昭和三年四月三日印刷
昭和三年四月六日發行

（非賣品）

近代日本文學大系
第七巻

編輯兼發行者 東京市麹町區内幸町一丁目六番地
國民圖書株式會社

右代表者 東京市麹町區内幸町一丁目六番地
野中次郎

印刷者 東京市本所區番場町四番地
井上源之丞

印刷所 東京市本所區番場町四番地
凸版印刷株式會社本所分工場

發行所 東京市麹町區内幸町一丁目六番地
國民圖書株式會社

電話銀座 七八三番
二一八八番
三六八六番
振替東京 五二二九八番

詞、舞、など記入してあつて、旋律の大體を知られるが、細かな節章は現今では殆んど其の意味を失はれてゐる。

口説(くどき)――謠曲で感慨、述懷、懺悔などの所作をして心中を述べることをいひ、その所作ぶりを淨瑠璃に應用したのである。其の他謠曲から出て淨瑠璃に應用されたものに、次第、シテ、ワキ、ツレ、ウタヒ、などがあつて、夫々註記されてある。

江戶――淨瑠璃節の一派なる江戶節に據つたのである。其の他、文彌、一中、冷泉、道具屋、など何れも淨瑠璃節の一派で、それ〲註記されてゐる。

唄――當時の流行唄に據つたものであるが、其の中には、閒の山、臼蹈歌、祭文(歌祭文)、歌說經(說經)、歌念佛、鹿島事觸、木遣音頭、子守歌、猿廻、巡禮歌、節季候、大黑舞、敲(たゝき)、鳥追、七草粥の囃、鉢敲、比丘尼歌、舟歌、馬子唄、萬歲唄、麥搗歌、疫拂、踊、などがありこれ等もそれ〲註記し、或は畧されてもある。そしてこれらの歌は總て近松の文に適應するやうに多少加筆されてゐるのであるが、それでも歌調曲節はよつて以て十分味ふことが出來る。

註　釋　終

其冠纓一、告レ王曰、今者燭滅有下引二妾衣一者上、妾援二得其冠纓一持レ之、趣レ火來上、視二絶レ纓者一、王曰、賜二人酒一使二醉失一レ禮、奈何欲レ顯二婦人之節一而辱レ士乎、乃命二左右一曰、今日與二寡人一飲、不レ絶二冠纓一者不レ懽、羣臣百餘人皆絶二去其冠纓一而上レ火、卒盡レ懽而罷、居三年晉與レ楚戰、有二一臣一常在レ前、五合五獲レ首却レ敵、卒得レ勝レ之、莊王怪而問曰、寡人德薄、又未二嘗異一レ子、子何故出レ死不レ疑如レ是、對曰、臣當レ死、往者醉失レ禮、王隱忍不レ加レ誅也、臣終不下敢以二陰蔽之德一而不中顯報上レ王也、常願下肝腦塗レ地用二頸血一湔中敵久矣、臣乃夜絶レ纓者也、遂破二晉軍一、楚得二以強一、此有二陰德一者必有二陽報一也。」

〔小笹に露のたまられぬ〕（女殺油地獄）六六四頁　千載集、戀歌四の部にある歌、「分けきつる小笹が露の繁ければ逢ふ道にさへぬるゝ袖かな。」の下の句をきかせたのである。こゝの文は、町風でないを名護屋帶にいひかけ、小菊が伊達な帶を胸高に纏うてゐる遊女風は、道で逢ふ人々のそれ者と見て、濡れかけること（擬話ごと）の爲む方ないの意。

〔男でも杭でもない〕（女殺油地獄）六九〇頁　男でも何でもないの意にいふ諺。狂言に男か杭かといふが見え又「くひ」に九位をきかせ、九位といふ位はないから、かくいふ。

淨瑠璃文中の註記に就いて

三重――この名稱もと聲明から出た語で、三絃の調子の高い一種の彈き方である。人の聲音は三絃の三重の調子が出されないので、三重に合はせて唄はれない爲に語らないこともあれば、從つてその文句も畧されることがある。（四座講式の聲明の書などには、初重、甲二重、二重、三重など註記してある）。其の他、地、フシ、ヲクリ、

〔呂州〕（生玉心中）三六頁　風呂衆の義、風呂屋女即ち湯女をいふ。一種の私娼であつて、顔に白粉を厚く塗り口紅を附けて嬌冶な姿をなし、浴客の垢をかきながら、今日は芝居へお越しか、色里の御歸りかなどと話しかけ、戀をしかけに色を賣つたものである。おさがは嘗て大坂天滿五丁目にあつた扇風呂の湯女を勤めて全盛を張り、伏見坂町の遊女よりも羽振がよかつた。

〔我が門に千尋あるかげ〕（平家女護島）四一八頁　伊勢物語の歌に、「我が門に千尋ある竹を栽ゑつれば夏冬誰か隱れざるべき。」

〔わごりよ〕（博多小女郎浪枕）三九一頁　わがごれう（和御寮）の約。そなた。

〔わせて〕（曾我會稽山）二六一頁　「おはせて」の訛。御座つて。

〔わたい〕（博多小女郎浪枕）三七五頁　「與へよ」の義。くれよ。この長崎國訛は現今も長崎地方の漁夫などは往々用ゐてゐる。猶博多小女郎浪枕中にある長崎國訛は、現今も用ゐられてゐる方言が多くある。

〔和中散〕（生玉心中）三八頁　勢州梅の木の是齋の藥店から賣出した下痢止めの藥の名である。大阪日本橋道頓堀邊には、和中散の藥店や、心太屋の水機關などがあつた。

〔ゐのじ〕（傾城島原蛙合戰）五一九頁　〔猪字〕猪をいふ。巢林子のこゝの文は、「かるも」というて、「ゐのじ」とうけたので、枯草に猪は古歌にも多く詠まれ、後拾遺集にも、「かるも搔き臥す猪の牀のいをやすみさこそ寢ざらめかからずもがな。」と見えてゐる。

〔烏帽子の懸緒云々〕（關八州繫馬）七九七頁　小蝶が暗中に箕田二郎纖の烏帽子縣緒を切り、纖が源頼平の恩に感じて頼平の爲に死するは、楚の莊王の故事を脚色したものである。說苑、復恩篇に、「楚莊王賜㆓羣臣酒㆒、日暮酒酣燈燭滅、乃有㆘人引㆓美人之衣㆒者㆖、美人援㆓絕

居所ニ、自ニ屛風之上ニ投ニ入櫛ニ、彼息女不意而取レ之、仍父已準ニ他人ニ欲レ遂レ志、于レ時不レ圖而壻自ニ田舍ニ歸著、入ニ來其砌ニ之間、忽以下不レ堪レ悲及ニ自害。」とある。櫛の歯の折れ、又は投げ櫛は不吉の前兆として忌む。

〔利劍卽是〕（生玉心中）六一頁　彌陀の功徳は廣大甚深であつて、能く無明煩惱を斷つこと、あたかも利劍の如しとの意。般舟讚に、「利劍卽是彌陀號、一聲稱念罪皆除。」

〔李蹈天（りたうてん）〕（心中天網島）五七五頁　太兵衞を惡んで李蹈天といふたのである。李蹈天は國姓爺合戰の假作人物で明國の右將軍となり、竊かに韃靼王と結んで反逆を企て、遂に君主思宗烈皇帝及び皇后華淸夫人を弑し、皇族忠臣抔を滅ぼして自ら國王となつたけれども、後に國姓爺との戰ひに敗れて捕へられ酷刑に處せられた。

〔りつかふりくていの祕文〕（傾城酒呑童子）三三八頁

〔六甲六丁の祕文〕六甲も六丁も、共に陰陽道にいふ神名。神仙傳に、「左慈學道左明ニ六甲ニ、能役ニ使鬼神ニ。」漢書藝文志に風鼓六甲二十四卷文解六甲十八卷とを記せど今傳はらない。また後漢書の註に、「六丁謂ニ六甲中丁神ニ也、若甲子旬中則丁卯爲レ神、甲寅旬中則丁巳爲レ神之類。」と見えてゐる。

〔兩頭の大蛇云々〕（傾城酒呑童子）三二四頁　孫子、九地篇に「善用レ兵者、譬如ニ率然ニ、率然者常山之蛇也、擊ニ其首ニ則尾至、擊ニ其尾ニ則首至、擊ニ其中ニ則首尾倶至。」と見えてゐる。巢林子はこの故事に據つたのであるが、これを兩頭の大蛇としたのは、その作意に合ふやうに書いたので、賈誼新書や世說德行上篇に見えてゐる兩頭の蛇とは別である。

〔離々たる馬目（ばぼく）、連々たる鴈行〕（國姓爺合戰）一一四頁　圓機活法、馬融の圍棊賦中の文句であつて、棊石が離れ離れに三角形をなして散布し、又はすかひに續き行くをいふ。

ても去らず、遂に敎へを受けて佛祖の心印を究めたといふ。祖師西來意とは、達磨大師が西天より來つて、此の土に禪法を傳ふ究竟の意思のいかなるかを究める事であつて、この意思を究めるは佛祖の心印を究める事である。難波土產に、「初祖に神光といふ僧來り參するに、祖は只端坐して敎への詞なければ、かの僧庭に立ちけるに、大雪降りて竹を折れども退かず、夜明くるまで立ち居たりしかば、初祖憐みて、汝何事を求めんためにか雪中にありやと問ひ給ふに、かの僧涙を流し、師たゞ願はくば敎へ給へといふ。初祖の曰く、諸佛無上の妙道は汝が如き小智小德の慢心をもつて得べきにあらずと。彼の僧聞くや否や刀をもつて左の肱を切り、師の前に置いて云く、諸佛の法印聞く事を得べしや。祖の曰く、諸佛の注印は已が心にあり、他より求むべけんや。彼の僧の曰く、我が心未だ安からず、師願はくは我が爲に我が心を安んぜよと。祖の云く、汝が心を我が前へもちきたれ、かの僧心を求むるにとらへ得べからず。祖の曰く、今汝が爲に心を安んぜりと、かの僧遂に悟りを開けり。」

〔行(ゆ)く先に的が立つ〕（心中天網島）五八二頁　行く先に罰の的が立つて、罰の矢の通る道筋をあゆまねばならぬといふ義で、將來罰があたつてろくなことはないとの意。

〔ゆづのつまぐし〕（女殺油地獄）六八三頁　神代紀に湯津爪櫛と書いてある。蓋し五百箇爪櫛で、齒の繁く閉の堅く逼れる櫛をいふ。古事記に、伊邪那岐尊が黃泉醜女に追はれた時に、湯津爪櫛を缺いで投げ棄てられたことが見えてゐる。風俗文選に、「櫛の齒缺くれば子に別るゝ。」といひ、また東鑑、建長二年六月二十四日の條に、「堺白地下二向田舍一訖、窺二其隙一有下通二艷言於息女一事上、息女殊周章、敢不レ能二許容一、而令レ投レ櫛之時、取者骨肉皆變二他人一之由稱レ之、彼父潛刋二于女子

客は紋日には馴染遊女への贈物、揚屋置屋への祝儀など多額の費用を要し、それで大盡として持てたのであるから、しはい遊客は紋日には登樓せぬやうにし、そしてこの費用を遁れようとしたものである。

〔やすらひ花〕（傾城酒呑童子）三四〇頁　陰暦三月十日（現今は四月十日）京都紫野の今宮神社の祭禮をいひ、寂蓮法師のこの祭の歌の句に、「やすらにはてよ。」とあるによつてやすらひばなといひ、鎭花祭に擬したものだといふ。

〔やだ〕（生玉心中）五三頁　「よわど」（弱所）の約訛であらう。弱點。

〔八つの時切れ〕（曾我會稽山）二六六頁　八つ時限り。八つ時は午後二時頃で、九つ時は十二時頃である。

〔柳渦卷く木陰には云々〕（國姓爺合戰）七三頁　謠曲、賴政に、「忠綱兵を下知して曰く、水の逆卷く所をば岩ありと知るべし、弱き馬をば下手に立てて、强きに水を防がせよ、流れん武者には弓弭を取らせ、互に力を合はすべし。」とあるを、作り替へたのである。そして「風」は伏兵、「弱き枝」は弱兵、「苔」は兵力、「强きに花を開かせよ。」は强兵に功名をさせよの意に譬へていつたのである。

〔山陰中納言の家の切り方〕（心中宵庚申）七五九頁　山陰中納言のことは大日本史にも見え、禁中料理のことを掌つた家である。

〔山の芋から鰻におなりなされう〕（心中宵庚申）七六一頁　俚言集覽に、「山のいもが鱔になる＝〔塵添壒囊抄〕龍陀事、魚も龍にこそ或は蛇のウナギになるとも、山のいものうなぎに成るとも云ふ事あり。〔續狂言記成上りもの〕シテ　又山の芋が鱣になるも一定でござる。」

〔雪折竹（ゆきをれだけ）に本來の面目を悟り云々〕（國姓爺合戰）八三頁　神光が達磨大師のところに參じて教へを請うても、教への詞なかつたので庭を去らず、大雪降つて竹が折れ

は、その寺の名のみ殘りて、今はなしと、この寺に無間の鐘もつきなくし、今は晦日にうそやつくらん。」

〔むざうらしげ〕（博多小女郎浪枕）三七七頁　かはいさうらしげ。この語現今も鹿兒島地方で用ゐ、かはゆい者といふことを「むぞか者」「むざうか者」といふ。

〔むろ〕（心中宵庚申）七六一頁　〔室〕室鰺の畧で、播磨國室津でとれる鰺は佳なるによつてこの稱がある。和漢三才圖會に、「室鰺＝多出二於播州室津一、故名レ之、形似レ鰺而畧圓有二白刺一、眼大、冬月作レ䱒、東海亦多出、味脆不レ佳、爲二下品一。」

〔めいよ〕（大經師昔暦）二七頁　〔名譽〕ほまれの意より轉じて、奇妙、不思議の意にいふ。この語後には撥音を添へて「めんよう」といひ、「面妖」などの當字が用ゐてある。

〔緜蠻（めんはん）たる黄鳥丘隅にとゞまる〕（國性爺合戰）八一頁　詩經にある詩。緜蠻は黄鳥の鳴きごゑ。緜蠻と鳴く黄鳥も峯の樹木の茂れる處にとゞまつて安居を求める。況んや人に於てをやの意。

〔もうる〕（國性爺合戰）九四頁　モンゴル（莫臥兒）（Mon ghol）國であつて、英領にならない以前の印度帝國の稱。

〔もがり〕（生玉心中）六一頁　紺屋の物干をいふ。竹の枝をもいだものを立て竝べ、布をもぎ枝に懸けて干す。「もがり」は「もぎたり」の義であらう。「紺屋のもがり劍の山。」とあるは、竹のもぎ枝の痕が刺立つやうになつてゐるから、かくいうたのである。

〔もんち〕（雙生隅田川）五六二頁　門地であつて家柄、門閥より轉じて、その處の風儀、或は他處との風儀違ひの意にいふ。

〔紋日〕（心中天網島）五七三頁　ものび（物日）の音便。祭の前日を「ものまへ」といふ「もの」と同じ語で、紋日とは祝日をいふ。遊郭の紋日は非常におほく、しかも遊

約。辻占の違はないやうに正しくあれの意。辻占（辻に居て往來する人の言葉を聞き、それによつて事の吉凶を判斷すること）には、昔「辻や辻四辻が占の市四辻、占正しかれ辻占の神。」と三返唱へて、其の辻へ先に來る人の言葉で吉凶を占つたもので、その一句を記したものである。

〔身だまんじりともせない〕（博多小女郎浪枕） 三七五頁

身どもは心配でまどろみもしない。「身だ」は身どもはの意にいふ長崎國訛。

〔三保の谷が著たりける云々〕（心中天網島） 五七三頁

仲居きよが、紋日に來ぬ馴染客と道で出逢ひ、これを促して引入れる狀をいうたもので、謠曲、景清に「三保の谷が著たりける、冑の錣を取りはづし〳〵二三度逃げのびたれども、思ふ敵なれば遁さじと、飛びかゝり冑をおつとり、えいやと引くほどに、錣はきれて此方にとまれば云々。」とあるに據つたのでつる。

〔視る目嗅ぐ鼻〕（傾城酒呑童子） 三六一頁　閻魔王廳の門側の左右にあつて、常に人を視察してゐる人頭幢のことで、左神は人の惡事を記し、右神は人の善事を記すといふ。十王經に「大城（閻魔王廳）四面周圍鐵墻、四方開二鐵門一、左右有二檀茶幢一、上安二人頭形一、人能見二人間一如レ見二掌中庵羅果一、右黑闇天女幢、左太山府君幢、………、左神記レ惡、形如二羅刹一、常隨不レ離、悉記二小惡、右神記レ善、形如二吉祥一、常隨不レ離、皆錄二微善一、總名二雙童一、………、其王以レ簿推二問亡人一、算二計所作一、隨レ惡隨レ善、兩斷二分之一。」

〔無間の鐘〕（博多小女郎浪枕） 三八三頁　遠江國佐野郡佐夜中山觀音寺の鐘をいひ、この鐘を撞く時は、現世では福々長者になれども、死して無間地獄に墮するといふ俗說がある。東海道名所記、小夜中山の條に「その寺に無間の鐘あり、二月の初の午の日開帳ありといふ。」と見え、東海道中膝栗毛第三編に「傳へ聞く無間の鐘

の夜すがら戯れ遊べ。」とあるのも、若みどり巻四、二上り、てる月の唄に、「月は武藏野……、かはいかござれいざよひ月に、戯れ遊べえい〳〵遊べえい〳〵〳〵えい〳〵〳〵、てる〳〵月云々。」と見えてゐる。「武藏野」とは野見つくさずを飲み盡さずにもぢつた大杯の名である。

〔文藏〕（女殺油地獄）六九六頁　佐川文藏をいひ、實惡の上手な俳優。

〔平ぐわい〕（博多小女郎浪枕）三七六頁　〔平懐〕饅頭屋本節用集、易林本節用集に、「平懐」と見えてゐる。憚らないで平氣なこと。

〔べゝのこ〕（關八州繋馬）八二〇頁　牛の子をいふ。この語今も關西九州地方で用ゐてゐる。關八州繋馬のこゝの文は、幼兒のするあかんべいに、牛をいへる緣でべべのことといひかけたのである。これを「べらのこ」とした本があるが、そは字形の相似より「べゝのこ」を誤つたのである。

〔墨子が白絲〕（關八州繋馬）八一九頁　墨翟が練絲の染色によつてその通りに染まるを見て、人は習慣によつて善惡何れにもなるを感じて泣いたといふ。淮南子說林訓に、「墨子見二練絲一而泣レ之、爲下其可二以黄一可中以黑上。」

〔法藏比丘の淨瑠璃〕（女殺油地獄）六七八頁　說敎節の淨瑠璃に法藏比丘といふ外題のものがある。その法藏比丘といふ淨瑠璃に、阿彌陀と藥師とは御夫婦なることが記してある。

〔ほるなん〕（國姓爺合戰）九四頁　南洋ボルネオ國のことか。

〔曲げて〕（心中天網島）五九〇頁　質に入れて。質を七に通はせ、七は第二畫が曲つてゐるから、質を「まげ」といふ。

〔まさしかれ〕（博多小女郎浪枕）三九九頁　正しくあれの

流レ涕、因號二此山一曰二領巾麾之嶺一也。」

〔びやうの柳〕（關八州繋馬）八五四頁　〔未央柳〕未央は「びあう」と讀むが、昔はびやうと讀んだもので、風流源氏物語卷三に、「未央の柳は眉に似たり。」とあつて、「未央」に「びやう」と傍訓してゐる。唐玄宗皇帝の未央宮に濃やかに粧ひを凝らせる柳のごとき眉。白居易の長恨歌に、「太液芙蓉未央柳、芙蓉如レ面柳如レ眉」とあつて、楊貴妃の眉を形容した句を應用したのである。

〔ひよん〕（心中天網島）五八九頁　凶の音讀であらう。物の凶なるをいふ。

〔嚬伽の聲〕（國性爺合戰）七三頁　梵語迦陵頻伽（Kalavinka）の畧、妙聲鳥と譯す、形體音聲ともに微妙な鳥なるより、以て美女の聲にたとへて頻伽の聲といふ。慧苑音義下に、「迦陵嚬伽、此云二美音鳥一、或云二妙聲鳥一、此鳥本出二雪山一、在二㲉中一卽能鳴、其音和雅、聽者無レ厭。」

〔頻繁として三度顧みるは天下の謀とかや〕（信州川中島合戰）七一七頁　劉備（蜀の昭烈皇帝）は三度も諸葛亮（孔明）を其の草廬に訪うたが故に、遂に其の義に感じて三分鼎立の計を策し、天下を開濟した故事に據つたのである。杜甫の蜀相の詩句に、「三顧頻繁天下計。」

〔佛法と萱屋の雨は出て聞け〕（心中宵庚申）七七九頁　佛法を聽くには談義參りをなすべく、萱屋に降りかゝる雨の音はかすかであるから、外に出ねば聞えぬとの意の諺。

〔ぶとう〕（大經師昔暦）三頁　〔不當〕不恰好。形のみにくいこと。

〔船は新造の乘り心云々〕（女殺油地獄）六六三頁　增補松の落葉卷四、古來中興踊歌、君はしんぞの唄、「君はしんぞの乘り心、さよいよえい〳〵、君と我と我と君と、ひきよせてはよる〳〵さ云々。」なほ女殺油地獄のこの次に、「君が杯いつも飲みたや武藏野の、月の、月

井、定出ニ賦 六十四萬井、戎馬四萬匹、兵車萬乘一、故稱ニ萬乘之主一。」

〔檜垣作り〕（博多小女郎浪枕）三七五頁　和船の左右の舷に立つてゐる筋を檜垣作りにした荷船で、多く酒樽、油樽などを積み込むによつて樽船ともいひ、六七百石以上の大船である。

〔ぴかしやか〕（傾城酒呑童子）三四一頁　氣取つて從順ならぬさまをいふ。ひけらかす。

〔非業の金〕（女殺油地獄）六八五頁　非業とは業因にあらざるをいふ。非業の金とは道ならぬ金の意。與兵衛が放蕩でなした借金は、與兵衛の金で拂へば業因の金なれども、何にも知らぬ親父に拂はせては、親父は非業の金を拂ふことになる。

〔ひし〕（傾城酒呑童子）三四六頁　ひしげる（拉）の義であらう。破滅。

〔毘首羯磨〕（生玉心中）五二二頁　天竺の有名な佛師。嵯峨清涼寺の釋迦は毘首羯磨の作であるといふ。巢林子のこゝの文は、謠曲百萬に、「毘首羯磨が作りし赤栴檀の尊容。」とあるに據り、赤栴檀に借錢をきかせたのである。

〔一こぶし〕（心中宵庚申）七五八頁　〔一拳〕鷹狩の時に鷹匠が鷹を握り拳の上にとまらせて伴し、鷹を放つて鳥を捕らしめる。「今一拳遊びし。」とは、今一度鷹を拳より放つて鳥を捕らしめるをいふ。

〔領巾麾山〕（國性爺合戰）八九頁　肥前唐津の南東にある山。欽明天皇の時大伴左提比古の妻松浦佐用姫が夫の唐土へ行くを悲しみ、山上に登つて夫の乘れる船を望み、項に掛けて飾りとせる布帛を振つて離別を惜しんだといふ。萬葉集に、「大伴左提比古郎子特被ニ朝命一、奉ニ使藩國一、艤レ棹言歸、稍赴ニ蒼波一、妾也松浦佐用嬪面 嗟ニ此別易一、歎ニ彼會難一、卽登ニ高山之嶺一、遙望ニ離去之船一、悵然斷レ肝、黯然銷レ魂、遂脫ニ領巾一麾レ之、傍者莫レ不レ

〔伯牙が琴も鐘子期にあらざれば名を知る者なし〕（關八州繫馬）八五〇頁　說苑に、「伯牙鼓レ琴、意在二高山一、鐘子期曰、善哉、巍々乎若二泰山一、俄而志在二流水一、子期曰、善哉、洋々乎若二流水一、子期死、伯牙破レ琴絕レ絃、終レ身不二復鼓一レ琴、以爲世無二知音者一。」

〔白人〕（心中天網島）五八六頁　「白」を見よ。

〔はし〕（傾城酒呑童子）三三九頁　〔端〕端女郎をいふ。

〔はすは〕（生玉心中）三六頁　〔蓮葉〕蓮葉の風にべろべろとなびく如く、輕佻浮華なるをいふ。なびき易い尻輕女。

〔はたした衆〕（女殺油地獄）六七八頁　米を賣り果した人だちの意。把多は米を賣るをいひ、また米を高値に賣り置いて米相場の下落を喜ぶをいひ、米商人間の通用語である。

〔秣丁笠〕（聖德太子繪傳記）一七八頁　眞竹の籜にて作り、徑二尺四五寸ばかりの粗製の笠である。この笠もと坂東地方から作りひろまつたによつて坂東笠といふのが訛つたのであらう。

〔初昔〕（槍權三重帷子）一三五頁　茶は三月二十一日から摘み、その日に摘んで製した上等の煎茶、抹茶の名である。蓋し昔は廿一日を合した字であるからの稱。

〔華飛び蝶駭けども人愁へず云々〕（國姓爺合戰）六八頁　陸龜蒙が鄴宮の詩に、「華飛蝶駭不レ愁レ人、水殿雲廊別置レ春、曉日靚粧千騎女、白櫻桃下紫綸巾。」華は飛び蝶は駭いて春去れども、人をして愁へしめぬものがある。それは水殿雲廊に別に春があるからである。曉には粉白黛黑の粧ひをなし、紫綸巾熟錦袴を著けた千騎の美女が櫻桃樹下にあつて、これぞ春である。

〔萬乘〕（國姓爺合戰）七二頁　帝王は兵車萬乘を出すといふ故事によつて、帝王の位を萬乘の位といひ、其の國を萬乘の國といふ。孟子、梁惠王上の註に、「兵車萬乘謂二天子一也。」漢書刑法志に、「天子畿方千里、提封百萬

共に道を行くに、その荷物を持つ者の順を定め、坊主に出會へば次の番の者に荷物を持たしめるを坊主持といふ。北うづむは明らかでないが、按じるに甚だしい略筆であつて、その意は、友達と坊主持をして、持たねばならぬ番となれば、少しでも持つまいとして北に走つて參詣人の羣集の中に埋れ隱れるといふのであらう。野崎觀音參りであるから參詣人は北に行く。

〔龐眉〕（國姓爺合戰）一一四頁　老人の大なる眉。文選、張平子の思玄賦に「尉龐（一本尨に作る、尨は蒼の義）眉云々。」とあつて、註に「龐眉皓髮云々。」とある。

〔望夫山〕（國姓爺合戰）八九頁　支那武昌の貞婦が遠方に赴く夫の離別をかなしみ、山に立つて夫の後姿を見送り、其のまゝ死して石となつたといふ。幽明錄に「武昌北山上有二望夫石一、狀若二人立一、古傳云、昔有二貞婦一、其夫從レ役遠赴二國難一、餞二送此山一、立望レ夫而化爲二立石一、因名焉。」

〔炮碌頭巾〕（心中天網島）五七四頁　丸頭巾のことで、大黑天の頭巾に似たもの。嬉遊笑覽に「古き繪草子を見るに置頭巾大かた丸頭巾と見ゆ、これをほうらく頭巾ともいふ。」

〔白〕（生玉心中）三六頁　白人の畧。賣女らしくなく素人の風を裝うてゐたから白人と稱したもので、一種の私娼である。もと其の日暮しの貧しい家に生まれて、眉目形のよい娘が曖昧屋に養女として貰はれ、色氣附く年頃になれば額を研き、客をあしらふ躾をならうて、淫を賣る女となる。心中天の網島に伯母の詞に、「曾根崎の茶屋紀の國屋の小春といふ白人。」とあるは、遊女も白人も共に賣女であるから、色氣のとれた伯母は遊女、白人を區別しない所に伯母の詞としてふさはしいが、まことは小春はもと南の風呂の湯女であり、それより曾根崎新地紀の國屋の妓となつたもので、白人ではない。

から出現したかを知らうと思へば、まさに衆生各自の心から造作したものと觀念せよとの意。

〔女三の宮〕（大經師昔暦）一頁　源氏物語にある人物で、朱雀院第三の皇女である。源氏物語若菜の卷上に、女三の宮の猫が他の猫に追はれ、猫の綱で簾が開き、女三の宮の姿が見え、柏木右衞門督は女三の宮を戀慕し女三の宮に近づき、後に密通された。その名も三の宮とおさんと通ふ所があるから、この淨瑠璃のはじめにこれをいうたのである。

〔ねつたい坊主〕（曾我會稽山）三一六頁　嫉ましい坊主。「ねつたい」は「ねたし」の音便。平家物語、宇治川の條に、「ねつたい、さらば景季もぬすむべかりけるものを。」

〔ねまらない〕（信州川中島合戰）七〇七頁　へたばらないの意。次の「ねまり」を見よ。

〔ねまり〕（心中宵庚申）七六三頁　すわり（坐）。うづくまり。下學集、態藝門に、「踞（ネマル）」。

〔のけばの梅〕（傾城酒呑童子）三六〇頁　軒端梅は謠曲、東北の古名である。こゝの文は、身の程を知らぬに白髭をいひかけ、家財の崩れに八島のくづれをいひかけ、兩の手に鐵輪の手錠を鐵輪にいひかけたのである。白髭も八島も鐵輪も謠曲の題名である。

〔のふず者〕（雙生隅田川）五六〇頁　「のふぞくもの」（野風俗者）の畧訛である。圖太く賤しい者。

〔のんこ〕（女殺油地獄）六六五頁（心中宵庚申）七五七頁　細鬢の伊達な結髪をいふ。

〔放生會〕（關八州繫馬）一〇一頁　陰暦八月十五日八幡社祭日に魚鳥を放つ會式で、殊に石清水八幡社の放生會は、神官、社僧、樂人、文武の官人等盛裝して行列をなし、神輿出でて盛大を極めたもので、詳しくは黑川道祐撰の日次紀事八月十五日の條にも載せてある。

〔坊主（はうず）持（もち）して北うずむ〕（女殺油地獄）六六五頁　朋友と

と見えてゐる。

〔二字〕（女殺油地獄）六六九頁　武士の二字をいひ、武士の意。武士を二字というた例は八文字屋本の中にも往往見えてゐる。

〔西を後に歩み行く〕（生玉心中）六一頁　極樂淨土は西方十萬億土にあるといふ。その西方を後にして歩み行くのであるから、極樂に遠ざかり地獄に墮する身なるをいふ。

〔二挺の弓〕（槍權三重帷子）一四八頁　人妻が他の男に懸想するを二挺の弓をひくといふ。平家女護島にも、「女の操を守つて、二張の弓をひくまじとは、弓取の義にも劣らぬ魂。」と書いてある。人妻おさいが權三と姦通ならぬ姦通の罪を得て、破滅となつて驅落する事となるを、「本筈の放さぬ先に弦切れて。」というたのである。

〔日親樣（にっしんさま）〕（女殺油地獄）六八二頁　こゝの文に、「日親樣へ願かけ。」とあるは、生玉中寺町正法寺の日親堂に願をかけたのであらう。正法寺は法華宗不受不施派京本法寺の末院で、その境内に日親堂がある。日親上人は日蓮宗の高僧で、京都本法寺の開山である。應永年間に立正治國論を作り、將軍足利義敎を諫めて獄に投ぜられ活火に燒ける鍋を頭に被らされたれども、屈せなかつたによつて冠鐺（なべかぶりの）日親上人といふ。

〔庭錢（にはせん）〕（壽の門松）二三〇頁　妓樓、色茶屋の一同に客より出す纏頭（はな）。原田光風撰、及瓜漫筆に、「庭錢といふは江戸にて總花といふ類なり、定めありて太夫は百三十目、天神は五十目、端女郎は三十目なり、右庭錢は揚屋へ請取、女郎屋内男女、揚屋内男女、町々の用人、東口西口の門番まで、それ〴〵配分すと聞けり。」

〔若人欲了知〕（津國女夫池）六五六頁　「じん」は「にん」と讀むべきである。六十卷華嚴經十夜摩天宮說偈品に「若人欲レ了二知三世一切佛一、應二當如レ是觀一、心造二諸如來一。」と見えてゐる。若し人が三世一切の諸佛は何れ

むをきかせて、これを祝福した。關八州繫馬は巣林子が淨瑠璃の最後の作で、彼が死の近づいたこの作に、己が藝術の上演される竹本座の安らけく長久なれと祝ふ彼は、常にこの愛著を以て靈腕を揮つてゐたことが想見されて感が深い。

〔名乘りて過ぐる杜鵑云々〕（壽の門松）二四九頁　萬葉集巻九に「鶯の生卵の中に杜鵑、獨り生まれて己が父に似ては鳴かず、己が母に似ては鳴かず、卯の花の開きたる野邊ゆ飛び翔り、來鳴きとよもし云々。」の歌及び反歌に、「かききらし雨降る夜を、杜鵑鳴きてゆくなりあはれその鳥。」とあるに據つたのである。「己」は「し」と訓めど、「しや」と訓んでもあるので、巣林子は「しや」といふたので、「おのれ」といふこと。倭訓栞に「萬葉集の己父己母をしやがちゝしやがはゝとよめること、俊頼朝臣の抄物に見えたり。」と見えてゐる。壽の門松の爰の文は、與次兵衛を杜鵑に喩へ、與次兵衛が父の眞面目なのに似ないで、放蕩で色里で羽振を利かす意にいふ。

〔なむきやらちよんのふとらやあ〳〵〕（國姓爺合戰）八五頁　千手觀音經の大悲心陀羅尼の、「なむからたんのうとらやあ〳〵。」のもぢりである。

〔納屋端歌〕（心中天網島）五七三頁　納屋で唄ふ端歌。馴染遊客が來た時座敷が他の客で塞がつてゐる際は、手輕に納屋で馴染遊女を呼んで逢ひ、唄ふ端歌。こゝの文歡樂の遊女町の狀態を見せてゐる。

〔ならし竹〕（博多小女郎浪枕）三九八頁　〔馴竹〕横にわたして衣服手拭などを懸ける竿、衣架。物類稱呼巻四、器用部に、「衣架＝かけざを（俗稱）、筑紫にてならしと云ふ。」

〔二月中旬に瓜を獻ずる榮華なり〕（國姓爺合戰）六八頁　三體詩巻一、王建の華清宮の詩に、「酒幔高樓一百家、宮前楊柳寺前花、內園分二得溫湯水一、二月中旬已進レ瓜。」

〔どや／＼通りのむや／＼の關〕（女殺油地獄）　六六八頁　どや／＼通りは陸奥出羽間の山道をいふとぞ。むやむやの關は今の羽前國南村山郡笹谷峠をいひ、關のあたり草木むや／＼と茂つてゐるよりの名であらう。奥細道菅薦抄に、「むや／＼の關は又うやむやの關といふ、其の跡とさす所二ケ所あり、武士の出るさ入るさにしをりするとや／＼とりのむや／＼の關云々。」

〔鳥は高く飛んで矰弋の害をのがれ云々〕（傾城島原蛙合戦）　五〇八頁　矰弋は「いぐるみ」といひ、矢に絲を附け飛鳥を纒うて捕へるもの。智慮のない鳥でも高く飛んで、いぐるみでとらへ害されないことを知る。莊子應帝王篇に、「鳥高飛以避二矰弋之害一、鼷鼠深穴二乎神丘之下一、以避二熏鑿之患一。」

〔取る手もゆらぐ玉の緒〕（曾我會稽山）　二八七頁　病身の老母が二子の手首を握る手も顫ひ、餘命も慥と定まらぬ意で、新古今集、賀部の歌、「初春の初子の今日の玉帚手に取るからに搖ぐ玉の緒。」の下の句に據つたのである。

〔中の風〕（女殺油地獄）　六六五頁　大坂新町遊郭の妓女の風。新町遊郭は曾根崎新地遊郭と南堀江遊郭との中間にあれば中といふ。新町遊郭は江戸の吉原のやうなもので、其の他の遊郭は岡場所的のものである。李秀撰、澪標、新町開基の條に、「新たに町となりしより世人新町とよぶ總名なり。又當津にては中といふ。」と見えてゐる。

〔七の賢き人〕（關八州繫馬）　八四九頁　竹林の七賢をいふ。晉の世に竹林の中に遊び、酒を飲んで樂しみ、淸談に耽つた七人の徒。世說、任誕篇に、「陳留阮籍、譙國嵇康、河內山濤、沛國劉伶、陳留阮咸、河內向秀、琅邪王戎、七人常集二於竹林之下一、肆意酣暢、故世謂二竹林七賢一。」とこの文は竹林の七賢のことをいうたのであるが、また竹の紋つく竹本座の變りなき御代を樂し

小なるを善しとす、齒拒とは、牙の牴拒せるを善しとす、量數になずらへて一石六斗二升といふ也。」

〔天竺浪人〕（主玉心中） 四三頁　天竺浪人と書けど、もと逐電浪人の轉倒語であらう。逐電はもと奔電を逐ふ義で急速なるをいふのであつたのが、轉じて出奔の意にいふ。天竺浪人は宿なしの意。

〔天の網〕（博多小女郎浪枕） 四一〇頁　老子に、「天網恢恢、疎而不レ漏。」と見えてゐる。爰の文は、天の網は廣大でその目は疎であれども、善惡の報漏れることなく、惡事を行つた惣七も、終に下界で撿非違使廳の捕吏に繩で搦められたとの意。

〔天も醉うたり〕（壽の門松） 二二六頁　和漢朗詠集春の部、菅公の花時天似レ醉序の句に、「春之暮月、月之三朝、天醉（すい）二于花一、桃李盛也。」

〔十返（とかへ）り〕（平家女護島） 四三一頁　松の花は百年に一度咲くといへば、それを十度繰返す間の長年月をいふ。本朝文粹、後江相公内宴賦に、「松花之色十廻。」

〔年もひさしの云々〕（女殺油地獄） 六八三頁　五月五日（端午ノ）節句をいうたもので、男兒ある家は幟を立て甲冑武器を飾り、陽の相に象り粽を作つて祝ふ。拾芥記に、「五月爲二男子祭節句一、嚴二具足、甲冑、旗、幟、槍、長太刀等武具一者、男子可下出二軍陣一振二舞武勇一領二國郡一爲中上功上、故以二出陣威勢之體一爲レ政、云々。」猶端午の節句には蓬を軒廂に插すから、年も久しを廂にいひかけて廂の蓬といひつゞけ、菖蒲酒、菖蒲刀など菖蒲を用ゐるから、蓬菖蒲といひつゞけたのである。

〔頭盔頭（とつぱいがしら）〕（信州川中島合戰） 七二一頁　兜の鉢の頂が薙刀形に尖りたるをいふ。この形のもの頭巾にもあつて頭盔頭巾といふ。

〔とゞしては〕（女殺油地獄） 六八四頁　坐止しては。「とど」は「とどまる」或は「とまる」の首音を重ねた小兒語である。

體の人を罵る語。蛸坊主。

〔附城〕（國姓爺合戰）一一七頁　向城ともいひ、敵城に向つて城を築き、兵糧軍兵を込め置き、敵地に侵入して戰ふに便にしたもの。

〔蔦の葉ののきも退かれも〕（心中天網島）五九〇頁　この文、「定紋丸に蔦の葉の。」といふて、増補松の落葉卷五、蔦の葉の唄、「落ちよ〳〵と落して置いて、壁に蔦の葉退き心、蔦の葉〳〵壁に、壁に蔦の葉退き心。」の句に據つて、「のきも退かれも。」といひ、離別できぬ夫婦仲の意にいひつゞけたのである。

〔罪なくて配所の月を見ん云々〕（壽の門松）二三六頁　徒然草に、「顯基中納言のいひけん、配所の月罪なくて見むこともおぼえぬべし。」と見えてゐる。これは現實にはあり得ない、純抽象的な顯基中納言の物數寄をいうたものであるが、山崎與次兵衞は罪を犯さねど、難與平の罪を引受けて座敷牢に入れられての感はどうであらう、嘸物數寄の趣味も起らないで、矢張侘しい感がしみ〴〵と胸中にしみ入つたであらうとの意。

〔露の笹原ヤットン〳〵、連立ち走る踏み分け走る磯の千鳥をぼつかけて、石⿰石耑摑んでずんずと延ばしやる〕（鎗權三重帷子）一四九頁　流行唄に據つたもので、この唄に似たものは、生玉心中上に、「戀の意地酒ヤトン〳〵、手元でかゝる押へてかゝる、……、拗ねる男をぼつかけて、そこらをずんずと飲ましやる。」と見えてゐる。こゝの文は、脛に創もてば笹原走るといふ意から、「露の笹原云々。」のこの唄にいひつゞけたのである。

〔天角地目〕（關八州繫馬）八二〇頁　善い牛はその角天を銜きその目地を見る。俚言集覽に、「天を銜き地を眄つつ洟たれて一黑陸頭耳小齒恒＝此は相牛の法なり、天を銜くとは、角の上を銜くを云ふ、一黑とは純黑を云ふ、陸頭とは頂の平らなるを善しとす、耳小とは耳の

た多くの臺。神代紀上に、「科ニ之以千座置戸一、遂促徴矣。」

〔千度看れば云々〕（傾城酒呑童子）三一九頁　遊仙窟に「千看千意密、一見一憐深。」とあつて、張文成が仙女十娘の顏容を千度ほど見ても、見れば見るほど美しく、千度の心きびしく、一度見るに一度おもしろく珍らしいとの意の詠である。又同書に、「日日衣寛、朝々帶緩…………、愁腹寸斷」とあつて、張文成が仙女十娘と別れてからは、戀の病の爲に日まさりに瘦せ衰へ、衣もひろくなり、朝毎に帶も緩くなり、憂愁によつて腸寸々に斷れたとの意である。また巣林子のこの後の文に、「潘安仁が母方の甥。」といへるも、遊仙窟に、「容貌似レ舅、潘安仁之外甥。」とあつて、十娘は姿容美しい潘安仁の外姪に當り、美麗舅に似てゐるといふに據つたものでこれを花山帝の美貌に譬へたのである。

〔ちやぐちう〕（國姓爺合戰）九四頁　ちんちう（Chicher）のことか。ちんちうは泉州で、厦門附近。

〔ちやるなん〕（國姓爺合戰）九四頁　印度のチヤウル國のことか。

〔ぢんの煙〕（女殺油地獄）六六四頁　沈香の煙。沈香樹は東ヒマラヤ、アサム等の地に產し、喬木にして百尺に達しる。香料は樹幹枝幹等に脂狀を呈し、暗色に凝結して存在し、その重くして水に沈む物を良品とする。樹によつては香料を有せぬものもある。

〔ついなんどり〕（曾我會稽山）二八九頁　「つい」は「ちよっと」の意。「なんどり」は「などり」の音便、「なごやか」「おだやか」の意。

〔月も日も云々〕（傾城酒呑童子）三五五頁　ひらぎ長の廣庭は武藏野を見るやうであるといふを、「武藏野は月の入るべき山もなし草より出でて草にこそ入れ。」といふ歌に據つて、かくいうたのである。

〔づくにふ〕（津國女夫池）六四七頁　俗入道の訛畧か。僧

我二子の母は孫晨のやうに家貧で、藁屋の紙帳の中に臥して、詩書の樂しみとは似ぬ病苦に悶えるとの意、蒙求に、「三輔決錄、孫晨字元公、家貧織レ席爲レ業、明二詩書一、爲二京兆功曹一、冬月無レ被、有二藁一束一、暮臥朝收。」

〔太液の芙蓉〕（雙生隅田川）五三七頁　白居易の長恨歌に、「太液芙蓉未央柳、芙蓉如レ面柳如レ眉。」とある。太液は宮中の池の名。太液の池には芙蓉が美しい。

〔大の字の金刀點〕（國性爺合戰）七五頁　大の字の第三畫へをいふ。難波土産に「筆法に點の名様々あり、大の字は三點にて、大の字の一文を玉案と名づけ、左へひく點を犀角と名づけ、右へひくを金刀と名づく、其の形刀の身に似たる故なり。」

〔大理の廳〕（女殺油地獄）七〇〇頁　撿非違使廳をいふ。職原抄に、「撿非違使＝諄和天皇御宇天長年中初置レ之。異朝最重二此職一、昔唐虞代皐陶爲レ士、此云二大理一、周禮立官之日、大司寇卽此任也、後代置二大理寺一、本朝又以二刑部省一爲二糺判之官一、天長年中准二唐朝一置二使廳一、蓋是大理寺也、云々。」德川時代に撿非違使廳とは言はぬが、殊更に昔の罪人を逮捕糺彈する役所の名を借りていうたのである。

〔誰が狩すとはなけれども、落ちくる肉〕（心中宵庚申）七七〇頁　誰も狩してゐるのではないのに、逃げ落ちて來る鹿に、平右衞門の病衰して痩せ落ちる肉をいひかけたのである。

〔筑後の川中島の四段目〕（心中宵庚申）七七九頁　從來山の舞臺は山簾で間に合はせてゐたのを、巣林子作信州川中島合戰を竹本筑後掾が演じる時、初めてその第四段目の天目山の山舞臺を、總て張りぬきの造り物に拵へたのは新案であつたので、生玉大寶寺の開帳にこの新案を應用したのである。

〔千座の置戸〕（傾城酒呑童子）三三八頁　祓の品々を載せ

速我訟亦不二女從一。」と見えてゐる。これを弱小の災ひ何程の事でもなく、言ふに足らないの意に轉用した。

〔齊の蘇秦がちうどくの仇云々〕（津國女夫池）六五八頁　蘇秦は、東周雒陽の人であるが、齊につかへて刺客に刺されて死んだから、齊の蘇秦というたのであらう。「ちうどく」は戎毒であらう。蘇秦權變に長じ、人の國を傾亂したから、之れを惡んで戎毒の仇というたのであらう。

〔ぜう〕（平家女護島）四五二頁　燃燒した後のふは〳〵した灰。燼。「じやう」「じよう」とも書いてある。

〔笑止〕（傾城酒呑童子）三四四頁　興のさめる事。轉じて、氣の毒、いたはしいこと。

〔石臺〕（生玉心中）三六頁　盆石をあしらうた植木鉢。

〔關のお地藏は親よりまし〕（博多小女郎浪枕）三九九頁　松の落葉卷四、馬士踊の唄に、「關のお地藏は親よりましぢや、親も定めぬつまをもつよの云々。」

〔關の孫六〕（心中天網島）五八〇頁　美濃國關の刀匠兼元をいひ、その人の作の刀。兼元は孫六と稱し、赤坂關の一派で、明應永正年間の人であるともいふ。二世兼元も孫六と稱し、初代兼元の子で、美濃赤坂に住し、三世兼元も孫六と稱し、二世兼元の子で、美濃關に住した。天文永祿年間の人。

〔園の竹〕（平家女護島）四一八頁　皇族をいひ、竹園の故事に據つたのである。史記世家に「孝王築二東苑三百餘里一」とある註に、「在二宋州宋城縣東南十里一、俗人言二梁孝王竹園一。」とある。孝王は漢の文帝の子で竹園に居られたので、竹の園を親王のことにいふ。

〔そんじよ其處〕（女殺油地獄）六九四頁（槍權三重帷子）一五八頁（壽の門松）二四一頁　尊丈足下の訛りである。轉じて「其處」「其邊」の意にいふ。

〔孫晨〕（曾我會稽山）二八五頁　爰の文は、孫晨家貧にして冬藁の中に臥しても、詩書を樂しんだといふが、曾

式法があつて、利休が南坊宗啓に傳へた眞の臺子飾は五十箇條もある。槍權三重帷子の後の文に、「祝言、元服、出陣の臺子、これ御簾の中の茶の湯の圖、誠の眞の臺子とは此の行幸の臺子の圖。」とあるは、夫れ夫れ茶の湯の式法あるをいうたものであるが、その中には行幸の臺子などいかゞはしいものもあつて、巣林子も茶道には未熟であつたのではあるまいか。

〔しんべ〕（傾城酒呑童子）三四五頁　新部子の畧。禿（かぶろ）をいふ。歌舞妓事始に、「新部子といふは幼少にて藝の至らざるをいふ。」と見えてゐる。歌舞伎子に限らず、禿をもいうたものである。

〔潯陽の江〕（國性爺合戰）九〇頁　謠曲猩々に、「所は潯陽の江の内の酒盛、猩々舞をまはうよ。」とあるに據つたのである。潯陽の江は支那江西省にあつて、現今は九江といふ開港場で、鄱陽湖の長江に注ぐところで、唐の白居易が客を送つて琵琶行を作つたも此の地である。

〔妾は右近の橘の昔の契り云々〕（傾城酒呑童子）三三七頁　妾は右近であるといふに、紫宸殿前の右近の橘をいひかけ、橘より古今集の歌、「五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする。」によつて、昔の契りは忘れじものというたのである。妾こそは右近なれど、心は入り替つた弘徽殿女御と、花山院との昔宮中に於ける睦まじい仲のさゝめ言は、忘れないであら／＼覺えてあるといふに、白居易の長恨歌、「七月七日長生殿、夜半無ㇾ人私語時、在ㇾ天願作二比翼鳥一、在ㇾ地願爲二連理枝一、天長地久有ㇾ時盡、此恨綿々無二絶期一。」とあるに據つたのである。

〔雀の角鼠の牙の災ひ〕（津國女夫池）六三二頁　詩經召南行露篇に、「誰謂雀無ㇾ角、何以穿二我屋一、誰謂女無ㇾ家、何以速（マネクル）二我獄一、雖ㇾ速二我獄一、室家不ㇾ足、誰謂鼠無ㇾ牙、何以穿二我墉一、誰謂女無ㇾ家、何以速二我訟一、雖ㇾ

金になる良質のものである。こゝの文に「四つ」とあるは四寶銀のことで、銀貨の面に寶の字が四つ刻してある、貨率は百分中銀二十分銅八十分の合金になる惡質のものである。新銀は四寶銀の四倍の價値を有し、新銀七百五十匁は、これを四寶銀に換算すれば、750×4＝3000 即ち三貫匁となる。

〔甚左衞門〕（女殺油地獄）六六七頁　大和山甚左衞門のことで、京役者で俏形（芝居で遊冶郞又は美男子に扮する役）濡事の名人である。

〔浸潤の譖膚受の愬〕（關八州繫馬）七八六頁　浸潤とは水の紙などを漸くにひたし潤す義で、譖は人の行を毀(そし)る事。即ちじり〱と巧みに譖り露骨でなければ、聽く者、知らず〱これを信ずるに至るものである。膚受とは肌膚に受ける利害の身に切なるをいひ、愬は己が無實の罪を愬ふるをいふ。片時も忍ぶことのできないやうに告げ來る時は、聽く者それに動かされて、取調べないで氣の毒に思うて速かに之れに應ずるものである。この浸潤の譖と膚受の愬とは人の察知し難いものであるに、能く之れを察知して二者の行はれる事のなきは、其の心の明らかなものといふべきである。論語、顔淵篇に、「浸潤之譖、膚受之愬、不レ行焉、可レ謂レ明也。」

〔心隨萬境轉(しんずゐばんきやうでん)〕（心中宵庚申）七八六頁　心は境界に隨つて轉じ變る。

〔しんぞ〕（生玉心中）三六頁　「神ぞ」であつて、神ぞ照覽し給ふの意で自誓の詞。當時は自誓の詞が多く用ゐられた。愛宕白山、弓矢八幡、侍冥利、商冥利、傾城冥加、いずくみぞ、白癩(びやくらい)、など皆それである。

〔眞の臺子〕（槍權三重帷子）一三三頁　昔宋朝から博多の聖福寺に贈り、それより紫野の大德寺に傳はつた黑塗の茶棚をいひ、その茶道の法式を傳へたもので、その傳授を得て宗匠となる。されば眞の臺子には最も重要な

〔壽命（じゆみやう）の松云々〕（女殺油地獄）六六四頁　岡山（野崎村の北に當り、北河内郡甲可村にある）に壽命長久の松といふ老松がある。それをいふ。河内名所記に、「岡山忍びの岡と古歌によみしは此所の事也と申し傳へ侍る慶長十九年甲寅年依大坂御陣五月五日秀忠公此山御本陣。此の山に壽命長久の松の大木あり、………。敕後撰、法印覺寬、待人になど語らはで郭公ひとり忍びの岡に鳴くらむ。夫木、登蓮法師、見し人をしのびの岡の花すゝきなびくは招く心地こそすれ。云々。」と見えてゐる。

〔春正（しゆんしやう）蒔繪の價千金〕（傾城酒呑童子）三五六頁　山本春正の作の蒔繪で千金もする高價な物といふに、蘇軾の春夜の詩「春宵一刻直千金、花有二清香一月有レ陰、歌管樓臺聲細々、鞦韆院落夜沉々。」の起句に據つたのである。

〔諸君は功犬（けん）なり云々〕（曾我會稽山）二五五頁　史記、蕭相國世家に、「高帝曰、夫獵、追殺二獸兎一者狗也、而發蹤指二示獸處一者人也、今諸君徒能得二走獸一耳、功狗也、至レ如二蕭何一、發蹤指示、功人也。」とある。狩の緣でこの故事をいうたのである。

〔諸漏已盡（しよろいじん）の大阿羅漢（だいあらかん）〕（傾城酒呑童子）三二四頁　漏は煩惱のこと。諸煩惱の已に盡きて解脫し、小乘の悟りを極めた者。

〔四郎三〕（女殺油地獄）六六七頁　櫻山四郎三郎のことで、憂ひ臺詞の上手な俳優。

〔白鼠の富貴〕（壽の門松）二四五頁　好古日錄に、「俗說云、白鼠は福神の使者なり、白鼠ある家は必ず富むといふ。今按ずるに、本草云、黃金之精化爲二白鼠一、抱朴子云、鼠壽滿二百歲一則色白、善憑レ人而下、名曰レ仲、能知二一年中吉凶及千里外事一。是等の怪說に基きて福神の使者といふにや、云々。」

〔新銀七百五十匁云々〕（心中天網島）五九〇頁　新銀とは享保銀のことで、貨率百分中銀八十分銅二十分の合

〔若蘭が織りし錦の歌、百花散亂すと雖も〕（聖徳太子繪傳記）一九二頁　若蘭は竇滔の妻蘇氏、名を蕙といひ、若蘭は字である。聰明で文を善くした。夫が流沙に貶せられた時、若蘭夫をおもふの情に堪へないで、錦を織り、廻文旋圖の詩を作つて夫に贈つた。「題二織錦畫一」の廻文詩は、「春晩落花餘二碧草一、夜涼低月半二枯桐一、人隨二遠鴈一邊城暮、雨映二疎簾一繡閣空。」といふ東韻の詩であるが、この文を廻し、下より逆に讀み上げると、「空閣繡簾疎映レ雨、暮城邊鴈遠隨レ人、桐枯半月低二涼夜一、草碧餘花落二晩春一。」といふ眞韻の詩となる。巣林子の文に、「百花散亂す。」といへるは、「餘花落二晩春一」とあるを譯したのである。若蘭の廻文の詩は、巣林子の後の文に、月益御前が二子を思ふ情の切な廻文の手紙をいはうとする伏線である。

〔しやぐわん〕（國姓爺合戰）九二頁　加藤清正を「おにしやぐわん」（鬼上官）といへば、この「しやぐわん」も上官であつて、部將の意にいうたのである。

〔十八公〕（槍權三重帷子）一二九頁　松の字を分解すれば十八公となる、故に松を十八公といふ。三國呉志に、「丁固仕二孫皓一爲二司徒一、呉書曰、初固爲二尙書一、夢三松樹生二其腹上一、謂レ人曰、松字十八公也、後十八歲、吾其爲レ公乎、卒如レ夢焉。」謠曲高砂に、「松は萬木にすぐれて十八公のよそほひ、千秋の綠をなして古今の色を見ず。」

〔十萬貫を腰に付け云々〕（關八州繫馬）八六〇頁　殷芸小說に、「有レ客相從各言レ所レ志、或願レ爲二揚州刺史一、或願レ多二貲財一、或願二騎レ鶴上昇一、其一人曰、腰纒二十萬貫一、騎レ鶴上二揚州一、欲レ兼二三者一。」

〔須彌の鬣〕（關八州繫馬）七九〇頁　馬の鬣をいふ。大坪流馬書に、「あがり馬の事。先づしゆみのかみを取りて、かた〳〵の鐙をうかしておるなり、有二口傳一、馬あがらば急にしゆみのかみに取付き給ふべし云々。」

その名稱となつた。極印はきはめの印の義であつて、金銀貨に量目、常是などを打ち込んで證とした印をいふ。

〔じやが〕（國姓爺合戰）九四頁　ジヤバ（爪哇）（Java）であつて、馬來(マライ)諸島の一。

〔しやかになひ〕（女殺油地獄）六八八頁　〔釋迦擔〕死人を後向に背負ふこと。現今加賀あたりにて、小兒を後向に背負ふ事を佛(ほとけ)ぶんぶといふ。ぶんぶは背負ふをいふ。元祿享保頃は、行倒れ人の取片付けに、非人が死人の手を肩に取り、後向に背負うて埋葬地に行つた。もつとも釋迦擔にするのは粗末な取扱であつて、普通は棺に納めて埋葬地に運んだのである。

〔昔在(しやくざい)靈山妙法華、今在西方名阿彌陀、娑婆示現觀世音云々〕（女殺油地獄）六六三頁　天台宗の僧侶間につたへられた南岳大師念佛往生安心の四句偈文である。釋迦如來は昔靈鷲山で妙法蓮華經を說き給ひ、今は西方の極樂淨土にあつて衆生を濟度せられ、觀世音菩薩この娑婆世界に種々に應現して衆生を濟度し、彌陀、釋迦如來、觀世音は過去、未來、現在の三世に亘つて、一切衆生に利益を施し給ふの意であつて、末句は「三世利益同一體」とあるを、「三世利益三年續き」としたのである。なほこの次の文に、「去々年つちのえ亥の春」とあるは、「去々年つちのと亥の春」とすべきで、享保四年である。

〔赤栴檀〕（生玉心中）五二頁　「赤栴檀(しやくせんだん)」に「借錢」をいひかけたのである。赤栴檀は栴檀の木の赤色を帶びたものをいひ、香木である。生玉心中のこゝの文は謠曲、百萬に、「嵯峨野の寺に參りつゝ……毘首羯磨が作りし赤栴檀の尊容。」とあるを應用した洒落である。

〔寂(じやく)は雨〕（心中宵庚申）七八二頁　俚言集覽に、「じやくは雨＝土佐にて末は雨と云、死し了るを云。寂の議か。」

ちりけつぱい」と訛り、更に「しちりけんばい」となつたのである。忌はしい事など人の言ふを嫌うてよせつけぬ意にいふ諺。

〔品革緘（しながはをどし）〕（信州川中島合戰）七二一頁　しだかはおどし（歯朶革緘）の訛りで、品革緘、此奈革緘と書くは借字である。藍地に歯朶の葉を二枚抱き合はせにした模樣を白く染め拔いたもので、歯朶とは裏白のことである。おどしもその色合などで敵を威すよりの名で、緒通しの義ではあるまい。

〔師（し）の卦（け）〕（國姓爺合戰）八七頁　周易に、師の卦は「䷆地ㇾ下坤ㇾ上。」と見え、通解に、「師者衆也、古者陳法、五人曰ㇾ伍、積至二二千五百人一、謂二之師一、故軍旅之事、通謂二之師一、此卦内坎下而外坤、卦體九二、以二一陽一統二衆陰一而在ㇾ下、將師之象、故名ㇾ卦曰ㇾ師、云々。」と見えてゐる。

〔汐影〕（壽の門松）二五〇頁　汐は勤銀三もんめの見世女郎をいひ、勤銀二もんめの見世女郎を影といふ。蓋し謠曲松風に、「月は一つ、影は二つ、みつ汐の。」とあるより出たといふ。後には勤銀が高くなつて、二もんめ三もんめでなくても、端女郎にこの名のものがそんした。

〔しやう〳〵てい〕（博多小女郎浪枕）三七五頁　「小女郎體」の義である。爰の文は、博多柳町の妓女をいうたのである。柳町は博多の遊女町として其の名高かつたが、今は九州大學が建設された爲に新柳町に移轉した。傾性野羣談卷二に、「小女郎」と書いて、「しやうじよう」と傍訓してある。博多方言に娘（小女すなはち小孃）を「しやうしやう」と云ひ、後に轉じて「しやんしやん」といふ。

〔常是が極印〕（關八州繫馬）八〇〇頁　江戸時代、銀座を常是ともいふ。けだし慶長中、堺の町人、大黑屋常是が銀吹を命ぜられしより銀座が始まつたから、遂に

〔三高(さんかう)〕（關八州繋馬）七九一頁　三溝とも書き、馬の頭から鼻に至る間に溝のやうに凹んだところ。

〔三五(さんご)〕（傾城酒呑童子）三五七頁　こゝの文、「奥州」といふたので、陸奥の郡數三十五をきかせて三五といひ、（延喜式巻二十二、民部省上に陸奥國の下に三十五の郡名が載せてある）、なほ五三の桐といふがあるので、それを「三五に義理」にもぢり、義理を張るを「播磨潟」にかけ、播磨潟飾磨を「鹿様」にいひかけたのである。

〔さん上ばつからふんごろ云々〕（心中天網島）五七三頁　山上參りの呪文のもぢりであらうとの説あれども定かでない。要するにあだ浄瑠璃である。意義があるやら無いやらのこの放膽の冒頭から、つぎ〳〵に展開して行く金玉の妙文を思うて感慨に堪へぬものがある。

〔さんせう〕（鎗權三重帷子）一二九頁　〔三小〕馬相書（古寫本）に、「馬は外腎と陰莖と耳の三つが短少なるを良しとす。」と見えてゐる。外腎とは陰囊である。

〔さんとめ〕（國姓爺合戰）九四頁　印度東境の地名聖多默（San Thomas）。

〔ざんない〕（聖德太子繪傳記）二〇〇頁　無慙の上方詞である。いたはしいこと。

〔しが〕（信州川中島合戰）七一〇頁　〔疵瑕〕難癖。人の難癖をいうて疵つけること。「しがからさきに」とあるは、「疵瑕からさきに」に「志賀唐崎」をいひかけたのである。

〔しげれ松山〕（曾我會稽山）二九八頁　「しげれ松山しげらうには、木かげにしげれ松山。」といふ唄の句に據つたもので、この唄は閑吟集に載つてゐる。爰の文は、太夫三浦と大彌太との情事をいうたものである。「しげる」はこもる義で、男女こもることで、房事をいふ。

〔七部の大乘〕（聖德太子繪傳記）二一三頁　大乘七部の經文。

〔七りけんばい〕（津國女夫池）六一三頁　七里結界(しちりけつかい)を「し

關白氏長者となり、十九年正月薨ず、享年五十。本阿彌光悅、角倉與一も信尹に書を學んで謠曲などを書寫し刊行した、これを嵯峨様といひ、近衞流派である。集林子のこゝの文は、謠曲本の字は近衞の書流にきまつたもの、野郎歌舞伎の俳優の被れるものは若紫の帽子にきまつたもの、遊郭に入りびたり遊女狂ひする者は、終に金と人情義理に窮して身の破滅となるにきまつてゐるとの意。

〔妻子珍寶及王位、臨命終時不隨者〕（平家女護島）四六頁　大集經に見えてゐる文である。妻子や珍寶や王位や、これ等のものはみな人の愛著樂欲する所であれども、命終の時に臨んで冥土に持ち行かれるものではない。

〔芾んなる甘棠剪る事勿れ〕（雙生隅田川）五四四頁　詩經召南甘棠篇に、「蔽芾甘棠勿レ剪勿レ伐、召伯所レ茇」蔽芾は小なる木の形容語。

〔さだつ〕（傾城酒呑童子）三四六頁　「さんだつ」（簒奪）の撥音「ん」の略された語である。うばひ取る義より轉じて、ごた／＼もめの意にいふ。紛糾。ごたつき。

〔五月雨ほど云々〕（心中宵庚申）七六七頁　諸國盆踊唱歌、河内の部、「さつき雨ほど戀ひ忍ばれて今はあきたのおとし水。」の唄に據つたもので、初めはしつこく戀慕されて、今となつてはあきて捨てられる意。

〔さるぜ〕（博多小女郎浪枕）三八二頁　ポルトガル語 Sarja、舶來の毛布である。なほこゝの文にある、「すためん」はオランダ語 Stammet、經を麻、緯を羊毛で織つた布。「かるさい」はポルトガル語 Carisea、地の薄い羅紗。「らんけん」はオランダ語 Laken、羅紗の類である。

〔さん〕（心中宵庚申）七八二頁　〔贊〕繪畫の上にその繪畫をほめて評した詩文を贊といひ、轉じて批評また惡評の意にいふ。

月卿は卿相又は公卿ともいひ、攝政關白太政大臣左大臣内大臣は公で、大納言中納言從一位より三位以上の人々は卿であつて、參議は四位でも卿といふ。殿上人とは四位五位及び六位の人の昇殿を許されたる者をいひ、堂上ともうへびとともいふ。攝關の子の元服以前殿上に仕へるを童殿上人(わらはてんじやうびと)といふ。

〔けんぼくぼ〕(傾城酒呑童子) 三四八頁　世間を憚らず表立つこと。公然。蓋し憲法公法より出た語か。

〔公道(こうだう)〕(大經師昔暦) 一〇頁　はなやかならぬこと。じみ。著實。

〔刻鐘〕(心中宵庚申) 七七八頁　鐘を撞いて時刻を報じるより鐘を刻鐘といふ。こゝの文は、熊野屋の權右衞門が宗昧をして鐘を作らしめたのが出來たので、その開眼供養をする爲に、檀那寺の住持や講中の者どもを招いたのである。

〔ごつい客〕(生玉心中) 三七頁　ごつごつしい。かどかどしい。武骨しい。現今も紀州東牟婁郡あたりにて、武骨しいを「ごつい」といふ。

〔こづか〕(傾城酒呑童子) 三四七頁　「もとどり」(髻)をいふ。「かみづか」(髮束)を「かんづか」「からづか」といひ「こづか」と轉訛したので、「かみより」(紙縒)を「からより」といひ、「こより」といふと同じ類である。

〔胡敵(こてき)の一足(いつそく)〕(平家女護島) 四二一頁　源平盛衰記、智卷第八、漢朝の蘇武の事の條に、漢武帝の時蘇武匈奴に使し、虜られて十九年、鴈の翅に文を結び付けて放つた、其の狀に、「昔籠二巖穴之洞一、徒送二三春之愁歎一、今放二稽田之畝一、空同二胡敵之一足一、設身留二永朽於胡國一、必神還再仕二于漢君一。」と書いたことが見えてゐる。

〔近衞流〕(心中天網島) 五九七頁　近衞信尹(のぶたゞ)の書流をいひ謠曲本の字は此の書流である。信尹は本名を信基、謚號を三藐院といひ、弘法大師の書風をまなんだ能書家で、近衞流の祖である。左大臣となり、慶長十年七月

〔ぐわち〕（壽の門松）　二四九頁　「ぐわんち」（頑癡）の撥音「ん」の脫落した語であらう。かたくなで愚かな義。野暮（やぼ）。不粹（ぶすゐ）。これを瓦智と書くは當字である。

〔くわを拔かし〕（國姓爺合戰）　九一頁　原本「くは」とあるに從ふべきか。氣を取られて鍬を手放す義であらう。以て氣拔けする、茫然自失する、當惑するの意にいふ。「くは」を「が」（我）に取つて我意の義とするは誤りであらう。

〔管仲（くわんちう）が九度（こゝのたび）諸侯の會もかくやらん〕（國姓爺合戰）　七〇頁　管仲が齊の桓公を輔佐して諸侯を九合し、天下を一匡し、諸侯に霸たらしめた。十八史畧にも、「齊太公望呂尙之所レ封也、後世至二桓公一霸二諸侯一、……、桓公九二合諸侯一、一二匡天下一、皆仲之謀。」と見えてゐる。九合は糾に通じ、九合は糾合卽ち聚合の意であるを、集林子は九度會合の意に解したのである。

〔傾城こまめにたらひが女房云々〕（壽の門松）　二四九頁　傾城は日に幾度も化粧をし腰湯をつかひ、こまめに盥に親しみ、盥は傾城の女房役といふ意で、「請出し盥」といひつゞけ、千代能の「とにかくにたくみし桶の底拔けて水たまらねば月も宿らず。」の歌に據つて、「底ぬけて影も宿らぬ。」というたのである。

〔荆（けい）の宣王に江乙が答へ云々〕（雙生隅田川）　五二一頁　戰國楚策に、「楚王（宣王）問二羣臣一、北方畏二昭奚恤一（楚之臣）何故、江乙曰、虎求二百獸一而食レ之、得レ狐、狐曰、子無二敢食レ我也、天帝使三我長二百獸一、今子食レ我、是逆二天帝命一也、子以レ我爲二不信一、吾爲レ子先行、子隨二我後一觀、百獸之見レ我而敢不レ走乎、以爲レ然、故遂與レ之行、獸見レ之皆走、虎不レ知二獸畏レ己而走一也、以爲レ畏レ狐也、今北方非レ畏二昭奚恤一、實畏二王甲兵一也。」

〔月卿雲客〕（關八州繫馬）　七九一頁　三位以上の人を月に譬へて月卿といひ、殿上人を雲に譬へて雲客といふ。

かんと、金の冠被ぬばかり、しやくは持病にありとかやと續けたれば、兩人は慨然たりしとかや。」とあつて有名な句である。「しやく」は笏を病の癪にいひかけて世話に碎けたのである。

〔くすんだ〕（心中天網島）五七六頁　「くすむ」は沈みがちな眞面目なるをいふ。尤草紙に「くすみたる物の品品、不動の顏、親子の中の物語、下戸の座鋪、年寄衆の參會。」倭訓栞に「くすむ＝奇ノ字の意也、枕草紙の抄にくすみて實法なる意也といへり。」「大小くすんだ武士の正眞。」とは、色に酒に歡樂の遊郭では、大小は殺風景でくすんだ物であり、それを佩いてにがりきつた眞面目な武士のきつするとの意。

〔桑山（くはやま）〕（心中天網島）五九三頁　桑山の丸子は小兒藥として有名である。桑山修理大夫が征韓の役の時持ち歸つて其の製法を傳へ、天王寺の北にある瑠璃寺から賣出したものである。

〔熊野の牛王の村烏〕（心中天網島）五八七頁　紀州熊野權現より出した誓紙であつて、表に熊野牛王寶印及び七十五羽の烏の繪が捺してある。起請文はこの紙の裏に書いたもので、「令ニ違犯一者　梵天帝釋四大天王總而日本國中大小神祇殊氏神八幡大菩薩摩利支尊天御神罰可ニ罷蒙一者也仍起請如レ件」などと書いて、年月日、宛名、署名したもので、七枚起請は七枚を用ゐたものである。この誓紙は熊野比丘尼が賣り、妓女などはこれを今の契約書のやうに使用したものである。

〔くりしめの注連繩〕（傾城島原蛙合戰）五〇九頁　「繰締注連繩」繰締の緒の注連繩になれるもの。繰締の緒は具足の胴の下部にあつたもの。武家名目抄甲冑部に「繰締緒、今无。」

〔〓（くるり）の矢〕（雙生隅田川）五四一頁　矢の先に小さい輕い目無しの鏑を附けて浮子（うけ）とし、鏃に鴈股などを用ゐ、水上を流して水鳥の脚を射る矢。

りける女の許に、死ぬべしといへりければ、返事に早死ねかしといへりければ、又遣はしける。」と詞書して「同じくは君とならびの池にこそ身を投げつとも人に聞かせめ。」とある歌に據つたのである。

〔掲諦々々々々云々〕（女殺油地獄）　六七三頁　般若心經に見える呪文で、唵呼魯呼魯旋荼利摩登枳は藥師如來の呪文、唵阿毘羅吽欠は大日如來の呪文である。山上參りの講中の者どもこれ等の呪文を唱へながら、河内屋德兵衛の店前に立ち寄るのである。

〔玉塔〕（平家女護島）　四三七頁　珠玉で飾つた塔。こゝの文は、玉塔に玉代をきかせ、謠曲、海士に、「龍宮に至りて宮中を見れば、その高さ三十丈の玉塔に、かの珠をこめ置き。」とあるを改作したものである。

〔金精の妙質火德の明輝〕（平家女護島）　四〇五頁　西方を金となす、鸚鵡は西域に產する靈鳥なるが故に金精の妙質といふ。南方を火となす、鸚鵡の觜赤いが故に火德の明輝といふたのである。なほこゝの文の、「籠の中の鸚鵡……靈鳥いかんぞ時のさかしきに遭へる。」までは、文選にある禰正平の鸚鵡の賦に據つたのである。

〔金の冠を被ぬばかり、しやくは持病にありとかや〕（傾城酒呑童子）　三五五頁　橘庵漫筆卷五に、「芝居主竹田小出雲狂言の筋を思ひついて門左衞門筆をとる。穗積以貫先生もその席に居られしが、段々作文するうち、金の冠被ぬばかりと書きさして筆をやめ、夜も深更に及びぬ、明日のことと門左衞門は歸れり。あとに以貫子と小出雲一つ蚊幮に臥して話に、扨々門左が例の妙文驚きしなり、併し金の冠被ぬばかりとは、町人の事蹟に狂言綺語ながら甚しきに過ぎたり、明日書き直させ候べしと、小出雲申しけるに、以貫子のいへるは、いかさまけやけき言葉なり、定めて門左料簡あるべしと寐られける。翌日門左來りて、よべのあとを書

の尿、馬勃は馬糞。韓退之の進學解に、「牛溲馬勃敗鼓之皮、倶收並蓄、待レ用無レ遺者、醫師之良也。」

〔箕裘〕（傾城島原蛙合戰）　四七四頁　弓人の子は其の父が堅い幹角を矯めて弓を成すを見て、軟かな柳條を曲げて箕を爲ることを學び、冶工の子は其の父が堅き金鐵を鎔して破器を補繕するを見て、軟かな獸皮を補綴して裘を爲ることを學ぶといふ義、よつて父祖の業を繼ぐ意。

〔菊籬のもとに手折りては、悠々として南山を見しは唐土〕（聖德太子繪傳記）　一六八頁　陶潛の飲酒の詩句に、「采二菊東籬下一、悠然見二南山一。」

〔歸去來々々、ぴんくはんたさつ、ぶおん〱〕（國性爺合戰）　九九頁　「きこらい」は陶潛の文に有名な歸去來賦といふがあるから、その歸去來を取り、「ぴんくはん」はくわんおん（觀音）、「たさつ」はさつた（薩埵）を轉倒して訛り、それに鐵砲の音「ぶおん〱」を添へて、唐音詞らしくいうたまでで、意味をなさぬ例の諧謔の筆である。

〔北向〕（傾城酒呑童子）　三四〇頁　勤銀五分ばかりで淫を鬻いだ下等な賣女である。北向とはこの賣女が上方の北方の横町の貧民長屋に住んでゐたからの稱である。この賣女も時代につれて勤銀も高くなり、變遷もしてゐる。原田光風撰、及瓜漫筆に、「北向―一匁、是れは天和の頃中堂寺村住吉屋太兵衞と云ふもの、價下直なる女郎多く抱へ繁昌しける故、島原よりこれを願ひ、住吉や島原の內へ引けるによつて、今郭內揚屋町の上に中堂寺町といへる一町あり、北向女郎始めは價五分、後は一匁にて、此の住吉屋に始まるとぞ、享保のはじめ此の住吉や太兵衞の家絕えたり、夫れより此の北向と唱ふるもの絕えて今はなし。」

〔君と竝びの池にこそ身をも投げつ〕（津國女夫池）　六三九頁　後撰集卷十二、戀歌四の部に、「まだあはず侍

あかぬもの。」

〔かまがわせた〕（女殺油地獄）六八七頁　邪曲人がござつた。鎌は身と柄とが折れ曲つてゐる故、邪曲の意に喩ふ。わせるはおは(御坐)せるの訛。

〔かもじ樣〕（信州川中島合戰）七三〇頁　か丶(阿母)の文字詞。こ丶は山本勘介の內儀をいふ。文字詞は、足利時代の末期朝廷式微にして供御の物備はらず、女官等その名をいふを忌んで何文字というたことから起つたといふ。

〔骨牌の繪の付く祈禱に痲布の明神〕（女殺油地獄）六七八頁　こ丶の文は祈禱といふからに、骨牌札の名の「あざ」、及び骨牌は痲布で作るから、それらをきかせて、それに明神を添へ、また骨牌札の名の「しやか」をきかせて牟尼佛を添へ、以て神佛名のやうにした洒落である。

〔寒雲鐘を隔つ〕（曾我會稽山）二七七頁　謠曲熊野に、「鐘は寒雲を隔てて聲の至る事遲し。」

〔漢宮〕（曾我會稽山）二九一頁　漢の宮殿の義、甘泉宮というたもので、陝西淳化縣西北山上にあつた宮殿。爰の文は、內は裏なき浮世蓙も、漢光武帝と寵姬李夫人とが甘泉殿で睦まじい契りをした、其の漢宮と思ひなし、夫婦幾久しい契りを鶴壽千年に譬への意。白氏文集の詩に、「漢武帝初喪二李夫人一、………、甘泉殿裏令レ寫レ眞、………。」謠曲、楊貴妃に、「漢宮萬里の粧。」

〔がんざう鱠〕（傾城酒呑童子）三六〇頁　「がんざう」は「かざう」ともいふ、採ち齏ふの約訛であらう。嬉遊笑覽に「和雜鱠＝かざうなます、夏の料理なり」、〔洛陽集〕和雜なます、蓼の酢たゝへて藍の如し、〔永榮料理物語〕に、かんざうなます、きすご、さより、鰈、えひ、いか、など色々つくりまぜ候事なり、これは酢しほかげんしてあへ、けんばかりおくべきなり。」

〔牛溲馬勃敗鼓の皮〕（關八州繫馬）八四七頁　牛溲は牛

ある。

〔幸左衞門〕（女殺油地獄）六六七頁　竹島幸左衞門（二代）をいひ、座元であつて上々吉の立役の俳優。

〔鏡の家〕（女殺油地獄）六八三頁　鏡筥。巣林子作の艶狩劒本地に、「鏡は女の魂、武士の太刀かたな、本望遂げん銘の物。」とある如く、鏡は女の魂であり、鏡筥は女の魂の宿る處である。

〔角を入れ〕（槍權三重帷子）一三三頁　角は當字で、鉸具である。鐙の頭に細い金具があつて、それに力革を差通す、其の細い金具を鉸具といふ。角を入れるとは、馬を進めようとする時鐙の鉸具で馬の腹を蹴るをいふ。

〔圍〕（傾城酒呑童子）三三九頁　〔鹿戀〕かこひとは、天神の次位にある遊女の稱で、太夫に附隨する者を引舟と別名す。この遊女の揚代貞享以前は十四匁または十五匁までであつた。そして當時流行しためくり骨牌をするに、十四、十五の數は人に見られないやうに圍ひ隱すものなれば、その緣でこの位の遊女を圍といふに至つたといふ。

〔肩の惡さ〕（曾我會稽山）二七六頁　運のわるさ。籠耳に、「運のよいわるいといふべきを、肩がよいわるいとはいふべき詞にあらず、肩に棒おく商人駕籠舁乘物舁より起りたる詞なり。」

〔かだ者〕（雙生隅田川）五六七頁　橫著者。「かだ」は「くわんたい」（緩怠）の約訛であらう。懶けること。

〔葛城の神隱れ〕（心中天網島）五九七頁　こゝの文、吉野の金峯山と葛城山との間に岩橋を架けるに、葛城の神は形の醜いことを辛がつて、夜でなければ出て働かなかつたと云ふ傳說を應用して、治兵衞が人目を忍び隱れる意にいうたのである。

〔壁に馬乘りかけし〕（心中宵庚申）七五八頁　唐突または性急なことの意にいふ諺。長町女腹切にも、「どうぞ意見でもされぬか、壁に馬乘りかけては明くべき埒も

枕の上にも、「ア、堅い〳〵、同船致し一つ釜の食事たべるは一門同然、サアお手上げられ。」と見えてゐる。さら疊に手をついて謹直になさらないで、疊より手をあげて樂になさいとの意。

〔おねば〕（心中宵庚申）七七六頁　御根葉であつて、間引(まび)いた嫩菜。

〔おばしま〕（平家女護島）四〇五頁　軒檻をいへど、巢林子は櫳檻をかく訓んだのである。櫳檻は鳥籠のこと。巢林子のこゝの文は文選の鸚鵡之賦に出てゐる。

〔おひえ〕（大經師昔暦）一二頁　〔御卑衣〕木綿の綿いれ衣。

〔大坂三鄕(おほさか)〕（心中天網島）五七五頁　大坂北組南組天滿組をいふ。攝陽奇觀卷之一に、「大坂三鄕といふは、北組南組天滿組なれども、往古は大坂二鄕にて、天滿は南中島の地なり、今土地繁昌して大坂の町續と成りたり、古き繪圖には天滿市場の邊建家見えず。」

〔おんくはう〕（國姓爺合戰）八七頁　不詳。蘊奧（うんあう）を誤つたのであらうか。

〔かい〕（博多小女郎浪枕）四〇二頁　「かい」は「かひ」で、生(い)き甲斐があるなどいふ甲斐と同じ語であつて、價卽ち價値の義である。こゝの文意は、長くも添はぬといふわけで、生命に關する價値のことまでもなしたといふのである。心中重井筒上の卷に、「客衆とやらのかいになり身代(しんだい)の妨げ。」とある「かい」も價値の義であつて、この文意は、德兵衞が客衆とやらの價値になつてくれては、儲けられないから、身代の妨げというたのである。なほ巢林子作中に見える「一門がひ」「死なずがひな目にあひて」などの「かひ」も、皆こゝにいへる「かひ」と同じ語である。然るにこの語を「害又は支障」の義と解するはいかゞと思ふ。

〔梅花鮫作(かいらぎづくり)〕（津國女夫池）六〇九頁　地粒すべてあらい鮫皮でつかを卷いた刀劍。合類節用集に、「梅華皮(かいらぎ)」と

手は金剛寶棒に支へ、左手は掌上に寶珠をとりて立ち頂上五輪塔婆ある姿を、天照大神日向下生の御像としてゐる。

〔賣買高い〕(心中天網島)　五八六頁　長町女腹切にも、「賣買高い此の節二貫目近い二十兩。」と見えてゐる。當時は正德元年鑄造の惡質な四寶字銀通用してゐる時代であるから、(心中天網島中之卷に、「今の治兵衞が四つ三貫匁の才覺打ちみしやいでも何處から出る。」とあるはなほ四寶字銀の通用せるを示してゐる。)、金貨との兩替にも、物品の賣買にも、銀の利目が薄い爲に高額を要し、世智辛い世なるをいうたものである。

〔外郎積んだ〕(心中宵庚申)　七六三頁　透頂香を撮むことであつて、すき(透を好の意にとり)頂く香の意に取つて、我が物おもひを先方に知らさうとする初心のわざである。

〔運開云々〕(曾我會稽山)　二一一頁　運は日月の運行をいひ、開は渉ること。こゝの文では地球の公轉の意。三百六十輪は周期の旋轉數で、三百六十日に當る。三百六十日を一年とすることは、淮南子にも、「天有二十二月一以制二三百六十日。」と見えてゐる。天運三千六百周とは、源頼朝が天運の開ける開の十年をいひ、治承四年高倉の宮の令旨を奉じて伊豆に兵を擧げてより、建久元年入朝して右近衞大將を拜するに至るをいうたのであらう。

〔うんざい〕(傾城島原蛙合戰)　五一六頁　「うざい」に「ん」の增加した誤り。有財餓鬼の事をいひ、以て人を罵つていふ。

〔うんすん〕(國姓爺合戰)　九四頁　これは國名ではなくて、ウンスン骨牌より取つたものであらう。

〔お位樣〕(聖德太子繪傳記)　一八一頁　御位高い人樣の義。先君子。亡父。

〔お手上げられい〕(壽の門松)　二三四頁　博多小女郎浪

つかけるを、水をいつかけるといふ。

〔一生懸命〕（津國女夫池）六二六頁　もとは「いつしよけんめい」（一所懸命）であつて、一所で生命を懸けつなぐ意で、庭訓往來六月七日の文にも「於二譜代相傳之分領、一所懸命之地一者、不レ可レ有二仔細一者哉。」と見えてゐる。後に訛つて「いつしやうけんめい」（一生懸命）といひ、その意も轉じて、命に懸けて事をする意にいふ。

〔いひきにて〳〵云々〕（博多小女郎浪枕）三七九頁　唐人踊の唄で、松の落葉巻四に出てゐる。

〔色に身代宇津の山、高安、齋宮、西の對、二條の后の面影に、似たつきもなき戀の闇、さそひ出せし白玉を、どこぞと問へば芥川、しばしは露の置き所、伊勢物語の模樣もあり〕（傾城島原蛙合戰）五二〇頁　伊勢物語にあることを模樣にした著物雛形を、伊勢物語中の語を引用して記したのである。色に身代うち無くするといふに宇津の山をいひかけ、「宇津の山」「高安」「齋宮」「西の對」は皆伊勢物語に見え、「二條の后云々」も伊勢物語に、「二條のきさきにしのびて參りけるを、世の聞えありければ、せうとたちの守らせ給ひけるとぞ、昔男ありけり、女のえうまじかりけるを、年を經てよばひ渡りけるを、からうじて女心あはせて盜み出で、いと暗きにきけり、芥川といふ川をゐていきければ、草の上におきたりける露を、かれは何ぞとなむ男に問ひけるを、ゆくさきおほく夜もふけにければ、云々、白玉かなにぞと人のとひし時、露とこたへてけなましものを。」と見えてゐる。

〔浮世蓙〕（曾我會稽山）二九一頁　石疊の地紋になつてゐる上敷。

〔宇多國行〕（壽の門松）二五〇頁　當麻の祖、正應年間大和國に居つた刀工。この人作の刀。

〔雨寶童子〕（曾我會稽山）三〇一頁　天照大神をいふ。右

木集に、「誰か聞く難波の汐のみつなべに田蓑の島の鶴の諸聲。」とあるに據つたもので、喜平次が愛人おさがと別れて、一人しよんぼりと雨中に桐油を拾うて著る狀をいうたのである。

〔洗革の鎧〕（傾城島原蛙合戰）四七三頁　洗革で縅した鎧。洗革とは水に浸しとかして作る革の義であつて、白色にいさゝか黄ばみのある革。

〔あらみさき〕（國姓爺合戰）八七頁　〔荒御前〕荒先鋒と書き、荒魂。荒神。神功皇后記に、「既而則撝二荒魂一爲二軍先鋒一。」

〔いきやく〕（女殺油地獄）六九四頁　「ひきやく」（飛脚）になつてゐる本がある。こゝの文「もつきやく」「めつきやく」と、おなじ脚韻をふませて文を修飾したのである。

〔いしんぢよ〕（壽の門松）二二九頁　「いしぢやう」（石丈）の訛。石のやうに堅固なこと。

〔いそもじ〕（生玉心中）三五頁　「いそがし」の文字詞。いそがし。こゝの文は、北野天滿宮の老松をいひ、天滿宮の今に榮えて參詣人數萬人もあつて、それらの人人が思ひ〳〵の願がけをするから、天神樣の御身までも忙がしいことであるの意。

〔平題箭（いたつき）の的矢（まとや）〕（曾我會稽山）一五七頁　平題箭をすげて、的を射る稽古に用ゐる矢。平題箭は鏃の一種で、木、角又は金屬で作り、先を平らにしたのもあつて、尖つてゐない。倭訓栞に、「倭名鈔に平題箭をいたつきとよめり、板著の義にや、題は頭の如し、今の戲射箭也といへり。古今集に二義をかねてよめるうた、咲花におもひつくみのあぢきなき身にいたつきのいるもしらずて。」

〔いつかけた〕（博多小女郎浪枕）三七六頁　ひつかけた。長崎、鹿兒島地方では現今でも、酒を一升ひつかけた（飲んだ）といふを、酒を一升いつかけたといひ、水をひ

註釋

本文中＊印のある語句に就き五十音順によつて索出する

〔朝込〕（曾我會稽山）二八四頁　夜の明けるを待つて遊客が遊里に入り、馴染遊女と逢ふことをいひ、それに早朝攻め入つて祐經を討つべきをきかせたのである。

〔朝ぶさ〕（心中天網島）五九三頁　あさぶつ（朝物）を訛つて「あさぶち」「あさぶさ」といふ、朝に食ふ物の義。夏山雜談に「御朝物は餅粽菓子の類を、年中毎朝河端（喜道）と云御菓子師より調進すると也、民間にても朝食より前に、何にても喰ふ事をあさぶちといふは此の餘風なるべし、今俗にて女子の詞に朝ぶさといふ是れ也。」

〔あなにゑや〕（傾城島原蛙合戰）五一八頁　「あな」は感動詞、「ゑや」も感動の意を示す助辭、「に」は悅、麗、美好の意。日本書紀、神代上卷に、「憙哉または妍哉と書いて、阿那而憙夜（アナニエヤ）と訓んである。巣林子のこゝの文は、心の浮くに天の浮橋をいひかけ、味甘（あま）の榮ふ（榮ゆの訛）に天の逆鉾をいひかけ、神代紀にある語を以て文飾とした。

〔あまのじやこ〕（聖德太子繪傳記）二〇三頁　人の妨げをする邪惡な者をいふ。「あまんじやく」ともいひ、「あまのさぐめ」（天探女）の「め」を畧して轉訛した語。

〔あまもの〕（津國女夫池）六二九頁　甘葛（あまづら）を煎じた汁で、嬰兒に飮ますもの。若風俗に、「すり粉あまものにて人閒育てたるためし數多あり。」

〔雨に著（き）る田蓑の島の鰥鶴（やもめ）〕（生玉心中）五〇頁　謠曲蘆刈に、「雨に著る田蓑の島もあるなれば。」と見え、夫

手へ蹴散らし、八方睨んで立つたるは、爲方なうぞ見えたりける。保昌をまつさき立て出羽の冠者頼平、河内守頼信公遙かに聲かけ、「ヤア〱其の者凡身ならず。小蝶が精魂土蜘蛛の通力加はると覺えたり。今に初めぬ此の太刀の、奇特を以て切り拂はん。」と、拔き放し押し戴き、「源氏の氏神正八幡、哀憐擁護を加へおはしませ。」と、良門めがけ投げかけ給へば、小蝶が形消えうせて眞の形蜘蛛切の、不思議を見るも神慮の加護。「得たりやおう。」と綱貞光、將軍太郎を組みとむれば、公時末武蜘蛛の脊にまたがつて動かせず。頼平頼信走りより朝敵退治、土蜘蛛退治、仇も恨みも切りほどく、御連枝一所に頼光頼信頼平の、家富み榮え國繁昌、盡きせぬ源氏の御代永く、萬々歳とぞ祝ひける。

關八州繫馬　終

たる女郎蜘蛛、紙に捻つて袂に入れん。一昨日來い。」と戲れて、飛び懸れば形は消え、殘るは袋ばかりなり。公時屹と見、「態に似せて卷子をまくと、扨もでつかい子袋、大佛殿の灸の蓋。」と、蹴散らせば颯とさけ、其の色靑蒼たる小蜘蛛共、幾千萬の數を盡し這ひ出る、簇々とむらがり集まりては區々單々と別れちり、這ふかと見ればすつくと立ち、蜘蛛かと見れば小鬼の形眞中に追取り込め、小手に飛び付き足に纏ひ、取り捨て拂へど羣りよる。踏み退け蹴とばし薙ぎ立つれば、山陰暗き梢を傳ひ、己が身を燒く蜘蛛火の光、こゝに點火しつ彼處に消え、殷の妲己が火を愛し、火山を盡すに 三重 ことならず。がにはり者もてあつかひ、「三日風が吹かねば、日本國を張りふさぐと、いふも理、仰山や夥し。一つづゝ殺すは手間づひやし。」と、竹箒斜に構へ、さらり／＼さら／＼／＼、岨陰岩陰撫で寄せ／＼掃き立つる。蜘蛛の足音竹の音。「扨もはかゆき面白や。」と、松風につれさつさと、箒にかけて掃き捨つる、風に蜘蛛の子ちらしける。公時がさらへる間に、谷を隔てて渡邊綱、貞光末武搦手へ攻め登り、朝敵與力の惡黨共腕限り切りつくし、將軍太郎を餘さじと大手の坂へ追ひ來る。先には公時待ち迎へ遁るゝ方もなき所に、不思議や小蝶がありし形影の如くに顯はれて、良門に附添へども、四人が眼にさへぎらず。太郎は妹の神通力、五體に加はる身は鐵壁、「公時ござれ綱ござれ、末武貞光蒐れや／＼。」と欺けば、四人目くはせよる所を、ことともせずひつ掴みかい掴み、右手へ投げ退け左

して誤りならず。」と、又引きしぼれば、「これ保昌、見しりごしにそりや胴慾。今からふつつり抜駆しよまい、片意地もいふまい、まんがちに首も抜くまい。其方の言ふこと何でも聞こ。もう堪忍してくれ。」と、天魔を欺く公時が、保昌にこなされ荒氣もださぬ誤り顔、蜈蚣に唾鼈に蓼、皆それ〲の敵藥有り。保昌はいだる矢先をゆるめ、「危う候坂田殿。」と、互にどつと大笑ひ。貞光末武綱諸共おくればせに近づき、「是れ〲兩人あれを見られよ。葛城山の絶頂に、繋馬の旗陣幕、將軍太郎が出張の城郭。賴信賴平御馬を出され搦手へ向うたり。變化も敵も一日仕事、時刻よきぞ大手より、攻めよ攻めよ。」と下知すれば、法螺を吹き立て太鼓を響かせ鬨の聲々三重攻め登る。名におふ山は嶮難險阻、岩に取り付き行く先は、藤か葛か細引か引渡す蜘蛛の絲、大木古木十重はたへ、張つたる綱に月日ももらさず、闇々暗き木の間より、あら恐ろしや土蜘蛛の、眼は明鏡、八つの手足に生ふる毛は釘を植ゑたる如くにて、出で入る息に火焰を吐き、顯はれ出づれば、「わつ。」と恐れ引き返す、顏に蜘蛛の巣身を絡む、絲に苦しむ軍兵共、八つの足に引き寄せ〲、血を吸ひ取られ死するも有り、綱に掛つて惱むも有り、誠に稀代の惡蟲なり。坂田公時走りより、「ヤア執著深き小蝶が魂魄、兄良門が出張の城を守護するか。蜘蛛の巢の亂杭逆茂木引き破り、太郎めが首とらん。」と帚取りのべ茂み〲、巢をなぎ拂ひ打ち拂へば、又顯はれて毒氣を吐き、腹に袋の子持蜘蛛。「ヤア人民を殘害し、喰ひ肥え

根を切り葉を枯らし、治まる御代の民安樂。＊十萬貫を腰に付け、千歳の鶴に乘り、揚州の都に樂しめる其の樂しみを樂しむも、今此の御代に生まれあふ、人は猶こそ樂しけれ。

第五

土も木も我が大君の國なれば、いづくか鬼のやどりなる。劒の威德に切り拂ひし、土蜘蛛の血を慕ひくる葛城山、平井保昌討手を蒙り、麓を取りまく數百の軍兵、霞隱れにさゝへける。例の氣ばやき坂田公時、「變化流行の蜘蛛なりとも高が蟲、太刀も刀も入るべきか。踏み潰してくれんず。」と、藪へし折つて竹箒、打ち擔げたる煤掃出立、不敵にも又剽輕たり。跡に嘶く轡の音諸軍に先だち獨武者、萠葱匂ひの甲冑弓箭、とりかい栗毛に一鞭あて歩ませしが、公時を遙かに見、駒打寄せ大音上げ、「討手の大將保昌が、目にさへぎるは變化の所爲か。君命の矢先うけて見よ。」と、弓弦しごいてうちつがふ。「ア、麁相するな保昌、變化でも蜘蛛でもない。コレおれぢや。朝霞に顏がみえぬか、赤ちや赤ぢや公時ぢや。率爾するな。」と狼狽へる。保昌それとは知つたれども、彼奴が持病の先がけ、躾はこぞと頭を打ちふり、「イヤ／＼くはぬ／＼。變化の通力我が眼をくらまし、公時に化け近づき寄り、引き裂き捨てんとは愚か／＼。よし又誠の公時にもせよ、大將の下知を待たず軍令を背く拔驅、射落

おふ物、眼の光は羅計火星、閨に向つてつく息は、虹のかけはし長廊下、五歩の細殿十歩の樓、尋ぬるかたも築山の、二人 山は鐵城水は淸劍、「修羅の巷にいざ來れ。」と、四人を一度に引き締め〳〵、なぐれば留る振ればしがらむ、捻ぢ合ひへし合ひ山を劈く變化の勢ひ、陸地に舟漕ぐ四人が力、「えいやえいや。」とひく息つく息、惡風吹きかけ砂をとばし、炎の煙の陰に隱れて、姿は忽ち失せにけり。ツレ四人の女も勇氣を碎き、茫然となつたる所に、シテ御家督賴信朝臣、平井保昌相具し驅け付けたまひ、「桃園重代膝丸の御太刀、内侍の枕の守にたて、虚空に向つて大音上げ、「怪は德に勝たずとしる。縱ひいかなる變化化生雨となり風となり、千萬に轉化し障礙をなすとも、天孫附屬の天子の威光、源氏の武功に加へ四海に施さば、刃に血ぬらず戰はず、他方萬里に追ひ散らさん。」と、雲間を睨んで立ち給ふ、聲を等しく山河草木動搖して、五百機たてる蜘蛛の絲、重なる雲に夕立の篠を亂すに 三重ツレ異ならず。彼方此方に立ちまふ内、御寢所の内、震動鳴動、これはとあわて驅け寄れば、二人膝丸おのれと鞘を拔け出で、刃の電光猛火の稻妻、變化の眞甲はつしと打てば、血煙ぱつと漲る瀧つ瀨、恐れて御殿を去るよと見えし、シテ「今より又も來らじ。」と、いふかと思へば忽ちに、ツレ内侍の御氣色本復本望、人々悅びさゞめく聲、空には刃の閃く光、二人逃げ行く化生を追ひかけぼつつめ、雲に登れば續いて分け入り、飛行自在の名劍寶劍、名も今の世に蜘蛛切丸と、威德を慕ひ血を慕ひ、變化の

靡、すさまじかりける次第なり。ツレ「すはや事ぞ。」と四人の女房、長刀かい込みとんで出で、内侍をいたはり寢所にいれ、眼をくばり立つたる所に、シテうしろにすつくと小蝶が形、一人六臂の變化を顯はし、道具屋「汝しらずや我そのかみ、南閻浮州に蟠り、葛城山に年をふる土蜘の精靈なり。大日本を横領し魔界になさんと、將軍太郎が心に加被し、甲斐も情の道に奪はれ、屍許りは泥土となんぬ。猶魂魄は五行造化の氣に止まる、一念只今思ひしれ。」とはつたと睨むを、ひるまぬ恐れぬ四人の女、ツレ「いかんぞ汝王地を犯す冥罰神罰、身を亡ぼせし前車に懲りず、後車の罪業生々はてなき惡毒蟲、羈絆を切らん。」と、いふより早く、四人が長刀裾を拂へば、シテ飛びあがり、ツレ右手をきればシテ左手へひらき、ツレ後をなげば、シテ前に忽ち早業輕業縱横無盡。シテ「やるなのがすな、あまさじ三重もらさじ。」聲を合はせて四人がなかに追取りまけば、二人形は失せて熾んの猛火、炎々燐々爆々たり。ツレ「南無三寶仕損ぜし。」と、呆れ立つたる庭の面、シテ花も焦るゝ紅梅の、木の間にきよろりと、けらけら笑ひ、霞を踏んで輕きは梅が香、ツレ重きは惡業二人たわむ枝々歩むともなく行くともなく、ツレ彼か是れかと又影失せて、こゝよかしこと眼をくばればあれを見よ、二人御階の元ににょつき、立つて小手招き、此方へ戻れば雪か霰か雲間の月、四方八面前栽築山追うつまくつつ、隱れつ見えつ業通自在。ツレ長刀投げ捨て手取にせんと驅け寄れば、シテ化生も六臂に追うつまくつつ、今煩惱の犬

所に仕へ申す命婦にて候。扨も内侍例ならざる由聞召し、唐の大和の妙薬を賜はり、みづから持つて參りしなり。いたゞき疑ひ給ふなとよ。」ツレ夜陰のおとづれ物凄く、不審ながらも立ち出でて、見るも恐ろし夢の小蝶、驚きたまぎり入れば追ひ驅け怒れる聲、シテ「愚かの人の有樣や。惱みをかくるも我がせこが、來べき宵なりさゝがにの、蜘蛛のふるまひ豫てより、我がなす業とはしら絲の、來るや千筋の絲筋に五體を搦め苦しめて、ひつ立て／＼られ。」ツレ「逃げんとすれど亂れ足の、はひまとはるゝ蔦葛、恨みつゝむも漏れやすき、囁き竹のすぐならぬ、其の身を悔の千度八千度。」シテ「こちは百度百千度。」二人「浮寢に長夜なき明かす。」ツレ「喃恐ろしや恐の戲れお悋氣は、己が心の闇の水暗き、澤の螢火送火に、付きて立ち去れ歸れかし。」シテ「いやいかに言ふともつきせぬ恨みの心の鏽矢、怨念力の張弓に射てや落さん連理の枝。」二人「瞋恚邪見の斧鉞を打ち立て／＼、しつてい／＼、伐木たう／＼たう／＼、枝も梢も打ち折り打ち拂ひ、「魔道に沉んで浮む世もなき我が眷屬の、長き奴とせんものを。」と、又ひつ立つれば息も絶え／＼、引かれ廻るぞいたはしき。君は嫁入の花やかに、我は地獄の門出に、冰の刃は劒の山、ツレ綾や錦のとのゐ物、かへつて焦熱大焦熱の、炎に身をば焦すくるしみ、シテ三々九度は　道具屋二河白道、うづまく炎みなぎる白波、庭の梢のさつ／＼／＼、池の水音どう／＼／＼、大地却つて遡り、高天碎けて落つると見れば猛火と燃え、電光げきして霹

十六日の夕ぐれは京中賀茂川筋に羣集をなし、精靈の送火これに付いて、お歸りや〳〵と聲々に呼ばはる。夫れになぞらへ、娑婆に迷ふ小蝶が妄執の魂を送らば、妄念の雲晴れ立ち去つて内侍樣の御本復、疑ひ有るまじと思ふが、何れも何と。」と言へば、一度に横手を丁ど、「できた〳〵。サア時刻が來たぞ早急げ。柴よ附木よ松明。」と手ん手にさわぎ夕日影、はや暮れかゝる遠寺の鐘、心もすめる

三重歌 精靈の送火、是れについてお歸りや〳〵〳〵。秋ならぬ秋こそきたれ、黄昏時の寂しげに築山の陰ほのめくは、羣る螢か明星か、かげは三つ四つ松明の、數も四人の女房達、まけじ劣らぬ山のこし、東西上下一どきに、一畫一點麓より、追ひ上りては又峯より、傳ひ集まり彼方の谷、此方のおさき一つに寄れば、大文字赫奕たり。無明の闇を照らさんとの、高野大師の御誓ひ、方十丈の御筆畫、今も歴々有り難き、安養世界淨土寺村、爰に移して彌陀來迎、「助かり給へ南無精靈、南無阿彌陀佛。」と廻向して、宿直所に立ち歸る。銀河晴れ行く初更の天、消え掛る文字の内より、一團の火焔烈々と空中に翩翻し、落つると思へば忽然と、小蝶が姿顯はれたり。次第 浮きたる雲の行方をば、浮きたる雲の行方をば、風の心に任すらん。歌 風の心も白雪の、消え歸りても落ち瀧つ、岩波高くせき返す、戀慕の闇に吳竹の、夜毎に通ふ築山の、我が身にもゆる片思ひ、人こそ知らね嫉ましやと、障子に荒くおとづるゝ。ツレ 内侍夢さめ胸とゞろき、「不思議や誰そ。」と問ひ給へば、シテ「是れは院の御

山櫻も、爰にみかはの杜若、五色の絲の色々を、縫の牡丹に玉を取る、獅子の雪團小雪團躑躅とも見よ紅粉鹿子、白い絞りは卯の花やかに、松も檜も杉も榎も、紅梅絳絹裏鬱金紫、裏吹きかへせば淺葱櫻鶸櫻、雲珠櫻八重櫻鹽釜櫻瀧櫻、一重櫻や小櫻の、あまえて見ゆる姥櫻とも御らんぜ。」と、詞の花も、春の山路秋の野邊、目前の興とも謂ひつべし。いつに內侍の笑顏、「かう見た所は誠の花にかはらぬ、目のさめた物好。殊に皆の衆が、思ふことなうわさ〳〵わさ〳〵機嫌よければ、つれて心も氣も輕い。」と、手をひかれて築山にかゝりし小袖、「どれも〳〵、しをらしい模樣や。」と、御手に觸れたる萩桔梗、菊にむれとぶ小蝶の縫、お目にかゝれば、「ハア、怖、爰にもまた小蝶か。」と、「わつ。」と一聲、手足もふるひ御色かはり、かつぱと轉び伏し給ふ。人々あわて抱きかゝへ、お寢間にやすめ參らする。四人あきれ溜息ほつと、なかにも岩藤打頷き、「合點した〳〵。最前胡蝶の夢の咄にも、ぞつと成されたお顏持、今また小蝶の縫紋にてお目のまふは只でない。御病氣は小蝶が魅入れ合點か皆の衆。」「それよ。」と一度に大聲上げ、「憎い女め慮外な恨み。目に物見せん。」と立ち別れ、驅け廻つても何を當所、又集まつて、「どうせう。」と、手に手を組み合ひ頰づかへ。木幡卽座の工夫を廻らし、「ナウ是れ〳〵、屈竟一の思案が有る。幸ひ今宵は篝火の大文字。元此の東山の大文字といふ事は、七月魂祭の精靈の、冥途の道を照らして送り歸す送火。さも無ければ魂婆娑に迷ひ留まるとて、

の染模樣、縫織紋の梅櫻、一度に咲ける風景、お氣も轉ずる道理。是れは何とお局樣。」「オ、何れも一趣向。とかく書付を以て伺はん。」と、人々を伴ひ御寢所の、お次の遣戸をそつと明くる屛風の中、夢現なき内侍の聲、「わつ。」と魘はれ呻き、身もだえ寐返りに、皆々立ち寄りやう〳〵と、抱き起せば力なき、*びょうの柳よわ〳〵と、御髮おもげの御息つぎ、女房達も諸共に打萎れてぞ見えにける。岩藤諫めて、「常々細いお心に何ぞ怖いお夢かな。必ずお氣にかけられな。神佛の夢想の外皆あだ夢。莊子と言ふ唐土の博識さへ、夢の中に胡蝶と成りしと承る。」と、言ひもあへぬに内侍はつと色變り、「胡蝶の夢とは心えぬ。扨は自ら夢の中に、まさなごとばし言ひしよな。恥かしさよ。」と許りにて、そゞろ涙の御顏。「ア、お氣弱い。胡蝶の夢とは詩歌にも數々。お心にかけらるゝは何ゆゑ。總じて今度の御なやみ心もとなきことのみ、お心つゝます仰せられ、お胸はるゝが卽ちお療治お藥もまはる筈。御慰みの爲にとて何れも趣向の物ずき、此の內お望み遊ばせ。」と御覽に入るゝ目錄、くりかへし打守り、「誠に、各心づくし、返す〳〵も淺からず。取分け此の書付に、衣笠山の花小袖、梢に四季の花の光、共にゆかしき詠めならん。急いで用意。」と宣へば、承つて女房達、數の小袖を取り揃へ、梢々にかけにける。歌「先づ初春の空色を、これ此の枝へひら〳〵と、文彌眞先かけて梅玉椿、かゝれやかゝれ藤波も、小簾山吹の裾模樣、柳すゝ竹柳に燕、薊蒲公英、若草をかけし枝ぶり、吉野初瀨の

評議には、どうでも是れはお悋氣の凝り。男の手癖足癖も、私らが樣ながりはりは、嚙み付きも仕かねず。又下々の女夫かけ向ひが悋氣諍ひは、先づ敲きあふくらはしあふ、道具三つ四つ打ち割れば、さらりつと胸が晴れるげな。上々方はうはずんべり、お心で許りくよ〳〵〳〵思ひの積り、それにお氣晴らしとは、ア、聞えたお療治、先づ私が存じより申して見ましよ。見す〳〵心を引立つるは相撲々々、先づお座敷に四本柱、括り枕をならべ土俵をつき、四人の我々眞裸で、二人づゝ西東へ立ちわかれて大關、腰元衆の内で關脇小結をえらみ、殘りの女中皆前相撲、肌の物は男の通り緞子繻珍の二重廻り。ア、さりながら、さがりを取つて引く時、中にこたへの張合なく、脇へずつと外れては氣の毒か、いつそそれも一景で有らうか。末武貞光のお内儀、何とおぼす。」と言ひければ、らん菊木幡顔打赤め「オ、ざんない一景も半景も、娘子供の時ならば、こじをらしうもあれかし、持ち古した墨の肌、腰に廻した肌の物、脇へずつとはづれては、手負烏見る樣で凄まじかろ。」と噴き出す。中に木幡は才覺者「すべての病人晝は紛るゝかたも有り。とかく暮れてのお慰みと思案致すに、毎年七月十六日、東山の大文字都では珍らしからず。この築山にうつし秋知り顔の夕景色、御覽に入れては何とばしあらん。」と、言へば岩藤「二人の御趣向殘る所はなけれど、私がまた思ふには、昔衣笠山に白布引きはへ、夏の雪を御覽ぜし帝も有り。お庭の梢に小袖をいくらも打ちかけ、四季の草木菊女郎花

笹の霰、こぼれやすさよ我が涙、ともに鳴きつれ歸る鴈、よそに見なして、思ひやるこそ、なにか心もかへるかな。お伽の衆のつれ歌も、たゞにはあらぬ多田の御所、賴信の御臺所伊豫の內侍、過ぎし頃より例ならず、打臥し惱ませ給ふゆゑ、渡邊が妻岩藤を始めとして、木幡らん菊おしやなの前打揃ふ四人連、言はねどしるき四天王の思はく達、夫は兵これ等は品者通り者、裲襠の裾長廊下、御寢所ちかく相詰むる。中﨟の少納言奧より出で、「何れも奇特の御機嫌伺ひ。內侍樣の御氣色、典藥衆の見立にもおよばず、夜晝となく暫くも御寢なればはや大熱、おびえ魂ぎりそゞろ言。萬一嫉妬見入れのわざか、もし怖いお夢かなどと伺へども、とかうの事も仰せなく、次第にお勞れ見る目の悲しさ。各がたの發明で面白をかしう言ひ廻し、御容體も聞かまほしし。また和氣法橋見立には、もとお氣のむすぼれ、何がな興あるお慰み、御心だにほうじなば、お藥も廻らんとの事ゆゑ、無調法な歌三味線、お氣は晴れずお頭痛でも引起そかと是れも氣遣ひ、なんぞ晴れやかな大ていなお慰み、皆々つれそふ殿達から世間廣う見るお衆、どうぞ御趣向賴みます。」と、餘儀なき詞に四人の女房、一度に、「はつ。」と頭をさげ、「ハアどうがなあ、ハア何とがな。」と、思案評定とりどりなり。公時が女房おしやなの前、遠慮なくずつと出で、「仰せの如く此の度の御氣色、何とも心得難きとて、賴光樣御夫婦賴信樣のお氣遣ひ、鬼取りひしぐ我々が、夫の武勇にも叶はぬは病論、寄り合うては額に皺、女房仲間の

「御勘當御免の上は彼等風情の朝敵、誅戮は我が掌の内にあり。存ずる旨候へば彼奴が命、暫く賴平に預け下さるべし。」と、申し捨てつゝと寄り、「汝市原野にて詠歌の姬が一命を助けられ、一味徒黨の契約を變ぜぬ證據、一旦の命を助け置く。今より後は敵と敵、戰場に鉾先を磨き、汝が首を賴平が切先につらぬくまで慥かに預ける。サア歸れ。」と、縛めの繩引きちぎる。良門つゝ立ち、「ホウ見事見事。天晴源氏の大將、契約を變ぜぬ本心感じ入る。重ねての參會は一戰の時。さらば。」と言ひて立ち歸る。賴光「暫し。」と留め給ひ、「己も鬼畜にあらねば善惡は知つつらん。親の恥辱をすゝがん爲の逆心、萎らしやさしし。いで汝に賜物せん。親將門が定紋繋馬の旗印陣幕、源家には無益の長物、汝が爲の守り神、サア得さするぞ。」と庭上に投げ給へば、おつ取つて押し戴き、「古今獨步の名將と音に聞きしに違ひなし。先祖の遺寶を賜はる賴光の大恩、我仇を以て報ずべし。是れよりすぐに葛城山に立籠り、時をうつさず旗をあげん。外の敵對數萬騎ありとも、望む所は賴平一人、身體は源氏にかへるとも首許りは良門が、永き味方に付くべきぞ。」「オ、大言も廣言も命有つて後の事。助け置くはちつとの間、首を預けた損ふな。」「汝が首もあづけ置く。」「オ、長吠えするな返答は、我が眼中に有り。」と睨み付くれば、うんとも言はず、眉毛も裂けよとくわつと見開く眼玉、睨んで左右へぞ（三重歌）なかれと、何思ひけん世の中に、名殘を空に吹きとめよ、とめて甲斐なき花の香を、袖につゝみし小

の烏帽子一頭、血の付いたる拔刀は江文の宰相殿、朝敵與黨の緣斷れたる證。委しき仔細申すもまだるく、此の一通に公時が、快童丸の昔より手習嫌ひ、がさくさ流の口上書、讀めかぬるは御推量に御覽願ひ奉る。」と、御前に差上ぐる。大將繰り返し〳〵熟覽有り、「賴平は兄弟にひいて、公の御用にも立つべき器量と見屆けしに、思ひもよらぬ此の度の罪科、悔むに所なかりしに、いしくも仕たりな。人丸赤人の名歌も、聞く人なければ歌人の名顯はれず、*伯牙が琴も鐘子期にあらざれば名を知る者なし。賴平が德を感じ恩を重んじて、天下のために命を捨てし、箕田二郎綱が心ばせこそ可愛けれ。」と、忝くも御大將涙に咽ばせ給ひける。「爲成卿夫婦誘引のよし、それ〳〵是れへ。」と御諚有る。公時悅びお次に立ち、夫婦を伴ひ上座にすゝめ參らする。賴光御覽じ、「長袖の御身ながら武士に劣らぬ爲されかた。朝敵の緣斷れたる證據委細に奏聞せば、二度御歸京、御心やすかれ。」と宣へば、夫婦は、「あつ。」と手を合はせ、「只よき樣に。」と許りにて、嬉しきも又涙なり。遠侍に聲高く、「末武貞光將軍太郎を生捕りし。」と、呼ばはり騷ぐ程こそあれ、庭上にひつすうる。御大將甚だ悅び給ひ「彼奴音に聞く不敵のわつぱよな。父將門關八州にはびこり、自ら僣して平親王と號し、百官百寮を立てたる程の逆意だに、我が朝神孫の神武に碎かれ、滅亡したる事聞き傳へて懲りもなく、前代未聞の朝敵天の責め遁るゝ所なし。一まづ獄屋に繫ぐべし。」と宣ふ所に賴平夫婦、散切髮にてかけ出で、

平君、涙ながらに烏帽子を取り上げ、「日本武士の頭に置くべき侍烏帽子、今月今日纜が情かけ緒の諫めに依つて、頼平心を飜す段、公時具に披露して御免の御諚相傳へば、その時舅宰相夫婦を誘ひ伺候せん。」と、渡す烏帽子を公時が、首の用意に持たせたる三寶に粧ひのせ、拳々服膺敬ひ捧げ「お暇申す母禪尼。」と、言へど答へずかこち聲、「母とは誰がこと子の有る者こそ母とは言へ、今日より子とては有りもせぬ孤獨の姿。僻事な宣ひそ。」と、首を肌身にいだき伏す。姫君親子弔ひ涙、江文の家の立つこと皆此の人の御恩ぞ。」と、言ふより外は然らばとも、言はで信夫のあら鷹も、翼しをる公時が、立端に迷ふほの〴〵明け、袖の雫や朝露の、芝蘭の園に入る人は、留めねど袖に薫あり、崑崙山の塊は、みがかぬ玉の光有り。斯かる忠烈賢臣の、出づるも源氏の大將軍、文武の徳の高きによると、歎きをとゞめ歸りけり。

第四

古の七の賢き人も皆、竹をかざすは變りなき、御代を樂しむ心有り。坂田公時太刀と烏帽子を臺にもり、頼光の御前に跪き、「某討手を蒙りし頼平君に御首二つ候。一つの首は天下の固め、國家の柱鐵の根繼と成る御首、又一つは朝敵與黨の御首、即ち此の御首討ち取ちたる證に、懸緒なし

ぬ。恨みを晴れよ。」と宣ふ中より、「ハァはつ。」と猶せきあへぬ親子の涙、止めて纜につこと笑ひ、「悔みなく恨みなき悦びの死とは纜が最期、サ介錯々々公時。葉侍の首をいかめしげに、武將の御覽に入れるは恐れ。我が首討つて溝瀆へも踏込み、只この烏帽子を上覽に入れ、此の趣の言上賴む。サア首討たぬか公時。エ、息がきるゝ氣をもますか、恨めしい公時。」と、言へども白洲にむずと坐し、「仁義忠孝揃ひに揃うた侍の、首の討ちやう己や知らぬ。婆樣こなた討つて下され。」と、獅子王の如き公時も、不覺の涙に咽びける。次第に五體の血はもれて、沈み入る氣を猶息はり、「ヤレ此の上は片時も娑婆に用はなし。サなぜ討たぬ討つてくれぬか。ヨイ〳〵介錯賴まぬ。」と、腹の刀をずつぱと拔き首筋に押しあて、兩手をかけて、「南無佛。」と、口に佛名兩眼に、母の顏見る目を塞がずまじろがず、首に生顏殘しながら、落つれば人々一同に、「ワァわつ。」と天に呼ばはり地に叫ぶ。さしもの母も前後にくれ、あへなき首を抱き上げ、「なう五つの年の乳ばなれより、久しうて母に抱かれたナア。」と、身にそへ歎き伏しければ、公時堪らず大聲上げ、「手も口も揃うた武士の生粹。エ、殘念や生け置いて、貞光末武綱公時に纜を加へ、賴光の御内の五天王と言はせいで悲しいこあつたら者を。」と身もなえ〳〵、我を忘れて歔り泣く。賴平君を始め姫君親子心なき、供の若黨仲間まで、顏打上ぐる者もなく、歎き佗ぶるぞ至極なる。内は歎きのまだ夜深きに、外は明けゆく隙白く、時も移れば賴

を挾んで大海を飛び越ゆる世は有りとも、爭でか報じ盡すべき。哀れ此の殿朝敵退治の御進發もあれがな、御馬の前にて討死せんと、時節を待ちし甲斐もなく、朝敵退治は扠置き、却つて朝敵と成り給ふ、歎きは我が身一つぞと、纜が心の底を知つたる者は、天が下に此の烏帽子只一つ。產んだる母も今日が日までかくと言はねば知り給はじ。」と、見やれば母も目を見合はせ、「オヽ、ういこと仕た。」と許りにて、平伏し歎けば姬君親子賴平君、むいきと名を得し公時も、淚見せじと提灯の陰へ廻るぞ道理なる。聲いきどしくすだきながら、「コレ公時、天下へ拋つ纜が一命、＊牛溲馬勃敗鼓の皮をし八とは存ぜねども、此の上にも殿のお心和がぬ其の內は、我は修羅道の奴苦しみを增すばかり。母じや人。公時賴むは是れ一つ。亡き後にも御意見たえず、朝敵一味の契約を切り給へば、それを修羅の矢先の楯につき、苦しみをまぬがれん。」と口說けば母も、「わつ。」と泣き、「ナウ賴平樣あんまり我づよい曲もない。今生に息の通ふ內、將軍太郎に契約の詞を飜し、御兄弟和睦との御一言を聞かせてたべ。そのお詞を願ひの絲烏帽子の懸緒につぎ合はせ、未來成佛の寶冠の紐として、極樂淨土へ著せて遣りたいわいの。」とて、かつぱと伏して泣きければ、共に淚の顏ふり上げ、「我が偏屈に凝り固まつたる心より、方々の意見を聞かず、あつたら武士を殺す事、賴平が一生の後悔、今日よりかく言ふも無益の詞。將軍太郎と契約を打破り、只今より兄々の御味方ぞ。氏神正八幡も照覽あれ、此の詞は違へ

役所領の高下に隨ひ、一人も殘らず伺候の夜、小寢殿の燈火を消され、白羽染羽の矢幹の御鬮、御臺所上段につかせ給ふ故、立ちまふ人は皆女中、其の中に彼の小蝶が艶色、竝ぶ方なき情の風俗、若氣の某御勝手にて一獻汲んだる微醉紛れ、座敷も闇のうつゝなく、小蝶が裳にひつたと縋つて戲れしに、彼の女己が懷中の匕首をもつて、ふつつと切つたる烏帽子は是れ、切られしは此の懸緒なり。剩へ小蝶大音上げ、天下の御大事評定の座敷、誰かは知らず暗紛れに、此の小蝶に縋り戲れしなだるゝ不行儀侍、不禮放埒の印の爲、烏帽子の懸緒を切り取つたり、サア女中火を燈し懸緒を切られしそれを證據に、御詮議あれと、はしたなく喚きのゝしる其の間、南無三寶纜の武名は是れまで。いきて恥を晒さんよりと刀の柄に手をかけしが、イヤ〳〵死しては恥辱を誰が雪がんと、思ひ返せど死ぬるより外爲方なく、五體の汗は直垂を通し、百千萬に氣を碎く、折しも頼平公聞きつけ給ひ、必ず必ず卒爾に燈火あぐるな、頼平が思ふ仔細有り、此の座の面々上下老若を限らず、一々烏帽子の懸緒を切れ、切り揃ふと一度に聲を揃へて案內せよ、その時燈あぐべしとの御詞、違背に及ばす片端より、殘らず懸緒を押し切り〳〵、我も各同音に、各切つて候と申し上ぐれば、御前の女中燈臺燭臺御座敷は日中と輝けども、殘らず懸緒を切つたれば、誰が小蝶に切られしとも、互の心を探り合ふばかりにて、其の座の武士に一人も惡名恥辱はとらざりし、此の御仁德情の御恩の忝さ、須彌山

平の御先途を見屆け給へ。萩の對の介抱、我が母と公時に任せ置く。」と、親子をゆるめ押しのけ、打刀拔くより早く、弓手の肋にがばと突き立て引き廻し、「出羽の冠者源賴平生害。サア首を討て公時、ヤレ首をうて公時。」と、言へども更に合點ゆかず。流石の公時きよろ〳〵顏、母も是れはと手を打つ所に、賴平走り出で給ひ、纜が膝の上にどつかと居掛り、「ヤイ氣違め、最前より奥に控へし賴平を、怯れて出合はぬと思ひしか。公時が振舞を始終見屆けんと猶豫する内に、無用のおのれが身代り、我命を助かり逃げ延びんと思ふ程ならば、公時に鬼神が加はつても、太刀先にて切り開き、やすやすと生き延びるに何のこと、身代りなどを賴まぬ。誰が恩にきぬ徒腹、エ、しなしたり〳〵。」と、齒ぎしみ恨み怒らるゝ。纜、「わつ。」と泣き出し、「エ、情なや夜光の玉に一つの疵。今纜が切る腹を御身代りと御覽ずる、御眼力こそ小さけれ。總じて主君の身代りなどと申すは、御幼稚の御曹子若君か、扠は上臈女性にこそ命代りし例もあれ、遮つて死にたがる殿に何の身代り。源賴平と名乘つて首討たるゝ纜は、天下の爲の生害人。數ならぬ纜が天下の爲とは事をかしく、推參がましく覺されん。是れには一つの物語、我が君も母上も、ヤア公時始め供人も、鳴をしづめて聞き給へ。物語の種是れなり。」と、袖に入れし錦の袋より、懸緒の切れたる烏帽子一頭取り出し、「是れは是れ去年霜月御督家定めの召の時、纜が著せし烏帽子、其の夜は內戚外戚の歷々、四天王以下在京の武士役

一朝敵將軍太郎一味の隨一、出羽の冠者源賴平を、江文の宰相爲成一の太刀を討つたり。」と、高らかに呼ばはつたる。家内もあわてふためく音、公時大きに苛つて門打ちたゝき、響き渡る大聲「討手をさし置きなま公家を引きこんで、賴平の初太刀を討たする箕田二郎の法知らず、渡邊の伯母の沙婆塞けの、狸婆の生年寄、公時に鼻あかせ手振で都へ歸さうや。門明けるにおのれら賴まぬ。公時が手打の鍵是れ見よ。」と「えいや。」と、おす力に、扉の肱坪腕がね搖ぐ所をがばと踏めば、貫の木中よりふつつと折れ、扉歪んで開けたり。公時が提灯こみ入つて庭上は白日。禪尼驚き走り出で、一間の障子押し開けばこはいかに、纜が右手の肩先したゝかに切られながら、髮切の詠歌の姫をかい込み、血刀持つたる萩の對、同じく取つて押へられ、「エ、仕損ぜし無念や。」と、悔み悶ゆる有樣、禪尼も「是れは。」と動轉し、呆れて詞もなかりしが、纜緣先に膝行し、「母者人も御上使も合點參らぬ其の筈〳〵、健氣にも江文の宰相殿の北の御方、賴平の首討つて差上げ、朝敵一味に緣を切つたる證を顯はし、敕勘を申し開かんと姫君に割なき賴み。傷はしや孝行と貞節の二つの道に迫り、其の身が母の手に懸らんと、髮を切つて男の頭にまなび給ふ、次第一々立聞きし、親子の切なる志見るに忍びず暗がりに、母君の手を取つて賴平の名代、一太刀切られし此の疵、實の賴平こそ討たずとも、血刀を其のまゝにて披露あらば、明らけき上の御裁斷敕勘御免疑ひなし。此の上は姫君御身を全う賴

直垂枚を銜んで行くが如く、上下騒がずおとなしく、しづ〳〵と打寄せ、門しと〳〵と敲かせ、「箕田二郎纜母の禪尼に案内申す。出羽の冠者頼平君將軍太郎に與し、今日七日に至りて非を改むる御心なきに依つて、御自害を勸め御首を討つべしと、坂田公時上使として參著。萬に一つ各違亂あるにおいては、恐れながら是非なく一矢仕らんため、兵具用意致すといへども、是れは世間の人口、武者の作法を塞がんが爲許り、只今にも野心を飜し、御兄弟和睦公時が願ひ此の上なし。さるに依つて鷄を待たず前廣に參上致す事、幾重にも御意見を加へられ、各諸共に御歸洛の御供願ひ存ずる。」と、神妙にこそ述べにけれ。邸の内には、「すは公時よ油斷すな。彼奴に似合はぬ禮儀の詞、猿の烏帽子狼の十德、くふな〳〵。慮外せば、赤頰首さらへ落せ。」とひしめけども、門外には聞かぬ顏、牀几立てさせ袖かき合はせ、悠々として控へける。塀の上には萩の對背を伏せ内外考へ見て、「扠すさまじや此の體にては、頼平の首よも我が手へは入るまじ。一番鷄は寐ほれて鳴かぬか。よし仕損ぜば夫れまで。」と、塀の上にさし覆ふ松の茂みに顏さし入れ、息の限りに張り上げ、鳥の鳴く音を二聲三聲、「家慶幸々々々。」と空音をはかる人の聲、四境に聞えて誠の鳥もばら〳〵〳〵、華やかにこそ三重諷ひけれ。門外門內すはやと色めく其の隙に、小庭にひらりと飛び下り見れば、閨の火は消えたり。姫が相圖は是れなりと、さがし寄る手に押し明けて、入れども人は白張の、障子をさつと血に染めて、

笑ひ聲、「申し母樣、そのお望みなれば能い所へござんした。幸ひ賴平樣最期の酒宴の大酒。アレ彼の障子の内に前後も知らぬ高枕、死人を切るも同然。さりながら箕田二郎親子の人の目が早い。わたしが燈消すを相圖に忍び入り、暗處のしるしには賴平樣のおつむり、永々の愼み長髮のお月代、山伏の樣ながら手に觸るを討てば少しも仕損じない。必ずおせきなされな。」と聞きもあへず「エ、嬉しい嬉しい、夫に替へて親への孝行、慥かに母が恩にきる。此の念力で塀を越すか、此の松を傳うてもの本望とげるは覺えがある。サ忍び入らう。」「イヤ〳〵〳〵八聲の鷄の鳴くまでに聊爾が有つては、預り人の無念越度。此の上にせく事ない。」と、賺す内にも心までせきくる淚の玉櫛笥、剃刀の刃より思ひ切る心の刃切惜しげなく、ふつつと切りて烏羽玉の、鬢の黑髮嬋娟たる、髱も額も時の間に、刈り捨て薄露の間を、待つも我が身の障子の内、明けて入るこそ哀れなれ。門には母の萩の對、姬の契約賴みにて、今や〳〵と胸に急く、心に永きしだりをの、鳥を待つ間も久方の、空や明くると見渡せば、南無三寶、討手の上使と覺しく高提灯星斗の如く、五十騎許りの人馬の音。見付けられては我が本望の妨げと、蓑笠取つて投げ捨て一足に小躍りし、塀の腕木にしつかと取り付き、翻りと女の身も輕く、塀覆ひに打ちまたがり、形をひそめ息をつめ、忍び居るこそ危けれ。程なく公時召具の兵士に鎖の肌著、槍印馬印具足の唐櫃下人に負はせ、火影にかゞやく兜楯、其の身許りは威儀を亂さず、烏帽子

は血をわけたれ、宰相殿はあかの他人、種もおろさぬ子故の難儀、さすが公卿の心清く、色にも出し給はねども、母が身に成つて見や、面目ないとも悲しいとも、夫に向つて一言も泣くにも顏は上げられず。聞けば今宵賴平殿は首を討たれ給ふとや。賴光は武將の役目、兄弟でも他人でも、朝敵討つは其の筈の事、珍らしからず手柄にならず。長袖の宰相殿賴平の首討つて差上げ給へば、朝敵と緣切る證、敕勘免許もとの官位に立ち還り、江文の家も立つべしと、刑部省の内緣にて、内證を聞きし故、討手の向はぬ其の前、賴平殿の首を貰ひに來たわいの。身にかへて夫を思ふ女心、母も同じ身なれば苦いも辛いも知りながら、酷い事言ふと思やるな。賴平殿を討たすれば、和女の方には孝行と云ふ道も立つ。サア手引して首尾よう討たするか、但し仕損ずるを合點で踏み込もか、此の二つが叶はずば此の母が自害して、門外に屍を晒すとも、すご〳〵とは歸らぬ。時も移る短い返事、どうぞ〳〵。」と打ちならす鐘音の、夜半のこだまの胸さきに、響き渡りて詠歌の姫、我が夫の身の大事、今宵にせまる其の上に、又親の身の難儀、何れを何れと捨て難く、返答にと胸つき、案じ煩ふ間を待ち兼ね、「サア〳〵返事はどうぞ。母が死なうか切り入らうか。今宵の半時は尋常の十二時より大事の刻限。母が一世の賴みごと分別所ぢや有るまい。」と、急く程此方は狼狽へながら、いかに死身なればとて、母の手にかけ夫の命取らせては、女の道は皆あだ事、背けば不孝と思ひ極めし初一念、五音をかへて

傷たえなんだ、今でも二つや五つはあんだ樊噲だ、張良だ。樊噲張良よそならず。」と、打連れしいりし奧座敷、謠 兵の交はり今ぞ名殘の酒宴なる。風が持てくる一村雨、窗うつ聲に打交り、用有りげに門の戸を忍びやかに敲く音、胸に徹へて詠歌の姫、酒宴の座敷をそつと拔け出で、走り寄り小聲になり、「夜更けて誰ぢや何者ぢや。」「ム、ウ咎むる人は慥か娘の聲と聞く。詠歌の姫でないかいの。」「ヤア扨はお前は母樣か。」「オ、奇特に聲を覺えてぢや。成程其許の母江文の宰相が妻萩の對。」「ナウおゆかしや久しぶりで、御無事なお顏が見たいゆかしい。」と、隙間を求め尋ねても、錠はかたく塀高し、いつ蟋蟀の踏み明けし、壁の破れにさし覗けども闇の夜の、村雨はるゝ星影に、見れば竹笠うなだれ、身は蓑蟲の蠢きて、「サア明けて〳〵。」の囁きも、娘の耳には雷の、落ち掛るより悲しくて「仰せなくとも明けてお顏も見たけれども、風も通さぬ貫の木海老錠。日こそ多けれ夜こそ多けれ、今宵のお出では何事ぞ。賴平樣のお命は此の曉の鷄限り、私とても遁れぬ命。聞けば悲しや私故に江文の家もたえ父母共に敕勘とや。一災おこれば二災おこる、何事も前世の因果と、思ひあきらめ下さんせ。討手の來るに間も有るまい。はや〳〵歸つて下さんせ。エ、おいとしや。」と許りにて、壁に取り付き戸に縋り、聲をも立てず泣き給ふ。「さればいの賴平殿の今宵討たれ給ふとは、世間の流布に隱れなし。それに付いて來たわいの。宰相殿の敕勘も、其許につれて賴平殿の所緣ゆゑ。母そこ

のつゞかん程、思ふ樣に切り散らし、恨みの腹十文字に切り破り末代に名を殘さん。ナウ和女が乳をふくめ養育して、人と成せしは誠の母も同然。木石ならぬ賴平が志をむげにして、恩を忘るゝ事はなし。恨みを晴れよ。」と許りにて、伯母が袂に縋りつき、聲もをしまず泣き給ふ、御有樣のいたはしさ。伯母は覺えず聲を上げ、「なう其のお心をとつくに打明け給はぬ、あつぱれ御器量大將や。夫れとも知らず此の婆が、鼻のさきの走り智慧、惡ざふ言ひたる舌たゞれ、打擲の皺腕も、折れよ腐れよお主の罰天の罰、免させ給へ和子免して下され。」と、持つたる弓をからりと捨て、抱き寄せ撫でさすり、泣き口說く老のくど〳〵は、文字餘り文字たらず。詠歌の姬も纜も、共に淚の雨そゝぎ、座敷もひたす許りなり。「ヤア泣くまい〳〵。此の曉の八聲の鳥、養ひ君の初陣目出度きをりから、女なれども家一番の老武者、討手の武士に無禮あらば直にこゝを軍の場、和子を始め一人も生き殘らん者はなし。コレ箕田二郎、門にしつかと錠おろせよ。」と淚を止め、「いざわつさりと最後の酒宴、御肴に婆が一さし舞はう。今こそあれ我も昔の十七八、油とろりと紅粉鐵漿白粉、生まれ付きの所體に、戀がありし故、いかな男もしなだれ掛る柳腰、今は海老腰ヤアえい〳〵。」と立ち上り、淚に濁るむしやら聲、謠「七つになる子がいたいけな事言うて、殿が欲しいと謠うた。殿よりも花よりも養ひ和子のお命が、ま一つ欲しやいとほしや。」と、又泣き沈むを取りなほし聲はり上げ、唄「おらが若い時や腕に生

將軍太郎は桓武天皇の末孫、出羽の冠者は淸和天皇の流れ、互角の大將晴れ業の契約、牛の血を神水として言ひかはせし詞を變じ、源賴平が女を人質にとられ爲方なく、太刀打の勝負は叶はず僞りの一味をして、當座の難を遁れし臆病者卑怯者、源氏の武道の奧知れたりと嘲り笑はれ、他門に恥を殘してもおめ〳〵と存命へて、兄賴光の御爲に成るべきか。又我契約の詞を違へず、あつぱれ源氏の殿原は、詞を變ぜず信を堅く守つて、討手を引受け仁義の刃に死したりと、譽れを取つて死したるが賴光の爲に成るべきか。勿論親子の意見一々理に當つて尤もなれども、武士の上には道に背きて道に當る事、譬へば黃金は寶の最上なれども、高山にのぼり咽渴して疲るゝ時は、千金萬金も一杯の水には劣つたり。錦は上なき美服なれども、六月の炎天には一重の麻の太布に、蜀江の錦も及ばぬぞや。然れば、何事も時ぞと思へ夏來ては錦にまさる麻の小衣と、詠ぜし古歌も武士の身にひつしとあたる。市原野の合戰に雪と言ふ文字のよみごゑ、恥を以て恥をすゝぎ、惡名を以て惡名を淸めんと、兄賴信に雪を摑んで投げ付け、番ひし詞を無になしては、兄弟はなほ弓矢の意地、泣き寐入りにはしまはれず。此の間を料簡し片意地とばし恨むるな。討手の武士は誰人か禮儀を以て向はば、我も禮儀を以て尋常に切腹し、首を討たるべしと思ひしに、武勇自慢の猪武者公時が向ふとや。定めて朝敵退治なんどと罵るは必定。その時某將軍太郎良門が副將軍、出羽の冠者賴平と名乘つて、腕の力太刀の金

見を爲果せんと番ひし詞は土か砂か。とつくに頭も剃りこぼつ筈なれども、甥子と言ひ養ひ君大事の弓取、もしもの事の有る物と、惜しからぬ白髪の十筋右衛門に元結かけし其の德に、此の度の訴訟を嫌ひ、關白殿のお使には御對面なき賴光へ、婆が額に角を入れ、佐々目の少貳といふ男に成りし故にこそ、七日のお命は延ばしたれ。もはや浮世の望み是れまでと、剃りこぼちし甲斐もなく、直らぬ其の根性に嗔恚を燃す剃つて悔しい。乳をふくめし此の婆、此方の片意地は知つて居る。善惡共に言ひ出す詞變ぜぬ癖、そこを押付け強意見する婆が癖は覺えがござろ。サア耳ある不祥に聞いてもらを、眼有る不祥に是れ見たまへ。御父滿仲公朝敵退治の御弓、不孝の倅を諫めの杖、渡邊の伯母と覺したら、三五の十八大きに當が違を。痛はしや所緣とてあの姬君の御父、江文の宰相爲成卿敕勘官位を削られ、都の內を御追放のこと聞きながら馬耳風ぢやの。御身を世繼に立てぬと言ふ賴光への恨みか、兄賴信を妬んでの朝敵か。金石より堅き心を婆が瘦腕に、打ち碎いてくれん。」と、又振り上ぐる腕に縋つて、「暫し。」と許り、淚ながらに聲を上げ、「二十四孝の伯瑜が、父の杖の弱りしを歎きしは孝行、今賴平が滿仲の御持弓に打たるゝは不孝の筈、理非善惡を辨へぬ我ならねど、焦りたる種は芽を生ぜす落花枝に歸らず。縱ひ命は助かりても、嫂となるべき詠歌の姬を妻として、のめ〳〵と兄弟諸武士と座を列ね膝を組み、世上の後指生きたる甲斐の有るべきか。よし是れは味方一家の恥許り。

ふ頼平の、御運の程がいたはしい。エ、見限り果てたる女中や。」と、齒にきぬきせず眼に角。姫君ちつとも驚かず、「ハテ爰なお人はけうとげな。頼平樣のお命今宵限りとは、今更驚く事かいの。元の起りは詠歌故と、御兄弟御一門の恨みとや。尤もなれども自らが父母は、又頼平樣ゆゑと嘸恨み悔み。それは互に人の習ひ、高いも低いも夫に連添ふ女の道は、一旦も二旦も御意見申し、承引なければ是非がない。夫婦は一所、善人なれば我も善人、惡人なれば同じ惡人、先へは死ぬるとも片時も跡へは後れぬ魂。コレお侍、討死と極めては、鎧物具さわやかに出立ち、美事に死ぬるでないかいの。まつ其のごとく源頼平が妻、詠歌の姫が最期に取亂し、髪髱にも櫛の齒入れず、けはひ化粧も繕はず、見ぐるしい死顏と言はるゝは誰が恥。なからん後までさすが頼平殿の妻よ北の方よと、お名を汚さぬけはひ化粧、客待つ暮の君傾城の夕化粧と、一つに見る箕田二郎殿、いとしや此方の目は眩んだなう。」と、一心すわりし聲高く、漏れ聞えて頼平公、妻戸あらゝかに引き開け氣色をかへ、「母は老女の繰言尤もとも言ふべきに、若き武士に似合はぬ愚癡の意見。是にも非にも頼平が齒より外へ出せし詞は鐵石、金剛舍利は碎くるとも變ぜぬ心、女などの意見を聞くべきか。イザ詠歌此方へ。」と振り返る後より、伯母禪尼が弓杖の村重籐、押取りのべて丁々々、「名殘情もなう悲しや。」と、取りつく詠歌を取つて引き退け叩き伏せ〳〵、「扨々曲もない。御身の言葉は金石より堅く、此の婆が頼光へ、御意

者は一人もない。時も時折も折、今朝より邸を出でありき、やう〳〵今歸つていつにない大聲上げての戯言、人の言ふのも叱りさうな乳兄弟のこなた、私を天人か楊貴妃か、譽められたうない聞きたうない。日比の忠節だて皆僞り、相手に成るもいま〳〵し。」と、かけ入る裾をしつかと取つて、頰冠かなぐり捨て、「此の纜が戯言つくす僞り言ふと。こなたの目にもみごと見ゆるか、こなたの眼に見えはせまい。こなたに教へらるゝまでもない、賴平公のお命、鷄を限りとは七日前から知つてゐる。もし賴光御兄弟のあはれみ七日と言うて、明日へも明後日へも延びるか。都方の取沙汰聞かんと思ひ今朝より宿を出で、淀柱本の邊まで參りしに、なう武將の詞は綸言同然、賴平公の討手として、無意氣者の坂田公時罷り下るに付き、御用船に標を立て川筋きびしき舟どめ。扨は賴平公一期の落著今宵にありと、息を切つて歸る所、客待つ暮の君傾城が妍自慢の紅白粉。只今譽めたは譏りの裏、詞で面をくらはしたが、ちつと胸へこたへたか。いたはしや賴平君、廣き世界に御身をせばめ、末長きお命を今宵にちゞめ果すこと、元の起りは其の妍ゆゑ、武將賴光を始め奉り、御兄弟御一門の恨みは御身一人。それのみならず御親父江文の宰相殿、敕勘受けて官位を削られ追放の身とは何故、皆その紅粉白粉のゆかり故。誠女の道を申さば、討手の向ふ今はの際まで縋つて御意見申し、お命を延ばすが夫を思ふ眞實、此の眞實がないからは、顏は美人心は佞人、其の水くさい心とも知らず、ほだされ給

こそ果敢なけれ。浮世の賴み今日の日に、皆腰折の詠歌の姫、母の讓りの增鏡、向へば是れも名殘ぞと、親には誰か江戸つげの小櫛の鬢水と、涙はら〳〵はらやに落す露の身の、最期たしなむ夕化粧、うつす我が身は母の顏。「ナウ母樣、是れは〳〵御機嫌よい笑顏拜みましお嬉しや〳〵。私が事を苦にせずとも、御無事でながらへ下さんせ。」と、ゆふべの烏夕雀、塒求むる聲々は、思ひもなげに羨まし。箕田二郎纜世の取沙汰を聞き合はせに、今朝より出でて立ち歸り、我が家を見入り頰かぶり猶引きしめ、顏を包み作り聲、「ヨウ〳〵見ごと〳〵、夕暮がたの夕顏化粧、歌の文字は三十一字、それを打ちこえ三十二相の詠歌樣、大唐四百餘州の美人の開山、楊貴妃虞氏君西施李夫人王昭君も、そこらへそこらへ及びもない事、日本は六十餘州神の嫁御の、この〳〵木花咲耶姫、富士の裾野に竹取の翁が拾うた寶娘、衣通姫も跣足で裸で逃げさんしよ。天から降つたら下照姫、海からわいたら龍宮の乙姫、佐保姫織姫天人の藪入か。世界にたとへる花もなければ、紅葉も及ばぬ翡翠の黑髮しんとろとろ、三日月なりの目元の釣針、つり〳〵釣つた殿御は、やれ扨ひら平樣世界の男の命の山だち、沖つ白波たつ名もわざくれ、體も骸も熨斗をつけて進上申す詠歌の姫樣。おや〳〵やつちや〳〵。」と譽詞、はつと興さめ詠歌の姫、逃げ入らんとし給ひしが、能く〳〵見れば箕田二郎。「イヤア纜殿か此方は本氣か。賴平殿のお命は曉の鳥限り、年寄つた母御の心遣ひと言ひ、此の家内に人心地の有る

鳥を限りに討手を遣はし首刎ぬるぞ。其の時我を恨むな。」と御座を立つて入り給ふ。伯母は、「はつ。」と頭を下げ、又くり返す嬉し泣き、御臺所も又伏し拜み、「殺さるゝを助かる恩は、めのとの母なり命の母。」と、悅ぶ内にも七日の日切、くるゝ月日は假寐の夢、二度と憂き目を見ようかと、思ひ過しの女心。「コレなう氣遣ひ遊ばすな。惡に強きは善にも強し、善と惡とは溜り水、導く方へ隨ふ習ひ。上々吉の和子樣に、仕立て上げるは婆が手ぎは。箕田二郎詠歌の姬君さぞ待ちかね、長居も恐れヤァえい〳〵。」の聲許り、居すくばりて立ちかぬれば、扶くる上﨟女房達、襟引き合はせひとつまへ、三つ子も同じ老の身は、帶も抱へも人まかせ、姿は老女頭は親父、下戶はなくとも妖物は、有る世なりとぞ噴き出しける。「喃是れ〳〵、嵐はげしき道すがら、頭も冷えん。」と、お心付きし御きせ綿、御恩も深き丸綿帽子、名殘はつきぬ藜の杖、「乘物にて送らせんそれ〳〵。」と宣へば、「ア、勿體ない。乘物まだるい氣が急ぐ。杖さへあれば今でも二十里三十里は、遣りかねる婆ではおぢやらしませぬよ。ナウ久しう腰をのして痛かつた。思ひの儘に屈めん。」と、おしよぼからげの杖ほく〳〵、つく〴〵思へば茨木童子は伯母に化け、おのが腕を取りかへす。今の伯母は男に化け、賴平の命を助け歸る姿は又伯母御、額をかくす渡邊の庵へこそは 三重 歸りけれ。天が下なる人は皆、君が田蓑の島近き、渡邊の伯母が言ひのぶる、七日も今日と夕露の、あだの命の蕣は、明日まで待たぬくだかけの、鳥限り

き女と、未來よりのお恨み悲しくやる方なく、樣々申しなだめても、二代の朝敵に與する頼平、私ならぬ朝廷の囚人、母の遺言とて免しては、國家の政道くらやみなりとの御立腹。此の上は自らも思ひ切る。頼平殿の事はふつつと思ひ捨ててたもやいの／＼」と、上はつれなき詞のうち、推量せよとの心の目まぜ、御袖のかげに手を合はせ、頼光の目を忍び、伯母を拜み伏し拜み、頼むと言はで頼むとは、涙が言ふぞ傷はしき。大將東に見やりもせず、默然としておはします、御膝元につつと寄つて聲をあらゝげ、「エ、心強い我が君、強い許りを勇士とは申されまじ。暴虎馮河して死するも厭はぬ大將には隨はずと、孔子も戒めたまはずや。二代の朝敵に一味する、その頼平の身寄の我々皆同罪。サア一番に此の婆御成敗々々々。獄門の木を常よりは、五尺も七尺も高々とかけさせ、政道に私なき武將の心を一天下に顯はし給へ。」と、膝立て直し憚りなく、座を打つてこそせきかけけれ。頼光甚だ感嘆あり、「言行そろひし義者の振舞、渡邊綱が伯母といはんに恥かしからず。始めよりさは見つれども所存計りがたく、佐々目の少貳と聞き流せり。頼平が罪科、明日首を打つに評定極まり助け難き命なれども、一旦の契約心ざしもだされず、今日は二十七日先考滿仲の御命日、今日より七日を限り來月四日まで、頼平が命をおことが爲に助け預くるぞ。其の間に教訓し野心なき心底世に顯はれ、江文の宰相敕勘を免され歸參あらば、永く命を助くべし。さもなくば七日過ぎて四日の曉、八聲の

り震ひ上り、恨みくどく脣うるみ舌ちゞみ、戰く聲に涙を含み、「ヱ、恨めしいつれない御夫婦や。血を分けぬ他人さへ氣を傷め、いとほしや詠歌の姫の物思ひ、我が子箕田二郎毎日毎夜御門に立つての御訴訟、是れらの憂き目に比べては、婆が裸は數ならず。此の世で綾錦八重九重の重ね著も、養ひ君の命乞さへ仕果せず見殺しにする罪科、とても三途の河の奪衣姥に剝ぎ取らるゝ。著て何せん。」とあたりの小袖おしやり〳〵「わつ。」と叫ぶ聲限り、枯れ憔けたる瘦骨を、絞る涙は八寒の氷といてる許りにて、御臺を始め女房達、共に袖をぞ絞らるゝ。見る目に堪へかね御臺所立ち寄りて、お手づから小袖取り上げ打著せ給へば、數多の女中立ちかゝり、袖を通しつ襟引きつくろひ前かき合はせ、涙に沈む賤機帶、結べば解く伯母が手を取り、お膝の上に引き寄せて、「なう乳を含めし誼みにさへ、左程までの心盡し、産み落し給ふ御母尼公の草葉の陰の御苦しみ。滿仲公の御子とては御兄弟只三人、高きも低きも乳の末とて乙は猶いとしき物。御母尼公御臨終の今はの枕、自らが手を取つて、なからん跡にも賴平を小舅とばし思ふな、おことが胎内より産み落せしと思ひ、憐みかけてとばかりにて、お目をふさぎ給ひし面影は、今とても忘られず。御在世の間は六孫王の嫁君、御威勢といひお身の榮華、肩をならぶる者もなく、此の世を去り給ひ御弔ひ御追善、何におろかも無き故に、自らが嫁づかへの御奉公は一つもなし、せめて賴平殿の命を申し助けずば、御位牌への言譯なく、ヱ、言ひ甲斐な

し、疊も冷ゆる大廣間、五體も凍えがち〳〵、ふるふ齦をくひしめ〳〵大聲あげ、「賴平公へ乳をあげ、お目通りに仕へし者、異國も見ぬく御眼力、よも見忘れ給ふまじ、佐々目の少貳と名乘ればとて、男と女御覽じ分けで有るべきか。ようも〳〵お心づよう婆めに物を思はせらるゝ、餘りむごき我が君や。」と、かつぱと伏して歎き居る、姿は地獄の繪、竹の根をほる罪人の、罪を悲しむ如くにて、いたいたしくも味氣なし。伺候の人々袖引き合ひ、「最前の振舞といひ善惡に強き婆、羅城門の變化が渡邊の伯母に化け、取られし腕取返せし、鬼さへ眞似る伯母なれば道理〳〵。」と囁きけり。奥にも斯くと聞ゆれば、御臺所のお耳に立ち、とりあへず御出であり、「なう渡邊の伯母か、珍らしやゆかしや。始めより聞くならば、すぐに奥へといはんもの、心にも嘸うらみ。若い時より愼み深い其方が、百になつても女の肌身、いとしやよく〳〵なればこそ、見る目も悲しい、あれ早う物著せよ。」「あい。」と言ふより女房達、「下襲よ上著よ。」と、著せても押しやり、打ちかくれば押しのけいや〳〵、「イヤ著せて下さるな。あの深山のこけ猿が、形は人に似て皮を著る故、獸、皮を剝げば寸分人間に違はずと聞く。我も猿同然、大額に拔き上げ、男わけの白髮なでつけ、此の上に皮著ては、君もお見知りなき佐佐目の少貳といふ男猿、その儘皮著ずにお見知りある賴平の乳母、綱が伯母。御契約はたがへらる、誰かひとり取り合はせ、どこへ取付く枝もなき、木からおちた猿婆、凍え死なせて下され。」と顫ひ上

以てたつた今追放。況んや本人たる頼平宥免叶はず。其の上一代一度の訴訟叶へんと、詞質を取つて我をさみする胡亂者。その契約は頼平に乳房を含めし乳母、即ち渡邊綱が伯母、綱が未だ若年の時つれ來り、父母なき孤兒ながら筋目ある倅、弓取に守り立て召仕へとてくれたりし其の褒美、所領は受けず財寶は貪らず、訴訟あらば何事にても、一度は叶へんと契約せしは、渡邊綱が伯母なるぞ。佐々目の少貳と言ふ者に契約せず、立つて歸れ。」と宣へば、「ム、ウ聢と伯母には御契約ありしな。その伯母こそは某。君にも覺え有る故伯母が便りとあれば、一子箕田二郎幾度か參つても、御門より追ひ返し御取上も無きゆゑに、我等直に參りしも兩三度、表裏二ヶ所の御門御臺所までも、伯母が參れば通されず、取次ぐ人もなき故男の形にまなび、潤ひもなき雪折の、枯竹をため直すごとくに、屈みし腰骨おし延ばし、指しも習はぬ太刀刀、取次頼まず無體に御目にかゝらん爲の此の有樣。サア伯母が一代一度の御訴訟とて此の上なし。サア御契約は何と〳〵。」と詞詰。「イヤ〳〵頼光が契約せしは女なり。汝は佐々目の少貳にあらずや。罷り歸れ。」と情なき御諚。「エ、理窟過ぎたる御大將。女に成つて見せ申さん。」と、つゝと立つて袴の紐引きかなぐり、くる〳〵解くか常陸帶、重ねし衣裳ひらりひらりと脱ぎ捨つれば、百年に一年足らぬ姥櫻、艶も枯木の裸身の、乳房は賤が干蕪、腰のゆもじの紅に、紅葉しがらむ肋骨、肉も落ちてさゞ波皺、いとゞ女は骨細の膝折りかゞめ畏まり、北山颪吹き通

斯程にも變りしか。柳に木傳ふ鷽鳩の小鳥が、九萬里の空を飛ぶ鵬の大鳥を笑ふとは、爺めが身にひつしと存じ當る。さりながら上天子大臣より、眞柴刈る山賤藻鹽燒く蜑までも、かはらぬ物は親子兄弟の恩愛、いかなれば我が君は、御弟を疎み憎み給ふ。」と、申しも果てぬに御氣色かはり、つつと立つて入り給ふ。續いて驅け寄り禁色の裾、しつかと縋れば怒れる御聲、「御事をか言ふと思へば、つきもなき親子兄弟の噂、推量に違はず賴平めが訴訟よな。何者に賴まれし。天下の鏡と成る賴光が心、イヤ汝らが知るべきか。案外なり。」と御諚ある。老人憚る色なく、「イ、ヤ弟を憎むを以て天下の鏡とは申されまじ。生まれ年こそ後先なれ、弟も同じ親の血筋、兄も弟も心に變りなけれども、若き時は血氣内に強く、兄親の心に叶はぬ勝、その度毎に血脈を捨てば、日本國天地人倫の道絶え果つるを鏡にしては受取られず。中にも賴平殿は乙の若君、御母君の御愛子、是れを殺しては御母への御不孝、不孝も天下の鏡か。その上一代一度の訴訟は、何事にても叶へんと、堅き御契約の方もあれ。武將の御身に契約を違へ給ひて是れでも鏡か。愚老が目には破れ鏡、是れ申し、鏡の曇りは研げば晴るゝ。いかな上手の鏡研も、破れ鏡はつぐにもつがれず、天下を照らすは及びもない事、どこぞ田舍の山寺の、鐘鑄の奉加に入れ給へ。」と齶許りの大口あけ、けんら〳〵とぞ笑ひける。賴光御座に歸り給ひ、「弟を憎むとは筋なき事を申す者かな。賴平めに連添ひし、詠歌の前の父母江文宰相夫婦、敕諚を

疋るだけ高に成り、「ヤァ緩怠至極。浪人か主持か、如何さま雜人匹夫とも見えず。貴人の御殿出仕退出の格式は知る筈。殊に武將のお館、のさばり過ぎたる振舞醉狂か老耄か。引立てられよ當番衆。」心得てんでに取りまく鼻捻、鐵杷刺股もぢりことぢ、白銀みがきにきらめく老眼、八方見開き莞爾と笑ひ、「怖しく〳〵ォ、こは。蝗の樣なる年寄に是れ程に立ち騷ぎ、まそつと強い若手の敵に、出合うては何程に騷がうぞ。鐵杷刺股が怖しとて、言ふこと言はぬ少貳でなし。サァ打つて見よ突いて見よ。」とちつとも怯れぬ勢ひ、「將軍太郎が殘黨、へうげ者に紛らし、我が君に近づき寄らん謀。それぶち殺せたゝき殺せ。」とひしめく所へ、御奧小姓聲々に、「是れ〳〵其の者荒くいたすな。我が君御見參との諚意。シィ〳〵。」といふ警蹕に、各持ちたる兵具を捨て、鎭まる内に御大將悠然として御座につかせ給ひければ、無禮田夫の老人も、始めの一徹引替へて、威儀を正し蹲踞する。やゝ有つて御大將、「佐々目の少貳とは翁よな。つひに名も知らねば面も見ず。譬へば遠き道を行くに、山坂海岸の難所あるが如く、上一人と下萬民の間は次第〳〵の取次、下の誠上へ通ぜずと思ふ、切なる心より所を忘れ、當番に對し我儘を言ひたるにてぞあらんな。自分の訴訟か、但し賴光が政道に邪有るを諫言の爲か。氣をしづめ心底を殘さず語れ。」と、御諚の中より老人御前の疊に額を付け、泣き萎れたる顏をあげ、「アッア有り難い。無禮狼藉の御咎めもなく、心を鎭め申せとの御慈悲心、貴人と下人との心は

猶子も世の習ひ、たとひ種腹かはりても、一旦世間披露の上は、親子の名は削られず。殊に朝廷にて其の役々の公卿大臣、彈正臺の御詮議極まり、解官追放との綸言、主人頼光遵背叶はず、却つて違勅の罪を重ぬる道理。一先帝都をひらき御詫言のことわり、幾重にも有るべきこと、我々は勅命主命情なく思召されそ。」と、ずつと寄つて冠はたと打ち落し装束かなぐり、「江文の宰相爲成夫婦御追放。役人參れ。」と呼ばはれば、雜色放免、割竹鐵棒あたりを拂ひ、末武貞光跡を押へ、林を辭する狩場の鳥、勢子に追はるゝ風情にて、歩み給ふぞ味氣なき。百年の雪霜一身に積り、鬢髮氷の銀拵へ、朱鞘の大小古風にそめる袴の襞積顏の襞積、一理窟ある時代親仁玄關に立ちかゝり、「愚老は佐々目の少貳と申す者。武將頼光君へ直訴申す事あり。罷り通る。」と、ずつとはひりの柳の間、櫻の間の番衆色立ちて、「ヤア無禮者狼藉者、下れ退れ。」とざわめけば、返答もせず盤桓たり。大宅忠正立ち出で、「自分の伺候か但しお使者か。御舍弟出羽の冠者頼平のお詫ならば無用、取次申すこと叶はず、お茶でも參つてお歸り。」と、すげなく立つて入らんとす。老人けら〳〵と笑ひ、「取次頼む程なれば、宿所に踏んぞりかへり、娘や孫に足さすらせ、寢ながらの一筆啓上でも事は濟む。頼光の耳へ此の口から言ひ込む天下の大事、玄關端近で打明けうか、よし〳〵奥のとろくにひつかゞみ、人怯めする大將に逢はんと言ふも無骨なり。御臺所に對面せん。サア奥方の案内々々。女中々々」と殿中響くしわがれ聲。忠

もあやまりなし。頼平に添ふ詠歌の姫、娘のつりとの事ならば是れ一つの申し譯。もと彼の姫は宰相殿の種にてなく、自ら異人に添ひて設けし娘。宰相殿へ嫁入しは詠歌の姫が五つの時、里より連れし我が子なるを、表向は宰相殿と二人が中の娘と言ひなし、今日まで育てしは申すに及ばず、誰々も能く知つたる事。我が種ならぬ娘を隔てなく養育せられし、其の恩も報ぜず剰へ娘故に、家も身も滅ぼす此の悔み、宰相殿は心恥かしく色にも出し給はねども、自らが心の中、悲しとも辛しとも、高きも賤しきも女は夫に威を付け、夫の恥も雪ぐこそ本意なれ。我ゆゑ夫の身の滅亡、此の憂きつらきは筆詞にも盡されず。姫が親は此の母ひとり、如何なる刑罰死罪にも行ひ、宰相殿のお身の立つ申し譯言上してたべ兩人。」と、人目も恥ぢず泣き叫び、くどき給へば爲成卿、「ア、未練なり。種こそわけね今日まで、娘よ父よと言ひ語らひしは必定。譬へば斯樣の災難なく、頼信殿の御簾中になり、世に侍かるゝ時はおしだまつて實父の顏、我が子で無しとはよも言はじ、他人さへ人のおちめ。況んや隔てなく愛をなし、孝を盡せし詠歌の姫、今更我が種ならずとは、此の爲成は得いふまじ。」と、制し給へど聞きわけなく、「いや〳〵姫に實の父はなし。父にも母にも我ひとり。御訴訟頼み參らす。」と、殿上雲居の上﨟の、家來とも言はん武士に、手をさげ詞をさげ髮の、疊に打ち付け打亂れ、聲も容儀もくづをれて、歎き給ふぞいたはしき。末武貞光あはれとは思へども、詞をあらゝげ、「御卑怯至極。養子

かば、五畿七道は言ふに及ばず、山林僻地の隈々まで、尋ね求むる配符の下知、今や訴へ來るかと、玄關廣間評定所、一間々々の諸役人、心を屈し待ち居たる。こゝに詠歌の姫の御父江文の宰相爲成卿、北の方萩の對、息女詠歌の姫賴平に誘はれ都を出で、剩へ賴平朝敵と成る、その咎逆鱗甚だしく、朝家の裁斷として宰相夫婦、閉門の罪に押し込められ坐せしが、今日罪科極まり武將賴光に、その沙汰すべしとの敕諚にて、左右の將監將曹前後をかこみ、賴光の御館に來臨有る。卜部末武臼井貞光仰せを蒙り受けとれば、警護衞府の官人等大内にこそ歸りけれ。末武貞光、夫婦の人を決斷所に誘ひ謹んで、「出羽の冠者賴平野心をかまへ、將軍太郎に一味により、賴信これを搦め捕り、天機を伺ひ候へば、苟且ならぬ天下の大事、兄弟の緣は私、朝敵征伐は將軍たる身の存する所、死罪か流罪か古例古法に任せ、賴光が所存の通りに計らふべしとの敕諚にて、賴平は斷罪に極まり候。扨御前の御事は今日までは朝廷の御計らひ、今日より武家に仰せ付けらるゝ條、官職を削り冠裝束を剝いで、夫婦共に布衣跣足の平人となし、都の內を追放すべしとの綸言默し難し、賴光ぢきに面談にて申し渡すべき所、右敕諚の上は今日より土民町人同然、我々兩人承り、鳥羽大路にて追ひ拂へとの下知。イデ冠裝束剝ぎ取り申す。」と、兩人左右に取り付けば、「是れは。」と許り北の方、押し隔て聲をあげ、「なう待つてたべ。此の度のお咎め御尤もとは申しながら、宰相殿の身に取つて露程

と思ひ油斷なく守り、重ねて御下知を相待つべし。」「ハア、。」と悅ぶ額を雪に擦り付け〳〵、冥途の人の歸りし心地、繩も「とく〳〵いざ御立。」と賴平の手を取れば振り放ち、積る雪をかき寄せ〳〵、三尺許りに押し固め、兩手に取つて差し上げ、「親子兄弟の天倫を紊り、朝敵に與する上は、今日助かる命聊か本望ならず。今ふる雪は出羽の冠者が魂。その仔細といつば、雪と言ふ文字には、すゝぐともきよむるとも言ふ訓有り。今こそ太刀刀をもがれ、丸腰無刀の囚人と成つて、恥辱の雪に埋もれ名を埋むといへども、見よ〳〵終には恥を以て恥をすゝぎ、惡名を以て惡名をきよむる、此の詞が通るか違ふか、賴平が身の果てをよつく見よ。」と、賴信の膝元近くがばと投ぐれば、はつと碎けて散亂したる六つの花、遠近は皆白妙の、雪か雲か八寒八風、人の肌骨に砭し、齒を食ひしばつて歸らるゝ。敵に取つて強からねば、味方に招いて益もなし。邪正一致善惡不二、一張一弛は武勇の根元、つたはる弓矢ぞたくましき。

第　三

狐は尺寸の穴に隱れて千里の虎を圖り、一賢の唯々は千愚の囂々を塞ぐ。武將源賴光朝臣市原野の一戰、御家督賴信切り鎭め給ひ、帝都穩かなりといへども、將軍太郞良門、跡を晦まし落ち失せし

過言千萬。將軍太郎に與し、御兄頼信公の鞍馬下向を待伏し、たつた今大合戰まがひなしの朝敵、指でもささば御分も一味、誤りなき伯母御前まで、罪に落すか狼狽者。」と、繩を控へ引添うたり。「ナニ將軍太郎に一味とや。ハツ言語道斷の御所存、情なや淺ましや。」と、頼平に縋りつき、驚動の涙にくれける所に、大將頼信將軍太郎を見失ひ、齒嚙をなし歸り給ひて、「ヤア箕田二郎、天下の怨敵と成つたる頼平を庇ふは、なんぢも朝敵一味よな。」纜色を損じ、「朝敵一味かとはお目が明かぬ曲がない。もとより冠者殿の乳兄弟、大殿頼光の御眼識、頼平が後見と仰せ出されし上は、死するとも同じ枕の某、落ち失せ給ふも知らず、將軍太郎に與し搦め捕られ給ふも知らずして、武名ながく廢り世上の謗り笑ひぐさ、一家の恥辱。大將の御情、科の實否極まるまで某に預け下さるべし。此の願ひ叶はずば腹かき破り、今生のお暇。」と申し切つたるあら訴訟。頼平つつ立ち箕田二郎をはたと蹴のけ、頼信の前につゝと寄り、首討ち給へ首討てといはぬ許り、綱に向つて首さし延べ、頼信に向つて首さし延べ、命をしまぬ勇氣の振舞、頼信目もやり給はず、「ヤア箕田二郎、汝が申し分、弓矢取る身の尤も千萬至極せり。朝敵に極まつたる頼平、暫時も助け置くべきに有らねども、河内守頼信は女を奪はれし腹たち、無體に弟を切つたるなんど言はれんも口惜し。殊に汝が老母は綱が伯母、事過つべき者にあらず。おことが忠心に感じ頼平夫婦、箕田二郎に預け置く。これ頼信が私ならず、頼光の仰せ

源氏の名をれ弓矢の冥加に盡き給ふか。」と、呆れ果ててぞ立つたりける。起きつ轉びつ詠歌の姫、雪踏み分けて走り寄り、「なう淺ましい繩目に掛り給ふか。千萬言うても返るにこそ。情知るは武士よ。我を代りに千筋のなは、一分だめしに切りさいなみ、頼平樣を助けてたも。」と、歎きあこがれ給へども、渡邊は見向きもせず。頼平臆する色なく、「かかる大義に與するからは、首は獄門と覺悟せで有るべきか。今更驚く繩目にあらず。源氏の嫡孫頼平が身の難儀に及び、手の裏返す根性さげ、末代の誹り無念至極。殺さるか助かるか、今日の落著極まるまで我は啞聾。サア無言ぞ。」と齒を喰ひしばり、思ひ切つたる眼ざし。「ま、そのお心に定まるからば、我とても一心するゑ、一所に生死かたづくまで、物言はじ聲立てじ。夫婦同じく無言ぞ。」と、口をつぐみ目を見合はせ、いはで物思ふ音なしの、瀧と涙は漲りて、雪は霙と解けにけり。時こそあれ頼平の乳兄弟箕田二郎纜、行方を尋ぬる旅出立、かくと見るより息をきらして驅け付け、渡邊をはつたと睨めつけ、「ヤイ慮外千萬、何科あつて我が君に繩かけし。詠歌の姫は頼信公、御心を懸けられしと雖も、定まる御臺にもあらねば、頼平公に於て聊か不義の過りならず。一たん若氣の戀慕の習ひ、兄親の禮をつゝしみ、陰をし給ふまでの事。繩をかくる科なし。」と、解かんとする手をもぎ放し、「和主が母は渡邊が爲には指渡した伯母。然れば和主とは親しき一家なれども心安きは私。まざ〳〵主君たる冠者殿に、粗忽に繩をかくべきか。慮外とは

めだ牛、まう／＼外に同類ないか。我が君を一突とはべゝの子のあべかこう。」*天角地目天罰自滅、牛の最期は立所、首捻ぢ切つて捨てたりけり。山際に一聲響き起り立つたる伏勢隙間もなく取り圍み、「ヤア／＼賴信、妹小蝶が仇を報ふ、將軍太郎が恨みの劍、遁れぬ／＼。サア腹々。」と罵つたり。渡邊かつら／＼と笑ひ、「何腹とは腹の皮。一代ならず二代の朝敵、切り平らぐる武將の役。王城守護の多聞天、鞍馬土產は己が首。」と、拔きつれて渡し合ふ。味方は主從三十餘人素肌武者、敵は十倍三百餘人鎧武者、喚き叫び入り亂れ、打ち伏せ切り伏せ追ひ捲る、野風山風吹雪を誘ふ、軍は花か降る雪は、絮を飛ばしてひら／＼／＼、暫時の內に野は眞白、白雪變じて紅の、死骸を埋む尺餘の雪、蹌き打ち合ひ戰ひしは、危かりける 三重 次第なり。卷軍の瞬く間に、多勢大半討取れば、味方に殘るは主從二人、勇氣撓まぬめつた切、叶はじ物と將軍太郎、殘黨引具し落ちて行く。「ヤア何處までも。」と賴信朝臣、追つすがうて追ひかけ給へば、渡邊聲をかけ、「盜賊半分の惡黨、大將の御手には勿體なし。某仕らん。」と驅け出づる、雪をれ松の木陰より、つゝと出でてかけ隔て、「賴平を見忘れしか。將軍太郎に加擔人。」と、會釋も無く切つて懸る。思ひがけなき渡邊、さすが主君と容赦して、受け流し組み留めんとあしらふ刀、勝に乘つて打つ刀引き外し打ち落し、むずと組んで取つて伏せ、弦袋のかへ弦しごき、高手小手に縛め、「こはそも如何なる天罰にか、朝敵にくみし、家來に搦められ給ふ。

き。染めてかへらぬ*墨子が白絲、縺れの末こそうたてけれ。良門が物見の鬼同丸、あわたゞしく立ち歸り、「源頼信宿願のため鞍馬詣で、歸るさは此の道と承り候。」と、大息ついで言上す。將軍太郎すく〳〵躍り、「サァしてやつた妹が仇、彼奴を討取り軍神の血祭、何と頼平不同心か。」「ヤア只今の誓ひの上はお尋ねに及ばず、一味始めの證、兄頼信が初太刀を仰せ付けられかし。」「オ、ウ滿足滿足。コリヤ鬼同丸、此の牛を屠り、腹の中に深く忍び、野飼の牛の死したる體に見せ頼信を欺き、一太刀刺せ。」と懇に言ひ含め、頼平伴ひ岨陰に、忍び待つとも白雪に、謠 源頼信朝臣、手延少々御供の、中にも一人當千の渡邊綱、直垂の下に腹卷し、栴檀籐の弓に征矢取りそへ、御馬の口に添うたるは、さも勇々しげに頼もしし。文彌 頼信袖を打ちはらひ〳〵、「面白の景色やな。年ある御代の印には、野にも山にも積る白雪。」と、古歌を吟じて行く駒の、蹄に花を踏ませては、これも惜しむか初深雪、手綱をひかへ、「あれ見よ渡邊、あの原に捨てたる牛の死骸、時々腹のうごめくは心得ず。生なき物の動くには有らじ。我が心の疑ひもや。」と宣へば、「何條さることの候べき。怪しきを見ながら打捨て置くべき樣なし。」と、弓取り直し弦道ひろく引きしぼり、切つて放せば羽ぶくらせめ、ずつぱと立ちし矢よりも早く、牛の腹より鬼同丸つゝと顯はれ、「エ、仕損ぜし口惜しや。」と、頼信目がけ驅けりよる。渡邊片手に引摑み、「うん。」と言はせぎうと踏みつけ、「ヤァねつそりの牛盜人、ちよろい工みのあ

郎を首取つて高名遊ばせ。一味などなされては、必ず未練御卑怯」と、身をもだえ心許りをせき上げて、叫び給へど動かせず。「サア賴平、一味か但し女を殺すか、返答おそくて見苦し。如何に〳〵。」と詰め掛くる。「エ、是非もなし。」源賴平が縱ひ朝敵と成り、一生を捨つればとて召連れし女をむざ〳〵と殺させ、我一人の恥辱ならず、先祖六孫王まで源家の氏の穢れ。サア今日より骨肉親類の好みを振捨て違變なき一味ぞ。」と、皆まで言はせず打消し〳〵「物がついたか天魔の魅れか。賴平樣。」と叫び給ふを、「一息立つるな。」と袂を口に押し込み、良門大きに悅び「流石源賴平、果敢の思ひ切り卽座の一味、亡父將門冥途の大慶これに過ぎず。上臈さこそ苦しからん。」と、つき放せども正體なく、伏し沈みてぞ坐す。「ナウ賴平、足下は淸和の庶流桃園親王の苗裔、我は桓武の正統葛原親王の後胤、王孫更に遠からず、王位を望むに憚りなし。運に任せて義兵を擧げん契約の杯、銚子これに。」と牛引きよせ、指添拔いて耳ぎはずんど引殺ぎ、生血を合子に絞り受け、「是れこそ唐土春秋の會盟、牛の血をすゝつて金鐵の誓ひの法、我が朝の起請神水同然かための杯、年かさに良門より。」とずんど干して、賴平の前に合子を指寄すれば、推し戴きずつと干し、「歃血の義を結ぶ上は盡未來變ぜぬ魂、千騎萬騎と思召せ。はや〳〵思ひ立ち給へ。」と、跡先ふまへぬ若氣の契約、聞くも悲しき詠歌の前、「是れなう〳〵大將の一言は、善惡の境ぞや。」と、止めても押へても、聞き入れなければ爲方な

せる汗の玉水、五體をひたすぞ道理なる。張本くわん〳〵と打點頭き、「今の働き、劍術稽古の手練ばかりにあらず、天骨自然の妙處感じ入る。眼中面色端武者にあらぬ見所あり。我とても渡世許りの強盗ならず。御邊が如き武勇の達人を試み、味方に賴み招かん爲。かくいふは平親王將門が一子將軍太郎良門、父が鬱憤を晴らし世を覆さんと思ひ立ち、妹小蝶を賴光が館へ忍びいれ置き、內通せしに顯はれて、あへなく討たせ、無念彌ましの骨に徹す。我に賴まれくれまいか。此の女の一命は御邊が返答、いやかおうかの間に有り。」と人質取りし手詰の詞、賴平はつと顏色變じ、呆れ果てて見えけるが、「扨は小蝶は妹、御邊は音に聞えし朝敵の張本、平親王將門の一子將軍太郎よな。ム、ウ其の女も遊君妓女の賤しき類にあらず。江文の宰相爲成卿の息女詠歌の姫。その姫と語らひしも小蝶が情の媒。我こそ多田滿仲が三男、出羽の冠者賴平。兄賴信その姫に、心を懸けられしも憚らず馴れ染め微服潛行の驅落者とは成つたれども、御邊が如き朝敵に出で合ひ首取つて、それを眉目として兄賴光賴信の心を柔げ、二度館へ立ち歸らんと欲する所。大船を飮む鯨鯢も、鐵の索綱に圍まれし、エ、無念口惜しや。」と、大地を叩き足ずりし、踏み碎く霜柱、百千本の劍の山、微塵にをるゝ許りなり。

「ア、これ賴平樣、狂亂か狼狽へてか。天道に背き朝敵に與し、身も家も立つ物か。女一人を庇うてお名を汚して下さんすなと、今申せしは爰の事。短い契りと斷念め、此の儘我を見殺し、此の將軍太

り添へば、「エ、ぐわちな、*言はいでも知れた事。何ぼう美しうても、器量に惚れることではごあらぬ。其の結構な衣服に首たけ。かうくどき掛つてからは、否でも應でも帶とかす。ホ、えい若い人、あつたら前髮早い落花。ハテ立流な腰の廻り、衆道女道どちらも好物。一刀しやつふり言はせば著物の價値がない。美しづくで裸になりや、目に角立て酷ういふも、此の樣に笑ひ〳〵言ふも剝ぐ所は同じ事、二の取には痛いめせぬが其方の德。ナア皆の者さうぢやないか。なまみだ佛。」と詞できぶくり賴平とはしら波の、直下に見るぞはまりなる。山賊とも山立とも聞きも知らぬ詠歌の姬、魂もきえぎえ、「コレ申し大事のお身、必ず短氣出し給ふな。」と、うろ〳〵顏の顫ひ聲。「ハテ彼奴ら風情に何の短氣。望みをかくる腰の物、くれるからは別儀ない。サア受けとれ。」と拔く間も見せず、さきに立つたる髭男、大袈裟に打つて打ちはなす。「ヤア侮つて先をとられた。刻めふはたけ。」と、聲々拔きつれ三重切り結ぶ。烏獲が腕先孫吳が術、兼ね備へたる血氣の勇者、左手右手へ切り拂へば、命を惜しまぬ強盜共、手痛くひしがれ引き色に見えたる所に、張本とおぼしき大の男、畔の陰よりぬつと出で、詠歌の前をひつ摑み、「コリヤ若者強張らば、此の女一刀ぎやつといはする。」と、切先胸に押しあつる。「ア、是れ〳〵聊爾せまい。氏系圖國郡にかへたる女房。粗忽するな早まるな。手向ひせぬ。」と刀投げ捨て給へども、氣もゆるされず手出しもならず、一生一世の進退浮沈、心をこがす額の煙、氣をあ

寒いつめたい疲れも厭はぬ徒跣、心中といひ姿といひ、兄賴信の打込まれたも道理〳〵。小蝶が御蔭蒙らずば、今頃は兄の奧樣、ひつくり返つてつい弟嫁、念力の矢に當つたからくり的ぢや。」と、跡先ふまへぬ戀の道、詠歌の姫も途方にくれ、「世の中の不思議とて、是れ程不思議の緣もなし。おの樣と夫婦とは、結ぶの神のよもや粗相もなされまじ、前生の因緣か。火の中水の底、土灰と成るまでも、添ひ果つるが女の操、憂き目つらきめ覺悟の前、私が事を苦になされず。世間廣う源賴平と、御身を立つて下さんせ。女一人の身をかばひ、お名ばし汚して下さんすな。」と、打涙ぐみ宣へば、「オ、我もさは思へども、指當るあてもなし。鞍馬山の別當は祈念をさせし好みもあり、押付け賴む心にて、爰までは來りしが、山中で雪に逢はば難儀至極、今少し是れで見合はさん。エ、口惜しい此の有樣。冬田に殘る鳥威し、是れを心の屛風几帳と思うてたも。」と打ちかけ給ふ男泣。「いや我よりも大事の御身。」と、又打著する袖と袖、顏を見合はせ泣き沈む、涙こほりてをざゝ原、野邊の霰と亂れけり。冬の日脚の晝も過ぎ、八瀨へ別るゝ小道より、小山のやうなる男共六七人、手ん手に背負ふ葛籠半蓋、錢箱櫛箱鏡立、太刀刀槍長刀も、ひとつに付けたる牛の鞍、のつさ〳〵近づくは、代官が宿替か、旅芝居かと疑はる。曲者共立ち留り、點頭き呀き荷を下し、夫婦の傍へのめり寄り、「コレ女郎さん美事でやす。たまりませぬ。」と帶際へ、ずつと遣る手を敲きのけ、「エなめ過ぎたいやらし。」と、賴平に寄

の身を、草におくてふ白玉か、問へど答へず消えもせず、見あぐる顏も見あはすも、ひとつ思ひに辛氣やと、いつそおろして石道を、歩むもほんに玉匣、二人つれたる衣手の、袖から袖へ手を入れて、唄 直に比翼のとりなりを、盡きぬ契りと影映す、我がみぞろ池ぞつとして、まだ日數へぬ旅さへも、思ひ窶れのしどもなや。あれ〳〵峯に打靡き、雪に洗ひつ風に又、けづりかけにし青柳の、手ふれぬ髮も我が髮も、いつ取り上げて岩倉や、冷泉 われて逢ふ夜の 唄 きぬ〴〵に、あけの睦言今更に、うしや別れは袖の海、馴染まぬ昔ましぢやもの、幾夜かさねし情の末も、恨みこがるゝ身は戀衣、せめて一夜はァ來ても見よかしな。泊り定めぬ宿なれば、いざとて誰か松が崎、先で添ふやら添はぬやら、知れぬ此の身と侘びぬれば、今幡枝に難波なる、何のその〳〵身をつくし、戀の瀬踏の一しほを、辛くも染めて八鹽の岡、山もあらはに木の葉ふり、殘る松さへ細々と、曉告ぐる鐘の音に、まだき鳥の寢所を、立ち行く數も三つ四つ二つ、又三つ五つ六つの花、其の花の頃いつ又壬生の花盛、唄 壬生のお寺のしやでんで、〳〵〳〵、花の盛りも人の盛りも、夢の夜嵐しやでん〳〵、〳〵〳〵。君ならずして誰と又、世に立榮えは鉾枝村、三つ瀬をかけてにのせ村、此方につゞく普陀落寺、道行く振に事とひて、百夜も同じつれなさの、小町が名のみ古墳を、小野とはいひて薄おふ、市原野にこそ著き給ふ。頼平そげ立つ顏ふりあげ、「なう詠歌の姫、玉垂几帳の外見ずが、戀なればこそ雪霜の、

し。「よし今宵は是れまで。」と、もと來し道に引返し立ち歸る。待ちまうけたる保昌、岩影にぬはれ伏して遣り過し、横になぐる切先、將軍太郎が肚腹をかかれ、怯めば得たりと太刀投げ捨て、乘つかゝり腕捻ぢ廻し、「強敵を生捕つたり。折り合へやつ。」と呼ばはつたり。あら不思議や小蝶が死骸、執念き一心骸に髑髏よるぞと見えしが、生けるが如き形となつてむつくと起き、保昌が襟際つかんで引きのくる、妄執幽魂の神通力、五體を縛られ惱む間に、命冥加の將軍太郎、虎の尾をふみ毒蛇の口、はふ〳〵遁れ失せてけり。「ヤア大事の敵を遁したる、荷擔人は何奴。」と、振り返れば小蝶が尸、さしもの保昌ぞつとして、指折り放し突きのくれば、五輪の石の轉ぶが如く、首と骸は引きわかれ、ぐわらぐわらどつと大地にひゞく愛著心、妬女の性根ぞ恐ろしき。「此の儘置かば又此の上、如何なる仇をかなすべき。」と、ずた〳〵に切り亂し、「サア遠くは行かじ將軍太郎、追驅けて討ちとめん。者共來れ。」といさみをなし、振りたて行くや松明に、明け行く星の光をうばひ、跡をしたうて 三重

詠歌の前道行

武士の弓胡簶は負ひもせで、戀の重荷に頼平の、肩脊いとはぬ詠歌の前、思ふに逢はで思はぬが、道具屋情を盗み盗まれて、ぬれより濡るゝ雪のかさ、心變るな變らじと、浮かれ出づるぞたゞならぬ。空は雪げに鞍馬口、鬼一口に賀茂山の、神さへなりて雨ふりし、昔男のあくた川、ちりも厭はぬ露

と宣へば、妹と心得將軍太郎、「でかした〳〵まつかせ其處へ。」と言ひかへす、聲に保昌北の方、しめし合はせて鑽あけ、點頭きあうて入り給ふ。良門妹が教への如く、外塀近く走りつき、内の樣體聞き耳立てし、切戸を押せばきりゝと開く。仕濟ましたりと獨り笑み、入り込む庭の勝手は知らず、立木も人かと心を配る暗き夜の、御殿の火影を目當にて、泉水築山切所を越え、寢所間近く窺ひよる。保昌女の衣打ちかづき、味方の組手に相圖を取つて出で向へば、近々と寄つて小聲になり、「小蝶が神妙の働き、親兄への孝行此の上なし。賴信の寢所はこれか。賴光は何處に有るぞ。サア案内〳〵。」と、立ち寄る所を衣ぬぎすて、良門が弱腰しつかと抱く。ちつとも動ぜず、「ホヽウ傍いたし。日本無雙の剛の者將軍太郎をたばかつて、組みとめんとは態に似ぬ不敵者。四天王は他行、平井保昌と云ふ木葉武士よな。云はれぬ事に腕筋ねぢられ、あら肝とばして恨むるな。」と振りほどく大力。「ヤア倅め、咽の穴の廣過ぎたる廣言、言ふ通り平井保昌、出あふ己が運のつき、動かれば動いて見よ。えいうん。」と締め付けて猶放さず、投げられてもひるまぬ、力互角のあら武者、上になり下になり、人まぜもせず揉み合ひしが、保昌が弓手の足松の古根に踏みくじけ、立ちなほらん〳〵とする隙に、腕もぎ放し飛んで行く。向うは組子の高提灯、歸れば捕手の振松明、前後を包む火の光、遁るゝ方なき死物狂ひ、五人六人一摑み、豆まく如く打ち付けられ、四方へぱつと遁げちつて、恐れて近づく者もな

たり。疑ひもなき盗賊の引入れ。コリヤ陳じても遁れぬ命、包まず言へ。」と責め給へば、小蝶苦しき目をひらき、「盗賊の引手とは恨めしい御臺所、身を八つ裂きに刻まれても、白狀する身の上にはあらねども、盗賊の名を受けては先祖の恥辱、兄弟一家の名をれ語つて死ぬる。事もおろかや平親王將門が娘、將軍太郎が妹は自ら、父が仇を報ぜん爲、間者となつて宮づかへ、狙ひくらせし此の年月、アアはかなき女心、賴信の御器量にほだされ、大事は忘れ戀一筋、外の女に添はせじと、詠歌の前賴平殿我が媒にて都をおとし、一人の邪魔は拂ひしに、院宣にて伊豫の內侍の祝言、重ね〲の戀の邪魔、毒害して妬みをはらさんと、思ふ內侍はつゝがなく、却つて我が身を失ふは、戀ゆゑ先祖の仇を忘れし親の罰兄の罰、當らば當れ殺さば殺せ、生まれかはり死にかはり、賴信と內侍の中、一念の鐵石七重八重の隔てとなり、思ふ儘には添はせじ。」と、夕闇てらす眼は明星、顏色朱に髮逆立ち、狂ひ罵り奧を目がけて飛びこむ所、保昌ずばと拔打に、丁ときつたる拳のかため、首は飛んであへなき最後、女ものがれぬ朝敵の末、天罰神罰まの前なり。北の御方身を顫はし、「內に入り込む奸人、おのれと名乘り自滅するも、神明の加護當家の武運長久のしるし。さす敵は將軍太郎、自らが術にてたつた今釣りよせん。組手を用意してからめられよ保昌。」と、筧の竹に口さし寄せ、「これ兄さま館の內も寢しづまり、大酒にて正體なし。前栽の外圍、塀の切戶を明け置いたり。究竟の時節、サア今々。」

而も今宵は頼信の婚禮、上下の武士共酒に醉ひ伏し油斷は必定。此の虚に乘つて忍び入り、頼光頼信易々と討ち取り、帝を追ひこめ王位をうばひ、父が素懐を達せんは此の時。案内はよく知りつらん、手引せよ妹。」と、語れば此方はとむねつき、兄妹心を合はせ置く、たくみの筋もあだ花の、色に引かるゝ小蝶が心、頼信君を今更に、討たすもつらし引かれもせず、返事に迷ふ戀慕の闇、空さへくらき黒書院、廣縁の下身をひそめ、傳ひよるは頼光の御臺所、小蝶がそぶり心得ず、窺ひつけより給ふとも、知らぬ因果のさゝやき竹、「ナウ兄樣、いまだ館も鎭まらず、仕損じては一大事。今夜に限る事でもなし、必ずせくまい〳〵。」と、一寸遁れに期をのばせば、「卑怯千萬おくれたか。是非今宵はのばされず。性根をすゑよ妹。」と、漏るゝ五音に北の方、守刀を拔くより早く、飛び蒐つて小蝶が肩先一打に、斬られて、「うん。」と反り返り、「何者なれば何の意恨。望みある大事の命、助けてたべ。」と逃げ行く髻、手にまとひ取つて引きふせ、又一刀指されて、「あつ。」と叫ぶ聲、何事やらんと平井保昌脂燭かゝげ躍り出で、「是れは。」と驚く小蝶が深手、外にはしらぬ將軍太郎、竹の口に耳はなさず、妹が返答今や〳〵と一時餘り、待ちこたへたる堪忍情。さすが武將の北の方、色もかはらず小蝶をがばと突きのけ、「につくい女めエ、。これ保昌今宵まうけの嫁君、伊豫の内侍の饗の膳に、蜘を入れ毒害のたくみ、配膳給仕は此の小蝶、仔細こそあらんとつけて來るあの遣水、筧の外に同類ありと覺え

靈、寸にたらぬ汝が形に、我が四尺の魂をしつかと受けとめ、伊豫の內侍を今宵の內に毒害し、戀ひわぶる賴信公と此の小蝶が緣の絲を、結び合はせて玉津島、神詠の驗を見せよ。急々如律令。」と、懷に隱し入れ、小褄ほら〳〵歩み行く。外面似菩薩內心如夜叉、表面にみえぬ皮一重、障子の彼方さゞめき渡り、「嫁君のはやお入り。」と、數々祝ふ銚子島臺、松と竹との千代かけて、謠「千秋萬歲の千箱の玉。」とぞ 三重 謠ひける。世にうたひしも一昔、先年相州猿股の城にて朝敵となり、亡びたる相馬二郎將門が、忘れ形見の嫡子將軍太郎良門とて、兇猛强氣の不敵者、父が謀叛の緖を繼ぎ、天下を覆さん計略、同腹の妹の氏素生をかくし、小蝶と名づけ賴光の奧方に奉公させ、館の樣を聞き合はす、便りも細き筧の竹、駒の頭を兄妹が、心通ずるさゝやき竹、館はなれて水上の、河原面に徘徊し、妹にしらせの短角出し高音をそらして 三重 吹く笛の、音もふけ渡る御館の內、小蝶は豫てしめし置く、兄良門の相圖の笛、心にこたへ忍び出づれば、筧の水も人もたえたる離れ庭、とひ口に口さし寄せ、「兄樣良門樣お出でなされたか。」と、吹きこむ息は竹の筒ぬけ、聞き取る兄は遙かの河原、妹小蝶は館の內、耳と口とは隔たれど、聞の筧は詞のかけはし、側でさゝやく如くなり。良門竹に口をよせ、「コリヤ妹、賴光の四天王のと、鬼神の如くいはるれど、表裏を知らぬ一圖の大將、某足元にあるとも知らず、手遠き所を尋ね探し、館には手に立つ武士一人もなしと聞く。これ本望の時節到來。

請取つた、座敷廻りの掃除は仕舞ひ。其方の役はお庭の植込。蜘の巣取つて、落葉はいて水打つて、そしてからのらかわきや。」と、叱らるゝ身も叱る身も、私ならぬ宮仕、心に任せぬ憂きふしの、竹竿取つて庭におり、蜘の巣取るやとりまぜし、思ひはつらき頼信君、外の女に添はせじと、心一つ身一つの、胸に網はるさゝがにの、梢々に絲引きて、八つ手に蜘の閨作り、寐覺が見付け、「それ〳〵小蝶殿、それ見さしやれ、オ、恐ろしい大きな青蜘。人の口へ入れば、其の儘死ぬる大毒蟲、嫁君のお部屋さき、御膳廻りへ落ち入るまい物でもない。早う取つて捨てさしやれ。」といふに小蝶が心付き、「ア、ほんに脣へさはれば人を殺す大毒。扨もなりに似せぬこはい物。」と、口には恐れ心には、此の蜘取つて内侍に與へ、我が戀の仇取らん物と、一念きざす執著心、蜘の毒よりすさまじし。おくに局の聲高く、「あれ〳〵、表御門より先走りの御案内、伊豫の内侍樣今お入り。お迎ひの手燭座敷の燭臺作法が大事。女房達襠に髪さげて、皆おぢや〳〵。」と呼ぶ聲に、「アイ〳〵〳〵。」とざゞめき賑ひ入りにけり。跡には小蝶よき隙ぞと、足をつまだて手を延ばし、巣を礑と打ち拂へば、いとはかなくも落ちくる蜘、袱紗におさへ押し包み、戴き〳〵天に捧げ呪詛の詞、「抑汝が神通不思議人力も及ばず。野馬臺とやらん唐土の書に、絲を引いて文字を導き、日本の譽れを顯はし、蜘蛛かゝつて喜び來ると云ふ本文も有りと聞く。又人の命を取る事、鴆毒蠱毒より速かにて、善惡にわたり妙を得たる精

差出口「晩のお客はどなたやら、めつたに目出度い〳〵の、譯を知らねば悦ばれぬ。寐覺殿樣子は聞かずか。」「ム、こなたはまだ知らずか。お客といふは此のお館の嫁君。その譯はの、かね〳〵賴信樣戀ひ焦れ給ふ詠歌の前、いかに戀なればとて有る事か、弟御の賴平さまが盜み出し、お二人連でお館を驅落ち、行方知れぬ騷動洛中は是沙汰、院の御所樣叡聞に達し、伊豫の內侍樣とて詠歌樣に劣らぬ美人、賴信が宿の妻にせよとの院宣、今宵俄にお輿が入る筈。是れと云ふも大殿賴光樣の御威勢、賴信樣のお勤めの好いから、目出度い御祝言ではないかいの。明日はお臺所のあもつき、今宵はお寢間でしつぽりと、二人のあもつき。ア、羨ましの伊豫の內侍樣、彌いよなうへうたんぢや。サアえいとえと〳〵、おつき。」と打笑へば、更級がいき過ぎ顏、「上々は尋常でお獨りの杵でも、つい子餠が出來れども、こちとが臼は下川に遣ふ味噌豆臼。」と、なまめき笑ふ女郎花、あなかしがまし口がまし。

「それはさうと此の小蝶は、今朝からこゝへ顏出しせぬ橫著者。小蝶々々。」と呼び立てられ、蝶はかはいや白粉を、泣きはがしたるやつれ顏、賴信の御祝言胸に迫れば氣もうかず、返事なく〳〵立ち出づれば、「是れこゝな人出來るぞや〳〵。上から下までお目出度事、猫の手もかりたい忙がしさ、その泣顏は何ぞ、氣色でもわるいか。御新造のお部屋の掃除疎漏に致すなと、お局の言付。人にばかり骨をらせ、ぬつくりと陰ばひりか。アレ西山に日もちり〳〵。お輿の入るに間も有るまい。こちとらが

せにける。性こりもなき殘黨原、一度に羣り來る所を、引き寄せ〳〵首すつぽり、踏みつけてはぽんと拔き、南方毛拔釘拔勝りの二人が手さき、ひとりも漏らさぬ拔首は、酸漿投るより安かりける。公時首を門柱に括りつけ打ちかたけ、きよひよんとひよんのをさめの拍子、鉢叩「宵は瓢簞曉は、討取るあたまの鉢叩き、渡邊殿。」とはやすれば、綱も拍子にのりの道、鉢叩「大恩教主の釋迦だにも、涅槃の雲に入り給ふ。いはんや怨敵朝敵を、などか一人ものがすべき。なもだ〳〵只賴め。」主君の智德に我々が、武德もまさる源氏の御代、縱ひ朝敵將軍太郎、水練飛行の鱗翼を得たるとも、水に入らば水をわけ、雲に入らば雲をさき、討ち取る印は此の幕の、馬を味方に繫がする、綱公時が勇猛力、四天王の卷頭卷軸、末世の筆にとゞめける。

第　二

都の富士を動かさず、爰に引き寄せ目懸りの、里の賤屋も植込の、木の間に見せて山水の、唐繪を庭にうつし取る、とんだ物好き飛石の、石は白河賀茂川を、筧に取りし手水鉢、乾の御殿は賴信公、まだ獨寢の御部屋作り、今宵俄の御客とて、座敷々々のはき掃除、女子手業のはかどらぬ、上段書院圍の間、牀は寐覺が生花の、長押鴨居を拭き立つる。更級杉野が障子のほこり鳥帚、柄さしばうきの

公時すかさず齋明をもんどり打たせ踏みつくれば、綱は御臺の塵うちはらひ、痛はり忍ばせ奉る。公時ふまへし腮張上げ、「ヤア保昌が甥の殿、ならず者の齋明か。保昌が度々の療治で癒らぬ盗人病、公時が細工按摩十四經、ちつと痛いを堪忍せい。」と、首ぐつと引きぬき、渡邊諸共大音上げ、「天命知らぬ國賊めら、すみやかに非を改め、降參すれば命を助くる。こはばらば手本は是れ。」と内へ投げ入れ、ちやうど睨みし眼力は、尺餘の築地も見ぬくべし。保輔門の屋根につゝ立ち、「コリヤ此の幕をひるがへし、將軍太郎殿を位に卽け、關白になる某、降參せいとは舌長し。高位につがふ詞を知らぬ慮外者め。」と、口に任する存外雜言。「オ、結構なる關白職。座の高いが望みならばまつかせ。」と、綱公時つつとより、扉關貫かためたる、左右の柱に立ち別れむんずと握り、「ヤアうん。」と力に任せ押し上ぐれば、さしも堅くぬり固めし、築地四五尺くづれ落ち、門は念なう大地を放れ、二人がせだけ指し上ぐれば、保輔飛ぶにも下は遙か、棟瓦にしがみ付き大聲上げ、「ア、申し綱樣、高位高座も高過ぎて、目がまふ〳〵。幕指物も是れかやす。命助けて公時樣、お慈悲〳〵。」と男泣き、涙しぶきの瓦葺、雨やさめ〳〵見苦しき。綱公時どつと笑ひ、「ヤイ保輔の安屋根葺、漏らぬ樣に葺きをれ。」と、彼方へ持ち行き此方へゆすり、思ふ程苦痛させ、柱を左右へ引きはなせば、門桁虹梁蟇股、椽裏板土瓦、ぐわら〳〵どうど地に落つる。保輔が天邊背骨、二本の柱に打ちみしやがれ、瓦礫と散つて失

てもかはつても、殿御ひとりに添ひ通すが女の道。一夜の逢瀬に父母と、思ひかふるみづから、見捨てたまふな頼平樣。」と、抱きつきしめあひて、わりなき中とぞ成り給ふ。「ォ、できた〳〵詠歌樣、兩御所の首尾は小蝶が受取つた。跡に心を殘さずとも、連れましてはやお退き。夜明くるまでは御供せん。はや〳〵お出で。」と引立てられ、いづくを當に賴平公、詠歌の前に薄衣きせ、落ち行く先のうき身より、跡の辛さやまさるらん。門内俄に騷がしく、雨戸障子切りさく音、叫びわなゝく女の聲々、「ヤレ盜人よ押入よ。」と言ひ甲斐なき下部共、小鬢をはつられ眞甲わられ、下女も仕丁も朱にそみ、命から〳〵逃げて行く。爲成卿の御臺所萩の對、甲斐々々しく、繋馬の幕右手にかい込み拔刀、保輔がたゝむ太刀受け流し〳〵、門外へ遁れ出で、切りはらひ飛び退り、「ャア世の常の強盜にあらず、金銀衣服に目はかけず、天子より預りたる此の幕望むは曲者。呼吸の通ふ其の内は、いつかな渡さん、長袖の女房と侮り、近うよつて怪我するな。」と健氣には宣へども、詠歌の姬は何處ぞと、一筋ならぬ胸の内、落ちもやらず支へらる。「ャア婆婆に飽いたか女郎め、その幕こつちへ渡さぬか。」と、又打ちかくるを切り解き戰ふ後に、齋明つつと驅け寄り、萩の對の太刀打ち落し、取つて引伏せ捻ぢつくれば、保輔陣幕引奪り押し戴き、「本望々々。そいつ刻め。」と言ひすてて、門内へ驅け入れば、髱引き上げ搔首せんと、刀逆手に取る所へ、東西より綱公時、阿吽の龍の雲を下る勢ひ、一さんに驅け來り、

棒、ちんからりが面白いか。家來自慢の僭上ならば、祇園會か放生會の、御輿の供せい渡邊。」と、かつらかつらと笑ひける。綱につこともせず、「ホ、小智は大道の妨げ、大國を治むるは小鮮を煮るが如く、ざこ小鮒を煮るにいらひ過せば、鱗も鰭も一つに崩れ、其の魚の形を失ふ。公の政道まつ其の如く、其の職に居て政道を執り行ふ役人の心持、近う言はば重箱を擂粉木で洗ふ樣にするもの、國を重箱にたとへ、政道を擂粉木に表し、彼の重箱を洗ふがごとく、角々へやりとゞけず大樣にもてなせば、器も損ぜず國全し、是れ聖代の政。愚者の政道はこまかにて、角々まで洗ひとゞけんとするゆゑ、重箱も損ね國危し。家に鼠國に盜人、百二百切りすてても、つくる事なき涌き物。內に仁愛を施し、外きびしく警固せば、刃も用ゐず德に隨ひ、自ら治まる道理、合點がいたか坂田殿、ちやのきよのきよひよんの分別、とひよんもない無分別。」と一口に打込めば、公時顏はふくらせども、道理につまり返答なく、「ちんぷんかんこちや知らぬ。重箱と擂粉木瓢箪と茶筅と、何れものかぬ御中なれど手柄はしがち、きよひよんかとひよんか鉢叩きの、仕上を見い。」とへらず口、別れてこそは行く水に數書くよりもはかなきは、思はぬ人をおもひがは、鵲ならぬ翅のゆかり、小蝶を橋とふみ迷ふ、出羽の冠者賴平、詠歌の姬にかねてより、思ひ亂るゝばさら髮、烏帽子もかたしと脫ぎすつる、姿はいかに男とは、いさしら絹を打ちかづき、築地のそともに忍ばるゝ。「コレ小蝶、媒の心遣ひ忍ぶ夜の

し、鉢叩「ア、これは何とも心得ず。鍋の月代石の鬚、終に見た事ない君が、しなだれ給ふは甘い事。我も岩木にあらねども、内に殘せし山の神、めつたむしやくしや悋氣する、ぢやのちやのきよのきよひよん。お腹たつまゝきよひよん。オ、怖やの、こはや〳〵寒き山野に、ていど待つちくらして、やがて迎へにでずるで、ずでんど打たれぬ先に、お暇申す。」と逃げ行くを、走りより縋りとめ、「今宵忍ばん相圖の綱、引きすて歸るお心は、おせかしぶりか憎てや。」と、引きよせてさしのぞく。顔は朱ぬりの根來折敷、目玉は皿鉢、はつと魂消え、「鬼か天狗かなう悲しや。」と、逃げ入り礑と閉しにけり。

坊門通の四つ辻より、一文字に三星の紋もかゞやく提灯、二行に金棒ひかせ、嚴重に來る行裝、「ムウ渡邊綱が夜廻りか。ハテ大さうな出立。一本させて笑はん。」と、頭巾深く瓢箪たゝき、鉢叩「大恩教主の秋の月、涅槃の雲に入るとかや。月夜に提灯外聞ぢや。獨りあるくは怖いなら、なもだ〳〵みだ頼め、公時頼め。」と鼻のさき、瓢箪によつと突きつけ、「コリヤ渡邊これ見たか。君命を重んずる公時がやつし事、又しては智慧なく〳〵と叱られても、出す所では智慧を出す。平親王將門が一子將軍太郎良門、山賊強盜を語らひ洛中をなやます間、片端から引つくゝれと承る兩人、綱がかま鬚、公時が煎海老色は常是が極印同然、日本國通用のしやつ面、此の如く形をかへ、ちやのきよのきよひよんで見知らしても、どこそが公時臭いやら、盜人どもが寄り付かぬ。それに引きかへけたたましい提灯金

恩國王の恩。よしや世の中寐てか覺めてか只何事も、後生なりけりなまうだ、なもだ〳〵彌陀賴む、彌陀の誓ひを賴む身の、人は雨夜の星なれや、雲晴れねども西へ行く。」西の京より東の京、北は一條南は九條、竪横九萬八千軒、足に任する坂田が夜廻り、洛中を苦しむる強盜どもを搦めんため、十德頭巾に身をやつせば、人も空也の茶筅賣、公時が一生を唱へ初めの南無阿彌陀佛、なもだ〳〵の鉢叩き、思案の底もたゝくらん。瓢の音さへ冱えたる夜の、月も落ちくる西三條、江文の宰相爲成卿の築地より、軒を打ちこす細紐に、結び下げし水仙一本。行き當りびつくりし、「コリャ何ぢや、ム、厄病の呪ひか、但し洛中物騷の盜賊のまじなひか。病除の爲ならば、南天と大蒜を吊る筈。ァ、聞えた御公家衆は華奢、尋常くさい物は忌み物、大蒜の代りに葱に似た水仙ぢやの。さすが歌人の御見立。何にもせい家苞。」と、手をかけて引きしやくれば、內に女のおとなふ聲。これは不思議と又引く綱に「あい〳〵〳〵。」と返事も近づき、切戶押しあけ立ち出づる奧女中、公時をすかし見て、「戀なればこそやつせしお姿。お屋形の思はく樣たんと待ち兼ねてござんする。いざお入り。」と呼ばれて公時合點ゆかず、「戀ゆゑやつすとは何の事。瓢簞一つの輕い世渡。御用ならば一本が六文、靑竹茶筅でお茶ちやとたつるを召しませい。叩きの一節、面白いをそへまする。」と瓢簞ならせば、「ァ、殿達はじやれ深い。隙どれば人も見る。賴みたる姬君のお疑ひも氣の毒。憚りながらお案內。」と手を取るを、振り放

度に、各聲を揃へて案内せよ。その時燈火あぐべし。」と、焦ち給へば違背なく、面々差添の小刀ぬいて押し切り／＼、「何れも殘らず切り揃ひ候。」と、纜も同然に申し上ぐれば、燈臺燭臺ばら／＼ばら、天の岩戸と開くれど、一座の武士に疵つかぬ、大將の心ぞ頼もしき。幽閑大度の御臺所、懸緒の事は御沙汰もなく、「各取つたる御鬮の矢、これへ／＼。」と御意の内、我も／＼と御前に差し上ぐる。人數二十八人白羽の矢二十八本、染羽には一人も取り當らぬぞ不思議なる。ひとつに取つて頂戴あり、此の内に一筋も染羽のなきは、頼信殿を御家督。差次の弟御なれば世間の順道、正直の頭にやどる神慮疑ふ所なし。頼平殿は天下の後見との事ならん。自ら女の身として、只今極めて言ひ難し。奏聞を經て吉日えらび、目出度く仰せ付けられん。先づ／＼今宵の悅び、保昌末武貞光、神酒をひろめて酒宴あれ。」と、頼信頼平伴ひて、御簾深く入り給ふ。動かぬ御代のかためぞと、末をしらはの八幡山、氏子さかゆく三貞鉢叩「よき光ぞとかけ頼む、世の光ぞと、頼む茶のきよのきよひよん、御寺に田螺にきよひよん。ォ、井の澤の、澤の寒き山野に、ていと打ちならす、三界を家とよ、走り／＼廻る鉢こくりが、ォ、／＼五郎三郎、田舍へお下りあろならば、此の程のなぐり情に、瓢をなりとも置いてゆけ、小瓢をなりとも置いて行け。それはや女郎、易き聞の事なりとよ。諸國をでつるで、づでんど叩かうずるにも、瓢なうてはお笑止。極樂のホ、前に流るゝ涙川、如何なる淵の瀬になり、天地の

次第は各かねて承知の通り、信をこめて取り給へ。サア只今火をしめす。」と、さつと披いて羅の扇に撲つは秋の螢火、これは冬の夜の螢火ならぬ燈火も、消えて銀燭徒らに、畫屏むなしく暗然たり。人々互に辭儀もなく、聲をも立てず心々に、立ちより〳〵神に任する盲摑み、行きつ戻りつ立ちまふ内、渡邊綱が從弟箕田二郎纜、御鬮の矢を取る牀脇に、坐したる小蝶が衣の空炷、なまめく薫りに心ほれ〳〵、お廣間酒の三杯機嫌、覺えずすり寄り振り解けば、付寄つて抱きつく。小蝶は賴信公へ他心なき氣を見せたく、左の手に烏帽子の懸緒、取つてぢつと引きのばし、懷中の匕首拔くより早く、結び際よりずつかと切り、取つてつきのけ大聲上げ、「天下大事の御家督定め、神前といひ上々の御座近く、くらまぎれの不行儀侍、誰かは知らず小蝶に戯れしなだるゝ、不義放埒の曲者、證の爲烏帽子の懸緒を切り取つたり。たつた今其の人を顯はさん。サア女中燭臺々々。」と呼ばはれば、一座も是れはと興醒し、纜酒の醉ひもさめ、なむ三寶、腹きらんと柄に手をかけて見て、につくい女め刺し殺してやくれん、我許りや死なんと、急き閊ふれども人知らず。面々烏帽子の懸緒を探り、互の心を疑ひあふ。火を見るまでの纜が身の安否、途方にくらむやだけ心、闇の闇路となつたる所に、賴平君の惻隱の御心に、纜が爲の正八幡、入りかはり給ひけん。御聲高く、「ヤア〳〵賴平が思ふ仔細あり。卒爾に燈火あぐるな。此の座の諸武士一人も殘らず自身烏帽子の懸緒を切り、きり揃ふと一

て腹癒せ。エ、腹が立つ。」と心の亂れ、身をけづる櫛形の戸口より、何心なく賴平君、牀の前に畏まり、烏帽子を傾け禮拜の直垂の袖そつと控へ、「時節わるい事ながら、引かれぬお方に賴まれ、屆けぬもいかゞと、お心もかへりみず申し上げます。江文の宰相爲成卿の娘御詠歌の姫樣、たんとお前を思ひこみ、お煩ひに成る程。私が參る度每にお部屋へ召され、小蝶賴む、賴平樣と詠歌が中の妻むかへ舟、年に一度は奢りの沙汰、せめて一代に一度の逢ふ夜を、引合はせてくれと御意なされ、それはそれは深いお心。お情あらば私も共に。」といひもきらさず、「待て〳〵。詠歌の姫は白馬の節會のお庭で見初め、我も心に懸れども、兄賴信深い中と聞くものを、夫れがどうも。」と赧らめ給ふ御容顏、「アアその御遠慮いらぬ事。尤もかし賴信樣、一兩度玉章はつけられしが、詠歌樣も心に染まず、賴信樣もしかとお心に取りしめた事でもなし、眞の時の一興。もし眞實事なれば、媒の小蝶が一分も立たぬ事。お爲あしうは致しませぬ。」と、さも有りつべう辯舌に、いひ廻されて賴平君、「ハテ道に違はず浮名の立たぬ事ならば、我も戀しき渡りに船、よい樣に小蝶賴む。」と宣へば、小蝶が重荷片荷はおりてがつくりと、氣草臥の漏刻初夜を告げてぞ聞えたる。御定めの時分よしと平井保昌、末武貞光をさきとして、源家相傳の武士の中、物頭分二十八人、素襖袴の袖を連ね、烏帽子を竝べて、我も〳〵と座につけば、上段に御臺所、賴信賴平兩御舍弟、左右に竝びおはします。小蝶仰せを蒙り、「御鬮の

きつく。頼信驚き振り返る顏と顏、何と詞の機もなく、「ア、眞に私が樣な麁相な。ひよつと滑つて抱き付きまし、お慮外な。ついお前に惚れうとした。御免なして。」と許りにて、差俯いて居たりしが、心を靜め小聲になり、「いつぞは〳〵密かに申し上げたいと、心に積るばつかり、お顏を見れば氣おくれして、わけては如何も申されず。」と、いへば頼信うち頷き、「ム、皆までいふな合點々々。我に言ひたき事ありとは、此方にも覺えあり。聞けば江文の宰相へ懇に出入るとや。彼の娘詠歌の姫と人しれず文を通はし、互の心はあひながら、頼信が此の身から、輕々しくも忍ばれず、姫も心遣瀨なく、頼まれしは其の事よな。かね〳〵密かに四天王にも言ひ聞かせ、頼光御夫婦の御耳へも入れ置きし。こよひ家督定めの品により、我が妻に迎へ取るべし。心せかず待たれよと、懇に傳へてくれ。人も聞くかとくどからず、萬事小蝶に任せ置く。頼む〳〵。」と言ひ捨て奥にいり給ふ。小蝶ほうどけでんして、「こりやどうぢや、是れ程にもあてが違ふか。そも思ひ初めしより、御前へ出ては胸を焦し、局へおりては心を碎き、一夜も安う寐る間もなく、いくせの心を盡せども、もしや〳〵の頼み許り、奉公も苦にならず、人に勝れつとめ、神といへば願を立て、佛といへば頼みをかけ、千筋萬筋の佛神の願ひの絲、今宵一度にはらりつと切れ果てた。エ、恨めしい、詠歌の姫、常はうらなく目かけぶり。此の事許りを隱し置いて、よう出しぬかれた。悋氣に位の高下はない。待て此の戀を妨げ、一本させ

員偏頗もならぬ筈、皆神慮の御はからひ。此の御鬮の矢の取りさばきも、御家久しきそなた、四天王の衆が承る筈なれども、男たる身は面々の私にて、かねて矢に覺えの印を付け置いたなどと、諸武士の褒貶やかましく、今宵此の場一通りの用事は、その小蝶に言ひ付けし。まづ頼信頼平殿、八幡宮の御拜なさるゝ樣に申してたもつ。委しき事は小蝶に萬事言ひ付けし。聞き合はせて御家督定め、首尾よいやうに頼むぞ。」と、御座を立つて入り給へば、保昌は御兄弟の御部屋々々に參りける。小蝶が跡に一人笑み、「知れぬは人の仕合、頼信樣に此の年月、砂地の雨だれほれて〳〵、惚れこんだ忍び涙、上と下との恐れを憚り、色に出す折もなかりしに、八幡樣御拜に只今是れへお出で。サア今宵こそ戀の花のひらけ時、頼信樣に折つてなりとも、ちぎつてなりとも貰ひましたら、ア、ぞつこんから嬉しかろ〳〵忝かろ。ソリヤ忝いが御座るわ。」と、時めく内に頼信朝臣、裝束改め牀に向ひ拍手の音、「高天が原に神とゞまりまします。」烏帽子の殿振、中臣祓のお聲の色どうもたまらぬ、とんと斯う抱きついてのけうか、飛び付いて頰ずりか、オ、しんき、ちと此方向かんせかし。ちよつと觸つて戴く我が手、御直垂のとめきやら、ムンゆかしい香や、フン〳〵ム、いとしらしい香ひぢや、オ、しんき、なぜにやら氣がせく、顏もほかつく、氣あがりもだく〳〵、のいつさはつつ罠に油の若鼠、そばゆる狐腰をよぢらす、心をもぢらす亂れ足元、けがの高名すべつた顏、もたれかゝつてひつたり抱

相馬の家の總領の、印も見えて目覺しし。「猶叡感の天杯、幕籏印は江文の宰相に預け置かる。家に納めて守られよ。賴光は數代の勳功、國家の政道大小となく、任せ仰せ下さるゝ。然れども未だ家督の定めなし。弟河内守賴信、三男出羽の冠者賴平二人の內、御邊が心に叶ひし者家督に立て、かさねて奏聞有るべし。」と、氏の譽れ身の面目、世に類なき綸言に、悅びの袖を左右左の、大內山にひるがへす、幕は相馬の紋なれど、唐土までも我が朝の、源氏の門に繫ぎ馬、なつく民こそ豐かなれ。武將賴光、將門が執念の變化を治め給ひしより、威勢日を追うていやまさり、御舍弟二人の內家督たるべしとの敕諚、今夜其の沙汰あるべしと、小寢殿の大牀に、八幡宮を勸請あり。白羽の矢三十三筋、染羽の矢三十三筋、合はせて六十六ヶ國の棟梁たるべき、表示をしめす御注連繩、和光の銀燭明と、神慮も納受なからめや。御臺所御座につき給へば、平井保昌罷り出で、「仰せに任せ御譜代相傳の諸武士、末武貞光を始め、殘らず大廣間に相詰め候。但し綱公時兩人は、洛中夜廻りの役人、不參に候。」と、申し上ぐれば御機嫌よく、「兩人の御舍弟達劣らぬ御器量、賴光の御心に何れを何れと別ちがたし。大將たる身は心行跡天に叶ひ、士卒萬民の歸服の德そなはらでは、家督には定め難しとて、八幡宮を勸請し、源家由緒の諸侍をあつめ此の閒の火を消し、備への矢を一人に一筋づゝ、御鬮として探りとらせ、一筋にても白羽多くば賴信、染羽多くば賴平との定め、闇夜のわざ私の贔

詞に應じ大宮人大藏省の被官御藏をひらき、尋ねさがせば一合の唐櫃に、頼光の放てる矢、鏑くだけて筐中までこそ立つたりけれ。人々立ち寄り見たまふに、天慶三年三月日とばかりにて、事の差別もわきがたく、重ねて不思議を增しにける。頼光具に明察あり、「此の書付の年號年月を考ふるに、朱雀院の御宇、平親王將門が亡びしときに相當る。傳へ聞く將門が廏の邊に、客星落ちて龍馬と成る。是れ我が身を立つべき吉相、相馬の家の軍神馬頭大明神と尊仰し、其の由緒によつて籏指物の紋所、隱れなき相馬の家の繫馬。然るに承平年中より關東にはびこり、既に王位を覆さんとせし所、俵藤太藤原秀鄕是れを誅伐し、其の證に獻じたる將門が籏指物、此の櫃に納まりしと存ずるに違ふ所あるまじ。彼の將門が末子成人し、密かに將軍太郎良門と名乘り、或は民家に押入り、強盜または山野に山賊して財寶をうばひ、籠城の端をあらはすよし、頼光が目附の者ども告げしらす。親子同氣を相求むるの奇特、將門が魂入りたる幕の紋の馬、此の時を得たると覺え候。免許を蒙り今日より洛中を夜廻り致させ、非常を糺し、將軍太郎が銳氣を取挫ぎ、彌四海太平の忠勤を抽んで奉らん。」と辯舌流るゝ水鏡、行くさき見ぬき奏せらる。攝政殿を始めとして、三公九卿八座七辨、百官百僚に至るまで、「武勇明察まことに淸和の嫡孫や。」と、「あつ。」と感ずる許りなり。「いで〳〵櫃をひらき、證據を顯はすべし。」と、蓋を開けば頼光の詞に違はぬ籏印、繫馬の幕の紋、五田町がゝりに染め込みしは、

立て吹き立て、龍象の波を蹴立つる四足の働き、惡來が多力にも止めつべうは見えざりけり。公時いらつて踏んばたがり、平頸摑んで引きよすれば、ひらりと飛ぶを、「得たりやおう。」と渡邊が、障泥ずりをしつかと抱く。かい潛つて驅け出す、二人が懸聲いばゆる馬、牧の野取の三重ごとくなり。頼光さわがず、弓矢おつ取り大音上げ、「清和天皇四代の孫、多田新發意滿仲が嫡子、鎭守府の將軍兼攝津守源頼光。」と三度名乘つて鏑矢取つて打ちつがひ、よつ引き丁ど放せば過たず、龍馬の三高ずばと射ぬかれ、をめき苦しみ伏すと見えしが、俄に風おち雷光形も消えて失せければ、*月卿雲客、「射たり、射たり頼光、日本の養由。」と、上下さゞめき悦びあふ。攝政殿立ち出で給ひ、「頼光の武功今に始めず。綱公時が勇力、重ねて恩賞あるべし。但し化生の出所をしらず。此の事卜占有るべし。」と、卜の博士伴別當を召さるれば、敕に應じ御階のもとに伺候する。參議爲成出で向ひ、「化生は只今武將の矢先に鎭まつたり。此の變化の本體、障礙をなすに由來あるべし。占ひ仕れ。」と有りければ、別當畏まつて懷中の祕書取り出し、天地に俯仰し、三才にくり合はせ暫く考へ、「ム、ウ震の卦を下にし、離の卦を上にす。噬嗑の卦と申すに當つて候。易に曰く頤の中に物あり、噬み嗑せて而うして後に亨ると云々。是れを以て考ふれば、天下は口中物は惡なり。此の惡を噬み整へ天下の脾胃に入る時は、天晴國家の御大事。方角は御殿の辰巳に一物有るべし。御詮議あれ。」と見通す樣にぞ占ひける。

り、殿上臺盤へもかけ上らん勢ひに高嘶き。左右馬寮の官人馬部の仕丁、組みとめん繫ぎとめんと追ひ廻せども、眼に遮る許りにて手にとられず。有驗の高僧貴僧に仰せ、大法祕法を修せらるれども、更に其のしるしなし。君いとけなく淸濁をわかたせ給はぬ叡慮に、不德の御過り有るべき樣なし。かかる妖怪は攝政たる兼家が責一人に歸す。諫めを奉り非を改むるは君臣の常道。所存殘さず奏聞有るべし。」とぞおほせける。賴光謹んで、「怪しきを見て怪しまざれば、怪しみ却つて壞るとかや。古宇多天皇の御在位、金岡大納言が書きたる馬、夜每に出でて萩の戶の萩を食ひあらし、異國には吳道子が繪、主の僧をなやませし類、名筆名作の畫圖、彫刻に魂入りしためし數を知らず。先祖經基孫王、鹿を射られし武功を傳へたる賴光、たとひ其の馬生あればとて、天威をいたゞき、綸言とよばはつて蟇目一矢仕らば、やはか仕そんじ候はん。況んや神にもせよ鬼にもせよ、現はす所の形は畜類、某が手をおろすに及ばず、召連れし二人の武士、たやすく計らひ候はん。」と返答大樣大鳥の、羽づくろひする綱公時、鬼でもござれ蛇でもござれ、相手のつよいが好物珍物、勇みにいさむ面魂、雲の上人力を得、此の頃こはがる牛飼舍人、火焚の衞士に至るまで、「誠に餠は餠屋ぢや。」と、宮中悅びいさみける。其の日もすでに午の刻限、昨日の頃ぞといふ間もなく、內敎坊の後より、いなゝき出づる惡馬の相形、須彌の*鬣蹄をかくし、耳は法螺貝眼は銅鏡、鼻のあらしは海風の、千里の砂を吹き

關八州繫馬

第一

水は石が鑽にあらずして、泰山の霤り巖を穿ち、索は木が鋸にあらずして、單極の綆幹を斷る。積惡累德始めにある事なし。されば＊浸潤の譖膚受の愬、行はれざる明王の、御代傳はりて六十六代、一條の院いまだ七歳の幼主として、五事七政を秋津洲に施し給ふぞ有り難き。東三條兼家公萬機を攝政し、參議江文爲成卿參はり議るの職に進み、六孫王の嫡流鎭守府の將軍、源頼光父祖の業を繼いで、君文を以て四夷を撫で、臣武を以て八蠻を鎭めしかば、行くもの途に棄てたるを拾はず、耕すもの手拍つて謳ひ、四門熈々としてやはらぐ民とは此の時なり。頃は永延二年更衣中旬、武將頼光別敕の召によつて參内ある。御供の武士には渡邊綱、調度掛として雷上動の御弓、坂田公時箙の役、半臂に腹卷烏帽子懸し、黑漆の大太刀佩きて左右に隨ひ、牀子の座にぞ伺候ある。殿下兼家公御座近く召され、「召さるゝ條餘の儀にあらず。去んぬる頃より宮中に不思議の變化、形は尋常黑の駒、刻限も午の時、いづくより來るともなく、御垣のもとにあらはれ、左近右近の木のもとに、飛び狂ひ跳ね廻

上げ、「己も何の忘れうぞ。もし言ひ出したら其方の泣きやらう悲しさに、默つて居た。」と許りにて、一度に、「わつ。」と聲をあげ、前後正體泣き叫ぶ。おのも翼を並べながら、人の最期を急ぐなる、八聲の鳥も告げ渡れば、「サア〳〵夜明に間がない。明日は未來で添ふものを、別れは暫しの此の世の名殘十念逼つて一念の、聲諸ともにぐつと刺す。咽の呼吸も亂るゝ刃、思ひ切つても四苦八苦、手足を跪き、三重身をもがき、卯月六日の朝露の、草には置かで毛氈の、上に無き名を留めたり。年は三九の郡内縞、血汐に染みて紅の、衣服に姿搔繕ひ、妻の抱帶を二つに押し切り、諸肌脫いで我と我が、鳩尾と臍の二所、「うん。」と締めては引括り〳〵、脇差逆手に取り持つて、二首の辭世にかくばかり。「古を捨てばや義理も思ふまじ、朽ちても消えぬ名こそ惜しけれ。遙々と、濱松風にもまれ來て、涙に沈むざゝんざの聲。」三國一ぢや我は佛に成りすます、しやんと左手の腹に突き立て、右手へくわらりと引き廻し、返す刃に吭搔き切り、此の世の緣切る息引き切る、晨朝過ぎの勸進所、目すりすりり門番が、見付けて、「心中ヤレ心中、心んだ〳〵。」と呼ばはる聲、吹き傳へたる濱松風、枝をならさぬ君が世に、類稀なる死姿、語りて感ずる許りなり。

心中宵庚申　終

許りなり。「あれ又愚癡な事許り。在所の父様姉様は、こな様より諦めよい。水杯の其の上に、門火まで焚かれしは、生きて再び戻るなと、私に意見の暇乞。其の愚癡な事いふ手間で、早う殺して下さんせ。アレ〱〱三方四方に半鐘が鳴る鐘が鳴る。人の來ぬ間に〱。」と急ぐ最期の玉鬘、夫にまどひ泣き沈む。「それよ〱由なき悔み。最早互に親の事兄弟の事言ひ出すまい。必ず其方言ひ出しやんな。いざ此方へ。」と、毛氈を土に打敷き、「なうお千代、此の毛氈を毛氈と思はれそ。二人が一所に法の花、紅の蓮と觀ずれば、一蓮託生頼みあり。親兄弟への書置も、此の状箱に入れ置けば、明日は早々届くべし。サア〱觀念、最期の念佛怠りやるな。今が最期。」とずばと抜く、一尺四寸親重代、「我が身を切れとて讓りはせじ。かひなき半兵衞が身の果てや。」と昔思へば手も顫ひ、不覺の涙堰きあへず。心覺えの西向に、千代は合掌手を合はせ、「光明遍照十方世界、念佛衆生攝取不捨、南無阿彌陀佛。」の聲より早く引き寄せて、脇差咽に押し當つる。「なう待つてたべ待たしやんせ。」と身をすりのけば半兵衞、「待てとは未練な。刃物を見て俄に命惜しなつたか、卑怯者め。」と睨め付くれば、「否否未練も卑怯も出ぬ。今の廻向は我が身の廻向。可愛やお腹に五月の、男か女か知らねども、此の子の廻向して遣りたい。嬉しやまめで産んだらば、どうして育てう斯うせうかと、案じ置きは皆徒事、日の目も見せず殺すかと、思へばかはゆうござんす。」と、かつぱと伏して泣き入れば、男も聲を啜り

情するどに人絶えて、物しん〳〵たる寺町を、死にに行く身も暫くは、爰生玉の馬場先に、法界無縁の勧進所、無明能化の門前に、念佛を便り辿り寄る。「なうお千代、＊心随萬境轉と聞く時は、心は境界に隨つて轉じ變る。其方も千代と言ふ名を、風覺良訓信女と改め、我も八百屋半兵衛を、露秋禪定門と改め、息のある内より早亡き人の數に入れば、死後の身體の置所も俗縁を離れ、寺の庭でと思へども、門開かねば力なし。爰は奈良の東大寺大佛殿の勧進所。先年了海和尚衆生濟度の說法を、此の所にて說き始め、今遷化の後までも、我が親は講中の第一にて、由緒ある所なれば、最期を爰と思ひ寄る。但し望みも有りや。」と問へば、「なう死ぬる身に何の望み。水の中火の中でも、先の世までもこなさんと、女夫になつて居る所を、見立てて死んで下さんせ。」とさめ〴〵歎けば、「オ、過分な。此の書置にも書く通り、養子に成つて十六年此の方、十方旦那の機嫌を取り、暇ある日には町中を振賣し、元は僅かの八百屋店、今では人に少々の、金貸す樣に儲け溜めても、辛い目許りに日を半日心を伸ばす事もなく、死なうとせしも以上五度。恨みある中にも其方に縁組み、せめての憂さを晴らせしに、それさへ添はれぬ樣になり、死ぬる身にまで成り下る。よしない者に連添うて、半兵衛が身の因果、其方までに振舞、在所の親仁姉御にも、悲しい事を聞かすと思へば、此の胸に鑢をかけ、肝を猛火で炒る樣な。エ、口惜しい。」と拳を握り、膝に押し付け身を顫はし、涙はら〳〵朝露に、つれて流るゝ

行つく〴〵し、仰せ背かぬ宮仕、氣のとつさかな姑に、せり〳〵弄りたでられて、命もなしやありのみの、谷川ふりに身を投げう、今日あまのりに成らうかと、心はうちやうかんてんの、いつわつさびとしもせねば、斯くなる蓮でござんせう。何と生薑の身の果てを、說敎言うて返らぬ水蕗の、姑去りで殺したと、祭文惡名つけて世の人の、蕨ませうがお笑止と、悔めば夫は芋莖の涙、「なう其方さへ其の如く、悔んで給るに此の半兵衞、年比日比の御厚恩、送らで死ぬは人の屑、罰をかぶらん恐ろし。」と、酸漿程な血の涙、はら〳〵溢せば走り寄り「私も病者な父樣を、先へ送るが蓴菜を、却つて憂き目見せまする。是れも何ゆゑ相生の、松茸ゆゑ。」と抱きつき、木末に知らぬ松の露、落ちて松露になりやせん。あれ一羣に聲高く、下向の衆のぞめき唄、見付けられじと影隱す。唄「我が戀路は絲なき三味よ、何のねもせで待ち明かす。それぢや〳〵、見れば思ひの雲の帶〳〵、さすぞ杯ならずと一つ參れ。いやとおしやるに、こちやも、それぢや〳〵、さうさんせそれぢや〳〵。しかもよいこの情盛りに、ちよきりこつきり小女房の、腰もしなへてやつくるり、くるりや〳〵やつくるりと、ぬめらしやんすは二人が外に名取川。オ、それ二人と二人が名取川。それぢや〳〵。」「それ行き過ぎし。」と立ち出でて、「今の小唄の一節に、二人と二人が名取川。オ、それ〳〵ぢやと謠ひしは、おれと其方が名取川。辻占がよい此方へ。」と勇むは男のやたけ心。「ア、嬉しい。」と引連れて、共に急ぐは女氣の

どき母の鉦の聲、胸にこたへて身も慄ひ、踏所覺えぬ差足に、鎹外す手もわなく、そつと出でたる門口に、「イヤアお千代か。」「おいの。」「サア鰐の口を脱れた。サアおぢや。」と手を引けば、「マア待つて下さんせ。生中一度戻つて、此方樣の口から、退くぞ去るぞと言はれては未來までの氣がゝり。此の門口でたつた一言、去らぬと言うて下さんせ。」「ハテ愚癡な事許り。今宵は五日宵庚申、女夫連で此の家を去ると思へばよいわいの。」「ほんにさうぢや。」手に手を取つて此の世を去る、輪廻を去る迷ひを去る、今日は最後の羊の歩み、足に任せて　三重

道行思ひの短夜

唄名殘も夏の薄衣、鶯の巣に育てられ、子で子にならぬ杜鵑、我も二八の年月を、養ひ親に育てられ、子で子にならず振り捨てて、死にに行く身は人ならぬ、死出の田長か杜鵑、同じ類の夫婦連、肩に掛けたる毛氈は、啼く音血をはく姿かや。覺悟極めし足元も、影ほのぐらき薄曇り、卯月五日の宵庚申、死なば一所と契りたる、其の一言は庚申、參りの人に打紛れ、忍び出づるも商賣の、八百や萬を一文字に、半兵衞といふ名にも似ず、唯ねぶかくも思ひつむ、わかな心の突き詰めて、詞の義理に薑や。智者は惑はず、勇者は懼れぬ生まれ付、流石は武士の種ぞかし。千代も今度が三度目の、嫁菜盛りも古くれて、諸事を細かなけしからし、人の言ふ事きくらげや、夫の親を手に捧げ、晝夜孝

や。お千代泣かずと爰へおぢやいの。まだ己が恐いか。爰へ〳〵。」と猫撫聲。「アイ〳〵お側へ參ります。」と立ち寄らんとする所を、半兵衛取つて突き退け、「女房許りは親の儘にもならぬ。身が氣に入らぬ。去つた〳〵出てうせい。コリヤさんも丁稚もよう聞け。半兵衛が女房去つたぞ。向ひ鄰町內でも母の浮名を立てたらば聞く事でない。うろ〳〵せずと出てうせい。」と、眞顏に睨む目に涙。「コレ嫁御おりや去らぬぞや。親の儘にもならぬは女夫是非がない。私を恨みと思やるな。」と言へども何の返答も、泣き入り〳〵しやくり泣く。「ム、其の涙はまだ母に恨みが有りさうな。有るなら言や聞きませう。」「イ、エ〳〵御慈悲深い姑御に、何の〳〵。」と詞許りにて、かつぱと伏して泣き居たり。「オ、己が言ふまでない。母者人に何の恨み。口手間入れる面倒な。」と、小腕取つて門口に引き出す。「此の身も遂に行く、後に〳〵。」と囁きて、目まぜに宿の名殘の涙、弱る心を見られじと、門口ぴつしやり見世ぐわつたり。鳴るは六つか早初夜か、時もじぶんも六々に、胸は譯なき五々八々、血死期近づく許りなり。あかぬ夫婦の生き別れ、流石の母も挨拶なく、おうへを立つて奥の間の、罪滅ぼしの鉦の聲、善惡照らす御燈の、火を見るよりも居眠る下女、外に見る目も荒布の束、中に隱せし一尺四寸、是れが冥途の案內者。魂こむる書置箱。地獄へ落ちるか極樂か、末は白茶の死裝束、くる〳〵包む毛氈も、早紅の血を見れば、死に損ひはせまいぞと、一心はすわれども、曖簾一重彼方には、すゝ

の習はし斯うした物。いとしぼなげに根からの悪人でもない母を、和女故に邪見者と言はせては、女夫の者が後生も悪い。母の機嫌好う一旦呼び返し、改めて己が手から去る筈ぢや。」「エ、イ、すりやどうでも去らるゝか。」「ハテ肝潰す事かいの。死ぬるは二人が豫ての覺悟。養ひ親にさん*もつかず、在所の親の遺恨もなく、エ、流石ぢや、見事に死んだと、未練者の名を取るまい爲、母に向ひ何ほの詞を盡したと思やるぞ。書置も認め死裝束脇差も、荒布の荷へ捲き込み、この世の心がゝりは微塵程もなけれども、金につまつて死ぬる心中と一口に言はれうかと、是れが一つの氣がゝり。」と、「わつ。」と泣けば、「わつ。」と泣き、「こなさんの孝行の道さへ立てば、私も心は殘らぬ。」と、夫婦手を取り縋り寄り、伏し沈むこそ道理なれ。母は念佛の廻向より、嫁女夫の願以此功徳氣懸り、餘所にゆるりと居る空も、見世さし頃によつと歸り、「なうお千代戻りやつたか。さつきにも言ふ通り、些とした料簡違ひで物思はせたいとしやの。ほんの生如來が見たくばおれぢやと思や。永うもない浮世に、酷いつらいめ見て何にせう。嘵否やの。コリヤ半兵衞、はしりの出刃庖丁よう研がして置いたぞや。ちよいと觸つても劍ぢやぞ。アなむ阿彌陀佛〳〵。」と、半兵衞に相圖の詞、嫁は知らぬと思ひこむ、是ればつかりは佛なり。女夫は母の機嫌顔、見れば此の世の本望と、思へど*寂は雨とふる、涙かくすぞあはれなる。「コレ半兵衞何も忘れたことはないか。日の永い時は得て物忘れするものぢや。よう思ひ出し

つとし、「何として戻つた。唯今母が出られた。道で逢ひはせんなんだか。」「さればいの、母さまの山城屋へよらしやんして、いつにない門口からにこ〳〵と、いとしや〳〵、おれがちつとの思ひ違ひで苦勞させた、今からいなそのいのじも言ふまいと心誓文立てた、娘は持たず天にも地にもたつた一人の花嫁、末期の水取らるゝも骨拾はるゝも和女、隨分孝行にしてたも、和女もおれがいとしがる、今お念佛に參る其の内に早う戻つて、後に逢はう早う〳〵と、とんと桶な物打ちあけた樣なお心。皆此方樣の言ひなし故と、ほんに男の御恩は戴いて居てもあきはない。松よ久しいな。最早どこも蚊があるに、女房主人がなければ、まだ蚊帳の釣手もなし。アノさんが居眠りでは、袷どもの洗濯もできまい。此の戸棚のほこりわいの。奥の疵もまだ塞がず、香の物も見舞ひたし、何からせうやら氣がうろつく。居付けた所に居て見よ。」と、とんと坐りし茶釜のまへ、湯を沸かして水になる、末知らぬこそ果敢なけれ。半兵衞とかうの挨拶せず、「コリヤ松よ、只ゐずとも藏へいて、椎茸よれ。」と人をのけ、お千代が顏をつく〴〵と見て涙ぐみ、「エ、かはいや利發なやうでも女心、母の詞を眞實と思ふか。言やる事が皆譃ぢや。さりながら昨日もくれ〴〵いふ通り、佛法の端も聞き入れ、物の慈悲も知つた人。我が甥をさしのけ他人の身共に、跡式讓る心からは、根から歪まぬ是れ證據。人には合緣奇緣、血を分けた親子でも中の惡いが有る物、乘合舟の見ず知らずにも、可愛らしいと思ふ人もある。人界

され、其の上にて私が、物の見事に去狀書いて暇やります。」「ホ、そこが男のかうけん。貴人高位の娘でも、夫が去るになんと申そ。」「時には千代めが姑への恨みもなく、お前を慈悲ぢやと言はせたい。十六年此の方たつた一度の御訴訟。老少不定の世の中、假令私が先だつても、如何なる跡のとひ弔ひ、百萬遍の御廻向より、聞き入れたとの御一言、智識長老のお十念を、授かる心。」と許りにて、女房の親と我が親と、世間の義理と恩愛と、三筋四筋の涙の絲、たぐり出すが如くなり。母ほいやりと笑顏して、「ム、思ひ合うた夫婦合、誠らしうは思はねど、譃に涙は出ぬ物、眞實去るが定ぢやの。」「ハテお前をだます程なれば、此の御訴訟は申しませぬ。」「オ、嬉しい〳〵。おれも鬼にはなりとむない。必ず去りやや。間に合ひ言うて欺しやれば、コレ此の母が咽笛を、出刃庖丁でちよいぢやぞや。母殺すか女房去るか、夫れからは其方の勝手次第。ア、さらりと穢土の苦が脫けた。此の世からの生佛とはおれが事。足輕う非時に參りましよ。こちや未來までのきざりせぬ閨の同行が、さこそ待ちや焦れて、なむ阿彌陀佛〳〵。さんよ其の形でつい供せい。ア南無阿彌陀佛。松よ又見世の吊柹食らふな。アなまみだ。」南無阿彌陀佛に取りまぜて、ぶつ〳〵言うてぞ出でにける。お千代が重なる五月の、重き身ながら足元も、手も輕々と帶の下、小褄引きあげちよこ〳〵走り、「ハア久しぶりで家を見た、半兵衞樣、今日といふ今日、町内廣う戾つたわいの。ア嬉しや。」と抱きつけば、半兵衞ぎよ

衛が叱らるゝも貝のわざ、和女に己が意見するも貝のわざ、一蓮託生の閨のお同行。」と、じやれて機嫌を取りければ、「そんならマア此方參らしやれ。此の樣な瞋恚の燃える時に念佛申せば、咽にすくすく立つ樣な。心鎭めて跡から參らう。エ、かててくはへてあたどんな念佛講。こんな時はめかりきかして延ばしだがよいわいの。眞に〱此方の同行に、機轉の利いたが一人もない。」と、怖いめ知らぬ我が儘だら〱。「オ、そんなら先へ行く、跡からおぢや。*佛法と萱屋の雨は出て聞けと、外へ出づれば又有り難い事も聞く。此の度生玉大寶寺の開帳に築山を飾られたも、*筑後の川中島の四段目から出た事ぢやげな。こんな事も出にや聞かれぬ。ア、有り難い南無阿彌陀佛。」と、輪數珠くり〱出でにけり。半兵衛一言の答へもせず、涙にくれて居たりしが、顏ふり上げ、「申し母者人、今めかしい申し事ながら、武士の釜の水で育ちし此の半兵衛、二十二の年から御面倒に預り、一人の甥御を差置き、家屋敷商賣とも、私へお讓りなさるゝ御厚恩、肝にこたへて空にも存ぜぬ。御恩の母の氣に入らぬ女房なれば、私が離別致してこそ、孝行も立ち世間もたつ。所に此の度國元の留守の間に、八百屋半兵衛が母が、嫁を憎んで姑去りにしたと沙汰あつては、萬々千代めが惡いになされませ、判官贔屓の世の中、お前の名ほか出ませぬ。母の惡名を立てて、若い者の人中へ面が出されませうか。親仁樣にも面目失はする。爰が一つの御訴訟。少しの間とおぼし召し蟲を殺し、美しう千代めをお入れな

ろ。十五年世話にした親の嫌ふ女房に、隨分と孝行つくし、親には不孝つくしや、恩知らずめ。」と、疊たゝいて喚き居る所へ、青布子の西念坊、案内なしにずつと通り、「熊野屋の權右樣から先達のお約束、宗味が※刻鐘の開眼、麁相な非時致します。講中皆お揃ひ、旦那寺もとうお出で。御夫婦ながら只今。」と、言ひ捨て歸るそゝくさ坊主、未來賴むはあぶなもの。「アレ親仁殿、熊野屋から呼びに來た、早よ往かつしやれ。おりや往かぬ。きり〳〵さしやれ。」とつこど聲。親伊右衞門は後生一遍、「ハレ嚊何を喧しい。またしても〳〵半兵衞さへ見れば、敵の樣にいふ人ぢや。世間する若い者、呼びに來まい物でもない。少々の事は聞きのがしにしやいの。」「ソレ其の結構過ぎたから、親を阿呆にしをるわいの。現在おれが甥の太兵衞を差置き、あかの他人の此ののら殿に、家屋敷遣る此の母、邪は少しもない。」「コレ嚊、それは誰も知つた事、今更檢べる事かいの。そのよな腹の立つ時は念佛が藥ぢや。兎角如來の御方便、修羅燃すそなたを呼びに來るも彌陀如來、參る此方等も彌陀如來、機嫌直しや。」と宥むれば、「イヤこち夫婦が出てゐて、跡へお千代を呼び入れ、留守の間でほたえさす事は成りませぬ。此方一人參つて、私は俄に目がまうたとなりと、頓死したとなりと、間にあひに遣らつしやれ。」「コレ嚊、たつた今西念坊が見て去んだわいの。此の伊右衞門に譃つけか、ア勿體ない妄語戒。この中さるお寺で、五戒の割口說聽聞した。三百戒五百戒も、約まる所は赤貝に留まるとのお談義。半兵

明「これは扨も早い事でごんすよの。俺が戻るは、ても遲い事でごんすよの。」「コリャのらつぽ今朝卯の刻から内を出て、何時ぢやと思ふ。晝下り、どこで鼻毛をよまれて居た。旦那衆の誂へ物、日覆ひしてさへ傷む時、高い物をてんとぼし。商賣の朸くらはせ、魂に覺えさせん。」と取り付けば、半兵衞走りいで、「母者人のがこりや尤も。コレ太兵衞、何處にのらくやつて居た。衽町の笹屋から、竹の子取りに矢の使。阿波座堀の丹波屋から栗おこせと言うてくる。朝倉屋からは青山椒、内にはきれる返事に困つた。大儀ながら母者人の機嫌なほし、つい一走り廻つておぢや。」「ハテ私ぢやとて何の悪い所にはひつて居ましよ。横町の山城屋から呼びこまれ、二つ三つ咄した許り。其れも外の事でござらぬ。此方に誰やら逢ひたいとて、今朝から爰に待つて居るというてくれとの傳言。私や花主を廻つてこう。此方も一寸往かしやれ。」と誂へ物を取揃へ、荷拵へして出でてゆく。半兵衞は山城屋と聞くより、お千代が來たであろ、氣どられまいと空とぼけ、「ハア山城屋からは何の用。どりや一寸いてこう。」と走り出づるを、むずと捕へ、「聟殿こりやどこへ。」「イャ山城屋から逢ひたいと。」「オ、その山城屋合點なりませぬ。アノぬつけりとした顔わいの。こちと夫婦は何にも知らぬと思うてか。氣にいらいで往なした嫁を、遠州戻りに在所へより、ようくはへて戻つたな。常磐町の従弟が所に預けておき、商賣に託け、間がな隙がな女夫こつてり、おれが知らいでおこかいの。嘸おれが事譏りやつつ

言ひ交し、思ひを陳べて立ち出づる。「暫し。」と父は起き上り、「姉なう重ねて戻らぬ爲、祝うて内で門火たけ。」忌々しいとは思へども、親に從ふ焚火の煙、「目出度う爰から焚きます。」と、庭にこがるゝ下もえの、果ては夫婦が無常の煙、灰に成つても歸るなと、其の一言を此の世の名殘、留まる名殘行く名殘、長き名殘と　三重

下之卷

夏も來て青物見世に水かわく、筵廂に除けられし、日陰の千代が舅の家は、新靭油掛町八百屋伊右衞門、淨土宗の願人、了海坊の談義にうち込み、開帳廻向の世話やき仲間、見世は半兵衞に打ち任せ、大坂中の寺狂ひ。女房は内外の世話に五つも年ふけて、朝から晩まで氣は苛だて、「此の半兵衞は藏にべら〳〵何して居やる。見世の賣物がしなびる。ヤイ松め、きり〳〵と水打ちをろ。コリヤさんよ、糊かひ物がひあがろがな、とりへて疊んで打盤出してちよき〳〵と打て。ヤ其のちよき〳〵で夕飯のおねばきざめ。*コリヤ松よ、今日は五日宵庚申、甲子が近い。二股大根のけておけ。ソレさんよ茶釜の下が燃え出る。」と商賣が八百屋とて、八百色程言ひ付くる、口せか〳〵と忙しきは、大晦日の生まれかや。伯母に似ぬ甥の太兵衞が市通ひ、走りの竹の子片荷には、獨活生姜青山椒白瓜二つ。

に取沙汰せば手柄々々。留めるな娘。ぞんぶんに自害めされ。見物せん。」との一言に、孝心深き肝を拉がれ、「ハアさうぢや過つた眞平。」と、額を擦り付け身を悔み、「然らば御暇。千代も同道いざお立ちやれ。」「エイやつぱり私を女房に持つて下さんすか。」「オヽ假令死んでも身體も戻さぬ。盡未來まで女夫々々。」「アヽ忝い。父樣姉さまも悅んで下さんせ。」と、はや締め直す抱へ帶、先をたぐつてにじりより、父ははら〳〵涙にむせび、「半兵衞是れ見や此のしどなさ。歸らんと云ふ嬉しさに、親の病を何ともいはず、悅ぶ顏を見る親の、心の內の嬉しさを、叶はば見せて禮いひたし。取締のない愚か者、伊右殿夫婦の氣には入るまい。賴むは其方の心一つ。親は老病明日知らず、黃泉の底のそこまでも、心に懸るは千代一人。明日が日眼塞ぐとも、姉夫婦にきつと言ひ付け、十二十の金の取りやり、いつ何時でも事缺かせぬ。隨分商賣手廣くして、娘が事を賴み入る。契約の杯せん銚子々々。姉よ酒をきらせしか。親子の中に遠慮はない。酒と思ふ心が酒、燗鍋に水持てこい。」と杯の出る間も焦るゝは子故の闇、引きうけ〳〵ずつとほし、「半兵衞さゝう。」親子夫婦が水杯、さいつさされつ、汲めども盡きず飮めども醉はぬ水酒盛、不便と思ふ親の氣は、餘りて色に出でにける。「命があらば又逢はう。死なば親子の末期の水、未來は八功德池の水。此の世に思ひ置く事ない。二人ながらお往にやれお往にやれ。さらば。」と夜著にうち凭れ、二度詞も交されぬ、親の心に身を恥ぢて、姉につど〳〵

して忘れしか、忘れぬ證據、其の身は實父の弔ひに假託け、遠州へ出かけし其の跡で、姑に追ひ出させ、養子の親に我が罪を塗り付くる不孝者、義理も法も知つた奴か。彼が何の武士の果て、鰹節の削り屑。人でなしめに緣組んで、可惜娘を捨てたな、ろくに吟味もせなんだかと、死んだ母が彼の世から、恨み召されう口惜しい。」と、愼み深き堅親仁、惡口交りの口說き泣。二人の娘も正體なみだ、「兎かく男に緣のない、生まれ性か。」と許りにて、聲も惜しまず泣き居たり。「扨は女房去られて爰へ戾つたか。」と、始めて驚く半兵衞、胸に磐石据ゑたる如く、呆れ返つて淚も出でず、暫し詞もなかりしが、「エ、情ない女房。假令一言一宿の交際にも、人の心は知るゝもの、況して足かけ二年の馴染、子までなしたる夫の心、知つても言譯してくれぬか。親仁樣の御立腹申し開くは知つたれども、我が罪を養ひ親に塗り付ける、不孝者との一言からは、ゆめ〳〵存ぜぬ。我ら去りは致さぬと申し分くる程不孝の上塗。親仁樣につがひし詞、違へぬ武士の性根を見せる。見て疑ひをはれ給へ。」と、ずばと引きぬく脇差より、お輕ははやくすがり付き、千代も驚き、「なう悲しや。こな樣に恨みはない。」と、障子引き明け走りより、留めても留らぬ男の力。「父樣賴み上げます。」と、騷げど騷がぬ平右衞門、「お身が居るとは知つての當事、耳にとまつての自害か。オ、よい分別。自害して死んだらば、あれ見よ八百屋伊右衞門夫婦、嫁を憎んで去りし故、子はつらうちに自害せしと、養子に惡名難を付け、口々

まい。網島の心中もござんする。徒然平家物語。なう父樣、何の本がよからうぞ。」「姉が讀みさいた平家物語、祇王が段を聞かう讀みやれ。」「誠に紙を付けた所がある。」と押し開き、「母の刀自なく／＼又教訓しけるは、天が下に住まん者、ともかうも入道の仰せは背くまじき事で有るぞ。千年萬年と契るとも、頓て別るゝ中も有り、あからさまとは思へども、存へはつる事もあり。世に定めなき物は男女の習ひなり。」「ほんにさうぢや。」と讀みさして、我が身に當る憂き涙、留め兼ねてぞ泣きゐたる。父も不便に目をしば／＼「昔も今も人の氣の、移り易き世上の習ひ。コレ姉もきけ。平家物語を千代が身に引較べていふ時は、清盛入道は八百屋半兵衞、祇王は千代が身の上よ。その清盛が心變つて追ひ出す。エ、憎や清盛去年聟入せし折柄、不調法な娘を進上致した、氣に入らぬ事あらば、打ち擲き縛り括つても直させ、末々までも見捨てず添うて下されかし。此の度共に三度の嫁入。在所は一つ所どころにて、又歸つては平右衞門二度人中へ面が出されぬ。娘は氣に入らずども、我を不便と面倒見て、必ず去つて給はるな。オ、去るまい／＼、御臨終の折柄は、先輿は平六殿、後輿は此の半兵衞、眞實の子を持つたと思召せ、今こそ町人八百屋の半兵衞、元は遠州濱松にて、山脇三左衞門が倅、武士冥利商賣冥利、千代は去らぬ氣遣ひするな。ア、忝いと手をつき、地頭代官の其の外に、一生下げぬ頭を下げし互の契約、物忘れする老の身にも、其の時の嬉しさは骨身に染みて忘れぬ物、若い形

どなたも變る事あるまい。國元へ參る時分は、事急にて知らせも致さず。氣のつかぬ親ども、留守の内にも嘸御無沙汰。拙者も無事に遠州より、唯今罷り歸ります。」「フウそれはな、御奇特にようお歸りなさるゝ。」と顏を背けて鼻あしらひ、「男ども女子ども、誰ぞお茶でもあげぬか。」と内にゐぬ人呼び立てて、むやくし顏の色合を、見て取りながら半兵衞、立つも立たれず仔細は知らず、互の心隔ての障子さつとあけ、「姉さまお藥溫めて。」と出づるは女房。「ヤアお千代爰に居るか。」と、聞き捨てて物をも言はずつつと入り、障子をはたと引き立てたり。「おかる樣、あれ女房いつから爰に。何故物は申さぬ。」と騷げども、「物言はぬ譯聞きたくば、此方の心にお問ひなされ。人の知つた事の樣に、ハヽ、ハ、可笑しい事ではある。」と、空笑ひ取つてもつかれず。「ムウ〳〵。」と許りさし俯向き、とむねつくより詞なし。奧には親のせぐるし聲、「夜短で日の永いは、老人の身によけれども、それも息才で驅け廻る時の事。病みほうけて日の永いは、扠々退屈で暮し兼ねる。千代よ棚な本おろして、何なりとも讀んで聞かせ。かるは何所に、來て聞かぬか。我が伽せぬか、うせぬか。」と、忙しく老の氣のいらだて。「あい〳〵爰に仕事しながら、障子隔てて聞きます。」と、流石半兵衞を捨てても立たれず、障子の傍に立ちよれば、「ヤ親仁樣御病氣か。容體見たし。」と言はんとせしが、不待ひなる氣をかねて、詞を留め折を待ち、共に摺り寄り聞きゐたり。千代は數多の本取り出し、「伊勢物語塵劫記父樣の傍に有る

まろぶ。父も見る目に涙ぐみ、「大事ないつつと來い、つつと寄れ。」と膝近く、「又去られて戻つたな。子に運ぶ親の心、居ながら千里萬里も行く。ましてや一つ家の內、寢ても寐られず、最前より何事も皆聞きしぞ。そも我ながら、斯くも心の變る者か。五十と云ふ年の內は、行步心に任せずながら、心は若かりし昔に變らず、氣も強く義理にも引かれ、おのれ重ねて去られたらば、顏も見るまじ物言ふまじとの我もありしが、六十に足踏込んでは、年許りよるでなく、月もより日もよつて、病にはからまるゝ。身の衰ふる程彌增しに、案じらるゝは子の身の上。三度は愚か百度千度去られても、去らるるに定まりし、前世の約束と思ひ諦むれば、悔みもせぬ憎うもない。笑ふ人は笑ひもせよ、譏らば譏れ指もさせ、子の不便さにはかへぬぞ。」と老の繰言息弱り、「半兵衞めは遠州へうせて留守の內とな。其の留守合點。萬一うせたりとも物言ふな顏も見な。彼奴が身上百倍の所へ嫁入させる。苦に持つて煩ふな。なう姉、下々は野へいつらん。茶わかいて、千代めに中食させてたもれや。」と、餘念なき父の顏。姉は悅び「お千代、案じた父樣の御機嫌日本一。お側はなれず御介抱申しや。嬉しや胸が開けた。」と、障子を引き立て〳〵勝手へ出づる折こそあれ、門に、「物まう賴みませう。」「何誰。」と答へ入るを見れば、千代が夫の半兵衞。扨こそ緣を切りに來たと、思ふ心に口どまくれ、「去狀樣ようござつた。」と言へども何の氣も附かず、旅出立の儘笠取つて、沓ぬぎに草鞋の紐、心も解けて、「おかる樣、

藏樣嗜ましやんせ。聟は無し聲低に言うても濟む事。千代は去られは致しませぬ。親の病氣を見舞のもどり、奥には父樣すや〱と寐てござる。目を覺して下さんすな。ひく〱。同じくは去んで貰ひたい。」と、氣の毒がるほど猶聲高、「親仁寐てか面白い。なんぼ隱しても慥かな事聞いてゐます。お千代殿幾度でも去られさつしやれ。あれこれの聟達が踏み擴げた田地でも、百姓の女房には大事ない。おれが持つて一夜さも寂しいめはさせまい。去られて戻つた悲しいと氣をくさらし、必ず女房ぶり損うて貰ふまい。去る春貰ひかけた時、おれが方へござればよいに、惚れかゝつた一念、脇に足は留らぬ筈。入るまい〱。戻ると云ふも、此の鼻に緣が深いからぢや。親仁殿に言ひ込んで、今日からでも我ら請込む。姉御大事にかけて貰ひましよ。」と、喚けば二人は死に入る許り。冷す心の奥に手を打ち、「かるよ〱。」「あい〱〱。」「南無三親仁おきられた。」金藏が見舞うたと言うて下され。又明日御見舞ひ申さう。」と、歸ればかるは腹も立ち、「これ〱去なずと、千代をお貰ひなされぬか。」「いや〱言うても大事の緣組、日を見て申し出さう。」と、へらず口して立ち歸る。「父樣お目が覺めたか。」と姉が障子をあくる跡より、千代もおづ〱指し覗けば、夜著にもたれて起臥も、惱み苦しき老の坂、*誰が狩すとはなけれども、落ちくる肉に顏あれて、見かはす親の顏と顏、堪へかねて、「なう父樣、お藥あがつてま一度、達者になつて下さんせ。」と、思はず知らず聲立てて、さめ〲歎き伏し

持つた人々は、寄合ひ茶呑咄にも和女の噂、ま一度戻つては親兄弟、人中へ顔が出されぬとは知りぬいて、火に入り骨を碎かるゝとも歸るまい、オ、必ず去られて戻るなと、念に念をつがうた今度の嫁入、よう戻りやつた。父樣お聞きなされたら、お悦びなされうぞ。お顏見せる折が有らう。必ず聲高に物しやんな。して半兵衞が暇の狀取つて戻りやつたか。」「否跡の月半兵衞殿、父御の十七年の弔ひの爲、生まれ故鄕遠州の濱松へ。戻り次第道具に添へ、暇の狀は跡から。先づ去ねと譯も言はず。お中に四月唯もない身を、姑御が手を取つて駕籠に引摺りのせ、むごいつらい。」と許りにて、歎くを見ればいたく〳〵しく、「子のある物を夫の留守、暇くれる姑、心に一物有るわいの。伯母聟ながら和女の親分、高麗橋二丁目川崎屋源兵衞殿指置いて、直に爰へ突付ける仕方も憎い。よい〳〵此方の人が京からの歸りを待つて詰開かせ、大體で暇はとらぬ。とは言へ世上の女夫中、去るといふ事誰がこしらへ、憂い目をさせる可愛や。」と歎けば、「わつ。」と泣き出す聲、「高い〳〵。障子のあなた父樣の寐入りばな。泣くな〳〵。」と言ひつゝも、傳ふ淚の血筋とて、親は泣き寄る憐れさよ。「平右殿御氣色、今日は如何。」とつつと入る、同じ村の金藏。お千代はちやつと姉の陰、見付けられじと身を隱せば、「ア、隱れまい〳〵。只今堤の茶屋で、大坂へ戻り駕籠の咄で聞いた。お千代殿目出度い。去られて戻らしやつたげな。」と、口も氣儘のとはうなし。お輕ははつと餘所よりも、親の聞く耳憚りて、「金

うこそ。何故駕籠の衆留めやらぬ。他外でもある樣に隔心がましい。酒一つ進ぜて去なしやいの。それ呼び戻しや。」と、言へども妹は差し俯き、歎けば共に歎かれて、「オヽ、道理〳〵。とう知らせんと思ひしに、此の病では死なぬ、氣のとり難い舅姑持つたお千代、壻半兵衛も忙がしい時分、聞いたりとも自由に來る事はなるまい、案じさするも不便沙汰するなとの、病人の氣にも逆はれず、高麗橋の伯母樣常磐町へも知らせぬ。コレ氣遣ひしやんな京の御典藥にかへてから、めつきりと藥も廻り、今朝も粥を中がさに三よそひ。病は請取つて治すとのお醫者樣の請合は、本復も同じ事。和女の顏御覽なされたら、いよ〳〵父樣の病はすつぺり直らう。嬉しい〳〵。お目に懸りや。」と有りければ、「エヽ父樣はお煩ひか、知らなんだ〳〵。何時からの事でござんする。」「ヤ何ぢやお煩ひ知らぬか。そんなら和女何しに來た。何悲しうて泣くぞ。」「恥かしや又去られて。」と、顏押し隱し咽び入る。姉も驚く顏に血を上げ「なうお千代、五度三度の壻入嫁入も、世に有る習ひとは云ひながら、惡い事は手本にならぬ。恥かしい〳〵と口で言ふ許りが、恥を知つたと言はれうか。和女もかる〴〵三度の嫁入。尤も始めの男道修町伏見屋の太兵衛殿、心不情に身代を持ち崩し、たゞすみもない樣に成り果てあかぬ別れ。其の次は死に別れ、互に難はなけれども、人は和女の辛抱がない故に、去られた〳〵と非難付け、此の度の嫁入も追ひ出さるゝに間はあるまい、忘れても島田平右衛門が娘の風下に居るなと、娘

唄＊五月雨ほど戀ひ慕はれて、今は秋田の落し水。軒の玉水とく〳〵ござれ、繁くござれば名の立つに、玉水近き山城の、村は上田に家富みて、莊屋に竝ぶ茅屋根も、内溫かに下女、竝んで紡ぐ綿車、手廻りもよくいくはへか、庭に五つのたなつ物、積む蓬萊の島田氏、平右衛門と云ふ大百姓、妻は去年の秋霧と、きえても殘る娘二人。總領輕に入聟を、鳥飼より呼び迎へ、妹千代も大坂に歷とした聟とつて、身の入前は上田の田畠の世話をやきやめば、萬事かぎりの俄病。姉のお輕は側離れず。臺所には女子供、「なんと今朝から仕事のはかもいたではないか。些と休まう。お竹お鍋。」と呼びつれて、思ひ〳〵に立ち出づる。親のすや〳〵轉寐の、隙を窺ひ女房は、心せはしく奥より立ち出で、「是れ是れ臺所に人が一人もない。連合平六殿は淀川筋、新田開きの御訴訟に、大事の病人振り捨てての京上り。男共はみな野へ行く。エ、憎い女子共、我が見る前ではちよびかはして、一寸立てば早何所へ。大切な主の煩ひ、藥一つ溫めうともせぬ。下々には何が成る。圍爐裏の下焚き付けぬか、次郎よ次郎よ。」と呼び廻す門の口、駕籠舁き据ゑて、「申し〳〵、大坂の新靭八百屋伊右衛門様から。」と駕籠の戸明くれば打萎れ、目元しほよる縮緬の、二重廻りの抱へ帶、涙の色に染めかへて、なく〳〵出づれば駕籠の者、「慥に御屆け申した。」と、言ひ捨て歸るも足早なり。親の家さへ女氣の、敷居も高く越えかねて、佇む有樣姉は見つけ、「ヤァお千代おぢやつたか。定めて御病氣の見舞ならめ。ようこそよ

手付に一寸ほてくろしい事御免々々。半兵衛様も氣をお通し。」とべつたり抱きつく、紺のだいなし白無垢に、黒白粋の兄弟なり。岡軍右衛門法界悋氣くわつとせき、「コリヤ下郎め見苦しい置きをれ。」と肩を取つて引き退くれば、「コリヤ何なさるゝ。ム、聞えたお取持の御酒が過ぎたか、ム、合點々々。流石二腰のお心掛は格別、柔術の稽古遊ばすな。不調法ながらお相手。」と座興にもてなし、ずつと寄つて一當あて引擔いでうんと投げ、「ハ、〳〵〳〵〳〵、こりや麁相でごはりまするでごはりまする。」と空惘け。甚藏逸平堪られず、一度に寄つて胸座摑み、「ぞんざいなる小丁稚め、朋輩をなぜ投げた。返報に砂かじらせん。」と引き立つる。「扨々お心掛のよい、お前方もこりや柔術か。どりやお相手。」と立つ拍子、二人が息合はつた〳〵と蹴かへせば、板敷より眞逆樣。「ハ、〳〵〳〵〳〵こりや又麁相御免御免。」と言ふをしほ、三人ぐづ〳〵起き上り、「エ、どんな所へ給仕に來て、酒もつて尻踏まれた。」と、袴の腰の痛い顏、耐へてこそは歸りけれ。半兵衛ぞく〳〵小氣味よく、「扨も手際小一兵衛。我は他國、便りなき弟が事頼む〳〵。今日の料理の御褒美に、二人が事を旦那へ訴訟、權柄晴れて念比さする、其の中立は半兵衛が、唄八百萬代の神かけて、結ぶ契りぞ三重

中之巻

表面許りの戀慕でなく、未來までも小七郎不便と思召すならば、此の場にて差し違へ、人の構はぬ未來での念者若衆。サア弟をやる。何方なりとも兄弟の契約々々。」と三人を睨め付くる。思ひがけなき抜身の杯、死裝束に吃驚して、「へゝん／＼。」と咳に紛らし、身ぜゝりし、ぐつと言ひ手もなかりけり。御門脇の長屋より、紺のだいなし裾七のつまで引褰げ、一振ふつて振り出すは、戀にこいとや小一兵衛、三人の鼻の先尻つき出してかつ踞ひ、「兄御半兵衛樣のお手前、シャお恥かしいべいながら小七樣に頓と打込み、二合半の盛切おだい、咽に詰つてぎつち／＼てきないこんでごはりまする。今日君がお情をつん出して、未來では拙者めを、お念者になさるべいとは、有り難いやら悲しいやら、セ、／＼／＼／＼、唐がらしを五つ六つかぶつても、こんな熱い涙は出ませぬでごはりまするで、ごはりまする。」と、白刃を取つて立ちよれば、小七郎も引きよせて、すはやと見えし刀の中、半兵衛飛び入り、「コリヤ狂氣したか小一兵衛。」と二人を左右へ引き分くる。「コレサ上方のお旦那、糟味噌汁の御恩にかへたお若衆、爰で死なねば心中が見えまらせぬ。是非に死なせて下され。」と立ち上るを引き伏せ、「男氣見えた。小七郎に誠の惚れ人はそち一人。爭ふものが有つてこそ、大事の弟を殺さうずれ。爭ひ手のない若衆、山脇半兵衛が挨拶、向後兄分に賴んだぞ。」「ハ、はつ。」と悦び小一兵衛、「お侍方と同座のならぬ奴めが、武士に劣らぬ魂故、結構なお若衆の兄樣とは、忝い／＼冥加ない。」

人の手前も恥かしながら、斯うなる上は隱されず。數ならぬ私に御執心とは、振袖の身の思出、忝いは山々なれど、獨りならず彼方此方の文の數、無下に返すも情しらずと、請取つては置きながら、一通も封を切らぬが何れも樣への立分、どなたに隨ふ心もなし。兄半兵衞の存じられし事でなし。此の文封の儘に御返辨。思し切つて下され。」と、男色たてぬく詞の優しさ。「其のいき方に猶なづむ。」としみしたたるう取廻せば、半兵衞見かね、「ハテサテ聞分もないかた〴〵。形こそ町人、心は侍、拙者が目利で惚れ人の内へ遣りませう。コリヤ小七郎裝束せい。」と、心を目にて知らすれば、「あつ。」と心得點頭きて部屋に入れば、半兵衞多くの文の上書讀み、「ハ、ア皆おの〳〵の名書。此の一括りの上書に、小一兵衞とは誰が事、御存じないか。」と問ひければ、三人共口を揃へ、「其の小一めは此の屋敷の中間。へ、エ慮外な下種めが、遣りをつたわ。」とえせわらふ。「イヤさうでござらぬ。此の道に高下はない。其小一兵衞も呼び出し、竝べて置いて念者に賴む。」「イヤ〳〵下司め、身などと同座に置く奴でない。殊に留守やら面も見ず。無用々々。」と言ふ所へ、山脇小七郎白小袖に淺葱上下、覺悟極めて座につけば、半兵衞は取り敢へず、肴臺の三方に拔身二口弟の前に置き、「惚れ手は四人、ほれられては弟一人、何方へ進ぜても殘る三人の恨み。此の兄は他國住居行末も氣遣ひ、否と言はさぬ御所望、歷々のお侍、町人風情に手を下げてのお賴みのつぴきならず、弟に覺悟させての死裝束。

分眞直に、御前へ申すが又御馳走。やれ〳〵〳〵、山の芋で足突いた。」と、どつと笑へば、「早お立。」とお供廻が振り出す毛槍、臺笠立傘大鳥毛、乘物引馬嘶き立ち、御城内までお禮の御供、鄉左衞門もお輿にそひ、暮れぬ間の御歸城と、氣も夕陽の三重入日影、座敷の仕舞は侍方、庭の締りは中間小者、役目々々に立ち別るゝ。臺所には半兵衞一人、庖丁生箸薄刃俎板取片付け、煙管銜へて吹く息に、鐵枴が皺を延ばしけり。二番ばえ共はら〳〵と立ち寄り、「拙者等は鄉左衞門組下の弓役共。御身は山脇小七郎の舍兄とな。早速の無心。弟の事を賴むも馬鹿らしけれど、前髮姿に神ぞ爪先よりぎり〳〵まで打込み、每日々々しづ心なき玉章、奉書の代も五百目許り。身上を紙に打ちこんでも、情ない小七郎、兄き是非所望申した。是れ軍右衞門が*ねまり申して手をつかへる。こりやさ拜み申す吳れ申せ。」と、たぐり掛れば甚藏逸平、「コリヤ半兵衞、おゝと言つたらむつかしいぞ。外方にも惚れ人が有る。奉書代は愚かなこと、君に掛つて壹貫五百が*外郎積んだ此の甚藏、弓矢八幡身にくれろ。」「イヤサ此の逸平にくれろう。」と、耳際に嚙み付く如く、惡風吹きかけ眼もくらみ、前後忘ずる許りなり。煙管も放さず半兵衞大あぐら、「御城下のならひ衆道御法度。おゝと言へば弟がござらぬわいの。」「イヤサ當國は女のみだらは、下々まで御政道。衆道にはお構ひなし。三人の內どれへなりと魂すゑて返事せろ。」と、もやつく後に小七郎、是れまで請けし文一抱へ、半兵衞が前におき、「兄者

御膳目八分に持ち出づれば、思ひ〳〵に給仕の作法、お汁が替るかへ飯繼、初獻の肴は鮹の足、一片當の引重箱。二獻めも御機嫌よく、お杯がかはつて平の蓋、有りがたがための臺引物、定めの通り御酒三獻、吸物は殼蜆、思ひの外の無馳走に、上には御悦喜納めの杯、坂部も丁ど下されて、首尾よく御膳はとれにけり。鄕左衞門板元に立ちはだかり、半兵衞を睨め付け「今日の料理は芋一種、大い所をお目に懸くるが御馳走。どの樣に切ればとて、五尺餘りの大芋、一寸足らずに切り碎く言語道斷、手討にする奴なれども、他國者と言ひ御成の時節、屋敷に叶はぬ出てうせべい。」と、息詰つたる腹立は、詞少なに凄まじし。半兵衞膝も動かさず、「是れは旦那の御意とも覺えず。今日のお料理、隨分切形に氣を付け、心一ぱい出かせしと一分自慢。御褒美はなされいで、存じの外の御叱り。總じて貴人大人へは、何に限らず斯樣の珍らしき物、お目に懸けぬは料理の慣ひ。大名高家は大樣にて、一度お目に觸れられては、澤山に有るものと思召し、鄰國のお出合にも、身が領内には、珍らしき山の芋有りなどと、お國自慢のお咄の上、ふと餘國より御所望の時、跡へも先へもいかず、國中を尋ねても有り合はせず、自ら殿樣を譃つきにしてのける。そこを存じて常の如くの調味は、旦那へ御奉公と存ぜしに、御機嫌に違ひしは身の不仕合。如何やうとも御存分に遊ばせ。」とどこやら詞のひつぱなし、殘る所が武士氣質。鄕左衞門あんごり、「ム、こりや尤も、イヤ尤も、過り申した〳〵。其方が言

杯限り。今日のお申しも麁相程御意に入る。獻立も書くに及ばず。コリヤ飯は赤交りの古臭いをすつくりと炊かせ、かき立て汁に小菜の浮し、向漬はおろし大根鰯鱠、燒物*はむろの酢いり、夫れも二つ切、引いて古茄子の香の物。扨ひらにはオ、それよ、家來に持たせし山の芋、是れへ〳〵。」と呼び出せば、五尺許りの山の芋、仲間二人が指荷ひ、料理場の板敷へ、菰を放して舁きあぐれば、半兵衛横手を打つて、「扨も圖なし。御當地は芋所か一生の見始め。大坂で見世物に致したら、錢銀の摑み取り。第一お家の吉相。なぜと申すに、今日は殿のお成旦那の御出世、追付山*の芋から鰻にお成りなされう。」と、輕薄ぬらくら口に鰻の、油とろりと乘せ掛くれば、「されば〳〵今日の仕あはせ。手下の百姓殿のお成を聞き付け、身が歸るさの道料理にせよとてくれしは幸ひ、今日の御馳走これ一種。お身が自慢の庖丁隨分切形を出かしてくれ。賴む〳〵。」と詞の下、お成門の貫の木の音、「すは殿の御入。」と犇けば、鄕左衛門も次の間に、袴改めお迎へとて出でければ、山脇小七岡大橋、金田も續いて急ぎゆく。半兵衛料理に心はせく、うつたり舞うたり身は一つ、薄刃押取り五尺の大芋三寸許り切り調へ、つい皮むいてちよき〳〵〳〵、葛醬油の出し鹽梅、貴方は急ぐ、殿のお顔も拜みたし、座敷口より指覗けば、御城主も股引がけ上段に著き給ふ。一間隔てて近習の人々、鷹匠犬引勢子足輕、玄關の小庭に居餘り、臺所口を押し通り、長屋々々を休息場。奥には料理の勝手を急ぎ、主鄕左衛門、殿の

松茸つけ竹の子、なまにかはらぬ仕様が祕密。」と、口も料理の鹽梅加減。鄕左衞門打笑ひ「ム、山脇三左衞門が倅なれば、身が爲には家來筋。親の廟參奇特々々。幼少より他國に育ち、當御代の御風儀知らぬは道理。料理は勿論衣類諸道具、凡て無益の費えお嫌ひ。上方でも風聞はないか、去年十月高師山のお狩場、身が相役佐野文太左、始めての御供、縮緬の羽織著召されたを、殿がじろ〳〵と御覽なされ、縮緬は風にしぶき面倒な、重ねておけろ是れを吳れると御意なされ、お手づから下された召換の木綿羽織。さしもの文太左はつと赤面。其の後此の事を工夫すれば、お供に參る文太左、縮緬の羽織著めされう樣がおりない。兼て文太左にお示し合はせ、諸家中の見る前木綿羽織を下されしは、美麗御停止とはなく、自ら奢りを止むる一家中への御意見、夫れを察せぬ御家中の二番ばえ達のざまを見よ。木挽町堺町の役者からつりをとる衣紋付、己が身の分限も知らず、一概に殿がお吝いお吝いと勿體ない陰言。綾錦を召されてもお大名、綿服を召されてもお大名。齋藤別當實盛が最期に、錦の直垂は著たれども、源氏を捨てて平家へ返忠の武士、心は汚れし襤褸同然。又佐々木源藏は二君にも仕へず、襤褸の肩を裾に結び、賴朝の御代を待ちしは心の錦。今の武士の美麗を好むは實盛、佐佐木が遺風を芳しと思召す、此の殿の御行跡は、下を寛げ世を豐かに、賣買を安くせん爲の御儉約。武士は元より町人の、其方等まで此の恩を忘るゝな。朝夕の御膳部も一汁三菜、酒も數を定められ三

此の儀はお侍中の差圖ならず。二三日以前より、お長屋に逗留致し罷りある、大坂の住人、靫油掛町八百屋半兵衛と申して、元は御當地遠州生まれ、私とは腹がはりの兄、樣子あつて五歲の時、大坂へ立ちこえ、町人に奉公し、商人の養子と成り、今の親は八百屋伊右衛門。實父山脇三左衛門は私が生まれし年相果て、當年十七年親の墓への年忌參り、私事も懷かしく、召使はるゝ御主人へ御禮も申したしと、逗留致せし兄半兵衛、商賣は八百屋殊更料理きき、幸ひと今日の御獻立を、致させし不調法は私。お目出度き折から御機嫌を直され、兄へもお逢ひ下されかし。」と、恐れ入つたるあやまりに、主人の顏も打ちとくれば、「是れ半兵衛殿能き折のお目見え。お獻立も仕直す爲、早う早う。」と呼び立つる、聲を力に兄半兵衛、魂は武士なれど、三十餘年町人に、業も姿も染め付きし、料理袴を假初に、御前と言へば氣もおくれ、臺所の板敷けつまづくやら滑るやら、はふはふ這ひ出で手を支へ、「お國の御家風も存ぜず、お獻立を致せしは不調法。先だつてお使に、一汁三菜との御意なれども、大坂藏屋敷留守居方の振舞でも、隨分輕いが二汁五菜、結構にはだんだん。朝鮮人の饗應御堂へも雇はれ、七五三、五々三、*山陰中納言の家の切りかた、料理一通りは承り傳へし故、申してもお大名の膳部、よもや一汁三菜とはお使の聞き誤りと、言はれぬ念を入れ過ぎしは猶不調法。お好みの一汁三菜、我らが手際で、きりきりしやんと切り立て、焚き立て鹽梅よしの御機嫌よき、御意を

さぞ取込。お料理組もう出來たか早し〳〵。我々も幸ひ非番、用あらば遠慮無用。」と挨拶口々、座敷口より小姓山脇小七郎、生花屑を花盆に、花の露うく前髪盛り、する〳〵と立ち出で、「是れは〳〵日頃の御懇意、お揃ひなされての御出で、主人鄕左衞門嘸滿足。唯今の殿樣先代と違ひ、何かに付けて輕いお身持、＊壁に馬乘りかけし今日のお成。主人は御供我々が當惑、掃除等もそこ〳〵。書院の筆架飾り石、活花も手筒ながら、間に合はするも奉公。御内見の上御直し下され。」と、詞も風も出過ぎざる、若衆とぬか味噌の味は屋敷に極まりし。金田甚藏岡大橋「何か〳〵君のお手際僻事が有らうか。さりながら人に心を盡させ、無下ない心一つの疵。」と目面も明かぬ取込に、額で睨みつ袖引きつ。手の中つまむも一昔、古い仕掛が田舍なり。坂部鄕左衞門衣服の綺羅も世につれて、戒むるとはなけれども、上に從ふ木綿羽織に紺股引、鷹野出立の凜々しげに、すた〳〵と立ち歸り「家來共掃除は出來たか。ヤア何れもお見舞過分。いやさ〳〵年はよるまいもの、岩松村岩水寺の門前よりお暇請ひ、只一飛びと思へども、氣情も足も心許り。さりながら殿には今＊一こぶし遊ばしお入り有るぞ、急く事はあらない。先づお獻立を一見。」と、長々と書き付けたる、半ば讀みさし大きに悔げ、「是りや何ぢや、殿の御膳は一汁三菜と先だつて言ひ越す所、三汁九菜の魚鳥づくし、身が身上を板元で切り叩くか。此の獻立は誰が指圖。」と以ての外の不機嫌に、頭も光りちらかせり。小七郎しとやかに、「憚りながら

心中宵庚申

上之卷

花のお江戸へ六十里、梅の難波へ六十里、百二十里の間の宿、都離れて遠江、濱松の一城主淺山殿の御在國、町家々々の賑ひ商ひに弛みなく、武士は弓馬に怠らず、日まぜ〳〵のお鷹狩、上一人の勵みより、犬も油斷はならざりし。お家相傳の弓頭、坂部鄕左衛門六十の皺の夜晝なく、お側去らずの野出頭、今日も鷹野のお供にて、留守の邸は大手の見付、お鷹歸りの御入とて、晝當場より先案內、給人若黨お出入の町人まで、降つて涌いたる忙がしさ。御成座敷の換疊、牀に掛物臺子の埃、掃いつ拭うつ、お庭の掃除どつさ草引き薄茶挽く、茶道は引木にもまるゝ。げに誠忘れたりとよ門の盛砂、小者は帚にもまるゝ。臺所の板元には青物の淵魚鳥の山、獻立は三汁九菜、おちた肴を吟味の役人、こりや目出鯛を三枚におろし、山葵は八百屋が請取り、南京の皿蒔繪の家具、善盡したる饗應なり。組下の二番ばえ、金田甚藏岡軍右衛門大橋逸平、打揃うたる血氣ざかり、立ちかけのんこの頭がち、裾はお留守の勝手見廻り「何れも御苦勞々々々。今日お鷹野より直お腰掛けらるゝとな。急なお成で

失ひ、母が詞に背く悲しみ、勿體なくも信玄公の御姿に出立ち手向はず、一太刀切られしは主君の御身も恙なく、謙信の御憤りを宥めん爲、此の上の御愍み、山本道鬼が首を召され、兩家戰ひを止め給はゞ、黄泉の母が願ひを達する悦び、生前死後の我が面目、偏に願ひ奉る。」と、歎き入つてぞ申しける。謙信はつと感じ入り、「實に頼もしし優しさよ。天晴弓矢の手本ぞや。一命捨てし道鬼が願ひ、反古にせんは弓箭の恐れ。信玄は兎も角も、謙信が戰ひは是れまで〳〵、姫が不興も免すべし。」と有りければ、「信玄とても其の通り、意趣も殘らず遺恨もなし。武勇も牛角軍慮も牛角、信濃一國五分々々の、分け取り名を取り譽れ取り、弓矢も既に納まりぬ。道鬼が悦び大音聲、武田長尾和睦相濟み、若君姫君誘ひ申せ。」と呼ばはれば、直江山城大和之介、高坂彈正原五郎、姫君若君御供申し、みな、「萬歳。」と悦び聲、暫しは鳴も鎭まらず。信玄の軍配團扇手に取り敢へず、「今日よりは他ならず、うちはうちは。」と戲れて姫君に下さるれば、此の悦びも此の太刀の、因緣厚き小豆長光、勝頼公へ聟引出甲斐と越後に信濃添へ、三國一ぢや親と子に、なりも鎭まる時津風、土も動かぬ鑛の、替り治まる大日本、地から生物木になり物、百億萬歳末掛けて、何から何まで皆繁昌、萬々歳とぞ祝ひける。

信州川中島合戰　終

是れに在り。見參やつ。」と呼ばはる勢ひ、雲に羽を伸す雲雀毛の駿足、一文字に乘りかけ、眞向二つに切り付くる打刀、信玄すかさず軍配團扇にはつしと受け、柴居を踏へ牀几を去らず、退かば付け入る請身の勝、切り込む刀の虛々實々。謙信呉子が祕術を盡せば、信玄孫子が心を練り、兩翼牛角の大將大將、自身の働き生死の境、目覺しくも又危し。拂ひ解す刀の餘り、信玄の肩先、三寸餘り切り下げられ、流るゝ血は瀧なせども、御佩刀に手も掛けず、切らば切られん面魂。謙信馬を乘り放し、「臆したるか信玄。とても我に叶ふまじき所存ならば、甲を脫いで降參せよ〳〵。」と呼ばはる聲に谷陰より、「武田信玄是れに在り。」と走り來る扮裝、形恰好些とも變らぬ信玄二人、見るより恟と謙信も、惘れて詞も無かりしが、「よし〳〵二人の中一人は似者、何方か誠の信玄、名乘つて尋常の勝負せよ。」と有りければ、以前の信玄牀几を去つて、老頭の甲かなぐれば、山本勘介入道道鬼、二人の中に涙を浮べ、「某御奉公に罷り出づる折柄、老母申し聞かせしは、今甲斐越後戰ひの眞最中、汝を武田より召さるゝこそ幸ひ、長尾の家臣直江山城は妹壻、緣も有り心を合はせ、若君姬君を御夫婦になし奉れ。互に名將々々の、義を爭ひ給ふ戰ひなれば、兩家の武勇に疵を付けぬが軍法の第一。まさかの時は一命を拋ち御中直し奉れ。此の詞忘るゝなと、呉々申し聞かせしも、今は老母が遺言となる。よつて數ヶ度の戰ひ、何時とても勝負は五つ〳〵に軍術を盡すと雖も、御中直し御緣を結ぶべき手段を

に永祿四年九月十日五ヶ度の戰ひ、劒の音天に轟き、人馬の嘶き大地に穿ち、勝負を一擧に定めんと川中島の南北を限り、西條山は長尾の陣所、雨の宮は武田の備へ。信玄牀几に著き給へば、旗本の左備へ高坂彈正昌信、右備へ原五郎昌俊、衆を計つて控へたり。物見の軍將染田三郎、鎧に射付の矢を負ひ掛け、息を切つて馳せ付け「謙信が旗本板垣兵衞に切り崩され繰引に引き退く。後陣の大勢を以て取り圍み給はば討ち取るは案の中。急ぎ御勢を指向けられ、然るべからん。」と告げ知らせ、又陣中へ立ち歸る。信玄些とも聞き入れ給はず「否々武勇の謙信、脆く引くべき樣なし。車懸りとて先手より繰引に引き、旗本と旗本行き合ふ樣に備へしは、謙信が家の軍法。重ねての物見を待ち、動くな動くな。」と宣ふ所へ、遠見の士卒息つき敢へず「敵筑摩川を夜の中に渡り、貝津の城の通路を取り切り赤坂山に兵を伏せ、思ひも依らぬ横槍に、板垣三郎穴山主膳討死なり。」と申し上ぐる。「さればこそ思ふに違はず。貝津の味方は敵の後を切り取らざるか、旗の手見ずや。」と宣ふ所へ貝津に置かれし伏兵立ち歸り、原隼人介正國謙信の後を圍み、志田源四郎大河駿河を討ち取り、板垣兵衞と心を合はせ、前後より挾んで切り立て〳〵、謙信は犀川を渡つて行方なく、戰は味方の御勝なり。」と申し上ぐれば、信玄團扇打振り〳〵「此の勢ひを失ふべからず。時刻移すな政信昌俊、急げ〳〵。」と宣へば、高坂彈正原五郎、諸卒を引具し馬引き寄せ、白泡はませ驅け出す。思ひも寄らぬ岨陰より「長尾謙信

影を知邊にて、「逃さじ遣らじ。」を力聲、跡を慕うて三重攀ぢ登る。下には姫君身を冷し、上にはむんずと引組んで、上になり下になり、起きつ轉びつ捻ぢ合ひしが、はずみを打つて高殿より、遙かの麓へころ／＼／＼、轉び離れて村上義清、橋を渡つて逃げ延びんと、心は逸れど身は勞るゝ、歩む小橋の目にちろ／＼、半途渡るを姫君勝頼、橋の木口を手ん手に摑み、えいや／＼と刎ね返せば、川へだんぶと刎ね込んだり。つゞいて勝頼かつぱと飛び込み、流れに從ひ水に連れ、跡を求めて三重追驅くる。義清も命から／＼難なく向うに游ぎ著き、又逃げ出づるを逃しも立てず、取つて引敷き首ふつつと搔き落し、「村上左衛門尉義清を、武田勝頼討ち取つたり。」呼ばはり給へば、父信玄思はずすつくと立ち上り、「出來した／＼。それこそ我が子不興免す。」と宣へば、各「はつ。」と土に平伏し、有難涙悦び涙、目に見ぬ鬼神の仇祟りも、心に呑みこむ天目山、甲斐の白根の動きなし。たけく勇める武士の、心も和ぎ楓葉の、錦に包む親子の中男女の語らひも、皆此の道より情知る、千首の歌の御威徳、かの貫之が言の葉を、仰ぎて今も感じける。

第五

百度戰つて百度勝つは、戰の戰ならざる物と言へり。武田信玄長尾謙信、四度の戰ひ互角にて、既

外し、「オン〳〵。」と呻り聲、微塵に成さんと弓杖、三杖許りぞ投げ付くる。勝頼宙にて離りと返し、また飛び掛り確と抱く。山も響く大音聲、「麿は天地開闢、猿田彦の昔より、此の天目山を棲家とす。腕立して後日に祟り受くるな。立ち去れやつ。」と呼ばはつたり。勝頼かつら〳〵と笑ひ、「猿田でも猫田でも組留めらるゝは紛れ者。サア神通で消ゆるか、我が人力で打ち殺すか、手際を見ん。」と締め付けられ、あがく變化を引擔ぎ、大地にうんとのめりを打たせ、投げ付けらるゝ拍子に連れ、頭の輪燈木の葉の衣、亂れて落つれば忽ちに、村上左衛門義清が、實の姿大音上げ、「天目山に變化有りとの、世上の風聞幸ひに、山の神の姿に似せ、信玄を討ち取らんと巧みしに、本意を達せぬ無念々々。父めが冥途の先驅せよ。」と面も振らず切つて掛る。「心得たり。」と拔き合はせ、一足去らぬ劒の刃音、姫君聞き付け、「アレ麓に勝頼樣、義清と危や〳〵。」と呼ばはる聲、高坂彈正原五郎、躍り出づれば信玄公、「構ふな〳〵。往かば一所に勘當ぞ。」と言はれてはつと齒切し、麓を睨んで控へたり。勝頼の打つ太刀、義清が右手の肩先、胸板掛けて切り付くれば、うんとのつけに反りながら、勝頼の高股薙ぐり切り、兩方手は負ふ總身は血汐、紅深き秋の葉の、楓を散らして三重切り結ぶ。有るにも有られず衛門の姫、麓を下りに馳け下るれば、加勢と見るより村上左衛門、心どまぐれ方角忘れ、高殿指して逃げ上れば、續いて上る山の原、小石に滑り踏みくじらし、草をたぐり木の根に取り付き、澄む月

し。村上左衛門義清が甲斐一國の鹽止して、我が軍中鹽に盡き力を失ふ所、敵ながらも謙信の懇情、勘介入道道鬼が孝心を美賞し、數百駄の鹽を送られし心入れ、古今獨歩の弓馬の達人、信玄何を以て恩報すべき所を知らず。せめておことの身の上、我が身に代へて申し開くべし。先づ此の處に足を留められよ。聊か麁畧を存ぜず。」と、うらなき詞に姫君も、扨は夫の勘當も、御免ある瑞相と、晦日の夜に滿月見付けし如くにて、「只能い樣に。」と許りなり。二人秋の慣ひの暮早く、山と山との中空に、入る日は暗く出る月の、影をも待たず枝々に、光かゝぐる燈籠は、夜見よとてや照らすらん。「あれなう見給へ山々の、梢々を吹き閉ぢて、ちり／＼ばつと、誘ふ嵐に亂れ亂るゝ楓葉は、錦織るてふ山姫の、絲のほつしと疑はれ、錦繡に花を敷く、老も若きも一時の、愁へを拂ふ夕景色、見て慰まん此方へ。」と、休み所に入り給ふ。謡時に更け行く夜嵐の、梢を鳴らす谷陰より、頭に輝く輪燈を戴き、身には千草の葉衣を重ね、歩み來る足は大地を離れ、古木の枝の四方を拂ひ、化したる姿の恐ろしや。勝頼屹と見御身を堅め、物陰傳ひに忍び寄る。化生すはと尻目に睨み、付けつ戻しつ踏み轟かす、眞砂交りの小笹原、さら／＼どう／＼ぐわら／＼／＼、蹴立て踏み割り高殿目がけ驅け登る。「登しは立てじ。」と聲を掛けて、むんずと組むを事ともせず、一振振つて勝頼の、頭を摑んで上らんとす。「ヤアやはか汝に負くべきか。」と、摑まれながら化生の眞中、突けども／＼身を開き、横に薙ぐれば五體を

給ふ不審さよ。」と咎むれば、「ム、優しき女の理窟かな。流れに口を漱ぐ許り、出家とは言ふ可らず。我が子の不興免せとの、理非辨へぬ人の詞、聞いたる耳の穢れを、此の瀧に洗ひしが不思議なるか。」「實に御耳の穢れを洗ひし水なれば、牛にかはんも穢れぞ。」と、折角寄る瀬の綱手繩、しやんと手繰りて立ち歸る。「女性暫し。」と呼び止め、「然らば我も不審あり。穢れを洗ひし水なれば、牛にかはじと引き歸るは、昔の巣父許由にもあらず、然もあれ如何なる人やらん、心ゆかし。」と問ひ給へは、「申し上ぐるも恥かしながら、我は長尾謙信が娘衛門の姫。勝頼樣と自ら、親の許さぬ戀故に、父と父とは合戰餘所に聞きなし添はれずと、二年この方引別れ、今日まで面を合はせず。痛はしや勝頼樣、父上御一人此の深山に引籠り在す、もし雜兵抔の忍び入り、御過ちも氣遣はしく、すはと言はば驅け隔て切り拂はんと、同じく山陰に身を忍べども、川より南は父の領分、勘當の身にて父の御領の土を踏むも恐れなりと、川を隔てて御物語、聞くも見るも痛はしや。昔の袖の花紅葉今は浮世の塵芥、衰へも自ら故、今生のお情親子の慈悲、御勘當免されば、笛に寄る鹿火に入る蟲、夫故死ぬる自らが、命一つは惜しからず。」と、溢るゝ涙落ち瀧津、水の白玉數添へり。「何謙信の娘とや。身を捨てて勝頼が不興の訴訟は、優しや萎らしや。さりながら彼に向ひて勘當と言ふ詞を出さねば、今免すべき詞もなく、又何を感じて許すべき程の規模もなし。勝頼が事は兎も角も、御身の事は信玄何とも見捨て難

誓つて契りを込め、二つ夫婦の星となり、今七夕と世の中に、文月七日の私語、變らぬ中をたのみにて、末の逢瀨を待ち給へ。」シテ「實に折からに君が牽く、牛の綱手のとり姿は、彼の牽牛の姿よなう。和女は織女此の橋は、二人が中の烏鵲の橋。」說敎とわたる風に山々の、秋を吹き越す紅葉の橋、流れは如何に。シテ「天の川、年に一度の語合は、絕えせぬ中と聞く物を、我はそれには引替へて、去年も今年も打解けて、寢る夜なければ物言はず、又來る年も如何ならん。賴むは父の御不興の、免しは何時を限りぞ。」と、二人はかつぱと平伏して、聲も惜しまず泣き居たる。ツレ折節瀧の水上に、集まる鳥の羽打つ音、振り返り見給へば、瀧本に座を占めて、耳洗ふ人の後影、疑ひもなき父信玄。飛び立つ心の戀しさも、後に引かるゝ恐ろしさ。牛に負はせし大小脇挾み、牛を橋に追ひ遣り〳〵、せめて和女は此の牛牽いて、草刈る體にて父に近づき、御不興御免の御願ひ、叶はぬまでも念晴らし、我と一所に有るぞとは、見付けられてもあし。」垣の、隔てぬ中も心から、暫しは忍ぶ賤が家の、内に身隱れ入り給ふ。シテ信玄四方を屹と見晴らし「あら面白の瀧津瀨や。夏三伏の暑を流し、來る人稀に奥山の、岩かき紅葉染め亂れ、錦裁ち切る心地して、譽れなき身の譽れには、天晴住むべき山路よな。」去るにても物に遮る眼の前、姫は夫の緣に牽く、牛の手綱を搔繰りて傍近く、「喃物申さん。古木を枕苔衣流れに口を嗽ぐとは、火宅を出でし沙門の境界。正しく弓矢取るお身の、何故耳を洗はせ

き手拭の、山下水を汲んで洗をよの。住吉の〳〵久しき松を洗ひしは、岸に寄せ來る白波の、颯とかけて洗ふらん。唄衣が白めばお色が黑むとよの〳〵。手まづ遮る紅葉の、流れに衣を濯がんと〳〵、合ノ手 花色衣の袂には、梅の香ひや流るらん。水に亂れて戀草の、乾せども乾く隙もなき、我には辛き月日やと、憂世を喞ち休らへば、シテ同じ思ひをうち乘せて、草刈籠の二つ文字、牛の角もじ直なもじ、綱手刈手の千草原、招く芒を呼ぶかとて、爰に焦れて來る賤の、人目を忍ぶ頰被り、互に顏を見つ見られ、シテ「ヤ、勝頼樣、何時の間に窶れし姿お最愛や。」ツレ「懷かしや衞門の姬、昔の面影なきぞとよ。苦勞召さるゝ悲しや。」と、倶に萎るゝ淚の袖、絞らば淵となりぬべし。シテ「我も高坂昌俊が計らひにて、此の頃爰に隱れ住み、稀の逢瀨に此の日數、積りし憂さの山々を、せめて語らん其の橋を、渡りて爰へ。」と招けども、ツレ「ア、愚かなり此の橋の、其方は父の御領ぞや。免されもなく押し付けて、土を踏まんも天地の恐れ忌はしく。」シテ「なう此の國の土も木も、主は君より誰有らん。我故辛き忍路の、御痛はしや情なや。自ら夫れへ。」とうち渡す橋に臨めば、ツレ「アヽ、暫く、橋な渡りそ渡るとも、逢ふこと難き其の神の、誓に背くも天地の恐れ。」シテ「扨は渡るも及びなき、目に見ぬ天の架梯は、音に成りとも聞き渡る。義理に憂き身をからまされ、心を繫ぐ葛城や、粂の岩橋中々に、夜の渡りも叶はねば、顏見る許りの夫婦かや。」ツレ「我とても其の心。傳へ聞く、遊子伯陽は、月に

掛替もなき若君を二年の御不興。傷はしや勝頼公、長尾武田は日月の如き中なりしに、數ヶ度の鬪諍我が不行跡より事起り、兩國の騷動民の歎き、先非を悔いての御愁歎と、密かに傳へ承る。一旦の誤りは御若氣、中さば有るまじき道にもあらず。家中の歎き勝頼公の御不興御免あり、姬君を呼び取り給へば兩國の悅び、咎は臣等に免じ給ひ、御不興御免し下さるべし。」と額を土に摺り付け〱申せども、聞かぬ顏して返答なく、紅葉の梢打詠め、空嘯いて在す。原五郎昌俊進み出で、「御不興の本は密通の憎しみ。餘所までもなく御先祖新羅三郎義光殿、權の平太景成が娘に密通の不行跡、世擧つて存じの所。密通を強く禁め給はば、御先祖義光殿の御子孫は君を始め、人中へ面が出されうか。免すとの御諚承らぬ其の內は、一寸も爰を動かじ。」と廣言過言の大音上ぐ。信玄くわつと御色變り、「オ、善き事ならば新羅三郎を手本にすべし。如何に先祖なればとて、惡事を定規に勝頼が不興免せとは不道なり。昌俊立ち去れやつ。」と御機嫌損じ、高殿を下り給へば、二人も「はつ。」と指し俯き、詞なく〱立ち歸る。「扨は彼等は、不孝の子は惠みある父も養はずと言ふ本文を知らざりし。山神を祭る清めの高殿、諸々の不淨聞かずと言ふ、大事の耳を穢せしよな。いで耳洗ひ清めん。」と瀧の流れに（三重 唄）水を汲みやらば、ヨウ、ヤ〱小川で汲みやれ、小川小石川轉び合うて、轉び〱轉び掛るトヨエ。」風の柵吹きよせて、魚も錦の下潛る、向うの川岸を傳ひ來る、賤の女子の玉襷、肩に盥を置

唄 秋の山、紅葉の牀に鹿の寐たよ萎らしや。合ノ手 經緯に露霜織りし、錦は山の紅葉、紅葉の流る川を、唄 渡らば錦中絶えんエイソリヤ、小鹿の渡らば中絶えん。江戸 紅錦繡の秋の色、白根が麓の竝木の紅葉、落ち來る鹿を射止めんと、心も猛き武士の、矢叫の聲響き入る。天目山の森の陰、高坂彈正原五郎左右に別れ、白木の弓に尖矢番ひ狩り廻す。信玄高殿の簾押し遣り屹と見給ひ、「ヤアけしからず。餘人の殺生をも禁むべき身を持つて放逸千萬。我が軍法工夫の此の高殿を建てん爲、當山を切り開かせしに、山神の祟り天狗の障礙、狐狸の禍ひ、天目山の變化化物と、一國他國恐れし故、我山神を祈り、當山殺生禁制の誓を立て、一千首の和歌を詠ぜしかば、誠に和歌は天地を動かし、鬼神も感ずる威德にて、山神の怒りも解け變化の祟りも鎭まつて、高殿を始め休所まで悉く成就し、春の花の旦秋の紅葉に心を澄まし、軍法の工夫に紛るゝ方なく思ひを凝らす所、何ぞや弓矢を帶し鹿を射んとは、我が詞を輕しむるか、山神の祟り恐れずか。然なくとも子を思ひ、妻戀ひかねて紅葉踏み分け鳴く鹿の、心はあはれと思はずや、武士も物の情知る、後日を屹と愼めよ」と、弓矢に猛き信玄公、心解けたる顏も、卽ち和歌の德ならん。高坂彈正政信御前近く、「さん候、我々御禁制を背き、鹿子の一つも射止むべき心底に候はず。態と君の御咎めにあづかり、夫れを序に勝賴公の、御不興中し開かん爲の手段。子を思ふ鹿の哀れをも知召され、男女の中を和ぐる和歌に御身を染めながら、

御暇とは恐れあり。嫁よ娘よ聟よ子よ、然らば〳〵南無阿彌陀。」と兩の手に二腰の刀を拔けば死出の旅、橇に乘らねど道急ぐ、越路の雪と消えにけり。人々「はつ。」と許りにて、泣く〳〵死骸に打掛くる。唐衣お勝はかき暮れて、絶え入り消え入り亂るれど、亂れぬ武士の殯、歎きは盡きず詞は盡きて、互に目禮葬禮は、直江夫婦が涙の種、勘介夫婦が別れて歸る、姿に謙信哀れを增し、「ヤレ待て暫し母が追善、信玄への土產せん。聞けば信濃の村上が、甲斐一國を鹽止して、人民士卒を惱まし、鹽攻にすると聞く。さもしし卑怯なり。謙信が軍は鋒先、鹽攻なんどの勝負はせず。我が越後には海有り、甲斐の一國の鹽に事缺かせず、馬車にて續くべし。軍兵の精力堅くして、我と合戰せられよと信玄に傳へよ。」「ハツア重ね〳〵情。」ある詞の機に身の歎き、涙滿ち來る許りにて、御暇申す武士の、情は情仇は仇、胸を二つに押し隔て、横ほりふせる甲斐がねの、弱味を見せじと包めども、枯れて甲斐なき柞原、影をはなれて別れ路は、跡に引かるゝ足弱車、片輪車や廻らぬ舌の、ド、ド、吃が盡きせぬ名殘、筆に書かれず謠はれず、泣きつ叫んづ足どもる身もどもる。歩み兼ぬれば力を付け、引立て引かれてコ、コ、コ、ツ心を殘して、カ、カ、カ、ン歸りけり。

第四

に捨てしも、武家の名を惜しむ不便さよ。雎と言ひて魚を取る鳥あり、野鷹これに番ひ、雎腹の鷹の子は、成長の後必ず母の業を繼ぎ、淵に躍る鯉を取る。侍も其の如く種腹揃ふは少なきに、天晴勘介が母なりし。惜しや非業の死をさせ、方々が哀れを見る事も輝虎故。」と許りにて、さしも我強き大將の、そゞろに袖をぞ絞らるゝ。「ヤア何をがな追善。」と、指添拔いて左の手に髻掴み、元結際よりふつつと切り、「家の弓矢は捨てずとも姿は發心、名をも今日より改め輝虎入道謙信。切つたる髪は佛にも捧げず。出家の手にも渡すまじ勘介に取らする。謙信が首取つたる心是れぞ母の香奠、臨終の心悦ばせよ。武士の武邊は珍らしからず。汝が孝行を感じ入つての餘りぞや。」と、涙にくれて賜びければ、「ハア、ハア有り難き御情。」と廣縁に平伏して、涙肌骨を絞りしが、「御心に隨はぬ恨みを捨てて重重の御懇情、申し上げん詞もなし。形と心は信玄に仕へ、御陣に向ひ鏃矢は射掛け申すとも、切ての御恩報じ、頭許りは御法體の御供。」と、同じく指添するりと拔き、髻掴んでずつかと切り、「サア今日より山本勘介入道道鬼、道は道と言ふ字にて、母を導く菩提の道、鬼は鬼と讀む字にて、鬼神も挫ぐ道鬼入道、親の冥土の餞別。」と、二つの髻を手に持たせ、血に塗れし膝の上額を付けて忍び泣き、母は苦しき眼を開き、「生まれ落ちて此の年まで、六ヶ國を歴巡り、遂に住所定まらず丁度七十二年目に、西方安樂國と永き住所定め、此の二總の切髪は、瓔珞華鬘幡天蓋、住家を飾る樂しやな。大將に

相手にして命を果す祖母ではない。疾くに自らは輝虎公の御手討に、逢ふ身の存へしは命の外。一國の大將の手をつき敬ひ御配膳、足に掛けて蹴散らせし、其の時の怒りの顏、思へば能くも堪忍はし給ひし。食は人の天なれば、下人下女の据うるにも、膳に向へば禮儀有り。法に背く慮外婆、車裂き牛裂きにもと嘸無念御腹立、いつの世に忘れ給ふべき。お心に從はず振り切り歸る勘介、追手を掛けて搦め捕られ、母めが憎しみ此の時と、逆磔にも行はれ、嬲り殺しと聞くならば、此の度母が死なぬ悔みは如何許り。坊主憎さに袈裟まで憎き世の喩へ、唐衣まで如何なる憂目に逢ふべきと、思へば胸を裂く如く、思ひ歎いて此の死樣、何に似たぞ能く見よや。磔の罪科人娵娘の鏽刀は、輝虎公のお仕置の大身の槍、貫かれ死するからは憎しみは是れまで。勘介を恙なく本國へ歸し給はれと、執成賴む直江殿。扨も〳〵如何に不定世界とて、斯くも定めなきものよ。母が生まれは尾張國、駿河國にて人となり、三河國へ嫁入して、信濃國に浪人住居、今甲斐國に主取し、こゝぞ我が露の身の置所、往生所と定めしに、思ひもよらぬ越後國の土となる。斯く定めなき人界は、彌陀の淨土も覺束なや。」と、淸き眼にはら〳〵淚、堪へ兼ねて娵娘「わつ。」と歎き伏しければ、勘介心も眼も眩み、獅子王のごとき輝虎も、包むに餘る落淚に、目をしばたゝいて在せしが、堪り兼ねて大聲上げ、「ア、敢なや是非もなや、我も人も武夫の身はうち見る許り美々しく、はかなき物の上はなし。あの婆が一命を義理

の心盡しは夫に手柄させたい許り。兄様こそ武士の我強くとも側から和ぎ入れ、縁者一門睦まじうするが妻たる者の道、折角呼び寄せた母様まで奪うて歸らうとや。兄様許りか唐衣が爲にも母。此の首は遣つても母様は遣るまいが、見事連れて歸るか。」「エ、キウ聞えぬカツ唐衣、ド、、、、吃の女アナ〳〵侮つて能う僞文シイしたな、ナ、涙が翻れてクウ〳〵口惜しい悲しい。預きやつて來たハ、ツ母ちやま、ノ、ンのめのめとスツ〳〵スツ〳〵、捨てては歸らぬ。ナ、名殘惜しくば首に成つてお供せい。」と礑と切るを請け流し、打てば外し開けば切る。互に命を塵とも灰とも、吃らぬ太刀筋曇らぬ刃、鐔音響く物見の亭、障子をさつと明けて出でたる老母の顏面。「母様止めて下さるな。」と聲を掛くれば、「オ、留めぬ出來す〳〵。切結んだ其の太刀兩方引くな動くな。」と言ふより早く眞倒樣、我が身を二つの刃の上、兩の肋を貫かれ、脊骨へ二本の切先は、朱に染みてぞ顯はるゝ。「ハア、是れは。」と許り嫁娘途方にくれて泣き叫び、家中の騷動勘介直江も取つて返し、輝虎も聞き掛け裸背馬にて驅け著け給ひ、「仔細有る敵國の大事の客人、殊に老女、我が國にての落命他國の聞え、難儀至極。」と大きに騷ぎ見えたまへば、勘介涙にくれながら、「武田信玄の家臣山本勘介と言ふ子を持ち、何か述懷御不足。但し人に御恨みばし候か。エ、言甲斐なき御最期。」と手負に力を付けければ、顏振り上げて、「我が子とも覺えぬ事を言ふよな。人に恨み有るなれば、其の人と刺し違へ死ぬるまで。述懷を

跛につぎして兩足揃への高低なし、一ッの目玉に八方見廻し立つたる所に、後を取切る片鎌槍、向うよりは十文字、前後一度に突き出せば、まつかせと開く四寸の身、槍と槍とがかつしと當つて結んだり。躊躇ふ間も無く手繰り引き、又突掛くる上下の穗先、下段に來るを木履の齒にてはつしと踏み止め、上段に突く汐首元、めてを延べて聢と取れば、取られじ物と堪ふるを兩手を掛けて、ヤアぐつと引奪り、石突を追取り伸べ、二人が頭ばたく／＼、強かに叩き付けられ、槍を捨てて走り込む。組んで留めんと無刀の男、大手を擴げ飛び掛る。脇の下を搔潛り太股摑んで撞と打ち付け、腰骨踏へて小膝を突けば、間も透もなく七八人左右より組み掛る。左手に擔いで右手に投げ越し、右手に擔いで左手へ投げ越し、引擔ぎ／＼、筋斗打たする手利の早業、敷かれし男も肩息にて、一度にどつとぞ逃げ散つたる。「エ、無用の隙費し。信玄公の旗下にて討死するまで、二人の主を取り、外の祿は喰らはぬ勘介、馳走しつ手込にしつ、扠々揃はぬ人の心の照降や。」と木履片足で追驅け行く。實綱城より驅け戾り、「南無三寶早歸りしか曲もなし勘介。當國に足を留めて貰ひたき主人の懇望。甲斐國許りに月日の光あるでもなし、片意地も能い加減、是非に歸らば、此の實綱が首腰に著けてお歸りやれ。」と、隈々尋ね呼び掛け慕ひ出でにけり。奧にはためく太刀音、兄嫁小姑、互に白刃引側め、うらめしいお勝殿、和女の似せ文して兄樣を呼び寄せん爲、書捨の反古を集め、女子共にも隱し忍び手習し、幾瀨

ナア無けれども、流石チン女子どし、セ、セン煎じ茶の夕暮雨の夜のツ、、、徒然、度々に琴もヒイ彈かれず筆先の物語、ホウ反古を誰か拾ひ集めて、手本とはナ、、、なしけるぞや。シイ七年先のクワツ懷妊五月めに小產し、チ、血の騷ぎに舌縮まり、ムウ、生まれもつかぬ吃となり、フウ筆を舌にて物云ひし、オウオ、思へば身の敵、是れが癒る物ならば、ク、、、、口側をキツ切裂き、シイ舌の根をヒツ引き出しても切て死樣に、彌陀の六字の名號を、マ、、、マン〳〵眞準にト、、、、唱へて死にたい。」と、搔口說き身を悔み、廻らぬ舌に、急き掛け〳〵繰りかけて、吃らぬ物は淚なり。不具を悔む身につまされ、天魔を欺く勘介も、不便彌增し淚ぐみ、「先年の小產より吃とて、それぞ天命誰をか恨みん。我も猪の難より五體不具になりたれど、畜生に恨みなく魂は元の勘介。御事も吃に心を屈せず、始めの性根を確と据ゑ、實晴幸が妻ならば、勝手は知つたり奥に入り、母に知らせ盜み出せ。我は裏の塀を乘り安々と退くべきが、御事は何と。」「ソウソ、ツ夫れでは此方のニヨニヨン女房か。」「おんでもない事、七生までも女房々々。」「ハア、ハア、カ、、、、ウ忝い、カ、、、カ、ツ畏まつた。」と驅け入る。今のか〳〵は、世界の嗅の手本なり。「サア心安し賢うぞ改めぬ旅出立。」と勇みて出づる透垣の陰人聲して、「勘介歸すな無體に歸らば討ち留めよ。」と、十文字の槍先照る日に輝き犇いたり。「ヤ蜂に螫され益ない事。」と庭に飜りとおりしも路次の木履片足、短き左に確と穿き、

ばゝつ、祖母様連れて抜けて歸る。」抜けて戻ると心は云へど詞には、ぬン、ぬんと許りにて、涙は聲に先だてる、舌も廻らぬ頤から。「何と狼狽へ來たとは、三界に只一人の母、今を限りと云ふ文に、狼狽ふるが不思議か。夫の狼狽ふる文書きしは何者に頼まれた、サア誰に頼まれた。」と言へども、更に覺えなければ、恨めしげに夫の顏に指さしし、「ウ、ウ譃わいの。」と泣き沈む。「オ、譃か實か其の文爰に懷中せり。汝が手跡是れ見よ。」と投げ出せば、さつと披き見れば我が手跡、「カ、、カ、、悲しやコツ此の手が腐ろ。カツ書きはせねども、筆々フゥ筆は私が筆。」と繰り返し〳〵能く〳〵見て、「ソツそでない〳〵ニイニ、似せた似せくさつた。似せ居つた奴詮索して、生けて置かぬ。」と走り入るを、「こりや待て阿呆者、詮索とは誰を詮索。元來似せらるゝが汝が過り。物を似せるに手本が無くて似せらるか。總じて敵の國へ入る時は、擧動にも氣を付け、一言半句の詞をも愼しみ、油斷せぬこそ男も女も武士の心掛け、唐土蜀の單富が古事抔、常々に聞きながら、浮々と書き散らす故に似せられ跡で詮索恨み云ふ程恥の恥。エ、無念や一生、敵の計畧に乘せられぬ晴幸、母と云ふ字に心眩み、敵國へ踏み込みしは、汝が筆先不覺を取らせし。夫れでも山本勘介が女房とばし思ふか。」と、がばと蹴つけ礑と睨む片目の光、月日と星の三光の、一度にさすかと身に徹へ、「わつ。」と叫び入りけるが、「アアア、淺ましきは不具の身、クウ、、國を離れて今日の日まで、ユ、夢にもコツ心休めず油斷とては

「ハテ心得ぬ屋敷の體。母の大病十死一生、只今の命も知れずと、女共が自筆の文、見るより前後辨へず驅け付けしに、病人ある體とも見えず。母は一段機嫌能しとて、女共にも逢はせず。殊に公用に付き、山城が夫婦連にて城へ上るとは、輝虎程の大將が女交りに、國の仕置軍評議するでもあるまじ、是れぞ不審の第一。ム、ウムウ〳〵今氣が付いた。母を囮に掛けて此の勘介を、味方に招き取る談合鏡に掛けたる如し。血を分けし妹なれども、夫を持つては夫の爲、主の爲を思ふ唐衣めは尤も至極、大阿呆は女房の吃め、輝虎の智畧にて母を馳走し、一家中尊敬するに心奪はれ、山城に欺し込まれ、息災なる母を萬事限りとの文を以て、我を釣り寄せ、甘々と敵國の袋へ入れしよな。エ、後悔千萬、一應も再應も念入る筈の事。母の生顏ま一度見たし拜みたしと、思ふより外他念を失ひ、ふかふかと踏み出せし勘介が一生の麁忽、後代の笑ひ草。否々片時も留まる所でなし、母を奪取り立ち退いて鼻明かせん」と立ち上り、見やれば奥に間數も多く案內知らず、門を出で後の塀をや乘るべき、サア一代の難所、我が爲の鐵杖が嶽鵯越、心の山坂跛馬、行きつ戻りつ思案最中、誰が知らせてや女房お勝走り出で、「コ、ツ斯樣。」と許りに取り付く所を、物をも云はず後樣に礑と突き退け驅け出づる。又引き留めて、「ナアナナナアなゝん何と、ウ、ウロ〳〵〳〵ウ、狼狽へてござつた。口こそ叶はね、コ、ツ此方のニョウによん女房、勝が預つて來たからは氣遣ひちややつつちやるな。頓てぱ、

御相談の事にて奥樣も今御登城。御夫婦御城よりお下りなき中、勘介樣御出でなさるゝとも、必ず必ず母御樣お勝樣へは先づ沙汰なし。此所でお茶上げお菓子などで、御馳走致せとの仰せなり。」と云ふ所に、「山本勘介樣御出で。」と小取次の撫子が案内にて、旅裝束の裁著に、膝は捻れてちんがちが、左跛に右騎、雪折松に星一つ、葉越に見ゆる男振、座敷に直れば女房達、ふつと吹き出す可笑しさを、エヘン／＼にまぎらして、お次へ笑ひに立つもあり、御茶小姓がくつ／＼／＼、手を震はして茶椀の臺、溢れ搖蕩ふ許りなり。細謹を顧みぬ大丈夫、笑ふも誇るも何ともなく、「其方は局か。山城殿の御内室唐衣に、身が來た通り取次賴む。」と有りければ、「ハア公用に付き夫婦共に登城、未だ城より下られず、先づ爰で御休息。それお煙草盆お菓子／＼。」と待遇ふ。「ム、公用ならば歸りの程も知れまじ。山州夫婦に用はおりない。老母の氣色以ての外との便りに驚き、夜を日に次いで罷り越す。早く母の顏見たし案内賴む。罷り通る。」と立たんとす。「否申しお母上樣は一段と御機嫌能く、爰許へお越しなされてより噎一つ遊ばさず、御家中の持囃し、毎日花の鳥のと、數々のお慰み。」と云ふ程氣遣ひ、「然らば女房勝に逢ひ申そ。」「否お勝樣も御機嫌能うお母上樣のお傍に。追付御夫婦お下りに間も有るまじ。それお風呂急がしや。少とお休みなさるゝ爲、お枕上げましや。ハア眞に氣が付かなんだ、お慰みに御酒上げましよ。」と、殘らず立つて入りければ、座敷には客人獨り、とほんとして手持惡く

ひてこそは歸る鴈、況して老の身の、今日歸る翌日歸ると、堪へせいなき老母の心、隨分慰め留めよと殿の仰せ、御家老の姑女御前家中重んじ、毎日の進物四季草木の造り花、屛風掛物歌書物語、或は囀る籠のとり〳〵、奥玄關の取次に、所狹きまで積み重ね、高田の局が披露にて、女房達の取捌き、表使の進物帳筆を擱く隙はなし。時に信濃堺の番所より早使到來し、「今朝未明右の目は畸、左の足跛の侍御關所を通り候故、何方より何方へ行く人と名を尋ね候へば、甲州山本勘介と云ふ者、御家老直江山城殿の御内證へ行くと申し、供の人馬をお國堺に殘し通られし故、脇道より遮つて先づお報せと、申し置いてぞ歸りける。」局手を拍ち、「是れは目出度い。山本勘介樣とはお客人樣の御總領、卽ち奥樣の兄御樣、申し上げたら嘸お悅び。其の間に腰元衆、お座敷綺麗に掃除しや。」と云ひ付け奥に入りければ、手ん手に雜巾鳥の羽帚棕櫚帚、掃いつ拭うつ立ち騷ぎ、「喃お大知つてか、勘介樣は奥に御座るお勝樣のお連合、隱れもない軍法者功の武士なれど、片目畸に跛ぢやげな。此方は吃何と思やる、お寢間の睦言が不自由には有るまいか。」「ア、何のいの吃で物が云はれいでも、肝腎の時にはッイふん〳〵で濟む事。男は氣轉で畸は愚か、兩方見えぬ眞の闇にも、夜軍の早業は手捷い、一番乘に拔目はない。」とぞ笑ひける。上臺所に局が聲、「奥樣お城へお上り。板の間へお乘物廻しやお供の衆。」と騷然き裏門開く音して、高田の局立ち出で、「是れ何方も、旦那樣今朝よりお城にお詰めなさるゝ。

い死に損ひ、小袖を吳るれば古著抔と蔑視し、剰へ天子將軍にも給仕致さぬ輝虎が、据ゑたる膳を臑に掛けて踏み散らす粗畧、狂人同然と思へども堪忍ならず。皺首刎ねん。」と重代の小豆長光二尺五寸に手を掛け給ふを、直江山城飛んで出で、御手に縋れば、唐衣母に取り付き、「お詫〳〵。」と心を揉む。「何の詫言。聟の主人、手向ひもせず詫もせぬ。サア手に掛らん〳〵。」と刀をかい込み立つたる擬勢。「オ、其の喉止めん放せ直江。」「これ〳〵〳〵、臑を持たせても堪忍するとの御誓言は何と。禮儀は此所。」と制しても、身を震はして無念の涙、中にうろ〳〵嫂が、心急く程口廻らず、拜んで廻りつ起ちつ居つ、爲方なく〳〵涙片手に琴引き寄せ、琴柱を律に調べ替へ、歌「許し給へ老の身の、松山力に足らぬ吃の不具者を賴みに預けしは我が夫、預るは姑、歌甲斐なくこゝに捨草の、露より脆き命をや。空しく枯れし帚木を、無常の煙と成し果て、一人悄々歸るさは、松山拾ひし骨の供をして、夫には何と語らん。替りには我が命、母を助けたび給へ、お慈悲ぞやお情。」と「わつ。」と叫び、彈き捨ての琴に身を投げ伏し沈む。鬼を欺く輝虎も、哀れに心の撓むを見て、直江押取り、「ア、御免有るぞ女共、母を誘ひ我が館へ〳〵。」「ハア、有り難し。」と一禮に、お勝が嬉しさ物云ひたげに、頭をふる許り足も付かず躍りぶし、歌「情の花のヤレ御所櫻、枝はえゝえつちりな、えゝえつちりな、えつちり越後の、御繁昌。」と祝ひ勇みて、三重日を送る。北國の爰にも己が時知りて、是れより北の古鄕を、慕

ば、「否辭儀は却つて迷惑。子息山本勘介殿、勇と云ひ智と云ひ、楠正成が再來とも云ひつべき弓取、惜しいかな武田信玄に奉公とは、珠を泥に抛ち麒麟を繫いで犬とする如し。斯かる英雄の御老母、直江山城內緣を以て不思議の御出で、一國に優曇華の咲いたる悅び。今日より我も母と賴み子となる證の杯頂戴の望み。斯樣申すは長尾彈正少弼輝虎、孝行始めの給仕配膳。」と烏帽子を疊に付け給へば、嫁も娘も、「はつ。」と許り、覺えず頭を下げにける。老母膝を立て直し、呵々と高笑ひ、「ハァ、長生すれば珍らしい事を見聞くよな。鎌倉の海には猪の角で鰹釣り、攝津河の淵には麥飯で鯉を釣ると聞きしが、越後國には老耄ひし此の祖母を餌にして、山本勘介を釣り寄せんとは、ハ、〳〵ハ、事可笑しや可笑しや。凡そ大將は天より受けたる明命を顧み、正直自然の規矩を外さねば、天の時地の利に適ひ、諸卒是れに和し、遂には誠の勝利を得る。總じて物には相應あり。此の祖母が給仕には腰元女の童が丁度相應。鷄を裂くに焉ぞ牛の刀を用ゐんとは、聖人の誡め。人を欺す僞り表裏今日の振舞に顯はれ、本心曲つた釣針に、釣らるゝ勘介ではおぢやらしませぬわいの。此の膳部に手をも掛けては恩になる。輝虎殿と敵對の勘介が母、敵の恩を請けては我が子の鋒先に緩みが付く。義もなく勇もなき此の膳何にせん。」と、ずんど立つて懸盤ぐわらりと蹴返せば、膳部亂れてひつた直垂、膝に味噌汁淵をなし魚より驚く嫁娘、「ハァ〳〵ハァ。」と肝を冷して惘れ居る。短慮の輝虎くわつと急き上げ、「憎

度も、著給ふと有るからは、輝虎の古著。此の祖母は此の年まで人の古著貰うて著た事がない。なう嫌や忌々しい。」と詞に綾も艶もなく、吳服も色を失へり。「否申し、母御に著せとは御挨拶、元是れは男模樣、勘介殿の土產に成されよとの志。」「否々々、武田信玄と云ふ主持つて何暗からぬ勘介、土產には越後の名產鮭の鹽引、歸るさの道には木曾川鮎の白干、信濃梅の梅干、皺のよつた此の顏の、無事を見せるが土產ぢや。オ、喧しや聟殿御免。」と足踏み伸ばし肱枕。直江も立つに立端なく、勝手に向ひ手を叩き、「誰そ參れ。御時分がよし料理々々、何として遲なはる。料理人め屹と申し付けん。」と、料理を其の座の機にして、母の機嫌の鹽梅加減、窺ひ〳〵立ちにける。程なく御勝手よしと仄めき、本膳の懸盤に種々の魚鳥、珍物の野菜美味を調へ、配膳の侍直垂繕ひ、作法正しき疊觸り、「御膳召上げらるべし。」と烏帽子八分に指上げてこそ扣へけれ。唐衣見れば主君輝虎公、はつと驚き、是れは恐れ冥加ないと、云はんとせしが仔細こそ有るらめと、「なう母樣御膳々々。」と云ふ聲に、起き直り座を組めば、管領風の摺足にて、膳の据振敬ひ深く、通ひの座に手を突き、邊國の儀御馳走も心許り。召上られ下さるべし。」とぞ仰せける。老母會釋し、「ホウ隔心がましい饗應、殊に仰山な神前に御供供ふる樣に、烏帽子直垂の配膳は、近習衆か外樣衆か。常々女子供に給仕さする、此の祖母齒は拔ける口も乾く、慇懃な給仕では窮屈で喰べ憎い。勝手へ立つて休息召され。唐衣代れや。」と有りけれ

寄せ、おめず場うてぬ白書院、縫物したる褥の上、威も備はつて見えにける。唐衣近く差寄つて、「お禮申すはお勝様、私が孝行をお一人に振掛け、老人の起臥朝夕の御介抱。此の度の道中雨に付け風に付け、山よ川よ嘸御氣盡し、詞には申し盡されず。」と言ひ掛ける程口籠り、只「あい〳〵。」と笑顔許りを愛想にて、硯引き寄せ赤らむ顔のはぢ紅葉、木の葉の時雨さら〳〵、世尊寺様の走り書、讀み人の癖に讀め易き、唐衣取り上げ、「ア、〳〵是れは忝い。お筆の通り姉となりとも妹となりとも、兄弟と思召しお心隔てず頼みます。」扨此の御手跡わいの、存ぜぬながら見事々々。此の半分何卒書きたい事や。」と、くる〳〵捲いて袖に納むる後より、直江装束改め、狂紋の綾の呉服一重、肩に掛けて立ち出で色代深く、「拙者直江山城守實綱、お國本へ罷り越し、親子の禮儀申し上ぐべき處、女共より迎へをまゐらせ、遠路の御光駕祝著是れに過ぎず。山本氏の御内室にも能くぞ〳〵御同道、お心易く御逗留有る様に、態と御馳走は申さず。從つて此の小袖は將軍義輝公のお召、二つ引兩の御紋付、主人輝虎拜領致され、一兩度著せられし許り。當國は寒國轉寐の裾に置き給はば、輝虎も滿足たるべしと」。指出せば、起き直り莞爾と笑ひ、「ヤレ〳〵數ならぬ此の祖母が來た事、輝虎公のお耳へ入れしよの。扨は爰は壻殿の館かと思へば、御主人の本丸か、シテ此の小袖を祖母に著よとか。ホウ御念の入つた事やの。扨々結構な狂紋の綾と云ふ物か。流石將軍のお召料。然りながら輝虎殿が一兩

は年寄られしか、機嫌は能いか。」と問ひければ、「長浪人の辛苦にや、腰は二重天頭は雪、十も老けて見えながら、行儀作法は昔にかはらず。勘介殿のお内儀、お勝樣にも始めて逢ひしが、尋常な氣高い嫂御、一つの瑾は口が吃で物云ふ事を恥かしがり、請返答は皆筆先、其の上琴の上手、筆にも書かれぬ急な時は、云ふ事に節を付け琴に乘せ唄へば、如何樣の早い事も、吃らずに云はるゝと母樣の物語。其の手の見事さ、墨付筆勢、御家中の祐筆衆にも少ない程の器用人。吃が直して進ぜたい。」と、語れば直江、「一段々々、隨分母の機嫌を取り、何時までも逗留有る樣に待遇せ。さぞ老體の草臥是れへ請じ、此の御座所に直して馳走々々。殿と我は障子の影にて事の樣を計らひ、首尾を見合はせ對面せん。」と、主從伴ひ入りにけり。折しも牀の大和琴、硯料紙も座敷に竝べ、唐衣廊下の欄干に手を掛け、「山本勘介殿の内儀樣、母御前連れまし是れへお通り、山本勘介殿の内儀樣母樣。」と、請待の聲聞ゆれば、「音高し〳〵。」塒を出でし老の鶴、子に逢ふまでぞ世の人の、問ふとも我は名無鳥、名を洩らさんはをこがまし。なう唐衣、此の越後は勘介が主君信玄公の敵の國、和女の夫は敵の御家老、其所へ此の母が來る義理は無けれども、此の世の名殘に母の顏見たしとの文の面、我も娘戀しさ、迎へと打連れ言舌廻らぬ嫁を力に、下女も連れぬ此の有樣。山本勘介殿の母よ内儀よと聲高に云はぬ事。ヤアえい。」と坐せんとするを手を取つて、「直にこれへ。」と請ぜられ、嫁のお勝が携へし、持刀膝に引き

いて見えにける。直江少しも驚かず、「御意なくとも申し上げんと存ずる所。尤も彼が妹を相具し候へども、勘介には未だ對面致さず、在鄕に引込み鋤鍬取つて自ら耕し、秋の田面の月に嘯き、薪を荷うて山路の花を友とし、世を諂はず祿を貪らず、天命を樂しみ義を堅く守る士、越後半國賜はるとて傳緣引を力に知行を望む勘介ならず。憚りながら君御短慮高慢にて、人に詞を下げ謙る事御嫌ひ、世の中八分に見下し、思ふ樣に知行さへ遣らば、樊噲張良でも、抱へて見せんとの思召とは大きに相違。今度武田方に成りたるは、必定信玄が上手を盡して招きたるに疑ひなし。某も餘りに殘念枕を割りし一手段、短氣を鎭め無念を押ふる御合點ならば、密々に申し上ぐべし。」と、恐るゝ方なく申しければ、さしもの輝虎理に服し、ほく〱頷き、座敷を屹と見渡せば、甘糟始め物大將殘らず御前を立ちにける。輝虎色を和げ給ひ、「これ實綱、智ある軍師を親師匠とも尊ぶは古の法。勘介我に奉公せば、弓矢八幡臑を持たせても堪忍する。お事が思案は何と〱。」「さん候、勘介幼少にて父に離れ七十に餘る老母に孝心深く、二十四孝の追加と沙汰に乘る孝行者、先づ母を靡けん爲女共方より、迎ひを立てさせ候。」と申す所に、直江が妻の唐衣、遣戸口に差窺ひ、「なう山城殿、母樣先程お著き、兄勘介殿の*かもじ樣も同道、指圖の通り直にお城へ乘物入れさせ、お次の臺子の間に憩ませ置きし。」と、聞くより輝虎、「出來た〱。具に聞きたし是れへ〱。」「御免ある近う參れ。」と呼出し、「シテ母

第三

葉公龍を好んで畫き刻めども、眞の天龍を見て魂を失ふ。これ龍を好むにあらず、龍に似て龍にあらざる物を好むと云はん。將の賢士を好む賢に似て賢にあらず。少ないかな才賢の臣。然れば長尾輝虎、信玄と初度の合戰に勝利を失ひ、本城に勢を引入れ、執權直江山城守實綱、甘糟椛崎宇佐美なんど、士大將召し集め、「今度の戰味方三萬の人數を以て、武田が一萬二千に驅け崩され、無念の敗北骨髓に徹す。日頃危き勝を好まぬ信玄、朝霧の紛れに大河を渡し、切所の細道より我が旗本の後へ押し廻し、無二無三に驅け破りし武畧の鋭さ、信玄が胸中より出づべからず。如何なる軍師が敵に組し、斯かる奇計をなしけるぞ。汝等聞かずや知らずや。」と、眉毛逆立て眼に角、以ての外の不機嫌なり。甘糟椛崎詞を揃へ、「我々も其の心付き、間者を入れて窺ひ聞き候へば、山本勘介晴幸と申す浪人を召抱へ、備へ陣取士卒の驅引、一向勘介が下知と承る。」と申しも敢へぬに、「ムウ音に聞く勘介、則ち直江が女房の兄ならずや。ヤイ山城、近き緣者の身にて、なぜ我には勸めず、何と油斷して敵には取られし。信玄が千石呉れば二千石、三千石遣らば六千石、五千石ならば我は一萬石も呉れんずもの。我が家を見限りしか、但し此の輝虎勘介が主に不足なるか、所存あらば言へ聞かん。」と、顏色急

暗いに大事のお身怪我遊ばすな。何と私が申さぬ事か、今宵の軍は義清退治に極まつた。ア、嬉しや何うか斯うかと、幾瀨の思ひの痞へも下り、落付きました。」と云ふ折しも、又改まる太鼓の調子、兵火熾んに數千の鐵砲、胸に徹へて勝頼、持つたる刀がばと捨て、「あれこそ父と父との戰爭、今が夫婦の別れぞ。」と、心亂れて立ち騷ぐ。姫も驚くおろ〳〵聲、「何の左樣では有るまい。」と離れ方なく付き纏ふ。山間にちら〳〵と炎焰に映る旗の手の、色も定かと分らねば、延び上り飛び上り、氣も逆立ちし心の闇の黑髪山、夫が上れば續いて上り、炎焰は下に見下せども、一天闇き眞の闇、旗の文色も見えざれば、「未だ日は出ぬか明けよ〳〵。」と明くるを惜しむ氣惜しまぬ氣。「エ、如何に男なればとて、餘りな思ひ切り。夜が明け旗の印も見え、兩家の戰爭に極まれば、添ふことならぬ身の上に、夜が明けよとは胴慾な。今宵一夜を千萬年、日天樣のお慈悲に、出て下さるな夜も明けな。」と、「わつ。」と叫び臥し轉び、嘆くに辛き東雲や、萬里を隔つる東海の、波に陽炎瞳々と、たなびき渡る雲の白旗幸菱、「あれこそ父よ武田の紋。」「ハア此方に焦るゝ赤旗の、紋は緣切る桐の薹、南無三寶、長き離別は長尾の旗。」彼方の戰ひ此方の思ひ、泣きあかしたる目も眞赤に出づる日の、五色八色染むる空々雲の波、赫々暉々たる太陽の、あゆみは五萬六千里、夫婦が間も幾千里、明けてはかなき夜牀の霜、朝日に連れて別れける。

ぬ女夫。何程不孝に成るとても、半時や一時のめかりはない。何か無しに莞爾と、互に倦く程しめ合うて、覺悟させて。」と抱き付く。「エ、時も時折も折、未練至極。」と突き放せば、叉取り付き、那方へ退けば此方へ慕ひ、纏るゝ袖に引かるゝ心、未練々々も戀慕の暗、來來を照らす辻堂も、妹脊の臺と

三重 なりにけり。既に五更の一天の、鐘に落ち來る村上義清、武田長尾の兩勢、無二無三に切り立つれば、太刀も兜も打ち落され、身に添ふ物は旗指一人、轉けつのめつゝ泥塗れ、命から〲逃げ延びて、溜息をほつとつぎ、「エ、無念口惜しし。信玄輝虎中違はせ、彼の鷸蚌の戰ひにて、兩國を握まんと、日頃の謀計がらりと違ひ、却つて彼奴に夜討せられ、家來を討たせ城を拔かれ、おめ〱と存へるも命が物種、此の恥辱を取り返す一つの計畧能く聞け。信玄が領分は海邊なき國なれば、遠州鹽の運漕にて、諸人の咽喉を濕す、我遠州の氏直には、豫て入魂所緣も有り。氏直に手を束ね賴み入れ、鹽の手を止むる物ならば、鹽に飢ゑて甲斐一國は戰はずして鏖し、信玄坊主め仕て遣れば、輝虎討つは手間入らず。三ケ國を押領し戀の敵勝賴め、探し出して寸斷々々切、衞門の前を溫りと、抱いて寢るは案の内。何と思案は有る物か。」と、語る後に聲を掛け、「勝賴是れに。」と切り掛くる。「悲しや伏勢やれ逃げよ。」と、一度の懲に二度の恥、投ぐる刀に家來が首、飛ぶより早く村上義清、はふ〱遁れ落ち失せたり。何國までもと驅け行く袂に縋り著き、「アノ臆病な村上、何時殺さうと儘な事。此の

つて勝負。」と、云ひければ、「ア、はやまるな時綱、指す敵の義清を指置き、武田長尾の合戰とは訝しし。あの火の手は村上が小諸の城の順道、敵の不意を討ち給ふ夜軍と覺えたり。兩人が首より村上が首取つて、土產にするが近道。」「オ、さうよ〳〵。本道は廻り遠し、直に打てば一里餘り。戰爭果てては詮ない事、いざ行くまいか。」「尤も〳〵時刻移すな時綱。」「まつかせ暗いぞ山坂高坂。」「合點ぢやサアこいやつ。」と、蹈んだる足は阿吽の二天、飛ぶが如くに驅けて行く。跡には夫婦悄然と、身を悔みたる喞ち泣き、良あつて勝賴、「病痾は少し癒ゆるより起り、孝は少艾より劣るとは、犇と胸に思ひ知る。我が愛著に親々を、修羅に導く不孝の大逆。あれ見よ子故に怒る嗔恚の兵火。勝賴程の者が色に迷ひ、民百姓の苦しみを、餘所に見んも本意ならず。爰に父の目は無くとも、月日は父の兩眼父と父とは合戰し、子と子は妹脊の語合は、天の照覽恐ろしし。義を見て爲ざるは勇み無し。是れより夫婦引き分れ、今まで積みし梟惡の、非を改むれば孝も立ち義も立つ。互に心殘れども、御身も輝虎の娘、輪廻の詞無用ぞ。」と、すげ無く云へど目は涙、泣き顏をれて衞門の姬、「切なき戀を義に替へて、添はれぬとの御詞道理なり。さりながら親と親との戰ひやら、村上との戰爭やら、誰が知らして誰か知る。父の軍に極まらば、成程添ふまい思ひ切らう。若し義清退治の上、互のお心打解け、和談有るまい物でもなし。添ふか添はぬか緣を切るか切らぬか、境は夜明けて知るゝ事。それまでは變ら

お行方知れず。假令お二人腐り附いたる御中なりとも、一旦縁を切らせ、兩方引分けお供して歸らでは、腹を切つても事濟まず。若し御短慮にて、御身を失ひ給はんかと、傷はしさも先だち、案じ過しがせらる丶。」と、互の憂きを語り合ひ、落涙するこそ道理なれ。勝頼夫婦も此の辻堂、宵より臥して在せしが、扨は高坂大和之介、我々故に苦勞の旅、逢はば縁を切らせんとの、詞にはつと胸驚き、息を詰めてぞ忍ばる丶。時綱重ねて、「今日暮前甲州境を過ぎし時、百姓共が逃げ騷ぎ、甲斐越後確執にて、近々戰爭の御用意と語るも有り。又兩家の不義の名を立てし、本の起りは村上義清。信玄も輝虎も先づ手合の戰爭に、義清を攻め給ふとも取り〳〵の風聞。何方にもせよ聞き捨て難く、一先國へ歸る覺悟。」「慥かな沙汰は聞かれずや。」「オ、某とても慥かに實否は聞かねども、夜明け次第本國へ罷り立ち、主人と主人の戰爭に治定すれば、御邊とも敵味方、對談も今宵許り。」もう何時ぞ、八つか七つか雨も降り止む。あれ〳〵南の山に雲斷れ、くわつと赤きは月日の出づる方角ならず、不思議不思議。」と見る中に、雲を焦せる兵火の光、どん〳〵響く攻太鼓、風に連れたる鯨波、耳を突き拔く許りなり。大和突立ち、「聞きしに違はず兩家の戰と覺ゆるぞ。安閑と見る所でなし。尋ぬる主人は行方知れず、空然と手振で國へは歸られまい。今云ふ通り主君と主君の戰ひなれば、爰は御分と我が戰場。こい兩人討ち果し、高坂が首を土產にするか、時綱が首を土產に遣るか、此の上に分別なし。サア立

れも出る。吹放しの辻堂、借らうと云うて布團はなし。斯樣の時の用意の酒、許由が捨てし瓢簞も、我等が爲の夜著布團。」と、腰に著けたる水呑に、だぶ〳〵と一つ請け、「一簞の食一瓢の飲、これ顏回が樂しみ。」と一引二引惜しみ飲んだる樂しみ酒。傍に臥したる侍、ましくししたる頭を持ち上げ、相宿へ辭儀も無く、けなりがらする不躾者、盜んで彼奴に鼻明かせんと、探り寄つたる手先に瓢簞大膽者、口から口へ一刻飮み、元の所に密と置き、虛寐入して臥したるは、可笑しくも又野太さよ。時綱一つさらりと乾し。「堪らぬ〳〵、自身の押へ最一つ。」と取り上ぐる瓢簞のひよつこり輕きは不審ながら、注ぎ掛くれば雫もなし。「是れや如何ぢや溢れたか洩つたか、吸うて取らん。」と撫で廻れば、旅人の息の酒臭さ、「ム、扠は此奴。」と、胸座取つて引摺り下し、「ヤイ鈴盜人は音にて顯はれ、酒盜人は臭氣にて知る。隱しても隱させぬ、ザア此の瓢簞の酒返せ。否と云へば首が飛ぶ。返答次第眞二つ。」と刀に手を掛け詰めかくる。些とも臆せず、「ハテがい〳〵と喧しい。飮んだ酒を返せとは法を知らぬ侍殿、酒戻しはせぬ物。成らば二つにして見よ。」と、胴を据ゑたる詞の端、大和之介聞き咎め、「然う云ふ和殿は武田の郞黨、高坂では有らざるや。」「ム、我が名を知りし御邊は如何に。」「長尾の執權直江大和之助。」「ヤア大和殿。」「高坂殿。」「是れは〳〵。」と手を取り組み、「暗がり紛れ危い事。互に息才珍重々々。シテ勝賴公の御在所は。」「然れば〳〵東山道を心懸け、四五ヶ國尋ねても、今に於て

雪の肌に花の顏、鹿子斑の雲の帶、肩に素縫の金紗の千鳥、裾野の模樣望月の、駒の追風そよ〳〵戰ぐ。松の葉のよな狹い氣を持ちやんな、廣い芭蕉葉の氣を持ちやれトノへ。よしや辛氣や其の裏戾せ廣い芭蕉葉の世は夢と、覺めては昨日明けて今日、暮れては明日の月日とも、賴みし甲斐も越後路も三重 皆古鄕となし果てて、同じ憂き身の人心、二つに割らば瓜生坂 江戸 重嶺峨々と冬枯れたり。見え初めしは花の頃、夏の通路足早く、かたへ涼しき夕風に、荻萩芒穗に〳〵出でてナ、さんざらめけば松蟲鈴蟲轡蟲、露も交りてはらり〳〵、紅葉土產に秋も井に、氷は厚く我が袖は、碓冰峠の入日影、暮相近き羣烏、聲は有れども里の名は、問はれず云はず櫛取らぬ、黑髮山の宵の闇、篠を突くなる吹き降りに、雨具は持たず宿はなし、野邊にいぶせき東屋も、昔の玉の臺かと、立ち寄り憩らひ 三重 給ひける。直江大和之介時綱、姬君見えさせ給はぬ故、主君輝虎の御憤り、兄山城へも面伏、本國へも立ち歸らず、若しや三河遠江、尋ぬる甲斐の隈もなき、月の入るより降る雨に、かゞせの蓑笠身に纏ひ、目指すも知らぬ黑髮山、上州指して急ぎしが、鍬は拔ける泊りは遠し、雨露凌ぐ木陰もがなと爰彼所透し見て、「是りや何ぢや、ヤア辻堂屈竟々々、木賃入らずの上宿。」と探り寄つたる緣の上、旅人と見えし侍の、同じく蓑笠引冠り、蹈み延ばしたる高鼾。「ム、世界は廣し我に變らぬ憂き旅人、相宿御免。」と、足押し遣つて腰打掛け、「扨々步く間は張合にて、雨も風も身に浸まず、氣が緩む程勞

も親なり子も子なり。原五郎愼んで「雪も頻りに日も傾く。早々御立ち。」と麓に向ひ「お供參れ。」と呼ばはれば、お徒士お小姓槍長刀、召馬引馬雪に斷えて引立つたり。「とてもの事に勘介も、御供申させん。」と、脫いで差し出す頭盔頭、主從契約の金兜、御手に取つて押し戴き、「渭濱に釣せし太公望、同車に乘せし帝を學び、勘介も馬上に。」と乘替の鞍壺に、兜を取つて打乘する、山形鍬形忍びの緒、結ぶ庵を龍頭、天にも上る心地して、勇んで甲府へ　三重

衞門姬道行

謠 雪を踏んでは花かと惜しむ岨かげの、谷水も靜かならで、騷がしき木枯の、山風に散る木の葉まで、追手の聲やらんと、後をのみ深山路の、奧深く急ぎ行末の、便りなき身の便りには、身に引締めし旅衣、此處や彼處に著古せど、生まれ付いたる衞門姬、女心の細道も、後強しや勝頼の、影と我が影四人連、憂きも辛さも世の外の、跡に見捨つる結梗が原、木にも草にも馴れぬれば、散る別れさへ惜しまるゝ。「あれなう御覽ぜ勝頼公、春の行方を尋ねかね、唄 二つ連れたる鴈金の、夫持ち顏に飛び連れて、餘所の孀に恥ぢよと鳴くは面憎や。」好いた男と連れて行く、身には厭はぬ聲なれど、あな喧し山々の、高嶺々々を見上ぐれば、雲の波たつ諏訪の海、深き情もァ、在原の、中將なりけるまめ男、謠 戀ゆゑ旅を信濃路や、淺間が嶽と連ねける、山の煙も我が思ひには、丈も及ばじ富士の山、

次。」と呼ばはつて、＊品革緘の絲毛の鎧、搖つて締めたる上帶も、二重鎖の小手臑當、＊頭盔頭の黑塗兜猪首に著なす片足の、跛ちが〱がつくりそつくり凸凹の、「山本勘介晴幸、御目見え。」と畏まる。「我等原五郎昌俊と申す者、御近づきに。」と躍り出で、「名にしあふ晴幸殿、御目見えの證なうては叶ふまじ。太刀打か槍か扠は立身か、いざ昌俊お相手。」と、引き立つる腰のよろ〳〵、重き六具に五體を釣られ、かつぱと臥して足立たねば、「鎧を著てさへ其の臆病、鯨波聞いたら目が眩はう。馬に乘るより手短に、棺桶に乘れ勘介。」と、大口明いてぞ笑ひける。「なう然のみ笑ひたまひそ。勘介は此の度猪に掛けられし疵養生、夫婦連にて箱根の湯元へ湯治致し、只今内に在り合はせず。主從の御契約留守と申すも恐れあり。此の鎧兜は我が子の著用武士の魂。ハテ魂さへ御目見え相濟めば、勘介も同然と、母が契約詞違へぬ印には、是れ此の鎧兜を著たる勘介、母とな思召されそ。」と、御前に蹲踞へば、原五郎ぐつとも云はず。大將信玄御悦び、甚だ感じ入り給ふ。「今より主從三世の契り、安堵の所領三百貫、子孫に傳ふる弓矢の道、指南賴む。」とありければ、「はつ。」と首を疊に摺り付け、「五體不具の勘介、斯かるお主を儲けしこと、誠に一眼の龜の浮木ぞや。武士は何時晴々しき、出陣出仕も有らうかと、嗜みの打物衣小袖、是れ御覽ぜ。」と引き寄する、破れ葛籠に疊み込む、幌衣小旗陣羽織、腕も通さぬ衣々に、子を思ふ親の棲辻を、合はせて其の身が勘介に、成り代つての應答、親

の、心遣ひぞ類なき。老母起き上り、「扨々聞分ない執拗いお方。左程に思召さば、事によつて勘介を奉公に參らせん。然りながら鶴は枯木に巢をくはず、大魚は小池に住まずと云ふ。勘介を抱へんと思召すからは、此方も主人の御器量を選ばねばならぬ。サア信玄公の軍法、如何なる心を以て兵を用ゐ給ふぞや。軍慮の程如何に〳〵。」と座を打つて云ひければ、「心得たり。」と突立ち、自在の下に焚き捨てし、榾押し退けて柴の小枝を、押し折り〳〵焚き給へば、烈々と燃え上り、茶釜に沸る湯玉の音、漣寄する如くなり。「信玄が兵を用ゐる事まつ此の通り。」と、指さし給へば、老母横手を礑と打ち、「天晴大將候よ。柔能く剛を制し、弱能く強を制す、黃石公が三畧を得給ひし。賴もし〳〵。是れは奇正の中にも正の軍術。扨心を以てする智謀は如何に。」と又問ひ掛くれば、「心得たり。」と外面に出で、雪間に餌る群雀、一羽取つて手に握り立ち歸り、「如何に老母、我が掌中に雀あり、生きたるか死したるか、云うて見られよ。」と宣へば、「ア、天晴希代の謀計。婆が生きたりと申さば御掌中にて握り殺して見せ給はん、又死したりと申さば、其の儘開きて放さるべし。是れ敵に依つて轉化し、何方も外さぬ兩全の謀計、卽座の答へ、ア、名將かな名將かな。一子勘介が主と賴むは信玄公。」と愼んで一禮し、「いで御目見え申させん。」と、一間に入れば信玄公、夜光の珠を得し如く、五郎も案に相違して、「扨も強い婆々めぢや。」と、舌を卷いてぞ見えにける。程なく奧より、「山本勘介御目見え。誰ぞ御

叱りつけ、「聞きも及び給はん、越後國長尾輝虎と仔細あつて鉾楯の中となり、此の信州を戰場にて、近々に輝虎と對陣す。惜しいかな勘介希代の才智を空しく、山林に朽ち果てん事殘念至極、我が師範となり三軍を司り、弓箭の力を助け給はば百萬の士卒に優り、信玄が大慶是れに過ぎず。萬卒は求め易く一將は求め難し、三度是れまで步行を運ぶ志御老母の執成し偏に賴み存ずる。」と、師弟の禮儀細やかに、低頭平身手を束ね、世にしみ〴〵と述べ給へば、老母起きも上らず齒の拔けたる口を明け、から〳〵〳〵と打笑ひ、「ハア物好な信玄殿やの。此方の息子は幼稚い時より山家住居、野飼の牛の手綱は取れど、掛鞍に一度腰掛けず、薪木の枝は切れども、人間の指一本、遂に切つた例もなく、足は跛で遠道ならず、片目は隻眼で見ること不自由、脊丈小さうて棚な物下すも、間に足らぬ山本勘介、軍の大將とは、ム、〳〵〳〵ァ、此の國の大名衆から、抱へ度いと云うて來れど、取敢へもしませぬ。其の爲の御入來なら、早う歸るがお手柄。ァ、冷える事や。」と圍爐裏に踏み出す拗者。原五郞堪り兼ね、「殿中さぬことか。ごくに立たぬ素浪人、何も世間の風說、作法知らぬ婆々めが子なら知れた知れた。サァお歸り。」と立たんとするを、信玄又睨め付け、「ム、主人の選み給ふと聞及ぶ、信玄其の器量なけれど思ひ掛けし一念、日の光が月に變り今日が明日、明日が明後日になるまで、主從師弟の契約致さぬ其の內は、信玄が骸を此の山に埋む許りぞ。」と座を占めて在す。賢者を求むる良將

呉にも劣らぬ軍者、諸方より招けども、主人の器量に選り嫌ひして奉公せず。今信玄が軍師に頼まん者、勘介ならで日本に覺えず。先月兩度此の庵室へ尋ねしかども、他行とて對面せず。今日は是非にと志し麓まで牽かせしは、信玄が乘替にあらず、勘介を乘する馬なるぞ、師を求むるは神の惠みを求むるが如し、隨分禮儀を亂すな。但し寒くて、堪忍成り難くば麓へ下つて誰そ替れ。エ、無氣根者め。」と遣り込められ、「是れ程の雪に何の事。」と雪に兩足踏み込んで、「火燵に煖つて居る樣な。豐年の兆やら、今年の雪は煖かな。」といふ脣も紫立ち、齒の根も合はぬ寒さなり。内にも積る頭の雪、主の老母と思しくて、折り焚く柴の夕煙、燻ぼる顏も煎じ茶の、はな香も澀く聞えけり。「ハ、ア嬉し、今日こそは爲果せたり。」と戸口に立ち寄り、「卒爾ながら山本公の御名を慕ひ、先月兩度參りしかども御他行。直に申し談じ度く、此の大雪を踏み分くる。斯う申すは武田信玄取次頼み存ずる。」と、事を愼み宣へば、「ム、武田信玄とは聞き及うだ樣な。足冷えて焚火の許を得離れぬ。用があらば其所明けて。」と手枕ながら待ふ。「然らば御免。」と戸を開き入り給へば、起きも直らぬ老母の體、原五郎くわつと急き上げ、「大體人の尋ぬるには挨拶も有る物、但し枕も上らぬ程蟲でもかぶるか、此の寒氣で寸白でも起つたか。どれ其の寸白の蟲捻り殺して本復させん。」と、立たんとするを信玄磕と睨め付け、「彼方より呼ばる丶、我にもあらず、押し掛けて參るからは辭儀は此の方。不行儀者退り居らう。」と

切つたり。國境までお供と云はんも此の足元、老母も氣づかひ。御縁もあらば又重ねて。隨分御無事で。」「其方も無事で。」「然らば〱。」と一禮述べ、別れて歸る勘介が、仁は玄德智は孔明、勇は關羽に竝びなき、譽れは三國名は高き、富士を移して諏訪の不二、御狩の手柄は猪に乘る、夫れは仁田我は油斷、猪にかけられ五體不具、缺くれば滿ち、滿つれば缺くる弓張月や梓弓、引くは片足ちんがちか、跛の根本隻目の謂れはこれ、此の〱〱猪を止めたる勘介が、譽れを代々に傳へけり。

第二

＊頻繁として三度顧みるは天下の謀とかや。武田信玄大僧正、徒士馬廻を麓に留め、原五郎昌俊一人御供にて、又踏み分くる木曾山陰、降り積む雪に道絶えて、山は水晶を植ゑたる如く、林は白銀を粧ふに似て、人目も共に埋もるゝ。爰にも住めば住居する、山本勘助晴幸が、庵の門に著き給ふ。原五郎雪中に畏まり、「此の寒風に御馬にも召されず傘もさゝせず、何所へ御出でと存ぜしに、黴浪人の庵室、若し御用ばし候はば、君の御成までも無く、我等引立て參らん物を、甲斐の信玄と云ふ名將、此の大雪に徒歩跣、慮外ながら餘り賞めた事でも無し、いざ御歸り。」と袖に縋れば振り放し、「何を知つて若輩者、此の勘介は隻目跛の小男、見掛は百姓山賤の如くにて、魂は日本の楠異國の孔明、孫

知らぬ谷底へ、落つると見えしが松が枝に、掛る手先も孝の德、飜りと取り付く早業は、木傳ふ猿ともいひつべし。猪は見上げて怒りをなし、木の根を穿つ鼻嵐、吹き立て〱石も砂も一捲り、土を返す勢ひは、唐鋤遣ふ如くなり。若木の松が根次第に掘れてゆさ〱〱、大地へ撞と付くより早く追取り伸べ、總身の力腕に入れ、擲り立てたる滅多打ち、打たれてたじ〱、弱る平首むんずと締め、難なく猪を組み留めたり。勝頼すはやと見るより早く驅け寄つて、猪の急所を三刀四刀刺し貫き、兩手を取つて引立つれば、根氣勞れて正體なし。「ウ、道理々々。以前の情今又猪の害を避け、重々深き恩の人。我こそ武田信玄が一子四郎勝頼。」「妾は長尾輝虎が娘衞門の前。」「村上に妨げられ、割なき戀路に苦しむぞや。親にも勝る命の親、心は如何に。」と宣へば、勘介一眼くわつと見開き、「扨は兩家の君達かや。某は山本勘介晴幸と申す者。輝虎の御家臣直江山城、我が爲に妹壻、旁縁有るお二人の、恙なきこそ珍重々々。村上が領分に、片時も猶豫御無用、早疾く〱。」との詞の下、供人引連れ落合藤太、「あれ遁すな。」とどつと來る。「ム、打揃うて御大儀千萬。もう草臥も息まつたり。刀汚しの蠅侍、此の蠅打喰らへ。」と、松の木取つて片足飛び、ひつし〱と打ち殺せば、敗亡敗北大師講の粥にあらぬ棒喰らひ、はつと一度に逃げ散つたり。藤太透さず、「勝頼遣らぬ。」と切り掛くる。振り返つて、「是りやさせぬ青蠅め。」と、横に薙ぐれば二つに斷れ、腸亂れ死してけり。「さあ〱敵の根は

そ爰に足跡あり。高名せん。」と追懸くる。藤太押へて、「急くな者共。此の萱原が物臭い。試みに鐵砲喰れん。」と、筒先下り打ち込み突き込み、二つ三つ玉とう〳〵、重ねて響く手答へ、「慥かに勝頼して遣つた。いで首取らん。」と、立ち寄る草葉ざわ〳〵、小山の如く脊を擡げ、によつと出でたる手負猪。「八幡免せ人違ひ、御免々々。」と逃げ迷ふ。勝頼も姫を圍ひ、打物拔いて指し向へば、荒れに暴れたる獅子奮迅、眼を怒らし牙をむき、敵も味方も差別なく、巖石鐵壁驅け割り〳〵追ひ立つれば、岸踏み外しころ〳〵、此所の岩陰彼處の谷、右往左往に逃げ散りしは、危かりける 三重 次第なり。早夕陽の山の端の、下枝眞柴刈り集め、人の十荷を勘介が、一荷にて立ち歸る元の道、草踏み散らし地を發き、山を隔つる人聲の、峠に響く許りなり。「ム、扨は以前の若者、敵に出合ひ戰ふか、あゝら心元なや。」と、案じ煩ひ立つたる所に、尾先を廻る猪の、思ひ掛なき後より、左手の太股くわらりと掛け、一振振つたる猪首の力、一丈許り跳ね上げたり。勘介痿まず足踏み直し、「憎い畜生皮引剝いで布團にせん。返せ戻せ。」の聲に猛つて一文字、二の身を替し遣り過し、戻せば開き四五遍惱まし飜りと乘り、左手に尾筒右手に鎌、搔き切る肋猪の血と人の血に、猪の毛變じて猩々緋、乘せは付けじと、古木に摺り付け、岩に當つれば撞と落ち、上になり下になり、半時許りぞ 三重 揉み合ひけり。勘介數ヶ所の疵の上、右の眼を突き潰され、流るゝ血に目も眩み、漂ふ所を牙に掛け、そことも

孝を立つれば忠に缺け、忠を盡せば不孝となる。此の理に迫つて刀を止め、身は山猿となりたれども母の寐覺の能き容顏、百萬貫にも替へるべきか。賴むと有るに身を引くも孝行故、賴み少なき浮世とて、心短く持ち給ふな。此所は其の昔日本武尊東夷征伐の御時、一葉を結んで占形とし、吉凶を試み聖運開き給ひしより、吉凶の聲を象り桔梗が原と申すなり。爰まで落ちのび給ふ事、行末目出度き瑞相。此の萱原を左へ行けば越後街道、此の道案内が我等の寸志。ア、千變萬化の浮世や。」と朸擔げて別れ行く。忠孝仁義の武士も、卞和が璧の埋れ居て、光なきこそ是非なけれ。「エ、天晴侍かな。大將たる身の七珍萬寶にも、替へまく欲しきは仁義の武士、家名を問はざる殘念さよ。いざ先づ敎へし道筋へ。」と、萱踏み分けて入り給ふが、急度思案し、「なう衛門の前、武藏坊辨慶が雪中の藁沓逆に穿きたる例。今此の草分くる跡に、心を付け敵慕ふは必定。此の茂りに伏して、敵を欺り落ちのびん。」と、蓬葎を押し分くれば、萩のもとあら下はれて、幾年經りし猪の、のつたりと臥したる形「ア、怖や。」と衛門の姬縋り給へば、「大事ない〳〵。凄まじい猛獸なれど常は人に害せず、疵を受けては手負猪の千人力、さもなき中は彼方から人を怖がる證據、獵人を恐れ屈み臥すと覺えたり。我も暫く隱れ家。」と、雙び臥猪の萩の牀、草引き覆ひ忍ばるゝ、憂目ぞ戀の慣ひなる。村上が郎等、落合藤太鐵砲提げ驅け來り、「あの尾上より見たは只今、何方へうせた。」と手ん手に探す足輕共、「こりやこ

信玄は良將輝虎は勇將、あら面白の雲の戰ひ、何方が勝つとも負くるとも、主持たぬ身の氣散じ。」と、詠むる空も秋の日の、短き煙管取り出し、打つ石の火に立つ煙、淺間を羅宇に比べつゝ、煙草に餘念無かりけり。武田四郎勝頼、衞門の姫との浮き戀路、義清に言ひ探され、諏訪明神より立退き、爰に迷ひ彼所に隱れ、足も破れて血に染まる、茨萱の根小笹原、野路吹く風も追手かと、心は先に眼は後に、見歸り〳〵衞門の姫、勘介に礑と行き當り、「ア、御免なりませ。」と愕り驚く許りなり。勘介じろ〳〵尻目に掛け、「若い女子若い男、水入らずの二人連、ム、ハ、〳〵聞えた。親の極める緣はいや、貴樣ならでと頷き合ひ、壻の大事の誂へ饅頭、ほつかり割るは思案の外、野でも山でも此の道此の道。此方もちやつと柴刈つて、饅頭は喰はずとも、嚊が豆茶を賞翫致そ。」と打過ぐる。勝頼袖を引き留め、「推量に違はず、我々は親の許さぬ妹脊の中、人目を忍ぶ者なれども、互に女なし夫なし、聊か不義にはあらねども、脇から邪魔の横戀慕、此の姫を奪ひ取らんとの敵故に漂泊せり。近頃わりなき事ながら、夫婦を隱まひ得させよかし。武運開かば武士となし、今の恩を報ぜん。」と生まれ付いたる大名風、勘介莞爾と打笑ひ、「我とても胎内から、柴刈では無けれども、斯く荷瘤出來せしは一人の母に孝の爲。すは奉公望む程ならば、恐らく百貫二百貫の所領は胸に覺え有り。さりながら主取すれば討死し命を捨て、祿の恩を報ずるがこれ忠の道。母孝行とて身を庇へば、祿盗人の不忠者、

は言ふに及ばず、越後の國をも切り取るか甲州を取らるゝか、其の時恥を雪がんに何程の事。勝負は貴殿と信玄が、軍慮の深淺に有るべし。」と、事もなげに宣へば、「オ、豫て武田殿に對し、輝虎が弓矢も試みたく望む所、只今より刃を爭ふ敵と敵、新參の横田兵介是れへ來れ。」「はつ。」と言ふより信玄も、「進藤小平是れへ出よ。汝は元輝虎の家來、敵方の首取初め。」「オ、汝は元信玄が家人、軍神の血祭。」と、兩方兩人一度に拔討、兩將突立ち、「サア入魂は是れまで。重ねて戰場對陣の外、音信不通の證の杯獻いた。」「オ、獻すぞ。」と、提げたる首をかつぱと投げ合ひ、勇んで別るゝ武士の、矢橋の浪の音替へて、鬨の聲とぞ三重音に聞く、名も山深き信濃路や、岩間は苔に埋もれて、雲こそ雲を誘ひ行く、峯には伐木丁々として、谷の水音潺々たり。爰に三州牛窪の浪人、山本勘介晴幸と言ふ者有り。幼少にて父に離れ、母の撫育に人となり、學ばずして石公孫呉の兵術に通達し、其の名央に影隱す、片山人となら柴の、腰に草鎌山朸、暫し世渡る賤の男の、木曾の麻衣袖狹き、草の細道傳ひ行く、爰ぞ桔梗が原とかや。勘介眉に皺を寄せ、「當國信濃は山深く、常に雲は騷げども、やあら心得ぬ今日の雲氣、南は甲斐に續きて鹽尻峠、北は越後に鄰つて鳥居が嶽、兩方の頂上より、二筋出づる白雲の、中に當つて亂れ散り、さながら軍の場の如し。察する所甲斐越後兩家の確執疑ひなし。

せけり。兩家の上下どつと笑へば、輝虎も笑壺に入り、「何と武田殿、甲斐越後兩國に挾まれたる信濃の村上、貴殿我等の家風聞き習ひも致さぬか、扠不作法千萬。嘸家の自墮落推量致せし。」と、詞の下より越後に殘されし甘糟、近江が方より時付の早飛脚、息を切つて輝虎の御前に馳せ著け、「去る二十二日衞門の姫君、信州諏訪明神へ御參詣、武田勝賴と密通の戀慕にて、連れて國遠なされ、直江大和之介御供より直に尋ねに出で、未だ御在所相知れず。」と飛札を捧ぐる所に、甲州の留守居板垣兵衞が方より、飛脚の早打信玄の御前に大息つぎ、「去る二十二日若君勝賴公、信州諏訪明神へ御參籠、越後の姫君と豫ての戀路、御兩所連れて行方なく、御供の高坂彈正尋ねに罷り出づる趣、委しく是れに。」と差し上ぐる、兩家の飛札飛脚の口上、割符を合はせし如く、兩將息を詰め給へば、諸武士も御機嫌計り兼ね、しみこほつてぞ見えにける。剛氣の輝虎齒を切り、「緣付晩き娘は必ず不義の惡名立つと申し越したる村上、此の次第知つたか知らぬか、彼奴が詞にひつしと當つて此方閉口、長尾の家の侍大將にも足らぬ程の村上づれに、非太刀を打たれし輝虎が、一期の無念。」と、面色變じて火の如く、「此の恥辱何と雪がん。」と、睨み遣つたる信濃路や、頭に上るいけぶりは、淺間の嶽かと疑はる。信玄動ぜず、「倅勝賴其方の姫は言ふに足らぬ若き者女性、譽れも恥辱も親と親の聞にあり。村上は喧嘩の行司構はぬ事。所詮御分と信玄敵對し、人數を調練し、信濃國を戰の場と定め雌雄を決し、信州

婿となるのみならず、親一門の名を下す例、もし左樣の事候ては長尾のお家の疵、早く義清が妻と定め給へば、世間の人口を塞ぎ、且は輝虎公のお爲、御入國を待たず道中まで、使者を以て頼みの御祝儀、目錄の如く進上。目出度く御受納冀ひ奉る。」と口上も終らぬに、氣早き輝虎はつたと睨み「北陸道に弓矢を取つては、五畿七道に隱れなき長尾輝虎を知らぬか。娘を所望すれども否應の返事せず、契約も定めぬに尾籠至極な、押し付けて頼むとは、信州の片隅に、輝虎が廐にも足らぬ小城持つたると、傲つて我を侮るか。緣付遲き娘は不義の浮名立ち、親一門の恥辱になるとは、人も頼まぬ爲思ひ。我が娘に不義あれば相手を糺し、同罪に行ふ越後の國風、恥を雪ぐに義清は雇はぬ。道中なれば生けて歸す。進物持つてとつく歸れ。誰か有る使者め引摺り戾せ。」と、嚙み付く樣なる大音聲。荒肝取られ胴震へどもめいらぬ顏、「流石大國の大將とも覺えぬ無骨に候。信州に武士多けれども、村上が譜代の家老粕尾玄蕃、此の音物お氣に入らずば、其方より使者を以て返辨あれ。此の玄蕃悄々持つて歸らぬ。」と立たんとすれば、「憎い親仁め、それ彼奴に負はせて歸せ。」「承る。」と若手の近習大小捩ぎ取り翼締め、樽肴進物共一つに荷造り、脊中に負はせ、括げ付け／＼、「サア本國へ戾り馬、駄賃は主の義清から請取れ。」と、手足を取つて追ひ出せば、「エ、無法な主人持つた故、思はぬ面目失うた。」と主の*しがからさきに立て、家老の身にて意見せぬ、我が非は見えぬ鏡山、頰押し拭ひ逃げ失

「御聞きなされ信玄。被官筋が譽れを取り主筋が臆れを取る事も有るべし。武邊は氏系圖に依らず。輝虎聊か恥辱とは存ぜぬが、して何と思召す。」「仰せの如く腰拔の坊主官は愚か、座頭の官でも弓矢の疵には少しも成らず。信玄努々心に掛らず。去りながら足輕體には奇特々々。拔羣の健氣者。彼等が遺恨も晴るゝため、進藤小平とやらん申し請け、愚息勝頼が手廻に遣はせたし。信玄に給はるまじや。」「ム、しからば横田兵介とやらん、馬廻に召遣ひ槍一本の用に立てたし。輝虎に下さるまいか。」「なにがさて進ぜいでは。」「過分々々此方も進上まうす。コリヤ〳〵今日より進藤小平、武田の御家來。」「横田兵介、長尾殿の御家人ぞ。」「はつ。」と左右に入り替り、直に目見得の禮有り義有り和も有りて、「なう武田殿、船數もなき此の濱さぞ御難儀、船中せまくとも暫しの海上、いざ御同船申すまいか。」「仰せなくとも所望の存念祝著。」と船の遺恨の波風立たず、比良の暮雪と打解けて、見やる堅田の落鴈と、共に下り居る牀几の上、威將の會とも謂ひつべし。時に信濃國村上殿より御使者と、輝虎の奏者番披露して、「使者は年頃天窗つき、粕尾玄蕃。」と名乘り、三荷三種の樽肴白銀卷物、輝虎の御前に竝ぶれば、「是れへ〳〵御口上承らん。」とぞ仰せける。玄蕃愼んで、「此の度將軍家より輝の一字を御拜領、年來御勳功の印、お家の眉目是れに過ぎず。從つて御息女衞門の姫君、主人義淸度々所望致せども御許容なし。年長くるまで緣付遲き娘は必ず不義の浮名立ち、後には迎へ取る人なく、一期

されしが、漸う將軍義輝公の輝の字を貰ひ、景虎を改め輝虎と名乘ればとてをこがましい。先祖は鎌倉權五郎景政、代々源氏の被官筋、其の輝虎に船を貸し、此の港に一艘もないと申されうか。船印おつ奪つて、此方の印に立て替へろ。」とどよめく中、輝虎の足輕進藤小平、問屋の中より搖ぎ出で、「聞き度くない、武田信玄が大僧正、腰拔の坊主官、脚脛の態で、身が殿を信玄が被官船印追奪れとは、首がなくても奪られれば奪つて見よ。」と、拔くより早く切り掛けたり。翻りと外し拔き合はせ、口も口腕も腕、驅け拔け切り掛け受けつ外しつ、命を露塵土砂踏み立て、一寸去らず挑み合ふ。兩家の先手一時に來り、どつと落ち合ひ、漸う左右に引分け聲々に、「甲州の御家來横田兵介、越後の御家來進藤小平喧嘩。それ御馬留めませい、控へませい。」と呼ばはれば、急かぬ信玄血氣の輝虎、一散に馬乘り進め、兩方鐙踏み放し、馬上に式禮下々まで、列を揃へて蹲へり。「相手共是れへ呼び出せ。」「畏まつた。」と兩人を連れ出づれば、兩將馬より下り立ち、輝虎大聲上げ、「供先の喧嘩は普く諸家に禁むる所。意趣討か時の口論か、品に依つて主人と主人の確執となる儀あり。次第眞直に申し分けよ。」と有りければ、進藤小平愼んで、「事の起りは船諍ひ、長尾の家は權五郎景政の末孫、源氏の被官との惡言堪忍罷り成り難く、斯くの仕合。」と申す内より横田兵介、「信玄が大僧正は腰拔の坊主官と申し、雜口聞かせし無念、御免を蒙り身命果し申し度く。」と、二人が詞有の儘にぞ訴へける。輝虎呵々と打笑ひ

の耻辱を觸れ廻るに同じ。首尾能く先づ當所を引きとり、萬事國境を越しての談合。召具せられし下女僕婢、お供の旅體亂れぬ樣に御沙汰肝要。此方の供廻、作方正しく早行列。」と下知をなし、悠々として立ち歸る。高坂彈正槍彈正と、名に負ふ武士の一分別、名將の家風芳しき、梅檀の林崑崙の石玉の光の世々永き、武田の家ぞ三重類なき。爰も昔の都ぞと、名にし近江の湖や、言の葉に乘り船に乘り、渡る北國七里半、廻船の問丸屋、表には駄荷山の如く、濱には數百の船艤ひ、桐の薹の印立てさせ、揃ひの荒夫馳せ違ひ、「如意が嶽は早お越し、お先手はそれ其所へ。御荷物積んでなぜ船にね*まらない。」と、北國訛りの半髪額。越後國守長尾殿、滋賀の山越此の津より、御歸國とこそ知られけれ。大津八町の方より、武田信玄の足輕、五十人組の小頭横田兵介、問屋の門に大息つぎ、「船支配する家は是れな。亭主に逢はう。」と呼び出し、「音にも聞くらん甲斐國の主今日歸國、米原まで船に召されうとの仰せ。新羅明神へ御參詣のため、三井寺に御休息、追つつけ是れへ。大船二十艘小船六十艘急度用意申し渡いた。急げ〳〵。」と呼ばはれば、亭主驚き、「越後の殿樣長尾殿より、先だつて仰せ付けられ、御覽の如く浦々の船まで驅り集め、外には網船釣船ならで一艘も候はず。御大儀ながら瀨田へお廻り。今日の船の御用御免。」と頭を地に付くれば、「身が殿は新羅三郎義光公の末孫、淸和源氏の嫡々、首尾能く參内院參、忝くも大僧正に任官、足利將軍も御尊敬の筋目。越後の長尾も上洛は召

江も仰天、村上彌嵩に掛り、「扨こそ〳〵神前にて不義の科顯はれし。當國の神の利生を見よ。主を失ひ武士は立つまじ。剃りこぼつて願人坊主、鉢開け。」と、嘲られ腹にするゐかね、切つて出づる大和之助を、高坂押へて、「武士の立たぬ事些ともない。彈正に任されよ。」と野袴の裾高く插んで身繕ひ、「これ村上、姫勝賴兩人は義淸が預り置くと、一國の大名の番ひし詞、失念は有るまじ、サア預り者なぜ逃した、何國へ落せし。サア聞かんサア言へ。」と、氣の付かぬ所の理窟詰。村上はつと當惑すれば、大和之助も力を得、「本人の行方隱すは、相見にて落せしな。科の元は預り主。御兩所の行方知るまでの人質、我が國へ連れ歸る、サア來い步め。」とねだり度い程ねだられ、無念々々も澀面許り、一言の返答なく、「大事の科人、直江殿いざ繩を掛けまいか。」「オ、尤も。」と、手ぐすね引いたる英雄の頰魂。「ア、鬱憤道理〳〵々々。所詮宿したる神主めが不屆、腹癒には神主始め彌宜めら殘らず、切つてなりとも搦めてなりとも、夫れに足らずば明神の社壇打ち毀ちなりとも、此の義淸構はぬ〳〵。」と言ひ捨て歸るも足早なり。高坂直江遙かに見やり打頷き、「一通を拜見すれば、豫て商人の便りに文を通はし契約の中、義淸に紀され恥を見んも口惜しく、暫く影を隱すとの書置。」兩人はつと呆れしが、「なう直江殿、申しても兩國守の姬君若君、御一門は廣し家來は多し、土民百姓を賴み給ひても、御身を寄せらるゝは自由。御行先に氣遣ひなし。兎角餘所の領分にて、騷ぎ狼狽へ尋ねては、面々主君

を以て案内する法。況んや當社は我が分内、一應の屆けもなく踏込む慮外至極。凡そ繪馬は神馬を表する物なるに、あれ見よ信玄乘馬の毛色甲斐の黑駒、馬取も留め兼ぬる驅馬の勢ひ。必定村上が領分へ馬を入れ、信濃一國押領の威勢を顯はす爲な。殊に衞門の姫は親景虎に某所望仕かけ女房同然。然れば直江兄弟は家來分、主從の禮儀知らぬか。」と、言ふより堪へぬ若者、「何々と、直江兄弟を家來とは、兒山城守實綱、此の大和之介時綱が事か。我々は越後國守長尾景虎公ならで、天が下に主君なし。御邊に一粒の扶持は得ず、家來とは推參千萬。ま一度言へ、延び過ぎた舌の根切り下げん。」と躍り出づるを高坂彈正「暫し〳〵。大事の姫君御供、我等も若旦那の供、理の非のと言ふ所でなし。平に平に。」と押し鎭め、案内なく御領內へ立越せしとの御憤怒り御尤も。さりながら使者を以て御案内申さば、道筋掃除等傳馬以下御馳走仰せ付けらるゝ、御心遣ひを遠慮に存じ、差控へ不念となるは心の外、眞平御宥恕下さるべし。」と手を束ね慇懃の勝に乘り、「ヤア拔何言ふまい。勝頼と衞門の姫密通し、某が領內を忍び合ひの宿にせられ、鼻毛をよまるゝ村上ならず。不義者の男女、落居するまで此の義淸が、預り置き動かせぬ。兩人共に置いて歸れ。身が者共神主が屋敷を取り卷き、大事の預り者油斷なく警護々々。繪馬踏割れ叩き破れ。」と犇く所に、お供の局下女腰元、「なう情なや姫君樣勝頼樣何時の間にかは行方知れず。牀にお文を殘されし。」と差し出す一通彈正おつ取り、懷中すれば直

高坂が女中同日の參り合はせ、時節惡しと思ふ氣色、量り兼ねて在す所に、長尾の家の子直江大和之介時綱する〳〵と立ち出で、「御遠慮痛み入り候。主人景虎願ひありて上京に付き、其の祈りとして參詣。信玄公にも御上洛とや。定めて同じ御祈。褥も新調御會釋に及ばず。御著座有る樣に仰せ上げられい高坂殿。」「扨々御丁寧の至り忝し。此方は遲からず、先づ姫君樣より。」「否是非とも〳〵其方より。」「いや何時までも。」と辭儀も半途に衞門の姫、包む人目を洩れ出でて、「お辭儀の有るは男同士。殊に親御樣と我が身親、水と魚とのお緣とや。女なれども其の子なれば、身を浮魚の寄邊を賴む、誘ふ水はそもじ樣、いざ拜殿へも一所に。」と手を取れば取り替す、越後縮の雪じやれば、京も及ばぬ手觸りに、勝賴臆めず打連れて、一つに縋る鐘の緖や、互に見ぬ戀聞く戀の、今こそ諸願成就と、神に誓ひの囁きは、如何なる仇の鰐口も、言ひ探されぬ中ならし。時に廊門の神人遽しく、「當國の殿樣村上左衞門義淸公、各へ對面あるべきとて、只今是れへ。」と申し上ぐれば勝賴、「應答も難し兩人逢うて挨拶有れ。我は何方へぞ外したし。」と、宣ふ間に村上が馬の嘶く聲。「幸ひ此方の姫神主方に寄宿。苦しからずば此方へ。」と思はず知らず案内する、大和之介にのり移り、此の仲人や諏訪の神、海より深き緣とかや。村上左衞門義淸神前まで道具立てさせ、莞爾ともせず、「ヤア直江高坂、主達は一國の家老、弓矢の法存ぜずとは言はせぬ。假令道中筋にても、他の分國を通るには、先へ使者

信州川中島合戰

第一

森々たる人品千丈の松の如く、磥々として節多く、砢々として目高しと雖も、大厦に施す時んば棟梁の功用大いなるかな。勇將は人を見智將は人を知る。是れを兼ぬる名將新羅三郎十九代の後胤、甲斐の先生武田大膳大夫晴信入道信玄居士、御世子四郎御曹子勝頼君、家も紫蘭の芽を出せり。此の度御父信玄の上洛、官位の願ひ成就武運長久の祈り、竝びの國信州諏訪明神に參籠あり。寄進の繪馬に珠玉を飾り、寫し馬舍人を引立て、驟み嘶ゆる狩野が丹靑、馬も祈願も懸け奉る御神前、禰宜宮奴は祝詞を繰りて、幣帛を大牀に捧げ、巫女少女は裙帶を引いて透廊に舞ひ奏づる、儀式も更に神々し。勝頼庭上に再拜し、拜殿に上らんとし給へば、執權高坂彈正御袖を扣へ、「見申せば拜殿に褥を敷き座を構へ候。是れ〳〵禰宜衆あれは此方の爲か、但し外の設けなるか。」と問ひければ、「さん候越後の太守長尾景虎殿の御息女、衞門の姬君あの松の木陰に、春駒書いたる繪馬を上げ、追つつけ御社參の用意、只今神主方に御休息。」と、申すに付けて傳に聞く衞門の姬、是れ幸ひに見まほしと思せども、

引敷き、縄三寸に縛め上ぐれば、はや町中が驅け付け〳〵、直に引立て引き出す、果ては千日千人聞き、萬人聞けば十萬人、殘る方なく世の鑑、傳へて君が長き世に、淸からぬ名や殘すらん。

女殺油地獄 終

ぐわらりと逃げ出づる、門の前に兩三人、「どつこい捕つた。」と、胸がい擢んで捻ぢすうるは、撿非違使の別當※大理の廳の官人なり。跡に續いて伯父森右衞門聲をかけ、「最前より各表に立ち給ひ、家内の一々殘らず聞き屆けられしぞ。必ず未練に陳ずるな。エ是非も無やナ、世間の風說、十人が九人おのれを名ざす。聞く度に此の伯父が心の中を推量せよ。事顯はれぬ先遠國へも落すか、さなくば自害をすゝめ、恥をかくしくれんと、新町曾根崎行く先々を尋ねても、跡へまはり〳〵、出合はぬは汝が運の極め。それ太兵衞其の袷是れへ〳〵。則ち五月四日の夜著し出でたる汝が袷、所々のきはづきこはばり、大理の廳より御不審。只今證跡の實否、汝か命生死二つの境なるぞ。誰か有る酒々。」「あつ。」と言ふよりちろり燗鍋、手ん手に引提げさら〳〵さつとこぼしかけ、かかる甥持ち弟持ち、心を碎く涙の色、酒鹽變じて朱の血汐。伯父甥顏を見合はせて、「あつ。」とより外詞なく、呆れ果てたる許りなり。與兵衞覺悟の大音上げ、「一生不孝放埒の我なれども、一紙半錢盗みといふ事つひにせず。茶屋傾城屋の拂ひは、一年半年遲なはるも苦にならず。新銀一貫匁の手形借り、一夜すぐれば親の難儀、不孝の科勿體なしと、思ふ許りに眼付き、人を殺せば人の歎き、人の難儀といふ事に、ふつつと眼付かざりし。思へば二十年來の不孝無法の惡業が、魔王と成つて、與兵衞が一心の眼を眩まし、お吉殿殺し金を取りしは河内屋與兵衞、讎も敵も一つ彼岸、南無阿彌陀佛。」と、言はせもあへず取つて

の善兵衛刷毛の彌五郎、河内屋與兵衛、三人連で參りしと咄せしが、其の割付に極まつた。お吉を殺し手も大方是れで知れました。三十五日の逮夜に當り、鼠が是れを落すといふも、亡者の知らせに疑ひ無い。是れも佛の御恩德。ア、南無阿彌陀。」とひれ伏して、喜ぶ心ぞ道理なる。氣味惡ながら折々の、とひ訪れも我がしたと、人に言はれじさとられじと、一倍横柄そらさぬ顏、「河内屋の與兵衛でやす。」とつつと入り、「つい三十五日の逮夜になりましたの。殺した奴もまだ知れず氣の毒千萬。したが追付知れましよ。」と、我と口から向うの吉左右。七左衛門尻ひつ褰げ寄棒押取り、「ヤイ與兵衛、女房お吉をよう殺したな。汝は爰へ縛られに來たか。遁れはない。」と棒振り上ぐる「ア、七左衛門聊爾するな。シテ己が殺した其の證據は。」「いふな〳〵。野崎詣りの割付、十匁一分五厘といふ書付、所々に血も付いて汝が手に紛ひ無い。此の外に證據が入るか。同行衆捕へて下され。」と、攫みつかん其の勢ひ、南無三寶現はれしと、突き上ぐる胸の動氣ぢつと押へて苦笑ひ、「此の廣い世間幾人も似た手が有るまい物でなし。野埼詣りの入用は己がもめ、割付も何にも知らぬ。よい年をして馬鹿ひろぐな。汝等までも同じ樣に立ち騷いで何とをる。」「まつかうする。」と、攫み付くを取つて投げ、寄れば蹴倒し踏みこかし、一世一度の力の出し場、棒ねぢたくり一振ふれば、「わつ。」と逃ぐる隙を伺ひ逃げんとすれば、「ソリヤ逃すな。」と追取りまく。小庭の内を追ひつ返しつ、二三ど四五ど隙を見合はせ、潛

まし。此の世こそ劍難の苦しみはあれども、未來は諸々の業苦をのぞき、本願往生疑ひはよも有るまじ。此の御催促に心驚き、彌一遍の稱名を喜んでお勤めなされ、必ず歎かせらるな七左殿。殺し手も其のうち知れませう。只御息女の介抱が第一。先だつ人も夫れをこそ滿足。」と示せば有り難涙ぐみ、「左樣とも〳〵。お吉がことは思ひ忘れ、是れも如來のお蔭と、信心堅固に喜びを重ね、行住坐臥に稱名は缺かしませぬ。さりながら乙のおでんめは二つ子、乳が無うては不便に存じ、死んだ翌日金付けて餘所へもらかします。姉はよういひ聞かせたれば合點して、香花の切れぬ樣に、佛壇について許りゐますが、なう中娘が朝から晩まで、母樣々々というて泣え居ります。是れには困り果てました。」と、ちやつと後の壁向いて、聲を呑んだる啜り泣き、「尤もさこそ。」と同行衆も、濡らさぬ袖は無かりけり。折節居間の桁梁、通る鼠の怪しからず、蹴立て蹴かくる煤埃、故紙をちらりと蹴落して、鼠の暴れは靜まりぬ。「ソレ何やら落ちた七左殿。」「誠に是れは。」と取り上げ見れば、半切紙に一つ書、「十匁一分五厘、野崎の割付、五月三日。」と許りにて、誰から誰への名宛もなく、色こそ變れ所々血に染まつたる書出し一通、「不思議の物。」と手に取り廻し、「是れは誰やら見た手ぢやわいの。」「我等もどうやら見た手の風。ア、河内屋の與兵衞々々。」「それよ〳〵。」と四五人の、口も與兵衞に極まれば思ひ出して七左衞門、「誠に死んだ亡者が物語。四月十一日我等夫婦、野崎詣り致せし日、皆朱

ざわ〳〵と何ぢやの。有所の知れた紙入、明日なととらんせ。」「否さうで無い〳〵。懐中が重たう無ければ、ずんと遊ぶ心がせぬ。」と、袖引き放し二人連、根から忘れぬ紙入の、からせい吐いて急ぎける。熱い茶四五服飲む程の、間も隙さず森右衛門、行燈目的に花屋の門口、「花車に逢はう爰へ〳〵。」と呼び出し、「河内屋與兵衛が跡追つて參つた。二階に居るか下座敷か。罷り通る。」とつゝと入る。「是れ是れ申し新町に紙入忘れたとて、たつた今お歸り。」「何だ歸つた。」「まだ梅田橋越すか越さずか。」「是れはしたり又跡へん。然らば明日にも與兵衛が參り次第、酒でも飲ませ爰に留め置き、早々本天滿町河内屋徳兵衛方まで急度知らせ。只今參りがけ櫻井屋源兵衛へも立ち寄り、吟味致せば五月四日の夜、大金二兩錢八百請取つたと有る。爰元へは何程拂つた。隱しては其方が爲にならぬ、眞直に言へ眞直に言へ。」「私方へも五月四日の夜に入つて、大金二兩錢一貫文。」「シテ其の夜は何を著て參つた。」「廣袖の木綿袷、色は慥か花色か、確乎とは覺えませぬ。」「ムウよい〳〵、はひれ〳〵。」と言ひ捨てて、元來し道を引返し、又新町へと 三重和讃「變生男子の願を立て、女人成佛誓ひたり。願以此功德平等施一切、同發菩提心往生安樂國。釋の妙意三十五日お逮夜の志。」お同行衆寄り集まり、勤めも既に終りける。中にも同行中の老體、帳紙屋五郎九郎、「昨日今日の樣に思ひしが、早三十五日の逮夜に罷り成る。二十七を一期として不慮の横死。平生の心立人にすぐれ、上人の御恩德報謝の心も深かり

花屋にたどり寄る。後家のお龜出で迎へ、「たま〳〵見えるお宮にこそ、ようお出でが相應なれ。與兵衞樣は爰が家。ちと風變り、御出でを止めて戻らしやんしたか。小菊樣呼びましや。內は上下座敷もつまる。濱の牀几で大きく酒盛、きり〳〵と吞みかけましよ。小菊樣サァ爰へ。行燈に油さしやや。油の次手に油屋の女房殺し、酒屋に仕替へて幸左衞門がするげな。殺し手は文藏憎いげな。與兵衞樣まだ見ずか。小菊樣連れましてちとお出で。お杯持つてこい。」と、只獨りでべり立つる。「後家たしなめ。ちと人にも物言はせい。生まれて與兵衞こんなむさい牀几の上で、酒飮んだ事なけれど、今日は許す。東鄰借り足して、與兵衞が座敷分に一つこしらや。材木大工諸色諸入目見事に我等仕る、きつい物か〳〵。エけびた此の蒲鉾の薄い切りやうは。」と僭上たら〳〵暴れ酒、しばらく時をぞ移しける。「與兵衞こゝに居るか。知らす事が有つて來た。」と刷毛の彌五郎牀几に腰かけ、「汝を侍がさがすぞよ。」「ヤしてそりやどんな侍が。」と胸にぎつくり横たはるも、心に包む惡事の塊、俄に顚倒うろ〳〵眼。「ハテきよろ〳〵すないやい。昨日から兄が所へ來て居る侍ぢやとやい。」「ア、夫れで落付いた。高槻の伯父森右衞門。」逢うては難儀爰へ尋ねて來うもしれぬ。早うはづして逢ひとも無いと、思へど急にも立たれねば、何がな機にと見廻し〳〵、「ア、思ひ出した。新町に紙入忘れて來た。中に呻く程金入れて置いた。つい一走り取つてこう。刷毛も來い。」と立ち出づる。小菊引き留め、「ア

逢はんもの。」と、待つ間程なく戸を開き、編笠被き立ち出づる。すかさずむずとひんだかふる。女郎も續いて、「こりや誰ぞ。卒爾せまい。」と引き分くる。「苦しからず卒爾で無い。汝與兵衛め匿れたらば逢ふまいか。」と笠引きちぎり顏見合はせ、「ヤァこりや與兵衛で無い人違へ。まつ平〳〵面目なや。」と腰折つて手をすれば、きやつも忍びの戀やらん、うなづく許り顏かくし、東の方へ走り行く。「河内屋與兵衛に深い中と音に聞く松風殿、昨日にも今日にも、與兵衛は爰元へ參らずか。氣遣ひの無い用事有つて尋ねる者。隱されては彼が爲ならず。サア眞直が聞きたい〳〵。」「まちつと先に見えまして、是れから直に曾根崎へ、かなはぬ用とてござりんした。」「なんぢや曾根崎へ。南無三寶遲かつた。拙者も跡から參らずば成るまい。次手にも一つ尋ねませう。五月の節句前か後か、六月へ入つては漸う六日。其の間に爰元で金銀のはらひ、金澤山に使うたことはござらぬか。是れも隱さずお知らせなされ。」「どうござんすぞ金のことは存じませぬ。やり手にお問ひなさりんせ。」と、いひすて局についと入る。「是れは我等不調法。よしそれとも與兵衛に逢へば知るゝこと。道も知つたる曾根崎へ、たつた一飛び一走り。」と尻三のづまでひつからげ、もみにもうでぞ 三重 唄 君を待つ夜はよや〳〵よ、西も東も南もいやよ、兎角待つ夜は北がよい。さきにも待ちながら、こちからひたと行き通ふ、道の犬さへ見知る程、うつゝ拔かせし河内屋與兵衛、小菊にあふせを田面のかりよ、新町の花見棄てて蜆川、爰の

ばする揚屋客、扇で忍ぶ茶屋の客、一座あそびは女房めく。肩で風切るからぞめき、位を問ふは田舎客、寝て物語る馴染客、太鼓過ぎてと囁くは、女郎の手もめの振舞客、親おや方の没却有り、我が身上の滅却有り、＊いきやくも交り行き通ふ、道の間をしばらくも、口たゞ置くは恥らしく、役者物まね地の物まね、小唄淨瑠璃口てんがう、西口東口々に、行くも歸るもさはり無き、夕々の大寄は、豐かなる世の勳なり。されば山本森右衛門、與兵衛が身持の知らせに驚き、暫く主人に暇請ひ大坂へ立越えしが、女殺して金取りしも、慥かに夫れとは知れねども、衆目の視る所與兵衛に指さす身の放埒若しやと詮議も寄り付かねば、先々尋ね郭の内、東口にて尋ねしに、＊そんじよ其處とは教へしかど、何れも同じ局のかゝり、爰や備前屋、是れや教へし備前屋かと、見まがひたゝずみ居る折ふし、手にかさ高な文持つて、西の方からくる禿。「是れ〳〵物問はう。備前屋と申す傾城屋は何方。其の御内に松風殿と申す傾城、御存じならば教へてたべ。我等當所不知案内。賴み入る。」とぞかたくろし。「フゥしさいらしい物の言ひ樣。備前屋は此の家、西の端に戸のさいた、客の有る局が松風樣でござんす。コレお侍樣、左の足あげさんせ、ソレ〳〵又右の足も上げさんせ。オ、よう上げさんした。いかい世話の。」と弄つてひんしやん行き過ぐる。「所柄とて人に馴れ、氣輕い奴。」と打笑ひ、教へし局に立ち寄れば、内に火影は有りながら、戸口犇と立て詰めたり。「扨こそ客は與兵衛に極まる。出づるを捕へ

口で申せば人が聞く、心でお念佛南無阿彌陀、南無阿彌陀佛。」と引き寄せて、右手より左手の太腹へ刺いては抉り拔いては切る。お吉を迎への冥土の夜風、はためく門の幟の音、あふちに賣場の火も消えて、庭も心も闇やみに、打ちまく油流るゝ血、踏みのめらかし踏みすべり、身内は血潮のあかづら赤鬼、邪見の角を振り立てて、お吉が身をさく劒の山、目前油の地獄の苦しみ、軒の菖蒲のさしもげに、千々の病はよくれども、過去の業病逝れえぬ、菖蒲刀に置く露の、たまも亂れて 三重 いき絶えたり。日頃の強き死顏見て、ぞつと我から心もおくれ、膝節がたく／＼がたつく胸を押しさげ／＼、さげたる鍵を押取つて、覗けば蚊帳の打ちとけて、寐たる子供の顏付さへ、我を睨むと身も顫へば、つれてがらつく鍵の音、頭の上に鳴神の、落ち掛るかと肝にこたへ、戸棚にひつたり引き出すうちがひ、上銀五百八十匁、背に聞きたる心當り、ねぢ込みねぢ込む懷中の、重さよ足もおもくれて、薄冰を履む火焔踏む。此の脇差は栴檀の木の橋から川へ、沉む來世は見えぬ沙汰、此の世の果報の付く時と、内をぬけ出で一さんに、足に任せて 三重 おしてるや、浪華の春は京に負け、京は浪華の景色より、おとるみな月夏神樂、郭四筋は四季ともに、散ること知らぬ花揃ひ、よねの風俗揚屋のかゝり、富士も及ばぬ戀の山、第一日本の名所なり。一年三百六十日、紋日が三日足らぬとて、くつわはなげく、女郎は其れ程客に厄介を、變替に行く客も有り、好んで頼み頼まるゝ、客は一際いかつけに、駕籠を飛

誓言立てても成りませぬか。ハァはあ何とせう、借りますまい。」と、いふより心の一分別、「そんなら此の樽に油二升取替へて下さりませ。」「夫れは互の商ひ内、貸借せいでは世がたたぬ。成程つめて。」と賣場に掛り、消ゆる命の燈火は、油量るも夢の間と、知らで升取る柄杓取る、後に與兵衛が邪見の刀、拔いて待てども見ず知らず、「祝うて節句もお仕舞ひなされ。こちの人ども割り入つて相談、有る金なれば役に立てまい物でなし。五十年六十年の夫婦の中も、儘にならぬは女の習ひ、必ず私を怨んでばし下さるな。」といふ内に、ともしに映る刃の光、お吉びつくり、「今のは何ぞ與兵衛樣。」「イヤ何でも御座らぬ。」と脇差後に押し隱す。「それ〳〵急度目も据つて、なう恐ろしい顏色。其の右の手爰へ出さしやんせ。」「おつ。」と脇差持ちかへて、「是れ見さしやれ、何も無い〳〵。」と、言へどもお吉身も戰々、「ア、こな樣は小氣味の惡い。必ず傍へ寄るまい。」と、跡退りして寄る門の口、明けて逃げんと氣を配れど、「ハテきよろ〳〵何おそろしい。」と、付け廻し〳〵、「出合へ。」と喚く一聲、二聲待たず飛び懸り取つて引き絞め、「おとほね立つるな女め。」と笛の鎖をぐつと刺す、刺されて惱亂手足を踠き、「そんなら聲立てまい。今死んでは年はもいかぬ、三人の子が流浪する、其れが可愛い、死にとも無い。金も入る程持つて御座れ。助けて下され與兵衛樣。」「オ、死にともないはず尤も〳〵。此方の娘が可愛い程、己も己を可愛がる親父がいとしい。金拂うて男立てねばならぬ、諦めて死んで下され。

たと疑はれ、いひわけに幾日かゝつたやら。なううとましや〱。歸られぬ内其の錢持つて、早ういんで下さんせ。」といふ程傍へにじり寄り、「不義になつて貸して下され。」「ハテならぬと言ふにくどいくどい。」「諄う言ふまい貸して下され。」「イヤ女子と思うて弄らしやると、聲立てて喚くぞや。」「ハテ與兵衛も男、二人の親の詞が、心根に浸みこんで悲しいもの、弄るの侮るのといふ所へ行く事か。何を匿しませう、跡の月の二十日に、親父の謀判して上銀二百匁、今晩切に借りました。ヤまあ跡を聞いて下され、手形の表は上銀一貫匁、借つた金は二百匁、明日になれば、手形の通り、一貫匁で返す約束。夫れよりも悲しいは親兄の所はいふに及ばず、兩町の年寄五人組へ先樣からことわる筈、今に成つて此の金の才覺、泣いても笑うても叶はぬこと。自害して死なうと覺悟し、是れ懷に此の脇差、差しは差いて出たれども、只今兩親の歎き御不便がりを聞いては、死んで此の金親父の難儀に掛くること、不孝のぬり上げ身上の破滅、思ひ廻せば死ぬるにも死なれず、生きては居られず、爲方なさに見掛けての御無心ぞや。無ければ是非もなし、有る金たつた二百匁で、與兵衛が命を繼いで下さるゝ御恩德、黄泉の底まで忘れうかお吉樣、何卒貸して下され。」と、いふ目の色も誠らしく、さうした事もと思ひながら、兼ての僞り是れも又、其の手よと思ひ返して、「フウ、まが〱しいあの虚言わいの。まだ尾鰭付けていはしやんせ。ならぬと言うてはきつうならぬ。」「是れ程男の冥利に掛け、

よ。」と、餘所の方から裏問ひける。「誰かとこそ思うたれ與兵衛樣か。こな樣は仕合な。後とも言はずよい所へござんした。是れ此の錢八百此の粽、こな樣へやれと天道から降りました。戴かしやんせ。何ぼ浪人でも極の日の寶、まんがなほろ。」と差し出せば、與兵衛ちつとも驚かず、「是れが親達の合力か。」「ハテ早合點な。追ひ出した親達が、何のこなさまへ錢金を遣らしやんしよ。」「いや隱さしやるな。先にから門口に蚊に喰はれ、長々しい親達の愁歎聞いて、淚をこぼしました。」「ム、そんなら皆聞いてか、よう合點參りしか。他人でさへ目を泣きはらした。此の錢一文も仇にはなるまい。肌身に付けて一稼ぎ、お二人の葬禮に、立派な乘物に乘せうといふ氣が無ければ、*男でも杌でも無い。夫れを御背きなされたら、天道の罰佛の罰、日本の神々の逆罰が當つて、將來が能う有るまい。先づ戴いて。」と差し出せば、「如何にも〳〵よう合點しました。只今より眞人間に成つて、孝行盡す合點なれども、肝心お慈悲の錢が足らぬ、というて親兄には言はれぬ首尾。爰には賣溜掛の寄金も有る筈。新で唯二百匁ばかり、勘當の許りるまで貸して下され。」「それ〳〵〳〵、奧を聞かうより口聞け、どこに心が直つた。譃にも金貸してくれとはいはれぬ義理。世間の義理を缺いても、金借つて惡性所の拂ひして、跡から段々行かうでな。成程金は奧の戶棚に、上銀が五百匁餘り、錢もありはありながら、夫の留守に一錢でも、貸すことはいかな〳〵。いつぞやの野崎參り、著物洗うて進ぜたさへ、不義し

けんと慳貪に言うたれど、心で三度戴きし。何を隠さう彼奴は立派好もする奴、取りわけ祝月鬢付元結を調へ、人交はりもしたからう。生まれて此の方節句々々、祝儀缺かぬに此の月許り、身祝ひもしてやりたさ、見苦しい此の恥辱をさらすも、お吉樣賴んで屆けん爲。まだ此の上に根性の直る藥には母が生肝を煎じて飲ませといふ醫者あらば、身を八裂も厭はねども、一生夫の錢金、文字ひらなかちがへぬ身が、子故の闇に迷はされ、盜みして顯はれた。恥かしゆござる。」と許りにて、「わつ。」と叫び入りければ、「道理々々。」と夫の歎き、子を持つものは身にこたへ、行末思ふお吉の淚、折からに泣く蚊の聲も、いとゞ淚を添へにけり。「ヤ祝日に心もない泣きわめき不調法。其の錢もお吉樣賴み、與兵衞にやつてお暇申しや。」と、いへども女房淚にくれ、「こな樣の遣つて下さる其の深い心ざしに、盜んだ錢が何と遣られうよ。」「ハテ大事無いひらに遣りや。」「いや許して下され。」と、女夫が義理の遣るかた無さ、お吉も淚とゞめかね、「ア、お澤樣の心推量した、遣り難い筈。爰に捨てて置かしやんせ。私が誰ぞよさそな人に拾はせましよ。」「ア、忝い。とてものお情此の粽も誰ぞよさそな犬に、喰はせて下さんせ。」と、又泣き出す兩親の、心隔てぬくゞり戸も、子の不孝より落ちたるくろゝ、開けて夫婦は歸りけり。父母の歸るを見て、心一つに打ちうなづき、脇差拔いて懷に、さいたるくゞりさらりと開け、つゝと入るより胸もくろゝも落し付け、「七左衞門殿は何方へ。定めて掛も寄りまし

ては親となる、親の始めは皆人の子、子は親の慈悲で立ち、親は我が子の孝で立つ。此の德兵衞は果報少なく、今生で人は使はずとも、いつでも相果てし時の葬禮には、他人の野送り百人より、兄弟の男子に先輿跡輿舁かれて、遖れ死に光りやらうと思うたに、子はありながらその甲斐なく、無緣の手にかゝらうより、いつそ行き倒れの、*しやかになひがましでおぢやるわ。」と、又むせ返るぞあはれなる。「ア、與兵衞め許りが子では無い。兄の太兵衞、娘なれどもおかちは此方の子でないか。サア〳〵早うさきへ。」と押し出す。「ハテ去ぬるなら連立たう。其方もおぢや。」と引き立つる。母の袷の懷中より、板間へぐわらりと落ちたは何ぞ、粽一はに錢五百。「なう情なや恥かし。」と、我が身を蔽ひ押隱し聲を上げ、「德兵衞殿眞平許して下され。是れは內の掛の寄り、與兵衞めに遣りたい許り、私が五百盜んだ。二十年添ふ中隔心隔ての有る樣に情ない。縱ひあの惡人め、お談義に聞く樣な、周利槃特の阿房でも、阿闍世太子の鬼子でも、母の身で何の憎からう。いかなる惡業惡緣が胎內に宿つて、あの通りと思へば、ふびんさ可愛さは、父親の一倍なれども、母が可愛い顏してはへだてた心に、餘り母があいだてない強張が強うて、いよ〳〵心が直らぬと、さぞ憎まるゝは必定と、態と憎い顏して、ぶつつたゝいつ追ひ出すの勘當のと、酷うつらうあたりしは、繼父の此方に、可愛がつて貰ひたさ。是れも女の廻り智慧、許して下され德兵衞殿。私に隱してあの錢を遣つて下さる心ざし、詞ではけん〳〵

いや何方も今宵のこと、萬事のお邪魔。是れ此の錢三百女房が目顔を忍び、つい懐へ入れて出た。與兵衛めがうせたらば、追付暑氣に赴く、さつぱりと肌の物でも買ひをれと、ゆめ〳〵我等の名を出さず七左殿の心付か、如何なりとも御機轉頼み入る。」と差し出す。後の門口、「お吉樣お仕舞か。」と、おとづるゝは女房お澤が聲。徳兵衛びつくり、「ハツ逢うては氣の毒隱れたい。卒爾ながら御免なれ。」と、かくるゝ蚊帳のうしろ影、「是れ徳兵衛殿、我が女房にかくるゝとは何事。」と、聲かけられて夫も敗亡、お吉もどまぐれ挨拶なく、そとには與兵衛「サア母のかまがわせた*。何いはるゝ。」とくるゝの穴、耳を付けてぞ聞きゐたる。女房お澤腰打ちかけ、「ナウ徳兵衛殿、七左衛門樣もお留守といひ、内の事はそこ〳〵に、何時あはうと儘の向ひどし、互に忙がしい際の夜さ、爰へは何の用がある。悪性する年でもなし。ムウ又與兵衛めが事くやみにか。如何に繼しい子なればとて、あんまりに義理過ぎた。眞實の母が追ひ出すからは、此方の名の立つ事はない。此の三百の錢のらめに遣るのか。つねづねに身をひづめ、しまつしてあいつに遣るは、淵へ捨つるも同然。其のあまやかしが皆毒害。此の母はさうではない。サア勘當といふ一言口を出づるが其れ限り、紙子著て川へはまらうが、油ぬつて火にくばらうが、うぬがざんまい。悪人めに氣を奪はれ、女房や娘は何になれ。サア〳〵先へいなしやれ。」と、引き立つる袖ふり放し、「エ、かゝ酷いぞやさうで無い。生まれ立から親は無い、子が年よつ

寶。」と鎖いたる店に平蜘蛛の、ひつたり身を付け身を忍ぶ。德兵衞は氣も付かず、手島屋の潛そつと明け、「七左衞門殿お仕舞か。」とつゝといれば、「是れは〱德兵衞樣、こちのはまだ仕舞はず、天滿の端まで行かれます。私は取紛れお見舞も申さぬに、ようこそ〱。此の程は與兵衞樣の事につき、いかいお世話でござんしよ。」と蚊帳より出づれば、「されば〱此方は稚い娘御達の世話、我等は成人の與兵衞に世話を燒く。何れの道にも子に世話やむは親の役、苦勞とも存ぜねども、引付けて一所に有る中は氣も落付く。あの樣に無法者を勘當すれば、やけを起し明日火に入るも構はず、謀判似せ判、壹貫匁の手形して、一生の首繫がるゝ例もある事と思ひながら、產の母の追ひ出すを、繼父の我等輕薄らしう留められず。聞けば順慶町兄が方に居るとやら。もし此の邊へ狼狽へて見えましたら、七左衞門殿御夫婦言ひ合はせ、父親は合點、隨分母に詫言いたし、どしやう骨入れ替へ、二度內へ戻る樣に、御意見偏に賴み入る。こちの女房お澤が一家一門皆侍。其の習はしか思ひ切つては見返らず、義理がたい生まれつき。其れに似ぬ道樂者。本親の旦那も行儀強く、義理も情も知つたる人。二人の子供に心を盡すは、皆故旦那への奉公。今與兵衞めを追ひ出し、一生荒い詞も聞かぬ親方に、草葉の陰より恨みを受くる。無果報は此の德兵衞一人。推量なされお吉樣。」と煙草に淚まぎらして、むせ返るこそ道理なれ。「ムウ、思ひやりました。こちのも追付歸られう。逢うてお話しなされませ。」「いや

は眠たうござらぬ。」と、言ひつゝ眠るもおとなしし。此の節季越すにこされぬ河内屋與兵衛、手筈の合はぬ古袷、心許りが廣袖に、提げたる油の二升入、一生差さぬ脇指も、今宵こじりの詰りの分別。勝手知つたる手島屋の、門の口覗く後より、「與兵衛殿ぢやないか。」「オ、與兵衛ぢやが誰ぢや。」と振り返れば、上町の口入綿屋小兵衛、「ア、此方は順慶町へ行けば、本天滿町親御の所へと言はるゝ、親御へゆけば追ひ出したこゝにはゐぬと有る。貴樣は留守でも判は親父の判。新銀一貫目、今宵延びると明日町へ斷る。」「ハテ爰な人はいきかたの惡い。手形の表こそ一貫匁、正味は二百目、今宵中に濟ませば別條ない約束では無いかいの。」「されば明日の明六つまでに濟めば二百匁、五日の日がによつと出ると一貫匁、元二百匁を一貫匁にしてとれば、こつちの徳の樣なれど、親父殿に非業の金を出さするが笑止さに、此方最屓でせつくぞや。今宵急度濟ましやや。」「小兵衛こりや念いるゝな。河内屋與兵衛男ぢや〱、當が有る。鷄の鳴くまでには持つて行く。眠たくと待つてもらを。」「はて今宵すまして入用なれば、明日又直に貸すわいの。此方も商賣一貫目や二貫目は何時でも、其の男氣を見届けた。」と詞で與兵衛が首しめる、綿屋小兵衛は歸りける。與兵衛見事に請合ひは請合ひしが、一錢の當もなし、茶屋の拂ひは一寸遁れ、拔差ならぬ此の二百匁、「有る所にはあらうがな。世界は廣し二百匁などは、誰ぞ落しさうな物ぢや。」と、後を見れば小提灯、「河といふ小文字は此方の親父、南無三

早い仕舞。内の拂ひもさらりとしまひ、兩替町の錢屋から、燈油二升梅花一合、今橋の紙屋から通持つて燈油一升、當座帳に付けて置く。まあ洗足して早うお休み。明日はとうから禮に出さしやんせ。」「いや〳〵早う休まれぬ。天滿の池田町へ往かねばならぬ。」「フウけうとい、もう宜いわいの。池田町は北の端、近所の掛さへ寄つたらば過ぎてのこと。」「こな人何いやる。節季に寄らぬ金の、過ぎて寄つた例は無い。今日暮れてから渡さうと詞つがふか。つい一走り往てこう。此のうちがひに新銀五百八十目、財布の錢も戸棚へ入れて錠おろしや。やがて歸ろ。」と立ち出づる。「申し〳〵そんなら酒一つ。姉それ燗して進じや。」と、立つて戸棚へ德利から銚子へうつせば、「ア、こりや〳〵燗せいでも大事ない。肴も杯も入らぬ。中がさ添へて持つて來い。夜が短い氣がせく、そこからつげ。」「あい。」とは言へど*とゞしては、手もとゞかねば立ち上り、つぐも受くるも立酒を、お吉見付けて、「そりや何ぞ、忌々しい。子供は頑是がないにもせい、立酒のんで誰を野送り。ア、氣味わる。」と、言はれて夫もちやつと腰掛取り直し、「掛乞に行く門出俄行きの立酒。此の世に殘らぬ〳〵。」と、祝ふ程なほ哀れ世の、永き別れと出でて行く。母を見習ふ姉娘、夜の衾をしき〳〵に、唄御座よ枕よ蚊帳の釣手は長けれど、屆かぬ足の短夜や。「おでんをろくに寢させて、母樣もちとお休み。」と言ひければ、「オ、でかしやつた。父樣もまだ遲かろ。蚊帳の内から表は母が氣を付ける。わが身も寢しや。」「いえ〳〵、私

る敷居の細溝も、親子わかれの涙川、徳兵衛つく〴〵と後姿を見送りて、「わつ。」と叫び聲を上げ、「あいつが顔つき脊恰好、成人するに從ひ、死なれた旦那に生寫し。あれあの辻に立つたる姿を見るに付け、與兵衛めは追ひ出さず、旦那を追ひ出す心がして、勿體ない悲しいわいの。」とどうど伏し、人目も恥ぢず泣く聲に、憎い〳〵と母の親、嗜む涙堪へ兼ね、見ぬ顔ながら伸び上り、見れども餘所の繪幟に、影もかくれて 三重

下卷

ふきなれし*年もひさしの、蓬菖蒲は家毎に、幟の音のざわめくは、男子持の印かや。娘ばかりの手島屋は、亭主は外の掛一まき、内の仕舞と小拂ひと、油賣つたり舞うたりに、二人の娘の世話、まあ姉からと、櫛笥取り出しとき櫛に、色香揉み込む梅花の油。唄 女は髪より容より、心の垢を梳櫛や、嫁入先は夫の家、里の住家も親の家、*鏡の家の家ならで、家といふ物なけれども、誰が世に許し定めけん、五月五日の一夜さを、女の家といふぞかし。身の祝月祝日に、何事なかれ撫でつけて、髪引く*ゆづの妻櫛の齒の、「ハア悲し、一枚折れた。」呆れてとんと投櫛は、別れの櫛とて忌む事をと、口には言はず氣にかゝる。何ぞのつげの小櫛かや。掛も十に七左衛門、大かた集つて中戻り。「ア、思ひの外

八つ、息もさせず擲ちするゑ、はつたと睨む目に涙、「ヤイ木で造り、土をつくねた人形でも、魂入れば性根がある。耳あらばよう聞け。此の德兵衞は親ながら主筋と思ひ、手向ひせず存分に踏まれた。腹を借つた生の母に今の樣、脇から見る目も勿體なうて身が顫ふ。今打つたも德兵衞は打たぬ、先德兵衞殿冥土より、手を出しておお打ちなさるゝと知らぬかやい。おかちに入聟取るといふは跡方もない事。エ、無念な、妹に名跡繼がせては口惜しと恥ぢ入り、根性も直るかと一思案しての方便。あの子は餘所へ嫁入さする、氣遣ひすな。他人どし親子と成るは、よく〱他生の重緣と、可愛さは實子一倍。疱瘡した時日親樣へ願かけ、代々の念佛捨て百日法華になり、是れ程萬面倒見て大きな家の主にもと、丁稚も使はず肩に棒、稼ぐ程遣ひほつく。汝今の若盛り、一働きかせぎ、五間口七間口のかど柱の主にと、念願を立ててこそ商人なれ。たつた一間まなかの門柱に念かけ、母に手向ひ父を踏み、行くさき僞り騙りごと。其の根性が續いたら門柱は思ひもよらず、獄門柱の主にならう。親は是れが悲しい。」と、「わつ。」と叫び入りければ、「エ、焦躁しい德兵衞殿。石に謎かける樣に口でいうて聞く奴か。出てうせ〱。うじ〱ひろがば町中よせて追ひ出す。」と、又押取つて母がつゝぱる朸の先、怖いめ知らぬ無法者、町中と言ふに恟として、と胸つきたるけでん顏。「喃兄樣出して私は跡に殘らぬ。」と、縋る妹を押し留め、「きり〱うせう。朸が食らひたらぬか。」と、振り上げこすり出されて、越ゆ

や、汝が親。今の間に其の脛が、腐つて落ちると知らぬか罰あたり、おとましや／＼。腹の中から盲で生まれ、手足かたはな者もあれど、魂は人の魂。汝が五體何處を不足に生み付けた。人間の根性何故さげぬ。父親が違ひしゆゑ母の心がひがんで、惡性根入ると言はれまいと、さす手引く手に病の種、おのれが心の劒で、母が壽命を削るわい。おのれ先度も高槻の伯父御が、お主の金を引きおひしと、ようも／＼此の母をぬく／＼と瞞したなア。たつた今兄太兵衛に行き合ひ、おのれが野崎のあばれ故、伯父は侍一分たたず、浪人し大坂へ下るとの便り、汝が謔が顯はれた。その時母がづか／＼と親父殿へ咄し、跡で知れては扨は親子の言ひ合はせと疑はれ、夫婦の義理もかけはてる。内でも外でも汝が噂、碌なことは一度も聞かぬ。その度毎に母が身の肉を一寸づゝ、削いで取る樣な因果曝しめ、半時も此の内に置く事ならぬ、勘當ぢや出てうせう、出されし／＼。」と撲つつくはせつ、たゝく片手に押しぬぐふ、涙手の隙なかりけり。「此の與兵衛が爰を出で、どこへ行く所がない。」「ォ、汝が好いたお山が所へ出てうせう。」と、小腕取つて引き出す。「ナウ兄樣追ひ出し、私は此の跡取る事いや。堪へて進ぜて下され。」と取り付けば、「何知つて、のいてをれ。これ徳兵衛殿、きよろりと見て居て誰に遠慮。エ、はがいい、毆き出して呉れん。」と、朸追取り振り上ぐれば、ひらりと外し引奪り、「此の朸でわごりよをぶつ。」と、はた／＼と打ちつくる。徳兵衛飛びかゝり、朸捥ぎとり、續け打ちに七つ

年忌命日もとぶらひ、地獄へ落さず迷はせまい爲に、名跡ついで苦勞する。わごりよが好いたお山請出し女房に持たせ、半年もたたぬうち所帶破つて、親方の弔ひもならぬ樣には得せまい。」「扠は是非壻取つて、妹に所帶渡すな。」「オ、渡す。」「ムウよう言うた。道知らずめ。」と立ち上り、俯けに踏みのめらし、肩骨脊骨うん〳〵〳〵と踏み付くる。「なう悲しや、淺ましい兄樣。」と、妹が縋れば、「おかち構ふな。彼奴が腹のいる程存分に踏ましや〳〵。」と、身も働かず座も去らず。妹堪へ兼ね、「あんまりな兄樣。私は何も知らぬ者。死靈のついた顏して、此のよに〳〵いうてくれ、其れからは商賣も精出し、親達へ孝行盡し、逆ふまいとの誓文立。それが嬉しい許りに、病みほうけた此の姿で、こはいこはい恐ろしい、死人のまねして譃吐かせ、父樣を踏んづ蹴つそれが親孝行か。年よつた父樣目でもまうたら、それは〳〵聞く事ぢやないぞ。」と、縋り取り付き泣き喚けば、「いき女郎め、吐かすまいと誓文立てて口固め、憎いほゝげた。死靈より此の與兵衛といふ生靈の苦しみ、覺えてをれ。」と、同じくがばと踏み伏せたり。「病み疲れた妹を踏み殺すか畜生め。」と、取り付く父親礑と蹴とばし、「腹のいる程踏めというたな。是れで腹をいるわい。」と、顏も頭も分ちなく、散々に踏む最中母立ち歸り、はつとばかり藥投げすて、與兵衛がたぶさ引攫んで、横投にどうどのめらせ乘りかゝり、目鼻も言はせぬ握拳、「ヤイ業さらしめ提婆め。如何な下人下郎でも、踏むの蹴るのはせぬこと。徳兵衛殿は誰ぢ

て來る如く、禮物は大方三十兩、何時でも受取る。いで一禱り。」と、錫杖振り立ていらたか數珠、さらり〳〵と押しもんだり。印をも未だ結ばぬに、病人おもたき顏を上げ、「なう祈りもいらぬ祈禱もいや。おかちが病癒すには、聟取の談合止めてたも。あの與兵衞が若氣ゆゑ、借錢に責めらるゝ、其の苦惱が冥土の苦患、是れぞ呵責の責となる。流れ勤めの女子なりとも、與兵衞が契約の思ひ人を請出し、娵にして此の所帶を渡してたも。是非に聟を取るならば、おかちが命は有るまいぞ。思ひ知つたか思ひしれ。」と、あたりをきろ〳〵睨め廻し、「ア、ずつない苦しい。」と悶えわなゝきそゞろごと、父は驚き色違へ、法印少しもおくせず、「汝元來何處より來る。とつく去れ〳〵。行者の法力つくべきか。」と、鈴錫杖をちりゝんから〳〵、「急々如律令。」と責めかくる。與兵衞むつくと起き、「何を知つて去れ〳〵、どう山伏おきをれ。」と落間にがばと突き落せば、「ヤア山伏の法を知らぬか。印を見せずば置くまじ。」と驅け上りりん〳〵鈴りん〳〵、引きずり下せば又驅け上る。不動の眞言どたくたぐわつたりばつたりだ。引きずり下され山伏も、錫杖がら〳〵命から〴〵歸りけり。與兵衞親の傍に膝まくり、「これ親父殿、今のそゞろ言耳へ入つたか。死んだ人を迷はせ、地獄へ落しても、此の與兵衞が好いた女房持たせ、所帶渡すことは否かならぬか。」「ヤイ姦しい。あたり鄰もあるぞかし、餘程にほたえあがれ。此の德兵衞は、死んだ人の跡式とらいでも、五人七人は寛りと過ぐる術しつたれど、

され下され。」と、餘の事いうて取りあはず。「オ、〱手柄に聟が呼ばれうば呼うで見や、見物せう。」と親の前に足踏み伸ばし、算盤枕の胸算用、ぐわらりと違うて見えにけり。父がそろ〱抱き起す、おかちが顔の面窶れ、法印とつくと見、「ム、年はいくつ。」「十五。」「病付は。」「跡の月十二日。」「ムム藥師如來の緣日。十五は阿彌陀。」と、懷中の書籍繰りひろげ指を折り、仔細らしき聲付、「そも〱*法藏比丘の淨瑠璃に曰く、阿彌陀と藥師は御夫婦と云々。卽ち此の病は一時も早く聟殿を呼び入れ、夫婦になりたいと思ふ氣病に、少し外の見入あり。」といふより、德兵衛尤も顏。法印圖に乘り、「稻荷大明神の使者、白狐の敎へ、髮筋程も違はぬ。禱り加持も藥同然。神佛にもその役〱、熱病さまし冷すには、比叡山の二十一社、溫むるには熱田明神、江戸頭の病は愛宕權現、足の病は阿閦佛、走人盜人動かせぬは不動の鐵縛り、咳氣を禱るは風の宮、老人達の老病には、白髭明神白髮藥師、若衆の病の禱りには、大慈大悲の地藏菩薩、*骨牌の繪の付く祈禱に、麻布の明神釋迦牟尼佛、どうとりの禱りは四三五六社大明神、八講七の社。別けて此の法印が得物、錢小判俵物の相場商ひ、上げうと下げうと高下は自由、持のお方が價上げしたい祈りには、強氣に上り高天が原の八百萬神、*はたした衆のさがりを禱るは、高きお山を時の間に、麓に下るさがの釋迦、安井の天神、もちとはたと兩方一度の禱りには、高からず安からず中を取つて、河内國高安の大明神、法力のあらたなこと、たなな物取つ

りけれ。踏締も無く世の中を、滑りわたりの油屋與兵衞、賣溜錢は色狂ひ、絞り取られて元も利も、滓も殘らぬ油桶、重氣に見せる汗は夏、中はすゞしき明樽を、擔うて宿へ歸りしが、「ヤ珍らしいお山ぶ。此方は見知つた白稻荷殿、妹が病氣禱りの爲か。あの付物が其方衆の禱りでのいたら、此の與兵衞が首かけ。母者人は藥取りにか。耆婆でもいかぬ死病、いはれぬ氣骨をらるゝ。ヤこれ親仁殿、おかちが煩ひより何より大事が有る。其の當座に母者人には言うたれど、夫れよりはつたりと打忘れ、今日ふつと思ひ出し、商賣やめて歸つた。跡の月野崎で、伯父森右衞門樣に行き合ひ、わざ〳〵飛脚もやる所、幸ひの便り親達へ言うてくれ、主人の銀四つ寶三貫目餘り引負ひ、此の節季にたてねば、切腹か縛り首、一生の無心、兄太兵衞は義理も法も知らぬ奴、沙汰なしに三貫目調へ、與兵衞に持たせて下されと段々の傳言。二貫目や三貫目で伯父に腹切らせて、此方衆の外聞世間が立つまい。今日は二日、際というて明日明後日、萬事を差しおき今日の中、三貫目調へて渡さつしやれ。あす夜明にかけ出せば、晝までに往て戻る。」と、たつた今直筆の伯父の文の裏表、憎く可笑しく、「如何な伯父でも、主の金引負ふ樣な侍、腹切らせたがまし。何ぢやこだくさんに三貫目、三匁もおぢやらぬ。お主が商賣去年から一文も見せぬ。算用したら三貫目や四貫目は殘る筈。遣りたくば其の金やれ。追付聟を呼び入るゝ大事の娘が病氣。どんな評定する隙が無い。ヤ法印樣お待遠。おかちが容體御覽な

後家も子供も路頭に立つ、兎角森右衛門次第になつてくれと、だん〱の頼みゆゑ、親方の内儀と此の如く夫婦に成り、親方の子を我が子として、守り立てし甲斐あつて、其方は自分の一人稼ぎもめさるゝ。與兵衛めに商賣の手を擴げさせ手代も置き、藏の一軒も立てる様にとあがいても、尻のほどけた錢ざし、籠で水汲む如く後からぬけ、壹匁儲ければ百匁使ふ根性。意見一言言ひ出せば、千言で言ひ返す。エ、元が主筋下人筋の親と子、釘ごたへせぬ筈。身の境界が口惜しい。」と、齒を嚙ひしばれば、「サア此方の其の正直を見拔いて、どろく者めが仕度いがひに踏み付ける。親父様の蔭でこそ、親子三人橋にも寐ず、人の門にもたたず、名跡立てて下された、其の恩德は本の親にも變らずと、毎度母も其の悔み。子供に遠慮あるからは、現在腹に宿した母にも氣兼が有るかと、思はぬ心置かるゝ。因果晒しの物にならずに飽き果てた。太兵衛頼む、江戸長崎へも追ひ下し、死にをらば死に次第、二度面も見たうない、微塵も愛著殘らぬと、如來かけての母が言分からは何御遠慮。勘當なされ。」と、評議の聲に目を覺し、「ア、ずつ無い母様々々、母様はまだ歸らずか。」と、おかちが苦しむ屏風の内、門には、「物まう。河内屋德兵衛殿は此方か。山上講中頼みにつけ、稻荷法印御見舞申す。」と案内す。「扨はおかちが祈禱なさるゝか、だん〱。私は高槻の返事が急ぐ。お暇申す。」と表に出で、「德兵衛宿に罷りある。早々御出で忝し。あれへお通り遊ばせ。」と、太兵衛歸れば法印は、端の間にこそ通

つけな事が言うて來ました見さつしやれ。跡の月御主人の供して野崎參りの折節、ごくだうの與兵衛めも參り合はせ、友達喧嘩に掴み合ふひやうし、御主人へ段々の慮外。當座に與兵衛めを斬り殺し、ぬしも腹切る合點の所、御主人の御料簡穩しく事相濟み、歸つて後御家中町屋是沙汰。のめ〳〵と面さげて奉公ならず、暇を願ひ浪人し、四五日中に大坂へ下り、二度侍の立つべき思案せずば、此のぶんで刀は差されぬとの文體なり。」と、いふより、「はつ。」と膝を打ち、「扨こそな、何處ぞで大事仕出さうと思ふ壺、かてて加へておかちが煩ひ伯父の難儀。まだ此の上に、どろめが何を仕出さうやら、分別に能はぬ。」と頭をかけば、「イヤ分別も何もいらぬ。追ひ出して退けさつしやれ。ぢたい親父樣が手ぬるい。私と與兵衛めは、お前の種でないとて、餘り御遠慮が過ぎまする。腹に宿つた母者人と連添ふお前、眞實の父と存ずる。軈て壻を取る程脊丈伸びた、おかちは打ち叩き成されても、あんだらめには拳一つ當てずほたえさせ、萬事に遠慮が皆身の仇。叩き出して此方へこさつしやれ。どれぞ酷い主にかけ、矯め直してくれませう。」と、言へば親は無念顏、「エ、口惜しい。尤も繼父なればとて親は親、子を折檻するに遠慮は無い筈なれど、其方衆兄弟は身共が親方の子、親旦那往生の時は、そなたが七つ、のらめは四つ。坊さま兄樣、德兵衛どうせいかうせいと、言うたを彼奴が急度覺えて居る。母も始めはおか樣の、內儀樣のというた人。伯父森右衛門殿が料簡で、其方が家を見棄てては、

見頼みまする。」といふ所へ、奥より母親兩手に茶椀、「なう〳〵目出度い下向。マァ一つづゝ參れ。こちの與兵衛が、山上樣へ虛言ついた其の咎めか、妹娘のおかちが十日許り、風引いて枕あがらず、醫者も三人替へても今に熱がさめかね、節句は近づく聟を入れる談合極まり、先からは急いで來る。何かに付けて夫婦の苦勞、皆與兵衛ののらめが、行者樣へ譃ついた祟り。お若い衆お詫の祈禱頼みます。」と、しみ〴〵語れば講中の先達、「否々お山の祟りなれば、與兵衛に罰が當る筈。役の行者ともいはるゝ佛が、若輩らしう何の脇がゝりなされう。娘御の熱病は又外のこと。そのやうな煩ひには、藥も醫者もいらぬ事。皆樣知らずか、餘り奇妙で異名を、白稻荷法印と申す、今の世の流行り山伏、與兵衛も定めし知つてるよ。此の法印を頼めば本復はたつた一加持。是れから直に立ち寄り、頼むに否は有るまい。」と、語れば悦び、「ナウ〳〵忝い。是れも行者のおしらせ。私は醫者殿へ參ります。是れで緩りとお休み〳〵。」と立ち出づれば、「否我々も面々の、親々妻子の顏も見たし。」互に無事で悦びの、貝吹く降伏惡魔を祓ふ眞言の、聲もちり〳〵ばら〳〵ぎやてい、おんころ〳〵に別れ歸りけり。

逆な弟に似ぬ心、順慶町の兄河内屋太兵衛、用ありげにも浮かぬ顏つき、「ヤ太兵衛來てか。おかちが氣色見舞か。書出し何か忙がしい時分、見舞には及ばぬ事。」と、いへば太兵衛傍近く寄り、「母には道でお目に懸り、立ちながら委しう物語いたせしが、高槻の伯父森右衞門樣から、唯今飛脚の狀に、も

中巻

*掲諦々々々々、波羅掲諦、波羅僧掲諦掲諦々々、波羅掲諦波羅僧掲諦。唵呼嚕呼嚕、旋茶利摩登枳唵阿毘羅吽欠。おん油屋仲間の山上講、俗體ながら數度のお山、院號請けたる若手の先達新客交り、十二とう組吹き出す法螺の、かひ〲しげなる金剛杖、腰に腰當首に數珠、巾著代りの水のみ、河内屋德兵衛店前に立ち寄り、「何と與兵衛内にか〱。講中何事なう、お山勤めて有り難い。今日の下向は知れた事。懇な友達は桑津まで迎ひにぢや。お主一人見えぬは氣色でも惡いか。忝い御利生見て來た。是れが土產まづ話さう。西國者とやら、兩眼潰れた十二三な盲が、大願かけて山上し、行者樣を拜む中、兩方ともにくわつと開き、小篠の坂を杖もつかずつゝつと下る。お山の衆が考へ、ア、有り難い、此の秋から世の中直る御告。あれ合點いかぬか。小さい盲は小盲、すなはち米藏開いて、易々と下り坂は、下り口とのをしへ。手隙なら夕方おぢや。色々お山の話で、旅の疲れをはらそうぎやてい、ぎやてい〱。」とのゝめきける。親德兵衛走り出で、「若衆下向か殊勝にござる。こちのどろめは山上參りの行者講のと、今年も身共が手から四貫六百、順慶町の兄太兵衛から四貫、以上十貫近い錢取つて、どれどこに迎へにも出をらぬ。神佛の罰も思はぬどろく者。友達がひに引きしめて、意

と追ひ立つる。折柄、「はい〳〵〳〵。」の、聲に交はる轡の音、小栗八彌下向の徒立。與兵衛狼狽へ逃げ損ひ、押しわる供先伯父の目に、かゝる不祥の出合頭、引捉へ捻ぢする、「最前は御參詣、今は御下向愼みなし。討つて捨てる。」と、刀の柄に手をかくる。「待て〳〵森右衛門、その者討つて捨てんとは何故々々。」「彼奴は最前の慮外者。他人ならば少々は見遁しにも致し、御免なされ下し置かるゝ様の執成しをも申すべき所、彼奴が母は拙者が兄弟、現在の甥、何とも助け難し。」と申しも敢へぬに、「シテ其の科といふは何ごと。」「御尋ねに及ばず、御服に泥を投げ掛け、御身を穢し汚したる科。」「否々此の八彌が身を穢せしとは心得ず。是れ見よ著類の何處に泥が付いたるぞ。」「イヤ召換へられぬ以前の御小袖。」「されば〳〵、著替ふれば泥をかゝらぬも同然では有るまいか。」「御意とは申しながら、已に御馬の鞍鐙も泥に染み、お徒歩でお歸り成さるゝは、旦那に恥辱を與ふる慮外者。」と、申し上ぐれば、「默れ〳〵。馬の皆具には泥の懸る物故に、障泥といふ字は泥をへだつと書く。泥の懸らぬ物ならば、何しに隔つるといふ字の入るべきぞ。恥辱も慮外も科も無し。武士たる者の恥辱とは、只一滴の濁り水も、名字に懸るは洗ふにおちず、雪ぐに去らず。あれら體の雜人、身が目からは泥水。泥より出でて泥に染まぬ蓮の八彌、名字は汚れぬ助けてやれ。」「ハアはつ。」と又有り難き御意を大事に、振る手を揃へ足そろへ、行列立ててぞ　三重

も正午に傾けり。嘸や妻子が待つらんと、辨當かたげかた〴〵に、姉の手を引く手島屋の七左衞門、咽喉が乾けど飲む間も急ぐ、茶屋の前にて中娘「アレ父樣が。」と縋り寄る。「オ、待ち兼ねたか。母は何處に。」と尋ぬれば、「母樣は爰の茶屋の内に、河内屋の與兵衞樣と二人、帶解いて衣も脱いでござんする。」「ヤア河内屋與兵衞めと、帶といて裸體に成つてぢや。エ、口惜しい目を拔かれた。さうして跡はどうぢや〳〵。」「さうして鼻紙で拭うたり洗うたり。」と聞くよりせき立つ七左衞門、顔色變り目もすわり、門口に立ちはだかり「お吉も與兵衞も是れへ出よ。但し出ずば其處へ踏込む。」と呼ばはる聲に「こちの人か。子供がお晝の時分も忘れ、何處に何してゐさしやんした。」と、出づる跡から與兵衞が「七左衞門殿面目無い。ふとした喧嘩に泥にはまり、色々お内儀樣のお世話。是れも七左衞門殿のお蔭、忝い。」といふ小鬢さき、髮の髻も泥まぶれ身は濡鼠。腹立つやら可笑しいやら、挨拶もせず「是れお吉、人の世話もよい比に爲たがよい。若い女が若い男の帶といて、さうして跡で紙で拭ふとは、尾籠至極疑はしい。餘所の事はほからかして、サア〳〵參らう日がたける。」「オ、〳〵待つて居ました。委しい事は道すがら。」と、姉が手を引きおとは抱く、中は父親肩車に、のりの敎へも一つは遊山、羣聚をわけてぞ急ぎける。與兵衞一人茶屋の見世、とほんとして居る所に、亭主を始め邊在所の者共五六人「先にから爰な人は參りか下向か、一つ所にうろ〳〵と合點いかぬ。サア通つた。」

血を見れば殿の御代參叶はず、歸らねばならぬ。下向までは隨分鞘口に心を付けて、森右衞門供をせいせい。」「ハアはつ。」とお詞忝く、「おのれ下向には首を討つ。暫しの命。」と突きはなし、隨分伯父が目に懸るなと、言ひたけれども侍氣、聲せぬ夏の手振鶯はい〳〵、武家のいきかたなづまぬ御馬、足を早めて急がるゝ。與兵衞うつとり、夢か現か醉ひたる如く、「南無三伯父の下向に斬らるゝ筈、切られたら死なう、死んだらどうしよ。」と心は沈み氣はうはもり、「遁げてくれう。」と驅け出で、「ハアかう行けば野崎。大坂は何方やら方角がない。此方は京の方、あの山はくらがりか但し比叡山か。どこへいたらば遁れう。」と、眼も迷ひ狼狽へ、「ア、どうかせう、何と。」加賀笠お吉と見るより地獄の地藏。「ヤアお吉樣下向か。私や今切らるゝ助けて下され、大坂へ連れていて下され。後生でござる。」と泣きをがむ。「イヤこちやまだ下向ぢや無いわいの。七八町往たれど、餘り人ぜり。こちの人待ち合はせに爰まで歸つた。エ、けうとなげな、身も顏も泥だらけ。氣が違うたか與兵衞樣。」「尤も尤も喧嘩して、泥を攫み合ひ、はね馬に乘つた侍に、其の泥が懸つて、それで下向に切らるゝ筈。賴みます〳〵。」と立ち去らず。「エ、呆れはてた。親御達の病になるがいとしほい。向ひどしのけんけんともならず。茶屋の内借つて振り濯いで進ぜましよ。顏も洗ひ、とつとと大坂へ歸つて、以後を嗜ましやんせ。又爰かります。お淸よ、父樣が見えたら、母に知らしやや。」と二人葦簀の奧長き、日影

を引き立ち隔つ。「そりや喧嘩よ。」と諸人の騷ぎ、茶屋は店を仕舞ふやら、二人は絶體絶命の、擲合ひ組合ひ、堤の片岸踏み崩し、小川にどう／＼落ち別れ、藻屑泥土まひごみ砂、互に投げかけ攫みかけ打ちあひ打ち付け扱ひ手無き相手勝負、氣根較べと三重見えにけり。折こそあらめ島上郡高槻の家の子、お小姓立の出頭小栗八彌、馬上に上下御代參の徒若黨、揃羽織の濃柹に、智慧の輪の大紋、手振の先供、「はい／＼はい／＼。」の聲をも聞かず與兵衛が、たぐりかけて打つ泥砂、出合ひ拍子に馬上の武士の袷上下皆具まで、ざつくと掛るも時の運、栗毛忽ち泥付毛、沛艾鞍も鎭まらず。與兵衛もはつと驚く所、「それ逃すな。」と徒士の衆、ばら／＼と取りまく中、相手は川を渡り越し、小菊も花車も手ばしかく、參りの諸人に紛れてのく。徒士頭山本森右衛門、與兵衛が兩脛かいてぎやつとのめらせ、膝を脊骨に挫ぎ付くる。「ア、お侍樣、けがでござる御免なりませ。お慈悲／＼。」と泣面かく。「此奴慮外者、お小袖馬具に泥をかけて、けがと言うては濟まぬ。面を上げい。」と首ねぢ上げ、「ヤア森右衛門殿伯父ぢや人。」「ム、與兵衛めか。」と、互にはつと驚きしが、「ヤイ己は町人、如何やうの恥辱を取つても疵にならぬ。旦那より御扶持を蒙り、*二字を首に懸けたる森右衛門、慮外者を取つて押へ、甥と見たれば猶助けられぬ、討つて捨てる立ちませい。」と、小腕を取つて引き立つる。馬上の主人、「ヤイヤイ／＼／＼森右衛門。見れば其方が大小の鞘口つめ樣が緩さうな。ふと鞘走つてけがでもして、

と、ひつたり抱き寄せしみ〲囁く。色こそ見えね河輿が悦喜、「エ忝い。」と伸びた顔付。客は堪らず傍にどうと腰かけ、「小菊どのお身は聞えぬ。如何なる縁にか會津樣ほどいとしい人は、大坂中に無いと言つたぞよ。國元の外聞身の大慶と、大事の金銀を湯水の樣に川遊び、ちよがらかされにや來申さない。其の男が聞くまへで、昨夜の如くいはないけりや、*どや〲通りのむや〲の鬩、二度と越し申さない。どうだ〲。」と責めせちがふ。言ひ合はせし二人の連つか〲と寄つて、「ヤイもさめ。此の女郎此方へ貰ふ置いて歸れ。但し東土産に川の泥水振舞はうか。」と兩方より立ちはさみ、投げてくれんず面構へ。坂東者のどう強く、「何さぶい〲ども、人嚇しの腕に色々の彫物して、喧嘩に事よせ懷中の物取ると聞き及ぶ。貧乏といふ棒に脛を揆られ、腰膝も立たぬ遊女狂ひ。上方の泥水より、奥州者の泥足くらへ。」と、つゝと寄り蹴上ぐる足首、刷毛が頤蹴ちがへられ、撞とまろんでころころ、小川へだんぶと撥ね落され、是れはと取り付く皆朱が大事の命の玉、縮み込む程蹴付けられ「鳶がかけた南無三。」と、惘れて空をみち〲〲、腹ばひ〲逃げて行方は無かりけり。友達投げさせ見て居ぬ男、「逆樣にうゐてくれん。」と、むずと攫めば振り放し、「ヤちよこざいなけざい六、えら骨引缺いてくれべい。」と、くらはす拳を請け外しては擲ち返し、敲き合ひ摑み合ふ。「なう氣の通らぬ是れどうぞ。」と、中へ小菊が械に入る。「ア、怪我さしやんすな大事の身。」と花車が圍へば、下女も手

やら戀のある美しい顏で、扠々堅い女房ぢやな。」「されば年もまだ二十七、色は有れど數子ほど產み廣げ、所帶じみで氣がこうたう、好い女房にいかい疵。見懸ばかりで美味の無い、飴細工の鳥ぢや。」と笑ひける。斯くとはいかでしろうとの、田舍の客に揚げられて、連れて主人の後家交り、變りちんつの國訛り。唄「やつしは*甚左衞門*幸左衞門が思案ごと、*四郞三が憂へ事。ちんつ〳〵ちんちりつてつて。」「日本一の名人樣、やつちや〳〵。」と譽める歌より褒めさする、金ぞ諸藝の上手なる。「そりやそりや來たぞ。」と三人が、手ぐすね引いたる顏色、小菊遠目にはつと驚き、「申し花車さん、同じ道許り氣が盡きる。始めの船に乘りたい。」と、裾かい取つて立ち休らふ。前に與兵衞帆柱立、跡に二王の張番立、「與兵衞せくな。」女郞と詰開いて男立てい。會津蠟燭が光だてしたら、こち二人が心切つて踏み消してくれる。」と、草履を腰に腕卷り、客は顚倒花車も下女も狼狽へ、小菊を圍うてうぞぶるふ。「小菊殿かつた。馴染の河與が借るからは動かせぬ。」と、茶屋の牀机に引きずりする。「是れ賣女樣安お山樣、野崎は方が惡い、何樣の御意でも參らぬと、此の河與と連になるを嫌ひ、好いた客と參れば方も構はぬか。其の譯聞かう。」と理窟ばる。目玉の鬼門金神もなごやかに、「コレ河與さん角が取れぬの。小菊といふ名が一つ出れば、與兵衞といふ名は三つ出る程、深い〳〵と言ひ立てられた兩人の中。連立つて參らぬも、皆こな樣のいとしさ故。人に煽てられ嗾けられ何ぢやの。私が心は誓文かうぢや。」

る。夫れに聞いて下され。小菊めが今日會津の客に揚げられ、早天から川御座で參りをつた。田舎者に仕負けては、此の與兵衛が立たぬ。小菊めが歸るを待つて一出入。」と、咄の内から二人のつれ、腕押しもんで力みかけ、鬼とも組むべき勢ひなり。「それ〳〵問ふには落ちず語るに落ちると。利口さうに夫れが信心の觀音參りか。喧嘩師ののら參り。買はしやんすお山も傾城も、何屋の誰何屋の誰と、親御達がよう知つていとしほや。そちへは與兵衛めが間がな隙がな入り浸つて居る、意見して下されと、私等夫婦に折入つて口說き事。こちの七左衛門殿もいやらぬ事は有るまい。定めしこな樣の心には、所こそあれ野がけの茶見世で、若い女子の態で、入子鉢の樣な、面々の子供の世話許りやきをらず、小差出たと憎かろが、此の諸萬人の羣集を、突き退け押し退け目に立つ風俗。本天満町河内屋德兵衛といふ、油屋の二番息子、茶屋々々の分も碌に立てず、あの樣見よと指ざしするが笑止な。こうたうな兄御を手本にして、商人といふ物は、一文錢も徒にせず、雀の巢もくふにたまる、隨分稼いで親達の肩助けと、心願立てさんせ。脇へは行かぬ其の身の莊嚴。ハァ氣に入らぬやら返事がない。姉おぢや早う參らう。道でこちの人に逢はしやんしたら、本堂に待つて居ると言うて下さんせ。茶屋殿過分。」と袂より、置く茶の錢の八九文、四分におもく五分には、輕々し氣の物參り、別れてお吉は通りける。惡性に上塗する皆朱の善兵衛、「あの女は與兵衛が筋向ひのおか樣でないかい。物ごしもどこ

様ぶゝが飲みたい。」も、折節傍の出茶屋見世、「爰借ります。」と憩らひぬ。是れも同町筋向ひ、河内屋與兵衛まだ二十三親がゝり、同商賣の色友達刷毛の彌五郎、皆朱の善兵衛、野崎參りの三人づれ、萬事を夢と飲みあげし、寐覺提重五升樽、坊主持して北うづむ。「小菊めが客と連立ち、よし〳〵と下向するも此の筋。」と、のさばり返つてくる道の、茶見世の内より、「申し〳〵與兵衛樣、爰へ〳〵。」と呼び懸けられ、「ヤお吉樣子供衆連れての參りか。存じたら連になりましよ物。七左衛門殿は留守なさるか。」「否此方の人も同道。二三軒寄る所もあり、追付爰へ見える筈。お連衆もマアこれへ。平に平に。」と強ひられて、「煙草一服致さうか。」と、腰打掛くるものんこらし。「何と與兵衛樣、御繁昌な參りでは無いかいの。よい衆の娘子達やお家樣がた。アレ〳〵彼處へ桔梗染の腰變り、縞繻の帶しやぢやわいのしやぢやわいの。ソレ〳〵〳〵其處へ縞縮に鹿子の帶、慥かに中の風と見た。又一位見事ではあるぞ。如何樣若いお衆が此の樣な折に、あんな見事な者引連れ、贅の遣り度いは道理。こな樣も連立ちたい者があろ。こんな折に新地の天王寺屋小菊殿か、新町の備前屋松風殿か、何とよう知つて居るか、何故連立つて參らんせぬ。」と、ばつと乘すればふはと乘り、「殘り多い。天晴今日は物の見事な事で、參りの羣集に目を覺させうと、此中から跪いたれど、備前屋の松風めは先約が有つて、貰ひも貸しもならぬと吐かす。天王寺屋の小菊めは、野崎へは方が惡い、どなたの御意でも參らぬと言ひ切

無かりしに、老若男女の花咲きて、足をそら〳〵空吹く風に、散らぬ色香の伊達參り、大人童も歌ふを聞けば、唄「行くもちんつ、歸るもちんつ、また來る人もちんつちりつて、チリテツテ。」傳を賴みの乘合船は、借切るよりも得庵堤、共に舳を漕ぎ付けて、餘所も一つの船の內、客は是れ見よ顏自慢、動ともすれば癡話事の、夫れに任せた身の上も、人も恥かし氣詰りと、小菊は陸へ一飛に、ぴらりばうしのふか〴〵と、眉は隱せどとりなりの、町で名護屋の胸高帶ば、*小笹に露のたまられぬ、始末算用世智辨も、人にこそよれ品にこそ、よれつ冷泉縺れつ道草に、人の言草ァ、むつかしく、うるさく憎く嫌らしく、我が供船を小手招き、唄「是れの見さんせナ愛宕の山にヨエ、*ちんの煙が三筋立つ、煙がナぢんの、ぢんの煙が三筋立つ。」四筋に別れ玉鉾の、是れより辰巳奈良街道、丑寅隅は八幡道、玉造へは未申、西は元來し京橋や、野田の片町大和川。爰は名に負ふ*壽名の松、御代長久の岡山を、歌には忍の岡とも詠み、讃良山口一つ橋、渡してすくふ御願力、無量無邊の聚福閣、慈眼視衆生念彼觀音、身得度者の御誓ひ、問ふも語るも行く船も、徒路ひろふも諸共に、迷ひを開く腰扇、御堂に念珠を三重繰り返す。所をとへば本天滿町、町の幅さへ細々の、柳腰柳髮、とろりとせいも種油、梅花紙こし荏の油。夫れは手島屋七左衞門妻の野崎の開張參り、姉は九つ三人娘、抱く手引く手に見返る人も、子持とは見ぬ花盛り、吉野の吉の字を取つて、お吉とは誰が名づけけん。お清は六つ中娘、「母

女殺油地獄

上巻

唄＊船は新造の乘り心サヨイヨエ、君と我と我と君とは、圖に乘つた乘つて來た、しつとんとん〳〵しととん〳〵、しつとゝ逢瀬の浪枕、杯は何處いた。音頭君が杯いつも飲みたや武藏野の、月の、月の夜すがら戯れ遊べ。囃し立てたる大騷ぎ、北の新地の料理茶屋、主人なけれど咲く花や、後家のおかめが請けこんで、客の變名は郎九とて、生まれは陸奥會津にて、名代流さぬ金遣ひ、この頃浪華此の里へ、登りつめたよ天王寺屋、小菊を思ひ、思はれたさに、鯰川よりゆら〳〵と、野崎參りの屋形船、卯月中旬のはつあつさ、末の閏に追繰りて、まだ肌寒き川風を、酒に凌ぎてそゝり行く。＊昔在靈山妙法華、今在西方名阿彌陀、娑婆示現觀世音、三世の利益三年續き、去々年つちのえ亥の春は、うらやせどやに罪深く、針櫛箱や數珠袋、そこに日の目も見ず知らぬ、一文不通の衆生まで、千手の御手の攫み取り、紫磨黄金の御肌に、忽ち那智の觀世音、去年は和州法隆寺、シテ聖德太子の叩キ千百年忌、ツレ是れ又救世の大悲の化身、シテ續いて今年此の薩陲。二人櫻過ぎにし山里の、たれ訪ふべくも

居る人々も、呆れ果ててぞ立つたりける。海上太郎業くさらかし居たりしが、「ア、思ひ付いた夫れよ夫れよ、此の松の樹が心もとない。てつきり梢に隠れて居をらう。一本づゝ片端に引き抜いて詮議せうか。いや〳〵抜くも手間どほなり、火を付けて燒き立てう。」「尤も〳〵夫れよ〳〵。」一同に、「火よ燃草よ。」と犇けば、入道梢に居るも居られず、枝より枝に傳ふ拍子、松の小枝に指添の、鐔引つかけて身は鞘ばなれ、大地へどうと落ちてけり。「そりや〳〵梢に人こそあれ、提灯寄せよ。」と、手ん手に長柄の槍押取り、穗先を揃へてぐつ〳〵と、芋刺串刺滅多突き、主君を殺せし天罰は、我と我が身に樹の空で、煽ちはためき眞逆樣、落つる所を義昭公、透さず首打ち落し、怨敵亡びて悦びの、勝鬨揚ぐる名を揚ぐる、中頃絶えたる足利の、家踏み起す掘り起す、萬の寶に秋津國、上下の活計歡樂も盡きぬ御代こそ久しけれ。

津國女夫池　終

逢うたる車切、五十の命袈裟切に、野邊の草葉の露霜と、太刀風撫で切り拂ひ切り、刀は業物手は利いつ、はらり／＼と三重切り盡し、提灯奪取り三人が、腰に聢と奥をさし、重ねて切り込む其の跡へ命から／＼長慶入道、「喃々悲しや表門も早打ち破り、大勢切り込む何とせう。何處に此の身を隱さうぞ。」と呟き／＼逃げ出でて、せめて命も助かるかと、賴みは千歲の松の木に、傳ひ登るも老人の、手足慄々身も顫ひ、踏み辷り踏み外し、はふ／＼梢に隱れける。三人が手に掛けて、切り殺せしは百人餘り、されども入道松永が、在所も知れず首も見ず、大きに急いて館の内、探す一間に松永彈正、躍り出づるを造酒の進、「サア松永は我に任せ、方々は入道が、在所探し給へ。」と、呼ばはり／＼受けつ流しつ渡り合ひ、火水になれと戰うたり。松永元より手練の勇士、踏込んで打つ太刀を、冷泉開いて受け外し、左の肩口三寸許り、切り下げられても事ともせず、沉んで拂ふ切先に、松永が太股半分餘り切り込んで、漂ふ所をつゝと入り、首宙に打ち落し、「松永彈正久秀を、造酒の進が切り止めし。」と呼ばはる所へ義昭公、藤孝兼盛諸國の加勢、高提灯を點し連れ、松原に大息つぎ、御大將怒りの大音「館の内に一寸も、探し殘せし所はなし。入道めに羽が生え、虛空を飛んで出でんは知らず、何處にか隱るべき。今日討ち洩らして入道に、再び逢ふは計り難し。能く天道にも見放され、弓矢の冥加に盡きたるか、エ、口惜しや腹立や。」と、しをれぬ御目にはら／＼涙、藤孝も途方にくれ、其の外並み

忍び寄つたり。思へば遺恨ふかき長慶、萬一各〻に討たせては、年來の大望徒らに君恩を報ずる所なし。我々が手に掛け申す内、暫く御勢を麓に屯し下されかし。事難儀に及ばば、笛を吹いて知らせ申さん。それを相圖に驅け付け、重ねての御加勢賴み入る。表門には主人義昭、中國西國の勢を以て寄せらる〻契約。時こそ移れ。」と呼ばはれば、皆、「尤も。」と言ふ聲して、先手より勢をまき解し、山下にこそは控へける。さらでも氣早き海上太郎、「なう案じたとは事變り、忍び入るも易かりし。いで入道が寢間へ踏み込み、首引き拔いて參らん。」と躍り出づるを藤孝押へ、「ア不覺なり兼盛。思慮深き長慶、如何なる事か企み置き、隱れ逃げんも計り難し。物靜かに館の內を檢分し、驅くるも引くも三人一所。急くな〱。」と制する內、夜廻りの中間打連れ拍子木打つて來りける。「是れこそ天の與へよ。」と翩りと屋根を飛ぶより早く、すつぱと切つて拔打に、はつた〱と切り倒し、直に拍子木かち〱かち、「御用心。」と呼ばはつて、館の內へ忍び入る。暫く奧も靜かなりしが、「すはや夜討。」と松永彈正「表門には別儀なし。裏門より入りつらん。敵は姿を隱れんと提灯持つまじ。味方は殘らず用意の腰提灯、印を合はせ松原へ誘き出せ。一人高名同士討すな。力を合はせ討つて取れ。」と、聲の下より三好が勢、皆一樣の提灯に、紛る〻方なく、淺川海上造酒の進、名乘り掛け〱、松原に木楯を取り、獅子奮迅虎亂入、飛鳥の翔りの手を碎き、南無阿彌陀佛の拜み討ち、いつの因果か今日の日に、廻り

第五

＊齊の蘇秦がちうどくの仇、計らざるに天是れを罰すとかや。三好修理大夫入道長慶、一旦の逆意運に乘じ、足利家を追ひ崩し、朝日の岡に館を構へ、南表に大堀掘つて、石壁高く河水を湛へ、數十人の警固、時を分つて油斷なく、北は千本の松しげり、岩倉山朗詠ヶ谷に續き、獸も驅けるに便りなき、要害賴みに日夜の酒宴、世を我儘にぞ振舞ひける。頃は永祿十二年、仲夏下旬足利義昭公、先君の仇を討つて、倶不戴天の恥辱を雪がん物と、淺川左京大夫藤孝、海上太郎兼盛、冷泉造酒の進、岩倉山を夜に入りて、三好が館に忍び付き、塀に梯子掛け渡し、進み入らんと氣をせいたり。後陣に續きし諸國の加勢、近江に佐々木六角判官、京極高成、淺井長政、美濃に大館沼田の平次、伊勢に秋家伊賀に金森一色藤丸、越後に上杉長尾の一族、越前に朝倉日下部義景、桃井小山宇都宮、甲斐に武田の旗大將、高坂彈正原隼人、山本勘介道鬼入道、尾張に織田の股肱の臣、羽柴筑前守秀吉、相模に根越五十嵐六浦、駿河に氏康、信濃源氏武藏の七黨八平氏、自身に馬を乘り進め、持槍小旗高提灯、塀の外面に隙間なく、沓の子打つて控へたり。其の隙に淺川海上造酒の進、難なく塀を乘り越えて、屋根の上に突立ち、中にも藤孝大音上げ、「なう御加勢の御中へ物申さん。御芳志に依つて、是れまでは

く時は、悪鬼心を和げ、忍辱慈悲の姿にて、「佛土に至る嬉しや。」と、貌は消え〳〵消ゆると見えし、青黄赤白四色の玉、虚空に飛び入り失せてけり。シテ「なう懐かし法の人。宿の主と見えしも兄義輝ぞや。御身必ず還俗して、若を守立て三好を討つて討ち滅ぼし、修羅の苦患を助けてたべ。煙の中に殘りし足利重代小袖の鎧、星兜、是れを渡さん。」と許りに、有りつる姿緋縅の、鎧と變じ給ひける。

ツレ慶覺足の踏所も忘れ、悦び勇み取り上ぐる、二人鎧の袖や墨染の、袖に掛るは名殘の涙、頓生菩提の廻向の威徳鎧の威徳、ツレ三好を亡ぼし恥辱を雪ぐ譽れも我も、天にも昇る心地にて、立ち出づる千疊敷、夜かと思へば シテ日はまだ高し、ツレ梅花開けば シテ菊の花咲けり。シテ秋かと見れば シテ雪も降りて、二人四季折々の榮華の御所の、上臈達も宮殿樓閣、皆消え〳〵と 三重シテ失せ果てて、有りつる礎の枕のうへに、眠りの夢は覺めにけり。時に虚空を閃きて、四人の女の四つの魂、淺川海上造酒の進、御臺所を誘ひ導き、刹那が間に馳せ集まる、幽鬼の所爲ぞ不思議なる。ツレ慶覺夢の御物語、此方は諸國の味方を語らひ、加勢の著到相圖の旗、思ひ〳〵に奉り、二人昔に靡く足利の、家に傳はる緋縅や、鎧の小袖舞の袖、敵を討つて太平樂、還城樂や還俗樂、菩提の門を引きかへて、文武の門にぞ入り給ふ。

皆白妙の夕景色。

二人唄 君と淀とが、相合傘の袖と袖、煙草戀草伽となり、煙吹き交ぜちら〳〵と、頭に雪の置き頭巾、唄 殿樣々々さむそにござるに、火桶遣りたや炭添へて、ザンヤレ〳〵、いつそ二人が雪ならば、ツレ 降り重なりて冰り付き、放れまいぞやいつまでも。爰は吳山にあらねども、傘の雪の重さよ、いで傘の雪を掃はん、傾く傘の動かばこそ、すは〳〵重るぞおもたや重し、大磐石の碎け亂れて飛ぶ雪の、ツレ 中に執念き初雪が、中有の面影忽然としてすつくと立ち、「なう恨みぞ積る、八寒の雪に身を埋み、大紅蓮の冰に閉ぢられ、苦しみ受くるも誰故ぞ。」と、天に叫び地に吐く息も白雪の、亂れて姿は消え失せけり。シテ「あら〳〵恐ろしあら怖や、逃げ行く先に又初雪が。」ワキ 面色變じて茜さす、忿怒の顏、共に來れといふ奈落の底に連れ行かん。行くも逃ぐるも、迷ひに迷ふ衾の內、瞋恚の角の枝高き、「梅枝爰に。」と梅花の炎、二人 此方に向へば又白菊が、眼の光は電光雷火の落ち來る如く、邪淫飮酒修羅道の、三つの車のくるり〳〵と 三重 追ひ廻る。義輝御聲苦しげに、「如何に大淀、汝が色に我を惑はし我又汝を苦しむる、苦患いつかは遁れん。」と叫び給へば、鬼女は笞を振り上げ〳〵「煩惱業火の娑婆の妄執、思ひ知らずや腹立や。」と、聲々天地に轟けり。ツレ 慶覺はつと御目を覺し、見れば夢とも面影は、こゝにあり〳〵苛責の現相。「若人欲了知三世一切佛、應觀法界生、一切唯一心。」と、破地獄の祕文を唱へ、袈裟追取つて投げ付け給へば、佛力不可量不可思議の、御法の聲を聞

著せて、連れて歩行けば足かる〴〵や。跡へ下れば跡から招く、ツレほういほい。シテ先に立たせて喃好い女房、甘い腰付巾廣帯で、因果め、ツレオ、いや、二人うかれ浴衣の菊の露、ツレ籬々に匂ひ溢れて亂れ咲き。謡シテ老いせぬや〳〵、藥の名をも菊の酒。唄己と其方はみばえの菊よ、中の色香はドッコイ人知らぬサウモセイ。其方待つとて胡麻殻焚いた。菊の下葉もドッコイ折り添へて、悔しや水を掬ぶまじもの、ツレ花にも戀の仇敵、ませも籬も踏みしだく、大地俄に震動して、渦巻き上る猛火の影、名のらで知れや白菊が、冥途の姿現はれたり。シテ「それ娑婆電光の境には、恨むべき人もなく、悲しむべき身にもあらざるに、如何にや汝いつ扠恨み初めけるぞや。早く黄泉に立ち歸れ。」と蚊帳に隱るゝ夏引の絲に繫ぎし玉の緒の、消えもやせんと身を冷す。ツレ「二世とかねたる妹脊の語らひ、仇には誰が爲す業ぞや。非道の劍に此の身を裂かれし其の苦しみ、二人身を切る緣切る其の恨み、退かじ離れじつき纏はつて、エイ〳〵〳〵えいくる〳〵、エイくる〳〵、くるり〳〵、未來永々憂目を見せん思ひ知れ。」天に登らば天津風、地に又沈まば土風山風、野風木枯さ、さ、さつ〳〵さつたるはやちの風に、ツレ吹き立てられてつゞいて上る上段の、障子に映る苛責の相、無明の業火黑煙、ふすぼり渡つて其の身を燒く、牀は精劍棚は鐵城、驕慢の刃に掛けて五體五つに切斷す。「娑婆の報いを今こゝに、あら堪へ難や。」といふ聲許り、殘るは谺松の風、姿儚く秋暮れて、冬も日數をふる雪に、庭も梢も埋もれて、

で、ちよつきり一寸間夫を切らるゝ乘換の、女郎の恨みの夜々を、重ねて付け廻したる恐ろし、シテ猶妄執の沸え返る、あつい燗より飲むなら酒の、ひやつひやひィ、ツレ日頃恨みの菊雪、亂れて梅飛び蒐り、取り付き抱き付き君に縋れば、シテ何ぢやの見られぬ。ツレ謡うはなり打ちたる此の鐵杖は、シテ煙管のらう〳〵、ひららう〳〵〳〵〳〵、らとらゝとら、らとらゝゝ、ツレ煙草の、シテひやとりとるろるろるろ、とるろるろるろ、てる〳〵〳〵義輝公、あら正體も、波の鼓のしらべも解けて、一筋ならぬ二筋三筋、四筋につれて此方に靡けば、ツレ彼方の恨み、シテ是れを慕へば、ツレ彼處の妬み、色と酒との醉ひ心地、魂くれて茫然たり。シテ思ひ出でたり其の昔、唐の帝の三千宮、蝶の宿りの囁言、夫れを移していざ爰に、花の香慕ふ蝶々の、宿りし袖こそ我がつまよ。ツレおう〳〵お手に、手ん手に手折り折り取る花の枝、二人宿りの蝶の立つや霞にひら〳〵〳〵〳〵、ふるは羽色か櫻か雪か、こがれ羽思ひ羽ふうは〳〵、露も溢れてえいころ〳〵〳〵、蝶々とまれ此の枝にとまれ、ふりはへ翳し揚羽の蝶、羽を休むる大淀の、袖に寢よとのしるしは是れ、此の比翼の蝶々、ちやうど抱き合ひ寢所に打連れ入る姿、あれを見よ憎し妬まし此の念力の牀の海、八苦の波と立ち隔たつて寢るとも寢させじ、添ふとも添はせじ、怒りに身を燒く身を焦す、紅梅即ち無間の炎、ぱつと燃え立つ三筋の煙、姿跡なし。三重シテ唄此方は今から殿樣やめて、内の嚊衆のだてこき〳〵に、葛籠ありたけ打著せ

出でて、鶯宿す梅が枝。二人籬の白菊露ながら、手折れば紛ふ袖の初雪、タヽキ夜毎に召され朝毎の、君が枕に寝亂れし、其の黒髪の移り香も、何故我に秋の扇と捨てられて、恨みは世をも人をも思ひ思はじ、只其の一人の大淀、よどの 冷泉 淀の川瀬の水車、汲んだる水は盡くるとも、今の涙はよも盡きじ、ツレあれなう又御座の二人寝、覗いて恨みを晴らさんと、障子の陰より差し覗けば、シテ我も共にと立寄りて、目に惱煩の苦を見する。二人君は重なる杯の、紅深き膝枕、其の面影も腹立や。シテ枕に響く其の鼓、打てや鳴らせや、打てや鼓の聲に紛れて身を忍ぶ、ツレ障子開けて紅梅の、天も花に醉へりや、庭も花に醉うたり。酒は愁への玉帚、千金春宵一刻飲み、シテ御酒の機嫌も義輝公、お手に鼓の、現か夢の鼾は大淀の、松の響か琴にも似たる膝枕、つめりこそぐり、せゝり起されほや〱笑ひ、ハ、〱〱、とろ〱寐る間によい夢を見た、二人寝よとて起された、シテ誰様と、シテおれ様と、二人折れや手折れや庭の梅、目さまし草と指をさす梅ケ枝の、ツレ香ひに移るあだ心、菊の下葉に置く露の、其の玉葛夫れよりも、九條の君の根引の花は飽かぬよなう。二人面白の花の郭や、世界の色のうはもり、出口には柳、招いて入り來る客の、揚屋の騒ぎにしろいお客はちり〲、西の洞院中の道寺、ぞめかばぞめけ、上の町下の町中の町の家竝、可愛ごかしに粹が身を食ふ、根引身請は金が巾する、口舌諸譯は太鼓請込む、年增の娼婦は紋日は追はるゝ、禿は遣手を怖がる、實に誠中戸小宿

木の牀框、廣東沉の違棚、積れる塵に埋もれたり。是れより奥は同じ館の内ながら、將軍の思ひ人、女の住みし部屋々々とて、假にも入りたる事なけれど、其の名許りは聞き及ぶ、梅枝が鳴渡の間、初雪が通天の紅葉の間、南表に白菊が住みし局は殘れども、主は無慙の刃に死し、連理の枕比翼の牀片敷く人も諸共に、なき世の中の習ひとは、思ひ知れども今更に、止らで落つる涙の玉、念珠の數を添へながら、御殿々々を行き廻る高殿、「ヤ是れこそ先君平日の御座の間よ。戀しの昔懷かしや。」と、さつと障子を明け給へばこは如何に、小袖と名づけし緋縅の鎧兜、上段に立てられたり。「ナウ是れをこそ尋ね求めしぞや。敵の手にも渡らず爰にある事、足利の家興るべき瑞相。」と、悅び鎧に手を掛くれば、俄に家鳴り雲暗く、立樹も草も動搖し、「うん。」と一聲悶絶し、さしもの慶覺階を、眞逆樣にころ〳〵〳〵、頃は二月梅香る、御所の世盛り花盛り、影の如くに顯はれしは、夢か現か　三重

千疊敷其の世語

謠 庭には金銀の砂を敷き、四方の門邊の玉の戸を、出で入る人までも、光を飾る粧ひは、誠や名に聞きし、寂光の都喜見城の樂しみも、斯くやと思ふ許りの景色かな。　平家 西に三十餘間に黃金の襖立てさせて、波に夕日を寫されたり。東に三十餘間に、白銀の襖立てさせて、通天の紅葉かかれしは長生殿の内に秋更けず、不老門の前には、日も傾かず上もなき、富士に勝りし色の山、情の谷の戸を

けて元の土とのみ、焦るゝ色は秋の葉の、散り〳〵になる御運の果て、餘處にて聞きし口惜しさも、今見る目には何ならで、人に言はれぬ思ひの數、包みかねたる涙の玉、袖と袖とに餘りけり。「ヤまだ暮れまじと、思ふ日の暮れ過ぎたり。不覺の歎きに時移せしか。あら笑止や、何處に立ち寄り一宿せん。處の人の來れかし。一夜の宿の假臥。」と、心を盡す折柄に、二十に傾く月の顏、清らかなる若人の、用ありげにて行き過ぐる。「是れ〳〵なう。」と呼び止め、「行き暮れたる旅の僧、一宿の御芳志賴み入る。」と立ち寄れば、「幸ひ我等此の邊にて、人宿を致す者なれども、三好殿より旅僧のお宿禁制と、仰せ嚴しき折なれば、悼はしながら叶ふまじ。是れより少し彼方に、足利將軍義輝公の住居なされし古御所の御座候。誰咎むる者もなければ、彼處に一宿なされまいか。」「喃其の御所は三好入道長慶が爲に燒き滅ぼされ、此の礎こそ御所の跡。外にあるとは誠しからず、不思議なり。」と咎むれば、「今にあるか燒け失せしか、御覽あるより證據もなし。御道案内申すべし。いざ此方へ。」と夕露の、「葎の宿は憂れたくとも、袖かたしきてお泊りあれ。なう御僧。」と、御所の方へぞ三重入りにける。

斯くて慶覺、處の人の案内にて、御所の御門を立ち入れば、昔の甍其の儘に、義輝御生害の折柄に、三好が兵火に燒けしとは、誰が僞りと白露の、宿りとなるこそ儚けれ。棟門唐門塀重門、九十五間の遠侍、大書院の障子押し開けば、釣殿記錄所渡殿、唐木作りの千疊敷、紫檀の長押花欄の椽、伽羅

出で、「なう御坊は庵室に在さず。裏の藪垣切り破つたるは臆病神に引かされ、落ち失せられしに疑ひなし。」と、いへば人々又仰天、驚かぬは藤孝一人、「いや〳〵究竟三昧に入る程の道念何の臆病。我々に氣を勵まさん爲の出奔と覺えたり。諸國の大名を驅り催し、多勢の著到を御覽に入れば、御還俗は必定。所詮御臺若君を淸瀧に預け、是れより三人三所に別れ、御分は關東美濃路に掛つて、土岐齋藤を語らひ、夫れより駿州相州に、北條氏康今川義元、甲斐國に武田信玄、伊勢に國司北畠、尾張に織田彈正忠信長を賴み、軍勢を催し大和路より攻め上れ。造酒の進は北國路越後の長尾謙信、會津に葦名佐竹の一統、越前の朝倉が兵を進め、近江の佐々木に手合して、若狹口七里半より切つて入れ。此の藤孝は中國に到り、毛利吉川小早川、尼子晴久陶入道、筑紫に小貳、菊地大友龍造寺諸將を語らひ、兵船を乘り連れ〳〵、南海西海の湊々に乘り入れ〳〵、敵を中に取つてすくめんは案の内ぞ。」と歌人は居ながら諸國の手配り手筈を取つて、御武運再び引起すべき梓弓、家の名に負ふ足利の足を早めて、三重次第捨てても巡る世の中は、〳〵、心の隔てなりけり。兄將軍は三吉野の、梢の雪と花散りて、御所も燒野と仄聞けば、せめては跡を記念にも、都ゆかしく慶覺は、昔の跡を來て見れば、爰ぞ御所の名殘とて、燒け殘りし方もなく、楚人の一炬に焦土となんぬ、咸陽宮の故事も、身に染み渡る小夜嵐、草より草に吹き閉ぢて、朽ちぬ其の名を礎に、誰見よとてや殘すらん。紋を据ゑたる軒瓦、碎

しや。」と、皆一同に頭を下げ、萎める花に置く露の、いき〳〵勇む許りなり。慶覺重ねて、「いかに藤孝、足利の家には先祖八幡殿、石清水の神前にて御元服の折柄、授かり給ひし小袖と言ふ、鎧兜を著し、敵陣に向ふこと方々も存知の前。其の鎧兜持參せしか。味方に加勢の武士は誰々、語れ聞かん。」と宣へば、藤孝はつと赤面し、「さん候御鎧兜は將軍御生害の折節、敵入道が燒討に灰燼となつて、土に埋もれしか、但し三好が手へ奪ひ取りしか、委細存ぜず。又御味方の軍勢は、君御還俗あつて、義兵を上げ給ふと告ぐる程ならば、足利重恩の國守城主、夜を日に繼いで馳せ參らんは案の内。御心安かれ。」と申し上ぐれば慶覺嚇と御色變り、「足利重恩の三好さへ君を弑し、天下を奪ふ賴みなき世の中、慶覺還俗して招くとも加勢の付くは覺束なし。何を以て三好を討たん。麁忽なり藤孝。是非なや數度の勳功譽れを現はし、和歌は古今の傳授を得、文武二道と呼ばれし達人、思慮淺くなり果つるも、足利の運命盡き果てし淺ましや。佛神にも恨みなし、口惜しの世の盛衰や。」と怒りの御目に涙を浮べ、泣く〳〵奥に入りたまへば、始めの悦び忽ちに、萎れ入つたる有樣は、目もあてられぬ風情なり。海上太郎大きに急き、「此の頃口手間入れさせ、何の詮もない事。差向ひにて聞き切らん。」と、奥をさして驅け入れば、藤孝、「あつ。」と感じ入り、「天晴先君の御弟、麁忽を戒め臍を固うする御氣質。傳へ聞く御先祖尊氏公、鎌倉御發向の餘風、名將の萌し顯はれし。」と言ふ所に、海上奥より走り

死にたい。」と、大聲上げて泣き沈む。藤孝涙ながら若君を抱き取り、慶覺の前に据ゑ參らせ、「是れこそ先君義輝公の遺子。日本廣しと申せども、伯父君甥君此の外に誰あらん、誰が守り立て後見し御代には出すべき。日夜内典外典に眼を晒し、朝夕善惡忠孝不義を勘辨の御身なれば、大凡俗の身を以て申し上ぐべき詞なし。所詮還俗の科に依つて、無間焦熱阿鼻大地獄の苦しみを受くると思召し、此の若君を後見し、御親兄の仇を討ち、足利の家御相續、我々が望みを叶へ下さるゝも廣大の御功德。サア御臺樣染々とお歎きなされ。」と、藤孝が聲を力に顏振り上げ、「夫に離れし鴛鴦の、恥かしき世の憂き音なれども、存ふも子の可愛さ、何事も賴みまゐらする。賴む〳〵。」の詞より、外は涙にくれ給ふ。淸瀧夫婦さし寄つて、「コレ若君樣、伯父樣へござれ〳〵。」の聲諸共、何れを夫れとみどり子の、教へられねど慶覺の、御顏を見てにつこりと、笑ふ面ざし目鼻のかゝり、先君に生寫し。「不便の者の有樣や、甲斐なき今の對面や。」と、包むに洩るゝ御涙。扨はと海上進み寄り、「甥は子伯父は親同然。流石御血筋なればこそ、胴慾な此方にほや〳〵と笑ひ顏、御目にかゝらぬか、愛しうはないか、いたいたしうは思はずか。ま一度分別して下され。餘り酷い。」と搔口說けば、慶覺やゝ打點頭かせ給ひ、「譬へば八逆十惡の無量の罪ともならばなれ、若が風情御臺の有樣、方々が歎きと言ひ、爭でか餘處に見るべきぞ。望みに任せ只今より、還俗せうわ。」とありければ、「何御還俗とや。なう有り難や賴も

しや。」と、皆一同に頭を下げ、萎める花に置く露の、いき〳〵勇む許りなり。慶覺重ねて、「いかに藤孝、足利の家には先祖八幡殿、石淸水の神前にて御元服の折柄、授かり給ひし小袖と言ふ、鎧兜を著し、敵陣に向ふこと方々も存知の前。其の鎧兜持參せしか。味方に加勢の武士は誰々、語れ聞かん。」と宣へば、藤孝はつと赤面し、「さん候御鎧兜は將軍御生害の折節、敵入道が燒討に灰燼となつて、土に埋もれしか、但し三好が手へ奪ひ取りしか、委細存ぜず。又御味方の軍勢は、君御還俗あつて、義兵を上げ給ふと告ぐる程ならば、足利重恩の國守城主、夜を日に繼いで馳せ參らんは案の内。御心安かれ。」と申し上ぐれば慶覺嚇と御色變り、「足利重恩の三好さへ君を弑し、天下を奪ふ賴みなき世の中、慶覺還俗して招くとも加勢の付くは覺束なし。何を以て三好を討たん。麁忽なり藤孝。是非なや數度の勳功譽れを現はし、和歌は古今の傳授を得、文武二道と呼ばれし達人、思慮淺くなり果つるも、足利の運命盡き果てし淺ましや。佛神にも恨みなし、口惜しの世の盛衰や。」と怒りの御目に淚を浮べ、泣く〳〵奧に入りたまへば、始めの悅び忽ちに、萎れ入つたる有樣は、目もあてられぬ風情なり。海上太郎大きに急き、「此の頃口手間入れさせ、何の詮もない事。差向ひにて聞き切らん。」と、奧をさして驅け入れば、藤孝、「あつ。」と感じ入り、「天晴先君の御弟、麁忽を戒め臍を固うする御氣質。傳へ聞く御先祖尊氏公、鎌倉御發向の餘風、名將の萌し顯はれし。」と言ふ所に、海上奧より走り

死にたい。」と、大聲上げて泣き沈む。藤孝涙ながら若君を抱き取り、慶覺の前に据ゑ參らせ、「是れこそ先君義輝公の遺子。日本廣しと申せども、伯父君甥君此の外に誰あらん、誰が守り立て後見し御代には出すべき。日夜内典外典に眼を晒し、朝夕善惡忠孝不義を勘辨の御身なれば、大凡俗の身を以て申し上ぐべき詞なし。所詮還俗の科に依つて、無間焦熱阿鼻大地獄の苦しみを受くると思召し、此の若君を後見し、御親兄の仇を討ち、足利の家御相續、我々が望みを叶へ下さるゝも廣大の御功德。サア御臺樣染々とお歎きなされ。」と、藤孝が聲を力に顏振り上げ、「夫に離れし鴛鴦の、恥かしき世の憂き音なれども、存ふも子の可愛さ、何事も賴みまゐらする。賴む〳〵。」の詞より、外は涙にくれ給ふ。清瀧夫婦さし寄つて、「コレ若君樣、伯父樣へござれ〳〵。」の聲諸共、何れを夫れとみどり子の、敎へられねど慶覺の、御顏を見てにつこりと、笑ふ面ざし目鼻のかゝり、先君に生寫し。「不便の者の有樣や、甲斐なき今の對面や。」と、包むに洩るゝ御涙。扨は と海上進み寄り、「甥は子伯父は親同然。流石御血筋なればこそ、胴慾な此方にほや〳〵と笑ひ顏、御目にかゝらぬか、愛しうはないか、いたいたしうは思はずか。ま一度分別して下され。餘り酷い。」と掻口說けば、慶覺やゝ打點頭かせ給ひ、「譬へば八逆十惡の無量の罪ともならばなれ、若が風情御臺の有樣、方々が歎きと言ひ、爭でか餘處に見るべきぞ。望みに任せ只今より、還俗せうわ。」とありければ、「何御還俗とや。なう有り難や賴も

に詞もかけず、机に染みたる御顔、海上が氣は焦つ、「御還俗の否應御分別極まりしか、御返答。」とぞつこうどなる。「ムウ其の事に來りしな。出家の身なれば、兄の敵討たぬとて恥にもならず。先祖の孝行後世弔ふより上もなし。分別するほど還俗は思ひも寄らず。重ねて言ふな聞くことない。歸れ歸れ。」と宣へば、海上ぎよつとし、見れば垣の外面にも、聞いて驚く顏の色、堪へかねて海上太郎驅け上り、御膝元にぐつと詰め掛け、「我等が短氣豫て御存知。御返答を生死の境と、一心を据ゑたる男。實正詞に違ひはないか。」「ハテ異な事に念を入る。出家侍二言はない。」「エ、其の根性とは知らないでな、割つつ口説いつ無用の口に風引かせ、腸が燃え返る。家來でない暇取つた。主でなければ恐れもない。」と机押取り、「泥坊め。」とてははつたと打ち、「道知らず義も知らぬ、づ*くにふめ。」とては丁ど打つ。音に驚き藤孝始め殘らず庵に走り入り、「勿體なし海上物に狂ふか兼盛。」と、引き止むれば、「否々放せ。生けて置けば修羅の種。浦々島々まで三好殿のおふれ〳〵と、足利數代の政道をもどき、入道長慶が參内院參の、馬の口取る奴めまで、ひん〳〵と跳ね廻り、いきり廻る面を見れば、其の度々にむつ〳〵と五臟六腑を捲り上げ、若君こそ御幼稚なれ、興福寺の弟君に還俗勸め、二引兩の旗眞先に押し立て、入道長慶が首取つて、今の無念を晴らさん物と、日月にも佛神にも、肝膽碎き願ひをかけ、海上が賴み是れ一つ、醋の蒟蒻のと品付けて、臆病第一の削り廻し、踏み殺して己も

第四

背くとて雲にも乘らぬものなれば、心ぞ緣に引かれ行く、よし足引の大和國、昔の京と奈良の里、興福寺の片邊に、身を墨染の庵室あり。門まうけたりと雖も常に鎖せり。垣は苔蒸し蔦かづら、朝は亂るゝ萩の露、平等眞如の玉を磨き、夕は戰ぐ荻の風、怨憎會苦の夢を破り、閑窗の月に嘯けば、十萬の億地掌の内に輝けり。時しもあれ夏も過ぎ、木の葉の時雨秋長けて、道は絕えけり山里に、旦暮誦經の聲ばかり、勿體なくも住人は、武將義輝公の御弟、義昭入道慶覺の、世を遁れます御庵、殊勝にも又痛はしし。斯くて淺川左京大夫藤孝、御臺所に廻り逢ひ、御誕生の若君を、清瀧夫婦に介抱させ、海上太郎が案内にて、庵の外に耳を澄まし、「嬉しや御經の聲の聞ゆるは御他出にあらず。いざ御案内申さん。」と、入らんとすれば、太郎、「暫時。」と押し止め、「某此の閒申すには、早く御還俗あつて、三好入道を討ち亡ぼし、家名の恥辱を雪ぎ、兄君の修羅の妄執晴らし給へ。且は御先祖の孝行と、繰り返し歎きしかば、篤りと分別して返事せん、其の內參れとの仰せ。還俗氣が付けば珍重。先づ某一人入り、返答よくば方々も直に御禮、惡しくば重ねて願ひの奧の手。暫く爰に。」と枝折戶開き、庵室の庭に頭を下げ、「海上太郎兼盛參上。」とこそ訪れけれ。慶覺御經に餘念なく、見やる許り

貞女の道を立てる〳〵と、思ひしは皆道に背きしか。神に憎まれ佛に捨てられ、閻魔王に罪を問はるる時、如何な富樓那の辯舌も、何と言ひ拔け逃れうぞ。畜生の身の果て見置いて娘肖るな。」と切先銜へ眞逆樣、池へだんぶと飛び入つたり。人々「是れは。」と泣き騷げば、よろめきながら文次兵衞、「男を害し其の妻を娶る、畜生殘害の此の體、燒くな埋むな鼈の餌食になれ。」と、並の池へどうと飛び込む、左手の腕造酒の進聢と取り、「とてもならばお腹めせ。御介錯は私。」と引き上ぐればくわつと睨め付け、「言はれぬ肝精。汝が世話は御臺若君の御事ならで日本に用はなし。兩人忠義を忘るゝな。」と、水中にて腰刀拔くより早く我と我が、腕の付根を切つて放す。胴は水底陸に止めたる其の甲斐なき、共に沉まん飛び入らんと、慌て憧れ裳を浸す浮草隱れ、「あれ〳〵父よ。」「喃母樣なう。」と叫べば共に鳴く蛙、聲を力に抱き上げ〳〵、抱へ引き上げ身を付け肌に暖めても、其の甲斐なみの春の池、體は冰と冷え切つたり。猶抱き寄せ擔き寄せて、「今目前の三途の川、共に瀨ぶみ。」と歎けども、忠義忘れぬ武士の、遺言深き濁り江に、涙汲みそへ立ち歸る。暫時の敵も來世の夫婦、暫時の兄妹此の世の夫婦、名は永き世の夫婦池、池の玉藻をなき魂の、形見に繁る蘆眞菰、語り傳へて言の葉の、寄るべの水とぞなりにける。

ぱ却つて一學が、エ、我に本妻なきならば、彼の娘を娶らんものをと戀咄、此方は後手になり、空しく歸るは幾度か、書捨の玉章千束につもり、胸に思ひの滿つる折しも、一學が前妻産後に死し、忌の中より呼び取り婚禮、無念にも妬ましく堪忍ならず、手もなく討つて思ひの儘に、夫婦とはなつたれども、思へば劔と劔を抱き合はせたる夫婦合、夫れとも知らず、我を賴むに馴れ馴染む傷々しさ、初めの戀に百倍したる苦しみ、胸に包んで二十年來時がな來れ、造酒の進に討たれて濛霧を散ぜんと、待ち畢せたる今月今日、一生の懺悔是れまで。サア討て酒造の進。ヤイ淸瀧親の敵逃さぬなどと、酒造の進に指でもささば勘當。先年捨てしも眞實は此の所存。サア討たぬか造酒の進、腰が拔けたか怯れたか。」と、せかれても只伏し沈み泣き居たり。「ヤ我を討たずば汝武士は立つまいが。」「如何にも討たれしも親、討ちたるも親、親の恩を辨へ知つて、武士が立たずば立たぬまで。」と腰の廻りかなぐり拔き、大小ぐわらりと投げ出す。母立ち上り刀追取り、するりと拔いて聲をかけ、「夫の敵文次兵衞恨みの刀受取れ。」と飛び蒐つて眞甲耳の根までずんばと切り付け、「サア敵討の儀は是れまで。一學殿とは只半年の馴染、喃お前とは早二十二年の馴染なれども、武士の娘に生まれた因果、樣々の御苦勞受け、恩知らず人でなしの此の女、犬畜生と思うて許して下され。」と「わつ。」と叫び伏し轉び、「淺ましや轉てや、敵を討つて貰はん爲に身を汚し、夫を重ねし其の敵は誰ぞ、枕を竝べ肌を觸れし後の夫。

れども、御契約の筋を立つるも一つの孝行。時を移さず討つて捨て、實父の孝養、今の父母の本懐を達するは易い事〱。母者人申し、尤も敵今は名をも變へつらん、元の假名實名、若し住所知るゝ手掛りあらば、よし虛說でも聞きたし。」と壯士の血氣盛り、そゞろに母は泣き出し、「愚かの事をいふ人や。名も在所も知る程ならば、何しに二人の夫を重ね、うか〱と手を延ばさうか。稚き其方の小腕に、刀を持ち添へさせても此の母が、中々人は賴まねども、何のあてもない故、文次殿へ苦勞をかけ二十餘年以來契約とは言ひながら、孤子の養育敵を聞き出す心遣ひ、其の恩は如何許り、今より其方成り代り敵を討ち、親々の恩を報じてたも。兩親さへあるものを、又兩親の孝行苦勞召さるゝいとしや。」と又さめ〲と泣きければ、「女房泣くな悅べ、敵の住所本名慥かに知れたぞ。」「ヤア、それは何處の何者。」「オ、駒形一學を討つたるは、當國當所の住人、冷泉文次兵衛長房。」「ハア、ハッ〱。」と許りにて、女房膝を立て直せば、御臺所は氣も消え〱、兄は呆るゝ妹は、やはか親は討たせじと、兄が目色に目をつくる。驚く許り一つにて、四人四つの心々、氣色變つて見えにけり。文次一人は色も變ぜず、「今に及んで無用の詞數なれども、一學を討つたるは喧嘩でもなく遺恨もなく、元の起りはあの女房、一家中に沙汰ある若盛りの艷色、我も二十三妻はなし、あはれ鴈の翼もがなと、焦れても言ひ寄らん便りなく、幸ひ一學あの女房に知邊あり、只管に賴まんと、文を認め懷中し、逢へ

人し、割なき中に清瀧を儲けしが、兄は先先大望ある大事の男子、此の乳房天の與へと、藁の中より水子の娘を捨て、實子に替へて育てしは、約束違へず敵を討たせ、妻の本望一學が亡魂の、修羅の妄執晴らさんと、旦暮心を碎きしに、思はず淺川公の御詮據無く、十三の春より召し出され奉公人に勝れ、膝元去らずの出頭、過分の所領に付けられ、時めくを見聞くに付け、日頃の存念一月延び一年延び、忘るゝともなく武士の道に迷ひ、何時でも敵は討たるゝもの、まだ知行まだ立身させ、天晴國郡の主ともなさんと祈りしに、國郡は扨おき、二十間に足らぬ泥水の、主となつたる不便さよ。野狐が油鼠の餌に釣らるゝ類、我も倅が知行の餌に罹つて、侍の本意を忘れ約束違へし、人の皮被た野狐の最期場は此の池水。コレ女房其方は人間なり、我が最期を見て前夫の敵を取つて、本望遂げたりといさみ、御臺所若君に忠義撓まず、南都の叔父君を頼んで、御運の到來を待つべし。」と、言ひ捨て池へ飛び入るを、「なう狂亂か悲しや。」と、引き止むれば蘆原戰ぎ、「勿體なや暫時々々。」と押し分け押し分け走り出でたる兄妹。「ヤア生きて居てくれたか出來した〳〵、誠の冥土歸りぞ。」と母も御臺も縋り付き、嬉し泣きこそ道理なれ。兄は草に平伏し、頭も上げず泣き居しが、「死に損ひし面目なさ、出おくれ致しお心惱まし歎きをかけ、重々の不孝申し上げん詞もなし。扨我等には父母四人ある由、承つて驚きし。さりながら七世の父母の恩より、今御兩所の御高恩、塊に須彌山比べて比べ難け

酒の進と清瀧は胤腹各別、まんざらの他人なれば、夫婦となるも障りなく、不義にもあらず。某が爲には養子でも又拾ひ子でもなく、親子となりし因緣、とつく語り聞かせで叶はぬ事、時を延ばし日を延ばし、一大事を怠り、今後悔の憂へを見、浮世の泥に醉うたる文次兵衞は四足にも劣つて、車の轍に彼の三升の水に渴ゑし、小鮒雜魚とは我が身の上。」と、はらく\と泣きければ、はつと驚く造酒の進、「扨は誠の親ならぬ親の高恩。」と、手を合はせてぞ聞き居たる。「ヱ、甲斐なき今の昔語、彼が誠の父は周防國の大守、大内義隆の家人、我等とは古朋輩、しかも同年駒形一學兼綱と言ひし覺えの武士、母は造酒の進を產み落し、七夜の内に相果て、夫れより間もなく是れにある我等が今の此の女房、未だ十七歲、子の養育とて呼び迎へ、後連の妻と定まりし。其の頃は大内の世盛り、家中は桼將碁茶の湯蹴鞠歌連歌、固より一學優男、花の本の門弟にて連歌を好み、同國朝倉の八幡宮月次の會の歸るさ、時しも五月下旬の五月闇、右は竝木左は小川、降り頻る五月雨に奴が提灯打ち消し、目指すも知らぬ後より、如何なる遺恨何者の業とも知らず、聲をもかけず切りつくる。流石手練の一學、連歌の附句にや案じ入りけん、拔きも合はせず敢なく只一打に、討たれて遂に此の世を去り、早二十二年の光陰、思へば隙行く駒なりし。二十に足らで孤子を抱へさ迷ふ女、朋輩の好誼忍び難く、十五にならば親の敵を尋ね求め討たせてたべ、ォ、討たせんとの契約にて、斯く夫婦となり、國を立退き浪

死なずにも濟む事を、差詰りし心ゆゑ、可愛や果敢ない死をさせし。せめて體が浮み出で、死顏なりとも見せてたも。」と御臺諸共池を廻り驅け廻り、水を叩き草に臥し、聲を惜しまぬ口說き泣き。「勿體なや父母に、孝行こそは盡さずとも、子故の難儀、憂へをかくる皆逆樣。」と、不孝の罪を悔みの涙、「死におくれたる面恥。」と、猶身を隱す蘆邊より、滿ち來る潮の如くなり。思ひ極めし文次兵衞、差當る哀れに取亂し、涙に沉み居たりしが、池を覗いて大聲上げ、「エ、殘念や半時遲かりし。ヤイ造酒の進、假令武家に生まれずとも、男たる者の自害とならば、腹を切るか、切先を啣へて貫かるゝか、下郎とても吭を搔く、其の法を知らぬ若者にはあらねども、不便や泥水を飲んで身を果せし、最期の心を察するに、思はず畜類の境界に落ちし故、太刀刀の冥加を恐れ、氏家名の恥を愼み、紋付の上著まで脫ぎ捨てし神妙さ、それこそ人よ弓取よ。親は子に及ばぬもの、人と思ひ御臺所、若君を預けて死んだか情なや。我が心の無念故、可惜しい侍を殺してのけた。女房なう可愛や娘も心器用者、恥かしいと思ひ詰め、盛りの花を池の藻屑となし果てた。」と、夫婦手を取り泣き叫べば、御臺所も聲を上げ、「百人にも千人にも、稀なる忠義の侍、男勝りの淸瀧に、今別るゝ若君の、生先御運の淺ましや。」と御身に迫る御涙、蘆の陰より二親の歎き兄弟が、涙間近き蘆垣の、隔つる中ぞ哀れなる。文次兵衞涙を押へ、「花に淸香月に影、侍は氏素性、水底の魂魄も能く聞け、御臺所も聞しめせ。元來造

たれども、流石侍人間の、道ならぬ恥を知り、死を別々にしたりと、父母へ申し譯世上の唱へ。水に物は書かれねど、心の誠を現はせば、池水は我が書置ぞや。此の上著は家の紋付、お身が上著は御臺所召下しの拜領、何れも畜生の死骸に捲くは、冥加なしとは思はぬか。」「ア、尤もいざ。」と帶を解けども、二世の契りは猶引きしめて、＊君と竝びの池にこそ、身をも投げつと讀み置きし、古歌の名所にあらねども、是れも夫婦が竝びの池の、岸の立樹に打掛け〳〵、「サア西は斯うよ。」と指さす方の畑中、走り來る松明、後の方より小提灯、母の聲にて、「それへ見ゆる松明は文次殿か。おうい〳〵。」の聲々、「南無三寶死に損うては、恥の恥ぞ。」と押し分けて、隱るゝ葦の節の間も、待つ命こそ短けれ。提灯片手に御臺の御手、引いつ引かれつ三人一所に走り寄り、「間もなき中近邊に居ぬからは最早尋ねまい。兄も妹も一器量ある者共、思はず畜生の交はりに名を穢し、恥かしい口惜しいと思ひ詰め、家を出で生きては居ぬ筈。御臺樣にも若君抱きまし恐れ多い御氣扱ひ。御供して早歸れ。エ、惜しい奴等殘り多い。」と涙ぐむ。「ア、氣の落つる事言うて下さるな。さう短う思はずとも、念晴らしに京道を尋ねまいかいの。」「ム、それ〳〵死骸を見屆けをさめて、其の後の覺悟。皆々此方へ。」と行き過ぐる、提灯の光に映る紅裏。是れ〳〵何か爰に翻くは、なう悲しや夫婦の衆、清瀧が小袖が枝に掛つて有るわいの。」「ヤ、此の樹の枝に掛りしは造酒が小袖。扨は二人が此の池へ身を投げしに疑ひない。

れば先へ抜け、走せ過ぐれば追ひ續き、まどひ繋がれ振りほぐされ、野道田道の幾筋か、繩の縺るゝ如くにて、根絡む草に蹴躓き、思はず二人どうと坐り、始めて息をぞ繼ぎにける。清瀧猶も泣きやまず、「エ、酷い造酒樣、なぜ俄に其の樣に、疎み隔てて下さんす。畜生道に落ちしとて、私が科でもなく尤もお前の科でもなし、過去の因果づく。一人お果てなされしとて、夫婦と契りし浮名は、死に更りても削られず、兄の一分立たねば妹は猶立たず、生きてゐよならゐよ程に、一人存へ斯う／＼せいと指圖して下さんせ。恥かしい事のありたけ、打解けしまうた其の跡で、兄妹の差合喰つたとて、何の詮もない事。犬ともなれ猫ともなれ、未來までも夫婦の中、死ぬるといふ今になり、さしあひ所へ行く事か。」と抱きしめてこそ歎きけれ。「オ、言へば其の通り。無念や造酒の進狼狽へたり。一人死なうが二人死なうが、穢れし惡名雪ぐにもあらず。如何にも／＼二人一所に死んで呉れん。爰は何處ヤあの一村の黑みこそ覺えあれ天神の森、宿所とは二十町餘りも距たる。是れ／＼叢に星の映るは池水、なう此方にも池水あり。誠に願ふ所、畜生の自害水に行き當る、天の導き深さ淺さを試みん。」と、石を拾ひ打ち込み打ち込む濁江の、濁りも深き水の響。「お身は其の池我は是れへ。」と、立別るゝを引き止め、「コレまだ恨めしい事許り。手に手を取つて同じ水底、同じ水が飲みたい。」と又泣き出せば、「オ、可愛や道理々々。我もさは思へども、死に切り死骸も浮ぶ時、兄妹とも知らず夫婦とはなり

きかへて、今日の逢瀬は脊中どし、泣くより外の事はなし。折もこそあれ、妻戀ふ猫の二匹連、廂の屋根に呼び交し泣き焦れ、唄戀に牡丹の眠りも覺めて、軒の柱をニヤウ／＼下りつ上りつ戯れ狂ひ、人目も恥ぢぬ聲々、涙の眼に造酒の進急度見やり、「牝牡同じ毛色は彼奴も兄弟。飛鳥にあらざれば、飛鳥の心を知らずとはそれは人間、畜類は其の氣を知る、我を己が友とする。エ、無念や是非もなや、見る目もうたて鬱し。」と吹き消すともし、「あの猫も兄弟か、ア、羨ましい兄妹、夫婦と契りても、人も咎めず誹られぬ、猫になりたい／＼、こちや猫ぢや。」と言ひつゝも、側へ／＼と立ち寄るさし足、兄は逃れん／＼と、そろり／＼の盜み足、屋根には猫の妻戀に、焦れ狂ひ縺れ合ひ、軒の掛樋を踏み外し、庭の古井へ二匹連、だんぶと落ちたる水の音、「なう悲し可愛や、助けて遣りたい。」と、見れども水の底深く、暫時はあがき苦しみて、遂には聲も絶え果てたり。膽に應ふる猫の自滅、刃に掛らず首縊らず、舌をも喰はぬ是れ畜生の自害の手本。何存へん今宵の命、淵にもあれ池にもあれ、行き當るを我が自害の場と、思ひ据ゑても妹が、「離れじ退かじ造酒樣。」と聲で探すを外せば尋ね、四方は暗闇戀の闇、側にあれども見ず見えず、觸導は足音行き違ふ、袖の追風鬢の香を、とめて是れぞと取り付くを、引外して突き倒し、走り出づる門の口、「私もなう。」と又取り付くを振り放し、縋れば放れ寄れば退き、井堰に掛るあら鵜縄、縺れ纏はれて三しどろなる。道とも畦とも案内知らず、横へ切る

けられ、征夷大將軍源義輝公の、御直の御詞にも掛りし、冷泉造酒の進房平と言ふ侍が、思はず兄妹夫婦となり四這にはひ、尾の生えぬ許りの畜生界に落ちたるな、エ、成り果てたり口惜しし口惜しし。」と喰ひしばる齒齦、握る拳の爪際より、絞り出す血に泣く涙、錦をほつく如くなり。「よしく御臺若君を父に渡し置く上は心易し、生面下げて存命へ、親一門を犬鷄の眷屬となさんより、我一人畜生になつて身を果し、氏家名は汚すまじ。是れまでなり。」と刀押取り「アッア是れは親の讓りの備前清光、畜生切れとて讓らぬ物。」と又脇差に手をかけ「ヤ是れも主君より拜領の行平、此の大小脇ばさみ物具固め、大事の御陣の眞先驅け、敵軍の大勢を捲り立て馳せ散らし、打ち合ひ切り合ひ切り結び、名ある敵を取つて押へ、首取れとてこそ拜領もせめ讓りもせしに、さはなくして畜生の腹を切る。二腰の銘の物、末代武士の手に取らず、永く日本の廢り道具となさん事、能く太刀刀の冥加にも盡きたりな。首縊り舌を食ふも、思へば人間の爲す業、畜生の自害手本なければ如何せん、扨淺ましき因緣や。」と一人言して咽び入り、身を搔き抓り歎き伏す、心の中ぞ痛はしき。思ひに沸る淸瀧が、心を制し押へかね、走り出では出でたれども、恥かしや抱きしめて、あられぬざれのかの睦言の、俄に夢にもならばこそ、今は兄樣妹の、禮儀もあり指合を、苦しや側へも寄りにくく、「わつ。」と許りに叫ぶ聲、兄も振り上げ見交せば、衞士の焚く火は顏に燃え、身には消えつゝ玉の汗、昨日の牀に引

を産んだは此の母、家重代の御本尊、此の判の筆者も是れ眞實の父樣。喃々再び娘悅んだ。これ造酒汝の妹、あれ兄ぢや。苦勞しつらん可愛や。」と、夫婦引き寄せ〳〵、歎けばうろ〳〵夢見し如く、造酒の進は猶仰天。「眞の父樣母樣が、なぜ捨てゝ下さんした。」と、父母に縋り付き、恨み泣くこそ道理なれ。「オ、尤も〳〵。赤子に何の憎しみ有つて捨てはせぬ。お主が生まれしは造酒が三つの年、浪人のうき世路、乳呑子二人の養育心にまかせず、兄妹共に餓ゑ凍えさせんより、女は果報もあるものと、捨つる妹捨てぬ兄、可愛さ大切さいづれ愚かあるものぞ。岩成が實子ならば、造酒の進首打てと、只今相圖まで定めしに、神佛の控へ綱、やれ〳〵危い加減に子を拾ひ、子は命を拾うたな。恨んでくれな。」と撫で擦れば、「扨は造酒樣は眞實血を分けし兄樣かいの、ハア、、ハアツ。」とより外詞なく、尻目に見遣る目に涙。兄は顚倒五體に汗、結び初めたる因果の契り。悔んでも悲しんでも、切れも離れも中々に、網に罹りし比翼の鳥の、絡む緣ぞ淺ましき。父母悅び、「みな人らしう生ひ立ち、忠節盡す其の冥加、親子兄弟廻り合ふ。御臺所もさぞ御機嫌。先づ御前へ。」と夫婦娘の手を引いて、「造酒の進は是れにて四方に氣を付けよ。牀の小銃に彈丸藥込んで置く。此の近邊は三好が百姓、慾に耽る人でなしの畜生共、ごそともせば擊て〳〵。」と、外を言ふにも我があて事かと、放さぬ鐵砲胸板にはたと受くるぞ不便なる。造酒の進只一人、我と我が身を見廻し、「エ、見事手足五體は人間と產み付

てあるからは、生中女の味方一人など、あつて益なくなうて事缺けず。女房共早う〳〵、是れへ呼び出し口を問ひ、某が目交するを相圖に、眞二つに打ち放せ。刀の刃に覺えあるか、ぬかるな〳〵。」「あつ〳〵。」と言へども一世の身の難儀、心騷ぎ氣もどまぐれ、「刀は業物研立てなれど、竟に女を試して見ず。萬一淸瀧が觀音の變化ならば、刀が折れはせまいか。」と、詞てんぐ〳〵上調子、「エ、連れに立つ母者人も早合點。」と、奧を見遣れば淸瀧が、母に誘はれ來る有樣、「南無三寶死にに來る。エ、俄に御臺の御用もがな、暫時の命も延ばはれかし。」と、やる瀨やる方なかりけり。さあらぬ顏にて文次兵衞、「淸瀧殿とやら、御身は岩成主稅娘とな。忠義とは言ひながら肉身分けし親、一門衆もさぞ懷かしからん。」と、心を引き見る其の中にも、造酒の進は我が親の、目交が夫婦別れぞと、胸に迫るは淚と念佛。淸瀧何の心もなく、「恥かしきお尋ね。私は元岩成が實子でなく、父母知れぬ捨子を、東寺の四塚にて拾ひ取りしと申せしが、殺さんとまで致せし故、恨みこそあれ努々慕ふ心はなく、由緣持たぬ果敢ない身、賴みまする。」と淚ぐむ。「イヤそれも岩成めが僞り、下心に何ぞ巧みあつて、證據印もない捨子と言ひなし置きつらん。」と、念を入るれば、「否々譃であるまい印には、襟に縫ひ付けありしとて私に呉れ置きし、守本尊一寸八分の不動樣、包みし袱紗に書判するゐて年號月日、眞の親の形見と起き臥し肌をも離さず、卽ち爰に。」と取り出す。父母驚き押し開き、見れば見る程覺えあり。「なう汝

屋、暫時が程の御安座所、案内申せ女房、燈火も細うして、藪越に覗かれな。」と義者の詞に心解け、御臺所清瀧も誘ひ奥に入り給ふ。文次兵衛造酒の進を近く寄せ、「御臺若君は身が請取る。其方は彼の海上太郎を尋ねて、阿波淡路の軍勢を驅り集むる一思案、然るべし。」と言ふ所に、興醒めたる氣色にて母立ち出で、「喃々聞けばあの清瀧といふは、敵も敵三好が家老、岩成主稅が娘なりとの物語。」と、聞くより父も驚く面色。「いや／＼お氣遣ひないこと。幼少より御臺所に仕へ、女に稀なる忠節、親にも逆ひ岩成を討つたる程、義を守り道を知つたる女。」と言へども、猶眉を皺め、「左程道を知る女、親に不孝はよもあるまじ。一度は主君に忠を勵み、又一度は親の仇を報い、志を遂げ孝の道を立つる心と見た。さなくとも一門廣き岩成、殊に此の邊三好が領分。緣引手引を以て欺らば、流石女の欺られ味方の大事となる時は、一生の不覺我が武士は廢る。危きをせざるは軍法の第一。不便ながら其の清瀧、切つて了へば寐覺やすく氣遣ひなし。呼び出し挨拶する中造酒の進、一刀に切つて退けい。それ女房、賺して是れへ同道。」と、行燈押し遣り座を組んだり。くわつと氣上り顏は天火、「シテそれは只今か。」「聞取る程御臺所も御氣が弛む。只今々々。」「ハツ餘りな御用心。忠節の味方一人失ふは後悔の基。此の女二心なきは我等請合ひ。」と、言はんとせしが我が戀路、敏き父に悟られじと、つゝみて詞を控へける。「いや／＼若い者の知らぬ事。佐々木が藤戸の浦人を殺せしも深き軍法。親子斯く

の進な。今度京都の騷動此の邊とても靜かならず、我も鏽槍引提げ、馳せ付け一働きと思ひしが、人も頼まぬ高名立、知行欲しげに無益の事と、流れに耳を洗ひ樂しむ所、君の大變汝もさぞ、一方の御用に立ちつらんとこそ思ひしに、只今は何の用。容貌の好い京上﨟を光らかしに來たか。此の近邊は三好が領分、腰拔の片時も足を留むる處でなし。早逃げ去れ。」と言ひ捨てて入らんとす。「是れ〳〵申し些か我が身を遁るゝ爲に候はず。是れは忝くも義輝公の御臺所、道にて若君御誕生。」と言ひも果てぬに、「ヤレ聲高し出來した〳〵。先づ〳〵是れへ。」と招き入るれば、母も聞き付け出で迎へ、「御代が御代にて、輿車の御成より、世の數ならぬ浪人を御頼み、名字の譽。」と蹲踞し、上座に移し參らする。御臺所も御淚、「思ひも寄らぬ飼犬に、手を喰はれ給ふ御運の末、存命へ殘るも口惜しながら、身二つになるまでと、劍の山を逃れしも、造酒の進の働き。頼むは親子夫婦ぞや。」と喞ち給ふぞ痛はしき。文次兵衛謹んで、「人間の吉凶天地の運は絢へる繩の如く、只今危難に迫り給ふと雖も、正しき若君在せば、當家の御運は一陽の春を待つ、雪中の梅に異ならず。何條三好連一國に威を振ふとも、天下に比ぶれば*雀の角、鼠の牙の災ひ何事か候ふべき。嬰子ながらも義輝公の若君、三好誅伐の御旗揚げ給ふとある程ならば、五畿七道に峙ち立つたる武功の勇士、弓箭の名を揚げ、祿を子孫に傳へんと願ふ武士、御味方と申さんに、面を振る者一人もあるべきか。此の邸の隅に設ひ置きし學問所の萱

り給へ。産屋は自然と天照らす、天に隔てのなき名將、土を踏まへし國土の主、此の君ならで誰やらん。オ、目出度し。」と壽きて、二人御臺所の御手を取り、勇み行方も天の川、思ふが中の船ならで、標野川岸曳船の、綱手に掛る青柳の、風に翩翻牧方を過ぎ佐太を越え、唄川を隔てて向ひを見れば、里の賤の女ナンデモ〳〵、襷がけして跣足でからげて、水にひつたり布晒す、細布さらしの里を過ぎ、けさ出の旅のひと日だに、憂きことの數身につもり、時を重ねて是れやこの、名にのみ聞きし大江の岸、渡邊の岸うち過ぎて、福島にこそ三重辿り入る。山の奥にも鹿ぞ鳴くなると、市にまじはる侘隱者、冷泉造酒の進房平が父文次兵衞長房、小知に腰は折るまじと、水草清きわたのべや、福島に閑居を占め、妻は渡世の塗桶に、丸綿ほんぼりひたひ綿色々ありと看板の、綿を摘むには口傳も入らず、手品一つのひぢ綿や、引いて延ばしてふは〳〵と、袂の下の富士の雪、婦人の能こそ優しけれ。

造酒の進房平、誕生の若君を清瀧に抱かせ、御臺所を介抱し、福島に尋ね著き内を窺ひ、即ち親文次兵衞が宅。「渡世の爲町人同然の體ながら、武士氣は今に變らず、父母共行儀づよき氣質、清瀧と我等密通の夫婦などと言ふ事、耳へ入らば慥かに勘當、鼻息にも出すまいぞ。」と、囁く後の細道より、「萬事無心なり一釣竿、三公にも換へず此の江山。」と口ずさみ、釣竿擔げ歸るは父長房、見向きもせずつつと入る。呼び返して、「申し〳〵、我等造酒の進、御勇健の體を拜し大悦至極。」と踞へば、「ム、造酒

は問ふまでも、及ばぬ景の秋の山、戀塚四塚跡に見て、いつか歸らん鳥羽畷、今ぞこえだの橋柱、淀の大橋小橋をも、朝日につれてと渡れば、波に五色の玉散りて、水に錦や流るらん。人目づゝみの松なみて、千歳の下は通れども、赤子產まぬ閒は存命へて、有るが有るにも定めなき、女は生死の境川鳩の峯こし詠むれば、和光の影はしん〳〵と、日も陽炎の夏木立、江戸巖頭峙つて山聳え谷巡り、諸木枝を連ねたり。取分け神の御誓ひ、他の人よりも我が人を、護りも堅き岩清水、今濁る世の源を、再び歸り住み馴れし、謠八重九重も遠ざかる、名殘法施の淚の玉、拾へば道も捗りて、橋本近き八つの鐘、つきぬ歎きのおどもりか、心わろげに御臺所、行き惱み草にひれふして、御息も絶え〳〵に、夫婦驚き集ひ寄り、さま〴〵勞り奉れば、折こそあらめ御產の氣づき、やす〳〵うみの產聲は、卵の中の嚬伽鳥、姿は玉の男子、歎きの中の悅びと、世の言草や是れやらん。シテ「ア、さて果報拙き若が有樣やな。御所を離れて道の邊の、空に一重のおほひなく、地に膝入るゝ宿りなし、淚產湯に引かせんより、柴折りくぶるよすがなき、是れが征夷大將軍左大臣義輝の總領君の誕生に、あるべき事か淺ましや。」と、こぼるゝ淚うへ〳〵も、悔みは女の習ひかや。ワキ冷泉立ち寄り、「否とよ、往昔の例を引けば梓弓、正八幡大菩薩、筑紫にみあれの折柄も、石上樹下の吉例あり。殊更所も男山、擁護のまなじり程近し。御壽命は高良の神、武内宿禰が三百餘歲を奉り、御果報は御先祖尊氏公にあやか

撞と打ち付け、胴骨を踠と踏まへ、持つたる御旗引奪り、差し上げたる其の勢ひ。「あれ餘すな。」と、どつと寄る。「ヤア物々し、手練は最前知つつらん。」と、當るを幸ひ人礫、取つては投げ付け投げ散らし、板屋の霰野分の風、木の葉の飛ぶが如くにて、邊に近づく敵もなし。梁帝が龍を投げ、項羽が山を抜く勢ひ、功名譽れも何かせん、義輝公の尊骸に、首なや果敢なや力なや、松を離れし藤孝が、命は蟬の羽よりも輕く、惜しからねども存命へて、主君の仇を打つまでと、心の岩石鐵壁も、碎けて涙はら〳〵はら、溢るゝ玉か唐土の、珠玉を鏤め日のもとに、たくみに匠が建て竝べし、御所も一時の雲霞、煙にまぎれて落ちて行く。

第三

旅の腹帶

あら痛はしや室町の、室に咲く花はや散りて、御臺所の御身さへ、こぼれかゝれる當り月、淸瀧が懐に、はやめ藥*やあま物や、五更の天もあけぬ夜に、造酒の進が御供にて、都を忍び行く道の、歩み苦しや足利の、夫れとは見せぬとりなりも、世の行く人に較べては、かげうづ高き月の顏、雲居をよそにあまさかる、御有樣ぞ哀れなる。昨日は御所の物見より、遠目鏡にて見し目覺えの、東寺の塔

し命、冥土までも。」と呟き、打連れ落ちてけり。猶も近づく鬨の聲、つるべて放す鐵砲矢叫び、御束帶所の遣戸より、長慶入道つつと出で、帳臺に向ひ御殿も響く大聲、「愚かなり義輝殿、一子の首を切つて誠の心を見せ、色を勸めて氣を奪ひ、五年以來仕込んだる謀計、武士と云ふ武士は我が味方。足利十三代の榮華の夢の覺め口、目覺しに冷りと切腹々々。サア大將は籠中の鳥。八方より燒討ちに、蟻の子までも餘すな洩らすな。切り入れ攻めよ。」と、下知すれば、一味申して初戰、適れ御用にたち長刀、拔きつれ〳〵六千餘騎、面もふらず切つて入る。味方は僅か御小姓、御茶道下侍五十騎ばかり、中にも一騎當千の、藤孝大鷹熊鷹の、雉子をかくる勢ひに、遁れた驅武者端武者ども、追つつまくつつ入り亂れてぞ三重戰うたり。敵は多勢を七手に分け、火の手を上げて取り圍めば、味方は殘らず討ちなされ、彌猛に逸る藤孝も、「今は是れまで。長慶がな來れかし。逃さじ物。」と眼を配つて立つたる所に、何時の間にかは松永彈正、足利累代二つ引兩の御旗、郎黨の須股權平太に擔げさせ、其の身は御首太刀に貫き大音上げ、「大將軍源義輝公を、松永彈正久秀が討取つたり。勝鬨上げよ。」と呼ばはつて徐々と陣に入る所へ、左京大夫藤孝、大白黑鬼の怒りをなし、一文字に取つて返し、無二無三に打つて掛る。「そりや淺川よ藤孝よ。」と主人が引けば郎黨も、我こそ先にと逃げて行く。「返せ松永、後を見するか彈正。」と追詰め〳〵追詰められて度を失ひ、逃げ迷ふ權平太が綿嚙摑んで、大地へ

恨み、積る因果の惡業、生きながら額に角も生え、身に鱗も出來ずして、今日まで君に思はれしは、冥土で苦患見せんとの、佛の罰か情なや。賤しいさもしい勤めの女、將軍樣に枕を並べ、文武二道の藤孝樣の御手に掛り、何の命が惜しからう。私故死んだ人々の、恨みの念も晴るゝ爲、弄り殺しにして下さんせ。御臺樣へ云譯し、御憎しみを許してたべ。返す〲も殿の事〲を。」と許りにて、遂に儚く息絶えたり。「思ふに違ひ神妙の女。」と袂絞つて立つたる所に、御所中騷ぎ仕丁下部聲々に、「何かは知らず軍兵四五千騎。色々の旗押し立てて、御所の四方に取り圍み候。」と、云ひも果てぬに追手の御門、貝鐘鳴らし鬨の聲、天地も裂くるばかりなり。「案に違はず入道めが年來の企て、君の御機嫌憚り手をのばして後悔至極。一先御臺を片付け、入道めと組まんずもの。」と大音上げ、「敵一味の侍畜生は兎もあれ、中間馬取にても、御恩を知らば切つて出で、驅け散らし追ひ散らせ。命を捨てよ。」と下知をなしてぞ驅け廻る。主君の命に任せ、冷泉造酒の進、御臺所の御手を引き、清瀧も刀ぼつ込み案內知つたる春日表、小門の方へと志し、足を早むる鞠懸の陰、父岩成主税の介槍引提げ、「返せ遣らぬ。」と追驅くる。清瀧かけ隔て、「親子の好みは內證、主從の忠義は世間。末代の恥辱が恥かしい。相手になるが合點か。」「ヤァ養ひ育てし恩知らず、不幸の女郎受けて見よ。」と突き出す槍をはつしと跳ねてつつと入り、岩より堅き岩成が、首宙に討ち落し、「サア親もなければ我一身、主君と夫に任せ

らせよ。」「承る。」と對の屋の、馬道を忍び入りにけり。「サァ惡入道が退出を待ち受け、手をすらせんか、但し御前の對決か、藤孝が一生懸命。」と、驅け出で驅け入り肺肝を碎き待つ所に、奥より出づる女の影。「ヤァ傾城の大淀。」「左京樣、藤孝樣。」と尋ぬる聲。「藤孝是れに。」と立ち寄り樣、左の太腹一太刀ぐつと、刺すも抉るも一度の早業、「うん。」とのつけに七轉八倒、押へて上に乘り掛り、「汝故に幾人か殺されし人の苦しみ、善い物か惡い物か、此の劒に思ひ知れ。惡鬼毒蛇の變化にもあるまじ、人殺すを好みもせじ。三好入道に賴まれ謀叛の加擔人な、吐かせやつ。」と挫ぎ付くる。「ア、〳〵藤孝樣、お名を呼んで來るは、なう其の事を申さん爲。在京の武士御所中の侍、皆入道に一味して、時節を見て義輝樣を殺さん〳〵と、樣々怖い事共、其のお氣もつかずうか〳〵と、御命は風吹く夜半の燈火、ア、浮雲ア、あぶなと、危む私が心の遣る方なさ、藤孝樣に知らせたいとは思へども、お側を離れお次の間へも出されず。寧そ私が惡人になり、愛想盡きて追ひ出さるゝか、御意見申す人あらばその時萬事打明けんと、女の果敢ない智慧立にて、ひよつと一人殿樣の御手に掛けさせ、につと笑うた其の時の、心の内の苦しみは、切らるゝ人の百倍とは、神ならで誰か知るべきぞ。夫れでも諫むる人もなし。扨は外樣へ知れぬかと、又殺させても沙汰はなし。情なや蚊を殺し、蠅を殺すも罪科。況して同じ人間、悲しや思はぬ殺生と、自ら浮かぬ顏色を、機嫌直しと又殺さるゝ。其の度々の人の

忽の成敗、長慶御邊が云ひ付けか。」と、問ひ詰めてもちつとも騒がず、御前に向ひ涙をはら〳〵と流し、「申し上ぐれば入道が、人を嫉む讒言に似たり、申さねば不忠、是非に迷ひ候へども、天下のため君の爲には、嫡子國長が首打つ程の長慶が、僞り事とはよも思召されまじ。情なや御臺所に心を通はす、密通の男おびき出し、隱し置いたりと承り、手段を以て乞食の孕み女をもとめ、殺し手をこしらへ斯くの如く計らひしかば、忽ち御臺所の御在所現はれしは、某が思ふ壺にあたる所、却つて罪を長慶に塗らんとする、佞臣逆臣、理否聞召し分けられ、長慶越度に極まらば、二言ともなく御前にて切腹。」と、刀の柄に手を掛くれば、「ア、はやまるな入道、汝に些か過りなし。善人惡人は我兩眼に見分けたり。」と、御佩刀するりと拔き、「不義の女不忠の男、まつこの如く打つて見せん。」と、御座の疊を刀背打に、疊みかけて七つ八つはた〳〵と打ち付け、「ハア、心地よし、長慶汝に未だ寢室を見せず、一獻酌んで氣を晴らさん。サア來れ。」と、召しつれられ、簾中深く入り給ふは、にが〳〵しくも笑止なり。御臺御氣も亂るゝ許り、「エ、口惜しや、我も大納言の娘、腹立や不義と云はるゝ此の無念、よし死なば死ね、無實負うては死ぬまじ物。」と、驅け入らんとし給ふを、「ア、御尤も。さりながら酒色に溺れし我が君、御心とろけし上は、理を申す程非に落つる。萬端藤孝に御任せ。是れ造酒の進、汝と清瀧夫婦の約束あると聞く。然れば麁畧あるまじ。清瀧が局に御臺を忍ばせ、隨分守護し參

狀もさせず、理不盡に首を刎ねては、詮議くらし長慶老。」「ハテ物に馴れぬ不功なり藤孝。只今の詞に賴み人は知れたり。そんじやうそれと名をさして白狀せば、却つて君の御難儀と分別し、態と名を聞き切らず。但し跡の詰らぬ時、御邊美事捌くか。」「ォ、跡は藤孝が捌く〳〵。ャィ囚人、謎掛ける樣に吐かさずとも眞直に申せ。忝くも武將の御前、長慶藤孝が詮議、眼を明け。」とありければ、顏ふり上げて、「跡の御難儀構はぬとあるからは、誓詞を破つて云うてのけう。賴み人はあの殿樣、御臺を殺し大淀御臺に定まらば、一廉大名に取立てる契約の印と大判五十枚戴く、是れが證據。」と手を放したる白狀、君甚だせかせ給ひ、御牙を噛み鳴らし、御身も慄ひ見えければ、「なんと藤孝申さぬか。跡が詰らぬとは此の事。是非に及ばず御舅、大納言殿へ誤り證文、御隱居の御思案。それ松永首を打て。」とせり立つれば、藤孝重ねて、「待て〳〵、憎い譃吐め、同類の張本あり。證據を以て詮議せん。造酒の進參れ。」と、高らかに呼ばはり給へば、記錄所の方より、冷泉造酒の進、輿物かかせ走り出で、緣先に舁き据ゑさせ、「御詮議の元是れに候。」と、御乘物の戶を開けば、お腹にやゝをもち月の、山の端出づる其の風情、伺候の諸武士吃驚顏、義輝公も御怪轉顏、入道が澀い顏、御臺所の御顏は、上氣かうじて紫の、藤孝の側を去りやらず、差俯いて坐し給ふ。かねて諜しおきたりけん、松永彈正突立ち、囚人の首水もたまらず打ち落す。藤孝大きにいらつて、「ヤレ詮議の殘る大事の囚人麁

あはれ何處にも謀反人が起れかし。其許を連れて討手に向ひ、千も二千も引並べて、成敗の見飽きさせたい。酒も過ぎたちよと寢よか。主税死骸を片付けて、休め〳〵。」と宣ふ所へ、お取次の侍罷り出で、「日外鳥羽の七瀨川にて、御臺樣を殺したる科人を、三好長慶召取り申されしが、只今御詮議なされんや、伺ひませとの御事。」と申し上ぐれば、君大きに御喜悦あり、「嬉し〳〵。舅大納言より姫かへせ御臺かへせと、毎日の難題に困り入る所よくしたりな。大方の詮議ならず、長慶入道左京大夫藤孝、兩職立合ひ屹度事を糺すべし。我も直に聞くべきぞ。囚人牽かせ。」と、御諚の趣相傳へ、兩人御前に詰めければ、松永彈正囚人護り、御白洲にぞ引かせける。三十許りに小柄の男、惡びれぬ面付、長慶睨め付け、「汝勿體なくも御臺所に對し奉り、遺恨あるべき樣なし。誰に賴まれ、何故に失ひ參らせし。眞直に申せ。少しもあらがはば矢柄責鐵砲ひしぎ、云はせて見せん。」と嵩に掛れば、囚人御前を遙かに見やり、「ハ、、、お久しや殿、昔は君が打つ露に、命を繫ぎし蟋蟀の左傳。今見ぬ振はお情ない。太鼓持こそ致せ、命は金で賣つた物、ずん〳〵に刻まれても申さぬ〳〵。お氣遣ひ遊ばすな。其處等は立派に立つる奴。」と、名ざさぬ許りに君を見る眼ざし。御立腹の御氣色、並み居る警固伺候の人々、手に汗握る許りなり。長慶聲をかけ、「知れた〳〵。徒口きかすな松永、それ引き立て首を刎ねよ。」と下知をなす。藤孝押へて、「いや〳〵何故の恨み、誰に賴まれ害せしと、明らかに白

を見て大淀めが笑ひくさる。アレ殿様へ抱き付いた。」と告ぐる内、重ねてどうと響く太刀音。「梅枝様今のは何ぞ。いとしや首が。」とばかりにて、身を投げ伏して泣き居たる。梅枝吐息をつく〴〵と、思案を据ゑて、「コレ申し、昔唐土に紂王と云ふ大王の后、妲己と云ふ美人、人を殺すことを嗜き好み、花の旦月の夕、酒宴の上に多くの人を切りさいなみ、民の歎きも顧みず、忽ち國を失ひしと、話に聞きしを目の前に、大淀は其の妲己に優りこそすれ劣りはせじ。遂には私等も白菊殿同然に、殺さるゝを待たうより、いつそ走つて退けまいか。いや斯うかいの。」と、囁く後の御寝所に、いつの間にかは義輝公、大淀諸共まし〳〵て、お耳に入るとも知らばこそ。「誰かある人はなきか。」と召さるゝ聲、二人もはつと敗亡し、逃げもやらず居もやらず、消えも入りたき風情なり。「岩成是れに。」と罷り出る。「あの二人の女成敗して、大淀が機嫌直させよ。」と、御意より早く飛びかゝり、拔打に初雪が、右の肩先ばらりずんと切りさげたり。梅枝退つて身構へし、「エ殿、千萬無量の云ふ事も、唯一字に止まつた、今の恨みが何處へ行かう。ヤイ人喰らひの鬼女よ蛇よ。生きかはり死にかはり、五百生々付きまとひ、片時も安穏でたたせうかいな。人に魂魄があるものか無いものか、思ひ知れや。」と恨みの齒ぎしみ、涙一滴眼に浮べず、睨み詰めたる眼差、「サア寄つて討て岩成。」と、首さし延ぶれば主税の介、怖々密と立ち寄つて、太刀振り上ぐれば敢なくも、首は前へぞ落ちにける。「大淀見てか、面白いの。

飛鳥川、罪なき罪に沈み行く、水のあはれやヨサイ、ヨ、ヨサイサヨ。白菊が、何を科とてかかるべき、覺えも繩に絡まれて、引き出さるゝ御所の庭、後に岩成主稅の介、邪見の眼四方に配り、切つてくれんず面魂、見るより二人は撥投げ捨て庭に飛び下り、「なういとしや、又人を切ると聞きしがこな樣かいの。斯う三人は昨日まで高下もない御寵愛、如何に見かへらるゝとて、慰みに人殺すとはあんまり酷い情ない。此の世の暇乞ぢやぞや、白菊樣なぜに物云はしやんせぬ。ヤ猿轡がはめてあるわいの。エ、胴慾な鬼鬼神。御臺樣も定めて殺し人は外にあるまい。あれを聞き是れを聞くに付け、此の二人が當り番近づきました。」と縋り付き、くどき歎けば白菊も、物云ひたげに身をあせり、涙を今の暇乞、三人顏をさし寄せて、泣き沈むこそ道理なれ。岩成主稅二人を引き退け、「隙入つては大淀御前の御機嫌如何、お手前達も今の中隨分口叩け、追付猿轡に間もあるまい。」と惡口あけて塀重門、はたと引き立て入りにける。「なう初雪樣、地獄々々と來世の樣に思ひしが、大淀は鬼の大將、あの門の彼方が無間地獄、なじみの白菊殿、最期を覗いていざ廻向。」と、おづおづ覗く門の隙間、「梅枝樣あれ見さんせ。白菊樣を引き据ゑて、繩を解くは助くるか。」「いやいや兩の手を引張つた。主稅の介が後へ廻る。何とするぞ。」と見る内に、どうと響く太刀音。「なう悲しや、兩の手を切り落した。痞へが胸へさし込んで私や動かれぬ。ア、南無阿彌陀佛みだ佛。」と、そゞろに慄ひ戰けり。「アレ初雪樣、今の

音もねほれし大騒ぎ、障子隔てて次の間に、連三味線の手もたゆく、本歌投節流行歌、引いては唄ひ唄うては、聲もかれのの朝霜や、興の興をぞ催しける。俄に酒宴の座も靜まり、義輝公の御聲高く、「昨日までは傾城の大淀、今日は我が御臺所、何事が氣に入らぬ。ヤレ皆寄つて機嫌とれ。」と廻らぬ舌を廻り聲、障子の外にも息を詰め、内を伺ふ折ふしに、塀重門の車戸ぐわら〳〵と明け、走り出づるは表使の清瀧殿。「是れ喃々、忙がしげに何事ぞ、ア、氣遣ひ。」と尋ぬれば、「梅枝様初雪様、お二人ながらお伽の役か聞かしやんせ。又お傾城さまの機嫌が損ね、今朝からけがな莞爾ともせず。夫れ故例の機嫌直しの御成敗が又始まります。私が親の岩成主税の介に、其の切り殺す人つれて來いとの呼び使。こんなお使するも因果、お役蒙る親の身も因果。御臺様の敵ない死を遊ばし、其の詮議も濟まぬ中、是れが先づあることか。氣もすゝまぬ歌うたひ三味線ひき、お伽もむやくしからうが辛棒が大事。傾城殿に睨まれて、憂き事見せて下さんすな。」と、語り捨ててぞ走り行く。聞いて二人は身慄ひし、「なう梅枝様、毎日々々むごい怖い哀れなこと、見聞くではないかいな。今日切らるゝは誰でござんしよの。」「ア、夕から白菊様が見えぬぞや。但し奴どもが馬取か、誰にもせよいとしいこと。ヤ面々に命が大事。氣に違はぬ様にいざ役目の三味線。」と、よその哀れを身の上に、思ひしらべの絲よりも、心は二あがり三さがり、撥もしどろに彈きなせり。祭文昨日は人の身の上の、今日は我が身の

ひ候はず。」と申し上ぐれば、「あれ聞かれよ造酒の進。淺川領へは一尺八寸の上行き過ぎ、殊更に頭の方一足ゆけば三好の領は離るゝ。大を捨て小に付く法やある。御尊骸も取り納め、御敵の詮議仕らうと出直さねば、淺川の爲も惡しからん。」と、主の威光のはねばかま、嵩に掛つて著せかくれば、淺川の民百姓、「すは我が地頭の敗なるわ。村の造作。」と囁きける。造酒の進から／＼打笑ひ、「いやさ五尺三尺此方の領へ掛ればとて、死骸の踏んだる足の下、三好殿の領内なれば、淺川が知るべき樣なし、疑はしくば百姓共、其の死骸の足動かせず、引き起してお目にかけよ。」「はつ。」と人より我先に、三好方の百姓共、死骸の足を碇と押へ、手手にずつと引き起せば、踏んだる足は三好が領内、「御覽なされ松永殿、此方の領分には些少の構ひなし。御尊骸も取納め、御敵の詮議御肝要。此の旨言上仕る、云分はござらぬか、何と／＼。」と迫りかくれど、松永一句の理に詰められ、返す詞もなげ首し、あやまり入つたる風情なり。死骸を抱へし百姓ども、「何うやら斯うやら敗になつた。あた面倒な死人や。」と、放せば東にかつぱと倒れ、いよ／＼西に障りなき、忠と不忠と善惡は、人間世の境目にて、是れを分つは天道の、直なる道を立別れ、睨んで左右へぞ 三重 別れける。黄金の臺玉の牀、錦の褥に夜もすがら、 唄 さまと添寢の夢を見た、覺めて悔しと一筋に、 半太夫 調子合はせて三つの緒の、餘所にはかりの泡沫を、爰には直に起き臥して、夏冬知らぬ室町の、御所ぞ榮華の奥御殿、女中許りで濱松の、

へばさうかと指し寄つて、又檢むる屍の、顏にぞ人の見知りはあり、肝心の面知らざれば、何をどうとの當もなく、二人ははつと差俯き、あぐみ果てたる許りなり。稍あつて松永彈正、「貴人高家の腹帶には、懷妊の月日姓名を記し、變成男子御産平安の守を納むる習ひと聞く。此の死骸にもあらば證據の第一。」と、立ち寄つて疑ひ解く錦の腹帶、内にこめたる五大明王、六觀音七佛藥師の御産の守、願主征夷大將軍源朝臣義輝と記されたり。「是れ〳〵疑ふ所もなく、御臺所に極まつり。國家の騷ぎ天下の憂へ、何者の所爲か、果敢ない御尊骸の有樣や。」と、涙をすゝつて立ちつ居つ、騷げば共に騷がれて、驚きながら造酒の進、見れば見る程手足の不束、腹帶の印は兎もあれ、御臺所に似ても付かず。松永が顚倒仔細ありと心に頷き、「御臺所と分明に知らるゝ上は、片時も猶豫なりがたし。三好殿御領内の騷動、氣の毒ながら淺川が存ずべき旨趣もなし。立ち歸つて言上せん。家來參れ。」と驅け出づれば、「喃々暫し。」と走り寄つて引き戻し、淺川の難儀三好に塗り付け歸るとて歸さうか。棒木より西東淺川の領内に、死骸が大分かゝつてあるとは、一目見ても知らるゝ事、お身が眼にかゝらぬか。ヤイ雙方の百姓共、棒木を分けて兩方へ、死骸の掛りの尺を打て。」承つて立ち掛り、棒木の中より東西に、引く繩筋のゆがみなき、代々の掟の規矩も、西の方淺川領に死骸の掛り、一尺二尺三尺一寸五分、東へ三好の御領には、一尺一二三、一尺三寸はござりませぬ。兩莊屋立合ひ見屆け、一分も違

とありければ、莊屋罷り立ち、「見付けし人は三好長慶樣御領の百姓、卽ち是れなる木六兵衞、其の見た通り眞直に申し上げよ。」と突き出され、「我ら井出の水落しに、今朝とう出かけにふつと見付け、世間は暗し小氣味は悪し、何見屆くるまでもなく、其の儘逃げて歸り足、莊屋殿へ注進し、それから村中驅け付けて、淺川樣の御領へも人を走らせ、お屋敷へも付屆け兩莊屋出合の上、死骸に菰を著せた許り、外には何も存ぜず。」と言分の趣、兩家の若黨矢立取り出し、口上書一々記しとめにける。「いざ見分。」と兩人死骸に立ち蒐り、はねのくる菰の下、下樣ならぬ女の風情、面の皮剝ぎむくれば、縱ひ存知の者なりとも、面色たゞれて夫れぞとは、誰が目にしろき練の下著、上は地なしに素縫の袷身内に兎の毛で突傷も、切傷とても、「あら不便や、懷胎の女ござめれ。産月近き錦の腹帶、絞め殺せしに極まつたり。造酒の進殿御覽なされ。此の女町人百姓の妻にあらず、公家か武家も國主方の御簾中。剝ぐべき衣服は其の儘に、面の皮剝いだるは追剝盜賊の業でなく、金水引のさげ下地、髮も亂れず死姿繕ひしは、殺して捨てたるに紛ひなし。迂闊に取り置く死骸でなし。さうは思召されぬか。」「實に〳〵尤もの氣の付け樣。小袖の縫は將軍の御物好、俗に云ふ室町模樣、下々の著る小袖にあらず。」と云はせも果てず、「是れ〳〵造酒殿、其の將軍で思ひ當る。御所を夜ぬけに行方しれぬ、御臺所も御懷胎、此の女も懷胎、髮のかゝり衣の綾、凡人ならぬ所あり。其の御方ではあるまいか。」と、云

戸を、現か夢かあけやらぬ、恨みを殘して歸りけり。

西に入り來る東が白む、五更の一點鳥もばら〳〵鐘も鳴る、數は六つの衢の聲々、又立ち寄つて門の

第二

君が代に、盡くともつきじ米麥の、みやこに通ふ鳥羽畷、其の片里の七瀬川、瘠せたる馬の飼料とて、淺川左京太夫藤孝、三好修理太夫入道長慶に賜はつたる、馬草刈場の領界、境目の棒木眞中に轉び伏したる女の死骸、頭は淺川足は三好の領分と、兩屋敷へ訴へ、雙方の莊屋月行司、村の歩きは棒突きならべ、「まあ一二尺東へ寄るか、一二尺西へ行き過ぎるか、どちらへなりとも片付かで、中有に迷ふ女の死骸、未來もさぞ。」とつぶやきける。「檢使のお出で。」と先走り、各土にひれふして、待つ間程なく淺川の大臣冷泉造酒の進、三好が執權松永彈正久秀、供人引具し死骸の前後に挾箱立てさせ、淺川三好境目の論、落著いかにと手下の者、固唾をのんで控へける。「なう冷泉殿、處の者共呼び出して仔細お尋ねなされまいか。貴殿お聞きなさるれば、拙者も共に承る。」「御挨拶に及ばずいざいざ。」「然らば御免。」と松永彈正、「淺川殿三好殿、兩方御領の莊屋出ませい。扨始めて見付けしは何者、其の節外に怪しき事はなかりしか殘さず申せ。死骸見分の上、相違あれば汝等急度曲事なり。」

る。御臺様の方人は彼奴め。お行方吐かせ。」と取り廻す。「ハア、知つたとて云ふものか。甘い奴ら。」と片はしに、蹴散らし〳〵、岩成が胸倉を辵と取り、「うぬは能う上意ごかしに打つたなア。早速なから返禮。」と、はたと蹴かへし打ちのめらし、頭もくだけ腹も裂けよと踏み付け〳〵、「ヤイ手引してうぬが主の、長慶に一目逢はするか、然らば助くる、さなくば只今踏み殺す。何と〳〵。」「ア、〳〵命お助け下されば、主人長慶に逢はせましよ。」「辵とさうか。」「誓文々々侍冥利。」「サア案内。」と引きたてられ、飛び退つて大聲上げ、「主人長慶に逢ひたくば、當年はならぬ。來る灰のえ猫の年、十六月朔日の、三つある時逢はせう。」と、云ひ捨てどつと驅け入つて、門の戸礑と打つたりけり。「エ憎い鬚め、よし〳〵長うは生けぬ奴。いで海上も御祝言の、祝ひの石を參らせん。」と大下馬の道具止、四尺四面の立石、「えいやつ。」と引き起し、高く指し上げ力に任せ、「えいやうん。」と投げ付くれば、四方四維に地響して、ほつかり打ち拔く槻の扉、石火矢なんともいひつべし。愈騷ぐ御所の中、馬淵團八郎扉の破れに首指し出し、「冥加知らず命知らずの暴者、早立ち去れ。」と、呼ばはる頭引摑み、「えいや。」と引けば團八も、身を逃れんと前へ引く。互にえいやと引く拍子、咽喉のかけがね首の骨、がつくり折れて皮ばかり、二三尺引きのばし、一ねぢ捻ぢてふつつと切り、「近頃乏少輕微ながら、是れ今晩の進上。」と館の前にかつぱと投げ捨て、夜も更け星も流るゝ御溝の水は南、我は北へと行く月も、

ひ是非もなや。」と手鞠の樣なる涙を、はら〳〵〳〵とぞ流しける。見廻す築地の彼方より、此方にさしたる櫻の枝を、登り傳ひてさゝがにの、いと危氣に女わざ、取り付く梢も花の香の、裾も小褄も懸りつ破れつ、下に見るとも白綾の一重帶、梢にかけて兩の端、手に取り絡み一思ひ、ついと飛んだる一はずみ、飜りとこそは落ちつきけれ。海上すかさず走りより、「心元なさ、何者なる。」と咎むる聲、「ア、高い〳〵。さういふは海上太郎か。我こそ御臺。」と聞きもあへず、「ヤア御懷胎の大事の御身、夜中にお一人此の樹を傳うてあるまいこと、御麁相至極。」と申し上ぐれば、「なう麁相とは曲もない。大淀と云ふ女ゆゑ、日頃お妾衆、梅枝初雪白菊などが、腹立つるをも樣々なだめ、押へる程の自らなれど、今夜の體を見ては、半時も御所には堪られず、守刀を喉咽へ差し當て見たれども、我一人の身ならねば、死にもやらず何の當所もなう拔け出で、里へ歸るも猶口惜し。何處をどうとのしるべさへ、心に任せぬ身の上を、哀れと思へ海上。」と、涙に咽び入り給ふ。「御道理々々々。好い折柄に參り合はせし。何方へも御供。御心安かれ。」と申し上ぐれば、「いや〳〵、人に誘はれてなんど、ない名を立てられ、猶無念。」と宣ふ間に、御所中騷ぎ、「御臺樣が見えぬわ。御臺樣々々々。」と、女の泣聲上下の騷動。「築地の外を捜せ〳〵。」と呼ばはる聲々、「なむ三寶。」と御臺所、行方も知らず落ち給ふ。程なく御門さつと開き、岩成主稅中間足輕四五十人、棒ひつさげ走り出で、「こりや〳〵海上めまだけつか

はしく、諸武士上を輕しめ恐れねば、自ら御威勢衰へ、國家の大事となる事、鼻の先にぶらつけども、諫言申す人は*七りけんばい。毛槍頭の長慶狸大淀狐、どれぞ一匹踏み殺さんと存じての狼藉、我等が殿に遁世させた替り、あの賣女髪の毛引き拔きずんほろばうに仕る。」と諸人の輕薄裸にして、齒に衣きせずぞ申しける。大淀もおろ〳〵淚、「道々申すも絃の事。御臺樣への憚り、外に數多お手かけ衆、如何な賢女も嬉しかるまじ。外の誹りはお名の恥。御所の中へは私やいや〳〵。是れから戻して下さんせ、歩行で去にますさらばや。」と立たんとすれば、「待て〳〵。推參な小丁稚、攝政關白も冠さげらるゝ此の義輝、國家の政道汝に敎へらるべきか。餘人の見せしめ、岩成馬淵彼奴ぶて〳〵。」「承る。」と兩方より、杖振り上ぐれば、睨み付けられぢつと引き、振り上ぐれば睨め付け、睨め付くれば棒を引く。「身が云ひ付くる何と〳〵。」「上意なり。」と聲をかけ、續け打に二三十、胴骨腰骨目鼻も分かず滅多打、散々に毆ち伏せたり。「エ、可惜興を覺せし。」大淀是れへ、いざ祝言の杯。」と、手を引き御門に入り給へば、岩成馬淵下僕まで、「ア、よい態、一人物に狂はせよ。」と御門の門はたとさす音笑ふ音、奥は千秋萬歲の、謠千箱の玉とぞ謠ひける。海上御門をくわつと睨み、「百萬の理を持ちながら、蠅同然の奴原に打たれたる口惜しや。雷が落ちかゝつても、びつくとも思はぬ海上が、上意と聲をかけられて、思はず頭がさがりしは、扨も天下の御威勢は、斯程にも重かりし。上下の違

馬淵團八郎友澄、徒士若黨まで子持筋の袴の町々、隅々に眼をくばつて歩み來る。先に手を振る徒士侍はつた〳〵と左右へ蹴飛ばし、走り蒐つて乘物の棒端、ぐつと引摑み大音上げ「室町殿の御所が揚屋になり、傾城を請込むと今聞いた。さて〳〵仰山な揚屋入り。大淀には我も執心、買はう〳〵と存じた所、今宵は身が貰ひ申す。金銀とては持たねど、是れ見よ四尺八寸亂燒きのはがねを持つて、腸ともに請出す。サア引きおろし道中させて見物せん。こりや〳〵〳〵。」と、四五間取つて突き戻せば、輿も人も一ぐるめ、大地にどう〳〵どうと轉び重なつたり。岩成馬淵「命知らずの狼藉者。」と左右より取り付く所を、寄せもつけず蹴散らし、飛び蒐つて輿の戸、はたと蹴破れば思ひもよらぬ義輝公、跡に續いて大淀が、生きたる心も泣き沈み、御袖に縋り立ち出づれば、さしもの海上「ハア、これは存じよりもなや。」と、土に喰ひ付く許りなり。武將はつたと睨ませ給ひ「倅め推參千萬。幼少より義昭が膝元にて育ちし故、萬事宥免して差置けば、程を知らぬ我儘、我が輿に向つて狼藉などとは、敕諚にも叶はず。但し義昭が言ひ付けたるか。」と、御氣色變つて上意ある。「ハア是れは恐れながら上意とも存ぜず。海上狂氣も仕らず。我が君と見奉らば、何の慮外致すべき。天下の主源義輝公と申す大將軍、傾城の相輿に召さんとは、如何な曉の夢にも、思ひがけなく此の仕合。君はあの賣女ゆゑ、九條の町に夜明し日明し、夫れゆゑ弟君の御遁世、御臺所の御歎き、御所中そはそ

郎兼盛、乳兄弟の主君義昭公、御發心の供には倶せられず、憖か御所の奉公、三好などが下に付き、外樣竝に追ひ廻されんも口惜しし。さればとて二王の片足立てた樣に、獨り肱を張つても濟まず。所詮義昭公の御行方、尋ねんと思ひ立ちけるが、君も御先祖代々我も親代々、相傳の主君の御殿、せめて御門よりお暇乞の御禮と、近衞通を室町の、御所の御門を見渡せば、扉八文字に開き、式臺には高燭臺星の如く、歌の御會か御振舞か、何事やらんと門番の、下役に仔細を問へば、「今夜は忝くも、新御臺樣のお輿入れ、町々の辻がため、館の内は式三獻の御用意、赤飯蒸すやら餅搗くやら、膾かくやら庭はくやら、まぜまする。」とぞ語りける。「して新御臺とはどなたの姫君。」「ハテ隱れもない九條の町の傾城樣、大淀樣と申す太夫、三好長慶樣の娘分になされて、あれ／＼提灯が見える。道の警固は岩成主税殿。サアかたづいて踞うた／＼。立ちはだかつて鐵棒頂戴なさるゝな。」と、いひ捨て内にぞ入りにける。元より堪へぬ海上太郎、「如何に叱人なければとて、幅の廣い傾城の請け樣。新御臺とはほたえ過ぎた女め。大事の主を坊主にし、甘々と御所へ入れては無念の無念。主人の髮切らせた代り、其の女め、素頭敲り摧いてくれんず。」と、夕闇にふり亂す大髻、重代の金剛兵衞四尺八寸、鐔元くつろげ横たへしは、反橋の欄干を腰にさいたる如くなり。時も移らず三條坊門の四辻、提灯列る行裝は、さながら姫宮政所の、御輿入ともいつつべく、輿添は三好が執權、岩成主税助重正、御弓頭

上。此の旨御披露頼み入る。」と述べければ、「エ是れは又あんまり興がる。お側から腰押してもさうはさせじ。」と言ふ内に、御臺幕より立ち出で給ひ、「なう冷泉、使の趣彼處にて聞きたるぞや。藤孝の知らせ然る事なれども、諸侯に八人の思ひ妻はある慣ひ、御所へ入れずば妬み悋氣と、其の傾城の賤しき身に蔑まれんも恥かしし。君さへお心慰まば、大淀には限るまじと、歸つて申せ造酒の進。」と露も御氣にとゞめぬ風情。梅枝差出で、「是れ申し御臺樣、斯う竝んだ三人は、皆殿樣の手かけの身、悋氣なされぬを惡いと申せば、身にいひかぶる樣なれど、殿樣より御臺樣百倍のお情、我々も御臺樣と奉つて、お詞を何が背きいはうではなけれども、傾城はぞんざいの凝まり、近い證據は帶の祝ひの折柄も、殿樣を留めて戻さず、義昭樣の御出家も、皆其の傾城づらめから。九條に居る内さへあれぢやもの、御所へ入れたらほんに〳〵、のさばり返つて手に入れ自慢、御臺樣が不運と、萬事を鼻で待はば、十度に一度はお腹も立たいで何とせう。其の時お悔みなされても、俄に悋氣もなるまいし、追ひ出さうにも動くまいし、お修羅の種を見る樣な。白菊樣初雪樣、淸瀧殿さうぢやあるまいか。」と、君を思ふも身を思ふ、詞の内より御臺所、焚き付けられて燃ゆる火の、胸にあまれば色に出で、お顏も朱の目に涙「言やればさうぢや入れては大事。供せよ冷泉皆も來い。」「ソリャお歸りよお乘物、輿よ車。」と犇いて、賀茂の御手洗川瀨の波、泳ぎ付く程氣もせかれ、道を早めて三重立ち歸る。海上太

は清瀧殿、遊山はさつしやる戀しい男の顏は見さしやる、見ぬ振したら何さしやろも。オ、羨まし。」と、呟けば、清瀧も氣を上げて、「口の悪いたしなましやんせ。造酒の進殿とは御臺さまのお指圖で、末々夫婦の筈なれど、さう云はれてはどうも行かれぬ、といふは譃、逢ひたいが眞ぢやもの、是れが行かずに居られうか。少しの癡話は御免なりませ皆樣。」と、おめず臆せず立ち出づれば、どうする事ぞと女中達、幕の物見に縋り寄る。冷泉造酒の進房平、淺川やうの繼上下、*梅花鮫作の長刀、さすが育ちも小姓あがり、年は二十の上越して、一つか二つ三つ指にて、草に手をつき頭をさげ、落付く程なほ清瀧は、戀にせかるゝ早瀬川、心たぎつて詞に餘り、「御臺樣神詣、お悦びの使者ならば、とり繕うて申すべし。其の手間に此の頃の、つもる話が聞きたい。」と、手をとれば捥ぎ放し、「急の御使馬をとばせ、其方の濡より此方の背中のぬれ、大汗をしぼる仕合。主人藤孝申し越し候は、御臺樣にもお聞き及び、義輝公御寵愛の傾城大淀と申す女、三好入道が九條の町を請出し、卽ち彼が娘にして、今暮御所へ入る筈に相極まる。入道がかねぐ\のしわざ、倅國長が首を討つたるなど、君に心をゆるさせん手段とは、藤孝見付け候へども、是れぞと申す越度なければ、是非を糺すまでもなく、お諫め申せば、却つて入道を嫉み妬みの讒言と御立腹。此のたび傾城を御所へ入れては、御家の滅亡遠からず。是れを止むること御臺樣の力ならでは叶ひ難し。片時も早く御所へお歸り、御供申せと主人が口

麹草繁蔞、佛座、菘蘿蔔芹薺、世に災難も七草は、此の初春に摘みすてゝ、野邊は千種の色見草、歌人の家のことぐさは、千々の心を種として、萬の言の葉も繁り、又色好みの戀草は、忍ぶ夜すがら月見草、とみにも人を夢見草、いとし人とし片敷けば、草の枕も綾や錦か、金襴緞子の夜著も布團もな、なん〳〵なつこりやいらぬ〳〵。締めてねた夜の其の明の日は、いとゞ思ひのまさり草、誰か嫁菜の寢よげにて、朝置く露のきえ殘り、濡れた姿の妬ましや。我に摘めとて此の草の、人に心をつくづくし、つばな亂れてみあれのの　シテ櫻はまだし　ワキ梅かをる　シテ花にあこがれ草にめで　二人宿を霞のまゝならば、明日も明後日もまとゐして、摘ままほしさに行きかねて、暫し休らひ給ひけり。景好き處に御座を設け、御臺所をお迎へに、清瀧といふ女會釋溢して、「是れはまあ〳〵何方を何方と、申す中にも御臺樣、御所でさへ土は踏ませませぬ、御養生なればこそ。お幕の内でちとお休み。」と云ひければ、御臺御機嫌麗しく、「自らが面白さに、人もさこそと思ひやる。御所の歸りは夜をこめて、皆おぢやいの。」と引き連れて、幕の内へぞ入り給ふ。御遊も半ばに末の女、お幕の外に畏まり、「淺川左京、大夫藤孝殿の御使者、冷泉造酒の進と申す人、御取次の女中、頼み度しとの御事。」と案内す。清瀧斯くと申し上ぐれば、「聞いた〳〵。藤孝の使者とは今日神詣の見舞ならめ。汝取次いで其の使者の口上も聞かうし、云ひたい事も話さうし、皆見ぬ顏。」と宣へば、女中同志はざわ〳〵と、「今日の果報

ばん。」と、既に出でんとし給ふ所へ、問注所の方より、「なう若君申し〳〵。」と、父修理入道長慶、御前にひれ伏し涙を浮め、「我等とつく出仕せば御髪は切らせまじ。曲もない藤孝殿海上太郎、縋りついてもなぜ止めましてくれられぬ。不忠不禮の倅故、六十に餘る入道が、數年の忠義も無になつたか。何を以て我等が心底お目にかけん。是れ參れ國長。」「はつ。」と答へて父が前、下ぐる頭を拔打に水もたまらず打ち落し、「是れでお腹をいられ、各も疑ひ晴れてたべ。」と、髻を摑んで指し上ぐる。義昭振り返り、「ム、長慶、これは其方料簡違ひ。國長づれに當つて切る髪にあらず、所存有つての發心。よし面うちに切る程なれば、數ならねども日本の大將軍、義輝公の弟源義昭が、髪の毛一筋には親子が首を竝べても替へはせぬ。汝にとらする跡弔へ。」と、見返りもせず立ち出でて、直に又入る法の道、聖の道も國民の、治まる道ぞ二重思ふ事、御生の注連に引く鈴の、叶はずばよも鳴らじとの、頼みを賀茂の瑞垣に、玉依姫の其の昔、別雷の御神を、御産の紐のやすらかに、あやかるための御祈り、二月の空の暖かに、日和義輝將軍の御臺所の神まうで、お伽は君のお手かけの梅が枝白菊初雪を、妬み憎みも女子氣の、きどく帽子に顏つゝみ、何れをそれと餘處目には、人の見知りも嵐吹く、柳が枝ともつれ合ひ、かちおひろひもお身ごなし、外珍らしく供すれば、行きやすらひて道草を、摘めどいづれをいづれとも、名さへ知らじな萌え出づる、草の色々問ひとはれ、摘む春草の何々ぞ、鼠

にいふべきか罷り立て。」「腮をこじ明けても言はせて見せう。」「イヤ言はぬ。」とせり合ふ高聲、藤孝制して「兩方しづまれ〳〵。」といへども更に聞き入れず。義昭公海上を礑と睨んで、「喧し兼盛、尾籠なり海上。」と押し靜め、「方々よつく聞かれよ。不肖の義昭勿體なくも、君をまなび上段に坐し、諸士の歷々を欺きしを、謀反と見たるは愚昧の眼には尤も至極。折しも兩頭の龜出現して吉凶を示す事、兄弟天下を爭ふ瑞相と言はんに、返答口を噤む許り。我が誤りなき旨を言ひ開けば、兄の恥辱を諸大名に觸れ聞かするに同じ。所詮一生兄弟面を合はせじと、思ひ定むる許りぞ。」と指添拔いて角額、綠の御髮ふつゝと切つて投げ給へば、海上太郎も藤孝も、動顚詞はなかりけり。義昭座を打つて、「エエ淺ましや兄義輝公、天魔の魅入か九條の遊女町へ、忍び〳〵の御遊山と聞きしに違はず、一昨日よりお出で、今日の壽御臺所より人橋を架けらるれども、醉ひ臥して御正氣もなしとの便り。早方々は出仕、奧には敗亡爲方なく、御臺所と相談にて此の出立。サア御恥を言ひ散らし、一時も御殿に足は止められず。藤孝かくて坐すれば、天下の政事に氣遣ひなし。我は是れより三界坊。ヤイ海上、共に發心お供などとてびくしやくせば、今生後生の勘當。藤孝に從ひ忠節を忘るゝな。」とつつと寄つて龜の片首ずつぱと切り、「サア此の上は諍ふべき者もなく、天下太平御代萬歲の瑞相と敕答せよ。」藜藿の羹紙の衾一鉢のまうけより、他を求めぬ身なれども、此の龜は申し請け、池に放ち成佛の緣を結

相重ねて、「義輝公御所勞といひ、卽座のお請も輕々し、追つて勅答。御保養疎略あるべからず。」と座を立ち給へば中門まで、敬ひ送り參らせて、御座に入らんとし給へば、三好御手を取つて引据ゑ、「なう弟君、米は人の生命を養ふ寶なれども、藁は履草鞋となつて蹂み躪らる。米と藁とは同根なれども、米の眞似のならぬが天地の定まり。如何に御舍弟なればとて、左大臣の裝束著し、征夷將軍の座に著き、諸大名に威を振ふは、押出しての謀反紛れなし。兩頭の龜の出現は、兄弟天下を爭ひ、亂逆となる驗、天照大神八幡宮の御告、其の胸にひつしとあたつてぬきさしなるまい。國家の大事忽にならず、詮議の間國長が宿所に預る。サアお立ち。」と引き立つる。藤孝押へて、「粗忽千萬。先づ御親父長慶老にも相談、上意を伺ひ義昭公の御心底、一應も再應も尋ね問うて上の事。」と言はせも敢へず「ア、あまい／＼。斯かる大事の企て問へばとて、オ、謀反起すといふ者のあるべきか。昔九郎判官腰越にて七枚起請を書かれても、賴朝ゆるし給はず。愚父長慶は正直一遍埒明かず。サア／＼お立ち但し繩を掛けうか。」と犇く所に、御乳母子海上太郎兼盛、端隱しの遣戸蹴放し跳り出で、三好が髻烏帽子共に、ひつ摑んでどうと投げのけ、「殿中にて大口あき、身が殿を謀反よ逆心よとは何を見付け、繩かけんなどとはどの腕ぶしで。親長慶が賢人顏の忠臣立、義輝公のお腰を打ちぬき、身が殿を煙たがる、親子の心に一物も二物もある。以前の通り、ま一度吐かせ直に聞く。」「ヤ天下の大事汝體

も御座を下らせ給ひ、然るべし。」と申せども答へなし。「御簾を卷き上げ申すべきか。」と、言へども更に答へなく、御膝うごめく許りなり。「敕使是れへ只今。」と表よりの案内、三好せいてずんと立ち、御簾掴んで引き退くれば、こはいかに義輝公は坐さず、御舍弟御曹司義昭、立烏帽子に小直衣、さながら武將の御出立。「ヤア是れ何ぢや、似せ將軍の化けぞこなひ。」と御手を取つて引き下せば、藤孝始め伺候の人々、呆れて眉をぞひそめける。一つの檻を廣縁に舁き据ゑさせ、敕使上座に著きたまへば、左京大夫藤孝謹んで、「義輝公は夜前より、風邪の御所勞に依つて、義昭名代として敕使を迎へ奉る。」と、首尾を繕ふ詞について、「恐れながら宣旨を奉じて、兄義輝に申し聞かせ候はん。」とぞ述べ給ふ。亞相笏取りなほし、「此の度江州堅田の漁人、一身兩頭の龜を釣り得て朝廷に捧げ奉る。古の伏羲氏の天下に王たる時、神龜龍馬出現せしより、唐土にも其の例多く、我が朝には元正天皇、聖武皇帝即位の年、又應永明應年中、不思議の龜の出現以上六ヶ度、年號を靈龜神龜と改元までありしかど、兩頭の出でたるは異國本朝其の例なし。菅家清家安倍卜部の勘文、善惡の理分明ならず、武家の評議たるべしとの敕諚。龜を一覽し吉凶つゝまず敕答あれ。」と述べ給へば、藤孝立ち寄り檻を開けば實に誠、一體に二つの頭、餌を爭ひ喰ひあふ有樣、命々鳥の類かや。義昭を始め三好淺川横手を打ち、「公家の御沙汰に及ばぬ事、不學短才の荒武士、善惡の評定恐れあり。」と難澀してこそ見えにけれ。亞

後太平記
四十八卷目

津國女夫池

第一

笑みを買ふ木の下花既に老いんだり、眉を畫く窗の前、月猶殘れり。優婉關雎の樂しみ、君穩かに民安く、國傳へます秋津御代、正親町の院の御宇、足利十三代の武將、左大臣從一位征夷大將軍源朝臣義輝公、曩祖尊氏公の箕裘を繼ぎ、國家の政道四惡をしりぞけ、洛陽二條室町に殿造り、五美を尊み給ひけり。御臺所は大宮大納言秋忠卿の御娘、去年の冬より御懷妊、既に永祿七年二月中旬、御著帶の御祝儀とて、在京の諸大名我も〳〵と出仕あり。御座の右は四職の棟梁、三好長慶入道が嫡子淡路守國長、左は管領淺川左京大夫藤孝を先として、武衛京極畠山、仁木赤松吉良大館、其のほか御譜代外樣の寄人まで、程につけつゝ居流れて、千歲を結び腹帶の、行末永き例ぞと、各あつと拜謁あり。御簾半ば卷き上げさせ、君御出まし〳〵、御杯を奉らんとせし所に、當番の奏者罷り出で、「御舅君大宮大納言秋忠卿勅使として、御來臨。」と申し上ぐれば、三好國長御簾に向ひ、「不時の勅使如何なる御用も計り難し。大宮殿とは御內緣と申しながら、勅使御對面はいつもの通り、君

面西右脇臥に、羽織打著せ死骸を繕ひ、泣いて盡きせね名殘の袂、見捨てて抱帶を手繰り寄せ、首に罠を引き掛くる。寺の念佛も切廻向、「有緣無緣乃至法界、平等。」の聲を限りに桶の上より、「一蓮託生南無阿彌陀佛。」と踏み外し、暫し苦しむ生瓢、風に搖らるゝ如くにて、次第に絶ゆる呼吸の道、いきせきとむる樋の口に、此の世の緣は切れ果てたり。朝出の漁夫が網の目に見付けて、「死んだャレ死んだ。出逢へ〱。」と聲々に、言ひひろめたる物語、直に成佛得脱の誓の網島心中と、目ごとに涙をかけにけり。

心中天の網島　終

子達の事が氣にかゝろ。」「アレひよんな事言ひ出して又泣かしやる。父親が今死ぬるとも、何心なくすや〳〵と、可愛や寐顏見る樣な。忘れぬは是ればつかり。」と、かつぱと伏して泣き沈む、聲も爭ふ村烏、ねぐら離れて鳴く聲は、今の哀れを問ふやとて、いとゞ涙を添へにける。「なう彼を聞きや、二人を冥途へ迎ひの烏。牛王の裏に誓紙一枚書く度に、熊野の烏がお山にて三羽づゝ死ぬると、昔より言ひ傳へしが、我と其方が新玉の歳の始めに起請の書き初め、月の始め月頭書きし誓紙の數々、其の度事に三羽宛殺せし烏はいくばくぞや。常には可愛々々と聞く、今宵の耳へは其の殺生の恨みの罪、むくい〳〵と聞ゆるぞや。報いとは誰故ぞ、我ゆゑ辛き死をとぐる。許してくれ。」と抱き寄すれば、「いや私故。」と締め寄せて、顏と顏とを打重ね、涙に閉づる鬢の髪、野邊の嵐に氷りけり。後に響く大長寺の鐘の聲、南無三寳長き夜も、夫婦が命短夜と、早明け渡る晨朝に、「最期は今ぞ。」と引き寄せて、「跡まで殘る死顏に泣顏殘すな。」「殘さじ。」と、につと笑顏のしろ〴〵と、霜に凍えて手も慄ひ、我から先に目も眩み、刃の立てども泣く涙。「ア、急くまい〳〵。」「早う〳〵。」と女が勇むを力草、風誘ひ來る念佛は、我に勸むる南無阿彌陀佛、彌陀の利劍とぐつと刺され、引き据ゑてものり返り、七顚八倒こはいかに、切先咽の笛を外れ、死にもやらざる最期の業苦、倶に亂れて苦しみの、氣を取直し引き寄せて、鐔元まで差し通したる一刀、ゑぐる苦しき曉の、見果てぬ夢と消え果てたり。頭北

ぬれば空に歸る。五生七生朽ちせぬ夫婦の魂放れぬ印合點。」と、脇差ずばと拔きはなし、元結際より我が黑髮、ふつつと切つて、「是れ見や小春、此の髮の有る内は、紙屋治兵衛と言ふおさんが夫、髮切つたれば出家の身、三界の家を出で、妻子珍寶不隨者の法師。おさんと言ふ女房なければ、お主が立つる義理もなし。」と涙ながら投げ出す。「ア、嬉しうござんす。」と小春も脇差取り上げ、洗ひつ梳いつ撫で付けし、酷や惜しげも投島田、はらりと切つて投げ捨つる。枯野の芒夜半の霜、倶に亂るゝ哀れさよ。「憂き世を逃れし尼法師、夫婦の義理とは俗の昔。とても事に薩張と死場も替へて山と川、此の樋の上を山と准へ、其方が最期場。我は又此の流れにて縊り、最期は同じ時ながら、捨身の品も所も替へて。」おさんに立て拔く心の道。「其の抱帶此方へ。」と、若紫の色も香も、無常の風に縮緬の、此の世彼の世の二重まはり、樋の俎木にしつかと括り、先を結んで狩場の雉子の、妻故我も首締め縊る罠結び、我と我が身の死拵へ、見るに目もくれ心くれ、「こなさん夫れで死なしやんすか。所を隔て死ぬれば、側に居るも少しの間。爰へ／＼。」と手を取り合ひ、「刃で死ぬるは一思ひ。嘸苦痛なされうと、思へばいとしい／＼。」と止め兼ねたる忍び泣き。「首縊るも喉突くも、死ぬるに愚かの有る物か。由ない事に氣をふれ、最期の念を亂さずとも、西へ／＼と行く月を、如來と拜み目を放さず、只西方を忘りやるな。心殘りの事有らば言うて死にや。」「何もない／＼。こなさん定めてお二人の、

て哀れなり。町田の入江の水煙、唄山の端白くほの〲と、「あれ寺々の鐘の聲、こう〱、斯うしていつまでか、とても存へ果てぬ身を、最期急がん此方へ。」と手に百八の玉の緒を、涙の玉に繰りませて、南無あみ島の大長寺、藪の外面のいさゝ川、流れ漲る樋の上を、最期所と著きにける。「なう何時までうか〱歩みても、爰ぞ人の死場とて、定まりし所もなし。いざ爰を往生場。」と手を取り土に坐しければ、「さればこそ死場は何處も同じ事と言ひながら、私が道々思ふにも、二人が死顔並べて、小春と紙屋治兵衞と心中と沙汰あらば、おさん樣より頼みにて、殺してくれるな殺すまい、挨拶切ると取り替せし其の文を反古にし、大事の男を唆しての心中は、流石一座流れの勤めの者、義理しらず僞り者と、世の人千人萬人より、おさん樣一人のさげしみ、恨み嫉みも嘸と思ひ遣り、未來の迷ひは是れ一つ。私を此處で殺して、こなさん何處ぞ所をかへ、ついと脇で。」とうちもたれ、口說けば倶に口說き泣き、「ア、愚癡な事許り。おさんは舅に取りかやされ、暇を遣れば他人と他人、離別の女になんの義理。道すがら言ふ通り、今度の〱ずんど今度の先の世までも、夫婦と契る此の二人、枕を並べ死ぬるに、誰が譏る誰が嫉む。」「サア其の離別は誰が業。私よりこなさん猶愚癡な、身體があの世へ連立つか。所々の死をして、縱ひ此の身體は鳶烏につゝかれても、二人の魂付き纏はり、地獄へも極樂へも連立つて下さんせ。」と又伏し沈み泣きければ、「オ、夫れよ〱、此の身體は地水火風、死

跡老松の綠橋、別れを歎き悲しみて、跡に憧るゝ櫻橋、今に咄を聞き渡る、一首の歌の御威德。かかる尊きあら神の、氏子と生まれし身を持つて、其方も殺し我も死ぬ、元はと問へば分別の、あのいたいけな貝殼に、一杯もなき蜆橋、短き物は我々が、此の世の住居秋の日よ。十九と二十八年の、今日の今宵を限りにて、二人命の捨所。爺と婆との末までも、まめで添はんと契りしに、丸三年も馴染まいで、此の災難に大江橋。「あれみや浪花小橋から、舟入橋の濱傳ひ、是れまで來れば來る程は、冥途の道が近付く。」と歎けば女も縋り寄り、「もう此の道が冥途か。」と、見交す顏も見えぬ程、落つる涙に堀川の、橋も水にや浸るらん。北へ歩めば我が宿を、一目に見るも見返らず、子供の行方女房の、哀れも胸に押包み、南へ渡る橋柱、數も限らぬ家々を、いかに名づけて八軒家、誰と「伏見の下り舟、著かぬ中に。」と道急ぐ。「此の世を捨てて行く身には、聞くも恐ろし天滿橋、淀と大和の二川を、一つ流れの大川や、水と魚とは連れて行く。我も小春と二人連、一つ刃の三つ瀬川、手向の水に請けたやな。何か歎かん、此の世でこそは添はずとも、未來は言ふに及ばず、今度の〳〵ずつと今度の、其の先の世までも夫婦ぞや。一つ蓮の頼みには、一夏に一部夏書せし、大慈大悲の普門品、妙法蓮華京橋を、越ゆれば到る彼の岸の、玉の臺に法を得て、佛の姿に身御成橋、衆生濟度が儘ならば、流れの人の此の後は、絕えて心中せぬ樣に、守りたいぞ。」と及びなき、願ひも世上のよまひ事、思ひ遣られ

は辛き*葛城の、神隠れして遣り過し、隙を窺ひ立ち寄れば、潛内からそつと明く。「小春か。」「待つてか。治兵衛様早う出たい。」と氣を急けば、せく程廻る車戸の、明くるを人や聞き付けんと、しやくつてあくればしやくつて響き、耳に轟く胸の内、治兵衛が外から手を添へても、心顫ひに手先も顫ひ、三分四分五分一寸の、先の地獄の苦しみより、鬼の見ぬ間と漸うに、明けて嬉しき年の朝、小春は内を抜け出でて、互に手に手を取り交し、北へ行かうか南へか、西か東か行末も、心の早瀬蜆川、流るる月に逆らひて、足をはかりに 三重

名ごりの橋づくし

走り書、謠の本は*近衛流、野郎帽子は若紫、悪所狂ひの身の果ては、斯くなり行くと定まりし、釋迦の教へも有る事か、見たし憂き身の因果經、明日は世上の言種に、紙屋治兵衛が心中と、仇名散り行く櫻木に、根ほり葉ほりを繪雙紙の、版摺る紙の其の中に、有りともしらぬ死神に、誘はれ行くも商賣に、疎き報いと觀念も、とすれば心ひかされて、歩み惱むぞ道理なる。頃は十月十五夜の、月にも見えぬ身の上は、心の闇の驗かや。今置く霜は明日消ゆる、果敢なき譬への夫れよりも、先へ消え行く閨の内、愛し可愛と締めて寢し、移り香も何と 冷泉 流れの蜆川西に見て、朝夕渡る此の橋の、天神橋は其の昔、菅丞相と申せし時、筑紫へ流され給ひしに、君を慕ひて太宰府へ、唯一飛梅田橋

何處に屈んで此の苦をかける。一門一家親兄弟が、固唾を呑んで臓腑を揉むとはよも知るまい。舅の恨みに我が身を忘れ、無分別も出ようかと、意見の種に勘太郎を、連れて尋ぬるかひもなく、今まで逢はぬは何事。」と、おろ／＼涙のひとり言、隠るゝ間の隔てねば、聞えて治兵衛も息を詰め、涙呑み込む許りなり。「ヤイ三五郎、阿房めが夜々うせる所外には知らぬか。」と、言へば阿房は我が名ぞと心得て、「知つて居れど爰では恥かしうて言はれぬ。」「知つて居るとはサア何處ぢや言うて聞かせ。」「跡で叱らしやんな。毎晩ちよこ／＼行く所は、市の側の納屋の下。」「大白癡め夫れを誰が吟味する。サアこい裏町を尋ねて見ん。勘太郎に風ひかすな。ごくにも立たぬ父めを持つて、可愛や冷いめをするな。此の冷さで仕舞へば好いが、ひよつと憂い目は見せまいか。」憎や／＼の底心は、不便々々の、「裏町を、いざ尋ねん。」と行き過ぐる。影隔たれば驅け出でて、跡懐かしげに伸び上り、心に物を言はせては、「十悪人の此の治兵衛、死に次第とも捨て置かれず、跡から跡まで御厄介、勿體なや。」と手を合はせ、伏し拝み／＼、「猶此の上のお慈悲には、子供が事を。」と許りにて、暫し涙に咽びしが、「とても覺悟を極めし上、小春や待たん。」と大和屋の潜の隙間さしのぞけば、内にちらつく人影は、小春ぢやないか待てと、しらせの合圖の咳、「エヘン／＼。」かつち／＼、えへんに拍子木打ちまぜて、上の町から番太郎が、くる／＼たぐる風の夜は、せき／＼廻る火の川心、「ごよざ／＼。」も人忍ぶ、我に

許りぢや仕舞うて寢やれ。さらば〳〵戻つて逢はう。」と、二足三足行くより早く立ち歸り、「脇差忘れたちやつと〳〵。何と傳兵衛、町人は爰が心安い。侍なれば其の儘切腹するであろの。」「我ら預つて置いて頓と失念。小刀も揃うた。」と、渡せば取つてしつかと指し、「是れさへあれば千人力、もう休みやれ。」と立ち歸る。「追付お下り成されませ。ようござりま。」もそこ〳〵に、跡は樞をごつとりと、物音もなく鎖まれり。治兵衛はつゝと去ぬる顏、又引き返す忍び足、大和屋の戸に縋り、內を覗いて見る內に、間近き人影喫驚して、向ひの家の物影に、過ぐる間暫し身を忍ぶ。弟故に氣を碎く、粉屋孫右衛門は先にたち、後に丁稚の三五郎が、脊中に甥の勘太郎連れ、行燈目的に驅け來り、大和屋の戸を打ち叩き、「少と物問ひませう。紙屋治兵衛はゐませぬか。一寸逢はせて下されい。」と呼ばはれば、扠は兄貴と、治兵衛は身動きもせず猶忍ぶ。內から男の寐ほれ聲、「治兵衛樣はまだ些と先に、京へ上るとてお歸り成された、爰にではござらぬ。」と、重ねて何の音なひも、涙はら〳〵孫右衛門、「歸らば道で逢ひそなもの。京へとは合點がゆかぬ。ア、氣遣ひで身が顫ふ。小春を伴れては行かぬか。」と、胸にぎつくり横たはる、心苦しさこたへかね、又戸を叩けば、「夜更けて誰ぢや。もう寢ました。」「御無心ながらま一度お尋ね申したい。紀の國屋の小春殿はお歸り成されたか。もし治兵衛と連立ちて行きは成されぬか。」「ヤ、何ぢや、小春殿は二階に寢てぢや。」「ア先づ心が落付いた。心中の念はない。

・戀情こゝを瀬にせん蜆川、流るゝ水も行き通ふ、人も音せぬ丑三の、空十五夜の月冴えて、光は暗き門行燈、大和屋傳兵衞を一字書。眠り勝ちなる拍子木に、番太が足どり千鳥足、「ごよさ〳〵。」も聲更けたり。「駕籠の衆いかう更けたの。」と、上の町から下女子、迎への駕籠も大和屋の、潛ぐわら〳〵つつと入り、「紀の國屋の小春さん借りやんしよ。迎ひ。」とばかりほの聞え、あとは三つ四つ挨拶の、程なく潛によつと出で、「小春樣は御泊りぢや。駕籠の衆直に休ましやれ。ア、言ひ殘した是れ花車さん、小春樣に氣を付けて下さんせ。太兵衞樣へ身請がすんで、金請取つたりや預り物。酒過させて下んすな。」と門の口から明日待たぬ、治兵衞小春が土に成る、種蒔きちらして歸りける。茶屋の茶釜も夜一時、休むは八つと七つとの間にちら付く短檠の、光も細く更くる夜の、川風寒く霜みてり。「まだ夜が深い送らせましよ。治兵衞樣のお歸りぢや。小春樣起しませ。夫れ呼びませ。」は亭主が聲、治兵衞潛をぐわらと明け、「コレ〳〵傳兵衞、小春に沙汰なし耳へ入れば、夜明まで括られる。夫れ故よう寐させて拔けて往ぬる。日が出てから起していなしや。我等今から歸ると直に、買物の爲京へ登る。大分の用なれば、中拂ひの間に合ふやうに歸るは不定。最前の金で、そなたの算用合も仕舞ひ、河庄が所へも後の月見の拂ひと言うて、四つ百五十匁請取とつて給らうしと、福島の西悦坊が佛壇買うた奉加銀一枚、廻向しやれと遣つてたも。其の外に懸合ひは、ハァ夫れよ〳〵、磯市が花銀五つ、是れ

其の金でおやま狂ひ、いけどう掏摸め、女房共は叔母甥なれど、此の五左衛門とはあかの他人、損をせう好みがない。孫右衛門に斷り兄が方から取りかへす。サア去狀々々。」と七重の扉八重の鎖、百重の圍みは遁る丶とも、遁れ方なき手詰の段。「オ、治兵衛が去狀筆では書かぬ是れ御覽ぜ。おさんさらば。」と、脇差に手をかくる。縋り付いて、「なう悲しや。父樣身に誤り有ればこそ段々の詫言。餘り利運過ぎました。治兵衛殿こそ他人なれ子供は孫、可愛うはござらぬか。私や去狀は受取らぬ。」と、夫に抱き付き聲を上げ、泣き叫ぶこそ道理なれ。「よい／＼、去狀いらぬ女郎め來い。」と引き立つる。「否私や往かぬ。飽きも飽かれもせぬ中を、何の恨みに晝日中、夫婦の恥は曝さぬ。」と泣き詫ぶれども聞き入れず、此の上に何の恥。町内一杯喚いて行く。」と、引き立つれば振り放し、小腕とられよろ／＼と、蹌踉く足の爪先に、可愛や礑と行き當る、二人の子供が目を覺し、「大事の母樣なぜ伴れて行く。祖父樣め。今から誰と寢ようぞ。」と慕ひ歎けば、「オ、愛しや。生まれて一夜も母が肌を離さぬもの、晩からは父樣と寢しやや。二人の子供が＊朝ぶさ前忘れず、必ず＊桑山飮ませて下され。なう悲しや。」と言ひ捨つる、跡に見捨つる子を捨つる、藪に夫婦の二股竹、永き別れと 三重

下之卷

ての發起心、母樣に渡されしがまだ御覽成されぬか。」「ォ、誓紙とは此の事か。」と懷中より取り出し「阿房狂ひする者の起請誓紙は方々先々、書出し程書きちらす。合點が往かぬと思ひ〳〵來れば案の如く、此の樣でも梵天帝釋か。此の手間で去狀書け。」と、ずん〳〵に引きさいて投げ捨てたり。夫婦は、「あつ。」と顔見合せ、呆れて詞もなかりしが、治兵衛手をつき頭をさげ、「御立腹の段、尤もともお詫申すは以前の事。今日の只今より何事も慈悲と思召し、おさんに添はせて下されかし。譬へば治兵衛乞食非人の身と成り、諸人の箸の餘りにて身命は繫ぐとも、おさんは急度上に据ゑ憂いめ見せず辛いめさせず、添はねばならぬ大恩有り。其の譯は月日も立ち、私の勤め方身上持ち直し、お目に懸くれば知るゝ事。夫れまでは目を塞いで、おさんに添はせて給はれ。」と、潸々溢す血の涙、疊に喰ひ付き詫びければ、「非人の女房には猶ならぬ。去狀書け〳〵。」おさんが持參の道具衣類數改めて封つけん。」と立ち寄れば女房あわて、「著物の數は揃うて有る、改むるに及ばぬ。」と驅け塞がれば、突き退けぐつと引き出し、「コリヤどうぢや。」又引き出してもちんからり、有りたけこたけ引き出しても、繼切一尺あらばこそ。「葛籠長持衣裳櫃、是れ程空になつたか。」と、舅は怒りの眼玉も据り、夫婦が心は今更に明けて悔しき浦島の、火燵布團に身を寄せて、火にも入りたき風情なり。「此の風呂敷も氣遣ひ。」と引き解き取散らし、「さればこそ〳〵是れも質屋へ飛ばすのか。ヤイ治兵衛女房子供の身の皮はぎ、

と言はれてはつと行き當り、「アツアさうぢや、ハテ何とせう。子供の乳母か飯焚きか、隱居なりともしませう。」と、「わつ。」と叫び伏し沈む。「餘りに冥加恐ろしい。此の治兵衛には親の罰天の罰、佛神の罰は當らずとも、女房の罰一つでも將來はようない筈。許して給れ。」と手を合はせ口說き歎けば、「勿體ない、夫れを拜む事かいの。手足の爪を放しても、皆夫への奉公。紙問屋の仕切銀、何時からか著類を質に閒を渡し、私が簞笥は皆明殼、夫れ惜しいとも思ふにこそ。何言うても跡へんでは返らぬ。サア〱早う小袖も著かへて、莞爾笑うて往かしやんせ。」と、下に郡内黑羽二重、縞の羽織に沙綾の帶、金拵への中脇差、今宵小春が血に染むとは、佛や知召さるらん。「三五郎爰へ。」と、風呂敷包肩に負はせて供につれ、金も肌身にしつかと付け、立出づる門の口、「治兵衛は内にお居やるか。」と、毛頭巾取つて入るを見れば、南無三寶舅五左衛門。「是れは扠、折も折ようお歸りなされた。」と、夫婦は顚倒狼狽ふる。三五郎が負うたる風呂敷振ぎ取つて、どつかと坐り尖り聲、「女郎下にけつからう。聟殿是れは珍らしい、上下著飾り、脇差羽織天晴よい衆の金遣ひ、紙屋とは見えぬ。新地へのお出でか御精が出まする。内の女房いらぬ物おさんに暇遣りや。伴れに來た。」と、口に針有る苦い顏、治兵衛は兎角の言句も出でず。「爺樣今日は寒いによう歩行かしやんす。先づお茶一つ。」と茶椀を機に立ち寄つて、「主の新地通ひも、最前母樣孫右衛門樣お出でなされて段々の御意見、熱い淚を流し、誓紙を書い

下さるな。」と、夫に縋り泣き沈む。「夫れとても何とせん半金も手附を打ち、繋ぎとめて見る許り。小春が命は*新銀七百五十匁呑まさねば、此の世に止むる事ならず。今の治兵衛が四つ三貫匁の才覺、打ちみしやいでも何處から出る。」「喃仰山な夫れで濟まばいと安し。」と、立つて簞笥の小引出、明けて惜し氣もないまぜの、紐付く袋押し開き投げ出す一包、治兵衛取り上げ、「ヤ金か、然も新銀四百目こりやどうして。」と、我が置かぬ金に目覺むる許りなり。「其の金の出所も跡で語れば知れる事。此の十七日岩國の紙の仕切銀に才覺はしたれども、夫れは兄御と談合して商賣の尾は見せぬ。小春の方は急な事、そこに四々の一貫六百匁と、ま一貫四百匁。」と大引出の錠明けて、簞笥を翻りと鳶八丈、京縮緬の明日はない、夫の命しら茶裏、娘のお末が兩面の紅絹の小袖に身を焦す。是れを*曲げては勘太郎が手も綿もない袖なしの、羽織も交ぜて郡内の仕末して著ぬ淺葱裏、黑羽二重の一茶裏、定紋丸に*蔦の葉の、のきも退かれもせぬ仲は、内裸でも外錦、男飾りの小袖まで、浚へて物數十五種、内端に取つて新銀三百五十匁、よもや貸さぬと言ふ事は、無い物までも有る顏に、夫の恥と我が義理を一つに包む風呂敷の、中に情を籠めにける。「私や子供は何著いでも男は世間が大事。請出して小春も助け、太兵衛とやらに一分立てて見せて下さんせ。」と言へども始終さし俯向き、しく／＼泣いて居たりしが「手附渡して取留め、請出して其の後、圍うておくか内へ入るゝにしてから、其方は何と成る事ぞ。」

立たぬ中、太兵衛めに請出さるゝ腐り女の四足めに、心は夢々殘らねども、太兵衛めがいんげんこき治兵衛身代いきついての金に詰つてなんどと、大坂中を觸れ廻り、問屋中の付合にも、面をまぶられ生恥かく。胸が裂ける身が燃える、エ、口惜しい無念な熱い涙血の涙、ねばい涙を打越え熱鐵の涙が溢るゝ。」と、どうど伏して泣きければ、はつとおさんが興さめ顔。「ヤアウハア夫れなればいとしや小春は死にやるぞや。」「ハテサテなんぼ利發でも流石町の女房ぢやの。あの不心中者なんの死なう。灸をする藥呑んで、命の養生するわいの。」「否さうでない。私が一生言ふまいとは思へども、隱し包んでむざ／＼殺す其の罪も怖ろしく、大事の事を打明ける。小春殿に不心中芥子程もなけれども、二人の手を切らせしは、此のさんが機關、こな樣がうか／＼と死ぬる氣色も見えし故、餘り悲しさ、女は相見互事、切られぬ所を思ひ切り、夫の命を頼む／＼と、かき口說いた文を感じ、身にも命にもかへぬ大事の殿なれど、引かれぬ義理合思ひ切るとの返事。私や是れ守に身を離さぬ。是れ程な賢女がこなさんとの契約違へ、おめ／＼太兵衛に添ふ物か。女子は我人一向に思ひ返しのない物、死にやるわいの死にやるわいの。ア、／＼＊ひよんな事。サア／＼サ何卒助けて／＼。」と騷げば夫も敗亡し、「取返した起請の中、しらぬ女の文一通、兄貴の手へ渡りしは、お主から行た文な。夫れなれば此の小春死ぬるぞ。」「ア、悲しや此の人を殺しては、女どしの義理立たぬ。先づこなさん早う行て、何卒殺して

是れも十夜の如來のお蔭。是れからなりともお禮念佛、南無阿彌陀佛。」と立歸る心ぞ直に佛なる。門送りさへ匆々に、敷居も越すや越さぬ中、火燵に治兵衛又ころり、被る布團の格子縞、「まだ曾根崎を忘れずか。」と、呆れながら立ち寄つて、布團を取つて引き退くれば、枕に傳ふ涙の瀧、身も浮く許り泣きゐたる。引き起し引き立て、火燵の櫓につき居ゑ顏つく〴〵と打詠め、「餘りぢや治兵衛殿、夫れ程名殘惜しくば誓紙書かぬがよいわいの。一昨年の十月中の亥の子に火燵明けた祝儀とて、まあ爰で枕竝べて此の方、女房の懷には鬼が住むか蛇が住むか、二年と云ふ物巢守にして、漸う母樣叔父樣のお蔭で、睦ましい夫婦らしい寢物語もせう物と、樂しむ間もなくほんに酷い情ない。左程心殘らば泣かしやんせ〳〵。其の涙が蜆川へ流れて小春の汲んで呑みやらうぞ。エヽ、曲もない恨めしや。」と膝に抱き付き身を投げ伏し、口說きたててぞ歎きける。治兵衛眼を押し拭ひ、「悲しい涙は目より出で、無念涙は耳からなりとも出るならば、言はずと心も見すべきに、同じ目より溢るゝ涙の、色の變らねば心の見えぬは尤も〳〵。人の皮著た畜生女が、名殘も絲瓜も何ともない。遺恨有る身すがらの太兵衛、金は自由妻子はなし請出す工面しつれども、其の時までは小春めが太兵衛が心に從はず。少しも氣遣ひなされな、假令こな樣と緣切れ、添はれぬ身になりたりとも、太兵衛には請出されぬ、若し金ぜきで親方から遣るならば、物の見事に死んで見しよと、度々詞を放ちしが、是れ見や退いて十日も

しや光譽道淸往生の枕を上げ、聟なり甥なり治兵衛が事頼むとの一言は忘れねど、其方の心一つにて頼まれし效もないわいの。」とかつぱと伏して恨み泣き、治兵衛手を打ち、「ハア、よめた〳〵、取沙汰の有る小春は小春なれど、請出す大盡大きに相違。兄貴も御存じ、先日暴れて踏まれた身すがらの太兵衛、妻子眷族持たぬ奴、金は在所伊丹から取寄する。疾くに彼奴めが受出すを私に押へられ、此の度時節到來と請出すに極まつた。我ら存じも寄らぬ事。」と言へば、おさんも色を直し、「假令私が佛でも男が茶屋者請出す、其の贔屓せう筈がない。是れ許りは此方の人に微塵も譃はない。母様證據に私が立ちます。」と夫婦の詞割符も合ひ、「扨はさうか。」と手を打つて、叔母甥心を安めしが、「ム、物には念を入れう事。先づ〳〵嬉しい、とてもに心落付く爲、かたむくろの親父殿疑ひの念なきやうに、誓紙書かすが合點か。」「何が扨千枚でも仕らう。」「愈滿足、則ち道にて求めし。」と孫右衛門懷中より＊熊野の牛王の村烏、比翼の誓紙引換へ、今は天罰起請文、小春に緣切る思ひ切る。僞り申すにおいては上は梵天帝釋下は四大の文言に、佛揃へ神揃へ紙屋治兵衛名を確り、血判をすゑて差し出す。「アア母様叔父様のお蔭で私も心落付き、子中なしても竟に見ぬ堅め事。皆悦んで下さんせ。」「オ、尤も尤も。此の氣になれば堅まる。商ひ事も繁昌しよ。一門中が世話かくも皆治兵衛爲よかれ、兄弟の孫共可愛さ。孫右衛門おぢや、早う歸つて親父に安堵させたい。世間がひゑる子供に風ひかしやんな。

煙草も呑みには來ぬ。是れおさん、いかにとし若いとて二人の子の親、結構な許りみめではない。男の性の悪いは皆女房の油斷から。身代破り夫婦別れする時は、男許りの恥ぢやない。ちと目をあいて氣に張を持ちやいの。」と言へば、「叔母様愚かな事、此の兄をさへ欺す不覺悟者、女房の意見など曖かに。ヤイ治兵衛、此の孫右衛門をぬく〳〵と欺し、起請まで返して見せ、十日も立たぬに何ぢや請出す。エ、汝はなあ、小春が借錢の算用か、置きをれ。」と算盤押取り、庭へぐわらりと投げ捨てたり。

「是れは近頃迷惑千萬。先度より後今橋の問屋へ二度、天神様へ一度ならでは敷居より外出ぬ私、請出す事は扨置き、思ひ出しも出すにこそ。」「いやんな〳〵。昨夕十夜の念佛に講中の物語、曾根崎の茶屋紀の國屋の小春といふ*白人に、天滿の深い大盡が外の客を追退け、直に其の大盡が今日明日に請出すとの取沙汰、*賣買高い世の中でも、金と癡呆は澤山なと、色々の評判。此方の親父五左衛門殿常々名を聞きぬいて、紀の國屋の小春に天滿の大盡とは治兵衛奴に極まつた。嬶の爲には甥なれど、此方は他人、娘が大事。茶屋者請出し女房は茶屋へ賣りをらう。著類著そげに疵付けられぬ間に取り返してくれうと、沓脱半分下りられしを、なう騒々しい、神妙にも成る事を、明さ闇さ聞き屆けて上の事と押し宥め、此の孫右衛門同道した。孫右衛門の咄には今日は昨日の治兵衛でない。曾根崎の手も切れ本人間の上々と、聞けば跡からはみ返る、そもいかなる病ぞや。其方の父御は叔母が兄、いと

で當つて暖まりや。此の阿房奴どうせう。」と、待ち兼ね見世に驅け出づれば、三五郎唯一人のら〳〵として立ち歸る。「こりや癡呆、お末は何處に置いて來た。」「ア、眞に何處でやら落してのけた。たれぞ拾たかしらんまで。何處ぞ尋ねて來ませうか。」「汝まあ〳〵大事の子を、怪我でも有つたら打ち殺す。」と、喚く所へ下女の玉お末を脊中に、「おう〳〵いとしや辻に泣いてござんした。三五郎守するならろくにしや。」と喚き歸れば、「オ、可愛や〳〵、乳呑みたからうの。」と同じく火燵に添乳して、「是れ玉、其の阿房め覺える程くらはしや〳〵。」と、いへば三五郎かぶりふり、「いや〳〵唯今お宮で蜜柑を二つづゝ食らはせ、私も五つ食らうた。」と、阿房の癖に輕口だて、苦笑ひするばかりなり。「ヤ阿房に掛つて忘りよとした。申し〳〵おさん樣、西の方から粉屋の孫右衛門樣と叔母御樣、伴立つてお出でなされます。」「是れは〳〵そんなら治兵衛殿起そ。なう旦那殿起きさしやんせ。母樣と叔父樣が伴立つてござるげな。此の短い日に商人が、晝中に寢た振を見せてはまた機嫌が惡からう。」「おつとまかせ。」と、むつくと起き、算盤片手に帳引き寄せ、「二一天作の五、九進が三進、六進が二進、七八五十六。」に成る叔母打連れて孫右衛門内に入れば、「ヤ兒者人叔母樣是れはようこそ〳〵。先づこれへ、私は只今急な算用いたし掛り、四九三十六匁、三六が一匁八分で、二分の勘太郎よお末よ、婆樣叔父樣お出でぢや煙草盆持つておぢや。一三が三、それおさんお茶上げましや。」と口早なり。「いや〳〵茶も

奴が面見ともなし。いざござれ〱さりながら此の無念口惜しさどうも堪らぬ。今生の思ひ出、女が面一つ踏む。御免あれ。」と、つつと寄つて地蹈鞴ふみ、「エ、〱しなしたり。足かけ三年戀しゆかしもいとし可愛も、今日といふ今日たつた此の足一本の暇乞。」と、額際を礑と蹴て、「わつ。」と、泣き出し兄弟連、歸る姿もいた〱しく、跡を見送り聲を上げ、歎く小春も酷らしき。不心中か心中か、誠の心は女房の、其の一筆の奥深く、たが文も見ぬ戀の道、別れてこそは 三重 歸りけれ。

中之卷

福徳に天滿神の名を直に、天神橋と行き通ふ、所も神のお前町、營む業も紙店に、紙屋治兵衛と名を付けて、千早ふる程買ひに來る。かみは正直商賣は、所柄なり老舗なり。夫が火燵に轉寢を、枕屏風で風防ぐ、外は十夜の人通り、見世と内とを一締に、女房おさんの心配り、「日は短し夕飯時、市の側まで使に行て玉は何して居る事ぞ。此の三五郎奴が戻らぬ事。風が冷い二人の子供が寒からう。お末が乳の呑みたい時分も知らぬ、阿房には何が成る。辛氣な奴ぢや。」と獨言。「母樣一人もどつた。」と走り歸る兄息子、「オ、勘太郎戻りやつたか。お末や三五郎は何とした。」「宮に遊んで乳呑みたいとお末のたんと泣きやりました。」「さうこそ〱。こりや手も足も釘になつた。父樣の寢てござる火燵

お手柄。結構な弟を持ち、人にも知られし粉屋の孫右衞門、祭の練衆か氣違か、竟に差さぬ大小ほつこみ、藏屋敷の役人と、小詰役者の眞似をして、馬鹿を盡した此の刀、捨所がないわいやい。小腹が立つやら可笑いやら、胸が痛い。」と切齒し、泣顏かくす澀面に、小春は始終むせ返り、「皆お道理。」と許りにて、詞も涙にくれにけり。大地をたゝいて治兵衞、「誤つた〳〵兄者人。三年前よりあの古狸に魅入られ、親子一門妻子まで袖になし、身代の手纏れも、小春といふ屋尻切に蕩され後悔千萬。ふつつり心殘らねば尤も足も踏み込むまじ。ヤイ狸め、狐め、屋尻切め、思ひ切つた證據是れ見よ。」と肌に掛けたる守袋、「月頭に一枚宛取り交したる起請、合はせて二十九枚、戻せば戀も情もない。こりや受取れ。」と礑と打ち付け、「兄者人、彼奴が方の我等が起請數改め請取つて、此方の方で火に燻べて下され。サア兄貴へ渡せ。」「心得やした。」と、涙ながら投げ出す守袋、孫右衞門押し開き、「ひいふうみいよ、十二十九枚數揃ふ。外に一通女の文是りや何ぢや。」と開く所を、「ア、そりや見せられぬ大事の文。」と取り付くを押し退け、行燈にて上書見れば、「小春樣參る紙屋內さんより。」讀みも果てずさあらぬ顏にて懷中し、是れ小春、最前は侍冥利、今は粉屋の孫右衞門商賣冥利、女房限つて此の文見せず我一人披見して、起請共に火に入れる。誓文に違ひはない。」「ア、忝い。夫れで私が立ちます。」と、又伏し沈めば、「ハァ〳〵、汝が立つの立たぬとは人がましい。是れ兄者人、片時も彼

る人々どつと笑ひ、「踏まれてもあの頤。橋から投げて水食らはせ。遣るな〳〵。」と追驅け行く。人立すけば侍立ち寄つて縛りめとき、頭巾取つたる面體、「ヤァ孫右衛門殿兄者人、アッァ面目なや。」と撞と坐し、土に平伏し泣き居たる。「扨は兄御樣かいの。」と走り出づる小春が胸倉取つて引居ゑ、「畜生め、狐め、太兵衛より先づ汝を踏みたい。」と、足を上ぐれば孫右衛門、「ヤイ〳〵其の癡呆から事起る。人を蕩すは遊女の商賣、今目に見えたか。此の孫右衛門は只今一見にて女の心の底を見る。二年餘りの馴染の女、心底見付けぬ狼狽者。小春を踏む足で、狼狽へた汝が根性をなぜ踏まぬ。エ、是非もなや弟とはいひながら三十に追掛り、勘太郎おすゑといふ六つと四つの子の親、六間口の家踏みしめ、身代潰るゝ辨別なく、兄の意見を受くる事か。舅は叔母聟、姑は叔母者人親同然。女房おさんは、我が爲にも從妹、結び合ひ〳〵重ね〳〵の緣者親子中、一家一門參會にも、己が曾根崎通ひの、悔みより外餘の事は何もない。いとしいは叔母者人、連合五左衛門殿はにべもない昔人。噂の甥御に倒され娘を捨てた。おさんを取り返し、天滿中に恥かかせんとの腹立。叔母一人の氣扱ひ敵になり味方になり、病に成る程心を苦しめ、おのれが恥を包まるゝ恩しらず。此の罰たつた一つでも行く先に的が立つ。斯くては家も立つまじ。小春が心底見屆け、其の上の一思案、伯母の心も安めたく此の亭主に工面し、おのれが病の根元見屆くる。女房子にも見代へしは尤も。心中よしの女郎、ア、

春騒ぐな、覗くまいぞ。」といふ所に、亭主夫婦立ち歸り、「是れは。」と騒げば、「ア、苦しうない。障子越に拔身を突き込む暴れ者、腕を障子に括り置く。思案有り繩解くな。人立あれば所の騒ぎ。サア皆奥へ。小春おぢや往て寐よう。」「あい。」とはいへど見知り有る脇指の、突かれぬ胸にはつと貫き、「醉狂の餘り色里には有る習ひ。沙汰なしに往なして遣らんしたら、ナア河庄樣、私やよささうに思ひやす。」「いかな〳〵。身次第にして皆はひりや。小春こちへ。」と、奥の間の影は見ゆれど括られて、格子手械に悶けば締り、身は煩惱に繋がるゝ、犬に劣つた生恥を、覺悟極めし血の涙、絞り泣くこそ不便なれ。ぞめき戻りの身すがら太兵衛、「扨こそ河庄が格子に立つたは治兵衛奴な、投げて呉れん。」と襟かい摑んで引き擔ぐ。「あ痛たゝ。」「あ痛とは卑怯者。ヤアこりや縛り付けられた。扨は盜みほざいたな。ヤ生掏摸奴どうずりめ。」とては礑とくらはせ、「ヤ強盜奴ヤ獄門奴。」とては蹴飛ばかし、「紙屋治兵衛盜みして縛られた。」と呼ばはり喚けば、往交ふ人邊近所も驅け集まる。内より侍飛んで出で、「盜人呼ばりは汝か。治兵衛が何盜んだ、サア吐かせ。」と太兵衛を搔摑み、土にぎやつとのめらせ、起きれば踏み付け踏みのめし〳〵、引捕へて、「サア治兵衛、踏んで腹いよ。」と足元に突き付くるを、縛られながら頰がまち踏み付け〳〵、踏みさがされて土塗れ、立ち上つて睨め廻し、「四邊の奴輩よう見物して踏ませたナア。一々に面見覺えた。返報する覺えてをれ。」と減らず口にて逃げ出す。立ち寄

私一人を賴みの母樣、南邊に賃仕事して裏家住。死んだ跡では袖乞非人の、飢死もなされうかと是れのみ悲しさ。私とても命は一つ、水臭い女と思召すも恥かしながら、其の恥を捨てて死にともないが第一。死なずに事の濟むやうに、どうぞ〳〵賴みやす。」と、語れば點頭く思案顏。外にははつと聞き驚く、思ひがけなき男心、木から落ちたる如くにて、氣もせき狂ひ、「扨は皆譃か、エ、腹の立つ。二年といふ物化された。根性腐りの狐め、踏込んで一討か面恥かかせて腹いよか。」と、齒切りきり〳〵口惜し涙、內に小春が啣ち泣き、「卑怯な賴み事ながら、お侍樣のお情、今年中來春二三月頃まで、私に逢うて下んして、彼の男の死にに來る度每に、邪魔に成つて期を延し〳〵、自ら手を切らば、先も殺さず私も命助かる。何の因果に死ぬる契約した事ぞ、思へば口惜しうござんす。」と膝に凭れ泣く有樣。「ム、聞き屆けた、思案有り。風も來る人や見る。」と、格子の障子ばた〳〵と、立聞く治兵衞が氣も狂亂、「エ、流れ賣物安物め、ど性骨見違へ魂を奪はれし巾著切め、切らうか突かうかどう障子に、映る二人の橫顏。「エ、くらはせたい踏みたい。」何吐かすやら點頭き合ひ、拜む囁くほえる態、胸を押へ摩つても、堪へられぬ堪忍ならぬ。」心もせきに關の孫六一尺七寸拔き放し、格子の狹間より小春が脇腹、爰ぞと見極め、「えい。」と突くに座は遠く、「是れは。」と許り怪我もなく、透さず客が飛び蒐り、兩手を攫んでぐつと引き入れ、刀の下緒手ばしかく、格子の柱にがんじ搦み、聢と締め付け、「小

梅田か北野か、エヽ知らせたい呼びたい。」と心で招く氣は先へ、身は空蟬の脱殼の、格子に抱き付きあせり泣く。奥の客が大欠伸、「思ひの有る女郎衆の御伽で氣がめいる。門も靜かな。端の間へ出て行燈でも見て氣を晴らさう。サアござれ。」と連立ち出づれば、「南無三寶。」と格子の小陰に肩身を窄め、隱れて聞くとも内にはしらず、「なう小春殿、宵からの素振、詞の端に氣を付くれば、花車が咄の紙治とやらと心中する心と見た、違ふまい。死神付いた耳へは、意見も道理も入るまじとは思へども、さりとは愚癡の至り。先の男の無分別は恨みず、一家一門其方を恨み憎しみ、萬人に死顏晒す身の恥、親は無いかも知らねども、若し有れば不幸の罰、佛は愚か地獄へも暖かに、二人連では落ちられぬ。いたはしとも笑止とも、一見ながら武士の役、見殺しにはなりがたし。定めて金づく。五兩十兩は用に立てても助けたし。神八幡侍冥利他言せまじ。心底殘さず打明けや。」と囁けば手を合はせ、「アヽ、忝い有り難い。馴染好みもない私、御誓言での情のお詞、涙が零れて忝い。眞に色外に現はるでござんする。如何にも〳〵紙治樣と死ぬる約束。親方にせかれて逢瀬も絶え、指合有りて今急に請出す事も叶はず、南の元の親方と爰とに、まだ五年有る年の中、人手に取られては私は素より主は猶一分立たず、寧そ死んで吳れぬか、アヽ死にましよと、引くにひかれぬ義理詰にふつと言ひ交し、首尾を見合はせ相圖を定め、拔けて出よう拔けて出よと、いつ何時を最期とも、其の日送りの敢ない命。

くは何處しも親方の習ひ。夫れ故のお客の吟味、自と小春樣もお氣の浮かぬは道理、お客も道理、だうり道理の中取つて、主の身なれば御機嫌よかれが道理の肝腎かんもん。サアはつと呑みかけわさわさわつさり頼みます。小春樣はる樣。」と、言へども何の返答も、涙ほろりの顏振り上げ、「あのお侍樣、同じ死ぬる道にも、十夜の内に死んだ者は、佛になるといひますが定かいな。」「夫れを身が知る事か。檀那坊主にお問ひなされ。」「ほんにさうぢや。そんなら問ひたい事がある。自害すると首くるとは、定めし此の喉を切るかたが、たんと痛いでござんしよの。」「痛むか痛まぬか切つては見ず、大方の事問はつしやれ　ア小氣味の惡い女郎ぢや。」と、流石の武士もうてぬ顏。「エ、春樣、初對面のお客にあんまりな挨拶。些と氣を變へ、どこりやこちの人尋ねて來て酒にせう。」と、立ち出づる門は宵月の、影傾きて雲のあし、人足薄くなりにけり。天滿に年ふる千早振る、神にはあらぬ紙樣と、世の鰐口にのる許り、小春に深く大幣の、腐り合うたる御注連繩、今は結ぶの神無月、せかれて逢はれぬ身と成り果て、あはれ逢瀬の首尾あらば、夫れを二人が最期日と、名殘の文の言ひ交し、毎夜々々の死覺悟、魂拔けてとぼ〳〵うか〳〵身を焦す。煮賣屋で小春が沙汰、侍客で河庄方と、耳に入るより、「サア今宵。」と、覗く格子の奧の間に、客は頭巾を頤の、動く許りに聲聞えず。「可愛や小春が燈に、背向けた顏のあの瘦せた事わいの。心の中は皆俺が事。爰に居ると吹き込んで、連れて飛ぶなら

千萬。櫻橋から中町下りぞめいたら、何處ぞでは紙屑蹂み躙つてくりよ。皆おぢや〳〵。」と、身振許りは男を磨く町一杯に、はゞかつてこそ歸りけれ。所柄馬鹿者に構はず堪へる武士の客。紙屋々々と善惡の噂小春が身に應へ、思ひ顋ほれうつとりと、無挨拶なる折節、內から走つて紀の國屋の、杉が氣疎い顏付にて、「只今春樣迯つて參りし時、お客樣まだ見えず、なぜ見屆けて來なんだと、酷う叱られます。慮外ながら一寸。」と、編笠押し上げ面體吟味、「ム、そでない〳〵氣遣ひなし。跡詰めてしつぽりと小春樣、滴る樽の生醤油。花車樣さらば、後に靑菜の浸し物。」と、口合たら〴〵立ち歸る。至極堅手の侍大きに不興し、「こりや何ぢや、人の面を目利するは、身を茶入茶椀にするか。弄られには來申さぬ。此方の屋敷は晝さへ出入固く、一夜の他出も留守居へ斷り帳に付け、難しい掟なれどもお名聞いて戀ひ慕ふお女郎、どうぞと一座を願ひ、小者も連れず先刻參つて宿を賴み、何でも一生の思出、お情に預らうと存じたに、いかな莞爾と笑顏も見せず、一言の挨拶もなく、懷で錢よむやうに、扠々伏向いて許り、首筋が痛みは致さぬか。何と花車殿、茶屋へ來て產所の夜伽する事は、竟にないづ。」とぶつつけば、「お道理〳〵。曰くを御存じない故御不審の立つはず。此の女郎には紙治樣と申し、深いお客がござんして、今日も紙治樣明日も紙治樣と、わきから手指もならず、外のお客は嵐の木の葉でばら〳〵〳〵、登り詰めてはお客にも女郎にも得て怪我の有る物、第一勤めの妨げと、せ

舅なし親もなし伯父持たず、身すがらの太兵衞と名をとつた男、色里で僣上言ふ事は、治兵衞奴には叶はねども、金持つた許りは太兵衞が勝つた。金の力で押したらば喃連衆、何に勝たうも知れまい。今宵の客も治兵衞奴ぢや。貰を〳〵此の身すがらが貰うた。花車酒出しや〳〵。」「エ何おしやんす。今宵のお客はお侍衆、追付見えましよ。お前は何處ぞ他で遊んで下さんせ。」と言へどもほたえた顏付にて、「ハテ刀差すか差さぬか、侍も町人も客は客、何程差いても五本六本は差すまいし、よう差いて刀脇差たつた二本、侍ぐるめに小春殿貰うた。拔けつ隱れつなされても、緣あればこそお出合ひ申す。なまいだ坊主のお蔭、ァ、念佛の功力あり難い。こちも念佛申すぞ。ヤ鉦の火入煙管撞木面白い、ちやん〳〵ちやんちやちやちやんちやん。唄えい〳〵〳〵〳〵、紙屋の治兵衞、小春狂が杉原紙で、一分小判紙塵々紙で、内の身代漉破紙の、鼻もかまれぬ紙屑治兵衞。エなまみだ佛なまいだ、なまみだ佛なまいだ〳〵と、暴れ喚く門の口、人目を忍ぶ夜の編笠。「ハァ、塵紙渡せ。ハテ強い忍び樣。なぜはひらぬ塵紙。太兵衞が念佛怖くば、南無編笠も貰うた。」と引摺り入れたる姿を見れば、大小くすんだ武士の正眞、編笠越にぐつと睨めたる、眞丸眼玉は敲鉦、念とも佛とも出でばこそ、「ハァア。」といへども痿まぬ顏、「喃小春殿、此方は町人刀差いた事はなけれど、俺が所に澤山な新銀の光には、少々の刀も捻ぢ曲めうと思ふ物。塵紙屋奴が漆漉程な薄元手で、此の身すがらと張り合ふは慮外

えい〳〵〳〵紺屋の徳兵衞、房に素より濃染込の、内の身代灰汁でもはげず、なまみだなまいだなまいだ〳〵〳〵〳〵。」「ア、是れ坊樣なんぞ、ェ、忌々しい。漸う此の頃此の郭の、心中沙汰が鎭まつたに、夫れおいて國姓爺の道行念佛が所望ぢや。」と杉が袖から報謝の錢、江戸「たつた一錢二錢で三千餘里を隔てたる、大明國への長旅は、あはぬだ佛あはぬだ〳〵〳〵。」ぶつ〳〵言うて行き過ぐる。人立紛れにちよこ〳〵走り、とつ河内屋に驅け込めば、「是れは〳〵早いお出で。お名さへ久しういはなんだ。やれ珍らしい小春樣々々々、はる〴〵で小春樣。」と、主の花車が勇む聲、「是れ門へ聞える、高い聲して小春々々というて下んすな。表に嫌な*李蹈天が居るわいの。密かに〳〵賴みやす。」といふも洩れてやぬつと入りたる三人連。「小春殿、李蹈天とはない名を付けて下された。先づ禮からいひましよ。連衆、內々咄した心中よし意氣方よし牀よしの小春殿、頓て此の男が女房に持つか、紙屋治兵衞が請出すか、張合の女郎、近付に成つて置きや。」とのさばりよれば、「ェィ聞きともない。得知れぬ人の仇名立、手柄にならば精出していはんせ。此の小春は聞きともない。」とついと退けば又摩り寄り、「聞きともなくとも小判の響で聞かせて見せう。貴樣もよい因果ぢや。天滿*大坂三鄕に男も多いに、紙屋の治兵衞二人の子の親、女房は徒弟同士舅は叔母壻。六十日々々々に、問屋の仕切にさへ追はるゝ商賣、十貫目近い金出して、請出すの根引のとは、螳螂が斧でござる。我ら女房子なければ

寠れさんした。誰やらが咄で聞けば、紙治樣故、內からたんと客の吟味に逢はんして、何處へもむさと逡らぬの、いや太兵衞樣に請出され、在所とやら伊丹とやらへ、行かんす筈とも聞き及ぶ。どうでござりやす。」といひければ、「ア、もう伊丹々々というて下んすな。夫れで痛み入るわいな。いとしほなげに紙治樣と私が中、左程にもない事を、あの贅こきの太兵衞が、浮名を立てていひ散らし、客といふ客は退き果て、內からは紙屋治兵衞故ぢやと、せく程に〳〵、文の便りも叶はぬやうになりやした。不思議に今宵は侍衆とて、河庄方へ逡らるゝが、かう行く道でも、若し太兵衞めに逢はうかと氣遣ひさ〳〵。敵持同然の身持、何と其邊に見えぬかえ。」「オ、〳〵夫んならちやつと外さんせ。あれ一丁目からなまいだ坊主がてんがう念佛申して來る。其の見物の中に、のんこに髮結うて野良らしい、伊達衆自慢と言ひそな男、慥かに太兵衞樣かと見た。あれ〳〵爰へ。」といふ間程なく※炮碌頭巾の青道心、墨の衣の玉襷、見物ぞめきに取り卷かれ、鉦の拍子も出合ごん〳〵、ほでてん〳〵ご念佛に仇口嚙み交ぜて、道具屋「樊噲流は珍らしからず、門を破るは日本の、朝比奈流を見よやとて、貫木逆茂木引き破り、右龍虎左龍虎討取つて、難なく過ぐる月日の關や、なまみだなまいだ〳〵。文彌 迷ひ行けども松山に、似たる人なき浮世ぞと、泣いつヱ、〳〵、ワハ〳〵〳〵、笑うつ狂亂の、身の果て何と淺ましやと、芝を褥に伏しけるは、眼も當てられぬ風情、なまみだなまいだ〳〵。唄えい

紙屋治兵衛
きいの國屋小春

心中天の網島

上之卷

唄*さん上ばつからふんごろのつころちよつころふんごろで、まてとつころわつからゆつくる〱るたが、笠をわんがらんがらす、そらがくんぐる〱も、れんげれんげればつからふんごろ。よねが情の底深き、これかや戀の大海を、かへも干されぬ蜆川、思ひ〱の思ひ唄、心が心留むるは、門行燈の文字が關、浮れぞめきのあだ淨瑠璃、役者物眞似*納屋端歌、二階座敷の三味線に、曳かれて立ちよる客も有り、*紋日遁れて顔隱し、仕過しせじと忍び風、仲居のきよが是れを見て、*三保の谷が著たりける、頭巾の錣を取り外し〱、二三度逃げ延びたれども、思ふおきてなれば遁さじと、飛び懸りヤつたり惡じやれ、ごんせと止めたる女景淸、錣と頭巾、ついふみかぶる客もあり。橋の名さへも梅櫻、花を揃へし其の中に、南の風呂の浴衣より、今此の新地に戀衣、紀の國やの小春とは、此の十月に仇し名を、世に遺せとの印かや。今宵は誰か呼子鳥、覺束なくも行燈の陰、ゆき違ふよねの立ち歸り、「ヤ小春樣か何といの。互に一座も打絶え、貴面ならねば便りも聞かず。氣色が惡いか顔も細り

くにて、眺め優しき風情なり。花火の花の上漕ぐ舟と詠み置きし、其の歌枕瀬枕に紫匂ふ櫓幕、錦の纜蘭の揖、照らす火影のあけのそぼ船、船子共船唄やらん〳〵、目出度いは神の氏子の夏神樂、波も色なる向ひ提灯ちやうさやようさ、渡り拍子の鉦太鼓、天滿宮の神事まで、火をもて作る水の面手を盡したる舞扇子、開く白地や白川の、家の要の松若君、千代萬歳の若緑、枝葉榮ゆる常磐木の、幾春秋をとこしへに、治まる國こそ目出度けれ。

雙生隅田川　終

藤内を始め、近習外樣隔てなく皆川岸に居流れて、暮るゝを遲しと待ち居たる。少將一家の人々は、七郎天狗が通力にて程なく都に立ち歸り、敵大掾を圖らん爲、班女御前と唐絲が、目馴れ覺えて下總の、花火を移す形容も、東女に似せ紫の頰冠り、「花火召しませ召さぬか。」と松振り立てゝ忍び寄り、「此の筒は流星と申す花火、水に入り雲に入り樣々の仕掛あり。御目に掛けん。」と班女の前、火繩を筒に甲斐々々しく、切つて放す玉藥、目的違うて藤内が肋骨、どうと打ち拔く鐵砲に、血煙立て息絶えたりて百連驚き、「それ狼藉者討ち取れ。」と、拔連れ〳〵討つて掛る。羣集の中より權正武國奴軍介躍り出で、「故吉田少將行房の妻子家來共、百連誅罰の宣旨を受けて斯くのとほり、一人も餘さじ。」と左手に現はれ右手に開き、手を盡してぞ三重切り盡す。「怨敵亡び失せたり。」と、莞爾と笑うて立つたる所へ、中納言匡房卿松若を誘引あり。「吉田の家皆松若に敕許なる。」と、安堵の綸旨渡さるれば、各〻「はつ。」と頭を下げ、勇み悅ぶ許りなり。「斯かる時節に逢ふ事も匡房卿の御執成、御禮申さん詞もなし。幸ひ仕掛けし此の花火、御饗應に。」と班女の前、心を盡し焚く花火、先づ始めの一曲は五穀豐饒の此の時に、廻り車の玉簾小町が歌の花車、百夜車の徒車、浮名搔き消せ淀川に、唄淀の川瀨の水車誰を待つやらくる〳〵と、えいと〳〵〳〵、ソレハえいえいとんな、ソレハえいとんな、サア浮世は戀の口車、次の花火は朝顏の、朝な〳〵に咲きかへて、盛り千歲の竹垣に、露を含める如

魔道に入り、主君の恩を報ぜん爲、假に山伏と變じ母君の旅路を慰め、御歎きを止め哀愁の念を拂はん爲、梅若君の幽靈と見せたるも誠は御弟松若君、孖の同じ俤は御眼にも違はねば、梅松若の二君とも、此の君一人に慰み給へ。是れこそ比良が嶽の大天狗の連れ行きし松若君、只今返し奉る。」と、シテ聞くも夢かと走り寄り抱き付けば、ツレ抱き付く。シテ「ヤレ松若か。」ツレ「母上か。」と、二人死したる人の蘇生、浮木の龜や優曇花の、稀の逢瀨ぞ緣深き。ツレ時にありつる天狗の姿、一團の野火と燃え上り、「我が行方を知導にせよ。若君出世の導き。」と、空に聲あり賴みある、跡を慕ひて人々は、二人又都路に立ち歸る。元より魔佛一如にて、死生淸淨天然と、心動かぬ武士は、忠に止まり義に止まる、親に先だつ葉末の露、夫に放れし牀の海、思ひは千々に變れども、止まる所南無阿彌陀、南無阿彌陀佛の聲許り、跡に殘して今までも、硯の水の隅田川、涙に染めぬ袖ぞなき。

第　五

驕りは愚人の病にして、禍ひ其の身に及ぶと言へり。されば常陸大掾百連邪の理を以て、吉田の家を掠め取り、暴惡憚る所なく、驕る心は上見ぬ鷲、秋まだ淺き北白河、流す花火の唐錦、是れぞ酒宴の一興と、堤に大幕打靡かせ、篭中玉の酒肴、山も川も我が物顏、横柄らしく坐しければ、執權件

ふ人の蹴上の塵かかる身となる梅若が、後の世も嘸あらん。淺ましの身の果てや、無慙の印を見る事よ。」と、大地を叩き聲を上げ、悶え憧れて泣き給へば、ツレ「是れ皆夫の誤り故、許し給へ。」と平伏して、涙限りの叫び泣き、道理せめて哀れなり。シテ我が子の爲と母上は、鉦鼓取り上げ諸共に、「南無西方極樂世界三十六萬億、同號同名阿彌陀佛、南無阿彌陀、南無阿彌陀、南無阿彌陀佛南無阿彌陀、南無阿彌陀佛南無阿彌陀。」シテ「これなう唐絲、只今幼き者の聲として、幽に念佛の聞えしは、正しく梅若が聲ござめれ。塚の內とは聞かざるか。」ツレ「仰せの通り塚の內。所詮自ら念佛をとゞめ、母君許り申させ給へ。」シテ「隅田川原の波風も荒くなよせそ。なむ阿彌陀佛〳〵南無阿彌陀、南無阿彌陀佛南無阿彌陀。猶懷しき都鳥、今一聲の聞かまほしけれ。なむ阿彌陀〳〵〳〵。南無阿彌陀佛南無阿彌陀。」二人稱ふる聲と諸共に、標の柳の影よりも、シテ顯はれ出づる稚兒の影、シテ「ヤレ梅若よ我が子か。」と抱き付けば跡もなく、消えみ消えずみ、シテ見えみ見えずみ、二人隅田川水の哀れや青柳の、枝に殘るは春風の、音森々たる許りなり。シテ悼はしや母上は生き出でつ死に入りつ、「生中見えずば見えぬまで。重ねて歎きを見するよな。ふつつと歎かじ是れまで。」と川岸に立ち上り既に御身を投げんとす。ツレ一村靆く雲中に、「暫し〳〵。」と止むる聲も矢を射る如く、音に聞きたる天狗の姿、右手の腕に松若を助け乘せ、雲間を押し分け踏み分け忽然と顯はれ出で、「知らじ我こそ淡路七郎、最期の一念に依つて

み參らする。ヤ儚き因果の長物語、お舟が著いて候ぞ。靜かに上らせ給へ。」と、いへども舟に伏し沈み、前後も涙に咽びしが、シテ「喃只今の物語、稚兒の名は聞き給はずか。」ツレ「兒の御名は梅若君。」シテ「扨父の名は。」ツレ「吉田少將行房朝臣。」シテ「なう夫れこそ尋ぬる我が子よ。あの塚の下にとや。いで顏見ん。」と現なく、舟を飛ぶとも走るとも、岸に翩りと驅け上り、空しき塚に抱き付き、「やれ梅若よ母なるわ、斯程憧れ迷ふもの、何の憎みに母一人跡には殘し捨てたるぞ。恨めしや懷かしや。哀れ夢にもなれかし。」と印の柳に身を投げ掛け、塚に撞と伏し轉び、聲も惜しまず泣き給ふ。ツレ舟長驅け寄り、「扨は御臺樣かいの。彼の人賣とは淡路七郎、自らは女房唐絲と申す者。夫が科の申し譯、梅若君の御最期を、語るに付けて先の世の、敵と敵が此の世にて、主從となりしか。」と、シテいへども母上は兎角の答へも泣き沈み、涙の雨や隅田川、水の水嵩も増るべし。ツレ「御歎きお道理。さりながら、親の涙は火焰となり、其の子の功德を燒くとかや。幸ひ祥月御命日、只若君の御跡を弔ひ給へ。我も又罪深き夫の後生の願ひ、光明遍く十方の世界を照らし、念佛の衆生を攝取して捨て給はずと聞くなれば、念佛ぞ後生の杖柱。」と鉦鼓を母に參らすれば、シテ撞木も取らで倩と、標の塚を打眺め、「なう今まではさりとも逢はんと思ふを心の力にて、知らぬ東へ下りしに、儚や此の世になき跡の、印計りを見る事よ。扨も無慙や死の緣とて、生まれ所を立ち去つて、東の果ての道の邊の土となり、往來

夫婦東の知邊を賴み、住家は爰ぞ本莊に、機織り絲繰り滌ぎ洗濯、飯炊く業も知らぬ女、夫は弓馬の道ならで、賣買算勘秤目も、暗き渡世の絲切れて、命を繋ぐ手術なく、淺ましや人賣になり下り、幾千萬か人の子に辛いめ見せし罪科と、子を失ひし親々の歎きが積つて、身一つに重き天の責、去年三月十五日、終に自害し世を去つたる塚は印の松一木、因果の日數巡り來て、然も今日は一周忌、命日に當り候ぞや。又此方に柳を植ゑし御塚の謂れを言ふも痛はしや。都育ちの御稚兒の、十二三になり給ふを人商人の勾引して、彼の人賣に又賣渡す。旅の疲れの御惱みを、不精者よ*かだ者と、威しの爲に打つ杖の急所にや當りけん、又定業にや坐しけん、既に末期と見えし時、唄 苦しげなる聲音にて我は都の者なるが、東の果ての土となる、母上斯くとは知らずして、待ち詫び給はん悼はしや、都の人の足手影も懷かしと、是れを最期の形見の詞、轉寐の夢と消え給ふ、土中に突き込み柳を植ゑしも御遺言、なう何よりも悲しきは、能く〳〵聞けば殺せしお稚兒は、人賣が譜代相傳の御主、夫れとも知らぬは天命主殺しの十惡人、其の座を去らず自害せし二人の塚はあれぞかし。今斯く申すも恥かしや、自らは其の人賣の妻となるも因果と因果、惡人の妻よ女房よと、人にも疎み果てらるゝ。生きての苦患に比ぶれば、死ぬれば佛の賴みもあり、生中世に存へ水一滴花一枝、主君のお爲夫の爲、誰か手向の知邊はなし、心許りの接待に旅人渡す法の舟。上臈も都人ならば、柳の本にて一遍の御廻向賴

ち受け、「何故女中の亂れ姿、思ひあつてか勞はしや。向うへ渡る人ならば自ら越して參らせん。とくとく船に召さるべし。」シテ「喃同じ世に同じ人ながら變るは心々ぞや。爰より下の渡船、我をも乘せてと賴みしに、心強き船頭にて、お事は都詞狂女と見えし、面白う狂うて見せずば、船に乘せじとありし故、轉てやな隅田川の渡守ならば日もはや暮れぬ、舟に乘れとは言ひもせで、舟に乘るなと仰せあるは名にも似ず、ォ、野暮らしと一ほんさせて參りしぞや。夫れには引換へ、とく船に乘れ渡さうとは、萎らしやお嬉しや。亂れ心も思ひ子の、生きてありとも死んだとも、行方在所の知れぬ故、逢はば何しに狂ふべき。謠「船こぞりて狹くとも、乘せさせ給へ渡守、お慈悲ぞや乘せたび給へ。」ツレ「實に業平の中將も此の渡にて、名にし負はばいざ言問はん都鳥、我が思ふ人はありやなしやと。我も昔の緣をば、いざ事とはん都人。折節外に人もなし、怪我なされな。」と助け乘せ、押し出す船に差す棹の、底より深き主從の、緣ともいざや白波に、跡の岸根は隔たりぬ。「コレ渡守の女性物問はう。向ひに松と柳を植ゑ二つ竝びし彼の塚は、樣ありげなり聞かまほし。語り給へ。」とありければ、ツレ舟長頻りに涙ぐみ、向うに竝ぶ名所々々も問ひ給はず、塚に目を留め問はせ給ふも緣ならめ。此の船の著く間謂れを語り聞かせ申さん。一つは亡者の罪障消滅、自他平等御廻向賴み參らする。扨も此の下總に住む人あり。舊は都の御所侍傾城狂ひの金銀に、主君の目を掠めし科、御勘氣を請け追ひ出され、

音頭。」始めて三保の松原越えたえ、松原越えたやつさ、クドキ松を木偏に書き初めて、何時の月偏日偏よりか、物に狂ひの女偏、我が詞偏盡しても、其の馬偏の耳偏に、風が吹くとも聞き入れぬ、見る目糸偏山伏も、頓と土偏と諸共に、狂ひ喚くぞ是非もなき。是れは昔の物語、されば難波の色里偏に、車偏屋の小里と言うて、人の憎まぬ米偏なるが、其の美しさ天人偏の、磨き立てたる玉偏故に、手偏指す人山偏なれど、とても金偏無ければならぬ。仇な口偏叩かうよりは、爰でしやんこゝとな思ひ切れさ。思ひ切れとは曲もなや。唐天竺へはよも行かじ。東は津輕蝦夷松前、西は九州薩摩潟、南は紀の路熊の浦、北は秋田路佐渡が島、虎伏す野邊の果てまでも、尋ね廻らで有られうか、あら戀しや梅若、やよや梅若と呼び憧れ、心そゞろに倉皇と、急ぐ程が谷打過ぎて、或は野に伏し山伏も、連れて狂氣にそみかくだ、若紫の武藏野や、草の筵にいざ暫し、暫しとてこそ三重憩ひぬ。春に先だつ冬梅は、雪を穿ちて芳しく、夫に後るゝ徒し身は、後家とて立つる家もなし。タヽキ渡り流れの水馴棹、世の憂節を獨りして、筆に書きつゝ隅田川、離れし夫の彼の岸へ至るは弘誓の渡船。爰は武藏と下總の中に流るゝ隅田川。娑婆と冥土は替れども、心は同じ渡船。「接待の船召されぬか。旅人なう。」と漕ぎ寄する。シテ狂ひ巡りて母御前、言問ひ交せし山伏も、見捨てて何地行方の、なく／＼獨り彷徨ひて千里を行くも親心、子には果てしの無かるらん。袖は涙に色變へし、隅田川にぞ著き給ふ。ツレ舟長待

る丶笹の葉に、四手切り掛けて神よ神、逢はせてたべと祈事の、胸に鈴振る高師山、九重霞む故郷を後に見捨てて大井川、子故の波に浮き沈む、親の輪廻の足弱車、狂ひ廻りて佇めば、ワキ法界坊心付き「此の頃の教訓教化にて少しは心鎭まるべきに、惡鬼入其心と聞く時は、野干の魅入も計り難し、いで一祈り。」と錫杖を、千早振る〳〵神降し、シテ赤い天狗に白天狗、友禪染の天狗達をどつと響めて招いた。謡 先づ筑紫には彦の山、深き頼みに四王寺、讃岐には松山降り積む雪の白峯、扠伯耆には大山、猶京近き山々、愛宕の山の太郎坊、比良の峯の次郎坊、名高き比叡の大嶽は、逢ふと言ふ字の耳に立つ、心横川の流れなれ。葛城や高間の山、山上大峯釋迦が嶽、ワキ難行苦行のすた〳〵坊主、すたすた言うてぞ加持しける。シテ「いや四方に風なき藤枝の、われから狂ふ梢とは、知らぬお僧の愚かさよ。二人 馴れにし旅の友なれば、何に心を岡部の宿に唯一夜に轉寢、蔦の細道宇津の山邊の夢は一富士、似たかよ蔦の山も、外にはすつとん〳〵、走り付き〳〵手鞠子に、沖津玉藻の年寄りて、磯の白波由井蒲原や、田子の入海底となく、箱根の蓋の富士の山、尋ぬる我が子に大磯の、名は僞りの懸子かと、天に憧れ地に伏して、歎けば見聞く涙の玉、輪袈裟に露や結ぶらん。恥も人目も身をも人をも思ひ思はず戀し心か、きよつ〳〵〳〵、きよつとなつては現なく、「喃々我が子が夫れ其所に、揃ひ浴衣に花かいらぎ、踊振の優しさ、物に譬へて得申すまいよの。いで自らも一踊、コレ山伏殿音頭

た。どれ物見せよ。」と意地張れば、「今は是非なし是れまで。」と、夕立空の雲霞、謠霧間に姿入るよと見えしが、俄にどつと遠近の山峯巖も碎くる許り、一當當てたる天狗風、古木吹き折れ吹き撓れば、心得たりと軍介は、大地を力にしがみ付き、吹き立てられじの力草、根からふつつり吹き拔いて、風に乘じて地をはなれ、吹き上げ吹き卷き吹き返し、東の方へ吹き送る、世の言草に是れや此の、落付知れぬ旅人を、風來者とぞ　三重

狂女道行

祭文 祓ひ清め奉るの釋迦は、羅睺羅の親仁にて、布袋は唐子のお乳母役、閻魔は鬼の旦那なり。扠日の本の我が先祖、役行者と申するは惡鬼惡魔の蟲藥、今に傳へて後腹を病まぬ山伏の境界は、日待月待甲子に、福德延命長久の代僧代待代參り、人の願ひは庚申己の巳は雲水に、任する足の浦山を進めて東に下るなり。「又爰に子を失ひ歎きの餘りに心亂れ、行方を尋ね東路へ下る女性の候。見る目も悼はしく此の二三日道連れしが、あれ〳〵彼へ狂うて正體なや。暫し是れに待ち受け 謠 問ひ慰めて參らせんと思ひ候。」「春の來る空も霞か瀧の絲、亂れて名をや流すらん。なう道行く人に物問はう。梅若と言ふ十二三の幼子に、若し逢ひはなされぬか。」何逢ひも見もせぬとや。乳のむ燕夏たけて母戀しとも慕はずか。ふつゝと歎かじ思はじと、思ふも弱る玉葛、風に散り〳〵ヤツ散り〳〵散つて揉ま

公人遅れたるか軍介、サア切つて見よ軍介。」と名指に愕然心付き、「我が名を知つて軍介とは、シヤ聞くまでない天狗殿、御主人の仇お家の敵、汝何所ぞで〱と日頃の念願、諸天善神の引合はせ、一寸も飛ばせじ。」と打ち掛くる刀の柄、手先ぐるめに聢かと取り、「能い目利、成程我は鼻高々々、吉田の家に仇をなす比良が嶽の我ならば、今まで汝を摑み裂かいで置くべきが。我は夫れとは事變り、汝主君の行方を尋ね、世上漂泊の不便さに、詞を交し見ゆるなり。汝が尋ぬる人々は、南海西海北陸道、四國にも在さず、早く此の土を立去つて、東の方に赴くべし。いそうれ軍介、歸れやつ。」と聞きも敢へず、「エ、似つこらしい、鼻の先がひこ〱する。未だに仇を仕足らいで、若君西國に在す故、此の軍介を東へ遣り、ほつかりすかたんさせんとな。兎角汝が詞とはもん*ち〱に出る合點。二人の若君送り返さば、時宜に依り一命は助くべし。返答吐かせ。」と挘ぎ放す、腕も屈んで働かず。「エ、口惜しい。鼻も羽節も切り落さんと、思ひ設けし此の腕力、汝が通力には叶はぬか。無念々々。」と切齒し、すく〱立つて地蹈鞴蹈み、聲も惜しまず泣き居たり。「オ、奇特々々〱頼もしし。我が身の上を語るとも、人界疑ひの念深く、よも誠とは聞き入れまじ。理を非に曲げて東路へ、歸れ。」と言ふほど我に張者、透を見て只一討と、不敵に掛合ふ片意地は、天狗の通力自在にも、持餘してぞ見えにける。「エ、情張者能い加減で歸らぬか。」「諄い〱歸らぬ。」「目に物見するが歸らぬか。」「何物見せう夫れ好い

「ヤイ擂粉木頭の味噌奴め、身が獨寐の伽枕閨へ踏み込むのさばり者、斷りなしに何とする。返し居らう。」と突立つたり。「ム、〳〵なう〳〵腹筋千萬。石の主は當山の山の神。我こそ先に假寐の夢、己が物と岩枕、括り留めうか引き留めうか、兜巾頭を土に付け、呉れろと言はねば如何な〳〵。我が物顏に返せとは物くさい。シテ取つて何とする。」「まつかうする。」と言ふより早く引奪り、ぐつと指し上げ二三遍くる〳〵と振り廻し、片手放しに投げ掛くる。軍介宙にて聢かと取り、「オ、子供より些と優し、サア戻すぞ。」と投げ返せば、取つては投げ掛け投げ戻し、二三度四五度迫り合ひしは、幼遊びのぶり〳〵や、毬杖手鞠衝羽根の、峯に谺のどう〳〵〳〵、宙に閃く大石は霰の走る如くなり。軍介はつと精勞れ、彼奴が力量我に拔羣、欺し濟ませて一討にして呉れんと、笑顏作つて空輕薄、「ハ、ハハア、なうお客僧、恐らく我に續かん者、日本にはと思ひしが存じも寄らず、ならぬ〳〵閉口致す。」と近寄れば山伏ふつと噴き出し、「其の手は喰べぬ奴殿、欺し寄つて討たんとな、望みならば切つて見よ。」と詞の下より拔打に、「能い推量。」と切り付けたり。左手を打てば右手にあり、右手を切れば左手に飛び、裾を薙げば躍り越え、横に拂へば搔潛り、切つても突いても手にたまらず。軍介呆れて汗たらたらと、大息吐いて茫然たり。「男たる者刀を拔き血を付けずば差されまい。コレ血を付けぬか。」と立ち寄つて恥ぢしむれば、「如何な〳〵及びがない許せ〳〵。」「及びないとは卑怯千萬、流石高家の奉

の、俤に似たる人さへ荒男、髭に涙の露時雨、振る手も弱り力も落ち、土邊に撞とない〳〵、泣いて休むぞ哀れなる。童共手を叩き、「あれ〳〵奴が泣くわ〳〵。」と寄り集り、せゝり擽り、「ま一つ振れ、ヤレ振れ〳〵。」とせびらかす。「喧しい。錢も出さず無默骨折らせ、ほだえ過ぎた餓鬼めら、毛槍の傍杖喰らふな。」と振りまはせば、わつと逃げ、「振らぬと言うてそりや振るわ。」謔吐奴の粕奴、黴の生えた毛奴。」と、笑うて散り〳〵歸りけり。身に思ひある長旅は、足よりもまづ氣草臥、眠れ眠れと黴吹く風、目は明いて居て夢を見る。「ヤこりや眠たうて堪らぬ。行先に日限はなし、錢なし旅は是れが德、ころりと一睡見知らせて、眼の覺め次第罷らん。」と、一丈餘りの四面の大石、根絡む蔦の唐錦、邯鄲の枕々と寢るより早く高鼾、蟒蛇と聞きや擬ふらん。是れも供なく連なし旅の篠懸や法螺貝持たぬ山伏の、獨り嘯き來りしが、「ヤァ扨*のふず者往還の道に横はり、のさばり伏したは何奴。ムム合點々々。盜人の晝寢何のあて。此の頃の道勞れ我らも少と相伴。」と立ち寄つて奴が枕の大石を、何の苦も無く片手に一寸引撮み、輕々四五間引き退けて兩足ぐつと踏み延し、寬かに寢たる有樣は不敵にも又恐ろしし。起すとなしに軍介枕下りに目を覺し、眼すり〳〵、「ヤ野太い山伏、踏んでくれうか、否々鼻明かせて慰まん。」と、徐々と差足し、片手に撮んで引き戻す。相も劣らぬ力は互に眞似する如く、木石物は言はねども鸚鵡返しと謂つつべし。山伏翻りと起き直り、大石むんずと引き止め、

第四

こりや大名のお通りだ先退けろ、振り込むさ、赤坂奴髭奴、年中振つても振り止まぬ。文福茶釜に毛が生えた、茶筅で剃つても未だ剃れぬ、振り込めさ火ふく茶呑もに隙がない、先退けろ任せておけろのよいやさ、よいや讃岐の金毘羅と、志したる一腰の、大脇差の身も錆びて、金けも付けぬ軍介が梅若君の御行方尋ね侘びにし長の旅、昔手馴れし七つ道具の宿入下馬前玄關前、仕方を今の路金にて一錢二錢の袖奉加、漸う辿り多度の浦、身の毛亂せし大鳥毛、世にふる體ぞ無慙なる。村里の子供友達誘ひ聲々に、「奴々槍屋町へ遣つて退けよ、草履振つたら錢取らしよ。所望々々。」と寄り寄る。「オ、能い子供衆、草履見度いかまつかせろ。總じて草履に三箇の大事五箇の祕事、先づ聟入舅入には結ぶの草履、年頭八朔眞の草履、女中のお供は手先やは〳〵品を振る。お若衆方は尻を振り、櫻も八重の奈良草履、今日九重の鼻緒には、八練粒練ばら緒綯ひまぜ京草履、海山草履皮草履、種々ありと申せども、只今振るは下馬前、お馬の足もぴん〳〵〳〵、拙者が脛もぴん〳〵〳〵、ぴんと跳ねたるはね草履、跳ねて直してない〳〵〳〵、是れより殿のお門出、大八文字の大跨ぎ、手先上りの目八分、すつ〳〵〳〵、又戻り足すつ〳〵〳〵。」子供の顏に目を付けて振つて廻れど、我が尋ぬる梅若君

天狗の栖を探し、松若君を尋ね求め、吉田の家に二度の榮えを見すべきぞや。腸を刳つての後ずたずたに切れ武國。ヤイ女房、夫の主の敵人買の惣太を、一太刀切らねば淡路七郎が妻でない。此の詞を忘るゝな。跡の死骸を土に埋むな灰にすな、往還に晒し主殺しの罪科人と、屍に恥を見ば梅若殿への志。サァ只今七郎が天狗になるをよく見よ。」と、兩手を疵にぐつと入れ、五臟六腑を摑み出し天に抛つ朱の腸、虚空に上つて魔緣の猛火、早三熱の魔道の驗、どつと吹きくる天狗風魔風土風梢を鳴らし雲に轟き三重入りければ、儚く消えし淡路が骸、眠るがごとく絶え果てたり。武國感涙止めかね、「不忠却つて忠となる、武士の手本と言ひながら弓矢の法は破られず。主君の敵。」と名乘り掛け、死骸の弓手を拔打にすつぱと切り付け、「サァ内儀、七郎が遺言何と／＼。」と聲掛けられ、遣る方なく／＼刀拔き持ち右手の肩口丁と切れば、「オ、出來た。お主の敵討つたかお内儀。」「ア、討ちました、悲しや討つて退けました。」と、夫の死骸に抱き付き、聲を限りの別れの涙、共に死なんと取り直す刀に縋り武國が、漸う助け宥むるも、思ひは千々の此の黄金、里の長に預け置き、松若出世の料とせば亡魂の本懷、童子共は親里を尋ね返すは放生供養、魂は魔道に沈むとも魄は冥土に梅若君、中有の旅の御供と、二つの骸を一つ野に、墓を並べて父母の、形見を遺す産髪は、延びて千筋の柳髮、佛の御手の絲となる。是れぞ印の柳の絲、來る人寄る人往來の人、手向の露と茂りける。

房にも露知らせず、鶉衣を身に掛け、口に麁食を啜つて溜めたるは鶴の粟、蟻の塔を組む如く、十年以來の塵積つて、此の金九千九百九十兩、今十兩で願成就と、思ふ間のとけしなさ、漸う若君買ひ取るより、早十兩に買手は餘る、泣くとも吠ゆるとも大願遂げずに置かうかと、威しのために打つ杖は我に當る天罰。其の時此の腕が折れも痺れもするならば、今の歎きは有るまじ物。此の上に億萬兩、天に屆く金銀にも買はれぬ人の命を、唯十兩の金に換へ僅かの利德に眼が眩み、報いに報いの利に利がくひ、親まで殺す大損知らぬ因果の算盤違ひなり。語るも武士の恥晒し。女房免せ一日も樂させず貧苦を凌ぎ、溜める〳〵と思ひしは、忠でもなく孝でもなく、地獄廻りの道中の路錢を溜めた淺ましや。」と積んだる金を踏み崩し踏み散らし、かつぱと伏して泣きければ、女も共に絶え入る許り。道理聞いて武國も、恨むに恨むる方もなく咽せ返るこそ哀れなれ。「ヤ由なき後悔。梅若君と知らぬ前は人商人の惣太、知つての後は淡路七郎俊兼、此の七郎が手を以て、主の敵惣太を一刀刺さずんば、武士道は立つ可からず。」と傍の刀拔くより早く、左の肋を右の脇へ一文字に搔き切つたり。女房、「是れは。」と、驚けば武國突立ち、「聞えぬ七郎、初太刀を我に何故打たさぬ。」「尤も〳〵。我一つの所存あり。梅若の御事は言うて返らず、天狗に捕られし松若の、行方は天狗ならでは知り難し。今我が腸を摑んで天に捧げ訴へ、十一年積りし我慢心、魔道に入つて天狗となり、山々嶽々深山深谷あらゆる

り金十兩に八丈が島へ賣る所、兎角の御歎き、心に叶はぬ腹立、折檻打擲打つ杖が急所に當つて、唯今空しくなり給ふ、御死骸拜まれよ。」と屛風摑んで投げ退くる。夢とも分かず武國抱き上ぐれば、御色變り御身も氷と冷え切つたり。「なう若君梅若樣、武國が參りしと魂魄は御存じか。主從三世の緣ならば、半時の半時など臨終を待ち給はぬ。佛神三寶も恨めしや。」と聲も惜しまず歎きしが、涙を拭ひ、「是れ七郎、御邊見知らぬ事ながら、其方ならで三界に相手なし。我も主なし能い死時、主君の敵遁さぬ來い。」と刀の柄に手を掛くる。些とも動かず手を突いて涙を流し、「主殺しの惡罪人踏み付けて繩を掛け、穢れ村の手に渡し、竹鋸逆磔にも掛くべきを、武士の手に掛け討たんとは生々世々の厚恩。とてもの事に暫しの暇、連添ふ女にも隱し置いたる、罪業の固まり見せん。」と立ち上り、大肌脫いで納戸口の疊引き上げ、簀子の下に手を入れ、金五十兩三十兩百兩包、摑み出し〳〵投げ出すは數知らず、堆高く積みなし、其の上にどつかと坐し、「水の月取る猿猴は及ばぬ事の譬へながら夫れは畜類、叶はぬ願ひに身を苦しめ、人を傷ふ人間は畜類に劣る、愚癡第一の淡路七郎我が身ながら淺ましや。主君を掠めし一萬兩の金一生に償ひ、御機嫌を取直し、若君達の御馬の口、沓草履を摑んでも譜代のお家に宮仕へ、忠孝を盡し親前司にも悅ばせ、孝の道を立てんと魂に思ひ定めても、商業知らず耕作知らず、人商人の證文を賴まれ、書き初めしを惡道の師匠とは、今日の只今思ひ知る。女

の御家破滅し、お家に主一人も無きを知らずか。」と、聞きも敢へず手を打ちて、「ハァハッ、とは如何にとは如何に。」と、仰天するこそ道理なれ。「始めて聞いて驚くは尤も〳〵。御臺所の兄常陸大掾、我が相役勘解由兵衛と心を合はせ、家を奪ふ計畧、主君御夫婦不慮の横死、松若殿は天狗に捕られ、梅若殿は行方知れず、歎きの餘り班女御前は狂亂となり、禁中より狂ひ出で給ふ。剩へ御邊の親父前司兼成、主君のお命助けんと、敵の前にて腹切つて果てらる丶。思案も談合も我一人。先づ梅若君を尋ねん爲、北國路より奥方へと志す。若し思ひ當りはあるまいか。御事が見しは二歳の御時。今年十二歳、旅窶れに色は黒みても面體爪外れ、園生に捨てても公家大名、衣裳は破れ垢付くとも、世の常ならぬ紋柄、肌の守には吉田の家の吉例にて、御誕生の六日垂れの産神を入れられしは、日本國に只一人。夫れかと似たる物語でも聞かせてたべ、第一忠節第二は情、主人の有りたけ失ひのめ〳〵と存ふる心底、思ひ遣られよ。」と涙に咽ぶ物語、聞く程ひつしと思ひ當り、父が最期にはつとする胸に動づき、喉には大磐石を押し込む如く、詞も出でず只彷徨と、女房を見れば見替す女心、思ひは膽に燒鐵刺す、身も氣もそゞろに落付かず、保ちかねて大聲上げ、「大事があらう〳〵と案じたは此の事。悲しやなう。」と許りにて、「わつ。」と叫び伏しければ、七郎も氣を定めつゝと出で、「是れ武國、以前言ひしは當座の拔句、誠人買の惣太とは此の淡路七郎俊兼、主君梅若君とも知らず、鳥目三貫文に買取

手影も、アア、ア、懷かしや南無阿彌陀。」と舌も縺れ目も變り、五體を惱ます打疵の、杖に刃を誰が付けて、十二歳の玉の緒は、ふつつと切れて絶えにけり。夫婦途方に呉れし所門口に案内乞ひ、「人買の惣太殿とは此の主人か。拙者は上方者、ちと御意得たし。」と言ふ風體、供も連れぬ武士の旅人、「やら心得ず。誰にもせよ見られてはむづかしし。死骸を隱せ。それ屛風々々、それ澀紙よ筵よ。」と立騒ぐ間に、「御免あれ。」と、笠取つて入るを見れば、古主吉田の家の執權縣權正武國、「是れは扨なんと淡路七郎。」「是れは不思議の御光臨。先づ〳〵是れへ。」と請ぜられ、あたりを見廻し、「淡路七郎俊兼と土地の者に尋ねても、左樣の人は存ぜず、元侍衆ならば、人買の惣太と尋ねよと敎へられ來りしが、扨は人商人に成られたか。」と問はれて夫婦敗亡し、「イヤ〳〵〳〵勿體ない〳〵。飢ゑに勞れ四辻にのめり死ねばとて、人買杯は存じも寄らず。ア、さう申す筈、十一年以前女故不忠を盡し、御勘氣を受け斯くの體。武具は少し嗜めども一僕も使はず、若し人の入る時も雇へば賃が出る、懇の方より今日も人を借り、明日も人を借り再々人を借る故、人借の惣太と異名付けしを言ひ誤り、人買にして退けて迷惑千萬。」ナウ〳〵女房共さうで無いか。」と言ひければ、「ア、何やら彼やら憂き事聞き辛きめ見るもお主の罰。昔の咎を御赦免あり一度歸參ある樣に、お執成願ひ上げます。」と、打涙ぐむ許りなり。「いや御代が御代ならば譜代相傳の御分、召し返さるゝ筈なれども、思ひ掛けぬ變に依つて吉田

れば臂を打ち、悲しむ聲も出でざれば、女房打つ手に縋り付き、「夫婦が命繫ぐも子供の蔭。煩はば醫者に醫者も掛くべきに、殺して報いが有るまいか。」と、はなねぢ挘ぎ取り捨てたりけり。「エ、愚痴な事此奴が此方の手へ入るも過去の約束、賣つて食ふ我らも過去の約束。八丈が島へ參らうと吐かすまで叩く。」と樫木の桿棒押取りのべ、棒もしわ〳〵撓る許り聲を掛けて續け打ち、棒は強く身は弱く、肋の急所にはつたと受け、「うん。」と許りに手足を縮め、色も變つて息絶えたり。「ハァ悲しや可愛や死んだ。」と女房抱き起し手足を撫り、胸を合はせて看病す。惣太も呆れ棒投げ捨てて詞なし。漸うに口に氣付を含め水吹き入れて、「これ息がする。最愛や痛いか苦しいか。何國を指して行く人ぞ、望みあらば何なりとも。明暮酷い辛い目見て、打ち擲かるゝ人よりも、傍で見る目は尚辛い。必ず死んで給るな。」と泣き口說き勞れば、淚を浮め手を合はせ、息疾しげなる聲細く、「我は都北白川數ならぬ者の子。父の昔の知邊を尋ね、一度奧州へとは思へども、身節碎け次第々々に胸苦しく、只今死ぬるに何の望み。肌の守は生まれし時六日垂れの產神。胎内よりの產髮は父母の生血にて、此の上の守はなしと今日まで身を放さず。お情慈悲と思召し、守一所に我が身體を土に埋み、印に柳を植ゑてたべ。身名は朽ち果つるとも、父母の生血の產髮は生育ち、柳の髮と茂らば、親の御恩の片端も、せめては送る一つの孝行、ア、母上の嘆歎く顏を一目見て死に度い。戀しいも母樣最愛いも母樣。都の人の足

で有るまい。頤養ふ有り難しと、鬼が島でも龍宮でも、遣る所へ何故うせぬ。返事せい丁稚め。」と怒る聲は嚙み付く如く、膽に響きて梅若君、多くの人に敬はれ、親にも主にも一生に荒い詞も言はれぬ身の、命も縮める心地にて、「八丈とやらんは日本の地を離れ、人の通はぬ島と聞く。せめて親達と同じ日本の地の内に。」と手を合はせ給へば、「吐かすな然らば此の頃足利の辻放下が方へ何故うせぬ。足利は日本の地で無いか。」「なう足利は是れよりも未だ奥と聞く。一里でも半里でも都の方へ遣つて下され。死ぬるとも親の方へ向うて死に度い旦那樣、御恩は更々忘れまじ。お慈悲〳〵。」と聲を上げ佛を頼む許りにて、涙を共に手を摩れば、珠ぬく數珠の如くなり。「エ、口で叱つて行かぬ奴、小刀針で養生し、ど性骨直さん。」と九寸五分するりと拔いて直と突出し、「太股を突かうか。」「ハア、〳〵。」「尻臀を突かうか。」「ハア、〳〵。」「動くな。」「アイ。」「動くな動いたらほてつ腹突くぞ。」「アイアイアイ。」「眼玉を刳らうか、脇腹を突かうか。」とじり〳〵〳〵と附け廻せば、身を冷し身を縮め、涙も出でず顫ひあがり〳〵、逃げても逃さん透間も見せず。「エ、〳〵餘り酷い旦那殿、殺さば寧そ一思ひ。詫言して下されなう内儀樣。」と叫ぶ聲、女房驅け出で、「なう疎ましや子供折檻も程がある。疵付けて誰が損。」と、小刀を捻ぢて引奪れば、掛けたる鼻ねぢ引きさげ、肩腰別かず力に任せ、疊み掛け掛け打つや空蟬の羽よりも薄き御肌、骨も折れ筋も切るゝ思ひにて、身を開けば足を打ち、手を上ぐ

よ。」「あい。」と答へて何國の誰が最愛可愛と撫子の、花も萎める面窶れ、眞面目顏にて立ち出づる。「又泣えたな。これ何奴も能い生付。此の顏立で大磯小磯か江口神崎へも遣らるれば、百貫道具なれども色里へ向かぬ大い疵物、臍が出臍大抵の事で無く、腹の上に一番西瓜置いた如く、此方は左の手が六つ指、其の代りに右の手が三本、十に足らずの缺皿、如何も客の間に合はぬが合點か。」「ハテ見付さへ能ければ三つ足でも德利子でも構はぬ。サアさらり〳〵。」と手を拍つて「女郎共來い。」と引き立てられ、「申しお內儀樣さらば忝うござんす。」と泣いて出づれば女房も、見る目に涙いぢらしく、「可愛や是れを何が忝い。坊此方おぢや。」と手を引いて納戸の中にぞ入りにける。惣太獨り笑みして、「商ひ拍子が直つて來た。此の勢ひには、彼の都の色白童も落付いたは定の物。今に十兩握つて其の十兩を、ム、斯樣と〳〵面白し。」と、胸の算盤高合はせて悅ぶ最中、撥鬘の彌藏若君の小腕攫み、家の內に投げ込み、「惣太殿此奴を八丈へ遣れば、此方も十兩我とても只は居ず、何も活計と此の頃骨折り口叩き、さあと言ふ段になり、腹が痛む脊が痛いと意地張り、間がな透がな逃仕度、蓼酢でも行かぬ餓鬼、是れ慥かに返した金渡さいで仕合。徒骨折らせた倅め。」と睨み付けてぞ歸りける。惣太滅金の樣なる眼を剝き、乙に入つたる胴聲、「蝗程な樣で親程な者に、息筋張らする不敵者、惡う育たぬ奴とは見た。王の子でも神の子でも、百里二百里榮耀に狼狽へ歩かうか。親元が分散か追放か碌な事

は品々、畔の落穂を拾うても暮せば暮す世の中、幾人と言ふ數もない人の子に憂き目を見せ、身に應ぜぬ錢金の手に入りは入りながら其の驗もない此の貧苦、其の報いとは思はずか。可惜お身を窶らし成下るも皆我故と、いとしぼく鏡一つ手に取らず襷放す間もなく、あがけども未だ此の土の苦は厭はぬ。とても長者にも成るまいなら、徐々營業變へる樣に、思案して下され。」と打萎るれば、「ア、知れた事を諄々と誰が是れを好む物ぞ。能い〳〵昨日八丈へ賣つて遣つた都者の色白め、彼奴が先に居付けば金十兩取る筈。固まつた金取つて殘る奴等は捨賣にして仕舞ふ覺悟。お內儀苦に持ち給ふな。」と戯るゝ所に、配頭の左次太夫七八歳の坊主子に、猿轡嵌ませ手を引き立て、「是れ〳〵旦那殿、病氣の無ささうな堅い坊主め、伯母の所へ行くと言ふ。此の子が伯母知つてぢやげな。逢はせて遣つて下され。」と言へば惣太合點し、「坊主能う來たな伯母は彼ぢや。あれ伯母々々。」と指ざせば、女房を見て怪顚顏頭振つて逃げ出づる。「ませた餓鬼め。」と拳三つ四つ喰らはせ睨み付けたる有樣は、鬼より增しの猿轡、泣けども聲の出でばこそ、淚ぞ顏を洗ひける。「流石配頭能う釣るぞ。此の坊主五百で置いて行きや。心に合はずと又何ぞで入合はせて遣らう。サ手を拍たうか。」「否夫れならば今日上總船が出るに付き、十許り十一二の眉目の能い娘の子、二人がらり一貫宛に相場が極る。夫れでは我らも少と儲ける。何と遣る子供はござるまいか。」と言ひければ、「幸ひ〳〵話し度き者あり。六つよ西瓜よ爰へ出

して能くば夫れも殺さん是れも殺さん。我が子は何國に隱せしぞ、尋ねて行かん住家は如何に。家も由なし宿も由なし奧の深山の、其の奧山の虎狼や鬼一口、雲居の餘所にとんどろとゞろ、轟々と鳴神も、分けて尋ねん天の川の星の數々戀しや子供、花の顏秋待ち敢へず、散り〳〵散り〳〵になれば、母は冬野のうら枯薄、夫故亂れ子故に狂ふ。庭の荻はら野邊の菊、野分に騷ぐ狂咲き狂ひ出づるぞ三重外つ國や、隅田河原の邊に近き埴生住、夫婦も元は都鳥、有るか無きかのかせ所帶、妻は手爪の賃仕事、小櫛取る間も無けれども、浮世の垢の落ちかねて、乘立ちもせぬ世渡りの、憂身に頓と筆捨てて、針手綴の色紙短冊歌人に似たる譬草、夫は詞を工みにして能き衣著たる商人の、有るが中にも人商人猿島の惣太とて、貧しき家にも槍長刀鐵研ぎ立て、鐵の棒堅木の棒、竹篦割竹鼻ねぢ、其の外子供の責道具ひつしと竝べ、手下の者に働かせ、其の身は庵にのさばり臥し、奧坂東の元締して、秋田坂田蝦夷八丈まで、賣つつ買うつの人商賣。其の昔丹後國山椒太夫が手植とて、蕃椒の惣太と近鄕異名を付けにけり。惣太枕を擡げ、「ナウ女房今日は三月十五日、上總浦の船日なれど、今朝から如何な一人も買ひに來ず、何國の誰が手柄とて鼻垂一匹連れても來ぬ。今日のやうな商ひ日に、帳面が黑まねば心持が勇まぬ、仕事止めて二三里ぶら〳〵廻つて、男の子でも女子でも勾引して連れて來て今日の帳面祝うてたも。」と言へどもふいと顏振つて、何の答へもせざりしが、「なう惣太殿人界の果報

て鞠を蹴るアリイ〳〵、源氏は明石の鯛を釣る、山姥は山路にて薪を樵らせ給ひける。唄知れぬは浮世ぢやナア面白いぞ。」武國も惘れ果て、「淺ましや狂氣なされしな。せめて内裏の御門を出で道にてもある事か、一大事の所を此の體は何事ぞ。能くお家の御運の盡、エ、口惜しし是非もなし。是れ正體ない氣を取直し此處立ち給へ。」と引立つれば、「何ぢや此處を立て。エ、推參な。太夫を知らぬか。野上の宿で全盛の太夫、海道一のふりて、新造抔廻したとは些と違はう。彼の簾の内なは誰樣ぢやえ。知つて居る〳〵先刻に聞いた王樣ぢやげな。エ、憎う何故隱れさんす。そこな禰宜衆頼む、首尾して連れまして來て下んせ。いざ往こ、さあ往こ、翌は里の祭ぢや、祭は紋日、唄紋日々々を算へ〳〵て野上通ひを悋氣せまいと、其所で鐘打て鐘を打たいの、くわし〳〵と打たいの、鐘は曉七つ起して別れを送る、禿が振袖惜しや形見の袱紗落せし、可惜物を中ちつくり茶巾程、紅染に括して端々にから梅唐松から花唐草、唐獅子を縫はせた、忘形見の我が子落した。花も紅葉も散らば散れ〳〵、落せし我が子の有るならば、田舍も住みよかるらん。其方へは行かぬか、其所には居ぬか。あれ〳〵〳〵それ〳〵〳〵夫れ其所に、子供返せ。」とかつぱと伏して泣き狂ふ。見る目いぶせく御簾颯と下るれば、諸卿もはらりと立ち給ふ。大掾悅び、「大内の汙れ夫れ打ち殺せ。」と言ふ聲に、「棒よ杖よ。」と犇いたり。武國共に狂氣の如く、取り付けば打ち拂ひ、縋り付けば逃げ廻り、「何狂女を殺せとや。殺

大掾いき〳〵いきり出し、武國主從氣を落し、人心地もなき處に、大理卿大江匡房、笏取り直し、「遠く書を尋ぬるまでもなく、目前日本紀に出て誰も存じの先例數多あり。まづ十五代の神功皇后仲哀天皇の御后、仲哀崩御の後大日本の家督を繼ぎ、異國まで從へ給ふ是れ一つ。三十六代皇極天皇これ二つ。四十一代持統天皇は天武天皇の御后、十善の御家督を繼ぎたまふ。君は一天四海の水、臣下は潦の溜水四海を治め給ふからは、溜水は其の身相應の家督、君を以て臣下の先例とするに何の難か有るべき、吉田少將が家督後家に仰せ付けらるゝ。相續致せ。」と仰せも果てぬ詞の中、「ハア〳〵有り難し。」と平伏し、三拜手の舞ひ足の踏みども知らず。大掾憚らず、「ア、御詮議が足らぬ〳〵。彼の女は元美濃國野上の宿の傾城、乞食非人の娘も知れず、萬人に枕を竝べ身の穢れたる女。勿體無くも神功皇后持統天皇の例を引き、公家の家督とは瓢簞に釣鐘、かけ組まぬ御評定。」と言へども諸卿聞かぬ顏、「是れ〳〵武國、敕諚忝しと存じ、早々連れて立ちませい。」「あつ。」と悅び、「いざお立ち、サァお立ち。」と引き立てても、南無三寶婦人の性の纖弱きに、今朝より樣々心を揉み、結ぼれ解けぬ胸の中、はつと悅びはつと驚き、氣は逆上り血も狂ひ、寐覺の如く恍惚と、きよろ〳〵眼なる顏打上げ、「ワハ、ハ、〳〵何が可笑しい〳〵、ホ、〳〵〳〵あれ〳〵〳〵、それ〳〵〳〵、最愛やの何時の間に誰がしたぞ、其の姿見や。手に百八の數珠持つて、雪踏片足下駄片足　舞 柏木の衞門は都の内に

影も形も無い子供を尋ぬる間とは、エ、まがくしき面付。主人の供して奥州の金山賣つたる、山賣の山こかしとは汝が事。」と言ふより武國ぐつと急き居丈高になり、「山か谷かは知らず、蟲同然の二才の餓鬼を、家督に備へ後見せんとは、吉田の家を衒り取る大騙り。」「ヤ騙りとは誰が事。」「オヽ誰ならん和主々々。」「騙りと言ふ證據は。」「證據が見度くば和主が心を見よ。」と、詞を押へ犇々と生木に釘打つ鐵槌論、相手も負けじと燒石に水掛論、雙方理詰の高聲、雜式恪勤鐵棒鳴らし、「鎭まれ／＼無禮至極。」と制すれば、「エ、大掾め、主人の大事を思はずば、飛び掛つてえら骨蹴て／＼蹴裂いて呉れん物。」と白洲を摑み涙を浮め、齒切をしてぞ控へける。御簾半ば卷かせ大納言能信を近く召され、「大掾百連は少將が先妻の兄弟なれば、緣のみにて血統にあらず。後家は正しく少將が實子梅若松若が母なれば、家に付いて親しみ深し。さりながら女の身にて、夫の家督相續の先例あらば、後家に家を繼がすべし。古例無きに於ては百連が子を家督に立てよ。諸卿各記錄を以て考ふべし。」との勅諚。關白賴通を始め、敎通師實三公以下の上達部、我も／＼と數多の書を繰披け、繰り返し考へ給へば、白洲には兩相手先例あれかし／＼、イヤ無かれかしあれかしと心の祈り、班女持病の血の道に、氣も上り宙を飛ぶ如く、心の賴みは記錄の面、善か惡かと氣を碎き、脈見る醫者の口を待つ、心の內こそ危けれ。有職の公卿殿上人中原淸原の學者、家々の名記古記を尋ねても、是れぞと言ふべき例もなく

鞭提げ縛り繩手繰つて控へしは、閻魔の前の獄卒に角の生えざる許りなり。未明より詰め掛けし常陸大掾伸び上り、「ヤイ橫道者、何面提げて罷り出た。吉田少將には外に緣者一家もなく、親類とては我一人。殊に先年少將陸奥國國司の折節、奥州金山貢納金一萬兩引負ひ、大内藏省の算用令に立たず、其の身の驕り死際の不行跡隱れなく、名跡召上げられ家絶えん事歎かしく、此の百連後見して我が二才の倅に家督を願ひ、今日仰せ付けらるゝに極まる所、何者の腰押で無理訴訟を申し妨げ、主の後家と仕組んで、吉田の家を丸呑に仕度いとて爲せうか。根心穢き女め、夫れ後の繩見たか。引括られ獄屋の新客に成らんより、申し下して罷り立て／＼。」と詞の權に威され、班女は魂身に付かず。武國嘲笑ひ、「コレ大掾殿理非は上の御裁き。御邊が立てと言へばとて、御前を立つべき謂れなし。下々の跡式爭論の樣に、見苦しき惡口雜言の相手にはなり申さず。但し彼の一萬兩の引負は、譜代の郞等淡路七郞俊兼と言ふ者に奉行申し付けし所、若氣の誤り遊女に溺れ遣ひ失ひ逐電せし故、主人存生にも此の金子を辨へんとの念願、家督請繼ぎ一萬兩を償ひ納め、家を立つべき爲の御訴訟。梅若松若と言ふ男子二人有るからは、親類衆の肝煎御無用。訴訟の趣天聽に及び、子供の在所尋ぬる間、後家の家督相續希ひ奉る。」と頭を下ぐれば大掾聲を荒らげ、「ヤァ男子の嫡子のと上を掠むる曲者。松若は天狗に攫まれ、首は首胴は胴と引き裂かれて死んだも知れず。梅若も首縊つたやら身を投げたやら、

家督を頼りに望み、毎日々々の訴訟。幸ひ今日は評定日、百連は早參内と聞く。汝等も記録所に召し出し、對決の儀もあるべし。慈悲を表の御仁政とは言ひながら、理を非に掠むる依怙贔屓は更になし。御前にて御尋ねの事申し上ぐるとも、少しも僞りなく、正直を元とする事、利運の種ともなるべし。」と詞ゆゝしき大理の官、兼ね備へたる文武の兩輪、御車寄にぞ入り給ふ。「あれ聞き給へ油斷のならぬ伯父大掾の不道者、遮つてお家の名跡望む由。今日の對決浮くか沈むか一生一度の阿波の鳴戸。只お氣強う。」と乘物より、助け下せば班女の前、「否終に見ねども御前と聞けば、慄然して恐ろしい。眼の前で叩かれつ縛らるゝ者もありげなり、夫れを見たらば眼が暈はう、怖や否や身が顫ふ。」と聲も戰く折節に、決斷所の小門より召使の下番走り出で、「吉田少將後家班女同じく家來武國お召し、出ませい出ませい。」と呼ばはる聲の調子まで、耳に對へて「ハア、。」と許り消え入る樣に見えければ、「エ何とてお心後れし。假令相手が富樓那の生まれ變りでも、歪んだ者は歪んで映る。上は鏡正直の道理を以て、伯父大掾を牢へ入れうと思召せ。」と詞に勢を付くる中、「少將後家何故遲なはる。早う出ませい出ませい。」と、お召しかさなる白洲の上、素足は未だ踏みも見ぬ、中門に刀脫ぎ置き、御前へこそは三重出でにけり。實に芇んなる甘棠勞る事なかれと、慕ひし聖代の政を移され、記錄所の簾中に出御あれば、玉座に續いて大理卿大江匡房三公九卿八座七辨席を連ね、庭上には刑部省の官人等、鐵

吉田の家を韲物には、入らざる世話の燒物口、平皿御無用御無用と睨む眼の壺皿より、無念の涙はらはら〳〵、はらからの子は生き別れ、歸らぬも水行くも水、同じ涙を二筋に、暇申して若君の、行方を尋ね慕ひ行く。

第三

別れを天外に求むれば、蜀山の雲終に隔たり、魂を地下に尋ぬれば、巴陵の水轉た流れて留まらぬ。世を其の昔に返さんと、行房の執權縣權正武國、一通の訴狀を懷中し、班女御前を乘物に忍ばせ、大理の廳の御門の邊に立ち憩ひ、訴訟の便を伺ひし忠義の程こそ淺からね。權中納言大江匡房、撿非違使の別當にて、衣冠繕ひ參內の、前驅の前に跪き、「吾らは故吉田少將行房が陪臣、權正武國と申す者。主人卒去に付き家斷絕に及ぶ歎き、恐れ入つたる御訴訟ながら、二人の男子在所知れ難しとは申せども、敕勘の罪にもあらず、父母の勘當にも候はねば、雲水を分けても尋ね出し申すべし。梅若か松若か連れ歸るまで、主人の孀に家督續がせ申し度き願ひの趣、訴狀宜しく御沙汰ありて、上廣大の御憐愍幾重にも仰ぎ奉る。乃ち主人の孀女をも彼所に相俱し候。」と沓の鼻に額を付け、合掌なさぬ許りなり。匡房卿打頷き、「さも有るべき願ひ何とて延引しつるぞ。常陸大掾百連、行房の

前代未聞の働きなり。行房御機嫌斜ならず、「眼を拔けば綸絹に戻ると口傳せり。軍介眼を潰せ〳〵。」と、のたまふ所へ勘解由兵衛、拔刀して逸散に驅け來り、少將の胸倉取つて刀を心元に突き當て、「是れうつそり、常陸大掾百連公に頼まれお身を殺し、吉田の家配分の契約。其の鯉の眼を突くと、少將がほてつ腹突き拔くぞ。」と、聲を掛くれば軍介も南無三寶と控へたり。少將聲を上げ、「エ、無念や運盡き果て、蟲の樣なる人畜めが、計畧に乘せられたるも天狗の障礙。よし吾は死するとも、鯉を二度掛繪に戻し帝へ捧げ、吉田の家さへ立てば本望。われには構はず鯉の眼を刳れ〳〵。」「くつたら突くぞ。」「構はず刳れ〳〵軍介。」と惜しまぬ命は天下の忠臣、刳らぬも一家の忠臣奴、迷ふ心を一圖に極め、眼玉をぐつと突き通せば、鯉は忽ち消え失せて元の綸絹に名筆の、妙不思議とも謂ひつべし。「エエ死に度うて死ぬるたはけ者。」と主人を引伏せ勿體なくも、胸元を刺し通し〳〵、「サア本望は遂げたり掛物は此方の物。」と牀に掛つて卷き取らんとする所へ、谷を傳ひ軍介息を切つて驅け付け、景逸が髻を摑んでうんと蹴倒し、「サアして遣つた主人の手向に胸板を突かうか、鯉の恨み眼を刳らうか、エエ能い氣味。」とせちがふ所へ、百連が加勢の雜人一羣に成つて馳せ集まる。「ヤア性懲も無きお客達、今度の馳走の獻立見よ。」と、景逸を水の深みへ投り込み、羣りかゝるを事ともせず、取つては池へ投げ込み投げ込み人筏、目打き鱠人の鮨、身體は水に冷物、手際は古今かうの物、敵は糠味噌追立汁、

詰り、鯉の行方は此の池〳〵。水かつ浚へ捕ふればとて何のこと。コレ家老殿何を放乎と。班女様にも勢付けて、此の間に梅若君尋ねうとは思はずか。エ、生鈍い權正殿、留守なれば一つも埒が無い。」と氣を揉めば、景逸何うがな立ちたい折に幸ひ、「畏まつた。」と足早に御前を立つて入りにける。時に池水逆波立ち顯はれ鰭振る鯉の形。「あれ〳〵一摑みにして見せ申さん。帶解く間もあら面倒や。」と諸肌脱いで腰刀、脊にくるりと、「廻ればお庭も程遠し、御免。」と言ひ捨て一文字に池へ濳然と飛び入つたり。水に矧の矢の如く驅せ飜れば、追ひ廻し近寄る透間の水放れ、飜りと組んで乘つたりけり。組まれて怒りの鱗を立て、拂ふ尾先に潑ね立てられ、散るは水玉波の花、玉も水草を搔き分けて拔手浮足撓みなく、泳ぎ上ればさら〳〵、流るゝ水の瀨に逆ひ、底を潛つてそことなく、沈めば沈み浮けば浮き、鯉は尾鰭の力を振り、此方は生死の境の水、爰を三途の川波と、氣力を竝べて三重桃み合ふ。龍は一寸にして昇天の氣を含み、鯉魚は尺にして龍に化するの勢ひあり。況んや古今一筆の鯉に與へし瀧の水、逆まき落つるを事ともせず、渦まき上る有樣は、和國に響きし瀧津波、八十丈の龍門を昇りし鯉も斯くやらん。軍介屹と見、「言はれぬ鯉殿瀧昇り何國までも御供。」と、峨々たる巖壁幸ひに踏み締むれば取所なく、葛を摑めば踏み辷り、落ちては上り上つては、遁さぬ遣らぬと聲限り、慕うて巖に這ひ上る。忠義の手掛足立に何なく巖に這ひ上り、鯉の顋を引摑み一息ほつと吐いたるは、

逆立つ尾先に繪絹を叩き、搖ぎ放れて庭の池水、四方へぱつと潑ね散らしてぞ飛び入りける。梅若君色を變へ、「夫れ見やつたの、サア何とせんひょんな事した景逸、賴む〳〵。」と泣けども爲方波の底。「あれ〳〵居るわいの。父のお耳へ入らぬ間に、ちやつと捕へて給いなう。」「エ、せはしない、急には成らぬ。御前の耳に入つたらば、常々の短氣、御手討は知れた事。事濟むまでは何國へなりとも御身を隱し、我らが使待ち給へ。あら恐ろしや。」と威されて、日頃さも無き若君の、返す詞も涙に暮れ悄々として出で給ふ。是れを館の見納めとは後にぞ思ひ知られたる。して遣つたりと大聲上げ、「掛繪の鯉の脫け出で行方知れず、折り合へ出合へ。」と呼ばはれば、上下驚き驅け集まる。行房御覽じ、「南無三寶何者のうでてんがう、眼を點れて斯くはしつるぞ。天子の逆鱗異國までの恥辱家の破滅此の時エ、しなしたり口惜しや。」と惘れ果てさせ給ふ所へ、婢の女遽しく、「疎ましや梅若樣の行方なく、お部屋にありし書置。」と言ふより母上取る手も遲く押し開き、奥まで讀みも終らず、「ヤレ梅若を留めて吳れ。人に嗾され掛繪の鯉に、眼を入れしは若が所業。父の叱りの恐ろしく、館を出づると書いたるぞや。何地へ放ち遣るべき。」と、驅け出で給ふを行房引き止め、「眼を開け班女、天下の大事吾が家の破滅を知らぬか。此の掛繪元へ戾らねば、生中梅若尋ねんより、此の少將共に生きて益もなし。エエ何とせん是れまで。」と、御佩刀に手を掛け給へば、軍介透さず飛び掛り御手を押へ、「御生害は詮の

の繪を盜み取り、百連公に奉らば、百連は鶫の悅び、少將はけら腹立ち、其のほてつ腹刳拔いて遣らん物。」と、心に呟き息を詰め氣を配り、木の葉に風の音するも、人かと心奥の間の牀に怖々のし上り、半分卷いたる掛物の鯉より躍る心魂、恟り見れば南無三寶梅若君、ぱつと許りに飛び退り、掛物詠めて紛らせり。心付かねば梅若君、「ム、其方も掛物を見におぢやつたの。」と詞の中に分別し、「然れば然れば、重ねて拜むは稀の事、見事何とも言句に及はず、凡筆成らぬ所あり去りながら、眼を點るれば繪絹を放れ、忽ち水に働くとは、餘り仰山な譃らしい言ひ傳へ。物は試し日來遊ばす繪の手際、一筆眼を點れ給ひ、唐土日本二千年以來の實否を糺し給へかし。」と勸むれば、「ア、あの人は勿體ない疑ひ、何の僞りある物ぞ。よし又譃にしや糺して何の德がある。」「いや左樣でござらぬ。何時知らず敕諚にて、眼を點れさせ叡覽ある時、此の鯉が働かずば、誠の繪は失ひ、贋物に替へたりと咎めの時は吉田のお家の大事。一寸墨點れ試み給へ。」と、勸むる惡事は繪に疵付け、親子自滅の詞を飾りて糺しける。「夫れも左樣なれど、此の鯉が若し水へ入り再び元へ歸らずば、なう怖や、此方や否々。」と宣へば、「よし水に入ればとて元が絹に書いた物、餘所の池へ行くまじ。高が此の泉水。後は拙者が胸に胸に。ひらさら一筆遊ばせ。」と牀の硯の墨磨り流し、退引させぬ入性根、幼心に尤もと、何の頑是も情なや、硯引き寄せ筆染めて、爰が眼と入墨の、寫ると等しく黃金の鰭、黃金の三十六鱗々、

しと、唐土までも涎をひかせん。いざ船遊山。」と手を取れば、班女品なく振り放し、「御臺樣の御最期百日になるならず、奥樣顏も否なり。殊更今日は風烈し。海の樣な深い池、危や〳〵入らぬ物。いで女子共に申し付け蓮の初咲手折らせて、御臺樣の位牌へ。」と立たんとするを引き止め、「愚癡かな〳〵死んだ女に遠慮とは何の事。景逸立つて舟言ひ付けよ。お身を乘せて人交ぜず行房が舟押さば、八幡どうも堪るまい。否とはいはせぬ來り給へ。」と乘らぬ心を打乘せて、神代も聞かぬ水馴棹、錦を舟や渡るらん。實に面白の折柄や。春の花皆衰へて、野山火を踏む夏の日に、淸江三面の水を湛へ、暑さ流してさんさ吹くやな松の風、餘りに吹いて松風よ、主ある花を散らすなよ。夏衣薄き契りは忌はしや。唯蓮葉の心もて、久しかれ〳〵蓮の花刈れ、刈り取らば浸さぬ浪に袖濡れて、浮名や水に晒すらん。謠いざ〳〵蓮刈らうよ。中將姬の古は法の蓮の絲長く、五色に染めし曼荼羅に、本尊かけたか時鳥の一聲は、藍より出でて藍に濃く、泥より出でて色染めぬ、蓮は花の君が代に、壽きていざや織るべし。惠遠法師が其の昔廬山に結ぶ交はりは、白き蓮の露の玉、濁りに染まぬ心もて、胸の蓮の影照らす、後の世掛けて織るべし。是れなう爰に鯉鮒が、蓮の花笠唄しやんと著て踊る態が萎らし、石龜もぢだんだ鰻鯰は不形な物よ。唄是れをきて見よかしのえ、朝夕馴れし風景も替る雲水遠近の、蓮尋ねて岸廻り、舟を心に任せらる。百連に言ひ合はせし勘解由兵衞、「天の與ふる時節、此の隙に鯉

牀に掛け給へば、各〻立ち寄り拜見あり。「ハア是れは誠の鯉、寫給とは更々思はれず、是れは〳〵。」と感じける。勘解由兵衞篤と見て、「斯許りの御重寶批言は恐れ多けれども、此の鯉に眼無きは不審にこそ。」と申し上ぐる。「ォ、能い不審、眼の無いが繪の高名、言うて聞かせん篤と聞け。唐土漢の武帝の時、昆明池と言ふ池に朝夕魚を釣る人あり、或時鯉を釣り得しに絲斷れて魚は波に入り、命を免れ去りたれども、針や鰓に殘りけん、武帝の夢に獨りの老翁我が咽に釣針あり、苦しむ事堪へ難し、取つてたべと歎きしかば、帝手自ら針を取り苦しみを助け給ひしに、玉一雙を奉り、我昆明池に住む者なり、君が寶祚を守らんと、其の儘鯉の形となり、去ると夢見し枕の上、夜光の玉のあり〳〵たり。武帝其の鯉の有様を自ら畫き給ひしに、未だ眼を點れざる内、忽ち尾鰭動きしかば、眼を點れなば繪絹を放れ、必ず水に入るべしと、驚き筆を止め給ひし其の鯉は此の繪にて、代々の天子に傳はれども終に眼を點れられず。又日本へ渡りしは、元正天皇の靈龜年中、我が先祖下道眞備と言ひし人、安部仲麿に伴つて入唐し、是れを傳へ歸朝して長く日本の寶となる。其の故を以て三年宛百連が家と我が家、替る〳〵預つて、是れを守護する事先祖末代の恆例、吉田家の規模是れに過ぎず。重ねては叶はぬ事、立ち寄つて能く拜見せよ。ヤァ長物語氣鬱々々。班女蓮の盛りあれ見られよ。楊貴妃が行水姿、太液の芙蓉に勝りしと唐人の自慢、我もそもじと同船して、班女が色にけおされ芙蓉に花の色な

を合はすお蔭〳〵。アレ向うから人が來る、見付けられては互の大事、歸れ景逸賴み存ずる景逸殿。家來參れ。」と馬引き寄せ、ひらりと乘れば景逸も、上分別の圖に乘つて分れ〳〵に三重此の外に何樂しみを白川の、所も吉田行房卿、四季を一日の下館、庭に自然の山河の氣色もえやは岩疊む、千尺の瀧津白絲の、鬱れ心解き流す、花月雪の其の外に、色と酒とのかけ造り、巧みに巧み物好に、あかせ立てたる軒の妻、班女と爰に二人寢の、閨に扇の風入らず、夏なき宿と住みなせり。下部なれども御氣に入りの軍介、奧の出入の玉帚庭の隅々掃き清め、花をつかんで投入に、心利きたる宮仕、芙蓉殿上中間にも、茶道にもなるお小姓にも、草履取には惜しかりし。池の蓮の初開き、水に錦を織り榮えて、たたまくをしき花盛り、朝來の白露香を促して益遠く、行房御夫婦立ち出で給ひ、「ヤイ軍介、汝が綺麗好き言ひ付けねども掃除氣味よし。此の投入も汝よな。沒義道な所一興々々。用あらば呼ぶべきに、立つて憩め。」と宣ふ折節、梅若丸珠玉を鏤めたる掛物箱、勘解由兵衛に持たせ立ち歸り、「常陸大掾百連より、鯉の掛繪請取り歸り候。」と差し上げ給へば、行房取つて押し頂き、「先御臺死去の時より、遺恨を含み仲惡しき百連、大方にては渡すまじと思ひしに、事故なく請取つて歸る事、天子の御威光若が手柄、部屋へ入つて休息あれ、大儀々々。」と淺からず悅び奧に勸め遣り、「班女も此の繪を遂に見るまじ。梅若が供して首尾能く歸りし褒美の爲、景逸にも見すべし。」と、箱押し開き手自ら

天狗の祟り行房には當らず、我が妹に取り付いて影の煩ひ、剰へ今日變化と取違へ行房に殺されたり。妹が事は悔んで返らず、夫れを越度にして遣らんと悶きしかど、淡路前司めが咎を引請け、腹切つて死んだる故、是れも夫れなりに妹は死に損、思ふ所へ手が屆かず。扨何がな返報と思案せしに、ヤレ屈竟の事こそあれ。汝も知る通り行房と某、替り〳〵に天子より預る武帝の筆の鯉の掛物、行房に渡す日限も近々。是れを押へて意地ばらんと思ふを頼みに、胸を摩つて立ち歸る。シテ唯今は何處よりの歸りぞ。」と、晝の焔を其の儘に燻り返つて尋ねける。「承つて驚き入る。某は比良の嶽へ立越え、木を伐りし其の替り、十萬本の杉を植ゑよと、行房申し付け候故、畏まつたる體に見せ、大津八町の出女に酌取らせ、此の四五日酒宴に夜日を暮し只今館へ罷り歸る。某有り合はせ候はば何とぞ分別仕樣もあるべきに殘念千萬。扨只今仰せられし鯉の掛繪、渡すまじきとの御思案然るべからず。何故と御意なされ、掛繪は元天子の物、敕諚にて預るを私に押へ渡さずば、朝廷の聞え却つて百連公の越度にこそなるべけれ、行房は構はぬ事。某が存ずるは、何の事なく繪を渡し、折を窺ひ盜み取らん。行房が手にて失ひたる時は、彼が越度天子の咎め、官職を削られ流罪はよい首尾、首が飛ばうも知れ申さず。此の分別は。」と聞きとれて、百連馬上を轉び落ち、顏を澀め腰摩り、「ヤレ景逸上分別に氣を奪はれ落馬も覺えず。成程掛繪渡すべし、盜み取るは汝が力くどうは頼まぬ、コリヤ手

には棒を振る。汝は命を棒に振りたいな。好きなら振つて呉れべい。」と、片手に引提げくるり〳〵くるくると引き廻す。「なう眼が暈ふ〳〵。」と叫ぶ聲に、殘る奴原取つて歸して追取りまく。「幸ひ棒を持ち合はせた。」と毆り立て〳〵薙ぎ立てられて三重逃げて行く。引返して猪熊を大地に打ち据ゑ足下に踏へ、「生きた人の首引き拔くを若君のお慰み。」と、顎に兩手を引掛け、「うん。」と一息、聲より先にちぎる〻首は童の捥ぐ、蜻蜓の首より易かりける。「サア御退き。」と、梅若を負へば脊中も香に匂ふ。人間一生花一時、負けるな劣るな、名を下すな、我を張る威を張る弓張の、月よ雪よ餅よ酒よと替れども、樂しみ同じ下戸上戸、善惡吉凶皆一心と、一念定めてうい奴けな奴氣味よい奴、伊達な奴が花摺衣、北白川へと急ぎける。

第二

鳥に似たる蝙蝠あり、魚に似たる蝌あり、形は人に似たれども、奸曲邪僻の侫臣の、心は暗き夕闇に、勘解由兵衞景逸提灯に道照らさせ、京極通を正親町、行き違ふ馬上は常陸大掾。「こは百連公か。」「ヤア勘解由兵衞、只今行房が館より歸る所、能き折柄に行き逢ひし。」と家來を遠退け、「馬上ながら言ふ事あり、近う〳〵。」と鼻付き合はせ、「何事も心に任せぬ浮世、比良の嶽にて木を伐つたる、

ア、切つたとは我が妹、日頃の仕方思ひ當る。切り手は少將、行房出でよ。」とすく〳〵立つて怒りをなす。「否主人は未だ退出なし。御臺所の影の病、御惱みを助けんと一心に存じ込み、天狗の所爲に化され、本體を前司めが手に掛けし狼狽者、詮ずる所主殺し、首取つて恨み晴れ給へ。」と指添引拔き鳩尾に突き立て、「南無阿彌陀佛。」の一息を、引きも返さぬ梓弓、浮世の弦は切れ果てたり。百連些とも合點せず、前司が死骸をどうと蹴飛ばし、「ヤイすつぱの皮め、談合づくの徒腹、天狗の出し喰はぬ百連。身が供の家來共、此の館踏み碎いても少將班女を探し出せ。」「承る。」と眞先に、二王のやうな猪熊八郎、其の外供人踏込み〳〵、板敷をこぢ放し建具を碎きて探しける。長屋に臥したる軍助打込む一腰鍋の鉉、ぴんと反つたる髭八文字に搖ぎ出で、「お供には草履取、お留守の時には當分出來合の大將軍介、泥脚一々引き拔かん。」と驅け込む間も無く、大將百連梅若引立て驅け出づる、腕捻ぢ上げて、「是れ何所へ。」「何所へとは少將が出るまで人質。」「ム、此の質受けたどつこい。」と捥ぎ放し、「百面百連大慾面。」と腕がらみに引擔いで、撞と投げ付け、踶かと踏へ既に柄へ手を掛くる。猪熊八郎驅け付け、軍介が片足摑んで跳ね退け、主を引立て、「サアお退き〳〵。」「オ、ぬからぬ〳〵軍介殺せ猪熊。」と、言ひ捨ててこそ逃げにけれ。猪熊は軍介にみぎは勝りの大男、「うぬ草履取に似合うた此の脚骨戴け。」と蹴出す膝節折れて退けと、撞ど蹴のめし蹣く所を、弱腰取つて引摑み、「ヤイ猪熊、熊の甕

の病とも療治に困り入り給ふ。「恨めしや少將樣、十年に餘る妹脊の中、見擬ふとは情ない。眼の前の仇を殺す事は叶はぬか。苦しいわいの。」と縋り付けば、「尤も〳〵、見所あり。あれこそ魔障。」と飛び掛り小腕取つて捻ぢ付ける。「なう恨めしや少將樣、十年に餘る妹脊の中、見擬ふとは情ない。」「否言ふな〳〵最前より汝先に詞を出さず、跡に付いて口眞似するは曲者、行房が見定めし。」と御佩刀引き抜いて、息のたばねをぐつと刺し、剳るに連れて手足も弱り、「うん。」と一聲此の世の限り、終に儚く息絶えたり。少將勇んで、「物怪を爲留めたり。人は無きか。」と召さるゝ聲、班女親子淡路前司、我も我もと驅け付くる。御臺の惱み天狗の障礙、有りし次第を語りも果てぬに、御臺所突つ立ち上り呵々と笑ひ、「愚かなり行房、切つたるこそ汝が女房、我こそ比良の大天狗。住む山の木を伐りたる恨み猶盡きず。」と異形と變じ車輪の翼、松若君を掻い摑み雲居を攀ぢてぞ飛び去りける。「悲しやあれ留めてたべ。」と、班女は正體泣き叫び、淡路の前司も途方にくれ、行房怒りの目に淚、虚空を睨んで、「わつ。」と泣き、死骸を見ては、「わつ。」と泣き跳り上り飛び上り、「無念々々。」と許りにて、かつぱと臥して泣き給ふ。老巧の前司が分別、「是れ天狗よりむづかしき百連奧にあり。唯今の御對顏破れの端、一寸延びれば思案もあり。班女御前御同道サア〳〵お下屋敷へ。跡は此の爺請取る〳〵。」「尤も〳〵いざ班女來れ。」と裏の小門より北白河へと忍ばるゝ。「切つた〳〵。」と言ふ騷ぎ、百連聞き付け走り出で、「ヤ

りん／＼とこそ三重暮近く、行房御所より退出あり。廊下傳ひの植込に、黑雲一叢どうどつと落ち來る松風の、梢に怪しき物こそ見ゆれ。下郎なれどもお供の軍介力量者、「殿御覽なされたか。」「見たか軍介。」「嘴長く眼は猿翼は鷲、扨凄まじい鳥。」「否々鳥でない天狗々々。」と言ふうちに、ひらりと飛んで火炎を吹き、御臺所の御寢所に一文字に搏ち入つてけり。「扨は御臺樣を此の天狗めが煩はす。些と風變り此方から摑み殺して吳れんず。」と躍り出づるを、「やれ待て軍介、魔障の通力荒氣には叶はず。見屆くるからは思案あり。必ず家中沙汰するな。勝手へ立て。」と宣へば、「エ、天狗摑まへ賴もしの銀吐き出させせず物。殘り多い。」と、呟き部屋へぞ入りにける。奥に女中の聲々、「なう恐ろしや御臺樣、又二人にお成りなされた。怖や／＼。」と逃げ廻る。「扨こそ。」と少將徐々と窺ひ寄り、障子を颯と憧れ臥したる御臺は二人、「なう恥かしい病を請け今生の恥晒し。」と口說けば口說き泣けば泣き、はつと打伏す聲までも、何れを影とも實とも擬ひ、惘れて在せしが漸う一人が顏振り上げ、「アレあの如く我が影の似せ者が、毎日七つ下りより付き纏うて苦しむる。追ひ退けてたべ我が夫。」と、言へば同じく顏振り上げ、「アレあの如く我が影の似せ者が、毎日七つ下りより付き纏うて苦しむる。追ひ退けてたべ我が夫。」「否追ひ退けるとは其方の事。」「否、追ひ退けるとは其方の事。」「ア、怖や退いて吳れ。」「ア、怖や退いてくれ苦し／＼。」と泣き叫ぶ。顏も身品も聲色も、二つ鏡に見交す形、何れを影

詞の言譯に、態と苦口惡口を、情なや稚氣に、誠と告げしか恥かしや。誠ある海山の志、生を替へても忘れはせじ。二人の心落付け長う疑ひ晴るゝ爲、心の祕密を打明ける。篤と聞いて下され。」と聲潛め、「そもじの腹より悅びしは松若許りと思うてか、彼の梅若も此方の產んだ子ぢやぞや。」「何つがもない。悅びは一度の外身に覺えは無い物。」「然ればいの、十二年以前二月七日、難產の苦しみ身に覺えは有るまい。產まれたは雙兒も孖、二人ながら揃うて男の兒。」「エ。」「オ、肝が潰るゝ筈。其の折柄に知らせては、難產の跡納らぬ、血も狂はんかと、一人は匿して我が手に取り、梅若と名を付け後まで孖を匿さん爲、脇より養子と沙汰し置き、此の事を知つたるは殿と自ら、扨は家老の權正、外には知らせず、此の年月產んだる子より大切に、育て上げたる梅若丸、一腹一種の松若、其許を妬み疎み惡むほどならば、腹に宿した梅若を、そも可愛しがるべきか、車の兩輪兩翼、月日と賴む二人の子、自ら息の通はん內、松若の出家思ひも因らず。今は恨みを晴れ給へ。」と心の二子底意なく、明かし給へば班女の前、「御臺樣のお情にて、双子を一人悅びし、忝や。」と手を合はせ、伏し拜む手に縋り付き、「忝いは互の事、お怨みは殘らぬか。」「ア、冥加ない、何のいの。」と聲を忍べば泣くまいと、抑ふれば猶流るゝ涙が涙拭ひけり。「アレ此の奧は長尾が局、暫く彼所に待ち給へ。足百連を首尾能く戾し、何事も心靜かに、いざ案內。」と打連れて、明くる障子の一重だに、隔て七つの時計の聲、

班女、松若驅け寄り、「なう母樣、今日爰へ呼び寄せ二人を殺す御臺の巧み、打て叩け。」と樣々惡口の概畧を、語る子よりも聞く母の心も闇み逆上し、物をも言はず立ちつ居つ、奧を見遣りてはら〳〵涙「エ、上臈に似合はぬさもしい。本妻か妾か名こそ變れ、吉田少將殿の妻は妻。されども立つべき人を立てるが女の道と嗜み、假寢にも館を後には寢ぬわいの。今度の病氣も松若を總領に立てん爲、班女が調伏詛ひ事と、お上屋敷取沙汰を、聞く度の口惜しさ。是れ淸い涼しい心の證據、何處からなりとも見て疑ひを晴れ給へ。」と、松若丸の頭髮かなぐれば悼はしや、髻際よりふつつりと、髢許りは手に殘り、いつ刈り捨ての春の草、「情なや削れば落つる一筋も、千筋も惜しみなでし物、何故に斬られうぞ、何しに出家にしたからう。家に望みの無い印、呼ばれてあつと來た心は、松若が今生に、父の館御臺所や梅若も、せめて一度は見せ度いと、思ふ心に惹かされ、殺されに來た口惜しい。人手賴まず死んで見しよ。是れ松若、無念な目を見て、名の恥を受けんより立派に死ね。」「心得ました。」と渡す刀を、取るより早く引き寄せ、胸に差し當て、「サア念佛。」と言ふ聲の、後の障子颯と明け、御臺所飛んで出で、「まあ〳〵先づ待つてたべ方々よ。佛神三寶を證據に今日呼び寄せしは、使前司に言ひ含めし詞に、露塵僞り無けれども、折惡しく兄の百連來合はせて、アレ彼の障子の彼方、黑書院に高い聲も聞ゆる。松若是れへと聞きしより、嬉しやと思ふ顏色を、意地惡の兄に見咎められ、ねすり

れ。奥に御臺の忿りの聲、「其の松若めどれ何所に。」と襖あらはに朱の顏容、花桶提げ搖ぎ出で、「コリヤ松若とは汝が事か顏上げい。ム、彼の顏形が梅若にそれほど似ずば何ぞいの。似る程胸が燃え焦る。何の好みに爰へ來た。あゝ推したり汝が母の班女は美濃國、野上の宿の傾城の成上り、少將殿の子を產んだ、是れ見よがしにのさばり顏せうでな。此の花桶の姫百合色は美しけれども、恐ろしや班女めがまつ此の通り、根性が鬼百合、手に取るも汗穢し、なう怖や。」とかつぱと投げ、花の露吸ふ山蜂の、針ある詞に、松若前後も泣き叫び、お傍の女中も聞き辛く、呆れて更に詞なし。梅若丸溫和しく、「なう母樣松若殿とても父上の御胤、私も同じ事、なさぬ中には猶恥あり。自ら同然においとしがり。」と言はせも敢へず、「夫れ程の事知るまいか差出まい、梅若默つて居よ、障子の內には兄百連殿も御座なさるゝぞ。松若を引摺り出せ、いぢばらば打て叩け女子共。サア此方おぢや。」と、手を引き連れ、姿萎るゝ梅若丸、打連れて入り給へば、局の長尾立ち寄りて、「コレ松若殿、あいくとは申せども打ちはせぬ。泣かずとも早う去なつしやれ。なう日頃に似合はぬ御臺樣のお腹立、怖やく。」と呟きて、皆々奥へぞ入りにける。涙絞つて松若丸「逢ひ度い見度いと呼び寄せたは僞り、母樣共に欺し寄せて殺さうでな。我も吉田の少將が子、おめくとは殺されまい。汝御臺め一太刀切らん。」と驅け出しては立ち戾り、「母樣はなぜ遲い。」と待つ間もあぶな幼心、亂れ惑ふ次の間より、人音して母の

いの、朝夕お側離れぬ梅若樣、見違へて宜い物か。さうく\は騙されぬ。何時の間に其のお惡意地、覺えてござれ。」と立ち歸る。袂に縋り引き止め、「是れは迷惑篤と見られよ。竟に館へ參らねば、形は見ずとも松若が名は聞いての筈。母の班女も追付是れへ。此の花桶はお慰み、御臺樣へ御披露大儀ながら。」と有りければ、「エお前が松若君かいの。扠も似たり、誰が見ても梅若樣、瓜を二つに割つた樣な。」と恂りして、驚く後に梅若君、何時の間にお出でとも、思はず知らず顏を見て、「是れはく\松若樣、今の間に此方へお廻り成されたか、お足元の輕いおまめな事。御取次申す内、暫く是れに。」と言ひければ、「ャイ長尾麁相な我は梅若、松若では無いぞや。」「何をお嬲りなさるゝ。たつた今見た松若樣、見忘れて宜い物か。」「あれまだ麁相な。松若は夫れ其方に。」と宣へば二度恂り、兩方見合はせ見合はせ、「眞にさうぢや、瓜を二つに割らずに矢張丸ぐちぢや。」と呆れて奧へ入りければ、跡にも顏を見合はせて、ふつと噴き出す許りなり。「扠は松若殿かいの、自らこそ梅若丸。何時逢ふ事と待ち兼ねしに、よくぞく\此方へ。」と手を取れば手を取り交し、「お館に梅若殿と申す兄君あり、折を以て逢はせんと母の班女が物語。など今までは弟かと、お顏も見せて給はらぬ、お心強や。」と泣き給へば、「懷かしさは誰も替らぬもの。世界に幾億幾何萬の人あれども、此方の兄我が弟と呼ばるゝは獨り宛。疾く逢はざりし口惜しさ。」と、互にひしと抱き合ひ、連なる枝の中よけに、悅び泣くこそ殊勝な

ア、賢女樣々々。只今までの御延引、もしは嫉妬の御心もやと存ぜしに御一家和合御家長久の基、直に參り、お二人お供仕らん。」と悅び勇み走りゆく。御臺御機嫌斜ならず、「ヤイ女子共、班女殿松若の見えたりとも、隨分慇懃に款待せ。自らが大事の客無禮があらば許さぬぞ。さりながら此の事を自らが兄大掾殿へ沙汰するな、必ず穩便々々。」と、未だ詞も畢らぬ所へ、表使の婢女、「大掾樣の御見舞。」と申し上れば御臺所、「うたてや時も時のお見舞、ア、月に村雲。」とおよるの物に打憑れ、心重げに臥し給ふ。百連寢所に立ち入り、「なう妹、病氣とは聞きしかど、山王の公用に取紛れ、見舞も延引病症は何、食事などは變る事無いか。」といへども唯弱々と、「御用多き内御見舞に及ばぬ事、物申すも氣むづかし、異る事あらば此方より。歸らせ給へ。」と宣へば、「否々斯程の弱り見捨てては歸られず、氣むづかしくば構ひめさるな。行房は參内とな、歸りを待つて醫者抔の談合々々。」と、奥へ通れば御臺は勇む氣も折れて、障子引き立て臥し給ふ。妻戶にたち添ふ幼聲、「御臺樣へのお取次賴みたし、誰ぞお取次賴まん。」と十二三なる小人の、花桶に草花折り入れて、持たる、花より持つ稚兒の、姿を花と謂ひつべし。局の長尾襖押し開け、「何方よりぞ。」と一目見て、「なう輕忽や梅若樣、何所ぞ餘所のお使らしう、私をはめてお笑ひ草にか。はまらぬ〳〵。御臺樣へ申し上げ、結句此方からお笑ひ草。」と立ち歸れば、「是れ〳〵女中、我を梅若とはいかい麁相、松若と申す者よ。」と宣へば、「アレまだ

御同道。然らば御供。」と、立ち給ふ。善と惡とは見分けても、理非をば付けず兩方を、立つる鳥居の二柱、朽ちせぬ御代の二重國廣き、人よ人人の上には品々の、行房朝臣の御臺所御心地例ならず、日毎に申の下刻より、時をも替へずお姿の、二つに影の煩ひか、但しは物の魅入かと、藥よ針よ御祈念の、數には洩るゝ神もなし。「奥家老淡路の前司兼成參上。」と御寢間の障子明ければ、前司御前近く畏まり、「只今御容體伺ひ奉らんと存ずる所の御召。今日の御機嫌如何もや。」とぞ申しける。「オ、今日は少し快い、顏見せて悦ばせんと、賴む事もあつての事。夜晝の心遣ひ嘸草臥。老人の慇懃な、サア膝直せ。」と宣へば、前司首を疊に付け、「毎度申す事ながら、倅淡路七郎俊兼、殿樣の御目を掠め、莫大の黄金惡狂ひに遣ひ果し、縛首をも刎ねらるべきに、御譜代の我等が子とて、命を助け國遠仰せ付けられしも、御臺樣の御執成御慈悲、倅が奉公一所に二人前の忠義、身を百千に碎いても御恩は報じ盡されず、お賴みとは勿體ない。其方が命入ることあり、其所で死ね前司と、御意成され下されかし。」と、きんか頭を下げにけり。「オ、滿足々々。否氣遣ひな事でもなし。下屋敷の班女殿松若といふ子もあると聞く。竟に御目に懸らねば、朝夕ゆかしく懷かしし、梅若兄弟顏を合はさせたし。度々殿へ申せども、折を待てとて御延引、二人の家老は山王御普請の留守、殿も今日は御參内、好い時節。其方自らが使と成り、班女殿松若ともに呼んで來て、あはせて給や。」と宣へば、前司御顏打眺め、「ハ

申さるべきか。即ち比良が嶽の御神に祈誓し、祟りを免し公用を勤めさせたび給へ、咎あらば某一人を、天狗の爪に攫み割き取殺し給へと、命を抛ち御鬮を取るに、神納受の御鬮あがらせ給ひ、扠こそ伐つたる材木共祟りあれば我等一人、天狗に攫み殺さるゝまでの事、御心易かれ。」と尤もらしき口上。元より心を合はせ置きたる常陸大掾、「ハア、忠臣かな〳〵、一命を捨てゝ公用を大事にかくる眞心、神慮に叶ひ天狗の祟りよも有るまじ。權正武國と言ひ其方と言ひ、少將殿、よい家老衆持たれて仕合、梅若が生先まで頼もし〳〵。」と譽め上ぐる。武國堪らず飛んで出で、「譽めらるゝ人數に此の武國は除けて貰ひ申す。最前家老共あゐながら、私慾に許り眼光り、諫言いふ術しらずとはどの家老、返答はありとも聞くに及ばぬ。天狗の棲む山杣入は不得手なれども、悪魔のさいた大掾殿の首筋へ杣入は、我等が獲物。」と刀の柄に手を掛くる。「慮外な詞咎め、刀拔かれば拔いて見よ、踏み折つてくれんず。」と躍り出づれば行房朝臣、「ソレ梅若、武國を制せよ。是れ大掾殿、下官が家來お相手には不足ならずや。殊に一大事の公用に私事を差加へ、叡慮を輕んずる誤り行房一人の罪、是非御宥免。」と押鎭め、「權正も此の通り急度心得、今度の公用行房に成り替り總て汝が身に引受け、成就までは我に奉公差止め、當山に逗留し、宜しく經營仕れ、景逸も是れに留まり、武國に力を添へよ、先づ今日手斧始の壽調ひ、貴公も下官も大慶是れに過ぐべからず。奏聞の爲一先歸洛。」と宣へば百連も、「いざ

に遣り込むる。武國怺へずつつと出で、「百連公には鳥居の御奉行許りと存ぜしに、主人少將妾共の事まで、御奉行は御苦勞千萬、事多き中に此の材木朽木と見給ふも尤も至極、此方の領分、比良の嶽の木を伐れば、勝手づくには珍重、さりながら隱れなき魔所、天狗の栖處往古より杣入らず。木の葉一葉一木の枝も折る時は、山荒れ人惱み必ず國の歎きと成る。寳祚萬歲民安穩と、敕願の鳥居其の辨へなく、魔所の木を伐り祟りあるまじとは、凡夫の某請合はれず。拙者が相役御存知の、勘解由兵衞景逸は、是非比良の嶽の杉を伐らん、我等は伐るまい、イヤ伐らう伐るまいと爭ひ、彼が詞を用ゐぬ故か、四五日病氣の由にて今日も不參、比良の嶽の杉を伐らぬは主人少將存ぜぬ儀、此の權正武國が下知、奏聞なりとも言上なりとも遊ばせ苦しからず。」と詞ににべも輕薄も、荒木を伐つて投げ出したり。百連何がな言ひたげに、口動ついて見えたる所に、俄に轟く地車、「えいやらやあ。」の木遣の聲は磯打つ浪、人夫の足竝地響して、杉の大木程なく車引き据ゑさせ、勘解由兵衞景逸主君少將の前に跪き、「御奉行百連公の御指圖を重んじ、御領內比良の嶽に杣を入れ、大杉數百本伐り追ひ〳〵山出し、先づ今日の手斧始に用ゐん爲、此の大木急ぎ引かせ候。」と申す詞に少將親子、「ハァはつ。」と恐れし興醒顏、兎角の挨拶無かりけり。景逸重ねて、「殿の御機嫌進まぬは、粗忽に魔所の木を伐り、跡の祟りを思召す御顏色、少しも御氣遣ひない事、勘解由兵衞がさ程の事、辨へなくて御家の執權と

の二葉は常磐にて、嵐に脆きは一本薄、然れば大聖釋尊は、因緣生死の二つを教へ、儒には仁義の二柱、教へ治まる君が代は神明和光の秋津國、一の手斧に天長地久君萬歲、二の手斧にて五穀豐饒民安全、三に山王御威光增益、鳥居成就御願圓滿千秋樂。」と祈念終れば幕の中、數千の番匠賑ひて、すでに酒宴を始めける。常陸大掾百連大音上げ、「酒宴待て〳〵。手斧始の今日より、斯かる不念にては、二十一の鳥居成就心元なし。奉行も倶に迷惑せんより、直に參內し、此の趣奏聞し、今度の奉行辭退致す。」と、假屋を出づれば少將驚き、「無骨なる大掾殿、心に入らぬ事あらば、是れ〳〵の次第と、內意を通ずるは傍輩の信、況んや我が妻は貴公の妹、此の梅若とは正しき伯父、存じ違ひの事あらば、心付け給はるべき所、先づ行房が不念の條々、承らん。」と急き給へば、「オ、聟舅なればこそ、前かどくれ〴〵申さぬか。今度は大事の御用家の規模、材木に念入れられよ、御邊の領分比良の嶽には大木の杉數多あり、四五月頃までの雪嵐にもまれ、性堅く木目よし、杣入れられよと、申せしを聞き流し、此の材木目に見えぬか。日裏陰山の雨晒し朽木同然、鳥居にして二年は持たず。先年奧州國司の時、金山貢物の運上にて、公家一番の金持、下屋敷に珠玉を彫め、班女といふ妾をする、松若といふ妾の子を、攝家淸華の御公達も及ばぬもてなし、其の費え十分一いるれば、皆造宮も心易し。エ、歷々家老ありながら、私慾に許り目が光り、諫言いふ術しらぬ、町人に同じき主從。」と一口

雙生隅田川

第一

*荆の宣王に江乙が答へ、狐虎の威を藉つて百獸を從へ、即ち其の虎を欺くの詞、一狐を以て萬世君臣の戒めとし、君明らかに臣直なる、御代傳へ來て七十三代、堀川院御靈夢に因つて、山王權現二十一社の神垣に、二十一基の大鳥居御建立、太しき立つる手斧始、斧の柄ながく神と君、民を惠みの功績なり。吉田少將藤原朝臣行房、造營一式承り、嫡子梅若丸、執權縣權正武國相具し、御普請場は、漣や志賀の濱邊に假屋をうたせ、伊吹纏向木曾信樂の良材、寄せられずといふ事なく、行房の小舅常陸大掾百連、總奉行の宣旨を蒙り、假屋に著座を列ねらる。權正武國御意を請け、大工小屋に向ひ、「手斧始の御祝儀勤めませい。」と述べければ、木工修理の兩棟梁、大紋の露結び上げ、御假屋に一禮し、御酒散米の供物、手斧に幣を取添へて、祭文をこそことぶきけれ。「夫れ天開け地凝り、伊弉諾伊弉冊の尊、男女夫婦の語らひをなし、陰陽の道長く傳はつしより、生れます神の宮所、建つる鳥居の二柱、一人は立たぬ理を、人に教への道とかや。天に日月夜晝の二柱、生あれば兩眼あり、松

せし墨田川、シテ伊勢をの　ツレ海士の　シテ汐選りも、二人つめれば心三吉野や、シテ*色に身代宇津の山、ツレ高安　シテ齋宮　文彌二人西の對、シテ二條の后の面影に、似たつきも無き戀の闇、誘ひ出せし白玉を、どこぞと問へば芥川、暫しは露のおきどころ、二人伊勢物語の模樣もあり。三河に染めし杜若、花紫の總鹿の子、紅鹿の子、鶸鹿の子、冷泉梅に短冊花に樽、籠に鶯菜種に蝶、繪に書く野邊に音するは、誰が乘る駒の轡蟲、草に亂れてちんから〳〵、松蟲の音はちりりん〳〵、綸子小袖のいたり染め、シテ緞子天鵞絨　ツレ金更紗、シテ繻子は五色の巻絹を、二人舟に山つむ海の原、漕ぎ連れ〳〵入舟の、蓬萊山とは難波津や、ツレ積んだる俵　シテ納むる黄金、二人かゞやく提灯あきらかに、くもらぬ玉のえいころ〳〵、ころ〳〵頃は霜月や、顏見世淨瑠璃大吉日、千秋樂は民榮え、萬歲樂には命を延ぶ、相生の松風、颯々の聲ぞ目出たけれ。

傾城島原蛙合戰　終

く、枝葉も榮え給ひけり。先づ上著の御小袖は、千代を染め込む松葉色、松に羣れ居る千羽鶴、十二の雛を飼ひ育て、君が幾代の友鶴と、壽きてこそ染めにけり。扠又千草の摺衣、唄 肩にかるもの花折りかけて、裾にゐる*のじがねた所え。えい〳〵えい風景の筆立に、心浮島飛ぶ螢、澤に澤瀉水桔梗、光琳松の三保が崎、墨繪の雪に煙たつ、富士の姿も清見寺、つかぬ鐘さへ響きくる、しやんとして扠美しや。シテ 肩から裾を、二人 吉岡に簾に葵をかけられしは、ツレ おもひ出でたり其の昔、賀茂の祭の車諍ひ、謠 シテ 車の前後に、ツレ ぱつとよりて 二人 人々轅に取り付きつゝ、人たまひの奥に、オ、〳〵押しやられて、物見車の力もなき、身の程ぞいとほしらし氣なり。牧に爪とぐ荒馬の、尾髪を嵐に吹きみだき、野邊の若草踏み散らし、嶮岨を穿つてまつくだり、或は谷より嶺にぼつかけ追立て高嘶き、友を 三重 集めて ツレ 狂ひ馬、是れを〳〵しの摘み染。二人 松山 一村茂る柳陰、肩はす縫の薄霞、飛びかふ烏七つ八つ、夜明を告ぐる有樣は、憎や逢夜の仇敵、見はてぬ夢やさますかと、ツレ 餘所の戀路を身の上に思ひ知らるゝ風情もあり。地黒模樣に 唄 シテ 辿り行く、二人 尾上の鹿の亂れ角、末の松山妻戀ひかねて、紅葉踏み別け、叩キ けい〳〵ほろゝと鳴くわえ、さりとは通ふわの、はて焦れての。これ〳〵これ誰もいな、あのや業平は是れさ、是れさは豆腐屋の果てかのほんえ、新艘まめには是れさ〳〵、打ちこんだ。文彌 朝も夜さりも水なぶり、官位器量も棒に振り、叩キ シテ 武藏國の果てまでも、ツレ 顏を汙

忠御馬を乘り込み、「オ、目出度し手柄々々。梶原が取り上げし金の采配、今重忠が得さするぞ。家に傳へて大將の子孫の榮え、更科夫婦が中の精次第、琵琶の姫も景久に、仲人は秩父の重忠。吉日えらみ婚姻せよ。いざ凱陣閧。」と、早々直す旗の足、駒も勇みの高嘶き、朝敵邪法は絶えはてゝ、絶えたる家は引起す君臣和合の道ひろき、惠みも廣き武藏野に、再び譽れを顯はせり。

第五

松竹梅嫁入雛形

千早振る女神雄神の御祝言、爰にかたどる大館、足立右馬允景久、葛西の源六清治、二祝言を一座敷、壻は心の浮橋に、嫁入御寮のあなにゑや、うまし雜煮も味甘の、逆鉾々々と賑へり。ツレ御客方への饗應として數多の藝者藝女郎、お里は京の色所、肖者と身の上の、二人松と梅との君達より、松竹梅の色直し、京染小袖の部屋みまひ、ツレ或は縫箔織物の、模樣づくし手を盡し、文章豐かに書き記し、やまと仄めく藝女郎、目錄をこそ讀み上げけり。シテ進上 ツレ島臺 二人島臺 二人あやかつて送り參らせ候の、松は禿の緣より、子の日根引の御全盛、末は尾上の友白髮、婆に成るまで紅絹裏や、十筋右衛門も鬢附の、梅花油のかをりくる、牀は天職梅の花、二俣竹の相生に、子竹根強く節強

氣に吹き消し吹き拂はれ、互に喰はん喰はれじと、追つつ追はれつ狂ひしは、目も當てられぬ三重風情なり。神明守護の一口に、蛙をぐつと呑むよと見えし、蛇の姿ひき替へて辨財天の御注連繩、虚空に飜めき失せ給ふ。四郎むつくと起き上り、茫然たる隙をうかゞひ、琵琶の姫更科太刀拔き持ち、「大惡人四郎め、邪法の蛙は只今、蛇に呑まれたを知らぬか。術が成らば爲て見をれ。所望々々。」と嘲れば、四郎はつと心付き、現のごとく覺えしが、さてはと心驚きて、祕文を唱へ虚空にむかひ、日を摑めども手に入らず、雲を招くに下らばこそ。「エ、口惜しや我が術は盡き果てしか。腹立や無念や。」と、怒り眼に涙をそゝぎ、拳を握り立つたる所へ、足立右馬允景久一文字に驅け來り、隙をあらせず打つて懸る。四郎ひらりと身をはづし、弱腰摑んでどうと引敷き、「邪法の力は竭きたれども、うぬ等ごとき五人三人、蠅蟲とも思はうか。」首引き拔かんとする隙に、琵琶の姫更科かけ寄つて、斬り付くるを左足にかけ、「うん。」と蹴とばし、既に斬らうよと見えたる所へ、葛西の清治走り寛つて四郎が首、水もたまらず討ち落し、景久を取つて引き立て、莞爾と笑うて立つたるは、心地よくこそ見えにける。「なう兄様か。」「我が夫か。」「秩父殿の御厚恩、情の笠は此の時。」と、兄弟の笠、重忠の笠、取り添へて三蓋旗、絶えて久しき指物を、どつと押したて大聲あげ、「佛法の仇王法の敵、父が恨み所領の敵、七草四郎を葛西の源六清治が討ち取り、朝敵亡び失せたり。」と高らかに呼ばはれば、秩父の重

「命をお助け〳〵。」と、動くは目玉蟲の息、この世に居るも名許りなり。淸治きつと見、「コリヤ餓鬼阿彌も同然ながら、邪法一味の方人等、斬り盡さん。」と立ちかゝれば、「ア、情ない胴慾な。立つて手向ひするにこそ。轉びました御免あれ、御慈悲〳〵。」と絕え〳〵に、土に摺り付き泣き居たる。景久押し入つて、「斬らずと死ぬべき*うんざいども、助くる扶くる。足手まとひ屈んで居をれ。」と呼ばはれば、「ア、有り難い御助け。轉ぶと言へば助かるさうな。轉び〳〵。」と蹌踉いて、皆々陣屋に這ひ入れば、外には味方の寄太鼓、一度にどつと鯨波の聲、景久淸治力を得、「あれ〳〵後陣も續いたり。いざ本丸へ。」「尤も。」と、天にも上る心地して、城中へこそ切り入りける。四郞夜叉の荒れたる如く、琵琶の姬更科が髻髮、兩手にからまき宙に引提げ躍り出で、「誰が繩ゆるして推參至極。寄手の勢を引入れしもおのらが仕業よな。エ、憎い奴。わが邪法にて寄手の奴原微塵になし、汝等に見せて吠えさせうか、但しは捻り殺さうか。」と、ひしぎ付くる膝の下、不思議や更科が懷中より、金色の光矢を射る如く、黃色の蛇顯はれ出で、頭を擡げ紅の、舌をちら〳〵差し向へば、俄に四郞、「うん。」と許り、眼くらみ腕も痿れ、二人を突き退け踏反り返り、苦しむ息の中よりも、蛙の姿飛び出づれば、二人の女も動轉し、物陰に立忍べば、蛙は聲を雲に鳴き、大地に形を掘り入らんと、恐れて逃ぐるを追ひ廻す。蛇は宇賀の御魂、四郞が邪法は蛙の術、虹を吹き掛け身を包めど、手術も忽ち蛇の、惡

文で。」と、二人は小袖の下褄押し切り、「筆が欲しい硯がな。」「ならぬ望みに隙を入れ、見付けられては大事ぞ。」と互の小指食ひ破り、「長うは書くまいつい一口、早う〳〵知らせ。」の血文、獨りがまけば獨りは立つて高櫓の、弓矢取り出し矢の根に慥と括り付け、更科は清治に、琵琶の姫は景久へ、互の夫樣參る、ひやうふつと切り放す。思ふ目當は違ひ無く、二人の矢先は遠鳴し、陣所の庭にぞ落ちてける。「サア此の内に四郎が有所、探せ〳〵。」と帯引き締め、「刀も櫓にあり難し。」と取つては打込み氣も勇み、城中深くぞ進みける。夫を思ふ血の矢文、見るより二人は心に徹へ、景久清治時も違はず、一陣にすゝみいで、諸卒を下知して東西より、つるべ放つ大筒に、神明擁護の彈丸鋭く、さしも堅めし二つの櫓、石垣壁土屋根瓦、ぐわら〳〵びつしやり崩るゝ音、百千の霹靂、頭の上に落ち懸り、須彌の四州に風あふれ、四大海の荒波を、一度にどつと吹き卷く如く、大地も裂くる許りなり。軍勢に先だち景久清治、二の丸に乘り込んで、十方に切り捲れば、獅々木大矢野森千束、高句千々石の郷民共抜き連れ〳〵打つて懸る。二人は是れを事ともせず、左右に別れ亂れ入り、手を盡してぞ三重戰ひける。鷲に兎鷹に雉、猫に鼠の出合ひしごとく、二人が手に掛け六人ながら、落花微塵に切り散らせばあへて刃向ふ者もなし。食に飢ゑし賊民共、音に驚き堪りかね、陣屋々々を這ひ出づる、足は蟷螂冬の蠅、手には杖つく力さへ、なく〳〵轉び躙るとすれど、首は地につき、腹は背につき這ひ蹲ひ、

人紛れこみ、城内を忍び伺ふ故、召捕つて候。」と引き据うれば、四郎屹と見、「ヤア珍らしし更科琵琶の姫。爰は野武士共何萬騎か取巻いて、日夜に攻むれども落されぬ城中に忍び入り、何とせうと言ふ事。城中は糧につき、牛馬まで喰らふ所へ生物到來。御當地珍らしい肴、括つて置き、更科が肥り肉、後程切つて賞翫、底味の甘い所、豫て四郎が覺えて居る。」と、せゝ笑うてこそ入りにける。「エエ腹の立つ、仕損じて牛馬と同じ食物になるか。何と科更樣口惜しうは無いかいの、無念には無いかいの。」「無念なとも口惜しいとも、エ、腹の立つ。見ればこなさんの繩は伸びてある。コレ爰を喰ひ切つて下さんせ、早う〳〵。」「オ、合點。」と更科は、つつと寄つて琵琶の姫の高手の繩、齒も折れよ齦も裂けよ、一世の大事と嚙み切り〳〵、しゝ切る念力佛力や加はりけん、さしもに締めたる高手の繩、ふつつ〳〵と喰ひ切れば、小手の繩も緩まりて、縛め左右なく解けにけり。今は琵琶の姫手は自由、立ち寄つて更科が、繩を解くやらほどくやら。「ア、嬉しい有りがたい。コレあの注連繩樣も懷中に御座る、是れが守となつたであろ。この神力で切り入らば、四郎が鬼神で御座らうが、首は二人が手の内に。」「サア斬るまいか。」と氣をせけば、更科押へて、「いや〳〵、二人許りでは言はれぬ二度のかけ。あの西の松山は、景久殿の御陣所、東の森は源六殿の陣所ぢやげな。あれへ矢文で知らせて、外から攻めさせ、城中の騷ぎを見て、内から二人裏切せば、四郎を討つは案の内。此處から矢文で矢

共。」と、屛に手を掛け、既に乘らんとする所に、城中には相圖の半鐘打ち立て〳〵、數千の軍兵顯はれ出で、手ん手に大石を打ちかくれば、「南無三寶。」と此方へ寄れば、大木を投げかけ〳〵、砂を蒔き掛け引くも引かせず、乘るも乘らせず、石子詰、一騎も殘らず打ちみしやがれ、逃ぐる富樫が頭の鉢七つ八つに打ち割られ、手覺えも無き手柄だて、敵の手柄となりたりし、討死の程ぞ哀れなる。城中の諸軍勢、「心は一致に逸れども、兵糧には盡き果て、せめて一日の糧があらば打つて出で、討死をせんものを、餓死する事か。」と、こゝに寄つては、「ヱ、無念。」彼所の方には、「ヱ、口惜し。」と立つる腹さへ背に付いて、物いふ力も無き所へ、大將四郎乘馬の口引つたて、二の城戸まで軍勢を招き、「斯う成るまで心を變ぜず、我が宗門を尊ぶこと過分々々。寄手より兵糧詰に逢うたれば、草木の根を掘り藁を煎じ、犬猫は言ふに及ばず、城中の牛馬一疋も殘さず喰ひ盡し、殘る物とては此の馬一疋、是れを手づから切つて方々に與ふるは、四郎が身を切つて饗應ふも同然と思ひ、ちと力つけ一方を切り破れ。追付寄手を討ち亡ぼし、甘い目に逢はせうぞ。」と、引き寄せて馬の鞅際を押し切り〳〵、「サア食へ〳〵。」と言ひければ、餓鬼に水を見せたる如く、「ア、有り難い忝い。」と、摑み食らひむしり食ひ、「この御恩は忘れぬ。御志を內の嚊にも嫁にも戴かせん。」と、陣所々々へ持ち歸る。斯くまで邪法に染みこみし、惡因緣ぞ恐ろしき。かかる所へ獅々木佐仲太罷り出で、「千々石村の勢の內に、女二

込み、四郎を討たうぢやあるまいか。」と、言へば點頭く稻の穗の、案山子に立ちし蓑幸ひ、二人は肩に打ちかけて、忍ぶ姿も花薄、萩は亂るゝ淺茅が原、掻き分け踏み分け行く道も、跡を慕うて 三重 急ぎける。 謠 抑七草の城郭と申すは、城のまはり一百四十三町餘、二方は海浪漫々と、嶮岨は屛風を立てたる如く、船を寄すべき手明きも無く、一方は斷岸八十餘丈、下は深田の要害に、築地を高く矢ざまを切り、雜兵三萬六千人、楯鉾弓槍雜鐵砲、不時を警め壘を堅め、四郎は主居の本丸に、龍蛇の勢ひさながら天にひるがへり、雲居に飛ばんと蟠れり。南の大手は葛西源六、東の山手は富樫左衞門、大軍を以て攻め圍み、時々に貝鉦ならし、遠巻に日を暮せば、西の山手は足立右馬允景久、日日夜々の鯨波の聲、兵糧の道絶ち斷つて、重忠の下向を待ち、空しく數日をおくる所に、何とか思ひけん富樫左衞門、手勢の中よりすぐり立つたる兵、二十騎ばかり召し連れ、田尻口の松原を、七草の城の搦手に、物音もせず急ぎける。富樫が執權車田傳藏、息をきつて走り付き、「數度の軍に味方の御勢、悉く討死し、敵は十分勝ち誇つたるきほひ口、僅かの勢にて押し寄せ、犬死せんとの御所存か。いざ御歸り。」と言はせも敢へず、「否さうで無い／＼。鎌倉より秩父重忠、近々に下ると聞く。彼に高名させて何と富樫が立つ物ぞ。城中は早兵糧に詰り、大半は餓死、牛馬を喰らひ革籠を嚙り、弓引く力も無しと聞く。 コリヤ 拔驅の手柄此の時。四郎が首は此の腕に握つた。城を乘れ／＼續けや者

間近く響き來る。ワキ「なう氣遣ひな更科樣、俄に不思議の鉦太鼓、何で有らう。」の詞の下、上の山路をしどろ足。シテ更科耳を傾けて、「ム、聞えた。あの拍子は軍陣の押太鼓。扨は秩父がぬつけりと私等を欺して、筑紫への寄手の勢に紛れない。エ、たらされた後悔。」と見る程もなく軍兵の、影は見えねど眞先に、ぬつと振り出す連枷を、二本からげて打ち碎く。千々石村の數右衞門と、席旗に書き記す。足手纏ひの婆嚊共、人數八百五十人、池尻口の持主と、土氣はなれぬ筆太は、「よめた〳〵四郞が味方。」何樂しみに籠城の、詮も無い鎌山朸、目籠の荒き木綿旗、風もたまらず森權八、くさか村の徒黨の勢、纏を押し立て引き續く、磨臼篩の物印。「敵を揉み割り立ち割りに、手並を見せん。」と呼ばはつて、聲も高句の與茂十郞、口之津勢を驅り催し、ざゝめき渡る足の下、土をすき鍬竹杷、箕を旗物に不吉の印、敵の落城うたがひも、中津の一族蜷川忠太と、墨黑に書いたる筆の命毛も、程は嵐に誘はれて、落ちくる鉦と諸聲に、唄「鉦を叩いて、佛にならばてんと、鍛冶町は皆佛やれ皆佛、てんとかぢ町は皆佛。夜明の烏、高い山から、ころ〳〵と落ちて、見たも、皆いたも、しなだんご。」臼に手杵の持印は佐藤喜庵につく勢と、ちぎれ〳〵に走りくる。その外蓑笠はね釣瓶、犁稻扱千石通、龍骨車綿操絲車、農具は家の物印、上つら下つら、布津香月、浦村里の土民共、しどろに成つて馳せ過ぐる。跡は峯吹く松の風、梢に騷ぐ羣鳥と、聲を調べの琵琶の姬、「いざ此の勢に打紛れ、易々城へ忍び

するぞ。神明佛陀の擁護によらば、何れの敵か亡ぼさざらん。琵琶の姫には重忠相傳の此の陣笠、四郎を討つまで是れを貸す。父の郡司は浮世の夢の破れ笠、兄弟は世を忍ぶ笠、葛西の家の三蓋笠は絶えたれども、今より兄弟が二蓋の笠に、この陣笠を取りまぜて、三蓋笠の家の指物、天が下に押したて四郎が首を引提げたる、悦びの對面重ねて〳〵。さらば〳〵」と立ち給へば、二人は、「あつ。」と押し戴き、殘る方なき御厚恩、この注連繩の繰り返し、申す詞も泣く許り、あと伏し拜み〳〵、情の笠を甲に著て、旅立つ筑紫の　三重

旅の素足

唄君に逢はねば解かれぬ物は、二人結びし下紐と、戀しゆかしの結ぼれ心、それで慕うて引かれ行く。琵琶の姫更科は、重忠の情にて六日延びたる日數より、いとゞ心は急がれて、月も明石の浦づたひ、寢ぬに亂るゝ黒髮の、むら〳〵千鳥濱千鳥、餘所の寐覺の夢にだも、見知らず知らぬ國越えて、筑紫に高き七草の、城へと尋ね行く〳〵道の、先を急がぬ旅ならば、この浦山の名所をば、訪うて眺めて道の記に、腰折歌の一首をも、詠まば硯の海面に、これ〳〵見さんせ美しや、走書する追手船、門司が關より便船し、豐前國の黒崎に、あがる朝日とうち連れて、我も西へと心せく、刈萱の關朝倉や、小米峠にさしかゝり、櫛田の神にぬかづけば、宜禰が鼓か神樂太鼓か、それで無いぞや貝鉦の、音も

の城を攻め破り、四郎を御手にかけらるゝは案の內。餘人に四郎を討たせては、兄源六が本領に立歸り、葛西の家を相續の願ひも絕え、一天四海の物笑ひは、身の悲しみ許りで無く、先祖の恥辱父への不孝自らもまた足立殿へ嫁入の緣も切れ、自害致すは兄弟許りか、更科樣御前一人生きてはよもや。すりや三人は死ぬるより外思案も無く、憚りも顧みず、御馬に縋つて御歎きは、源六諸共我々が、七草四郎を討ち取るまでに、道中御逗留、緩々なされて下さるれば、葛西の家を御取立て、三人命助かる事、御慈悲。」と許り兩人は、土に身を伏し泣き居たる。重忠馬上をひらりと下り、「ム、扨は清重の娘達な。父も切腹に及ばず、本領沒收までは無き事を、例の梶原が依怙の沙汰、年月の悲しみ思ひやる。殊更女の餘儀なき賴み、重忠が身に取つては、迷惑ながら聞き捨てんは不便々々。今日より兄源六に日を二日、汝等達が女足、道中を急ぐとも嘸あらん、一人に二日づゝ、二人に四日、合はせて六日は重忠が、情を以て道中隙入れ得さすべし。」とありければ、二人は、「はつ。」と首をさげ、「ア、有り難や忝や、慭か御禮は冥加ない。サア更科樣一足も。」と、悅び勇み驅け出づれば、「ヤレ暫く。」と呼び戾し、「四郎が術は鬼神も同然、酒呑童子以來の朝敵、足立富樫數萬人の手に及ばぬ者。汝等二人が力には勇むとも甲斐あらじ。」と、懷中より*くりしめの注連繩取り出し、「是れは江の島の辨財天にて、朝敵退治の祈禱として、千座の大法祕法を修せられ、鎌倉殿夢中に授かり給ひし注連繩、更科に得さ

第四

*鳥は高く飛んで矰弋の害をのがれ、鼷鼠神丘の下に穴掘つて、人の薫ぶる患へを遁るとかや。扨も七草四郎高衡、筑紫七草の城にたて籠り、足立富樫の兩大將、數日これを攻むると雖も、四郎が仙術に寄手度々敗北と、早馬をもつて鎌倉への注進、櫛の齒をひくが如く、此の度は秩父の重忠七千餘騎を引率し、其の身は錦の陣羽織、裏打鎖の唐革小笠、雲雀毛の駿足、馬の背撓に跨つて、隨兵小具足前後にむら〳〵、村濃の旗の足立西の宮、須磨の上野に著きたまふ。後陣の方より、「なう〳〵。」と呼ばはつて、二人女のわきせきと、重忠の召されたる、馬の轡頭しつかと取り、用あり氣に息つきあへねば、近習共聲々に、「ヤア見苦しし女原、それ引き退けよ。」と立ち掛れば、重忠御覽じ、「ヤアさなせそさなせそ。」と押し止め、「コリヤ〳〵女、重忠に何用ある、語れ聞かん。」と宣へば、二人は兩手を土につくばひ、「恥かし乍ら自らは、葛西郡司清重が娘琵琶の姬。又是れなるは兄源六清治が妻更科と申す人。父清重の切腹、本領を召し上げられしも、七草四郎より事起り、兄弟の者の身の上は、御存じの譯申すに及ばず。兄源六は七草四郎を討たん爲、筑紫へ下り樣々心を盡せども、四郎が不思議の仙術にて今に得討たず徒らに日を暮す由。此の度重忠樣筑紫へ御下りなされなば、手間隙いらず七草

敵との一言。嬉しい〳〵。去りながら全く四郎に取られし命でなし。彼奴と夫婦の娘、同罪のがれず急度訴人いたさんと、足立右馬允に向つて言ひ放したる幡樂が詞、土灰に成つても違へられず。あはれ暇を取る金がな、緣を切りたし〳〵と思ひしに、いま天地晴れて葛西の源六淸治が妻となり、娘は世間廣く成り、金に替へし一命は娘にこそやつたれ、何の敵の有るべきぞ。民の世話に鴈一羽さへ矢は三錢の喩へ。二本の矢にて金に替へぬ娘まうけた悅び、源六が舅との一言、臨終の耳に聞く事は、すゝむる六字に劣るまじ。十ケ年の夫婦が命、娘が憂身の膏にて繫ぎしもの、始めは娘を產み出す、今は娘が安養世界へ、我を產み出す命の親の、著せられし白小袖、極樂淨土へ生まれいづる幡樂が今の產衣ぞや。なう壻殿、重ねて四郎退治の時、軍門出の餞、吉左右の矢を壻引出。」と二筋兩手に引摑み、ぐつと拔いて差し出し、莞爾と笑ふも老木の花、見る間も夢と息たえたり。親子、「わつ。」と死骸に取り付き、「父よ。」「夫よ。」と呼び返し、泣き叫びては聲かぎり、縋り付いたる手向草、かへらぬ水にあこがるゝ。親のわかれ、敵に別るゝ本意なさも、ともに世上の愛別離苦、結びそめたる夫婦の緣、結び繼がれぬ娑婆の緣、二つの緣を一筋に、歪まぬ法の誓願力、彌陀の國まで武士の、永き譽れを殘しける。

すれば娘共に源六が討たんと言ふ、源六に從へば四郎が娘を刺し殺す。我此の矢先に掛らずば、人質に捕られし娘、何とて命助からん。なう源六、冥途の郡司殿御事を愛しと思はるゝも、幡樂が娘が可愛と存ずるも、人の親も我が親も親の心は親が知る。よも狂氣とは思すまじ。なう四郎殿、多くの金銀にて、娘が傾城の苦をぬぎし、大恩報ぜんにも一錢の貯へなし。金も返さず一味もせねば、幡樂は大盜人、其の盜人を射止めさせし、是れが誠の望みの矢壺。娘に暇を吳れて給べ。エ、言ひ度い〳〵言ひ度い事多けど、口が動かぬ〳〵。」と言ふ舌も強張つて、顏もそこね弱る聲。親子は前後取亂し、「まちつと生きて下され。」と、抱きかゝへ身を悶え、聲も惜しまず泣き沈む。源六つゝ立ち、「一命を捨てられし上は、四郎が恩は相濟んだり。是れからは目前の舅の敵のがされず。サア來い勝負。」と拔き放す。四郎すつくと立ち、「エ、しをらしい志。我が法は廣大にして人を殺さず、一人も仙術に勸め入るを本とする故、太刀打ちせず助け置く。この情を思ひ、われ城郭に立籠り、一天下を引受け合戰の時、味方に來い〳〵。但し是非に只今打ちたくば、サ、討つて見よ。」「オ、餘すまじ。」と討ちかくる、刀の光に陽炎の、形は見えずなりにけり。「エ、口惜しや父と言ひ我と言ひ、二度まで討ち洩らす。よし一念の惡鬼となり、父子の無念を散ぜん。」と、既に自害と見えける時、弱る聲にて幡樂、「ヤレあれ止めよ。なう〳〵源六、犬死めさるな最期に申す事あり。是れへ〳〵。」と近く寄せ、「舅の

得心なるか。」と投げ出せば、元より源六望む所、四郎も更科突き放し、弓と矢取つて立ち向ふ。更科はつと身を冷し、「否々弓矢は放れ物、源六様とて必ず勝つにも定まらぬ。母様留めて下され。」と、親子周章て立ち騒ぐ。「阿呆めそれ矢に當るな。」と、二人を父が引抱へ、押しすくめ押止むる其の隙に、四郎源六互に弓と矢うち番ひ、きり〳〵と引き絞る。「むさと放すな見物するぞ。待て〳〵、やれ待て待て。」と、聲を掛けても保ちかね、兩方一度にひようど放つ。鏃と鏃が眞中にてはつしと中り、二本の矢柄は篦となり、微塵に碎け散つたるは、揃ひも揃ひし手利なり。「ホ、ウ天晴矢業。勝負は乙矢。」と二人を押しのけ、中腰に成つて見物す。「參りざふ。」と源六、南無八幡大菩薩と心中に立願すれば、四郎も心に蝦蟇鐵枴海尊仙人と觀念し、矢束十分篦かづきまで引き詰め、暫し保つて離れ際、呼吸の拍子の眞中へ、幡樂飛び入る矢は離るゝ、左右の肋に二本の矢、はた〳〵すつぱと受けとめ、血煙はつと射手も、「ハッ〳〵はつ。」と弓投げ捨て、娘は驚き縋り付き、泣くよりほかの詞はなく、母は猛つて、「四郎は四郎とも言ふべきが、曲も無い源六殿、三寸か二寸こそ手先狂ひと許しもせん。是れ程目當が違うて、弓取と言はるゝか。」と恨み歎けば、幡樂目を見開き、「ア、ばゝ恨み言ふ事少しも無い。なう兩人、始めの一矢の當りは細かなれども的が外れた。まこと幡樂が望みの矢壺に、ひつしと當りしはこの受留めし二本の乙矢。的になりし某が、物狂はしき様なれど、皆娘が不便さ故。四郎に組

ずと摑んで指し通す刃の下、ついと飛び拔け、納戸の內に入るよと見えしが、忽ち實の七草四郎が本體、開の戶蹴破りつゝ立つたり。源六聲を掛け、「望む所能う來た。」と、斬りかくればかいくゞり、更科が胸ぐら慥かと取つたる人質に、左右なくも討ちかけず。幡樂夫婦も仰天し、爲方つきて見えにける。「ヤイ爺能く聞け。過分の金子に代へた更科、生けうと殺さうと、言ふに及ばず四郎が物。但し今仙法に歸服し徒黨すれば、助けて直に暇を呉れる。あの藪くゞりの木棚さがしの鼬めに、與すると言ふや否やたつた一刀。いやならいや應なら應、一言の返答。」と、退引きさせず詰めかくる。一世の大事と源六、「これ幡樂、更科ゆゑに父が勘當うくる程大事の女なれども、家の敵には替へられず。あの蚓喰らひの泥蛙めに、一味すると聞くや否や、蛙め共に更科も眞二つ。有無の返答一言々々。」と、ぎしみ蒐れば、幡樂ちつとも騷がず、「ム、ウしらさ海老にて鯊を釣り、麥飯で鯉を釣るは子供の業。武勇だてする若若が、娘を餌にして親を釣るとは、娘を〱むす〱ムウハア〱〱〱腹筋千萬やい。左樣の事にかまけて迂路つく幡樂にあらず。出直せ〱。」と恥ぢしめられ、さしもの四郎猶豫すれば源六も刀引側め、兩方ためらひ控へたり。「いで幡樂が望み有り。」と牀に立てたる白木と塗木の弓二張鷹の羽と鶴の羽の征矢、二手爪よりし素引して、二人が前に押し別け、「サア此の弓矢もつて兩方に立ち別れ、一度に放せ。武藝を試み射勝ちし方は、卽ち聟なり味方なり。若し相討は面々の不運、

佛。」と父の勇みは猶悲しく、「私が苦痛を助けんと、御慈悲は有り難けれども、邪道に落すは私が罪。其の儘おいて喰ひ殺させて下されし。」と、歎き沈むぞ道理なる。親子夫婦が一生の、大慈大悲の繪像をおろし、打敷に擴げ奉れば、蛙は猶も目を放さず。「エ、罰も利生も皆一心、踏んで吳れん。」と立ちかゝり、足をあげは上げたれど、忍辱慈悲の觀世音、歷劫不思議の尊容、廣大智慧の御眸、明暮恭敬禮拜して、賴みを掛けし御本尊、只今土足にかけん事、如何なる惡業惡因と、思へば目も暮れ心消え、踏みもやらず退きもせぬ、足に蛙は眼をつけ、上ぐれば見上げ、下せば見下す惡念力。涙を嚥つて幡樂大聲あげ、「口惜し淺まし。泥水に這ひ廻り、下駄の齒にも踏み殺す、小蟲一疋に惱まされ、今生は嬲り物、來世は墮獄の佛罰。」と、「わつ。」と叫び入りければ、母も娘も諸共に、「御罰は我にこそ。」と、聲をはかりの喞ち泣き、道理とこそ聞えけれ。蛙は毒氣の虹を吹き掛け忿りの相。「是非に及ばず是れまで。」と、足を上ぐる頭の上、棚に積んだる瀨田柴の、「暫し〳〵。」と踏み散らし、「やあえい。」と飛んで下りたる若者、幡樂が足を取つて押し退け、「我等は葛西郡司淸重が嫡子、同苗源六郎淸治。息女吏科とは最愛の契約ありながら、漂泊の浪人心に任せず、吏科が安否きかまほしく、今朝未明に藪垣を破り、忍び入りし慮外まつぴら御免。この七草四郎蛙は、我等が名字の敵、親の敵も同然。」とはつたと睨み、「やい蟲め、おのれ蛙の形で斬るは殘念ながら、武士の刀有り難しと頂戴せよ。」と、むん

腹突き貫き、國土の怨敵討ち亡ぼし、我が身は死しても佛法王法に、忠節の名を末代に殘さん。」と、言ひも終らぬ中よりも、ぞつと惡寒に更科が、色は木賊の眞蒼青に、「苦しやなう。」と悶え伏し、手足は冰り額は霰の玉の汗、身を顫はし身を縮め、息もたえ〴〵苦しめば、父母驚き、「痞へが出たか氣のつきか。藥よ水よ。」と立ち騷ぐ。「ア、病で無い藥はいらぬ。恐ろしや四郎が術、念ひをかけては千里も見通し聞きぬいて、形を吹き出し仇をなす。父を勸めて一味にと騙した僞り、四郎が胸に徹してかぞつとすると等しく、四郎が來て身を責むる。見て下さんせ。」と上の衿押開けば、あらいぶせ恐ろしや、頭に角ある大の蝦蟇、雪の肌にひつたりと、四足を張つて肉を締め、ぎろつく眼は銅の鋲を打つたる如くにて、胸に喰ひ入る刃の齒音、鑢を卸すに異ならず。父母二目と見もやらず、娘が苦痛うめく聲、病ならねば藥も無く、いで摑み殺さんと近づけば、幡樂に毒氣を吹き掛け眼を眩ます。狼狽へ歎く夫婦の樣、目も當てられぬ次第なり。幡樂淚おし拭ひ、「よし〳〵未來奈落も合點、今日より仙術の法に歸伏し、徒黨全く僞り無し。」と詞につれて喰ひ放し、飜りと飛んで蛙つくばひ、紅花の舌をひら〳〵とはみ出す面つき、さしもの幡樂ぞゝ髮たち、「某發起し一味の上は、早々歸れ。」といへども更に動かず。母は泣く〳〵、「ア、思ひつけた。仙術に入る誓文には、佛の像を踏みまするとやら聞き及ぶ。その望みか。」と言へば、悅び嬉し氣に鳴く蛙の聲。「オ、易いこと踏んで退けん。持佛堂の佛

なり。「扨四郎が外に眞實の男とは、京都の町人か但し百姓か。」「否々、今流浪の身とは言ひながら、鎌倉大名葛西の源六清治殿、內裏大番の御在京に馴染を重ね、末々堅い約束まで致せしが、御親父樣の勘當にて、逢瀬も便りも絶えし折しも、七草四郎が請出す談合、やれ嬉しや此の里をさへ出でたらば、歎きを言うて暇を取り、源六樣に添はんものと、隨分廻つて郭を出で、色々樣々理たて、暇は呉れる筈なれど、こゝに一つのうたてい難題。汝が親の手塚幡樂は、武勇の譽れある者、暇をやる代りには、親に我が法を勸めこみ、味方に靡け從へよ、其の時暇をやるとの事。大事の親を忌々しい、恐ろしい惡人の徒黨となし、現世後生も勿體なく、その詞を聞き捨てに、そつと逃げ出で、源六樣に逢ふまで、先づ鎌倉へのおもひ立ち、餘り父母の御顏が見たさ、御暇乞ひに立ち寄りしに、ま一足で危や〳〵、觀音經が聞えずば、此の世で父母見られうか。有り難い御經の力、父樣母樣ひろうた。」と、伏し拜みてぞ泣き居たる。幡樂顏色うちとけ、「我を仙術に進め入れ度きとや。成程々々徒黨に組し暇取つてとらせん。同道せい。」と言へば母も娘も、「なう淺ましい事いふ人、氣が違うたか。」と興さめ顏。「ハテ愚かな。誠に一味する者か。幡樂が表裏の智畧、眞實一味の色を見せ、近づき寄つてむんずと組まば、彼奴は若者力量者、我は老體骨は枯木、微塵にはたき碎かるとも、摑み付いたる手は放さず、下にならば下より突き、上にならば上より突き、後を組まば我が胸板より串柹さし、四郎が胴

程憧れて、「是れ娘が來ました。娘ぢや開けて下さんせ。」「悲しやあれ娘と言ふわいの。」「イヤ娘が何の來るものぞ。娘では無い無盡意菩薩、無量百千萬億。」に思ひを碎く夫婦の歎き、御經も跡や先、堪へ兼ねて驅け出る母、帶を控へて止むる父、なく／＼念彼觀音力、振り放し走りでて戸に取り付き、「悲しい所へおぢやつたの。其方の夫四郎は國を騷がす大惡人、連添ふ其許も一所に、見付け次第縛つて出せと鎌倉殿の御意が出て、愛しや廣い世界を狹い身になりやつた。何とぞ身を免れて、一日も命いきて給も。夫れに增す孝行は無い。むごい目が見ともなさ、父も母も今死ぬる。兩親の命日忘れず、夫は佛法けづるとも、そつと隱して廻向しや。それが身の冥加身の光ともなるぞいの。父樣は武士の義理、一言もかはされぬ。サ、今が最期、念佛となへて早かへりや。エ、門の戸一重へだてて、十年振の娘が顏、見ずに死ぬる悲しや。」と、「わつ。」と叫びて入りければ、「なう母樣待つて下さんせ。四郎はわしが男で無い、本の男は別にある。七草とは緣を斷るわけを言ひに來ました。必ず死ぬまい死ぬまい。」と苛ち喚けば幡樂きき付け、「なんぢや四郎と緣を切るとは、譃ぢや無いか誠か。」「何の譃言ひましよ。男は別に有るわいの。」「それが定なりや娘一人拾うた。」と悅び勇み飛んでおり、錠明けるやら捻ぢ切るやら、親子が顏を見合はせて、「扨も大きう成つたの。」「ホウォウいかい白髮にならしやんした。」と、三人手を取り縋り合ひ、嬉しとも悲しとも、別きて別ちも泣く淚、思ひやるさへ哀れ

戸に入りにけり。折もこそあれ更科が、忍ぶ手綿の頰かぶり、道を問ひ〳〵家を訪ひ、見しりは元の藪垣、走りついても戸は明かず、押したり引いたりしやくつたり、聲を潛めて「母樣申し、科が來ました、父樣更科でござんす。」と、言へども更に音もせず。「ムヽ寺參りなされしか。外には錠もおろさず、內で締るやうに賢いからくり。此處で待たう、早う歸つて下されかし。」と、待つ間や心せかるらん。父母かくとも白小袖に、淚をかけてくど〳〵と、「可愛や娘が模樣の物は郭風、派手で御氣に入るまじ、こなたや母が好いた樣に、染めて著よと孝行で吳れしもの、血に染めるとは思ふまい。」と悔み歎けば、「御婆愚癡な事いはずとも此の形見や。二人の死骸を人が見て、幡樂が浮氣な心中したと言ふで有らう。もし草雙紙に作らば、外題は心中友白髮。」と、命を塵とも最後のおどけ、心けなげに哀れなり。「これ朝暮賴みし觀世音普門品、一品讀誦し、御經の終りが命の終り、夫婦の顏の見納め。隨分小聲に〳〵。」と顏も淚も同音に、「種々重罪五逆消滅自他平等、妙法蓮華經、觀世音菩薩、普門品第二十五、爾時無盡意菩薩、卽從座起、偏袒右肩、合掌向佛、而作是言、世尊、觀世音菩薩、以何因緣。妙觀世音、佛告無盡意菩薩。」と、吹きくる風が取次ぐ經の聲。「ヤア御二人の看經か。申しかゝ樣、とゝ樣、こゝ開けて下さんせ。」と、呼ばはるも親子の緣、胸に響きて母はきよつきよと耳そばだて、父は紛らし聞かせじと、淚にむせぶ聲張り上げ、「一心稱名、觀世音菩薩、卽時觀其音聲。」の高くなる

變易の理にくらければ時々に驚く。必ず膽潰さるな、身は今日腹切つて死ぬる。」と、聞きもあへず、「ヤア、定めなき世の習ひとも、大體の事かいの。譯を聞いてこちの胸も定めたい。仔細を語つて下され。」と心を揉めば、「されば〱、長う言うて詮ない事、つまる所は娘が夫、七草四郎は王法を覆す天下の朝敵、見きき次第夫婦共に訴人いたせと、禁中北の陣とやらん言ふ所、鎌倉殿御名代の公家衆、足立右馬允と言ふ武士の大名と、理を詰め義を立て問答の上、更科とも七草とも、耳に入るか目に見れば、ちつとも庇ひ隱す事ならぬやうになり切つた。なればとて幼いより、人手にかけ苦勞させた娘、何の科何の恨みに繩をかけ、これ首斬れよと出されうか。身こそ貧なれ武士の道を守り詰め、ひけを取らず誹られず、七十の老の坂、浮世の峠を踏み越え、この上に何處の高根何國の嶺、何の目當の花も無し、生きる程業さらしと思ひ極め切る腹。斯く言ふ中も因果の廻り、娘の來まいものでない。持佛に燈明香たててたも。本來空の故鄉へ歸る、旅出立せん。」と、座を立つを縋りとめ、「聞く中から私は死んでゐる。子故に死ぬるは父も母も同じ事。五十餘年連添ふ仲、獨り殘るが恨めしや。この春の便りに親達の寢卷にと、くれし古著の白小袖、著れば親子連立つ心、ともに〱。」と、思ひ極めし淚の目元。「道理々々、母の身でまだ〱存へ、悲しい目も見られない。同じ刃と覺悟めされ。」と內より門の戶錠おろせば、女房持佛に火を掲げ、薫らす香も我が命も、消ゆる間近き薄煙、打連れ納

故に子を賣つて、末頼もしく思ひしに引きかへ、男の緣に連れ、今は天下の科人と成り、親は訴人の身と成つて、親の解かれし此の繩の、聟と娘に係るべき、因果の羈これなり。」と、大地にはたと打ち付け、「御暇申す。」と首を下げ、涙を白洲に擦り付け〳〵押し隱し、につこと笑ひ立ち歸る。尾羽は枯れても荒れ果てても、昔ながらの武士の道、立つる詞の花園や、志賀の里へぞ 三重 行く先も、住めば都の名にふりし、志賀の浦浪餘情無き、隱者住居の離れ庵、主人幡樂は大内の召に依つて京上り、年寄つても女の留守、寢ても夜の目をまんじりとも、明六つ五つ四つに過ぐれば、「今日でもないか待遠や。」と、戸口に立つて西東、見廻す外面の藪垣、「是れは〳〵何處の野良犬が破りしぞ。たつた一夜の夫の留守、犬まで婆を侮る憎や〳〵。」と、小竹捻ち寄せ押し綰ね、結ぶ繩ふし竹の節、是れも世に住む憂き節なり。急ぐ心に幡樂が、任せぬ足を漸うに、歸り著いたる我が家の門。「なう御歸りか待ち兼ねし。駕籠にでも乘せはせず。先づ〳〵内裏樣の御用とは、何事ぞや。」と言へども答へず、「おばゝ、垣をゆひ圍ひして、何時までの棲家。ごくに立たぬ事する人。」と、言ひすて通れば續いて入り、「今の五音は氣にかゝる。九年十年顏見ぬ娘が身請したげな。近々に夫婦づれで來るで有らう。障子の破れも繕ひくれと、内を出るまでいうた人、戻り〳〵浮世すてた言ひ樣は、何事が出來ました。」と問へば幡樂うち笑ひ、「人間世は天地と同じく、今まで照る日が俄に雨に成る如く、昨日思ひし事今日變る。

に、宿所を賺し出し、途にて繩をかけ、盜賊の體になりし事、一生の殘念これ一つ。」と、詞すゞしく目の中に、無念涙ぞうかみける。經房卿きき給ひ、「あれ聞かれよ右馬允。幡樂が僞り無き詞の心底、詞の色に顯はれたり。如何に老人、汝は助け歸すべし。七草四郎は朝敵と言ひ、天下の大罪人、所在を知らば告げ來れ。汝等夫婦が命を助け、急度御褒美せらるべきぞ。」と宣へば、幡樂居丈高になり、「人を御覽じ違へしな。假令四郎が壻でない他人なればとて、命助かり御褒美に引かれ、訴人する幡樂に候はず。親子三人同罪なれども、國靜謐の爲と有るならば、遁れても遁れぬ大罪人、見付け次第きき次第、訴人いたす義も有るべし。いや只事むつかし、所詮首を刎ねられよ。」と、思ひ切つたる顏色に、右馬允おつ取つて、「尤も〱。上には御長袖、御慈悲あまつての御意。一天の帝、ならびに武將鎌倉殿へ忠節を盡し、名を殘すを老の本望として訴人せられよ。連なる緣の同罪、その方とても免れぬ所、天下國家の爲命を捨てられよ、賴み入る。」と、言ひければ、「ム、一命をくれよ賴むとの詞、僞り無くば右馬允殿御誓言。」「オ、二度鎧を肩に掛けず、槍の柄握らず弓矢取るまじ。それ繩とけ。」詮議は是れまで。幡樂罷り立て〱。」と、下知に從ひ繩取が、解いたる繩を幡樂とつて手にたぐり、「エ、哀れ我が身の未來記を知るならば、とつく親子三人飢ゑに疲れ死なんもの、貧苦に責められ爲方なさ、娘に乞食の憂き目を見せん不便さ、傾城の身は男づれ、如何なる果報も有るものと、可愛さ

太郎が弟、武士の浪人ならずや。富樫と御分、浪人詮議に在京して、など四郎はとらへぬぞ、油斷なり。」とぞ仰せける。右馬允うけたまはり、「御役疎畧致さねども、彼の四郎形を種々に變じ、人力に及ばず。然るに島原の傾城更科と申す女を相具し、夫婦共に行方しれず候故、この更科が親、手塚幡樂と申す者、江州志賀の里に隱者と成つて、遁れ住む由承り、密かに召捕り尋ね問はんと存じ、忍びの者を遣はして候。」と、申しも敢へぬに、大理の廳の官人罷り出で、「足立殿の手の者、手塚幡樂を召捕り參り候。」と訴ふれば、「幸ひ〳〵、傳奏の御前にて糺問せん。是れへ引かせよ。」「あつ。」と答へて埋門の扉を開けば七十許り、頭の雪に埋木の、いつの花實と存へて、一度は子故に悅び、一度は子故にぞ、苦しき今の縛繩、御前に引き据うる。右馬允階下に立ち、「幡樂が娘遊女更科、七草四郎に相具し、夫婦共に行方なし。汝は親子壻舅、よつく知りつらん。ありの儘に申せ。斯く言ふ我は足立右馬允景久。堂上にましますは吉田中納言經房卿、武家の傳奏。鎌倉殿の御前も同然。陳ずればいやながら拷問するぞ。」と有りければ、幡樂顏を上げ、「事あたらしき御尋ね。娘を賣つて命をつなぐは、さながら我が子の肉を喰らふ人外、畜類に同じき某、起證誓紙を以て申すとも、よも誠とは思召すまじ。さりながら水責火責の拷問に遇ふとても、存ぜぬ事は存せぬと申すよりほか詞なし。永く御疑ひ受けんより、疾く〳〵白髮首刎ねられよ。ハテ扨この御尋ねと候はば、早速すゝんで參るべき

負は脊に助け載せ、ひよい〳〵〳〵飛んでかへるもあり、石を蹴飛ばし砂子を蹴立て、奥には篳篥笙を吹く、爰には虹を吹き立て〳〵、蛙の歌は引替へて、がまんの池波岸うつ音、一足さらず喰ひ合ひしは、凄じくも又三重不思議なり。池水變じて紅に、さしもの景久氣を奪はれ、うつとり見とれ休らへば、又一しきり雨交りに、どつと落ちくる嵐につれ、御殿俄に動搖し、有りつる蛙は行方なく、消えて形は無かりけり。御遊も半ばに打ちやみて、上達部上童立ち騷ぎ、「俄に御惱、御典藥よ占方よ。」と、ひそめく聲々只事ならずと、景久愼み宿居守る所に、鎌倉の傳奏吉田中納言經房卿立ち出で、右馬允を召され、「今宵非常の宿直はおことよな。只今蛙の鳴く聲御耳に入ると等しく、玉體ほとほり、以ての外の御惱不思議千萬。御池のほとり見てまゐれ。」と宣へば、景久つゝしんで、「重ねて見申すに及ばず。御池の蛙數十萬、兩方に屯を構へ、互に喰ひ合ひ諍ふ有樣、正しく鬪諍合戰の勢ひ、池水も血汐となし、風雨震動して消え失せし有樣、具に見屆け候。」と申し上ぐれば、經房卿横手を拍つて、「疑ひも無く蛙軍。唐土にては漢の武帝元鼎五年、蛙鬪つて北狄起り、本朝にては推古の御代、蛙鬪つて蝦夷の一族謀反せり。何れも不吉の例、殊に主上御夢に、仙人日月を踏んで虹を吐くと御覽ぜし。蛙の吹く息虹と成ると、陰陽の輩申すに違はず。今宵の御惱この障礙疑ひ無し。しかるに七草四郎と言ふ者、蝦蟆仙人が法を傳へ、樣々の幻術を以て萬民を惑はす。もと此の四郎は錦戸

はらと、蘭麝の匂ひうち薫り、聞き馴れぬ物の音も、流れに響く御溝水、流泉啄木の曲を奏るとは、斯かる事をや夕立の、空さり氣なく澄む月に、御池の蛙二つ三つ、鳴き出せば七つ八つ、次第々々の諸聲は、扠かしましし、蛇ばし出でたるか、何にもせよかしましし。御座に響かば御遊の妨げ。ここらが御番の心がけ、追散らし叡感に預らんと、袴のそばはさんで、聲を知邊に御垣が原の、唄柳の綠陰深き、御池の澤瀉杜若、あやめも別かぬ水籠に、這ひ出る蛙幾千萬、數も限りもあら夥し。凄まじや池水を、東西にさかつて立ち別れ、萍水草に飛びかふ有樣、目を驚かす許りなり。「是れなん蝦蟆合戰といふ物な。音には聞けど目に見始め。いで奏聞。」と立ち歸りしが、「否々御遊の興さまし。始終を篤と見屆け、御尋ねの時奏聞せん。」と眼もふらず守りゐる。池の面は漣たかく、左に備へし蝦蟆の陣、一逆一順長蛇の如く、頭を討たば尾に纏ひ、尾先を討たば頭に包む、首尾を計つて控へたり。右は水火木金土、五行の陣勢あり〱と、中にも尺餘の大蛙、これ大將と謂ひつべく、のたりのたりと顯はれ出で、互に齒を研ぎ瞬きせず、兩方睨む蟇目の光、矢を射る如く輝けば、數萬の蛙聲許り鳴き立て〱、さながら鯨波の聲、入り違へ入り亂れ、喰ひつ喰はれつ飛び違へ追ひ廻し、卽座に死ぬるは捨てかへる、驅け倒されて起きかへる、臑を嚙まれてちんがちが、跛足ひき〱蝦蟆、身内は血みどろ赤蛙、追はれて色も靑蛙、弱れば手もなく川中で雨蛙、跡をも見ずして逃げかへる。手

頃に燈を見せる。」心得ため桶ふまへて取り付く垂木端、軒端に裾を引つかけて、危や轉び柿葺、見上げて行ふ四郎が術、消えたる提灯一時にはら〱、くわつと點りてさながら晝の如くなり。「あれこそ四郎、餘すな逃すな搦め捕れ。」と、大勢どつと取り巻くを、少しも動ぜず、屋根に向つてつく息は、青黄赤白紫に、渡せる橋は何の虹ぞや、とへど答へず目の前に、四郎が形は掻き消す如く、虹の止りは屋の棟に、その魂は更科と、共に連立ち飛ぶ蛙、「あれ打ち殺せ。」と拳をにぎり、「礫よ石よ。」と騒ぐ間に、影も遙かに遠ざかり、行方さらに白雲の、棚引き響く夜明の鐘、音に聞きたり唐土に、形を吹き出す鐵枴仙、蛙を愛せし蝦蟇仙人の、法を傳へて末の世に、目を驚かす許りなり。

第三

花に鳴く鶯は、聲に笙篁の調べを成し、桐の古木の丸木橋、それさへ琴の音に通ふ。されば當今後鳥羽の聖主、月待つ夜半の管絃の御遊、風俗催馬樂朗詠も、玉簾深き聲もれて、主殿司の立明し光の數も百敷や、大宮人の袖はえて、雲居に響く絲竹の、直なる御遊樂しめり。足立右馬允景久、浪人詮議の在京のついで、禁中非常の守護仕れとの宣旨によつて、萩の戸の簀子に伺候して見廻せば、鎌倉の勤番とはことかはり、御格子あけ渡して、御簾のひま〱洩りくる上臈の、衣のおとなひはら

やと分別も、築山のいざり松、塀に靡きし片枝は天の教へ、塀の外は朱雀道、枝傳ひにと思ひ込んだる植込は、目ざすも知れぬ闇こそよけれ、松が枝に傳ひ上るもわじ〳〵、顫へば震ひ落されて、枝の露ふる年ふる松を、飛び下りんとむかうを見れば、數十本の高提灯こは如何に、丸に梅鉢富樫が紋、「南無三寶、最前四郎を見付け、右馬允樣を出し拔きの拔驅な。彼奴に先を越されては、夫も恥辱望みも絶ゆる。天道も神佛も、何が憎いぞ何の祟り、斯うまで運も盡くるものか、無念や口惜しや。」と、塀の屋根に抱き付き、聲をもたてず泣き居たり。「いや〳〵泣いても叶はず、踏み込んで四郎奴と死なんもの。」と、塀を翻りと飛び下りたり。程なく富樫組子組下百人許り、提灯四方を押取り卷き、「奥州の四郎高衡を召捕れと、鎌倉殿の御諚によつて、富樫左衛門向うたり。出で合へやつ。」と呼ばはれば、郭中は子をさかさま、遣手禿は泣き喚き、上を下へと返す所に、不思議や風も吹かぬに提灯燈火、殘らず一度にばつと消え、前後も見えぬ眞黒闇、虚空は人馬の馳せ散る音、松吹く風に鯨波の聲、大地の震動鐵砲をつるべ放つ如くにて、揚屋の座敷は忽ちに、島原陣とも言ひつべし。四郎更科手を引き合ひ、左衛門が鼻の先、驅け廻れども知らばこそ。「暗いぞ〳〵同士討すな。二三人づゝ立ち別れ、聲を掛けて驅け出せ。」と、うろ〳〵四方に別れける。四郎囁き、「時分はよいぞ更科、辻の門より軒へ登り、東寺の塔を目當に、屋根傳ひに早落ちよ。」「いや暗うて何處も見えませぬ。」「ハテよい

事いうた。傾城の先祖を云ふは恥なれど、浪人でこそあれ我が親は、朝日將軍木曾殿の御家老筋手塚何某。請出さるゝは嫁入の心、いくばく悦ぶ今日の今宵、暖かに七草さんに指もささせぬ。身請の土産に其方が首を持つて行く。サア來い。」と拔き放せば、「エ、小賢しう邪魔する女、用捨は無い。」と渡り合ひ、互に年も相生の、松と松との共ずれに、餘所を忍びて聲たてず、打つ手も知らず力は無し、閃く紅絹裏劍の光、目鼻の先にひら〳〵と、亂れ散るこそ危けれ。四郎聞き付け、「何をあがく傾城めら。」と、飄りと飛びおり、「ほでてんがう置き居れ。」と、二人が刀踏み落し、唐琴が項引攫んで投げ退け、「密々吐かすをろくには聞かねども、七草が首欲しいとな。我が首は知行にも成り國にも成り、金、にもなるに依つて、日本國の武士が皆ほしがる。いかな〳〵。萬民を靡く王法を奪ひ、四海を一呑と思ふ七草、我術を行はば、郭中の燈火を一度に打ち消し、長夜の闇となす程のそれがし、汝等の腕には推參。捻り殺すは易けれども、僅かの事に大義の妨げ、雀おどして鶴失はんよりはと命を助けた。これ更科、あいつ一人ものに狂はせ、今宵郭の名殘の牀、サアおぢや〳〵。」と、打連れあがる二階より、踏み靜めたる氣のつよさ、言ひ伏せられて琵琶の姫、いき精はつた甲斐も無く、「エ、口惜しの身の上や。」と、涙五體を絞りしが、「どうでも今宵は遁されず。オ、それよ、右馬允樣富樫と共に在京なり、告げしらせて討たせん物。屋敷を尋ね一走りいて呉れう。ア、よも大門を通すまじ。」兎やせん角

り理無い事ながら女は互、此方は神の結ぶ縁の男、深い中でも七草は請出す金の男。サア密々言ふも洩れてはならぬ。」と驅け出す。「先づ待つて。」袂に縋り、「七草樣を金の男と氣がついたれば面白い。わしも眞實來世までと契約の男がある。鎌倉に隱れもない、葛西の源六淸治殿。何と膽が潰れるか。おいとしや私ゆゑ父御の御勘當、佇む方の有るも知れず、逢ひたい見たい添ひたいと、思ふ許りに過ぎ行く月日、憂き節に責められ、年を切り增し〳〵、郭の綱が重なり、源六樣に添ふ時節は無い所に、思ひも寄らぬ七草樣が、請出して吳れう、やれ忝い、この郭さへ出でたらば、心あつて暇を吳れずば、逃げても走つても、遂には源六樣に添はう物と、思ふ賴みの七草さん。この金の男に別るゝは、眞實の男源六さんに別るゝも同じ事。誓文の罰あたらば當れ、これぱつかりは料簡して貰はねばならぬ。」と、手強き詞、唐琴おどろき、扨は兄源六樣のと言はんとせしが、いや〳〵傾城は賢しく、人の上を我が上に言ひなして、難を遁るゝも知れぬ事、云はぬ所と分別し、「これ更科さん、料簡して貰はうとは彼方此方、料簡は其方にある。サア料簡して下さんせ。」「イヤ其方に無ければ此方にも料簡ない。七草樣の代りに、この更科が首とらんせ。是れが料簡々々。」「なう慮外ながら此の唐琴は武士の娘、さうは狼狽へぬ。斬るべき者は得斬らず、役にも立たぬこなさん斬つては、犬猫きつたも同然。」と、言ふより更科、富樫が脇指とつてぽつこみ、裾みじかに帶ひき上げ、「犬猫きつたも同然とは誰が

造どこも痛まぬか。さりながら、痛い目するも水揚の祝儀々々。」と打笑ひ、二階へ上る後影見上げ見下し、「嬉しや富樫は去なせたり。我が手にかけて四郎が首取り、父の恥辱を雪げば、葛西の家の武士立つて、思ふ夫と比翼連理、佛神のあてがひ、富樫が捨てたる刀とつて落指し、落し付けても心はやりに身はわな〳〵、蹌踉く足を踏みしむれば、板間はめつきりめつきめき、氷を渡り火を踏む思ひにて、窺ひ登る箱梯子、明けんとするに手は顫ひ、嵐の敲く襖戸は、ごと〳〵〳〵、さら〳〵〳〵さつと明くれば更科が、此方へ出づる姿を見て、あつと飛ぶやら走るやら、元の所に身を縮め、いとど顫ひぞ增りける。更科立ち寄り、「合點ゆかぬ新造殿、女の際に刀さいて二階へ上り、誰に恨みで誰を斬る。譯も無い事しだして、身を失はうと言ふ事か。人の知らぬ中、私にそつと心底明しや。斯う言ふも其方が愛しさ。誓文くされ明日出る郭を得出でず、居腐りにする法もあれ、何なりとも聞きわけ、腹の癒る樣に肝煎らう。心を鎭めて腹の立つ一通り語つて聞かしや。なう疎まし人や。」と、小聲に成つて鎭むれども、只「あい〳〵。」と許りにて、暫し詞も無かりしが、「更科樣差當てて、どうも言ひ憎けれど、御誓文が忝い。これ人に恨みも腹立も何にも無い。此方を請出す七草を斬るわいの。」「ヤア、ウ夫りやなぜに。」「オ、膽の潰れる筈。わしには稚いより許嫁の男あれども、言ふに言はれぬ障りあつて添ふ事ならぬ。今でも七草の首を斬れば、障りも晴れて世間晴れて夫婦になる。あんま

聞くより富樫くわつと急き上げ、ずんど立つて引摺り下し、髻摑んで、「門番連と吐かした此の頰桁、はり歪めてくれん。」と、振りあぐる腕首惜と取り、「ヱ、憎や、待て己。」と言うた許り爲方なく、腕にほつかり斷れて退けと食ひつかれ、宗重堪らず振り放し、「己女め、戀も情も是れまで。」と、ずばと拔いて打ちかくる。「オ、切り殺せ。死ぬとも獨りは死ぬまい。」と氣は逸つても刃物は無し。拔けつ潛つつ女業。七草聞き付け、梯子ぐわた〳〵鳥より輕く、裾端折つてつゝと入り、富樫が持つたる柄ともに、脈も切れよと腕捻ぢ上げ、取つて引据ゑ、大小捥いでぐわらりと投げ、「新造を貰ひたしと、亭主が段々の願ひ。この里の遊興は互づくと、料簡して呉れたるに、尾籠至極の刃物だて、冥加しらず罰あたり、この脛骨を戴け。」と蹴上ぐる足首、踏まれじ物と富樫左衞門しさつて見れば、右の膝口に尖矢の疵あり〳〵と、四郎が繪圖に少しも違はず。きやつ四郎高衡ござんなれ、大勢催し生捕らん、してやつたりと心も勇み、逃げて去なんと身をもがく。唐琴も立廻りに、同じく見付ける矢疵の跡、ヤアおのれは奧州の四郎と、言はんとせしが、ちやつと言ひ換へ、「おのれは四郎、素人な傾城と侮つて我儘いふな。あなたへ詫言して取らす。重ねて此處へ足踏みすな。もう堪へてやらんせ。」と、七草が手を取り引き退くれば、宗重むく〳〵起き上り、睨んで見ても彼奴が頰付只者ならず、仕損じて我が命のがれ刀も脇差も、捨てて跡をも見返らず、足をはかりに驅け出す。七草なんの氣も付かず、「新

今此の里の名に高き、花月高尾吳羽なんど、堪らぬよねと聞き及ぶ。この內隙なを今宵の緣、それ引摑め。」と言ひければ、「仰せの君達誰方も指合、まだ四五日もお隙なし。幸ひ今日突出し女郎、唐琴樣と申す太夫職、旦那の威勢で貰ひませうか。」「突出しとはまだ手入らずな、珍重々々。コリヤ働け。」と投げ出す。くれぬ粹より遣る野暮に、廻りの強い花車、「旦那くわつと見事な儀。追付御供。」と罷り立ち、ざゝめき騷ぎの最中二階、のぼり氣に成つて富樫左衞門、座敷にとほんと待つ間ほどなく、亭主二階を飛んで下り、「首尾よう貰ひ、新造樣それ御出で。」と、聲に引かるゝ唐琴が、知らぬ男に顏曝す、辛いぞ憂いぞ此の身に成つて、悔しや玉手箱梯子、半分おりて思はずも、宗重に目を見合はせ、くわつと驚く氣に堪へ、下りも上りも、足も心も踏みまよふ。目かどつよき富樫左衞門、つゝと寄つて腰抱き締め、「ヤア珍らしい。念力かけたる葛西郡司が娘琵琶の姬、何としてのお傾城。芥さらへて黃金の釜の掘出物。請出して身が御前樣。ヤイ亭主、唐琴が身請十萬兩でも引かぬ大名。早くうせて埒明けい。」と、呼ばはれば琵琶の姬、「エ、聞きにくい胸がわるい宗重。右馬允樣とは、夫婦で夫婦に成りにくい武士の義理、傾城は遊びもの、寢ても逢うても我が夫の、名字に瑕は付かぬと思ひ、人置の緣を求め、今日始めて此の里に、唐琴と言ふ浮名を取るも、右馬允殿に一夜なりとも、逢はん爲ばつかり。安宅の關守門番づれが、唐琴を身請とは、些とすしなぞ推參なぞ。エ、けたいの悪い。」と、

ア見事な新造樣。郭廣しと申せども、恐らく〳〵御全盛の折紙道具。扨目出たいは更科樣、言ひ出す其の日に身請とは、傾國開闢の初物。手形の埒も薩張。七草樣も疾うから御出で、あの二階に長う短う、待たせまするも今日ばかり、明日から鼻を突き合はせ、春は早々七草薺の若ばえ、とゝかゝ〳〵おぎやあ〳〵を聞きませう。千秋樂。」と取囃せば、「能う祝うて下さんした。今宵郭を出ると思へば、嬉しい半分名殘も半分、心殘りは此の新造の唐琴殿、生まれは遠國、京には知邊緣も無し。私とても馴染なけれども、眞實の妹の樣に愛しうて、此の度の水揚も、七草さんの御世話に掛け、二十日も三十日も引き廻す心でありしかど、私は身請今日限り、嘸力が有るまい。今宵からでも粹な御客を、引付けて貰はして下さんせ。行末かけて賴むぞえ。郭の名殘唐琴殿、主樣、いざ酒にしようぢや有るまいか。」「そのとや酒の御託宣、神は二階へ上らせ給へ。禿衆おみき〳〵、我等は酒の神主。」と、戲れ勝手へ立ち出づる。二階は名殘の一節を　唄「月は笠きて西へと急ぐ、とつつく御供の髭奴、朱雀細道とび足どつこい、押せやれどつこい、露は嵐にちりつてとん。」三筋の絲の音に引かれ、末社はいきつて先走り、玉川屋に大聲あげ、「大盡御出で。」と鳴りこめば、亭主は御迎ひ、門口に這ひ蹲ふを目もやらず、座敷にのさ〳〵富樫左衞門、膝を捲つて大胡坐、「わりや亭主か。大名の名は隱しても知れるもの、言ふに及ばず、身は富樫左衞門宗重さ、公用の憂さ晴らし。傾城狂ひに來りしなど沙汰は無用。

れ。」と、抜き連れて取り巻いたり。佐仲太大音あげ、「仙術の大敵、今日歸伏の人々、あれ撲ち殺し、四郎殿の御感に預れやつ。」と、下知すれば、大口千束森大矢野鄰の妙心向ひのお爺、尼も沙彌も朸とり、棒熊手鳶口横槌、擂粉木提げ〳〵滅法やたら、追返しつ喚きしは、犬の嚙み合ふ三重如くなり。案内しらぬ裏屋の奥、溝に踏み込み井筒に躓き、下部が腰骨膝の皿、權藤六も眞額割られ、塵捨場にのめり伏したりけり。佐仲太徒黨に勇みを付け、「お手柄〳〵。仙術の末繁昌。さりながら役人を殺しては跡が難し。家財諸道具取り納め、すはと云はば我等一所に、立ち退く用意肝要。まづ各の發起心、佛法の罪消え失せ、御本尊仙人御納受の印拜ません。」と、鏡を表に飜りと返し、「サア禮拜々々。」と聲に從ひ立ち掛り、向へば映る畜生の、影引替へて玉の冠玉の釵、忍辱柔和の天人天女の顔容あり〳〵。「ア、有り難や、命を捨てて惜しからぬ、南無仙人樣。」と、夕月に、鐘も暮れ行く三重雲の足、出口の柳こきまぜて、松と梅との縱緯に、戀を冷泉織り出す島原や、ぞめきは梭を綜るに似て、町の六筋に結ぼれ絲の、愛しからぬは無き中に、別きて名に照る更科とて、桔梗が許の太夫職、七草四郎が思ひ草、俄に根引極まりて、さらばやいのの暇乞ひ、今日突出しの妹女郎、唐琴を引連れて、揚屋々々を顔見せと、郭名殘の二道中、品は替れど一つ前、摑みからげに脛見えて、裾に露ちる玉川屋、馴染の揚屋に入りにける。「ソリヤ唐琴さん更科さん御出で。」と、家内喚けば亭主立ち出で、「ハア

へし合ひ鏡に向へば、「情なや、我等が顔は馬に成つたか。」「こちや牛ぢや。」「私や犬か狐に成つた。」「猫ぢや。」「鼬ぢや。」「淺ましや、悲しや、皆畜生に成り果てた。エ、阿彌陀めに欺された。助け給へ仙人樣。教へを受けて只今より、法を持ち奉らん。」と、皆々一度に手を合はせ、隨喜の涙かぎり無し。「扨は家主殿はじめ、一念發起なされしに僞りは無いか。座敷なりの間に合はせに、心に僞り有りとても、鏡に急度顯はるゝ。何と〳〵。」と言ひければ、「ア、御勿體なや。あらたな奇瑞を拜みながら、疑ひの念恐ろしや。宥させ給へ。」と平伏す有樣。「オ、果報者達、目出度い〳〵。然らば向後法の爲には命を惜しまず、七草四郎殿へ從ひ奉らんとの連判の上、直に金子を與ふる。」と、卷物いだせば、一座の男女二言とも言はず、我先にと印判書判、或は爪形筆の軸、指先より血を出し、徒黨かたまる決定心。「サア御褒美。」と十兩包、ぐわらり〳〵と投げ出せば、我劣らじと立ち重なり、戴く拜む木綿襦袢の懷に、今日ぞ始めて陸奧の、黃金の花ぞ咲きにける。かかる所に町の番太慌急しく、「申し申し松右衞門樣。浪人の改めとて、富樫殿の御内、柳瀨權藤六と言ふ御侍、大勢連れて早此處へ。」と、呼ばはる中に權藤六つつと入り、「七草四郎が徒黨獅々木佐仲太とは其方な。鎌倉殿の仰せをもつて、尋ぬる事あり動くな。」と奥に踏込み、「これ何だ、惡魔の形か化物か。人民を誑す惡人め。」と、繪像押取り引き裂く所を佐仲太飛び掛り、「しや物見せん。」と緣先にどうど投げ付くる。「狼藉者斬れ括

や佐仲太、面々二世を頼む本尊、佛を侮る許りで無い、人を癡氣にするは醉狂か亂氣か。」と聞きも敢へず呵々と笑ひ、「さういふ各が醉狂よ亂氣よ。念佛申す乞食非人幾人かあれども、終に乞食を遁れずのたれ死。各が明暮彌陀よ釋迦よ觀音よと、經よみ念佛めさるゝが、どれ金持に成つたか大名に成つたか。其の儘裏屋ずみ、未來活計歡樂の、便宜きいた者一人も無し。佛法に欺され億萬劫身を苦しむる人々に、今宵の御馳走、我等が本尊拜せさせん。近く寄つて拜まれよ。」と、厨子の戸開けばこは如何に、木の葉を著たる荒法師、雲に乘じ口より虹を吹く繪像。「オ、ざんない佛樣や。」と一同に、「南無阿彌陀佛。」と唱へける。作仲太怒つて、「忌々し念佛、忝くも此の御本尊は、九郎判官殿の御家臣、常陸坊海存仙人、長生不死の術を學びて、歡樂無苦の仙人と成りたまふ。その法を今傳へし人は、奥州五十四郡の主、秀衡の四男、今の名は七草四郎殿、この法に信服し、神も佛も打捨て、一心不亂に仙術に傾く人は、病苦なく貧苦なく、金銀米錢に飽き充ち、國主城主公家高家にも望み次第、保つ壽命は一千歲、無二無上の大法。この法に信じ趣く人には、當座の褒美に與ふる黃金これなり。」と、革袋ひらき積み重ね、辯を竝べて勸むれば、愚癡無智の男女氣を奪はれ、心迷ひて見えにける。「痛はしや方々、佛に誑され、畜生道に沈んだる證、仙人の明鏡に照らされ、佛法の罪現はるゝ其の證據。」と、祕密の鏡の裏を開いて棚に掛け、「サアぬし〴〵の顏を見よ。」「あつ。」と各押し合ひ

の馳走、其の儘置いてま一遍まはつて、忝う存じますと言うて、ま一遍まはつて、追付御出でなされと、二三遍も四五遍も、目の舞ふ程廻つてたも。早う〳〵。」と追ひ出し、「サア〳〵人は無い。此の隙に。」と、四郎が忍ぶ變へ姿、坂東武士のあらそだちも、此の北京にすみ前髮、深編笠の歩み振り、胡蘿蔔牛房の土氣はなれて、島原風のひんぬきなり。程なく大矢野松右衛門さきに立ち、相貸屋の夫婦連、日雇手間取諸の師匠、鍼按摩久庵洗物師の蛇の目後家、かのこゆひのお雪が嚊うち連立つて、「今日は御ざうさ御辭儀申す筈なれど、お親しみの爲、拙者は一軒あなたの藪醫、藥を盛つても違ふゆゑ、森宗以と申す者。」「我等が商賣こがしにて、山善平白髮あたまの額に一寸。」「わたしは戀路の商賣、殿達方はふつとつゝに出逢うて、大きな腹を持ちかけられまい物でも無い。此の指二本で墮す程にける程に、藥研婆と申します。」と、心々の挨拶咄、乘合舟の如くなり。「打揃うて忝い。獨住の我等、御馳走は心ばかり。ゆるりと御咄し。先づ御茶一つ。」と釜の下焚き付け、「此の頃下直な薪もとめしが、おの〳〵も御買ひなされ、得な物。」と小隅より、彌陀藥師觀音なんど、木佛五六體、繩からげ引解き、小鉈取り延べめつき〳〵、とう〳〵めき〳〵、釋迦も地藏も大日も、ともに阿彌陀の四十八割碎きて釜の下、煙にむせぶ觀世音、枯れたる木とて火花咲く、いづれか火坑變成池。一座の男女色ちがへ、胴顫ひ冷汗し、「ハッ〳〵、はつ。」と驚く許りなり。大矢野松右衛門、腕を取つて、「こり

爰にぞ。」「されば申し鎌倉より浪人改めとして、足立右馬允富樫左衞門、上京いたせし故、彼の七條通の家を追立てられ、十日許り以前これへ移り、即ち今日宿茶と申して、家主はじめ相借家中へ酒をもる約束、是れぞ幸ひの參會、相借屋中婆嚊までも勸めこむ企て。さてその元の御首尾ども、承りたし。」とぞ申しける。四郎打笑み、「久々の對面に、吉左右聞いて滿足。此方にも油斷なく、コレ此の如く色々に樣を替へ、町人百姓すゝめこみ、別けて當所島原の傾城、更科と言ふ太夫、この親は智謀ある武士の浪人と聞き及ぶ。さいつ頃より島原に通ひ、更科に馴染み、近々に請出す極め。時には親とは壻舅、緣を以て我が法にすゝめ込む程ならば、外の人百人まさり、そちも隨分精いだせ、愚癡な女童嚊勸め込めば、智ある者も妻子につるゝ慾の世の中、とかく金を蒔き散らせ。」と、籠の底なる山の芋で、ぴつくり足つく革袋。「又此の鏡は師より授かる祕密の鏡、裏表に仔細あり。能く見分けて人に拜ませば、如何なる者も隨喜すべし。ヤ鄰は壁一重シイ〳〵。この荷は此處に置いて與れ。是れから直に島原。なんと身が差換の刀こゝにも有るか。」「如何にも〳〵、大小御小袖御羽織も、戸棚に入れて奧の間で、召換へられい。」と案内する間に、東鄰の雇嚊いそがしげに、「申し〳〵、御家主殿はじめ長屋中、殘らずずらりつと觸れました。どれも皆御出での筈。ハア、たんと青物めした。どれ牛房洗はう、胡蘿蔔そろよ。」と蹲へば、「いや〳〵皆御出でなされて、手づからの切り刻みも一つ

む涙と笑ひ、「夫の暇の印はそつちへ槍一本。日本に敵は四郎一人、仙術幻術魔法邪法駄祇尼の法、雲霧の城に籠るとも、親の譲りの身體髪膚は我が城郭、骨は石垣肉は塀、眼は矢狹間、五臟六腑の高櫓、手足は軍兵力あり〳〵、あらゆる武藝驅引進退、下知の大將我が一心。」と、一念堅めて身は輕く、天が下をば笠やどり、印の笠も三界坊と、行方さだめず別れけり。

第二

小善は益なしとして爲ざる故に、善積まずして名を成す事なく、小惡は害なしとして去らざる故に惡積つて身を滅ぼす。爰に奥州泰衡が弟四郎高衡、仙術を學び、兄弟討死の劒の下、臑に矢疵を受けながら、鎌倉勢の目を眩まし、霧に隱れ水に棲む、蛙の聲のかまびすき、伊香保の沼の如何して、東路を免れ出で、今は都に樣を替へ、荷ふ枌は細けれど、心は太き大望、來る時節を松茸ぞ、茸松茸牛房山の芋、青豆生姜人參葉胡蘿蔔や、選胡蘿蔔は立身の後、藥病七草四郎と呼ばれ、利に構はねば算用も、大宮通を櫛笥町、行抜けの裏貸家、小家は口の、「嵯峨松茸、松茸ざふ。」と賣りにける。笹垣したる小座敷より、「松茸買はう。」「おうい。」と答へて管暖簾、顔さし入るれば、四十許りに鰭ある男、能う見れば昔の郎等、獅々木佐仲太、内よりも小手招き、つつと通つて、「是れは〳〵、何時から

るは二世の夫、見返れば三世の父、二つは斷れて二筋きれぬ涙の絲、琵琶の姫も源六も、無念さ悲しさとり〴〵に、思ひ亂れて立つたる所に、大河七郎まつ先に、梶原が郎等數十人、半途より取つて返し、「ヤァあの若い者は、必定郡司が勘當の倅源六な。琵琶の姫を富樫に娶はさねば、主人景時一分たたず。早々渡せ。但し引立て歸らうか。一口返事。」と呼ばはつたり。「なう兄樣、あれこそ父の高名盜み、大河七郎。」と、聞くより源六槍の鞘脫し躍り出で、「よい目利。葛西源六清治、女房もらひの詰開きは存ぜず。永々在京して傾城にまぶれ、傾城の貰ひには隨分粹な男、郭の出入は槍が捌く。サア返事は此の槍先。」と、三段にまくりかけたりけり。「生ぬるいぬくわか、槍の柄切つて切り折れ。」と、喚いて掛るを左右に受け、槍一本に數しれぬ、刀を拂ひ打ち落し、急所々々を選び突き、手に立つ者も三重無かりしが、七郎が弟大河九郎、跡に廻つて石突本を確と取れば、七郎は印付の環をかけて握つたり。「ム、ウ汝等これ何とする。」「まつかうする。」と兩方より、打ちかくる切先を、頭を振つて受け外し、槍引き上げて一振ふれば、左右へばつと退きながら、直に切り込む二人が打物、石突と鋒先と、本末に受けながら、二間を五間に使ひなせるは手利の祕術、逃げても逃さず討つても討たせず、追ひ廻し追ひ靡け、二人が胸板はた〳〵はつたと突かれて、同じ枕にのる所を、押取り直して止めの槍、金輪際までぐつ〳〵、ぐつと通りし念力に、時の敵は討つたりと、兄弟顏を見合はせて、心を含

取沙汰聞くより右馬允、源六うち連れ走り付き「ハツ〱南無三寶。」と、驚く許り爲方なく、源六は勘當の、親の身に手も觸れられず、體の前に蹲り、「わつ。」と泣いては立ち上り、「相手は梶原主從。」と、驅け出でてもあてど無く、立ち戻つてもたまられず、「エ、どうかせん如何せん。子は有つてあり甲斐なく、かかる禍ひの御最期、我一人の不孝の科、御慈悲に御免。」と五體を投げ、大聲あげて歎きしが、「これ足立殿、敵四郎が幻術を行はば、我又念力を以て討ちとめ、父が恥辱を淸むべし。御身は妹連れられ、はや御歸り。」と言ひければ、右馬允かぶりを振つて、「いや〱、言上も遂げぬ契約は内證づく。采配めし上げられ、武名廢りし葛西と、一家の緣を結んでは、末代足立が家の疵、思ひもよらず。四郎を討つて武運開くる其の時、改めて結ぶまでは、ふつつと緣きる、暇の印は其の槍。」と、詞も名殘も振り切つて立ち歸る。袂に縋り琵琶の姫、「成り果てし我々ゆゑ、大事の弓矢の御家の名字、連れて下すも勿體なし、御前樣奥樣と言はれ度い望みも無い。奉公人と名づけて、御寢間の御用に召使うて下さんせ。」と、涙ぐむも痛々しし。「これなう譬へば禁酒する人が、酒醬と名づけても、飲む口は同じ酒。その如く奉公人と名づけても、寢間の用とは酒醬の奥樣、ならぬ〱。」「ム、御尤も御尤も。そんなら傾城白拍子は遊びもの、その身に成らうが必ず逢うて下さんすか。」「エ、くりごと。行先までの約束は、緣きらぬも同じ事。夫婦の緣は運次第。」と詞を形見に引き別れ行く姿、見送

いへサア聞かん。」と、肱を張つたる男まさり。幕打上げて父の郡司、「ヤア構ふな姫、蟲の樣なる下郞めと、諍ひ勝つて何面目。武運つきたる淸重が、腹きる樣を君へ申せ梶原。」と、刀を拔けば景時、「これは。」と走り寄り、「一徹千萬むざ〳〵と腹切つては、金の采配とりあげられ、武士道ながく廢つて、葛西の家の破滅笑止々々。こゝに一つの料簡あり。豫々申す此の姫の事、右馬允が先約を變改し、景時が仲人にて、富樫左衞門にめあはされよ。返禮には金の采配、家に傳はる樣に、御前は某請取りまうす。右馬允が義理一つ缺けば、和殿が武門の家も立ち、賴まれし景時が身分も立つ。萬一足立がこねるとも、上へ申して仕樣は樣々。景時に任されよ。」と呟く中より、ぐつと怒りの額の筋、はつたと睨んで、「やかましい景時。武士と武士との義理を違へ、娘が緣づきの御蔭を蒙り、武門を立つる葛西でなし。御邊なんどが取合で、金銀の采配千本もつても、蠅拂ひに劣つたり。この采配は忝くも君より拜受、娘に讓る。」と言ひ捨て、刀を肋にがばとたて橫十文字、返す刀の切先を、口にくはへ眞逆樣、俯伏に成つてぞ死したりける。「なう情なや。」と琵琶の姬、歎くに甲斐のあらばこそ。梶原えせ笑ひ、「不覺者の無念腹、切り損〳〵。武名すたつたしるし、采配召し上げらる。」と引つたくる。「いやいや命に換へし采配、渡しはせぬ。」と取り付くを、突きのけ〳〵、追はへ行くを追ひはらひ、梶原親子主從、立ち歸れば力なく、父の死骸に抱き付き、前後もわかず泣き居たり。葛西淸重切腹と、近邊

いもの、實檢に入れる首が無ければ、見參して何の詮も無い、まつ此の通り申せと、父郡司が口うつし、聞き給へや。」と伸びあがり「そも葛西郡司が、向うたる仙北の城郭、一方は海、一方は深田、後は嶮岨の山高うして鳥も通はず。籠りし敵は四郎高衡、凡夫を誑らす邪法を行ひ、形を隱せば水の月、目には見れども手に取られず、術を爲す事魔法の如し。されども郡司は老巧數度の軍に立渡る、霧の晴間によつ引いて放つ矢、四郎が馬手の膝口、箟深に射付けて、どうと伏す所に、御子息源太殿の郎等、大河七郎兼任、首を取らんと走り寄る。郡司押へて、無禮なり匹夫、我が主の場所なすて、餘所の攻口、他人の射とめし首取らんとは、法を知らぬ尾籠の者と、せり合ふ中に幻術自在の四郎、雲霧に紛れ失せてけり。郡司苛ちに苛つて、塀も櫓も乘り崩し、堀を埋め山を毀ち、五十四郡を探せども行方なく、無念の凱陣、諸人に面も合はされず。弓矢とる身は相互、君の御前は景時殿、幾重にも賴み奉る。是れより打立ち四郎が首引提げ、會稽の恥辱を雪ぎ度きとの申しやう。親の歎きは子の歎き、私とても同じ御願ひ。畠山殿和田殿歷々あつても、御前の執成は梶原樣、雀の千聲鶴の一聲、賴みまする。」とぞ語りける。源太が勢の中より「ヤア謊つかせぬ。大河七郎これに有り。四郎が膝口に射付けしは某が矢、われ攻口の城の大將。首は郡司に取らせて吳れと、競り合ふ閒に落ちうせた。直に急度詰開かん。」と、躍りいづるを立ち隔て「女なれども使は琵琶と言ふ淸重が子。言ふ事

子孫につたへられよ。」と賞すれば、能員いきほひ天にも到る、半月の印を持たせ、我が本城にぞ立ち歸る。次の幕より八田知家、伏縄目の鎧烏帽子掛して、射向の袖をゆりかけ、「某苟くも伊達次郎が江戸立籠る阿津賀志山の山城を一揉に攻め落し、討ち取る所の次郎國衡が頭候。」「神妙々々。當世の英雄誰か肩を竝べん。御許しの金の采配、握つて天下に憚り無し。」との褒美の詞、「忝し。」と木綿附の、鳥の羽の印をはつとのし立て、己が館にぞ歸りける。鄰の幕より嫡子源太景季、褐布の鎧直垂さわやかに著流し、「不堪の我等、僅かに父の箕裘をついで、櫃馬五郎が籠つたる、鳥の海の城郭を乘り崩し、五郎俊衡が首見參。」と、言ふより景時扇を上げ、「働き〳〵。汝は一年一の谷の追手、生田の森の手柄と云ひ、日本無雙の勇士、景時が子なるぞや。金の采配子々孫々に取り傳へよや。」梓弓、矢筈の印立てさせ、親子牀几を竝べしは、嚴しうこそ見えにけれ。稍あつて景時大聲あげ、「錦戸兄弟四人の敵に、味方も四人の大將、四郎が首は誰が取つたるぞ。實檢時移る、何事に隙取る。エ、馬鹿らしい。」と罵つたり。三蓋笠の印立てたる幕打上げて琵琶の姫、鎧にあらぬ卯の花染、裾の蹴廻し草摺長に、梶原が前にしやんと坐し、「人々凱陣の悦び迎ひ、我も〳〵と親子兄弟集まれども、葛西郡司は一人の男子源六は勘當、褻にも晴にも琵琶と申す娘、自ら迎ひにまゐり、最前より父の詞、ヤイ琵琶よ、なぜに男と生まれて呉れなんだ、男子ならば物具させ、打連れ向ふ程ならば、今の悔みは有るま

前髪より召仕ひ、家の法度を知りながら、博奕したるに疑ひなし。エ、憎し。」と、仕込杖おつ取り延べ、腰の番を碎けてのけと、打つ杖は痛からで、武士の情の骨に染み、頭も上げず泣き居たり。左衞門殆んど疑ひ晴らし、「拙者が扱ふ。もう御堪忍々々々。」といふをしほにて、「こりや、御詞故に赦し置く。あの奴が持つた道具、己かたげて供をせい。」「ない。」と許りに武士の、道あり仁ある心の底を、汲んで鳥毛の俄槍もち。安宅の關にて判官ぶちし、武藏坊にも懲りもせぬ、愚癡は其の身の富樫左衞門、わかれてこそは三重向うたる。奥州討手の諸軍將、葛西清重比企能員、梶原源太景季八田知家、切通の松陰に、面々のしるし大幕うたせ、鎌倉の左右を待ちければ、一家一門むかひの衆、持たせの行器悦びの酒肴、濱松の音ざゝんざの聲、酒に逢うても兵の、勇みある今日の酒宴なり。鎌倉より梶原平三景時、御代官として幕前に案内せさせ、その身は牀几に威儀正しく、「今度おの〳〵粉骨を盡し、強敵一時に滅びし事、多年弓馬の嗜み顯はれ、御感なゝめならず、重ねて恩賞御沙汰ある可し。在所々々へ歸つて休息せられよ。卽ち某御名代、首實檢。」と述べければ、幕の内より比企能員、洗革の鎧同じ毛の甲を高紐に掛け、弓手の膝をついて、「不肖の某、錦戸太郎が平泉の城を受取り、手痛く攻むれば泰衡たまらず、蝦夷が島へ逃げんとせしを、國分が原に追詰め、討取る首に候なり。」「げに拔羣の高名、古今に比類なし。大將分の印として、君より授け賜はつたる金の采配、ゆゝしく

き悔むに甲斐も無く、當社の神力を祈り、勘當の訴訟せんと參詣せしに、富樫左衛門それ浪人よと取り廻す。鎌倉追放の某、詮議にあうては身の難儀。何とぞ思案あるまいか。」と、語る間に富樫が郎等、目を光らして驅け廻れば、負うた子より抱いた子、「先づ御姫樣大事ぞ。」と、腰元附々引包み、餘所にや森の下道を、人目忍びて歸りけり。程なく富樫驅け來り、「そりや以前の奴逃すな。」と、前後を圍んで左衛門大聲あげ、「編笠著ながら神前を拜し、世を忍ぶは浪人に紛れなし。出所住所假名實名つぶさに申せ。主持なれば誰が家來、つゝまず申せ。上意によつての詮議なり。何と〳〵。」とぎしめけども、身の上も名乘られず、陳ず可き當話も出ず、一期の浮沈と引繕ひ、死に身に成つてぞ居たりける。足立始終は聞きたれども、相役なれば用捨もならず、「エ、手ぬるし富樫殿、笠を手繰つて面を御覽ぜ。」「尤もざふ。」と笠うち落せば、二十二三の屈竟の男、誰見知つたるものも無し。右馬允横手をうち、「ヤおのれは身が槍持の澀平め、言語道斷の曲者。病氣と僞り奉公ひき、主人も恐れぬ遊山あるき、手討にしたい奴なれど、公用の門出ゆるし置く。富樫殿御覽なされ。下々に慈悲をなせば、けつく主を侮る、重ねては首が飛ぶ。以後をたしなみ供せい。」と、裏は情、表は劍の詞の五音、源六は夢見し心、富樫二人の目色に氣を付け、「合點參らぬ足立殿。槍持に似合はぬ刀の拵へ、前髮つらを見た樣な。」と言はせもたてず、「ム、尤も能う御心つけられた。三年の切米にも叶はぬ、大小の鐔縁頭。」

千萬々々忝し。さりながら、足立づれの端侍が、御姫方に口とらせて乘るならば、罰が當つて落馬致すは定のもの。かの僧正遍昭が、女郎花と言ふ草花の罰あたりて落馬して、我落ちにきと人に語るなと、詠ぜし歌を聞くに付け、なう十七八の娘の罰はあらたな物、御放しなされ。」と引き取る手綱、「放せとは他人むきかいの。夫と師匠は主同然。張良とやら言ひし兵も、師匠の沓を取りしぞや。女房の身で夫の馬の口取るに、なんの辭儀の入ることぞ。思ひこがれて氣が騷ぐ。いつそ此の身を鞍にして、乘り鎭めて下さんせ。」と、前輪に縋り、「なう右馬樣々々々。」といへば、馬はおのれが事と、頭を低れてしなだるゝ。右馬允もにくからず、「琵琶の姫とは見つれども、言上を經ぬ間は互の遠慮。舅郡司殿もはや大佛の切通まで凱陣。近々に言上し呼びむかへて其の夜から、足立右馬允景久が妻女房ぞ。先づ夫れまでは葛西郡司殿の姫君、御手を汙し慮外至極。」と鞍越に手を取り替し、戴き合ひしめ合ひ、につと目元に溢るゝしほ、馬の脊重き戀の重荷、やがて嫁入のしるしかや。かかる所に鳥居のうち人騷ぎ、朱鞘の大小編笠目深の若者、走り出でて姫に縋り小聲になつて、「なんと久しや妹、兄源六郎清治おほえてか。」「ヤア兄樣か。年月あんじ暮せしに、是れはどうした態ぞいの。」「さればされば、始めて父の名代、大番にのぼり京珍らしく、傾城狂ひに身を持ち崩し、放埓無法の行跡ゆゑ、勘當うけて遠國に漂泊し、今度奥州御征伐、父諸共に向ふべき身が、弓矢神に捨てられし親の罰、歎

「さつても御縁ふかい許嫁の殿御樣と一時の神まゐり、あの馬に御姫樣のお心づいたも是れ不思議。」と、言へば下女のお福が、「ハテ右馬允樣の馬ぢやもの、御姫樣のおなかへ應へるはずぢや。」と笑ひける。姫も嬉しく遣瀨なく、「八幡樣の引合はせ、是れを序に御顏も見たし、詞を替そ。サア皆おぢや。」と、進みたまふが、「いや〳〵氣の毒が有るわいの。同道なされし富樫左衞門、自らを妻にと父上に貰ひかけ、梶原賴み威勢を以て言ひ掛けても、足立殿へ先約とて、御承引なき恨み、父上に顏を振り、武士に似合はぬさもしい心、妨げなすは知れた事、止めにしよ。エイまゝよ、行て御目に掛らうか、大事の殿御の浮名やたたん。エ、邪魔なやつ、名もとが〳〵しい富樫め、寸善尺魔胸の癪。」心に足の有るならば、神の忌垣も越えぬべし。神樂終れば足立右馬允、旅いでたち綺羅やかに、長羽織の徒士の者、「旦那御下向御馬引きませ、御馬々々團介鴈介、參れ。」と呼べども油斷の馬取、方々散つて出で合はず。便りにひかるゝ琵琶の姫、「馬取これに罷りある。」とは女とも見えず、男づゝみの染手拭、小褄きりゝに裾短、一振ふり出す手付腰付、「ハイドウ。」口繩解いて手繰りくり〳〵膝栗栗毛の、胡馬北風に嘶えいなゝく、「君が御馬に取付いた。千里も萬里も二世も三世も、添うて離れぬ御馬添。いざ、いざ〳〵、召しませい。」とぞ引き廻す。一目見るより夫れとは知れども、餘所々々しく、「扨々おやさしい。是れは誰方の姫君ぞ。中間共が野良をかわき、近所に無きを御笑止がり、情と申し御心きき、

巡檢せよ。」との御諚にて、御暇賜はり、扨若宮の御代參、神事の御沙汰こまやかに、君が誠の德ひろく、雲居に渡る鶴が岡、神威も增して三重ますかゞみ、萬代てらす若宮に、鐘の緒も解く夢も解く、夢違ひの御神事と、世上に響く鈴の聲、神樂の笛のあな尊やと、老若喜び沸え返り、湯だて參らす鎌倉の、谷七郷が袖はえて、紫、淺葱、うこん紅梅、鶯の、縫ふてふ花の名にし負ふ、葛西郡司淸重が、祕藏娘の琵琶の姬、右馬允景久と、妹脊の緣の許嫁。父の郡司は奧州より、はや凱陣と聞くに付け、嫁入は何時ぞ、ア、しんき／＼で夜の目もろくに、差異も無き夢の氣がゝり祈らんと、乳母腰元氣に入りの、下女のお福がよぢり腰、徒歩を拾へば足長の、鶴が岡にぞ著き給ふ。外を見つけぬ奧女中、「是れは／＼賑やかな、賣物見せ物鳥居の奧に鼓太鼓が聞える、御神樂が始まつた。サア御急ぎ。」と、そゝれば姬君「ア、待ちや／＼あれを見や。下馬に乘馬を繫いだは、旗本大名の參りか。もし知る人の方ならば、嫁入前の自らが、善し惡しの評判受けるも嫌らし。」と、宣ふ折から、破れ烏帽子に白張裝束、御幣かたげて來る男、乳母立ち寄り袖をひかへ、「是れ禰宜どの、あの馬は誰さまの參りぞや。」と問ひければ、月毛に靑貝の鞍は富樫左衛門殿、黑栗毛に蒔繪の鞍は、足立右馬允景久殿、二人共に大役承り、その悅びの門出の社參、神主殿へ銀百枚、社家中へ十枚づゝ。こちらがやうな糟禰宜仲間、三十人へたつた錢一貫に三升樽、その代りに強飯が喰ひ放題。」と、言ひ捨て通れば腰元中、

組の契約、足立にいさゝか誤りなし。富樫が關所の不吟味は、天が下に隱れなし。大事の公用貴殿の贔屓なればとて、些とも憚る重忠ならず。」と、諂はず飾らぬ賢者の詞。景時また閉口し、御前しらけて笑止なり。賴朝公天性人を捨てたまはず、「富樫も今は先非を悔み、役儀に不念も有るまじ。足立富樫兩人に申し付けられよ。若し相詰め有るならば、これへ召せ。」との御諚。折ふし足立右馬允景久、富樫左衞門宗重、侍所の當番にて、召しに應じて出でければ「近う〳〵。」と御座近く召され、「京鎌倉町屋住ひ、諸浪人吟味の事、二人にまうし付くる條、委細老中の下知を請け、詮議を遂げよ。」と宣ふ所へ、御廣間の取次まかりいで、「今度奧州秀衡が子供討手の軍兵、御味方大きに勝利を得凱陣つかまつり、先手の軍大將、葛西郡司淸重、梶原源太景季、八田知家なんど、大佛の切通までまかり著く。すぐに鎌倉へ入れ申すべきや、伺ひ奉るとの訴へなり。」とぞ申しける。賴朝御喜悅淺からず、「錦戶兄弟四人の者は、平家同然の大敵、誅罰する事先祖の威光、源家長久のしるし。討手の者ども早速對面すべけれども、帝御夢の愼み、鶴が岡に奉幣使を以て、御湯神樂をさゝげ、夢違ひの神事を思ひ立ち、火水を淸むる鎌倉、血をあやせし軍兵おそれあり。しばらく切通に控へさせ、卽ち景時、汝賴朝が名代として出でむかひ、敵錦戶太郎泰衡、伊達次郎國衡、四郎高衡、櫃馬五郎、兄弟四人が首を見屆け、味方の者共高名の實否を糺し、後日に違亂なき樣に記し置け。二人は近郷立ち別れ、

ごき、兵亂のしるしには、陰陽の氣まづみだれて、草木に金銀の異形の花咲くと、鶴林玉露に見えたり。彼是引合はせて考ふれば、邪法を弘むる異人ひそかに、諸人をなづけ徒黨を結び、王法を傾くべしと、佛神の御しめし。もつとも御愼みの御夢候。」と、例を引き書を引き、義理明々と述べられれば、大將、「アッ。」と感心あり、辯口我張りの梶原も非難うつべき詞なく、頂を下げて聞き居たる。賴朝暫く御思案あり、「今儒佛さかんの神國に、邪法を弘むるものなんど、よも有るまじとは思へども、九郎義經が郎黨常陸坊海存、仙術を學び、高館落城にも其の行方なし。所詮横目の武士を選み、京鎌倉の町屋に住む、諸浪人の詮議せさせん。役人には誰々か然るべき人柄、沙汰せられよ。」と宣へば、伺候の人々一同に、「浪人改めとは御尤もの御政道。」と、役人の評定あり。重忠は、「足立右馬允しかるべし。」と申さるれば、景時は又、「富樫左衞門こそ一器量ある勇士、是非富樫を。」と遮つて言上す。重忠かさねて、「いや〳〵富樫左衞門は、一年領分安宅の關を預り、判官殿の作り山伏を十二人まで見損ぜし不眼力、御役柄不相應。」と有りければ、景時おほきにせいいて、「ヤア某が言ふ程の事うちこむ氣か。足立右馬允は先づ年若し、殊に上意も伺はず、葛西淸重が娘と緣組の約束したる我儘者。御分が足立を贔くごとく、この景時は富樫贔屓。」と、顏を赤め聲を張る。重忠嘲笑ひ、「天下の御政事に贔屓とは、梶原殿ちと御麁相。諸大名の婚禮、先づ內談極まつて、其の後伺ふ掟なれば、葛西が娘と緣

心の影、體も性も無い事。夢あはせ夢判じなどとは、覡陰陽師の渡世。鎌倉殿の問注所にて、歴々あつまり眉をひそめ夢評定、智ある者の笑ひ草。」と、一口に言ひけなせば、君を始め滿座の人々、赤面してぞ見えにける。畠山重忠、景時が過言を聞き兼ね、「是れ梶原殿、この御評定を智ある者の笑ひ草とは、この重忠は其の笑ふ人こそをかしけれ。既に周禮の占夢に、六種の夢をあげて、占ふ旨を記せしが、聖賢の書をも笑ひ草にする人は、如何なる智者か承らん。」と詰められ、「なう書面ばかり聞きはつり、義理を知らぬは外題學問、これ笑ひ草。但し學力ある重忠殿、この夢何と占はれし。如何に〳〵。」と言ひ募る。「いや御邊の尋ねに及ばず、心を殘さず申せとの仰せ。某が考ふる所よく聞き、不審あらば難ぜられよ。そも此の夢、日は日本神道、月は月支佛道、佛神二つの道を、王法左右の翼として、世を保ち國を治め、民を教化し給ふなり。陰陽家には仙宮の蛙、息を吐いて虹と成ると沙汰せり。蛙は卽ち蝦蟇仙人が仙術、不思議自在の奇特を顯はし衆生を迷はす、道に似て道にあらず。儒には是等を異端と嫌ひ、佛家には邪法と破す。この邪法國に起り、日月の翼を踏み折れば、王法忽ち覆り地に墮つる瑞夢ならずや。昔揚雄が甘泉の賦を作り、文章に案じ勞れ寐し夜の夢に、五臟六腑を吐くと見て、その朝より心神疲れ果てしとかや。智は身の內の寶、棚引く虹は國土を潤す、雨露の氣にして天地の寶、天の寶を吐きつくせば、天の氣おとろへ、國土も枯るゝ道理。國に弓箭う

傾城島原蛙合戰

第一

是に似たる非ありと註せし、程明道の詞盛んなるかな。こゝを以て知んぬ、佛を說くの法正に似たる邪あり、君に仕ふるの道、忠に似たる姦人、玉と欺く白露の、澄み濁る世を明らけく、流れを正す源の氏の再興、六十餘州の總追捕使、大納言の大將賴朝卿、威權四海に儀型たり。文治の帝後鳥羽の院、不思議の御夢を御覽あり。御夢の吉凶、國土の治亂に係る趣、安倍卜部の勘文、武家に是れを考へ、政道たゞさるべしと、御夢の全體を繪圖に寫し、鎌倉に下し賜はれば、問注所の南向き、上段の牀にかけまくも、畏まつて御拜見。大江廣元、和田畠山、千葉梶原、同じく拜見して面々に、工夫を廻らす夢判じ、凡慮の及ばぬ所なり。賴朝はなはだ怪しみ給ひ、「能く見られよ方々。僧とも俗とも別け難き異人、兩足に日月を踏んで雲に乘り、口より五色の虹を吐き、大地の草木黃金の花、咲きたるとの帝の御夢、吉凶いかゞ心を殘さず、評定あれ。」と宣へども、短才不學の身を愧ぢて、おのおの詞なき所に、こと知り顏に梶原平三景時進みいで、「異な事に御心を費さる。もと夢は元氣の虛

國(くに)こそ樂(たの)しけれ。

平家女護島 終

はめ、暴惡を恣にせし其の天罰、廻つて木曾義仲に、なれし都を追ひ出され、落ちて行方も赤間が關、安德天皇をはじめ奉り、女院二位殿一門以下、皆入水と聞えしかば、すは勝軍と源氏の武士、船よりつくる鬨の聲、水のしら玉たまの緒も、ともに消え行く舟戰、今日を限りと見えにける。能登守教經端船に取り乘り、義經に見參と、心を配つて漕ぎめぐる。源氏の方より安藝太郞實光、同じく次郞光行と名乘つて、敎經の船に漕ぎならべ、手取にせんとしつかと組む。敎經いかつて左右に二人を取つて引きしめ「いさうれおのれら、能登が最期の供せよ。」と、「うん。」と締むる小腕を取り、放れん放さじ、退かう退かせじ、えいや〳〵と組み合ふ音、船を踏みしめ踏み放し、逆卷く波はどう〳〵どう、三人一所に海中へ、どうと落ちたる水の泡、消ゆると等しく海の面、忽ち元の宇津の山、磯打つ波と聞えしは、草の葉渡る風の音、義朝の頭枕の上、眠りの夢は覺めにけり。文覺むつくと起き上り、あたりを見廻し「ム、聞えた〳〵。邯鄲の枕に五十年の夢を見し、それは唐土是れは又、義朝が曝首を、枕にしたる一睡に、平家の滅亡源氏の榮えを見たること、夢にあらず現にあらず、正八幡の告げぞかし。賴もしし賴み有り。見よ〳〵平家に泡ふかせ、源氏一統の御代となし、天下太平國繁昌、五穀成就民安全、めでたい盡めにして見せん。」と袋おつ取り首にかけ、勇み勇んで急ぎける。百億萬歲末かけて、ゆるがず動かず傾かぬ源氏の腰おしは、六神通の文覺が從ひ守る神と君、久しき

にも見參の引出物いたさう。是れは故左馬頭義朝の曝首、二度の朝敵と六條河原に曝せしを、奪ひ取つて肌を放さず。頂戴あれ。」と前に置き、念珠つまぐり座をくめば、兄弟牀几をまろび下り、中にも義經「オ、情なや口惜しや。運を計り時節を待つとは云ひながら、早速御敵清盛を討ちもせず、一度さへ有るに二度獄門の木に曝させ、御名を汙せし不孝の恐れ。早く平家の一門が、首取つて大路にさらし、父上の修羅の妄執、今生のあたを報じたや。」と、をどり上つていかりの涙。賴朝は默然といはで歎きも一入に、二人の心思ひやり、伺候の軍兵眼を見合はせ、皆あはれをぞ催しける。かかる所へ有王丸、大汗に成つて馳せ付け、「俊寛が郎等有王と申す者。君しろし召されずや、木曾冠者義仲、北陸道より打つて上り、一戰にも及ばず、平家はこと〴〵く西海へ逃げ下る。法皇のまします牢の御所に亂れ入り、是れをも一所に西海へつれ參らせんと謀りしを、有王やう〳〵に盜み出し、法王は當國三島の明神まで供奉仕り、某一人うつたへの爲參上。」と、大息ついで述べければ、賴朝甚だ驚き給ひ、「早速の注進過分々々。同じ源氏の一類なれども、義仲に平家を討たせては、賴朝が末代の恥辱遁れがたし。我は有王を召し具し、法皇の迎への爲、三島へ馬を馳すべきぞ。我が代官として義經六萬騎の勢を引率し、夜を日に繼いで都にのぼり、平家の一門根をたつて、早く凱陣有るべし。」と絕えて久しき白旗を、雲居の外までなびかせて、出陣有るこそ三重ゆゝしけれ。然るに平家榮華をき

途の川瀬中有の旅、つくりし罪より友もなき、*妻子珍寶及王位、臨命終時不隨者の、佛の金言まのあたり、身の毛も立つて世の人の、永き教へと成りにける。

第五

次第思ひやるさへ遙かなる〳〵、東の旅にいそがん。「是れは高尾の文覺なり。我伊豆國の流人、右兵衛佐頼朝をすゝめ、平家追討の義兵を起させばやと思ひ、ひそかに院宣を申し下し、只今伊豆國蛭が小島へと急ぎ候。ア、づなう草臥れた。意地にも我にも百里たらず、二日にはきつい道。とろとろと見しらして、又一息にやつてのけよ。さらばころり。」と伏柴の、枕にかりの頭陀袋、寐るより早く高いびき、地雷かと疑はる。時に文覺假寐のたましひ、たちまち體を顯はれ出で、今目前にありありと、亡ぶる平家の有りさまを、夢ともわかず現とも、いさ白旗を三重ひるがへす。扨も兵衛佐頼朝公、關八州を切りしたがへ、其の勢すでに十萬餘騎、御舍弟九郎御曹子義經、秀衡が勢を驅り催し、奥より切つて伊豆國、心も勇む浮島が、はらから御陣をめされける。時に文覺法衣をあらため、二人の中に立ちはだかり、「和殿は聞き及ぶ牛若丸な。今元服して義經とは、ヽオ、眼の内の賢しき生まれ。和殿久々にて舍兄頼朝に對面さぞ滿足。先だつて頼朝には、平家追討の院宣、申し下して參らせつ。和殿

言ふ聲ばかり、姿は消えてもえ立つ火焰、筧に入るよと見えつるが、流るゝ水の忽ちに、焰と成つて落ち來る音、渦卷き上る黑煙に、御所中俄に暗となり、目前焦熱大焦熱、火煩地獄の有樣も、斯くやと覺えて凄まじし。入道叫んで「宥せ〱、熱や〱堪へ難や、苦しやの、やれあた〱。」と身をもがき、やう〱に這ひ上り、小袖引きぬき裸身を、もしやとずつぷり石舟に、浸せばくら〱水は其のまゝ湯となつて、沸き返り煮え返り、湯玉虛空に迸り、業火の筧心火の瀧、五體に焰をいたゞけば、百節の骨頭、爛々々燃え上り、しゝむら裂けて炭の如く、一世の惡逆身に積り、年も積つて六十四、治承五年閏二月四日の日に、熱や〱のこがれ死、生火葬とは是れやらん、哀れはかなき最期なり。依正兩輪の火の車、雲中にとゞろけば、清盛の胸中より車輪のやうなるひかり物、顯はれ出でて虛空にあがり、車に乘ると見えつるが、無の字の筆畫あり〱と、無間の底に沈むべき、二位殿の夢の告、今こそ思ひ知られたり。「今こそ本望遂げたり。」と、虛空にあがる二つの玉、邪慳の長柄を押し立て〱、立ち去る車の響に驚き、二位殿あわて出で給ひ、見れば敢なき面影の、いぶせくも悲しくも、空を仰ぎて「わつ。」と許り、歎き沈ませ給ひける。人々立ち寄り諫め參らせ、奥に誘ひ奉り、清盛の御骸を、津の國兵庫の名にし負ふ、經が島にぞをさめける。天子外祖とかしづかれ、此の世にきはまる位をふみ、六十餘州に威をふるひ、古今獨步の人なれども、又かへり來ぬ死出の山、三

か、遁さじ。」と、ちらめく焰に打つてかゝれば後より、引きもどすは千鳥が妄執、其の魂がつきまとひ、引き付くるを事ともせず、切りはらひ〳〵、衣服脱ぐ間も「あら遲や。」と水舟に飛び入つて、頭を浸し身に浴びかけ、暑さを凌ぐ有樣は、劍に鍛ふ燒きがねを、水に入れたる如くにて、殿中ふすほる許りなり。すは又響く家鳴につれ、あづまや千鳥二人の姿、筧の上に現はれ出で、「さなきだに、女は五障三從の、相ノ山重きが上の憂き思ひ、夫は何處と不知火の、筑紫の果てや國の果て、合鬼界が島にながされて、跡に焦るゝ閨の内、糸文辛苦せねども顏瘦せて、戀しゆかしの日に添へば、今は心も亂れ髮、夫の歸洛をいつかはと、待ち兼ねし身をむごらしや、解けとせつきし下紐の、解かれぬ義理に身を捨てて、永き別れとなしたるも、不義より起る心の劍、我と身をきる最後の一念、盡未來際生々世々、放れじ退かじ。」と、はつたと睨む眼の光、矢を射る如く照り輝き、五體を劈く許りなり。「我を土足に掛けまくも、沈みし君を助けたる、科とて殺す心の刃、非道のあなうら大地を劈き、島に殘せし父上も、今は冥土の友千鳥、汝も冥土の友がらす、同じ暗路の苦患を見よ。」と、頭をつかんで引上ぐれば、天にもつかず地につかず、中有の呵責を今爰に、嗔恚の猛火に雨と降り來る、くるくるくる、「まつ倒に、おちて奈落の苦しみを、思ひ知れや。」と怒りの顏、恨みの息づき、照る日に移ろふ明鏡の、光りわたるに異ならず。「父の憎しみ身の敵、夫の罪障身のほむら、今こそ最期。」と

弓勢、假に姿を變化して、たばかつて斯く退けたり。今こそ思ひしらせん。」と、二人のすがた消ゆると等しく、瞋恚無明の二つの焰、ひらめき轟き入道の、ふしどに飛んで入るよと見えし。「はつ。」と許りに女房達、二位殿を介抱し、はふ〱逃げ入り給ひける。障子蹴破り太政入道、「なう熱や情なや、五臟六腑を燒き焦す。ヤレ骨を焚くわ身をもやすわ、堪へがたやあら熱や。」と、天をつかみ地をつかみ、「苦しや助けよ。」と吐く息も、猛火となつてかへつて身をこそ燒きにける。多くの女中次の間に、熱さは共に身を燒く如く、傍あたりへは寄り付かれず。入道息も絶え〱に、「水よ〱。」と呼ばはれば、「そりやこそ。」と女房達、用意の筧にしかけたる、千手の水を手ん手に汲みながせば、筧に傳ふ水音も、左右にわかれてさつ〱と、さゞれ石舟さゞ波立ち、水どう〱と湛へたり。心よげに入道、飛び入らんとしたりしが、眼に物や見えつらん、枕の小太刀おつ取り、虚空を睨み大音上げ、「めづらしや賴朝、命を助け流し置きたる昔を忘れ、平家に弓をひかんとは、恩を知らぬ大惡人。おのれは牛若小冠者めな、鞍馬そだちの精進腹、入道を討たんとや。年こそ寄つたれ手練を見よ。」と、太刀拔き放し、うつゝの人に詞を交すえいやつとう、虚空を相手に八方無隅、受けつ流しつ切り合ひしが、飛びしさつて身構へし、「ヤァ此の大首は何者、何ぢや奈良の大佛ぢや。ハ、〱〱〱、事をかし事をかし。淸盛に燒き潰さるゝ身を以て何の恨み、何の仇。歸れ〱。何、歸るまいとは。又あづまや

りあひ給ひしが、はるか上座なる老翁、『此の二十四年平家に預けたる、將軍の節刀を取りかへし、伊豆國の流人、兵衛佐頼朝に、得させんずるわ。』と宣へば、一座の各領掌有る。かたへの人に名を問へば、『上座は八幡大菩薩、かくまうすは武内の神なり。』と、いひも敢へず霧霞と影きえたり。御夢といひ我が見る夢。かた〴〵御つゝしみ。家門の大事。」と宣ふ所へ、信濃國藏人庭上に畏まり、「故帶刀先生が次男、木曾冠者義仲義兵を起し、其の勢すでに雲霞の如く、安曇の城にたて籠り、又東國には流人兵衛佐頼朝、院宣を申し下し、北條四郎をかたらひ、山木判官を夜討にし、石橋山に城郭をかまへ、ゆゝしき御大事に候。」と、いまだ訴へをはらぬところへ、筑紫宇佐の大宮司公通、あわたゞしく罷り出で、「鎮西の住人緒方三郎維義平家を叛き、彼に從ふ戸次臼杵松浦黨、みな〳〵源氏に心をよせ、伊豫國には河野四郎、紀州に熊野別當湛増、鈴木をかたらひ源氏にしたがひ、平家に弓を引かんとす。早く討手をつかはされ、然るべからん。」と言上す。二位殿を始とし、人々耳を驚かし、あきれ果てたる許りなり。教經眉に皺をよせ、「東國北國のそむく上、南海西海盡く敵となり、急なる事眉に火の付く同然。病氣のさはり入道殿へは沙汰御無用。宗盛公へ參上し一門あつめ、討手の手分いたさん。」と、言ひ捨て御所を退出有る。信濃藏人大宮司公通つゝ立ちあがり、「知らずやわれこそあづまや千鳥二人が亡魂。情なや清盛に命をとられし恨みの魂魄、憂き目を見せんと思ひしに教經が

と引き絞る。後に女の又そつくり、「我は千鳥といふ女、わどのに受けたる恩はなし。歸れといふに歸らずば、入道もろとも同じ憂き目をみつせ川、來れ。」と髻しつかと取り、「えい。」と引かるゝ梓弓。教經臆せず拂ふ本弭末弭に、「恐ろしや三十番神まし〳〵て、魍魎鬼神は穢らはしや。出でよ〳〵とせめ給ふぞや。腹立や思ふ人をば取らで、剰へ神々の責を受くるか口惜しや。」と、かつぱと轉べば、大音上げ、「正四位下能登守平朝臣教經。」と鳴弦し、きり〳〵と引き絞り、ひやうと放つ矢さけびに、二人の女も行きがたなく、忽ち障礙消え失せて、御所の震動安全たり。二位殿悦び帳臺を出で給ひ、「今に始めぬ教經の弓矢の德、お手柄〳〵。是れに付けてもなう過ぎつる夜、我が見たる夢ばなし。能登殿近う。」と招き寄せ、聲をひそめ目は涙、「いふも語るも忌はしや、音に聞く火の車といふ物か、牛の面馬の顔なる鬼共が、猛火の燃え立つ車一輛、御所の內へやり入るゝ。恐ろしや此の車に、いかなる者を載するぞと、夢心地に尋ねしに、平家の太政入道殿惡行超過し閻浮第一の大佛を、燒き亡ぼしたまふ科によつて、無間地獄へ沉めよと、閻魔王の仰せにて、迎ひの車と答へしが、夢は其の儘さめつるぞや。神明の守りも絶え、三世の佛の綱も切れ、ながき苦患や見給はん。今度や娑婆の限りかと、思へば氣も消え心消え、入道より自らが命ぞ先へ。」と許りにて、身を投げ伏して泣き給ふ。教經御手をはたと打ち、「あら不思議や、某が夜前の夢、所は大內の神祇官、束帶まさしき人々數多寄

波次郎氣層者、「いやさ變化ばけ物は、臆病な氣を見すかして業をなす。難波かくて候はば、天狗にもせよ鬼でも有れ、障礙思ひも寄らぬこと。あはれ化物かう言ふ内に來れかし。取つて捻ぢ伏せ手取に致し、藥入らずにきつぱりと、御快氣を見せ奉らん。」と、目に見ぬさきの口廣言。女につと會釋して、「天狗の鬼のといふまでなし。誠は我はあづまやとて、俊寛が妻の幽靈ぞや。サア手取にして見よ。」と、言ふより姿はつと消え、忽ち人のしやれかうべ、座中一ぱい充滿たり。詞には似ず動顚し、「ヤレ恐ろしや、なう怖や。」と、驅け出す裾を引啌へ、追ひまはし追ひすくめ、逃げもやらず居もやらず、念佛陀羅尼お題目。一つごつちやにしやれかうべ、上になり下になり、轉び合ひ轉び退き、火鉢の中へ飛び入り〳〵、ぱつと燻ぼる煙のうち、一塊に山の如く、頭一つに目は百千、睨む光は流星の、渦卷き上る如くにて、「わつ。」と戰き膽を消し、輾けつ轉びつ逃げ散れば、俄に家鳴り震動し、大地もくづるゝ許りなり。江戸 能登守教經萌黄匂ひの腹卷、上には狩衣引きちがへ、重籐の弓張月、星切斑のとがり矢、搔い込うで大牀に躍り出で給へば、女の姿又顯はれ、「珍らしや教經殿、我あづまやが幽靈なるが、御身蟇目を以て、我を追ひ退けんとの、弓矢の威光に壓され、情なき入道に近づく事かなはねば、恨みを報ぜん樣もなし。情ある能登殿に恨みはなし。弓矢をふせて歸つてたばせ給へとよ。」「何あづまやが幽靈とは事をかし。化け損ひの古狸正體あらはせ。左もなくば能登が一矢。」

所、二位の尼君樣のお使。今日はいつ〳〵より心を付けてのお宿直。化物も顯はれず、お心の騷ぎもなく、上にもすや〳〵お鎭まり、一入二位樣の御滿足がり。さゝ一つめされて彌御番油斷なき樣にまうせとの御事なり。」と述べければ、各「はつ。」と頭を下げ、中にも番頭難波次郞經康、「冥加にあまる仕あはせ。御禮は使のお執成。ついては外樣の我々、御不例の御容體しかと存ぜず。憚りながら御物語。」と尋ぬれば、「さればいな、過ぎつる嚴島の御下向より、夜晝に四五度づゝ、たゞ身が燒けるあた〳〵と許り御意なされ、お熱のさす折からは、あたり四五間の熱さ〳〵、眞夏の土用に百二百のお釜を、一度に焚く樣なと思はんせ。御看病中す私はじめ一人もお傍へ寄付かれず。せめて御心も涼しいやうと、御覽なされ彼の如く、お庭に水舟を据ゑ、比叡山千手井の水は日本一の冷い水、每日每日汲み寄せて、あの筧から流し込み、すつぽりと水に浸り、お頭からさつさと、音羽の瀧にうたる樣になさるれど、其の水さへ沸湯の樣になりまする。お熱のささう知らせには、此の御所が鳴り渡り、あすこの隅がめき〳〵〳〵、こゝの隅がぐわた〳〵〳〵。」半分聞いて一座の者、そろり〳〵とにじり寄り、「して其の跡は何と〳〵。」「此の跡が猶怖い。かう竝んで居る疊の下がむく〳〵〳〵。何がお目に懸るやら、空を睨んで、ヤイ又來たか、ソリヤ來たわ、遣らぬとてはがさ〳〵〳〵、遁さぬとてはどた〳〵〳〵。それは〳〵恐ろしい事。」と、語れば座中色靑ざめ、片息になつて聞き居たる。難

蜑。あづまや樣は母樣同然。母の敵父のかたきの入道。法皇樣は一天の君、お命にかはると思へば、数ならぬ蜑の此の世の本望。殺されても魂は死なぬ。一念のほむらと成つて皮肉に分け入り、取り殺さいで置かうか。エ、無念や。」と怒りの齒ぎしみ、恨みの涙、磯打つ浪に村雨の、篠を亂すがごとくなり。「膽の太い入道に取りつかんとは蟷螂が斧鉞より是れ見よ。」と、さそくに掛けてえい〱えい、頭微塵に踏み砕き、がばとふみ込む波さかまき、潮のひゞき震動し、死したる千鳥が骸より、顯はれ出づる瞋恚の業火、清盛の頭の上、車輪の如く舞ひくるめく。ぞつと身ぶるひ色かはり、「うん。」と一聲顚倒し、目口をはつて戰きける。隨身雜色「是れは。」と驚き抱き起し、「藥よ水よ。」と呼び生くれば、すつくと立つてあたりを眺め、「汝等は何も見ぬか。オ、氣味わるし〱。法皇も逃げば逃せ。命が物種。都へ歸らん船急げ。」と水主楫取玉の汗、海は水玉火の玉は、放れず去らず都の空、慕ひ行くこそ 三重 恐ろしき。身亡びんとする時は、災害ならび至るとかや。扨も入道相國御心地例ならず。殊更御所中さま〴〵の妖怪、或は屋鳴光物、色々の姿あらはれつ、物あやしきこと限りなく、いかさま變化の業ならんと、晝夜をわかつて宿直の武士、そよと物音風音に、火鉢のぜう*の動くをも、心を配つて守りける。常に外樣の男とは、顏見合はすも法度にて、互に心おく女中、二十三四の色盛り、町の風とは一位、顏も姿も格別に、土器瓶子携へ出で、愛想らしく手をついて、「わしは入道樣の御臺

て海に飛び入りしが、足立つ程は立ち泳ぎ、「お命すくひ奉らん。必ずお身をもむまい。」と、乗り越す汐には拔手を切り、泳ぎのぼればさら／＼／＼、さゞ波高く押し流され、見る目を力にたぐりくるくる、みなぎる波を巴の字に開き、渦巻く逆巻く波枕、海に馴れたる蜑の業、ずつと水練に姿も見えず。船には弓槍太刀長刀、刃をならべ眼をくばり、浮かば切らんと待ちかくる。陸には有王身をもめども、烏が鵜の眞似爲方なく、拳を握つてひかへたり。清盛いらつて、「ナアうつそりめら陸を見よ。俊寛が下人有王丸。先づ彼奴から打ち殺せ。」畏まつて飛びおり／＼、「命しらずの前髪首、さらへ落して根付にせん。」と、憎體にのさばれば、有王くつ／＼と打笑ひ、「口有る儘にほざいたり。ものほしいをりからよい慰み。」と、面もふらず割つて入り、磯打つ浪のまくり切り、木の葉を誘ふ山おろし、もみ立て／＼三重切りちらす、有王に切り捲られ、むら／＼ぱつと逃げ散つたり。難なく千鳥、法皇を、肩に引つかけ浮み出づれば有王丸「ハア、お命安全めでたし嬉しし。こつちへ任せ。」と波打際におり立つて、脊中に潮を淨めの垢離、法皇を肩に負ひ奉り、足に任せて落ち行きける。其の隙に淸盛長熊手追取りのべ、千鳥が頭にざつくと打ち込み、えいや／＼と引く汐に、逆ふ千鳥がうきくるしみ、舳先にどうど引き上げ脊骨を蹈まへ「誰に頼まれ憎い蜑め、引き裂いてくれうか。エ、腹立や。」と、胴骨をしつかと蹈まへて睨め付くれば、「オ、蹈み殺せ喰ひ殺せ。俊寛が養子千鳥といふ薩摩の

歸りきつと守れ。急げやつ。」と怒りの顔色。畏まつて船押し切り、基康都へ歸りける。清盛法皇をはつたと睨み、潮逆巻く大聲上げ、「ヤァ位ぬけ殿法皇殿。保元平治より此の方、朝敵になやまされ、天下くらやみと成りたるを、盡く切り鎮め、法皇と言はせた入道が恩を忘れしな。動もすれば平家を亡ぼせ、入道を殺せ抔、俊寛を始め人を語らひ、ぬつくりとした事たくまれし。今までは常盤と云ふ女、人質に取り置いたれども、牛若冠者めが奪ひ取り東國へ逃げたれば、一寸も油斷ならず。此の後平家追討の院宣など、賴朝牛若にやられては、飼ふ犬に手をくはるゝ道理。海へ投げ込み人しれず殺さん爲、巖島參詣と僞り是れまではつれ來たれども、根性くさつても王は王、手にかくるは天の恐れ、自ら身を投げ給へば清盛に罪はなし。サァ身を投げ給へ早う／＼。」と、極惡聞くに堪へかねて、磯には千鳥有王丸、出るも出られず差し覗き、只はら／＼と身をひやす。法皇御衣に御涙を掛けながら、「天照大神に見放され奉ると思へば、世にも人にも恨みなし。神武の正統八十代、みづから身を投げし例を聞かず。入道が心に任すべし。只末代こそ心憂けれ。」と許りにて、昔をしたひ行末を、忍びかねては咽せ返り、歎きしづませ給ひける。「入道が心に任せよと有るからは、殺せとの事な。オオ院宣は背かじ。」と、勿體なくも取つて引きよせ、兩足かいて眞倒、海へざんぶと投げ込みたり。汐に引かれて玉體は、沖に誘はれ磯に打ちよせ、浮きぬ沉みぬ漂へば、千鳥はつと走り出で、つゞい

し。御先途見屆けうと思ふ氣はないか。」と、すがり付いて止むる所へ、浦守の下人かけ來り、「コリャコリャ其の船漕いで往け。清盛樣鳥羽法皇をつれまして嚴島御參詣。此の浦に御船が掛る筈。やれ其の舟漕ぎ退けよ、急げ〳〵。」と言ひ捨てて、次の里へと走り行く。丹左衞門の尉基康、有王丸を船近く招き寄せ、「成經康賴歸洛の趣 清盛公へ訴へん。此の女性を同船の事、咎められては事むつかし。俊寬が養子娘なれば汝が主人、きつと預くる。是れより陸路を同道して都へのぼれ。アレ船歌の聞ゆるわ。早お船も程近し。」と、船をかたへに漕ぎのくれば、有王千鳥を介抱し、一村しげる葦陰に、かくるゝ程も波の上、はや御座船の棹の歌、舟唄「やんれ龍頭鷁首の黄金の梶やァ玉の棹、綾や錦を帆に上げて、やらんやらおめでたひつる鱸釣る。」磯邊に錨をおろしける。流人船漕ぎよせ、丹波少將成經、平判官康賴を召し具し、「丹左衞門の尉基康、只今歸洛仕る。御披露。」と訴ふれば、御簾あげさせ船館に、法皇安座ましませば、席をならべ清盛入道、「我が下知をそむいて俊寬も歸洛させよと、病みほうけたる重盛をたらし、赦文くださせたる者有りと聞く。俊寬もつれ歸つたるか。」「御諚の如く一所に歸洛すべき所、妹尾太郎と不慮の口論によつて、妹尾を討つたる科に任せ、俊寬はすぐに彼の島に殘し置き候。」と申し上ぐる。法皇はつと御驚き、入道くわつと色をそんじ、「しやつ憎い俊寬め、首取つてはなど歸らざるぞ。手ぬるし〳〵。成經康賴も心ゆるされず。汝に預くる。連れ

へば、灘の男波が打ちよせて、いつも添寢のとこの島、京とまりては上の關、あすは都も程近く、阿武兎御手洗久留來島、右手は四國の海面を、走る兎の月を越え、暮れては明くる日の烏、かう〳〵たる海の原、島々浦々幾湊、風に任せ艫に任せ、船は備後の敷名の浦、汐待ちしてこそ居たりける。俊寛僧都の郎等有王丸、主人の遠流赦免有りと聞きしより、夜を日についで備後國、敷名の浦につきけるが、磯によせたる上り船、すはや是れかと渚に下り立ち、「是れ〳〵御船へもの問はう。鬼界が島の流人歸洛の船はいづくまで參りしぞ。類船などは成されずか。俊寛が郎等有王丸と申すもの。御存じならば敎へてたべ。」「なう是れこそ尋ぬる流人船。丹波少將成經。」「平判官康賴。」と艫板に躍り出でたまへば、「御堅固の歸洛重疊千萬。法皇の院宣小松殿の情によつて、主人も赦免と承る。有王丸御迎ひに參りしと、憚りながら御傳へ。」と、聞くより二人は打ちしをれ、千鳥を呼び出し引合はせ、「是れこそ俊寛の養ひ娘。僧都と思ひ宮仕へせられよ。」と、有りつる島の物語。有王、「はつ。」と途方にくれ、「エ、しなしたり口惜しや。あづまや御前の最後にも、一足ちがうて御命助け得ず、腹切つて申し譯と思ひしかど、島に僧都のましませば、無念の命ながらへ、待ちおほせたる甲斐もなく、よつく佛神にも捨てられしか。娑婆の奉公是れまで。腹かき切つて冥土の忠義急がん。」と既にかうよと見えければ、千鳥陸にかけ上り、「なう早まるまい。此の度歸洛なきとても、死に失せ給ふお身でもな

舟路の道行

比は文月なかばの空、都方には亡き魂を、迎へて歸る槇の露、是れも都へ歸り行く、船にぞのりの誓ひにて、鬼すむ島を遁れ出で、少將成經康賴は、歸洛の船の旅衣、今著て見るこそゆゝしけれ。千鳥ひとりは泣き憧れ、假初に親と賴みし俊寬を、跡に殘しておきの島、またあふ島を漕ぎはなれ、餘所に見捨ててゆきの島、硫黃が島より地の島まで、海上七々四十九里、船繫ぐべき磯もなく、蒼海天に連なつて、雲に漕ぎ入る沖津船、ながめも遠く漫々と、北は三韓壹岐對馬、南は香椎宇佐八幡。

謠 そも〳〵此の御神は、すべらぎの御代始まりて、十六代の尊主應神天皇、御裳濯川の底清く、神德遍き夢想の告、鳩の嶺に鎭座あり。他の人よりも我が人と、誓ひも固き石清水。今すみ上る我々が、二たび帝都の雲を踏み、九重の月を詠むる事、皆神明の擁護ぞと、おの〳〵法施を奉る。波の白木綿青幣、かかる遠國波濤にも、名所は音に響の灘、鐘が岬に明け渡る、箱崎の松宰府の梅、末は蘆屋の浦づたひ、蜑の漁火かげもなく、松ふく風の聲許り、今行く船に通ひ來る。苫よりくゞる滴りは、小倉の雨の絲に似て、波も縮や織るらんと、心をむすぶ中空に、初かりがねの雲間より、ちら〳〵ちら散らし書、誰が玉づさのもじが關、海布刈の明神ふしをがみ、潮の滿干の玉島に、つゞく光や茜さす、周防灘とは是れかとよ。濡れた姿のあの姬島はナ、たが思はくの由緣ぞとナ。沖のかぶろに言問

りなり。宗清はなほ泣かぬ顔、「ヤイ慰みに人切るか。主君を落す爲ならずや。お供申して立ち退け。ほえな〳〵。」と突き退くれば、「いかにもお二人落しましよ。我が身は殘つて父上の、看病させて下され。」と、又立寄るを礑たと睨め付け、「母さへ離別したるもの、看病とは狼狽へしか。手負に心を揉まするな。勘當と言はぬを嬉しと思はぬか。但し勘當受けたいか。不孝者め。」と呵るも涙。「ア、〳〵お供しませう。」「お供せう。」「アレ父の心ざし。立ち退いて下されませ。」と、泣く〳〵涙も顏の血も、押しのごひ〳〵先に進めば親子の人、身の大事をも思ひやり、宗清父子が忠節も、思ひやる方涙ながらに出で給ふ。宗清つつ立ち、「牛若やらぬ常磐やらぬ。エ、足が立たぬ口惜しや。」とわざとよろ〳〵どうど轉び、「おのれ斯程の薄手にひるみはせぬ。」と、又立ち上つて太刀を杖、よろり〳〵とよろめく姿、見かねては立ち戻り、遁さぬ遣らぬは聲許り、兩方泣き顏睨む顏、閃く許り刃向けもせぬ、勇者のふるまひ情あり、恩愛あり哀れあり、分別あり仁義有る、心は太刀のひかりに見えて、義理に引かるゝ牛若君、親にこがるゝ雛鶴が、翼しをるゝ涙の雨、常磐の杜の木の葉の露、落ちて行くこそ哀れなれ。

第四

こと打笑ひ、「ハア誰かは知らず、我を突きしは源氏の忠臣。サア宗清こそ牛若に出で合ひ、深手を負うて討ち洩らした。ヤレ退け〳〵。」と呼ばはる隙に牛若君、緣の敷板引きのけ給へば、雛鶴が顏も容も朱に染みて這ひ上り、「なう懷かしの父上や。一歲母上につれて別れし娘の松が枝、今の名は雛鶴、ゆかしうござる。」と許りにて、縋り付いて泣きけるが、「母上に後れてより、常磐樣に仕へても、われ宗清が娘とは、今日といふ今日言ひ始め。最前よりのお詞、始め終りを緣の下にて熟聞き、お主の命も助けたし、父上の武士も立てたく、親の身に刃をあて、八逆罪を身に受けしは、親と主とのいとしさ故。サア牛若樣常磐樣、早うお退き成されませ。なう父上、しるし許りにちよつと切らうと思うても、推當の切先が、悲しや思はぬ深疵、唯一言免すといふ、詞をかけて下され。」と、血を吸ひ拭ひ疵を撫で、聲を惜しまず泣き居たる。宗清も諸共に、咽ぶ淚をおし隱し、「離別の母が娘なれば、親でなし子でなし。女なれども源氏の郞等、平家方に刃を當て、免せとは何事ぞ。源氏方には誰ならん藤九郞盛長が姪松が枝ならずや。緣の下より突かずとも、なぜ名乘りかけては討たざるぞ。宗清が恐いか卑怯者め腰拔め。」とは言ひながら、出來しをつた。」と引きよせて、縋り付いて泣きければ、常磐御前も牛若も、「扨はおことは宗清の娘かや。血筋程有る心ざし、子といひ親といひ、かかる忠義の武士の、敵に成つたる源氏の運、此の行末もいかならん。」と、四人顏を見合はせて、「わつ。」と泣き入る許

せ、冥加なし勿體なし、痛はしとさへ言ひやらぬ、奉公の身の淺ましやと、思へば胸も裂くる許り、凋るゝ目蓋を見開き〳〵、せきくる涙を飲みこみ〳〵、澀面つくるぞ哀れなる。「ヤ主人顔して怪我するな。牛若と聞かば遁されぬ。宗清を一太刀打つて、親子共に早立ち退け、サア立ち退け。」とせきければ、「オ、誠有る宗清の詞は父の教訓。いざ立ち退かん。」「尤も。」と走り出づれば、「是れ〳〵、小松殿御眼識の宗清、おめ〳〵と見遁して、我が武士道立つべきか。此の宗清を一太刀うつて、打つて立ち退け立ち退け。」と呼ばはつたり。「ム、尤も。」と牛若飛び掛り太刀振り上ぐれば、常磐は縋つて、「やれ情なや。心ざしの宗清に太刀をあて、天の咎め氏神の御罰、苔の下なる義朝の御照覽も恐ろしし。縱ひ親子が此の儘に、一生を朽ち果すとも、道を立て義を立て誠をつくす侍に、何と刃があてられう。免してくれ。」と泣き給へば、「エ、言ひ甲斐ない。薄手も負はず落しては、宗清が武士が廢るが。」「否それでも切らさぬ。」「否討て。」「否討たさぬ。」と義を爭ふ。「エ、曲もない。腹を切るは易けれども、敵を見てぬく〳〵と腹切つては逃げたも同然。小松殿の御詞、昔は免も有れ、今は平家の祿を食む、我が死後までも眼鏡を違へな。畏まつたと請合ひし、一言は須彌山より猶重し。彌平兵衞が一生の、廢ると知らぬ恨めしや。」と睨みつくる血眼に、涙も交る聲の下より緣の下、敷板のはづれより、宗清が弓手の高股、ぐつと通す切先は、朱に染みてあらはれたり。人々、「はつ。」と驚けば、宗清につ

込みふみ込み打ち合ふ音、常磐驚き杉戸はづし引き抱へ、間の小楯と身を捨てて、前におほひ後に隔て、止めても止らず抜けつ潜りつつ、太刀と太刀との閃く影、暗夜の稲妻流るゝ汗、軒の雫のごとくなり。常磐御前聲をかけ、「おとなげなし宗清、はやまるな牛若丸。母がいふこと聞かぬか。」と、制せられ飛びしさり、「エ、無念な。源牛若が大事を思ひ立つ故に、母上と心を合はせて、下女腰元に様を換へ、心を盡すと聞くならば、忠節をなすべき所。主君たる母君を、なぜ打つた何故たゝいた。」「ヤア主君とは舌長なり。彌平兵衛宗清が今の主人は、平家の大將小松殿。平家の仇となる者は打つて捨てよ。義有る武士と見極めしと、お眼がねを以て向うたる宗清。不義放埒の常磐、手をもつて打つも腕のけがれと、肌身も放さぬ此の雑巾を以て打つたるは、有り難しとは思はぬか。不義者の恥知らずに、廻り逢ふ事有るべきかと、隠し置いたる此の雑巾、親子の恥をおし拭ひ〳〵、早立ち退け。」と、巻絹取つて牛若の、額に礑と投げ付けたり。「エ、推参なり。いで切り裂いて捨てんず。」と、引き解けばこは如何に、正八幡大菩薩と、あり〳〵記せし源氏の白旗。二人は、「はつ。」と押し戴き、「我々にめぐり逢ふまでと、肌身も放さず持つたるとや。今此の旗を拜する事、父義朝の蘇生とも千騎萬騎の味方とも、此の上の有るべきか。奥深き宗清の、心を忖らず率爾の雑言、免してたべ宗清。」と親子手をさげ頭をさげ、伏し沈み給ふを見て、色には出さず宗清も、情なの人界や、譜代の主人に手を下げさ

恥辱か、義朝が屍の恥、牛若と言ふ倅が生先、源氏一統の恥辱恥さらし。去りながら今宗清が主でなければ構はぬ事。狐狸が人をばかし失ふにもあらず、常盤が不義放埒と申し上ぐる上の事。」と、ずんと立てば、「なう暫く。」と引き止め、「常盤が不義とは情なや。俊寛が妻の自害は、身の貞女を守る許り。死んで源氏の爲にならば、あづまやづれに負けうか。生きて心の辛抱は、ア、恐らく常盤には及ぶまい。牛若を助けん爲、清盛が心には從へども、病と僞り帶解いて、一度も肌を汚さぬ者。そもやそも往來の人を呼び入れて、仇の枕を竝べうか。牛若は日陰者、誰を便りにせん方なさ、往來の人を呼び入れ、色に迷ふは男の習ひ、欺し賺したらし込み心を見屆け、したがふ者には源氏一味の血判させ、牛若に義兵を上げさせ、平家一門の首を見ん爲。」と、いふ詞を打消して、「吐かすな〳〵譃つきの常盤め。今おのれが不義を見付けられ、當惑しての造り言、聞くも弓矢の穢れなり。」と、立つて行くを又引き止め、「いや常盤の不義のない事は、聞いても聞かする、聞かでも聞かする。」と、むさぼり付くを取つて突き退け、「エ、平家に敵たふ常盤ならば、討つて捨てよと御意を受けた宗清に、僞り者恥知らず。」と懐中の卷絹、一ねぢ捻ぢて丁々、「徒者。」とて礑と打ち、不義者とて丁と打ち、詞さげがみ黑髪を、寢くたれ髪と打ち亂す。杉戸へだてて笛竹が、「なむ三寶顯はれし。」と、裾はし折つて杉戸蹴放し、袂の下の二尺三寸、隙をあらせず切りかけたり。老功の宗清拔き合はせ渡り合ひ、ふみ

の侍、人目忍ぶの頰かぶり、笛竹に近づき、「雛鶴とやらんの物語に、奥の樣子承る。よい年をしてなんど蔑みも恥かしし。頰かぶり御免なれ。御案内。」と述べければ、「ア、御案内申すまでもない。此の廊下を。」と戸を開けば、月さへ洩らぬ長廊下、たどり〳〵て閨の內、燈火そむけ掛香や、空薰物にふすべられ、蚊は一匹も夏の夜の、蚊帳ぞ閨のしるしにて、えへん〳〵打ちしはぶくも聲清めり。「待ち兼ねしもの是れ男、思はせ振の咳なんぞ、誰樣の花か知らねども、こよひ許りの一枝は、折るも盜むもお免し。」と、蚊帳ごしに抱き付けば、とかうも言はず振り放す。「エ憎。もがかせて慰む氣か。清盛といふ人なくば、いつそ女房に成りたい。ハヤ鐘が鳴る夜が更ける。こゝへ。」と、蚊帳押しのけ、「いつまで包む頰かぶり。」と取つて引きのけ顏見合はせ、「ヤァ彌平兵衞宗清か。なう恥かしや。」と押しうつむき、消えも入り度き風情なり。宗清常磐に目もやらず、顏打ちふつて獨言、「あつぱれ宗清は今小松殿といふ、よい主取つた果報の武士。古の如く源氏を主人と仰ぐならば、世間に恥辱をかかんもの。ハア、嬉しや〳〵。俊寛が妻のあづまやが最期の詞、常磐が如き汚れた根性さげまいもの、道しらず徒者と笑ひ誹つて、其の身は伊弉冊の尊以來、貞女の手本を世に殘し、刃に伏して空しくなる。思へばあづまやは四相を悟る女賢人、小松殿も賢人。平家の仇となる事あらば、常磐とて容赦すな、討つて捨てよとの仰せ。徒らに極まれば、平家に弓引く仇にもあらず、其の身ばかりの

つめ、窺ふ内のひそ〳〵まで、洩るゝ方なく聞ゆらん。讀みも終らずわな〳〵震ひ、「なう恐ろしい文言、是れに判形存じもよらず。命が大事。」とかけ出す。「大事を知らせて往なさうか。」と引き止むる常磐の小腕取つて突き退け、爰を大事と足早く、走る杉戸に額打つやら當てるやら、やう〳〵に押し開き、ぬつと出づれば笛竹が、追取刀につゝ立つたり。「わつ。」と戰き身を縮め、二度顫ひ周章てける。

「コリヤ男、ときは御前に賴まれて、源氏の方人申したか。奥の樣子をサア語れ。」「なう勿體ない。今の世に見る影もなき源氏に賴まれ、平家の咎め何とせう。思ひもよらず。」と言はせもあへず、拔打に向うざま、天邊より太腹まで、節々こめてから竹わり、二つにさつと笹の露、散る魂のもぬけの殼、廊下の敷板こじ放し、掘り置く土の穴かしこ、人には見せじと骸を取つて引摺り込む、音に驚き雛鶴刀引提げ出で、「なんと首尾は。」「されば〳〵、見かけによらぬ卑怯者、いつもの如く切つて捨てた。一味して戰場に討死するも死は同じ。愚人め故に今日も又、思はぬ殺生南無阿彌陀。」「エ、まだるい念佛所か。次の男がもう此處へ。いつもの通り死骸は埋む。跡を首尾よう〳〵。」と、緣の下へ這ひ入れば、笛竹手水の水汲みかけ、流す血汐のからくれなゐ、神代も聞かぬ女わざ、あたりに目を付け、目の鞘はづす刀の血痕、押し拭ひ〳〵、袖にをさめし顏容、けんによなりふり引きつくろひ、物音うかゞひ立つたるは、昔の神功皇后の、娘の時も斯くやらん、外に比もなかりけり。つゞいて以前

此の奥に御座なさるゝは、聞き及びも有ろ。千人の中から百人選み、百人の中より十人えり出し、十人の内に一人勝れた常磐御前とて、それは〳〵美しい君、そもじにたんとほの字ぢやと嬉しいか。是れこんな目に遇ふ事。」と、囁けば身をねぢて、俄につくるつぼ〳〵口、「ェ譃ばつかり。おらが樣な者に、此のかま髭で頰ずりは痛かろもの、わしや厭や。」「ェ氣の弱い。是れ此の帷子著て行きや。」と、帶引き解く肌は鍋の底氣味わろく、「こりや何と言ふ帷子。ム、柔かな身について動かれぬ。言はぬ事は惡い。此の帷子も著取、我等が身の廻り一色も散らす事ならぬぞや。」「それを氣遣ひする事か。夜ふけぬ内に此處から。」と、杉戶ひらいて突き出せば、一足行ては蹪き、すべる飛脚の脛つばき、「さるにても我千里を股にかける商賣、一度も步みかねぬ身が、一足も動かれぬ。智慧こそ有れ。」と四つ這ひに、はふ〳〵明くる障子の內、燈火かすかに寐姿を、見るよりぞつと身も痺れ、蚊帳の外に蹲り、伽羅の薰にむせ返る。蚊帳の內より常磐御前、手を引き寄せ、「是れ待つて居るサア爰へ。此の手のきやしやな事わいの。」と、ぢつとしめられ現を拔かし、「こりやあんたる因果骨、めき〳〵致す御免有れ。お辭儀申さぬ〳〵。」と、蚊帳引き上げてめり込む。常磐押へて、「ァ、待ちや〳〵。眞實抱かれて寢る氣なら、我が言ふ事を背くまい、他言せまいと此の誓紙に、血判するゑて上の事。物も書くらめ是れ見よ。」と、袂の內の一卷を、渡せは取つて押しひらく、杉戶の外には笛竹が、耳をそばだて息を

跡をも見ずして逃げ失せける。「なう笛竹殿、徒骨折つたぢやないかいの。」「いや〳〵一のうらは六、陸地輕げにそれ其處へ、狀箱かたげ飛脚の足、淀から三里にきうもなく、脇差一腰さしも草、もえ立つ汗にむくつく髭もすけべゑの、への字なりが面白い。腰骨ふとい達者づくり、是れがおかみの好物男、やれそれ遁すな呼び込め。」と雛鶴飛ぶより足早に、袖を控へてしみ〴〵と囁けば、甘い奴、じろりと見た目にほやりと笑ひ、つれて內にぞ入りにける。跡に續いて聞ゆるは、小唄歌ふか何言ふぞ、顏見ぬ先の聲のあや、「鰺やさし鯖かは鯨、めぐろ鯛のすき實乾しがます鰹節、干鱈鹽鱈だら〳〵」とだらつき聲にて通り行く。「ソレ雛鶴、其の魚賣呼びやいなう。」「イヤ〳〵今日は義朝樣の精進日、せめての冥加に魚賣は、遠慮なされ。」と言ふ所へ、旅する武士の高からげ、股引脚絆頰かぶり、「南の方からそれ來たぞ。」「まつかせ遣らぬ。」と雛鶴が、さゝやく顏をふり切つて、行き過ぐるを縋り付き、「たけき武士の心をも柔ぐる、歌も戀路を種と聞く。いかなる武士も稻舟の、押すに押されぬ此の道を、止らせ給へ。」と言ひければ謠さすが岩木にあら男、心よわくも立ち止る。所は朱雀の御所の門、つれて入る日も暮れ過ぎぬ。常磐御前の帳臺の、夜の光は雲居にも、劣らぬ露の奥座敷、間の廊下を笛竹が、晝の飛脚の手を引いて、案內をてらす燈火に、動きもやらず立ち止り、「こりや何處へつれて行きめすぞ。びやくらい返してくれられよ。」と齒の根もあはぬ胴ぶるひ。「是れ怖い事なんにも無い。

えてはお身の大事、私らや此方も善いことは有るまい。恐うてならぬ。」と顫ひ聲。「ア、氣遣ひない笛竹が何も飲込んだ。今日は何時より通りが薄い。それでも好い男せめて二人程つらねば、其方も私も一分立たぬ。」「オ、合點。」といふ所へ、素袍袴に掛烏帽子。「こりや歴々の侍、たゞし公家方の諸大夫か。あれほどの人體にやぶれ扇は不都合な。」「エ、そりやまゝよ。これそこな烏帽子殿爰へ〳〵。」と招かれて、小腰をかゞめ聲はり上げ、舞「萬戸が其の日の裝束には、阿耨菩提の腹巻に、隨求陀羅尼の小手を差し、斷惡修善の臑當を、あくち高にしつかとはき、大たうれん小たうれん、二振の劍十文字にさすまゝに、神通自在の葦毛の駒、歷劫不思議の浮沓はかせ、其の身かろげに乘つたりける。ヤツアイエイ イヤアホ、まんこ將軍雲宗とて、〳〵。」「ア、しんき。此處へおぢや、しつぽりと言ひたい事が有る。先づ待ちや〳〵。」と雛鶴亭より下るゝを見て、「エ扨はしつぽりが御所望か。舞あら傷はしや蜑人は、海上に浮み出で、乳の下をかき切り、玉を押し込み申したり。乳のあたりに無いならば、疵の有りたけ何處もかも、探つて見給へ我が君と、只さめ〴〵と泣き居たる。」「ム扨はまひ〳〵か。舞まひでも蜘まひでも大事ない。是れ御門の内へおぢや。結構な目に逢はせう。こんな事ぢや。」と耳に口よせ、「かうぢや〳〵。」と囁けば、舞まひ色ちがへ、舞「まんこ此のよし聞くよりも、あら怖や恐ろしや、是れ龍宮のつゝもたせ。三百目の*玉塔に、其の外惡魚しかけ者、遁れ難しや、我が巾著。」と、

鏃を爭ふ時、源氏譜代の宗清、軍の御供用捨あれと云ふべきか。よもやさは言ふまじ。源氏昔の恩を思はば、今又平家の祿を食む、其の恩賞よも忘れじ。義有る武士と見定めし我が眼力、重盛が臨終も今明日に極まつて、あすの夜までは不定の命、病み疲れて眼眩み、最期に人を見違へしと、死後に小松が名を下すな。早急げ宗清。」と、牀の緞帳、御簾もさつと下りければ、宗清、「あつ。」と頭をさげ、「文武二道の賢將、義有る武士との御詞、生前の面目武門の譽れ。哀れ御命まつたうして、御馬の前にて討死し、御恩報ぜぬ殘念至極。もし宗清狂氣して、御眼力を違へなば、冥土より御手を下郎にかされ、步に首を下げ給へ。はやお暇。」と罷り立つ。源氏の恩平家の恩、引かれ撓まぬ梓弓、やたけ心ぞ。　三重　賴み有る。圍女とや惡口に、是れをも言へば夕づく日、朱雀の御所は女護の島。昔は源氏の春の園、義朝の花紅葉、今日は平家の秋の庭、清盛の月雪と、見人は變れどかはらぬは、常磐御前の起き臥しの、一人で足らぬ御身持。お腰元の笛竹、おぐし上げの雛鶴が、男見立の仰せを受け、裏の小門の物見の亭、往來の人の風俗を、見下す簾捲き上げて、今日も變らぬ役目とて、口へも入らぬ善し惡しに、男待つ風亂次し。「なう笛竹殿、いつぞは〳〵と思ひしが、幸ひ外に人もない。常磐樣はお氣あひが惡いとて、牀も離れず藥文籍、いつ浮き〳〵ともなされぬに、來る日も〳〵二人か三人か往來の男呼び入れて、お精の強い。上々には何が成る物ぞ。あれではお煩ひも直らぬ筈。清盛樣へ聞

「私むすこは坊主落ち、ろくに生え揃はぬ物、常磐が何にせらるゝぞ。」「我らが兄は提灯屋、張替もないたつた二人の兄弟。」「こちの夫はから碓蹈み、腰から下の強い男、惜しい事いたした。」と、誰に恐れも泣き喚く、女心のひとむくろ、思ひやられて哀れなり。大臣御息ほつとつき、「我病に臥して政務を辭し、民のうつたへを聞かざれば、はや斯かる事の出で來るは、當家の徳の薄きより洛中の騒ぎ、後の禍ひも輕からず。屹と糺し得さすべし。ヤア〳〵彌平兵衛宗清、汝常磐の館の次第とつくと見屆け吟味せよ。狐狸の業ならば、獵師を以て狩り取らせよ。常磐が不義放埒に極まらば、屹と實否を糺し、入道殿へ言上し、御指圖に任せよ。又末々平家の仇と成るべき事と見るならば、誰に問ふまでもなし、入道殿のおもひ者とて用捨すな。常磐なりとも討つて捨て。詮ずる所は是れ第一。心得たるか。」と宣へば宗清謹んで畏まり、「御諚違背申すにてはあらねども、元某は源氏重恩の侍、殊に相具し候女房は、先年離別の後に相果て、今生に亡き身と申しながら、藤九郎盛長が妹。かたがた源氏に好みの筋目。剰へ一人の娘を女に付けて別れしが、只今成人して、いかなる源氏方に縁を組みしも計りがたし。かれこれ以て常磐御前の詮議には、源氏無縁の他人に、仰せ付けられ然るべし。」とぞ申しける。小松殿聞き給ひ、苦しげなる顔ばせに、立腹の色あらはれ、「心得ぬ事を言ふ者かな。源氏譜代の汝なれば、常磐が常の行跡、心入も能く知つつらんと思ひ寄つての事。明日にも源平

築山に、花の咲いたを見たるか。」ワキ「實にきつと見たれば。」シテ「戀の花や。」ワキ「いたづら花や、うちや匂ひわたつた。」シテ「植ゑい〱早少女。千町。」ワキ「萬町。」二人「億萬町の早苗より、兄や弟や、妻や子をかへしてたもるなら、民も豊かに君が小田は、二人謠 實るぞ程なかるらん、實るぞ程なかりける。」謠ひ了れば一座の人、悦びさゞめき給ひけり。重盛御耳をそばだて、「田な植ゑさせそ。あれ止めよ問ふべき事有り。早少女ら具して來れ。」畏まつて雜色共、「御用有るぞ、早少女共、御前へ參れ。」と呼ばはれば、ひつしよ形振早少女の、手足も土にひれ伏せり。「近く寄れ女共。夫を返せ子を返せと、訴訟有りげの田うゑ歌。汝ら誠の早少女にあらず、包まず申せ。」と宣へば、鍬取の翁頭をもたげ、「仰せの如くかく申す翁を始め、誠の早少女に候はず。君しろし召されずや。入道相國のお妾常磐御前の坐す、朱雀の御所の邊を通れば貴賤にかぎらず、男たる者かいくれに行方なく、二度影も見ることなし。狐狸の所爲とも申し、又は常磐御前往來の男を呼び入れ、放埓いたづら狂ひとも申す。兄にわかれ弟を失ひ、かゝり子に放れ路頭に立ち、飢死する親も有り。夫を取られ泣きこがれ、狂氣する女も有り。五十人か百人こそ、よむに數かぎりもなし。洛中洛外の苦しみ、上にはお耳に立たぬか、但し知つても知らぬ貌か。此の翁が直訴し、重盛公の御耳に達し、御詮議願ひ奉らんと、男失ひし女共、何れも早少女に出立たせ斯くの仕合。推參は御免あれ。」と申し上ぐれば、女子共聲々に

めしきは入道殿、はかなきは平家の運命、一門のなれの果て、思ひやられて口惜しや。」と、怒れる眼に涙をうかべ、御聲ふるひ枕をつかみ、歎き沈ませたまふにぞ、御前伺候の人々も、「實に御道理や。」と各袖をぞ絞らるゝ。「よし／＼盛衰は天に有り、悔むまじ怨むまじ。時こそ移れ耕作を見物せん。とく／＼。」と宣ひて、既に田植ぞ 三重 早苗取る、水のみどりも青々と、御簾も障子も明け渡り、「いつに勝れし御機嫌。」と、上下悦び勇みけり。折から愛宕の里の長、手には持てども心には、くはない顔の白髭を、土にすらせて色代し、「なう／＼早少女おぢやらしませ。翁があら田をとろりつとならし濟まいて、萬歳 五穀成就君萬歳、民も千秋々々と、水口も祭濟まいた。田をばぞんぶりぞ／＼、ぞんぶりぞんぶり／＼ぞ。サアナウお田を植ゑうよ。」「はつ。」と答へて早少女は、著つれて笠のおくれじと、手ん手に早苗取りはやす。ほかに類もあら金の、土に汚れぬ田植歌、シテ「植ゑい／＼早少女。めでたき君がお田うゑ。苗代におり立つて田をうゑば、笠かうて著せうぞ。」ワキ「笠買うてたもるならば、なほも田をば植ゑうよ。」シテ「いかに早少女、懸想文がほしいか、失せた夫がほしいか。」ワキ「水上が濁りて、下の歎きが目に見えぬ。夫かへしてたもるならば、なんぼ嬉しからう。」シテ「男が見えずばそれなりに、當代のはやり物、後家狂ひせよみめわる。」ワキ「エ、つら憎の男が、言うたることや腹立。」シテ「腹が立つならば水鏡見よかし。」ワキ「水鏡見たれば、顔のよごれた世のなか。」シテ「朱雀の御所の

當湛增、白木の箱を携へ周章しく御前に出で、「本宮の社壇修復の爲、神體を假に宮遷しいたす所、いかなる者の所業やらん、此の箱をこめ置きたり。私かに開かん事後難計り難く、御注進。」とぞ述べにける。「よし何にもせよ推量の詮議無益の至り。それ開け。」「承る。」と貞能、蓋こじ放せば、こはいかに、厚板を削りならし、衣冠束帶の人を畫き、總身に四十九本の釘、胸板首に矢の根を打ち込み、「日本第一三所權現に申し奉る。小松内大臣平重盛が運命をちゞめ、源家の弓箭を擁護し給へ。兩箇の所願ひとへに冥慮を仰ぐものなり。願主蛭が小島の住、源頼朝。」と書きしるし、調伏の願書を添へ置きたりけり。人々、「是れは。」と手を打つて、呆れ果ててぞおはしける。重盛怒りの御涙を、はら〱と流させ給ひ、「扠も〱天恩知らずの愚人めやな。去んぬる平治の合戰に、既に誅すべかりしを、池の禪尼と重盛が、身に代へて願ひ助けし故、扠こそ流罪しては有れ。彼の唐土の獨角獸といふ獸は、水上の惡毒を、己が角にてそゝぎ消し、國民の命を助くれども、獵師は恩をわきまへず、獨角獸を殺して角を取る。是れ頼朝めに相同じ。敵味方と成るならば、鉾先は磨かずして、重恩の重盛を調伏とは淺ましや。此の度我が病氣は、父の惡心止むまじくば、我が命を取り給へと、熊野權現に立願しての死病なれば、死するは小松が願成就、それとは知らで頼朝が、おのれが願成就と、悦び思はん愚かやな。重盛むなしく成るならば、見よ〱源氏の白旗を、秋津洲に飜さん。エ、恨

はぬ重盛公、反つて御氣に障らんか。通盛が存ずるは、同じ酒を用ゐるとも、庭に大竹小竹數千本植ゐさせ、酒の甕をしつらひ、七人の樂人に、胡飲酒酣醉樂など舞樂を奏し、竹林の七賢がたのしみを學んではいかゞあらん。相詰めし者共存じ寄り遠慮なく申して見よ。」とぞ仰せける。主馬判官盛國つつと出で、「恐れがましく候へども、我が君常の御たはぶれにも、上を敬ひ下を憐む御心より、北のお庭に方一町の田をひらかせ、毎年御領內の土民を召され、耕し植うる賤の手わざ、民の辛苦を御覽有る。今年もあら田はすきかへし候へども、御所勞によつていまだ田植の御沙汰なし。折しも此の頃の雨に濡ふ早少女の、田植を御覽に入れられれば、御心にも叶ふべし。」と言上すれば、知盛、「げに是れも興あらん。所詮目錄に書き付け伺はん。」と、人々相具し大牀の、御座の閒さして出でらるゝ。*十返りの霜には朽ちず一時の、無常の風に枝枯れて、賴み少なき小松殿、父入道を諫めかね、世を思ふ故物思ふ、思ひ積りし日陰の雪、消ゆる閒を待つ許りなり。維盛枕に近づき、「御病中の御慰みと一門の心ざし、御望み有れかし。」と、目錄を奉れば助け起され、脇息にかゝるも暫し玉の緒の、よわりを見せぬ親心、披見有りて打笑み給ひ、「重盛が病氣を悲しみ、各心を盡さるゝ、返す〴〵も淺からね。此の書付の內早少女に田を植ゐさせんとの物好。我每年の慰みにて、庭の田面を見るに付け、去年の田植もなつかしし。用意させよ見ようずるわ。」と宣へば、盛國畏まつて罷り立つ所へ、熊野本宮の別

顏囘は早く夭して終に四十の花を見ず、盜跖は命長うして既に八十の霜を踏む。生死不定の理は上智博識も辨ずべからずとや。小松大臣重盛公、御所勞日を追つて衰へ給ひ、和丹兩家の典藥、配劑醫案を盡せども、更に其の驗なく、既に大事と見えければ、嫡子維盛を始め、通盛知盛重衡資盛、其の外一門の老若、寢殿に居流れ給へば、廣びさしには主馬判官盛國、筑後守貞義、彌平兵衞宗淸なんど、心を惱まし泣み居たる。御典藥和氣の法印奥より立ち出で、「今朝の御脈夜前の通りに相變らず。謹んで御容體を考へ奉るに、是れぞと名づけん御病氣なく、只七情に破られ給ひ、お氣の疲れ御心の結ぼほれ深く見えさせ給ふ。何にても興ある御慰みを催し御覽に入れ、暫しが內も面白しと御心晴れ給はば、御保養と成り藥力もめぐり候はんか。」とぞ申しける。維盛聞き給ひ、「實にさぞ有らん。祖父入道殿邪の御振舞、歎きは父重盛只ひとり、一天四海を引受けて、御身一つの病と成るも理かな。何をがな氣も晴れて心にかなふ慰み、かた〴〵も思ひ寄り賴み存ずる。」と宣へば、各「はつ。」と首を傾け、「どうがなナ、ハア何とがな。」と思案評定取り〳〵なり。新中納言知盛進み出で、「御慰みとてつね〴〵目馴れ給ふ事は、さして興にも成り難し。彼の白樂天が酒興山の景氣を學び、庭前に酒の泉をたゝへ美女を集め、琵琶琴調べ歌ひ舞ひ奏でさせば、終に御覽なき事にて、お心の開くる事もや。」と有りければ、越前三位通盛聞きもあへず、「趣向めづらしし。さりながら平生酒宴亂舞好み給

御上使の越度聊か無し。」と、始終を我が一心に、思ひ定めし止めの刀、「妹尾受取れ恨みの刀。」三刀四刀しゝきる引き切る、首押し切つて立ち上れば、船中、「わつ。」と感涙に、少將も康頼も手を合はせる許りにて、物をも言はず泣き居たり。見るに付け聞くに付け、千鳥一人が遣る方なさ、「夫婦は來世も有るもの、私が未練で思ひ切りのない故、島のうきめを人に掛け、のめ〳〵船に乘られうか。皆樣さらば。」と立ち歸る。縋り留めて、「是れ我此の島に止まれば、五穀にはなれし餓鬼道に、今現在の修羅道、硫黄のもゆるは地獄道、三惡道を此の世で果し、後生を助けてくれぬか。俊寛が乘るは弘誓の船。うき世の船には望みなし。サア乘つてくれ早乘れ。」と、袖を引きたて手を引きたて、やう〳〵に抱き乘せければ、せん方波に船人は、纜解いて漕ぎ出す。少將夫婦康頼も、「名殘惜しやさらばや。」と、言ふより外は涙にて、船よりは扇を上げ、陸よりは手を上げて、互に、「未來で〳〵。」と、呼ばはる聲も出船に、追手の風の心なく、見送る影も島がくれ、見えつ隱れつ汐ぐもり、思ひ切つても凡夫心、岸の高みに驅け上り、爪立てて打招き、濱の眞砂に伏し轉び、こがれても叫びても、哀れとぶらふ人とても、鳴く音は鷗天つ鴈、誘ふは己が友千鳥、一人をすてて沖津波、幾重の袖や濡らすらん。

第三

て起き直り、打つてかゝるもひよろ〳〵柳、僧都は枯木のいざり松、兩方氣力なぎさの砂原、踏ん込み踏みぬき息きれ聲を力にて、爰をせんどと挑み合ふ。船中騷げば丹左衞門舳板に上り、「御帳面の流人と上使の喧嘩、落居の首尾を見屆けて言上する。下人なりとも助太刀すな。傍より少しも構ふな。」と、眼もふらず檢分す。千鳥堪へ兼ね竹杖ふつて打ち掛くる。僧都聲をかけ、「寄るな〳〵。杖でも出せば相手の科は遁れぬ。差出たらば恨みぞ。」と、怒れば千鳥も爲方なく、心許りに身をもんだり。血まぶれの手負と、飢ゑに疲れし痩法師、はつしと打つてはたじ〳〵〳〵、刀につられ手はふら〳〵、組みは組んでもしめねば左右へひよろりと放れ、砂に咽んで片息の、兩方危く三重見えけるが、妹尾が心は上見ね鷲、攫み蒐るを俊寛が、ひばり骨にはつたと蹴られ、かつぱと伏せば這ひ寄つて、馬乘にどうど乘つたる刀、止めをささんと振り上ぐる。船中より丹左衞門、「勝負は屹と見屆けた。止めを刺せば僧都の過ち科重なる。止め刺す事無用〳〵。」「オ、科重なつたる俊寛、島に其の儘捨て置かれよ。」「否々御邊を島に殘しては、小松殿能登殿の御情もむそくし、御意を背く使の越度、殊に三人の數不足しては、關所の異論叶ひがたし。」と呼ばはつたり。「されば〳〵、康頼少將に此の女を載すれば、人數にも不足なく、關所の異論なき所。小松殿能登殿の情にて、昔の科は免され歸洛に及ぶ俊寛が、上使を切りたる科によつて、改めて今鬼界が島の流人となれば、上の御慈悲の筋も立ち、

して、せめて一夜添寢して、女子に生まれた名聞と、是れ一つの樂しみぞや。エ、むごい鬼よ。鬼神よ、女子ひとり乘せたとて、輕い舟が重らうか。人々の歎きを見る目はないか、聞く耳は持たぬか。乘せてたべなう乘せをれ。」と、聲を上げ打招き、足ずりしては伏し轉び、人目も恥ぢず歎きしが、「蜑の身なれば一里や二里の海怖いとは思はねども、八百里九百里が、泳ぎも水入も叶はねば、此の岩に頭を打ち當て打ち碎き、今死ぬる少將樣名殘をしい。去らばや、念佛申しむぞうが者、りんによぎやアつてくれめせ。」と、泣く〳〵岩根に立ち寄れば、「やれ待て〳〵。」と俊寛よろほひ〳〵舷を、漸う轉び走り寄り、「是れ船に乘せて京へやる。今のを聞いたか。我が妻は入道殿の氣に違うて切られしとや。二世の契りの女房死なせ、何たのしみに我一人、京の月花見たうもなし。二度の歎きを見せんより、我を島に殘し、代りにお事が乘つてたべ。時には關所三人の、切手にも相違なく、お使にも過りなし。世に便りなき俊寛、我を佛になすと思ひ、捨て置いて船に乘れ〳〵。」と、泣く〳〵手を取りひつ立て〳〵、「御兩使賴み存ずる。此の女乘せてたべ。」とよろほひ寄れば、妹尾太郎大きに怒り飛んで下り、「ヤアづくにふめ。左樣に自由に成るならば、兎狀もお使も詮なし。女はとても叶はぬ。うぬめ乘れ。」と睚み掛れば、「それは餘り料簡なし。とかくお慈悲。」と騙し寄り、妹尾がさいたる腰刀、拔いて取つたる稻妻や、左手の肩さき八寸許り切り込んだり。「うん。」とのれども流石の妹尾、差添ぬい

「思ひも寄らず、やかましい女め、誰か有る引摺り退けよ。」と犇いたり。「ハテ料簡なければ力なし。此の上は少將も此の島にとゞまつて、都へは歸るまじ。サア俊寛康賴船に乘られよ。」「いや〳〵一人殘し本意でなし。流人は一致我々も歸るまじ。」と、三人濱邊にどうど座を組み、思ひ定めし其の顏色、丹左衞門心ある侍にて、「是れ妹尾殿、斯樣にては君御大願の妨げ。女を船には乘せずとも、一日二日も逗留し、篤と宥め得心させ、皆々心よくてこそ、御祈禱ならめ。」と言ひも切らせず、「ヤア、そりや役人の我儘。船路關所の通り切手、二人と有る二の字の上に、能登殿が一點加へて、三人とせられしさへ私なるに、四人とは何方の免し。所詮六波羅のお屋形へ渡すまでは我々が預り、乘らぬとて乘せまいか。俊寛が女房は淸盛公の御意を背き首打たれた。有王が狼藉、召人同然の坊主、雜色共郎等共、三人共に船底に押しこめ動かすな。」「承る。」と匹夫共、千鳥を突き退け三人の小腕、引き立て〳〵、狩人の餌畚に、小鳥をつむるが如く、ねぢ付け〳〵、嚴しく守る妹尾が下知、「船出せ乘り給へ左衞門殿。但し御使の外私の用ばし候か。」と理窟ばれば力なく、同じく船に乘り移る。不便や濱邊に只一人、友なし千鳥泣き喚き、「武士は物の哀れ知るといふは僞り虛言よ。鬼界が島に鬼はなく、鬼は都に有りけるぞや。馴れ初めし其の日より、御免しの便り聞かせてたべと、月日を拜み龍神に願立て祈りしは、つれて都で榮耀榮華の望みでなし。蓑蟲の樣な姿を元の花のすがたに

と指し出す。少將判官諸共に、「是れはふしぎ。」と讀み返し繰り返し、もしやと禮紙を尋ねても、僧都とも俊寛とも、書いたる文字の有らばこそ。「入道殿の物忘れか、そも筆者の誤りか。同じ罪同じ配所、非常も同じ大赦の、二人は免され我ひとり、誓ひの綱にもれ果てし。菩薩の大慈大悲にも、分け隔ての有りけるか。疾くに捨身し死したらば、此の悲しみは有るまじき。もしや〳〵と存命へて、淺ましの命や。」と聲も惜しまず泣き給ふ。丹左衛門懷中の一通出し、「とつく申し聞かせんずれども、小松殿の仁心骨髓に知らせん爲暫くはひかへたり。是れ聞かれよ。」と聲を上げ、「何々鬼界が島の流人俊寛僧都事、小松の内府重盛公の憐愍によつて、備前國まで歸參すべきの條、能登守敎經承つて件の如し。」「何三人共の御赦しか。」「中々。」「ハァ〳〵はあ。」と俊寛は、眞砂に額をすり入れ〳〵、三拜なして嬉し泣き、少將夫婦平判官「夢ではないか誠か。」と、踊りつ舞うつ悦ぶは、猛火に焦げし餓鬼道の、佛の甘露に濕ひて、如淸涼地と歌ひしも、斯くやと思ひやられたり。兩使詞を揃へ、「もはや島に用もなし。仕合と風もよし。いざ御乘船。」「尤も。」と、四人船に乘らんとす。妹尾千鳥を取つて引きのけ、「見ぐるしい女め、見送りの奴ならば、そこ立ち去れ。」と睨め付くる。「イヤ苦しからず。此の少將が配所の中、厚恩の情を受け夫婦となり、歸洛せば同道と、堅く申しかはせし女。御兩人の料簡を以て、著船の津まで乘せてたべ。子々孫々まで此の恩は忘れじ。」と、手をすつて詫び給へば、

ても、一滴の酒はなし杯なし、めでたいと言ふ詞が、三々九度ぢや。」と言ひければ、「ハア此のいやしい蜑の身で、緋の袴とはおやばちかぶる事。都人に縁を結ぶが身の大慶。七百年いきる仙人の藥の酒とは菊水の流れ、それを象り筒につめたも此の島の山水、酒ぞと思ふ心が酒。此の蚫貝のお杯いたゞき、今日から愈親よ子よ、父樣よ娘よと、むぞうが者とりんによぎやアてくれめせ。」と、言へば各打笑ひ、「げに尤も。」と菊の酒盛、あはびは瑠璃の玉の杯、さいつ差されつ飮め歌へ。三人四人が身の上を、いわうが島も蓬萊の、島にたとへて汲めども盡きぬ泉の酒とぞたのしみける。康賴沖を屹と見て、「ハヽア漁船とも覺えぬ大船漕ぎ來るは心得ず。あれよ〱。」と言ふ中に、程なく著岸、京家の武士の印を立て、汐の干がたに船つながせ、兩使汀にあがつて松陰に牀几立てさせ、「流人丹波少將、平判官康賴やおはする。」と、高らかに呼ばはる聲、夢ともわかず、「丹波少將是れに候。」「俊寬。」「康賴候。」と、我先にと周章き走り、二人が前に、「はつ〱。」と、手をつき頭をさげ蹲る。妹尾太郎が首にかけたる赦文取り出し、「是れ〱赦免の趣拜聽あれ。」と押し開き、「中宮御產の御祈によつて、非常の大赦行はる。鬼界が島の流人丹波少將成經、平判官康賴二人赦免有るところ、いそぎ歸洛せしむべきの條件の如し。」と讀みも畢らず二人、「はつ。」とひれふせば、「なう俊寬は何とて讀み落し給ふぞ。」「ヤア妹尾程の者に、讀み落せしとは慮外至極。二人の外に名が有るか、是れ見よ。」

ちやすみ、黄楊の小櫛も取る間なく、蠑螺の尻のぐる〳〵わけも、緣有る眼からは玉かづら、かかる島へもいつの間に、結ぶの神の影向か、馴れ初めなじみ今は埴生の夫婦住み、夫を思ふ眞實の、情ふかく哀れしり、木の葉をあつめ縫ひ綴る針手きき、さよの寐覺は鹽じむ肌に引きよせ、聲こそは薩摩なまり、世にむつましい睦言、うらが樣な女ら、歌連歌にべる都人、夢にも見やしめすまい。緣あればこそ抱いて寢て、むぞうが者ともおもしやつてたもりめすと思へば、胸つぶしうほや〳〵しやりめす、親もない身、大事のせなの友達、康頼樣は兄丈俊寛樣は父樣と拜みたい、娘よ妹よ兔せろ角せろとぎやつて、りんによがつてくれめせかしと、ほろと泣いたる可愛さ、都人のござんすより、りんによぎやアつてくれめすが、身にしみわたる。」と語らるゝ。僧都聞き入り感に堪へ、「扨々面白うて哀れで、伊達で殊勝でかはいい戀。先づ其の君に見參。いざ廬に參らうか。」「いや卽ちあれまで同道。千鳥々々。」と呼ばれて、「あい。」と蘆かき分け、竹のあふごに目ざし籠、擔げた振も小じをらしげな、眉目がよければ身に著たる、襤褸も綾羅錦繡を、恥ぢぬ形はあたらもの、なぜに蜑とは生まれけん。僧都も會釋のあいさつ、「やさしい噂承つて感心。康頼は疾く對面とな、俊寛は今日始め。親と賴み度いとや。此の三人は親類同然。別して今日より親子の約束我が娘。あはれ御兔かうぶり四人づれで都入、丹波少將成經の北の御方と、緋の袴きるを待つ許り。エ、口をしい、岩をうがち土を掘つ

「かこちは道理。去りながら康頼は此の島に、熊野三所を勸請し、日參に暇なし。三人のともなひも、此の頃四人に成つたるを、僧都は未だ御存じなきか。」「何四人になりたるとは、扨は又流人ばし有つての事か。」「イヤ左樣ではなし。少將殿こそ優しき蜑の戀にむすぼれ、妻をまうけ給ひし。」と、言ふより僧都にこ〳〵と、「めづらし〳〵。配所三歳が間、人の上にも我が上にも、戀と言ふ字の聞き始め。笑ひ顏も是れ始め、殊更蜑人の戀とは、大織冠行平も、磯にみるめの汐なれ衣、ぬれ始めは何と〳〵。俊寛も故鄕にあづまやといふ女房明暮思ひ慕へば、夫婦の中も戀同然、語るも戀、聞くも戀、聞き度し〳〵語り給へ。」とせめられて、顏を赤むる丹波少將、「三人たがひの身の上を、包むには有らねども、數ならぬ蜑の茶船、押しだして戀と申すも恥かしながら、なう斯かる邊國波濤まで、誰が踏み分けし戀の道、あの霧島の漁夫が娘千鳥といふ女、世の營みの汐衣、汲むも燒くもそれはまだ濱邊のわざ、そりや時ぞと夕波に、可愛や女の丸はだか、腰にうけ桶手には鎌、千尋の底の波間をわけて海松布から、和布荒和布あられもない裸身に、鱧がぬらつき鯔がこそぐるかざみがつめる、餌かと思うて小鯛が乳にくひ付くやら、腰の一重が波にひたれて肌も見え透く。壺かと心得蛸めが臍をうかゞふ。浮きぬ沈みぬ憂き世渡り、人魚のおよぐも斯くやらん。汐干になれば洲崎の砂の腰だけ、踵には蛤ふみ、太股にあかがひ挾み、指であはび起せば、爪は牡蠣貝黃螺の蓋。あまのさか手を打

界が島と聞くなれば、鬼ある所にて、今生よりの冥土なり。縱ひいかなる鬼なりと、此の哀れなどか知らざらん。此の島の鳥獸も、鳴くは我を問ふやらん。むかし語るも忍ぶにも、都に似たる物とては、空に月日の影ばかり、花の木草も稀なれば、耕し植ゑん、五つの穀物もなく、せめて命をつなげとや、峯より硫黃の燃え出づるを、釣人の魚に換へ、波の荒和布や干潟の貝、みるめにかゝる露の身は、憔悴枯槁のつくも髮、肩に木の葉の綴りさせてふ蟲の音も、枯木の枝によろ〳〵よろ〳〵と、今は＊胡敵の一足と、歎ちしも俊寛が身に白雪の、積るを冬きゆるを夏、風の景色を暦にて、春ぞ秋ぞと手を折れば、凡そ日數は三年の、言問ふ物は沖津波、磯山おろし濱千鳥、涙をそへて故鄉へ、いつ廻り行く小車の、轍の鮒の水を戀ふ憂き目も中々に、比べ苦しき身の果ての、命待つ間ぞ哀れなる。同じ思ひに朽ち果てし、鶉衣に苔ふかき、岩のかけ路をつたひ下り、わづらふ有樣「我もあの姿かや。諸阿修羅等故在大海邊、そも三惡四趣は、深山海づらに有りと御經に說かれしが、知らず我餓鬼道にや落ちけん。」と、よく〳〵見れば平判官康賴。「ア、我も人も斯くも衰へはてしか。」と、心も騷ぐ濱邊の蘆、かき分け〳〵來る人は丹波少將成經。「なう少將殿。」「なう康賴。」「こは俊寛か。」「僧都か。」と、招き合はせ歩みより、「伴ふ人とては明けても康賴、暮れても少將、三人の外なき物を、何とてか音づれ絕え、山田もらねど世にあきし、僧都が身こそ悲しけれ。」と、手を取りかはし泣き給ふ。

爲ならずや。祈誓も立願も慈悲心なくて叶ふべきか。別紙に俊寛の免文持參して、使の越度に成るとても、御邊に科はかけまい。此の丹左衞門基康が、腹切るまで。」と申す詞に一致して、「俊寛がゆるし文能登守教經。」と、在判して渡さるゝ。丹左衞門重ねて、「赦免状は濟み候へども、海上あらための關所々々通り切手、鬼界が島の流人只二人と許り書かれたり。是れぞ難儀。」と出せば、取つて披見有り。「オ、是れぞ猶心安し。二の字の上に能登守が、一點加へて流人三人、關所異議なく通すべき者なり。」とよみ上げて、渡し給へば丹左衞門受取り、「此の上もなき善根。關所もやす〳〵御產もやすやす、瑞相よき門出。いざ立たれよ兼康。」と、いへども妹尾しぶ〳〵顏、「女童のする樣に、慈悲善根なんどで子が生まるゝ程ならば、世に難產は有るまいが、產の道ははなれ物。此の上に中宮の御身に怪我の有つた時、能登守教經と申す弓取、愚癡文盲のお名が流れん笑止々々。」と、舌もひかぬに六波羅より早使、「中宮御平產王子御誕生。ゆるし文のお使悅んで急がれよ。」と、呼ばはる聲に妹尾太郎がむつと顏。「是れ妹尾、女童のする樣な慈悲善根の奇特、あれ聞きたるか。教經が文盲の名をながさんかとの氣遣ひ。汝等は智慧有つて、人の上まで心遣ひ大儀々々。さりながら智慧も餘りはたらけば、後には其の智慧も落ち、つれて首も落つる物、用心して道いそげ。」と、詞も胸にはつしと中る、小松殿の大悲の弓、能登殿の義心の矢、海山こえて末遠き、筑紫の空や 謠三重 もとよりも此の島は、鬼

め申せ。重盛ひとり言ふにもあらず。忝くも鳥羽法皇、かねぐの御歎き、かれこれ院宣と思ひ一人も島に殘すな。それにも入道殿承引なくば、一門の心得にて、中國備前の邊まで呼び上せ時節を見よ。我が死後までも遺言と思ひ忘るゝなと、斯く言ふ教經一門殘らず病牀に呼び集めての詞、一門は皆忘れしか、覺えても守らぬか。エ、言ひ甲斐なき者共かな。イヤ〳〵人はとも有れ此の教經は、小松殿の詞あだにはせじ。入道殿へ申す間、兩人しばらく是れに待て。」と、馬引き寄せ乘らんとし給へば、妹尾太郎つつと寄り、「ア、申し〳〵、いはれざる御取持。やせ坊主一人助けしとて、定業の御難產が變成男子の御平產も候まじ。總じて俊寛當家御取立の身にて、恩しらずの畜生。女房あづまやが御馳走たつぱい受けながら、御心にも從はず、慮外の自害、第一に家來有王といふ小倅、御所に切り入る狼藉者、推參者。かかる不當の俊寛を召し返し、仇を求められんは狼の子飼する同然。今をも知らぬ大病の小松殿御詞たたぬとて、何の咎めもなき事。」と、申す中より能登殿氣色損じ、「默れ妹尾詞多し。汝が樣なる不實者に問答無益。所詮俊寛が免文は、教經書いて渡さん。硯料紙。」と宣へば、「イヤ申し我らは少將平判官二人許り御ゆるしに、入道相國公の御使、外の儀は存ぜず。急ぎの公用おいとま。」と、ずんど立てば丹左衞門引きとゞめ、「是れ〳〵御邊許りがお使か。兩人承る上は萬端相談入魂も有るべき所。いかめしげに先だち、ひとり擢んで何とする。何事も御產安穩の

弓勢勇力、まなばずして學問力も有王丸、引かれて名をこそ傳へけれ。

第二

＊我が門に千尋あるかげと詠ぜしも、平家にしげる園の竹、＊入道相國の御娘、中宮御産のあたり月、御産所は六波羅の池殿にて、かねての御祈禱、御室東寺天臺座主をはじめ、御願寺十六ヶ寺、伊勢住吉賀茂嚴島、七十餘ヶ所の御奉幣。中にも能登守教經は、石清水御代參、駒を早めて下向有る。鳥羽のつくり道、丹左衛門尉基康妹尾太郎兼康、雜色供人相具し、旅出立にて參り合ひ、「我々は中宮御産あたり月、さま／＼の御願に付き、今日獄屋をひらき、罪科人ども殘らず御免。是れによつて鬼界が島の流人をも、召しかへさるゝ免文の御使、兩人承り候なり。」とぞ申しける。能登殿やがており立ち給ひ、「ム、流人御免とは尤もの善根。然らば勿論俊寛僧都、丹波少將成經平判官康頼、三人共の御赦免で有らうずるな。」と宣へば、「イヤ御ゆるし文の名付は丹波少將平判官二人ばかり。俊寛は殊に御憎しみ深く、一人島に殘し捨てよとの御諚。」と聞きもあへず、「扨こそ／＼。是れに付けても小松殿は、三世を見ぬく末代の賢人。入道殿慈悲心なく、意地強き氣質を今病中にも一つの悔み、鬼界が島の流人共赦免の時、俊寛には憎しみ深く、一人島に殘さるゝ事有りとも、一門たつていさ

ふ。有王が大髻菊王が大童、みだしかけ振りかけ、下手上手に押し合ひて、勝負は互角と見えたる所に、「ヤア〱過ちすな菊王。汝等が手に叶はじ。」と取つて引き退け、「教經が一ひしぎ。」と、組み付きたまへば、「望む所。」と有王が、腕がらみにさしこんで、一押しぐつとこりや〱〱、ねぢ付くる大力に、さしもの能登殿よろ〱〱。「ヤ前髪めに負けうか。」と、踏み直せば礑と突き、「エ、口惜し。」と、取り付けば振り解き、組めば捻ぢまげ引き廻され、平家一番の大力と、音に聞えし能登守、大腰に地響うたせ、尻居に撞と投げ据ゑたり。「有王めには教經も叶はぬ。一人も出合ふな手竝は見えた。己も歸れ。」と宣へば、「イヤ生きて歸る命なし。入道と刺し違へん。」と、かけ入る所を立ち上り、上帶つかんで「狼狽へたる若者。己ら五人や十人は、教經が片腕にも足らねども、情の負と知らざるか。鬼界が島に流人の主を持ちながら、犬死するかたはけ者。誠の力是れ見よ。」と、片手につかんで車寄の築地越、投げ越す力風を持つ、桐の一葉をふうはふは、ひら〱ひらりと下り立つて、恩を感ずる感涙落涙、うはべは色だつ敵と敵、にらむも徳に入るの門。能登守は入道をいさめて徳に入るの門、六波羅の大手門、總門樓門冠木門、扉は金石鐵壁の、透間の風も通さねど、さはらで通る弓矢の情、助くるも道殺すも道。「さらばかへれ有王。」「おいとま申す。」と禮儀は身の上、殘る恨みは主君の上、拳をにぎり牙を噛み、しどろ足にて歸る波、内には義理を立つ波の、音に聞え名に聞きし、能登殿の

者、清盛公へ直見參と、御所中を切り散らし、御座危く候。」と、追ひ〳〵の言上に、愈動顚、「能登殿甥御頼み入る。伯父は老耄敗亡。」と、いひ捨て奥に入り給ふ。荒れに荒れたる有王丸、當番の詰侍、放免の假武者所、牛に虻の付く如く、寄れば蹴散らし、縋れば拂ひ、大牀に立つて大音上げ、「清盛相國は主人俊寛が妻の首と、婚禮有る由たつた今聞いた。嫁入御寮は首ばかり、聟殿に胴が有つては片ちぐで似合はぬ女夫。入道の胴を切つて入滅の媒人、よい所に有王丸、聟殿に見參。」と、八方に眼をくばり、振りちらす前がみは、時雨の雲に風あれて、暮山をめぐる勢ひなり。下司二郎友方、「丁稚め遣らぬ。」と縋り付くを、首筋つかんでぐつと引き寄せ、「文覺法師がはりやはらげたる頭、手間は入らず。」と、刀の柄にてはつたと打てば、石榴を割つたる如くにて、か丶へてはふ〳〵逃げてけり。近よつては叶はじと、難波瀨尾が無分別、卷轆轤の大綱を、兩方四五間引つぱつて、卷いて取らんと犇いたり。「ハア、子供遊びの綱引か。惡あがきする餓鬼めら、是れ見よ。」と片足上げ、「やあん。」と氣をこんで、まものをふつつと踏み切れば、瀨尾は武士のきず難波、西瓜まろばす如くにて、ころ〳〵轉びうつたりけり。「此の上は能登鯖を一口食ふまで、能登殿々々々。」と驅け入る所を、菊王丸飛んでいで、「どつこい慮外な能登呼ばり。旦那には手に足らぬ。わつぱの菊王。サア來い。」と、四つ手にむんずと取組んだる。兩方年は十八さ丶ぎ、力は藤こぶ藤づるの、ねぢ合ひしめ合ひからみ合

障子も御簾も引き退けほや〳〵笑顏、「情なきあづまやを、靡かせて來たとや。能登守は弓矢打物許りか、戀の中立の名將高名々々。はやう逢ひたし。かの君は何處にぞ。」「卽ち是れに候。」と、袖の下より生首、御膝元に差し置けば、入道くわつと顏色かはり、「ヤア腹だちや倅め、首斬れとは誰が言ひし。年寄りて色に耽ると嘲つたる仕かた。親同然の伯父に向つて緩怠至極。返答せい能登守、言譯せい敎經。」と、日ごろの短氣增長して、摑みつかんず荒氣にも、ちつとも恐れず、「是れは近比御無理千萬。もと此の女の心だて、善し惡しは御存じなく、面體うつくしき、顏よき色を戀ひ焦れ給ふ故、その顏をお手に入れし敎經、御感はなくて御立腹は無體千萬。彼は法皇の御謀叛に與し當家を亡ぼし、一門の首取らんとせし俊寛が妻、折がな時がな夫のあだと、心に劍をふくんだる女、御寢間近く寵愛は、鴆毒に砂糖甘葛をつけて、脣によせ味ふ如く、命懸の戲れ、大將たる身のせざる所、申すに及ばず御存じの上、とかく御心懸けられしは、あづまやが目鼻口元より外は入らぬと存じ、くどきおほせ顏許りつれて參つたり。サアお杯の相手。それ御銚子御肴。但し御寢間の新枕か。」と、生首を膝もとへ押し遣れば、さすがの入道顏しかめ身を縮め、「ハッア今日は安藝の嚴島の御緣日、精進を忘れた。敎經明日々々。」と、座を立ち給ふを、「是れは胴慾。あづまやが思はく、餘り不興。」と止むる折から、御門はた〳〵しむる音、遠侍さわぎ立て、「俊寛が召使有王丸と名のり、十八九のあばれ

ても背かれず。先づ入道殿を誰とか思ふ。一門の棟梁國家のかため。いかなる非道を宣ふとて、汝等ふぜいが理を理に立てさせ、清盛入道が理をまげて、天下の仕置立つべきか。さりながらおことが女の操を守つて、二張の弓を引くまじとは、弓取の義にも劣らぬ魂感じ入る。匹夫匹婦も志を奪はずと言へり。かばねの上まで恥辱なき、貞女の道は能登守が立てて取らせん。又おことは一たん入道殿の御詞、屹と立つべき御返事、サア只今々々。」と、道理たゞしき詞の末、涙にかきくれ手を合はせ、「ア、有り難しとも嬉しとも、申し上ぐる詞なし。平家の中にも小松殿か能登殿かと、一二といふて三のなき、文武二道の御大將、數ならぬ下種女に、道を立てて取らせうとの海山の御恩德。夫の名も汙さず、生きての本望死しての譽れ。いで自らも清盛公のお詞の立つ御返事を。」と懷の守刀するりと拔いて、肝先にぐつと突き立て、一くりくつて「申し敎經樣、あづまやが死ぬれば平家の御意を背く者此の世にない。御意を背く者なければ、入道殿のお詞は立つたぞや。お詞立つるは此のあづまや。あづまやが道を立てて下さんすは敎經樣、御恩は忘れぬ。ア、忝い。」と、是れを最期に絶え果てたり。おどろき騷ぐ女房達、突き退け押し退け「出かいた女。」と首打ち落し「是れ菊王、此のからだ門外に捨て置け。」と、髻つかんで首ひつさげ、御前間近く欄干に謹んで「御心を懸けられしあづまや、敎經がくどき落し連れ參る。御望み叶ひ候。急ぎ御酒宴々々々。」と、呼ばはり給へば入道殿、

や、逢ひたやと思ふより外望みはない。身の果報何にせう。何も聞かぬ聞きともない。」と、兩手にて耳塞ぎ、「武士の情には、せめて泣かせてくれるな。」と、「わつ。」と許りにうつぶして、沉み入りたる有樣に、盛次も詞なく、すご〳〵奥に入りければ、ひつ繼いて齋藤別當實盛、白髪髭くひそらし、「我ら六十に餘り色氣をはなれ、奥方女中を預る實盛と云ふもの。お寢間のつとめは兎も角も、御前へちよつと出るぶんは、年寄の惡い事申すまじ。」と、言ひも切らせず、「ア、くどや〳〵、きのふも來て同じ事くど〳〵と長口上、聞き入れる耳がない。」と、愛想なければ手持惡く、「拙者生國越前、近年御領に付けられ、武藏の長井に在りし故、それで長居は御免有れ。」と、紛らしてこそ入りにけれ。胸にせまれば聲に出で、「恨めしの世の中や。囚人と成る程ならば、手桎足械牢獄屋にも入れられず、情交りの憂目を見る。水責火責の苦しみも、心の辛さは劣るまい。此の上にお使たたば、何と返事もせん方なし。なう上臈達、我が内には有王丸とて音に聞えし大力の若者あり。若し忍んで尋ね來るならば、今生後生のお情、密かにそつと知らせて給べ、有王を力に、此の地獄が遁れたい。有王がな來れかし。有王は來ぬ事か。」と、立ちてはくどき、居ては歎きの折から、渡殿に足音して能登守教經、わつぱの菊王相具しつゝ、と入り、「俊寛が妻あづまやとは汝よな。某などは朝敵退治の大將か、其の外天下の大事ならで、斯樣の、大人氣なき小節に、詞も加ふる能登守にあらねども、入道殿の仰せは某と

うしたふりに、若衆出立の目せき笠、金鐔鍼門ざしで、たんだふれ〲千代の松坂越えて、エ松は千歳の色ながら、をしや小松は雪をれて、老木かれせぬ六波羅をどりが所望だが合點か。」唄「平家平家と千草も靡く、扨は居よいか住みよいか。居よも住みようも慈悲も情もしやんとしよ。我は身一つ泣きくらす。」「踊とが見度くば、昔にかへせ世の中。對の浴衣しやんと著た、踊ぶりがゆかしい。吉野初瀬の花よりも、紅葉よりも、戀しき夫が見たいもの。うたての踊やな。情には人々、鬼界が島へながされ、夫諸共住む樣に、申してたべ。」と許りにて、かつぱと伏して泣き給へば、をどり子の上らふ達、「げに理痛はし。」と、皆々袖をぞ絞らるゝ。踊の聲の聞えてや、亭のうちより越中の次郎兵衞盛次、御使として局に入り、「なうあづまや殿、此の閒御一門衆入りかはり立ち代り、さま〲仰せらるゝに承引なきも尤もながら、御身とて岩木ならず。今日本にて西を東と宣ひても、そむく者なき入道殿、戀なればこそ我々まで御頼み。時世につくも一つの道、かつは身の果報。常磐御前の仕合是れぞよい證據。女たる身の望む所と思はずか。サア〲よいお返事を。」と摩り寄れば、身をしさり、「エ、主人達から内衆まで人らしい人はない。常磐御前の仕合とは、武士の口から聞きにくい。夫義朝の白骨まで踏み叩く敵の、手かけめかけと成るやうな、助兵衞の徒ら者と、此のあづまや比べらるも口をしや。八重の潮路の鬼界が島、雨露も凌ぎ兼ね、餓鬼同然に成り果てし、殿御を愛しや戀し

尾、頭はられて堪忍するか。下司次郎おり合へ出合へ。」と、馬の尾にて柄まいたる九寸五分、よらば突かんず面魂、恐れて寄り付く者もなし。「オ、さも有らん。汝らが主の淸盛は、國土をなやます大惡魔。此の文覺は惡魔降伏、國土安穩をいのる大行者をくるしむる惡逆、遠くは三年近くは三月に思ひ知らせん。此の身は即ち不動明王、なまくさばんだばさらだ、せんだまかろしやなそはたらうんたらあんだら共。」と、どつと笑うて立ちかへる、勇猛力ぞ 三重 春風も、庭はをどりの秋の露、「さつさふれふれ、ふやる小褄はいとしえ、えい〳〵えい〳〵、えんに引かるゝ柳の絲の、雪にをれぬも風には靡く、竹は戀しり幾夜も靡く、靡きくる〳〵栗栖野の萩、野わけの薄、尾花靡きてやつちりナ、やつちりナ、ちりゝ縮み髮も、油とろ〳〵櫛の齒に靡く、たん〳〵丹波の酒呑童子もサアエ、さすぞ杯飲めよ醉へさ、醉うたまぎれにな君と寢てさ。」歌ひ踊りて上﨟達、局の緣に腰打ちかけ、「申しあづまや樣、是れ見さしやんせ。時ならぬ踊も御奉公。入道樣の仰せ隨分お心なぐさめ、御杯の相手、お寢間の添寢も遊ばす樣に致せとて、あれ彼の亭に御座なさるゝ。いざ氣をうかして我々が、踊につれ御前へお出で。サア〳〵踊。」とざわめけば、「ア、いや〳〵、自らをいさめの踊、笑ふではなけれども、世に有りし昔は舞子踊子、腰元まじり樣々の變り踊、やゝこ踊木曾をどり、小町踊伊勢踊、見せたいものは都踊のぬき拍子。」「ム、見たい〳〵。いざ一をどり所望々々。」と浮されて、「羞かしながら斯

をむんずと摑み、御首の中に聲有つて、「義朝が髑髏より、おのれが素頭はり碎かん。」と、握り固めしかな拳、鉢も割れよと二三十、腦も烏帽子も打ちさかれ、眼も眩み、「是れ死にます〳〵お助け。」と、ほゆるも構はず前へかつぱと突き伏せ、其の手をのばし曝首つかんで御首へ引き入れしは、二たび爰に羅生門、茨木童子が腕骨にて、相手が綱には似ざりけり。難波妹尾肝を消し、「今度の兵火に燒け落ちし此の中に、狸野干も住むべき樣なし。黃金のまじりし金佛、金の精と覺えたり。ついでに御首も打ちひしぎ、鑄潰して公用に達せんそれ〳〵。」と、あらしこ中間立ちかゝり、大槌大杵鐵梃なんど、ごう〳〵くわん〳〵、百千の銅鑼釣鐘、河瀨にひゞき漣立ち、木草もゆるぐ許りなるに、裳なし衣に種子袈裟かけ、六尺ゆたかの大坊主、御首の中より躍り出で、鎚も杵も踏みちらし蹴散らし、「ヤアやかましいうんざい共、音にも聞くらん高尾の文覺といふ源氏の腰押し、此の曝首はもと我が物、取り返さう許り佛の頭ふみあらした。罰は平家利生は源氏、淸盛にまつかう吐かせ。」と立ち出づる。「それ盜人坊主、難波妹尾をしらぬか。一足も遁さじ。」と、大勢どつと取りまいたり。「やれこと〳〵し。那智の瀧に千日うたれ、龍神と相撲取り、愛宕高尾の大天狗と、腕押ししたる坊主、手なみを見よ。」と獄門柱、「えい。」と引き拔き振り廻し、河原の院の古道より、長講堂の裏筋を、追ひかけ追ひ込みなぐり立つれば、眉間眞向腰骨膝ほね打ちみしやがれ、邊に近づく雜兵なし。「ヤァロほどもなき難波妹

たゝかひ惡口に、寄手も口をくひしばる。西大寺の苦口法眼反魂坊、二月堂の荒若狹、吉祥院の婆羅門佐渡、南大門のくわんの木日向、釘ぬき周防、南圓堂には八角目玉の眼光法師、傳法院の今韋駄天今毘沙門、鋒を取つてはならび名取の法師武者、倶舍唯識維摩の學頭にて、智慧殊に勝るれば、今文殊ともあざ名せり。鎭守堂の鰐口因幡猪、和泉虎禪師、これ等は早業隼の、飛鳥の影に先だつて、風を追ひかけ嵐を追ひつめ、楯割り石わり岩切坊、發志院にはとんぼう返りの通明法師、矢ぐりの小聖、夜叉新發意、榎木寺になた僧正、元興寺に鎌僧都、管槍中將熊手快源、黑不動赤不動、十五大寺七大寺の荒法師惡法師、野晒の首は源義朝、金色の大頭は聖武天皇の御建立、逆徒の大將金銅の盧遮那佛、前佛さつて後佛を待つ、首數都合五十六級、七千萬歲彌勒の世まで、をさまる平家の御代の大數かなひ畢んぬ。從三位右近衞中將平朝臣重衡、是れを討つ。」とぞ讀みたりける。往來羣集目をそばめ、「恐ろしや勿體なや。」と、皆手を合はする折から、六波羅の早使下司次郎友方、鞭鐙を合はせ驅け來り、難波妹尾にのべけるは、「常磐御前より義朝の髑髏を申し受け、持佛堂に安置して、經讀み廻向し弔ひたきとの願ひ、叶へられては、又新參の俊寛が妻、あづまやが何事をか望まんに、叶へられずばかたみ恨み。所詮此の曝首事やかまし。打ち碎き鴨河へ流し棄てよと御一門一統の仰せ、いで計らひ申さん。」と、脚榻を踏んでのび上れば、あら不思議や、大佛の鼻より大手を以て、下司が頭

分勞り馳走して、酒宴音樂舞踊、望むこととして慰めよ。禪門が祕藏の客人もてなせく。」と宣へば、上中﨟の女房達、手ん手に繩も打解くる。人々の執成しにて、夫俊寛の若しや歸洛のたねもやと、心にそまぬ輕薄の、空賴めこそ理なけれ。「オ、梅櫻にも勝つて、散ること知らぬ入道が閨の花、老後の眺め壽命のくすり、皆重衡が忠孝、手柄々々。奈良法師の首に此の髑髏を添へ、大佛の頭をも六條河原に獄門にかけ、難波妹尾警固して、見物羣集の聞く前、首帳をよみ立て、諸國にかゞむ源氏共、聞き傳へにも威しをくれ、平家の威勢をあらはせ。もし奪はんと近づくか、胡散な奴原切捨にせよやつ。」と、長絹のそば引摑み、帳臺に入り給ふ。六十有餘の老木の櫻、我慢の色に咲き出づる、心の花や三重春の水、六條河原に高垣結ひ、盧遮那佛の御首に、義朝のどくろを竝べ、中央に掛けければ、照る日の影も金色に、五十餘級の衆徒の首、光明にてらされて、累々と連なりしは、梢に實る佛前の、庵摩羅迦とも云つつべく、洛中の貴賤踵を接ぎ、近國他國の老若男女、道さりあへず立ち集ひ、「五天竺の堂塔を一日に滅却し、八萬四千の僧尼を殺せし、弗沙密多羅が惡逆を、末世の今に見る事よ。奈落の底には利利も須陀もかはらぬもの。恐や凄や。」の聲々は、巷にみちて夥し。妹尾太郎兼康、入道相國の仰せによつて、首帳開き高々とこそ讀み上げけれ。「第一の物始め坂四郎法師永覺、山階寺の大倉坊、鐵拳の式部卿、是等は六宗に名を得し惡僧、軍神の祭とす。戒壇院の富樓那沙彌、詞

齒まばらの大口くわつと開け、とろ〳〵見とれ坐す。重衡すゝみ出で、「此の女は鬼界が島の流人、俊寛僧都が妻あづまやと申す者、南都法華寺の尼寺に隱れ住み、平家に敵對小長刀を以て某が陣を窺ひしを、搦め取り候。」と披露も聞かず、「ム、色よき花は匂ひも深し。みめが好ければ心もやさしく健氣なり。俊寛法師はたふとげもなき妻帶坊主なれども、二萬石の寺領を與へ、僧都になして崇敬せし、清盛が恩を忘れ、法皇の謀叛に與したる罪科、女房に科はなし。それ故に當家を一旦の恨みは殊勝々々。向後我に宮仕へよ。年よりし禪門が起き臥しの撫でさすり、介抱に預らん。それ繩解け。」と宣へば、妹尾太郞兼康、繩を解かんと取り付く腕もと、ずんど立つてはたと踏み、「慮外なり靑侍、院の昇殿をゆりし法勝寺の執行俊寛僧都が妻。いくさの習ひ雜兵にも、搦めらるゝは是非もなし。我が夫と膝を組みし平家の前、引かるゝさへ口惜しきに、此のあづまやが身に、おのれ等が手を觸れさせうか。羽あらば空をも飛び、夫諸共と思ふ身を、命助かり宮仕へとは、情知らぬ清盛公。エ、むかしの世が世ならば、かかる無念は聞くまい物。神佛の罰利生も、人によるか入道殿。」と、はつたと睨む眼に淚、つゝみかねてぞ見えにける。「いや入道を情知らぬとは料簡ちがひ。此のされかうべ義朝が妻、常磐が我にあまえる不便さ、牛若なんどいふ子供を助け置きしは何と。俊寛を島より戻さうと戻すまいと、お事が心に有るべき事。それ局々の女共、あづま屋が繩を解き、西の對にて隨

餘級、竝に大佛の頭燒け落ちしを、衆徒の首と共に車に積んで凱陣仕る。外に生捕一人、急ぎ實檢有つて、生捕の罪、御沙汰有るべうもや。」とぞ述べらるゝ。入道相國笑つぼに入り、「惡法師ども源氏に心を寄せ、當家に敵對、我が威光に恐れぬは、佛を甲にきる故、惡徒の張本大佛の首をも取つたるとは、手柄々々。扨又源氏肩入の大惡僧、文覺法師南都に隱れ住むと聞きしが、生捕とは文覺か。それへ引け。」と宣へば、重衡しさつて弓袋より、曝首一つ取り出し、是れは源氏の大將故左馬頭義朝が髑髏。かの文覺、東大寺の二階樓に壇をかまへ、源義朝公と書きしるし本尊に立て、平家調伏の行法まぎれなきところ、四方をつゝんで攻めすくめ候へども、只者ならぬ文覺、太刀刀燃ゆる火も事ともせず、焰をくゞつて落ち失せ、殘せし所の曝首、奪ひ取り候。」と、聞くよりつつ立ち齒がみをなし、「エ、憎や〳〵。此の禪門をほろぼさんとせし義朝、されかうべと成りても二たび足下に來る。入道が威勢思ひ知れ。」と、髑髏も碎け檜扇も、折るゝ許りに丁々と打つては小をどりし、はたと蹴散らし、がはと蹈み、「一門の人々是れを見よ。二度の朝敵討つたり。」と、殿中ひゞく高笑ひ、いかりより猶凄まじし。「扨いけどりとは何者、面を見ん。」と御諚の中、繩目血ばしる弱腕、指まで同じ紅鹿の子も、奥樣じみて面やつれ、三十許りの亂し髮、盛り過ぎたる夭桃の、春を傷める姿にて、ひかれ出でたる百の媚び、列座の一門目を動かし、烏帽子ひら〳〵ひらめけば、入道も氣を取られ、奥齒向う

平家女護島

第一

籠の中の鸚鵡*おばしまにしたがつて俯し仰ぎ、戸牖をうかがつて踟躕ひす。紺の趾丹き嘴、綠の衣翠き衿、*金精の妙質火德の明輝、辯才聰明にして能く物言ふ。靈鳥いかんぞ時の險しきに遭へる。放たれたる臣、棄てられたる妻、懷ひを茲に同じうす。平朝臣清盛入道相國の、四海に覆ふ驕慢の、網には洩るゝかたもなし。家にあらそふ子なければ、家正しからずとかや。小松の內府所勞によつて致仕し給ひ、敎訓も懈れば、驕奢暴虐心の儘。第九の姬君は高倉の御門の中宮にて、殊に此の頃御懷胎の御悅び、執柄華族の公卿も、平家にへつらふ御進物、あるひは馬太刀卷絹織物、綺羅みち〳〵て殿中花の如く、門前に市を成し、萬寶一つとして缺けざれば、禁中も仙洞も、是れには過ぎじと見えにける。爰に子息三位中將重衡、南都のいくさに勝利を得、奈良の都の八重櫻、けふ九重の梅が香と、よろひの袖にかつ色見せ、御前に畏まり、「去る二十八日、てんがい般若坂の柵逆茂木押し破り、興福寺東大寺諸伽藍殘らず放火せしめ、奈良法師の首七百餘、猿澤の池に切りかけ、大將分の首五十

ず。「行く先とても構ひなし。繩を許せ。」とありければ、畏まつて雜色共、立ち寄り解く繩の跡、吹き擦り撫で擦り、「王樣の意氣方は又格別なものぢやないか。」此の手が自由になつたれば、郭の門を出た樣な。」と、笑ひ悅ぶ其の中に、小女郎は始終しく〳〵涙、留めかねたる顏振り上げ、「連合の惣七殿、斯かるお慈悲を待ち受けず、私を捨て、此の世彼の世へ飛び去りて、比翼の鳥の片羽がひ、今が博多の此の小女郎、生きて甲斐なき命ぞや。お慈悲に殺してたべなう。」と聲も惜しまず泣き居たる。「オ、尤も〳〵。夫惣七同類とはいひながら、色に迷ひし若氣の至り、罪の輕重明白たり。自害せしは其の身の不祥。汝夫に成り代り、親惣左衞門に孝行盡し、後世を弔ひ得さすべし。敕に任せ、彼奴原それ追拂へ。」重ねて惡事を止め灸の、顏に燒鐵入痣、耳殺ぐ鼻削ぐ、血みどろちんがい追拂ふ。鄰國他國幾萬人、博多小女郎が物語、語るも聞くも後代の、永き噂を遺しけり。

博多小女郎波枕 終

ぬもの故に、命の*かいまでなしたよな。許して給れ小女郎。」と、いふ聲もはや息切れし、頼み少なく見えにける。鋭く見ゆる捕手共、「獄屋へ渡しては叶はぬ事。人は互、兩方名殘惜しませよ。」と、料簡するこそ優しけれ。聞けば聞く程猶悲しく、「其の起りは誰がさすぞ。小女郎を人手に渡すまいとの御心から、親御に替へ命に替へ、女房に持つて下されし、それ程私が可愛いか。冥加ないとも忝いとも、お前に禮をいふ詞、日本は愚かの事、唐土天竺にもよもあるまい、此の手が自由になるならば、拜んで死に度うござんす。」と、夫の膝に顏差し寄せ、消え入り絶え入り咽せ返れば、「此の世で逢ふは今許り。來世も變らぬ女夫ぞや。南無阿彌陀佛彌陀佛。」の、聲もかすかに脇指ぐつと、拔くより早く息絶えたり。小女郎、「わつ。」と聲を上げ、「待つて下され連立ち度い。遲いか疾いか殺さるゝ我が命、皆樣お慈悲に今爰で、殺して下され殺して。」と、狂ひ戰き驅け廻る。斯かる所へ撿非違使の某眞先立ち、此所彼所にて召捕つたる海賊原、傾城交り繩付共、一度に彼處へ引き來る。撿非違使一札押し開き、「囚人共に申し聞かする趣、有り難くも承れ。一沖掛りの大船に通路を求め、波を潜り水底を拔け船へ近付き、諸色を奪ひ取りし事國法を背く大罪。武士に仰せて死罪あるべき所、當今御卽位の御悦びによつて、死罪一等を勅免なり。」と聞きも果てず繩付共、蘇生りたる心地して、一度に、「あつ。」とぞ勇みける。重ねて傾城共に打對ひ、「汝等は流れの身、彼奴等に添ふは勤めのならひ科にあら

で。」と、呟き〳〵立ち寄りて、駕籠舁き上ぐればがば〳〵と、駕籠から漏れて流るゝ血は、大地に毛氈ひく如く、乘人はうん〳〵喚くにぞ「やれ駕籠の内で自害した。出合へ〳〵。」と駕籠投げ捨て、恐れて側へ寄り附かず。役の者共立ち懸り綱引き退け、簾上ぐればこは如何に、一尺五寸切羽際まで突き込んで、刃先は弓手の脇腹に蟲の息、眼はぎろ〳〵、呆れて爲方なかりけり。斯かる處へ小女郎が身にも掛つた縛り繩。引かれて來る身の悲しさより、此の有樣を見る悲しさ、流れし血汐を踏みしだき、駕籠の内へ顏差し入れ「小女郎が來ました。私も今縛られた、繩掛りましたぞや。昨夜までも一つ枕に起き臥して、一所と契り交したに、こなさん一人が先だつて、存へ物を思へとか。苦しうござろ、じゆつないか。」と、言ふも淚に搔き暮れて、前後も覺えず泣き居たり。惣七苦しき目を見開き、「オ、繩掛つたか小女郎。國法を破り、親に不孝の大惡人、廣い世界に狹められ、所の住居もならぬ樣に身を持ちなし、落付く方なく當途なく、此の所まで迷ひ來て、*天の網地の繩に搦められし此の惣七、故鄕へ引かれ死罪に遭はば、一門の頰に血を注ぎ、親へは不孝の上塗りと、思ひ定めての自害、毛剃九右衞門が海賊に與し、今まで身に纏ひし繻子縮緬、和女に著せた綾錦の冥加に盡き、菰被る身に成り果てた。夫につるゝならひとて、そなたまで繩をかけ、名を流させ憂き目を見するは、我が一心より事起る。此の惣七がなかりせば、今の憂い目は見せまいもの、不便や嘸悲しかろ。長くも添は

惣七が胸に應へ、かゝらぬ繩に氣を縛られ、向うの人は下るれども、我が心から身をすくめ下りもやらず、「コレ小女郎、先づそなたから乘り替へて先へ行きや。」「そんならお先へ參ります。」「四日市とやらで待つて居よ。」「駕籠の衆早う連れましてや。」と、おりゐの駕籠の河合村。小女郎は何の氣もつかず、駕籠に任せて乘りかへ行く。石藥師から來る駕籠の者聲かけて、「女中の連衆乘せた駕籠は是れか。うちも聞いた駕籠替よい。」「おつと幸ひ、サア立てい。旦那殿替へまする。下りて下され。」と駕籠の簾を打ち上ぐる。相手は駕籠をハヤ下りて、提げたる風呂敷包、身輕い出立の袷股引、こはぜ脚絆に身を堅め、腰に早繩見るからぞつと惣七が、餘所見る顏は我が顏を、見せじと忍ぶ頰冠り、心早に下り立つて、「駕籠の衆大儀。」と乘り替ふる。駕籠の簾我が手に取つて引き下し、「急ぎの者ぢや增やらう。サア駕籠遣つた。」といふ聲は、人の耳にも顫ひけり。「小町屋惣七捕つた。」と聲を打ちかける、駕籠に縒苧の細引綱、中に是れはとあがけども、翼なければ飛ばれもせぬ、駕籠の鳥かや惣七は、中に音を泣くばかりなり。豫て相圖の小屋の者、十手提げくる〳〵と押取り卷き、「科は心に覺えがあらう、其方共に仲間八人と、分明の仰せを請け、我々捕りに向うたり。尋常に召捕らるゝか。踏み付けて繩かけうか。」と、いへども念佛の聲の外、何の答へもあらざれば、「爰は途中、次の宿まで此の儘連れ行き、繩かけて國へ引け。これ駕籠遣れ。」「心得ました。」とても遁れぬ命ぢやに、爰で繩を掛らい

ざる辨柄縞の、「愚癡なさら〴〵さうではないに、羅紗もない事言はしや綸子な。先へ行く子に尋ぬれば、拔け參宮の頭字が、耳に留まる神心、守り給へ。」と再拜の、袖に神樂の鈴鹿山、八十瀨の川に濡れ初めし、「おれとそなたが初戀に、二世も三世もかはらじと、登り 冷泉 つめたる坂の下、今零落の身と知らば、ざつと淺葱に染めうもの、裏表ない心から、僞紫の色わるう、やつれ顏見る悲しや。」と絞る袂の涙の露、野邊の草葉も色付きぬ。泣いて心を亂せとか。方樣ならで、唄「賴む博多の小女郎がなくば、世帶の花も縮緬と、こんな姿にせまい物。ぬめ 幻の此の世から、未來〴〵も夫婦ぞ。」と、縋りついてぞ泣き居たる。唄 *關のお地藏は、親よりましと聞くなれど、勝らぬ此の世の舅御の、機嫌直して給はれと、賴みを直に救ひ乘せ、共に助かる駕籠舁の、「駕籠やりませう。」と歩み來る。ワキ「尾張へ行くもの。先の宿まで駕籠賃いくら。」シテ「石藥師までは、道は二里ある駕籠賃ころり。」ワキ「ころりは知らぬ。」シテ「知らずは錢百。」ワキ「それは高い。」シテ「負けて行きましよ。」ワキ「七十々々。」二人「好いわ負けた。」と駕籠下す。道は一筋駕籠二挺、二人思ひを抱き乘せて、打見るよりは肩重く、シテ「小川ぢや。」ワキ「そこせい。」シテ「かたせい。」ワキ「まつかせ。」二人 杖突坂小谷大谷打過ぎて、日影も我も行く空の、末果てしなき旅衣、昨日今日とは思へども、都を出でて日數さへ、四日市にも程近き、追分にこそ 三重 著きにける。*まさしかれと心中に、賴みをかけし辻占の、駕籠舁が詞のはづれ、

分量を知つたる故。畜類に劣つた身の程知らず、なれの果てを思はれ、不便さに腹が立つわいや。」と包みかねたる涙なり。「ヤイ惣左衛門が子になりたくば、手鍋提げても正道に、淺ましい死をせぬ様に命全う何卒親を先に立て、惣左衛門が葬禮に、喪服を著て供して見せ。其の時は我が子ぢやと、棺の中から悦ぶ。早う失せう。」と許りにて、「わつ。」と泣き入り泣く聲の、耳に殘るを形身にて、わかれゆくこそ　三重

下　卷

惣七小女郎道行

唄戀と小袖は一模樣、身に引き締めて合うてこそ、寢心もよく著心もよく、よく〳〵見限り果てられて、追ひ出されし我が宿の、邊に顏を見られじと、戸口も店も明けやらぬ、星も夜深き親の恩、重ねて著たる其の時は、いとゞ心も輕かりし。今朝肌薄く行く道は、かたせ苦しき身の行方、心からとはいひながら、情馴染の京の町、三條小橋で知る人に、粟田口かと思ひしも、先へ心の關寺に、身の衰への恥かしき、今の小町屋惣七は、博多小女郎がならし竹＊、何時も心に懸けて置く、唄親のかひきに綾錦、「最早都を見ん事も、又となるまい限り。」といへば、共に泣く〳〵憂きくろ繻子の、絲の切れ

「申し御手は取れどもお顏は知らぬ。私はお許しなけれどもお前の嫁。どうぞ御機嫌直して、惣七樣とも詞を交し、一期の見始め見納めに、お顏を拜ませ下され。」と舅の手を我が顏に、押し當て〳〵泣く涙、親の歎きも表はれて、腕顫ふぞ哀れなる。盡きせぬ涙の手を振り放し、銀財布一つ投げ出し、早う出て往け〳〵と、言はぬ許りに門の方、教ふる手さへ引き入るれば、「今は親よ舅よと、便る名殘もきれたるか。」と、又絕え入りて泣きけるが、「ナウ不孝至極の惣七に、是れ程のお慈悲、路銀まで下さるゝお心背くは猶不孝。」と、財布を女夫が頂き〳〵「はや人顏も見えまい。是れが眞の名殘ぢや。」と、互に身用意裾引き上げ、泣く〳〵表に出でけるが、鄰の門を遙かに見入り、「ヤレ姥唯一目親父樣を、小女郎に見せてくれ。路銀のお禮も申し度い。」と、小聲にいふも聞き付けて、姥が出づれば惣左衞門、「こりや姥、何をとぼ〳〵する。今の銀は鄰の道具賣つた銀、直に鄰へ投げ込んだ。禮受くる筈がない。惣左衞門が子供には商ひこそ敎へたれ、非道の身過する子は持たぬ。淺ましや不便や天道も日月も、神も佛も罰は當てはなされねど、此方から罰の下へ當りに往くとは知らぬかや。生身には餌食あり。人間一人生まるれば、乳房といふ天道の御扶持方、正道の家職勤むれば、分限相應々の、天の乳房が備はる。正道にない金儲け、榮耀する樣なれど、天道の乳首に放れ、三界の捨子となり、のたれ死するは幾人か。猫は火燵に寢臥しする、犬は土邊で物喰へど、火燵な猫の眞似せぬは、身の

踏みためず、障子を我が身に負ひながら、どうと伏せば九右衞門、隙さず蒐る片足をがばと踏込み、小女郎が上に重なり伏し、障子越に突かんとす。「突いたらおのれ一打。」と、上に閃く惣七が切先、危き中の危さなり。親はあこがれ鄰の壁打ち毀ち〳〵、手の出る程に壁下地引き破り、割符を出しひらめかす、親の手付の物言ふ許り。惣七屹と見付け、「ヤイ九右衞門聊爾すな。割符渡す言分あるまい。此方も差す、サア差せ。」と鞘に納めて眼前に、助かる命も親の慈悲と、手共に取つて押し戴き押し戴き、「是れ〳〵慥かに受取れ。」と、渡せばとつくと見屆け、「ム、別條ない受取つた。これ惣七、互に命がけの身過、魂を研く仲間の法、切り結んだ劒の下から睦まじうなるも魂、遺恨は殘らぬ。氣苦勞のある顏色ぢや。山が崩れ掛つても、狼狽へぬ心持たねば、此の商賣はならぬ事。いつもの時分に又下りや。國で逢はう。」と暇乞、出でて行くこそのぶとけれ。惣七小女郎を引き起し、「今のを見てか忝い親の慈悲。此の壁の崩れをせめて拜みや。」と泣きければ、「ア、有り難い御恩德、慈悲心を受けながら、壁一重彼方の舅御の御面體、見ることも叶はぬか。ハア、息切れて物言はれぬ。水でも湯でも。」と苦しめども、茶椀一つ杓一本、「あら氣の毒なんとしよ。」と、言ふ聲鄰に響き入り、茶椀に溫湯壁越しに、情の親の手つきを見て、「ハア、冥加ない有り難い。」と夫婦、「わつ。」と泣き出し、茶椀に縋り手に縋り、「お杯とも藥とも、氏神のお神酒とも、此の上のあるべきか。」と、二人戴き飮み交し、

色を變へ、「三千里を股にかける此の仲間、命代への割符を親父に預けたとは何處へ。甘い事いふないふな。仲間を脱けて一人儲けしようでな。音沙汰なしの俄宿替と、ちやうど算盤が合うた。此の割符は其の肌に付けて居る、知れた事。受取つて見せう。」と、大戸潛戸の懸金樞、憖かとしめて伸し上れば、小女郎周章て、「これ九右衞門樣、魚と水とのお仲間、何の譃がござんしよ。此の割符は二三日中私が急度渡しましよ。まづ歸つて下さんせ。」と、押し出す小腕むずと取り、「エ、面倒な。」と簀子にどうと投げ付くる。「卑怯な、女を痛めずとも、いふ事は身に言へ。」と、脇差に手をかくれば、「ヤ反を打つて威嚇しても、割符を取らずに置かうか。」と、ずはと拔けば惣七も、飛び退去つて拔き合はせ、兩方腕は狂はねども、繩目も弱き古簀子、まばら朽ちたるしのべ竹、踏込む足を踏みとめて、右へ拂へば左へがぶり、左を斬れば右を踏込み、打ち合ふ切先春の日に、解け行く氷踏む如く、小女郎は中に身を捨てる、掃溜の鍬帚、持つて開いて相手の刃物、打ち落さんと立ちまはる。裾を簀子にしがらみて、かつぱと轉ぶ頭の上、閃く刃ぞ三重危けれ。邊鄰に聞き付けても、恐れて態と知らぬ顏、堪り兼ねて惣左衞門、何をいふも子の可愛さ、「割符を渡す怪我すな。」と、表へ廻る門の戸を、押せど叩けど明くにこそ。樞の穴から覗いては、「ハァ、〳〵悲しや危や。」と、もがいて裏へ驅け廻る。内には小女郎、障子を外し中の楯、相手の刃物を押へんと、前に塞がり後に開き、隙間を見て打ち付くる、足

れがあれば一大事。入物ともに道具屋の手へ渡つたか。」「いや〳〵懸硯は賣れたれども、其の割符は殘して親父樣の鼻紙入に納めてぢや。そんな事氣遣ひせず早う町をのけましたい。ハア會所から呼びさうな。姥はもう往きまする。命あらば御緣次第。お二人共に御無事でや。」と、歸るぞ是れも名殘なる。茫然として惣七、「親父の耳へ入るからは、世上に知れたに極まつた。四日市には思ひ寄る方もある。伊勢路へ向けて遁るゝだけは遁れて見ん。もう七つに下つた。サア用意。」といふ所に、「惣七宿にか。早い門のさしやう。」と、潛戶を明けてつつと入るは毛剃九右衞門。惣七狼狽へ、「ヤ珍らしい何と思うて。まづ〳〵是れへ。」と、「煙草盆持て來い、茶持て來いよ。」といふ程、九右衞門うさん顏、「默りや默りや惣七。大坂で逢うたは四五日前。追付上る京で逢はうと言ひ合はせ、こりや宿替と見えた。何とした仕だらで何方へ立ち退きやる。氣遣ひなり。」といひければ、「イヤ〳〵氣遣ひな事でない。たつた今上つてまだ洗足も使はず。老體の親別住居も異なものと、一所につぼむ談合で、諸道具を引くやら、取込んだ最中。旅宿は何處ぞ、其の中此方から便宜せう。休んで往きや。」と出でんとす。「待ちや待ちや。ハテきよろ〳〵と女夫ながら飲込まぬ素振。これ軈て商賣時分、此方も明日國へ下る。仲間中から預けた島の割符請取りに來た。其の割符を渡して往きや。」「オ、如何にも〳〵、其の割符は大事にかけ、箱に入れ封を付け親父に預けた。追付是れから持たせて遣らう。」と、いふより九右衞門

度詰開かう。」と走り出づるを、「是れ〳〵、女子のいうて濟まぬ事。貸屋といふは名許り、破れ家を手前普請、ねだも追付張る筈で、板も買ひ置く。屋賃といへば二ヶ月三ヶ月、さきへは遣れど滯らず、町義付合愚かも無き身、家財まで取られ、姥が行方も知れぬは、どうでも下の沙汰でなし。方方にあづけ置きし金銀荷物に就いての事か。何れの道でも命ある中、一夜も爰では明かされず。エ、是非に及ばぬ、惣七が運も是れまで。こりや女子共男共、見る通りの仕合力にかなはぬ。主從の縁もこれ限り。大坂の遣ひ餘り、一歩こま金少々あり。三人寄つて分けて取れ暇を遣る。さらば〳〵。」金更紗の財布共に投げ出せば、「お笑止とも何ともお辭儀申すもお慮外。またの御緣。」と口上を、捻つて見れば手にさはる、一歩小判も八九兩。はつと寐耳に水臭き、半季一季の名殘なく、連立ち表に出でにけり。物音鄰へ聞ゆれば、姥が會所を脫けて來て、「なうおとましや〳〵。昨日の晩から親父樣がお出でなされ、中々でもない事。あさましい慾心に海賊の仲間に入り、道に違うた金儲けを、結構な事と思ひ居る。木の空に引張らるゝは今の事。菜大根肩に置いても、正道な儲けは三文でも、身に付くと言ひ聞かせた詞反故にして、何で出來た屋財家財、これが我が子の敵ぢやと、おいとしぼや涙片手に道具屋集め、二足三文に賣り捨て、家もあけて其の上に、鄰の會所で町衆の前に畏まり、何やら斷りいうたり、皆お前ゆゑの御苦勞。」と涙ぐめば、涙ぐみ、「これ姥、懸硯に入れ置きし割符の手形、是

直孝行な惣七め、一人の親に隱すからは、碌な銀とは存ぜぬ。後に募つてお町内お家主へも難儀をかけ、其の身も人並の死をせぬ奴、今かう致すも親の慈悲。邪の銀は身につかぬと申す事、骨身にしみて思ひ知らせ、うきしほ踏んで正道の商ひに、取り付く心つけん爲、俄に道具屋へ走るやら、古鐵買を呼ぶやら、心急いてお町内へ無禮、お家主へ付屆け申さぬは、眞平々々幾重にもお詫言。貸屋札出して下さりませ、お家は明けます〳〵。」許りにて、下ぐるはきんか頭なり。「御親父の言分承り屆けた。さりながら、惣七殿には口合家請もある仁。後日の念に御親父の一札、留守居の姥も判を取る。サア會所へ同道、いざござれ。」と、門の戸はたと引き立てて、天の岩戸にあらねども、爰にも紙の貸屋札、殘らぬ千早古道具、明屋とこそなりにけれ。博多小女郎は町風に、馴れし夫の惣七が、危き分限波の上、何百里とも知らぬ火の、心づくしを過ぎし身は、京大坂は鄰にて、夫婦打連れ歸りしが、暖簾はづし大戸をしめて墨黑に貸屋札。「こりや如何ぢや。ハッ〳〵。」といふより詞なく、潛戸押し明け入りたるに、湯水を飲まん鍋釜も、疊もあげて閑古鳥、泣くにも泣かれず興さめ果て、口を明いたる許りなり。惣七心は足の裏の、疵にこたふる小笹原、簀子にどうと坐しければ、小女郎せいて、「これ申し、緩りとして居さんす所であるまい。懇にする家主殿、内儀樣と私とも親しうて、先度下る時にも、土產に大坂の三芳下駄賴むぞやとおしやんした。それ程他事ない中で譯の惡い仕方。私や急

市に、町内騒ぎ、三重やかましし。家主菱屋嘉右衛門興覺め顔にて驅け來り、「是れは〳〵狼藉千萬何事ぢや。此の家は我等が貸屋。主は小町屋惣七といふ西國商人、夫婦連で十日許りの逗留で大坂へ下る。跡にはあの婆たつた一人、留守の事はお家主頼みますと言ひ置き、今日か明日は戻られう。お姥もお姥、留守居とは何の爲。これ親父、先づ*わごりよは誰なれば、よい年をして京の町の作法知らぬか。町所へも斷りなく、人の留守に踏込み疊まで賣り拂ひ、捌きはなんとする事。此の心清町一町のたばねをする年寄、則ち家主うつかりと見て居よか。姥も一所に詮議する。鄰が町の會所、サアサア歩びや。」と喚けども、姥は涙に顏傾け、親惣左衛門手を束ね、「お家主と申しお年寄御尤も〳〵。我等は惣七めが父、小町屋惣左衛門と申して生國は長崎。二十ケ年此の方上方居住いたせども、資本なければ商賣も捗取らず、山科邊に逼塞いたし、故郷力に惣七めが、西國通ひいたせども、仕合したとの便りもなく、どうかかうかと思ひ暮す折節、はし〴〵人の取沙汰、小町屋の惣七は、西國で大きに儲け、博多の傾城請出し、心清町に檜木作り節なしの見世を張り、風體は無人の暮しでも、内證の榮耀は千貫目持と、噂する程心得難く、夜前始めて尋ね參り、沙汰に違はぬ内の諸道具、代物に喫驚いたし、姥めに向うても詳しき樣子は知らぬと申す。各も商人、我等も七十八まで商ひで食べた者。胴返しの利なればとて、儲けるには方圖がある。僅か十兩十五兩まうけてさへ、吹聽して悅ばせた正

腰を脱かして魂の、身に添うたるはなかりける。亭主四郎左立ち歸り、「ア、氣遣ひない〱。此の博多の殿町で、飛脚殺して金取つた奴、壁鄰の揚屋で捕へ、代官所へ引きました。此方の事ではないない。」と、いへば一どに顔を見合はせ、「ア、有り難いヤレ忝い。あつたら肝を潰した。」と溜息ほつとついたるは、世並の惡い疱瘡に、二番湯かけし如くなり。「長居は無益、惣七殿京へ上ろ。サア〱皆々往なう〱。女郎衆は駕籠で舟場まで。」「一口いうても八人が、「亭主さらば。」と立ち出づる。「七人一度に身請とは、聞きも及ばぬ大々盡。お一人びとり顔に書付張り付け度い。」「なう磔刑と聞くもぞぞがみ、いや〱。」「お手柄のお名が顯はれう。」「顯はれるは猶氣懸り。何にもいふな。」と出でて行く、男自慢は七人の、鼻に顯はれ　三重

中卷

市たてて屋財家財の崩し賣り、捨賣に相場なし。戸棚簞笥塗長持、燭臺椀家具吸物椀、俎板佛壇何や狩野の三幅對、表具許りも百貫に編笠提灯、南京の八匁から九匁を、鐔に見込の中脇差、鍋も釜も燻り罐子も、疊も上げて荒道具、簀の子の竹の小間道具、ありとある物塵も灰も、猫も價値ににやん匁、五分と飛んで時鳥、守本尊懸硯、鐵漿壺も罷り出で、金になれとや口々に、付けて糶る〱糶

心致した。只今より仲間になりお差圖は背くまい。承り及ぶ長崎には、物の堅めに血酒飲むとや。僞りでない惣七が心底、腕引いて盟を見せん。」と、片肌脫げば、「ア、見えました〳〵。人にこそよれ何の此方に僞りあらう。更めて杯事。皆來い〳〵。」と呼び集め、「小女郎殿嬉しかろ。亭主身請の惣代金何程ぞ。」「書付これに。」と差し出す。押取つてさらりと讀み、「小女郎殿とも七人の身請代金千四百五十兩な。端があつてやかましい。五十兩は亭主に遣る。千五百兩これ請取れ。」と、一兩二兩の七百五十兩方目出度い仲間入り。「皆兄弟より他事なうなされ。歌へ〳〵。」唄「おんらが在所はの、奥山のてゝうちのでんぐり〳〵栗の木の、木の根を枕に轉び寢。此の小女郎戀する山家の、品物でなまいだぶつ、帶解いて是れござれ。抱いて轉び寢、面白いぞ。」と樂しみける。町の夜番あわたゞしく、「人をあやめ法を背いた科人が、此の郭へ入り込んだと、上の町から客改め。一人も客衆外へ出る事なりませぬ。捕手の衆がハヤ爰へ。」と言ひ捨てて、亭主を連れて驅け出づる。動ぜぬ自慢の九右衞門始め、六七人がぐんにやり〳〵、俄に顏色茹菜の樣にしを〳〵と、「コリヤ堪らぬ。どうぞ舟へ行く道は外にないか、金の出るには構はぬ。土の底へは這入られず、天へ昇る梯子はないか。隱れ蓑隱れ笠があら欲しや。」と、我が身一つを片付け兼ねて顫ひ居る。惣七小女郎が手を取つて、門口に氣を配り、固唾を飲んで居る所に、內か鄰かぐわた〳〵〳〵。「捕つた〳〵。」と喚く聲。「なう悲しや。」と一同に、

なたと心中を立て通し、女郎の口から金貸せとまで恥を捨てての心ざし、無にして遣らしやるは、そりやいかい邪慳。悪い事は言ふまい、こちの仲間へ這入らしやれ。小女郎も此方に添はせ、五十貫目や百貫目の金は取替へて、親御の息がかゝらずとも、物の見事に取り立てましよ。仲間が多うなる程此方は損なれど、運を力にする商賣、運よわうては埒明かぬ。此中のやうな場を遁れた、命冥加な運強いこなた、九右衞門が力になる人と見て、コレ手を下げる。仲間へ入つて下され。」と、詞は下げても居やひ腰、否といはば切りかけんず、氣色面に見え透いたり。惣七も手詰の返事、仲間へ入れば家の大事命の仇。いやといへば小女郎を、人手に渡すのみならず、命までとらるゝ。何れの道にも死ぬる命、國法をや愼むべき、小女郎にや添ふべきと、二つの心身一つに、定めかねてぞ居たりける。「申しこれ惣七樣、貴方の商賣は知らぬが、駕籠に乘る人駕籠舁く人、品は變れど行く路は同じ事、金も取替へ何から何まで世話やかうとの心入れ。お身に悪い事でもなし、あつというて仲間になり、早う私と起き臥しを、一所にしようとは思さぬか。お爲にならぬ筋ならば、いやと返事を言ひ切らしやんせ。こなさんに添はれねば、生きて居る小女郎ぢやない。女房にしなと殺しなと、否か應かが生死の、大事の返事でござんする。急く事はないぞや。」と、懐に手を差し入れ、「オ、此の汗わいの。」と鼻紙ありたけ拭き捨つる。濡れて破るゝ人の身の、嗜み難き道ぞかし。惣七、「はつ。」と打首肯き、「得

現を拔かし、顏に餘念はなかりけり。九右衞門聲懸け、「コレ〳〵亭主、爰にはちつと用がある。よね樣方口の座敷へ。跡から見ゆる太夫方も爰へは無用。」「おつと此方へ來たまへ。」と、亭主に連れて立ち廻る、女郎も田舍は穩當なり、出るも如何、出ぬも如何、小女郎に引かれて惣七は、障子押し明け立ち出づる顏と顏、互に見合はせ、「ヤア小女郎が馴染の男、今思ひ出した其方が事な。」「オヽおのれ等に逢ひたかつた。ヤア人は無いか。此奴らは下の關の。」跡言はせじと毛剃が連共大聲上げ、「頰桁聞かすな打ち殺せ。」と蹴立つる杯燗鍋の、轉けて疊にたぶ〳〵〳〵。「濡れから起つた喧嘩さうな。大事にはなるまいか。」と、かみする女子下男、うろつく顏も靑ざめて、生きた心地はなかりけり。毛剃一寸動きもせず、「アヽ騷ぐまい〳〵、此の九右衞門が思案がある。彌兵次殘らず女郎衆の側へ行け、跡はおれが受取つた。」「いやさうでない。我々が相手になる。親仁一人心元ない。」「ヤア此の毛剃引取る男と思ふか。わいらが居ればやかましい。疾とと行け。」と睨めつくれば、「そんなら行きます。親仁次第。」と打連れて、表の座敷へ出でにける。小女郎は前後知らず、惣七に引添うて二人の目元に氣を配る。「コレ若い人惣七殿、此中の事一言いうても物が無いぞ被仰るな。この方どもの商賣言はずとも見られた通り。何事も身が大事と思ふから、此中の事こらへさしやれ、いやといはしやりや事になる。ヤ悴へさしやれ、小女郎を此方へ請出すと、こなたの詞が反故になり、小女郎も可愛やこなたこ

から金貸してと、身の恥は思はずか。」「恥を包むも事による。たつた今いうた事、來月は筑後の客が私を請出すと、出口の佐渡屋と薄約束。お前の下りを月よ星よと待ち受けたりや此樣な首尾。人手へ渡れば私や生きては居ぬぞや。金借つたとて返せば恥にもならぬ事。私次第。」と振り切れば、やるも涙行く涙、隱して座敷へ繰り歩み、毛剃が側へすわればばつと衣の香の、四邊の人はうろ〳〵と、顔を見合はす荒男、俄に嗜む衣紋付、鬼が花見る風情なり。「毛剃樣久しいな。私やこなさんへ無心に來た。こちらに大きなもめが出來て、急に身請をして貰はねば、ならぬ首尾になつたれど肝腎の物が無い。かね〴〵の詞もある。此方の才覺調ふまで、私が身請のなる程、金貸して下んせ賴みやする。」といひければ、「日本一の粹樣、金貸して下んせとは言ひ憎い事。二言と聞かぬ、お前の用なら千兩でも萬兩でも。コリャ亭主、小女郎樣も一所に身請、行き度い所へやりまする。金は毛剃が呑込んだ。女郎方の見ゆる內、小女郎樣借りました。飮めや歌へ。」と騷ぎ立つ。「ア、待たんせ〳〵。あの障子の彼方に今言うた、大事の男が來て居さんす。連れて來て禮言はせます程に、毛剃さん詞違へて下さんなえ。」「男冥利商ひ冥利虛言ござらぬ。お供なされ。」の詞にいそ〳〵立ち歸る。「太夫樣お出で。」と呼ばはる聲、門から色の摑み取り、勝山、江口、大磯に、寄せ來る波の大騷ぎ、座敷に一杯入り込んで「薄雲さん、操さん、小倉さん、三人はお跡から。」「そりやこそおてき。」と色めいて、毛剃が連ども

てある物只置くな。轉けても土を掴んで起きるは、七つ起。質を取らずば金貸すな。欲しい物は買はぬが德。月夜に夜業はせぬが損、稼ぐに追付く貧はなし。芥子を千にも割木の焚き樣、必ず灰を取る事なかれ。捨てる物は何にも無い。鍋のすみでは細眉作り、しべのきれは痿痺の妙藥、水なき井戸は梯子の入物、鼠の尾まで錐の鞘。差せ干せ傘、人に貸すな鰹魚節。擂粉木擂鉢砥石石臼藥研まで、目にこそ見えね貸す度に、減らずに戻る例はなし。扨其の外は愛嬌附合、始末貯蓄讀書算盤秤目の、上を見れば方圖がない。我より下を手本として、右の條々守るに於ては、微塵積つて山となり、長者の金言疑ひなし。無間の鐘とは名許りにて、現世も未來も背かねば、自然と榮ゆる福德緣起、聽聞あれ。」と語りけり。「否とも應とも申されぬ。世界中が此の通りに身持つたら、私等が商賣は、とりおくだ屋。」とぞ笑ひける。座敷の隔ては障子一重、彼方の騷ぎひし〳〵と、小女郎が身に應へ、「ア、有る所にはあるものかな。五人六人の太夫達請出さう、何やろ彼やろ是れやろと、金銀財寶は塵埃。父樣や母樣の貧な暮しを見た時も、能はぬ金が欲しいとは、夢程も思はずして、今日といふ今日、彼方の身請が羨ましく、私や金が欲しうなりました。仕合の好い人を妬むは道でなけれども、どんな男ぞ顔見てや。」と、障子の隙より差し覗き、「ヤァありや私が近付。まさかの時は心便りになりましよと、力を付けてくれた人。金借つて來やせう。」と、進み出づるを引き留め、「近付は內證人も聞く。女郎の口

の目錄、聞かせたい。」と打笑へば、亭主横手をはたと打ち、「扨有り難いお經。我等も些とあやかる樣に、其のお經さづけ下され。」と、せがみ立てられ、「然らば聽聞仕れ。」と、何やら知れぬ懷帳、殊勝らしげに取り出し、吝い事の謔八百、長者經と擬へ、聲張り上げて讀みにけり。

長　者　經

「そも此の無間の鐘の濫觴を尋ぬれば、天竺の大金もち、月蓋と名に高き、さつても吝い長者あり。佛これを示さん爲、朝な〳〵の頭陀の行、はつち〳〵も空耳潰し、うんともすんとも言はれぬ佛の方便にて、光はさながら一歩小判の山吹色、金と見るより吝ん坊長者、佛の箔を剝がさんと、慾から入る〻手の內を釋迦の手管にしかけられ、惜しや悲しや南無阿彌陀佛、此の撞鐘を建立す。されば穢い長者が心、末世の今に留まつて、まづ初夜の鐘を撞くときは、諸行無常に惜しや〳〵と響くなり。後夜の鐘を撞く時は、是生滅法な事と響くなり。晨朝のひゞきは、生滅滅多に入用知れず、寂滅いらざる鐘の聲、一文をしみの百八煩惱、此の鐘の音を聞く人は、現世にては分限の金持、未來にては無間の釜入。斯かる不思議の撞鐘を、疎かに撞くべからず。扨行法の次第といつぱ、絹も紬も著る事ならず、木綿布團も榮耀の至り、荒菰引いて起き臥しの、身は習はしよ奈良茶粥、精進潔齋菜入らず、晝夜にたつた二度の節季は尻からげ、往來の中をちよこ〳〵走り、ちよこ〳〵ちよこ〳〵脫けて、落ち

敷に居流れ毛剃が諸色請込んで、差配らしげに勿體顔、「亭主薄々見知りがあらう。郭の縱横十文字、昨日まで端ぜゝりした我々、俄分限は見らるゝ通り。今日からは太夫狂ひ。來る道すがら見て置いた一文字屋の江口、丸屋の勝山、同じ家の薄雲、油屋操、和泉屋小倉、車屋の大磯、此の六人を請出して、是れに居らるゝ人々の物言ひ伽、明日まで待たぬ、今日の中に首尾させい。」「これはきつい。」と四郎左衞門飛んで出づるを、「やれ待て〳〵、亭主が留守では興が無い。言ひつけて呼びに遣れ。」「畏まつた。」と硯引き寄せ書き付けて、呼びにやる足走り書き。「早う往て來い。お吸物、大座敷も一つにせい。子供泣かすな。女房共に藥飮ませ。」「ヤ何ちや花車が煩ふか。それ挾箱持つて來い。油斷召されな人參用ゐて養生が第一、持ち合はせたはずまう。」と蓋押し開き一包、一つ選の大人參、一斤餘り投げ出し、「四郎左子供は幾人ある。」「娘が一人、男が二人ござります。」「オ、よい子持。小さけれども此の珊瑚樹、つゐで秤目が八匁、二人の子に提げさしやれ。お娘が著物に有り合はせた緞子三本繻子五本、此の緋縮緬裏によからう。」綿の代まで相添へて、投げ出すほり出す頂くに、亭主が腕ぞ草臥れける。四郎左衞門ぎよつとして、「お禮よりまづ膽が潰るゝ。何時の間に此の樣な大分限者におなりなされた。」と問ひ詰められて間に合ひ詞、「きつい〳〵。江戸商ひまだるく、佐夜の中山*無間の鐘、撞き當てた福々長者。さりながら、此の鐘撞くには行法がむづかしい。長者經とて寺に傳はる緣起

したかと、一口言ふことならぬか。」と、眞實見ゆる涙の玉。男もはら〳〵聲顫ひ、「小女郎息災にあつたの。一年振に顏を見て、よい姿も見せよい事も聞かする事か、聞いてたも。毎年の如く諸色を仕込んで下る所、下の關にて海賊船に乘り合はせ、家來は眼前海へ沈めさせ、我が命さへはふ〳〵の仕あはせにて、此の所まで逃げ延び、商賣の荷物衣類は其の儘船に棄て置き、肌に一錢貯へなければ、二度に二つの下著を賣つて、今日までの露の命を繋ぎしぞや。此の度の下りには受出し、女房に持たんとの深き契約。其の金銀も人手に渡し、詞を違へ望みを叶へぬ我が本意なさより、そなたが恨みん心の不便さに、言譯やら顏見にやら、見苦しき身も恥ぢず、爰へ來て面目もなき物語。」と、涙に聲を曇らせり。「よう打明けて下んした。寶は涌き物、お命さへあるならば、私や嬉しうござんする。私が心でお前一人は如何なとなる。おいとしや肌寒かろ。お顏がたんと細つた。」と、著ながら上著ふはと著せ、抱き締めてこそ泣き居たる。表は血氣の下男、「大盡樣の御來臨。」と鳴り喚く。「ヤレ人が來る此方へ。」と、男の手を取り身を寄せて、奥の一間に入りにける。客は過ぎつる海賊共、眞先たつて毛剃九右衞門、彌平次、傳右、仁左、平左、市五、三藏、「サアござれ。」と、引摺る雪駄の金にあかした衣裳付、各さるぜ、らしや、すためん、かるさい、らんけん、繻子、天鵞絨、下著上著も渡り物、頭は日本、肌は唐との襟界、ちくら手くらの一夜撿校、つひに目馴れぬ出立ばえ、奥田屋に搖ぎ込み、座

も、金銀なければ肩すぼり、己と心奥田屋の、門を覗いつ退いて見つ、案じ佇み居る風情。内には乞食と尖り聲、「殘物は遣つて仕舞うた。通りや〳〵。」とつかうどなり。「扨ははや物貰ひと人目には見ゆるよな。成り果てたりしなしたり。此の風俗で小女郎に逢ひたいと、いうたりとも聽き入れじ、聽き入れてから小女郎が恥。思ひ切つた。顔見まい。」と、立ち歸る後より、「オヽまちや〳〵。」と重之丞、「コレ今日は太夫樣の心ざしの日に當り、施しの一錢。」と差し出しながら、「ハァ此の乞食はお絹布を著て居る。」と顔差し覗いて、「ヤァお前は京の惣七樣。なう太夫樣、惣七樣の乞食になつてごんした。」と、呼ばはればかいふつて逃ぐるを、「往なさぬ待たんせ。」と、帶に縋つて留むる間に、家内も驚き驅け出づる。小女郎は表に走り出で、笠かなぐつて、「眞にさうぢや、嬉しや能う來て下んした。此の有樣は如何ぞいの。」と、何の樣子も聞かぬ先から泣く涙、「コレ四郎左樣、奧へ連れまして咄し度うござんす。」「如何にも〳〵お馴染の惣七樣、御用あらば御意なされ。」と、亭主が情に打連れて、入るより早く縋り付き、「戀しゆかしは言はいでも知れた二人が中、此のお姿は親御樣の御勘氣でも受けての事か。樣子が無うては叶はぬ筈。お前の心に此の小女郎はまだ傾城ぢやと思うてか。此の身は郭に居るとても、心はとうから女夫ぞや。肩裾結び手を引いて、人の戸口に縋るとも、交した詞違やせぬ。今日は母樣の十三年の命日、お前に逢うたは親達が、あの世から手を取つての引合はせ。女房まめに暮

うわうわう〳〵。」「ア、おきや〳〵。なう慾市殿、其の拍子では踊られぬ。錢太鼓の三味線、知らずば知らぬと頭からいうたがよい。長崎の伊左衞門樣とは違うた物。もう踊らぬぞや。」「それで藝が上るものか。三味線彈き止むまで、サア〳〵踊りや。」といひければ、「何ぼでも踊らぬ。三味線止めて、こなたも石碓か跛引かしやれ。」「何ぢや跛引け、盲目と思ひ侮るな。目二つ持つた汝等に、いで物見せん。」と三味線振り上げ、聲をあてどに追ひ廻す。亭主奥田屋四郎左衞門臺所から立ち出で、「こりや何ぢや、慾市嗜め大人氣ない。禿共もあがいたら遣手に告げて叱らすぞ。ヤイ重之丞、今日は小女郎樣の母御の十三年忌、追善の爲身揚りして、小女郎樣は奥の間に、經念佛してござるでないか。附いて居る太夫樣の親御の事、線香でも立てうと思ふ氣はなうて、盲目相手に何事ぢや。」「いえ〳〵私共二人錢太鼓稽古して居たりや、慾市の三味線で邪魔しやりんす。」「其の錢太鼓が猶惡い。物の稽古も時がある。奥へ往てついて居よ。二人ながらとつとと往け。コリヤ慾市、表の二階に、宰府の源樣が來て御座る、見舞うたか。」「やつちや一角せしめん。」と人の巾著當にして、貰はぬ先の締め括り、さいふの客へと取りに行く。百年經ねど衰へは、今身の上に小町屋惣七、下の關の大難に、命一つを拾ひ得て、博多へこがれ著きしかど、身に附く物は手足より、外には何の當もなく、知邊の方へも身を恥ぢて、問ひ音信は絶えしかど、小女郎が情忘られず、戀しき風の吹き立つる、柳町には來たれど

皆の衆ぬかるな。」「まつかせ込んだ。油斷するな。」「サア來い。」と、櫓下るゝも忍び足、所は沖津汐風の、外は一味の船の中、聞く人もなし見る人なし、人は知らじと思ふこそ、結句身の上知らずなり。下人が喚くまつかせ聲、櫓の上へ躍り上るを追續いて、彌平次傳右衞門、二人が中に取り捲いて、宙に指し上げ、「これわいな。」と投り込む波の哀れや下人、底の水屑となりにける。「サア一人は仕てやつた。惣七奴が見えぬ探せ〳〵。コリヤ〳〵爰に傳馬込に。」といふ聲に、惣七水棹押取つて狂ひ出で、「ヤア海賊奴等、樣子一々見屆けた。死ぬるとも一人死なうか。」と、そつぱうめつぽふ打ち立つる。後へ廻つて市五郎、隙を窺ひ攫み付けば取つて投げ、投げられながら足首を確乎と取り、眞逆樣にずでんどう、どうと響く波音にまくりかけ、大勢かゝつてだんぼらぼ、邊も知れぬ海の中、眞逆樣に打ち込んで、「サア仕濟ました目出度い。」と笑ふ聲、惣七はつと心付き、見れば傳馬の中々に、物音せば惡しからんと、纜解いて艣を押し立て、惡魚毒蛇の口よりも、遁れ難き場を遁れし、一反ばかり漕ぎ出で〳〵、「オ皆々骨折り〳〵。惣七これからお禮申す。此の返報は重ねて。」と、心急げばえいさつさ、えいや運は傳馬にあり、押すや艣腕の續くだけ、命限りと三重「いひきにていひきにて、すいちやゑんちや、すはひすふいてう、ひいたらこはいみさいはんや、さんそ

誰様も是れに。」と挨拶し、思ひ惱みつ立ち煩ひ、漸う下へ這ひ下るゝ。「身請する程内證が暖かで、風引いたとはどこやら足らぬ和郞さうな。」と、惡口苦口小倉口より、波押し切つて來る早船、此の船目當の一文字、眞黑になつて漕ぎ付けたり。九右衞門始め立ち騷ぎ、「ヤア三藏、市五郞、首尾は〳〵。」「近年の拍子よく、荷物受取り金渡し、あつちも機嫌、こつちも仕あはせ。荷數手形に引合はせ、渡しませう。」と聞く嬉しさ。「船頭起きよ、舵子も來い。荷物請取れ。」「まつかせ。」と、心も勇む虎の皮百五枚、仕合はせすれば氣の藥、海老出の人參五箱で三十斤、仕損ずるは手廻しの緞子七櫃二百本、船から船へうつしの麝香四十臍。「なんと遠見に見付けられはせなんだか。」「けも無いことといはしや縞絽が十五箱、さりながら、むりやうの繻子が十二丸、世話入れた漆七桶、運の強いは一昨日の夜の月影、照の好い鼈甲百斤、まつかう仕濟まし歸りました。天地の惠み明星程な珊瑚樹が八十粒、手形の表これまで渡しました。此の一通は來夏船の割符。迎ひ船にお出でなされとの言傳。」と、渡せば取つて押し戴き、「手柄高名、休み召され。二人の衆にも酒おませ。」「お目出度い、お頭樣御褒美をしつかりと、御酒も祝うて下されう。」と、皆本船に乘り移る。九右衞門相仕等招き寄せ、小聲になつて、「何れも見ずや。荷物を船へ積む折柄、乘合の京の奴、かきだつより顏差し出し、合點ゆかぬと思ふ面付、生けて置いたら頰桁叩き、後日の難儀見る樣な。斬り殺しては大事の門出、血を見るが忌々し

赤鰯の小鐺がくさの、おんどもが脇腹さなへ當るが最期、引摑んで壁へ腕揩らうと思うて、鐺を逆手にやつくるり、それは〳〵見事な事であつたがなう。他國者に投げられては國へ歸つても成敗、死ぬる命は何處でも一つと、二尺八寸引ん拔いた。コリヤンほたゆるなと、又引つ擔いで投げたがの、角のある溝石でくさ、頭の顱骨が粉微塵に打ち破れた。オ船では破れたといふは忌々しい。頭のさらが走つた〳〵、血が走るいろ、涙が出るいろ、頭抱へてやといどにかろはれ、小宿さなへ往んだがの。今で思へば*むざうらしげに、そがいにせでも大事なかたん。上方衆は氣がよかけん、こがいな事はあるまい。」と、仕形交りの高咄し、皆安閑と聞き居たる。「サア京のお客お咄しなされ。次第々々に所望せん。上方は色所、定めて深い譯があろ、お咄しあれ。」と口々に、乘すれば乘つて、「されば〳〵、親惣左衞門吟味つよく、京大坂ではびたひらなか我が物で我が儘ならず。毎年の筑前通ひ、幸ひに柳町の小女郎とは、抑より互に上り、是非當年は請出して、女房に持たるゝ合點持つ約束。」と、半分聞いて、「ア、被仰るな聞くまでない。我等も博多へ參る者。此の一座五人が小女郎殿の身請の幇間。大盡くわつとおはずみ。」と、毛剃が起きて膝立つれば、「よう〳〵身請の大盡樣。」「こりや誰が大盡ぞ。」「小女郎樣の大盡。」と一座がはらりと取り廻し、座興も過ぐればむつとして、嬲るか但し侮るかと、心くる〳〵喘きたぐる胸を押へて、「えへん〳〵、今朝から風邪引き頭痛致す。跡の咄しは後刻々々。

れば其の跡は、鬼とも組むべき男共、あんぺら取つて敷かすやら、茶出しに唐茶摘み込む。注ぎ出す色は薄けれど、頭を頭と敬ひし、禮儀ぞ仲間の花香なる。表の乘衆小町屋惣七、生得慇懃都育ち、呼ばれて櫓に割膝し、「船頭馴染に押し付けての便船、御訪ねなくとも御挨拶申す筈、無禮御免。」と手を突けば、「ア、堅い〳〵。同船致し一つ釜の食事食べるは一門同然。サアお手上げられ。此の五人は我等が仲間、他事無う咄し明かす中、近付になつてお咄しなされ。かう申す某は長崎者、九右衛門と申してそつと致いた唐商賣。是れは同國彌平次と申す仁、次は上方小倉屋傳右、難波屋仁左。其許呼びに參つたは、阿波の徳島平左衛門と申して、髪月代致さるゝ。船中の事缺き心置かずとお頼みなされ。して其許は何國何方。」「我等も生國長崎、倅の時分親に連れて、生まれ所を引越し京住居。父が名は小町屋惣左衛門、同名惣七と申す者。賣買の爲筑前へは毎年の下り上り。誰樣も船中*平ぐわい御免。よいお近付もとめし。」と、禮儀仕舞へば膝崩れ、飼直せば寢腹這ひ、はや千年の馴染程、心解けたる朝霜の、奥底もなくなりにける。九右衛門顏色打解けて、「船中の寂しさ、物語程伽になる物はない。おんどもが二十七の年、薩摩者と喧嘩した咄、譃ぢやなかばん聞かつしやれ。九月の七日九日は氏神殿の祭、本踊いろ唐子踊いろ、見事なことばん。本興善町といふところで、石五器に一二杯、肝の束ねへ諸白を*いつかけた薩摩二歳、太り男であつたばん、諏訪へ踊見がい行く行き違ひに、中が

博多小女郎波枕

上卷

唄船を出しやらば夜深に出しやれ、帆影見るさへ氣に懸る。長門の秋の夕暮は、歌に詠むてふ門司が關、下の關とも名に高き、西國一の大湊、北に朝鮮釜山海、西に長崎薩摩潟、唐土阿蘭陀の代物を朝な夕なに引きうけて、千艘出づれば入船も、日に千貫目萬貫目、小判走れば銀が飛ぶ、金色世界もかくやらん。沖に何まつ*檜垣作り、十四五反の廻船に、船頭舵子は縕袍著て、足蹈み伸ばす梶枕、四五人の乘衆共、櫓の上につゝくつく、そよと波音船影に、心を付くる蚤取眼、物案じ顏も頰すいたる中に頭の毛剃九右衛門、生まれは長崎國訛り、「コリヤうん達、まだ市五郎三藏が船は見えいろ、心元なかばい。心たまぎりや夜ざとくなつて、*身だまんじりともせない。首尾よからうば筑前さなへ此の船廻し、柳町のしやう〳〵*ていども請出いて、上方さなへ突走る、表の間借り切つた上唐人、船頭が馴染、筑前まで乘せなけりやならぬといふ。しおほせにや筑前へは行かぬ船、門出よか〳〵、よか便聞かうばい。表の乘衆呼うでわたい*、咄どもして紛らさん。」「あつ。」と答へて平左衛門、呼びに下る

に知らず。斯う災難の來る時、始めて悔むに甲斐もなし。重罪は我一人、あの倅助け下され。」と、涙に沈むぞ心地よき。「兎角は都の御沙汰ぞ。」と、警固嚴しく引立つる。酒呑童子、茨木童子、退治あるも世の誡め、政道耀く賴光は朝參院參御振舞、京近國の悅びたる、賑ひたるに酒樽に、だい〳〵の御代こそ目出たけれ。

傾城酒呑童子　終

なり。涙一滴こぼしなば、七生までの恨みなり。お暇申す加藤殿、横笛殿さらばや。」と、刀を拔けば紅の、紅葉における秋の霜、消えて儚くなりにけり。女房娘右馬之允、遺言おもんじ泣かぬ顏。加藤兵衞所の者、「前代未聞の義士貞女、死骸共は跡より。母横笛は先へ歸れ。」といひければ、長大音上げ、「何處へ〳〵。横笛が代りにて名も横笛と呼ぶからは、其の儘こつちの抱への內、手形の通り勤めさす。暇が欲しくば五十貫に二十割增千貫積め。男ども横笛を留め、親兄弟棒づくめにして、追ひ出せ敲き出せ。」といふ處に、俄に表騷がしく、見世も格子も打ち破るばかり。坂田公時眞先に、貞光季武綱保昌山伏出立に込み入つて、「上意々々。」と、金剛杖ぶち伏せ〳〵、「誰かある。親子共にあれ括れ。」「承る。」と、加藤兵衞、吉助、踏み付け〳〵縛り付けて引き据うる。渡部綱進み出で、「やい長承れ。おのれが奉公人の抱へ樣、人買同然の仕方、其の上折檻嚴しく拷問をまなび、殊には歷々の町人さへ、愼む程なる奢り、身の程知らず世を憚らぬ我儘、其のほか數ケ條の罪科は、とつく召捕らるべき處、酒呑童子退治に、弓箭の御用繁多の閒宥免せられしなり。童子やす〳〵退治あり、御歸洛の道より直に、我々仰せを被つたり。」と言ひ渡す。公時躍り出で、「女郎せぶつて摑み取つた一步小判の金が罰、覺えたか。」と、こんと喰らはす頭の鉢、四邊も響くばかりなり。長頭を下げ、「一々誤り奉る。世上の人も聞き給へ。驕る者久しからず。我人に辛ければ人亦我に辛しと、口にはいへど心

子となし、其の後此の娘一人は持ちたれども、年寄るに隨ひ、世に力なく便りなく、兒めを他人にくれず弓馬の家を起し、老の樂しみ、浪人の憂きめは見まじいもの、惜しや口惜しや子程の寶は無きものと、我が身の上は見ゆれども、人の上には盲目同然、洛中變化蔓つて、夜な〳〵人を失ふ由、これ幸ひの紛らし物と、思ひ初めたる一念が、地獄の道の門出なり。なう加藤殿、其の子が素性も穢からず。平家の大將常陸介安盛が執權、八郎權頭秀國とは我が事よ。」と、いふ聲に吉助覺えず、廊下を飛んで出で、「なう父上か。我こそ商人の養子となりし、本名は右馬之允。」と縋り付けば、「寄るまい寄るまい、子ではない。右馬之允といふ子は持たぬ。」と睨め付けられて聲を上げ、「子でないとは情なや、御無沙汰の不孝は御免あれ。何僞りを申すべき。紅葉狩の此の太刀を證據にて、親よ子よと只一言、お詞を賴み奉る。」と、どうど伏して泣きければ、「オ、太刀に僞りなければとて、親子とは何事ぞ。五歳より其の年まで、人となりしは誰が養育、玄冬素雪の寒き夜、九夏三伏の暑き日に、老いたる親を養ふより、子には心の碎かるゝ。其の憂き苦勞を人にかけ、まんまと育て上げさせ、誠の親よ寶子よと親しみ寄り、養ひ親の心に滿足せうか、何と嬉しかるべきか。飛びしされ子ではない。なう加藤殿、とても の事に此の母も、其の子が乳母となしてたべ。これ兩人、加藤殿へ忠孝勵み、我を親と思ふなえ。一遍の念佛も親と思はば請けまじきぞ。他人と思ひ廻向せよ。一日の精進も養ひ親への無禮

れまじ。家を出るより覺悟ぞや。我を庇ひ給ふな。」と、さも潔き詞の末。「オ、でかいた〳〵。」と取つて引き寄せ刺し通さんとする處を、母、「暫く。」と押し留め、「人の子殺して我が子を助けうではなけれども、世には療治もある事。此の子殺して若しあの子の疵本復あるならば、こちの娘は誰が産んで返さうぞ。なう横笛樣、助かるも死ぬるも一人と思へど二人の命。氣を慥かに持つてたべ。看病してたべ人々。」と、悶え憧れ泣きければ、女郎遣手も哀れさに、「何處ぞでは此の家に、大きな事が出來う出來うと思うた。」と袖を絞らぬ者はなし。今を最期の横笛、「なう父上、必ずあの子を助けて給べ。是れのみ黄泉の障りぞや。わしや來世で母樣に久しうて逢ふが嬉しい。南無阿彌陀。」の一聲も、睡れる如く息絶えたり。加藤は死骸に抱き付き、前後不覺に取亂す。廣文娘を引寄せ、既に斯うよと見えける處、加藤慌てて抱き取り、「いかな〳〵思ひも寄らず。不便の娘が只今の遺言、父母の遺言より默止されず。此の子を某申し受け、名を横笛と呼ぶからは、我が子が二度蘇生つたる同然。我が子に指もささせぬ。」と、猶抱きしめて放さねば、夫婦、「あつ。」と悦び涙。廣文何とか思ひけん、胸押し寛げ拔いたる刀、腹にぐつと突き立て、脊骨をかけて引き廻す。人々、「これは狂氣か。」と驚き騷げば、「アア騷ぐまい〳〵。」と押し鎭め、「なう加藤殿、我等も昔は弓矢打物取つて、誰に劣らぬ身なりしが、主君の諫言耳に逆ひ、勘氣を受けて此のざま。若かりし時忍び妻の腹に、男子一人設けしを、商人の養

元銀に十倍增しても、取り戻すの代りのといふ事いたさねども、其處は身が料簡してやらうが、そなたの娘はたつた今、自害して十死一生。それとてもかへたくば、此方はかへ德。相手同士の詰開き詰めびらき。」加藤兵衛、「はつ。」とばかりに氣も狂亂、「いやさ命あつての詰開き。死なぬ内まづ逢はされよ。」とせきければ、遣手ども口々に、「其の身も父御のお出でと聞き、逢ひたい望み。只今是れへ。」と手負をねやの牀ながら、そろ〳〵舁いて出づる體。父は目もくれ走り寄り、「ヤレ横笛なるわ。」と、朱の血潮に抱き付き、手足を擴げ身を撫でて、疵もとつくと見屆け、「自害の疵より棒のあと、死したる母が美しう、産み付けたる肌をあき所もなく撲たれしは、自害せずとも死ぬべきに、これは無念の自害かや。いつそ擲き殺されば、敵を取つて腹癒んもの。かはいや早まつて、思ひをかけてくれるか。」と、人目も恥ぢず聲を上げ、伏し沈みてぞ泣き居たる。横笛父の手を取つて、「ナウ撲ち擲かるゝは常の事。今死ぬる病人さへ、慘い辛い親方なれば、我一人無念なと思ふではなけれども、流れを立てて母樣の、遺言そむく悲しさに、あらぬ歎きをかけます。」と、父を見上げ見下して、泣く聲もはや息切して、最期近くぞ見えにける。廣文が娘傍に寄つて涙を押へ、「おいとしや皆我が父の所業ゆゑ、此の春よりの憂さ辛さ、御身の上を思ひ遣り、自らが代りに殘り、御身樣を戻さんと、是れまでは參りしに敢ない死を遊ばす。なう父上縱ひ此の身が代らぬとて、あのお方の最期を見て、すご〳〵とは歸ら

て、掏兒強盜を打つ如く、よつく恥を與へしな。我が親の世なりせば、一々獄門にかくる奴なれど、町人の淺ましさ、女郎屋に忍び込んだる過りなれば、エ、此の儘叩き殺さるゝ。ヤレ白妙死出三途を連立たん。」と、廊下傳ひの欄干を、力に取り付きたじ〳〵、這ひ上つてはよろ〳〵、よろぼひよろぼひ歩みつき、數寄屋に入つて、「ヤア白妙はハヤ息絶えしか、先だちしか。」と言ふ聲に、家内はつと驚くをりから、遣手の龜があわたゞしく、「ナウ新艘の横笛樣が剃刀で自害して、まだ死に切らねど深疵、斯う申す内もあぶなし。」と、色を違へて言ひければ、さしものぶときひらぎの長、悄としてこそ見えにけり。

第五

かかる處に北白河の廣文、親子夫婦在所の者、加藤兵衛伴ひつか〳〵と入りて、「なう〳〵長殿、先程より公用に就いて御意得る如く、度々申し入るれども取合はれず。當春我等が賣りし横笛とり戻して、本親へ急度渡すべしとの上意に候へども、其の時の五十貫今更一錢なければ、取り戻さん力なきゆゑ、此の琴柱と申す我等が娘を代りに取り、横笛を此の親父加藤兵衛殿へ渡して給べ。其の爲所の莊屋組中、同道致す。」と陳べければ、長不興顔にて、「ム、此方が横笛が父御か。此方商賣の作法で、

め。」「此の大きな物何處もとへ捩ぢ込みましよ。」「頰桁叩く口へ捻ぢ込め。」「畏まつた。」と口押し割らんとする處へ、數寄屋の障子蹴破つて、吉助堪らず飛んで出で、大根取つて下僕が頰はたと撲ち、横笛が縛め捻ぢ切れば、半死半生。「これ朋輩達、勝手へ連れて看病あれ。」と、取つて押し退け、長が前にどうど坐し、「こりや長、白妙と二世の契約せし西國の吉助といふ男。白妙が病氣見舞ふが科ならば、横笛よりも先づ此の男打ち殺して腹を癒よ。サア撲て撲たぬか。長恐ろしいか、何故撲たぬ。」とせめかくれば、「オ、己とても商ひ物に忍び逢ふからは盗人よ。此の長が撲ち兼ねうか。サア腰の刃物を渡せ。」「ムウ此の刃物がこはさに得打たぬな。ヤイ此の刀はちと由緒あつて、うぬらが如き根性の穢れた、犬同然の奴等に拔く刀ぢやない。氣遣ひせずとも寄つて撲て。但しこはいか。」「なんのこはい。」と打つてかゝる棒の先、しかと取つて拂ひ退け、つつと入つて擔き上げ、大の法師を筋斗返りす。「ぎやつ。」とのめらせ馬乘に、どうど跨り握り拳に息吹きかけ、七つ八つ十二三、頭も碎けと撲り廻す。一子太四郎飛んで出で、「そりや親父樣投げた。打ち殺せ大事ない。」「まつかせ。」と立ち蒐り、家内が寄つて棒づくめ、漸う長を引き除くる。吉助は只一人、取り付けば捥ぎ放し、頰がまち緣がまち腕骨腕木障子の腰骨、片膝足の踏み度なく、誰が撲つやら喰らはすやら、棒に別ちは無かりけり。足は立たず目はくるめく、衣類も裂かれ髪亂れ、心許りの亂れねば、「おのれ如何に傾城屋の法なればと

成る。病人めに何用あつて誰に頼まれた。サア吐かさぬか。」と振り上げて、二三十滅多打、起き直れば礚と打ち、居直れば丁ど打つ。髪も頭も分ちなく、釵笄打折れて、鼈甲飛んで亂れ髪、骨も散るかと哀れなり。横笛聲も涙にくれ、「白妙樣へ見舞うたは、誰にも頼まれませぬ。餘り見る目もいとしさゆゑ、今死ぬるお人に一寸見舞に往つたとて、科緩怠になるならば、殺しなりと如何なりと。餘りな旦那殿。」と、言はせも敢へず、「うぬが口から殿呼ばはり。それ眞裸にして庭の松へ括し上げい。」「はつ。」と言ふより情なく、帶引きほどけば一家の女郎、「それ程の科もない人を、こりや餘りな旦那さん。新艘は打たさぬ。」と、驅け寄る處を棒横たへ、「一つ穴の狐ども。」と、十方滅法撲ち廻せば、撲たれて左右なく寄り付かず。横笛骨も碎くるばかり、弱る心をとり直し、「ナウ朋輩さん達怪我して下さんすな。私が事は構はずと置いて下さんせ。是れ殿というた腹立に、恥かしい裸にして縛りやつたの。何程でも言ひ止まぬ、旦那殿どの〱どの。エ、情ない。死なしやつた母樣ならで、友達にも見せぬ、女子の肌を口惜しい。此の樣な姿は地獄の繪に見たばかり。鬼め童子め茨木童子め、白妙さんと此の横笛が妄念が、其方の身に酬はう。」と、涙まじりの雜言は、人の泣くより哀れなり。「エ、憎い奴め。それ男ども臺所の大根一本持て來い。」と、また五つ六つ續け打ち、打たれて雪の裸體も、消え消えとこそなりにけれ。「申し旦那樣、此の大根何になされます。」「なんになさるゝとは、それ捻ぢ込

末期の暇乞。」「さらばでござんす。」「來世で逢はう、さらばや。」と、立つて見居て見羽拔鳥。謠「關路の鳥も聲々に、夢も跡なく夜も明けて、村雨と聞きしも今朝見れば、松風ばかりや殘るらん〳〵。」「そりや果てた。南無三寶始めの道は人立あり、樂屋から猶ならず、ハア、何處から戻しましよ。それそれ其處へ親方が裝束で。隱るゝだけはまづ此處へ。」と、白妙が夜著の裾に押し隱し、橫笛上に打靠れ、障子はた〳〵差し籠めたる。長は風折水干、後見お出入どや〳〵と、「ハ、ア出來た〳〵。殊更舞の内、我も木陰にいざ立ち寄りての思入れ、息がはずむ。」と大團扇、扇ぐやら擦るやら。「まづ面脫がせませ、汗を拭へ。」と寄りたかる。長烏帽子著ながら、「何と松風出來たか。此の裝束で直に爰で、自然居士を見せうかの。脇の人買が艣櫂を以て散々に打つ。謠身には繩口には綿の轡をはめ、泣けども聲の出でばこそ、といふ處を面白うして見せう。男ども樫の木の棒持て來いやい。」と呼ばはれば、常の氣知りて下人共、二言と呼ばれず走り來る。「只今揚幕入り樣に、面の内からちらりと見た。病人めが居る數寄屋へ何者か逃げ込んで、障子を鎖すを見付けた。あれ探して引摺り出せ、早う〳〵。用捨せば共に片端喰らはすぞ。」「はつちや怖し。」と會釋もせず、障子を明くれば橫笛が、身を顫はして居る處を、「旦那の御意ぢや。」とあらけなく、人のもてなす花盛り、落花微塵に引き出す。脾の臟強き大音にて、「こりやびりめ、此の長が日頃の手竝知りながら、今から野太い根生さげ、後には己なんに

ても晴れやらず。ごくにたたぬ身の上咄、語つて益なき事ながら、我が親までは人に知られし名ある武士、仔細あつて浪人し、我が五歳の時西國、今の親の養子となり、氏をかへ苗字を捨て、算盤秤を取りしより、産の親とは音信不通、住所も知らねばまして生死の便りも聞かず。今の親は商人の一錢を仇にせず、手代共の算用嚴しくて、金銀は我が物ながら水の月、目に見るばかり手に取られず。されども指いた一腰は實父の讓り、大國二箇國三箇國の價ともなる名劍、寶は身の指合はせ、代なして其方が身の代と、方々主を尋ぬるに、ナウ是非もなや、我が冥加に盡きたるか、千兩とも萬兩とも限り知られぬ此の太刀を、やう〱三百兩五百兩、六百兩より上に、直を付ける者なければ、神を恨み佛を恨み、唐高麗へも渡られず、爲方更にあらばこそ。むざ〱と郭の中で身を果さす、腑甲斐なき男持つたよな。今の恨みは此の太刀、我が腹に突き立てば、人の命は取るべきが、白妙といふ女の身一つを助けぬもの、寶とは誰が名づけしぞ、竹の篦には劣りし。」と、柄を叩き鐔を打ち、かつぱと臥して泣きければ、白妙も手を合はせ「餘り冥加恐ろしし。數ならぬ此の身故重代の寶を放そとは、左程私が可愛いか。因果な者に馴れ初めて、苦勞させますおいとしや。」と、二人が繰言悔み言、盡きせぬ涙ぞ道理なる。側に聞き居る横笛、涙に沈む顏振り上げ「あれはや能の切り果てると其の儘衣裳脱ぎに、あれからは一日なり、咎められては何方の爲にもならぬぞや。」「オヤ何時までも同じ事、今が

見に肌を放さぬぞや。」「ナウ我とても同じ事。過ぎにし事を思ひ出せば懐かしや。三歳は爰で馴染をかけ、何事も皆夢となり、此の形見の紋付ばかりは殘れども、〽是れを見る度に、彌増しの思ひ草、葉末に結ぶ露の間も、忘られればこそあぢきなや。形見こそ今は仇なれ是れなくば、忘るゝ隙もありなんと、あれ謠に唄ふもことわり。一日も夫婦とて世に住む甲斐の有るにこそ、忘形見何にしようぞいの。〽捨てても置かれず取れば俤に立ち優る。起き臥しわかで枕より、跡より戀の責め來れば、爲方涙に伏し沈む事ぞ悲しき。」折も折なる松風の、謠が泣かす二人が中。横笛内へ立ち廻り、「いとしや側へ寄りたいが、まだ五段の舞がある。此の間に鳥渡。」と戸を明くれば、吉助前後の辨へなく、「是れは。」とばかり走り入り、抱き付けば抱き締めて、「語る事ない言ふ事ない。極樂でも地獄でも、附いて往きたい許りぞ。」「エ、忝うござんす。」と、互の肩に互の顔、打靠れ合ひ咽せ返り、泣く忍び音に横笛も、連れて袖をぞ絞りける。男やう〳〵涙を押へ、疊を叩いて、「エ、心に任せぬ、なれば成り行く身の果てかな。とても死ぬるに極まらば、一日でも一夜でも、身が手へ引取り往生させ、今生の名殘に、入棺も葬禮も手にかけんと、思ふ心一筋に、六百兩といひかけしに、無得心の長めに足元見られ、千兩なくては暇くれまいと言ひ募つて埒明かず。吉助が子を懐妊すれば本妻同然。僅か四百兩惜しんで、郭の中で持ちごもりに殺した穢い奴と、人でなしの長めに蔑まるゝ此の無念、身を切り裂い

ら、彼の入込の人々の目を忍ひ、橋懸りの縁の下より、泉水の際を廻らねば、どうも爰へは參られず

物數言はず聲低に、お二人が顏許り、見つ見らるゝを樂しみに、聲立てて下さんすな。人が聞き付け

見付けては、吉樣は大事のお身、跡の詮議が喧しし。必ず靜かに〳〵。」と、囁く中に笛鼓、「あれ能が

始まる此の紛れに、首尾して連れましてや。」と行く振は、何時の間にやら里馴れて、しやんとかい取

る飛石の、三つ地五つ地一聲の音に紛らす忍び路や、忍び男の忍び風、頭の上は橋懸り、唄ふ謠の松

風に、身は村雨と袖ひぢて、涙に絞る頰冠り、鼓も耳にびく〳〵と、秋風越ゆるは須摩の關、越すに

越されぬ金のせき、盜みせぬ身も盜人の、忍ぶに似たる篠竹の、柴折戸口に佇めば、白妙待ち兼ね、

「ナウ吉樣かいの。」と、起きるにも腰立たず、立ち上れども足立たず。男も垣に取り付いて、聲を忍

べば招き合ひ、心を中に通はせて、年を隔ての天の川、涙を淵とせきかくる、稀の逢瀨ぞ哀れなる。

白妙漸う緣際まで這ひ出でて、「ま一度逢ひたい〳〵と、思ふ念が屆いて嬉しう往生しますれば、思ひ

置く事なけれども、大事の子を身に宿し、浮世に殘し置きもせず、未來へ連れて往くわいの。」と、又

さめ〴〵と泣きければ、「オ、夫れも先世の約束。引手あまたの身なれば、面々の果報により、大名貴

人の北の方ともなるべき人、思へば此の吉は和女の出世の妨げ。あれあの謠を聞きや。諸身にも及ば

ぬ戀をさへ、須磨のあまりに罪深しとは我が事よ。此の下に重ねしは、二人寢し夜の其方の寢衣、形

換へての訴訟、はし〴〵聞えて心ざしの嬉しさと、親方の酷さとは如何なる世にか忘れうぞ。吉様に逢ふまで、まちつと生きたい〳〵と、今朝までも思ひしが、物いふ事も力なく、此の胸の苦しさは、大方今宵が往生。これ此方頼むぞや。此の抱いて居る紋付は、彼の人様の形見の袷、棺に入れて下さんせ。持ちごもりて死ぬる身の、眼を塞ぐと其の儘、非筒屋まで知らせて、彼のお人の廻向が、受けたいわいの。」と打伏して、泣く涙さへ弱り行く。「オ、そんな事氣遣ひせず、心慥かに持たしやんせ。私は常にも申す通り、嫁入するまで身を自墮落に持つなと、母様の遺言立つまいかと、それは〳〵悲しうて、死なう様にも存ぜしに、長門様の才覺にて、此の度の水揚とやらいふ事を、彼の吉様をお頼みゆゑ、私に帯も解かせず、お主は閨をかへ、牀の側へも寄りつかぬ様になされしゆゑ、今日まで身を穢さず、親の遺言違へぬ、此の御恩送りには假令内へ漏れ聞え、寸斷々々に刻まれても、鳥渡なりとも生き世の中逢はせましたさ、能見物に紛らし、顏隠してあれまで。」と、いへば覺えず起き直り、「ア、有り難い忝い、早う逢ひたいどれ何處に、あれ〳〵あれに居さんす。」と這ひ出づるを、「これ申し何おしやんす。あれは庭の松の木、吉様ではないわいな。」と抱き留むれば、「ア、扨は眼も最早暗んだか、もう死ぬるに間はあるまい。死際の顏を見せ、嘸吉様が悲しかろ。わしや又それが悲しい。」と又伏し沈む許りなり。横笛見る目も遣る方なく、「早う逢ひたい見たいと、心のせくはことわりなが

は天鼓微塵。聞かつしやれたか親父様、親子の耳へ入るからは國中一ぱい、恥を雪がうぞ。エヽ〳〵口惜しい無念や。」と、ずん〳〵に引き裂き、疊に打ち付け〳〵て、撞ど坐り泣き居たり。「ア、氣の小さい、其の心で長が跡は繼がれまい。此の榮耀の叶はぬ奴等が、皆猜んでいふ事。何年か以來人の噂に乘る男、それ程身代殖えて來る。ひよつと人に譽められては、跡の身持がむづかしい。言ふ奴には言はせて置け、構はぬ〳〵。あれ狂言が始まつた、松風の用意せう、裝束ども持つて來い。」と、怯む氣もなき氣の強さ。そも人間の皮一重、下は恐ろし上皮は、先づ美しき上臈の、面を持たせて三重入りにけり。表に囃す松風の、爰にも吹いて白妙が、身に浸み渡る病の牀、誰わくらばに訪ふ人の、數寄屋といへど隙間なき、障子一重を明くるさへ、力、「馴染の彼の人の、顔見る事のかなはずば、せめて何うかと一言の、便りが聞いて死にたい。」と、知らぬ來世の闇よりも、涙中有に迷ひけり。人に心を置き鼓、横笛が稚名を、直に付けたる竹の名の、身は川竹となる例、衣裳の模様は仕立口、著馴れぬ物を無理遣手が、歩き振にも非難いふ、人目を偸みわくせきと、急ぎにけらし白妙が、病の枕に立ち寄つて、「お眼開いてかや。」といひければ、重たき目元にじろりと見て、「ナウ横笛殿かいの、好い女郎になつてぢやの。奇特に見舞うて下されし、*視る目嗅ぐ鼻より恐ろしき親方の目を忍び、よく〳〵心にかゝればこそ。年も往かいでしをらしい、嬉しうござんす忘れはせぬ。暇の事を朋輩衆が、身に

ばう、鯛のあへもの飯も汁も*がんざふ鱠、けんに置いたるめうがの程ぞ恐ろしき。ありあふ女郎、「わつ。」と許りに逃げんとす。「こりや一人も動くな。遣手ども男ども繩持て來い、棒もて來い。頭取は長門め。」と、こづか摑んで引き寄する。一子太四郎鼓片手に素袍袴、「ア、是れ〳〵舞臺へ聞える。」と走り出で、「先づ御堪忍々々々。」ともぎ放し、きつと睨め付け、「これ女郎ども、何故御機嫌を損ふ。面々のお客を捨て、白妙が爰へ出る事、重ねてぐつともいうたらば、此の太四郎が堪忍せぬ。慮外ながら親父樣も親父樣。今日は歴々方の集まり、家内にての我儘に、點打つ人はあるまじと思ふは我が身一分の理、世間の人が許さぬ。其の證據御覽なされ、只今我等此の鼓を調べしに、御存じの折居の胴、拍つて見ればほと〳〵と桶の底叩く樣なり。肝を潰し皮を外せば、何者の所爲にか、胴の中にお前の惡事、一家の惡口を料理の獻立能の番付、一通に書いて入れ置きし。エ、無念千萬此の如く、後指を指さるゝとは知らなんだ。一分が廢つた。讀むも涙が零るれど、是れお聞きなされ料理獻立、御汁世上の人を薄味噌、自慢臭い葱、面の皮牛房二つに切鯛、明日御めし、煮物は傾城打擲の棒鱈、燒物は取沙汰魴鮄、人間の葛醬油かけて、奢る者久し辛漬の香の物、引いて嫁菜、猿頰、恥掻の吸物、抱への女郎伊丹諸白。エ、口惜しい皆までまだ〳〵讀まれぬ。これ又能の番付、大きな千歳さん〳〵そう、脇能身の程を白髭、八島の崩れ、諸道具*のけばの梅、兩の手に鐵輪、世間で謠ふ親子籠太鼓、跡

る程なれば、私等が何の口叩きやしよ。餘りそれは情ない、慘うござんす旦那さん。」「なに此の長を情知らぬ慘いとな。扠は客に賴まれ、ぐるに成つて訴訟か。六百兩に付けるを、千兩といふ身共より慘いといふは客の事。知るまいと思ふか、白妙めは其の客の子を孕んでけつかる。見すく我が子を持ちごもつて死ぬるを見捨てて、まあ四百兩惜しむ物知らず、是れが慘うあるまいか。爰を引張つて千兩取るか、但し千兩損するか、爰らを氣強うかゝらねば、傾城屋はならぬ。一人に情かくれば跡々の例になる。情知らぬ親方と、すねはたばつて勤め麁末にする奴等、棒の先で勤めさしよ。言ふな默れ。」と睨め付くれば、「何程默れとあつても此の長門は默らぬ。千兩の損德は白妙殿一人の上。私始め數多の女郎、ア、忝い賴もしい、慈悲な親方と思へば、心健しう一人の客も取り外さず、內の爲になる樣にと、身を忘れて勤める。眞に言ふぢやなけれど、能の囃のと榮耀榮華に誇つて、朝晚王樣の上る樣な、二の膳三の膳、酢いの甘いのは誰が言はす。ヤア旦那さん、總々の女郎の心が反れたら、五千兩や七千兩の損が見たいまで。其の頤が三間程橫町へ飛びやんしよ。ヤア旦那さん。」とぞせりかけらる。「何奴もく憎い奴。女郎のお蔭で榮耀するとは、世界中のくつわ屋に、せめて長が三分一眞似る者が何處にある。持つて出た身の果報でする榮耀。頤が三間程歪むか歪まぬか、是れ見よ。」と立ち上り、兩足にて蹴てく蹴散らす本膳二の膳、刺身の鯉は煮物に躍り、練味噌かぶる牛房どろ

の好い御機嫌。今の御訴訟中さうではあるまいか。」とつつと出で、「折がな〳〵此のお願ひと、朋輩殘らず申し合はせ置きしは、彼の病人白妙殿の事。旦那さんも油斷なう醫者衆も換へ、養生は樣々なれど、次第々々に病も重り、金の鎖で繫いでも、此の度はあつち者と、醫者樣達のお咄、其の身は時節是非に叶はぬ事ながら、いたはしいは彼の西國の吉樣といふお客、新艘からのお馴染は我々も存ぜし事とても死ぬる道ならば、一日なりとも郭の外で、死なせたいとの歎き。我人儚い勤めの身、兩方の心思ひやられます。此の事は井筒屋から、度々お耳へ入れし事。今日は別して總太夫中天神衆殘らずの御願ひ。」と、半分言はせず「ア、こまだるい、跡を聞くまでもない。料簡して白妙に暇くれといふ事か、成らぬ事。白妙といふ奴で何ぼうか損をする。三十日餘り煩うて、勤めはせず藥は喰らふ、人手は取る。地體此の吉とやらいふ田舍客めが穢い奴、六百兩で暇くれい、暖かに千兩の小判耳が缺けてもならぬ。定めて今日は此の客めが見物に紛れて、逢ひに來る手管があると推量し、あれ彼の鼻の先の數寄屋へ、病人奴を打込んで置く。皆見舞に往く事無用。禿めら局の奴等でも、白妙に水でも食らはしたら棒縛り。新艘の横笛め、浪人の娘とやら吐かして、賴もし立すると聞く。數寄屋の傍へも寄つたらば、縛り始めに括し上げてくれるといへ。客が大事往け〳〵。」と、始めの笑顔引換へ忽ちに閻魔顔、面を被換ふる如くなり。奥州些とも怖氣なく、「こりや旦那さんとも覺えぬ。お客から千兩出

て、今時分の鶴脂が無うて食はるゝ物か。打明けて犬に喰はせ。今持つて來た平皿は何ぢや。」「ア、是れは生鮭でござりんす。態々若狹へ飛脚を立て、取り寄せたと申されます。」「ム、若狹へ取りに遣つた。こりや出來した。」と機嫌を直す食好み、朝暮珍物高直の魚鳥は直に小判嚙む、齒骨も茨木童子なり。思ひ〳〵の大盡の、よねの威勢を劣らじと、能の祝儀の贈物、花とはいへど木々に咲く、花の時節は杉折の、雲脚蝶形洲崎形、五つ重ねの縞桐の、紋を透して手を込めて、奥州が名を忍ぶ客、*三五に義理を播磨潟、鹿様よりとほのめかす。花紫が深い客、長堀の粹様、金絲の網をすきかけて髭籠に籠めし祇園坊。半ぶ御贔屓弓も引く方、靫のお客といふもあり。銀の毛彫の飾り壺、宇治の花香を其の儘に、詰めし昔も今橋と、逢ふ夜が客の名に渡る、瑠璃白玉のふらすこに南蠻酒泡盛、藥と汲むや玉の井が、お客よりぞと我一に、靜卷絹金太夫、長門薄雲初紫、色品盡す進上に、好い客持つて全盛と、先づ親方の機嫌とる、ひどさぞ思ひやられたる。長大きに笑みを含み、「ム、これは太夫達のお客方より今日の花か、さて〳〵懇な過分々々。是れといふも和女衆が精出し、客に廻つて親方大事に勤むるゆゑ、さりながら勤め〳〵と思ひ、酒過して煩うて下さるな。ヤお客の側で嘸氣詰り、些との間なりと寢轉んで休息なされ。親方と思ひ氣兼は無用。我等が大事の金箱達。」と、ふはと乘せても暴れ馬の、轡に手綱許されず。中にも長門は姉女郎、「なう奥州さん、半ぶ樣いづれも、旦那さん

先づ彼の衣裳の結構さ、大名もかなはぬとの御評判。お行水なされて追付松風、皆待ち兼ねてござります。」「イヤ行水心が悪い。水許りに五人三人掛つて居つて、京の水をきらして、かゝり湯に大坂の水を使はせをつて、扠肌の鹽梅の悪さ。金次第でならぬ事はなけれども、汲み立ての京の水と嵯峨松茸のとり〴〵、此の二色が心に叶はぬ。ア、松茸時分に上りたいが道中が大儀な。船嫌ひなり馬嫌ひ、駕籠はふらつく。ヤア福庵、お主は地體京生まれ、若し貧乏公家に近付があるならば、御所車一輛買うてくれ。乗つてあること。」と方圖もなき、月蓋長者の隠居せられし如くなり。見に來る人の空焚は、匂ひ渡りし橋がゝり、一二三の松を煙り來て、樂屋にちゝつたんぽゝの調べも伽羅に埋もれて、鼓の音さへ薫り來る。「あれ鼓を調べるはもう次を始めるか。俺が案内するまで、始めるなと言うて來い。此の間何れも勝手へ立つて認め〳〵。我も飯喰はう膳を出せ。」「そりやこそ御膳。」と呼子鳥、古金襴の膳覆ひ、誠しからぬ取沙汰も、譃でござらぬ本膳は、*春正蒔繪の價千金、かけ盤高坏二汁七菜手を盡す、餘所の振舞ひらぎ屋の、朝夕とこそ据ゑにけれ。七度搗に七度篩ひ、誰が水晶を飯にして、精厭はぬ白鷺の、せゝり箸して不機嫌顔、「何と世界にもう喰ふ物も無いかい。明けても暮れても鯛の鯉のと喰はれぬ物ばつかり。此の二の汁の鳥は何ぢや、問うて來い。」「イヤ問ふに及びませぬ。何がな珍らしい物をとて、生鶴のお汁。」といふよりくわつと色を損じ、「鶴といへば結構な物かと思う

第四　植込の大江山榮華は大格子の唐織

*月も日も、庭より出でて庭に入る、郭の内の武藏野や、ひらぎの長が廣庭の、光琳風の築山を、見渡す目さへ遙々と、谷の岩組九十九折、筑波の山も恥かしの、森と繁りし植込は、華麗を盡す物數寄の、松の作り木作り枝、庭の松風三味線の、天柱に通ふ細廊下、數寄屋が軒の南天に、珊瑚樹繫ぐ玉簾、萩は宮城野躑躅が岡、梅や櫻の花紅葉、天より四季の仕著して、手形の外の色づくめ、金づくめなる身の榮華、*金の冠を被ぬばかり、しやくは持病にありとかや。豫て催す檜木舞臺も成就し、今日こそ爰を晴の能、三番過ぎて中入の、熊野より直にお行水、臺處にはどや／＼と、五色の赤飯蒸し立つる、鍋釜ありたけたけ／＼と、女子呼びつぐ男共、見物場掃く水を打つ、樂屋に續く衣裳場に、お出入の藪醫針立、算用足らずの懸倒れ、傳授覺えて手は利かぬ、古鼓のならず漢、其の外萬能一心の家業なし。「扨も出來た遊ばす／＼、米取る能太夫も跣足ぢや。」と、慶庵とり／＼御機嫌伺ふ折節、湯殿の内より、「お上りい。」と呼ばはれて、「ア、イ。」と應へて禿ども、緞子縮緬天鵞裏の臘虎の布團の三重ね、沉の脇足煙草盆、湯殿を出づるひらぎの長、天窗の鉢に立つ湯氣は、富士の煙の上もなき、ほとび過ぎたる湯上りの、お伽共がお髭の塵、「さても熊野の面白さ、何うも／＼。好い衆のお客達が

も存ぜず。如何樣過ぎし春の頃、古朋輩の合力とて、浪人の營みを助かりし事も候へば、若し其の子を賣つたる値にてやありつらん。それも詳しく存ぜず。又騙落かとのお尋ね。假令首を討たるゝとて逃げ隱るゝ樣な夫にては候はず。去りながら一夜にかはる人心、夫婦の中とは申しながら、計らひがたし。」とぞ申しける。「オ、健氣なる申し樣。天子大嘗會の前なれば、死罪は宥め助け置く。北白河の莊屋年寄、廣文を尋ね出し、娘を急度渡させよ。加藤兵衛も鏡山に同道して受取れ。違背せば連れ來れ。莊屋其の旨承れ。」と、御座を立たんと仕給へば、親も莊屋も詞を揃へ、「其の間妻子共逃げ走りも氣遣はし。とてもの事に廣文出づるまで此の女、牢舍仰せ付けられかし。」とぞ願ひける。賴光打笑み給ひ、「オ、逃ぐるといふとも、唐土天竺へはよも行くまじ。津輕合浦筑紫の果て、王土の限りは武將の下知。僅かに圍ふ牢屋許り牢屋とはいふ可らず。賴光が許すといふ詞を出さぬ其の內は、千里が野邊も牢屋たり。逃げば逃せ。賴光が一言は千筋の繩ぞ。まかり立て。」と簾中に入り給ふ。文武の德の堂々と、威ありて猛からず、實に名將の源の、水上淸き印には、世々に流れて家々の、平橘藤原や、八百八十氏はおほけれど、めぐり〳〵て盡きしなく、なほ源の御代に住む、民に幸ひありとかや。

の我が娘、當春賀茂のやすらひ花に參り、それより今に行方知れず、度々訴訟申せども、變化の業とて追歸さる。是れ御吟味の暗き處、變化異形を幸ひに、人商人の蔓り候。此の御心付かざるは御政道の失ならずや。御穿鑿下さるべし。」と憚りなく訴ふれば、季武聲を荒らげ、「御政道暗しとは天晴己はをこの者。して汝が娘人賣に取られし證據やある。」と睨め付くる。加藤兵衛ちつとも臆せず、「さん候。江州鏡山ひらぎの長が許にて、娘を見付け候ゆゑ詮議を遂げ候へば、北白河の廣文と申す者より、料足五十貫文に買ひ取ると聞くより早く、廣文が宿所を尋ね候に、此の頃他國仕る由。さるによつて恐れながら御威光をかり奉り、武將よりの御召なるぞ、廣文が妻子召連れ來るべしと、所の莊屋に申し渡し候へば、追付引連れ參るべし。對決願ひ奉る。」と憚りなく言上す。賴光聞き給ひ、「神妙々々。汝が詞上を蔑するに似たれども、却つて政道を勵ます一助。我何ぞ下聞を恥ぢん。」と宣ふ所へ、北白河の土民ども、「廣文が妻子召連れ參りし。」と四十餘りの女房、十四五ばかりの娘の子庭上に畏まる。賴光御覽じ、「廣文が妻子は汝等よな。夫の廣文粟田口の加藤兵衛が娘を勾引し、鏡山の遊女に賣つたる條まぎれなし。定めて汝も能く知つつらむ。夫が宿所に居らぬ由、驅落か但し行先知つたるか、眞直に白狀せよ。少しも陳ぜば拷問させうずるわ。」と宣へば、女房は聊か惡怯れず、「夫の惡事を女の身にて存ぜねばとて、同罪遁るべき樣なく候へば、陳じても益なき事。左樣の事は夢に

ぬ御訴訟。則ち其の比丘尼の名、一人は貞林一人は又貞觀々々。」とぞ申しける。「是れは深草土器師。明けて十四の小娘、何者の所業にや、首も腕も引き拔いて、腰より下は殘れども、骨は碎けて候。」と、泣き焦れて申すもあり。「音羽山の燒物師。女房が天窗の鉢打ち破られし。」と言ふもあり。油の小路の傘屋が女房、武者小路の具足屋の母、お室の糀屋、吉田には八百萬屋、御幸町の稚兒醫者、六條の豆腐屋、七條の袈裟屋、狼谷の衣屋、櫛笥通の紙漉、押小路の鮨屋、三條の取上婆、娘を失ひ妻を奪はれ、叔母は姪を尋ぬれば、妹は姉を見失ふ。兎にも角にも御詮議あり、妻の行方を知らせて給べ、娘に逢はせて給はれなう、御慈悲なるわと聲々に、泣き悲しむ有樣は、閻魔の廳に罪人の、罪を悔むもかくやらん、目も當てられぬ次第なり。賴光も落涙あり、「此の頃の訴訟人、爭論出入の事はなく、妻子を失ふ訴へ、春より帳面八百人に及べり。ヤア汝等、これは丹州大江山酒呑童子が所爲なる由、弘徽殿の告によつて、某討手を蒙れども、幼主御即位、大内守護にて延引せり。近々に大江山に分け入り、生きたる者は連れ歸らん。死したる者は敵を取つて得さすべきぞ。目に見えぬ變化なりとも、源氏の威光弓箭の德滅ぼさであるべきか。靜謐の御代となし、追付歎きを止むべし。罷り立て。」と仰せければ、「ア、有り難や。」と一同に、「わつ。」と叫びし其の聲は、大路に響き哀れなり。爰に四十許りの男子勾欄の下につゝと出で、「某は粟田口の貧者、加藤兵衛と申す者。横笛と申す十五歳

頼光、決斷所に出で給ひ、季武貞光執筆の役、檢非違使左右に著座して、庭に隨兵兵具を携へ、御門開けば訴訟人、我先にと込み入りしを、貞光進んで「ヤア騒がし〳〵。御批判は後程、名をさして召し出さん。まづ面々が訴訟の品を帳に付け、それ鎭めよ。」「承る。」と隨兵かなぶち振り廻せば、しいと鎭まり突く這ひて、皆々帳にぞ付けにける。「恐れながら私は、上京西陣織殿屋の孫三郎と申す者。十七になる年季の織人、一昨日の暮方より行方知れず失せ候。親請人に尋ぬれば、却つて此方を恨み口、御威光を以て御穿鑿仰ぎ願ひ奉る、故鄕は錦の小路の者。」と、口上の趣を貞光帳にぞ留めにける。「我等は二條室町絲商ひの吉次と申すものにて候。一人の倅に一門中より嫁を取り、里歸りの道にて見失ひしと申して、今に戻さず候へば、御詮議願ひ奉る。我等が爲には姉が小路の針や、從弟同士。」と繰り返せば、同じく帳にぞ留めてけり。次に年頃六十餘りの女房は「柳の馬場のあこうと申す綿つみ敎へる寺子取。十二と三になる弟子が二日に二人の行方知れず。お慈悲に御詮議給はれかし。人の小娘失ひて、未來のつみ綿親々の、恨みはさながら眞綿にて、首締めらるゝ思ひなり。」と、淚を流して訴へける。「私は宇治の里梅田と申す茶師にて候。十八歳の娘閨の内にて姿なし。側に臥したる下女に問へば、こちや知らぬと申すなり。細かに御詮議下さるべし。」とぞねがひける。「私は今熊野の貞月と申す比丘尼のお寮。二十三四の弟子二人、勸進に出で今日七日、今に歸ら

人交はりもするなとか、御料獻頼み奉る。」と手を合はせ詫びければ、ゆらも、「只御恩には、京へ往なして下され。」と、泣くより外の事ぞなき。我が子の恥を聞き入れて、「そんなら如何なりと、墮胎なりと産ませなりと、埒明けて京へ往なせ。今宵の中に俵屋と通屈して、せんよを明日から呼び取り、此の八百兩の戻る程、餘の女郎共をせつちやうせい。」と酒呑童子も其處退けの、茨木童子が摑み面、片腕切りたき許りなり、加藤兵衛聞けば聞く程力落ち、ム、あの心では泣いても口說いても、聞き入れはよもあるまじ。なまなか言ひ出し仕損じて後日も如何。兔角頼光へ訴へ、御威光でなくんばと、思ひ定めて座敷を立ち、「これ御亭主、勝手も殊の外取込と見受けたり、我等も今日守山まで參る用事ゆゑ、お暇申す。」と笠押取り、「重ねてお出で。」といふ聲も、聞き捨ててこそ出でにけれ。長あとを見送つて、「あの樣な奴客にすな。何の二つや三つ宿をしたとて塵埃。小喧しい措いたが可い。ア、もう往なう、コリヤ何奴ぞ來い。猿め、先へ往て善哉餅言ひ付けよ。小豆は舌に障る、京の龜屋が羊羹を櫺り潰してせいと言へ。太四郎も來い。」と立ち出づる。今の榮華は喜見城、女郎の爲には怖ろしき、鬼が城へと三重歸りけり。東宮懷仁親王七歲にて御位に卽かせ給ひ、攝政兼家朝政を正し、武將源頼光非常いましめ給ひしかば、聖の御代の九重や、民の訴へなかりしが、永延二年の比よりも、訴訟沙汰人日々に增し、頼光の門前は夜の內より羣集して、御門の明くをぞ待ち居たる。夜も明けゆけば

うて六貫匁といふ禮銀を、何の價に出さうぞやい。此の樣な手練をせねば分限者にはなられぬ。これが俺が商賣ぢや。其の腹な子を墮せ。今宵から此方へ來い。」といへば、ゆらは返事なく、只伏し沈み泣き居たる。太四郎聞き兼ね進み出で、「せんよを請出し下さるゝ御恩は海山有り難し。ゆらめに勤めさせうとは、それで此の太四郎が若い者の一分、何と立たうと思召す。歷々のお付合京都までも聞えた、ひらぎ屋長は嫁に勤めをさするわ、息子の太四郎は女房に流れを立てさすと、惡名を立てられうより、同じ恥をかく手間で、孕み女を擔いた方が遙かに增し。ゆらめに平產いたさせ私の子といたしお前の詞も立てませう。其の上で何となう親へ戾して下され。」と、言はせも敢へず、「ヤア氣の弱い。彼奴を親へ戾して、せんよを請出す八百兩は何處から出る。總じて慘い目を見まいと、物の哀れを知つたり、人のおれそれ、世の中の義理順義を知るが最期、貧乏神が乘りうつる。此の春抱へた廣文が口入のしんべめも、明暮吠え廻れども、叩き込み責め伏せて、五十貫をやがて五千兩にして見せう。コリヤ此のゆらも前出した六貫匁、せんよ受出す八百兩、五層倍にせにや置かぬ。男共ゆらを此方へ連れて來い。」と、立たんとすれば太四郎留めて、「今暫く、申し親父樣、ゆら一人が無ければとて、お前が貧乏なさるゝか。假令彼ゆゑ金銀の山を築けばとて、太四郎樣の內儀といはせた者に道中させ、私は生きて得居ませぬ。子を產まして波風立てず、去るに何の手はつかぬ。明日より此の太四郎に

ばかり。此のお腹が今見えたか。わしも京にわけあつて、此の處へは下るまいと言ひ切つて居たれども、此方の親御が懷妊大事ない、其の子は太四郎が子にして、おのれが孫に極める、茶屋揚屋の嫁に其處らは構はぬ、是非において貰はうと、父樣との固めで嫁つて來たわしなれば、此の腹の子は此方の子、親旦那と三つがなわで、＊けんほくほはれて產んで見しよ。人の浮名立てうより、此方の浮名たしなましやれ。」「イヤこいつ嘘付め。女房日でりはゆくまいし、おのれ許りが女か。此の澤山な女子に、懷胎な合點ぢや嫁に取らうといふ、阿房な親が何處にあろ。大恥かかぬ中出て失せう。さなくば取つて引き摺り出す。」と、小腕取つて引立つる。門口より親長は「默止れ〳〵喧しい、太四郎默れ、ゆらも默れ。こりや、せんよに勤めをさするによつて、情夫の何のと喧しい。とんと請出して本妻にせい。町の分限者共のする程の事、此の長が仕兼ねうか。疾うに內證聞いて置いた。八百兩では今でも埒の明くやうに、俵屋と談合締めて置いた。コリヤゆら、われが親と言ひ交した詞一言も違へぬ。京の東では住吉屋のゆらといふては名を取つた娘ぢや。ア、何うぞ此方の格子へ出したれば、大儲けするものぢやと、見込んで親へ貰ひかけたれば、女郎には賣りませぬ、殊に大盡の子を懷妊して居るといふて埒が明かぬ。そこで此の長が思案を以て、こしらへにも懷妊にも構はぬと一杯喰はせ、まづ嫁に貰うて、跡では其の腹の子を疵にして勤めさせうと、此の長が胸一つで斯うからくんだ。さうな

が大地に手を突き頭を下げ、膝を折つて口說くならば、指いたる我が大小の義理にも逼つて、聞き分けぬ事よもあらじ。」と、亭主が歸るを松茂る、小庭に佇み居たりける。情夫の後妻打つ波の、おゆらは夫太四郞が、＊こづか胸座摑み合ひ、敷居で轉ぶ雪駄は飛ぶ、引摺り込んで上り口、どうど打ち付け「これ太四郞殿、せんよ殿とのもや〳〵知り拔いて居るぞや。今日も今日此方が門を出て行くと、せんよ殿を呼びに來る。ヤア合點ぢやと、裏の路次から密と出て、こそ〳〵宿へ仕懸けて、一から十まで見屆けた。此方衆親子の商賣は何ぞいの。女郞屋と揚屋と、內の女郞と餘所の揚屋と間夫したら、此方衆親子がきよろりと見ては居まいがの。まつ其の如く餘所の大事の立物の太夫と、揚屋の身で情夫狂ひ、郭にぱつと沙汰あれば第一商賣の妨げ、女房が虛氣ぢやと、ゆらが鼻毛が讀まるゝわいの。今許り言ふぢやない、何ぞ言へば氣の通らぬ、悋氣かと一口に言ひ込め、何と粹は悋氣はせぬものとの、何處からの法度ぞ、どなたからの極めぞ。サア言や〳〵。」と武者振り付けば、取つて突き退け、胴骨を踏み付け〳〵、「おのれが何所へ女房呼ばはり。其の腹持つても女房か。七月の京土產、旣に此の太四郞に男の一分を捨てさせうと能うしたな。女房でない出て失せう。去り狀が望みなら千枚でも書いて遣ろ。男ども女ども引摺り出せ。」と犇けば、家內さわぎ立ち、「先づ親旦那呼んで來い。座敷へ聞ゆる門に人がたかります。ア、うとましや。」と騷ぎける。ゆらけら〳〵と打笑ひ、「ハア改まつた事

ざつたおゆら樣といふ、歴然としたお内儀樣が有るぞや。コレ此の眼に見えぬか。せんよ樣と若旦那のこそ〳〵故、おゆら樣とのもや〳〵が此の耳へは入らぬか。*内のさだつが面白いか。惡魔め。」とては礑と打ち、「天狗め。」とては突き伏せ、下がへに手を入れて、太股を捻ぢ上げ〳〵捻ぢ上ぐれども聲立てず、痛さを怺ふる憂き涙、疊に落ちて潸然と、齒軋みしても加藤兵衞、出づるにも出でられず、言へば言ひ負け、武士の娘を下種女に、見す〳〵親の見る前で、さいなまする無念やな。飛びかゝつてやつき通さん、眞二つにや切り殺さんと、刀に手をばかけたれども、切つて誰が爲、遣手には科もなし、腹立つる程我が子の*ひしと、急ぎ立つ心押し沈め、「オ、遣手衆憎いは道理々々。其方は娘は持たずか。」と、聲を涙に曇らせて、見ぬ顏するぞ哀れなる。「こりや、客樣達の手前もちつとは恥かしいと思へ。其の遣り放しな根性で、今から多くの殿達に、しつほり〳〵やらるゝか。とつとと失せう。」と引き立つれば、「申しお客樣、餘所の娘が折檻に逢ひ居る、不便なことやと苦に持つて下んすな。私や痛うもないぞや。」と、笑顏に懸るはら〳〵涙、追立てられてぞ歸りける。加藤見送り起ちつ居つ、跡に焦るゝ親心、「サア〳〵在所は知れた。賴光の御前への訴へは、上り下りも日數を取る。今宵一夜も見捨てては親も命が堪らぬ。親方ひらぎの長と、太四郎とは親子とや珍重々々。長が邪慳無得心の者なりとも、鬼でもあらず畜類にもあらず。彼奴も子を持ちたれば、親子の哀れは知るべきぞ。某

河の廣文といふ奴ぢやげな。」「ム、なに北白河の廣文とや。名所さへ聞いたれば、政道明らけき頼光へ訴へ、其の廣文め獄門にかけ、そちは郭を安々と取り出すは今の事。さりながら其の間にも必ず必ず、一夜でも遊女の勤めして身を穢せば、重ねて武士の妻とならず。一生の大事ぞ。」と語れば、横笛又泣き出し、「サアそれが悲しうござんする。母樣の御臨終に、貞女兩夫に見えずとて、夫一人の外とては、男に手をも取らさぬもの、女の大事は是れ一つと、くれ〴〵の御遺言、胸の守にかけて居る。さりながら近い内格子へ出す、太夫にするとの用意を聞けば、責めに逢ふより悲しうて、死なうと思ひ詰めましたに、今お目に懸れば、心に力頼みもある。片時も早う取り返して下され。」「オ、氣遣ひするな今の事。それまでは親の名も人に語るな漏らすな。」と、いへども漏るゝ親子の涙、留めかねて居る處へ、遣手の鍋が藥罐聲、煮えかへつたる顏付して、「こつちの*しんべは爰らへは見えぬか。」と、奥へ通つて、「こりや爰にぢや。早今から野良かわくか。わがみが爰へおぢやつて、もう丈長が伸びたとて、一日も太夫樣方に附きもせず、供は仕やらず、眠たい目は仕やらず、朝晩仕事は研ぎ磨き。もう半年も居やれば、アノ氣立な旦那樣の手竝を忘りやつたか。又しては遣手がぬるい〳〵と、棒の側杖喰ひさうな。何のらかわいて爰に居る。エ、因果め。」と撲りこかす。「おりや遊びにや來ませぬ。太四郎樣からせんよ樣へ文持つて來ました。」「それ夫れが木馬の基。若旦那の太四郎樣には、京からご

心の愚かさ故。過ぎし彌生やすらひ花の歸るさ、白髮頭に赤ら顏、浪人らしき親父めが、『ヤァ加藤兵衞の娘か、小さい時に逢うたれば、定めて其方は覺えまい、扨も〳〵成人、加藤殿へも無沙汰した、長の浪人笑止な、其方を賴光樣の御臺所へ、御奉公に出さう、親の立身の出世、たつたいま加藤殿とも談合し、お主を爰まで迎ひに來た、鳥渡逢はする人あり。』と、騙すとは夢にも知らず、父樣の合點なら、何うなりともと連れだちて、船に乘せ駕籠に乘せ、此の所ひらぎの長へ連れて來て、五十貫とやらに私が一期を賣り渡す、ヤァ其の筈でないさうでないと、泣いても喚いても聞き入れず、長が手にわたりしより、間がな隙がな逃げて退けう、走つてくれうと心懸くる素振を見て、慳貪邪慳な親方が、五十貫に買うて、一萬兩にもする奴ぢや、其の根性を直さぬかと、縛つて長押に釣り下げらるゝ時もあり、柱を横に渡して、足に石を括り付け、木馬とやらに乘せられ、夏の夜は裸にして、植込に括り付け、蚊にせめらるゝ時もあり、食をとめられ撲ち擲きは常の事、泉水へ身を投げて死なうかと思へども、せめて父樣に爰に居ると知らせたく、不繁昌な女郎衆は私同然の責めさいなみ。木陰へ寄つては、兎角命が大事ぢや、地獄へ落ちたと思やと、朋輩衆の情にて、一日〳〵暮せしが、抓り叩かれ小刀針、身内に明所はござらぬ。」と、語る子よりも聞く親の、心に釘針刺す如く、共に歎き沈みしが、「エ、憎い奴輩。しやつ人商人、其の親父奴が名所は聞かなんだか。」「手形の時見ましたが、北白

とて、かくれもない大くつわ、太夫ばかりが五十人、天職が七十餘人、圍の端のと二百人に餘つて、禿共さへ百人餘り、事の多い中なれば、どの筋から何うこけて、お尋ねの娘子のござるまいとも申されず。ア、どうぞ知らせて上げたや。」と、しみ〴〵泣いてぞ語りける。表口から急がしげに走つて來る禿の聲、「俵屋のせんよさんは奥にかえ。」と、つつと通つて鼻紙の、中から出す延の文。「コレ太四郎様の、お前へ進ぜとおしやんす。」と、文を渡せば讀む暇も、囁けばさゝやいて、頷き合ひし横顔を、能く〳〵見れば尋ぬる我が子の横笛、はつと嬉しさ抱き付くばかり、親は爰にといはんとすれども人目あり、人の思ひ我が思ひ、汲みかへ〳〵心の水、わくせきするぞ道理なる。せんよが心は戀一筋、脇の顔には目も付かず、「鳥渡往て來ませう。」と、文引裂いてせゝくしやの、小褄ほら〳〵立ち出づれば、共に跡をも振り返らず、連立ち急ぐ我が子の振。「コレ禿衆々々、鳥渡爰へ借りませう。」「あい。」と見返り、「ヤア父様かいの。」「ア、高い〳〵。可愛の者や。」「ゆかしうござる。」と許りにて、抱き付けば引き寄せて、聲を呑んだる濕り泣き、親子の樣ぞ哀れなる。加藤兵衛涙を押へ、「春より今日が日まで尋ね餘つて、最早此の世に無いものと、思ひ極めし上ながら、若しやと爰へ來りしに、思ひも寄らぬ此の體、何として淺ましい。君傾城に使はるゝ、禿とは誰がなしたるぞ、如何なる者に騙されしぞ。不便の者の有様や。」と、聲打萎れ言ひければ、「父様に歎きをかけ、我が身も憂目見る事は、私が

忝い。我等太夫樣方を呼びまする風體な者でなく、身は都に住みながら、女郎達とは詞をかはせし事もなし。まして此の郭の何方が何方とも名も存ぜず。亭主太四郎とやらが心得を以て、不思議にお目にかゝる事、返す〳〵も忝し。一見と申し武骨もの、なれ〳〵しき事ながら、盲目蛇に怖ぢずとやら、身に逼つての物語。我等が兄弟より親しきもの、當春十五の一人娘、三月より行方知れず、狐狸の所爲かと、夜な〳〵の太鼓鉦。人買人賣の手にも渡りしかと、京都伏見の遊女町、山々谷々探しても今日まで行方知れず。殊に母もなきもの父の歎き御推量。死したるに極まらば、せめて身體なりともと、親は狂氣の如くになり、子が存へあるならば、親の悲しむ一倍と、親子の心おもひ遣り、我等が身同然に、斯樣に尋ね申すなり。禿子供に思ひ當りの方あらば、お尋ねも申したく、さてこそ氣立の好きお女郎とは望みしぞや。色もなく戀もなく、大事の女郎に立ち入りし御物語、嘸譯知らずと思されん。是れも心の遣る方なさ、不調法は御免なれ。」と、はら〳〵泣いて語りける。せんよは鼻紙手に取つて、「ナウ始めてのお客に、泣いたはこれが始めぞや。ちつと違ふか違はぬか、女郎の成立は皆それに似たる事。親御の歎き御懇の中ならば、さこそと思ひやられて、わしが昔も今更に、袂を絞るばかりぞや。此の郭の女郎屋、わたしが親方始めとして、禿共多いと申して二十人か三十人、肝煎口合ある内に、親元慥かの判を取り、吟味に吟味が郭の作法。此の太四郎樣の母屋は、ひらぎ屋の長

た一夜太夫といふ者買うて見たし。路銀の餘り一兩二歩、これを貴殿に渡し申す。然るべき樣に賴み入る。」と述べければ、太四郎手を打ち、「さて打明けた被仰れやう、それが結句野暮の粹。女郎にお望みはござらぬか。」「いかな〳〵。太夫でさへあれば誰でも構はぬ。」「申し、女郎と申すは、面々に情夫と申す戀があるゆゑ、夫れへの心中大方初手は振りまする。其の手管でお目を偷む事がある。左樣の時に得手のお方が、今宵一夜はおれの物、一寸側を放さぬと、堅くろしいお方がござります。そんな事も御料簡なされますか。」「構はぬ〳〵、振りたくば振らつしやれ、神樂の鈴程振らつしやれ。只氣立の好い、*びかしやかせぬ太夫を賴む。」太四郎悅び、「こりや女子共、俵屋へ往てせんよ樣呼んで來い。杯持て來い。小座敷の火燵へ火を入れい。まづ此方へ。」と奧座敷。「私は隱居へ鳥渡見舞うて、後方お目に懸りましよ。」と、雪駄も足の横町の、こそ〳〵宿へぞ走り行く。ひらぎ屋よりと聞く嬉しさ、せんよは心たぐり行く。「遣手禿も跡から。」と、引舟入らず走り込み、客の事も問はばこそ、「これ龜殿、太四郎さんは何處へぞ。わしが來る事知つてかや。」「オ、〳〵成程々々旦那樣の御合點、障りないお客さん、お座敷は中の間へ。せんよさんお出で。」と引合はせ、位のある松の牀柱、とんと憑れて寄り添ひの、無い事ある事しやら聲に、かみする女子の取廻し、杯ばかり投げ入れの、鼻紙袋にありあはば、露も打ちたき風情なり。龜が勝手へ立つを見て加藤兵衛居直り、「先づ以て今日はお出で

鋸屑と溜りける。此處に加藤兵衛氏綱といふ浪人あり。身にも譽れもちながら、いまだ時にも粟田口、浮世を忍ぶ柴の戸に、去んぬる彌生*やすらひ花、一人娘を見失ひ、足手限りに身を碎き、尋ね廻れど影も見ぬ、鏡の宿にぞ著きにける。見馴れぬ里の賑しさ、行き來ふ女郎の年恰好、同じ程なを見るにつけ、若し此の里には居ぬ事かと尋ぬるも面伏せ、聞かねば心落付かず、摺れ違ひ摺れ縺れ、一つ處を行き戻り、案じ佇み居る處へ、*北向のつまがはが袖を控へて、「これ君さん、旅のお人か近付もなささうな、局へごんせ、しつぽりと知る人になりんしよ。」「ォ、過分〳〵。客にもならうが、まづ密かに尋ねたい事がある。」と言はせも敢へず、「尋ねたい事合點ぢや、私が位かえ。きまつた通り五分でごんす。安い物ぢや這入らんせ。」「否そんな事ではない。此の郭に居る禿子供の親里所は知つてかや。」「ム、〳〵私や禿使うた事はなし、女郎のさもしいそんな事何の知ろ。まあ這入らんせ。」と引き留め、「此の三十日客せねば、賣物でない樣な味な所があるぞえ。まあござんせ。」と引き留むる。「否先づ重ねて〳〵。」と武者振り付くを捥ぎ放し、鬼一口を遁れし心、目を塞ぎ鼻摘み、ひらぎ屋へこそ入りにける。内には見馴れぬ風俗の、胡散らしげな大小に、さすが袖にもあしらはず、亭主太四郎揉手をして、「何方かは見馴れぬお人。我らはひらぎ屋の太四郎と申す者。御用は如何。」といひければ、「拙者は京都浪人者、一生に傾城と物申した事ござらねば、揚屋衆に近付なし。閻魔の廳の訴へに、たつ

といふ聲に、靈化は失せて覺めければ、女御の姿あり〳〵と、元の繪像に寫りけり。右近夢の心地にて、安盛が詞の企み言上すれば、死靈の告げ一言一句違ひなし。「皆安盛が惡逆。」と、逆鱗殊に甚しく、「今宵當所に宿する由、探し出して搦め取り、賴光が心に任せ計らふべし。」との院宣も終らぬに、平安盛參上し、「右近の前は叡慮に叶ひ候か。伺ひの爲參りし。」と、言はせも果てず渡部、「院宣なるぞ。」と胸板を、かつぱと踏み付け乘りかゝり繩をかくれば、「こは如何に。忠節はげむ安盛を搦めよとの院宣は、心得難し。」と起ち上る。「いや科はいふに及ばず、己が心に覺えあり。言譯あらば賴光の御前にて申すべし。」と、頰骨を五つ六つ續け打ちに打ち付け、「それ〳〵。」と引き立つる。猶々玉體安全の御祈禱を、晴明が千早振るてふ祝詞の聲、君は女御追善の御經の聲打混り、さながら神も影向し佛も來迎あるばかり。佛法王法神道も、共に盛りの花の山、今に古跡ぞ殘りける。

第二　東寺の西口いばらぎがつかむ八百兩のきんさつ

唄 來いと呼ばずと、行かずに置こか、君が見たさの鏡山、ひらぎの長が土藏づくり、風にも散らず日に枯れぬ、黄金花咲く松と梅、百にあまりて圍はし、二百餘人の玉蔓、夕々に產み出す、てゝなし金の攫みどり、茨木童子と名に高く、母屋は總領太四郎が、揚屋女郎屋親なして、鋸商ひ金銀は、

樣の櫂木は握らりやせまい。」と喚きける。「いや愚かなり戀路には、王位とても隔てなし。現世の位は未來の仇、心に思ひ身に忍び、口に戀しと焦るゝも、身口意業の三業の、其の三業を知らずや。」と縋り付けば、「なう悲しや、三劫とは糠の事か。糠三合持つたらば、入聟すなとは男の事。」「是れは女の一念の、其の玉蔓這ひ纏はりて這ひかゝり、遁れ難なや遁さじ。」と、寄りては離れ離れては、又引き寄する戀慕の綱、「苦しく〳〵。」と夕闇の、空恐ろしく賤の女も、惱み臥せば玉體も、疲れ轉ばせ給ひしを、猶も離れぬ恨みの涙、凄まじかりける次第なり。義兼惟成此の音に何事やらんと驅け付けて、抱き起し參らせ、「是れは〳〵。」と許りにて、驚き騷ぐ其の處へ、賴光の代官として渡部綱、阿部晴明誘引し、一散に驅け來り、「今夜晴明天文を考へ候へば、おりゐの帝死靈のなやます天變ありと奏聞し、攝政兼家公の仰せによつて、則ち晴明召し具し候。賴光は禁裏守護に候故、渡部を以て言上。」と細々と述べにける。法皇叡感斜ならず、「とく〳〵加持し申せ。」との院宣。晴明右近に近付き、＊りつかふりくていの祕文を唱へ、天津金木天津すがそを、＊千座の置戸におきたらはして、祓ひ申し淨め申せば、忽ち顚ひ口走り、「我こそ弘徽殿の亡き魂よ。君に恨みは無けれども、平安盛將軍職を望まん爲、右近に敎へて寃を言ひかけ、三の君の命も我が取つたると奏せしは、跡形もなき詐り。三の君は丹波國、大江山酒呑童子といふ鬼神の所爲。疑ひ晴れて敕勘許し、契りを違へ給ふな。さらば〳〵。」

び入ると思へば、「うん。」と魂ぎりて、我ならなくに我が心、弘徽殿と入れ替り、「*姿は右近の橘の、昔の契りは忘れじ物。彼の驪山宮長生殿のさゞめごとも、君と我が中にあら〳〵、あらがねの七重の鎖は切るゝとも、縁は切らじ。」と手を延ばし、引けば引かるゝ御切髱、亂れ引かれてよろ〳〵〳〵、よろばひ柳氣力なく、風に揉まるゝ御有樣、天に引立て地に引据ゑ、「君が心は飛鳥川、我は三途の波枕、朽つる世までは朽ちせじ。」と、三界六道つき廻る、足弱車くる〳〵〳〵、苦しみたまふぞ哀れなる。大原のお嫁は斯くとも知らず、酒を求めて歸りしが、法皇右近は亂れ髮、摑み合ひ給ふ體。「こりや何んぞ、早夫婦喧嘩か。今からそんな身持で、此の憂き世帶は持たれまい。王樣も王樣ぢや。内裏の格が此處へは向かぬ。向ひ鄰の聞えもある。男は裸百官の、上に立てば女御樣、今で申さばおか樣ぞや。夫婦喧嘩所帶の毒。アヽおとましや。」と言ひければ、「兎角右近は狂氣ぞや。能く計らへ。」との仰せにて、奥へ入らんとし給へば、「どこへ〳〵。」と玉體を、引き廻し引き伏せて、「なう狂氣とは世にある人。我は形も夏草の、陰に焦るゝ螢火の、聲を立てねばそれぞとも、岩にせかるゝ岩間水、二つにさつと打ち割れて、波に碎かば碎けよ。」と、さめ〴〵と泣きければ、「是れおか樣、何ぢや割つての碎いての、二つにも三つにも鍋釜は此方の、割れてもわしは構はぬが、世帶の毒とは其處の事。擂木一本箸片し、只は出來ぬ錢が入る。但しあの王樣の細工に見事遊ばすか。假令それでも勿體ない、王

凄まじや。夢幻に見たとは違ひ、顔ばせは美しく魂は蛇身、見るも怖や。」と逃げ惑ふ。法皇驚き「こは何事ぞ仔細を申せ。」と宣へば、「さればこそ此の間或時は夢に見え、又幻に顯はれ、『弘徽殿が怨靈なり、汝君へ召さるゝ筈、妬ましし腹立や、三の君を取り殺し、あら嬉しやと思ひしに、己が枕を並べんとや、思ひも寄らず叶ふまじ、君に近付く女あらば取り殺し〳〵、日本國の女の種を枯野となして絶さん。』と、鬼とも蛇とも譬へなく、追ひ廻さるゝ其の苦しさ、身につまされておいとしや、三の君の御最期まで、思へばお主の敵ぞ。」と安盛が教への通り、違ひなく〳〵語りける。法皇誠と思しめし、大きに驚き逆鱗あり。「存生にては妬みなく、賢女貞女とつくりなし、臨終にも異女に思ひ忘れて慰めと、能くもよくも僞りし。戀も想ひも覺め果てたり。釋迦牟尼佛も聞き給へ、三世の契り是れまで、世々永劫の勘當ぞ。」と繪像を取つて投げ給ひ、「是れに付けても三の君が最期の心不便やな。形身には右近の前、閨へ來れ。」と打萎れ、入御なるこそは是非なけれ。右近繪像を取り上げ、佛壇に掛け置いて、「さりとては情なや。お爲になるとありし故、教への通りは申せしが、死したる人に無き名を負はせ、我が詞一つにて縁を切らせ敕勘ある、恨みを許し給へ。」とて、涙を流し詫びけるが、不思議や繪像搖ぎ出で、身の毛もぞつと忽ちに、地絹を離れ形を現じ、「右近とやらん慥かに聞け、生身の寃も辛からずや。科なき骸に敕勘受け、寃に妹脊の中絶ゑし、思ひを思ひ知れや。」とて、懐に飛

け安盛も、同じく御前に伴はる。安盛憚る處なく、「三の君の身の果て餘り本意なく、せめての由縁と此の女を御宮仕に奉る。叡慮にも叶ひなば、御恩賞には鎭守府の將軍職、偏に願ひ奉る。これ右近の前、日頃怖や恐ろしやと、怖ぢ恐れたる夢物語御咄し申し上げ、弘徽殿に負けまじと、隨分お氣に入り給へ。後程御機嫌伺はん。」と、御前を退出し、旅宿へこそは歸りけれ。右近は稚き時よりも公家奉公は馴れたれども、王位に押され身も顫はれ、顏に紅葉の秋津君、共に御心恥かしく、御詞もあらざれば、義兼惟成氣の毒がり、「サアこゝらが男の困り物。お嫁どうぞ御挨拶。萬事は賴うだ任せたぞ。我々は花山寺の和尚の方へはづすぞ。」と、表へ出づれば、「オ、それ〳〵跡はわしが請取つた。さきは閨の御杯、酒買うて來ませう。こんな時には兎角酒、酒は情の露雫。」德利提げて出でにけり。右近は猶も差し俯向き、君も何を打付にいひかけ給はん詞もなく、「盆には嘸踊りつらん。踊が好きな顏付ぢや。京と違うて踊もなき、此の山里の寂しさは、住み憂からん。」と宣へば、「否々物靜かな御住居、お殊勝な佛樣、私はこれが好き。こちらなは釋迦樣、あの繪像の佛は何と申す佛やら、悋氣深いいたづらさうな佛樣ぢや。」といひければ、「オ、あれこそ麿が涙の種、弘徽殿がおも影よ。位も身をも捨てたれど、契りは思ひ捨てられず。廻向をなしてくれよ。」とて、御涙にぞ暮れ給ふ。右近も憐れを催せしが、ャ忘れたり安盛の言ひ敎へ、此處の事ぞと思ひ出し、「マア弘徽殿の御影か、なう恐ろしや

戒名清容永久。」と、語れば君も堪へ兼ねて、どつと笑はせ給ひけり。兩人重ねて、「今宵君の御慰めに女中一人參らるゝ。御祝言のまなびしたけれども、我々は男勝手知らず、待上臈も何もかも、萬事そちを頼む。」とあれば、「ア、つがもない。内裏樣の嫁入とは御所車の御入内、一度拜んだばつかり。作法は夢にも知らぬわにや。」「いや〳〵左樣の儀式でなし。此の御住居の事なれば、祝うてざつと形許り。其方達が嫁入と同然に入用の物調へて、御挨拶も申してくれ。平に〳〵。」と頼まるれば、「それならば安い事。八瀨や大原の嫁入は大體祭同然、酒は醪の手作り、高野川の鮎の鮨、干梭魚の挈り物、芋と蒟蒻煮〆て、三種の肴が入ります。落付はお雜煮、餅は大方一人前三升當に搗いたれば、大概に行き渡る。冬なればさつぱりと洗濯夜著も入るけれど、暑い時分は是れが德。靑柴一把燻べれば、蚊帳釣らずの新枕、閨の内は其の身の機轉。わしらが若い時分は、祕密口傳も入つたれども、山家の奧の奧までも、今の娘は一人食み、五日歸りするまでは、朝晩のかき鱠、お汁には何なりと尾鰭の付いた燒物。尤も飯は上置なしの生飯なり。」といひければ、「扨も目馴れず聞き馴れぬ、侘びたる賤が物語、聞くも山家の珍らしさ。」と、叡感限りなかりけり。はや安祥寺の入相の、音羽の峯に夕づく日、傾く笠の女姿、平安盛同道にて、御庵室に伺候し、「かね〴〵奏せし中納言高房が養子、右近の前御宮仕へ。」と奏すれば、義兼惟成出で迎ひ、「能くぞ〳〵此方へ。」と、笠を取らせ引繕ひ、玉座に近付

お末か一兩人、呼ひ申さん。」と申し上ぐれば、「否とよ王位を振り捨て、内裏を出でて世を遁れ、左樣の音信、都の譏り世に煩し。右近とやらんがともなひには、此の山科の里人、土民の妻子賤の女にても密かに語らひ、何方へも漏れぬやうに。」と宣まへば、「ア、誰をがな雇はん。」と、二人談合とり〴〵の、折に折り焚く柴付馬、彼の山越えて此の山樵が、「八瀬や大原木黑木束ね木、柴召され。」とぞ賣りにける。惟成見付けて、「なう義兼、あれは御所へ柴入るゝ、朧の清水のお嫁でないか。何と今宵あの者を頼むまいか。是れは幸ひ柴買はん柴買はう。」と呼び入るれば、「あい。」と答へて内に入り、不思議さうに顏を眺め、「これは〳〵見た樣なと思うたが、京の御所で再々見た、御公家さま達ぢやわにや。誠に聞けば上樣も内裏をお出でなされて、お位は宮樣へ參つたと申すが、爰に隱れてござりますか。何暗からぬ王樣の、宮殿樓閣打捨てて、わしらが住居同然に、御内の衆も無ささうな。是れは先づ如何した謂れ、お借錢がなあつてであろ。御不自由を推量して、おいとし樣や勿體なや。親祖父代々おきよ所へ柴入れた冥加の爲、薪はよめが續けませう。何ぼお位高うても借錢には勝たれぬ、ほんの位倒れぢや。」と、涙を流すぞ殊勝なる。義兼惟成打笑ひ、「いや〳〵左樣の事ではなし。あれにござなさるゝこそ今までの帝樣、御髮切らせ給ふ故、花山の法皇と申し奉る。其方が心ざし叡感なり。」とありければ、「ア、有り難や。」と手を合はせ、「其のえいかんとは私が舅、九十六の錢百で一昨年死なれ、

公時は、「たつた今、夜食を喰うた食ごなし、變化も鬼人も悪人も、ひとこに仕舞ふ。」と驅け出づる。「とまれ留まれ。」「いや放せ、放せ。」「留まれ。」とりぐの、鷄の八聲や鐘の聲、夜はほのぐと茜さす、公時が顔朝日の色に、つれて御所へぞ上りける。

第二

雲居の月も山樵の、軒端に曇る御住居、松の柴垣竹の簀戸、錦の褥引換へて、刈穂の庵の草筵、主殿司の菖蒲草、葺かねど軒に生ひ茂り、主水司の初氷、佛の閼伽と碎かれて、曉の鴈夜の鹿、何れ哀れの種ならぬ。西の一間は御佛殿、弘徽殿の繪像を掛け、中尊は釋迦牟尼佛。「佛も我も十九歳、それは衆生濟度の道、是れは戀路の闇に入り、猶三界を出でやらず、佛は心穢しと嘸見給はん恥かし。」と、懺悔に絞る花衣、苔の袂と朽ちにける。參り仕ふる者とては、中納言義兼、左中辨惟成ならで、下部の一人も置かれねば、二人水汲みあさ菜摘み、名聞離れし御遁世、戀ゆゑとこそ哀れなれ。義兼惟成御前に出で、「内々平安盛申し上げし、高房が召使右近と申す腰元、三の君に似たるよし、則ち高房猶子となし、御徒然をいさめん爲、安盛今宵御庵室へ、密かに伴ひ申さん由申し越し候。若き女の男の中、女の連も候はでは、初々しくも頑にて、却つて不興と存ずれば、京の御所より女嬬か

譯が悪いぞえ、怖い事はないわいな、ござんせなア。」と小手招き、鬼の癡話かと氣味悪し。安盛怖々ながら、「さいふは坂田公時な。我は天子の御使下郎の傍は穢らはし。いふ事あらばそれから申せ。いはれぬ處へ出しやばつて、傍杖に逢はん不便や。」と顫ひ〳〵も口減らず。公時堪らず暴れ出でて、前なる軍兵引摑み、取つては投げ〳〵、安盛を中に引立て引摺り出し、欄干にどうど打ち付け、「やい譃吐め、綱が討手の敕諚とは、何の王樣の敕諚ぢや。日本の王樣の仰せでないは、たつた今賴光禁中で聞かれた。大がたりのもがりめ、此の公時は閻魔王の敕諚にて、おのれらが討手に向うた。地獄で手間の入らぬ樣に、粉に碎いてやるべし。」と、元首押へて胴骨を、「えいやうん。」と踏み付け〳〵さいなめば、「ア、痛や苦しや、免してたも公時、僞りとはいひながら、帝戀慕の御歎きいさめん爲の忠節、證據は此處に御文もある。さりとては過つた免してくれ。」と泣きければ、保昌渡部縋り付き、「假にも天子の御使、敕書を懷中せし者に、足をあつるは後日の越度。あやまるからは許してやれ。」と、漸うにもぎ放し、「サア歸れ。」と引立つる。命拾うて安盛は足早に立ち退きしが、立ち歸つて大音上げ、「宸筆の敕書を持つたる人には、三公だにも下馬する作法。賴光が郎等共、敕筆の御文を土足にかけて踏んだる事、只今直に奏聞す。詞を番うた諍ふな。」と言ひ捨てて引き返す。公時、「其の頤引裂かん。」と、飛んで蒐るを綱保昌、「洛中變化の騷動に取混ぜて事やかまし。まづ鎭まれ。」と制すれども

殘つて、我に恨みを爲ししよな。微塵に碎いて捨てんず。」と天を睨み大地を踏み、身を揉み猛り廻れども、翼なければ虛空も飛ばれず、怒れる眼に怒りの淚、嶺に夕日に夕立の、雨を濺ぐが如くなり。斯かる處に平安盛、平家の一族五百餘騎、橋の兩岸追取り卷き、「やあ〳〵それなるは渡部綱、宣旨なるぞ承れ。高房の娘三の君、帝より召さるゝ處、遮つて是れを押へ、剰へ失ふ段、朝家を輕しめ奉る罪科によつて、搦め捕つて參らせよとの綸言、違背に於ては首討つて曝せとの御事なり。恥を思はば腹を切れ。」と、弓杖突いてぞ呼ばはりける。綱は莞爾と打笑ひ、「やれ〳〵嬉しや。相手欲しう思ひしに、平家の大將安盛とや。それこそ綱が口舐めずり。變化より先づ己を。」と跳り出づれば保昌、「やれ待て渡部、平家にもせよ敵にもせよ、宣旨とあれば敕使なり。上へ對する朝敵といはれては一大事、先づ穩便に引き取つて、負けて勝つ思案もぞ。靜まれ。」と制すれども、「いや〳〵聞かぬ。」と驅け出づる。安盛は勝に乘り、「縛れ括れ。」と下知をなす。三方論議の眞中へ坂田公時、例の大太刀前下りに指しほらし、のつさ〳〵と歩み來る。安盛はつと色違ひ、肩身を萎め軍兵の、中に屈んで隱れけり。公時は橋板も踏み拔く許り立ちはだかり、「たつた今まで此の處に平安盛が見えたが、掻き消す樣に失せたるは、是れも變化のわざなるか。變化を斬るは綱が獲物。又人間のぶう〳〵を、捻り殺すは此の金時が好物。何處へ失せた。」と睨め廻し、「ヤア其處にか、これ此處へござんせ盛樣。それは

渡部綱平井保昌、息を切つて馳付け、「われ〳〵兩人少將殿の御館へ參りし處、姬君御入なしとある心元なさ、是れまで迎ひに來つたり。廣綱は手を負うたな、エ、いひ甲斐なし卑怯千萬。盜賊の業か口論か、語れ聞かん。」と睨め付くる。「卑怯とは情ない。平安盛三の君を奪はんとの催し。樣子はゆる〳〵申すべし。それ吉平次姬君を兄貴へ渡せ。保昌殿御苦勞。」と一禮そこ〳〵姬君も、「怖いやら悲しいやら、一期の憂い目見たぞいの。そなた衆に逢うたれば、胸の跳りも靜まつた。早う館へ連れて往て、少將樣に逢はせてや。大體撫でて貰はずば、お腹の痞へは下りまい。」と、言ふも笑ふも戀なれや。「お道理〳〵、いざ此方へ。」といふ雲の、俄に天地震動し、綱保昌が姿は其の儘鬼神となり、姬君を搔き抱き飛び去らんとする處を、「南無三寶。」と吉平次、打物拔いて切り拂へば、廣綱も一世の大事、疵も忘れて打ちかくる。雲霧に眼眩み腕弱り、切つても突いても水を切り、風を切るが如くにて蹈みも溜めず欄干に、「うん。」というて反り返れば、鬼神は姬を引摑み、惡風吹きかけ焰を降らし、虛空にどつと笑ふ聲、雲に殘りて失せにける。雷鳴騷ぎに綱保昌、あはやと驚き驅け付け見れば、廣綱は朱に染み、吉平次ものた打つて、三の君はましまさず。漸う二人を呼び助け、事の樣子を尋ぬれども、「變化の所爲は力に及ばず、無念〳〵。」とばかりにて、言舌正しからざりける。「扨こそ。」と下人を添へ、二人を木陰へ介抱させ、綱は怒つて齒ぎしみし、「エ、口惜しや保昌、必定これは羅生門の執心

つて指し上げ、「こりや〱〱。」割木の中へ投げ込んで、「ヤレ吉平次怪我があろ、つれまして他へ寄れ他へ寄れ。」と言ふ所へ、爰かしこの割木の陰より、十人許りむら〱と、手ん手に割木提げ〱追取り廻す。「ハア、知れた〱。扨はうぬ等は平安盛が郎等ども、町人の行き懸りに紛らし、姫君を奪はんための喧嘩の仕懸と、見た〱三田源八渡部綱が弟、汝等では相手に足らぬ。安盛は何處にある。姫君のお供なれば、隨分蟲を殺して太刀刀は抜き放さぬ。汝らに振舞ふものがこつちにある。櫓持ち出し肩すかし、負投げ懸投げ腹櫓。」と、尻引褰げ四股を蹈み、朱に染みたる前髪は、赤熊の如く打亂れ、大手を廣げ、「ヤァ勝負、いざござれ。」と喚きしは、只雷電の如くなり。「オ、よい推量、平安盛。三の君を置いて往け。」と打ちかくる。敵は八方我が身は一人、同じく割木おつ取つて、てつへいそつぱう肩骨胴骨天窗の鉢、割木限り腕限り、打ち合ひ〱投げ合ひしは、風に揉まるゝ古家に、こけらの散るが 三重 如くなり。源八獅子の勵みをなせども、嵩に懸つて打ちかくれば、「もう斬らねばならぬ。」と、するりと抜いて馬や總五が胴骨ぐつと指し通せば、「うん。」と許りに死したりけり。「すは切つたわ。」と、呼ばはる聲、吉平次たまられず跳り出で、眞先に進んだる矢島傳平が片腕どうど切り落し、にげ足したる大勢を、二人が中に追取り込め、太刀と割木の金剋木、火花を散らし 三重 切り立つる。此の勢ひに怺へずして、北へ走り南へ飛び、聲も高き橋も高き、闇を分けてぞ逃げ失せける。

見れば、おまん可愛やな布晒す、な布晒す。コリヤお上臈何處へ、夜道をござるは戀ぢやの〳〵。戀人は誰か知らぬが、此の鼻が鳥渡相しようかい。」と縋り付けば、「ア、うるさ。」と、そつと除けば又纏れ、「しんぞ其の風堪らぬ。」と、抱き付けば引外し、取り付く處を吉平次腕とつて跳ね除け、「これ眼つぶれ、此の女中は忝くも、汝が小錢で買ふ樣な賣物でない。ほでてんがうかわかずと、通れ〳〵。」といひければ、「わりや此の女中の附者か、盲目め、身を鉢坊主と思ふか。通れとは通るまいが何とする、サア何とする。」と仕懸くれば、吉平次も大事の供、怺へて見れども堪られず、「オ、是れで通して見せんず。」と、拳を固め目鼻の閒割れて除けと丁ど打つ。「ヤおのれに打たれて居ようか。」と、松の木腕を振り廻す、手頸を取つて振り放せば、突蒐り捻ぢ合ひ摑み合ふ處へ、綱が弟三田源八、吉平次許りは氣遣はしと、御跡慕ひ來りしが、遙かに見付けゆらり〳〵と立ち寄つて、相手の肩骨ひつ摘んで引き除け、「これ若い人、此方を見れば女中同道、おぬしが叱つて手柄にもならぬ事、殊に少しこちらに酒氣もあるさうな。參りかゝつて男が扱ふ、堪忍してお通りやれ。」「イヤ馬鹿め、身體自慢に人らしい、扱ひとはほんの男の出入、わい等が知るこつちやない。」と打つてかゝる、小腕むずと摑んで得手物、「ヤ、これわいな。」腕車にどうど投げたりけり。橋詰に積んだる割木の木陰より、馬屋の總五杵の割木押取りのべ、源八が眞向欺し打、二つになれとはつしと打つ。打たれてひるまず、總五を取

らぬえ。唄にも唄ふ聞きやらぬか。」と、恥ぢしめ恨み給ひける。保昌横手を打つて、「何と渡部、姫君のお咄は正八幡の御託宣、遲なはる處でなし。思案は無いか。」といひければ、「オ、思案というて姫君を、鳥飼殿の御館へ入れ申すより外はなし。御分と我との爭ひは、根も葉もない內證事。お手前賴む少將殿へ參つて表向の御儀式は追手の沙汰、今宵密かに渡部が家來を付け、此方より姫君を送り參らせんと、申してくれたら滿足せん。」といひければ、「ハテ此の上臈を內裏へ上げ、安盛めに威を付けては我が君の御恥辱、何れも我が身に係つた事。然らば我は驅け付けん。被衣などといふ物は、御所めいて人目に立つ。びらり帽子か綿帽子、町風に出立たせ、一足も早く送られよ。先づ奥へ入れ申せ。渡部が叔母が又來たとも、毛の生えた鬼の腕姫君には一本もなしと答へ。」と戲れて、あふり打ち立て

三重打ち寄する、岸の漣玉走る、誰か堀江で水高き、矢を射るごとき川の瀨を、戻橋とは付けぬらん。川岸に積みたる材木の、中に薪は交れども、火の氣なければ暗き夜に、思ふ殿御に逢ひに行く、姿ぞ女子一生の、つくろひもなく三の君、花紫を戴いて、びらりしやらりの町風も、帽子に漏るゝ衣の香の、娘は同じ娘にて、御所こそ色の司なれ。綱が郎黨八十吉平次、跡に續いて見え隱れ姫君の御供し、女の足の急げども、十町餘りを行き惱む、道捗行かず一條の戻橋に行きかゝる。先にのさばる懐手、肩で切る風ばかくさく、身の程知らぬ高聲も、たつみ上りに皺枯れて、「唄高い山から谷底

人した其方の極め覺えがあらう。二日も三日も手前から、萬事取持ち肝煎るは仲人の役ならずや。今日で十日に餘れども、何の便宜おとづれなく、父上は腹を立て使を越しても門を閉ぢ、取次ぐ者もないとある。コレ世間の娘に問うて見や、十六七になつてから、嫁入を急ぐか急がぬか。急かぬ娘があつたらば二つともない首賭。少將樣も若い殿、驅け出る馬を駐める樣にお心も急かうし、我も思ひの溜り水身も涌き出づる池水に、人目堤の切れ口は、いかな止めても押へても、思ひ流すに流されず。サア返答聞かん。」と仰せける。渡部も至極に詰り、「御尤も千萬なり。さりながら當時羅生門の變化を討ち、三七日の物忌に引き籠り、出仕をさへ仕らず。殊に常陸介安盛と源平武勇を勵む時節、不覺の批判受け候へば、源家の油斷と身を愼み、御祝言の御挨拶日限までも延引。追付首尾なし申すべし。聊か如才是れなし。」と、いひも敢へぬに、「ア、おきや〳〵、如才なしとはいはれまい。自らは弘徽殿の女御樣に、似たとやらん叡聞にて、未だ祝言せぬ内に大内へ召されんとて、平安盛お使只今館へ來る故、我も乳母一人連れ、やう〳〵と逃げ出でたり。今宵の内に嫁入せねば、明日は内裏へ召さるゝ筈。其の褒美には賴光の官職を削り、安盛を鎭守府の將軍になさるゝ由。我々思ひかなはぬのみか、源氏の引けといふ物よ。斯かる大事のありとも知らず、朋輩喧嘩の保昌も保昌。是れは如才であるまいか、いや油斷ではあるまいか。如才ない〳〵と口で許りは小兒もいふ。唄さんさ如才はござ

けば保昌は、振り放さんと捩り引く。「留まれとまれ。」のうなり聲、「叶はじもの。」と怒る聲、磯の松風岩打つ波、*兩頭の大蛇が常山の山の腰、きり〳〵と卷き締めて頭を竝べ引き合ふも、是れには爭で違ふべき。兵庫鎖の白銀づくり、筋金蛭金鎬の金返り栗形裏がはら、中は如何なる名作の、干將莫耶ござんめれ。鞘と一つになひまぜの、繩になさんと左へ捻ぢ、卷かれじものと右へ捻ぢ、えいや〳〵の力聲、太刀の帶取寛ぎて、飾りの金具緩ぎ出で、からり〳〵からり〳〵と鳴る音は、*諸漏已盡の大阿羅漢、神通力を試さんと、須彌山を動かす時色界に風起り、四王忉利の大伽藍、百億の寶鐸、那由他の羅網、八萬恆沙の瓔珞華鬘、雲居に散つて鳴り渡り、響き渡るも斯くやらん、此の世に譬へん物はなし。保昌は古兵、太刀損じては惡しかりなんと、するりと拔いて帶取を、ふつゝと切つて切り放し、馬乘放しすつくと立てば、綱は鞘を持ちながら、塀の上に突立つて睨み合うたる頰魂、阿吽の仁王に異ならず、凄まじかりける勢ひなり。龍虎と挑む其の中に、段模様の染被衣、供の女が頰冠り、御所のひんぬき二人が中へ、怖氣もなくしやんと分け入る追風や、茨の枝に初花の、一輪咲きたる如くなり。兩人怒つて、「ヤア誰かある、此の女引摺り退け。」と睨め付くれば、被衣押し除け、「何と渡部久しいの。此方は音に聞く保昌の。我こそ中納言高房が娘三の君。これ渡部、其方は武士か侍か。鬼の腕は切りやらうが侍とは思はれぬ。鳥飼の少將殿と自らが祝言は、跡の二十八日とは、仲

きぞ。よい處へ能う來たなア。渡部綱が腹切るをよつく見置いて、賴光へ御物語仕れ。今生の對面是れ限り。生を變へて茨木が腕取り返し逢ふべきぞ。必ず〱其の時に變化と思うてびつくりすな、昔の好みに取つて噛もとはいふまい。」と、あくまでに廣言し、既に刀に手をかくれば、保昌大聲上げて、かつら〱と笑ひ、「やれ腹筋や腹の皮、鬼の腕を切つたるが何程の高名ぞ。それを手柄と思ふゆゑ、又奪はれしも恥辱と思ふ、エ、淺ましやかはいやな。此の保昌などは切つたを手柄と思はねば、奪はれても恥ならず。變化鬼神を鎭むるは、禰宜山伏行法の出家の加持の數珠先にて、祈り伏するも珍らしからず。弓矢取る身の高名は、鬼より怖い朝敵大敵を亡ぼし、生捕分捕ほまれを子孫に殘すこそ手柄とはいふべけれ。是れしきに腹切らう脊を切らうといふ樣な、馬鹿侍の切腹を、見て居る樣な目は持たぬ。」と引返して驅け出づる太刀の鐺を渡部、塀越にしつかと取り、「ヤアさはいはせぬ保昌、左程侮る渡部を見舞に來たは心得ず。笑はん爲か褒めん爲か、聞かでは得こそ返すまじ、留れ。」とこそは引いたりけれ。「ヤア一人武者保昌が、歸るといふを天津風、雲のかよひ路吹き閉ぢて、天地を動かす勢ひにも、とまらば留めて見よや。」とて、鯉口鐔に握り添へ、鐙踏張り乘りすゑたり。「オ、汝は聞ゆる歌人にて、大内にての花盜人、華奢風流の口吟み辯舌は利いたりとも、鬼神を取挫ぐ渡部との力づく、ちつと慮外。」と夕闇の、「羅生門にて我が兜の、まつかうこそは引いたれし。」と、しやくつて引

事羅生門にて鬼神の片腕切り取り、三七日の物忌に籠り候へば、門外にて拙者承り帳に記し、一門他門共に對面仕らず。然るに一昨日渡部の叔母、久しく逢はざる懐かしさ、ゆかしい戀しい抔とて、七十に餘る身がさま〴〵歎き恨みしを、變化の業とは思ひも寄らず、恩愛捨て難く門を開き對面せしに、忽ち悪鬼と顯はれ腕を盗んで天井より、あれ御覧候へあの如く、破風を蹴破り黒雲に入りて失せ候。綱は是れを無念に存じ切腹のお暇申すか、一期の浮沈と籠居の節。帳に留め置き後程申し聞かすべし。近頃無禮千萬。」と、慇懃にぞ述べにける。保昌破風を屹と見上げ「ム、ウ聞きしに違ひなかつしな。去りながら鬼の腕を取り返され、それが無念な口惜しい、切腹せうといふ樣な、不覺人の渡部に逢うて何の用もなし。左樣の男子と知らずして、馬の足費して、見舞に來たる保昌まで、不覺者と人や見ん、門に立つも穢らはし。」と駒引き返し、歸らんとする處に、「待て〳〵保昌用がある。」と、聲をかけて渡部塀の上に突立ち上り、「ヤア珍らしい保昌、御邊と某御前にての爭ひゆゑ、其の夜羅生門にて鬼神の腕を切つたる事、定めて音にも聞きつらん。三七日の物忌過ぎば、鬼の腕を御邊が頬へ投げ付けんと思ひしに、口惜しや腹立や、化生の業は力なく、やみ〳〵と奪ひ取られ、渡部程の武夫が、鬼神退治の證據を失ひ、表裏者の名を取らん、弓箭の恥辱爲方なし。人間業にて此の無念晴らさん事かなひ難し。某も腹切つて、共に變化の鬼神となり、二度腕を取り返し、御分が眼に晒すべ

は申すべけれ。いまだ契約ばかりにて、親の家を出でざる女、何條事か候べき。殊に仲人渡部綱、羅生門の鬼神を斬りし愼みとて、物忌に籠り、傍輩の對面も仕らぬと承る。然れば祝言の日限も延び〳〵と覺え候。これ屈竟の折柄、仕おほせて參らせん。」と、勸め申せば主上も、「しるべ嬉しき戀の山、ふみ通ふべき架橋せよ。」と、宸筆もこま〳〵と艶書遊ばし、「此の度の恩賞は望み次第。」と宣旨ある。安盛烏帽子を地に付け、「只今源家繁昌にて、滿仲より賴光まで、鎭守府の將軍に任ぜられ、平家はあれども無きが如し。此の御使仕おほせなば、賴光が將軍職を某競望仕らん。最早夜も更け候ひなんず、宿所へ歸らず、是れより直に參らん。」と、御文賜はり上書見れば、上々とても癡話文は、別にかはらず、「樣參る、身より。」とばかり薄墨に、御筆立の堆高さ、御文體までさぞ〳〵と、思ひ梨地の御文箱、蒔繪に照りし桐菊の、「丸が思ひは深けれど、人は情も朝霜に、おきまどはすなと傳へよ。」と、常寧殿に入りたまへば、主殿司の宿直守、御格子參る。三重　扨も渡部綱は、假初の人の詞の爭ひに、羅生門に行き向ひ、茨木童子が腕切り取り、三七日の物忌に、門戶を閉ぢて愼みし、武勇のほどこそ由々しけれ。一人武者保昌は、綱が徒然尋ねんと、舍人馬添只一人、肌に腹卷二月や、空も朧の月毛の駒、門前に手綱搔い繰り、「平井保昌お見舞ひ申す。物まう。」とぞ呼ばはりける。門を堅めし堤の彌惣、唐居敷を飛んで下り、地に鼻をつけて、「お出での由申し入るべく候へども、主人綱

の公卿も程遠く、御いらへ申す人も無かつし所に、常陸介平安盛瀧口に候ひしが、「安盛。」と勅答して御庭に跪く。「近う〳〵。」と間近く召され、「汝は武士の身なれども、桓武天皇の御裔末、雲居を出でて遠からず。物の情は知るべきぞや。弘徽殿に露程も俤似たる女あらば、尋ね出して我が思ひ、晴らせよかし。」とばかりにて、又御涙にくれ給ふ。安盛謹んで承り、「さん候中納言高房が娘三の君は、容顔こゝろばへまで、弘徽殿に見かはす許り似たる由、御所中の取沙汰、叡聞にも達し參らすべし。此の頃承れば鳥飼の少將、彼の三の君を戀ひ慕ひ、源頼光が郎等渡部綱を仲人に頼み、近々に婚禮取結ぶとは申せども、普天の下王土に住んで、勅諚と申さんに誰か違背仕らん。安盛不肖の身なれども、御文一つ賜はつて、彼の姫に與へ父母に申し聞かせなば、今宵の中に伴ひ參り、弘徽殿の御忘れ草、宸襟をやすめ奉らん。」と、忍びやかに奏すれば、主上の仰せありけるは、「いざとよ三の君が弘徽殿に似たるとは、豫て我も聞きしかど、渡部綱が仲人にて、鳥飼の少將に見ゆるとな。然れば主ある女ぞかし。おりゐの後は例もあり、在位の身にてまさなき事、上一人の善惡は下萬民のかゞみぞや。後代の譏りも恥かしし、此の世の戀さへかなはぬを、まして冥途の人、戀しき思ひは如何なる思ひぞ。」と、十善天子の御身にも、世をつらしとの御述懷、戀路の習ひわりなさよ。安盛重ねて、「宣旨恐れ入り候へども、去りながら一夜も夫の家に入り、夫婦枕を竝べてこそ、主ある女と

傾城酒呑童子

第一

*千度看れば千々の意密し、一度見るに一つの憐い事深しとは、張文成が仙女に契りし辭、日々に衣寛び、朝な〳〵に帶緩ぶ、悲しみの腸きざ〳〵に斷つとは、文成が仙女に別れし恨み、天上下界なほ戀慕の圍みを出でず。況んや心を種として、和歌に和ぐ日の本の、色香に染める梅櫻、花山の帝と申すこそ、みやびやかなる御本性、艶やかなる御容、潘安仁が母方の甥にもたとふべかんめれ。女御後宮數多候その中に、大納言爲光が娘恒子の姫、一朝に選ばれ弘徽殿を御局にて、比翼連理の御語らひ、三千の寵愛只一人、六宮の粉黛も色を失ふ日陰草、其の嫉み草身に生ひて、遂に病の牀の内、短き夢と消え給ふ。帝不覺の御歎き、朝政したまはず、雲の上何となく忌々しげなりければ、月卿雲客せめてはと、弘徽殿の御姿、繪に寫して奉る。容はありしに似たれども、物言はず笑はず、中中思ひの種ぞとて、晝は夜の御殿に御涙を友とし、夜は南殿の月に御心を傷ましめ、歎かせ給ふぞ痛はしき。折節帝は萩の戸の、御階にすご〳〵下りさせ給ひ、「人やある人やある。」と召さるれど、宿直

以て、懸けたる繩ぞ恨むるな。」とお聲の内よりも、時致「わつ。」と聲を上げ、「ナウ伺候の大名小名秋津島を海に譬ふれば、雫ほどもなき數ならぬ時致が、親の敵討たずんば、日本の大將軍頼朝公の御手より繩をうけ、斯かる情の御詞を聞くべきか。父河津精靈、先だちし祐成も、いか許り悦び奉らん。哀れ今一度生まれ變り、御馬の先にて討死し、此の御恩報じたや。三寶佛陀も憐み給へ。」と、聲を揚げて泣きければ、滿座の諸武士感涙し、鬼を欺く朝比奈も、「羨ましや時致、果報ものよ時致、有り難の我が君や。」と獻り上げ／＼、涙の中の悦びは、理とこそ聞えけれ。和田秩父千葉上總、「心あらん者共は繩に手をかけ結縁せよ。御立ちざふ。」と呼ばはれば、御門に控へし虎少將、母を誘ひ走り入り、君を禮し時致が繩に縋つて悦び泣き、門にお馬のいばふ聲、假屋の木戸も明七つ、谷七郷の鎌倉へめでたく還御成されける。今日一日の十二時、／＼、積り積つて百千年、盡きせぬ源氏の繁昌こそ、民安全の國土なれ。

曾我會稽山 終

居ぬからは、未來へ參つて奉公せい。それ〳〵暇。」と宣へば、時致謹んで頭をさげ、「明らかなる御政道、先だちし祐成さぞ有り難く存ずべし。去りながら胤こそ替れ兄は兄、命召されんをまざ〳〵と見てゐんも不仁の至り、助命願ひ奉る。」と思ひ込んで言上す。「時致に免じ命は赦すぞ、剃りこぼつて追ひ拂へ。」「承る。」と朝比奈、「剃刀も刃物の內、汝に當てるは穢らはし。義秀が手剃刀戴け。」と髮くるくると手にから巻き、一引ぐつと、「あ痛たゝ。」「オ、痛い筈。一引が千僧供養、二引を萬人の物笑ひ、鳥の毛を引く芥子の花もぐずんぼろ坊主、*ねつたい坊主鉢坊主、是れがお寺の長助。」と、笑うてこそは追ひ立てける。時致五郎丸を引き起し、三間許り取つて投げ、「申す事も是れ限り。今生に用なき男、サア寄つて繩掛けられよ。」と、後手に成つて待ちければ、雜色共はや繩持つて立ち蒐る。「ア、暫し〳〵。」と御聲を懸け給ひ、「日本無雙の兄弟助け置きたき者なれども、兄祐成が討たれし上は、助かれといふともよも助からじ。賴朝が父義朝を討つたる長田莊司めが首、討つたる時の嬉しさは、平家の一門の首百千にもかへざりし。彼等が今日の心の喜び、命の何か惜しからん。國の憲法是非もなし、鷹岡へ引き出し、今生の暇取らせよ然りながら、一騎當千の兵、雜兵に繩掛けさせんは、弓矢の冥加も恐れ有り。賴朝が繩掛けん。」と、忝くも御大將白洲に飛びおり、眞紅の總打つたる御鎧の總卷取つて押したぐり、「賴朝が右の手には西三十三ヶ國、左の手には東三十三ヶ國、六十餘州の力を

家の總領。あはれ此の一法師が手に渡り、討死せばやと存ずる所、是れなる五郎丸薄衣被き、捕つたと言うてしつかと抱き付きし、頭付は童なり是れこそ一法師ごさめれ、望む所と嬉しく易々と搦められ、今の千悔萬悔。己とだに知つたらば、蹴殺して捨てん物、よし〳〵申して詮なき事。とく〳〵首を召さるべし。」と詞涼しく言上す。五郎丸聞きも敢へず、「ヤァ生まれた跡の早め藥、口許りの廣言言ふな〳〵。既に我が手に入つたる時、一代一世の力を出し、捩ぎ放さんと足手を踠き、許せ〳〵と大聲上げて吠えたれども、びつくりとも動かせず、取つて引き締め縄掛けたを忘れたか。由ない口を聞く手間で念佛申せ。」と冷笑ふ。五郎くつ〳〵と吹き出し、「心有つて懸つた縄、己が力で懸けたとは體より口の廣い奴。とても死なんず命、よしない力身なれども、時致が僞りと君の思召し、諸大名の蔑みも無念なり。おのれが力に搦められぬ證據是れ見よ。」と、筋骨に氣を込め一搖り搖つて、「えいやうん。」とはつたる、高手小手の縄ふつゝ〳〵と切れたるは、三歳の童が燈心切るより易かりける。飛び掛つて五郎丸を膝の下に取つて引き伏せ、「ヤァ夜前汝が力にて搦めたが定ならば、ま一度御前で搦めよ。」と胴骨を膝節にて、ひしげて退けと押しければ、聲は出でず兩眼に、溢す涙は雨やさめ。油を搾める如くなり。斯かる所へ朝比奈三郎、小猫を提げたる如くにて、京の小四郎が細首撮んで驅け來り、御前にどうど打ち付くる。賴朝御覽じ、「汝は親兄弟に逆らひ敵に組せし無道者。此の世に祐經が

が立ち戻り、「もし異議に及ばば摑み殺して捨て申さんか。」「否々問ふべき仔細有り、殺す事は無用無用。」「はつ。」と答へ立ち出でしが又立ち歸り、「然らば死なぬ程に、骨々ほつき〳〵捻ぢ折つて參るべきか。」「オ、其の段は兎も角も。」と宣へば、「アイ忝い、コリヤ面白からうぞ。」と小躍りしてぞ入りにける。賴朝重ねて、「日も長けなば、鎌倉入明日に成る。路次の經營もいかゞなり。相殘る訴へは鎌倉にて聞くべきぞ。先づ時致を引き出せ。一目對面せん。」とぞ仰せける。お次に控へし御所五郎丸、時致が繩引き立て御白洲に引きすゑ、「兄弟狼藉の餘り此の者の御寢所近く切り入り、御命危かりし所某難なく組み留めて候。」と嚴しげに言上す。五郎威丈高に成り、「ヤア御尋ねも無き口上だて。時致言上する事有り、耳を澄まして能く聞け。」と、御前の方を振り仰のき、「恐れ多き申し條にて候へども、弓馬の家に生まれて親の敵を討ち候事、僻事とも狼藉ともよも御不審は候まじ。只今召し出されしは、御所の假屋へ切り入りし御咎め候な。時致も好む所には候はねど、折り合ふ兵頭はりに逃足強く、一人も手に立つ者候はず。御所の内にはよき武者ぞ宿直しつらん。功有る武士に出合ひ、討死せばやと奥深く切り入り候所に、扨々當代のきれ者は化者と功なる武士。以前我が君討つて出でさせ給ふ音、年にも足らぬ大友の一法師が、御物具に縋つて、曾我兄弟鬼神なればとて、御手を下されんは源氏の御恥辱。殿原に仰せ付けられ候へと諫言申すを、遙かに聞き、萎らしや優しや流石大友の

混亂仕り候。後日の御咎めを恐れ言上仕り候以上。月日。」賴朝大きに御氣色損じ、「住持が訴へに限らず、隱目付の者共宵に耳へ達したり。蒲の入道が切腹も相手は景高と聞く。鎌倉に於て急度詮議相遂ぐべし。夫れまでは和田義盛に預け置くぞ。」と宣ひも果てぬに、平次景高、「此の儀は段々申し譯。」と言ふ所を、朝比奈三郎義秀、小腕を取つて捻ぢすゑ、「言分あらば追つての事、今日から親父が預りぢや。北の丸で榛谷が朝食の相伴に、汝が頰をはり殘して殘念。」と、四つ五つはりこかし羽搔締に引縛り、家來が手にぞ渡しける。廣元一通又取り上げ、「曾我兄弟が種變りの兄、京の小四郎恐れながら言上。右祐成時致豫々の企て承り及び、數度意見に及び候へども許容なく、御狩場の狼藉至極、上を憚らざる次第恐れ入り存じ奉り候。是れに依つて老母並に大磯の虎化粧坂の少將と申す遊女、兄弟一味の者共以上三人搦め置き申し候。私同心仕らざる所聞召し分けられ、御褒美頂戴仕り候はば、有りがたく存じ奉るべく候以上。」君御顏色損じ、「憎い京の小四郎が訴狀。よつく當代を詮議暗しと見立てしな。兄弟が力に成る程こそなくとも、祐經が內通の犬と成つて、老母の方へ入り込みしと言ふこと、賴朝聞かで有るべきか、言語道斷諸人の見せしめ。老母二人の遊女急いで繩を許し、取手の者共しやつめ召捕り來れ。」畏まつて罷り立たんとする所を、朝比奈三郎又つゝと出で、「何の彼奴めに捕手の者。我等に仰せ付けられかし。」「オ、兎も角も。」「忝し。」と立ち出でし

小柴垣を破り逃げ候砌、竹のひつそぎにて左の眼突き潰し申し候。但し自身の怪我の由口上。」次を讀まんとする所を、賴朝「暫く〳〵、悉く聞くに及ばず。鬼神なればとて兄弟二人に見苦しき働き。假令薄手かすり手負せたりとも、打ち留めずんば高名に有るべからず。末代の批判諸家の恥を殘すに似たり。」御前に於て是れを引き裂き捨てらる、大智の程ぞ尤もなる。次の一通押し開き、「伊豆國の住人仁田四郎忠常恐れながら言上。一、二宮太郎安清專ら忠義を存じ、曾我兄弟が緣者たるを恐れ、女房を離別致し、猶以て祐成所存を察し己が名を隱し、某が假名を致し、祐成を喰ひ留め申し候きざみ、横合より折り合ひ首を取り申し候。某此の度の高名は全く二宮高名にて御座候。此の旨御披露願ひ奉り候以上。月日。」賴朝大きに感じ給ひ、「鎌倉の早打時を違へず重々神妙の仕方。親殺し主殺しの外一家に祟る法はなし。女房も以前の如く相具し、兄弟が老母介抱等少しも憚るべからず。老中此の旨沙汰せられよ。扨仁田四郎が高名は今に始めぬ事ながら、ほまれを他に讓つて身を謙る勇者、感じても餘り有り。恩賞は鎌倉にて計らふべし。次は〳〵。」と宣へば、「恐れながら言上。拙僧義は、藤澤寺の住持瑞阿上人と申す者にて御座候。今晝時分工藤左衞門祐經殿家來、近江小藤太と申す仁まゐられ、梶原平次景高殿仰せに候間、日中九つの鐘を差し置き、八つに撞き申すべき旨申されし候ゆゑ、叶ひ難きよし申し候へば、拙僧を初め寺僧ども殘らず搦め、自身鐘を撞き近在鄰鄉刻限

き富士の嶽、曾我兄弟が會稽山、骸は裾袖に埋めども、譽れは三穗の松の風、他の國まで吹き傳へ、昔語を今の世の、人の眠りを覺しける。

第五

*運闕三百六十輪、天運三千六百周、賴朝卿の武運に和し、御狩の御遊建久四年五月二十八日、晝夜十二時に事終り、同じき二十九日の鷄鳴、梶原平次景高、朝比奈三郎義秀、御迎ひとして參上す。鎌倉還御の御供揃ひ廣廂に出で給へば、秩父北條和田岡崎、何れもお供の出立にて伺候有り。因幡守大江廣元、奏狀訴狀口書等數通御前に持參し、「是れは御狩中諸人の願ひ訴へ、諸檢使の覺え等にて御座候。鎌倉へ歸御有つて御裁許有るべく候や。但し今朝聞召し上げらるべうもや。」と伺へば、御寮聞召され、「鎌倉へ歸つては留主中の訴へも多からん。狩場の間の事共は、只今是れにて沙汰せんず。廣元讀まれよ。」との御諚にて、逐一にこそ讀んだりける。「五月二十八日曾我兄弟亂入の刻み、御家人手負の檢使竹下孫八左衞門、同じく安田三郎見分の覺え。一、太樂平馬之丞頰深疵、但し右の方なれば逃げ疵のこと。一、愛甲三郎弓手の腕、馬手の肩後疵二ケ所。一安西の彌七郎右の横腹深手 腸ずた〱に切られ、存命不定に相見え申し候。一、臼杵八郎頭を割られ卽座に討死。一、新開荒四郎

討て。」「二宮討て。」と責めかけられ、「オ、小舅の曾我を討つ刀、二宮は持ち合はせず。是れで討たれば御邊討て。」と、祐成と切り合はせし、太刀をからりと投げ出す。忠常おつ取り提灯に透して見ればこは如何に、物打より切先まで刃を石にて叩き潰し、打ちみじやいだる槌同然。「ム、最前より此の太刀にて打つ眞似したるか。アッアたのもしとも優しとも、弓矢取る身の手本ぞや。雜言御免二宮殿。」「それこそ互惡口御免仁田殿。和殿の如く情有る友を持つたる五郎十郎。」「御分の如く誠有る縁者を持つたる曾我殿原。」「一生花實も咲かざりし。」「天運のつたなさよ。」と、二人不覺の落涙に、鎧の袖をぞ絞りける。今を限りの祐成起きなほり、「縁者と申すも元は他人の二宮殿、好みなき仁田殿御芳志は、五百生生き變り死に變るとも忘るまじ。御手に懸り討たるゝ事、祐成はなんぼう果報の者、首討つてたべ疾く〳〵。」と、いへども二人涙に暮れ、差し俯いて居る所に、御所の方より聲々に、「曾我五郎時致御前近く亂れ入り、御所五郎丸が組みとめ、御假屋安穩なり。」と、呼ばはる聲に祐成、「あれ聞き給へ時致は召捕られしとや。祐成が最期いかにと案ずべし。疾く首討つて兄が最期淸かりしと、悅ばせてたべ仁田殿たのみ入る。南無阿彌陀佛、彌陀佛。」と、首差し伸べて目を閉づる。「名ざしの上は承る。御心易かれ。」と、太刀拔き持つて後に廻り、振り上ぐれば祐成が、首は前にぞ、をち方に、早曉の八つの鐘、鳥も啼く〳〵人も泣く、ねをなく千鳥の直垂に、首よ涙よ包みても、洩れて名高

松明出せ。」と呼ばはれば、忠常が下部ども提灯取つて差しあぐる。仁田と仁田が顏さし合ひ、「ヤア二宮、以前仁田と名乘りつるは御邊よな、扨淺ましや。ヤイ兎死すれば狐是れを悲しむとは、同じ類に禍ひの來らん事を悼む事故。元緣者の端くれ、御咎めの飛ばしる懸らん事を痛み、祐成を討つて一味せぬ身の言分とは、はて能い思案。女房を離別せしは、他人に成つて兄弟が力とならん心底、尤も斯く有るべき事と感心せしに、扨は立身の爲の離別か御分別々々々。よしなき仁田呼ばはりが奇怪さ、思はず驅け合はせ、あつたら若者を手に懸けし殘念さよ。」と大きに怒つて恥ぢしむる。二宮から〳〵と笑ひ、「獼猴が帝釋天を嘲るとやら、おのれが足らざるを以て、人の大智を計らんとして、却つて愚智が顯はるゝ。二宮が曾我を討たんと思はば、今日まで何の待つべきぞ。憖か功有る男子と思ひ、名字を借つて追散らし、某他人に成つたる德、天下晴れて匿ひ置き、時節を待つて世に出さんと手を取つて、引かぬ許りにあしらへども、祐成たじろかねば爲方なし。手柄はしたし怖くは有り、二宮が聲を後楯に驅け合はせ、溢れ幸ひ指果報、あつたら若者を思はず討つて殘念などとは、義を知つた武士の言ふ事。猪に乘つて高名とする、獵師風情の言分には、過ぎた〳〵。」と、言はせも敢へず、「ヤア小舅をしとめんとする程の不仁もの、武士の情はぞんじも寄るまい。祐成が首は御邊急ぎ討つて手柄にせい。」「イヤ人に貰うて手柄にする安淸ならず。御邊討つて手柄にせい。」「イヤ二宮討て。」「仁田

我殿原、思ふ敵は祐經一人、木葉武者五十百切つたるとて何の益かある。仁田四郎が手に懸り、御勘氣の者の末孫と、獄門の恥が受けたくば、いざ來いやつ。」とぞ罵つたる。「オ、よい敵ござめり。仁田なればとて必ず勝つにも極まらず。人穴の地獄の鬼、猪杯相手にしたとは違ふべし。十郎祐成手並を見よ。」と打つて懸る。「エ、無分別者是非なし。」と閃く太刀影雨夜の星、電火を飛ばして切り結ぶ。更に勝負もなかつし所に、花やかに鎧うたる武者一人、坂東聲を打揚げ、「あら穢らはし、我が名を盜む曲者高名を貪るか。伊豆國の住人仁田四郎忠常とは我が事、見參せん。」と呼ばはつたり。祐成飛び退り、「六十餘州は廣けれども、賴朝の幕下に仁田ならで武士は無きか、あら仰々し。瘦浪人一人か二人討たんとて、彼も仁田是れも仁田にたゞしき表裏者、二人共に餘さじ物。」と打つて懸る。「ヤア跡から出て仁田とは人眞似か。祐成は討たせじ。」と、懸け隔たれば掻い潜り、打ち付くれば懸け隔て、祐成一人に仁田は二人、入り亂れて揉み合ひしが、陽に開いて打つ太刀を、後の仁田が陰に閉ぢ、受け流して裾を薙ぐ。祐成が馬手の高股膝口掛けて切り落され、弓手許りの片足立、二打ち三打ち打つ效も、百手を碎く氣も弱り、犬居にどうど轉びしが、「弟の時致はいづくにぞ。祐成こそ討たれしたれ、死出の山にて待つべきぞ。言ふ事も是れまで。サア何れなりとも首を打て、臆れたるか。」と聲懸くる。「否討手の實否紛らはしく、黃泉の障りも悼はしし。誠の仁田が面を見せ、名字盜みを面縛させん。

「伊豆國の住人伊東次郎祐親が孫、河津三郎が二人の子、曾我十郎祐成同じく五郎時致、親の敵工藤左衞門祐經を討ち留めたり。賴朝公の御内に弓取はなきか、折り合ひて打ち留めよ。」と呼ばはつて、邊を睨んで控へたり。闇さは暗し雨は降る、假屋々々に、「すは夜討。」と、弓一挺太刀一振に、五人三人取り附いて我よ人よと奪ひあひ、繫ぎ馬に鞭打つて遲しとあせる所も有り、鎧に辷り兜に躓き、小手を臑當草鞋を笠、上を下へと犇けば、御馬屋の德竹大聲上げ、「物の黑白も見えざるに、松明出せ。」と呼ばはれば、二千軒の假屋より、箙靫蓑竹笠傘帚に至るまで、火を付けて投け出せば、裾野の暗は忽ちに百千の朝日影、一度に照らす如くなり。騷ぎの中より名乘り掛け〳〵切つて出づれば、兄弟は小柴垣を小楯に取り、入れ替へ〳〵名乘り替へ、火花を散らして雨交り、揉み立て〳〵三重戰ひける。腕首切られて引くも有り、頰先肩先尻こぶた、弓手の太股馬手の足首、矢場に切られて死するも有り。されども兄弟薄手も負はず、血氣に進む時致は、假屋の人種絶さんと、御所の間近く切つて入り、祐成は柴垣の影に息をぞ休めける。假屋々々の松明も降りくる雨に打ち消され、東西暗き木陰より、緋縅の鎧著て二尺餘りの打刀、三尺五寸の大太刀横たへ、四十足らずの武者一人、のつさ〳〵と動き出で、「抑是れは先年上意を蒙り、富士の人穴に入つて地獄の底まで名を顯はし、此の度の狩倉には虎より猛き猪を乘り留め、日本無雙と譽を一天に輝かす、仁田四郎忠常とは我が事。物々し曾

さつさ、人の足音どろ〳〵〳〵、右往左往に三重もて返す。其の隙に兄弟は、敵工藤祐經を思ひの儘に討ち畢せ、門外に走り出で袂を絞つて喉を濕し、勢ひ猛に立つたりし、心の内こそ嬉しけれ。「エ、心地よい時致、年月の思ひに較ぶれば、敵を討つは易かりしな。餘り嬉しさ心急いで忘れしが、祐經に止め刺しつるか。」と問ひければ、あれ程に切る上は何の仔細か候べき。」「いやさはなし、跡にて實檢有らん時、敵を討ちは討つたれども、止めを刺さぬは狼狽へたりと言はれんは、骸の上の恥辱ぞかし。五郎如何に。」と有りければ、「尤も。」と打頷き、誰をか恐れ忍ぶべき、のつさ〳〵假屋の歩み、ぐわつた〳〵踏み鳴らして引き返し、障子襖はら〳〵と蹴放し、祐經が死骸にどうど跨り、「能く聞け祐經、一念の瞋恚に依つて敵と成り味方と成る。六根の罪障消滅し、不退の彼岸に到れよ。」と腰の指添ひん拔き、「そも此の刀は箱根にて初めて見參したる時、得させたる赤木の小刀、御邊元の主なれば鐵の味は知つつらん、只今返す受取れ。」と、右手の耳の下よりも、ゆん手へ通れと刺す程に、耳と口とを、「一蓮託生、南無阿彌陀佛。」と廻向して、元の所へ立ち歸るに、手指す者さへなかりけり。祐成待ち受け、「落ちば此の儘落つべけれども、隱れ忍んで一生を暮さんは、生きたる甲斐は有るまじ。一足にても逃ぐるとは弓矢の恥辱、殊更我々ゆゑに御生害有る蒲殿の御恩、御供申さで叶はぬ命、浪人の我々が鏞太刀と、奉公日の出の殿原が、刃を試して討死せん。」「尤も。」と、二人等しく大音上げ、

無三に切り込んで兄弟屍を晒す所存。重忠公へ一生積る御禮は、貴殿の執成し頼み入る。」と言ひければ、兄弟が耳に口を寄せ、「氣遣ひばしし給ふな。祐經は明日君の御馬の御供、それゆゑ假屋も寐靜まる。此方へ〳〵靜かに。」と、道の案内の杖柱、嬉しさ類はなかりけり。「是れこそ祐經が臥牀なり。心靜かに本意を遂げ會稽の恥を雪がれよ。」と、いと念頃の詞に縋り、「御案内の程五百生の體を燒くとも、いかでか報じ盡すべき。隨つて通路の此の割符、蒲の入道殿より密かに拜借申せしかど、御切腹の跡なれば返辨申さん樣もなし。我々が死骸にあれば、蒲殿こそ御勘氣の伊東が末の曾我に組し、反逆の族よと死後の虚名に御骸を潰さん事、御恩を却つて仇にて報ずる道理、近經殿に預け置く、然るべく賴み存ずる。」と二枚の小札を手に渡せば、「尤も〳〵近經に任されよ。主人重忠惡しくは計らひ申されまじ。老母の事もゆめ〳〵麁畧候まじ。今暫くと存ずれども、役目なれば知らぬ顏、弓矢の禮儀是れまで。」と本田は假屋に入りにけり。「今は何をか期すべき。」と兄弟合羽かなぐり捨て、「本田が教へし敵の假屋は是れなり。」と、木戸駒寄を飛び超え跳ね超え、兄弟莞爾と打笑ひ、天にも上る心地にて、難なく臥牀に討つて入る。次に臥したる宿直の侍 足音に目を覺し、「すは盜人よ。」と、呼ばはつて逃げ出づる。假屋々々に聞き付けて、「ソリャ盜人よ御立よ。」と騷ぎの上は又混亂、相圖響かす大鼓鉦、かんかんどん〳〵、「どんくさい、又雨が延びて來た、お立が降る。」と入るも有り、雨の足音さつ

なれば御假屋の傍近く、斷りもなく忍び行く。馬盜人か盜賊か、それ搦めよ。」とひしめけば、祐成騷がず、「イヤ苦しからず、鎌倉より祐經殿へ密々の御用の使。咎め立てして方々が所領の仇ばしし給ふな、疑はしくは見られよ。」と、首に掛けたる通路の割符、「是れ見られよ。」と指し出す。兩人怐り詞を替へ、「存ぜぬ事とて雜言申せし御免有れ。新開安西咎めたりとは、祐經殿へは必ず沙汰なしに賴み入る。假屋へは此の辻を左へきれ、行當りの大構へ、いざ御通り候へ。」と馬鹿慇懃のそら輕薄、結句敵の引入を仕濟まし顏にぞ別れける。兄弟遁るゝ鰐の口、虎の威を借る此の割符、蒲殿の御恩ぞと、御寮の假屋の傍近く忍び入るこそ危けれ。左右の假屋騷ぎ立ち、「お先手は發足の御觸有り、合羽は取置き腰錢を取落すな、馬よ鞍よ。」と犇けば、兄弟彌氣も急かれ、「祐經が假屋とてもさぞ有らん。是れまで忍びし甲斐もなく、此の雨の降り止む事、神明にも見放され、能く武運に盡きしか。」と拳を握り齒を鳴らし、虛空を睨んで立つたる所に、秩父の執權本田次部近經小具足に身をかため、本陣の夜廻りしてけるが、曾我殿原と見るよりも近々と步みくる。兄弟「誰ぞ。」と咎むれば、「波に搖らるゝ沖津船、知邊の磯は此方ぞ。」と、囁く聲に祐成はつと嬉しく、「重忠公の御情、又は御身の御懇情、此の度に限らねども御禮申す事もなく、禮儀知らずとや思されん。今宵年來の大望達せんと存ずる所、俄に雨晴れ假屋々々は出足の用意、此の騷ぎには覺束なし、此の儘歸つていつの時をか期すべき、無二

場の用意も事靜まる。殊には蒲の入道殿貸し給はつたる此の割符、賴朝公の膝元へも、通路自由と聞くなれば、祐經を討つは案の內。假屋には定めて遊女數多有るべきぞ、罪作りに手な負せそ。雨はいつも降りながら、今宵の雨ぞ身には染む。討死せしと聞えなば、思ひ切つたる御心にも、母の歎きはいか許り悲しさよ。」と涙ぐむ。「仰せにや及ぶべき、祐經は籠中の鳥網代の魚、やはか洩らし候べき。恐らくは此の時致天魔波旬に出で合ふとも、些とも怯まぬ魂、今宵の雨は身に掛り、ぞつこん徹つてわぢ〳〵と、物悲しう罷り成る。敵に出で合ひ働かば、所々の死を遂げんも計られず、最期の杯一つ飮うで給はれ。」と、腰に付けたる懸烏帽子に、降り來る雨を受け溜めて、祐成が手に渡せば、「なう七度結びて兄と成り、六度契りて弟と成ると傳へ聞く。死に變り生き變り兄弟の緣は切るまじ。」とさらりと干して指しければ、時致とつて押し戴き、「兄は親にて候へば、母上の御杯も是れに籠り、天の甘露仙家の漿、此の酒に勝らんや。」と、受けては飮み〳〵、降りくる雨は恩愛の、親と妻との血の涙、親子夫婦の血を飮むと、思ひ知らぬぞ哀れなる。五月雨の一頻りをだやみて、空さりげなく淸々と、北斗の光鮮かに晴れ渡れば、安西彌七郞、新開荒四郞、旅裝束に下部を引具し、「雨も晴れて候ぞ。君は明日五つの御發駕、先手は追付けお立の御用意。」と、呼ばはらせ打つて通る。兄弟はつと顏見合はせ、「此の騷ぎに亂れ入り、討つて本望達せん。」と、袖摺り違へ驅け通る。「コリヤ〳〵何奴

夫の大望母の歎きを止め給へ。慈意妙大雲、澍甘露法雨、怖畏軍陣中、念彼觀音力。」と、虎少將が小指を喰ひ裂き、流るゝ涙諸共に、袖に浸して虚空に散らし、一身五體に汗を流し、足を蹐て肝膽碎き天を禮し地を拜し、祈る心ぞ無慙なる。諸天も感應過たず、晴天忽ち常闇と、虚空に閃く電光、足高山に雲覆ひ、涙の雨を誘ひ來て、俄に降りくる雨の足、篠を亂すが如くなり。人々嬉しさ有り難さ、濡るゝも厭はず伏し拜み／＼、御本望の末頼もしく、袂を母に打覆ひ、狩場の方へ焦れ行く。されば五月二十八日に、今の世までも降る雨を、虎が涙や少將の、夜の雨とも 三重 名に高き、富士の裾野の御狩の御遊、鎌倉の騷動にて、急ぎ歸御有るべしとの、時刻も雨に事延びて、假屋の騷ぎもいつしかに辻の篝も影薄く、晝の疲れの手枕に、短き夜半を鐘の聲、夢より夢を結びける。時節よしと曾我殿原、鬼王兄弟を故郷へ返し、出立つ祐成が裝束は、母上より賜はりし、秋の野に草盡し縫うたる練貫の單衣、村千鳥の直垂の袖を結んで肩にかけ、黑鞘巻の太刀を佩き、竹子笠の紐強く、上に下部の靑合羽、陣松明に道照らさせ、先に進めば五郎時致、是れも母より賜はつたる、白綾に鶴の丸縫うたる袷衣、揚羽の蝶の直垂赤木の柄の腰差、別當より賜はつたる、源氏重代友切丸肩に打掛け紙合羽、しめたる笠の怯れじと、跡に續いて出立つたり。「いかに時致母の御恩を徒らに、今宵敵を討たずんば、不孝といひ世の人口、生きたる甲斐も有るまじきに、天の惠みか降る雨に、御寮の御立は延引す、狩

い。五月雨は五月の雨、一日過ぎれば六月よ、今宵は二十八日の五月の雨はなど降らぬ。月日に僞り在すかと、勿體なや天道まで恨み申すも此の母が、命の情ない故ぞかし。空目して死なせてたも。刃物たもれ。」と縋り付く、其の手を直に抱き付き、三人一所に顔見合はせ、思はずわつと聲を上げ、悶え焦れて歎きしが、「少將樣何と思召す。雨さへ降れば明日五つの御立とや。其の間には御兄弟御本望は必定。お二人の名を下すも、名を上げるも雨一つ。夫を慕ひ石に成つたる女も有り。身こそ賤しき流れの女と成りたれども、一念は誰に劣らうぞ。天道地神龍神も、流れの女は守るまじとの誓ひもなし。命にかへて天道へ雨を祈る志、其方は何と。」「オ、我とても其の通り、死ぬるに二つの道はない。サア／＼早う。」と勇み進めば母君も、「賴もしき心ざし思ひ込うだる念力、天道納受なからんや。我も共に。」と立ち給へば、虎御前中に立つ心の疑ひ夏草を、結んで幣と禮拜し、眼を閉ぎ心中に、「南無や三島の大明神、傳へ聞く古曾部の能因法師、苗代水にせき下せ、天くだります神ならば神と、詠ぜし歌は國土のため。日の本照らす日の御神も、*雨寳童子の御名は普き天の下、咎めて陳ねし大和歌例もふりし雨乞の、小野小町も女なり。我も又女なり、三十一文字は陳ねずとも、妾が僞り無き心、百首千首の和歌と成つて、感應の雨を降し願ひを叶へおはしませ。日頃信じ奉る普門品の天龍八部阿修羅、迦樓羅、緊那羅摩睺羅、其の外南海下界の龍神、二人の願女が一身の血を絞つて雨となし、

に思うても御運の悪い御兄弟、お知人に成らねどもお袋樣もおいとしい。こなさん達お二人の心が察し遣られて、私や涙がこぼれる。さりながらくい〳〵と思はんすな、來らぬ時節は是非がない。私も運が悪いわ、まあ二三日狩場に居れば、白兎の子貰ふ物、何も時節と思はんせ。もう別れんす其の中え。」と、大事の咄ひつ摘み、しどけ中ばに言ひさして、駕籠を早めて急ぎ行く。母君堪へ兼ね轉び出で、「龜菊とやらんの咄聞きました。オ、其方衆も悲しい筈、母が心も推量あれ。言ふ事なす事ぐりはまになる曾我の運、存へて幾何の憂目をか重ね見ん。命ながきは恥多し、嫁御さらば。」と、守刀を逆手に拔き持ち、「南無阿彌陀、南無阿彌陀佛。」と稱名の、聲より早く飛び掛り捥ぎ放し、「胴慾な御袋樣、命を捨てゝ御兄弟のお爲に成る事ならば、二人が命惜しまうか。望みさへ叶はぬに母御に自害させまし、不孝の罪は子に報い、一生御運は開けまい。御兄弟が愛しくば、思ひ直して給はれ。」と、縋り歎けば、「わつ。」と泣き、「死んで憂き事聞くまいとは、子を思はぬに似たれども、母が身にも成つて見や。子供の爲にと病を作り、思ひ設けし母が慈悲は仇と成り、雨さへ降らねばお立は今宵八つ立とや、顏ふる間も有る事か。假屋々々の騒がしきに、若し近寄つて見とがめられ、盜賊なりと搦められ却つて憂目に逢はうかと、案ずる程身も慄はれ、自害せずとも死に兼ねまい。賴朝公の鎌倉入を止むるは雨許り。アレ〳〵星も晃々と雲の一筋あらばこそ。何故雨が降る物ぞ、降らずば望みは叶ふま

大一大萬大吉と、我を折烏帽子立烏帽子、白一文字、黒一文字屋の山の井殿、竹に雀は仙臺屋の陸奥殿、遣手は露の幸菱、覺むる眠りの梅ばつちり。竝んで二つ提灯は大和屋の唐土、名も高橋の紋所二人が心相駕籠で、追ひ〳〵に舁き來る。急かるゝ心に虎少將、詞を掛けねば答へもなく、過ぎ行く跡から龜菊が、印は紛ひも嵐吹く紅葉流しの紋提灯。「コレ龜菊殿、虎少將ぢや物問はう、乘物暫し。」と止むれば、「待つてたも駕籠の衆。」と忙がし中をせはし夏草、わくせき草にぞ下しける。「なう逢ひたかつた二人樣。」「此方とても其の通り。して御兄弟のお身の上はどうぞいの。」「さればいな、いうてもいうても御運の弱い御兄弟、お袋樣の御病氣とて、俄に曾我へお歸り、京の小四郎とやらが內通、何やかやで祐經とんと心を許し、もう樂ぢや今宵から假屋に足を伸ばして、御狩中は緩りと酒盛しよとの前企み。是れはよい首尾御逗留の間には、どこぞで本望遂げさせましよと心力の有りし所、けふ晝過ぎ八つがしら鎌倉より、二宮太郎殿と云ふ人早打のお使、賴朝樣の弟蒲殿とやらが腹切らんしたといの。是れも御兄弟に付いて入譯有つてぢやげな。それで假屋々々の騷動をどりの崩れぢやと思はんせ。それ故賴朝樣も今宵八つにお立ち鎌倉へお歸り、若し雨が三粒でも降れば、明日五つにお立ちが延びる筈。降つても照つてもお先手は八つ立とのお觸、荷を締めるやら何やらやくたいの有ることか。私らが樣に假屋々々へ呼ばれた女郎衆、俄に里へ戻さるゝ、此の有樣見て下さんせ。抱へる樣

やこそ事よ、ア、氣遣ひ、一走り往て見てこうか、跡も危しあれ〳〵。」と、心許りを碎く間に、次第に近づく提灯に、女交りの笑ひ聲。「エ、氣遣ひない〳〵、皆郭の駕籠舁共、假屋々々へ呼ばれた女郎衆の戻りと見た、若しあの中に龜菊のゐやるか、いざ待ち合はせて問うて見よ。母君は先づ暫し。」と草の繁みに隱し置き、小提灯の心切りしめ待つとも知らでざゝめきて、一節謠ふ聲のあや、「唄三年以前の皐月闇、鴫立澤の歸るさに、禿さんか誰やらが、螢を取つて遊びなば、面白かろでは有るまいかと、詞醉ひを涼めし夜半の風、今の氣色に吹き送る。駕籠舁が癖は駕でふり、螢は光る淺瀨川、「跨げぢや。」「まつかせ。」乘物の、乘手は知れた提灯に、上と下とは石疊み、中に二重の松川菱、喜瀨川の三浦とて年まへの太夫、大彌太殿とは深い中、これも狩場へ呼び寄せられ、*しげれ松山羨ましい。「跡から見ゆるは誰ぞいの。」問はれて駕籠の簾より、招く扇や開き扇は、「朝霧樣、狩場の露でしつぽりと、濡れさんしたの〳〵、ぬれた印の三本傘雲折竹は奧州樣。」「五十餘人の松の中、手管の上手め見たぞ遣らぬぞ。」「オ、いや惡口言ふは誰ぞいの。」「問はれて言ふはむのじながら虎でござんす。」「少將ぢや。」「珍らしい問ふに及ばぬ差合ひくらず、中よしの弟兄御の假屋へか。龜菊樣とも一座してお噂たら〳〵。近い内逢はうぞえ。先づおさらば。」と道を早めてそれそこへ、いたら貝は岩崎樣、綱の手は菅原殿、舞うたる鶴は茨木屋の左門殿、龜甲は輪違屋の花咲が、一座のこなしあふ夜の譯、

懺悔々々え、何が菩提の道と成る、懺悔々々々々々々え色にそみ、又香に愛でて拾ひ洩らせる後世の種、闇の闇路を如何にせん、照らせ三島の宮所、御燈の光しん〳〵と、心も清き瑞籬に、馬上の母は手を合はせ、祈る願ひの百千々を、いはで心に駒急ぐ、老木の松はつれなくて、初咲櫻續穗梅、盛りの花の嫁達の、身にはいかなる神無月、五月の雨のいつの間に、涙の時雨染手綱、絞れど乾く隙ぞなき。出で行く人に後れじと、笠取りあへず杖取らず、常の姿を其の儘に、今來て見れば旅衣、裾野も近くなりにけり。星さへ見せぬ松林、下は野澤のちり〳〵水、裾は茨が綻ばし、足は草履が杭や伐株小石原、一寸先は闇のうたてや小提灯、細蠟燭も仄暗く、駒の躓き氣遣はし。「御狩場も早程近し、是れから二人がお手を引き、いざ徐々お歩ひ。」と抱き下すも下さるゝも、蹌踉きながら下り立ちて、「なう嫁達、乘つてさへ草臥れる、我が身で思ひ遣らるゝ、もう何時ぞ、心のわくせきする故か、鐘は四つやら夜半やら、聞き捨てて數へもせず、更けた樣に覺ゆるに、狩場の方に物音は聞えずや、兄弟が生死も、誰か聞かせん便りなや。」と、歩みもやらず立ち給ふ。「お道理や去りながら、我々が妹分喜瀬川の龜菊と申す者、祐經が氣に入つて狩場へも呼ばれし故、御兄弟の御事を身に引締めて頼みしが、若けれども龜菊は侍まさりの氣ばへといひ、義理強いは傾城のならひ、よもや如才は致すまじ、憐れかし龜菊に逢ひたい事や。」といふ中に、草の葉越にちらつく火影、邊を照らして見えければ、「そり

螢火か、いや兄弟の亡き魂よ。結び止めんと下がへの、褄吹き反す夜嵐に、はつと消えては狐火の、我とわが身を迷はする、雲より上の一聲や、又二聲や三聲とだにも、啼き捨てて何地行くらん、やよや待て、汝よ冥途の鳥ならば、死出の山路に關据ゑて、先立つ我が子留めよかし。心覺えの道程も、弓手は秩父の山おろし、松の響か磯打つ波か、晝なら三保か 相ノ山 淸見寺、鐘かう／＼と仄聞え、猶も心ぞ急がるゝ。煌く露の玉澤村、闇はあやなし梅澤村、ふた村過ぎて行き狂ふ、駒の蹴上の鞠子川衣紋流しの、ア、曲もなや、此の駒の道の街に行き泥み、打てども扇れどもなど進まぬぞ歩まぬぞ、哀れ一足に千里もがなと、焦るゝとは思ひ知らぬか白月毛の、駒に恨みの涙の鞭、打つに甲斐こそなかりけれ。否なう駒に科はなし、此の別れこそ大磯道、夕暮ごとにお二人が、しやんとめされて通ひ路の、戀の知邊の馴れ／＼し、今宵はそれに引替り、乘手も道も替るとは、知らで止まる可愛さよ。二人御兄弟の御形見今一度、里の方へと押し向けて、引き立て見れば不思議やな、元の如くに歩み行く、引き戻せば立ち止り慕ふは誰ぞ我が夫、我が子よ主の憂き別れ、二人共に悲しむ優しやと、鞍の前輪に縋り付き、歎けば共に聞き入れて、耳をふせ尾を垂れて、人諸共に泣く涙、己が毛色も染めぬべし。歎くな駒に勢付けてハイシイ、足柄越は風荒く、露を蒔繪の箱根山、今行く道も、遂に行く賽の河原のいつとても、大人童の隔てなく、唄 罪は重たし迷ひは深し、何が菩提の道と成る、懺悔々々

四人の願ひ四弘誓願ぞ有り難き。「子を先だてての弔ひは逆事とて、其の子に罰の當るとや。身は箱王が變りにて、今日より我こそ箱王法師、十郎は我が兄五郎は返つて我が親ぞや。いざ虎御前少將、初夜の勤めの頃なれは、親五郎殿兄十郎殿の菩提を祈らん持佛へ。」と、泣く〳〵誘ふ御姿、兄弟此の世の暇乞、名殘をしかの狩場へと、急ぐ足さへ跡へ引く、立ち留りても面かげを、中に隔つる小萩垣物越もはや聞かせじと、耳驚かす初夜の鐘、諸行無常を今までは、餘所に聞きしも我が身の上、母は我が子の上に聞く、一つ響を別れ路の、涙々に聞き分けて、又逢ふ夜なき親と子の、袖の露こそ重たけれ。

第四

虎少將道行

妻戀ふ鹿の身の果ても、戀の文書く筆と成る、有つて甲斐なき老の身は、死して體の置き所、同じ裾野と心ざし、馬に任する道しるべ、是れは若駒乘手は老の、姑一人嫁二人、踏みも習はぬ雙鐙、流石夜道の力とや、油煙も細き提灯に、足元許り照らされて、萎れ出づるぞ哀れなる。先は何處と詠むれど、富士さへ見えぬ闇の夜の、今宵一夜は十五夜の、月にぞかへまほしの影、ちら〳〵〳〵

討つべき透間もなきと聞く。病と僞り呼び戻し惨う憂う呵りしは、悪人の兄めに聞かせん爲、彼奴めに聞かするは祐經に聞かせ油斷させて、易々と討たせん爲の親の慈悲、心碎くは如何許り、一萬と言ひし時よりも、兄十郎はねび者にて麁忽せぬ生付き、箱王の時より五郎は氣がさ者、すはと言へば氣が逸る、腕の骨の固まるまで、人にも油斷させん爲、出家にすると箱根へ登し置きたるに、元服したる咎ぞとて、此の頃までの勘當は、是れも敵に肌許させ、本望を遂げさせんと、勘當も親の慈悲、父の爲に捨つる命、惜しまぬ子には孝の道有り義も有る。討死すると知りつゝも、勸むる母は何の道、恨めしの身の上や。助かれといふ情は有れど、死ねといふ慈悲はなし。親の死を歎かぬ不孝の子は多けれど、孝行の子の討死を厭はぬ母は我許り。若き子供を先だて、跡にさがる冥途の道、夫の河津殿へいひ譯は何とせん。」と、涙の限り聲限りくどき給へば、虎少將も絶え入る許り、母の愛心兄弟が身に答へ胸に染み、悲しさ爲方遣る方なく、伏し拜みては泣き沈み、歎き入つては伏し拜み、思ひ隔つる破れ垣、いとゞ涙に朽ちぬべし。「不便や可愛や兄弟が、由なき母にからまれ、嘸や道を急ぐらめ、さりながら現世の望み叶ひなば、來世はなほ頼み有り、箱王を出家にせんと、袈裟衣まで營みて、佛に契約申したる、其の言葉を違へじと、かはりに母が出家して、その袈裟衣身をはなさず、是れ兒よや嫁達。」と、上の單を脱ぎかくれば、下は墨染五條袈裟、一度に、「あつ。」と手を合はす、庭と上とに

めて見て、結局は共に死ぬる分。」と、帶引き締め裾短、褄かいからげ走り出でんとする所に、奧より母上帚追取り、用捨も波の皺腕も、共に折れよと打ち立て〳〵、「ヤレ思切の無い奴。」とて礑と打ち、「未練者。」とて丁と打ち、「郭にては流れの身、爰にては武士の妻、夫の親の敵討母が目顏を忍んでも共に見たて出してこそ、弓取の女房なれ。」と打ち敲き〳〵、「母は寢ても寐入らず、書置するを物聞より見て泣く涙は如何許り、そこを耐へた親心、思ひやれや。」と許りにて、帚をからりと投げ捨てて、轉び伏して泣き給へば、垣越に聞く兄弟、宵には似ざる御心、又もや御意の變るかと、立ちも離れぬ夜の蟬、取り付く露の崩れ垣、忍び音になく哀れさよ。二人の女かき暮れて、「敵討つを曲事と、御叱りの間もなく、止むる我等をお咎めは、狼狽へて猶氣が迷ふ、合點の上で諸共に、思ひ切るなら切りたい。」と、恨み顏にて口說き泣く。母君いとゞ目も開かれず、「口は廻らず心は急く、仔細も言はず杖棒當てて恥かしい。昔を知らぬ人々の不審なも道理。兄弟の子供が五つや三つの頃より、父を討たせうか、夫れ知りながら可愛さに、死目に逢ふと驚かせ惑はせ、邪魔を入れて呼び戾す、其の邪魔は誰無念なと思ひ込うだる魂、成人に隨ひ增りこそすれ飜さぬ、弓矢取る身の念力、母が止めて留らがさすぞ。恨めしや妾が腹貸した、京の小四郞といふ種變りの大惡人、欲に耽り襟に付き、敵祐經が家の子同然に身を寄せ、此の頃爰へ入り來り、有る事無い事犬に成つて嗅ぎ出し、內通すれば用心し

嬉しさも、書き綴りゆく藻汐草、心餘れど盡されぬ。祐經はともすれば、虎が情の忍びがき、時致が筆の運びには箱根の別當の御こと、母の御不興宥され申し、倶不戴天の敵を討ち、名を後代にあげん事、偏に母の御慈悲とぞ。其の外同じすさみにて、「今日賜はる直垂は、最期に著し冥土まで、母上に添ふ心地にて、父尊靈に逢ひ奉らん有り難さよ。脫ぎ捨てし著馴らし衣、かたみと御覽下さるべし。弓と靫は二宮殿、机に殘せし萬葉集法華經は時致が、八年讀誦し手に觸れし、姉御前に參らする。守袋は禪師坊、諸神諸佛の誓ひを直に、後世の引導賴むぞや。鬢の髮は虎少將、千筋となでし數々の念佛申し手枕の、移り香しめて忘るなよ。鞍と鐙は鬼王團三郎にとらするなり。我々が身に替り母上の宮仕へ賴む事是れ一つ。建久四年五月闇、天は暗しと申せども、思ひは晴るゝ下旬八日、祐成時致判。」と書き止め、からり〳〵と筆を捨て、聲をも立てず泣き居たり。「名殘はいつか盡きすべき、短夜や更けぬらん、いざこい五郞。」と先だてば、續いて出づる時致が、大力の踏む足に、年經る家の落緣を、がばと踏み拔き撞ど落つる其の響、障子の煽ちざわ〳〵〳〵、紙帳の騷ぎに目を覺し、「ヤア十郞樣が坐せぬぞ、五郞樣もござらぬぞ、表よ奥よ。」と立ち騷ぐ。「見付けられては惡しかりなん、やり過して跡より拔けん。」と頷き合ひ、荒れたる庭の萩薄、引き被いてぞ隱れ居る。「なう此の紙帳の書置、扨は今宵討死とや、只今結びの杯して直に離れてあられうか、かみ樣のお歎きお腹立、追付いて留

に金の舌を嘗めてぞ出でにける。揚屋の空燻山里に、今日は蚊遣に燻べ替へ、二つ並べし羅の、蚊帳も紙帳も所帶めく、内は裏なき浮世蓙、心を延ぶる種ならし。漢宮の牀の上に契りを千年の鶴に譬へ、恩愛の筵の上には快潤たる母の詞、恐れざるにはあらねども、時致が年月の念力やはか今宵を過さんと、少將を醉ひ臥させ出づる紙帳の戰ぎにも、祐成の目や覺めんと心締めたる高からげ、母の形見と直垂抱い込み、身を潛めたる差足は、我が身ながらも野狐の罠を窺ふ有樣なり。言ひ合はせねど同じ心に祐成が、虎を酒に寐いらせて、今生に有つてこそ母の恨みも有るべけれ、今宵限りの命ぞと直垂身に添へ、拔足に燈火暗き人影を、弟は兄とも知らず、兄は又弟とも知らで互に忍び足、ちらと見付けてつゝと寄り「時致か。」「十郎殿か。」「音高し〱。彼の一大事を今宵と思ひ定めしな、我とても其の通り、能く兄弟が心の斯くまで合ふ事は、本望遂げんは手の内なり。兎につけ角につけ、痛はしきは母上、悦び寐入の御枕、嬉しき夢がな見給ふらん、覺めての後の御歎き、今見る樣に悲しや。」と奧を見遣りて兄弟が、忍び涙ぞ哀れなる。祐成涙を止め「豫ては今宵假屋にて、心靜かに書置し、形見も殘さんと思ひしが、是れより宙を驅けるとも、富士野へ著かば夜半も過ぎ、中々思ふ外なるべし、歎きの中の御慰み一筆殘さん。」「尤も。」と牀の硯を引き寄せて、料紙取る間も有らばこそ、恨みなとてぞ書きつくる、紙帳に涙拭へとや。乳房くはへし昔より、二十餘年の身の思ひ、悲しさも

は悦ぶ打鮑、折しも二宮の姉がくれたる小樽をも、心で結ぶ蝶花形、母は持佛の前に寢て、河津殿の位牌諸共に、ざゝんざの聲聞かせてたも。ヤア京の小四郎、己は方々寄る方多し、今夜は歸つて、重ねて來い。あれ日も暮れかゝる里の迎ひも來ぬ前、兄役に祐成夫婦部屋へ〳〵。」「あつ。」と言へども立ち兼ねて、恥ぢて赤らむ横顔を、差し込む虎が袖の下、「是れは〳〵大人氣ない、かみ樣のお世話に成る事か、手管の逢ふ夜思ひ出し、手ばしかう遣らんせ。」と、手を取りかはし入る振を、五郎見やつて、「扠も兄き厚い和郎、こちや成らぬ、ウ、恥かし。」と俯向きて、疊に喰ひ付き身を縮む。「是れ申し少將が若うて殿御の思ひ樣、嫂に劣つたと姑御の思召も迷惑、サアござんせ。」と引き立つれば、「否こちや否ぢや。」「否と言うて濟むものか。」「それでも母ぢや人の見てぢやもの。」「あれ彼方向かしやんした。」「否ぢや〳〵。」も否ならぬ、閨に引摺り入相の、鐘睦まじき夕なり。月なき宵の雨曇り、京の小四郎部屋の體を伺へば、今宵許りはたつぷりと、燈心太き燈火の、影に廻らす杯に、可笑しや何をめあてにて、八千代を結ぶ夫婦の緣、親子の緣の縺れ合ひ、絡む岩根のさゞれ松、「濱松の音はざさんざ、千箱の玉。」とぞ謠ひける。小四郎が思ふ壺、「甘し〳〵、假令兄弟鬼神でも、母と女房に斯う羈し打たれては、脛骨立たずの腰拔、祐經公一代の厄拂ひ、此の足で注進し御褒美は何で有らう、知行で有らうか、若し金銀を下されたら小商ひまだるい、とんと小判に掛らう、小判〳〵。」と獨言、口

命を捨つるも、父の孝養母を悦ばせ申さんため、御機嫌損ひ命を捨てて益もなし。祐成に於ては敵討のこと、ふつつと思ひ切つたるが、五郎いかに。」と有りければ、不承々々に佛頂面、「ハテ生きるとも死ぬるとも一所と言ひ交した、兄きの分別變るからは、獨り物にも狂はれまい、どうなりと勝手次第お返事なされ。」と尖り聲、「あれ〳〵あれこそ母が病の神、元の如く勘當。」と、宣へば虎少將、「エ、惡い聲付、同じ物の言ひ樣で、あゝ畏まつたと*ついなんどりと、お受けは成らぬ事かは。」と、諫めてもなほ面癖、祐成大聲上げ、「母上のお命の障り、御勘當に懲りぬか。」と、叱られて喫驚し、「口でまだまだ申さんより、誓文の爲只今御前で金うたう。」「オ、尤もいざ金打。」と、兄弟刀拔き寬げ、打ち合はんとせし所を、母手に縋り押し止め、「オ、出來したり〳〵、生先祝ふ若者共、金打はせぬ事ぞ。其の眞實を見るからは、最早心も落付いたり、嬉しし〳〵今こそ母が藥と成りし二人の子、元服させて此の方の痞へが下りた。」と、悅びの笑顏さへ哀れなり。「總じて若き男子に妻子と言ふ羈しを早く持たせねば、身持を輕く、命を塵とも思はぬ物、虎御前や少將とは、深き契約有りこそせめ、押し出して自らが嫁と呼ばねば定まらず、娶る時は必ず父母に申すと、禮記とかやにも有りと聞く。今夜是れにて祝言の杯取離し、祝うてたべ。」と、枕の文匣に疊み置く直垂二領、「是れは兄弟が爰はの晴と嗜みし、一世一度の妹脊結び二人の嫁御、衣紋風よく著せ給へ。狹くともあの部屋を嫁入御殿に擬へ、肴

即時に歸るを孝行とばし思ふか、さぞや外の用とて母が呼ぶには歸るまい、殊に今度の御狩の供は、工藤左衞門祐經を討たん爲の謀叛とな、五郎めは勘當宥して昨日今日、此の意見は幾度か色をかへ、品をかへて言ひ盡し、今更同じ事いふに及ばぬ忘れはせじ、兄が勸めたか弟が勸めたか、合點の行かぬ五郎めが頰魂、始めの氣が直らぬな。當時祐經は一國の大名何百騎といふ大將、抑お事らに討たれうか。一僕連れるか連れぬ身を、祐經方のあふれ者、忍討に討ちたるとて、其の時誰を恨むるぞ。言ふも愚か河津殿は坂東一の勇者、兩國懸けし大名なれども、奥野の狩の歸り足、欺矢は爲方なく、命を失ひ給ひたる、父の最期の手本にして、昔思へば老の身の、此の頃子供の狩場の留守、あられう物か推量して、母も親の内ならば、可愛と少しは思ひやれ。母が此の病といふも僞りの誠ぞや、五臟六腑の病ならで、病はなしと思ふかや、雨風の氣に當り、物のたゝりの病には療治も有る藥も有る、子ゆゑの闇の病には唐高麗の名醫をよせ、萬卷の醫書を探しても、藥の方はよも有るまじ、藥に成るも二人の子、病に成るも二人の子、起き臥し立居明暮に病と成つて痛めんより、鴆毒と成つて一思ひに殺して了へ兄弟。」と、かつぱと臥して泣き給へば、祐成時致虎少將、「これは勿體な御詞。」と、疊に頭を打ち付けて沈み入つたる連涙、無智無慙の小四郎が、義理にも泣くぞ道理なる。祐成袖を絞り兼ね、「御教訓と申し御不便餘つての御恨み、暫しが中御心を苦しめし段後悔恐れ入り候。敵を討つて

弟を待ち馴れしには彌増して、虎少將が氣も急かれ、心も空に日は傾く。「ハァあの鳴る鐘は早七つ、なぜに遲い。」と走り出で、表に立てば内氣遣ひ、内には心落ちつかず、門の出入幾度か鐘の數々繁かりし。仇は返つて情の馬、曾我兄弟が孝の鞭、切所難所の六里半、只一時に驅けさせ、馬を道に乘り捨てつゝと通れば虎少將、「そりやこそお歸り、なう申し、御病氣賴み少なく、かういふ間も危い。」と聞くも悲しく胸騷ぎ、「ヤ小四郎殿深切の看病忝し。」と、挨拶一禮そこ／＼の、足音靜かに牀近く紙帳の褄に手を添へて、「祐成歸りて候、時致歸りて候、御心は如何ぞや、など御藥は參らせぬ、北條殿より給はりし、奇妙の藥是れに有り、我々不便と思召さば此の藥召し上られ、一日も御命延ばへてたべ母上。」と、涙を隱し申しける。「なに兄弟が歸りしとや、近う寄れ此處寄れ。」と、紙帳の褄より兄弟が、手首をしかと取る手もゆらぐ玉の緒に、まだ力有る物ごしにて、「虎御前少將、はれ／＼と此の紙帳取つてたべ、早う／＼。」と宣へば、「あい／＼。」返事するまも老人は、いとゞ心も短き釣手、手も結ぼれて急げば廻る、「あら鬱としや。」と押し退け出づる母の顏、目の中慥かに色合も、常に變らぬ息ざしに、病人よりは側の人、はつと心ぞ煩ひける。母は怒りの目に涙、「ヤイ兄弟、嚴しげに北條殿の御藥何にせう、母が病とは呼び返さん爲の空言。たとへば他人でも友達、知音の大病死病と聞く時は、萬事を捨てて驅け付ける、是れが人情世に住む習ひ、珍らしからず。母が末期と驚きて、

を限りと聞えけり。折しも大磯の虎假粧坂の少將、狩場の留守のお見舞も、見捨て難なく留まりて、さま〴〵心をつくせども、馴染なき身は病人の、お氣扱ひと差扣へ、團三郎は富士野の使、二宮へ人を走らせても、夜明より夫婦ながら、留守と許りにいなせもなし。うつにも舞ふにも京の小四郎、紙帳によりて鼻いき伺ひ、「まだ歸らぬか祐成時致、扨も遲し。」と、表に出でては南を見やり、足を空に驅け廻り、「是れ〳〵二人の女中、我等は現在母の腹より出でたれども、五郎十郎とは種替り、殊に久しく通路もせず、漸う此の比來懸つて、出かし顏の孝行だては兄弟衆の思はく、世間共に譯立たず、馴染なけれど兩人は、嫁と言ふに頭振られず、年寄られても女子どし、遠慮なしに賴み入る、第一が臨終の勸め〳〵。」と言ふに付け、扨は早此の世の賴みも切れたかと、心細さの胸詰らして、紙帳越に口差し寄せ、「追付御兄弟お歸りに間もあるまじ、それまでも先づ一筋に後生の事をお心に、お忘れなされな南無阿彌陀。」と、淚に濁る聲の色、母上息も苦しげに、「さればよ老の病の牀、後世忘るゝにはあらねども、臨終の一念に攝取の光明を期し、十念の枕のうへに、聖衆の來迎を待つ事も、此の世の念を拂ひ捨て、一心亂れぬ上にこそ、本願にも逢ふべけれ、我が子の絆にからまれて、闇より闇に迷ふ身は、三尊の來迎より懷かしの祐成や、二十五菩薩よりゆかしの時致や、過ちでもしたるか心元なやあら遲や。」と、物ごしも早よわ〳〵と、子故に惱む狩場の雉、おのが命は忘れけり。夕暮毎に兄

ち、後へ廻れば跳ね散らし、蹈み立て蹴立て高嘶き、乘せんず氣色はなかりけり。「南無三寶前に大敵後に母の臨命終、一代一度の身の大事、弓馬の氏神鶴が岡、當所には富士淺間、箱根兩所駒形權現、分身は百和龍王右鵠王左鵠王、本地大聖文殊菩薩の獅子の駒、御手の如意は鞭と成り、不動明王の縛の繩、手綱に變じ給へや。」と、慈救の偈を繰りかけ〳〵、轡の立ちぎきむんずと摑んで、搖りと乘るに恐れなく、頭を垂れて身を伏せし佛神力ぞ有り難き。時致嬉しく蛇に綱付けても乘らん物と、婆羅門栗毛の口によれば跳ね上り、棹立ち尻込み邊を蹴立つる馬煙、つゝと入つて太腹を、さけて退けとはつたと蹴る。然しもの惡馬もよろ〳〵〳〵、怯む所を引き寄せ、ひらりと打乘つて、兄弟鐙ふんばつて、轡を竝べ扣ふれば、祐經案に相違して、只うつかりと大口を、呆れ果ててぞ見えにける。祐成勇めば時致きほひ、「ヤア〳〵團三郎、汝は是れより秩父殿、和田殿、其の外の方々へ一禮申して假屋を仕舞へ。サア來い五郎。」「いざござれ十郎殿。」と、一鞭くれて乘り出すも、日脚もはやき午未、我が身の運も上刻と、八卦占かた八つ響く鐘に誘はれ 三重 風誘ふ、朽木の櫻春過ぎて、又何の世の花をだに、待つに甲斐なき曾我の里、痛はしや母上は、河津に別れしゆふべより、二十餘年の物思ひ、貧しき上に世を忍ぶ、兄弟の子の成人を急ぐは親の老と死を、急ぐと知らで身に積る、雪折松のむずをれに、俄病の萬死の牀、樂しみは似ぬ*孫晨が藁屋の紙帳漏りくる風、そよと寢返り息つぎも、今

けての平じひ、得て是れに手を取るわいな。そこらを千匹繋いで、恥をかくが手柄の基、さあ飲み伏せたと油斷させ、心を宥す門立か思ひ懸けなき*朝込、ずつと仕かけ差引成らぬ手詰の杯、腕を捻ぢ上げ首を押へ、つぎかけ〳〵奈落の底まで飲み伏せ、引き起して止めの杯一獻さいて、しやんと取る、是れを本望本酒の手柄と言ふわいな。去りながら此の菊もいつぞや、山下宿で三日三夜、和田さんの大よせに、朝比奈さんの無理酒には、誓文とんと息ついた。」と、笑うて其の座を寛げしは、物に馴れたるこなしなり。此の詞に兄弟差詰つたる氣を開き、「母の痛はり心ならず、參會は重ねて。」と、立たんとすれば、「暫く〳〵、孝行の程感じ入る、祐經も一家の端餘所の樣には思はず、本海道は遠ければ、山路の近道急ぎのため、某が祕藏の名馬、狩場まで引かせしを兄弟に餞せん、外道月毛婆羅門栗毛是れへ〳〵。」「あつ。」と答へて引き出す、其の丈八寸餘り、肉十分に節高く、沛艾に口こはく、乘入もせぬ野髪の馬、一樣の鞍皆具、遣繩追繩口取繩、面を振れば六人の、舍人もよろめき引立てられ、前脛かいて齒をたゝき、人を嚇して鼻あらし。髪より洩るゝ眼の光、角なき鬼の如くなり。兄弟急度目配し必定此の馬に驅落させ、殺すか不具か恥かかせん謀、辭退せばなほ恥辱と、祐成會釋し、「天晴御馬候、かかる名馬を申し受け、浪人の我々飼も舍人も不足なれば、路次の間借用。」と、外道月毛を引き寄せ、乘らんとするに寄せつけず、鞍に縋れば鞍そばえ、前に寄ればすつくと立

行劣り給ひては、冥途までの御恨み天の冥加も恐ろしし。祐經殿に和を乞うて、お立ち〳〵。」と勸むれば、祐經大きに力を得、是れ〳〵兄弟、父の河津は流矢に當りしとも、俣野五郎が討つたりとも、分明ならぬ親の敵、差當て祐經を狙ふとな、よし〳〵さもしげに言分はすまじいぞ、サア打ち懸けよ切り懸けよ、音に聞く程にもなし、怯れたか曾我殿原。」と足元見たる廣言、五郎堪らず、「神妙候祐經。」と、躍り出づるを押し止め、「母の便りを何と聞く、狂亂か弟。」「いや〳〵〳〵、微塵粉灰になればとて、敵に聲を懸けられ、悄々立つては骸の恥辱放されよ十郎殿。」「ヤイ身の譽れも恥も捨て、婆婆と冥土の父母を悅ばせ奉らんと、幼少より今日まで兄弟が念願、早忘れしか時致。」「ハツアさうぢや、エ、殘念至極、口惜しい祐成殿。」「無念な時致、淺ましき曾我の運命や。」と、涙の齒ぎり身を振はし、握りひしぐ太刀の柄、拔きかけ〳〵はつし〳〵と鐔打は、鎺切羽も一時に碎け散るべう見えてけり。龜菊手に汗握りしが、禿の時より善し惡しの事に揉まれて驚かず、しやんと立つて、「申しお二人樣、顏を赤めてなんぞいの、たんと無念さうに見えるぞえ、里通ひなされし程にもない、是れが何の恥ぞいの。謂はれぬ差出か知らねども、他事ない虎さん少將樣、龜菊が一座に居て、うつかりと見てるたかと、思はんすも氣の毒な、お侍の義に迫るも、浮世の戀に身を碎くも、念懸けるは同じ事、たとへば酒の意趣有る中二日心か公用か、醉うては成らぬ首尾もある、其の足元を見て張合懸

傳へ、臨終の母に親子の對面、臨終の望み叶へなば、身の功德とも成り申さん。エ、團三郎が一生の奉公を仕損ぜし。」と、血走つたる兩眼に、涙をはら／＼とぞ流しける。「ムウ老母の病氣に付き、兄弟を呼び戻すとは此方に、割符のあふこと僞りならず、其の外尋ぬる仔細有り、所詮鎌倉殿御前にて吠えさせよ。」と、ひつ立てんとする所に五郎時致、何としてか見付けけん、坂を下りに驅け來り、勢子の兵五六人ひつ摑んで、手鞠のごとく打ち付け／＼、團三郎が繩も皮も引つちぎり、八幡四郎をはたと蹴倒しどうど蹈まへ、梢も搖ぐ大音にて、「鹿の皮被きし人を、鹿と見るは愚かの眼力、曾我五郎時致は、形は人にて魂の鹿をよつく見る、鹿こそ通れ十郎殿、おり合ひたまへ。」と呼ばはれば、祐成續いて走り付き、「兄弟揃うて珍らしき對面。」と、太刀の柄に手を懸くれば、祐經が郎等、「主を討たすな餘すな。」と二重三重に懸隔て、引包んで立ち騷ぐ。團三郎割つて入り、「ア、／＼旦那麁忽なされな、今日のお命團三郎が預る。御一生の大事のお使、故鄕の御老母一昨日の夕暮より、俄の御病氣次第に重り、只今も計られず、千に一つも御本復有るまじき御覺悟、今生の名殘兄弟に一目對面せん、萬事を振り捨て立ち歸れ、是れに背かば時致は元の如く、十郎諸共生々世々の勘當と、絶え／＼弱る御聲を聞き捨てて驅け付けし。」と、聞くよりはつと力も落ち、兄弟目と目を見合はせて、寢ぬに夢見る心地なり。「ア、御思案所でなし。京の小四郎の不所存人さへ、引添ひて看病、此の人にお二人が孝

る盗人鹿、總構への柵をくゞる所を、大勢をり合ひ生捕つて候。」とひつ据うる。其の形頭胴體鹿の丸皮にて身を包み、咽の下に人の面、見知りの有る曾我の譜代の團三郎、はつと見る目も濁江の、沼に漂ふ龜菊が、土にも入りたき心地なり。祐經元より目かど強く、「周の武王は渭濱の獵に太公望といふ賢臣を生捕り、孔子は魯國の狩に麒麟を得られし、工藤左衞門祐經は富士の御狩に、曾我兄弟が下人鬼王が弟、團三郎といふ四つ足を生捕つたるは、武王孔子に劣らぬ某。ヤイ蓄類、御吟味嚴しき總構へ、鹿の皮を被り忍び入らんとせしは、根ざしたる所存有るよな、眞直に白狀々々。僞るに於ては盗賊類になし、見苦しき刑罰に行ふべし、ぬかせやつ。」とぞ睨め付くる。團三郎少とも臆せず、「鹿の皮を被り畜生の眞似する程の不肖の身、見苦しき刑罰を、さのみ恥辱とも存ぜず去りながら、盗賊類に落されては、浪人の主人兄弟が惡名も悲しければ、仔細包まず語り申さん。祐成時致は御狩拜見の爲、情有る大名達の組下に交り、此の狩場に罷り有り、故鄕に殘す一人の母老體に俄の大病、時を待つ間の命の中、子供の顏を一目見て、末期の水をも受けたきとの歎き、夜前夜半過に曾我を出で、山川分たず驅け付けては候へども、慌急しく不思議立つ頬付にては、總木戸の御番所御咎めを憚り、雜人の屠り捨てたる鹿の皮を身に纏ひ、柵を越えんとせし所を見付けられ、多勢是非なく此の有樣。なうお女郎、各は情有る流れの身、知る人も多かるべし、知邊も有らば兄弟に此の趣を告げ

夜龜菊には留守させて、お前は御所の假屋に寢て、つひに寢姿見せもせず、思ふとはしら〳〵しい。鎌倉の奥樣の關の戸が嚴しいか、奥樣の文をそれ肌に付けてぢや、狩場では此の龜菊が關破り。」と、懷に手を指し入るれば、「ハァ、拜む〳〵、夢々悋氣の文にてなし、祐經が身に取つて一つの難儀いでさらば懺悔咄して聞かせん、定めて大磯の虎、化粧坂の少將が噂でも聞きつらん、曾我十郎五郎某を親の敵と、狩場の羣集に紛れ入つて狙ふと聞く。安々と彼奴等にくれる命でなく、身用心の爲君のお側を離れず、夜は御所のお次に寢る其の窮屈さ、生まれついた鼾かき、嗜めば咽へ詰つて鼻へは出でず、耳で鼾もかくの仕合。然るに鎌倉に殘し置く女共が、心ざしの過分さ氣の働きの利發さ、曾我兄弟が種替りの兄、京の小四郎と言ふ者に、ならずの野良者を嫌し、金銀取らせ曾我の老母が方へ、間者に入れて付け置きしが、母は血筋の恩愛に欺され、何事も隱さず曾我が家内、箸のこけた事まで京の小四郎が内通、聞くは皆女共が智謀、此の上にまだ悅び、彼の老母十死一生の大病にて、死目に逢はんと兄弟を呼び戻すとの内通、十郎も五郎も孝行な奴、聞くと堪らず、最早曾我へ歸りつらん、神明佛陀の守り目深き祐經、疫病の神送つて心は武藏野爰は裾野、世間廣く今夜から、どこに寢ても安樂世界。」と、語るを聞けば曾我の噂、虎少將の由緣には、われも好みは外ならず、耳に應へて疎ましし。勢子の中より八幡三郎が弟八幡四郎、三股角の大鹿荒繩懸けてひつ縛り、「せごうの兀げた

え聞に漏るゝ鐘の聲、數へて見れば二つ三つ四つ七つ八つ、また九つと勇み行き、遠ざかり行く駒の足、戀せぬ身にも思ひ知る、飽かぬ別れの曉の、鐘に涙はかゝるとも、夫の武運長久と、又逢ふ事を待つ宵の、鐘に契りて別れける。

第三

小牡鹿の入る野も山も聲々に、勢子を揃へて狩りにけり。工藤左衞門祐經、打交ぜの狩には鹿論も事喧しと、便りよき岡邊に場を構へ、手の者組子に鹿猿狩らせ、遊君喜瀨川の龜菊と、牀几を並べ酒肴前に列ね、「ヤア〳〵者共、色有る君が見物、豕でも鹿でも一匹生取り、龜菊が髮筋にて繫いで見たし、精出せ〳〵褒美をくれる。」「畏まつた手取にせよ。」と、我が身知らずの猪武者、猪に驅け散らされ、鹿に突かれて吠ゆるも有り、熊と組んで眞逆樣にこけざるが、頰骨掻き裂く血まぶれの、面は猿より赤恥かいて逃ぐるも有り、口は手柄のえい〳〵聲、喚き叫んで三重狩り暮す、獵のきかぬも時の興、祐經杯受けながら、「なんと龜菊、諸大名の假屋々々、呼ばるゝ傾城白拍子も多からん、身に揚げられたは仕合、猪狩肴に酒盛とは、鎌倉殿の御臺所も叶はぬ榮耀、か程に思ふ祐經に廻り樣がさうでない。そでない〳〵。」と寄り添へば、「いや〳〵ゥはべ許りの眞實なしとは是れ此の殿、毎夜毎

と擔いで、「うん。」と投ぐれば、ころ〳〵と二宮が足の前、轉び落つるは梶原が揃ひの足輕、扨こそと安清も上に睨んで突立つたり。續いて懸るを組んづ轉んづ、眞逆さまにずでんどう、小首を土に打ちをつて、「ぎやつ。」と許りに死してけり。小藤太怒つて、「汝に負けてよいものか。」と、放逸無慙の瞋恚を張つてしがみ付く。禪師坊二天四天の威をかつて組み合うたり。上になり下になり、起きつ轉んづ組み合ひしが、片岸を踏み崩し中ごしまで、轉び落つれど兩方放さず放しもせず、さす股に踏張つて暫く息をぞつぎにける。下には安清姉御前、身を冷して待ち懸くる。「サァ來い。」と聲を懸け、一揉み二揉み枯木を倒す如くにて、梶原が目の前、地響うつてどうど落つる。透さず近江を取つて押へ、馬乘にまたがれば、平次景高はつと驚き、長おひせば猶氣味惡しと、跡をも見ずして逃げ失せける。二宮續いて追ひ驅くる。「暫く〳〵、一大事の御用先、逃げば其の儘逃されよ、なう二宮殿姉御前。」と、鬢鬘かなぐりすて、「我こそ弟稚名はおん坊、國上の寺にて法師に成り禪師坊と申す者、樣子は緩々申すべし。梶原が指圖にて、當山藤澤寺の時の鐘、九つを八つに打ち替へ、安清殿に腹切らせんとの企て、空は曇つて見えねども、まだ日は晝に傾かず、早く狩場へお出で。」と言へば、二宮はつと嬉しく、「近江は刻限を違へし大罪人、法の如く討ち捨て。」と、取つて引き寄せ首打ち落し、「これも曾我の敵の小枝、暇の印。」と投げ出し、一さんに驅け出す。二人も跡を見送りて、泣いて別るゝ雨雲の、絕

が目荒き帷子に、涙の玉を振ひけり。安淸不便に堪へかね、「オ、神妙にも聞き分けし。今日より他人の證ぞ。」と、受取渡す名殘も袖も、ふり切り出づる頭の上、一聲驚く鐘の聲、二宮はつと指折つて、「三つ四つ五つ六つ七つ八つ、南無三寶早八つか、九つの鐘を何として聞き洩らせる、*寒雲鐘を隔つといふ事を忘れしか、富士野へはまだ程も有る、刻限違へば、榛谷との口論無下となり、一生爰に極まつて曾我の運命我が運命、一時に盡きたよな、口惜しや無念や。」と、大地を摑み拳を握り、せきくる涙止めても、止め兼ねて見えにける。梶原平次景高揃ひの足輕數十人、まつくろに驅けつけ、「ヤアヤア二宮時切の早打、刻限相延び御注進の手筈相違、其の科輕からず切腹させ、首を富士野へ持參せよと、お留守居中の評定極まり、檢使は梶原承る、腹を切れ。」とぞのゝしりける。「言ふまでもなく刻限違ふは安淸も覺悟、人の腹を借つても切らぬ、人にも切つて貰ふまじ、首持參までもなく、賴朝公の御前にて、さつぱりと切つて上覽に入れる首、御邊などが苦勞にも預らぬ。」と又驅け出すを「待て〳〵、腹切りかぬる臆病者、家來共引き包んで打ち殺せ。」「承る。」と犇けば、女房同じく二宮にひつ添うて、打合はさんとせし所に、禪師坊いつの間にかは登りけん、藤澤寺の岩頭に大音聲、「是れ〳〵麁忽なされな、時が違うた。」と呼ばはれば、與力の下人聲々に、「ヤァ面倒成る下種め、住持を始め同宿まで繩は解いて助けをる、投げ殺せ踏み殺せ。」と摑み付くを取つて引き寄せ、「えい。」

命の大事となる仔細有るにより、密かに老中の耳へも達し、首尾能く事を治めたく、心は先へ飛ぶ折ふし御臺所より、狩場の御注進八つ切との御諚、願ふ所と有り難く畏まつてお受け申す所、榛谷四郎さし構ひ、曾我に緣者の此のお使心もとなしと、押へ諍ひしより心づき、北の丸の殿中にて、見事に去狀書いたるは、緣者を離れ諸人の疑ひ晴らし、他人の義理合許りを以て、思ふ樣に曾我が肩を持たん爲の離別、飽きも飽かれもせぬ妹脊の中、此の外安清に別心なし。往還驛路に姿を晒し、吠え廻る程添ひ度くば、元の如く二世も三世も變らぬ夫婦、然るうへは見苦しげに、緣者の依怙贔屓罷り成らず、兄弟老母の身の上、どう成つても構はぬぞ、必ず我ばし恨むるな。」と、言ひ捨てて驅け出す。

「待つて下され去られませう。武士の情の離別とは夢にも心付くにこそ、去狀を見てはつと急き、安清殿と緣切れては、祐成や時致が片腕を落されたも同じ事と、悲しいやら口惜しいやら、一圖に腹の立つ許り、外の譏り無き樣に他人に成つて兄弟が、力にとの誠の心、淚が溢れ忝い。縱ひ此の身には不義有りとなりとも、いかなる疵を付けてなりとも、兄弟の爲ならば離別してたべ去つてたべ、暇の狀をたべなう。」と引き止むれば、「見苦しし、といへば斯くいふ、時切の御使仕損じ腹切るが見たいな。」「なう情ない事いふ口で、去ると一口言はれぬか。詫言しても夫には、添ひたいが女の習ひ、望みで去らるゝ淺ましさ。男も女も曾我一家の、是れ程かたの悪さは。」と、包み兼ねたる淚の樣、下女

散り〳〵逃げ失すれば、「餘さじ遣らじ。」と禪師坊、跡を慕うて追驅けける。中村宿の方よりも、馬煙霞を蹴立て矢を射るごとく乘り來るは、「夫の太郎安淸殿、サア生きるか死ぬるは此の所、あの馬留めよ。」と言ふ程も、家來に乘りぬけ稻妻走り、尾筒を左手にから卷けば、下女は鞁をかい摑み、止めても止らず十間餘り引摺られても、猶放さず、刎ね上る馬に輪を懸けて、鞍強に耐へしは造り付けたる如くなり。安淸はつたと睨んで、「二十里を三時切のお使、仕損じては一期の不覺、恥を知つたる男子なるぞ。尾籠至極。」と乘り出すを、又引き止め鐙に縋り、「情無いぞや二宮殿、恥を知るは男子御許りか、去狀受くる女の身、是れに上こす恥辱はなし。二人の弟が豫ての大望、後見は石鐵の楯よりも、賴みに思うた甲斐もなく、お暇と有るからは兄弟が事も賴まれぬ。見る影もなき曾我殿原、由ない緣を結びしと、悔しい顏の色めも見せず、款待し給ふ心に惚れて忝く、起き臥し立居一命懸けての宮仕へ、見落しでも有る事か、貧しき曾我の惡目が、今日といふけふ見え初めしか、兄弟への面當か、兄弟を見放す氣か、侘しき身なれど河津が娘、道理が立たねば暇の狀は受取らぬ。」と馬氈に投げ付け縋り付く、憂きと恨みの諸手綱、絞る淚ぞ哀れなる。安淸せいたる顏色にて、閃りと飛び下り、木の根にどつかと腰打ちかけ、「暇を異れた女、詞も交さぬ筈なれども、今までの好み、聞かずや今朝北の丸にて曾我兄弟より事起り、蒲の入道殿御切腹、鎌倉の騷ぎとなり、御詮議の筋目に依つて、兄弟が

らるゝは、軍に後見せた同然、削つても此の恥辱はのがれぬ、日影者の曾我が姉、御勘氣の者の末などと、傍輩の佞人どもに言ひ廻されての去狀か、いづれの道にも直に返事が聞きたい。」と、長刀構へ立つたる所に、茶屋の牀几をそろ〳〵と梶原平次景高、長刀の柄をむずと取り、「此の乘物を二宮と見違へて、おのれの名乘る因果晒し、梶原平次景高を知らぬか。」と、呼ばはれば下人共、一度にばらりと取り廻す。南無三寶人違へと、胸は騷げどそらさぬ顏、長刀を捩ぎ放し飛び退つて身構へす。「コリヤ女、佞人の傍輩とは誰が事、サア誰々を指して佞人。總じて曾我に好みの奴原、世に有る者を妬み嫉む僻み根性、安清が今日のお使も、眞直には言ふまいと、某遮つて急ぐ御用に對して狼藉者、餘すまじ。」と主從拔き連れ打つて懸る。「ヤア夫を出し拔く梶原、長刀の刃を頂け。」と、八相に振つて懸る。上を學ぶ下女、腰の刀ぬき放し、大勢相手に主從二人、切り結ぶも女業。「こつちへ任せ是れこそ望む心太、商人が手竝を見よ。」と、山椒の粉胡椒の粉、オッ辛芥子其れより辛い韓紅、唐辛子の粉を掴み込む、水桶に酢も醬油も掻き交ぜ〳〵、突出しを水彈き、羣り懸る雜人原、顏を目當にしゆつと突き出す胡椒芥子の水鐵砲、唐辛子の石火矢、弓手へ廻つてしやつぷり、右手へまはつて又しやつぷり、鼻を突き拔くくつしやめしやくり、辛いなみだに目玉も飛んで、咽はひい〳〵火花を散らして三重防ぎける。口も明かれず眼も眩む、蕎麥切料理に打ち立てられ、心太どう敗亡し、梶原主從八方

に踏み辷り、岩角荒き荒男、手を引き腰押し漸うと、門外に吐息つき、「ハ、ア見ゆるは三保の松原、清見寺釣船も漕いで行く、扨涼しいわ氣が晴れるわ、海道は絲引く如く、嶺から見れば麓の人が小さう見える。」下から見るも斯くぞとは、我が身を知らぬ愚人共方丈に案内す。住僧立ち出で對面ある。近江小藤太慇懃に、云々の旨相述ぶれば、住僧更に心得ず、「工藤梶原の御賴みとも覺えぬ物かな。鎌倉には鶴が岡の撞鐘を以て、御番諸役の常規とし、當寺の鐘は二十里四方諸職人諸商人、往來通路の刻限を極め、君より寺領頂戴す、私に刻限を違ふるは、諸民を迷はす大罪、勿體なし〳〵、叶ふまじ。」と言はせも敢へず、飛び掛り取つて捻ぢすゑ、「御出頭の工藤梶原殿のお賴みを聞くまいとは、家來ども坊主めら一人も殘さず引括れ。」畏まつて取つては締め付け捻ぢ倒し、一人も洩らさず猿繫ぎ、「聲立てさすな、一所に追ひ込み錠下せ。」と、引立て奧へぞ入りにける。嶺は吹きまく靑嵐、海道は蹴上げの土煙、一文字に來る人は二宮の姉御前、夫の安淸が暇の狀、三行半分讀む目も闇く、淚絞つて鉢巻しめ、恨みを夫に思ひしら柄の長刀抱い込み、走る道芝照り付けて、火を踏む如き燒石原、下女は附き兼ね息切らし、「申し奧樣ちとお休み、何を申すもお身が有つての事、目が眩ふ〳〵息が絕える。」と、呼ばはり〳〵行く先に、舁きすゑたる梶原が早乘物、「サァあれが我が夫。」と、女房乘物取り廻し、「是れ太郎殿是れ安淸殿、今朝曉の鳥鐘も一つ枕に聞いた中、何を惡目に離別とは。女の夫に去

り近う寄れ。」と、招き寄すれば禪師坊、是れぞ聞き及ぶ敵の家來、樣子は聞きたし、ところてんがうする顏で、によつと突き出す鼻の先、「こりや何しをる。」と梶原が、睨め付ける眼は皿鉢、皿うち落し豆の粉はひに砂塗れ、「ひら皿御免。」と入りにけり。「して〳〵狩場に別條ないか、いづかたへ。」と問ひければ、「さん候、主人祐經、本田と矢を爭ひし大鹿、鎌倉へと承り、風聞いかゞ聞いて參れと申し付け、鎌倉へ。」と言はせも敢へず、「其の鹿ゆゑに祐經殿、降つて涌いたお仕合、蒲の入道にも辯舌を以て腹切らせた、曾我兄弟の奴原も、此の筋から罪に落し、縛り首打つ工面。さりながら氣の毒は、二宮太郎御注進の使、八つ切に御狩場へ行く筈、女房を去つて曾我と緣は切つたれども、彼を遣つては兄弟が事、惡うは御前へ申すまい。某先へ驅け拔けて、まつかへさまに言上し、曾我の根を絶やさんと、只今狩場へ行く所、二宮がまだ此の所を通らぬこそ重疊々々。御邊はあの藤澤寺へ登り、住持に逢うて申さうは、工藤梶原兩人が賴み入る、今日九つの刻限を八つに打ち替へ給はらば、恩賞せんと賺し込み、彼の高所から下を見下し、馬でも駕籠でも早打と見るならば、八つ鐘を撞かせよ、其の時は我が分別有り。もし又住持が否と言はば、片端に引括り、御邊鐘を撞いたがよし、下人も連れて急げやつ。」と、景高は心太屋に入りにけり。近江は下部を引具して、見上ぐる寺の總構へ數十丈に山聳え、常に參詣稀なれば、偶登る人とても、道は木の根の足だまり、眞砂交りに石高く、赤土露

手の錦皿、下し給はつて是れで喰ふ、價は八十五文が所、燃え立つ腹を冷いやりと、四尺八寸の水船一尺八寸の突出し、十文字に突くまゝに、白木の丸箸右手の小腕に持ち添へて、酒もすごし奉る。秩父殿は精進汁花柚散らして進まれたり。和田の一門九十三膳、代物合はせて三百八十四文なり。千葉小山宇都宮、いづれも芥子はお嫌ひにて、砂糖大豆の粉のつこ此の、この〳〵高するゑての暴れ喰ひ、皿も錫猪口も錫箸打つ音がざゝめいて、さしもに廣き富士の裾野に、膳の据場はなかりける。去る程に三千人の勢子の者、三日前から仕過しの、僭上はまつかへさま、巾著振ひ底を叩いて、是れで御免と詫びるも有り、身の爐紅葉色々の、品を竝べて人形に、人の氣を汲む水車、水操も鹽梅よき。」舌を廻して語りける。亭主もほつと息つぎに上下を見廻し、「あれ〳〵東から、乗物に綱付けて人足が引いてくる、ムウ乘つた人が笑止や腸が揉み切れう、ハア、急な用さうな、飛ぶわ〳〵。」と言ふ方より、順風の帆懸船坂を下れる車の如く、えいさ聲してはや乘物、見世前にどうど下し、人足に戸を開かせ、乘手は白布に、胴骨卷いたる仰々しさ。「コリャ〳〵亭主、鎌倉から富士野へ、乘物でも馬でも早打は通らぬか、隱さずとも申せ。」といふ。「ハテ損も德もない事、見たらば何の隱しましよ。早打にも遲打にも、今朝からはこの乘物許り。」「よいわ〳〵水一つ。」と振り仰のいだる顏と顏、小藤太きつと見付け、「ヤ梶原平次景高公。」「さいふは近江小藤太な、よい所で行き合うた。咄す事あ

三重鳴る鐘の、空四つ上り藤澤や、澤邊の水に富士映る、雪さへ暑き夏の旅、空尻馬も徒歩人も、蒸しくる雲に雨を乞ひ、一吹きさつと下さるゝ、涼風價千金と、行き惱む道の傍に、葭簀圍うて杉葉葺く、清水堰き入れ水車、筧の竹の絲筋に、しだるゝ水の柳陰、暫しとてこそ旅人の立ち寄る所、「天下一根本仕出しの家。」と、看板冷いやり冰室山、冰突き出す染付の、南京すゞし錫の皿、樗折りしく青楓、楢の葉もりのたゝりなし。霍亂藥咽に早、秋風通ふ見世商ひ、主は久上の禪師坊、今度の御狩に祐成時致年來の本意を遂げ、富士野は兄弟が命の露の置き所と、便り密かに寺を出で、御骨なりとも拾はんと、懸鬘に姿を替へ十日餘り此の營み、御狩場見廻りの諸方の使大磯通ひ鎌倉の、商人旅人暑を避けて、上り下りの其の中に、祐經が家來近江小藤太、鎌倉への歸るさ見世に立ち寄り「コリヤ〳〵亭主、水くれい。」とぞ横柄なる。「やすいこと、同じくは心太に成されたら、そつちもこつちも後藥、暑氣を去つて渇きをとめ、二日醉のよろ〳〵も、一膳食へば心太、賴朝公も聞しめし、大名小名御相伴の御膳料理、前代未聞のところてん、扨も甘しと舌をまきがり、隨分商ひにせこを入れ、往來の人の腰錢を、狩りとるべしとの御諚にて、見世先に富士を作り、御狩の體を人形にて、水操に仕懸けてお目に懸くる、サア只今始まり。」と、聲可笑しくて拍子とり、「御寮の其の日の御賞翫、靑葉涼しき心太、おなかよしげに一二膳、白皿受けて召されたり。御相伴には五郎丸、赤繪吳須

祈りしは只今、御出仕の折までも言ひ語らひし數々は、捨詞か空言か恨めしの心や。」と、卷いては解き讀んでは泣き、去狀顏に押し當てて、思はずかつぱと身を投げ伏し、聲も惜しまず泣き居たる。有合ふ腰元下女はした、樣子知らねば泣かれもせず、互に顏を見合はせて、溜息ついたる許りなり。「コリャ八平次、どうしたことで暇やると、御口上は無かりしか、樣子は知らぬか、知つたらば聞かせてくれ。」と氣を急けば、「委細の事は存ぜねども、祐成樣御兄弟、蒲の入道殿に方人なされ、賴朝公を討ち奉らん企てと、梶原殿の詞に依つて入道殿には御切腹、それ故旦那は御狩場へ御注進のお使、八つ切との仰せを請け、榛谷と又口論有り、御暇の狀印の笄、渡し申せと仰せより外には何も存ぜず。」と言はせも敢へず、「ムウ聞えた〳〵、安清殿は最早狩場へござつたか。」「イエ〳〵御前で口論最中、今頃お立ちも存ぜず。」と聞き捨ててずんと立ち、脛高々と帶引締め、「誰そ足早な女子共、長刀持つて追付け。」と、言ひ捨てて驅け出す。各慌て縋り付き、「お里へでは有るまいし、恨み言ひにお出で遊ばすはお道理と言ひながら、殿のお歸り待ち受けて詫なさるゝがよい筈。」と止むれば振り放し、「退き去りも有る習ひ、我が身の事は兎も角も、其の儘狩場へ遣りましては、今の恨みつらみより、まさつた歎きも有らうかと思ふ故、搔きたくる程氣が急くもの、まだ〳〵待つてゐられうか。八平次お留守大事にせい、皆の者共賴むぞ。」と、はした一人引具して、振り擔げたる長刀の、道を反らせて

波も朝比奈が、待ち來る寄せ來る磯の波どう〳〵、とゞろ〳〵と踏み鳴らす、女波男波の足はやく、鰭を竝べてひともつれ、ともに御所へぞ參りける。

第二

片削ぎの千木や内外の曇りなき、空も五月の二十八日、式日の御祝儀に、二宮太郎安淸出仕の留守の間には、夫に代る武士の妻、心の障り身の不淨、手水の水に濯ぎすて、袋棚より取出し、紐解く大聖不動の尊像、五月なり緣日なりと、牀に移せば女子共、供へのお神酒お鏡に、向ふ心の眞直なる、冥慮ぞ暗に有り難き。二宮の姉御前心靜かに合掌し、「夫の武運長久御狩の御留守預りて、大切の役目禍ひのない樣に、取別け弟曾我祐成五郎時致、一萬箱王と申せし時、不動を工藤と聞き違へ、勿體なくも尊像を、切り奉らんとまで思ひ込みたる親の敵、工藤左衞門祐經を、首尾よう討たせたび給へ。」と、只一筋の念願は感應さぞと著し。家來白崎八平次遽しく、「旦那より火急の御用、參りつけねど御居間へ。」と、御免を乞はず大息ついで畏まる。女房驚き、「何の御用か氣遣はし、御口上は。」と問ひければ、「何れも同じ御奉公とは申しながら、斯かる御使身に取つての大難。」と、卷き込む暇の印の弃一通を差し出せば、開いて見るや見もわかず、潸然涙の顏振り上げ、「お身も息災御武運も長久と

が請ひ受ける、是非に遣らぬ。」と引き止めたり。「エ、面倒心急き五つの時に程もなし、二十里に餘る道三時切の早打、天狗の羽をも借りたい所、時刻延ばして二宮に腹切らせん企みよな。腕ぶし斬り放す奴なれど、互に御用蒙る身、騒動の上の騒動、命は助くる爰放せ。」と、捻ぢても押しても榛谷少し力增し、縋り付いて動かせず。お次に朝比奈身を揉んで、齒痒くまだるく遣戸口より身を半分、齒噛をなしても母の怖さ、ずつと引き込み、によつと出しては、ずつと引き込み、業を沸かして睨む顔、巴御前きつと見て、「やれ朝比奈ちやつと來て、あがけ〳〵許す〳〵。」「オ、まつかせ。」と跳り出で、「母の御免ぢや忝し。」とつゝと寄り、榛谷が兩腕取つて捻ぢ上げ、「サアおいきやれ二宮。」「急用のお使、物申すも暇惜し。」と、言ひ捨て驅け出し走り行く。「二宮を遣るからは我等に何の言分、こゝを放せ朝比奈。」「オ、二宮は時切、おのれを宥すも時切、知行潰しの米櫃飯櫃かけはんがい、片手に足らぬ中は虚との明きはんがい、御時分能からう朝比奈が、握り拳の握り飯、喰らうて見よ。」といふ空の、霞におつる鐘の聲、ごんと鳴ればぐわんと喰らはせ、又ごんと鳴るぐわんとはる、三つ四つ五つ頭の頭で數とる拍子取る、次に初夜後夜晨朝入相寂滅爲樂、跡はひらゝく天窗の骨、碎けて百八ぼんの凹、撮んで小庭へどうど投げ、「思へば〳〵梶原め釣髭の釣鐘面、はり碎かいで殘念至極、よし〳〵今は逃すとも、我が見込んだは鰐百倍、一度はとらで置くべきか。」と、日數を泳ぐ生死の海、淺瀬は

く梶原めを切り損じて口惜し〳〵。八幡連五十人百人成敗せしとて、誤る筋はなけれども、割符の札の御詮議、一度は切らで叶はぬ腹、世に健氣なる曾我が爲捨てん命、遁世の身の悦び導き給へ南無歸依佛。」と、小脇に突き立て引き廻し、返す刀の切先咥へ眞逆樣に貫かれ、三十五歳五月闇、短き夢と消え給ふ。御臺所の御使者として、重忠の北の方、銀杏御前徒跣足にて驅け付け、榛谷四郎重朝、二宮太郎安清を召し出し、榛谷は死骸ども御預け、二宮は富士野へ早打、蒲殿御切腹曾我兄弟御狩場に紛れ有るよし、狼藉なきうち急度御詮議遊ばせとの御口上、晝八つの時切れ、半時の半時違うても越度、過意仰せ付けらるゝとの御意、大事のお使早う〳〵。」「畏まり奉る。」と、驅け出づる刀の鐺、榛谷四郎聢かと取つて引き留め、「こりや待て二宮、御分は曾我の姉聟小舅の難儀する御使、眞直には得言ふまい。役替して死骸受取れ、富士野へは身が罷る。」と、引き戻して驅けいだす。榛谷が鐺二宮搔い摑んで呵々と笑ひ、「和殿は祐經と相聟、祐經を引く心から、此の二宮を疑ふな、似合うた〳〵。ヤイ一門緣者の好みと御奉公とは格別、ム、疑ひを晴らして見せん。」とどうど引き据ゑ、牀の硯引き寄せ、三行半にさら〳〵去つて去狀、裏さしの暇の印と卷きこんで家來の侍呼び寄せ、「宿所に歸り女共、三世の緣の切れ目なりと申し渡せ。富士野のお使曾我と他人の二宮太郎。」と言ひ捨てて驅け出す、袴腰むんずと抱き止め、「人に心を許させんと、さつぱりだて受取らぬ。御使は榛谷四郎重朝

祐經が出頭を妬み嫉む者多く、曾我を引き御前通路の割符の札、彼等が手に入るまいものでなし。御身の方にも、彼の札二枚受取つて置かれしが、散らさず手前に有るならば、サア只今是れにて一見せん。」「ヤア御邊に咎められ、是れに候 梶原殿とて、おめ〳〵と出すべきか、大事の切手汝等には見せぬ見せぬ。」「扨こそ〳〵見せぬは曲者、曾我に割符を呉れたは必定、推量は違はぬ蒲殿、ヤア蒲燒殿蒲燒の鰻入道殿、ぬらくら拔けても拔けさせぬ。」と惡口雜言手詰になれば蒲殿も、無念餘つて一世の浮沈、急き上したる顔色、巴御前は根元知らず、何事やらんと氣を盡し心を配つて控へたる。「是れ梶原、入道が受取の割符紛失せば何とする。」「オ、曾我は伊東が末天下の怨敵の引入れ、能い仕合で切腹々々。」「ムウ入道が切腹には、冥途の供を召し連るゝが合點か。」「しやら臭い誰を供に。」「梶原平次景高を連るゝわ。」と衣の下の薄氷、一尺二寸拔討に、はつと飛び退く梶原が、烏帽子のまねきを切り落され、後の障子蹴破つて、同じく逃げて犬坊に、續いて逃ぐる八幡が肩骨、脇つぼまで切り下げられ、「うん。」と反るを取つて押へ、胸元を三刀刺し、死骸にどうと腰打懸け、一息ついで立ち給へば、お次外樣の騷動上を下へと返す音、巴御前大音あげ、「蒲の入道殿仔細有つて八幡三郎をお手討、騷ぐな〳〵。御所へ走り御臺所へ注進申せ。御用なき者此の内へ一人も叶はぬ。」と戸口に立つて呼ばはりしは、木曾殿の後家義盛の北の方ぞと物々し。其の隙に蒲殿衣脱ぎ捨て齒嚙をなし、「エ、打物短

や文武の工藤本田、入道が扱ひ不足はあらじ、爭ひを親しみの始めにて、上下相和するこそ、源氏長久國家安穩のもとゐなれ。」と、御詞に花實を交ぜ、面白可笑しき御扱ひ、巴悅び小頷き、お次外樣遠侍聞き傳へ〳〵、あつと感ずるばかりなり。につこりともせず梶原、「イヤサ濟まぬ〳〵、第一本田めが樣に似ぬ大矢、殊に的矢は業の矢とて、親の敵を射る故實あれども、鹿を射る法はなし。サア矢の主の詮議〳〵。」とせりかくれば、蒲殿も當話の返答猶豫して見えけるを、犬坊八幡聲を揃へ、「但し本田が親を鹿に突き殺され、其の敵射たるか何と〳〵。」と遣り込むる。お次に朝比奈堪へ兼ね、襖半身出でんとす。母きつと見て、「又な〳〵、捻り餅ちりけ一炷すゑうか。」と、睨め付けられて身を縮め、引込む顏こそ殊勝なれ。蒲殿ちつとも臆せず、「百樣知つて一樣知らぬとは御邊が事、的矢を業の矢といへばとて惡業の業と心得、親の敵を射る事と、故實を一偏に覺えしな。是れ常に射馴れし矢業よき故、わざの字の聲にて業の矢といふ義なり。靫胡簶に的矢一手入るゝは、侍所瀧口の骨法、親の敵に限らず、鳥をも鹿をも射る時有り、長袖となつたれども、家に生まれ、弓馬の道は入道こそよく知つたれ。いはれざる詮議推參なり。」と、御氣色變つて宣へば、「イヤサ主人祐經を曾我兄弟が、親の敵と狙ふ由念を入るゝが僻事か。」「オ、さもあればこそ、賴朝の膝下離れず用心する祐經、曾我兄弟に翅はなし、何を知邊に御前近く忍び入るべき、用心無用。」と、仰せも果てぬに梶原、「イヤ〳〵、

手習は否がる、物讀は嫌ひで、和田が家が嗣がるゝか。サア今から手習するか。」と、太股をふつ〳〵と抓められて、「あ痛〳〵、手習しましよ。」「物讀するか。」「讀みましよ〳〵あ痛た。」「母がいふ事聞かねば又是れぢや。」「あ痛〳〵。」「捻り餅の味忘れな〳〵。」と、ふつ〳〵抓り引き起し、「行儀ようして遠侍に相詰め、何事有らうとお廣間へ差出でて、慮外したらば又是れぢやぞ、まだ怖い目付止めぬか、ちりけに一炷すゑうか。」と威されてお次へたつ。灸嫌ひの髭男、短慮の病母親の、意見ぞ藥艾なる。程なく、「蒲殿御入り。」と廊下番衆取次げば、梶原始め犬坊八幡出で向ふ。蒲殿暫く鹿に目をとめ莞爾と笑ひ、「なう巴御前、寶を爭ひ地を爭ふは人間世の慾心、それとは替り是れは優しき弓矢の藝、其の爭ひは君子なりと、孔子も是れを譽め給ふ。位爭ひ歌爭ひ春秋の詠めを爭ひし、雲の上人の風骨にも劣るまじ、心憎さよ優しさよ。爰に一つの物語、昔の〳〵とつと昔の其の古、大和國天の香久山といふは女山、又畝傍山耳無山此の二山は男山、香具山姫の艶なる容に想ひをかけ、我が妻にせんいや我こそはと、山と山とが妻爭ひ、夜毎に谷峯震動す。出雲國におはします阿菩の御神是れを扱ひ止めんと、御船を走らせ給ふと聞き、二つの山は中直り、阿菩の神は播州印南野に神止まりまします。此の三つ山の爭ひ、中の大兄の御歌を、萬葉集には載せられたり。今の世までも美目よき女を、お山といふも此の香具山の謂れなるべし。總じて物の扱ひには、心なき山の甲斐も有る、況ん

扱ひの術に依つての事。ナウ女の力と首の無い石佛、外の用に使はれぬ、何の役に立たぬ物。」と、御書院にぞ通りける。物に堪へぬ朝比奈三郎、斯くと聞くより御番所の柘榴の棒ひつ提げて、驅け込む所を母飛び懸り、棒の物打しつかと取り、「ヤイ餓鬼め御殿中を知らぬか、騒ぎを止め穩便に納めよと御意を受けた巴が子、此の棒で誰を打つ。」「オヽ曾我殿原を盗みよ騙りよ、父義盛の不詮議と吐かした奴等、素頭打碎く、怪我なされな。」と捻ぢ上ぐる。「コリヤ打碎く程なれば汝は賴まぬ、あんばく者め又捻り餅喰ひたいか。」と、片足擧げて眞中より、棒をはつしと踏み折つたり。「梶原め八幡め、はり殺して退けん。」と、飛んで出づるをむんずと組めば、朝比奈兩手を差し込んで、親子四つ手に取組んだり。母も母なり子も子なり、汗を貫く頰髭と、風に亂るゝ下髪の、「辷り出でたは母の腹、今は我等が腹櫓。」と、三尺許り釣り上ぐる、巴兩足踏み放し、我が身を重りに持ち上ぐれば、朝比奈も朝腹に、大力の母あぐみ果て、釣り下しつ釣り上げしは、龍の氣さしの六々鱗、沸つて落つる水の勢、鰭を叩いて龍門の、瀧登りとも謂つつべく、母刎返し一放れ、大の男をひつ擔き、どうど落す其の響、祇園精舍の釣鐘を、切つて落すも斯くやらん、御殿も搖ぐ許りなり。泣顔にて朝比奈、むづ〳〵起きる胴骨膝にひつ敷き、「エヽ疎ましの荒者め、親に世話を揉まするなア、かたむくろに曾我を引く、おのれは最屓の引倒し、文武二道の弓取とて、強い許りが武士でない、又しては切つての投げてのと、

取り出し、「是れは北條時政大江廣元兩印にて、鎌倉殿の御前までも内意を達する割符なり。祐經が用心構へ賴朝を後楯、尺寸側を去らぬと聞く。兄弟に是れを貸す、何處までも恐れなく、鎌倉殿の膝下にて晴業の敵討、花やかにして無念を散ぜよ、必ず隱密々々。」と、別れ給へば、鬼王有り難しとも冥加とも詞はたらず、御厚恩忝 涙包めども、心に漏るゝ駕籠乘物、伏し拜み〳〵てぞ 三重 別れ行く。

北の丸の大廣閒工藤本田が鹿論、蒲殿に扱はせ穩便に濟ますべしと、巴御前承り鹿を廂に舁きすゆれば、御留守番の大小名遠侍相詰め、蒲殿をこそ待ち受けけれ。梶原平次景高祐經が一子犬坊丸、郞黨八幡三郞相具し、御廣閒にのさばり出で、八幡三郞目鼻を顰め、「狡々圖ない大矢、御覽成され景高公、小兵の本田が射たればとて一閒も飛ぶものか、是れを射んもの昔ならば鳥海彌三郞、當代は淺利與市殿。然らば矢印有る筈、名を書かぬは合點、阿呆力の曾我五郞時致と言ふ餓ゑ浪人、主人祐經一門のはし每度の無心合力、何貸せ彼貸せもらかせの騙り事も人食はねば、狩場で小盜みせん爲、紛れ入りたるに疑ひなし。和田殿の不穿鑿、兎角梶原殿御父子にかけねば、明白成らず。」とそやされ、「オ、サ別はない、重ねて本田めに射させて見れば忽ち化が顯はるゝ。此の矢は景高預つた。」と拔かんとすれば、「是れ梶原殿、其の矢に指でも觸るが最期、腕を巴が引き拔く。」と、腕捲り脚捲り紅梅もるゝ雪の膝ぶし、骨ふと〴〵と練絹に岩を包みし如くなり。惡しかりなんと梶原、「先づ蒲殿がわせて*

一の谷の大手生田の森を攻め破り、武功と申し御連枝の六十餘州に冠たる御身、梶原が末子なんど我は顔の乘打、御無念察し奉る。我等が主人も伊豆相模に名を得し者の末なれども、運の變に依つて一族に父を討たせ、本領は其の者の秣刈場と成り果てて、昔の劒鏽浪人、貧しき家には故人疎く、世にも人にも侮られ、いつ花咲かん埋木の、身の無念存じ合はせて不覺の涙、問はず語りも御恥かし。」と、又涙にぞ咽びける。入道殿小聲にて「扨は曾我兄弟が下人よな、年月の堪忍さぞ有らん。祐經君の寵に誇り、諂ひを勤めと紛らし世に蔓り、鎌倉武士の風儀を亂す佞臣、エ、齒痒し得討たぬな。入道昔の範頼ならば、天晴力を添へんず物、もどかしさよ。」と宣へば、「御覽の上は包むに及ばず、曾我が下人鬼王と申す者、今度の御狩を武運の時と兄弟忍び巡りしに、昨日の朝敵祐經、山尾越す鹿に目を付け、弓矢番ひ追ひ掛けしを、茂みの影より五郎時致、まつ只中をと急きに急いて放つ矢が、敵の竹笠射かすつて、鹿の草分ずんばと當り、祐經が矢は太腹、難なく鹿は留りしが、時致は隱れなき大力、箆廻太く矢束も拔羣、殊に名乘家名の印もなく、既に矢穿鑿に及ぶべかつしを、秩父殿の執權本田次郎親經、我こそ一の矢射たんなれと、本田と祐經鹿論に取りなし、大事の難は遁れしが、今度の御狩に討ち漏らさば、何時の世にか優曇華の曾我が天運開くべき、御賢察。」と許りいひさして、頭を下げてぞ泣きゐたる。蒲殿も涙ぐみ、「あつたら勇士ども世に埋もるゝ不便や。」と、懷中より木札一枚

旗の、流れは同じ、源の蒲の御曹司範頼朝臣、天下の疑ひ晴らさん爲、修禪寺にて御出家あり、法名源雄と衣を墨に染めながら、鎌倉殿の御舍弟世の覺え重けれども、身持は輕き駕籠乘物、只一僕を侍にも、草履よ杖よ吳竹の、藪醫に紛ふ風情なり。大名小路の升形より、引馬に五つ道具、乘物の戸八文字に開かせ、布袋乘に乘つたるは、梶原平次景高なり。範頼の御乘物道を讓つて片付けば、梶原が近習ども、「蒲の入道殿の御通り、下馬成さるべきか。」と伺ひける。「世捨坊主になんの下馬。」と、顏さし出し坂東聲、「夫れなるは蒲の入道殿な、工藤と本田が扱ひの爲北の丸へ御參か、我ら始め御留守役の大名小名相詰め申す、出頭第一の祐經と、陪臣の本田が鹿論は提灯に釣鐘、鵜の毛のさき程も祐經ひける扱ひならば、爲に能く御座んまい。乘物やれ參れ。」と傳へて八枚肩、徒脚脛、「やつこらさ。」邊をはねて刎馬の、人を蟲とも、「はい／＼。」埃蹴かけて通りしは、存外至極の無禮なり。掘りぬき井戸の方より二十許りの若侍、編笠ぬぎ捨て兩手を土に蹲うたり。蒲殿御覽じ、「浪人か主持か、此方への會釋ならば、お通りやれ／＼。」と手を出し給へども、只、「あつ／＼。」と許り差し俯き、忍び涙に暮れゐたり。蒲殿も斯許りの涙怪しと乘物を、おりゐの衣立ち寄りて、「いかなる人の何ゆゑに、用有りげなる落涙、見捨て難し。」と宣へば、涙に沈む顏打上げ、「直に申すも恐れながら、口惜しの世の中や候、殿は忝くも頼朝公の御弟、九郎判官殿諸共に平家追討の御代官、五萬騎の大將軍、

事よ。」「イヤ上をもどく其方が慮外よ。」と、兩方聲もあら木の眞弓、詞鋭にいひ張りける。御臺所御聲高く、「あれ鎭められよ人々、老中さへ理非を分けぬ鹿論、女の批判およばぬ事、されば蒲の御曹司範頼入道殿、今遁世長袖の身ながら頼朝公の御弟、折しも在鎌倉こそ幸ひよ、北の丸に請じ互に遺恨なき樣に、中分の扱ひ御料簡に任すべし、巴宜しう沙汰せられよ。」と、御褥を立ち給へば、阿古屋つゝ立ち、「工藤左衛門祐經と、匹夫下郎の本田と中分の扱ひとは、お恨めしい御臺樣。」と、御裳袴に取り付く所を常夏引きとめ、「匹夫下郎とはどれどの口から。」「コレ三ヶの莊の主、近江八幡なんど本田程の者は、家來に持つた大名の御前樣、下郎といふが不思議か。」「オ、其の大名の御前樣、息の根留めん。」と爪紅血走る抓み合、百花亂るゝ女中の騷ぎ、巴御前ずんど立ち、兩足宙に俵返し、小脇に抱い込み、「えいやつ。」と締めたる大力、眉も鬘もばら／＼涙、鼻息許りたえ／＼なり。「ホウむつちりと抱き心地よい甘さうな肉合、祐經殿の御祕藏が尤も、さりながら御臺樣の御前で、餘り慮外な口がさがない、乘物下馬まで巴が送る、我儘が言ひたくば祐經殿歸られて、夫婦閨の私語、無理も我儘も睦言は御勝手、人中で我儘言へばまつ此の如く、痛いか／＼、痛い目に逢ふぞや。」と締め付け／＼、「ヤ片荷宛で力に足らぬ、相手の不祥常夏。」と片手に取つて引き寄せ、横抱き締めたる弓手の小脇、下髮垂れて薄化粧、二つ頭の顏の色、我が顏共に三つ巴、太鼓の御門明六つの、雲ほの／＼と三重白

伺候の女中面々の殿御の武藝を身の手柄、御臺所も御機嫌の御前ざゝめく許りなり。祐經が妻阿古屋の前進み出で、「聞き惡き御帳面、秩父の郎等陪臣の本多づれ、我が夫祐經と鹿論さへ慮外成るに、本多が六分の勝とは義盛の依怙贔屓、末世に殘る御記錄、祐經一人射留めしと、書き改め願ひ奉る。」と憚りなく言上す。義盛の北の方巴御前聞きもあへず、「是れ阿古屋殿、本田次郎親經は、秩父の家來といひながら、武藏源氏の歷々、軍の場數は御出頭の工藤殿も及ばず、此の度の御狩にも、假屋奉行夜廻り御直の御用承り、御近習の御家人竝、女房にも御臺所御對面有る程の筋目、誰に恐れ負けてゐるん、義盛が依怙とは工藤殿の奧樣、少し口上が出來過ぎた。」と、膝元に摺り寄つたり。阿古屋色をかへ、「イヤ昔は王の孫にもせよ、今は秩父の徒若黨、そもじも昔は朝日將軍木曾殿のお部屋御臺巴御前、大力の子胤をとらんと、和田義盛申し請けられ、今は我々同輩、其の時々の身の程知らぬ無用の本田が系圖立、然も金泥にて工藤左衛門祐經と矢印有り、本田が矢には家名もなき*平題箭の的矢、狩場の法も知らず慮外千萬の鹿論、御帳面替るか本田が名を消さるゝか、いつまでもお願ひ。」と額髮押し撫でて、まばゆからぬ張臂辯口、末座に著きし本田が女房常夏、「是れ阿古屋殿、慮外といふは馬の乘合座敷の高下、杯の前後などの事、扠は戰場にても目上の敵には太刀打も慮外と、後を見せて逃げらるゝな、弓矢の道不案內で、小差出た批判傍痛し。」と嘲笑ふ。「それ〳〵慮外といふが其の

字に和訓を付け、てには巧みに讀んだりけり。「御帳面の第一の筆も夏毛の麋は、大友の市法師まだ十五歳の小腕の矢先、就中御褒美たり。番鹿は秩父六郎、三町五反の尾上を隔て、鏃こまかき鹿子まだら、御行縢の料たるべし。牛とも象とも紛ひて、三刀かき切つたる肋骨、仁田四郎忠常が、世上の美談に乘つたる猪、御狩一の高名なり。長沼五郎が諸肘さすや岡邊に蓬喰、呦々と鳴く小牡鹿の角、二つに引き裂きて是れを手取の證據とす。はやわざは土肥彌太郎、巖に躓く狼その咽頸を踏んで、叩き留めたる一討の、力鐵鞭恐ろしき、虎狼より盛長が組んで、刺留めし荒熊と、名は明らけき月の輪も、浮んで薄の波はしる、番兎の登り坂、駒馳せちかへ長刀に、のせてとめしは小山判官、皮に疵なく山猪の、眉間の骨を射碎きしは、淺利與市が神頭の弓勢、足高山に足くらべ、追ひもおうたり二十八町、息のかぎりを追ひ詰められ、狐は死して岡部六彌太、是れも手取の高名たり。兒玉太郎が槍玉に、上げて突きしは飛鳥の業、鴈股早く飛鹿の、本首射きる安田三郎、竹下孫八左衛門、向ふ猪に矢はたたず、打ちものにて切りとむる、宇佐美左衛門川越太郎、相馬小太郎結城友重、土屋平山千葉宇都宮、各矢先の高名あり。外に牡鹿一頭、工藤左衛門祐經秩父の郎等本多次郎親經、一の矢二の矢の諍ひ、鹿一匹に矢二筋、祐經太腹本多は草分、六分の勝に候へども、鹿論未だ落居せず、二本の矢は射つけの通り、仍つて終りに記すものなり。御狩場の別當和田義盛判。」と讀み上ぐれば、

曾我會稽山

第一

照射する火串の影の狙ひ獵、狗は獸を追うて殺し、人は其の處を指し示す。今諸君は功犬なり、蕭何が如き勝つ處を指し示すは、功人なりとの故事の心を爰に狩衣、裾野に暫し御宿陣、右大將家の御威勢は、富士より高き鎌倉山、建久四年五月二十八日と、明くるも寅の一天に、虎の御門ぞ開けける。御留守なれども式日の、御禮は御臺所に與奪有り、竹取の間に出で給へば、和田畠山千葉上總、大老執權の北の方を始めとして、工藤梶原宇都宮、土肥佐々木三浦黨、昵近高家の内室達、其の外御譜代由緒有る家の子の妻女まで、夫々の格に任せ、座次を亂さず參列して、二十八日の御禮一度にあつと拜謁有る。袖の縫物綾錦高燈臺に輝きて、金泥砂子竹取の翁が娘の彩色も、光を恥づるばかりなり。斜ならざる御氣色にて、「なう方々富士の御狩の御留守に、幼稚の賴家いひ甲斐なき自ら、各とても女の身、鎌倉を靜謐に持ち固めしも大將殿武威目出度き故ぞかし、あの庭上に列べし御狩の中の勝れ物とて送られし、射手の譽れも顯はす爲、それ〳〵目錄。」と宣へば、中原吉之が妻承り、男文

ねばならぬ。」と、手ばしかく縛り上げ、「身請は濟んだか與平殿。」「いやまだ濟まぬ、金子は千兩一枚の、手形に換へて。」となん與平、親方が前に置く。勘右衞門頭掉り、「來二月には年も明き、身任せになる吾妻、千兩といふ金取つては人の思はく男が立たぬ。金取らずともと申したけれど、よもや左樣はなされまい、跡六月をば三百兩、殘りは入らぬ。」と突き戻す。與平素より氣散じ者、「出來た／＼、手形は取つた金取つた、吾妻が身請濟みました、そつこで請出す三百兩、打つておけ、しやん／＼、ま一つせい、しやん／＼、すつとせい。コリヤ亭主、此の千兩は始めより身請に當てた、一錢でも殘しては本意ならず、三百兩は亭主にはずむ。」「コリヤ忝い。」「二口合はして六百兩、打つておけ、しやん／＼、四百兩殘つて氣に懸る、寄つて祝へ。」とばら／＼／＼、金は座敷に色かへたり。揚屋の男女別ちなく、押し合ひへし合ひ拾ひ取る。「皆取り込んだかめでたい／＼、祝うて三度しやん／＼。」と、手拍子に口拍子、仕合拍子の三々九度、末は千秋萬年も、變らぬ妹脊を重ねける。

壽の門松　終

少ない吾妻、今まで金は儲けてくれる、僞りは申しませぬ。」「ム、おもしろい、代官所の首尾も別條ないか。」「其の段も此方より申し下せば相濟みます。」「珍重々々、下々ども其の革葛籠持つて來い。亭主二個を開かれよ。」「あつ。」と葛籠の紐とく〳〵、中より吾妻與次兵衛正氣になつて立ち出づる。彥介はびつくりし、親方亭主も興覺顏、治部右衛門は包みかね、「ヤレ與次兵衛か治部ぢや〳〵、無事な顏見て嬉しや。」と、あとは言はずの悅び淚。與次兵衛も頭を下げ、「何事も御免あれ、親淨閑へお詫言。」「賴むに及ばぬ淨閑の心入も聞いて居る、吾妻もいかい苦勞めさつた、ナウ親方殿此の一腰に引換へて、吾妻を身共に下され。」と手をつけば、吾妻も、「久しい九郎左樣、旦那樣へお詫言、賴みまする。」と泣き居たる。與平勇んで彥介を取つて引き立て、「おのれよう聞け、此の與平が江戶へ稼ぎの根本は、吾妻殿を請出して郭の苦患を助けんと、思ひ込んだる一商ひ、五百貫目に間の無い金、手間隙入らず儲けため、立ち歸る途次、與次兵衛殿にもお目に懸り、樣子は段々聞き屆けた、おのれを切つたは此の與平。與次兵衛殿に難儀を見せ、金銀大分取つたな、打ちのめしても腹癒ねど、めでたき時節ぢや、とつとと歸れ。」と突きはなせば、「ア、有り難や正月も此の座敷で取つて投げられ、跡は切られて今日は又、殺さるゝかと思うたが、お助けはかたじけない、三度の數が合ひました。」と、逃げ出づるを治部右衛門、腕挫ぎに取つて投げ、「己は何うも往なされぬ、淨閑が言譯させ、閉門御免請け

り飾らせたり。「前後の爭ひなさるれば、此の浪人者は一番。」と、呼ばはつて座敷に出で、「身請の代金此の一腰。」三千貫の折紙と、共に投げ出す形恰好、中身は見ねど與次兵衛が物語りの治部右衛門、擬ひなしと難與平、口を閉ぢて窺ひ居る。亭主九郎左は、福德の三方論議に行き當り、「兎角は親方料簡次第、呼びにやらうか身が參らう、それはご九郎左〳〵。」と獨語して驅け出す。跡は互の睨み合ひ、彥介は手懲りした、與平が顏の氣味惡く、心も心ならねども、見付は嚴い服部育ち、煙草盆引き寄せて、煙吹き出す佛頂顏、煙管ぞ迷惑灰吹を、敲いて返事を待ち居たる。吾妻が親方勘右衛門、亭主に連れて座敷に出で、「樣子は九郎左物語り、吾妻が手形を身請とは終に郭に無い格にて、兎角のお返事申し難し、何れへ手形上げましても、此の事世間に流布あつて、驅落させた後にても、金さへ遣れば濟む事と、惡い性根を吹き込まれ、其處にも驅落爰にも逃げた、又しても關破りと、郭の騷動親方仲間の難儀なり、此の相談は成りますまい。一旦吾妻が顏を見て、其の後では好い樣に。」と聞きも敢へず、「聞えた〳〵、餘人は知らず此の彥介、早速吾妻を尋ね出し、身請はおれぢや詞を番うた、罷り歸る。」とずんど立つ。「左樣はさせぬ。」と難與平、小腕取り引つ擔ぎてどうと投げ、背骨にしつかと打跨り、「逃足も往足も達者に生まれついた男、動かば頭はり碎く合點か、藤屋の勘右尤も千萬、今の詞は聞き處、吾妻が顏を一目見たらば、其の座で身請は違ひないか。」「何の虛言申しませう、末に年期の

換と、奧の座敷に居られます、親方へはまだ知らさず、お前と一所に親方へ、言うて見ましよ。」と立ち出づる。表の騷ぎは葉屋の彥介、どか〱と入り來る。「コリヤ珍らしい旦那。」「とれたか〱、果報な九郎左、金儲けうなら我等に廻れ、輕いお出でが身請の談合、きついか〱、知つた通り此の春早々、山崎の與次兵衞めに、小鬢先をちよつられた、弓矢八幡堪忍せぬ氣、代官所へも訴へ親淨閑に御預け、內證から手を入れて段々と詫言する。金銀で扱へば百萬兩でも聞かぬ男、コレ見よ疵も平癒した、與次兵衞めは憎けれども、親めが心が不便さに、許して遣つた其の禮とて目腐り金、樽代としてよこした、酒戻しはせぬ物故、まあ受取つて置いたぢや。吾妻めが關破りも與次兵衞が唆し、お預けの內を連れて逃げた、淨閑は其の祟りに、吾妻與次兵衞尋ね出すまで、道具諸色に封印付け嚴しい閉門。聞けば與次兵衞めはのたれ死したげな、出れば其の儘切らるゝ首、仕合者ぢやあるまいか。扨談合は吾妻が事、關破りの科人、此奴が命も助からぬ、佛性に生まれ付いたが彥介が病ぢやわ、是れも助けて取らせたい。まづ吾妻めが手形を請出し、跡では緩々行方を尋ね、飯でも焚かせすゝぎ洗濯、手足擦らせ一生は、養ひ殺しにする覺悟。彥介なりやこそかうもいへ、相談して埓明けい、コリヤ現金ぢや。」と五十兩、亭主が前へ投げ出す。與平は始終を聞き濟まし、「御免。」と襖押し開き、「亭主亭主、吾妻が身請は身が先ぢや、金子は是れぞ。」と持たせたる、千兩包の木地の臺、前へずつし

難波潟梅に名を取り松繁り、紅葉の錦晝さへや、夜見世を新たにお許しと、疾しや遅しと見にくるわ、四筋の町の軒深く、燈火星の如くにて、三五以上の月の顔、さす汐影のわけもよき、局々の手拭は、濡れぬ隙こそなかりけり。太鼓は打たで大門に、轟く馬の高嘶き、井筒が許へ乗懸けの、客は八幡の難與平、威勢美々しく飛び下るれば、亭主迎ひの槌で庭はくまい、「九郎左見忘れか、當正月には造作の上、貴殿が世話になん與平、以前は金銀内大臣、今日參るは内證に、樣子も金もある大臣、罷り通る。」とつつと入る。「誠に左樣よお珍らし、先づお茶煙草。」と輕薄に、油載せたる燈臺も、早立ち替る蠟燭の、流れの里ぞ氣散じなる。「九郎左近う。」と招き寄せ、「知らるゝ如く此の正月、藤屋の太夫に貰うた金、直に東に芽を出して、人いためずのどか儲け、馬の脊骨も折甲斐あつて、此の度罷り歸る處、太夫吾妻は郭を逃げ出し、關を破りし科人と、行方を求め探さる由、道中ながら承る。恩を受け詞を番ひし此の與平、捨て置いては男立たず、彼を受出し世を廣うしてやらん、吾妻が年期の證文あらん、此方へ貰ひたし、金に換へて今宵の内に首尾する樣、九郎左御差配々々。」と、ちよつとの露もしつぽりと、家内潤ふばかりなり。「おめでたい／＼、お聞きとあるからは申すに及ばず、さりながら不思議な事がござります、今日暮方に田舍めいたる浪人衆、吾妻は此處に居られずとも、手形なりとも身請がしたい、金はなけれど一腰の宇多國行、二尺ばかりのだんびら物、折紙ともに引

乘せ、今日は故郷の焦れ泣き、我から狂ふ秋の葉の、亂れて袖におきもせず、寢もせで露の偶も、待たるゝとも待つ身になるな、親と子の便りをしのぐ山崎の、妻もさこそは亂れ髮、言うた詞が力ぞや、私が馴染は三重の帶、長い夜すがら引きしめて、妬み悋氣の心なく、預る物は半分の、主は忘れて居さんすか、過ぎし月見は井筒屋で、底意隈なき夜と共に、踊り明かした面白さ、私や百までも忘りやせぬ。ヲドリ唄 忘れぬものよ見飽かぬ君が、外八文字の道中姿、目付で殺す所體になづむ、*傾城こまめにたらひが女房、請出したらひの底脱けて、影も宿らぬきぬ〴〵の、親を悲しみ妻を戀ひ、心一つ二しなに、*名乘りて過ぐる杜鵑、しやが父に似て父に似ず、子は色里に初音ふる、タヽキ 冠は被ねど大盡と、花車が轟く口舌の門、遣手が叩く禿が睡り、みな夢の間の境涯と、破れば*ぐわちもなかりけり。かくと知れども柳の絲の、おどろを亂す山颪、激しき親の諫めの詞、妻が別れの一言葉、身に沁み沁みと戀しやと、互に手に手を取り換し、聲も惜しまず泣き居たる。夕陽岫に程もなく、西北に風起り、東南に向ふ空の足、梢木の間もはら〳〵〳〵、小川の水音さら〳〵〳〵、雲の羽袖もひら〳〵と彼方へ靡き此方へ靡き、くるり〳〵くる〳〵、くるりと廻り廻るや、月は行けども果てしなき、思ひは目前親の罰、當つて碎くる男の姿、走れば走り留れば留り、狂はぬ袖も亂れ心、命つれなき流れの身、流れ渡りの世の中に、しばし留まる賤が家の、軒を尋ねて 三重 惱みけり。

籠の足、せめてかたして留めもせず、戀の重荷に小付して、親子の哀れ打乘せて、別れ行方や　三重

下巻

與次兵衞吾妻道行

唄 春に育つも花誘ふ、蝶は菜種の味知らず、菜種の蝶は花知らず、知られず知らぬ中ならば、浮れそめまい、狂ふまいもの味氣なや。吾妻立ち寄り、「オ、嬉しやお心も靜まつたか、アレ御覽ぜよ蟲でさへ、番ひ離れぬ揚羽の蝶、我々も二人連、粹な同士の中々に、お心弱や。」と諫むれば、唄 吾妻請出せ山崎與次兵衞、請出せ〳〵山崎與次兵衞、何時か思ひのナ下紐解けて、昔思へば憂や辛や、憂や辛や忍ぶ昔も憂や辛や、情なや誰あらう、山崎與次兵衞樣とて人々に、後れぬ髮の亂れ心、吾妻が顏も見忘れて、現なやと制すれば、唄 其方は藤屋の吾妻かの、與次兵衞に揉まれて、色の惡さよいとしさよ、近い内には必ずと、請けて樂さしよ世帶して、子供設けて二人が連れて、お乳が肩くまおてゝが日傘、肩で風切る山崎に、親の御恩を振り捨てて、そなたの世話になりふりも、昔には似ぬ男山、今では人も秋篠や、外山の松よ事問はん、待つが辛いか別れが憂いか、待ちも別れもせぬ樣に、親の許した女房は、義理と情の二面、かけて思へど甲斐もなく、半太夫 今は野末の放れ駒、昨日は吾妻に戀を

してやるぞ、南無阿彌陀佛。」といふ聲に、「申し〳〵落ちませう、待つて下され親父樣。」と、撞と伏してぞ泣き居たる。「ム、しかと落ちるか。」「何の僞り申さうぞ。」「ヤレ嬉しや落付いた、今までの不孝皆許し、三十年の孝行をたつた一度に請取つた、死んだ婆も嬉しからう、お菊には親がある、淨閑にはお菊がある、跡には少しも氣遣ひすな、連の女中があるさうな、嫌がるとも灸すゑさせ、酒飲ませて下さるな、馬では人が面を見る、高くとも駕籠に乘れ、賴みまする。」とそこ〳〵に、心は千筋百筋の、縞の財布を投げ出し、「さらば。」と許り言ひさして、跡は涙に咽びけり。與次兵衞猶も有り難き、親の恩と妻の思ひ、別れの辛さにうつとりと、氣ぬけの如くよろ〳〵と、前後も分かず見えければ、「これ吾妻ぢや合點か、あれは奧樣お菊樣、さらばとせめて言はんせ、ヱ、氣の弱いお人や。」と、力をつくる我が身も、人目を深く忍ぶ夜の、「いざ相駕籠。」とさゝやきて、袖打ち拂ふ春の霜、「駕籠の衆おぢや。」と招きけり。お菊の聲もうらがれて、「なう何方に落付いても、其の儘御無事の便りを待つ、泊り〳〵の朝晩に、冷えぬ樣に賴むぞや、何やら言ひたい事共が、胸にはあれど口へ出ぬ、只御無事で息災で。」と、いふより外は泣く許り、誠をいはば我こそは、夫を連れて退くが道、何ぢや妬み憎んだ人、相駕籠で遣る妬ましさ、羨ましさと悲しさと、涙の筋は多けれど、愛しい許り一道に、見送る駕籠も遙々と、「さらば〳〵なうさらば。」の、聲を紛らす後夜の鐘、跡へ戻るは雲の脚、先へ急ぐは駕

先が無事でも、取り逃したる咎めにて、それ程の罪は親父樣の身に係る、其の難を厭はぬ慈悲心、親父は親の道が立つ、與次兵衛は今日まで始終親の氣に違ひ、剰へ親を身代りに、逃げて命助かり、百年千年生きるとて、入交りもならねば、天地の内には住まれぬ、お心をもどくでなく、歎きをかくるが面白うは無けれども、矢張此の儘死なせてくれ、命を捨てて一生の孝行がして死にたい。」と、聲を上げて泣きければ、「これも亦お道理。」と、二人も心破りかね、泣くより外の事ぞなき。淨閑内より聲を上げ、「お菊／＼、不孝者めが落ちまいといふさうな、エ、／＼情ない哀れ知らず、七十になる淨閑が、もがられたといふ外聞悪さ、人にこそ知らせね、内證手を入れ二百兩まで扱うても、足元見て千兩でも聽かぬといふ、淺疵とは聞いたれども、人の生身何うあらうかと、親の案じは如何思ふ、將棊で心を紛らせば、結句傍から氣を付けて、思ひ出す程胸苦しい、宵から心粉にはたいた桝落し、量つても量られぬ、親の歎きを思ひやれ、一生子でも居るまい、一度は親にもなり居らう、胸の中が知らせたい、落つるか落ちぬかはや吐かせ。」と、聲荒けても泣顔は、壁より外に漏れにけり。與次兵衛涙に平伏して、「有り難いお詞程、如何も此の與次兵衛、此處が立つて落ちられぬ、眞平御免。」と伏し沈む。「ム、よい／＼、年寄つた親を持つ者は、一日も親を先だて、其の身息災で年忌追善、弔ひたいと願ふぞや。己は親に弔はれ、歎きが懸けて見たいか、サア此の合口、皺腹へ突込んで、望みの通りに

で、落しにかゝる事ぢやない。定めてぢい鼠もあらう、其の巣へ屈んで、此處らさへ影を見せねば、鼠落しも音なしになつて濟む。此の度の枡落しによう懲りて、夜毎に桁走り棚走り、杯囓つたり、親の小判咬へて盗んだり、暴れ廻る事ふつ／＼止め、後には＊白鼠の富貴と榮えるを、親鼠が見る嬉しさ何うあらう。癡氣鼠の狼狽鼠、此の合點が往かぬかと、おりや此のごろ夜が寐られぬ。」と、涙に聲をふくませば、「如何にも／＼、お慈悲な鼠算用、成程私が逃しませう。」「オ、滿足々々、ざつと胸が開いた、此の頃心に此の事許り、持佛へ參つても佛の顔も見えなんだ、嬉しや今宵から、心靜かに看經せう。」と、念佛力の後姿、見るに心ぞ遣瀨なき。與次兵衛走り出で、聲をしるべのかたじけ涙、おきくは舅の足跡を手に戴いて、「吾妻樣、與次兵衛樣、今のお慈悲を聞かつしやつたか、早う此處を退く程がお心安め孝行、淨閑樣の起き臥しは此の菊が居るからは、今までより猶氣をつける、跡に氣遣ひ遊ばすな、お前に誰ぞ付けたいが、アウどうがな。」と案ずれば、「これお菊樣、それには此の吾妻が居る、命を捨てて出た郭、二度歸る心はなし、お前さへ御料簡お供せよとあるなれば、私や忝い郭へは歸らぬ。」と、思ひ詰めたる詞の末、「オ、そんなりや跡先首尾が好い、サア更けぬ先に。」と引き立つれば、與次兵衛袖を打ち拂ひ、「さうでない／＼、人の父としては慈に止まり、人の子として孝に止まるといふ、預り者が驅落し、先の相手が死ぬれば、忽ち親は下手人に捕られ首刎ねらる。たとひ

自害させまし、私もお供と剃刀も用意しました。お主の名も流さず、私も情の御恩に命捨つる志、お前の御縁は妨げぬ、たつたま一度お顔見せて下さんせ、其の目を直に塞ぎます、ナウお慈悲ぞや。」と、懐中の剃刀喉に押當て、婆婆の名殘と涙さへ、思ひ切つたる哀れさに、お菊はやう／＼胸開け、袖引きとめて、「これ吾妻殿、義理にも命捨てうとは、僞りにはならぬこと、心底がいとしい、主も定めし逢ひたからう、沙汰なしに密と逢はせましよ。」「ア、有り難い料簡深いお菊樣、大事の殿御を澤山に、だいて寐ました堪へてや。」「ハテ取り返されはせまいし、それだけ此方の仕合。」と、心解けたる路次の中、「お菊／＼。」と呼ぶ聲は舅の淨閑、鼠取の桝落し手に持つて、嫁は何處にと立ち出づる。「アレ爰へ親父樣、折が悪い先づ少時。」と、吾妻を塀の小陰に隱し、「まだおよりも遊ばさず、夜更けて何でござります。」「イヤ別の用はない、これ見やお菊、若い奴等が仕掛けて置いた桝落し、はつたりと響いたゆゑ開けて見たれば、鼠は逃げて往んだと見えて、桝の内には何にもない。是れでつくづく世の中の悟り開いた、中の餌食を頼みにして油斷すれば、落しに罹つてつい殺さるゝ、思ひ切つて餌を捨て、逃げて退けば其の鼠が命を助かる許りか、親鼠舅鼠女房鼠もあるであらう。此の一家一門の鼠共が悦び、別して老鼠の親鼠が心の安まりは、いかばかり嬉しからうぞ。若し若鼠の分別なしが、逃げた跡で、親鼠が又落しに罹らうかと、由ない意地を立て居らうが、いかな／＼親鼠は老巧

大事の家業も餘所になり、内は野となれ山となれ、夜を日についでの里通ひ、親御の不機嫌世上の惡口、此の度の難儀それ見たかと、いよ〳〵人の嘲り、我とても女の身、腹が立たいであるものか。夫の恥辱さがない女房と、いはれまいと嗜んで居れば、お菊は奇特な悋氣せぬ賢女々々と、賢女ごかしの拜み倒しに逢うて、吾妻殿に睫讀まれ居るわいの。此方を女郎かと思へば鬼か天魔か、此の剃刀で人の男に死ねとは。死んでよくば此方一人死んだが好い、大事の男の膚はあらされ、心の底は見探され、世間に惡う謠はせ、生きる死ぬるの難儀も誰ゆゑぢや。傾城殿其方ゆゑ、いき傾城の恥知らず。」と、積る恨みの高聲に、與次兵衞も障子そつと明け、彼方も此方も道理詰、道理の無いは我許り、二人の心思ひ遣り、顏は焚火の冷汗に、消えも失せたき許りなり。「いか程お恨みお叱りも、お前に逢うて此の吾妻が、申し上げう詞はない。引手數多の身の上さへ、悋氣妬みは女の常、お心堅い町育ち、誠なき傾城めが瞞しての賺しての、憎や〳〵はお道理ながら、與次兵衞樣に逢ひましたは、女房にならうとも手かけ妾にならうとも、申し交した事もなく、勤め許りも馴染だけ、夜を日にますおいとしさ、女子の泥む風俗、好い殿御持たしやんした奥樣、お世話はお前お一人。此の度の騷動も人違ひを頼もしづくで、お身の難儀も私から起る、相手も軈て死にそなげな、悲しいは我が身一つ、知らせて覺悟もさせましたく、郭を忍んで此の有樣、見付けらるればみせしめに逢ふも合點、相手が死んだら

傳ふ足音の、「サアこれぢや。」と飛び立つばかり。「與次樣ぢやないかいな、あるにもあらず吾妻が見舞に來たわいな。」と、聞くよりお菊はつとして、さても太い傾城め、どうする事ぞ試みんと、内より壁を懷かしげに、ほと〳〵敲けば、「ム、聞えたか、定めし何處も締つて入る事もなるまいと、私が心に思ふ事、こま〴〵と此の文にあり、とつくと讀んで自筆の返事見ますれば、今生の本望。」と塀越に投げ込んだり。「ハア、誰が拾はうも知らいで、女房のある男の屋敷、遠慮もない。」と披けば、見知つた〳〵。朧月にも見違へぬ吾妻が筆、仔細らしい一つ書き。此の剃刀は私が研ぐ心の刃、もしもの折は必ず〳〵、さもしい者の手にかゝらず、淸い御最期候べく候。時は違ふと日は同じ日、最期處はかはるとも、來世はひとつ蓮葉に、永き契りをめでたくかしこ。エ、此の剃刀の入れざまは、どうぞお命助けたさ、女房舅が泣きしづみ、父御樣とも爭ふ程の大事の命、澤山さうに死ねと書いた此の文に、めで度かしこは何ぢやの、男共に言ひつけ叩き出してくれうか、イヤそれ程夫の名が立つ、直に逢うて言うて退けうと、路次の戸開き立ち出づれば、「ナウ與州樣か懷かしや。」と、縋り寄る手を聢かと捉り「音に聞いた吾妻殿か、今の文も見ました、私や與次兵衞殿の女房きくといふもの、遙々の處ようござつたの、定めて主に逢ひたかろの。知らしやる通りの難儀で、アレあの座敷に押籠められてはござれども、おれが逢はせぬ、ア、此の菊が逢はせぬ。吾妻どのにはとうに逢うて禮言ふ筈、此方ゆゑに

は果報ぢや。」と、涙に咽び立ちければ、舅も恨みいふ事も、泣く〲表へ立ち出づる。跡にはお菊將棊盤、何處へ取り付く島もなき。「淨閑樣のお詞の、道理は聞えた樣なれど、金銀なければお命ない、あの内藏の金箱も、用に立てねば將棊の駒も同じ事、ア、慈悲のない親御や。」と、浮世の賴み涙にくれ、無常心や入相の、鐘物凄く 三重 暮れ渡り、鴈の數讀む朧月、泊り烏の寄邊なき、藤屋吾妻がわくせきの、思ひを乘せて在所駕籠、淀の川水流れの身、海道行くも山崎、歸るも山崎、霞が内の畦傳ひ、そりや打渡す丸木橋、見馴れぬ目には怖ろしく、駕籠を留めて下り立ちて、所體作るも町風に、譯なき夜半の松の風、裾吹き返し呼び交し、戀の山崎そんじよう其處と、人の敎へし家並も、所稀なる家造りの、裏門塀のかゝりまで、扨は爰ぞと知られける。「駕籠の衆、此處が與次兵衞樣のお屋敷、塀越に見ゆるがお部屋さうな、いとしやあれに押籠められてこそ、わしや彼處へ往くぞや、ちつと隙が入らうとも必ず待つてや、戻りも賴むぞや、煙草が無くば進ぜうか、つい往て來う。」と裾輕く、寄る程塀の高ければ、伸び上り〲、伸び上りても燈火の、影も通さず隙間なき、用心嚴しき内の體、嵐と共に路次の戸を、敲いて我が胸躍る、耳を壁に押し當てて、聞けどひつそと音もせず、何時までかうして居たとても、誰がしらせの便りもなし、吾妻が來たと呼ばらうかと、佇む足は釘冰、身も冷え渡り冴えかへる、火燵さへなき座敷牢、いとしや寐てか起きてかと、お菊が見舞ふ駒下駄に、飛石

婆の、夫婦合まで不和になり、我が子の命に替へぬ金銀、さぞや親類縁者が飢死するとも構ふまい、我こそ浪人主人持つた一家もある、物知らずと縁を組み、一門の名を汚す、無念至極。」と許りにて、喘きあげ／＼泣きければ、淨閑もしば／＼目、「侍の子は侍の親が育てて、武士の道を敎ふるゆゑに武士となり、町人の子は町人の親が育てて、商賣の道を敎ふるゆゑに商人となる、侍は利德を捨てて名をもとめ、町人は名をすてて利德を取り金銀をためる、是れが道と申すもの。如何なる大病難病も、病には療治種々あり、國法で取らるゝ命には、人參で行水させても、いかな／＼助からねど、金銀では助かる命の買はるゝ金銀、大事の寶といふ事を、與次兵衛めが知つたれば、此の難儀は仕出さぬ、なんぼう惜しみ貯へても、死んでは帷子一枚とは、此の淨閑も知つたれども、死ぬるまで金銀を神佛と尊ぶ、是れが町人の天の道。金の罰の當つた奴、まだ此の上に惜し氣もなう、金出して如何なる天罰大難にがな遭ひ居ろかと、可愛い程猶出しかねる、吝い名を取る此の淨閑、金銀許り惜しむでなし、塵灰まで惜しい物、たつた一人の伜が命、惜しうなうて何とせう。」と、坊主頭を將棊盤、とんと投げ伏し泣きけるが、「治部右殿のお恨みも壻可愛さとは存ずれども、左程に思召すならば、何故日頃引き寄せて、意見もして下さつたら、斯樣の事は出來まいものと、我が子の癡氣は思はず、脇がかりの恨みが出る。子ゆゑには愚鈍になり、不調法申すも存ぜぬ、奥へ參る治部右殿、ア、死んだ婆

て見る氣はござらぬか。」「我等が吝いは知れた事、座敷牢へ入らうが、都詰にならうが、金銀は手放さぬ、歩あしらひで見しらせう。」「此方も歩を以てぶに首を提げらるゝが、悔みはないか。」「構はぬ構はぬ、先づ逃げて居ませう。」「コレ其の内に香車の槍を以て槍玉に上げらるが、それでも金銀出すまいか。」「勿體ない事。槍玉に上げられうが、獄門に上らうが、手前の金銀は放さぬ〳〵。」と、兩馬強き慾の皮、傍でお菊は氣を揉みて、包む涙も手見せ禁、命手詰と見えにけり。治部右衞門腹立顏、盤中の駒搔き寄せ引摑み、淨閑が眉間にぐわらりつと投げ付けたり。お菊はつと驚けども、淨閑はびくともせず。治部右衞門膝立て直し、「恥を知れ淨閑、あひやけはもと他人、駒を頰へ投げ付けられ、咎めもせぬ恥知らずに、いふも國土の費えながら、將棊に事寄せ金銀出して扱ひ、與次兵衞命助けよといふあてこと、合點せぬお主でなし、歩に首を提げられ、槍玉に上げられても、金銀とては出さぬとは、治部右衞門に氣をいらせ、面白いか可笑しいか、其方も獨り子此方も獨り娘、兩方共に懸替なし、壻を子と思うて居るが、嫁を娘と思はずか、與次兵衞が斬られたら、可愛や菊が歎かうかと、思ひ遣つてたもらぬは、エ、さりとては恨めしい、緣組の時婆が留めて、小身なりとも侍に緣組みたい、何ぼう分限者金持でも、町人とは馬が合ふまいと、くれ〴〵留めた、否々名に觸れた山崎淨閑、武士交はりもする仁と、我一人情張つて、此の頃婆が恨み言、お主が吝い無慈悲から、五十年添ふ爺

昨夜から盤の上とつくと見定め、工夫した相手とさすはこはもの、お手は此方かサア遊ばせ。」「まア飛車先の歩をつきませう。」「ヤ此の成金して遣らうでの、かう寄りませう。」淨閑頭を叩いて、「ハア、南無三、此の馬落ちた、深田に馬を驅け落し、引けども上らず打てども行かぬ望月の、駒の頭も見えばこそ、むづかしゆなつた。」と案じける。お菊盤の側に寄り、「これ父樣、彼方の方が落ちれば此方も落ちる、兩方の睨みあひで何時までも埒明かぬ、迷惑する駒はたつた一枚、淨閑樣のお手には金銀がたんとある、慾を離れて金銀さへおうちなさるれば、これ此の父樣の向うの淨閑樣の此の馬は助かる、何卒手にある金銀を打ち出させます樣に、思案して見さしやんせ、合點か〳〵。」と袖を引けば、治部右衞門打首肯き、「オ、〳〵〳〵能う智慧付けた呑込んだ。」と、いへども淨閑氣も付かず、「親ぢやと思うて助言いふまい〳〵、又ちよつこりと歩で合いたぞ。」「ム、シテお手に何々。」「淨閑が手には金三枚銀三枚、歩もござる、此の歩で廻したらまだ金銀がふえましよ、いかい金持うらやましいか。」「金持とは此の角が睨んで居る、かう寄つたらば金銀出して打たずばなるまいぞ。」「でも金銀は放さぬ、桂馬をあがろ。」治部右衞門堪へかね、「ハテいかい吝嗇坊、澤山な金銀握りつめて何になさるゝ、來世へ持つて往かるゝか、これ御覽なされ、此の飛車をかう引けば、天にも地にもたつた一枚の此方の此の王が、片隅へ座敷牢の如く追籠められ、今の間に落ちるが、金でも銀でも打ち散らして、圍う

たかと、仕懸けた喧嘩、身が斬つたも同然。殊に其の切手とは男同士の義理ある中、奈落の底まで此の與次兵衛が切つたになつて、相手が死んだら切らるゝ覺悟。とは言へ彥介め、左程の疵ではなけれども、ねだつて金にするもがりとは鏡にかけた事。見す〳〵金で買はるゝ命、此方の藏の金銀では買はれぬさうな、預けられたは母の命日、皆是れ親に不孝の罰。」と、投首するぞ不便なる。「されば私が父樣も、それを言うて淨閑が聞えぬ、吝いも事による、千兩二千兩いればとて、獨り子の命にかへらるか、慾をさへ離るればつい埒の明く事。口惜しい此の治部右衞門、浪人の身でなくばと、くい〳〵言うて恨み言。多分今日も見えませう、父樣の袖引いて恥ぢしめて言はせたら、何ぼ吝い親父樣も、得心なうて何とせう、アレ父樣の聲がする、聽て好い事聞かせましよ。」「もう往にやるか、又後に見舞うてたも、いとしや寂しからうの。」と、夫婦の顏も打萎れ、淚隔てゝ引き立つる、明くる障子の明りにも、暗む心ぞ哀れなる。與次兵衛見舞として毎日淀の渡し舟、梶田治部右衞門はあひやけの壻を思ふも娘の爲、老の心を惱ませども、父淨閑はさもなくて、「ヤ治部殿お出で、昨日の指掛けの將棊勝負付けましよ、サアござれ。」「これは餘りな淨閑老、拙者が毎日老足を運ぶも、與次兵衛事氣遣ひさ將棊さしには參らぬ。昨日の勝負は何方へなりと、付けてお仕舞ひ〳〵。」といへども、「否々馬鹿奴が事は運次第、昨日の駒動かせず置きました、サアござれ〳〵。」「然らば勝つても負けても是れ一番、

中巻

覺つかな、*罪なくて配所の月を見んといふ、古人の物數寄如何なれや、日影も見せぬ座敷牢、九軒町の喧嘩は、薬屋の彦介手負ひし事、代官所の沙汰となり、相手山崎與次兵衛と訴ふれば、與次兵衛も男の義理、難與平とは顯はさず、我が身の科に引き受け、親淨閑に預けられ、相手の疵は養生し、死ぬるか本服か、二つ一つの左右次第、我も生きる瀬死ぬる瀬を、定めかねたる飛鳥川、明日が日知らぬぞ力なき。一家の内に取分けて、女房お菊の物思ひ、一日も氣を詰めぬ人、煩ひも出でようが、何がな心慰みと、あぶる餅も我が胸も、共に焦るゝ庭傳ひ、障子明くれば與次兵衛、色も靑ざめうつとりと、氣あひ惡氣に俯けり。「二三日はお食も進まぬ、何處ぞ惡くば藥でも參りませ、自體お前の短氣が、私が明暮苦になつた。若し私にいたづらあらば、先の相手を切りも殺しもなさるゝ筈、ハテ傾城は賣物幾人にも賣らいでは、よしない法界悋氣から、此の難儀も起つた、但し其の吾妻と私とひとつに思うて下さんすか。こんな事知つたらば、一寸も出すまいもの、悋氣せいで今では口惜しうござんす。」と、恨みまじりのうろ／＼涙。「いうてたもるな／＼、一天下の人よりも、そなた一人に恥かしい。さりながら石淸水八幡宮も照覽あれ、身は斬らぬ、なれども彦介めが、與次兵衛やらぬ覺え

今宵一夜は苦しかるまい。」「否々一歩は寸の初まり、油斷は稼ぎの大毒。」と、帶引き解けば吾妻取り付き、「寒い折柄御遠慮無う、矢張小袖を召しませい、道中も大井川とやらいふ川は、いかう危い事ぢやげな、御無事で吉左右待ちまする、やがて。」と別れ與次兵衛も見送つて、「與平殿山崎には兄弟ありと、此の與次兵衛御心便りに思召せ。」「慮外ながら、江戸にも兄弟ありと思召し、互の無事は狀通。」と、別れて跡は戸障子しめ、月も雲居に寐靜まり、松に嵐は鼾して、與平は九軒を一足二足、三番太鼓打ちやみて、郭寂しき折こそあれ、待伏せしたる葉屋の彦介、蛇目の紋をしるべにて、與次兵衛と見るよりも、瞞し賺してはたと切る。ひらりと外し難與平、「さては宵の白癡者、意趣がへしの待伏せか。」と、つつと入つて跳ね倒し、小刀を逆手に滅多突き、眉間を突かれのた打つて、「ヤレ人殺し。」と聲立つる。見付けられては出世の邪魔と、おくれを見せぬなん與平、風を追うてぞ逃げ失せける。町中俄に騷ぎ出し、「棒よ熊手よ提灯出せ、大門うて。」と犇けば、彦介はうろ〳〵と、「相手は山崎與次兵衛、井筒屋の客めぢや。」と、喚き立つれば與次兵衛、聞くより胸にはつしと堪へ、「與次兵衛これに。」と立ち出づる。聲をしるべに彦介は、後より慥かと抱き留め、「相手は捕へた組伏せた、騷ぐまい。」といひければ、吾妻引舟遣手まで、狂ひ出づれど放さばこそ、「ハァはつ。」とばかりの涙さへ、何と成る身の　三重

歸れば、踏まれてさへあの頤、人を踏んだら如何あろ。」と後は笑ひの賑ひや。唄正月買の騒ぎ初め、飾りの下では三味引き、梯子の陰では寶引、節分豆撒き年男、槌の子抱いて稲積んで、若恵美壽にかけ鯛、蜜柑柑子橘、橙と祝うて何處も吉野、榧勝栗譃でござらぬほん俵、食摘に土器さすぞ杯、鳥渡押へて、去年より今年はみづ〳〵〳〵、若みんづりの井筒屋と、わきて賑々賑へり。

粋の粋を越えたる戀の山崎與次兵衛、駕籠を飛ばせて西口より、おろせがいきつて、「旦那お出で。」といふより家内、「こりや目出度い。」と跣足で飛んで門口まで、福の神のお迎ひ、ちやうさやうさや千歳樂萬歳樂、奥の座敷に設けの火燵、亭主蓬莱内儀は銚子娘は土器、「牛房も身祝ひ太夫様も御全盛、お庇で我等も仕舞は緩りくわんすで。」「まづ大福の口開けに、替つた咄がごんする。」と、吾妻は與平を與次兵衛に引合はせ、ありし有様一々を、語る詞に與次兵衛、「豫て意趣ある薬屋の彦介、どうがなと存ずる折節、忝い與平殿、此の以後は何時までも、心安う御意得ませう、お手上げられい。」と一禮す。見馴れ言ひ馴れ聞き馴れぬ、詞遣ひも第一は、足のしびれに難與平、只、「あい〳〵。」と許りなり。「御律儀で重疊々々、江戸へとの思ひ立ち尤も〳〵、吾妻が事は苦になされず、一廉の儲けして仕合の上洛。」門出に終夜、唄飲めや謠へや一寸前は闇の夜と共、「母が案じて居りませう、いかい御造作與次兵衛様、吾妻様皆様つらりと遣ひ立てた、お暇申す。」と立ち出づる。「餘りといへばけたゝまし、

家も廻るぞよ、廻るわ〳〵山姥が、謠山又山に山廻り、ハヽヽ面白い、如何でも斯うでも吾妻殿を、奥へ連れて。」と引き立つる。どれに下地のむいき力「これはどうぞ。」と引き退くる。引舟に向う風、花車は彼方へ押し込んで、遣手も取つてやり梅の落花狼藉。むかし怺へぬ難與平、齒切をしても堪忍ならず、彦介が足首を火燵の内より聢かと取り、うんとしむれば「あいたゝたゝ、ャレ足首が斷るゝわ。」と、目は顰むれど口減らず、「此の火燵には狼があるさうな。」と、蹴もぢるを引き倒し、布團押し除けつつと出で、熟柹臭い彦介が、鼻の先に澀柹の、澀い顔して立ち跨る。「ヤ此奴何ぢや。」「何者とは眼を開け、人ぢや男ぢや、男といふ者見て置け、うぬは何者。」「葉屋の彦介といふ男見ておけ。」「ャ生臭い男よばり、おけ〳〵置いてくれ、額に毛拔もあてる者が、いとしほげに女郎衆弄つて何の男、サア男が定ならおれとせい、サアせぬかい、いやせぬかい、男同士の喧嘩といふもの、教へてやろ。」とつつと入り、小腕捻ぢ上げ引擔いで逆どんぶり「ぎやつ。」と言はせ頭顚倒、腹這ひにはつたとのめらせ、腰骨を七つ八つうんといふ程踏み付けて、鼻歌に懐手、吾妻つき〴〵可笑しさ怺へ、笑ひを殺す笑止顔、彦介漸う起き上り「聞えた〳〵、與次兵衞が廻し者、彦介を踏んだぞよ、山崎與次兵衞覺えて居れ、したが踏まれても此方に七歩の勝、正月早々俺が身代踏み廣げてくれたな、殊に今年は戌の年、犬は土に寝るもの、年八卦に叶うた、コリヤ人の巳午が惠方ぞ。」と、肱を張つて立ち

太夫樣でも、畢竟直段の高い總嫁ぢやないか、なんと、否か、いやとは申されまい。それに山崎與次兵衞には賣つて、此の葉屋の彥介には何故賣らぬ。一文一錢直切らぬ拙者を、如何なる者とか思ふらん、忝くも桓武天皇無體の後胤、攝洲津の國服部の住人葉屋の彥介、大坂に五間口の店も所持仕る貸藏も持參つかまへさ、大金持を知らぬかナ。ア、慮外ながら、いやとは言はれまい、都島原上林の高橋に、金遣うて髮斷らせた、伏見撞木町枡屋の高尾に、又したゝか遣うて、心中に生爪を放してくれた、まだ鼻も殺いでくれた、耳を殺いでくれた、大々盡の彥介、山崎の與次兵衞に仕負けて、藤屋の吾妻に三度四度ふられては、此の彥介一分たたぬ、半分もたたぬ。今日から、三日ひこづるつかんだ、相場のたかい總嫁の買ひ初め仕り、金銀米錢ぐわらり〱と撒き散らしたら、吾妻がくるりくるりと廻らざ賭ぢや、サア〱〱買うた。」としなだれ寄れば、吾妻むつと頰がまち、ぴつしやりとみしらせ、「エイあた贅ばつた、聞きともない。其の高橋とやら高尾とやらは、其方の樣なうつそりでも、金さへ遣へば髮も斷ろ爪も離そ、京や伏見は知らぬが、此の新町の傾城は魂が違うた。恐らく此の吾妻はいかな〱、一生身上り仕暮しても、其方の樣な意地腐りに、小判の挺でも動く女郞ぢやないぞや、がや〱口利く男の意地ならば、手柄に吾妻を廻して見や。」とずんど立つ。「ム、張の強いに猶惚れた、此の彥介は吾妻を廻して見しよ、まはろわ〱、遣手めが頰がぐる〱廻るわ、爰の

金も上しましよ。なん與平が立身、吾妻樣の御出世、與次兵衞殿の本望。」千里一飛び一拍子、一器量ある男なり。「聞けば聞く程頼もしい御心底、此の吾妻に戀ある身で、與次兵衞樣に末長う添はせうとて、俄に江戸の思ひ立ち、二人が中の結ぶの神さん、門出の杯、しみ〴〵お禮申したし、井筒屋へ伴ひましよ、母御樣は如何ぢやえ。」「イヤ與平が望み叶へば、此の世からの生佛、太夫樣おさらば、愈頼み上げまする。」と、與平が脊中しとと打ち、「こりやあやかり者、嬉しいか〳〵。」と、輿を持たせてやはらぐる、母は太鼓子は大盡、ぱつと打つたる露よりも、太夫が情戴いて、歸るさ急ぐ長持急ぐ、いそ〳〵賑々揚屋町、遣引舟が、「アレ〳〵太夫さん、阿波座から煩い和郎が見えるぞえ。」「眞に眞に贅こきの彥さん、しかもづぶ〳〵醉うた足元、見咎められては猶惡口。」と、手繰り寄邊の井筒が本、内證花車に吹き込めば、「こんだ。」と許り與次兵衞が、小袖をかりのなん與平、見馴れぬ揚屋の大騷ぎ、戀ぶるひして見窄らし。足はどれても目角は強き、袴肩衣横筋かひ、町一ぱいをひよろ〳〵と、直にどれこむ井筒が座敷、吾妻は煙管の吸口閉ぢ、物もいはずにあちら向く。與平は人に見られじと、火燵の内へ顏差し入れ、被く布團の緞子より、五絲緞の事ぞおもはるゝ。彥介花車を引捉へ、「コリヤ花車樣め聞き給へ、正月は新春の御慶目出度く申し納め候、この〳〵此の鼻は新酒の醉ひ紛れ、積る恨みを申し始め候、ナ何と、否か。面白い、其處な遣手め能う聞け、いかな吾妻殿でも、

く、逢ふ夜の牀の溫まり、また逢ふまでは冷さじと、深い中著は烏羽玉の、「黑羽二重の蛇目の紋、與次兵衛樣のお小袖、暫しも身は放さねど、是れが私が心一ぱい、これを著て、表向の客になつて下んせ。」と、小袖渡せば難與平、「これが誠のお情、私戀は叶うた。」と、押し戴いて泣く許り。母は始終つつくりと、「なうお傾城の詰開きは、むづかしさうな事や。」とて、耳を澄ますぞ殊勝なる。與平涙押し拭ひ、「お前に逢うて眞實の、涙といふ物覺えました、金の草鞋で尋ねても、二人とない女郎に思はるゝ、與次兵衛殿はあやかりもの、著物も戻しませう、代りには以前の小判貰ひました。」と、取る手を母がはつたと打ち、「ヤイ卑怯者、今の詞が早違ふ、難波屋の家に疵付けるか、下卑た奴め。」と叱られて頭掉り、「いや／＼身の慾に致すにこそ、吾妻樣と與次兵衛殿、これ程の深い中、聞き捨てては男がたたぬ。此の金を此の儘置けば揚屋の庭錢、埃になつてすたります。小判と見れば小判、吾妻樣の身の油、金をおれが預つて、此方も身から油商ひ、どか儲けすればどか損する、ついと江戸へ下つて十兩を百兩、百兩から二百兩、二百兩から五百兩、段々儲けの商ひ拍子、千兩にするは三つ羽の征矢、關東廻しの商ひの筋道は我等が家、吾妻樣根引にし、與次兵衛殿とお二人悦びの顏を見て、今日の情の御厚恩を送らねば、此のなん與平立たぬ／＼。常々金がな／＼、是れを買うて斯う賣つてと、心當の事どもあり、江戸の道中、二歩では高砂野の宮、母者人は横堀の妹聟に預けりや緩り、其の内

與平、吾妻が膝へどうど投げ付け、「胴慾にござる曲がない、おりや金にや惚れぬ、貧な者と侮つて、金で口を塞ぐのか。我等が宿は庭かけて七疊半、貧乏神のお旅所といひさうな住居、師走正月も同じ布子一枚なれど、傾城に金貰うて揚屋へ往たと言はれては、此の難與平人中へ顔が出されうか、戀にかこつけ物取とは、目ききが違うた吾妻樣、七十に餘る母まで各に顔まぶらせ、無念にござる、宥して下され母者人。」と、聲を忍びて泣きけるが、「ア、よう思へば、怨みしは不調法、追付與次兵衞殿に請出され、奥樣に備はるお身、我等は日雇取、内方へ雇はれて、沙汰でもすればお身の爲に悪いと、後を大事になさるゝは尤も〳〵。氣遣ひなされなふつつりと思ひ切りました、鼻の先ばかりで戀せぬ證據は是れなり。」と、腰のさすが引拔いて、既に小指に押し當つれば、吾妻取り付き、「待つて下され誤つた。」と、漸うに押し止め、「金進ぜたはあやまりなれど、身の納まりを思ふなどと、さうしたさもしい吾妻ぢやない。與次兵衞樣には稚馴染の本妻あり、父御樣は隱れも無い*いしんぢよなり、私から起るお宿のもや〳〵、悋氣やら御意見やら、後の極月の二十日前、ちよつと逢うてそれからは、不首尾々々々の文許り、おろせ揚屋の付屆け、初紋日の買論も、私が獨りの胸算用、年のある上年切り増し、男の恥を包む程、身脱けのならぬ此の苦患、郭で婆になる吾妻、可愛と思うて下され。」と、恥も哀れも打明けて、つがなく零す正月の、涙も顔に憎からず、絞る袂の上一重、裲脫いで帶解

それで思ひ切り居れと、彼奴を連れ附き纏ふ子の可愛さ、母が命が一夜さの、傾城代にもなるならば、今でも死んで見せませう、押付がましい事なれど、一寸許りのお杯、是れで上つて下され。」と袖から出す小半入りの、德利に餘る親心、缺杯の蒔繪の猩々、笑ひかうじて涙の種、泣くこと知らぬ遣手さへ、彼方向くこそ哀れなれ。聞く程吾妻おし俯き、「粋な婆さん、私が言はう詞がない、與平様は何處にぞ、顔が見たいござりやせ。」と、呼ばれて婆も一時に、千歳を延ぶる門松の、影にかくるるなん與平、指をくはへて這ひ出づる、袖口取つて引き寄せ、「惚れた〳〵」と人毎に、誠もない口癖さへ、勤めする身は先づ譽れ、公平の樣な男を煩はしたは此の吾妻、嬉しうござんす忝い、命にも替へ身にも替へ、逢ひ通したいものなれど、戀というては一寸の詞もかはされぬ、深い男があるわいな。山崎の與次兵衛樣と申して、新艘の初牀より、面白いと悲しいと、譯のありたけ仕盡して、勤めは名許り、夫婦というて今一人と、外にも漏らす水もなし。というて母御樣の御眞實、せついお前のお心入、立ちながらの杯に、酌み流さんも本意でなし。これ重山、預けた物それ爰へ。」「あい。」と應へて引船が、袂の内の袱紗物、色こそいはね山吹の、十兩許り一包、「是れも可愛い山様ゆゑ、譯のある金なれど、母御樣へ進ぜます。與平樣の身の廻り、立派な大盡に仕立てて下さんせ、渡り竝の客に身を賣るは傾城の習ひ、枕をこそかはさずとも年月の物思ひ、酒で流して下さんせ。」と、渡す小判を難

込み果てられた、其の難波屋の婆で御座る、あの頰冠りは獨息子、千貫目の大釜の湯氣で育つた奴なれど、今では錢一貫の廻しもならず、なん與平〳〵と、其の日過の日雇取、騙りと見ゆるもお道理。」と、老の繰言眼に涙、問はず語りに古を、思ひ出したる風情なり。引舟禿遠慮なく、「ム、踊唄に謠ふは婆の事か。　ヲドリ唄えい〳〵山崎ナ〳〵、八幡山崎なん與平のお婆、ヤァこの誠に金を出せさ、盆に御座れ。」と笑ひける。吾妻は始終貰ひ泣き、「皆の衆は何笑ふぞ、戀であらうがあるまいが、勤めする身の習ひ、落目と聞けば見捨てられぬ、吾妻を見込んで賴むとは、愛しらしい婆樣、傾城冥加聞く氣でごんす、此處は人立ち繁山、ちよつと横町の小店を假の揚屋町、此處へ〳〵。」と手を取れば、涙を流し、「忝や〳〵、お咄し申す事とても、此の婆が此の年で、何の願ひござりましよ、月とも星とも思ふはあの與平め、いつぞや人に雇はれ、此の新町へ文の使の序に、吾妻樣を見染めて、ホ、〳〵ホ、親の口からァ、おはもじ、戀病に煩ひます。家主鄰家の聞えもあり、五器提げる瑞相かと、叱つて叱つて追ひ出しても退けうと存じたれども、ァ、昔の身ならば、若い者の手かけ妾のといふ最中、申し難いが太夫樣達、一年二年買ひ詰めても、何處の痛みにもならぬ身代、其の氣で育つた奴の事、ァ、可愛やどうぞしてやりたいと、母が瘦我も子の望みも、金銀といふ兵には、又してもへしつけられ、見殺しにする子の命、氣遣ひするな、情を商賣になさるゝ吾妻樣、歎き申してお杯戴かしよ、

節、やりが前垂茜さす、※天も醉うたり人も醉ふ、初杯の内祝ひ、過ぎて諸禮のよね揃へ、雪駄の音のしやら／＼と、春めく中にむらさきは、色のつかさや藤屋がうち、吾妻といへる名木の、松には續く花もなき。戀と利發を目のはりに、なさけこぼるゝ道中は、往來の人もたち止り、花を見捨つるかりがねも、歸りくるわの晴れ處、身にも年にも恥ぢもせず、七十許りの古婆の、古綿帽子の頰冠り、春知り顏に七屋の、藏の戸出づる鶯茶の、布子の袖を摺れ縺れ、附き纒ひ行く足元、遣手のかやが聲高に、「これ爰な婆樣、此の廣い道を何ぞいの、高砂の尉と姥が離別した樣な態で、太夫樣に摺れ縺れ、エィ嫌らしい小舌たるい、あの跡から同じ樣に、ついて來る若い男は、駕籠舁の風とも見えぬ、此方の連か、とつとと退いてもらはう。」と、押し遣れども腹立てず、「オ、御道理樣や御免なりませ、音に聞えた吾妻樣、お慮外ながら染み／＼と、お咄申したい事御座りまして、郭をぶら／＼いたします、何卒お聽入れなされて、お情に預れば、婆が後生も助かります、大事の／＼太夫樣に、鹽の辛い梅干婆が、醉狂な奴と思しめそ、お恥かしや。」といひければ、「オ、いや、口合をやらるゝ。これ女郎樣達の全盛を見掛けて、姨の祖母のといふ騙り事は古い／＼、其の爲の遣手、これ眼が黑い見て置きや。」「ナウ怖い事いうて下されな、騙り事いふ樣に見えますか、ア、貧乏はせまいもの、連合は船場で隱れもない、千貫目の廻しもした難波屋の與左衛門、爲換の金が滯り、大坂を仕舞うて八幡へ引

山崎
與次兵衛

壽の門松

上巻

唄 筑波根の峯より落つる瀧の白玉、一二三四、五六七八、九軒の町に羽交す、比翼の羽子板木欒子も、磨き入れては色に成る、戀の二葉の禿松、枝と枝とを遣羽子も、三四いつも末長に、返事に馴るる門の松、抱への松あり客も待つ、まづ新町の初子の日、松澤山に深緑、千代も根引は絶えすまじ。

「コレ〳〵新介、嫌といふもの無理に突きやつて、それ見やの、羽子を松へ突きとめやつた、元の樣にして返しや。」と、袖に取り付く禿共、「ナウ取り付きやんな、男に突かすりや留るとは、頭から知れた事、珍らしさうに。」と振り離し、手を拍いて、「ほつほらほ、此方や知らぬ、あべかこの新介。」と、走つて内へ驅け込めば、「そりや〳〵逃すな捉へよ。」と、羽子から起る諍ひは、飛ぶが如くに追うて行く。情口舌の萌え出づる、雪間に素足伽羅香る、霞の袂虹の帶、冷泉 雲の上著をゆりかけて、新艘突出し出立ばえ、唄 紺に鬱金に薄染淺葱、織物縫物染物盡し、小紋三重染二重染、淺葱鹿子に鶸鹿子、紫鹿子にふる年の、憂きをも芥子の紅鹿子、極彩色の越後町、三筋に三つの春たてば、松若緑梅時

逆せんと思ひ立つたる五逆の科、積惡のがるゝ所なし。此の詞を太子に傳へ、佛を敬ひ神を尊み、寶祚を守れ方々。」と、太刀引き拔いて我と我が首「エィ〳〵。」とかき落し、怨敵亡び失せにける。時に不思議や音樂聞え、守屋が骸の內より靑赤の玉顯はれ出で、空中に漂ひしが、「諸惡莫作諸善奉行。」と金色四方に輝いで、俄に降り來る法の花、敵は味方に降りくだる、七珍萬寶地に敷いて、國土安全、民繁昌、佛法繁昌、伽藍を建つる壽命は延ぶる、いつまでものべて盡きせぬ君が代は、萬々歲とぞ祝ひける。

聖德太子繪傳記　終

人手には此方も殘念、サァ來い〳〵。」と呼びかくる。跡見赤檮、「南無三寶川勝に先越されし。」と一散に驅け來り、守屋が鐵棒しつかと取り、「御邊が首はそも〳〵より入札は此の赤檮、外へはやらぬ。」と捻ぢ合うたり。守屋きつと見、「もうよいか。」と棒引き寄せ、赤檮が腹帶ひつつかみ、眼より高くさし上げ、大地へどうと投げ付くれば、宙にてくるりとはね反し、足ふみ直してつつと入る。川勝も後れじと兩方より取り付くを、聢かとしめ、「蠅蟲めらを一匹や二匹捻ぢ殺しても何にせん、生け置いて守屋が腰ひねらせて使はん。」と、ずんと立てば、政若都賀若調使丸、後より聢かと取り付く。守屋からからと笑ひ、「サァ取り付いたか、もうよいか。」と、身をもぢつて引き寄せ、どうと押へ、「入らぬ汝等が腕立て、一々暇とらせん。」と、既に危く見えける所に、聖德太子弓と矢番ひ、椋の木の小陰より、ひやうふつと放ち給へば、過たず守屋が眉間、うらをかいてはつしと立つ。智者は惑はず、勇者は恐れず。守屋二人をがばと投げ、矢を逆手に引き拔いて屹度見、草原に撞と坐し、「コリャ兩人、云ひのべたき事あり、つつと寄れ是れへ。」と招けば、川勝赤檮、「何事ぞ。」と立ち寄れば、「オ、我が運命も是れまで、此の矢は正しく太子が射たると覺えたり、矢幹短く鏃なく、殺さずして人を鎭むる神通の鏑矢とは此の事、矢の根なければ兜を越して、我が身に立つべき道理もなし。然るに斯樣にうらをかかせ、心身甚だ混亂して、人の面も見る事なし。神武不殺の威におされ、神の冥慮に背く印、佛法を破

いらぬ事おしやるな、我は觀念隙惜し。」と、明心達理の眼を閉ぢ、御衣を被いで座を組めば、守屋大臣はがみをなし、「をさめ過ぎたる捨坊主め、蹈み殺さん。」と、驅け寄つて衣引きのくれば、天地俄に震動して、半身丈六達摩の像、眼の光は射る矢にひとしく、金色世界を映すが如く、照りかゞやけばさしもの守屋、眼くらみ、「わつ。」とわなゝき、馬は大地に四足を蹈み込み惱亂し、焦げ付けらるゝ有樣は、照りに照りたる大旱魃、草の萎む如くにて、見かへれば又ぴつかり、命から〳〵三重逃げて行く。斯くて守屋大臣は稻村が城に立歸り、士卒を集め、「此の度の一戰わが首を太子にやるか、きやつが首諸共に一天下をわれ取るか、勝負は時の運なれども、一つは士卒の勵みにあり、思ふ任せに近付け、もらさず餘さず打ち殺せ。」と、頻つて下知をなす折節、寄手の軍兵一同に、「えい〳〵わつ。」と鬨の聲、花を散らして三重戰ひける。城中より弓削廣海躍り出で、「太子の方にてさる人と聞き及ぶ跡見赤檮、秦川勝はあらざるか、見參やつ。」と呼ばはつたり。「川勝是れに。」と進み出で、ちやうど切るを受けはづして、廣海が弓手の肩より馬手の肋へうち込まれ、のつけにそるを飛びかゝり、首をかき落し、「事始めよし、いざ蒐れ。」と、引き返さんとする所に、守屋遙かに此の體を見て、丈餘の鐵棒片手に提げ、川勝目掛けて馳せ來る。望む所と近々と立ち向ひ、「一別以後久しう存ずる守屋殿、以前の好み人手にはかけ申さじ、觀念あれ。」と嘲れば、守屋くわん〳〵とうち頷き、「主に暇くれたる慮外者、

「長追ひせそ。」と立ち歸り、「聞き及ぶ調使丸とは和殿の事か、此の庵に長居は無益、聖徳太子も天上より歸洛あり、河州高淵にて天皇諸共、守屋退治の評議の眞最中、二人の女を誘引して驅け付けよ。」と水に緑の影うつる、蘆引きちぎつて水に浮め、「とく〱是れにのられよ。」と言ひければ、「ア、つがもない、此の蘆の葉にどう乘られうぞ、危いことを。」と斟酌顔。「知らずや人の世を渡る、一生の危き事、此の蘆舟に劣らんや。」人々はつと感心し、眼を閉ぢて乘り移れば、ゆらず沈まず大船を、陸に置きたる如くなり。芹摘御衣を手に捧げ、「此の一重は夫の形見、煩惱の手に垢づけども、菩提の水にすすげよ。」と、被け給へば、「御殊勝々々々、此の衣を身にふるれば聖徳太子に逢ふ心、さらば〱。」と人々は、川を半ば渡る所へ、守屋大臣どつとかけよせ、「アレ〱芹摘が川を渡るわ、射とれ〱。」と下知すれども、矢の一本もあらばこそ、皆立ち騷いでひしめく間に、逆まき落つる山川に、絲もて引くやさゝがにの、蜘蛛の昔は柳の葉、蘆は陸路を行く如く、次第々々に隔たり行く。守屋焦つて、「芹摘を隱し置きたる削り廻しは己よな、言語道斷不屆奴、睨み殺して呉れんず。」と、立ちよれば身構へし、「御無用々々、おのれが我を睨むうち、此の目をふさいで見ずに居ようか。上を欺き下を虐げ世をみだす天罰おもひしれ。」と、はつたと睨む兩眼は赫々たり。守屋ちつとも臆せず、「イヤこいつ慮外者、犬めに睨みまけうか。」と大眼をくわつと見ひらく。法師から〱と笑ひ、「ヤア雛の樣な眼を以て

沸り汲み交し、色も花香も主從の、盡きぬ縁こそたぐひなき。羣鳥の梢を立ち、四方にはつと羽打つ音、おどろき耳をすまして聞けば、五合無菜のしもべども、門外につゝ立ち、中にも弓削廣海大音上げ、「此の家の主は居をらぬか、太子が一族芹摘の后かくし置く旨注進に依つて、守屋公の仰せを被り我々追手に向うたり。踏んごんで召捕らうか、但し縛つて引き渡すか、返答次第。」と呼ばはつたり。内にははつと立ち騒ぐ。玉鶴焦つて、「ナウ調使殿、よい所へござつた、鐵の楯ぢや、けな人ぢや、あそこへ行て切つてござれ。強い男。」とそだつれども、「あら勿體なや、あつちは香のもの、こつちは糟味噌、切らるゝは膳の箸、外に道はあるまいか、お供して逃げん。」といへば、「いや〳〵道はない、どうせう。」と、三人よればない時は、文殊の智慧も徒らに、顏を見合はす許りなり。門外より聲々に「返答せぬは曲者、亭主め共に打ち殺せ。」と、戶を打ちめがんとする所へ、主の僧かけ戾り、此の體を屹と見、「一物もなき禪僧の庵室、盜みに來うやうはない、聞えた〳〵、おのれ等は死にに來たか、いで引導してとらせん。」と手杖取りのべ打つて蒐る。「否さ守屋公の御意によつて芹摘を捕りに來た、慮外せば捨坊主め、おのれがためにもなるまい。」と、わめきたつれば、「ヤア囂しい、主の威光を吠えまはる犬侍、棒をくらへ。」と打つてかゝる。調使丸も力を得、跡に續いて薙ぎ立つる。「そりや調使丸が出るからは、太子も居るに極まつた、注進まうせ。」と討手の勢、跡をも見ずして逃げ散りけん。

の住家よな、用意には行きつまる、幸ひの事、取りためた物あらばしてやらん。」と、ふたひきあくれば、「ア、悲し。」と叫ぶ女の聲につれ、又半櫃を押し明けて、出づる女の甲斐々々しく、調使丸にしがみ付き、「お姫樣を何とする、むざ〱とは渡さじ。」と顔を見合はせ、「ヤアそなたは舍人調使丸。」「お前は玉鶴、其方は尋ねる芹摘樣、ヤア嬉しや。」飛び退れば、二人は左右に取り付いて、「そなたとはけんによもなく、人音がするならば此の半櫃へ隱れよと、主の僧のいひ敎へ。最前表に茶を一つと聲を聞くと逃げ隱れ、棚探しやつたも見て居たが、見付けられずはよい物か、太子樣にも逢はせても。」と悅び給へば、調使も嬉しさ腹ふくれ、八杯やつたる心地して、自慢張肱高楊枝の、太子の下人とあらはなり。「おなつかしいは御尤も、太子は御願滿足とて、梵天宮へ御參向、たつて御供と願ひしかど、姫君にみやつかへば我に付添ふ同然、來る文月中旬に、和州大峯蘇莫闍が嶽にて迎ひ奉る御契約、それまでの御形見。」と、御衣に取りそへ御佩刀をさし出せば、「追付御目にかゝらうが、待ちびさし懷かし。」とわりなき涙しみ〲と、御衣の袂を絞らるゝ。調使丸さし寄つて、「御家の亭主は何うした由縁、御介抱いぶかし。」と問ひければ、「不審は尤も、誰に由縁はなけれども、佛のまねをする墨に、衣を染めし人なるが、太子の御歸りあるまでは、爰に忍べと夕な朝な、何から何まで世話にして、まそつと先に出られたが、追付けてかへられう、懇に禮言うてたも、疲れもさぞ。」と落葉たく、茶釜の

雪霜も消えし昨日は昔にて、今日は音をふる鶯の、聲も嵐も勝絶に、調べかへたる調使丸、太子の形見取り持ちて、芹摘の御行方、尋ねんかたのしるべさへ、なく／＼迷ふ山傳ひ、白雲は月に映じ霞は松を友として、知る人得たる其の中に、露のあたひも消え果てて、あしたは草の原寂し。此の氣色前は川、水は緑に詩を釣るべく、後は歌人　風雅の山、「見て居て腹もふとるまい。いざ行かう。」向うを見れば椎柴の、隙もる垣に世を隔て、東うけたる明窗、軒に干菜の風そよぎ、見る／＼食もあり氣なり。何でもしかけて今の疲れを晴らさんと、門に佇み、「片岡山の飯に飢ゑ行き惱みたる旅の者、お茶一つの御無心。」と、いへどもさらに答へもなし。留守か但しは寢て居るかと、戸をおせば開けたり。不思議ながら内に入り、差し覗けば半櫃二合、佛壇に無量壽佛の白毫の、光とがむる人もなし。「ム、主は他參か珍重々々、したゝみして立ちのかん。」と、内より門の戸はたと締め、「心やすや。」と飯櫃かゝへ、あたり見廻し、「いかに人がなければとて、青蓮華の眼より盜喰し居るわと、佛の御覽も面目なし。アレ頻婆果の脣が動くは人に告げる氣か、見ぬが佛、告げぬも佛、默つてござれ。」と、蓋追取り、「ヤアさつぱりと洗うてある、エ、面倒な。」と櫃投げほり、「是れはまた餘りな、何時人が來うも知れず、用意もせずに何國へうせた。外に何もないことか。」と、繰り返し見まはせば、なまめく女の染小袖、片褄もれて色めいたり。「心得ず賤が家に、斯かる衣裳のある事は、ム、讀めた／＼盜賊

事も世の中を、心にまかす自在天、四禪天には四石あり。其の外是れより四十九院の別所にて、普門輪藏多寶堂引聲堂萬燈院、三光天には日の本の、神の本地千早振る、十五社の宮殿あり。およそ三十三天、天人天上の宮殿樓閣玉の階、瑠璃の扉、珊瑚の欄干、瑪瑙のこじり、金銀水晶いろへたて、いろへたてる大伽藍、見るとも聞くとも盡きすまじ。本土に歸り法華經の三の巻、化城喩品を拜せよ。」と教へ給へる御聲につれて、忽ち金字金泥の偈頌の文と現はれて、光明天にみち〳〵たり。太子歡喜隨喜の涙うるほす。肩におひ給ふ大乘一軸拔け出でて、くる〳〵〳〵と紐とけて、巻頭巻軸大空にさら〳〵〳〵、天の浮橋烏鵲の橋、末世に是れを經橋と、夕日に向ふ虹のはし、即心即佛經一體、駒の蹄紫磨黄金、神通如意の駒に手綱をくりかけ〳〵、ゆるがぬ天の經橋を、しづ〳〵〳〵と乘り下げ乘り上げ乘りおろし、晨朝の會に入り給ふ。扨こそ攝州難波津の四天王寺は、是れ此の大梵天の伽藍を寫し、末代濁世の今日までも、日夜の參詣朝暮の勤行、老若男女諸共に、梵天宮に入る心、神明佛陀は水波の隔て、謹上再拜々々と、かざしの雲をふりわくれば、異香薫じ花降りて、又くりかへし巻きかへす、天の告げこそくもりなき。

第五

梵宮伽藍の巻

「あらはれし、忝くも梵天王玉の冠玉の沓、瓔珞細輭の御衣芳しく、二人の侍者に圍繞せられ、此の一巻は二萬由旬、諸天の伽藍を寫したり。是れへ〳〵。」と飜し、招く袂や巻物の、紐左に解け廻る天の形のあり〳〵と、迦陵頻伽の聲音を竝べ、繪解あるこそ殊勝なれ。「先づ地形は東に摩尼山、六度萬行波羅蜜山、前に法性無漏の海、隨縁眞如の波は打つとも、騒がば騒げ彼の岸に、寄せ來る船は絶えせじな。四方の四門は四王天の樓門にて、多門持國增長廣目、降魔の利劍の垂木端、佛法擁護の梁、斷惡修善の四足をつきかため〳〵、世界國土を守らせ給ふ、忉利天にくわう〳〵と、時の鐘なる六時堂、生滅々已に日は出でて、寂滅爲樂に入る日影、八色五色の大蓮華、石の舞臺や舞人のかざしの舞樂樂變化、諸天の中に兜率天、內院の講堂は摩耶夫人の淨土ぞかし。されば女人の五障の冰、消えてながれて絶えず綮たり。つがひの龜のすむ水は、阿耨達池の流れと知れ。ながれ〳〵て雲水の、塔の高さ五十丈、黄金の寶鐸白銀の、風鈴の聲は罪障懺悔のひゞきあり、九輪九曜九會曼荼羅非想天の廻廊非々想天の廻廊は、ア、〳〵〳〵めぐり〳〵て百八十間、百八煩惱のねぶりなければ、夢もやぶれてさつ〳〵と、雲吹き拂ふ無雲天、大金堂は是れにあり。誰かは色に移り初め、色界慾界愛著戀慕の愛染堂、萬の願ひ庚申、帝釋天梵天、海の寶山の寶、珍果珍寶二つ御藏にこめて、たゞ何

ることを知らず、守屋が蜂起、五畿内なかば同意して、おぼつかなきは是れ一つ。とく〳〵歸り緋の衣を印にて、后をみつぎいたはらば、今の供には勝るべし。それとても聞き入れずば、太子と思ふな調使とも思はぬ。」と、威しの言葉御涙「初秋中の五日には、和州大峯蘇莫闍が嶽に出で向へ、主從の緣は朽ちすまじ。暫しが程のさらばぞや、さらば〳〵。」の御名殘、やう〳〵耳にとゞまりて、記念の御衣を太刀にかけ、御返事はなく〳〵見かへり見送りふりかへり、嘶く馬の聲も涙の雨に音そひて、歩み歩みも峯ふりし、松の梢に御馬を控へ、「願はくは五乘三乘七方便諸天諸神加被を垂れ、我が大願を濟したまへ。」と、一心不亂に合掌あり。時に孤雲に茜さす、日輪月輪耀々と照り渡り、光明も塵に交はる和光をひらき、日輪には珊瑚の樓閣、月輪には水晶の樓臺、顯然と桂の夫婦形を現はし、「あら珍らしの行幸やな、われ〳〵は朝な夕な禮拜法味を受けたりし日天子月天子、見覺えずやおはすらん。大伽藍建立の念願天に通じ、誘ひ參れと天帝の敕に依つて我々迎ひに來りたり。此の白雲のあなたこそ、めでたき梵天王宮なり。されば梵天には諸天の宮殿樓閣を一々に繪に寫せし、二萬由旬の卷物あり。是れを拜して能く覺えば、伽藍建立すみやかに成就せん。疑はず過たず信心功を積むべし。」と、宣ふ御聲のかんばしく、薫じ渡れる嵐となりて、白雲さつ〳〵と吹き拂へば、あれ見よ梵天宮とぞ　三重

調使丸口を控へ、「今まで君の御伴して、御馬を雲に飛ばせ、峯々嶽々殘らず見ては候へども、斯かる嶮岨不思議の御山、行く先猶も覺束なし。還御あるべう候。」と御馬の口を引き返せば、「是れこそ須彌の半腹大梵天に行く道なり。われ攝州難波の里に大伽藍建立の心あり。されば梵天王宮の宮殿を寫さんため、梵天宮に登るなり。是れより凡夫の身はかなはず、一先歸れ。」と宣へば、「こは情なき仰せや候。高麗唐土の果てまでも形に影の調使丸、上は有頂、下は奈落の底までも、何しに離れ申すべき。御馬は畜類、いかなる荒凡夫も畜類には劣るまじ。怨めしの我が君や。」と怨み涙は頻りなり。「否とよ馬は觀音の部衆、雜阿含經にも四種の馬を說かれ、六波羅蜜の功德にて、畜類なれども菩薩の行悉多太子の初發心、車匿童子をかへされし、ためしは音にも聞かざるや。」「いや車匿は車匿、お調使はお調使、昔は昔、今は今、背かばそむけ御心に。」と、歸らん氣色嵐吹く、山路に座を組み居たりけり。「汝愚かにして天上人界の隔てを知らず、目を閉ぢて東に向ひ禮拜せよ。」と、御身も共に觀念あれば、御方便を誠ぞと、東に向ひ合掌の、隙を御覽じ一鞭くれ、あふりをうてば飛ぶ駒の、數千丈の谷を越え、松にかゝれる浮雲に、法の威德ぞ不思議なる。眼を開き大聲上け、前後不覺に歎きしが、「太子に捨てられ獨り歸りて何かせん。此の谷に捨身し、せめては未來の御供。」と、既に斯うよと見えければ、御手を上げて、「まて暫し、不便さよいとほしさよ愚かなり、汝太子ある事を知つて、都に后あ

引合はせ、今日のいま見ていまの間に、なじみは日かずふる市の、里を南に横折れて、雲の絶え間のゆふづく日、立ちどまりて呼びかはし、聲は木末に山彦する、山のかけぢはいざ〳〵と、脊さしよせて姫君を、負ふは優曇華法のみち、鉢タヽキ彌陀十劫に正覺を、となへ始めて三界の、衆生をたすけ誘ひし、昔も今に似たるぞと、問ふもこたへも黄昏に、連れて庵へ三重雪霜と、月のめぐりをしるべにて〳〵、日のゆく御空たづねん。しかるに入唐渡天といつぱ、佛法流布の古跡を見る、それさへかたし夢殿の、外をも夢と御覽じて、夢もうつゝも一如ぞと、見ひらきたまへば、天上も下界もこゝに遠からず、梵天宮へと行幸なる、傳法救世の御慈悲心、かたじけなしとも有りがたし。*七部の大乘御肩に、老いせぬ駒の道しるべ、御馬副には調使丸、明暮御馬の口とりて、日本めぐりの嶽々の、富士も筑波も眼の下に、もゆる淺間のあさまにも、谷の小川の煙かと、比良や横川の花曇り、見下すからに一かすみ、傳へ聞くさへふりし世の、竹杖ひとつ橋として、月の都に入りしとかや。ためしを茲に引く手綱、りん〳〵〳〵〳〵、響く轡の音ならで、鳥の鳴く音も絶え果てて、駒のなづまん草もなし。かつし〳〵と歩ませて、行けど果てなき岩が根に、玄冬素雪の寒風は、肌を劈く所もあり。虹を産み出す山の腹、時雨吐き出す谷の口、いかなる名山高山とも、名も白雲にとぢられて、おぼろ〳〵が中の瀧の音、飛龍直下三千尺、其の水上に駒とめて、いざ水かはん天の川、星も手に取るばかりなり。

もしげる葉もしげる、おもはづかしし暫しとて、笠傾けてまつすぐな、石にたすくる道疲れ、そなたの方を見給へば、日影うらなくさえ渡り、經につれたる木魚のこゑ、殊勝氣に修行者の、「なんむしいはんきろつうきやたいついたいふいおみとふなんむくはんつういんふさなんむたいせいつふさなんむおみとふ〱〱〱。」とまめやかなり。「是れ程にいき筋はつて申しても聞えぬか手の内も施さぬ。但し詞が通ぜぬか、阿彌陀というたらひからうし、祖師の釋迦より骨牌の釋迦を握りつめた世の中、大方では手放すまい。分別あり。」と打ち頷き、「釋迦は好き彌陀はほしがる一錢を、投げぬ人こそ哀れなれ。なまうだ〱なむあみだ、誰か財布のひぼをとかなん、できたけふから是れ〱。」と笑ひをのんでぞ通りける。玉鶴立ちより、「釋迦も阿彌陀もお好きとは、淺いやうで深いお勸め、お殊勝に存じます。一包の心ざし恥かしながら。」と差出せば、鉢タヽキ「オヽ、お利發な上臈や、貧者の一燈萬燈も、しんどう思へばむそくする。かう見た所かた〴〵は、卑しからざる生育ち、何處から何處へ行く人ぞ、覺束なし。」といひければ、「しをらしいお尋ね。お出家なれば太子の御事。」「ム、言はしやるな人も聞く、御身の上はかくれなく、世間の噂に聞きました。愚僧も申さば太子の弟子、お師匠のおかさまであろ。心やすかれかくまうた。身は鉢開のまうけなくとも、太子には御意得たい用もあり、御歸洛の折までは庵にござれ、人も通はぬ山住の、寂しいは御ふしよう。」と、無二の詞に力を得、是れも佛の

心も廣き女の才智、勝鬘夫人は大王の一通の文を得て、恆沙の衆生を濟度あり、月益御前は一通の假字文に、佛法の味方をひく、一つの文は二つに讀み、二つの位牌は一つとなり、一乘一味の法の花、種あり實ありこのみあり、武勇の種も有明の、月益が筆ぞ敎へなる。

第四

芹摘の后道行

花鳥に云ひ習ひてか音には鳴く、梢離れて散る花も、皆天地を旅寢にて、ならはで物ぞ思はるゝ。馴れし雲居は隔たりて、先にはあての土も木も、皆我が夫のものなれど、忍べば心おく霜に、白き脛まであからみて、まだうら若き芹摘の、歩みかねたる爪先を、手に息吹いて玉鶴が、あたゝめなづる引き立つる、勢ひを道の力にて、焦れ行方ぞはてしなき。三笠の山はありながら、眉の下ふる村雨には、逍女の袖と袖、ぬれた姿ぞと人や見ん。小褄りゝしく引きしめて、君とねる夜を待乳山、我は夫もなき渡る、蘆邊の田鶴を玉鶴と、千歳契りし效もなく、世は僞りを耳馴れて、誠稀なる神垣は、三輪の社の印ぞと、過ぎ行きがてに手向山、額づきながら御后見上げ給へは、峯の紅葉は草葉にかゝる、野邊の錦は誰が著るぞ、我も故鄕に翻し、袖ふる山のうらやまし。往來の岡の松並みて、人目

が今の禮人がらは尊まず、月益御前の本然の智慧を禮し候。」と、三度頭を地に付け大音上げ、「葛木の島主と秦川勝が契約金石のごとく、只今より守屋を捨てて、天皇太子の御味方、印のため人質の女中たち一人も殘らず許し申す。」と呼ばはる聲、人々寐耳に水を得て、網代を出でし淀鯉の、淵に躍るが如くにて、悦び給ふぞ道理なる。門番下番さわぐ所に、「弓削廣海大息ついて、「ヤアヽ川勝、人質皆此の曉首を刎ねよと仰せを被り歸る所、腰拔侍かへり忠、逃さぬやらぬ。」と、刀のつかに手をかくる、其の手を取つて打ちかづき、横投にどうと投げ脊骨を膝にひつしき、「かへり忠とは舌長し。普天の下天子の味方でないもの誰かある。我が代々の所領の内纔か尺寸の守屋が年貢地まじりし故、是非なく一旦守屋に從ひ、我が軍配にて澀川の勝軍、是れで年貢は餘る程はかつて仕舞うた。遂には佛法王法の御味方と、島主某勇者と勇者の契約、磐石より猶堅く、父入道が中陰位牌、二つに打割りて繼ぎ合はする時を期せんとの約盟、身を離さず是れにあり。」と、まもりに添へし錦の袋、位牌の半片取り出せば、政若、「父が遺言われも身を離さず。」と、肩にかけたる小包より、また片割を取り出し、寄せ合はせたる割符の位牌、金泥の文字ありヽと、孝心忠心漆となつて、離れず合ふこそ不思議なれ。「おのれ一命は助くる。川勝が詞守屋に屹度達せよ。」と、はやなはにしばり上げおつたつれば、門番下番道を開き恐れをなす。月益親子人質の人々誘ひ出づる日の、かげはれやかに世を廣く、

ちかへしては哀れしれかし、かはかつさままゐる。サア此の文章はうはの空の癡話文、もしまた別の讀方にて、子供におくる實の文に極まらば、契約の通り川勝御味方に參るべし。一字も違はば不義者に極まる一生一度の大事、善惡の境サア承らん。」と打ちつくれば、「されば此の一首の歌、身はさかさまにといふ事にお目が付かねば是非もなし。直に讀めば戀の文、さかさまに讀めば子供の方へおくる文、宛名も政若都賀若二人の名を一つにして、川勝樣を倒樣にして讀み給へ。まさつかわかではあらざるや。筆の始めはとめとなり、とまりは筆の始めとなる。文章つゞかずくだ〳〵しく、はなれはなれの詞に含む親心、きこし召して思ひやれや。」とて、涙ながらに讀み給ふ。「くど〳〵おもひだし、たゞひごろ、よのちゝのごなをぞこひし、ふぎをぞんじられわかんとうはしぬ、へだつもへだつふたりがことおや、こはいつせなむすびなれど、かみやいこくのほとけ、さなきだにしともたぬみ、げびなひとにうとまれな、ふもおとゝいは、ねふしなりのいとしいこ、かはいこ、はゝがかたみとよ。」兄弟も打萎れ川勝もびつくりと、女の才智の働きに、始めの憎さ倒樣の文詞こそ哀れなれ。「ナウさかさま文字もすぐさまに、讀めば直なる親の慈悲、是れが母がいたづらか。」と「わつ。」とさけびて臥しければ、「ゆるしてくだされ母うへ。」と、兄弟左右にすがり付き、涙あらそふ親子のさま、思ひやるさへ哀れなり。川勝は飛びしさり、「及ばぬ智慧を定規にして、人をはかりし誤り、悔いても返らず。川勝

何ぼう親に孝行でも、忠義と武勇を忘れては、鼠捕らぬ猫同然、おぬし達が母いとしい、母かはいいと思ふより、父御前がおぬし等を、かはいう覺しめされたは百倍千倍まされども、其のかはいい子をふり捨てて、めざましい軍の討死は、武士の役目と知らぬかや。親の子ならばなぜ親の眞似はせぬ。兄弟茲に無駄死し、家の氏は誰が繼ぎ武家の役は何とする。斯く有らうと思ふ不便さに、疑ひの立つ文も書く、若し落ち散つても、艶書は我が身獨りの不義と戀の文に書きしかど、二色のよみ樣にて、子供の方へ送る文、屆けて貰はん爲なれど、戀一色に讀まれし故、母は一生の仇名を取り、我が子の手から刀背打受け、斬られし刀の疵よりも、子供に當る天罰の悲しさよ。」とかつぱと臥し、流るゝ涙流るゝ血、紅白粉やもろこしの、渭流を袖に湛へたり。川勝默して居たりしが、から〱と笑ひ、「口がしこいこというたり〱。文一通に二色の讀み樣とは、人をたぶらす拔け言葉、某不勘といへども假字文讀まぬ程の盲でもなし、違うたか違はぬか子供を證據に聞かせん。」と、高々とこそ讀みにけれ。「よどみたかかははこいはがこいしといのりなしぶねはいととおもふ。（のりなしふねとはム、後、家のこゝな書いたり〱）。なれまとうにとひなびけ見ぬたもとしにたきなさけとほのくこいやみかどれなひずむなせついは子やおとこがりたふつたへもつたへ。（エ、したたるし〱子供ようきけまだある〱）。ぬしはうとむかわれらしんぞおきふしひこそをなごのちゝのよろこびたゞしたひもおとくとく（もと）、かへす〱一首の歌、恥かしや身はさかさまの戀衣打

も此の文、扨こそ催促の文よと披見せしに、案のほかとも興さめて手を打つて詞なし。川勝が御味方は、大丈夫の義は缺けて、後家と密通の好色故と、評せられんは弓矢の瑕瑾、よし人は知らずとも天地が明らかなり、我が心も淸からず、母が不義の心一つで契約違へし殘念さよ。島主が亡魂あらば、冥土より手を伸べて討ちも捨てたかるべし。無道の母を思ひ捨て、家の武名を淸めよ。早々歸れ。」と制すれば、「否々一家一門の恥辱、川勝殿の御加勢を妨げし大惡人、島主が名代と名乘り、刀背打して冥土の父が怒りを休めん。そこのき給へ。」と驅け込む所を、「アレ麁忽すな。」と、帶を攫んで留むる間に、都賀若が先へつつと拔け、障子引き開け母を見るより刀引拔き、「人でなしの母樣、父上の名代。」と刀背打に四つ五つ、小腕まはつて肩の口三寸許り斬り込まれ、「うん。」とのれば、政若走り蒐つて、弟が刀ひつたくり、「侍の子と生まれ刀背打を仕損ひ、なぜ母上に手をおほせた、狼狽者め、刀背打の仕樣敎へん。」と、弟の脊骨疊みかけ〳〵て打つ刀、母は朱に染みながら、縋りつきもぎ放し、涙にくれし目を見出し、「ヤイうろたへ者とはおのれが事、爰はどこぞ敵の屋形、守屋退治の御陣に、槍一本の御用にも立たうと思ふ所存はなく、母親獨り助けんとて、垣を破り忍び込み、命は幾つ持つたるぞ、父母が產み付けし命は只一つ、うたてや情なや、生きとし生ける者には一色宛の役あつて、鷹は鳥を取るが役、猫は鼠を取るが役、三毛の唐猫も獵せぬは鼠捕らずと云ふ。武士に一つの大役あり、

取り、人竝の死をせず、子供の名を捨て、死したる父が白骨にも恥辱を得るは目前、その儘置いて守屋方にて刑罰に死したる分は手がつかず。無道の母を思ひ捨てて、父が武勇の名を繼ぐこそ孝行よ。相役の見ぬうち早歸れ、兄弟が骨柄島主に見せたやな殘念さよ。」と涙ぐむ。兄政若發明者。「卑怯なり川勝、誠や御邊は一度帝の御味方に參らんと、我が父と堅き契約あるよし、士たる者の言葉を違へし面目なさ、母にあらぬ難を付け、世上の誹りをふさがんための僞りな、サア證據をあげて母の惡事を承らん。」と氣をせいたる。「オヽ、子供相手に云ふも淺ましながら、打見るより大人しし、物の道理は知りつらん。總じて女は二人の夫に見えぬ法、然るに島主が忌中殊に人質擒の身預りの此の川勝に戀慕し、艶書を袖に入れ、人前も憚らぬ見苦しき行跡、云ふも中々いま〱し。物も書くらめ、母の手を知りつらん。是れおふくろの癡話文御覽なされ。」と投げ出す。「オヽ、母の手知らいでよいものか、なに上書はかはかつさま、ナウ都賀若樣かに是れは母の筆。」と、頂かせ頂いて、披く心ぞ無殘なる。「それぞ大和詞の戀の文、とつくと讀め〱。」と、いはれて卷き返し、繰り返し〱讀んでは卷き返し、「ナウ都賀若悲しや母樣氣がちがうた。天魔のみいりか口をしや。」と、兄弟膝にもたれ臥し、あたりも恥ぢず泣き居たり。「道理〱口惜しい悲しい筈、斯く云ふ川勝も一度は御味方に參らんと、父島主との契約時節がな來れかし、人質の上﨟達を盜み出し、御土產として參內せんと、折を待つ今宵し

めつきと破る音。「すは盜賊か忍びか。」と、袴の紐も時は何時、夜中過ぎ、「外からは貧の盜人内には戀の歌、扠まぜ合はせて事やかまし。」と、獨言して帶締め付けて高からげ、心かけ置く身のかため、筒の火かい込み緣をおるゝも音せじと、庭の木の間を差足して、つまり〳〵切りやぶる切先、「ヤ死にに來たる不運者。」と、燈そむけ提灯ふせて、待つともしら刃の山刀、非力と覺しく休み〳〵切る音もめつきめき〳〵、きれもきれたりさゝらへり。一間なんなく切り破り、潛る形は星の影、明らかならねど十四五許り、十二三の丁稚兄弟らしく、太刀かたなのさしこなし、只者ならぬ身の取り廻し、山刀そつと捨て、耳をすまし囁き合ひ、息を呑んで足音も、渚の鷺の小鮎を覘ふ拔足して、緣際近く寄る所を、くわつと上げたる筒の火も、明々たる川勝が眼ざしは子ごゝろに、猶すさまじく胴振ひ、怯氣を見せじと蹈みしめて、睨みあうて立つたりしが、「兄樣ヱ、口惜しい本望は遂げられぬ、是非におよばぬ何とせん、これまで入つたる思出、母の顏一目見て切死にせんサア來い。」と飛んで入るを、「待て。」と一聲かけられて、「あつ。」とゝゞまる兄弟が、心の内こそほいなけれ。川勝覺えず涙を浮べ、「おこと等は葛木島主が子供よな。母を奪ひ助けんとの一器量、島主が倅といはねども明らかに、砂の中の金とは汝等が事ならん。よし川勝が腹切るとも、目を眠つて本意を遂げさせたい場なれども、奪はせぬが親子のため、朋友信あるの道なるぞ。此の母ながらへては大惡事を仕出し、不義不貞の惡名を

せず、「かはいやそばに居たあまのじやこ、口へも入らぬ餅搗き、咽が鳴らう。」と笑ひける。表門より呼びつぎ／＼、「君よりの上使あり。」と、呼ばはる聲に月益奥に驅け入り給へば、河邊何某使として、「是れ／＼廣海、守屋公急々に仰付けらる旨あり、夜中ながら早々出仕あるべし。跡は川勝用心油斷なきやうにとの仰せなり。」とぞ言ひ渡す。廣海謹んで、「夜中急の御召、片時も猶豫なり難し、いざすぐに御同道、川勝殿御番所渡し申した。馬に鞍置き郎等跡より追ひ付け。」と、袴股立取り敢へず、夜半の鐘の聲おくる、風を追うてぞ急ぎける。川勝番所に只一人、つく／″＼と思案し、「今宵俄に月益我に戀慕の仕掛け、此の文懐に押し込んだる心入れ一圓に心得ず。此の女猥りなる者にあらず、どうでも仔細あるもの。」と、上書見れば丸かなにかはかつさま。「ム、うへはわざと戀の文、うちに大事を書いたもの。」と、ひとり頷き開く文、假字美しく眞名交り、先づ筆たてに、「よとみたかかははこいはか。」と書き初めしより終りまで、大和言葉ひんぬき上々の癡話文、見れば見る程我が方へぬれ文、奥書に一首の歌、恥かしや身はさかさまの戀衣打ちかへしては哀れしれかし。川勝はつと興さめ呆れ果て、「書いたり／＼畜生女、見る目も汙れ、取る手もいま／＼し、見下げはてたる女め、此の川勝をなぶつてかあなどるか憎き奴め、此の文頰へ打ち付けうか、引き裂いて蹈躙らうか、それも結句情らし、諸人に見せて恥かかせん、斬つても捨てたき女め。」と、獨り腹立ち居たりしが、庭の高塀めつき

て局々、毎夜々々の男穿鑿、ア、羨ましいことかな、あの男に文が一つ付けたいと、思ひの數々書きくどき、常に肌を放さず、をりがなく〳〵サア爰ぢやと、思へば傍にきつと*あまのじやこ、エ、面倒なあまのじやこのない時節を〳〵と、天から降る時節を待てば雪も降る、師走は内裏も餅搗き、千石萬石ソリヤ上臈を臼へ入れうと、仕丁どもが杵持つて追ひかける。まだ十六の目からは、大きな杵がこはうて、御殿中を逃げ廻り、御番所に彼の人がちやうど此の川勝樣の樣にして居る所の袖の下へ、まづ斯う顏をさしこんで、袴腰にぢつとだきついた其の時は、臼も杵も打忘れ、ぞつこんたへて其の嬉しさ、底の眞實は知らずに、いたづら者と思はりよかと、恥かしいと嬉しいと汗はひつたり、肌に付けた文が濡れぬさきにやりたけれども、又そこにもあまのじやこ、エ、辛氣なあまのじやこが、あちら向くかと思へど、こゝを大事と見つめて居る。あれ〳〵あそこに餅花、それ〳〵そこにも餅花、したり〳〵しだり柳に櫻花、はなに鶯手ふり鶯、聲につき手につき、きよろ〳〵する間に文を袂に、やれば戻す戻せばやる、ハテ讀みていやなら、そつちで引き裂いて捨てたがよいわいの。拜みます〳〵拜んでもせがんでも、ふみ返すは丸木橋、いやともおうともいはば岩橋、しつかりと文渡して、ア、嬉しやと思うたが戀のこと始め、胸の思ひの煤掃は昔咄、今は引きかへ此の世あの世の年こし、語る我が身は炭より先に焦れて灰になりさうな。」と、語れば川勝すまぬ顏、廣海は猶合點

ねど、書き寫す御經に心すむ月盆御前筆をとめ、「扨々何かのお心遣ひ氣のつまる事もなし。是れは爰元では御法度、法華經と申して諸經の王、夫島主菩提の爲、百ヶ日までに書きたてんと急ぐほど猶筆廻らず、火燵はなし手はひゆる、何と申しそれへ出て火にあたることなるまいか。」「お道理〳〵、式法なれば御近所に爐はきられず、いざ〳〵是れへ。」と伴ひて、炭つぎ直す埋火の、あたりは春の心地して、涙の氷解けぬべし。「ハァお二人左樣に飛び退いて私一人あたるも迷惑。女の側との御遠慮ならば此方こそ。」と立ち歸る。「それは結句迷惑、扨々お構ひなさるゝな。」と袖に取り付く川勝が、手を袖共にぢつと取り、「申し斯う袖を取り交せば昔が思ひ出さるゝ。島主殿と我が中は常體の夫婦でなく、互の戀の樣々、其のほれ初めは私が心一ぱい筆に染め、先づ此の樣に袖をとられた折に幸ひ、あつちの袖へ彼の文をまづかう入れた。」と、誠の一通川勝が袂に入るれば、はつとして何かなしにつきもどす。また押し入るをつき戻し、「ナウ〳〵寒氣の節ぬれ咄所望に存ぜず、ひあがつた火鉢に仕らん。」と寄り居たり。「いかにも〳〵、戀も無常もおもしろからぬは人の身の上、さりながら聞くも形見語るも形見、耳の役に聞いて下さんせ。」と、詞遣ひもやはらげば、廣海何の氣も付かず、「さらば我等も耳の役。」とすべりより、火箸手ぐさの火ぜゝりして、「ほんに此の火に燒かれうそはない、私は始め禁中に宮仕へ、島主殿は元より侍所の勤め、二十一の元服男、私は十六、傍輩の上臈中臈御格子過ぎ

りや書いたものぢやない、我が手に探つて抜いたもの、眉をぬいたまゆ鑷。」と、口がしこくもいひすべらす。金柑頭の典藥佐伯元亨齋、「ヤ川勝殿廣海殿、櫻戸御前の血の道かるいこと／＼、藥一服調合せず、瞽女座頭に一曲彈かせ、忽ち本腹いたさせし、是れが老醫の機轉の療治、右の手の三脈が三下り、二上りにぴん／＼したる見立なり。」と、笑うて通るを兩の袖口聢と取り、「誰に寄らず懐中改め上意なり。」と、懐探して、「是れ／＼此の封じ文、誰に賴まれ誰への文ぞ。」と咎めける。「いや文でない咳氣の療治の藥代、捻つて見ても知れた事、上書に咳氣の證據銀子三兩十二匁九分々々。」と、關をのがるゝ心地して、面々に札合はせ殘らず歸れば門々しめ、奥に女中の看經の、聲々細き燈の、影に二人の預りも、心やすまぬ晝夜の勤め、眠り催すばかりなり。「何と廣海殿、弓矢にたづさはる者の死後に名をあぐるも、一つは女房の心にあり。打揃うたる女中のけなげさ、別して月益御前の操と云ひ利發さ、あれに添ひし島主ならばと、奥ゆかしうは覺さぬか。それに付け月益獨り小歌も聞かず引き籠り、氣色も勝れぬ面體、重らせては貴殿我等の不念、ちと容體お尋ねなされ。」といへば、廣海物怪顔、「ムウいや／＼拙者は先度、牢輿に繩綱掛けうと申しやり込められ、氣の取り苦しい女房、又詞咎めにあへばこは物、御免あれ。」「然らば我等。」と蹈みしだく、袴の裾の長緣傳ひ、障子の前にこわづくり、「何れも氣鬱なき樣にと、主君より念入れらる。御心晴らしに。」と、あくる障子に影はささ

心、雪折竹の一ふし唄ふ聲のあや、しらべ合はせし三つの緒を、何にたとへん軒の村雨さゞめごと、彼の白居易になかせたき、浮世の外の山館、秦川勝弓削廣海預りて、女中の心痛めじと、聲よき瞽女琵琶法師など召し入れて、氣を配りいたはれども、塀の外面は亂杭や、馴れし都は近けれど、千里を隔つる二重垣、今日は漢宮の人にして、明朝胡地の妾となる、思ひを爰に籠鳥の、慕ふ雲居は遙かにて、近づく者は最期日の、影も短く暮れかゝり、番所の火鉢吹きおこす、風より外に出入の、人を嚴しく咎めけり。表門より時の拍子木ちやう／＼と打ちたつれば、中門の太鼓數に應へて打ち合はせ、七つの切の札改め「外より入來の人々、早出でられよ。」と呼ばはれば、盲法師の辰の市、歩む疊に目はあれど、けつまづく月夜も闇の夜も、晝ともなしにさぐり足、跨がる足の「又明日。」と、出づる所を武士共、兩の手をむずと取り、懷中改め「御制法。」と、ぬつと手を入れさがせど／＼懷寒く、鼻紙うすき冰砂糖、寒晒痰切生薑、聲の藥は身に相應。「書いた物は持たぬか、書いた物があらば是れへ出せ。」「それは迷惑、かいた物はござれども、ずんと古い木綿々々、御免々々。」と云ひ捨てて、とぼとほとぼ／＼歸る跡から又とぼ／＼、川舟と云ふ瞽女が「手引き／＼。」と呼びこがれ、出づる所を引きとらへ、「いつもの通り吟味する。」と、手を押し入れる懷も、匂袋鼻紙袋、中に撥駒琴の爪、「斯樣なものは構ひなし、此の袱紗に包みしは、書いた物でありさうな。」「ア、姫ごせに*ざんないこと、そ

からはしばるに及ばず、いざお次へ立つて牢輿に。」と、云はせも敢へず、月益くわつと色をかへ、「人質の我々を何の咎あつて科人とは、其の科の品を聞かん。何れも大臣公卿の御臺、此の月益も武者大將葛木島主が妻、見苦しい獸のごとく繩網とやらかけた乘物、乘りやう知らぬ。道の用心氣遣ひならば、杻械梏でもささばさせ、其の分では此の身が金輪際までにえこむとも、いかな爰は動かぬ。」と、はら〳〵涙の眼を見合はせ、上﨟達一樣に、膝を固めし張肱は、苦々しくも哀れなり。川勝取り敢へず、「御尤も〳〵、是れは廣海詞の過り、科人などの如く、牢輿にはめさせられしと申すことを麁相千萬、川勝に御免下さるべし。折ふし陣中御車は出し絹の用意なし、見苦しながら少しの道、張輿にめされ下されかし、お輿添も捗々しからず、我等兩人馬は引かせ申せども、歩にてお供仕らん。御馳走役承るも恐れながら御緣にや、御用あらば何事も御家來同然に思されよ。」と、式退して演べければ、月益につこと笑ひ顔、「是れはまあ〳〵御念入つた御詞、いはれぬ女の仔細らしいお笑ひ草、是れも夫の名を惜しみての申しごと、お歴々を步跣で輿添とは憚り、お役目の警固ならば兎も角も、鐵の鎖は免るゝとも、川勝殿の心ある情の繩に搦められ、逃げ走る道もなし、何になりとも乘せられて只御苦勞ない樣に、いざ皆樣おたち。」と、會釋して一度に座敷を立ち出づる。男も女も意地一つ、たとひ網代の車より、武士の詞ぞ玉の輿心に乘りて三重よそには知らぬ飛鳥川、淵は瀨となる人

くださんかと、案ずるは是れ一つ、お情には一番に此の月益が首斬つて、高々と獄門にかけて下されかし。兄弟の子供に見せ、母の恨み、父の仇、君の敵と一心に、無念に無念の義を勵まし、子心に勇みを付け、鬼神も欺く守屋殿の眉間に、鏑矢の一つも射かけさせ、小腕の小太刀も切りかけさせ、でかしたり健氣者、親も親子も子なりと世上の褒め者、冥土の父の魂魄を慰め武士の手本となる體を、獄門の木より見る嬉しさは、數ならぬ母が露の命百千にもかへられうか。お情には川勝殿、早く命を召す樣に願ひ申して下さるが、なう御恩ぞや。」とうち口說き、淚に咽ぶ哀れさに、かけかまひなき伺公の武士も、感淚催すばかりなり。すぐりし如き烈女ども、さしもの守屋ほつとあぐみ、「よし〳〵是非の沙汰は重ねて。卽ち秦川勝竝に弓削廣海兩人に預くるぞ。志紀の山館に移しこめ、大臣高家名ある者の妻なれば、番のものも禮儀正しく敬ひ、藝者の盲法師など琴琵琶花鳥慰みは望み次第、酒など勸めて女心を煩はすな、病氣には藥師を付け、よく〳〵痛はれ、去りながら夜廻り等嚴しく出入の人を吟味し、晝夜の番怠るな。もし奪ひかへされては我が一生の恥辱、汝等が越度、用心油斷すべからず。是れ女子達、死罪の日限も程あるまじ、此の世の逗留しばしの間、慰みでも食物でも、遠慮なしに好みの物望んで隨分活計せ〳〵。」と、帷幕の内にぞ入りにける。弓削廣海したり顏にまかり出で、「山館まで二里の道、申しても大事の科人、道の用心屹度搦め申すべきが、牢輿に繩綱かけさする

含んだる川勝、つつと出で「それ〴〵に夫ある女中は、男の心澀らす爲の人質、其の詮も候へども、末座に控へし月益は、夫葛木の島主討死し、寡婦の獨身、誰をこらす爲の人質とも捕へ置きたる其の益なし。なう月益御前、幼少の子もあると聞く、歎きを申し歸りたうは思はずか、御前の執成し此の川勝を始め誰あつてあしかれとは申すまじ、上にも定めて御聞き入れ、爰は願ひのありさうな義。」と教ふとなしに教ふれば、月益顏をふり上げて、川勝を熟見て、暫し涙にくれけるが、「扠は音に聞く秦川勝殿とや、夫の島主出陣の時申されしは、敵陣に人多けれども、心にくき弓とりは秦川勝、いで一軍して押し並べむずと組み、搦めらるゝか搦むるか、川勝が首ならば人手には渡すまじ、また我討死と聞くならば、首は川勝が取つたりと思へと言ひ置いて出でられしが、敗軍の勢を喰ひ止めんと、味方を勵まし、深入りし、多勢を引き受け、思ふ樣に切りちらし、天晴見事の討死とは聞きしかど、命の中に川勝と云ふ武士の顏、生けてならずば首なりとも、聖德太子の御旗下に、一度は付けて見せんとの詞も仇に、軍場の苔の下なる白骨まで、左こそ無念にあるらめと、今顏ばせを見るに付け、情の詞を聞くにつけ、いとしいは我が夫。」と、覺えず我が身をどうど投げ、叫び伏して歎きしが、「なう川勝殿、各一所の人質我獨り助かり、此の命何にせう、夫の忘れ形見、政若都賀若とて十五十三の二人の子供、母が憂身を悲しみ、おめ〳〵守屋殿へ降參し、二心よ卑怯者と後指さされ、親の名まで

ア今でも我が味方に引き入れしよ。所領を與へ一生安樂に暮させん。戀路の哀れ思ひやる守屋が詞、惡く聞くな女房衆。」と、辯舌に和を入れてとろりと騙す油口、妹子の御臺眼に涙を持ちながら、「是れ守屋殿、戀路の哀れ御存じとて、我々が憂身を梢に放れし花とまでは氣が付いたが、枝が高うてま些との所へ手が屆かぬ。吉野初瀨の名所も、四季とこなつに櫻が咲き亂れてあると思ふは、不覺の至り、夫婦の契りも其の通り、飽かぬ別れの曉もなく、心にさはる待つ暮もなく、二人添うた所は吉野の山の彌生如月、又斯う引き別れ、互に戀ひ侘びた所は吉野の山の秋の末、花も葉もない木々の梢も、又來る春を待つ樂しみ、散る時あればこそ花も咲け、別れがあるからは、ハテ逢ふ時節も來らいで何とせうぞいの。夜があれば晝があり、表あれば裏あり、滿潮あれば引汐あり、負ける時あり、勝つ時あり、西へ〳〵と入る月日と思へば、東に出づる月日、天道はぐる〳〵。一度はあたる順の舞、今かゝつた此の繩、めぐりめぐつて守屋殿の身にかゝる、天命のいましめと思へば、ちつともそつとも苦にならぬ。そなたも萬事取込みの中、年の寄るにいはれぬお世話。」とありければ、殘る人々一同に、「オ、問ふに及ばず言ふまでなし、弓矢取る身の軍の門出、今生夫婦の暇乞、敵の擒となる上は、夫に逢はぬ、生きて歸らぬ、二つの覺悟をすゐた女、とく〳〵首を刎ねられよ。」と、敵の詞に靡かぬすゝき、ほに顯はれし思ひ切り、高慢第一の守屋の臣、いひしらけてぞ見えにける。素より心に義を

珍らしい對面しますの。定まる奥方あるかないかは知らねども、芹摘の后樣に深き戀より事おこり、佛法を妨げ王位を傾ける程の色好み、定めて氣に入つたお妾お局もある筈、女の心は馴れても御存じないかいの、命を捨て身に替へても夫の威勢がましたい、夫の名が上げたいと願ふが天性と女の情、我等が殿御は蘇我馬子、守屋殿とは左右に立ちならんで朝家のかため、天が下の大臣職、その妻ぢや女房ぢやぞや。いかに人質の身が辛い、別れて居るが悲しいとて、膝を組み肩を並べた同輩に、大事の男を降參させ、主君と仰ぎ輿車の跡に付け扈從させて、じろ〳〵〳〵見てるさうな女子共と見えるか、とツくと目利なされ。」「サア何れも目利させまいか。」「オ、目利頼まん。」と、一度に屹と振り上ぐる、顏白妙に無念の涙、雪に霰ぞ亂れける。守屋も案に相違し、「一應にいふことならず、それそれ繩を許せ。」「承る。」と武士共、うちかけ取つて引きのけ〳〵、縲絏押し切り押し切つて、繩は解けども打ち解け難き、敵の眼に氣を付けて、猶も心ぞ縛らるゝ。守屋えせ笑ひ、「ム、さては面々が夫を守屋が味方に頼み度く、懇望すると、氣を廻しての力身よな。いかな〳〵、彼等ごとき何萬騎敵にしても、睫の塵とも思はねば、味方に持つて詮もなし。軍立してひつこき廻る面にくさ、鼻ひしがんと人質は奪ひ取つたれども、咎もなきわごぜ達に物思はすも大人氣なし。夫婦は脣と齒の如く、脣なければ齒寒し。若木の花の蕾ながら、梢を離れし思ひさこそ〳〵。夫婦一所にありたくば、サ

將勝海が弟、弓削廣海目錄ひらき讀み立つる、聲をしるべに井手の山吹、云はねど風にあらはれて、いづれも奥様御前様、氣高く著なす衣裳がら、五色の織物縫物の、花をからみし高手小手、繩目ばかりはかくるれど、手を通さねば便りなき、袖のうつせのうちかけ姿、鎧武者の並み居る中、おめずばうてず怯氣なき、一番は蘇我大臣の御臺所櫻戸御前、次は小野妹子の御臺軒場の萩、大伴神手の臣の御臺藤袴、牧吹宿根當麻眞人の北の御方千歳御前、閑屋御前、討死したる葛木島主が妻月益御前、堂上にあらずとて帳にも筆の末の露、おくれを見せぬ敵のまへ、いづれも目元すゞしげに、善と惡とをうちかけ一重、下は召人、上は長閑き花見月見のあゆみ振り、につこと笑うて坐しけるは、言ひ合はせたる如くなり。威だかき女中に弱味を見せじと、守屋ゐだけ高になり、「扠々わごせ達は、情の強い男を持つた故、かかる恥をかき苦痛をもすることよ。忠で候義で候とて妻子にわかれの憂き目を見せ、骸を人馬の脚にかけられ、子孫の根をたやすは笑止千萬、女心思ひ遣り不便々々、淺ましき人質の身の上を、面々夫の方へ打歎き云ひおくらば、木石ならぬ者共妻をあはれみ我を捨てて、守屋が味方に降參すべし。然らば官祿ともに加增し、夫婦かはらぬ千歳の契り榮華を子々孫々に傳へんは人たる身の悅びならん。蘇我妹子を始め面々の夫を、此方の味方に引き取り、夫婦めでたう暮したうは思はずか、心底聞かん。」とたらしける。蘇我の御臺臆する色なく、「ム、物部守屋とはわもじの事か、

言玉を連ぬるも心を顯はす事、讀みなす文字のてにはにあり。物部守屋澀川の軍に勝ちほこり、帝を倉梯の山陵に追ひ込め困しめ奉る。公卿大臣の御臺所、宗徒の武士の北の方、うばひ取つて人質とし、天地も許さぬ天子の粧ひ、甲冑楯鉾鞍鐙、兵器を竝べし屋形を臺盤所朝餉殿上などと名づけ、蝶鳥書いたる帳のうち、千里の外も一呑の謀こそうたてけれ。軍奉行の秦川勝進み出で、「今度の合戰味方十分の利運とは申せども、蘇我妹子などながらへあらん限りは勝負いまだ決せず。人質の女數多候て一人に五十人の繩取、番の者人數の費え、軍の妨げ麁忽に首も討たれまじ、一向助け歸さるゝか、御評議然るべし。」とぞ申しける。守屋打笑み、「オ、人質こそ智畧の第一。田夫野人の夫婦さへ、戀ひ慕ふは人間のならひ、いはんや佛法にしみ付く心ぬるき公卿武家、來世は一つ蓮と契りし女房、死出の山を手に手を取つてなどと思ひこうだる佛者共、女も皆歷々翠帳紅閨に顏を竝べ、詩歌管絃に暮せし中忘れがたく、內裏を捨てて此方へ降參するは必定、時には太子が佛法、獨り打つつゞみ、佛法とも音は上げさせぬ、太子さへ滅ぶれば、帝は水に放れし魚、日本の王位は守屋が此の掌、戰はず殺さずして勝つといふ神武不殺の軍法是れなり。人質共に對面し、直に心底聞いて見ん。女ばら殘らず召し出せやつ。」と詞は荒く、よい女房見る下心、顏に守屋の目は細く、伺候の軍兵葉武者まで、俄にたしなむ男振、鎧の袖や草摺に、さはればがたひしがた〳〵と、衣紋つくるも騷がしし。武者大

赤幬おくればせに馳せ來り、南無三寶島主討死か、よい〳〵此の赤幬が弔ひ軍、生死の門を押し破つし緩りと往生さすべし。」と城門に兩手を掛け、「えいや〳〵。」と押しければ、楠の尺餘の角柱手に隨つて動き立ち、瓦碎けて散る音は、飛龍の浪をたゝくが如く、扉しわつてめき〳〵、金物ちぎれてさら〳〵〳〵、めつきりはつたり地響きは、須彌の崩るゝ如くなり。赤幬すかさず驅け入つて、城中薙いでなぎ廻れば、副將軍勝海鹿毛なる馬に捨鞭うつて逃げて行く。赤幬笑壺に入つて大笑ひ、「軍は負け海ざまは逃げ海、逃げば逃せ、終に一度はこつちのもの。」と、門の貫の木追取りのべ、雜兵を片端に、打ち立て〳〵、討てばひつしやり夏の日の、蠅を打つより易かりけり。門の扉をひつかたげ、島主が死骸を乘せ、「當分機轉の輿は涅槃の門の扉、前後は兄弟、かかれとてこそ武士の、生死不定は覺悟のまへ、泣くな政若、涙掛けるな都賀若。」と、いへど兄弟萎める顏、跡見赤幬が赤顏、島主が生顏も、二度見せぬ苔の下、埋もれぬ名をとゞめ置き、印の石に苔むして、巖とならん代々までも、鑑なり手本なり、尤も弓馬の教訓ぞと、聞く人手向をなしにける。

第三

*若蘭が織りし錦の歌、百花散亂すと雖も夫を思ふ心おもきこと山の如し。此の日の本の假字遣、千

ればかけ塞がる、敵は手しげく切つてかゝる、拂ふ間に子は進む、後は親子の諸刀、忠孝慈愍の切先に、あしらひかねて軍兵共、城中へさつと引き、門の戸はたと押し立つる。子は切り込まんと驅け出づる。「ヤレ待て、あぶない、でかした。」と引き止め、「父が子〳〵、明日死んでも落付いた、是れほど健氣な兄弟を何しに勘當するものぞ。大將をはじめ諸軍勢、氣を落せし武者振を勵まさんとの謀、勘當は許した。」と、言へば兄弟縋り付き、「親の御慈悲。」とばかりにて、嬉し涙に咽びける。「オ、嬉しい、己も嬉しい、大將にも告げ知らせず、忍んで來れば不審もたたん、いざかへらん。」と立ち上る。誰が射るとも白羽の矢、島主が眞向にうらをかかせてはつしと立つ。大事の傷なればたまり得ず、佛倒しにかつぱと臥す。兄弟あわて縋り付き、城を見ては齒がみをなし、顏を見てはしやくり上げ、「御傷は淺い氣をはつたり。」と、いさむる我ももろともに、消えんとかこつばかりなり。島主眼をくわつと見開き、「主も知れぬ矢先にかゝり、むざ〳〵ム、むざ〳〵死ぬるが口をしい。川勝めを存生に味方へ付けず首も見ず、互の詞も反古にして、是れ一つ殘念々々。我死したりとも肌にかけた位牌の片割、繼ぎ合はする時節を見よ、繼ぎ合はせずば川勝が首とつて手向けよ、薄著するな毒喰ふな、達者で兄弟中ようせい、孝を思はば心をつくせ、君の爲には死にをれ。」と、是れを最期の詞にて、五十一期つきはつる。兄弟は、はつとばかり、大地に五體を投げ捨てて、聲も惜しまず泣き居たる。跡見

り、砦數ヶ所付けたれば、いつ攻めうともこつちのまゝ、一まづ皇居を守護せん。」と、暫く陣所を控へける。日はさやかにて掻きくもる、目は泣きはらせど骨々にしみ付く親の諫言を、最期のすゝめと兄弟、大手の門に走り付き、「いかに城中の人々、斯く申すは葛木島主が二人の子、兄政若十五歳、弟都賀若十三歳、母は守屋に奪はれ、父には不興、生き甲斐もなき命、何を以て君恩を報ずべき。此の城を枕に討死するより外はなし、不便と思ふ人あらば、をり合うて勝負を決し、兄弟が本懐を遂げさせたべ。」とぞ呼ばはりける。子供目當てに我一高名諍ふ守屋が勢、中にも、「役の熊王。」「六田の岩切。」と名乘つて驀に討つて蒐る。兄弟莞爾と打笑ひ、「オ、聞分あつて早速の御出でかたじけなし、參りざふ。」と渡り合ひ、祕術を盡して戰ひしが、熊王太刀を受けはづし、弓手の肩口切り下げられ、岩切も膝口わられ、のつけに返り失せにける。兄弟大音上げ、「弱者は相手に足らぬ、秦川勝はあらざるか、出合へやつ。」と呼びかくる。軍兵ども腹を立て、「いはれぬきやつが相手好み、鱠にたゝけ。」と聲々に、をめいてかゝれば兄弟今を限りと死にぐるひ、大勢に渡り合ひ、しのぎを削り戰ひける。島主は兄弟陣所になしと聞くより必定死に出でつらんと、子に引きかへす親心、逸足出して驅け來る。案に違はず大童に戰ひなし、既に危く見えければ、「島主是れに。」と名乘りかけ、面もふらず切り込んだり。父と見るよりおくれじと驅け出す。親は討たせじ子は死なんと、控ふる袂振り放ち、躍り出づ

仕度に見えければ、島主躍り上つて齒がみをなし、「エ、口惜しや守屋が弓矢何程のことかある、心憎きは川勝一人、よし／＼守屋に川勝敵に實が入つて面白い、島主があらん限りは二つの首を兩手に提げいで置かうか、ヤイ餓鬼めら、おのれも父が子、若年なれども鎧を著たは何のため、だてに著たか寒さに著たか、兄弟枕を竝べ討たれたりとも、君の御供したりとも、親はなんぼう滿足せう、母をおめ／＼敵に奪はれ、父の御事氣遣ひとて、はふ／＼の態で是れへ來て、ォ、奇特によう來たと悅ぶ親と思ふか、大腰拔のうろたへ者、ごくにもたたぬ注進し、妻をうばはれし人々に氣を落し、守屋方へ降參させ笑はんためか、あれ見よ何れも色もかはらず結句心には勵み付く、うぬらが母を奪はれし此の島主、人々への申しわけ、朝恩を報ずるため、さつぱりと討死といふものをして見せう、女房も子も無ければ、世の中に殘念なし、勘當ぢや立つてうせう、まだうせぬか。」と反を打つ。人々驚きかけ隔て、兄弟にもの言はせず、無理に陣所へ引き入れける。島主に勵まされて兩將、「家を忘れ、妻子を忘れ、身を忘るゝは兵家の常、今さら驚くことならず、天恩を辱うし、勅命を受けたる臣等佛神も照覽あれ、生きて歸る心はなし。」と、思ひ切つたる顏色に、諸軍勢も義にすゝみ、「誰か不忠を存ずべき。骸を御旗下に晒さん。」と、まづ咲きかゝる言葉の花、雪間に匂ふ冬の梅、はや勝色ぞ顯はれける。島主勇んで、「ォ、尤も斯くこそあるべけれ、一大事は帝の御上氣遣ひ千萬、此の城には柵をふ

世を見た事もなく、あるなしの穿鑿傍痛し、此の太刀の引導受け、極樂地獄の疑ひ晴らせ。」と、南無阿彌陀佛の拜み斬り、火宅を出づる車斬り、平等大慧の撫で斬り、亂れ斬り、佛道神道分目の勝負晴れがましくぞ三重見えにける。造は大嵩者、既に危く見えにける。法師飛鳥の身も輕々、かい潛つて烏帽子際、眼を掛けてずつぱと斬り、よろめく所を付け入つて、疊みかけ／＼首ふつつとかき落し、「神道汙れの生首、佛道には五體不具、何方つかずのさいたらばたけ。」と打笑ひ、味方の陣に引き返せば、「ぼん樣お手柄／＼。」と、一度にどつとぞ褒めにける。「此の勢ひに乘り込め。」と、どつと寄すれば城中も、門の扉はたと打つて、堅固に守つて控へたり。寄手馬子妹子を始め堀際に駒を並べ、「すぐに城をや乘り取るべき、陣を堅めて後度の勝をや待つべき。」と、評定まち／＼なる所へ、島主が二人の子政若都賀若大汗になつて驅け付け、父が鎧の草摺を控へ、「夜前守屋が大勢内裏に押し寄せ、御所を圍んで攻めし程に、宿直の兵防ぎ戰ふ力なく、或は逃げ失せ討死し、帝はやう／＼倉梯山まで落ちさせ給ふ。剩へ守屋が軍兵公卿の館へ亂れ入り、妹子馬子を始め、公卿大臣の御臺所北の方を奪ひとり、我々が母月益御前をも搦め取つて候、兄弟も討死と存ぜしが、當手の勝負、父の御事氣遣はしく、此の事知らせ申さん爲、すご／＼と後を見せ、是れまで驅け付け候。」と、涙を浮め語りければ、兩將を始め諸軍勢、「是れは／＼。」と氣を失ひ、呆れ果てたるばかりなり。陣中ひそめき皆落

負ふ蘇我馬子妹子大臣、葛木島主は官軍の武者大將、月日の御旗、家々の物印、軍兵風に梳り、枯野の露に沐みして一刻に揉み破り、われ乘取らんと勇みをなす。城中には守屋が副將軍弓削勝海寄手を直下に見下して、「驅けちらし追ひ拂へ。」と、大手の門八文字に開かせ、一度にどつと切つて出づれば躊躇はず、入れ替へ〳〵名乘りかへ、雪を散らし木の葉を亂し、花を飛ばせて戰ひけり。城中には川勝が百術千慮の下知をなせば、さしもの寄手色めきたち、攻めあぐんでぞ見えにける。城の中より七尺豐かの髭男、鎧の上に淨衣を著し、立烏帽子に三本五幣の指物、つけの棒提げ、鳥居立につゝ立ち大音上げ、「抑是れは當國河内國守屋公の氏神、符都の大明神の神主大造とは我が事なり。汝等が佛法は此の世は苦界の娑婆世界、早く淨土に至らんと願ふとな、やすいこと〳〵、我と思はん寄手の勢、神罰の棒をいたゞき、極樂淨土にたつた一飛び、いざ來い〳〵。」とぞ招きける。「憎い禰宜めが廣言、打ち取つて功名せん。」と拔きつれ〳〵切つてかゝれば、事ともせず謹上再拜拂ひ打ち、うやまつてまうすりこ木打ち、神はきね打ち、正直の頭肩骨腰のつがひ和光胴骨きらひなく、千早振る棒八方無隅微塵になれとぞなぎ立つる。刹那が間に七八十騎弓手馬手に薙ぎ伏せて、「ハア笑止〳〵、聖德太子佛頼んで地獄へ落つる不便さよ。」と、かんら〳〵とぞ笑ひける。寄手の陣より二十餘りの若僧、鎧の上に掛絡をかけ、太刀提げ小躍りして大音上げ「抑愚僧は和州橘寺吉沙彌といふ沙門、已來

いて、位牌を二つに切り割り、「コレ此の一方を返事に持つて歸られよ。」と投げ出す。島主も動轉し、女房は氣も狂亂、「こちの人あんまりな、此方の一味せうせまいは位牌の知つた事ぢやなし、勿體なや父上を。」と、臥し沈みてぞ泣き居たる。島主膝立て直し、「ム、聞えた、返答あしくば堪忍すまじき此の島主が面魂、氣味惡く、親の位牌を切り割り、是れで料簡してくれか、いやかおうかさつぱりと口上で返答せよ、此の判じ物の樣なこと、身には措け、守屋にせい。」と、投げ返す。「ハヽア、さ程道理に暗うて、武者大將見事する氣か、親子は一體、位牌は卽ち川勝が一身、いま連判削つて守屋に叛けば、武士の義立たず、又親の信ぜし佛法に敵すれば孝行たたず、御分に渡すは孝行の位牌、手前に持つは武道の位牌、二つを一つにつぎ合はする時節來れば、川勝が孝も立ち武も立つ。此の上の返答ない。」と、また島主が前に置く。「ム、面白い、孝と義となき士は、味方に賴んで詮もなし、必ず位牌を繼ぎ合はせ、孝行武道の義を立てよ、それまでは敵味方、戰場に向つて遠慮はせぬ合點か。」「オ、いふにやおよぶ、此方も遠慮はない。島主が首は身が取るぞ。」「川勝が首は身が取るぞ。」「必ずとれよ。」「オ、取つて見せう。」「サアさらば。」「さらば。」と別るゝ武士の一言は、返らぬ水の川と島、濁らぬ氣立、三重 吹き分くる嵐は柳に幌をかけ、松柏枝を矢に番ひ、骸は積んで山をなす、寄手に響く責鼓、城に合はする鬨の聲、矢叫びの音法螺の貝、百千の雷もこゝに落ちくる如くなり。寄手は名に

つか知らねども、氣は百千に碎かれて、讀むほど知れぬ夫の心、問ひには立たれず、囁いても返事せず、どうした事と島主も、奥を見やりて諸共に、野澤の水の五月雨や、すまぬそこいを汲みにけり。川勝衣服改めて、睨みつめたる眼ざし、今もやことにあひざめの、大小ぼつ込み玄關さして立ち出づる。女房ちやくと袂に縋り、「けたゝましいお顏付、月代も遊ばして、何方への御出でぞ、樣子がなうては叶はぬ筈、御物語。」と、引きとむる。「オ、いうて聞かしよ、父母の忌中は大事のもの、耳に多言を聞かず目に惡色を見ずと云ふ、最前より心に受けぬ多言を聞き、今二日となつて大事の親の物忌に疵付けんこと勿體なく、茶坊主めに云ひ付け、二日の時計を一時に打たせ、四十九日の數を合はし、今日卽ち五十日の忌明け、地頭への出仕をするに不思議はない。」と、袖振り切つて突きのくる。先には島主身構へして、「コレ川勝中陰明けて他行する身が、是れに居る某に式退もせぬは、長精進で眼が見えぬか、心に受けぬ多言を聞いて、中陰の妨げとや、心に受けうか受けまいか、直々の返答承らん。」と、突立つたり。川勝臆せぬ笑ひ顏、「オ、最前よりの長口上、天下の人民皆國主の味方、そりや知れたること、然れども義によつて朝敵となり、命を果すも武士の道、二つなき川勝が一身、敵とも味方とも今返答はならぬ〳〵。」「ハテ辭宜をするも事による、何方も付かぬ言分せずとも、一口に片付けて、今返答。」と詰めかけたり。川勝立ち戻つて、佛前の父の位牌を持ち來り、腰の指副引き拔

じ、お賴みなされて得心なければ、互に快からず、さうは思召されぬか。」と、始めの詞おし枉げて、間に青柳の絲筋を、わけて云ふにも云ひ難し。島主一圓うてぬ顏、襖の彼方に川勝が、あると見しより大音上げ、「ハア、川勝殿の內室なれども、遉女性、彼の昔物語、比干は紂王を諫めて胸を裂かれ、夷齊が武王を憤り、終に首陽に飢ゑたるも、惡を諫めて義を求め、仁を勸めて身を捨つる。それさへ天下に益もなく、我が身一つの仁義だて、胡麻と芥子が大小を諍ふ如く、どちらを見ても小さし小さし、四海の仇を拂ひ淸め、廣く國家に仁を敷き、名を金石に記されて、譽を子孫に殘すこそ、武士たるものが望む所、何ぞや僅かの義にくゝられ、國賊の方人仕おほせて大惡人、仕損ずれば子々孫々長く家名を失ふ事、其の上御親父入道殿、太子の法義に歸依めされ、かたの如くの信心者、父の道を改めぬは、孝の一つと忠中の勤めも、佛法にて追善作福ありと聞く、守屋に從ふ心ならば、いかに親の爲とても、佛道にて跡とふは、僻事であるまいか。そこを構はぬ心底に、一物ありと見て取つて、詞を盡すも川勝殿、味方に賴まん爲ばかり、いやかおうか、二つに一つの御返答、承らん。」とつめかくる。女房彌理に伏し、「重ね〳〵いやとは云はれぬ御詞、かうしたことを聞かれては、よもやいなとも云ふ氣か、但しいはぬ氣か、いかゞ。」とあとをさし覗けば、川勝は鏡に向ひ、若黨の團中が剃る月代の際立てて、一理窟ある顏の色、茶頭坊主の茶行めは、時計仕掛けてめつた打ち、數は幾

い、帝に頼まれ奉つての御味方頼み入る。身不肖ながら此の島主、七重の膝を十重も折り、甲の天邊を地に付け申さん、直談とは此の無心、偏に〳〵御料簡、川勝殿の御名代、御返答は。」と一筋に、思ひ込んだる武夫の、魂等閑なかりけり。座は替れども理は一途、川勝も吐息付き、分別眼を閉ぢにける。女房つく〴〵打頷き、「いやとは云はれぬ理の至極、夫川勝と申しても、守屋に譜第相傳でもなく、當國守屋知行ながら、龜井竹淵大初瀬、此の近郷は夫の先祖、刀の先で切り取つて、一派立てた身なれども、いつぞの程から年貢地が混つたとて、ふつと守屋の下知を聞き、あがまへが高じて、今では地頭の名はあれど、それは假令、なんの守屋に恩は受けず、お主と申すは王樣より外はなし、ことに父御入道佛道の信心者、親孝行の佛法のお味方、何のいなとは申されまい、忌明け次第驅け付け、お前方と御一所に、手柄は仕勝ち高名は、誰に劣りもせぬ人。」と、夫自慢の舌車口に廻せど、川勝は澀い顏、襖細目に裾を引き、「守屋の廻文判形は削られぬ、帝の御味方ならぬ〳〵、言ひ直せ。」と、囁けばはつとして、堅い夫の料簡押し付けても云はれぬ首尾、島主が傍へすり寄つて、「また斯うもござりませうかいの、川勝存じられうには、恩のあるなしは内證、秦川勝守屋の被官とは、一國知らぬ者なし。今御味方に參つては、得手勝手な卑怯者、人でなしと嘲りは先祖までの恥辱、義も道も立ちますまい。義を重んじては髫髮の童子死するに門なしと、常々主の口ずさみ、よもや心は變ずま

刀かさ高に出立つて廣間に通れば、女房會釋し、「是れは珍らしい御出で、けしからぬ御出立、されば夫川勝も、お出での由承り、お目に懸りたき物なれども、御存じの如く明後日まで父の忌中、地頭の出仕も致さねば、何方へも御意得ませぬが、お心安い島主樣、御用とは氣遣はし、私に聞きませいとの申し付け、お心置かれず仰せ聞けられませ。ハアお煙草は上らず、火を清めてお茶上げませい。」と、愛想らし、「ム、忌中とは御尤も、さりながら申さでもすまぬ事、奥方へはなし致すは川勝殿へ申すも同然、屹度お聞きなされう。守屋大臣忝くも聖德太子佛法御興隆を嫉み、おのれが母をも見殺し、膳靫負を殘害せし大惡逆、剰へ帝を失ひ奉り、其の身萬乘の位に卽かんと志貴の郡、澀川に城郭を構へ、不日に内裏を攻むべき催し、御存じでござらう。太子は折ふし夢殿の禪定に入らせ給ひ、天上とも入唐とも、凡人の知る所にあらず。是れに依つて蘇我馬子妹子大臣、斯う申す島主を始め、敕命を申し下し、近日彼の地へ發向し、一戰に守屋を亡ぼし、宸襟を安め奉る合點、それにつきて川勝殿、守屋が領内御住居の人、申さば敵味方、爰をよう合點あられう。天地の間に生有る者、何れか天子の恩を受けずや。良禽は木を見て住み、忠臣は君を選んで仕ふと云ふ。天下を奪はん位に卽かんと、臣として君に刃向ふ守屋は、至極の大惡人、太子は此の世許りかは、未來出離の大導師、善惡の二つ目前に見えたこと、若い人のわるう呑込み、降參などと思しめさうが、必ず／＼さうでな

がら、地頭の權付、いやと言へば、臆病者、是非なく陣觸の廻文に加判する上は、忌中明け次第驅け付け、斬つてのはつての、心は佛道、形は修羅道、返り咲きの梅花手向に受けうも知れぬ命といふは座興、手柄して見せませう。二日の忌中大切に勤むるは孝行、氣鬱することはおりない。ゆめ〳〵氣遣ひめさるな。」と、いへば女房進み寄り、「便ないお物語、いよ〳〵心がないもの、先づ申して見ませうか、*お位樣の御忌中は、月を日にかへて十二月を十二日、我儘なされやう、すりや三年も名ばかり、それに五十日の長精進をやう〳〵濟めば軍立、内でとつけりと精進あげの間はないぞえ。魚でもあがつて力付けての軍立がようござんせう。私も木竹の身ではなし、夫婦ちとしつぽりとァ、魚でもあがつたらようござんしよ。」と、耻かしげに赤らむ顏のほんのりは、霞に虹の如くなり。門外に馬の高嘶、若黨罷り出で、「葛木島主樣、急用の御相談とて御出でなり。」とぞ申しける。「ム、お中のよい島主樣、ようこそ〳〵此方へと申しませ。」「ヤレまて〳〵、尤も島主懇意といひながら、彼は太子方に無二の忠臣、弓馬の道も磨く者、守屋の地に住む某、日頃とは違うた、咄に來う樣もなし、來る隙もない筈。よし何にもせよ地頭の出仕も相止め、燕居せる川勝、他の對顏も本意ならず、戻すも無禮、幸ひ御身も近付、立ち合ひ樣子お聞きやれ、此方へ。」と請ぜさせ、合の襖に中陰の、遠慮を隔て聞き居たる。いつに變りて島主は、白檀みがきの腹卷、木蘭地に藍花摺つたる陣羽織、大太刀首かき

第二

蜂に上下の禮あり、烏に反哺の孝あり。人は四靈の長たるや。世の時を見て滄浪に、冠を濯ひ口すゝぐ、秦川勝といふ武士あり。家の弓矢は忘れねども、今伶倫に身を寄せて、河内國に居住の地、守屋が領分入り混れば、主あしらひの無念さも、それなりけりの親の孫、父川文入道病死あり、今二日にて七々の、名殘もいとゞ身にぞしむ、落葉は書院に滿ちて紅を敷く。玲瓏たる佳月寢所に耀いて、別れを今も在すが如く、父の位牌を供養し、喪に引き籠る川勝が、至信心こそ他に異なれ。夫につれて風俗も、うづたかき蒔繪の煙草盆、手づから提げて中陰は、夫婦も遠慮の襖越し、「永々の御忌中ま一日二日といひながら、嘸お氣もつきませう、廣間の庭の白梅が返り咲き、春の樣なと女子供が申します。暫くの間お心晴らし、御覽もや。」と伺へば、「ム、女房も苦しからず。」と襖戸開き、「おいやる如く父の忌中も今暫し、忘れうとは思はねども、去る者は日に疎し、月日の經つも名殘あり、父母の別れには王憂へて、亮陰三年とて一天の君猶斯くの如し。匹夫の我等二月たらぬ中陰に、目を悅び耳を樂しみ、心の儘に過さんこと天の恐れ。其の上地頭守屋殿、澁川に城を構へ、叛逆の思ひ立ち、父入道殿は專ら佛法に心を入れし人、その甲斐もなく守屋が手に屬し、帝太子に弓引くことは迷惑な

十町ばかりぞ追ひかくる。何として直駒、郎等少々取つてかへし、門たゝき割り亂れ入り、后を奪ひ引立て行く。「ヤア玉鶴が是れに居る、后樣を渡さうか。」と、取り付く所を一つに攫み、大地へどうと打付け、「動くなおのれ等、鉞の二つ胴。」と振上げんとせし所に、赤幡すかさず飈の起るが如く、宙を飛んで驅け來り、直駒をはつたと蹴倒し、鉞もぎとり胴骨どうと踏み付けしは、心地よくこそ見えにけれ。「サア此の間に落ち給へ、都は守屋が方人多し、明けぬ先に早う〳〵。」と見送つて、「ヤイ罪人め、此のあらけない鉞、むく〳〵の娘達を是れで割つてたまるものか、うぬらが罪障の山の杣入杣木になれ。」と振り上げ、伐木たう〳〵〳〵と割つたる頭の鉢兩腕兩股、ちやう〳〵はた〳〵微塵に割つて割り付くれば、殘る兵一度にどつと寄せかくる。「ヤイ瘦山の雜木共、こなしてくれん。」と東西南北、四面八面割りちらし、太子は御佛守屋は地獄、せめ手の赤鬼赤頰よつく見よ、地獄の釜の割木にして、大焦熱の燃口よし、三途のながし死出のかち、生木ふし木のきらひなし、十惡五逆の五かけ十かけ、手早い木割の手並は是れまで。」どう〳〵〳〵と踏んだる足音、川音水はしる、富の小川を打越えて、斑鳩の御所へぞまゐりける。

杖、*鉢丁笠の軒ふかき、小家の歩くに異ならず。門外に蹈んばたがり、「あらうそさびしい今宵も何の事もない、太子夢殿御入三昧の間、后の屋形守れとの御意を受け、何にもせいで嬉しうなし、強盜でも來いかし。」と、振り返る山手より、提灯星の如く、數百人羣つたり。「ヤァ曲者。」と門の冠木を踶かと取つてひらりと乘り、練築地の棟瓦、大胡坐組んで待ち居たる、程なく、大勢斧鉞打ちかたげ、喚いて來る、大將は東の直駒、左右に下知して、「ヤァ／＼者共、此の門一重打ち破るは易けれども、太子方より用心構へ、過ちしては不覺なり。提灯さし上げ内を照らして驚かせ。」と、取りのべ／＼差上ぐる鼻の先、赤檮をかしさ、「ヤァ下された、暗闇にしてよい氣味せん。」と、ふつと吹き消し又引き寄せては吹き消し、引き寄せ／＼片端に、ふつ／＼／＼と吹き消され、俄闇に度を失ひ、行き當り攫み合ひ、亂れ騷げば直駒、「騷ぐな／＼、塀の上に何やら見ゆる。油斷すな。」と言ふ聲に、赤檮騷がず棟瓦取つて投げかけ、雨の如く投げ付くれば、「そりやこそ敵が飛びおりた。」と味方討同士軍、更に分ちはなかりけり。直駒こゑを掛け、「見付けた／＼、塀の上なは跡見赤檮、誰かある搦め取れ。」「承る。」と山邊石繩、腕木に取り付き上る所を、肩骨攫んで「えい。」と引き上げ、小脇にかいこみ、首ふつつと捻ぢ切りしは、熟柹をもぐより易かりけり。「見たか／＼名乘るに及ばず、跡見赤檮もそこへおりて見參。」と、練築地ぐわら／＼／＼蹈み碎く土煙、搏つ鶻羽たゝく鷲、逃ぐる敵をあまさじと、

夫婦の契りはくちすまじ。心外無別法、佛も法も心にて、夫婦も亦心なり。應無所住而生其心、邪正一如。」と、鞭を上げ給へば、調使丸駒の口を引立てて、矢を射る如く飛ばせけり。「偶逢うて甲斐もなき、暫くなう。」と聲を上げ、慕ひ行かんとしたまふ所へ、膳叡負あわたゞしく、「危し〳〵妹君、守屋が今日の花の會、天皇太子をうしなはんと、謀反連判の會合、其の諍ひにて修羅道に迷うたり。我夫婦とかたらひし玉鶴を力にして、いづ方へも落ち給へ、こなたへ。」と、引き戻す。「いや〳〵太子の御供。」と、控ふる袂兄弟の、此の世の緣もふつときれ、かつぱとまろぶまろ寢の牀、夢は破れて閨の戸に、「なう太子樣々々。」と、御門に走り出で給へば、腰元下婢、「恐い夢御覽なされたか、お心しづめられませ。」と、諫めても茫然と、空さへ曇る玉鶴が、走りついたる夫の門、慌急しく、「賴みませう賴みませう。」と叩けども、「守屋めが使さうな、默れ〳〵。」とひそめく音、「いや大事ない玉鶴と申して、叡負樣とは夫婦、守屋が逆心一味なされぬにくしみ、無體に害せし叡負樣のお首を證據。」と、なげ入るれば、后、「是れは。」とさめやらぬ、夢に夢見る御淚、門を開けば走り入り、「契りし人のお妹御、夫の形見の后樣。」「兄の形見の玉鶴殿。」と、引き寄せ〳〵縋り付く、中は嫂小姑、淚の絲の結ぼほれ、寄り合ふ緣の哀れさや、夢に逢うたる御物語、かなしみ深き夜半の霜、奥に伴ひ入り給ふ。

御隨身跡見赤檮、太子の仰せを被り、后の屋形を忍びの夜まはり、五尺四寸の一本刀、樫丸太の仕込

も渡り、天上も遊ばす筈、何時知れずお供の用意、ふせりまする。」とぞ寝轉びける。「あの人のまざまざしい譃わいの、夢殿に心を澄まし、座禪なさるゝに、伶人の舞が入る事か。夢殿は託け、后達とのお慰みに極まつた、サァまつすぐに言や〳〵。」と、首筋に手を入れたまへば、「ァ、こそば〳〵、いやこそぐられても打たれても、無いことは申されぬ。今宵に限らず爰ぞといへば、伶人の舞、太子樣に添うたものさうな。殊に前生は唐土南岳大師と申す、大智識の御再誕、昔の御身の御命日、毎月二十二日舞樂を奏せよとの仰せ、蘇我大臣笛の役、妹子大臣笙の役、此の馬も時々は太鼓の役。」と笑ひしが、「ヤおもひ付いた疑ひの念晴らし、此の著替への烏帽子白張をうちかけ、調使と召さばはつとこたへ、お馬について道すがら、明さ暗さを問ひ問はれば、互の思召すまゝ。」烏帽子めす儘、白張の袖にひかるゝ黑の駒、黑白しやれたる馬取なり。案の如く聖德太子築地の上より、「調使々々。」と召さるれば、后、舍人が敎への如く、「あつ。」とお馬を引き寄せ、烏帽子傾け坐す。馬上に閃りと乘り移り、大悲の手綱をくりかけ、智慧の鞭を當てたまへど、此の駒毛を立て身顫ひし、四足を縮め働かず。太子后に御目を付け、「珍らしや芹摘、御身が嫉妒煩惱の紲に、神變自在の黑の駒、駿足を繫がれたり。夫婦の契りは天倫にて、好色戀慕の類にあらず、われ釋迦佛のあとを追ひ、和國に佛法流布の大願、夢殿に閉ぢ籠り、諸國に佛法廣流の地を見立て、梵天王宮に上り、世尊天上の遺教を求め立ち歸り、

るゝ姫百合と、ながし控へのにらみ合ひ、目前修羅の劍の立花、左右に別れて三重雲の上、更け行く月の夜遊の舞樂、聲は嚬伽の鳥の聲、菩薩も爰に貴德樂春鶯囀の鶯に誘引せられ、芹摘の后は只獨り、來るともなしに青柳の柳花苑の笛の聲、笙篳篥は澄み渡り、樂も終りて聞えけり。「ア、戀し〳〵と思ふ中、何時の間に來たことぞ、太子樣のまします斑鳩の御所は爰、築地ごしに高く見ゆるは夢殿さうな、舞樂があるからはまだ御格子でない、內へどれから入ることぞ、爰がおうまや黑の駒が居眠る、ハァ、舍人の調使丸が草臥れて、烏帽子著ながら高鼾。ナア調使丸調使々々。」とゆり起され、「あい。」と許りにむつくと起き、「こりやお馬目をさませ、君のお出でぢや合點か。」と、沓しめなほす鞋の紐、「ヤア是れは芹摘樣、太子樣と思うて、あつたら目をさまいた。」と、ころりと寢るを、「是れ〳〵賴む、ちつとの開目さまいて、話す事聞いてたも、みづから后號まで下されても、いつ御所へ參つてしみじみとしたこともなく、里にぶら〳〵する中に、守屋が妻にせんと兄の靭負をせびらかす、辛氣なことばつかり、但悋氣する后達でもあることか、又外にお心通ふ方もあることか、お目にかゝつて御心底が聞きましたい、どうぞそもじの才覺で、太子樣の御座なさるゝ夢殿の中へ、みづからをそつとやつてたもや。」と宣へば、「なう〳〵ならぬこと〳〵、男さへ出入かなはず、いかな后樣でも、女子は猶以て、殊に每夜々々甲斐の黑駒に召し、拙者一人口に付き、日本の山々嶽々國めぐり、やがて唐へ

捻ぢ切り、「日本の提婆我なり。」と、我慢を張つて立つたる勢ひ、見るより玉鶴たしなむ刀かい込み、堰き上つたる女心、脇目もふらず守屋が前にすつかとゐて、「是れ守屋殿、我はもと母君の奉公人、當分そなたの雇ひなれば、主で主でないもの、慮外などといふまいぞ。ヤイ鬼め鬼神め畜生め、母君が命がけの意見を聞かず、咎もない大事の男をよう殺したな、人目忍ぶは是れまで、膳叔負が女房玉鶴、夫につるゝ女の作法、我も佛を信仰の身、佛法の敵夫の敵。」と切りかくる。入れ違へ弱ごしを片足に三間ばかり、鞠より輕く蹴ちらかし、「ム、ヽヽやさしいしをらしきめらう一人、彈指きでも殺せども、大事の軍の門出近し、無益の女を殺すは軍神の穢れ、助くるぞ立つてうせう、しをらしい刀三昧でかした〳〵、褒美をくれる頂戴せよ。」と、叔負が首を投げ出せば、玉鶴怒りの氣もがつくり、「昨日逢うて詞をかはし、今朝は文の使りを聞き、今の間に死顏見る、たつた一日一夜の中、斯うも變るは何事。」と、目も昏み氣も落ち果て、涙見せまい泣くまいと、せく程もるゝ涙なり。エ、獨りながらへ何にせう、死んでくれうと思ひつめしが、分別しかへつゝ立ち上り、「コレ名にし負ふ守屋殿の太刀先に、數ならぬ女の此の首を貫かれ、さき立てし夫のため、手向の立花になりたいが、芹摘樣が氣遣ひな、とつくと御殿を移し參らせ、互に一命一色の、花の會に必ず見參、それまでさらば。」と、身をすゑて、「女松の心の枝振よし、小言吐かずと出てうせう。」と、詞も猛き鬼百合に、こなたはしを

太子様の御慈悲教へを受け、咲き散る花に無常を知らせ、心を和げ善心に引き入れん爲の花好み、老の榮耀と思ふかや。見るもいぶせき太刀かたなをひらめかし、劍の山の道引が、善とはならで惡となり、咎なき花にも紅葉にも、恨みが出來た。」と子を思ふ、口說き淚はせきあへず。「サア尼法師の首斬らば、先づ一番に此の母が首打て。」と、顆頭取り給へば、守屋は大きに動轉し、「ヤア何時の間に誰が剃つた、心中に望みあつて佛經を削る守屋が母、佛を信じ尼となり、我が子の恥辱はおぼさずや、曲もない母上。」と、氣色を損じ怨みをなす。「オ、曲もないとはおことが事、惡業の報いの罪助けん爲の母が尼、懷に乳を含めし嬰兒の時も、今とても可愛さは變らぬもの、恥になる事するものか、膳を助けよ、殺さば母も死ぬるぞ。」と、立花の小太刀追取つて、「サア母を殺すか助くるか。」と、胸にあてたる刃の光は、稻妻またぬ危き命。守屋が傍若無人にも、母を見殺す悲しみ、おめ／＼と靭負を助くるも口惜しく、心迷ひのたるみに刎ねかへせば、取つておさへ母を見やりて、「はあ／＼／＼。」と身をひやすばかりにて、もとより蒔かぬ慈悲の種、助けん色め見えざれば、「ヤレ母が目のまへ死するを見ても、人を助くる心のない、おのれは鬼畜木石か、ながらへ如何なる恥をか見ん、子の罪を母が身に、是れを見よ南無佛。」と、咽に突き立て臥したりし、見る目敢なき最期なり。「ハア、仕なされたり仕なしたり、うぬめいよ／＼逃されぬ、母の敵身の敵。」と、膳が首の骨一捻ねぢて、「えいやつ。」と

姫をも我に得させよ。いやといふ詞の下、膳一家が首斬りて、劒の立花の下草にさしならべん。返答いかに。」とをめく聲、天地に響き礎にどうづき突くが如くなり。逃れがたなき膳、よもや活けては歸すまじ、一生の浮沈今日と、「是れ大臣殿神道に事寄せ、代を奪ふ逆心とは、目高がとつくに見付けたり。神道佛道の善惡は知らねども、大連朝敵に組する男でなし、佛法をふり捨て姫をも呉れとは、髭口からあまいこと、よう言はるゝなうッサア此の痩首を劒の立花にささるゝか、貴公の首を花桶や棺桶の投入に插すものか、互に命の水際、さつぱりと綺麗にさせ。」と、つかに手をかけつゝと寄る。守屋が見くだす面魂、肉眼の威におされ、拔きもやらず太刀のつか、目貫もひしげ碎くるばかり、握りつめて挑みあふ。鞍作數手走り寄つて、後より鐺返しにむずと取る。さしつたりと一反そつて拔打に、數手が頬がまち頤かけて斬り下ぐる太刀風に、勝海始め遠侍にぞ逃げ出しける。守屋飛びかゝり、膳が細首攫んで打ちふせ、脊骨にどうど乘りかゝり、「たとひ夜を晝牛を馬といへばとて、守屋が是非を糺さんとは、慮外千萬ちつぺいめ、息骨が立てらるか動いて見よ。」と、憑れかゝる肥滿の身體大山を負うたる如くにて、指を屈めん樣もなく、牙かみならす膳が、心の中ぞ無念なる。斯くと聞くより母尼公泣く／＼驅け出で、「ヤレ恐ろしの有樣や、此の頃くれ／＼云ひ聞かせし、責めらる許り地獄でなし、責める心が卽ち地獄、邪見の子を持つ因果にて、奈落に沈まん此の身を、

らしい花の流儀、去りながら師匠の手際も一覧せず、判形は致されず、守屋公の立花拜見。」と立たんとすれば、「ヤア無用の師匠吟味、先づ判形。」と睨め付くる。勝海つゝと寄り、「印判の用意なくば、手形を押せ。」と、腕首取るを振放し、「是れさ師を選んで習ふは古の法、先づ師匠殿の立花一見。」と、ずんど立つて、「師弟となつては七足去る、今の兩足慮外なし。」と、花瓶片端に取つて投げ、松も紅葉も踏み分くる、野邊のさを鹿あばれ鹿、牀にかけたる簾引きちぎつて捨てければ、牀には守屋が劍の立花、鐵のうすばたに七つ道具は拔身の刃、さはらば切らんと氷の利劍、つなぎの枝とも謂つつべく、さしもの靫負當惑し、息をのんでぞ控へける。守屋怒れる胴聲にて、「劍の一色よつく見よ、蠅同然の汝等親子、此の守屋に楯付くこと蚯蚓が大蛇に諍ふ如し。抑汝が親膳の連は、先朝の敕勘世のたゝずみなく、我が領内に身を忍び相果て、大恩を受けし其の倅、我が法度の佛法を信じ、剰へ汝が妹膳姫、我が妻にせんと望めども承引せず、佛法信心親孝行の聞えありとて、聖德太子娶るべき約束にて、芹摘の后と女官の號をかうぶるとや、言語道斷の奴輩待つて見よ、たつた今一戰に勝負を見せ、佛を信ずる帝の御首、眞に立てたる鉾に貫き、正眞には太子の首、ながし控へに蘇我大臣妹子が首、其の外一天下尼法師の首切つて、受け副へ前置き串柹ざしに貫き、みな紅の首の一色。佛法を攻め伏せ、神の流れの日本帝位を望む守屋大臣、いはれぬ我をはらんより、佛像を燒き捨て、

みも立花を習ひ各にも望みしに、膳𫍡負といふ素浪人、常は家來同然に出入し、此の頃は召せども不通に來らず、立花を望めば立て捨てにして歸りしは、面々に言ひ合はせし某が企てけどつたりと覺ゆる、召し寄せ實否を糺すべし。」と、言ふ所へ、「膳𫍡負參上。」と、更に心の解け難き、氷の上を踐む如く衣紋繕ひ、「遲參御免候へ。」と坐する所を、直駒勝海に目くはせ、「御機嫌わるい口上張るな膳。」と左右よりひつ包む。飛びしさつて身構へし、「立花の仰せかうぶり早天より精出し、御意をそむく覺えなし。エ、〳〵エ花がお氣に入らぬな、よしあしは知らず心一ぱい、何が御意に違うた、緣切れ花か見通し枝か、切枝折枝まがひ枝、りうご壁さしくゞり枝、四つ手月の輪釘かくし、六花六葉四花四葉、是れ定まりの花の法度、其の外は時の機轉、出來不出來は、指果報、天に捧げ、人の心をやはらぐる御會、思ひよらぬ立花が喧嘩になりさうな。」と、興になしてぞ立ち居たる。「ムウ汝が立花一切守屋が氣にくはず、天も神も納受國家安全の立花の祕傳、守屋が家に傳へ簾中に一瓶立て置きたり。一座の輩皆我が弟子、今日より汝も弟子とせん、それ〳〵師弟契約の連判。」と言ふより、勝海心得て連署の一卷硯取り添へ、「サア血判。」と差し出す。扨こそと披見すれば聖德太子を亡ぼし、佛法を破却し、帝を弑し、己萬乘の位を踐み、神道を以て天下をしるべき謀反一味の連判、𫍡負はつとせしが少とも動ぜす、「ム、珍

君がため鐵しつはりと撓める露に戀をもつ。しぐれも霜も降らば降れ、ながしの松は深緑、ぢつと控への若緑、見せばや鶴も我が宿と、千代に八千代に苔衣、しやれの枯木を胴づくり、雪を出でたる早咲の、梅こそ谷のうつりにて、水際きよき花の影、何に譬へん唐繪の屏風よ、ナゼ〲たてて見たれば面白や、木立枝ぶりつりもよく、峯を見こしの松の葉に、月をも宿す景色あり。木々も草葉も緣切れず、夫婦の緣も結び合ひ、長うそへとや副下に、まくらかり葉の蝴蝶花はねよけのあひしらひ、同じ青葉も濃き薄き、わけて淺葱と紺こんるりの葉がくれに、珊瑚の玉をもり上ぐる。萬年青は三がのまへおきに、口傳あるぞとしら玉椿、八千秋を祝ひこめ、野菊澤菊さし混ぜて左草とめ右木とめ、雨露のそめ葉の芳しく、造化の手業仇ならず、おのづからなる風情には、見あぐる山の陰繁み、見おろす谷の奥深く、淺澤小野の水わけて、千代を見せたる竹の節、非情も心あり顔に、さしかこひたる立花の作意、天も納受人樂しみ、妖艶風流のもてあそび、月花わかぬものまでも、あつと感じて詠めけり。「必ず〲傍輩衆、玉鶴が立てたとは沙汰なしに頼むぞや。」「オ、〲なんの言はうぞ、立花揃ひしと許り、いざ披露申さん。」と打ちつれ奥に入りにける。出づるに警し入るに蹕す、天子を眞似る守屋が奢侈、「御出でなり。」とよばはれば、弓削の勝海、東直駒なんど、花の連衆御機嫌うかゞひ並み居たるに、挨拶もなく、上段にどうど坐し、「なう方々、親の恩は廣大、老母此の頃守屋が心を慰めん

胸にひつしとこたへ、膳靫負と此の玉鶴が、人目を包み忍び逢ふ深い中、若しや知つてのあてことか、此の男はなぜ遲いと氣をくだく折ふし、花箱に文添へて、「膳の靫負より玉鶴殿へのお使ひ。」と聞くより嬉しさ口上も、ろくに岩瀨の森の蟬、「たがひ〳〵。」と文引きかくす裲の、褄を屛風のぬすみ讀み、「今日の御會心に落ちぬこともあり、麁忽には參るまじ、枝をため葉をすかし、立つるばかりの木の葉の色々、此の目錄に引き合はせたのむ。」とばかり、ひつこなす文章も誠の夫婦、戀をはなれし戀の底、嬉しき肌にぢつと付け、「是れ傍輩しゆ、靫負殿は遲參にて、花を我等に立ててくれとの使、見樣も知らぬ女の業、ことに手向の立花には深き口傳もあるげな、知らぬは知らぬと正直に云ふぞ誠の天の道、覺束ながら。」と、立ち寄りし姿も品も花なれば、向ふ花瓶の水鏡、立てぬ花こそうつりけれ。

眞の立花

是れ〳〵御覽ぜ、是れぞ此の神に手向の眞の花の數、ゆがまず直なる心の竹を立て初むる、一二の枝の房やかに、茂る葉がさね呉竹の、世々を重ぬる例なり。正眞は水仙に、陰と陽とのつがひ葉は、爰に口傳と岩戸を表はし、惠みの露を貝口にうけて、諸願も成就の神、影向の枝とかや。受けそへは殘んの菊籬のもとに手折りては、悠々として南山を見しは唐土、日の本の朝日のてり葉はまきして、

人となる、御法の花の初咲の、國も榮えて、千早振る和光の影も理にくらき、物部守屋の大臣僻見の横車、正直無上の道を遮り、因果もなく後世もなく、今生一旦と見破り、立花は天の祭ぞと、母の方便聞き入れて、したしき公卿武家浪人らに、一瓶づゝと所望の花、風おほひ水灑ぐ女小性の其の中に、玉鶴と云ふ華車者の、立花も少し心得て、「ナウ傍輩衆今日は以上五瓶の筈、揃うたら申し上げまいか。」と、南面の廣廂、誰とは札に名のらせし、右のはしは弓削勝海、「ム、見ごと蘆の心、柳の副へ、前置きに寒菊、正眞の鷄頭に少し色を持たせてしやれ木の取り合はせ、さつても插いたり〳〵、是れは弓削の廣海南天の心、正眞の紫菀、龍膽のあしらひ、胴に伊吹のうつりのよさ、左の端は東直駒、ハア、さいたわ松の心、正眞の燕子花、枇杷の葉を使うたり。控への柏梅擬の受け、出來たさうな。」と、褒めければ、霜夜といへる麁相者、「ナウ玉鶴殿あの後から、ぬつと出たまんぢうの木は何とやらいひますの。」「ハテこゝな人、木の名は檜葉、後に見えるは見越の枝といふもの。」「オ、それほんに見越入道いや〳〵。」とこそほめにけれ。次は、鞍作の數手の臣、「青葉まじりの紅葉の心、ながし控への取り合はせ、正眞の菊、どれも〳〵よう出來た。」と褒め囃す。「まん中の花瓶に花一本さしもせず、利根さうに膳の靫負と札打つたは是れ誰ぢや、エ、彼の浪人の膳か、それなら道理素浪人、花よりも先づ鼻の下、物ほしからう。」と、一度にどつと打笑ひ、水さし水うちざはめけば、玉鶴

く見え給へば、上から下に悦び合ひ、皆「南無佛。」といさむ聲、暫しは鳴りも靜まらず。老女やうやう本性付き、溜息ほつと詞はなく、淚に沈み居たりしが、「誠に地獄極樂は、今生にもありしもの勿體なし恐ろしし、佛法は僞りと譏り嫌ひし五逆罪、十惡人とは我々親子、太子樣の御慈悲に白髮頭剃りこぼし、四部の御弟子の一分にて、後生を助けたべなう。」と、頭を叩き手を合はせ、懺悔の淚せきあへず。太子歡喜まし〳〵、「よいかな〳〵疑ひ菩提の種となる、めでたし〳〵、それ我が法は無明の煩惱を切る利劍なれば、何ぞ剃刀の刃を賴まん。」と、柄香爐をさしのべ、日益がいたゞき、「善來比丘。」となで給へば、惠日の影に解けそむる頭の霜の落髮も、七寶無數の莊嚴、日月も納受の天に音樂、一むらの紫雲降つて剃髮を包みとる。光に映じ行く空の雲の上人御垣守、下官の男女に至るまで、「はあつ。」と感じて禮をなす。初發心こそ不思議なれ。太子重ねて、「家に歸つて汝が出家を守屋に見せば、大きに怒り諍ひて、却つて功德を失ふべし。頭を包み隱し置き、每月六齋日、草木の花を瓶に活け、諸天を祭り供養せよ。凡そ立花の功德には、草木成佛の因緣、花散り葉の落つるにも聲聞無常の悟りあり。粧ひ立てて色々に、咲き匂ふ花を見るときは、濁る心も淸やかに、怒りなく恨みなく天人の歡樂花にあり、いかに放逸の守屋も花には心やはらぐべし、その時出家の姿を見せ、佛道に誘引せよ。」と。日益お暇給はりて積る迷ひも疑ひも、ひらくる花の帽子にて、頭つゝむも柔和なる、民は名字の

づ此の樣な者と性根を付けて吳れんず。」と、大手を擴げ睨め付くる。日益けら〳〵と嘲笑ひ、「ア、事可笑し、見事姿は引き裂かうが、我が子の守屋を引き裂きだてして、腕首引き拔かるゝが笑止々々。佛法も丁度其の通り、人に依つての機の前、正體もない後生の沙汰、極樂とはよい夢、地獄とは恐い夢見る如く、手にもとられぬ闇の夜の空礫、虛空の繪を書く子供たらし、願ふに足らぬ佛法皆僞り。」と正理を昧ます辯舌は、卽ちそれぞ地獄なる。聖德太子忍辱慈悲の御聲にて、「不便やよく〳〵迷うたり、神道を見損ひ佛道には猶疎し、十界の三世は、差別の法三を開して一佛乘、神は唯一圓頓一實相の外、別に佛法なく、本地垂迹一如なれば、神佛とて二つはなし。守屋親子が佛を蔑し、地獄極樂なしと云ふ、舌三寸の惡業、梵天に響き天の災難、只今能つく見凝りせよ。」と、宣ふ中より電光、虛空爆き鳴り渡り、雲は炎と燃え立つ煙、朱をさす如き日輪に本地釋迦如來、毘盧遮那徧一切處の御形、增上我慢の惡人を驚かしたる破法の猛火、佛體焦るゝ現相渦まく火炎の虹となり、日益が頭に燃え掛れば、「ナウ熱や堪へ難や、やれ燒け死ぬるわ焦げつくわ。」と、逃げ惑ふ前後も煙、七顚八倒悶絕し、五體を投げて踠く音、大磐石を火に燒いて淵に沈むる如くなり。太子日天子に向つて、三寶の御名を唱へ合掌あれば、忽ち火坑變成の五色の光明御簾を照らし、異香薰じ花降りて、法身莊嚴の本佛、八十種好歡喜微笑の御かほばせ、瓔珞華鬘輝き渡り、雲居に入らせ給ふと等しく御惱平癒、叡慮涼し

なきは、仔細ぞあらん、敕使を以て所存の通り、屹度召し問はるべきか、馬子は如何候。」と、評定區々なる所に、六十餘りの老女練貫の袴ふみしだき、「いや／＼御使までもなく、わらは即ち日益と申し守屋が母、御諚の如く君の御惱を臣として悦ぶ者や候べき。我が子の守屋ふかく悲しみ度々の諫言用ゐられず、上の御心より起つたる作り病、忝くも日の本は、天照大神の御子孫、主として代々の帝、神道を以て御代を治め給ふ故、君安く民豐かなり。うたてや淺ましや佛とやらん、西天竺の人形を尊び、罪を作れば死して地獄に落つるとや。地獄の釜は何處の釜屋が細工、土釜か鐵か死んでの後の骸は、燒けても焦げても構はぬこと。節分の鬼さへ恐れをなす神國の人間、牛頭馬頭の惡鬼が責めよかし、此の婆がいがめてやる、傍いたい佛法、見て來て證據に立つ者なければ、來世とはよい拔道、佛に成つてなり負せて何の樂しみ、サア何の德がある。佛像を海に沈め經卷を燒き捨て國土を清め給はずば、天神地祇の御祟り、天帝龍神怒りをなし、帝の御惱民の煩ひ國の災止む時なく、守屋が諫め思ひあたり給はんは、只今のこと、佛法と聞くも耳汙れ、佛といふ口も穢らはし／＼。」と、破法の唾白髮たる、頭を振つてぞせりかけける。庭上に控へし御隨身跡見の赤檮、物に怺へぬ兵、生得の赤頬鬼灯の如くせきのぼし、「ヤイ婆め己が知る程のこと、聖德太子御存じなうてあるものか、地獄の呵責合點がいかずば、赤檮が此の腕を見よ、己が頭、爪先まで微塵骨灰に引き裂き、地獄は先

聖徳太子繪傳記

第一

佛勝鬘夫人に記を授けて宣はく、「汝如來の眞實の功德を歎ず、此の善根を以て、當に無量阿僧祇劫に於て自在の王となり、現前に讃歎せん事、今の如くにして異なる事なかるべけん。」と、等勝鬘師子吼經の金文宛も符契を合する如く、一千餘回の法の花、始めて爰に咲き匂ふ、聖德太子の救世の恩、オロシ、報じても猶餘りあり。御父用明天皇崩御の後、伯叔の帝に攝籙の臣として、靈山附屬の法水を神國に湛へて、垂迹和光の影をうかべ、周公孔子の教へを羽翼として、十七ヶ條の憲法を立て、現世安穩の佛說世に示さんと覺せども、天下の貴賤未だ迷ひの邪義の罪、上一人の御惱となり、良藥效驗を失へば、太子の御身に大衣を著し、緋の袂に柄香爐を燻らせ、南殿に突立ちて、御惱平癒の御祈禱、小野妹子、蘇我馬子、佛法歸依の兩大臣、太子の左右に隨ひ、信心無二の御祈誓、諸佛薩陀も影向あり、佛法擁護の善神も、感應嘸と著し。妹子の大臣宮中を見廻し、大音上げ、「凡そ天子の御惱は天下の煩ひ、月卿雲客頭を疚ましめ心肝を焦す所、大連物部守屋たゞ一人參内せず、天氣を伺ふ事も

ひ、無南三寶と北へ走り南へ戻り、何處へ失せたと小隅々々を、唐猫の鼠をさがす眼のひかり、橋には死骸のたをうつ。折しも七月中旬、血は流れてとう〱と、月こそ浮べ伏見川、龍田の川とぞまがうたる。甚平姉を引立て來れば、「エ、助太刀の其方にうたるゝは口惜しい、夫の手にかけくれまいか。」「ャ市之進程の仁、誰が助太刀を討つものぞ。」と、橋の中へ突き出せば、「なう懐かしや。」と寄る處を、片手なぐりに腰の番ひ、くわらりずんど切り下げられ、「あつ。」と許りに伏したりける。帯引摑んで面ひきあげ、見れば子供の不便さと、憎し〱の恨みの涙、胸に浮むを打ち拂ひ、ずんど切り下げ取つて引伏せ、肝先踏まへぐつと刺いたる我が切先、右の踵を蹠かけ、ずつぱと斬れども覺えばこそ、直に男が胸板踏まへ、留めは何れも一刀、槍の權三が古身の槍、疵も古疵咄も古し、歌も昔の古歌なれど、谷の笹原一夜さ咄、其の槍の柄も永き世の、御評判とぞなりにける。

槍の權三重帷子　終

がせうぞ、とてもなら今死んで、此の燈籠を六道の、中有の明りに迷ひを晴れ、せめて未來が助かりたい。」と、歩き〳〵の口說言、男も心かき曇り、空は今年の日照にも、袖には誰が雨乞の、身を知る雨ぞ果てしなき。市之進が嗜む備前國光、運こそ來たれ我が妻に、此の世の緣は薄桛の、帷子高く捻ぢ褰げ、甚平とは後前に、ひき別れたる夕の雲、時は冥途の酉の下刻、運こそ北の橋詰にて行き逢うたり。「笹野權三、淺香市之進が女敵、覺えたか。」といふより早く打ち蒐くる。「ォ、待ち受けたり。」と指し上ぐる、弓手の小腕水も溜らず切り落せば、飛び退つて武士の役、作法許りと一尺八寸、拔き合はせて刃向うたり。「スハ暴者切つたわ〳〵喧嘩よ棒よ、踊子共に怪我さすな。」「お吉樣ァ。」「おせん樣ァ。」「半兵衛ヨ。」「權介ヨ。」人を呼ぶやら逃げるやら、鄰町八丁九丁町、十番切の五月闇、夜討の入りたる如くなり。女は甚平をちらりと見て、望みは夫の切先弟に討たれ犬死と、暫し身を引く橋の陰、權三が踏込み討つ切先欄干に斬り込んで、喰はへ留めたる刀を捨て、「ェ、竹がな一本、一手遣うて槍の權三と名を取る印、諸人の形見に遺さんもの、足取なりとも見物せよ。」と、刃を潛る無刀の働き、有繫なりける手負ひ振、一生一世と念力に、切り込んだる右の肩先、胸板を筋かひに、ばらりずんど斬られても、猶身を引かぬ最後の身振、橋はさながら紅葉の、稀に逢瀨の敵と敵、踏込み〳〵五刀、斬られてのつけに返せども、武士の死骸の見事さや、逃疵さらに無かりけり。市之進女を見失

過分。」と二人手を引き氣もせく足元、「此方衆は怪我しさうな、鴈木に躓き、おかさまの大疵に又、疵のつかぬ樣に用心々々。」と、常船頭の戯語も、今日こそ胸に應へけれ。牀の陰に身を密め、「甚平が爰に有るからは、市之進も此の邊に居らるゝは必定、サア／＼二人の望みかなうた、覺悟あれ。」といひければ、「ア、それは覺悟の前、國を出る其の夜より夫に進ぜた命、惜しいとは思はねども、若し弟の甚平が手にかゝらば口惜しい犬死、甚平と見るならば隨分と遁るゝが、市之進殿への奉公、私や此方が心ざし、かうしても居られまい、今夜は何處に泊らうぞ。」「ハテ三栖が端か油かけか、そろ／＼京へなりとも上らう。」と、夕の空もはや暮れて、軒端々々に燈す火は、切子燈籠色々の、花の繪盡し判じもの、見世に涼みの芝居咄や踊子の、十二三から八つ九つの娘、優しや黒い羽織の腰卷に、野郎帽子の濃紫、揃ふ拍子や容姿もよく、踊「それ／＼それ／＼やつとせ、クドキハエイ／＼、難波江の、蘆の假寢の一夜さへ、長き契りと結びはすれど、許さぬ戀の關の戸や、いつそ山邊と思へども、一期猿丸との誓詞もあれば、天智天皇罰おそろしく、親の菅家もそこはかとなく、餘所の人丸賴まれずして、直に大江の千里を越えて、凄き深養父中押し分けて、たんだふれ／＼な爰で切れさ。」踊る姿の懷かしや。「ナウ彼の踊子を見るにつけ、國の子供も彼の年ばい、生きたか死んだか煩ふか、かはいや今年は踊るまい、離れ／＼に成り果てゝ、何處で死んでも淺ましい、子供の水も受けまい、湯灌葬禮誰

涼む顔して二三遍、心祝ひの神の鬮、市之進が旅宿へと、足を飛ばせて走りける。苫押し除けて、「ハツァ大事の物忘れた、コレ船頭殿、此方二人は上げてもらを、人に頼まれ大事の買物、銀まで受取り乘り急ぎするとてとんと忘れた、上げてたもれ。」「してそれは何處まで買ひに往かしやる。」「オ、あれは、何とやらいふ町ぢや、オ、それ〱、撞木町のあちら、藤の森の先ぢや。」「ハァ此方も餘程の事いうたがよい、爰から何程あると思はしやる、一里半ござる、其の中に船は出て仕舞ふ、上げる事はなりませぬ。」と、情もなげに取り合はず。「イヤ遲くは構はずとも出して給れ、二人分の運賃は拂うて上る、平に頼む。」と北南の見世先、橋の上に目を放さず。「爰な旦那殿はうろ〱と、詰らぬ事をいふ人ぢや、乘せもせぬ運賃取つては一分立たぬ、やはり乘りてござれ。」「それは酷い船頭殿、今の樣に跡から乘客もあれば狹うなる、平に上げて下され頼みまする。」と詫びければ、「狹い事氣遣ひして下されな、明日の朝大坂まで、滿足に屆けりやよい、今宵一夜外はお嬶樣も胴切にして、旦那殿も細々に刻んで片付けて乘せまする、そこらは構はず蹈反つて、のたれてござれ。」といふ言も、心にかゝる一つなり。おさるよろづ氣に懸り、「なう船頭殿、物には情といふ事あり、人を乘せず運賃取れば船頭の一分たたぬとや。我々とても人に銀をことづかり、其の買物を渡さねば、何うも一分立ち難い。これ手を合はする、是非とも上げて下され。」と、詞を盡せば聞分けて、「そんなら早う上つた。」「ア、過分

兄弟三人聲々に、「權三めは切り殺し、母樣は息災で連れて戻つて下され、さらば〳〵父樣。」と、いへども父はさらばとも、言はんとすれば目も暮れて、胸に八色の雲とづる、故鄕離れて三重別れ行く。月に誰、寢て見よとてや伏見とは、船に寄せたる里の名の、橋の夕暮來て見れば、涼しくの文字形取りて、京を持つたる京橋に、ひとつ流れの御祓川、末吹く風も袂涼しき。權三おさゐは三日とも同じ所に足とめて、居るにゐられぬ梓弓、伏見に暫し墨染の、秋の櫻か入相も、明日をば知らず一日の、命々と聞き捨てて、難波の方に思ひ立ち、人目を忍ぶ乘合に、空居睡の船漕げば、傍に茶船を漕ぎ連れて、饂飩蕎麥切、きり〳〵と押し廻し、豆腐奈良茶と茶を賣るも、宇治の川水落ち添ひて、昔を胸に涙ぐむ、女心ぞ哀れなる。市之進は御幸の宮、甚平は三栖の里、毎日そんじようそこ〳〵と、相圖をしめて甚平一人、京橋の夕日影船共を見廻し、「ずんど早う出る船があらば乘りたい。」と、乘人に目を付け見廻せば、「早いが好きなら此の船、初夜が鳴ると出します。」「おういかう狹いことはござらぬ、若い旦那殿とお嚊樣と苫の陰に屈んでぢや、あの側が廣い、彼處に置きませう。」「イヤ居處は如何なりとして居ようが、初夜というてはもう遲い、明日の晝船に致さう。」「そんなら勝手、船はこつちの、乘る身はそつちの、強ひはせぬ。」といふ中に、船中篤と見まはし、顏は見えねど十が十、これに極まつたと、嬉しさ足も飛び上れど、苫の陰より見付くるかと、態と緩々橋の上、

へに及ばず、彼奴も身の蜂拂ひかね、お暇申し捨て驅落致す處を、因州堺にて思ひの儘に討ち取りました。」「手柄々々、」なう市之進、敵討の門出に、是れ程の吉左右あるべきか、忠太兵衞が指圖甚平を連れられい、尤もいふに及ばぬ事、助太刀して本討手の名に疵つけな。」「畏まつたお暇。」と立ち出でんとせし處に、十歳許りなる旅人の門柱に影隱れ、奥を覗いてちらめくを、市之進急度見遣り、心得ずと走り出づれば、中息子の虎次郎凛々しげなる旅裝束、「己この態は何處へ行く心入れ、小癪者め。」と小腕取つて引出す。「イヤ父樣の供して行く、姉さまお捨は女子なり、わしは男、敵討つ親を一人やるは武士でない。」と、先に立ちて走り出づるを引き留め、「さては己を産んだ母を切る心か。」「母樣なんの切るものぞ、母樣を連れて往た權三めを切つてくれる、どうでも往く。」と意地張つたり。「やい惡い合點、叔父樣も父も出て行けば、祖父樣祖母樣お年寄、姉や捨は女郎の子、其方を後に殘すは、若し權三めが來た時、切らせうと思ふ用心。隨分休齋に茶の湯を習ひ、時々これへお見舞ひ申し、お二人へ孝行姉妹共に氣をつけ、權三めが來たらば切つて捨てい。但し一人殘るが怖くば連れて行かん。」と宥めたらせば、「如何にも一人殘りましよ、跡のこと氣遣ひせず、必ず手柄遊ばせ。」と、聞分の好き利發者、舅夫婦は目もくれて、「女子男打揃ひ、すぐつた樣な子供の成人、見たい心もなき母めは、如何なる畜生ぞや。不便とも思はぬ、切るなりとも突くなりとも、やがて本望々々。」と涙ながらの暇乞。

言はれぬ遠慮、心は矢竹に存じても、人數なければ手の廻らぬ事もある、扨こそ留守の內、よもや何事もあるまじと、落付いても斯樣の事の出來、權三も他國に親類知音もあるべし、何と構へ置くも知らず、三日路四日路とも踏み出し、時の變にて助太刀欲しい事もあるべし、是非ともに御同道。」「イヤこれ御心底賴もしけれど、女房の弟に助太刀させ、女敵討つては本望でもあるまいか。」「いやさ助太刀と極めずとも、只力になるまでの事。」と、聲高になりければ市之進色を損じ、「さては茶入釜の蓋取るよりほか、人の首の取りやう知るまいと思召すな、弓矢八幡身こそ小身なれ、見事ちぎれ具足の一領も用意して、すはと言はば刃鐵を鳴らすお歷々にも、負ける事はおりないさ。」甚平から〱と笑ひ、「ア、腹筋な、然らば足元の女敵何故討たぬ。」「ム、ウ足元の女敵とは、ム、ウ川側伴之丞が事な。」「それ程覺えのある女敵何故討たぬ。」市之進はつと驚き、「尤も彼が不義の狀、數通女が手箱にて見付け、彼奴も一刀と思へども、一時には手に及ばず、先づ是れは後日の沙汰。」と言はせも敢へず、「それ〱〱、鼻の先に置きながら、二人の敵は手が屆かず、初日の敵後日の敵といふ分ちは知らず、助太刀賴まぬといふ市之進の女敵一人は、岩木甚平が助太刀討つた、お見やれ。」と、腰兵粮の器物引き斷り押し開けば伴之丞が首、洗ひたてて持つたりける。市之進「これは。」と手を拍てば、舅夫婦大きに悅び、「金輪際の敵、憎しといふは彼奴が事、たゞし御扶持人上へは何と訴へた。」「いや訴

出のお杯を。」といひければ、「尤もさこそ。」と打解けて、隔てず交す杯に、言ふ事とては首尾能く追付本望々々、其の本望とは子供の母、我が妻を切ることを、身の悦びになす事は、如何なる運如何なる時、如何なる惡世の契りぞと、思へば礑と胸塞がり、鐵石の如くなる、市之進が心かきくれて、覺えず涙に咽びけり。女房おさるが弟岩木甚平、宿なし旅の形も窶れ、一僕具して立ち歸る。忠太兵衞伸び上り、「ヤイ〳〵甚平戻つたか、首尾は如何ぢや、市之進も只今門出、何と〳〵。」とすく〳〵立ち、「ヤア市之進留守の中不慮の事出來、お歸りないさき不義者共が提首、此方へ見せ申せと親共の心ぜき、我等は素より彼奴等が驅落の曉より、直にぶつ立ち食物を腰に引附け、海道筋の旅籠屋馬次舟場を詮索し、山陰在々までも近郷殘らず尋ねしが、いや〳〵足弱を連れ氣の後れたる迷ひもの、深く隱るゝ心も付くまいと存じ、伯耆路へかゝつて、詮議致せども出で合はず。つく〴〵存ずれば、相番を賴みしまでにて、番頭へも斷らず、日數を經るは不調法と存じ、引返し只今歸りがけ、直に斷り相濟み、鳥渡立ちながら兩親に逢はん爲此の仕合。御自分も我等も互に遲いか早いかで、お目に掛らずば殘念たるべし、幸ひの折に參り逢ふ、本望達せん吉左右、いざ御同道仕らん。」とぞ勇みける。市之進手を拍ち、「さて〳〵御苦勞お骨折、御親子の御懇意心肝に徹し忝し、最早是れより御同道には及ばず、我等一人參るからは外を賴む事もなし、甚平殿は御休息賴み入る。」といひければ、「いやさ

も是れはと手を束ね、涙にくれし聟舅、武家の道こそ正しけれ。「サア／＼婆にも逢うて暇乞の杯、姉妹の娘ま一度顔も見たからう、草鞋がけの體、態と奥へとは申さぬ、やい／＼市之進のお出で、皆來いやい。」と呼ばはれば、「ヤ申し小さい奴等に能く申し付けたるが、何と吠えは致さぬかな。」「イヤイヤ器用者共、其處は氣遣ひめさるな。」と玄關に坐しければ、母は二人の孫娘、左右に具して立ち出づる。中に杯酒肴盆正月の節振舞、三人の子の誕生日、一家寄り合ふ祝日の、座敷は座敷に異らねど、揃はぬものは人の數、五人顔を見合はせて、物をば言はぬ目禮に、涙たしなむ顔付は、泣き叫ぶより哀れにて、酌取る下女が袂まで、零さぬ酒に絞りけり。母は涙の怺へ精、盡き果てて、「わつ。」と泣き、「可愛や此の子供が父御の言付覺えてか、目に涙は持ちながら、おとなしいを見るにつけ、彼の業人の畜生の人でなしの腹から、此の樣な器用な子を何として産み出した、人並の根性下げてくれたらば、母も子も揃うたり、忠太兵衛夫婦は子も孫も産み揃へた、手柄者と言はせぬか、娘の子は母方附と二人許り送つて、虎を殘して下さるは、岩木の名字を疎み、此方とは縁を切る心か、曲もない市之進、恨みにござる。」と聲を上げ、積る涙を一言に、泣き盡すこそ道理なれ。「イヤ／＼御恨みは相違、隔つる心は聊かなし、此の度我等お暇下され、世の散人となりたれども、親より傳へ今日まで、樂しみと致せし茶の道は忘れ難く、虎次郎めを千野休齋弟子分に預け申したり、お恨み晴れられ、門

まうも角立つ、暇乞一禮の傳手もがなと、玄關見入り立つたる處に、舅忠太兵衞瘦骨高く引褰げ、鍋の鉉程反りに反つたる、朱鞘ぼつこみ、一文字に驅け出づる。「ア、申し〳〵。」と袖ひき留め、笠取つて捨てければ、「ヤァ市之進今朝は畜生めが諸道具、孫娘二人受取り申した、旅出立は暇乞と見えた、お出で過分、追付吉左右待ち申す。」と言ひ捨てて驅け出づる。「いや申し、御顏色も常ならず氣遣ひ千萬、巨細承り屆くるまでは、慮外ながら放しませぬ。」「なう市之進御自分江戶より下著の節、娘さるめが提首を、お目に懸けいで口惜しい、伜甚平は其の日より尋ねに出る、年寄つても忠太兵衞、腰膝立たぬ身ではなし、刀の刃に血も付けず、高枕でも暮されず、一人物にも狂はれず、相手がなと存ずるに、最初不義の證據を取つて我等にも知らせ、國中に沙汰をした、事觸は川側伴之丞、彼奴を斬つて老後の思出、お放しやれ。」と驅け出づる。「ア、これ〳〵、御心外尤もながら御老人の腕先、萬一伴之丞に討たれさつしやれば、此の市之進先づ女敵を差置き、舅の敵を討たねば叶はず、取りまぜ迷惑は拙者一人、平に〳〵御料簡、御厚恩に請けまする。」と差俯けば、「なうこれ市之進、斯程根性の腐つた女房の親でも、忠太兵衞が討たるれば、舅の敵を討つ氣よな。」「これは曲もないお尋ね、假令女は畜類になつたりとも、舅は舅に極まつた忠太兵衞殿、敵があらば討たいでは、そりやお尋ねに及ばぬ事。」「市之進ァ、御心底、身に餘り忝い。」と、大地にどうと老體の、跪いたる感淚に、市之進

となす、母が身體諸共に、薪となしてくれぬか。」と、歎くを見ては下女婢、若黨小者に至るまで、皆袖をぞ絞りける。「殘つたは長持一つ、取り分けて燃やせ。」と、開く二人の孫娘、兄弟抱き合ひ泣き居たり。祖父も祖母も夢心地、「やれ〳〵危や命冥加な孫共や、もし火を付けたらよい物か、堅い父御の言付か、何故に聲を立てなんだ、器用に生まれついたよな、花紅葉の樣な子供を、母めに能うも見捨てた。」と、髮搔き撫でて泣きければ、お捨は何の頑是なく、「母樣に逢ひたい、母樣呼うで。」と泣く許り。姉のお菊はおとなしく、「父樣は母樣を斬りに行くと被仰る、祖父樣祖母樣頼みます、代りに私を殺して母樣助けて下されと、父樣に詫言を。」と、膝に凭れ伏しければ、「オ、能ういうた、母は左程に思ふまい、虎次郎は何故越されぬ、娘を母に付けるは離別の作法、此方に隔ての心はない、孫三人を朝夕に見たらば憂さも紛れうもの、此の子は父御の四十二の二つ子にて、祖母がお捨と付けたが、今は父母兄弟が、世の捨者になつたか。」と、口說き繰言身も萎れ、枯木の樣なる祖父の顏、涙に分ちなかりけり。「泣くな〳〵大事ない、なんぼ母めが捨てても、祖父や祖母が可愛がる、甚平といふ叔父がある、サア來い〳〵。」と手を引いて、泣く〳〵奥にぞ入りにける。茶筅髮いひ甲斐もなき身なれども、武道を研く霰釜、沸る心は運次第、淺香市之進歸國を直に門出と、三人の子を片付けて、氣は廣けれど先づ暫し、お國の内は憚りの、笠深々と舅の門、今までとは事變り、案内なしも無禮なり、物

ヤイ中間ども下女どもよ、餘り人の見ぬ中、はや〳〵内へ運んでくれ。」と、歎きあせれば忠太兵衛、「これ〳〵お婆、聞いて居ればぐど〳〵と、何をごくにもたたぬ事、市之進には過りない、男一所にうつて捨てゝ、女の諸道具市之進が留めて何にせう、人間外れの女汚れし道具、武士の家が穢るゝ、中間共片端に叩き割り、火を付けて燒いて仕舞へ。」「畏まつた。」と棒木槌、鋤鍬鉞ひつさげ〳〵立ち懸る。母は絶えかね手を擴げ、「待つてくれ〳〵、なう祖父樣道具惜しうはなけれども、今生でも來世でも、おさゐが顏はもう見られぬ、手に觸れた道具、せめて一色は老の形見に遺したし、屋敷を驅落する時も、唐高麗に居るとても、さぞ忘れぬは子供が事、常々遣りたい〳〵と、思ひし念も不便なり。一色宛も殘して、子供に取らせて下され。」と、葛籠引き寄せ簞笥に縋り、悶え悲しみ泣きければ「これお婆、今是れが悲しいとは、お身も我もま一度は、大きな悲しみ聞かねばならぬ、其の時二人は何とせう、年寄つては憂き事を聞くが役と覺悟して、ぢつと涙を堪忍めさ、身も堪忍々々。」と、一圖に堅き國武士の、咽に涙ぞ詰りける。「何と思案して見ても此の道具請取つては、傍輩中の思はく他國の聞え。若黨中間ども煙高いは憚り、一色づゝ取り分け、燒いて捨てい。」と言ひつけられ、迷惑ながら主命、葛籠簞笥挾箱引散らし打ち砕き、海士の燒火と燃え上り、煙に見えぬ俤に、母は猶も身を悶え、「可愛やおさゐが嫁入の時、まあ爰で門火を焚き、千秋萬歳と祝ひし其の道具、門火の跡で灰

る、磯の千鳥をぽつかけて、石礫掴んでずんずと延ばしやる〳〵、サアえいさつさ、えいさ〳〵えい笹葉の槍の槍先に、はづす小鳥も無かりしに、今は羽風も恐ろしく、船は乘合人目せく、徒歩路急げど捗行かず、何を知邊に難波津の、名は住吉も住み憂しと、世の憂き節の伏見山、染めぬ袂も捨つる身は、心許りを墨染の、里に忍びて 三重 送りける。さりともと、昔は末も頼まれき、老は憂身の限りぞと、古歌の詞も思ひ知る、岩木忠太兵衞玄關前、淺香市之進方より、小袖簞笥挾箱葛籠長持、其の外嫁入道具一色積み重ね、「不義人の諸道具、返納。」と呼ばはり散らして歸りけり。母は持病の血の道に、おさゐが事の其の日より、癪の痞へに胸痛み、いとゞ枕も上らぬに、「何ぢや道具が戻つた、壻とも孫とも緣切れたか、情なや。」とよろぼひ出で、「なう聞く事も見る事も悲しい事ばつかり。」と、葛籠にかつぱと抱きつき、絶え入る許りに見えけるが、「如何なる天魔の障礙ぞや、此の樣な事仕出す、さもしい氣は微塵もなく、まじやう者の孝行者、子も尋常に育てて、母樣聞いて下され、私は娘もたんと持ち、嫁入の時の諸道具を一色も散らさず、子共躾ける便りに、小身の我が夫に餘り苦にかけともないと、言ふ詞が違ふにこそ、二十年になる道具古びもせず持ちなす此の心で、そもや惡事を何のせう、物の魅入か報いか。」と、又口說き立て泣きけるが、「市之進の身になりては、口惜しい筈なれど、餘りに是れはつれない、子供に讓つてくれもせず、見苦しい門に積ませて、我が子の恥は思はずか。

ど、戀の病は驗なき、但馬のゆげた數ふれば、我とそもじは五つと七つ、十二違ひの月更けて、姉ともいはば岩枕、交す枕が思はくも、影恥かしや野邊の草、其方は人の女郎花、俺が口から女房とは、身の櫨楓いたづらに、染めぬ浮名の村萩の、亂れ泣くこそ哀れなれ。振り上げ見れば源の、鬼神退治の大江山、峯は青葉に包まれて、谷も尾上も森々と、山の風さへ愛想なく、くすみきりたる松の下陰、藪の木陰の一在所、あれ／＼／＼麥搗く嗚等鄰の姉が、二十ばかりで鐵漿振袖、それでも戀の一節や、唄大工どのより鍛冶屋が憎い、閨の鍜鍛冶が打つショガエ、なう鍛冶がうつ、閨のかけがね鍛冶がうつショガエ、なう鍜の、關の鎖の解け初めて、迷ひ初めしは誰故ぞ、若い殿御を我故に、崩折れ姿二腰の、其の一腰は道芝の、露のあたひと消え果てて、一本薄刈り殘す腰の廻りは秋の暮、寂しや悲し愛憐しと、抱き合ひては泣く許り。國に親と子東に夫、思ひは千筋百筋の、我は涙の苧桛くる、眞苧をくるとや世の噂、手で堰きかぬる川水に、洗ふ帷子播磨潟、ろくに寐ぬ夜の目もとぼとぼと、埃まぶれの髮容、鹽燒く浦の蜑にも劣る、山田畠の唄鳥威し、さりとは鳥威し、あはの鶉や澤の田鶴、ひよ／＼と鳴くは鵯、小池に棲むは鴛鴦、鴛鴦の、而も孀の夫の留主守、男鰥の憂き住居、鳥の上にも歎かれて、いとゞ涙の種ぞかし。跡に夕立つむら／＼雲に、さつと吹き來る風の音、野邊の薄の戰ぎまで、我を追ひ來る追手かと、唄＊露の笹原ヤツトン／＼、連立ち走る蹈み分け走

に來た、誰も臥さつてけつかるか、明けよ／＼。」と呼ばはつたり。「ハァ、悲しや弟の甚平、門からは出られぬ。」裏門はなし塀高し、飛んづ押しつ彷徨く間に、家内は起きる門は叩く、前後に眼を付く茨垣、「ヤァ惡人めが拔穴、我が身に神の御利生。」と、二人手を組む生死の巷、命の境四斗樽に、六道四生ぎつと詰つて動かれず、跡へも先へも酒樽と、共に逆樣さかどんぶり、ころ／＼頃は曉の、時は夜明の七つがしら、二つ頭に足四本、胴は一つの酒樽に、歩む無明の酒の醉ひ、是れぞ冥途に通ひ樽、契りは偕老同穴と、ひとつ棺にひとつ穴、何處ぞに埋んで桶の輪かと、言はねど物が言はせ樽。

下之卷

權三おさゐ道行

唄　槍の權三はだて者でござる、油壺から出す樣な男、しんとんとろりと見惚れる男、どうでも權三は好い男、花の枝から零れる男、しんとんとろりと見とれる男いとしい男、戀ひ慕はれし、＊二挺の弓の本筈の、放さぬ先に弦切れて、引かれぬ方にひかれゆく、ひとり留守寢の牀のうち、心も澄みて目も冴えて、しんき／＼の空悋氣、終に我が身のあだし草、世のそしり草浮草に、淺香の水の漏れ初めて、笹野の露と置きまどひ、寢まどひ歩みまどひては、故鄕忘れぬ二人が涙、涌きて出石の山はあれ

れたと、後指をさされては、御奉公は愚か人に面は合はされまい、とても死ぬべき命なり、唯今二人が密夫といふ、不義者になり極めて、市之進殿に討たれて、男の一分立てて進ぜて下されたら、なう忝からう。」と、又伏し沈む許りなり。「否これ不義者にならず、此の儘で討たれても市之進殿の一分立つ、死後に我々曇りない名を雪げば、二人も共に一分立つ、如何にしても密夫になり極まるは口惜しい。」「オ、いとしや口惜しいは尤もなれど、跡に我々名を清めては、市之進は女敵を討ち誤り、二度の恥といふもの、不承ながら今爰で女房ぢや夫ぢやと、一言いうて下され、思はぬ難に名を流し、命を果すお前もいとしいはいとしいが、三人の子をなした、二十年の馴染には、私や換へぬぞ。」と、「わつ。」と許り歎きくづをれ見えければ、權三も無念の男泣き、「五臟六腑を吐き出し、鐵の熱湯が喉を通る苦しみより、主のある女房を、我が女房といふ苦患、百倍千倍無念ながら、斯うなり下つた武運の盡き、是非がない、權三が女房。」「お前は夫、エ、／＼忌々しい。」と縋り合ひ、泣くより外の事ぞなき。「サァ家内の目の覺めぬ内夜もみじかし、早立ち退かん。」と引立つれば、「可愛や三人の子供が、母が今此の態で、住み馴れた此の屋敷を退くとも知らず、何事か夢に見て、すや／＼寐入る寐顔に、暇乞を。」と泣きければ、「エ、未練な市之進に首尾能う討たるゝより、浮世の願ひ何がある。」と、引立て門を明けんとすれば、門外に提灯人足扉ぐわた／＼大音上げ、「岩木甚平笹野權三に逢ひ

庭にひらりと投げ、拾へといはぬばかりなる、思ひの闇ぞ爲方なき。二人の影はばら〱髪、如何にしても此の態、帶解いても居られずと、庭に出でんとする處を、「ア、〱帶に名殘惜しいか、不承ながら此の帶なされ、一念の蛇となつて腰に卷き付き離れぬ。」と、引解いて投げ出す。權三餘りに艴として、「二重廻りの女帶、致した事ござらぬ。」と、同じく庭に投げ出す。隙さず拾ひ伴之丞聲を立て、「市之進女房笹野權三不義の密通數寄屋の牀入、二人が帶を證據、岩木忠太兵衛に知らする。」と、言ひ捨て拔けて出づる聲、「南無三寶伴之丞、弓矢八幡遁さじ。」と、刀引拔き障子蹴破り飛んで出て、燈籠の火の影薄く、探し廻れば波介が、狼狽へ廻るを憾かと捉へ、「伴之丞は何とした。」「私を捨てて出られた。」「エせめて己を冥途の供。」と、肝のたばねをぐい〱、抉れば、「ぎやつ。」と許りにて、二刀にぞ留りける。直に逆手に取り直し、弓手の小脇に突込む處を、おさゐ縋つて、「こりや何うぞ、不義者は伴之丞、身に曇りないお前が、何の過り死なうとは。」「ア、愚かな、二人が帶を證據に取られ、寢亂れ髪の此の態、誰に何と言譯せん、もう侍が廢つた、此方も人畜の身となつた、エ、〱無念や。」と泣きければ、「さてはお前も私も人間はづれの畜生になつたか、如何なる佛罰三寶の冥加には盡き果てた、淺ましい身に成り果てたか、はあつ。」とばかりにどうど伏し、消え入るやうに歎きしが、「エ、是非もない、最早此の二人は生きても死んでも廢つた身、東にござる市之進殿、女房を盗ま

染みうまい花盛り、伴之丞も氣は上づり、裾はお留守を念がけて、先陣越された宇治川に、膝ぶりぶりの流れ武者、喉を渇かし立ちけるが、權三が聲にて「ハァ誰ぞ庭へ來たさうな。」「ハテ晝さへ人の來ぬ處、夜更けて誰が來る物ぞ。」「イヽヤ今まで鳴いた蛙が、ひつしやりと鳴き止んだ。」「ア、蛙もちと休まいでは、きよろ〳〵せずと先づ卷物共讀ましやんせ、あれ又蛙が鳴きます。」と、いふ中に波介樽を潛つて庭の內、主從一所に立憩らふ。「あれ又ひつしやり鳴き止んだ、どうでも誰ぞあるは定、ちよつと吟味。」と刀押取り出でんとす。「是れ遣らぬ、三方は高塀北は茨垣、犬猫も潛らぬに人の來る筈がない、獨りしての氣遣ひ。扨はお前と私、かうして居るを妬む女子が、喚きに來る其の覺えがござんすの。」「是れは迷惑、左樣の覺え微塵もない。」「いやある〳〵、媒が口を添へればつい埒の明く樣に、內證しやんとしめてある。エヽ〳〵〳〵女の身のはかなさは、うはべ許りに目がくれて、胸の中を知らなんだ。」と、「わつ。」とばかりの腹立涙、「これ宵からくら〳〵燃えかへるを、姑が聟の悋氣と、浮名がいやさに笑顏作つて、怺へ袋ふつつりと緒が切れた。これ見よがしの其の帶は、定紋の三つ引と裏菊と、小じたたるい引並べ、誰が縫うた、誰が遣つた、噛み切つて除けう。」と飛びかゝり武者振り付く。「ハテ此の帶には樣子がある。」「オヽ樣子が無うては、樣子といふが妬ましい。」互に泣くやら叩くやら、帶ぐる〳〵と引解き、疊みかけて擲り打ち、「エヽ嫌らし手が穢れた。」と、手繰つて

さらりと思ひ忘れう。」と、拂へども猶胸焦す、涙は癖となりにけり。契約なれば笹野權三、供をも具せず靜かに門を叩く音、内にも答へず走り出で、「誰ぢや。」「笹野。」と許りに明くる戸を、入るより早く端としめ、「直に數寄屋へ〳〵。」と、手燭片手に傳授の箱、二人忍びし有樣は人の疑ひあるべしと、我が身に見えぬ障子一重、明けて數寄屋に入りにけり。「是れは繪圖の卷物、祝言元服出陣の臺子、是れみすの中の茶の湯の圖、誠の眞の臺子とは此の行幸の臺子の圖、三幅對三つ具足壺飾りの品々、印可の卷許しの卷、これを讀めば口傳入らず、心靜かに緩々とお讀みなされませ。」權三戴き繰り返し、讀めば世間も靜まりて、蛙の聲も更け渡る。折しも川側伴之丞、四斗入の明樽下人に持たせ、市之進が屋敷塀の廻り、うそ〳〵耳を敧て小聲になり、「ヤイ波介、内には能う寐たぞ、おさるが寢間へ忍び込み、口說きおふせ積る念を晴らし、色の上にてたらしこみ、眞の臺子傳授の卷物してやり、權三めにうつそりさせう、若し人が起きあうても女小者、口へ砂でもほゝばらせ、いきほねを揚げさすな、それ鏡突き拔け。」「まつかせ。」と、蹈みつくれば底も鏡もすつぽりと拔けたるを、枳殼垣にぐんぐつと、葉山繁山繁けれど、茨障らず思ひ入る、拔穴道とぞなりてけり。「おのれは四方見合はせ跡から來い。」と伴之丞、そろ〳〵と這ひ潛り、庭に出づれば數寄屋の内に燈火の、影は障子に男と女、忍び逢ふ夜のさゞめごと、頷き合うて顏と顏、寄せてしつぽり濡の露、寐て仕舞うたかまだ寐ぬか、染み

か。」「如何にも懇望なされし故、巻物渡す約束に極めました。」「出來た〳〵、若い和郎の奇特な諸藝の心掛頼もしい、仕損じあれば市之進の誤り殿の恥辱、祕傳殘さず傳授召さ。さりながら家の大事譯知らぬ下々にも、一言一句聞かせまい、隱密々々、更けぬ先に歸らう提灯とぼせ、皆宵から休ませ、夜ざとに留守を言ひ付きやれ、また明日見舞ひ申さう。ヤイ角介、男といふは己一人、門脊戸に氣を付けい、何をいうても晝でも鼾角介だ。」と、老の戲言夕闇に、歸れば跡は門の戸を、さすが數寄者の庭の面、若葉の木立物古りて、路地ほの暗き燈籠の、火影宿かる熊笹の、露は螢か蛙の聲の囂く、萱屋が軒におとづれて、しよろ〳〵流れ水の音、夜も森々とふけにけり。おさゐは緣先に家内は寐入りほつしりと、何を思ふと咎め人の、無きが我が家の取得にて、涙も袖に落ち次第、「エ、思案する程妬ましい、大抵の男を可愛い娘に添はせうか、我が身が連添ふ心にて、吟味に吟味思ひこうだ稀男なればこそ、大事の娘に添はする物、悋氣せずに置かうか。晝の婆めが吐かし面、お雪樣と權三樣と内證しやんとしめてある、エ、腹が立つ妬ましい、悋氣者とも法界とも言ひたか言へ、傳授も瓢簞も何のせう、臺子も茶釜も絲瓜の皮、エ、恨めしい腹立や。」と、身を緣桁に打ち付けて、零す涙の袖袂、絞る茶巾の如くなり。「ハァウァ、思へば、悋氣も因果か病か、是れ程悋氣深うては、我が男を手放して海山隔てて能う置くぞ、能く〳〵お主は怖い物、皆心の氣隨から、姑が壻の悋氣とは惡名の種、

の取結び、偏に賴み上げまする。始めての長口上ホ、〳〵、アゥおはもじや。」と喋舌りける。「是れなう、そつちの心に長ければ、聞く耳には猶長い、此方の奧樣は、禮物取つて肝煎する奧樣ぢやござらぬ、殊に酉のお年で此方の樣な長鳴きが忌事ぢや、早う往んで下され。」と、愛想なければ手持悪く、「ム、ウ私は戌で丁六十、狼狽へ歩いて棒に逢はぬ先に、長吠えせずと往にましよ。」と逃げ吠えしてぞ歸りける。奧には得手に法界悋氣、嗔恚の怒り綱きれて、靜め兼ねたる折節、「父岩木忠太兵衞、只今是れへ。」と若黨先へ告げければ、家内恐れ靜まりて、おさゐもをかしからねども、親に愛想の笑ひ顏。「オ、市之進の留守、皆機嫌能うて滿足。虎や捨めが能く遊んで、晝寐をせず睡たい、歸つて早う寐たいというて、連立つて歸つた。夜が短い早く寐せて疾く起し、晝あがかせたが萬病圓。姉は奧にか、娘の子は十三四から端近く出さぬがよい、姉や捨めはお身に似たが、虎めは市之進に生寫し、こりや市之進江戶より歸つたというて、母が側へちやつといけ。」と、孫寵愛の戲れ。「オ、久しう遊びやつた、祖父樣祖母樣喧しからう、奧へいて姉とならんで寐しやや、乳母よ寐冷させまいぞ。やい角介、戾つたらなぜ石燈籠に火はともさぬ、日が暮れたが目に見えぬか、女子ども、祖父樣のお慰み、今の銘酒をちと上げませ。」と饗せば、「いや〳〵銘酒より何より數寄屋の庭、毎日見ても見飽かぬ、市之進の物數寄、心が伸びておもしろい。ヤ豫て内意咄した笹野權三、眞の臺子の願ひにはわせなんだ

る不義者、御用人衆まで訴へ、恥かかせてと思ひしが、侍一人廢るといひ、市之進殿歸られては生死のあることと、中使の下女に暇遣つたれば、兄の不義の使に妹の乳母が來たさうな、直に逢ふも口惜しい、留守を遣うて奥から樣子をたち聞きせう、女子ども挨拶して言ふ事いはせてつい往なせ、權三樣をもあの婆が、見ぬ樣にそつと拔かして往なせませ、夜に入り人も靜まつて必ずお出で、傳授の卷物渡しましよ。」と、言ひ捨て奥にかくれ入る。萬は機轉才覺者、目まぜ首肯き權三を圍ふ袖屛風、

「なう〳〵お乳母どのとやら、此の暑いに年寄の御大儀な、どれ汗拭うて進ぜう。」と、顏にべつたり手拭の、縮と皺ともみ草の、どさくさ紛れ忍ぶ草、權三は拔けて歸りけり。「餘り拭うて顏が痛いか、切角のお出でに、奥樣は今朝より親里へ參られ、緩りと逗留ある筈、何なりとも私にお語りなされ。」といひければ、「それなら此方頼みましよ、養ひ君のお雪樣と申すと、笹野權三樣と言ひ替せの事あれども、媒が無うて御祝言が遲なはる、殊に此の乳母が働きで、一夜の枕を交させた、其の禮に權三樣より雪駄一足銀一兩、是れが證據。侍の妹に侍が疵付けては、退引ならぬ大事、爰に奥樣鳥渡お口添へらると、波風たたずつい埒の明く樣に、權三樣と內證の跡先しやんとしめてある。お子樣方もあるからは、錢金出して御祈禱さへ、なさるゝぢやござらぬか。人の爲の好い事は、山伏入らずの御祈禱、首尾よう相濟み相應のお禮、そこは乳母が呑込んだ、此方も骨はぬすむまい、うはべばかり

ア是れは迷惑、誰とも約束なし、木石ならぬ若い者、當座の色は格別、極めし事は努々なし、師匠の聟と申せば聞えもよし、娘御お菊殿、私妻に急度申し請けませう。」「ハアウ忝いお嬉しい。サア望み叶うた。お侍の詞底を押すは如何ながら、媒なしの緣組證據のため、鳥渡御誓言聞きました い。」「御念入は尤も、二度具足を肩にかけず、市之進殿の指料に刻まれ、骸を往還に曝す法もあれ。」と、言はせも果てず、「ア、もうようござんす勿體ない。今日は吉日今宵臺子の傳授の書、印可の卷物渡しましよ。それお供の衆戻せよ、先づ娘には逢はせませぬ、私に似たならば定めて悋氣深からう。脇へ心散らさず一筋に賴みます。惡性があつたらば、此の姑が悋氣の腰押し。お持たせの銘酒お前と私が此の樽に、斯う手をかければ契約の杯した心、橋がなければ渡りがない、臺子が緣の橋渡し、此の樽も橋渡し。」橋にて祝ふ鵲の身も紅に染むるとも、世に謠はるゝ端ならん。又玄關に老女の聲、「女子衆ちと賴みましよ、川側伴之丞妹お雪と申す者の乳母、つひしかお目には掛らねど、お慮外ながら奧樣へ密かにお咄申したさ、おゆき使やら何やら、押掛けて參りし由賴みまする。」と言ひ入るる。權三はつと色違へ、扨々思ひも寄らぬ奴、何用あつて參つたぞ、我等には大禁物、見付けられては迷惑、どうぞ拔けて歸りたいと、うろ／＼眼になりければ、「ハテ伴之丞の侍畜生、その妹の乳母何の氣遣ひ、侍畜生の因緣聞いて下さんせ、主ある私に執心かけ度々の狀文、夫ある身を蹈付にす

御馳走、眞の臺子の飾り、市之進弟子中との仰せ渡し、常々市之進殿お物語一通りは聞き覺え、未だ指圖繪圖の卷物、傳授口傳許し印可を請けざれば、押しはなして眞の臺子、覺えたとは申されず、天下泰平長久の御代、斯樣の事を勤めねば、武士の奉公秀で難し、數年の懇望今度の大願、卷物拜見を許されば、生々世々の御厚恩。」と、額を疊に押し下げて、師弟の禮儀見えければ、「扨も〳〵御執心御奇特なお心入、此の傳授は一子相傳にて、我が子の外へは傳へられず、遁れぬ弟子は親子の契約ありての上、繪圖卷物も渡す事、それに付き次手がましい近頃粗相な、藪から棒と申さうか、寐耳に水と申さうか、思召しも如何なれど、折がな〳〵と豫々心にこめし故、申し出して見まする、姉娘のお菊を、此方樣へ進ぜたいと常々私が望み、いまも今とてお噂申せし折柄。斯う申せばどうやら臺子の傳授とかへ〴〵にする樣で、娘の威も落ち大事の傳授の詮もなし。それはそれ、是れは是れの談合で、菊を其方へ進ずれば聟は子の相傳、市之進聞かれて滿足、第一私が戀聟、押し出して好い女房といふには限りのない事、先づ大抵目鼻揃うた祕藏娘、添はする殿御はこな樣除けて外にない、何と合點して下さんすか。」と、いへども恥かしげにさし俯いて返事せず。「サア如何でござんすぞ、ハテ何の是れが恥かしい、扨は娘がお氣に入らぬの、ム、頭掉らしやんすは嫌でもない。エ、知れた、疾うから外に約束があるさうな、さうぢや〳〵主ある花は是非がない、可惜男に戀がさめた。」と立ち退けば、「ア

くりの長門印籠、ほんに四人酉の年、是れも不思議、榮耀言はずと殿御に持ちや、其方が否なら母が男に持つぞや。ほんに市之進殿といふ男を持たねば、人手に渡す權三樣ぢやないわいの。」と、子を寵愛のあいだてなく、時の座興の深戯も、過去の惡世の縁ならめ。「サア此の上に衣裳著せ替へ、裲させて見せうぞ。」と娘自慢の鼻脂、手を引き奧にぞ入りにける。玄關に「物まう。」茶の間の萬が「どれい。」と應へ出で迎へば、笹野權三一樽持たせ「岩木忠太兵衛殿は是れにござらぬか。」「ア、毎日お見舞なさるれど、今日はまだ見えませぬ。」「ム、然らば奧樣へ申してくりやれ、この中は御無沙汰、お留守何事なく珍重に存じまする、ちと申し度きことござれども、委細は忠太殿まで申し入れませう、此の一樽は上方の銘酒、稚い方のお慰みお見舞の印と、お次手に申してくりやれ。」と、言ひ置き歸れば、「ア、申し先づ暫く。」と走り入る。女房はや立聞きて、「御口上聞いた〳〵、待ち請けた樣な事苦しうない、お通りなされと申しませ。」と、櫛笥鏡臺片付けて、塵掃く羽根の二つ羽も、比翼の惡縁底深き、笹野權三は遠慮ながら、常の居間にぞ通りける。「是れは能うこそお見舞と申し、子供方へとお心づき、珍らしい御持參、折々玄關までお出で下されても、態とお目に懸る事もなし。して御用とは何事か。親忠太兵衛までもなく、直にお咄し遊ばせ。」と、隔てぬ挨拶まめやかなり。權三手をつき、「御深切忝し、忠太兵衛殿か御舍弟甚平殿を以て申す筈、近頃粗忽の願ひながら、今度御祝言お振舞の

と撫づる櫛の齒に、身持行儀の解きほどき、子を思ふ手につや〳〵と、見かはす程に見えければ、「それの、格別よい子になりやつた、譃なら其の鏡を見や、親の目は贔屓目、他人が證據萬來いよ、飯炊の杉もちやつと來て、お菊が髮つき見てくれい。」「あい〳〵。」と走り出で、「是れは〳〵奥樣いかいお上手、額付髮付で、下地のよいお顏が、猶美しうならしやんして、女子でさへ辛氣が涌く、裸身をむつくりと、だいて寢たい。」と譽むるもあり。杉がはたと手を拍つて、「アヽ然うぢや、日頃の不審が今晴れた、私が鏡で顏を見て、木地は隨分よけれども、人が惚れぬ異な事と思うたが、髮の結ひ樣ばつかりで、あつたら此の身が埋木ぢや。慮外ながら奥樣の手に二三日掛つたら、お國中の男は、秋風に薄の穗、靡けてやろ。」とぞざゝめきける。「親の子を譽めるは嫌らしけれど、此の樣な娘を大抵の男に添はせるは妬ましい、常々つく〴〵思ふには、御家中で聟を取らば、表小姓の笹野權三樣に添はせたい。器量はお國一番、武藝ようて茶の道も、弟子衆に續くはない。そして氣立といふ物が、萬人にも憎まれぬ、愛しらしい氣質、男のきつする〳〵。」と、いへばお菊は童氣の、「申し母樣、權三樣は大人で叔父樣の樣にあらう、わしやいや〳〵。」と頭掉る。「ア、わけもない、母は三十七の酉、父樣は一廻り上の酉で四十九、これ十二違うても、見事わが身達の樣な子を持つた。權三樣は一廻り下の酉で二十五、其方は酉で十三、十二の違ひは丁度よい似合ひ頃、まあ二三年して顏も直し、脇つめたらしつ

使ひ習ひます。」「是れなう其方ももう十ぢや、其の合點がいかぬか。侍は侍知れた事、去りながら父樣を見やいの、御前も能く御加增まで下された、武藝は侍の役珍らしからぬ、茶の湯を上手になさるゝ故、人の用ゐる奔走もある、少さい時から茶杓の持ち樣、茶巾捌きも習うて置きや。永々の留守の中、子供が惡う育つたと言はれては、母が浮名も恥かしい。男の子は男の手、祖父樣へ往て大學でも讀み習や、馬鹿よ、供して暮方に連れ戾れ。」と、內外までに氣を配る、留守こそ心盡しなれ。お菊は流石姊だけの「母樣いかいお世話、ちとお休み。」と指し出す、薄茶茶椀の音羽山、大人くれたる振を見て、「オ、孝行な能う言やつた、おとなしうなりやつた、妹のお捨は乳母と遊びに出たさうな、行水も仕舞うてか、此の髮は誰が結うた、萬が細工と見えたの、髷がまちつと下つた、額もけんで愛想がない、髱の出し樣鬢付で、ようもわるうも見せるもの、顏の道具相應に、目が女子の大事の物。前髮もかうでない、母が直してやりましよ。」と、開く櫛箱鏡臺の、此の鏡より世の中は、人こそ人の鑑なれ。人の振見て我が振の、善きも惡しきも身の手本、繪に書く筆のすさみには、京や大坂の上﨟も、心で見れば今爰に、冷泉吉野初瀨の花も見る。江戶殿御持つての朝寢髮、湯上り顏や洗髮、人にな見せそ亂れ髮、寢亂れ髮の枕にも、寐顏は猶もつゝましや。容儀は生まれつきなれば、たゞ嗜みは黑髮の、目出たからんこそ、女はめやすかるべしと、徒然草にもあるといの、兎角女子は髮容、千筋

ら落ちて落馬したとは、いかう念の入つた落馬、痛むが道理、何方も落馬がはやるやら。生駒新五左が瘧も、妙薬一服でかげもささず落馬致す、我等は今朝他所へ參り、大事の精進をつい落馬致した。此の樣に落馬のはやる時、むざと言分などなさるゝな、首が落馬致さうぞ。」と、澀口いふも茶の湯者を、壻に持つたる 三重 身の習ひ、昨日は今日の＊初昔、世の口に合ふ茶の名所、人は氏より育ちかや。淺香市之進の留守の宿、おさゐは有繋茶人の妻、物數寄も能く氣も伊達に、三人の子の親でも、華奢骨細の生まれつき、風忍ばしくゆかしくの三十七とは見えざりし。數寄屋廻りの掃き拭ひ、下女中間にもいろはせず、帚放さぬ綺麗好き、路地の飛石敷松葉、石燈籠は苔蒸して、巖となれる手水鉢、植込の 謠 木の下陰の落葉かくるまで、夫婦存へて、子供の末を高砂の、松の榮えや祈るらん。中息子虎次郎棹竹横たへ、年季の角介杖提げ、路地の中に走り入る 謠 景清これを見て、物々しやと夕日影に、打物閃かいて切つて蒐れば怺へずして、刃向ひたる兵は、四方へばつとぞ逃げにける。えいやつたうたうとぞ打ち合ひける。「ヤイ〱〱、餘程にあがけよ其處なぬくめ、見事男の數に入りながら、江戸の供さへ得仕をらず、小さい子を相手にして、怪我でもさするか數寄屋の壁に、疵でもついたら何とする。是れ虎次郎、彼の馬鹿を相手にして、日がな一日惡あがき、一々に帳に付け父樣お歸りなされたら、屹と告げる待つて居や。」と叱られて、「いや母樣、惡あがきはしませぬ、私は侍ぢや、槍

仰せ付けらるゝとは申せども、何方が傳授なされたも存ぜぬ故お尋ね申す。此の度の御用に立てば、第一は御奉公、其の身の手柄、壻の市之進も本望、何と御兩人、聞き覺えもあつて茶の湯の名を取らうなら、此の度なり。」とぞ語りける。我慢者の伴之丞、「ハア、眞の臺子安い事、傳授許しは請けねども、秘事は睫毛何でもない事、種々我等存じて居る、數年の稽古は此の度、御用は拙者承る、心安う思召せ。」「それは先づ珍重、權三殿は御存じないか。」「されば存じたとも申されず、存ぜぬとも申されぬ、總じて是れは茶の湯の極意、家々の傳多けれども、師匠市之進一流は、東山殿より嫡傳、一子相傳の大事なれば、權三體が茶の湯で傳授許し請けう筈もござらねども、師匠の咄聞きはつゝた義もあり、大概非の入らぬ程の、御用の間には合はせませう。」と、詞の中より伴之丞、「ハテ斯程大事の晴の御用、間に合はせで濟むものか、此の御用は伴之丞が一人して勤むる、忠太殿其の通り心得召され。」といひければ、「いや我一人の儘にもならず、娘ながらも市之進女房、彼が所存もあるべき事、假初ならぬ眞の臺子の傳授事、過りあつては殿の恥、諸事談合づくが能い筈。サア御兩人お歸りか、いざ御同道致さうか。」「兎も角も。」と伴之丞、跛ちが〳〵腰を引く。忠太兵衞面憎く、「此方は腰をお引きなさるゝが疝氣でも起つたか。」「されば〳〵拙者程の馬の名人なれども、龍の駒にも蹴躓き、馬から落ちて落馬いたした。」と、片言やら重言やら、忠太兵衞をかしさ、彼奴嬲つてやらんと思ひ、「馬か

今歸宅、重ねて〱、小者共來いやい。」といへどもいつかな聞き入れず、「イヤ草臥れたとは負用心、勝負せねば堪忍せぬ。」と手綱を繰つて乘り出す。權三も今は力なく、馬には一息つがせたり、我が身の汗も入方の、月毛の駒に櫻狩、祕密の手綱繰り控へ繰り緩め、左右に輪をかけ違へ、互に負けじと二三遍、入れかへ〱乘つたりしが、權三が馬は逸物の、口を切つて*角を入れ、「ハウッ。」と懸けたる聲の内一散に驅け出す。伴之丞が栗毛馬鞭影に尻込して、打つても引いてもしやくつても、前脚搔いて高嘶きし、躍り上り跳ね上り鞍に堪らず伴之丞、屛風返しに撞と落ち、木の根に腰骨打ち當て、「あ痛あ痛。」といふ聲に、馬取中間草履取、主人の恥も打忘れ、一度に哄とぞ笑ひける。權三驚き飛んで下り、「怪我はないか。」と立ち寄れば、「こりや權三、相手はお主が月毛馬、此方へ渡せ斬つて捨つる、馬を渡せあいた〱、腰を揉め中間共、うぬらも首があぶない。」と、權三が方を尻目にかけ、相手知れずの一人腹。權三も言はれぬ挨拶と、身を控へて立つたる處に、進物番の岩木忠太兵衞、六十八でも生得堅氣、赤銅月代剃り立てて、「ヤ御兩人是れにか、御宅へも參るべきによい處で御意得た、東御家老衆より御狀到來、此の度若殿御祝言相濟みお悅び、お國に於て當月下旬近國の御一門方御振舞、御馳走の爲*眞の臺子の茶の湯なさるべしとの事、是れによつて我等が聟、淺香市之進も留守なれば、御家中弟子衆の中、眞の臺子傳授の方へ、御廣間本式の飾物等勤めさせ申せと、御留主御家老衆より

い。さりながら末長う縫ひ仕立てて召させねばならぬ。どれぞ仲人頼みて、本式の言入はお前から、是れは先づそれまでの心頼み、此の帶の如く何時までも、お腰元を離れず添ひ纏うてや、さうぢやぞや。」と鞍の前輪に打ち懸くる、其の手を取つてぢつと締め、「どうも言はれぬ嬉しい心、八幡我等も心底變らぬ、此の馬も聽いて居る、畜生の心は人よりも恥かしい、こりや證據に立て、馬よ聞いたか聞いたか。」と、いへどもいかな馬の耳、風に嘶く許りなり。權三帶疊んで懷に押し入れ、「あれ／＼濱手から栗毛馬の遠乘は舍兄伴之丞。」「ハア眞に乳母、兄樣がそれ其處へ。」「ヤア旦那樣かこりやならぬ、見付けられては後の邪魔、サア先づ此方へ／＼。」と本社の方へぞ走りける。程なく伴之丞乘り來り、「ヤ權三お身も遠乘か、いかう精が出て馬持がよいゆゑに、其の月毛も一兩年滅切と能くなつた、買人があらば賣つて仕舞ひ、五兩も七兩も利を取つて、又跡から安馬買ひ置き、乘り入れて賣つたらば金持になる筈、よい藝覺えて仕合。」と人をけなす口癖、權三氣立を能く知つて、「オヽ、サ小身者の馬の手入、飼を碌にかはぬ故、見懸ばかりで爰はの時の用に立たぬ、御身達は大身、人手は多し飼はよし、すはといふ時駻強く、歩み勝つはお身の馬、祕藏召され。」といひければ、「ム、其の言分は先度二の丸の櫻の馬場で、其の月毛に此の馬があゆみ負けた當言な、サ一馬場せめて勝負せう、サア乘れ乘れ。」と氣を急いたり。「イヤサ心得たと言ひたいが、今まで乘つてお見やる通り、人馬ともに草臥れ只

手な事被仰れなやいの、權三樣。よもや忘れはなされまい、去年の冬私が宿で、お雪樣とお前と逢はせた時、これ限りと被仰れたか、サア何と、たつた一夜切りに、切り賣りにする娘御ぢやござらぬ、アウ忝くもそれから梨も礫もせず、お文の往く度毎に、此方から返事せう、どれ何處に一度の返事もなされたか。お雪樣の父御樣母御樣はござらず、目代になる此の乳母はぐるなり、伴之丞樣へたつた一言、言ひいれでつい御祝言すむ事。サア奥樣に持たしやるか但し嫌か、嫌なら嫌と今御意なされ思案がある、眞に私が育てて自慢ぢやないが、男に指もささせぬ、甘い盛りの十八豇豆、柔かな内を一口食うて、せゝりさがして置かうや、そりやなりませぬ、ア、あべかこう。」とぞ喚きける。「オ、女中の氣では恨み尤も、文は落ち散る遠慮深く、返事せぬは身が過り。御舍兄伴之丞とは、御膳番の淺香市之進に茶の湯の相弟子、心易い朋友なれども、申し憎いが味な氣質で、むざと物のいはれぬ仁。若い者の口から御自分の妹下されとは、何ともそれは恥かしし、然るべき媒介頼み兩方へ挨拶あれ。我等は合點、伴之丞さへ呑込まるれば、用人衆まで伺うて、其の上は緣次第、此の詞をたがへなば、たつた今此の馬から、眞逆樣に轉りと落ち、蹈み殺さるゝ法もあれ、心底變らぬ〳〵。」と、いへばお雪がにつこりと、笑顏に開く小風呂敷、「是れ此の帶の縫見て下さんせ。丸に三つ引お前の御紋、私は裏菊、ようはなけれど私が細工、大小の締まる爲、中入に念は入れたれど、くけ口がお氣に入るま

うちくれ〱驅けさする、轡の音はりりん〱、障泥の音ははた／＼／＼、叩く嵐や馬場先の、すずの笹原さら〱、さら〱さつと、乘り飛び〱乘り飛ばせ、蹄を陸地に著けばこそ、二町五段の馬場のうち、息をもつがず半時ばかり、達者を見せてぞ三重せめ馬の、鞍も鐙も汗になり、乘り止むれば小者馬取、「もうお仕舞か。」と走り寄る。「ヤイ丁稚、殊の外汗になつた、一走り歸つて著替の袷持つて來い、馬取共其の閑宮へ往て休息せい。」「ない。」と言ふより中間共、休む方には足早く、立ち去る跡につる／＼と、立ち寄つて足の爪先、鐙共に確乎と取り、「久しうござんす權三樣、御無事で目出たうござんする、是れ見ぬ顏もよい加減にしたがよいぞや、可愛そに馬も骨折らせ、今日一時に稽古せねば叶はぬか、左程私が嫌ならば、最前から避けずとも、何故此の馬に踏み殺させて下さんせぬ。エ、此方樣はなう侍のぬけ／＼と、よう譃を吐かしやんす。」と、睨む眼の中おろ／＼と、女は涙脆かりし。「是れお雪殿、人にこそよれ川側伴之丞殿の妹御、君傾城を嫐る樣に、權三が譃をつく物か、少しも心かはらねども、下々の奴等まかう爲、中間めらが見付けうかと、馬に乘る心もせず、氣が宙を飛ぶ樣で、是れ此の如く汗かいた。自體乳母お主が不調法、屋敷の人目も有る物、若い女中に意見もせず、此の樣な遠驅け、御家中ふつと名が立てば、此の權三御奉公がならぬ、申し交した詞は違へぬ、サア同道してお歸りやれ、早う〱。」と乘り出す、轡取つて引き留め、「乳母が不調法とは、よい

槍の權三重帷子

上之卷

君八千代國は治まる御留守にも、弓馬嗜む梓弓、馬の庭乘遠乘と、遙かに出でし濱の宮、鳥居通の流鏑馬馬場、竝木に落つる風の音、とゞろ〳〵と打つ波も、乘り分けつべき器量こそ、表小姓の數々の、中にも笹野權三とて、武藝のほまれ世の人に、槍の權三はだて者の、どうでも權三は好い男、諸ひはやらす美男草、女若ふたつの戀草を、飼ひに飼うたる月毛の駒、前脚とつて駻つよく、雪嚙み碎く白泡に、＊さんせうよしや尾は青柳の、しつたり〳〵した〳〵、かつし〳〵と歩まする、大坪流の鞍の內、稽古に心染手綱、かい繰り〳〵乘拍子、「はい。」とかけたる一聲に、兩口放す奴が髭も、共に跳ねたる駿足や、袴の裾に風受けて、小波寄するしゆみの髮、しつ〳〵〳〵と乘り戾し、引き廻し乘る袖摺の、松も女松の＊十八公、其の年頃の振袖の、京染模樣菅笠は、家中で誰の娘ぞや、お乳母らしいが小風呂敷、權三見る眼の絲薄、ちらりほらりと馬の先、除ける振して邪魔をする。權三それぞと見し人の、心に覺え荒駒も、色にそばえて足早き、はい〳〵聲をかごとにて、馬ぞ迷惑癡話の鞭、

上げん、御誓言にて御返答承らん。」と、いひもあへぬに韃靼王、「オ、く神妙々々。」といふ所を、飛び蒐つてはつたと蹴倒し絞め上ぐれば、隙をあらせず國姓爺、飛び蒐つて父が縛め捻ぢ切りく、李蹈天を取つて押へ、父を縛りし楯の面、まつ其の如く高手小手に縛り付け、三人目と目を見合はせて、「ア、嬉しや。」と悦ぶ聲、國中響く許りなり。諸軍勢勇みをなし、太子姫宮御幸なし奉れば、「御前にて彼奴原則ち罪科に行ふべし、夷とはいひながら韃靼國の王なれば、縛りながら鞭打ちして、本國へ送るべし。」と、左右にわかつて五百鞭、半死半生打ちするゑて引き退けたり。「サア是れからが李蹈天、元の起りの八逆五逆十惡人、片身恨みのない様に、國姓爺は首引き拔かん、兩人は兩腕。」と三方に立ちかゝり、聲をかけて一時に、「えいやうん。」と引き拔き捨て、「永曆皇帝御代萬歲、國安全。」と壽くも、大日本の君が代の、神德武德盛德の、滿ちて盡きせぬ國繁昌民繁昌の惠みによつて、五穀豐饒に打續き、萬々年とぞ祝ひける。

國姓爺合戰　終

斯くの如く召捕つたり。日本流に腹切るか、但し親子諸共直に日本へ歸るに於ては一官を助くべし、承引なくば唯今、目前にて一官を引張切にせん、兎角の返答早や申せ。」と、高聲に呼ばはれば、今まで勇む國姓爺、はつとばかりに眼も暗み、力も落ちて打萎れ、諸軍勢も氣を失ひ、陣中ひつそと靜まりける。一官は齒嚙をなし、「ャイ國姓爺、狼狽へたか後れたか、七十に餘る此の一官命存へ何になる、母が最期の健氣なりとて、父にも語り吹聽せしを忘れしか、是れ程まで仕おほせし一大事、此の皺爺が命一つに迷うて仕損ぜしと言はれて、末代の恥辱故鄕の聞え、日本生まれは愛に溺れ義を知らぬと、他國に惡名とゞめんは日本の恥ならずや、女なれども汝が母は生まれ故鄕を重んじ、日本の恥といふ字に命を捨てしを忘れしか。是れ程の手詰になり、此の親が目前に八つ裂きにせらるゝとも、眼も觸らず飛び蒐つて本望遂げ、大明の御代になさんと思ふ根性は何處で失うた、エ、未練なり淺ましし。」と、地蹈鞴踏んで制すれば、國姓爺父に恥ぢしめられ、思ひ切つて大王目懸け、飛んで出づれば李蹈天父に劍を差し當つる。はつと氣も消え立ち留り、進みかねたるしどろ足、頭の上に須彌山が今崩れ懸つても、びつくともせぬ國姓爺、前後に暮れてぞ見えにける。甘輝呉三桂互に屹と目配せ、突つと出でて韃靼王の前に頭を下げ、「斯くまで仕おほせ候へども、御運強き韃靼王、一官搦め捕らるゝこと國姓爺が運も是れまで、末賴みなき大將、我々兩人が命を助け給はらば、國姓爺が首取つて差し

下知を爲し、「未だ生死も知れず、殊に此の南京城、四方に十二の大門三十六の小門あり、一方にても明いたる方より落ち失せんは必定、四方に心を配つて討て。」と相詞に手を配り、箙を叩き鯨波の聲、天も傾く許りなり。小むつが嗜む劍術の、牛若流の小太刀を以て一陣に進み出で、「相手選ばず時選ばず、所も選ばぬ此の若武者、死にたい者が相手ぞ。」と思ふ樣廣言し、多勢が中へ割つて入り、火水を飛ばせて三重戰ひける。賊兵數多討たるれども、七十萬騎立籠つたる南京城、落つべき樣こそなかりけれ。國姓爺は如何にもして、父の生死を知るべしと、驅け廻つても爲方なく、陣頭に大音上げ、「我唐土へ渡つて五年の間、數箇度の合戰終に無刀の軍をせず、今日珍らしく劍の柄に手もかけまじ、馬上の達者劍術得物の韃靼勢、寄つて討てや。」と招きかくれば、「憎い廣言打ち殺せ。」と、我も〳〵と喚いて蒐る。引き寄せて劍捻ぢ取り叩き挫ぎ打ちみしやぎ、鋒槍長刀もぎ取り〳〵、捻ぢ曲げ押し曲げ折り碎き、寄せ來る奴原脛に障れば蹈み殺し、手に觸るを捻ぢ殺し、絞め殺しては人礫、騎馬の武者は馬共に、一つに摑んで手玉に上げ、四足を摑んで馬礫、人礫馬礫石の礫も打ち交り、人間業とは三重見えざりし。さしもの韃靼攻め寄せられ、すは落城と見えたる處に、一官を楯の表に縛り付け、韃靼王を先に立て、李蹈天進み出で、「ヤア〳〵國姓爺、己日本の小國より這ひ出で、唐土の地を蹈み荒し、數ケ所の城を切り取り、剰へ大王の御座近く、今日の狼藉緩怠千萬、是れに依つて親一官を

の御暇請。」と飛んで出づれば、兩將袖に縋つて、「ア、曲もなし、甘輝が爲には妻の敵、舅の敵、吳三桂が爲にも妻の敵嬰子の敵。」「オ、それ〳〵孰れも敵に輕めなし、天下の敵は三人一所、サア來い。」と驅け出づる。此の三人の太刀先には、如何なる天魔厄神も面を向くべき方もなし。鄭芝龍老一官、夕霧暗き黑革縅すゝどけに出立ちて、南京城の外郭の大木戸敲いて、「國姓爺が父老一官と申す者、年寄膝骨弱つて人竝の軍叶はず、さればとて若殿原の軍咄安閑と聞いても居られず、此の城門に推參して、速かに討死し、素意を達したく候。あはれ李蹈天出で合ひ、此の白髮首を取つて給べ、生前の情ならん。」とぞ呼ばはりける。城の中より六尺豐かの大男、「優しし一官相手になつてとらせん。」と、木戸押し開き切つて蒐る。「心得たり。」と二打三打討つぞと見えしが、突つと入つて首打ち落し、大きに不興し大音上げ、「一官年寄つたれども、斯樣の葉武者に遣る首持たず、李蹈天出で合はせよ、外の者が出でたらば、何時までも此の通り。」と、城を睨んで立つたりけり。韃靼大王壽陽門の櫓に顯はれ出で、「國性爺が父老一官とは彼奴めよな、問ふべき仔細數多あり、殺さずとも搦め取つて引いて來れ。」「承る。」と四五十人棒づくめに取り廻し、隙をあらせず滅多打ち、捻ぢ伏せ〳〵縛りつけ、城中さして引いて入る、無念といふも餘りあり。程なく甘輝吳三桂國姓爺を眞先に、大手の門に驅け付くれば、引續いて六萬餘騎、小むつを後陣の大將にて、今日を死戰と押し寄せたり。國姓爺

一座の上下諸共に、皆々袖をぞ濡らしける。「殊更女の身ながらも、故郷を忘ぜず生國を重んじ、最期まで日本の國の恥を思はれし、我も同じく日本の産生國は捨てまじと、あれ見給へ天照大神を勸請す。某匹夫より出でて數箇所の城を攻め落し、今諸侯王となつて各の傅きに預る事、全く日本の神力に依つてなり、然れば竹林にて從へし島夷ども、日本頭に作り置く、彼等を眞先に立て、日本の加勢と披露せば、元より日本弓矢に長じ、武道鍛錬隱れなく、韃靼夷聞き怖ぢして、二の足になる所を疊みよせて乘取らんと、此の頃我が女房に諜し合はせたり。ヤア〱源の牛若、軍兵率し是れへ是れへ。」と、團扇を上ぐれば「あつ。」と答へて立ち出づる、小むつが髮の初元結、諸軍勢の元服頭、大和淺葱に唐錦、華麗なりける扮裝なり。假御殿の幔幕より姫宮走り出で給ひ、「なう〱國姓爺、此の旗は御身の父一官の旗印、此の書付も一官の筆心元なき文言。」と、出し給へば牀几を下つて讀み上ぐる。「我愁ひに明朝先帝の朝恩を報ぜんと、再び此の土に歸參し功もなく譽もなし、老後の餘命幾許の樂しみをか期せん、今月今夜南京の城に向つて討死を遂げ、美名を和漢に留むる者なり、鄭芝龍老一官、行年七十三歲。」と、讀みも終らず國姓爺すつくと立ち、「サア敵に念が入つて來た、母の敵に父の敵、智畧も入らず軍法も何かせん、方々は兎も角も身に逼るは國姓爺、たゞ一人南京の城に乘り込み、韃靼王李蹈天が首捻ぢ切り、父が最期の場をかへず討死して、父母が冥途の旅を同道せん、今生

へ。」と口を拔けば數多の蜂、鳴り羽ぶいてぞ出でにける。「賊兵嘲笑ひ、淺はかなる童威しの謀計、燒き捨てて恥かかせよと積み重ねて火を放けん、其の時筒の底に仕懸けたる放火の藥鳴り渡り、飛び散つて十町四方の軍兵に、生き殘る者は候まじ。」と、火繩を筒に差し付くると齊しく、飛んだる亂火の仕掛、實にもかうとぞ見えにける。五常軍甘輝、菓物入れたる花折一合取り出し、「吳三桂の奇計尤もに候、又某が謀、斯くの如く折籠二三千合も拵へ、樣々の菓子餉酒肴認め、各是れに鴆毒を入れ、陣屋に貯へ竝べ置き、陣所近く敵を引き受け、戰ひ負けたる體にして十里許り引き取るべし、韃靼が例の長追、勝ち誇つて陣屋に込み入り、此の食物に眼くれ、寶の山に入りたりと軍將雜兵、我先にと摑み喰らはんこと必定、脣に觸ると齊しく片端に毒血吐き、刃に血ぬらずして皆殺しにしてくれんこと、」面々軍慮心を碎き、評議取々區々なり。國姓爺打頷き、「孰れも一理ある計畧、批判申すに及ばず、さりながら國姓爺が魂に徹し忘れ難きは、母が最後の一句の詞、韃靼王は汝等が母の敵、妻の敵と思ひ込んで本望遂げよ、氣を撓ませぬ其の爲の自害なりとの詞の末、骨に沁み五臟に徹し刹那も忘るゝ事はなし、千變萬化の謀計も何かせん、只無二無三に攻め入つて韃靼王李蹈天に、押竝べてむずと組み、ずた／＼に刻んで棄てずんば、假令國姓爺が百千萬の軍功も、君の忠も世の仁義も、母の爲には不孝の罪。」と、鏡の樣なる兩眼に、淚をはら／＼と流しければ、吳三桂甘輝を始め、

切つて、手詰のせきを勝軍、敵のはまを拾ひ上げ、國も御代も打ちかへて、手を盡したる劫もあり、忠義の道はまつ斯う〱、道は斯うよ。」と打連れて、福州の城にぞ入りにける。

第五

泰山を挾んで北海を越ゆる事は能はず、王の王たらざるは能はざるにはあらずとかや。延平王國姓爺兵を用ゐること掌にまはすが如く、五十餘城を屠り、武威日々に熾んにして、妻の女房古郷より梅檀皇女を供し參らせ、九仙山より呉三桂太子を御幸なし申せば、十善天子の印綬を捧げ永曆皇帝と號し奉り、龍馬が原に八町四方の木城をからくみ、陣幕戸幕錦の幕、陣屋の上には日本伊勢兩宮の御祓、大幣を勸請し、太子を別殿に移し參らせ、其の身は中央の牀几にかゝり、司馬將軍呉三桂散騎將軍甘輝、同じく左右の牀几に坐し、韃靼大明分目の勝負、軍評諚とり〲なり。呉三桂團扇取り直し、「凡そ謀は淺きに出でて、深きに至るに如くはなし。」と、竹筒一本取り出し、「此の筒に蜜をこめて、山蜂多く入れ置きたり、斯くの如く數千本拵へ、先手の雜兵に持たせ、立合の軍する體にて筒を捨てて逃げ退かば、貪慾熾んの韃靼勢、食物と心得拾ひ取らんは必定、口を拔くと齊しく、數萬の山蜂羣り出で、賊兵を毒痛せしめ、漂ふ處を取つて返し、八方より討ち取るべし。是れ御覽候

く行くともなく、向うの峯に登り付き、足もわぢ〳〵慄ひけり。程なく賊兵雲霞の如くどつと驅け寄せ、「あれ〳〵太子呉三桂も見えたるは、思ひも寄らぬ拾物、鰯網で鯨を捕るとは此の事、的になりたる奴原、やれ弓よ鐵砲よ、打ち取れ射取れ。」と犇きける。貝勒王下知をなし、「やれ待て〳〵後は廣し退き場はあり、弓鐵砲は叶ふまじ、こりや見よ竟に見ぬ雲梯、必定國姓爺めが日本流の算盤橋、疊橋なんどいふ物ならん、敵に喰物あてがふは愚かの軍法、續けや者共渡れや渡れ。」と五百餘騎、押合ひ詰合ひ我先にと、えい〳〵聲をかけ梯の、半ば渡ると見えけるが、山風谷風颯々と、雲の梯吹き切つて、大將始め五百餘騎、どた〳〵〳〵と落ち重なり、面額打割る天窗を碎く、泣いつ喚いつ彌が上、谷をも埋むる許りなり。呉三桂鄭芝龍得たり賢し心地よしと、大石大木當るを幸ひ、投げかけ投げかけ打ちつくれば、一騎も殘らず刹那が中、人の鮨とぞなりにける。中にも大將貝勒王、岩根を傳ひ葛を手繰り這ひ登れば、呉三桂遊仙の棊盤引提げ、「こりや此の棊盤は野老で練つて石より堅く、苦うて口に合はずとも一口喰ふか、己が一目目を持つて御無用の棊の相手、棊勢を見よ。」と、頭を出せば丁ど打ち、面を出せば礑と撲ち、打ち付け〳〵腦も鉢も打ち碎かれ、微塵になつてぞ失せにける。

「オヽ〳〵本望々々、本朝にても斯かる例は、先例吉野の棊盤忠信、それは榧の木是れはところの九仙山、先手が味方へ廻りくる、四つ目殺しに中手を入れて、征に懸けて打ち切つて、攻手搦手斷ち

命あれば珍らしや、一子國姓爺が故郷の妻、栴檀皇女を御供せし。」と、招き合へば姫宮も、「懐かしの吳三桂、おことが妻の柳歌君、命懸けての忠節にて、浮世を渡る浮れ舟、日本へ吹き流され、一官親子夫婦の情、不思議に再び逢ふ事よ、柳歌君は何國にぞ、嬰兒は何となりけるぞ、早う逢ひたい逢はせて給べ。」と、焦れ給ふぞ道理たる。「されば其の時の深手にて、我が妻は空しくなり、后も敵の鐵砲に命を落し給ひしゆゑ、胎内を斷ち破り、我が子を害し敵を欺き、太子は山中にて、安々育て參らせし、はや七歳の生先は是れに渡らせ給ふぞ。」と、語るにつけて姫宮も、「わつ。」と許りにどうど伏し、人目も別かぬ御歎き、思ひ遣られて痛はしし。一官麓を見返つて、「あれ〳〵貝勒王奴が姫宮を見付け、數千騎にて追ひ蒐くる、年寄骨に力身を出し、踏み留まつて命限り、防ぎ支へんと逸れども、宮の御上危なし〳〵、それへどうぞ退けたいが此の山不案内、谷を越す道はあるまいか。」「いや〳〵此の山廻れば六十里、谷深うて底知れず、是れへも呼ばれず其處へも越されず、エヽ、如何せん何とかせん。」と虚空を拜し、「只今奇瑞を現じ給ふ、御先祖高祖皇帝、靑田の劉伯溫、神仙微妙の力を合はせ、非常の危難を救ひ給へ。」と、太子諸共一心不亂に祈誓あり。姫宮小むつも手を合はせ、「南無日本住吉大明神、福壽海無量。」と丹精無二の心ざし、天も感應地も納受、洞口より一筋の雲無心にしてたな引けば、天の雲梯鵲の渡せる橋や、葛城の久米の岩橋夜ならで、夢路をたどる如くにて、渡るともな

の成長汝が身の、面影を能く水鏡、水清ければ影清し、汝忠あり誠あり、心の鏡に映り來る、我は先祖高皇帝。」シテ「我は青田劉伯溫。」二人「住家は月の中に立つ桂の裏葉吹き返し。」シテ「智見の目には上十五。」ワキ「下十五夜と見つれども。」シテ「衆生は心亂れ葉の、石とや賺な見るらん。」ワキ「又水中の遊魚は。」シテ「釣針と疑へり。」ワキ「雲上の飛鳥は。」シテ「弓の影とも驚けり。」ワキ「一輪も下らず。」シテ「萬水とても上らねば。」二人「滿ちては虧くる影あれば、虧けても滿つる月を見よ、暫しが程の雲隱れ、遂には晴れて天照す、日の本和國の神力にて、太子の位は早出づる日。」と、宣ふ御聲は松吹く嵐、俤許りは松立つ山の、峯の嵐に吹き隱れてぞ失せ給ふ。シテ茫然として吳三桂、夢かと思へば交睫まず、げにも五年の月日を經たる印にや、我が顏には髭伸びたり。太子の尊容時の間に御脊丈も立ち伸びて早七歲の御物ごし、「吳三桂々々々。」と召さるゝ御聲おとなしく、雪の深山に鶯の、初音を聞きし思ひにて、「あい〳〵〳〵。」と頭を下げ、天を拜し地を拜し、嬉しさ足も定まらず、二度夢の心地せり。御前に手を束ね、「古の鄭芝龍が一子國姓爺、日本より渡つて味方の義兵を起すとは、音にこそ承れ、春秋五年の軍功明らかに、大明半國は取り返し候へば、國姓爺に案內して、君是れに在す旨を告げ知らせたく候。」と、申しも敢へぬに遙かの谷の向うより、「喃々それなるは、司馬將軍吳三桂にてはなきか、吳三桂々々々。」と、呼ばはる方を能く〳〵見て、「御身は昔の鄭芝龍か。」「是れは〳〵吳三桂

甲を膺當鎧は逆樣、馬を脊中に、ォ、〳〵〳〵〳〵大手の門を押し開き、切つて出づれば寄手の勢貝鉦鳴らし、鯨波の聲、大將團扇追取つて、ひらり〳〵ひら〳〵ひらり閃かし、シテ日本流の軍の下知、攻め付け挫ぐは義經流、緩めて討つは楠流、倶梨迦羅落し坂落し、八島の浦の浦波も、爰に寄手の勢ひ強く、揉み立て〳〵三重切り立てられ、城中指してぞ引いたりける。「時分はよし。」と夕暗に、日本祕密の炮碌火矢、打つて放つ其の響、須彌も崩るゝ許りなり。楯も櫓も海人の焚く、鹽の煙か炭竈か、火焔は秋の村紅葉、楚人の一炬に焦土となんぬ、咸陽宮とも謂ひつべし。國姓爺勝鬨の駒の手綱を搔繰つて、輪乘をかけてくる〳〵、くるり〳〵と乘り廻し、廻る月日に僞りの、無き世なりけり神無月、時雨れて過ぐる岡の邊に、棟門高き城郭こそ、是れも國姓爺が切り取りし北州の長樂城、軒の甍は爛々と玉を彩る初霰、霙交りの夕嵐、吹き來る上に降り積り、塀も櫓も埋もれて雪の眺めは面白や、其の外閩州建州諸國の府、三十八ヶ所切り取つて、太子の御幸を待ち顏に、所々に*附城築き、兵糧軍兵込め置いて、威勢は天の氣に顯はれ、手に取る樣にぞ見えにける。シテ吳三桂悅喜の餘り、身をも人をも打忘れ、太子を抱き奉り、城ある山へと走り行く。ワキ二人の老翁引き留め、「愚かなり〳〵、目擊一瞬に見ゆると雖も、各百里を隔てたり、汝此の山に入つて一時と思ふとも、五年の春秋を送り、四年に四季の合戰を見たるとはよも知らじ、斯くいふ中にも經つ月日、太子

安宅の關守を欺きし例を引くや梓弓、軍兵に目配し、「抑是れは、驪山の麓楊貴妃の御廟所、太眞殿再興勸進の大行者、勸進帳を聽聞し、勸めに入れや關守。」と、軍勢の著到一卷取り出し、味方の祈禱敵調伏と觀念し、一人高らかにこそ讀み上げけれ。「それ熟おもんみれば、韃靼逆徒の秋の月は、無殘の雲に隱れ、生死不定の永き夢、驚かすべき勢もなし。玆に往昔、帝おはします、御名をば玄宗皇帝と名づけ奉り、寵愛の玉妃に別れ戀慕やみ難く、涕泣眼にあらく、涙玉を貫く、思ひを善路に翻して太眞殿を建立す。斯程の靈場の絶えなん事を悲しみて、鄰鄕の褒似が末葉諸國を勸進す、一戰合戰の弔は、敵方にては首を矛に貫かれ、味方にては合戰勝利の勝鬨揚げん、歸命稽首敬つて申す。」と、天も響けと讀み上げたり。ワキ關の大將右龍虎左龍虎、「すは國姓爺、飛んで火に入る夏の蟲。」シテ悄に蟬の喚いて蒐れば、ワキ莞爾と笑ひ、シテ「樊噲流は珍らしからず、門を破るは日本の朝比奈流を見よや。」とて、貫の木逆茂木押し破り、向ふ者を叩き伏せ、逃ぐるを摑んで人礫、左龍虎右龍虎討ち取つて、難なく過ぐる月日の關や、碁盤の上も、一人關吹き越ゆる秋の風、霧霽れ渡る山城は、韃靼の軍將海利王が楯籠り、前は巖壁後は海、要害頼みの油斷を見て、秋の夜討の國姓爺、乘つたる駒の轡蟲、月松蟲の聲澄み渡り、しん／＼りん／＼しう／＼／＼と、堀際近く攻め寄せて、百千の高提灯一度にぱつと立てたるは、千世界の千日月一度に見るが如くにて、城の兵寐耳に水の、慌て騷いで

にあり〱と、合戰の有樣目前に見すべし。」と、宣ふ聲も山風も、碁石の音にぞ響きける。シテ吳三桂はつと心付き、げに〱こゝは九仙山、此の九仙山と申すは、四百餘州を目の下に、峯も幽に、おぼろおぼろと雲かと見れば一霞、麓に落つる春風の、風のまに〱吹き霽らす、空は彌生の中旬なる。平家柳櫻をこきまぜて、錦に包む城郭の、あり〱とこそ見えにけれ。何國の誰が籠りしぞ、門高く堀深く、砦々に搔楯築き、要害嶮岨を帶びたりし、昂々たる高櫓、揚る雲雀や歸る鴈、花と見つつも色々の、旗に翼や休むらん。長閑に照らす朝日影、月影打つて付けたるは、日の本の美名を顯はし、延平王國姓爺が乘取つたる石頭城、いはねどそれと白眞弓、鐵砲高麗矛槍長刀、大旗小旗靡き合ひ、吹拔幟馬標翩飜と翻り、天も五色に染め成せば、藤も躑躅も山吹も、共に映ろふ色見えて春の日數は盤上の、石の數とぞ積りける。二人若葉が末の深綠、晴れ行く雲の絕間より、是れ南京の雲門闕と、名乘りて出づる杜鵑、幔幕高き卯の花垣、今年も夏の半ばなり。シテ方三十里に逆茂木引き、關の大將左龍虎右龍虎三千餘騎、兜の星を輝かし、シテ太鼓を打つて亂聲し、ワキ鳥のそら音は、シテはワキか二人るとも、ゆるす方なき勢ひに、劍は夏野の薄を亂し、火繩は澤の螢火と、要害巖しき關の戸は、鳥も通はぬ許りなり。シテ日本育ちの國姓爺、例へば此の關鐵石にて堅めたりとも、押し破つて通らん事、童が障子一重破るよりも安けれども、軍中の目覺しに、我が本國文治の昔武藏坊辨慶が、

仙山に攀ぢ登り、暫し佇む松風も、馴れてや友と住み馴れし、*厖眉白髪の老翁二人、石上に碁盤を据ゑ、黑白二つの石の數、三百六十一目に、*離々たる馬目連々たる鴈行、傍目もふらぬ碁の勝負、心は蜘蛛の、空に繋れる絲に似て、身は空蟬の枯枝となり、浮世を離れし手談の技、中間禪の高臺かと、太子を石段に移し參らせ、枯木の株に頤持たせ、見惚るゝ我も諸共に、餘念の塵をや拂ふらん。吳三柱興に乘じ、「なう／＼老人に物申さん、市中を離れし座隱の遊び面白し、さりながら琴詩酒の三つの友を離れ、碁を打つて勝負を爭ひ給ふ事、別に樂しむ所ばし候か。」翁差して應へなく、「碁盤と見れば碁盤にて、碁石と見る目は碁石なり、大地世界を以て一面の碁盤となすといへる本文あり、心上の須彌山是れにあり、大明一國の山河草木、今爰より見るになどか曇らん、一角に九十目、四方に四季の九十目、合はせて三百六十目、一目に一日を送ると知らぬ愚かさよ。」シテ「面白し／＼、天地一體の樂しみに二人對ふは何事ぞ。」ワキ「陰陽二つあらざれば、萬物調ふ事もなし。」シテ「勝負はさて如何に。」ワキ「人間の吉凶は時の運にあらずや。」シテ「扠白黑は。」ワキ「夜晝。」シテ「手段は如何に。」ワキ「軍の法。」シテ「切つて押へて跳ねかけて、二人軍は花の亂れ碁や、飛びかふ鴉、羣れ居る鷺と喩へしも、白き黑きに夜晝も、わかで昔の斧の柄も、自らとや朽ちぬべし。」ワキ翁重ねて宣はく、「今日本より國姓爺といふ勇將渡つて、大明の味方となり、只今軍眞最中、是れより其の間遙かなれども、一心の碁勢眼力

空走り行く如くにて、山なき西に山見ゆる、月に先だち日につれて、日の本出でし秋風の、立ちも變らず其のまゝの、まだ秋風に鱸釣る、松江の港に著きにけり。ワキ人々船より上り給ひ、「誠にお兒の御情、坐したるやうなる船の中、かかる波濤を時の間に、渡したまへる御方は、如何なる人にて有るやらん。」シテ「人がましやな名もなき者、われ日の本に昔より、住み馴れたれば住吉の、大海童子と申す者、暇申して此の童は、住吉に立ち歸り歸朝を待ち申さん。」と、二人夕波の汀なる、蜑の小舟を漕ぎ戻し、追風に任せつゝ、沖の方に出でにけりや、沖の方へぞ 三重

九仙山

傳へ聞く、陶朱公は勾踐を伴ひ、會稽山に籠り居て、種々の智畧を運らし、遂に呉王を滅ほして、勾踐の本意を達すとかや。昔を問へば遠き世の、例も呉三桂が、今身の上に白雲の、山より山に身を隱し、太子を育て奉る。移れば變る苔筵、宮前の楊柳寺前の花、峯の古木に立ちかはり、夕の霧の間には、我が身を以て褥とし、鑾輿屬車の手車も、蔦の錦におりかへて、朝の露のほとりには、谷の猿の肩に駕し、早二歳は昨日今日、暮るゝも山明くるも山、我が名も君が顏も、人目を包む雲水に、虹の架橋途絶えして、深山烏や鵺鳥、梢に來鳴く鸚鵡さへ、昔をまねぶ聲はなし、水遠くして山長く、根笹茅原槇檜原、峨々と聳えし崔嵬の、山路に疲れ行く末は、名にのみ聞きし江寧府の、九

し年の數、いさすがかきて箱崎の、松とし聞かば我も急がん。磯邊傳ひに寄藻搔く、海士の子供の打群れて、彈き石投子又丁か半、三つ四つ五つ數へては、幼遊びも睦まじく、七瀬の淀に行く水も、昔の影や隱れん坊、鬼の來ぬ間と謠ひしも、濡れて乾かぬ旅衣、唐土船を松浦川、港もちかの浦風に、其方の方を見給へば、磯に手繰の廚川、波に搖らるゝ釣舟に、シテ「鬢頰結うたる童子一人、網を下さで釣竿のいと悠々と眠り來る。ワキ「なう〳〵お兒、我々は唐土へ渡る者、好からん方まで乘せて給べ。」とぞ仰せける。シテ「アラ何ともなや、一人は唐人一人は筑紫人、女性の身にて唐土へ渡るとは、戀しき人のあるやらん、二千里の外古人の心、三五夜中にあらねども、影を漏らさぬ月の船、疾く〳〵召され候へ。」と、早差寄する水馴棹、二人不思議の緣と打乘りて、焦れ行方も白波に、凪ぎて長閑き海の面。ワキ「續きて見ゆる八十島を、異國の人の家包に、敎へてたばせ給へとよ。」シテ童子舳板に立ち上り、海原遙かに指さして「いかに旅人聞き給へ、先づ彼に續くは鬼界十二の島、五島七島中にもあの白き鳥の、多く群れ居るは白石が島、此方に煙の立ち登るは硫黃が島、扨又南に高く、霞かゝるは千どの島なり、彼は古天照神の、住吉の明神に笛吹かせ舞曲を奏し二神の、遊び給ひし所とて、二神島とは申すなり、なう唐土人。」とぞ語らるゝ。二人語る間に敷島の、はや秋津洲の地を離れ、それより先の島々の、島かと見れば雲の峯、山かと見れば空の海、風はなれけど蜑小舟、天の鳥舟岩舟の、

珠汐滿珠を以て御船を守護し、船玉神とも申すなり、昔唐土の白樂天といひし人、日本の智慧を圖らんと、此の秋津洲に渡り給ひ、目前の景色を取り敢へず、青苔衣を帶びて巖の肩に懸り、白雲帶に似て山の腰をめぐると、詠じ給へば、大明神卑しき釣の翁と現じ、一首の歌の御答へ、苔衣著たる巖はさもなくてきぬ〱山の帶をするかなと、詠じたまひし御歌に、ぎつと詰つて樂天は、爰より本土に歸るとかや、國を守りの御神の、其の御歌は苔衣、我が身に受けて旅衣、いざ。」とて二人打連れて、船路遙けく 三重 なりふりや。

栴檀女道行

唐子髷には薩摩櫛、島田髷には唐櫛と、大和唐土打交ぜて、さしも習はぬ旅立や、船と陸とを行く道は、笠捨てられず懷中に、枕を疊む夢たゝむ、千里を胸に疊みこむ、女心の強弓も、男ゆゑにぞ引かれゆく、我は故郷を出づる旅、君は故郷へ戻る旅、二葉に見せて栴檀女、小むつが諫め力にて、大明國へと思ひ立つ、心の内こそはるかなれ。親と妻とを持ちし身は、何か歎きは有明の、月さへ同じ月なれど、なう二人見馴れし閨の中、名殘數々大村の、浦の濱風一村雨は、さら〱と霽れても晴れぬ我が涙、袖に包みて袂に拭ふ、鏡の宮に影とめて、泣かぬと人や見るめの浦、ふりさけ見れば久方の、日も行末の空遠く、歸るさ何時ぞ天津鴈、誘へや誘へ我が夫も、二十五筋の琴の絲、結び契り

汐ざかひ、ちくら者かと疑へり。夫も今は國姓爺と名を改め、數萬騎の大將軍と聞くからに、我も心の勇みあり、若衆出立に樣をかへ、撫付鬢の大髻、翡翠の大髱ふつさりと、禰宜の息子か膏藥賣か、女とよもや水淺葱の、股引しめて羽織著て、朱鞘木刀眞紅の下緒、花の口紅雪の白粉、菅笠深く脛高く、足元輕き濱千鳥、濱邊傳ひを日參の、驗松浦の住吉や、神前にこそ著きにけれ。充滿其願と祈誓をかけ、手を合はすると見えけるが、ひらりと拔いたる居合の早業、神木の松を相手取り、木刀翳し跳り上つて聲をかけ、「えいやつたう／＼えい／＼たう、えいやつたう。」と上段下段の太刀捌き、陽炎稻妻獅子奮迅、足取り手の內四寸八寸身の開き、蹈み込んで打つ入身の木刀、古木の松の片枝を、ずつぱと切つて落せしは、いま牛若とも謂ひつべし。何時の間にか栴檀女、森の陰より走り出で、「なうなう小むつ殿、毎日々々時を違へず變つた風俗、今日といふ今日跡を慕うて見付けしが、誰に習うて此の兵法、器用な事や。」と宣へば、「イヤ師匠はなけれど夫の打太刀、習はうより馴れての事、唐土の便り心元なく、お迎へ舟は參らずとも、お供して渡らんと、此の明神へ吉凶を祈り候へば、是れ見給へ、木刀にて此の松の木の眞劍の如く切れたるは、神納受の驗と申し、商船の便船時節も好く候。」と申し上ぐれば、「それは嬉しし賴もしし、片時も早く戾して給べ。」と、御悅びは淺からず。「御心安く思召せ、總じて此の住吉と申すは、船路を護りの御神にて、神功皇后と申す帝新羅退治の御時、汐干

を押取つて、咽喉にがはと突き立つる。人々、「これは。」と立ち騷げば、「ア、寄るまい〳〵。」とはつたと睨み、「なう甘輝國姓爺、母や娘の最期をも必ず歎くな悲しむな、韃靼王は面々が母の敵妻の敵と、思へば討つに力あり、氣を緩ませぬ母の慈悲、此の遺言を忘るゝな、父一官が在すれば、親には事を缺くまいぞ、母は死して諫めをなし、父は存へ教訓せば、世に不足なき大將軍、浮世の思ひ出是れまで。」と、肝のたばねを一抉り切り捌き、「サア錦祥女此の世に心殘らぬか。」「何しに心殘らん。」と、言へども殘る夫婦の名殘、親子手を取り引き寄せて、國姓爺が出立を、見上げ見下し嬉し氣に、笑顏を娑婆の形見にて、一度に息は絶えにけり。鬼を欺く國姓爺、龍虎と勇む五常軍、涙に眼は暗めども母の遺言背くまじ、妻の心を破らじと、國姓爺は甘輝を恥ぢ、甘輝はまた國姓爺に恥ぢて萎るゝ顏かくす。亡骸をさむ道の邊に、出陣の門出と生死二つを一道の、母が遺言釋迦に經、父が庭訓鬼に鐵棒、討てば勝ち攻むれば取る、末代不思議の智仁の勇士、玉ある淵は岸破れず、龍棲む池は水涸れず、斯かる勇者の出生す、國國たり君君たる、日本の麒麟是れなるわと、異國に武德を照らしけり。

第四

唐土の便り今やと松浦潟、小むつが宿の明暮は、唐の姫宮相住ゐ、邊鄰も浮名立て、唐と日本の

乳の下より膽先まで横に縫うて指し通し、朱に染みたる其の有様、母は、「是れは。」と許りにて、かつぱと伏して正體なし。和藤内も動顚し、覺悟を極めし夫さへ、そゞろに愕く許りなり。錦祥女苦しげに、「母上は日本の國の恥を思召し、殺すまいとなさるれど、我が命を惜しみて親兄弟を責がずば、唐土の國の恥と、斯うなる上は女に心引かさるゝ、人の誹りはよもあるまじ、なう甘輝殿親兄弟の味方して、力ともなつて給べ、父にもかくと告げてたべ、もう物言はせて下さるな、苦しいわいの。」とばかりにて、消え〴〵とこそなりにけれ。甘輝涙を押し隱し、「オ、出來いた〳〵、自害を無にはさせまい。」と、和藤内が前に頭を下げ、「某先祖は明朝の臣下、進んで味方申すべき身の、女の縁に迷ひしと俗難を憚りしに、我が妻只今死を以て義を勸むる上は、心清く御味方、大將軍と仰ぎ、諸侯王に準へ御名を改め、延平王國姓爺鄭成功と號し、裝束召させ奉らん。」と、武運開くる唐櫃の、ふたへの錦羅綾の袂緋の裝束、章甫の冠、花紋の沓、珊瑚琥珀の石の帶、莫耶の劍金を磨き、絹笠さつと差しかくれば、十萬餘騎の軍兵ども、幢の旗旛の旗、吹拔楯鉾弓鐵砲、鎧の袖を列ねしは、會稽山に越王の二たび出でたる如くなり。母は大聲高笑ひ、「ア、嬉しや本望や彼れを見や錦祥女、御身が命を捨てしゆゑ、親子の本望達したり、親子と思へど天下の本望、此の劍は九寸五分なれど、四百餘州を治むる自害、此の上に母がながらへては始めの詞虚言となり、再び日本の國の恥を引き越す。」と、娘の劍

思ひ遣方涙の色、紅より先の唐錦、錦祥女は其の隙に、瑠璃の鉢に紅解き入れ、「是れぞ親と子が渡らぬ錦中絶ゆる、名殘は今ぞ。」と夕波の、泉水にさら〳〵、落瀧津瀬の紅葉と、浮世の秋をせき下し、共に染めたる泡沫も、紅括る遣水の、落ちて黃河の流れの末、和藤内は巖頭に、蓑打被き座を占めて、赤白二つの川水に、心を付けて水の面、「南無三寶紅が流るゝ、扨は望みは叶はぬ、味方もせぬ甘輝めに、母は預け置かれず。」と、蹈み出す足の早瀬川、流れをとめて行く先の、堀を飛び越え塀を乘り越え、籬透垣蹈み破り、甘輝が城の奧の庭、泉水にこそ著きにけれ。「先づ母は安穩嬉しや。」と飛び上り、縛めの繩引き斷り、甘輝が前に立ちはだかり、「五常軍甘輝といふ髭唐人は和主よな、天にも地にもたつた一人の母に繩かけたは、己を己と奉つて、味方と賴まん爲なるに、もつてうすれば方圖もない。味方にならぬは此の大將が不足なか、第一女房の緣といひ其方から從ふ筈、サア日本無雙の和藤内が直に賴む返答せい。」と、柄に手をかけ突立ちたり。「オ、女房の緣といへば猶ならぬ、御邊が日本無雙なれば、我は唐土希代の甘輝、女に絆され味方する勇士にあらず、女房を去る處もなし、病死するまで便々とも待たれまい、追風次第早歸れ、但し置土產に首が置いて行きたいか。」「イヤサ日本の土產に汝が首を。」と、兩方拔かんとする處を、錦祥女聲をかけ、「ア、〳〵是れなう〳〵病死を待つまでもなし、只今流せし紅の水上を見給へ。」と、衣裳の胸を押し開けば、九寸五分の懷劍、

らず、終に一度の孝行なく、何で恩を送らうぞ、死なせて給へ母上。」と、口說き歎けば、「わつ。」と泣き「なう悲しい事いふ人や、殊に御身は娑婆と冥途に親三人、殘り二人の父母は、產み落した大恩あり、中に一人の此の母は、憐みかけず恩もなく、うたてや繼母の名は削つても削られず、今爰で死なせては、日本の繼母が三千里隔てたる、唐土の繼子を惡んで、見殺しに殺せしと、我が身の恥ばかりかは、普く口々に日本人は邪慳なりと、國の名を引き出すは、我が日本の恥ぞかし、唐を照らす日影も、日本を照らす日影も、光に二つはなけれども、日の本とは日の始め、仁義五常情あり、慈悲專らの神國に生を受けた此の母が、娘殺すを見物し、抑生きて居られうか、願はくは此の繩が日本の神々の注連繩と顯はれ、我を今絞め殺し、屍は異國に曝すとも、魂は日本に導き給へ。」と聲を上げ、道もあり情もあり、哀れも籠る口說き泣き、錦祥女は縋り付き、母の袂の諸涙、甘輝も道理に至極して、漫ろ涙に暮れけるが、稍ありて甘輝席を打つて、「ハッア是非もなし力なし、母の承引なき上は、今日より和藤內とは敵對、老母を是れに留め置き、人質と思はれんも本意ならず、輿車用意して所をたづね、送り還し參らせよ。」「イヤ送るまでもなく、此の遣水より黃河まで、好き便りには白粉流し、叶はぬ知らせは紅を流す約束にて、迎へにお出である筈、いで紅解いて流さん。」と、平常の一間に入りにけり。母は思ひにかき暮れて、思ふに違ふ世の中を、立ち歸りて夫や子に、何と語り聞かせんと、

世に飜さんと此の土に渡る、彼が討手誰ならんと、數千人の諸侯のうちより、此の甘輝を選り出され、散騎將軍の官に任じ、十萬騎の大將を給はる、和藤内を我が妻の兄弟と、今聞くまでは夢にも知らず、彼奴日本に傳へ聞く、楠とやらんが肝膽を出で、朝比奈辨慶とやらんが勇力ありとも、我又孔明が腸に分け入り、樊噲項羽が骨髓を借つて、一戰に追つて追ひ捲り、和藤内が月代首提げて來らんと廣言吐きし某が、一太刀も合はせず矢の一本も放さず、ぬく〳〵と味方せば、五常軍甘輝が日本の武勇に、聞き怖ぢする者でなし、女に絆され緣に引かれ、腰が脫けて弓矢の義を忘れしと、韃靼人の雜口にかけられんは必定、然れば子孫末孫の恥辱遁れ難し、恩愛不便の妻を害し、女の緣にひかれざる、義信の二字を額にあて、薩張と味方せん爲、ヤイ錦祥女、留むる母の詞には慈悲心籠り、殺す夫の劍の先には忠孝籠る、親の慈悲と忠孝に命を捨てよ女房。」と、理非を飾らぬ勇士の詞、「オ、聞きわけた身に適うた忠孝、親に貰うた此の體、孝行の爲捨つるは惜しいとも思はぬ。」と、母を押し退け突つと寄り、胸押し明くれば引き寄せて、見る目危き氷の劍、「なう悲しや。」と驅け隔て、押し分けんにも爲方なく、退けんとするに手は叶はず、娘の袖に喰ひ付いて、引き退くれば夫が寄る、夫の袖を啞へて引けば、娘は死なんと又立ち寄るを、口にくはへて唐猫の、塒を換ふる如くにて、母は目もくれ身も疲れ、「わつ。」と許りにどうど伏し、前後不覺に見えければ、錦祥女縋り付き、「一生に親知

び給ひてより、恃むべき主君なく、韃靼の恩賞被り、月日を送る折から望む所の御頼み、早速味方と申したきが、少し存ずる旨あれば、急にあつとも申されず、篤と思案し御返事を。」と、言はせも果てず、「ア、ウそりや御卑怯な詞が違ふ、是れ程の一大事口より出せば世間ぞや、思案の間に漏れ聞えて不覺を取り、悔んでも返らず、お恨みとは思ふまじ、なれならざれお返事を、サア只今。」と責めつくれば、「ムウ急に返答聞きたくば易い事〳〵、如何にも五常軍甘輝和藤内が味方なり。」と、いふより早く錦祥女が胸元取つて引き寄せ、劍引き拔いて咽笛に差し當つる。老母慌てて飛び蒐り、二人が中へ割つて入り、持つたる手を踏み放し、娘を脊中に押し遣り〳〵、仰向に重なり臥し大聲上げて、「是れ情なや何事ぞ、人に物を賴まれては、女房を刺し殺すが唐土の習ひか、心に染まぬ無心を聞くも、女房の緣ある故と、心腹が立つての事か、但しは狂氣か、偶〻始めて來て見たる、母親の目の前で殺さうとする無法人、日比が思ひ遣られた、味方をせずばせぬまでよ、今までと違うて親のある大事の娘、これ怖い事はない、母にしつかと取り付きや。」と、隔ての垣と身を捨てて、圍ひ歎けば錦祥女、夫の心は知らねども、母の情のあり難さ、「怪我遊ばすな。」と許りにて、共に涙に咽びけり。甘輝飛び退つて、「オ、御不審御尤も、全く某無法にあらず狂氣にも候はず、昨日韃靼王より某を召し、此の頃日本より和藤内といふ似而非者、小僕下劣の身を以て智謀軍術逞しく、韃靼王を傾け、大明の

の、しめからまれし藤葛、起居苦しき其の風情、甘輝見る目もいたはしく、「誠世の中の子といふ者のあればこそ、山川萬里を越え給ふ、其の甲斐もなき縛めは、時代の掟是非もなし、それ女房お手が痛むか氣を注けよ、優曇華の客人聊か麁畧を存ぜず、何事なりとも此の甘輝が、身に相應の事ならば、必ず心置かるゝな。」と、世に睦まじく饗せば、老母顏色うち解けて、「ォ、頼もしい忝い、其の詞を聞くからは、何しに心置くべきぞ、頼みいりたき大事、密かに語り申したし、是れへ〳〵。」と小聲になり、「なう我々此の度唐土へ渡りし事、娘ゆかしい許りでなし、去年の初冬肥前國、松浦が磯といふ處へ、大明の帝の御妹栴檀皇女、小船に召され吹き流され、御代を韃靼に奪はれし御物語聞くと齊しく、父は素より明朝の廢臣、我が子の和藤内と申す者、賤しき海士の手業ながら、唐土日本の軍書を學び、韃靼大王を滅ぼし、昔の御代に飜し、姫宮を帝位に卽けんと、先づ日本に遺し置き、親子三人此の唐土へは來たれども、淺ましや草木まで、皆韃靼に隨ひ靡き、大明の味方に心ざす者一人も候はず、和藤内が片腕の味方に頼むは甘輝殿、力を添へて下されかし、偏に頼み參らする、是れが拜む心ぞ。」と額を膝に押し下げ〳〵、只一筋の心ざし思ひ込うでぞ見えにける。甘輝大きに驚き、「ム、扠は聞き及ぶ日本の和藤内と申すは、此の錦祥女とは兄弟、鄭芝龍一官の子息候な、ム、武勇のほど唐土までも隱れなく、頼もしき思ひ立ち尤も斯うこそあるべけれ。我等も先祖は大明の臣下、帝亡

料理も念入れ、龍眼肉のお飯、お汁は家鴨の油揚、豚の濃汁、羊の濱燒、牛の蒲鉾種々にして上げても、「なう忌々しいそんな物いや〳〵、縛られて手も叶はぬ、つい握飯をしてくれ。」と御意なさるゝ。其の握飯といふ食ひ物は、何の事やらどうも合點參らず、皆打寄つて詮議致せば、日本では相撲取をむすびと申すげな、それゆゑ方々尋ねても、折しも惡うお齒に合ひそな相撲取が、切物なり。」とぞ申しける。表に轟く馬車、「御歸館。」と呼ばはつて、唐櫃先に舁き入れさせ、悠々たる絹笠も、さすが五常軍甘輝と名に負ふ其の物體、錦祥女出で迎へ、「何とて早き御退出、御前は何と候ぞや。」「さればされば、韃靼大王叡感深く過分の御加增、十萬騎の旗頭、散騎將軍の官に任ぜられ、諸侯王の冠裝束賜はり、大役仰せ付けらるゝ、家の面目是れに過ぎず。」とありければ、「それはお手柄目出たい〳〵、なう家の吉事は重なる物、日來戀しいゆかしいと申し暮せし父上、日本にて設け給ひし母兄弟、賴みたき事ありとて、門外まで來り給へども、お留守といひ、嚴しき國の掟を憚り、男子は皆返し、母上許りを留め置きしが、猶も上の聞えを畏れ、繩をかけてあれ彼の奧の亭にて、御馳走は申せども、胎内からぬ母上、繩かけし御心底、悲しさよ。」とぞ語りける。「ウム繩かけしとは好い料簡、上へ聞えて言譯あり、隨分款待せ、いざ先づ我も對面せん、案内申せ。」といふ聲の、漏れ聞えてや妻戶の內、「なう錦祥女、甘輝殿のお歸りか、こゝはあまり高上り、妾それへ。」と立ち出づる、貌はいとゞ老木の松

泣かぬが日本武士の風、大手の門の閉開に、石火矢打つは韃靼風、一つに響く石火矢の、音に聞くさへ三重遙かなり。夢も通はぬ唐土に、通へば通ふ親子の緣、恩愛の綱結び合ひ、結ぶ餘りの縛り繩、かかる例は異國にも、稀に咲き出す雪の梅、色音は同じ鶯の、聲にぞ通事入らざりし。錦祥女は孝行深く、母を奧の一間に移し、二重の褥三重の布團、山海の珍菓名酒を以て、重んじ饗す有樣は天上の榮華とも、又高手小手の縛めは、十惡五逆の科人とも、見る目悒く傷はしく、樣々にみや仕へ、誠の母といたはりし、心の內こそ殊勝なれ。腰元の侍女共寄り集まり「何と日本の女子見てか、目も鼻も變らぬが、可笑しい髮の結ひ樣、變つた衣裳の縫ひ樣、若い女子もあれであらう、裾も褄もほらほらほらと、ぱつと風が吹いたら太股まで見えさうな、ア、恥かしい事ぢやあるまいか。」「いや〱とても女子に生まれるなら、此方や日本の女子になりたい、何故といや、日本は大きに和ぐ大和國といふげな、なんと女子の爲には、大きに和かな好もしい國ぢやないかいの。」「ホウ有り難い國ぢやの。」と、眼を細めてぞ頷きける。錦祥女立ち出で「是れ〱面白さうに何いふぞ、彼方は自らとはなさぬ中の母上なれば、孝行といひ義理といひ、誠の母より重けれども、國の掟爲方なく、縛り搦めるおいとしさ、韃靼王へ漏れ聞え、連合に咎めあらうかと、宥免もなり難く、難儀といふは我が身一つ、何れも賴む。食物も違ふとや、お口に合ふ物伺うて、進ぜてくれよ。」と宣へば、「いや申し如才もなうお

芝龍一官が女房身が母、姫の爲にも母同然、犬猫を飼ふ樣に繩付けて通さんとは、日本人はどんな事聞いて居ぬ、小むづかしい城内へ入らいでも大事ない、サア御座れ。」と引き立つる。母振り放し、「それそれ今言ひしを忘れしか、大事を人に賴む身は、幾度か樣々の憂目もあり恥もある、繩は愚か足枷手枷に掛つても、願ひさへ叶はば、瓦に金を換ふるが如し。小國なれども日本は、男も女も義は捨てず、繩かけ給へ一官殿。」と、恥ぢしめられて力なく、用心の腰繩取り出し、高手小手に縛り上げ、親子が顏を見合はせて、笑顏を作る日本の、人の育ちぞ健氣なる。錦祥女も堪へかぬる歎きの色を押包み、「何事も時世にて、國の掟は是非もなし、母御は自らが預る上は氣遣ひなし、何事か存ぜねども、御願ひの一通り、お物語承り、夫甘輝に言ひ聞かせ、何卒かなへ參らせん。扨此の城の廻りにはつたる堀の水上は、自らが化粧殿の庭より落つる遣水の、末は黃河の川水と、流れ入る水筋なり。夫の甘輝が聞き入れて、御願ひ成就せば、白粉解いて流すべし、川水白く流るゝは、目出度き印と思召し、勇んで城へ入り給へ。又御願ひ叶はずば、紅をといて流すべし、川水赤く流るゝは、叶はぬ左右と思召し、母御前を受取りに門外まで出で給へ。善惡二つは白妙と唐紅の川水に、心を付けて御覽ぜよ、さらば〳〵。」と夕月に、門の戸さつと押し開き、伴ふ母は生死の境、菩提門を引きかへて、是れは浮世の無明門、貫の木丁ど下す音。錦祥女は目も暮れて、弱きは唐土女の風、和藤内も一官も、

歎き暮し泣きあかし、二十年の夜晝は、我が身さへ辛かりし、能う生きて居て下さつて、父を拜む有り難や。」と、聲も惜しまぬ嬉し泣き。一官は咽せ返り、樓門に縋り付き、見上ぐれば見下して、心餘りて詞なく、盡きぬ涙ぞあはれなる。武勇に逸る和藤内、母諸共に伏し沈めば、心なき兵も零す涙に鐵砲の、火縄も濕るばかりなり。稍あつて一官「我々是れへ來る事、聟の甘輝を密かに賴み度き一大事、先づ〳〵御身に語るべし、門開かせて城内へ入れてたべ。」「なう仰せなくとも是れへと申す筈なれども、此の國未だ軍半ば、韃靼王の掟にて、親類縁者たりとも、他國者は城内へ堅く禁制との掟なり、されども是れは格別こりや兵共、如何せん。」とありければ、料簡もなき唐人ども、「否々思ひも寄らぬ事、ならぬ〳〵、*歸去來々々々、びんくはんたさつ、ぶおん〳〵。」と又鐵砲を差し向へば、人々案に相違して呆れ果てて見えけるが、母進み出で「尤も〳〵、大王より掟とあれば力なしさりながら、年寄つた此の母に何の用心入るべきぞ、彼の姫に只一言物語する許り、妾一人通して給べ、誠浮世の情ぞ。」と、手を合はせても聽き入れず、「いや〳〵女とて宥免せよとの仰せはなし、然らば我々料簡して、城内にある中は、縄をかけて縛り置き縄付にして通せば、韃靼王へ聞えても主君の言譯、我等が身晴れ急いで縄かゝれよ、夫れが否なら、歸去來々々々びんくはんたさつ、ぶおん〳〵。」と睨めつくる。和藤内眼をくわつと怒らし、「ヤイ毛唐人、汝らが耳は何處に付いて何と聞く、忝くも鄭

る處、涙を押へて、「一々覺えある事ながら、證據なくては胡亂なり、自らが父といふ證據あらば聞かまほし。」と、いふより兵口々に、「證據々々、證據を出せ〳〵。」「ハテ親子といふより別にかはつた證據もなし。」「そりや曲者よ。」と鐵砲の筒先、一度にはらりと突掛くる。和藤内掛け隔て、「無用の鐵砲、ほんともいはせば撫で斬りにしてくれん。」「イヤしやつめ共に遁すな。」と、火蓋を切つて取り圍み、「證據々々。」と責めかけて、既に危く見えけるが、一官兩手を上げて、「ア、是れ〳〵證據は其方にある筈、一歳唐土をたち退く時、成人の後形見にせよと、我が形を繪に寫し、乳母に預け置きつるが、老の姿は變るとも、俤殘る繪に合はせ、疑ひを晴れ給へなう。」「其の詞がはや證據。」と、肌に放さぬ姿繪を高欄に押開き、柄付の鏡取り出し、月に映ろふ父の顏、鏡の面に近々と、寫し取つて引比べ引合はせて、能く〳〵見れば繪に留めしは古の、顏も艶ある翠の鬢、鏡は今の老衰れ、頭の雪と變れども、變らで殘る面影の、目元口元其のまゝに、我が影にも髣髴たり。父方讓りの額の黑子、親子の印疑ひなし。「扨は誠の父上か、なう懷かしや戀しや、母は冥土の苔の下、日本とやらんに父上ありと許りにて、便りを聞かん知邊もなく、東の果てと聞くからに、明くれば朝日を父ぞと拜み、暮るれば世界の圖を披き、是れは唐土是れは日本、父はこゝに坐すよと、繪圖では近いやうなれど、三千餘里の彼方とや、此の世の對面思ひ絶え、若しや冥土で逢ふ事もと、死なぬ先から來世を待ち、

我さへも面を拜まぬ御臺所、對面せんとは不敵者、殊に日本人とや、油斷するな。」と高提灯、銅羅鐃鉢をうち立て〳〵、塀の上には數多の兵、鐵砲の筒先揃へ、「石火矢放して打ちみしやけ、火繩よ玉よ。」と犇きける。奥へかくとや聞えけん、妻の女房樓門に驅け上り、「ァ、騷ぐな〳〵、聞き屆けて自らが、それよと聲をかくるまで、鐵砲放すな粗忽すな。ナウ〳〵門外の人々、五常軍甘輝が妻錦祥女とは我が事、天下悉く韃靼の大王に靡き、世に從ふ我が夫も大王の幕下に屬し、此の城を預り守り嚴しき折も折、夫の留守に女房に逢はんとは心得ず、さりながら日本とあれば懷かしし、身の上を語られよ、聞かまほしや。」といふ中にも、若しや我が親か、何故尋ね給ふぞと、心許なさ危なさに、懷かしさも先だちて、「つはものども粗相すな、むざと鐵砲放すな。」と、心遣ひぞ道理なる。一官も始めて見る娘の顏も朧月、涙に曇る聲を上げ、「粗忽の申し事ながら、御身の父は大明の鄭芝龍、母は當座に空しくなり、父は逆鱗被り日本へ身退く、其の時は二歳にて、親子名殘の憂き別れ、辨へなくとも乳母が噂、物語にも聞きつらん、我こそ父の鄭芝龍、日本肥前國平戸の浦に年を經て、今の名は老一官、日本で設けし弟は此の男、これなるは今の母、私かに語り賴みたき事ありて、なり果てて此の姿恥を包まず來りしぞ、門を開かせたべかし。」と、しみ〴〵口說く詞の末、思ひ當りて錦祥女、扠は父かと飛び下りて、縋り付きたや顏見たや、心は千々に亂るれど、有繫一城の主甘輝が妻、下々の見

に、頼まれぬ心底、我竹林の虎狩に從へし島夷を、軍兵の元手にして切り靡ける程ならば、五萬や十萬勢の付くは隙入らず、何の人頼み此の門蹴破り、不孝の姉が首捻ぢ切り、壻の甘輝と一勝負。」と、躍り出づれば母縋り付き押し止め、「其の娘御の心入は知らねども、夫に連れて世の中の、儘にならぬは女の習ひ、父とは親子御身とは胤一つ、他人は自ら一人にて、海山千里を隔てても、繼母といふ名は脫れず、娘の心に親兄弟戀ひ慕ふまいものでもなし。其處へ切り込んで、日本の繼母が妬みなりといはれんは、我が恥ばかりか日本の國の恥、御身不肖の身を以て、韃靼の大敵を攻め破り、大明の御代に囘さんと、大義を思ひ立つからは、私の恥を捨て我が身の無念を堪忍し、人を懷け從へ、一人の雜兵も味方に招き入るこそ、軍法のもとと聞く、況して壻の甘輝は一城の主、一方の大將、是れを味方に頼む事、大方にてなるべきか、心をさめ案內せよ。」と制すれば、和藤內門外に大音上げ、「五常軍甘輝公に直談申し度き事あり、開門々々。」と敲きしは、城中響く許りなり。當番の兵士聲々に、「主君甘輝公は大王の召に依つて、昨日より出仕あり、何時御歸りも計られず、御留守といひ夜中といひ、何者なれば直談とは推參至極、言ふ事あらば夫れから申せ、御歸りの節披露して取らすべし。」とぞ呼ばはりける。一官小聲になり、「否人傳に申す事ならず、甘輝公の留守ならば、御內室の女性へ直に逢うて申すべし、日本より渡りし者と、申せば合點のある筈。」と、いひも果てぬに城中騷ぎ、「我

第三

仁ある君も用なき臣は養ふ事能はず、慈ある父も益なき子は愛する事能はず。大和唐土樣々に道の巷は別るれど、迷はで急ぐ誠の道、赤壁山の麓にて、親子三人廻りあひ、我が壻とばかり聞き及ぶ、五常軍甘輝が館城、獅子が城にぞ著きにける。聞きしに優る要害は、未だ冴え返る春の夜の、霜に閃く軒の瓦、鯱鋒天に鰭振りて、石壘高く築き上げたり。堀の水藍に似て繩を引くが如く、末は黃河に流れ入り、樓門堅く鎖せり。城内には夜廻りの銅羅の聲喧く、矢狹間に弩隙間なく、所々に石火矢を仕掛け置き、すはと言はば打ち放さん其の勢ひ、和國に目馴れぬ要害なり。一官案に相違し、「亂世といひ、斯かる城門事々しく、夜中にたゝき聞きも馴れぬ舅が、日本より來りし抔いふとも、誠と思ひ取次ぐ者もあるまじ、假令娘が聞きたりとも、二歲で別れ日本へ渡りし父と、如何なる證據を語るとも、容易く城中へ入れんこと難かるべし、如何はせん。」とぞ囁きける。和藤内聞きもあへず、「今更驚く事ならず、一身の外味方なしとは、日本を出づる時より覺悟の前、つひに見ぬ舅よ壻よと親しみだてして、不覺を取らんより、賴まれうか賴まれぬか一口商ひ、否といはば卽座の敵、二歲で別れし娘なれば、我等とも行き合ひ姉、彼奴孝行の心あらば、日本の風も懷かしく、文の便りもあるべき

事なり、先帝の妹宮栴檀皇女に廻りあひ、三世の恩を報ぜん爲、父が故鄕へ立ち歸り、國の亂れを治むるなり。サア命惜しくば味方につけ、いやといへば虎の餌食、否か應か。」と詰めかくる。「ナウなんの否で御座りましよ、韃靼王に從ふも李蹈天に從ふも命が惜しさ、向後お前の御家來共、お情賴み奉る。」と、地に鼻付けて畏まる。「オ、出來したノヽさりながら、我が家來になるからは、日本流に月代剃つて元服させ、名も改めて召使はん。」と、指添の小刀はづさし、是れも當座の早剃刀、母も手々に受取つて、ならぶ頭の鉢の水、揉むや揉まずに無理無體、片端剃るやらこぼつやら、絲鬢厚鬢剃刀次第、瞬く間に剃り仕舞ひ、二櫛半のはらけ髮、頭は日本髭は韃靼身は唐人、互に顏を見合はせて、頭冷つく風引いて、嚔々村さめと、淚を流すぞ道理なる。親子どつと打笑ひ、「揃ひも揃うた供廻り、名も日本に改めて、何左衞門何兵衞、太郎次郎十郎まで、面々が國所、頭字に名乘り、二行に立つてほつたてろ。」「承り候。」と、お先手の手振の衆、＊ちやぐちう左衞門、東蒲塞右衞門、呂宋兵衞、東京兵衞、暹羅太郎占城次郎、＊ちやるなん四郎はるなん五郎、＊うんすん六郎すん吉九郎、＊もうる左衞門じやが太郎兵衞、＊さんとめ八郎英吉利兵衞、今參りのお供先、跡に引馬虎斑の駒、母を助けて孝行の、名を取る口取る國を取る、譽れは異國本朝に、蹈み跨げたる鞍鐙、虎の背中に打乘つて、威勢を千里に顯はせり。

ざいたり、身が生國は大日本、風來とは舌長し、左程ほしがる虎ならば、主君と頼む李蹈天とやら石花菜とやら、爰へ突き出し詫事させい、直に逢うて用も有る、さもない内はいかな事ならぬ〳〵。」と睨め付くる。「ヤア物な言はせそ討ち取れ。」と、一度に劍をはらりと拔く。心得たりと守を虎の首にかけ、母の傍にひつ据うれば、繫ぎし如くに働かず。「オヽ心易し。」と太刀指し翳し、羣る中へ割つて入り、八方無盡に割り立て〳〵撫で捲くる。勢子の大將安大人、官人引具し立ち歸り、「おのれ老耄餘さじ。」と一文字に切り掛る。猶も神明擁護の驗、神力虎に加はつて、むつくと起きて身慄ひし、敵に向ひ齒を鳴らし猛り唸りて飛び蒐る。這は叶はじと安大人、勢子の者が差いたる劍、かり鉾數槍手に當るを幸ひに投げ付け〳〵三重打ち懸くる。虎は神力自在を得、劍を宙に引喰はへ〳〵、岩に打ち當て微塵になす。刃の光玉散る霰、冰を碎くに異ならず。打物つくれば官人共、色めき立つて逃げ惑ふ。後より和藤内、「どつこい遣らぬ。」と顯はれ出で、安大人が素首を摑んで指し上げ、くる〳〵と振り廻し、「えいやつ。」と打ち付くれば、岩に熟柹を打つ如く、五體ひしげて失せにけり。此の勢ひに官人原跡へ戻れば惡虎の口、先へ行けば和藤内二王立に突立ちたり。「ア、申し御堪忍、御免々々。」と手を合はせ、土に喰ひ付き泣き居たり。和藤内虎の脊を撫でて、「汝らが小國とて侮る日本人、虎さへ怖がる日本の手竝を覺えたか、我こそ音に聞えたる鄭芝龍老一官が倅、九州平戸に成長せし和藤内とは我が

闘うて立つたるは、西天の獅子王も恐れつべうぞ見えてげり。案に違はず吹く風と、共に荒れたる猛虎の形、藤根に頬を摩り付け〳〵、岩角に爪研ぎたて、二人を目がけ嗥み蒐るを事ともせず、弓手に撲り馬手に受け、捩つて懸くれば身を替し、撓めば閃りと乘り移り、上になり下になり、命競べ根競べ、聲を力に「えい〳〵〳〵。」虎の怒毛怒聲、山も崩るゝ三重如くなり。和藤内も大童虎も半分毛を挘られ、兩方共に息疲れ、石上に突立てば、虎も岩間に小首を投げ、大息吐いたる其の響、吹鞴吹くが如くなり。母藪陰より走り出で、「ヤア〳〵和藤内、神國に生まれて神より受けし身體髪膚、畜類に出で合ひ力立して怪我するな、日本の地は離るゝとも、神は我が身に五十鈴川、大神宮の御祓納受などかなからんや。」と、肌の守を渡さるれば、「實に尤も。」と押し戴き、虎に差し向け差し上ぐれば、神國神祕の其の不思議、猛りに猛る勢ひも、忽ち尾を伏せ耳を垂れ、じりゝ〳〵と四足を縮め、怖れ戰き岩洞に隱れ入る。尾筒を摑んで跳ね返し、うち伏せ〳〵ひるむ處を乘り懸り、足下に確と蹈まへしは、天斑駒素盞嗚尊の神力天照神の威德ぞ有り難き。かかる處に勢子の者、羣り來る其の中に、大將と覺しき者大音上げ、「ヤア〳〵汝は何國の風來人、我が高名を妨ぐる、其の虎は忝くも主君右軍將李蹈天より、韃靼王へ獻上の爲狩り出したる虎なるぞ、早々渡せ、異議に及ばば打殺さん、*しやぐわしやぐわん。」と喚きける。李蹈天と聞くよりも願ふ處と笑壺に入り、「ヤア餓鬼も人數、殊勝しい事は

坡が配所ぞや、それよりは甘輝が在城、獅子が城へは程もなし、其の赤壁にて待ち揃へ、萬事を諜し合はすべし。」と、方角とても白雲の、日影を心覺えにて、東西へこそ三重別れけれ。敎へに任せ和藤内、人家を求め忍ばんと、甲斐々々しく母を負ひ、方便も知らぬ岩巖石、古木の根ざし瀧津波、飛び越え跳ね越え、飛鳥の如く急げども、末果てしなき大明國、人里絶えて廣々たる、千里が竹に迷ひ入る。和藤内ほうどくわを拔かし、「なう母者人、此の脚骨に覺えあり、もう四五十里も來ませうが、人にも猿にも逢ふ事か、行けば行く程藪の中、ウム合點たり、方角知らぬ日本人、唐の狐が嬲るよな、魅さば魅せ宿なし旅の行き付き次第、小豆の飯の相伴。」と、根笹大竹押し分け踏み分け、猶奥深く行く先に、怪しや數萬の人聲攻鼓攻太鼓、喇叭ちやるめら高音を反らし、ひやう〳〵とこそ聞えけれ。「スハ我々を見咎めて、敵の取り卷く攻太鼓か、又は狐の爲す業か。」と、茫然たる其の折節、空凄まじく風起り、砂を穿ちどう〳〵〳〵、竹葉颯と卷き立て〳〵、吹き折る竹は劒の如く、凄まじなんども愚かなり。和藤内些とも臆せず、「讀めたり〳〵、扠は異國の虎狩な、彼の鉦太鼓は勢子の者、爰は聞ゆる千里が原、虎嘯けば風起る、猛獸の所爲と覺えたり。二十四孝の揚香は、孝行の德によつて、自然と脫れし惡虎の難、其の孝行には劣るとも、忠義に勇む我が勇力、唐へ渡つて力始め、神力ますます日本力、刃で向ふは大人氣なし、虎は愚か象でも鬼でも一挫ぎ。」と、尻引つからげ身繕ひ、母を

り、互に呼ばれ招かれて、姿を隠す汐曇り、聲を隔つる沖津波、沖の鴎磯千鳥泣き焦れてぞ　三重

千里が竹

江戸別れ行く、舟路の末も不知火の、筑紫は雲に埋めども、跡に擁護の神風や、千波萬波を押し切つて、時も違へず親子の船、唐土の地にも著きにけり。鄭芝龍一官は、故郷へ歸る唐錦装束引替へ妻子に向ひ、「我が本國と言ひながら時移り代變り、天下悉く李蹈天が引入れにて、韃靼夷の奴となり、昔の朋友一族とて、誰を尋ねん樣もなく、司馬將軍吳三桂が生死の所在も知れざれば、何を以て義兵の旗を揚げ、何國を一城に楯籠るべき所もなし。然るに某去る天啓五年、此の國を立退き日本へ渡る時、二歳になりし娘の子を、乳母が袖に捨て置きしが、其の子が母は產み落して當座に死す、かくいふ父は八重の汐路の中絶えて、何時父母も知らぬ身が、育てば育つ草木の、雨露の惠みに長ずる如く天地の父母の助けにや、成人して今五常軍甘輝といふ大名、一城の主の妻と成る由、商人の便りに聞き及ぶ。頼む方は是れ許り、親を慕ふ心あつて娘さへ承引せば、聟の甘輝も易々と頼まるべし、是れより路の程百八十里、打連れては人もあやしめん、我一人道を變へ和藤内は母を具し、日本の獵船の吹き流されしと、頓智を以て人家に憩ひ追ひ付くべし。是れより先は音に聞ゆる千里が竹とて、虎の栖む大藪あり、江戸それを過ぐれば*潯陽の江、是れ猩々の住む所、風景聳えし高山は赤壁とて、昔東

結構者も事による、此の海底に身を沈め、瞋恚は嫉妬の大蛇となつて、本の契りは今日の仇今に思ひ知らせん。」と、石を袂に拾ひ入れ、巖の肩に攀ぢ上れば、驅け上つて和藤内抱き留めて、「ヤイこりや粗相すな心底見付けた、軍なかばの大明國、事太平に治まるまで、姫宮を汝に預け、日本に留め置かんと思へども、筋なき女の心を窺ひ、態と情なく見せたるぞ。是れ四百餘州と釣替の姫宮を、聢かと預け置くからは、男の心變らぬ證據、姫宮に仕へ奉るは、舅に孝行夫に仕ふる百倍ぞや、命にかけて賴み入る、國治まつて迎への御船のお供せよ。」と、宥むれば聞き入れて、「此方には氣遣ひせず、隨分無事で御座れや。」と、いへども弱る女心、「せめて一夜の覺悟もせず夢見た樣な別れや。」と夫の袖に縋り付き、「わつ。」と許りに泣き叫ぶ、心の内ぞ遣瀨なき。和藤内も胸塞がり、至極の思ひに目も暗み、共に心は亂るれど、「斯くては果てじいざさらば。」「さらば〱。」の暇乞、栴檀女も涙ながら、「追付迎への輿を待つ、其の時伴ひ歸るべし、必ず早う。」と宣へば、畏まつて和藤内泣く〱船を押し出す。又纜に取り付いて、「言ひ殘せし事のあり、暫くなう。」と引き留むる。「エ、聞分なし。」と引き切つて、船をふかみに漕ぎ出せば、爲方波に身を浸し、只手を擧げて、「舟よなう、舟よ。」と呼べど出船の、かひなき巖に驅け上り、足を爪立て延び上り、見送る影も遠ざかる。唐土の＊望夫山我が朝の＊領巾麾山、今の我が身の我が思ひ、石ともなれ山ともなれ、動かじ去らじと搔き口說き、涙かぎり聲かぎ

べきが、大勢は目に立つて所々の渡海の番所、國の咎め恐れあり、夫婦密かに藤津の浦より出船すべし、お事は是れより乘り出し、便りよき小島に姫宮を預け置き、船路を變へて追ひ付けよ、親子が忠心正直の、頭に宿る神風は、船中何の氣遣ひなし、出合ふ所は唐土に、隱れなき、千里が竹にて相待つべし、急げ〳〵。」と姫宮にお暇申し、夫婦は遙かに別れ行く。和藤内姫宮の御手を引き、元の唐船に移し乘せ參らせ、押し出さんとする處に、女房息を切つて走り付き、船の纜しつかと取り、「ムウ内には親父樣母樣も皆お留守、異な事と思ひしに、道理にぞ是れぢやもの、親子とつくと談合しめ、親御の國からお内儀呼び、此の小むつを置き去りに、親子夫婦四人連、唐へ身代引く氣ぢやの、餘り酷い情ない、何の見落仕落がある、唐高麗は愚かの事、天竺雲の果てまでも、共に連れんと言ひ交した二人の中、仲人もない挨拶ない、二人が胸と胸とに、起請も誓紙も納めてある、何ぼうあかれた中なりとも、今までの情に、せめて同じ船に乘せ、五里も十里も沖中の波に沈めて、鱶や鮫の餌になりとも、夫の手から殺して下され藤内殿。」と、舳板を叩き泣きくどき、放さん氣色はなかりけり。「エ、大事の門出不吉の吠面、其處立ち退け目に物見せん。」と櫂振り上ぐれば、姫宮慌て縋りつき、留め給ふを押し除け、櫂も折れよと舷端たゝき、威しに打つを身に受けて、「打たれて死ねば本望。」と、濱邊にどうど臥し轉び、聲も惜しまず歎きしが、「エ、是れでも死なれぬな、ア、よし〳〵、今は是れまで

れなる。母も袂を絞りかね、「實に誠斯樣の事を承らん印にや、今朝曉夫婦變らぬ夢の告、軍は二千里を出でて西に利ありといふ事を、まざ〱と見て候、ヤア和藤内、此の夢を考へ君御出世の忠勤を勵む可し、如何に〱。」とありければ、和藤内謹んで、「只今某此の濱にて、鴫の鳥と蛤稀代の業を見受けしより、軍法のおんくはう*を悟り開いて候。千里を出でて西に利ありとは、大明は我が國より西に當つて千里の波濤、軍法の法の字は三水に去と書く、三水は水なり、水を去るとは此の出汐の水にまかせ、早く日本の地を去るべしとの神の告、我等が本卦師の卦に當つて、師は軍の義なり、坤上坎下の卦體、一陽を以て衆陰をすぶるといつぱ、我が一身を以て數萬騎の軍兵を從へ有つ大將、今三水のさす潮に、早く日本の地を去つて、南京北京に押し渡り、浮世に存へあるならば、呉三桂と軍慮を合はせ、李蹈天が賊徒を滅ぼし、軍勢催し韃靼へ逆寄せに押し寄せ、韃靼頭の芥子坊主、捻ぢ首貫き追ひ伏せ切り伏せ、御代長久の凱歌を上げん事、和藤内が心魂に徹する處、天の時は地の利に如かず、地の利は人の和にしかず、吉凶は人によつて日によらず、此の儘直に御出船、道すがら島々の夷を語らひ、案の中なる軍せん、御出陣。」と勇みしは、三韓退治の神功皇后、艫舳に立ちしあ*らみさきを、今見る如き勢ひなり。父は大きに感心し、「オヽ、潔し賴もしし、誠や一粒の花の種は地中に朽ちず、終に千林の梢に上るといふ本文、實に一官が子なるぞや、我々夫婦も同船にて御供申す

兎角親父と談合、おぬしは内へ歸つて早々是れへ同道せい、人の見ぬ中早う〳〵。」といひければ、小むつもはつと手を打つて、「扨も〳〵おいとしや、同じ日本の内さへも、王位高貴の姫君は、荒い風にもあてぬと聞く、況してや是れは見ぬ唐土の、王胤の淺ましき御姿や、所も多きに爰へお船の寄る事も主從の御緣深きゆゑ、追付親父樣呼うで來ませう、ア、おいとしのとらやあや、きんにやう〳〵。」と涙にくれ、家路にこそは歸りけれ。斯くとは知らず一官夫婦、不思議の瑞夢蒙りしと、當國松浦の住吉に詣で歸るさの濱傳ひ、「なう〳〵。」と聲をかけて招き寄せ、「栴檀皇女亂國を遁れ、御船是れへ流れよる、痛はしき有樣。」と聞きも敢へず一官夫婦、「あつ。」と頭を地に付けて、「御聞き及びも候はん、某は古の鄭芝龍と申す者、只今の妻や子は日本の者にて候へども、舊恩を報ぜずんば、忠臣の道立つべからず、某こそ年寄つたれ、此の倅兵事軍術を嗜み、御覽の如く骨太に生まれ付き、大膽不敵の剛力者、いま一度大明の御代に飜し、冥途にまします先帝の宸襟を安んじ奉らん、御心安く思召せ。」と、世に賴もしく申し上ぐれば、皇女御涙にくれ給ひ、「扨は聞き及びたる鄭芝龍とは御身よの、李蹈天が惡逆韃靼國と心を合はせ、兄帝を失ひ國を奪ひ、妾も既に害せられんとしたりしを、吳三桂夫婦の臣が介抱にて、今日の今まで惜しからぬ露の命のつれなさを、賴む。」と許り宣ひて、又さめ〴〵と泣き給ひ、互に通ずる詞の末、緣につるれば唐のもの、悔の八千度繰り返す、昔語ぞ哀

天を見る様で、勿體なうて氣が張つて、寢られはせぬ。」とぞ笑ひける。其の隙に上﨟濱邊に下りて夫婦を招き、「日本人〳〵、*なむきやらちよんのふとらやあ〳〵。」とありければ、小むつふつと笑ひ出し、「ありや何といふお經ぢや。」と、腹を抱へてをかしがる。「ヤイ〳〵笑ふな、あれは日本人爰へおぢや、賴みたいといふこと。」と、押し除けて立ち寄れば、上﨟涙にくれながら、「大明ちんしんにようろ、君けんくるめいたかりんかんきう、さいもうすがすんへいするともこんたかりんとんな、ありしてけんさんはいろ、とらやあ〳〵。」と許りにて、又潸然と泣き給へば、小むつは濱邊に轉りと臥し、腹筋捻つて堪へかぬる。和藤内は常々父が詞の唐音覺え、はつと手を突き頭を下げ、「うす〳〵うさすはもう、さきがちんぶりかくさんきんないろ、きんにやう〳〵。」と手を打つて、互にしみ〴〵手を取り組み、悲歎の涙睦まじし。小むつはくわつと急き上げ胸ぐら取つて、「是れ男唐人詞聞きたうない、如何に淫奔すればとて、何時の便宜に唐三界、餘りな稼ぎぢや、やい其處なとらやあや、此方の大事の男を、能うも〳〵きんにやう〳〵にしたなあ、日本の男の鹽梅は、吸うて見る事もなるまい、此の鹽梅喰うて見よ。」と備中鍬振り上ぐれば、和藤内ひつたくり、「ヤイ目を開いて悋氣せい、是れこそ日比語りし父一官の古の主君、大明の帝の御妹栴檀皇女、國の亂にて吹き流され給ふとの御物語、見捨てがたなくいたはしし、直に我が家へお供せば、莊屋の斷り代官所の詮議、何の彼のと喧しし、

の男子唐土に押し渡り、大明韃靼を平均し、異國本朝に名を揚げし、延平王國姓爺は、此の壯者の事なりけり。小むつ遠目に、「なう〱もう潮がさいて來る、何をきよろりとしてぞいの。」と、走り寄つて、「是れはさて、鴫と蛤と口吸ふか、女夫といふこと今知つた、如何やら犬の樣で見ともない、どりや放して取らせう。」と、笄拔いて口押し割れば、鴫も悅び蘆邊を指して、滿ち來る潮に蛤の、則ち隱れ沈みけり。

もろこしぶね

「ハア時雨れさうないざ歸らう。」と、見遣る洲崎に楫を絕え、搖られ寄るは珍らしい作りな船、「鯨舟でもなし、唐の茶船か何ぢや知らぬ。」と、船底見れば唐土人と覺しくて、二八餘りの上臈の、芙蓉の顏柳の眉袖は淚の汐風に、化粧も剝げて面瘦せて、哀れにも美しく雨に萎れし初花に、目鼻を付けし如くなり。小睦小聲になり、「ありや繪に書いてある唐の后、淫奔して流された物ぢやわいの。」「アアさうぢや〱好い推量、おれは惡う合點して、楊貴妃の幽靈かと思うて怖かつた、何でも好い女房ぢやないかいな。」「ムウ嫌らし、唐の女房が目に付くか、親父樣が始めの樣に唐にござつて、此方もあつちで生まれたら、彼の樣な女房抱いて寢さしやらうが、日本に生まれた因果に、わしが樣な女房持つて口惜しからうの。」「ハテひよんな事許り、なんぼう美しうても唐の女房の衣裳付頭付、辨財

上り、ばつと立つてはころりと落ち、鴫の羽掻百羽掻、毛を逆立てゝぞ爭ひける。和藤内つく〴〵見て、備中鍬がらりと捨て、「アッァ面白し、雪折竹に本來の面目を悟り、肱を切つて祖師西來意の輪を開きしも、尤もかな、ことわりかな、わが父が敎へによつて唐土の兵書を學び、本朝古來名將の、合戰勝負の道理を考へ、軍法に心を委ねしに、今鴫蛤の爭ひによつて、軍法の奧義一時に悟り開けたり。蛤は貝の堅きを賴んで、鴫の來るを知らず、鴫は嘴の鋭きに誇つて、蛤の口を閉づるを知らず、貝は放さじ、鴫は離れんと、前に氣を張つて後を顧みるに隙なし、こゝに望んで我手も濡らさず、二つを一度に引摑むにいと易く、蛤貝の堅きも詮なく、鴫の嘴の尖も終に其の德なかるべし、是れぞ兩雄を鬪はしめて、其の虛を討つといふ軍法の祕密、唐土には秦の始皇、六國を呑んだる連衡の謀。本朝の太平記を見るに、後醍醐の帝天下に王として、蛤の大口開きし政取締なく、相模入道といふ鴫鎌倉に羽拍きし、奢りの嘴鋭く、吉野千早に潮を吹かせ申せしに、楠正成新田義貞二つの貝に嘴を閉ぢ攻められ、挘り取つたる其の虛に乘つてうつせ貝、蛤共に摑みしは、逸物の高氏將軍、武畧に長ぜし處なり。誠や父一官の生國は、大明韃靼鴫蛤の國爭ひ、いま合戰最中と傳へ聞く、あはれ唐土に渡り、此の理を以て彼の理を推し、攻め戰ふ程ならば、大明韃靼兩國を一呑みにせんものを。」と、眼も放さず工夫を凝らし、思ひ初めたる武士の、一念の末ぞ逞しき。理かな此

どつて、和藤内三官と名乘り、二十餘年の春も立ち、秋も過ぎ行く十月の、小六月とて溫かや、備中鍬に魚籠提げ、身の活計と夕凪に、夫婦連立ち出でにけり。見渡せば沙頭に印を刻む鷗、沖洲にすだく浦千鳥。汐の干潟を鋤き返し、蛤蹈んでいろ〳〵の、かいどり小褄しよぼ〳〵濡れて、拾ひし貝は何々ぞ。寄生蟲、小螺子、淺蜊貝、汐吹き上げの簾貝、ちらと見染めし姫貝に、一筆書いて送りたひらぎ、口開いてほや〳〵笑ふ赤貝に、心よせ貝、ア、いたら貝、君は酢貝と、吸ひ付けど、我は鮑の片おもひ、憎やそもじの螂螺に、喰はせたいぞや榮螺貝、梅の花貝櫻貝、寢もせで一人赤螺の、誰をまてとや、人の海松食忘貝、我が二人寢の牀臥は、身に蜆貝祝貝、門出好しの螺貝は、悅びの貝とぞ取りにける。中に一つの大蛤、日陰に口を打開き、取る人ありとも白泡の、汐を吹いて盛り上げしは、實にや蛤能く氣を吐いて樓臺を爲すといひしも、かくやと見とれ居る處に、磯の藻屑に飛び渡り、あさる羽音おもしろく、下り居る鴫のきつと見付け、嘴怒らし只一喙きと狙ひ寄る。「ヤアいはれぬ鴫殿、看經もする身で、是れが眞の殺生かい。蛤も蛤口をくわつと破戒無慙。」飛び付いてかち〳〵〳〵、喙く處を貝合に、しつかと喰ひ締め動かせず。鴫は俄に興覺め顏、引きつしやくつつ羽拍きし、頭を振つて岩根に寄せ、打碎かんず鳥の智慧、蛤は砂地の得物、汐の溜りへ引き込まんと、尻下りに引き入る丶。羽ぶしを張つてばつと立ち、一丈許り上れども、吊られ落ちては又立ち

上は生き延びても我が身一つ、死んでも誰を友千鳥、生死の海は渡れども、夫の行方子の行方、君が行方は覺束なみの、浮世の海を越えかねし、渡りかねしと言はば言へ、此の一心のはやて船、仁義の艪櫂武勇の楫は、折れても折れぬ沖津波、寄せ來る鬨の聲かとて、劒に縋つてたじ〱、よろよろよろぼひよる方の、磯山颪松の風、亂れし髮を掻き上げて、あたりを睨んで立つたりし、和漢女の手本紙筆にも寫し傳へけり。

第二

はまづたひ

*緜蠻たる黄鳥丘隅にとゞまる、人として止まる所にとゞまらずんば、鳥に如かざるべしとかや。爰に大日本肥前國、松浦の郡平戸の鄕に、釣垂れ網引き世を渡る、和藤内三官といふ壯者あり。妻も同じ海士の業、藻に栖む蟲の我からと、仲人なしの手枕に、括り枕と締め合ひし、小睦といへる名に愛でて、世を睦まじく暮しけり。抑この和藤内が父は、元日本の者ならず、大明國の忠臣、大師大爺鄭芝龍といつし者なりしが、暗き帝を諫めかね、自ら長沙の罪を避け、此の日の本に筑紫潟、老一官と名を改め、浦人に契りをこめ此の男子を設けし故、母が和國の和の字を用る、父は唐人唐の聲をかた

く追ひかくれば暫し防ぐ其の間、船底に隱れましませ。」と、拾ひし劒と腰の劒、二刀に振つて待ちかけたり。剛韃程なく驅け付け、「憎い女め、櫂で打つた返報。」と、長柄の戟押取り延べて突掛くる。「オオ其方からあてがうた此の劍、此方からも返報。」と、切つてまはれば二十餘人、女一人に切り立てられ、陸にまよへる蘆邊の鷗、一羽もたたず討たるるもあり、痛手を受けて逃ぐるもあり。柳歌君も剛韃も、數箇所の深傷朱に成つて、一村蘆を押し分け〳〵、追ひ入り追ひ込み互の眼に血は入つたり、前後も分かぬ盲目打ち、岸の岩角切先に、電光石火の命を限り、危かりける 三重 有樣なり。剛韃戟も切り折られ、膝行り寄つてむんずと組み、柳歌君が持つたる劍、捥ぎ取らん〳〵と、捻ぢ合ふ足を蹈みためず、のけ樣にかつぱと伏す。直に乘つて乘つ懸り、刺し通し〳〵首ふつつと搔き切つて、莞爾と笑ひし心の內、嬉しさ類なりけり。「喃々姬宮樣、お身には怪我もなかつたか、舟は其の儘其處にか。」と、蹌踉ひ寄つて、「此の體では船中のお供はならぬ、又敵が寄せ來ればもう何うも叶はぬ、潮に任せ何處までも落ち給へ、沖へ舟の出るまでは、此の女が陸に控へた、敵何萬騎寄せたりとも命限り腕限り、さりながら主從二度の對面は、御緣と命ばかりぞや、隨分御無事で〳〵、南無諸天諸佛別して八大龍神、萬乘の君の姬宮の御船を守護し給へや。」と、舷取つて押し出せば、折しも引潮の名殘を何と栴檀女、泪悄るゝ汐風に、龍神納受の沖津風、沖を遙かに流れ行く。あら心安や嬉しや、よし此の

り、出來しをつた出來いた、娑婆の親に心殘すな、親も心は殘らぬぞ。」と、いへども殘るうき名殘、鎧の袖に若宮を、包む涙に咽せ返り、別れ行くこそ哀れなれ。かくとは知らず柳歌君栴檀女を誘ひ、港口まで落ち延びしが、前後に敵滿ち〳〵たり。「サア是れまでぞ遁るゝだけ。」と繁る蘆間を掻き分けて、身を忍びてぞ隱れ居る。李蹈天が侍大將安大人、手勢引具しどつと驅け寄せ、「今の鐵砲確かに后か吳三桂に當つたと覺えし。」と四邊を見廻し、「こりや見よ、后を仕留めたわ、ハァ腹を切り割き、懷妊の王子まで殺した、忠節立する吳三桂、主君を捨て名を捨てても命惜しいか、彼奴は人前すたつた、此の上は彼が妻の柳歌君、栴檀女を尋ぬる許り、眼を配れ高名せよ。」と、四方に別れ走り行く。中にも剛韃といふ我武者もの、いで栴檀女を召しとり、一人の手柄にせんと、鎧の上に蓑打ちかけ、海士の小舟に棹さして、入江〳〵を漕ぎ廻り、「此の蘆の陰が氣遣ひな。」と、押し分くる櫂の先、柳歌君しつかと取り力に任せ跳ね返せば、舟端を蹈み外し俯伏にかつぱと沈み、浮き揚らんとする所を、櫂も折れよと疊みかけ、打てば沈み浮めば打ち、息もつがせず泥龜の、泥を泳ぐが如くにて、水底潛り落ち失せけり。「エ、無用の拔けがけ、殊に舟まで仰せ付けられた、渡りに舟とは此の事。」と、船中に隱し置きたる劍取つて横たへ、栴檀女を乘せ參らせ、我も乘らんとせし處に、何處より這ひ上りけん、剛韃鎧も濡れ雫、戟提げて二十騎許り餘すまじと追ひかくる。「ハァ忙がしや御覽候へ、敵手ひど

ぎ伏せ捲り立て、走り歸つて「今は是れまで、事急なり、御死骸は兎も角も、一大事は御世繼。」と、后の手を引き立て出づれば、此のごろ生まれし我が水子、乳房を慕ひ「わつ。」と泣く。「エ、邪魔らしい、さりながら己も我が世繼ぞ。」と引き寄せて、戟の柄に確乎と結ひ付け、「こりや父が討死するならば、成人して若宮に忠臣の根繼となれ、我等が家の木守。」と振り擔げてぞ三重落人を切り留めんと、敵の兵慕ひ寄れば蹈み留り、切り捨て打ち捨て引汐の、海道の港に著きにけり。是れより臺洲府へ渡らんと、見れども折節船一艘も、渚に沿うて立ちたる所に、四方の山々森の陰、打ちかくる鐵砲は横ぎる雨の如くなり。呉三桂は札よき鎧、飛び來る玉をうけとめ／＼、后を覆ひ圍へども、運の極めや胸板にはつしと當り、玉の緒も切れて敢なくなり給ふ。呉三桂もはつと許り、前後に暮れて立ちたりしが、「御母后は是非もなし、十善の御子胤を、胎内にてやみ／＼と、泡となさんもいひ甲斐なし。」と、劍拔き持つて后の肌押し寬げ、脇腹に押し當て十文字に劏き破れば、血潮の中の初聲は、玉の樣なる男皇子、嬉しも嬉し悲しも悲し、遣る方涙に母后の、袖引き斷り押し包み、抱き上げしが、「待て暫し、取り卷きたる四方の敵死骸を見付け、若宮を隱し取りたりと、行末まで探されては、宮を育てん樣もなし。」と、篤と思案し、我が子引き寄せ衣裳を剝ぎ、宮にうち掛け參らせ劍取り直し、水子の胸先刺し通し／＼、后の腹に押し入れ、「適れ汝は果報者、好い時生まれ合はせて、十善天子の御身代

でて刃を腐らし、檜山の火は檜より出でて檜を燒く、仇も情も我が身より出づるとは、今こそ思ひ知られたれ、鄭芝龍吳三桂が諫めを用ゐず、汝らが諂ひに誑され、國を亡ひ身を失ひ末代に名をながす、口に甘き食物は、腹中に入つて害をなすと、知らざりし我が愚かさよ、汝等も知る如く夫人が胎內に、十月に當る我が子あり、誕生も程あるまじ、月日の光を見せよかし、せめての情。」と許りにて御淚にぞ暮れ給ふ。「ア、ならぬ〳〵、大事の眼を抉り出したは何の爲、忠節でも義理でもない、君に心を緩させ、韃靼と一味せん爲、睛一つが知行に成る、君の首が國になる。」と取つて引き寄せ、御首を水も溜らず打ち落し、「サア李海方此の首は韃靼王へ贈るべし、汝は后を搦め來れ。」と言ひ捨てて、寄手の陣へぞ驅け入りける。司馬將軍吳三桂敵數多討ち取り、難なく一方切り開き君を落し奉らんと、立ち歸れば南無三寶、御首もなき尊骸朱になつて臥し給ひ、李海方后を搦め引立つる。「ヤア甘い處へ出合うたな、我が君の弔軍齋にこそ外れたれ、非時を喰はう。」と、飛び蒐り、李海方が眞向、二つにさつと切り割つて、后の縛め切り解き、淚ながら尊骸を押し直せば、代々に傳はる御國讓り、御卽位の印の印授御肌に懸けられたり。「エ、有り難し、是れさへあれば、御誕生の若宮御位心安し。」と、鎧の肌に押し入れ、一先づ后を御供せうか、先づ御骸を隱さうかと、難儀は二つ身は一つ、打碎かんと敵の勢、一度にどつと亂れ入る。さしつたりと切り拂ひ、込み入ればなぐり立て、打ち伏せ薙

ぬ明朝を、攻め破らん抔とは、大海に横たはる鯨を、蟻の覘ふに異ならず、あれ追拂へ〳〵。」と、驅け廻つて下知すれども、我が手勢百騎許りの徒士武者ならで、公家にも武家にも誰あつて、おり合ふ味方のあらざれば、拳を握つて立つたる處に、女房柳歌君水子を肌に抱きながら、后の御手を引き立て、「なう口惜しや御運の末、公卿大臣を始め雜人下郎に至るまで、李蹈天に一味して、御味方は我々ばかり、無念至極。」と齒がみをなす。「ア、悔むな〳〵言うて益なし、但し后の胎内に、帝の胤を宿し給へば大事の御身、一方を切り拔けて君諸共に、某御供申すべし、其の子も爰に捨て置き、おことは一まづ御妹を介抱し、海道の港を差して落ちよ〳〵。」と言ひければ、心得たりと甲斐々々しく、栴檀皇女の御手を引き、金川門の細道を、二人忍びて落ち給ふ。「いで是れからは大手の敵を、一當あて追ひ散らし、安々落し奉らん、御座を去らせたまふな。」と、言ひ捨てて驅け出で、「明朝第一の臣下、大司馬將軍吳三桂。」と名乘りかけ、百騎に足らぬ手勢にて、數百萬騎の蒙古の軍兵、割り立ておん廻し無二無三に切り入れば、韃靼勢も餘さじと、鐵砲石火矢隙間なく、矢玉を飛ばせて三重戰ひけり。其の隙に、李蹈天弟李海方、玉體近く亂れ入り、帝の御手を兩方より確乎と取る。后夢とも辨へず、「天罰知らずの大惡人、御恩も冥加も忘れしか。」と縋り給へば、「オ、汝とても助けぬ。」と取つて突き除け、冰の利劒を御胸に差し當つる。君は怒れる龍顏に御淚をかけながら、「實に刃の鏃は刃より出

汝こそ逆臣よ。」と、立ちかゝつて御足にかけ、呉三桂が眞向を蹈み付け給へば、不思議やな、御殿頻りに鳴動して、敕筆の額搖ぎ出で、*大の字の金刀點、明の字の日偏、微塵に碎け散つたるは、天の告かと恐ろしし。呉三桂猶身を惜しまず、「ヱ、情なや、御眼も暗みしか御耳もしひたるか、大の字の形は一人と書いたる筆畫、一人とは天子帝の御事、其の一人の一點取れば、帝の御身は半身、明の字に偏なければ、日の光なき國は常闇、忝くも彼の額は、御先祖大祖高皇帝、御子孫繁昌御代萬歳と宸翰を染め給ふ、宗廟の神の御怒り畏ろしと思召し、道を正し非を改め、御代を保ちましまさば、君に擲つ呉三桂が一命、蹈み殺され蹴殺されても厭はばこそ、土ともなれ灰ともなれ、忠臣の道はたがへじ。」と、御衣に縋り大聲揚げ、涙を流し諫めしは、代々の鑑と聞えける。かかる處に四方八面人馬の音、貝鉦鳴らし太鼓を打ち、鬨の聲地を動かし天も傾くばかりなり。思ひ設けし呉三桂高樓に驅け上り、見渡せば山も里も韃靼勢、旗を靡かし弓鐵砲、內裏を取り卷き攻め寄せしは、潮の滿ち來る如くなり。寄手の大將貝勒王、庭上に乘り入り大音上げ、「抑我が國の主順治大王、此の國の后華淸夫人に戀慕とは謀、懷妊の后を召取り、大明の帝の胤を絕さん爲、李蹈天が眼を抉つて、一味の印を見せたる故、時を移さず押し寄せたり、とても叶はぬ呉三桂、帝も后も搦め取つて味方に降り、韃靼王の臺處に蹲ひ、炊水でも啜つて、命をつげ。」とぞ呼ばはりける。「ヤア事をかし、百八十年草木も搖が

刃にかけんこと、勿體なしとも淺ましとも、悔むに甲斐のあるべきか、其の逆臣佞臣とは李蹈天がこと、君は忘れ給ひしか、御若年の時、鄭芝龍と申す者、佞臣を退け給へと諫め申すを逆鱗あり、鄭芝龍は追ひ放たれ、今老一官と名を變へ、日本肥前國、平戸とかやに住居ひ致すと承る、鄭芝龍が傳へ聞き、日本まで大明國の御恥辱ならずや。先年大明飢饉の時、李蹈天が邪智を以て、諸國の御藏の米を盗み、君に憐みなき故に、おのれ韃靼の合力を受け、民を救ふといひなし、國中に散らし與へ、萬民を撫け謀叛の臍を堅めしと、知召されぬ愚かさよ、彼が左の眼を抉りしは、是れぞ韃靼一味の合圖、御覽候へ南殿の額、大明とは大きに明らかなりといふ字訓にて、月日をならべ書きたる文字、此の大明は南、陽國にして日の國なり、韃靼は北、陰國にして月の國、陽に屬して日に譬へし左の眼をくつたるは、此の大明の日の國を、韃靼の手に入れん一味の印、使も敏く其の理を悟り悅んで立ち歸る、積惡奸曲の佞臣、早く五刑の罪に沈めずんば、聖人出世の此の國忽ち蒙古の域に陷ち、尾を振り皮を被らぬばかり、畜類の奴となり、天地の怒り宗廟の神祟りをなし、其の罪帝の一身に歸せん事、拳を以て大地を打つにははづるゝとも、吳三桂が此の詞は違ふまじ、恨めしの叡慮や。」と、泣いつ怒つつ理を盡し、詞を盡して奏しける。帝大きに逆鱗あり、「物識顏なる文字の講釋、理をつけて言ふならば、白雪却つて黑しともいふ義あり、みな李蹈天を嫉みの詞、事もなきに甲冑を帶し、朕に近寄る

受けつ流しつ戰うたり。姫君下知して宣はく、「*柳渦巻く木陰には風ありと知るべし、弱き枝には蕾をもたせ、強きに花を開かせよ、うつろふ枝を梢にかへて、互に力を合はすべし。」と、花に馴れたる下知によつて、喚いて蒐れば花を蹈んで、同じく惜しむ色もあり、唯一文字に頭に插せば、二月の雪と散るもあり、落花狼藉入り亂れ、軍は花をぞ三重散らしける。豫て帝の仰せによつて、心を合はせし女官達、梅方態と打ち負けて、枝も花も折り亂され、むら〳〵ばつと引きければ、勝色見せて櫻花、「サァ姫宮と李蹈天、御縁組は極まつたり。」と、數多の女官同音に、勝鬨揚ぐる*嚬伽の聲、宮中響き渡りしは、千羽鶯百千鳥、囀り交す如くなり。司馬將軍吳三桂、鎧兜さわやかに出で立ちて、偃月の戟會釋もなく振り廻し、梅も櫻も散々に薙ぎ散らし御前に畏まり、「只今玉座の邊に合戰ありとて鬨の聲殿中に響き、宮中以てのほかの騷ぎによつて、物具固め馳せ參じ候へば、さて馬鹿らしや、御妹梅檀女と李蹈天が緣定めの花軍とは、天地開けてこのかた、かかるたはけた例を聞かず。君知ろしめさずや、一家仁あれば一國仁を興し、一人貪戾なれば一國亂を起すといへり。上の好む處に從ふは民のならひ、此の事を聞き及び、山樵土民の娵取聟取、此處にても花軍彼處にても花軍、喧嘩鬪諍の端となり、花は散つて打物業、まことの軍起らん事、鏡にかけて睹る如し。只今にも逆臣起り宮中に攻め入り、喚き叫ぶ鬨の聲は聞ゆるとも、すは例の花軍と馳せ參る勢もなく、玉體をやみ〳〵と逆臣の

の、思ひ埋みてあかさるゝ。長生殿の方より「出御なり。」と呼ばはつて、二十歳限りの后達二百人、梅と櫻の造り枝、百人宛片わけて振擔げ、左右に召具し入り給ひ、「なう妹君、我萬乘の位に卽き、臣下多き其の中に、右軍將李蹈天は、遂に朕が命に背かず、朝暮心を慰むる第一の忠臣、御身に心を懸くると聞く、幸ひ朕が妹婿にせんと思へども、御身更に承引なく、今日までは打過ぎたり、然るに此の度韃靼國より無體の難儀を言ひかけ、既に合戰に及び國の亂となるべき處、吳三桂などが忠臣顏、口先の道理は誰も言ふ事、李蹈天が左の眼を抉つて宥めし故、使も伏して歸つたり、國の爲君の爲身を捨てて不具となる、末代無雙の忠臣を賞せずんばあるべからず、是非に朕が妹婿北京の都を讓らんと約せしが、御身承引あるまじと此の花軍を催せり、賢女立してすん〳〵と、すげなき御身が心を表し、梅花を味方に參らする、朕が味方は櫻花、女官共に戰はせ、櫻が散つて梅が勝たば、御身の心に任すべし、櫻が勝つて梅花が散らば、御身の負に極まつて、李蹈天が妻となす、天道次第緣次第、勝つも負くるも風流陣、蒐れや蒐れ。」と宣旨あり。下知に從ふ梅櫻、左右に分つて備へける。敕諚なれば姬宮も、よし力なし去りながら、心に染まぬ夫定め、左右なう引くべき樣はなし、花も我が身も先がけて、當今の妹梅檀皇女、緣の分目の晴軍、大將軍は我なりと、名乘りもあへぬかざしの梅、誰が袖觸れし梢には、羣れ居る鶯の翼にかけ散らす、羽音もかくやと梅が香も、芬々とうち亂れ、

を淸むる忠臣の仕業、是れ見給へ。」と小劍逆手に拔き持ち、弓手の眼にぐつと突き立て、眼蓋を懸けてくるり〳〵と繰り出し、朱になつたる睛引摑んで、「なう御使者、兩眼は一身の日月、左の眼は陽に屬して日輪なり、片目なければ不具者、一眼を抉つて韃靼王に奉る、國の恩を報ずる道を重んじ義を守る、大明の帝の忠臣の振舞是れ候。」と、笏にすゑて差出せば、貝勒王押し戴き、「ア、適れ忠節や候、只今吳三桂の言分にては、厭とも兩國權を爭ひ合戰に及ぶ處、天下の爲に身を捨てて事を治め給ふ事神妙々々、忠臣とも賢臣とも申すにも餘りあり、后を迎へ取つたるも同然、我が大王の叡感使に立つたる某も、面目是れに過ぐべからず、早御暇。」とぞ奏しける。叡慮殊に麗はしく、「李蹈天が眼を抉りしは伍子胥が餘風、吳三桂が遠き慮りは范蠡が趣あり、兩臣政事を糺す、我が國は千代萬代も變るまじ、韃靼の使は早本國に返すべし。」と宴樂殿に入り給ふ。實に佞臣と忠臣の面は似たる紛者、目利を知らぬ南京の、君が榮華ぞ三重例なき。爰に帝の御妹梅檀皇女と申せしは、まだ御年も十六夜の、月の都の宮人の、胤や此の世に降る露の、玉をのべたる御貌、管絃の道文の道、文字も働く口吟み、日本で歌といふげながら男女を和ぐとや、爰にも戀の媒介は變らぬものと詩を吟じ、年よりひねし御心、兄帝奢りの樣、色に耽り酒宴に誇り、朝政し給はぬ御意見の種にもと、行儀正しき御身持、伽の女官召し寄せて、浮世咄もさゝやきの、耳は戀する眼は睨む、心が伽羅の焚きさし

ひ、五常五倫の道今に盛んなり、天竺には佛因果を說いて、斷惡修善の道あり、日本には正直中常の神明の道あり、韃靼國には道もなく法もなく、飽くまでに食らひ暖かに著て、猛き者は上に立ち弱き者は下に付き、善人惡人智者愚者の別ちもなく、畜類同然の北狄、俗に呼んで畜生國といふ、如何に御邊が賴むとて、數百萬石の米穀を合力して、此の國を救ひしとは訝し〱、民勞れ餓ゑに及ぶは何故ぞ、上に由なき奢りを勸め宴樂に寶を費し、民百姓を責めはたり己が榮華を事とする、其の費えをやめたれば、五年や十年民を養ふに、事を缺かぬ大國の德、叡慮も量らず公卿僉議にも及ばず、懷妊の后を輕々しく、夷の手へ渡さんといふ心底聊か心得ず、契約は御邊との相對、上に知召さぬ事、畜生國の貢物、內裏の汙れ取つて捨てよ官人共。」と、北狄を事ともせず國の威光を見せたるは、*管仲が九度諸侯の會もかくやらん。韃靼の使貝勒王大きに怒つて、「ヤア〱大國小國はともあれ、合力を得て民を養ひし恩も知らず、契約を變ずるは、此の大明こそ道もなき法もなき、手に足らぬ畜生國、軍兵を以て押し寄せ、帝も后も一くるめ、我が大王の履持にする事、日を數へて待つべし。」と席を蹴立てて立ち歸る。李蹈天引き留め、「暫く〱、憤り尤も至極なり、某先年貴國の合力を受けて、一粒も身の爲にせず、國を助けしは忠臣の道なるに、今又約を變じ兵亂を招き、君を苦しめ民を惱まし剩へ、恩を知らぬ畜生國と、いはせんは御代の恥國の恥、此の度臣が身を捨て君を安んじ、國の恥

時に崇禎十七年中呂上旬、韃靼國の主順治大王より使を以て、虎の皮豹の皮、南海の火浣布刺支國の馬肝石、其の外邊國島々の寶、庭上に並べさせ、使者貝勒王謹んで、「韃靼國と大明國、往古より威を闘み國を爭ひ、軍兵を動かし鋒先を交へ、互に仇を結ぶ事、且は鄰國の好みに違ひ、且は民の煩ひたり、我が韃靼は大國にて、七珍萬寶くらからずと申せども、女の容餘國に劣つて候、此の大明の帝には、華清夫人とて隱れなき美人おはする由、我が大王戀ひ焦れ深く所望に候へば、此方へ贈り給はつて大王の后と仰ぎ、大明韃靼向後親子の緣をなし、長く和睦致さんと、型の如くの貢物、數ならねども鎭護大將貝勒王、后御迎への爲參朝。」とこそ奏しけれ。帝を始め卿相雲客、「今に始めぬ韃靼の難題、すは諍亂の基ぞ。」と、宸襟安からざる處に、第一の臣下右軍將李蹈天進み出で、「今までは國の恥辱を謹み隱し置き候、去んぬる辛巳の年北京五穀實らず、萬民饑渴に及びし刻み、某私かに韃靼を賴み、米粟數百萬石の合力を請け、國民を救ひ候ひき、其の返報に何事にても、韃靼の望み一度は必ず叶へんと堅く契約仕る、君今四海を保ち民を治め給ふも、一度韃靼の情に依つてなり、恩を知らぬは鬼畜に同じ、御名殘はさる事なれども、とく／＼后を送られ然るべし。」とぞ奏聞す。大司馬將軍吳三桂、待漏殿にて篤と聞き、御階欄干蹈み散らし、李蹈天が膝元に撞と坐し、「不便や御邊は何時の間に、畜生の奴とはなりたるぞ。忝くも大明國は、三皇五帝禮樂を興し、孔孟教へを垂れ給

父は唐土 母は日本 國姓爺合戰

第一

＊華飛び蝶駭けども人愁へず、水殿雲廊別に春を置く、曉日粧ひなす千騎の女、紅唇翠黛色を交へ、土も蘭麝の梅が香や、桃も櫻も永に、花を見せたる南京の、時代ぞ盛り盛んなる。抑大明十七代思宗烈皇帝と申し奉るは、光宗皇帝第二の皇子、代々の譲りの絲筋も、絶えず亂れぬ青柳と、靡き從ふ四方の國、寶を積んで貢物、歌舞遊宴に長じ給ひ、玉樓金殿の中には三夫人、九嬪二十七人の世婦、八十一人の女御あり。凡そ三千の容色、顔を悦ばしめ、羣臣諸侯媚を求め、珍物奇觀の捧物、＊二月中旬に瓜を獻ずる榮華なり。爰に三千第一の御寵愛華清夫人、去年の秋より御懐妊あつて、此の月御産の當月、君の叡感臣下の悦び、聖壽四十に及び給へども、世繼の太子在さず、豫て天地の御祈禱此の度に驗あり、王子誕生疑ひなしと、産屋に名珠美玉を列ね、産衣に越羅蜀錦を裁ち、御産今やと用意ある。中にも大司馬將軍呉三桂が妻柳歌君、此の頃初子を平産し、殊に男子の乳なればとて、御乳附の役人、其の外乳母侍女阿監、役々の宮女附添ひて、掌の上の珊瑚の珠とぞ冊きける。

そなりにけり。

生玉心中 終

なつて來たか。」「ア、今になつて愛想盡しいうて下んす、命惜しい程なら、高で身をうつ事もない、逢ひ初めて今日が日まで、鳥の啼かぬ日はあれど、顏見ぬ日もなかつたに、死ぬる今夜に限つて顏さへ見えぬ雨空、未來の暗さが思はれて、それが悲しうござんす。」と、歎けば男も涙ぐみ、「オ、道理、我とても今生の名殘、ま一度顏も見たけれど、燈とては夏草に、せめて螢の影でもほしい、オ、思ひ當りし。」と、小石拾うて脇指の、鐔を火打の石の火の、光待つ間の命の樂しみ、下緒の總のしげ絲を、火口となしてかちく〳〵、かつしと打つて吹き付くる、火影も息も幽にて、互に見交す顏と顏「永い別れになつたか。」と、わつと許りに縋り付き、大聲上げて歎きしは、理せめて哀れなり。旣に明け行く烏の聲、泣く〳〵胸を押し廣げ、「サ、何にも思ふ事は無い。」「オ、でかした〳〵。」と拔いたる脇指取り直し、「南無阿彌陀佛。」と差し通せば、うんと許り反り返る。ぐつと抉れば手足を踠き、また差し通せば身を悶え、抉りくり〳〵目も眩き、娑婆に出る息絶え果てて、終に冥土に引き入つたる、あへなき最期ぞ哀れなる。死骸を繕ひ、血刀よつく押し拭ひ、同じ刃と思へども、守にせよとの親の讓り、此の刃に死するは最期の不孝、二世まで夫婦抱帶、契りは先の世々までも、重ぬる牀の竹すがき、死顏見せじと押し包む、羽織も空も黑羽二重、牀几をがはと、踏み外せば、色も變じて目眩き、忽ち息は絕えてける。惜しや五日の花菖蒲、花の體を血に染めて、戀の刃に伏見坂の、世語とこ

さがを連れて退く手間で、おれが内へ驅け込み、まつかうかうした首尾で、死なねばならぬ難儀、男と見懸けて頼むと、たつた一言いうて見い、人にも知られた柏屋の半兵衞、いや知らぬといはうか。眞にやれ〳〵、家財賣つても救ふ心底、胸の扉に鍵がなうて無念なわい。ア、是れも跡へん、今いうて返らぬ事、さあ小辨、中寺町から藤の棚、ま一遍尋ねう。」といふ所へ、西東より大勢連、「あの茶店に泣く聲はさがと嘉平次、サア仕てやつたぬかるな。」と、ばら〳〵と立ち懸り、半兵衞小辨にむさぼりつき、「死なば嘉平次一人死ね、大事の奉公人よう殺さうと仕たなあ。」と、髻取るやら引張るやら、提灯上げて顔と顔、「ヤア半兵衞でないか。」「町の衆か。」「エ、優長な、人に世話をやかす事ぢやないわい、さがが事を仕出せば損といひ、大きな町の騷ぎぢや、サアたて〳〵。」「いかい皆の苦勞ぢや、草臥れた上に、小辨がめろ〳〵泣くので、共に氣が落ちて來て、少と爰で休んだ、どうで此奴ら死なうわい、つんと足が進まぬ。」と、歸る柏屋止まる柏、命枯葉の夜嵐に、又東西へぞ別れける。人影なければ嘉平次も、さがも葭簀ほどいて溜息つき、「今のを聞いてか聞きやつたか、半兵衞が情の詞、エエ男ぢや過分な。」「小辨が優しい志。忝いと嬉しいと、胸にあまれば聲にもる、二人が歎きぞ至極なる。「ア、何のかのと隙どる程涙の種、サア今ぢや念佛申しや。」と引き寄すれば、さがは、「わつ。」と泣き出し、「ま少と〳〵、まあ待つて下され。」と、前後不覺に取亂す。「待つて呉れとは、命が惜しう

父とも母とも言ひ出さぬは、我に未練を見せまい爲、嗜み深い其方ぢやと、思うて涙が溢るゝ。」と、語ればさがは、「わつ。」と泣き、「忘れてゐた物ひよんな事、母様ゆかしうござんす。」と、男にひたと取り付きて、聲の下行く涙の流れ、袂に溜る哀れさよ。「オ、でかしやつた、いうて仕舞ふは懺悔の一つ罪を助かる種ともなる、サア夫婦が親の事いふ、其の詞を冥土の引導、一時も急がん。」と、氷の刃するりと抜き、既に血汐と鹽町の、畠傳ひに、「あれ誰やら、南無三寶、見知りの有る柏屋の提灯、サア寸善尺魔如何はせん。」と狼狽ふる。さがは賢く茶店の園ひ、葭簀廣げてぐる〳〵ぐる、平もぐる〳〵ぐる〳〵卷に、二人簀卷の妹背川、流れの智慧も才覺も、今宵限りの憂身かな。親方柏屋半兵衛、小辨諸共方々と尋ね兼ね、「エ、下種の智慧は跡から、紋付の提灯で尋ぬるは無分別、嘸小辨もしんろかろ、俺もくはをぬかした、爰で暫く休まう。」と、蠟燭消えて立ち寄るも、同じ茶店の牀の上、夫れと知らぬぞ是非も無き。小辨しく〳〵泣き出し、「いとしやさがさんどうしてぞ、傍輩といひ姉女郎、本の姉さん妹と、姉妹の契約して、あのさん頼りに勤めたに、若し心中など仕て死なんしたら、私や木から落ちた猿、親方さん頼みます、早う尋ねて下さんせ。」と、縋りついて泣きければ、「オ、優しい事よう言うた、親方の身に成つて見い、可愛い許りかさがが死ぬると、大きな倒れ。年の廻り合はせで損するも有る事、夫れは絲瓜とも思はぬが、聞えぬは嘉平次、この半兵衛を男で無いと思うたか、

の、我が噂も明日よりは、歌祭文を身の上に、祭文坂町邊のな通り筋、柏屋内におさがとて、年は二十の、ヨイ花盛り、客衆々々の揚詰を、貸すの貰ふの暇無き、辛い勤めの中に扨、深い願ひは一つ屋の、嘉平次故に身をはめて、替るまいとの七枚起請、書いて二人が取り替す、小指の血汐杉原に、押して心をみかきもり、衛士の燒く火と品替る、かの小林が舞扇、是れも浮世の形見こそ、今は仇なれ松風や、無常の風も立ち騷ぐ、辨財天の鰐口の、鰐の口より恐ろしき、追手の聲のあれ〳〵、おはへて爰に北向の、八幡宮の燈明も、おのれとしめり行く先は、罪業の程思はれて、呵責恐ろし鬼踊の、寺の藪垣物凄く、身をふるはしてぞ立ちにけり。さがは涙にゆきやらず、「なう夜明に間も有るまいが、何處で死なうと思うてぞ。」「オヽ、馬場先の松原を最期場と心ざし、來る事は來たがあれ見や、星さへ一つない雨空、たとひ綺麗に死んだりとも、血汐の體を雨にうたれ、むさい穢い死顏と、笑はるゝも口惜しい、この茶店を最期場に極めん。」と、羽織うち敷き座を組めば、共に寄り添ふ牀の上、「サア、今が最期ぞや、臨終の一念は、無量劫をひくといふ、何にも心に懸らぬの。」「ア、くどい事思ひ合うたこなさんと、一所に死ぬる私ぢやもの、浮世の本望遂げたれば、思ふ事も悔む事も、露程もないわいの。」と、いへば平は猶泣き出し、「そこをいはうと言ふ事、今死ぬる今までも、我は親の顏を見る、親兄弟の事許り言ひ續けて、我は死ぬるぞや。其方も父母持つた身、今日が日の最期まで、

れはせまいかと、引き合ひし手を引き寄せて、猶抱き締めて泣き盡す。今日の祝ひの菖蒲の露も、我が袖には憂はしや、つらや端午の紙幟、神にも世にも捨てられて、菖蒲刀の鋒先に、掛る契りの惡緣と、返らぬ道を辿り行く、涙の雨に星消えて、可愛い其方、いとしい殿御、顏も見せぬか五月闇、命も世をも我が身をも、今一時に掘詰の、あれ井戸にも女夫有るわいの、そちも妹脊は替らねど、こちは釣瓶の繩切れて、横に切れ行く道筋の、是れ六道の新道と、花屋が辻にしよんぼりと、憂き數々を今宵しも、數へ盡して下寺町の、後夜の響きも身にしみ〴〵と、今ぞ二人が一生の、夢の寐覺を松屋町、是れが父御の通りかや。我が生まれもこの筋の、親兄弟もこの身とは、しらで夢をや結ぶらん。むすび留めても止らぬは、私が人玉生玉の、草にやつるゝ白露を、あこがれ出づる魂かとて、拾へば消ゆる初螢、夜は思ひに燃ゆれども、晝は名におふ遊山所の、貴賤羣集の伊達盡し、人をいさめの藝盡し、茶屋が藁屋の軒續き、竹の柱に節込めし、稽古淨瑠璃太平記、琴の連歌引き替へて、松に激しき雨風や、我は初音か時鳥、冥土の友と鳴き連れて、いとゞ萎るゝ袂かな。夫れ覺えてかこの春の、花の紋日をこの牀で、二人寐覺の小杯、其方ま一つおれ一つ、さはる手許に萬歲が、あひも興ある相の山、花は（相の山）散りても根に返る、人は返らぬ死出の山、死して返らぬ道ぞとは、今の憂身を謠ひしか。三途の瀨戸の燒物盡し、親は堅手の茶椀と茶椀、我が疵付けて我と我が、名をや流さん恥かし

歩はなし。「ハァ、今のどやくやに、同道めが摑んで走つた、サァ嘉平次死物狂ひ、一寸もやらうか。」と、貰ひし脇指ほつこんで、驅け出でんとする所に、紺屋の手代若い者、どや／＼と門口に、嘉平次殿あんまりな、偶歸つて何事仕出す、兎角評議は明日、一足も出させぬ。」と、外より門口はつたと締め、夜明まで張番と、棒突き並べて動かせず。「譯を聞いて下され。」と、斷つても詫びても、道理立たねば男も立たず、一分立たねば一歩もなし。死ね／＼と來る死神の、引手は爰ぞと窗の子を、踏まへてひらりと飛ぶ所を、涙の袖にひつたりと抱き留めて、「どうぞいの。」「どうとは死ぬるばつかり、足音しやんな泣聲すな。」と、身より餘りて涙川、せきも止めよ岩をこし、番は閻魔倶生神、紺屋のも*がり劍の山、先には死出の大和橋、踏むは三途の泥の海、迷ひこがれて　三重

下之卷

嘉平次おさが道行

なむ阿彌陀／＼、南無阿彌陀佛なむあみだ／＼、なむあみだ／＼、南無阿彌陀佛なむあみだなむあみだ、南無阿彌陀佛を頼みても、*西を後に歩み行く、極樂淨土に背くとも、*利劍卽是と聞く時は、死する刃も彌陀の緣、南無阿彌陀佛の聲細く、心細さや來世まで、かう手を引いて行く事か、若しや離

川、内々の手形の銀子不埒故、明後日お願ひ申すと斷りに越したれば、松屋町へいけと有る、夫れ故自身いつたれば、親仁は是れへわせたと有る、千も萬も入らぬ、銀戻すか戻さぬか。」と、無體に内に入りければ、嘉平次先へ驅け込んで、一歩を隱さん〳〵と、皿の上に中蹲ひ、前打合はせ〳〵ても、膝の間より顯はるゝ、金は金にて銀ならず。「ヤ嘉平次見事な、町人は神佛とも主君とも、額に戴く一歩を股に挾んで股が冷えう、さ程澤山な一歩を、戻すまいとはそりやわやぢや、綺麗にしやんと渡せ渡せ。」「コリャ長作、十六兩唯しられ、夫れがぞ原に嘉平次が、狼狽へ始め命沙汰に及んだ、お願ひ申さば申し上げ。仔細の有る此の一歩、粉に叩かれてもやる事成らぬ。」「オ、此の長作が、粉に叩かれても取つて見せう。」「ヤァしやら臭い。常々の嘉平次とは違うた、口廣い事言ふと思ふな、命を先へ出して置いて取つて見よ。」「オ、取つて見せう。」と、摑みつく手をむんずと取り、店の小角へはつたと投げ付くる、起き上つて組み付くを、まつかせと引抱へ、上になり下になり、店の燒物皿茶椀、花人粉黴塵五重の塔、西行法師も痛手を負ひ、ちやほの鷄飛んでちり、けづめに蹴られて長作が、轉ぶ所を撞と乘り、備前鉢にて天窗の鉢、「覺えたか〳〵。」と打ち碎かれて錦手の、目鼻血みどろちんがいに、「嘉平次の生盗人、出あへ〳〵。」と呼ばはつて、闇に紛れて逃げ失せけり。「エ、嬉しや〳〵、一期の本望とげたぞ、親の御恩の一歩を、己にのめ〳〵取られうか。」と、見れども〳〵皿打明けて一

内に何の怪我もない、ぎえんのよい脇指、今宵は身共が、おきはが親に成りかはり、聟引出に取らする。」と、仇とはしらぬ凡夫心、「サア今宵こそ早歸つて、明日の晝まで緩りと寢よう。やい嘉平次、埒明き次第起しにこい、明日顏見よう、さらば〳〵。」と立ち出づる。さらばは實のさらばにて、明日見る顏は死顏の、生顏見るは親と子の、是れぞこの世の別れなる。嘉平次は親の影、隱るゝ許り見送つて、內に驅け入り窗の下、覗けばさがは消え入る許り、泣きしみづいて音もせず。「是れ〳〵萬事皆聞いてであろ、忝いといはうか、悲しい事といはうか、是れで結句嘉平次が、親の冥加に盡きるわいの。」「否々、そりやこなさんの不孝といふ者、今の酒とは銀さうな、どこも首尾よう仕舞うて、おきは樣と夫婦になり、親御の心を悅ばせて下さんせ、私一人死ぬれば濟む、どの道からどういうても、只こなさんがいとしい、惡う聞いて下んすな。」と、眞實見えたる淚の體。「ア、ひとり死なせてよい物か、貰うた一步は百許り、銀さへあれば何談合も爲安い、假令どうなればとて其方を捨てて、おきはと添ふ氣は微塵もない、南無三帶が切れたか、表から廻つておぢや、勝手しるまい連れにいかう。」と表を明けて出づる所に、印傳屋の長作、究竟のもの連れて、「ヤァ嘉平次、親五兵衛は爰にぢやげな、逢ひたい〳〵。」「譯もない長作、何時ぢやと思ふ、親仁が爰へいつわせた事が有る、用が有らば明日なりと明後日なりと、松屋町へいて逢へ、歸れ〳〵。」と押し出す。「是れ何とする、親仁に逢ふも汝が

もさがが袖絞る、露の萩燒大皿出し、「慮外ながら。」と受けければ、「丁度飲め。」と瓢箪傾け注ぎ懸くる酒にはあらぬ麴の色、花の一歩のから〳〵、さら〳〵と七八十、皿堆く盛りあぐる。子は惘れうつかりと、親のみうち守れば、親は、「わつ。」と聲を上げ、「やれ慈悲知らぬ親の酒を見よ、實の慈悲の味ひを、飲みてしれや。」と泣きければ、「ハア、有り難し。」と許りにて、親の膝に打凴れ、聲も惜しまず歎きしは、性は善なる涙なり。包むに餘る親心、「不便や可愛やこの春より、狼狽ふる體を見て、この酒一獻飲ませたく、幾度か思ひ寄つたれど、否々氣の定まらぬ間は、却つて毒酒と控へたり。此の酒飲んで方々の恥辱を雪ぎ、無明の酒の醉ひ醒せ、身共は年寄氣丈にて、病といふ事知らねども、五六日は汝ゆゑ、胸も痛んで不食する、兎角人の親には病となるも子の心、藥となるも子の心、今宵の意見を聞き入れて、彌心を持ち直し、親の藥となつてくれ、長生したいと思はねども、せめて三十二三まで篤と見立て、人になして死ねば樂ぢや。」と咽せ返り、成人の子を引き寄せて、脊中を撫でて泣きくどく、親の心ぞ哀れなる。嘉平次も人々の、心の中を思ひやり、一言も無くさし俯き、落つる涙は杯の、是れも上こす許りなり。おきはも涙にくれながら、「晦日の夜から昨夕まで、案じて一目もおよらず、お心疲れお身の毒、歸つてお休みなされませ。」「オ、歸らう、是れ嘉平次、この脇指は死んだ母と身共が祝言の時、聟引出物として舅より貰ひ、枕元の守刀となしたる故、家

さがが悲しさ身に迫り、死手は爰に只一人、父御前の目の前で、死んで見せんと涙の帶、たぐり取り付き登らん〳〵と、心許りに力なく、足は泥に引き締り、帶は中よりふつつと切れ、蘆邊にどうど落水と、共に涙ぞ流れ行く。とても死身の嘉平次、親の心を休むるは、安い事〳〵、是れ一生の孝行納めと觀念し、「ハア、誤り入つて御尤も、若氣の至り言ひ交せしを捨て難く、今までお心背きしは不調法、是れより魂入れ替へ御意を背かず、如何にもおきはと祝言。」と、いへどもさがは心を知らず、實と聞いて恨みやせん、死際まで僞る事、親を欺すか勿體なやと、思へばせきあげ聲吃り、いひさしてこそ泣き居たれ。「否々、今まで幾度かたらされた、その心底に極まつた證據が見たい。」「ハテ證據とて何と致さうぞ。」「オ、證據には今宵直にこちへ來て、祝言の杯せい。」「夫れは餘りな親仁樣、申し交した女にも、とくと合點させ、何處も首尾よう埓明けた證據、明六日の晝まで待つて下され。」といへば親も打頷き、「尤も〳〵、然らば祝言は其の上、姉も呼び寄せ一家集まり杯せう、只今心の定まつた印の杯、一つ飲んで身にさせ。」「否出店で竟に酒飲まず、酒とてはござらぬ。」「オ、さう有らうと思うて、酒は身が持參した。」と羽織の下より、一升入の祕藏の瓢簞取り出し、「サァ親の酌一つ飲め。」「あつ。」といふより素燒の杯取り出す。「否々小さい、汝が飲むは知つて居る、鉢でも茶椀でも大きな物で一つ飲め。」「さのみ深うはたべませぬ。」どれか是れかと茶椀尋ぬるその音を、聞くに

在所へ戻つて、尼になりともなりまする。」と、道を正して泣きければ、さがは聞くより氣も亂れ、「いとしや彼のお人も、心の内は妬ましかろ、私が離るゝことも否、父御のも尤もなり、エ、死にやうが遲かつた、今潮がさいて來て、この身をとつても往けかし。」と、身を悶えてあこがるゝ。嘉平次は、「只何事も親の慈悲、御免。」とよりは一言も、ないて俯くばかりなり。五兵衛大きに腹を立て、「何事も親の慈悲とは、さてはこの親は慈悲を知らぬと思ふよな。オ、慈悲知らぬ、慈悲知らぬ親持つたが不祥、このおきはにも親がある、おのれと夫婦の約束で、人の娘を貰うて、此方の息子が合點せぬ、其方の娘を返すと、すご〳〵と戻して、一つ屋の五兵衛が世間へ面が出されうか。親に恥を與へる子に、慈悲とはどこへ、エ、淺ましい根性、二本指すを侍、一本指せば町人と許り思ふか、癡呆者、大小はこの胸に有る、武士に劣らぬ五兵衛と、今日まで人に笑はれぬ、その倅がどしやう骨、茶屋の銀負うて逃げ隱れ、死んでも恥が拔けはせぬ、汝が身は廢つても、この五兵衛は立て通す。このおきはと夫婦になれ、サアどうぢや、サア否か應かの返事せい、否と言ふと此の脇指、こりや、ハテびつくりすな、汝は切らぬ人も切らぬ、おきはが母は身が姉父は他人、おきはを孀にする代り、身が腹に突込んで、一つ屋の五兵衛が一分立てて見せう、サア返事、サア何と。」と拔き懸けて責めつくる。おきはは柄に取り付いて、「叔父樣殺す事はない、私が死ねば十方がすみます。」と縋り止めて泣き叫ぶ。

つと結び下げ、「サア取り付いてぶら下れ。」と、共に手をかけ筒井筒、非筒にあらぬ釣瓶下し、干潟の沼を踏む足も、淵に沈むが如くなり。さあらぬ顔にて、「只今臥せる折から、何事の御用がな。」と、門の戸明くれば親五兵衛、常に數寄の大脇差、「遠慮せずに此方おぢや。」と、手を引き入るゝは養ひ娵のおきは、思ひがけなき嘉平次、こりや何事が起つた、さがが嘸悲しかろと、挨拶も何するやら、聲もうはもる許りなり。おきはは道々泣いたる顔、親も涙を目に一杯、「ヤイ癡呆め、おのれ商人の又しては又しては、店を明けて餘所歩き、晦日前物際は、武士の軍の虎口ぞい。跡の二十八日より出店を出で、朔日は天滿にて阿呆をさらし、大事の五月の節季を捨て、今日までは何處に居た。たつた今家主より知らされし、清水燒の仕舞物買ひに、京へ上つて今朝歸り、親父も機嫌が好いとは、五日にも十日にも、親に顔を何時見せた、さがとやらが顔さへ見れば、親の顔も兄弟の顔も、己は見たうあるまい、鹽町の姉が禮に來て、親子兄弟菖蒲の杯するとて、今日の節句は嘉平次の顔が見えぬと、汝が事悔んで可愛や泣いて歸つた。さりながらこりや、このおきはが顔ばつかりは、否でも應でも一期見せねばかなはぬ。」と、いへばおきはは、「わつ。」と泣き、「エ、情ない嘉平次樣、嫌なもの私が無理に添はうといふにこそ、お前の心が不定で、外を家になさるゝ故、親父樣の御苦勞、一つ屋の家も立ちませぬ。心さへすわつて家を踏まへる覺悟なら、おさが樣が呼び入れて、兎角お身の立つやうに、私や

「此方も是れで二度起きた、ま一度起きるは定のもの。」と、呟き内に入りにけり。嘉平次表に氣をつけ、「サア向ひの門もしまつた、是れまでこそ大儀なれ、何處に何の障りもなし、二人が斯う竝べば、夫婦住居ひし同然なり、これ此處が其方の內ぢやぞや。ヱ、口惜しい、世間廣う內へ入れ、親にも逢はせ、町へも廣め、其方に世帶を打任せ、商ひも仕擴げ、嘉平次が女房は勤めの者の風はない、何程の大世帶も捌きかねまい女房ぢやと、いはせうと思うたに叶はぬ事は叶はぬ物、たつた僅か一貫目餘りの、銀の瀨戶を越し兼ねて、浮名を取つて死ぬる事、無念なわいの。」と齒ぎしみし、頭も上げず泣きければ、「さればいの、私とても一日なりと父御樣に御奉公、姉御樣を姑御と宮仕へせうものと、明暮の願ひ事かなはぬのみか此のしだら、及ばぬ願ひの逆罰か、この前さる人に三世相見て貰ひしに、前生で佛前の茶湯の茶椀打ち割りし報いあり、愼めとの物語、今思ひ合はすれば、此方さんのこの商賣を打破つて身を果す、茶湯の茶椀打ち割りし、因果が廻り來ました。」と又伏し沈み泣き居たり。「斯うなる身の三世相、碌な事があるものか、夜半も過ぎたいざおぢや。」と、旣に出でんとする處へ、「嘉平次用がある、此處明けい。」と門たゝく。「たれぢや夜更けてやかましい、用があらば其處から言へ。」「癡呆者、親の聲を知らぬか、五兵衛ぢや明けい。」「はつ。」といふより仰天し、たつた一間の濱納屋を、さがが表振も見せともなし、何處に隱さん道成寺の、鐘はなけれど卽座の智慧、窓の貫に帶をき

しやん〳〵と打つ響、四邊はしん〳〵遠音の谺、紺屋に聞き付け、「すは盗人よ、よりぼうよ、提灯。」と、若い者共驅け出づる音、さがを後に羽織の下、裾をかづきの海士ならで、人の見るめも覺束な。「ヤア嘉平次殿、此中は如何ぢや、際の日に商人の店を捨てて、何處へぬつくり這入つてぞ、書出やら懸乞やら、今宵までも尋ねて來る、返答にも困つた、エ、譯の惡いお人ぢやなう。」「尤も〳〵、京の清水燒にずんと安い仕舞物があると聞き、人に先を越されまいと、俄に上つて漸う今朝下つた、日頃*やだのあるこの嘉平次、さぞ逃げた走つたと評判で御座らう、親父も商ひに精出すとて、何時にない機嫌で、今夜は出店に泊れといはるゝ、何處も首尾になりました。家主殿の錠さうな、サア鑰があるなら明けて下され、とてもの事に火も貰はう、行燈に燈して下され、何かと皆の御苦勞、その代りに今度の清水燒には利がある、わつさりと振舞を。」と、さがを圍うて身を背け、この期になつても口利口、後を見せぬは強者なり。その間に錠明けて、「これ火も點しつけました、茶でも所望に御座らぬか。」と、表へ出づれば嘉平次は、跡じやうりして入り替り、「もう休んで下され、明日お目にかゝらう、いかう睡たい寢まする。」と、礑とさして内より鐶しやんと締むれば、さがは溜息身を顫はし、「早う死んでのけたい。」と、囁くも只涙なり。表には猶不審を立て、小側に打寄り、今夜の歸り合點がいかぬ、言分といひ飲込まぬ、清介は親御にこの樣子知らせておぢや。」「まつかせ。」と驅け出す。

いうてもだんない。」と、いへば一人が首肯いて、「ム、それで聞えた、嘉平次の赤栴檀」と打笑ひ、しむる門口しん〱と、川音更けて靜かなり。世の中にあき果てよとてつきし名か、今は身にさへ秋のさが、平と二人が二日の夜、身の憂き儘にふつと出て、何處をとぼ〱行く先の、當もない駕籠かりの世に、死なねばならぬ信濃紬の絲よりも、心が細く氣も弱く、廣い國をも我と我が、心で狹く住みなせし、日本橋にぞ著きにける。「なう平樣、どれ顏見せさんせ、いとしや漸々に氣が暗うならんす、如何思うてぞいの、この樣にうか〱と、唐高麗を歩いたとて、一貫目と上つた銀、ふり涌かう筈もなし、その中人に見付けられ、見苦しい目に逢ふ時、難波燒の嘉平次が死んでものけず、茶屋の銀負うて、彼の態見よといはれた時、この頃天滿で姉御さん被仰んす通り、御一門まで面汚し、とても生きぬ覺悟の上、早う死なうぢやあるまいか、ア、思へば姉御さん、此方さんを大切に、いとしさうなお詞、さがといふ名は聞いてなり、大事の弟を先度の奴が殺しをつたか恨めしいと、憎みをうけうが悲しい。」と手に取り付いて泣きければ、「オ、今宵は延ばさぬ合點なれど、先づ密と出店へ往て、小刀でも用意し、我が宿と名づけた出店の門口、夫婦手を取り最期の門出する心、嬉しや通りの人にもあはなんだ、サア這入りや。」と戸を押して、「南無三寶、つい引摑差いて出たれば、親父からか家主からか、門に錠を下した、こりや斯うある筈。」と四方を尋ね、くり石拾ひ、力に任せしやん〱、

心々の商賣も、皆世渡りの大和橋、下行く水の泡よりも、色にぞ銀は消えやすく、際は素燒の明き德利、今日の菖蒲の節句にも、店さし身皿兎や角と、人も火入や灰吹も、碎けて物や思ふらん。繁昌の地の紋日さへ、更けて寂しき五月闇、駕籠の者共提灯提げ、嘉平次が店わるゝばかりに敲けども、誰そと答むる人氣もなく、頻りに敲けば家主紺屋の若いもの共、大欠伸して出で合ひ、「誰ぢややかましい、一年に一度の五月の節句、我人皆休んで居る。嘉平次殿は晦日前から此處には居られぬ、二日の晩方鳥渡戻つて、それから影も見せられぬ、懸乞衆なら、ゆうべ乞うたがよいわいの、節句しも何事ぞ、總じて其處は出店で、火を燒く事も御法度、本家は松屋町九之助橋の角、一つ屋の五兵衞殿隱れはない。」「否懸乞では御座らぬ」伏見坂町柏屋のさがと申すが、是れも二日の夜から見えませぬ、今日で四日、樣々にしても知れませず、此樣處によもやとは存じながら、嘉平次樣とは深い中、念の爲で御座る。」といふ處へ、理窟臭い白髮まじり、「嘉平次殿はまだ御座るか、歸られたらいうて下され、西國橋印傳屋長作から參つた、手形の銀子不埒について、明後日お願ひ申しますと。」「ア、聞くに及ばぬ、此處は出店の店貸、何事も存ぜぬ、本宅へ〳〵。」と、取合はねば爲方なく、皆東へと走りける。紺屋のものども呆れはて、「なんと淸介、このさがといふお山見やつたか。」「ム、其方はつひに見ぬか、再々此處へ泊りに來た、それは〳〵好い女房、如何にも〳〵嵯峨の釋迦、＊毘首羯磨の御作と

大事の身、駕籠の衆早う乘せて往なつしやれ。お客様も笠貸しましよか、但しお駕籠かりましよか。」「いや／＼駕籠は錢が出る。只貸す笠を借らぬが損。さがは夜晝身どもが揚、道の間も算川の内、駕籠について歸らう。」と、跣足になつて出でければ、さがは心も暗紛れ、何としてぢや何處にぢやと見廻せば、ア、悲し。平は鬢もかき亂れ、亂るゝ雨の藤の陰、濡れて立つたる味氣なさ。勤めとて口惜しい。大事の男を撲ち敲かせ、濡れ萎るゝを見て居ながら、我が身は駕籠に乘る事か。エ、儘ならば飛び下りて、共に抱いても濡れうものと、見やれば男も眼を合はせ、焦るゝ中の憂き涙、いとゞ雨こそしきりなれ。「なう駕籠の衆、先づ待つてや。わしやこの桐油が鬱陶しい。身は濡れても厭はぬ。是れを此處に捨て置いて、俄に雨に逢うた人、被て下されば本望、是れはさがが貰うた。」と、手を上げて引きしぼり、疊んでひらりと捨てければ、平は立ち寄り拾ひ取り、押し戴きて雨に著る、田蓑の島の鰥鶴、泣いて立ちたる哀れさに、「ア、忝い。誰かは知らねど、能う拾うて被て下んす。私もその下に暫しが程の雨宿り。此方さんも其の通り、その雨桐油を一樹の陰、他生の縁で御座んす。」と、駕籠は見返る、嘉平次は、見送る中に降る涙、つれなや神の梅の雨、降り隔ててぞ 三重 別れゆく。

中之巻

の狂言が、面白うて再々見ると吐かしたが、能う見覺えた。とりも直さず油屋の九平次。總じて狂言淨瑠璃は、善し惡し人の鑑になる。己は騙りの手本にするか。師匠の九平次より倍越した大騙り、この春おのれに三百目銀借つた。懇の中手形も入らぬと吐かしたれど、好い中の垣と預證文してやつた。それに引續ぐ合點なら、差引して算用せい。こりや油屋の九平次。醬油屋の徳兵衞を騙した格を出したらば、ちつと頤を喰ひちがへう。ちよつと手をつけるが最期ぢやぞ長作。」と、腕まくりして捻ぢ寄れば、「ヤアぴこ〳〵するない。わやにしてもさせぬ〳〵。手形の銀は手形の通り、取る所で取つて見しよ。」「オ、三百目の手形に、十六兩は得遣るまい。」「やるまいとは如何して。」「まづかうして遣るまい。」と、面甲ほうど喰らはする。「ヤア二才め。撲たれて居ようか。」と撲ちかくる、腕捻ぢ上げひつくり返せば起き上り、むしやぶりついて擲き合ふ。さがは焦つて、「なう喧嘩々々。」と呼ばはる聲、客も駕籠も醉ひ潰れ、「させぬ〳〵。」と割り込んで、ひよろつく足を踏みこかされ、「さへ人蹈んだは堪忍せぬ。」と相手が何れやら滅多撲ち、大道へまくり出で、大盡も泥まぶれ、駕籠の者も跛引く。嵯峨は嘉平次圍はんと、身を捨てて驅け廻る。わめく人聲雨の音、三重瀧を流すに異ならず。祝子宮奴棒突き散らし、「社內の騷ぎ狼藉千萬。出でよ〳〵。」と制すれば、どやくや紛れに長作は、行方なく逃げ失せたり。茶屋は思はぬ踏立て、「はや日も暮れた御門がしまる。お客樣もはやお立ち。さが樣は

圍まへたに極まつた。姉も共に勘當ぢやと、喚き散らして御座りました。それで走つて來ました。アアずつなや。」と息をつぐ。「ア、そんなら往なさなるまい。往かいで叶はぬ處もあり、見捨て難ない事もあれど、男も女子も親の命には背かれぬ。殊に夫の呼び使。ア、女郎樣お邪魔しました。」と、怪我の振にて駕籠にはつと行き當り、「ハア駕籠があるとは氣が付かなんだ。これに限らず狼狽へては、鼻の先な事に氣がつかぬ事が多い。商ひ物の請取なら、買主の手へ渡りさうなものが、中使の手に握つて居るとはの、これも氣のつかぬ事。」と、敎へる智慧や天神を、伏し拜みてぞ歸りける。嘉平次憚る方もなく、駕籠蹈み散らし跳り出で、長作が髻取つて引据ゑ、「この嘉平次を盜人の騙りのとは、何の頰げたで吐かいた。先は武家方、中取したと思はれては出入がならぬ。先づ請取書いて渡せ。銀取つて遣らうと、うま〱と能う喰はせたなあ。今のは身が姉ぢや人、駕籠に居るのも見付けてぢや。姉の前で能う恥を與へた。人かと思うてはまつた。涙が溢れて口惜しい。」と、齒噛みをなして泣き居たり。「オヽ成程、姉とは一言で見て取つた。買主の方へ往くべき手形が、中にとまつてあるとは、何ぢや女の猿智慧。先へは此の長作が請取して上げた。彼は身が方への請取。おのれもせちがな奴ぢやもの、銀も見ずにあたヽかに、請取をせうわいなア。」「エ、さもしい騙りめ。ヤイ銀が慾しくば穢い言懸せうより、きれいに家尻きれいやい。さつてもたくんだ〱、今おもひ當つた、嵐の芝居の曾根崎

儀樣も見て御座る。勤めの者はあんな者かと蔑みが恥かしい。たとひ平樣が盗人であらうが、強盗であらうが、いとしうて〳〵、命をやつたこのさがぢや。何程此方が佛程正直でも、顔も見たうないわいの。」「サア先づ一旦左樣いはねば譯が立たぬ。それも此方に合點ぢや。今に嘉平次が大盗人仕居つて、一つ屋の五兵衞、鹽町の姉が首にも繩付け、その身は此方の裏の西の方に、烏のとまつた樣に首許りになつた時、長作さま懇しようといはうより、今思ひ切つたれば、彼奴も仕合此方も德。どれ前の樣にむつちりと肥えてか、嘉平次めが吸ひ取つたか、肌を見たい。」と懷へ手を入るゝ。取つて突き退け、「こみともない、おかつしやれ。言ひ憎けれどこのさがと平樣とは、一心づくで逢うて居る。此方の樣な口前ではないぞや。」と、おろ〳〵涙の腹立聲。嘉平次はもう是れまで、堪忍袋も破れかぶれ、飛んで出でんとする處へ、姉の内より迎への丁稚、大息繼いで、「申しおへ樣、ちやつとお歸りなされませ。早う呼んで來いと、旦那樣は門に出て待つて御座ります。早う〳〵。」とせきかくる。「ア、心もとないけたゝましい。何事が起つた。こりや此處は公界ぢやぞ。誰も人の名は言はず、樣子許りちやつといへ。構へて人の名をいふな。」と、心のきいたる姉の利發、使はるゝ丁稚も機轉者、「角屋敷の親父樣がお出でなされて、かの板圍ひの總領殿が、一昨日から在所が知れず、附屆借錢乞、親仁樣も一分立たぬ、お前の留守も合點が往かぬ。兄弟の事なれば眼醫者にかこつけ、總領殿を

様が取次いで、屋敷方へ賣らんした、その銀が十何兩とやら昨日渡る筈ぢやげな。請取も往つてあるとの事。大事無か私に渡さんせ。左無か先少と酒でも飲んで待たんせ。」といへば長作、「ヤァ〳〵大それた事言ひますの。酒處で御座らぬ。エ、如何に身が術ないとて、不器用な氣になり居つた。如何にも賣物は取次ぎ、銀高一貫二百三十目代十六兩、慥かに彼に手渡しして、卽ち自筆印判の請取を握つて居る。地體これは九之助親五兵衛の店の賣物、銀はおのれが遣うて、親の手前の算用立たず、此の長作を横道者にせうとは、底意の怖い盗人。この物騒の世の中、此方の所も裏は野ぢや。內の勝手は知つて居る。必ず用心さつしやれ。身が熱ければ、どの樣な事仕ようも知れぬ。」と眞顏の言分。さがははつと色違ひ、兄弟は猶身にかゝる、難儀を察して駕籠の中、くわつとせき上げ身をもがき、「エ、無念や騙られた。姉の手前が恥かしい。いつそ驅け出で踏んで腹を癒ようか。出ては姉の恥辱か。早う歸つて下されかし。」と、千萬碎く氣の働き、胸の鞴に怒りの火炎、駕籠もゆらめく許りなり。長作駕籠には氣もつかず、「これさがどの、驚く事ではない。地體彼の氣な生まれつき、それを知らずに仇惚れして、この長作は捨てられた。むごいぞや〳〵。何と元へ戻して、おれが懇してやらうか。嘉平次などとは違うた。十貫目や十五貫目は手のわるい事せずに、見ん事今でも〳〵ぢや。此方も憎かろ筈がない。」と、しなだれ寄つて手をとれば、「ア、いや〳〵、なめすぎた、おかんせ。あれ町の御內

や。肌ふれねばきかぬとわめいたりや、こりや實の契りは重ねて、約束のしるし是れぢやというて、引き寄せしつぽりと頰摺して、サア往ね〳〵と突き出さるゝ。私も名殘が惜しうて、跡覗いて見たれば、氣味惡さうに店の手水鉢で、頰を洗うてけつかつた。」と、語れど二人は餘りの事、紛らす耳の餘所の町、風に嵐の芝居果て、散らし太鼓の聞ゆれば、南無三寶、長作が來ぬ先に、姊も往んで下されかしと、飛び立つ許りの駕籠の中、今にも來たらば何とせう、のめ〳〵とも出られぬ首尾、出ねばぐわらりと筈違ふ。氣を揉んでも爲方なく、なに御存じなき天神を、俄に賴む許りなり。約束なれば長作、暖簾の書付見て、「ムゥ淸水屋は是れぢやな。少と賴も。」道頓堀の茶椀屋嘉平次は此處にか。約束の通り長作が來たというてたも。嘉平次〳〵。」といふ聲に、兄弟驚くその中にも、姊は知つたる駕籠の中、思ひ遣りては諸共の、心遣ひぞ殊勝なる。さが聞き付けて走り出で、「ヤア長作樣久しうごんす。」「嵯峨殿か。嘉平次が來るからは、此方も此處にと思うた。我らは今日侍衆の相伴で、嵐の芝居から直に鯉屋へ往く筈で、これ袴の體なれど、嘉平次が何やら內々の一物、今日入らいで叶はぬ、持つて來てくれといふ。棧敷の事武士の前、おうというたが何の事ぞ。つんと此方に覺えがない、嘉平次は何處にぞ。早う逢うて聞きたい。」と、いへどもさがは姊の前、駕籠にとも言はればこそ。「いや鳥渡彼處まで。追つつけで御座んしよ。今日入らいで叶はぬとは私も聞いたが、彼の樣の賣物を此方

う。其の身一人の恥かいの。親兄弟は何になれ。來世の便りはなけれども、あの人ゆゑに迷はつしやる、母樣がいとしい。」と、慈悲の涙も眼に餘る、駕籠にあてての口說言。嘉平次は身も縮み、命も縮まる許りにて、消えも入りたき心地なり。幾松は嘉平次が駕籠にありとも氣もつかず、「エ、曲もない兄きの心。今ならでは申さぬが、私が眼病もあの人ゆゑ。聞いて下され有る事か、おきはと其方と夫婦になれ、その代りに家屋敷、商ひの株共に親父の跡を繼がする。合點せい〳〵と道ならぬ事耳かしましく、所詮私が死ぬるか癈疾にして下されと、山上樣へ願をかけたれば、御利生でこの病。つい時花眼の顏すれど、眼は綿繰で繰るやうで、響いて物もいはれぬ。天滿に上手の眼醫者があると、連れてお出でなされし故、道すがら物語もと、これまでは參りしが、養生はしませぬ。私が盲になつたらば、兄樣の一人して店の事も取捌き、內に身が据わつたら、おのづからおきは樣と一つになる氣も出來ませう。エ、私等まで身を捨てて、是れ程に思ふとは思ひ遣りもあるまい。聞えぬ所存な兄貴や。」と、目を抱へて泣きければ、供の竹が差出口、「嘉平次樣といふ人は譃吐きの骨頂。私にもきつう惚れて居る、いつぞ日の暮に出店へ來て、思ひを晴らさせてくれと、口說かつしやるいとしさに、お使の序に寄つたれば、今宵遁れぬ客がある。重ねて此方から便宜せう。こゝろざし嬉しいと、錢二十程包んで懷へ入れらるゝ。むつと腹が立つて來て、私や店屋者ぢやないぞや。身を賣る女子ぢやないぞ

引摺り出して叱らう。いや〳〵供の下女が見る處、さながら若い者、人中で恥もかかされまい。身の成る果てが可愛い、父樣がいとしい、おきはが心が無慚なと、種々胸にせめあまる、涙は聲に早もれて、「なう幾松、其方は仕合な。好い時に眼を病んで、淺ましい事見やらぬ。今のお山が、今日一日は奥の客に身を賣りながら、座敷を忍んで駕籠にかくれて居た體は、外に深い人に逢ふ手管とやらであらうが、お山はお山の道にもせい、その深い男は、誰ぢや知らぬが、あるまい事ぢやないかいの。定めて此方の嘉平次もまああの通り、嘉平次の惡性では、お山と相駕籠で、桐油の下に屈んで居ようも知れまい。見るめも悲しい淺ましい。これといふも親の恩を忘るゝ故、心もみだらに身を持ち崩し、人にも人といはれぬ。父樣や母樣に娘はあり息子はあり、何を不足におきはといふ子を貰うて、乳母を取り守をつけ、憂き世話が病みたかろ。小さい時から女子の手業も教へ込み、心もたまかに育て上げ、嘉平次と夫婦になしたらば身代の藥なり、商ひの勝手もよく繁昌もさせたいと、嘉平次がいとしい許りに、世話をやんで病み死の、母樣の恩をはや忘れ、かはいげにおきはもほんの*天竺浪人。店の若い者ども彼の女子始めとして、兎や斯う評判する時は、姉が耳へ八寸釘を、打たるゝよりも猶こたへる。若しも自然此の駕籠に、お山と嘉平次と乗り合うて居る處、今の客が見付けて、引摺り出して踏むとても、何と言譯あるものぞ。見こそせね聞きこそせね、定めてさい〳〵行く先で恥をかきつら

も飲みしこり、踊るやら謡ふやら、騒ぐどさくさ若草の、妻もこもれる駕籠の中、あられぬ姿顯はれて、姉や弟の見咎めん。さがは奥より尋ねんかと、怖さに猶も身を寄せて、締めあふ中の冷汗は、桐油漏る雨の如くにて、肌著も絞るばかりなり。奥の客がだら聲にて、「こりやさがは何してぢや。色が無うて飲めぬわい。頭痛がしようば此處へ來て寢やしやれ。どりやお迎へに自身お馬を出されう。」と表へ出づるひよろ〳〵足。駕籠の者ども生の醉ひ、「さが樣〳〵、迷子になつてか。返せ〳〵さが樣返せ。ヤア此處にか。酒飲むまいとて手が悪い。」と、姉に取り付く手をもぎ放し、「エイ狼藉な。さがとやらぢや御座らぬぞ。此方や道通り、雨宿りに茶屋の店へ腰懸ければ賣物と思やるか。阿呆くさい。」と叱られて、「南無三寳。さがのお山と取違へ、愛宕山へ登ろとした。御免々々。」のちろ〳〵目、四邊を見廻し、「扨こそな、愛宕山から瞰下せば、さがは一目に見付けたぞ。駕籠から帶の端が見えるぞ。さがを探し出さうか。」と、寄らんとすれば、「ア、これ〳〵、出まする〳〵免さんせ。」と、桐油の陰より這ひ出でて、「此方さんたち欺して、隱れん坊したれば、つい探し出された其のかはりに、何程なりと飲まさんせ。何處のお内儀樣やら麁相な、怺へて下んせ。皆ごんせ〳〵。」と奥に入れば、嘉平次はさがを離れし嵯峨松茸、選り殘されし風情にて、駕籠に縮んで居たりけり。姉は元より商ひ屋の、妻となる身の眼も早く、ちよつと見るより一寸やらず、駕籠なは弟の嘉平次。さて情ない身持かな。

音羽燒の、皿の鉢の茶椀のと、十五六兩が物賣つてくれ、晦日にお銀が渡る、請取書いておこせと、四五日前に取りに來た。定めし昨日請取つつろ。今日嵐の棧敷に、侍衆に附いて居た。俺も芝居を立ち樣に、棧敷の裏から訪れて、直に爰へ來てくれと、かた〴〵約束して來た。今ではこの平に命もくれる挨拶、筈違へる男ぢやない。芝居果てに長作が銀持つて來るか、爰へもばつとはずまうし、此方が出店の仕舞は、少し取る懸もある。二百目あればざゝんざ。伏見坂から道頓堀、一厘殘さず物の見事に仕舞うて、待つて居や節句から面も笠も脫がせう。ヤ借錢の笠は脫いでも傘は放されぬ。又降つて來た。南無三寶あれ見や。あの菅笠著て來る女房、鹽町の姉ぢや人、目の惡い角前髮は弟の幾松。」「ムウ〳〵ほんに恰好が能う似やした。それ〳〵此處へ御座んす。こな樣逢うてもだんないか。」「いかな〳〵俤も見せともない。あの幾松が手を引いて來る、腰の太い尻のひよつと出た女子、姉の內の竹といふ飯焚。彼奴が見た事聞いた事、その日の內に大坂中に事觸れ、此方が取沙汰、何のかのと親仁に告げるいやさに、少し濡れかけて欺したりや、惚れられ自慢で、もうその事を觸れ歩く。それで彼奴が名を筒拔とつけて置く。そなたも姉の知つてぢやげな。ア、うるさ。何處ぞにちよつと隱れ笠、隱れ蓑なき。」身の置き處、駕籠の雨桐油打明けて、二人が膝を組み合はせ、身を抱き合ひて身を忍ぶ。姉はそれとも道の邊の、淸水が見世に少時とて、「爰借ります。」とぞ休らひける。奥には猶

もつむ機も織る、算用もやり居る。顔も十人並なれど、其方を除けてこの世界に、女子があると思ふにこそ。綿をつまうが機織らうが、おきはは愚か中將姫の再誕が、蓮の絲で一重羽織織りやるとて見向きもする平でない。されども親の契約、少さい時から許嫁、今日祝言明日祝言とせがまるゝ。一理窟こねたの。これ親仁樣、私や畜生ぢや御座らぬ。胤腹わけねど兄妹、妹よ兄樣といひつゝも、夫婦になるは犬鷄のする業。男もたてた一つ屋の五兵衛は、畜生を子に持つたと言はせては私も不孝此方も一分廢る事、ならぬ〳〵と言ひ破る。そこらをつまらぬ鎌親仁、ォ、こりや出來した、イヤ能ういうた。ヤイ畜生吟味する根性で、茶屋者と腐り合ひ、親にも知らせず夫婦になる極めして、行先が借錢だらけ、人に疎まれ指さゝるゝ、是れが又人聞か。五兵衛が眼には畜生と見えるわい。茶屋者と緣切つて、おきはと夫婦になるまで、門詰も踏まさぬと、撲たぬ許りの首尾なれば、主屋へとては禁制。姉壻は他人なり、ずんど堅い商人。一人の弟は眼病氣。問ひ談合も誰とせう。いろは茶屋から坂町かけて、負うた門は七八軒、銀高僅か一貫目餘り。身を刻んでも當なければ、騙落か自害と思ひ定めた所になう、生身に餌食天道人を殺さず。覺えてかこの前扇風呂で、其方の事で大喧嘩した、西國橋の印傳屋の長作、味な事でその喧嘩から、兩方心底見屆け、齒の根も喰ひ合ふ懇。彼奴は所帶持なれば、少しの取替もしてくれる。この長作が肝煎で、中國のお屋敷へ、親仁の店から錦手乾山

此方さんが、大和橋の濱納屋借つての出店も、私が近くに居よう爲。懇な宿では斷りたて、出店へ泊りに往く夜さは、夫婦所帶をする心、同じ寢るのも身につく樣で嬉しい。されども一度は父御さんの御耳へ、入れねば如何もならぬぞえ。聞けば姉御さん、堺筋の鹽町邊に緣付して御座んすとや。この姉さんなど賴みまし、前方から父御樣によう思はれて下んせ。昨日の晦日も內に居さんせず、譯の惡い評判聞けば、頭髮一筋づゝ拔かるゝよりも苦しうて、氣を揉んでも踠いても、身は裸なり工面はならず、大方は四日までと私が請合ひ置きやした。私一人なら死んでなりと了はうが、此方さん惡う言はするが口惜しい悲しい。茶屋の勤めする者は、人の小息子そゝのかし、惡道に引き入れるの不孝者にしてのけると、十人が十人で町の衆は思はんす、淚が溢れてうとましい。私可愛が定ならば、父御樣とも姉弟御とも、首尾能うして下んせ。」と、淚ぐみたるしんみの詞、更に勤めと思はれず。嘉平次も共淚「今に始めぬ其方の心底、過分々々。ハテたつた一人の父親なり、一つ屋の五兵衞とて、若い時は男を磨き、物の筋道六義を立て、無理をいふ人でもなく、子供が少しの色遊び、五百目一貫目遣うたとて、悔む人ではなけれども、どうとも斯うとも叶はぬ事があるぞいの。今までは隱したが、弟の幾松と俺とが間に、十八になるおきはといふ妹がある。元は在所一つ屋の叔母の娘、後々はこの嘉平次と從弟どし女夫にする約束で、藁の中から養ひ、死なれた母の肝精で、物も書き縫針、綿

ちければ、「なう二日逢はぬは如何ぢやいの。」と、顔差し入るゝ編笠の、下こそ戀の宿りなれ。嘉平次も懷かしさ、「この中は田舍客で、平野屋にぢやと聞いた故、往きか戻りに顔見よと、濱側を用ありけに、往つつ戻つつ、入りもせぬ和中散買うたり、心太屋の水機關も、さう〳〵は見て居られず。うろうろすれば長町脇の子供が見知つて、ありや〳〵東の難波燒が坂町通ひ。柏屋通れば二階からちよいと招く、のつ是れ何としよと惡口いへば、四邊からは、きよろ〳〵見る。親の內へは往かれぬ首尾、出見世にも尻すわらず。いつその事遠がけに、蜆川の芝居の曾根崎の狂言見て、醬油屋の德兵衞と我等が思ひ引合はせ、憂きを晴らす合點で、その通り一筆書いて、小辨を賴うで置いて來た。その文見てか。今日此處へおぢやつたは、天神樣の御利生、神も佛も馴染がほん。親仁の見世の燒物に、一文宛でも天神樣、お馴染ゆゑぢや。」と、言ひければ、「さればいな。その文見ると嬉しうて、客を勸めてこの天滿といふ思ひつき。幸ひとこの淸水屋は、私が前方扇風呂に居た時からの近付ゆゑ、爰を賴んで芝居へも呼びにやりやした。それに付けても、父御樣の內方へも、また往かれぬ首尾とある。これ逢ひたい見たいは私とても、眞に〳〵寢た間にも忘れねども、終には末で夫婦になる大願ではないかいの。その間が互の辛抱。人は次第に身を持ち上げるが眞なれど、扇風呂のさがともいはれた身が、晦日節季は前垂掛で、うら屋せと屋けんどん屋三界、懸取に步く樣な勸めするのも澤山に逢はう爲。

駕籠の衆何として遲かつた。お客樣は待ち焦れ、たつた一人飲んでぢや。いざ先づあれへ。」といひければ、「さればいの、*ごつい客の癖に、揚の日は半時も、側に置かねば損のやうに、吸ひ付いて居たさうな。それで勤めが續くものか。これ駕籠の衆頼みます。私は雨氣で頭痛がして、休んで居ると間に合はせ、杯の相手になつて、日頃の手並にいきつかして下んせ。」「どつこい氣遣ひなされますな。任せてをけでも盥でも、飲み付けてやりませう。是れおか樣精出して豆腐燒かつしやれ。鰻も四五本燒かつしやれ。冷飯も燒かつしやれ。」と、からげおろして入りにけり。さがは主人の側に寄り、「さつきにいうておこした硯川の、嵐の芝居へ便宜して下んしたか。樣子は如何で御座んすぞ。」「何の如在いたしましよ。お前からの書付を、其の儘持たせてやりました。心中の狂言の口上の處、直に觸れてもらうたと、使は疾うに戻つたが、もうお出でなさるゝ筈。定めし狂言に見惚れて、それでかな遲いか。」と、言ひつゝ炙る豆腐より、さがが心や焦るらん。假初の薄茶茶椀も馴染みては、濃茶茶椀屋嘉平次は、さがが情の錦手に、染め付けられて親兄弟の、意見も耳に蓋茶椀、深編笠も隱れなく、さがは見付けて、「これ此處ぢや〳〵。」と招けば、ちよこ〳〵走り、牀几に腰をうち懸けて、側へ寄りたい抱き付きたい、言ひたい事のわくせきも、主人が見る目憚りて、他人向なる折からに、奥より、「何ぞお肴。銚子替やや。」と手をたゝく。「あゝい。」と引くのが定まり、蒲鉾梅干粋な花車、氣を通して立

をやりての玉が、忍ぶ戀路を*石臺の、女蘭男蘭は*呂州の姿、*白と眺めて白牡丹、しやんとしてからいやみなく、しかも色香の深見草。唄 思ひきれとは死ねとの事か。生きて添はれぬ浮世なら、いつそ煙になりたやな。辛氣燃して待つ宵に、似たりや似たり桂仙花、暫し休らふ木陰を宿の、枝は木槲我が身はちやこく、うるさき里の勤めぞと、誰かはつげや柏槙や、縱南天に小手毬に、いとし男と射干の扇のなりに末廣の、逢瀨を祈る神垣に、柏手ならぬ柏屋の、我が名も嵯峨の若楓、戀草千草思ひ草、眺めらるゝも眺むるも、おなじ色なる袂百合、扇翳して神々詣で、安井生玉清水坂を、しやなら〱しやなら〱、ちよこ〱走り、しやんとして見よや。唄 柏屋さがは*はすはに御座る。戀の意地酒ヤトン〱、手元でかゝる、おさへてかゝる。どうでもさがは濡者ぢや。油壺から出すよな女房、しんとろとろり見とれる女房。すねる男をほつかけて、そこら〱をずんずと飲ましやる〱、サアエイトン〱、エイトン〱トン〱。*しんぞ一夜はお手枕、日影彩る五月棚、草の異名は種々に、よむともよしや葭簾、西の茶屋から我を呼ぶ。忙しないとて見殘して、見捨つる花や、三重 恨むらん。色の勤めのうきふしの、峠を越えて伏見坂、戀のないにもならひとて、あたら肌を柏屋の、さがは大和の一見客が、今日は天滿の社内の茶屋で、酒と出かけて遊ばんと、一昨日からの揚げ續け、空も雨氣の駕籠の桐油、賣木の花に氣を晴らし、清水屋にこそ入りにけれ。茶屋には待ちかね、「エイさが樣。

嘉平次
おさが　生玉心中

上巻

次第今に傳へて老松の、今に傳へて老松の、變らぬ色を頼まん。その松が枝の宮柱、今に榮えて數萬人、心々の願立に、神の御身さへァ、＊いそもじの、まして流れの憂き節や、日毎に替る身の勤め、今日も苦海の神詣で、道頓堀を天神へ、駕籠も一里を飛梅や、社の圍り浮れ出で、見渡せば數々の、花屋植木屋立ち竝び、色賣る〳〵花の色賣る、我も色賣る身は仇花の、花に値の高下があれば、勤めの品も段々の、品々あるも道理や。花と色とは元一つ。されば身を賣る金の名を、花代とこそ名づけけれ。先づ鉢植の作り松、すんと流しの一枝は、太夫の威勢備はりて、悋氣の嵐手管の雨、無理な口説の霜雪も、騒がず痛まず彌增しに、情の綠はびこりて、松の位とたとへられしも憎からず。冷泉春立ち行けば色失せて、さびしき梅も捨てられず。是れ天職の姿にて、一夜流れの軒端の梅の、あだな袂に香をとめて、唄さんさ思ひの種かいの。根から嫌なら添ふ氣ぢやないに、瞞されて憎や辛さを逆に、客に泣かせてきぬ〴〵の、別れあやなき菖蒲草、局女郎に擬へて、牡丹畠の名盡しに、大盡も目

た、叶はぬ〳〵。それ衣ひつぱげ。」と、どつとよれば、「ア、是れ〳〵。出家侍さとりは同然。助くるといふ義理は、三世に渡る衣の徳。愚僧が念願相叶ひ、二人が命下さるれば、これ現世を助かる衣の徳。もし又罪に沉んでも、愚僧が弟子になすからは、未來をたすかる衣の徳。未來でも現世でも、たすかるといふ文字二つはなし。サアたすけた。」と呼ばはる聲、諸人、「わつ。」と感ずる聲、道順夫婦の悦びの、聲はつきせず萬年暦、昔暦新暦、當年未の初暦、めでたく開きはじめける。

大經師昔暦　終

は劍の金性の、刃にかゝる約束か。私は土性墓の土、何とてはかに埋まれず。つひに木性の木の空にかばねをさらし、名をさらし、なんど小歌につくられて、つよきおきめに粟田口、けあげの水に名をながす、おさん茂兵衛が新精靈、恥かしながら手向草。おなじ罪科の下女が名の、玉は冥途に通へども、魂魄此の世にとゞまつて、共にうき名はくたすとも、冥途は主從一所にて、娑婆で手なれし玉がわざ、無間の釜で茶をわかし、往來の人の廻向うけ、我が身の悟りひらく日。ア、嘆くまじ今さらに、何くよ〳〵と凶會日の、悔むもよしな引きよせて、結べば露の命にて、とくればもとの道芝に、やがて亥子や五里六里、十死も過ぎてこれぞ此の、小川通は三途の川、牢の町さへ近づけば、見物羣集とり〴〵の、暦が噂くりかへす。思へば私が嫁取よし、我が昔の元服よしの、日どりもよしや蘆に鷺、裾の模樣も繪にうつし、筆につらねて末の世に、かたりつゞけて三重聞きおよぶ。道順夫婦羣集の中をおしわけ〳〵、「犯せる罪が重ければ、又慈悲といふ名が重し。磔にも獄門にも、此の爺嫗を代りに立て、ふたりを助け下され。やれおさんかはいや。」と、縋りつけば警固の者、「寄つたらぶつ。」と追ひはらふ。黑谷の東岸和尚、衣の袖をまくりあげ、韋駄天の如く飛び來り、「出家に棒をあてたらば、五逆罪々々。サアおさん茂兵衛、此の東岸和尚が助けた。」と、持ちたる衣を打ちかけ〳〵、肱をはつて立ち給ふ。役人頭腹を立て、「罪科極まつたる囚人を助くるとは、上を輕しめたる御坊のしか

現はれて、不義ぢやのなんの庚申、今日はあしたの甲子と、知らであふ夜の其の報い、世上の口にうたはれて、合はせて見てもあはぬ中、丸い苧桶に角の蓋、まを績みためて、綯ひまぜて、今は我が身の縛り繩、そしりをうけん情なや。祭文おさん茂兵衛に言ふやうは、よしなき女の悋氣ゆゑ、何の咎なきそなたまで、あれ不義者とあやふ日、つひに命のほろぶ日、湯殿始めに身を清め、新枕せしひめ初め、かの著衣始めひきかへて、ひかるゝ駒のくら開き。思へば天一天上の、五衰八專閒日もなし。只何事も坎日と、聲も涙にかきくるゝ。歌茂兵衛やうく顏をあげ、こは愚かなりおさん樣。火に入り水に入る事も、さだむ因果とあきらめて、せめて未來の黑日をのがれ、二季の彼岸に到らんと、念じ給へや南無阿彌陀、南無阿彌陀佛を帆にあげて、ともに弘誓の船のりよし。紅蓮の井戸掘焦熱の、地獄のかまぬりよしなやと、いそがぬ道をいつのまに、こゆる我が身の死出の山、死出の田長の田がりよし。野邊よりさきを見渡せば、過ぎし冬至の冬枯の、木の間くにちらくと、ぬき身の槍の恐ろしや。「あれでそなたの身を突くか。」「是れでそもじを殺すかや。」「血忌も今はいつはり。」と、二人は顏を打合はせ、くどきこがれて泣く涙、馬の尾髮やひたすらん。またさえ返る夕嵐、雪の松原此の世から、かかる苦患に往亡日、島田亂れてはらくく、顏にはいつの半夏生、縛られし手のつめたさは、我が身一つの寒の入、涙ぞ指の爪とりよし、袖に冰をむすびけり。つくぐ物を案ずるに、我

心要證據人の首を討つて、何を證據に詮議有るべきしるべもなし。殘念々々。二人の罪科極まつたり。首も一所に京都へわたせ。早々罪人引きませい。」「承る。」とひつ立つれば、梅龍つゝ立ちだんだ踏み、「エ、〳〵早まつた仕損じた。七十に及ぶ梅龍が、でかしだてして一生のあやまり。むだむだと腹切るも、ひとり物に狂ふに似たり。相手がな欲しやなあ。ヤア助右衛門よい相手。おのれを切つて人を殺したあやまりと、共に罪科に行はれん。」と、するりぬいて打ちつくれば、眞甲をしてやられ、朱になつて逃げたりけり。「首をとらずにおかうか。」と、驅け出づるを大勢取りつき「狼藉させぬ粗忽させぬ。」と抱きとむる。「狼藉合點ぢや。はなせ〳〵。」と驅け出すも、とまるは老の力にて、とまらぬものは科人を、引き行く駒も目に涙、轡にかゝる白泡の、哀れをのこす。 三重

おさん茂兵衛こよみ歌

乘る人も乘せたる駒も、つひに行く道とは知れど、最期日の今日か明日かの我が身には、我のみ消ゆる心地して、數多の人の命ごひ、それを杖とも柱暦の紙やれて、向ふそなたは都の惠方、ふたりが身には金神と、思ひ返せば胸塞がり、月ふさがりの駒の足、隙ゆく駒の世のたとへ、八十八夜は及びなき、年は十九と二十五の、名殘の霜と見上ぐれば、空にしられぬ露の雨、はら〳〵ほろ〳〵繩目に傳ひ、鞍壺につたふ涙の十方ぐれ、泣く〳〵ひかれ行く姿、よその見るめも哀れなり。人目盜みて

と、つらぼね三つ四つふみつけ〳〵、さらぬ顔にてゐたりけり。かくと聞くより助右衛門、嬉しげに走りつき、「私は此の度お願ひ申しあげし、御領内助作が從弟、京大經師以春手代助右衛門と申す者。御苦勞千萬に、おさん茂兵衛御からめ下され、我々主從本望大悦仕る。繩付二人請取り、早々のぼり申したし。お渡しなされ下され。」と、謹んでのべければ、役人氣色をかへ、「そいつ引きのけ。推參至極な。繩付を渡せとは、おのれに賴まれ捕りはせぬ。京都より解狀によつてからめとる。すぐに京の牢屋へひき渡す。殊にだん〳〵詮議ある者。慮外をぬかしたらおのれ共に、搦める。」と叱られて、助右衛門もみ手をしてのく所へ、赤松梅龍早駕籠にてかけつけ、首桶ひつさげつか〳〵と出で、「われらは大經師以春が下女、玉と申すものの請人すなはち伯父、赤松梅龍と申すもの、此のたびおさん茂兵衛驅落の事、ゆめ〳〵兩人の不義はなく、此の玉がよしなきことばを聞きちがへ、嫉妬の心餘つて、まちがひのあやまりにて、思はず不義の虛名をとる事、詮ずる所玉めが口からなすわざ、科人は一人。すなはち玉が首うつて參るからは、兩人の命御助け下さるべし。」と、蓋をとれば玉が首、おさん茂兵衛は一目見て、「はや先だつたかはかなや。」と、きえ〳〵とこそ成りにけれ。代官の役人手を打つて、「ハァ、はやまられた梅龍。此の兩人の囚人は、科の實否定まらず。京都に於て媒の女、其の玉を證據に詮議あらば、事の次第あきらかに顯はれ、兩二人共に助かる事も有るべきものを、肝

悟した合點ぢや。」と、表を見れば捕手の役人、助作をさきに立て、「とつた〱、とつた〱。」とみだれ入る。茂兵衛臆せずつゝと出で、「見ぐるしいお侍。あひ口一本ささぬ町人、手向ひはいたさぬ。倅の時より柔術あて身を稽古して、すはといはば腕は細くとも、お侍の五人や七人は慮外ながら、ぎやつと言はせてのめらせ樣も知つたれども、もとのおこりは主人の勘氣。主人に手向ふ同然と思ひ手むかひは仕らぬ。此の女中につき、申譯あれども、それもいらぬもの。不義ならば不義にして、サア尋常にくゝれ。」「とつた〱。」とひつぷせ〱高手小手、顔色變ぜず縛られし、男も女もけなげさに、捕手の武士は我を折つて、哀れといはぬ人もなし。おさんすゞしき眼の中にて、助作をはつたとにらみ、「エ、さもしい土百姓。おのれ少しの慾にめでて、よう訴人しをつたな。申し殿樣。あいつに八百目の銀を預け置きました。かうなつた身に金銀はいらねども、これは親のなさけの銀、京へのぼして黒谷へ上げて下されませ。」と、いひもきらぬに助作、まが〱しき顔付にて、「ア、おそろしい女め。いつおのれに粒三文もかつた覺えはない。五十日ばかり家かして、宿賃の米の味噌のと算用したらば、二三百目もくる筈ぢや。八百目あづけたとはいきがたりめ。」と、あらがふ所を、茂兵衛繩取引立て、助作が横腹はつたと蹴倒し、「これ式のめくさり銀、おのれ風情に僞りを言はうか。よいよいおのれにくれた。八百目の銀、うぬが根性相應に、現世は長者と悦んで、閻魔のまへで算用せい。」

案内もせずつゝと入り、「ヤア新六様、さつきは御出でなされた。預りの八百目、たゞ置くよりはと、ちつと手まはし致し、急にはどうもとゝのはぬ。一兩日待つて貰ひましよ。こなさまもあんまりな。あの様な傾城殿請出したうへに、銀つかふといふ様な、昔の心おやめなされ。」といひければ、「いやこれ助作さん、あのさんの入用ではないわいな。皆私が入用ぢや。勤めの身はな、全盛する程世間がはつて、つらい物でごんす。懇な客から借つた銀で、今宵中にかやさねばわけが立たぬわいな。其の代りにあのさんの勘當がゆりて、大坂へいなんしたら、夜でも夜なかでもいうてごんせ。八百貫目や八千貫は、誓文くつされ、利なしでやんす。」といひければ、「あの通り〳〵。近頃御苦勞千萬ながら、どうぞ頼み存ずる。」「ム、いかにも聞きとゞけた。それ程急なと知らなんだ。七つ過ぎ暮までに急度持つて來ませう。夫婦の衆の請取とる。必ず内にござれや。」「オ、動きもしませぬ。」と約束かたき、銀が敵と知らざりし、身のなるはてぞあさましき。「扨々とろりと一ぱい參らせた。今の傾城の物眞似芝居は、御すきの一徳。銀請取るとそのまゝ、驅け出していそいだら、夜の中に七八里は心やすい。宮津におちつき、切戸の文殊の法印様に母方の縁あれば、頼むにひきはなされまい。そろ〳〵用意。」と帯しなほし、身拵へする中に、かな棒の音人足しきりにちかづきたり。「ヤ、氣味わるい。ハアなむ三寶口惜しい。助作めに出しぬかれた。おさん様ものがれぬ。未練なはたらきあそばすな。」「オ、覺

栗賣の柴賣のと、丹波から京へ出るもの多し。あれが言ひこれが聞き、知れたも不思議でござらぬ。助右衛門めを始め、旦那の一家が、鄰在所に宿取つてゐるげな。其の上たつた今、但馬の湯入を乗せて通る駕籠舁が、*めいよな事をいひました。大經師のおさんが、奥丹波に隠れてゐる樣子が知れて、京のお役所から、爰の代官所へ解狀がついて、在々を尋ねる、其の使の早駕籠を乗せて、老の坂の下り口から、二里の間を一貫四百。七百づゝあたゝまつたと、たつた今いうて通りました。」と、身をふるはしていひければ、「ハテ何とせう。今までが不思議の命。されども父さま母さまの、歎きの程がおいとしい。一日でもながらへるが孝行。今夜のうちにのかうでは有るまいか。」「いかにも〳〵、かのお志の一貫目、二百目つかうて、殘る八百目、此の家主助作に預け置きました。大事のお慈悲の此の銀を、こなたとわたしが急度だかへて死ねばとて、人の寶になす事は、冥加につきると思ひ、今寄つて申したれば、おつつけ持つて行かうと申す。此の銀を腰につけ、丹後の宮津に兄弟同然の者が有る。そこまでどうぞのきませう。それまでに運つきて、死ぬる期に極まつたらば、日頃申すとほり、惡緣と思うて下されませ。私ゆゑに大事のお身を棄てさせました。」と、涙ぐみ打悄れて見えければ、「又おなじ事ばかり。それは互の因果づく。只忘れぬは二人の親。扨いとしいは幼馴染の以春樣。こなたも私も微塵濁らぬ此の心、いひわけして死にたい。」と、又さめ〴〵とぞ泣きゐたる。家主の助作

てござるゆゑ、此の頃漸う見舞に來た。此の在所で私は島原の傾城が、請出されて來てゐると、莊屋にも誰にもいうて置く。もし人がとうたりとも、島原で見た女郎ぢやというてたも。ちと樣子も有るほどに、京ではなほ沙汰なし、賴むぞや〳〵。さらばまちつと祝はう。」と、錢ざしぬいて五六十、半紙二枚にもらすなと、わが名をつゝめば惜しからず。「ハアかさね〴〵おめでたい。二三日中に京へ出まする。烏丸へも參り、御嘉例のごとくお手代衆、助右衞門樣茂兵衞樣とお杯致しましよ。御無事な通り話しましよ。」と、出でんとすれば、「なうこれ〳〵、その烏丸でなほかくしたい。ア、酒に醉うたら忘れて、ひよつといやればわるい。此の春はもう烏丸へは行かしやんな。來年めでたう、私がのぼつて祝ひましよ。烏丸の代りに爰で杯出したいが、折しも酒をきらした。これで飮んで下され。」と、二三匁の豆板二つ、のませぬ樽の口塞ぎ。「ハアなんのこれで申しませう。本の樽より結句木樽に醉ひました。」と、甘いめにあふ萬歲の、舌鼓うつて出でにける。おさんも憂世恐ろしく、うつかりとなる所へ、茂兵衞も色靑うして立ち歸る。「エ、きり〳〵戾りはせず、此の身になつて惠方參り所か、たつた今每年京へ來る、得意の萬歲が來て、不思議立てたを、につこらしう譃ついて、いなす事はなせたが、どうやら爰にも恐氣がたつて、長う居らりよと思はぬ。」と、語れば茂兵衞もあきれはて、「サア〳〵盆も正月も一時に來ました。天知る地知るで、こつちこそ見しらね。今の萬歲の格で、

正月三日の寅の一天誕生まします。若えびすあきなひ神と顯はれ給ひて、商ひ繁昌護らせ給ふは、實にめでたう候ひける。やしよめ〳〵、京の町のやしよめ、うつたるものはやしよめ、うつたる物は何々、大鯛小鯛鰤の大魚、蚫榮螺、はまぐりこ〳〵、蛤こうとうつたる物はやしよめ、京の町のやしよめ、そこをば打過ぎ、そばの棚見たりや、そばの棚見たりや、豆に小豆、大根蕪、加賀の牛房毛牛房、からしの粉山椒の粉、辛い胡椒召さいの。やしよめ〳〵、京の町のやしよめと、うりためて千貫、つなぎたてて萬貫、惠方の御藏づつしり、納めて家もふく〳〵。爺樣婆樣父樣母樣、和子樣姫御前、産みならべてふく〳〵ふく〳〵。」ほゝんほんとぞはやしける。「オ、めでたい〳〵。よういはやつた。父樣母樣御無事な、萬歲祝ひましよ。猶御壽命は百。」づゝみ、盆に入れてさし出す、おさんの顏を不思議さうに、「ハアこれは奧樣、お久しうござりまする。御機嫌ようかはつた所で、正月をなされまする。」「ア、つがもない。私は萬歲に近付はないわいの。」「なんの私らを見覺えはなされますまい。毎年お庭で舞ひまして、おまへはおうへに結構な布團しいて、腰元衆つらりとならべて、御見物なされました。京烏丸大經師の奧樣、よう覺えてをりまする。田植が御すきでござりました。なんと一つ舞ひましよか。」と、言へばおさん胸おどろき、「目かどのつよい人ぢやの。毎年の事でもこちはすきと覺えぬ。必ず〳〵いづかたでも沙汰してたもんな。私が里の父樣、此の所へ去年から逼塞し

さらば。」の泣き別れ、父が歸れば母がとめ、母が歸れば父がとめ、おさん茂兵衛は歩みかね、名殘惜しさに立ち止り、小高き土手にのび上り、二人見送る影法師、賤が軒端の物干の、柱二本に月影の、壁にありありうつりしは、憂き身の果ては捕はれて、罪科逃れぬ天の告げ。母は驚き、「なうぢい樣。情なや爰に磔が。」「悲しやおばゝ、おさん茂兵衛が影法師。天道の力にも叶ふまいとのしらせか。」と、又たへかねて泣く聲に、内より玉はくゞり戸明け、顔指し出す其の影の、同じく壁に映りけり。「あれ又爰に獄門が。」淺ましや此の首の、其の名は誰としら露の、「玉ではないか。」「おさん樣。」「さらばさらば。」の聲のうち、はや黑谷の後夜の鐘、生滅々とひゞきくる。はては寂滅爲樂ぞと、名殘悲しき。三重

下之卷

春立つと、去年の雪げをそのまゝに、かすむも山の奥丹波、軒の氷柱もとけわたり、谷の水音しつたんたん、ほんほんほんほんとなる鼓、萬歳「德若に御萬歳と、御代も榮えまします。ありきやう有りあら玉や、年立ちかへるあしたより、水も若やぎ木の芽もさし榮えけるは、實にめでたう候ひし。京の司は關白殿、退位の帝ひのもくだいり、王は十善神は九善、よろづやすやす、浦やすが木のもとにて、

人でも、二十四時は待つて見る。唐天竺日本國の名醫の藥を浴せても、天下の法を背くといふ、大病には叶はぬぞや。たつた一つの頼みには、以春の方へ手を入れて、心をなだめ見るばかり。もし其の内召捕られ、すは最期といふ時は、白髪頭を大地の底へすりつけて、命乞も身がはりも、願ふといふは其の時よ。なまじひ親がかくまふと聞えては、さきに我が立つて、許したうてもゆるされぬ。親下人にも見はなされ、憂目をするときこえては、げには先に憐みあり。ヤイおさん。畜生よ犬猫よと、叱るとて恨むるな。願かけぬ神もなく、祈らずといふ佛もなく、三光天ををがむとて、七十になる道順が、朝毎垢離を取る時は、總身の骨は凍れども、娘がおきめにあふならば、此の苦しみを百千萬、重ねても物の數かはと、こらへて月日を拜するは、あの月天子の照覽あり。利生は無下にはよもなるまい。茂兵衛たのむ煩はすな。これこゝに銀子一貫目、家質の利足のたし銀に、黒谷の和尙樣より借つたれども、世間はつて何にせん。家を町へつき出し、寺へ返す此の銀、やるというてはやられぬ。貰ふというては貰はれまい。道順が涙にくれ、うろたへて落いたぞ。落した物はひろひ德、罰があたれば落したもの。拾うたものに罰はない。おばゝおぢや歸らう。」と、夫婦せきあげむせび入り、二足三足立ち去れば、おさん茂兵衛「わつ。」と泣き、銀取り上げて額に當て、「あんまり深い親の慈悲、かへつて冥加が恐ろしい。なう父さま母さま。」と、呼びかへせばふり返り、「何にもいふな〳〵。さらば

きを見れば夜も更けて、出でたる月はさえながら、親子の袖ぞしぐれける。茂兵衞はかきくれて、ものをも言はず居たりしが、「我ら男のつらをさげ、か樣のわざを仕出し、のめ〳〵ながらへ在る事も、おさん樣のお命を、何とぞと存ずる故、お宿もとへおさん樣を御同道なされ、御命たすけ下されば、科を私ひとりに受け、物の見事に死にましたい。御料簡頼み上げます。」と、手を合はせ泣きければ、「ア、おろかしい事いふ人ぢや。われ一人いきながらへ、いひ譯が立つ程なれば、二人いきても同じ事。取りちがへうがどうせうが、以春といふ男持ちながら、そなたと肌ふれ寢たは定。形は生まれかはつても、此の惡名は削られぬ。そなたはいかううろたへが來たさうな。」と、恥ぢしめられて茂兵衞も、「アツアさうぢや。ハアあれ三條通の車の音、夜明というて程もない。行くさきあてどはなけれども、私在所丹波の栢原まで落ちて見るばかり。サア暇乞なされませ。」と、言へども親子一生の、生死をあらそふ今はの別れ。月出ぬ先は顏見えず、いつそ思ひ切るべきに、見交す顏は見きられず、なまなか月も恨めしく、母はもだえて、「これ親父殿。脈のあがつた死病も、もしやと藥はもつて見る。天にも地にも、たつたひとりの大事の娘、見付けらるゝと殺さるゝ。手ばなしてやられうか。ござれ爺嫗つき添うて、死なば親子一時に。」と、氣も狂亂のくどきごと。道順もたへかねて、「それはおしやるまでもない。いかなる大病難病でも、藥一味の加減にて、たすかるも有るならひ。息の絶えた死

一滴こぼさねど、嫗の泣きやるが悲しい。」と、「わつ。」と許りに怺へかね、餘所をも恥ぢず大聲あげ、夫婦は老のいきぎれに、むせ返りてぞ歎かるゝ。茂兵衛はひれふして、とかうの詞なくばかり。おさんは母に抱きつき、「二人に不義のあやまりは、微塵程もなけれども、ほんの因果のまはりあひ、いひわけたたぬしなとなり、京洛中に畜生の名をながし、罰のあたつた此の上に、誓文立てん樣もなし。父樣のお腹立、母樣のお恨みも、私かはいい上なれば、來世をかけて形見の詞、我々は天の網、とてものがれぬ命の內、親達にあふからは、木の空にさらされて、屍を槍でつかれても、思ひ置く事ござらぬ。」と、くどき歎けば、「まだぬかす。其の槍でつかせまい、木の空へあげまいと、思うて胸をこがすわや。」と、又たえ入つて泣き沈む。母は涙の數珠袋、ふくさ物取り出し、これ一步二つ白銀も少し有る。いとしやいかう肌うすな。路錢につきてぬぎやつたの。これを茂兵衛に渡して、駕籠に乘せて京の地を、一足も早う立ちのいて、必ず〳〵悲しい事、聞かせて泣かせてたもんな。」と、泣く〳〵渡せばおし戴き、「忝うござんする。中に著た淺葱縮緬は、奈良の町で賣りはなし、此のうへに著た蘆に鷺、此の秋おまへの下されて、未來までも母樣の、形見とおもうて著ますれば、寒いとも覺えず。見付けらるゝをそれぎりの、命の內は袖乞でも。賴みないは後生の事。これはそのまゝとめ置いて、死んでの跡の弔ひに。」と、歎けば母も、「ア、悲し。また死用意ばかりを。」と、つきぬ涙の露霜の、白

下立賣の親父樣。」「ナウ父樣かいの。」と走り寄り、取り付く所をついとのき、「ヤイ畜生に父樣と、いはるゝ覺えはないわいや。」と、「わつ。」と泣く〳〵ふりあげて、うたんともがく杖の下、母はあこがれ火を吹き消し、娘を袖におしかこひ、「なう親父どの、おさんめは逃げました。もうこらへて下され。」と、影をかくすは母の慈悲、打つ杖は父の慈悲、心かはると子や思ふ、哀れはおなじ淚の闇、迷ひの上の迷ひなり。道順不覺の淚にくれ、「道順が未來も早知れた。獨り娘の事なれば、聟を取つて家をつがする筈なれど、近年諸國の銀もすまず、家屋敷をも人手に預ける逼塞の身。此の跡を娘に渡し、苦勞さするかはいさに、一代切りに家を捨て、よめりさせた親心、先とてもその合點、道順が娘ならば拵へいらぬ、みやげもいらぬ。育てた親に見込が有る、娘の心がみやげぢやと、したはれた根性に、畜生の魂がいつのまに入りかはつた。恨めしや情なや、池にすむ鴨や鴛を見よ。軒に巣をくむ燕も、雌一羽雄一羽、夫婦番ひは生ある物のならひぞや。父親さま〴〵の毛色をうむは、犬猫ならでどこに有る。親は犬にはうみ付けぬ。猫になれとは誰が育てた。畜生に對して詞はかはさぬ。これは我が獨言。とてもかうなるからは、山の奧にも身をかくし、のがるゝだけは遁れもせず、京近邊をうろたへ、今のまに召しとられ、洛中を引廻され、親が大事にうみつけて、撫で育てた體を、槍でつかれて死にたいか。體にも恥がかきたいか。生けうが死なうが此の道順は、悲しいとも思はねば、淚

其方と、三人よつたそぶりなりとも人に見られては、そりや一つ穴のいたづら狐、一所によつたは、扨こそ玉が媒で、おさん茂兵衛が不義は極まつたと、いひ立てられてはいよ〳〵科が重う成る。爰をよう合點せい。つれなうあたるはお爲ぢやぞ。此の事ゆゑにそちも繩目の恥にあひ、此の如く預けられた。しかれば同罪はのがれがたい。首を切られ手足をもがれ、ためし物になるとても、主と頼んだ人ゆゑ、命惜しむな。梅龍が姪ぢやぞ。最期を淸う死んでくれ。」と聞ゆれば、玉が聲、「それは氣遣ひさしやんすな。とうから覺悟極めてゐる。伯父ひとり姪ひとり、私が死んだら伯父樣の、さぞ便りなうおぼしめそ。茂兵衛殿はどうしてぞ。いとしいはおさん樣、何處にどうしてござるやら、常がはかない正直な、心を知つた私なれば、何かに思ひやります。」と、泣き入れば梅龍も、「オ、そちがいとしいはおさん殿、身は下立賣の親御達の、歎きが思ひやらるゝ。」と、内に伯父姪くどき泣き、外に二人が立聞いて、涙をもらす戸のすきま、聲なき冬のきり〴〵す、壁にすがりて泣きゐたり。血筋がむすぶ親子の契り、おさんの親道順夫婦、娘の浮名かくれなく、命がつらき老後の恥、人に面もあはされず、月出ぬさきの心の闇、黑谷の菩提所へ、徒歩の夜道の夫婦連、小めろがさげし風呂敷や、つゝむ涙にとぼ〳〵と、行き過ぐる軒の下、二人しく〳〵泣き聲の、耳にとまれば立ちどまり、「おばゝあれ合點のいかぬ何者やら。」と、うとき老眼すかして見る。行燈の影に茂兵衛見つけ、「あれおさん樣、

して、白無垢一重憲法に、裾模樣有る蘆に鷺、足に任せて奈良堺、大津伏見をうか〳〵と、夫婦にあらぬ夫婦の樣、神佛にも人間にも、うとまれはてし身のうへやと、互の心恥かしく、顏打ちあげて顏と顏、見合はせ顏をあかめては、淚の外に詞なし。「なう茂兵衞殿、とても私らは今日あつて明日ない身、命を命と思はねども、いとしや玉はどうなりやつたと、案ずるはこればかり。只ゆかしいは父樣母樣、何ぼ思ひあきらめても、逢ひたうござる。」とむせ返り、あゆみかねて泣きければ、「オヽ、逢ひたいはお道理。我とてもお目かけられしお主筋、お名殘をしさは同然。爰が彼の玉が在所岡崎。あれあの行燈の出た所が、すなはち伯父の宿、これによつてお里の便宜玉が噂も、聞かうと存じ參りしが、內の首尾を聞き合はせず、案內するも麁相なり。」と、軒に立ち寄り窺へば、內には玉か泣くころの、わけも聞えずくどき事、伯父梅龍が聲として、「ヤイ玉、此の本はこの伯父が每夜講釋する、太平記二十一卷目尊氏將軍の執權、高師直といふ大名、鹽冶判官といふ、これも歷々の武士の妻に心をかけ、末代まで惡名を殘し、鹽冶判官もそれゆゑ命を失うたは、もと侍從といふ女が媒からおこつた事。おさん殿と茂兵衞と、眞實の間男でないに極まつても、二人つれて驅落めさつたは定よ。此の二人にいづ方であうたりとも、萬一爰へ尋ねてござつたとも、かならず〳〵物いふな。見ぬ顏せい。かういへばつれない水くさい樣なれど、さうでない。間男といふ浮名のたつた二人の中へ、媒といはるゝ

か解きをるか。」としめつくる。「あいたゝ。只の町人と違うて、禁中のお役をすれば、本繩にかけても大事ない。解いてほしくばそつちで解け。」「ヤァ汝めは繩付で預くるさへ、昔からない作法に、禁中の御用を聞く町人は、本繩かけても大事ないとは、どこから出た掟ぢや。上を輕しめた慮外者、どうしても大事ない。」と、駕籠の棒引きぬいて、力に任せ七つ八つ、片息になる程ぶちのめされ、「己助右衛門をぶつたぞよ。」「ォ、ぶつた。身がぶつたがあやまりか、町人の分で本繩かけたがあやまりか、御さばき所で埒あけう。サァうせう。」と引つたつれば、「そんなら待ちをれ。解いてくりよ。」「ォ、とかせいでおかうか。まひとつ棒をくらふか。」と、きめ付けられて、不承々々に繩ひつほどき、「こりやたしかに預けた。所の莊屋にもことわつて歸るぞ。一寸でも取りにがしたら、請人共に首がとぶが合點か。」「まだ頤を聞きをるか。」と、頰げた三つ四つくらはせて、玉が手を引き内に入り、鎹はたとしめにける。駕籠の者ども笑止がり、「今のはいかう痛みませう。駕籠でお歸りなされ。」といへば、助右衛門顔をかゝへ、「此のはず〳〵。今年は爰が金神に當つた。それでこのほゝだゝり。殊に今日は土用の入り、それで跡がきつうどよむ。暦の事はおされぬ。」と、へらずぐちして歸りけり。むすぼれて、なまなかつらきみだけ苧の、おさん茂兵衛は夢にだに、戀せぬ中の戀となり、つれて走りし其の日しも、茂兵衛が肌の紙入に、たつた三歩のかねてより、思ひもあへぬ旅の道、おさんの肌著しろな

出す。玉は涙に目も顔も、水より出でたる如くにて、「伯父様面目もござらぬ。」と、「わつ。」と叫びし顔を見て、鬼のやうなる梅龍も、涙を咽につまらせて、歯がみをなすぞ道理なる。玉は恨みの身をふるはし、「これ助右衛門、物には料簡品も有る。おさんさま茂兵衛殿、一所に退いての上なれば、間男でないといふ言譯はなけれども、かう成りさがつた始まりは、以春様の悪性と、其方の心の佞人から、おさん様にほれた間男といふはそなたぢや。腰元のかやをだまして、何やかや取らせて頼んだを知つてゐる。もういはう／＼と思うたれど、いや／＼人のそこねる事、とかくおさん様に疵さへ付けねばよいと思うて、此の玉が急度目になつて、おさん様の傍を、一寸もはなれぬ様にしたによつて、かやめもいひ出す折がなかつたやら、私をけぶたさうにして、其方の文を燒いて捨てをつたも見てゐる。それをねたに思うて、針を棒に取りなして、此の様にしなした。おのれを礫にかけ、かやめがまづ此の様に縛られ、獄門にかゝる奴なれど、此の玉が慈悲心ひとつで助かつた。此の頃これをいはうとすれば、いひけし／＼、人でなしめ、慈悲が仇になつたか。」と、かつぱと伏して泣きければ、「ふんばりめ血迷うて何ぬかす。請人たしかに預けた。」と、いひ捨てて立ち歸る。梅龍とびかゝり、ほんのくぼ引つつかんで、引きあぐれば、足をつま立て、「これ何とする。」「何とするとは、縛るさへ有るに、町人の分でなぜ本繩にしばつた。急度訴へておきめにする奴なれど、御免なれとぬかして、解きをる

内儀の、間男の媒した玉めなれば、同罪はのがれぬ。おさん茂兵衛を尋ね出すまで、請人といひ内證は伯父姪ぢやげな。そなたに急度預けに來た。二人の者が磔なれば玉は獄門。たしかに預けた。そりや駕籠入れ。」と舁き込む所を、梅龍棒端つかんで、二三間押し戻し、「これお手代、此の赤松梅龍が姪などを、むさと前垂奉公などに出す物ではおりない。兩親もない奴、漸う伯父が太平記の講釋、暮六つから四つ時分まで、口をたゝいて一人に五錢づゝ、十人で五十錢の席料を以て露命をつなぐ、素浪人の伯父が力には、絹氣をひつぱらせて、腰元奉公に出す事もならぬ。大經師の家は常の町人とはちがひ、國王大臣も一年の鏡となさるゝ暦の商賣、日月のめぐりを明らかにしるす物なれば、畢竟月日に奉公さすると觀念して、大經師御手代衆參る奉公人たま、請人赤松梅龍と、判をするたは姪が不便なればこそ。國元では人なみに武士のまねをして、鉢坊主の手の內程、米も取つた此の梅龍。預け者には請取り渡しの作法が有る。此の家わづか三間にたらぬ小借屋、めぐりに細溝ほるやほらず、薄壁ひとへぬつたれども、身が爲の千早の城郭、六波羅の六萬騎にも、落されまいと思ふ所に、どこへ見苦しい駕籠舁が泥ずね。サア改めて渡せ。」と、辯舌は講釋、事の道理は太平記、形容は安東入道が、理窟をこねるもかくやらん。「あた仔細らしいおどしだておいてもらを。武士でも侍でも、此の助右衛門はなんともない。改めて請けとれ。」と、駕籠打明け、高手小手のしばり繩ひつ立てて引き

他人むきにて暮しけり。講釋果つれば聞き手の老若、出家まじりに立ち歸る。「なんと聞き事な講釋、五錢づゝには安い物。あの梅龍ももう七十でも有らうが、一理窟ある顏付。ア、よい辯舌。楠湊川合戰おもしろいどう中、仕方で講釋やられた所、本の和田の新發意を見る樣な。いかい兵でござつたの。いづれも明晩々々。」と、ちり〴〵にこそ別れけれ。大經師助右衛門駕籠をさきに押し立て、「梅龍宿におゐやるか。」と、あけんとすれば、門の戸ははや閉めたり。「ハテ門しめた閉めぬとて、盗人に取らるゝ物も有るまいが。」と、わるゝばかりに戸をたゝく。梅龍内よりつこど聲、「かしましい何者ぢや。此の家に聾はない。講釋なら明日こい〳〵。」「イヤ講釋聞きたうない。大經師以春手代助右衛門ぢや。急にあはねば叶はぬ。」と、しきりにたゝけば、「せはしない。あくる間もある物。」と、によつと出でたる糟尾の總髪、紙子の廣袖革柄の大脇指、「ヤア助右殿、夜中にけはしい。なんの用でござる。」といへば、「何の用とはをさめ過ぎた。この中毎日人を越し、そなたが請に立つた玉が事につき、用が有るといへども、酢の蒟蒻のとわがまゝいうて、顏出しもせぬ請人が、どこの國に有る事。この月朔日あくれば二日の曉、旦那外より歸りの門口、すりちがうて手代の茂兵衛めが、内儀おさんぢよろをそゝのかし走り出で、やれ〳〵といふうちに、行方が知れぬ。内を詮議すれば、玉めが寢所に、おさんぢよろと茂兵衛めが寢た體にて、玉めはおさんの寢間に入りかはつて寢てゐた。しかれば主人の

にて、敷居を一つ二つ越し、三つ暦の細工所の、次の茶の間に玉がねる、疊はいづく摺足の、屛風にはたと行き當り、びつくりしたる膝ぶるひ、おさんもはつと胸さわぎ、身も顫はるゝ空寐入。屛風そろそろ押しやりて、夜著にひつしと抱きつき、ゆりおこしゆり起し、ゆり起されて驚きの、今目のさめし風情にて、頭をなづれば縮緬頭巾、サアこれこそとうなづけば、男は今日の一禮の、聲を立てねば詞なく、手先に物をいはせては、ふしをがみ〳〵、心のたけを泣く涙、顏にはら〳〵落ちかゝる。其の手を取つて引きよせて、肌と肌とは合ひながら、心へだたる屛風の中、緣の始めは身の上の、仇の始めとなりにける。既に五更の八聲の鷄、門の戸はげしくとん〳〵〳〵。「旦那お歸り。」はつときえ入る寢所に、汗は湖水をたゝへたり。「やい〳〵戾つた明けいやい。」と、呼ばはるは以春の聲。助右衞門目をさまし、「どいつらも大ぶせり。」と、提げて出でたる行燈の光、顏を見合はす夜著の内、「ヤアおさん樣か。」「茂兵衞か。」「はあはア、。」二重

中之卷

京近き岡崎村に、分限者の下屋敷をば兩鄰、中にはさまるしよげ鳥の、浪人の巢の取葺屋根、見るかげ細き釣行燈、太平記講釋、赤松梅龍としるせしは、玉が爲には伯父ながら、奉公の請に立ち、

腹が立つ。なう此のうへに無心が有る。そなたとおれとかはつて、爰におれを寝させてたも。いつもの格で以春殿がござる時、泣いつ恨みつくどかせ、今宵は玉のなびきやる顔で、夜のあくるまでだいてねて、内との者の見るまへ、幸ひ母様泊つてなり、いき恥かかせて本望とげたい。そなたの寝巻の*おひえもかして、寝かはつてたもらぬか。」「それはお易い事なれど、召しつけぬ木綿夜著、お膚がひえてたまるまい。」「エイなんのいの。昔の井筒の女とやらは、嫉みのほむらに鍉の水が湯となつた。男の恨みに身がもえて、寒さつめたさいとはぬ。ひらに頼む。」「そんならばともかくも。隨分ぬからしやんすな。」と、なほ引きつゝむ此の屏風、火を吹き消して烏羽玉の、玉は奥にぞ入りにける。科なき科にうづもれし、茂兵衛はつく〴〵と思へば、玉が志日頃つれなき此の男を、女心に恨みもせず、仇を恩なる詞の情、恥かししとも面目なし。たとひ此のまゝ死するとも、一生に一度肌ふれて、玉が思ひを晴らさせ、情の恩を送らんと、目ばかり出すふか頭巾、明屋の二階忍び出で、主屋の屋根を四つばひの、姿を人にとがめられ、又此の上に盗人と、名をやうづまん柿葺、昨日の雨のかわかぬに、今宵の霧の淺じめり、足のふみどもうはすべり、そろり〳〵と引窗の、下を覗けばとこやみに、何のしやうどは見えねども、家の勝手は覺えたり、それを心の力繩、たぐる心も細引と、ともにきれ行く心地なり。足音餘所に知られじと、柱をさすり壁をなで、目は明きながら盲目の、杖を失ふ如く

氣からおこつた事。私にきつうほれたとて、すきさへあれば抱きついたり袖ひいたり、隙を取つて爰を出よ。餘所にそつとかこうて、在所の親も養はう、小袖やらう銀やらう。うるさやいやや、聞きともない事ばつかり。私か身さへきよければ、御夫婦いさかひさせまいと、今ならでは申しませぬ。餘所の夜咄にわざと夜を更かして、表の男部屋の二階から、此の屋根傳ひに、あれあの引窗の繩を傳うて、私が此の寢所へ、大方毎夜さござんする。あんまりで腹は立つ。見限りはてた旦那殿、しつかい盜人の行儀か。おさん樣へしらせまし、町中へもことわつて、でんどで耻をかかせます。必ず恨みさつしやるなと、此の女子に叱られて、すご〳〵と我が家の中戸を内からたゝいて、戻つたぞよ〳〵とお寢間へござるうしろつき、をかしいやら憎いやら、かゝつた事ではござんせぬ。所にわたしが茂兵衞殿の肩を持つた故、扨は二人が密通か。禁中の御役をして、侍同然の大經師が家で、不義者めとのにくしみは、悋氣のあたり、ちやうど割符が合ひました。今夜も慥かに忍ばつしやるは知れた事。今宵こそ聲立てて、お前に告げうと覺悟をきはめ、帶も解かずに此の通り。おまへもさぞお腹立。いかに家來なればとて、侮つたほれ樣ぢやと、思へば腹が立ちます。」と、涙をながし語りける。おさんため息横手を打ち、「さても〳〵今の世の賢女とはそたなのこと、男畜生とはつれあひ以春殿。女房一人まぶつてるる男とてはなけれども、あんまり女房を阿呆にした踏みつけたしかた、涙がこぼれて

から、お手をならしはなされず、見ぐるしい寝所へ、何の御用でござります。」「ムウそなたもまだ寝やらぬの。別に用はなけれども、茂兵衛の難に遭やつたは、皆このさんが頼んだ事。それをどうして知つてやら、岡崎の伯父にかこつけ、我が身のうへに取りなし、いひ譯してたもつた志、あんまりあんまり嬉しうて、禮いひに來たわいの。さきの世の姉か妹か、死んでも恩は忘れはせぬ。」と、はらはら涙をこぼしける。「これがまあ勿體ない。お禮うけう覺えもなく、お前のお頼みなされたやら、どうした譯やら存ぜねども、さつきの樣に申せしは、私が心有つての事。」「いやいや譯を知らずには、そばから出ていひわけしやる筈がない。」「御尤もく御不審の立つ筈。そんなら懺悔いたしましよ。ぢたい私があの人に、骨身に染んでほれまして、二年此の方くどけども、器量に似合はぬ公道な、かたくろしい偏屈な生まれつき、奉公の内いかな事、女子の手をも握らぬの、女子の顏は明いた目で、見る事もいやぢやのと、あいそづかしばつかりで、やさしい詞もかけられず。エ、聞えぬ嫌はれた、憎いくと思ふやさき、さつきの難儀、見やつたの、玉が罰があたつた、よい氣味とは思ひしが、いやさうでない、恨みといふも戀からおこつた憎しみ。戀こそは叶はずとも、ほれたは定よ。爰で心底見せいではと、我が身を捨てた此の玉を、まだ不便とも思やるまい。ほんに怨めしうござんする。それにまあおさん樣の前なれど、さもしい穢い卑怯至極な旦那樣のお心。茂兵衛殿へのあたりは、皆悋

頼みまし、銀才覺してもらひます、慈悲心あまつて身の難儀、まつぴら御めんなりませ。」と、實しやかにいひければ、おさん親子は幸ひと、「玉出來しやつた。有樣にようていやつた。人のためのしぞこなひ、殊に大事の祝口。つれそふ女房姑が一生の詫言、許してやつて下され。」と、手を合はせても合點せず、以春いよ〳〵腹を立て、「さてはうぬらは密通か。此の大經師は禁中のお役人、侍同事の町人。不義のうへに、主の印判盗み捺す大罪。今日は早日も暮れる。明日請人を呼びよせ、段々せんさくする事あり。ヤイ男ども、鄰の明屋の二階へほひ上げ、下に急度番をせい。油斷するな。」といひつくる。おさん親子は有りやうに、いうてよかろかわるかろか、心定めぬうき草の、茂兵衞は下々にひつ立てられて、わるびれぬ性根たゞしく哀れなり。「女どももさびしからん。お袋こよひはお泊りなされ。舅殿の氣色見舞がてら、我等下立賣へ參つて、萬事つぶさに咄しませう。それ女房ども頭巾おこしや。是れ助右衞門、戻りは定めて夜が更けう。皆早うやすませ、門もしめて火の用心。傳吉提灯、七介こい。鄰の明家に氣をつけよ。」と、いひつけ表に出でければ、助右衞門は方々のかけがねしめて部屋に入る。臺所には有明の四角行燈、六角堂の鐘こう〳〵と三重ふくる夜や。おさんは母御を寐入らせて、心もしめるねまきの露、玉が常の寢所の、布團も薄き茶の間の角、四尺屏風をおしのくれば、玉はねもせず寢所に、只つつぼりと起きるたり。「ハアこれはおさんさま、御用が有るならおねま

へ胸にしみ、色違へするばかりなり。以春大きに驚き、「さて〳〵口頃程にもない、見ちがへた根性。總じて所帶がた商ひ事、二人にまかせ置くからは、事によつて主の印判おすまい物ではなけれども、助右衛門にも知らさぬは、私慾有るに極まつた。どうした心で印判盗んだ。助右衛門それ言はせて聞きや。」「エ、なまぬるい旦那様。」と、髻を取つてさゞいがら、二三十くらはせ、「サァぬかさぬか。」とねめつくる。茂兵衛髪もときむしられ、「オ、まだぶて〳〵踏んでくれ。主の印判盗むとは、だいそれた此の茂兵衛。さりながら今日まで、茶屋の店へ腰かけず、かるたのうち様存ぜず、人なみに著がへは持ち、足手まとひの妻子はなし。何を不足に私慾をせう。からだは粉にはたかれても、茂兵衛が口からいひわけせぬ。おさん様お袋様、詫言など遊ばしたら、未來までのお怨み。ヤイ助右衛門、天道が物をおつしやれば、おのれが面をぶち返し、許して下され茂兵衛殿と、をがませいで無念なわい。くちをしいわ。」と齒ぎしみし、顔をかたぶけ泣き居たり。以春もさすがなじみの下人、「いか様二十年見落しもないやつが、俄に悪心有る筈なし。言譯せい〳〵。」と、いへどもさらに返答せず。仲居の玉はかねてより、茂兵衛に心をかけ、命も捨てんと思ひこむ、志をや顯はしけん、主人の前に手をついて、「これは皆私が頼みし事、茂兵衛殿に科はなし。岡崎にゐられます、私が伯父様、浪人の營みにくらしかね、五百日餘りの借錢にこひつめられ、腹を切るとの便り、あんまり悲しさ。あのお人を

お前とてもお主、親の恥は娘の恥、舅の恥は壻の恥、二人のお主の恥を雪ぐは、畢竟お主の奉公。おちついて奥へござりませ。」「ア、嬉しい〳〵。物はいうて見ようもの。母樣にもさゝやいてお心をやすめう。そなたに任せた賴むぞや。こりや女子ども、お料理がよくば早うお膳出しませ。」と、いさみて奥に入りにけり。茂兵衞とつくと思案を極め、他人さへ賴まるゝ。つまる所が主のため、たとひしわざは曲るとも、心はさつぱり、ぬぐひ漆の刀かけ、主人以春の巾著を、明けて奪ふも紫袱紗、印判そつと取り出し、いつの間にかは助右衞門、戾つて後に有るぞとは、見ずしら紙を押しひろげ、文言銀目は跡にも書け、先づ印判をとしつかと捺す。背中に目のなきうたてさよ。「茂兵衞それ何する。」と、聲かけられてびつくりせしが、「ハア、助右衞門か。天道は恐ろしい。見付けられてのけた。壹貫目程入用有つて、旦那の名代で銀をかる。此の月中にあてが有る。二十日程の間、目ねぶつてたもるか。そなたの氣では、傍輩の首切らるゝもいとふまい。茂兵衞が科は極まつた。くゝりなりと殺しなりと、勝手にしや。」となげ出す。「オ、いきずりめ、勝手にせいでおかうか。男ども皆おぢや。旦那お出でなされ。」と呼ばはれば、家内の上下、「何事やらん。」と立ちさわぐ。助右衞門鼻をしかめ、「旦那是れ御らんなされ。おまへの印判盜み出し、白紙におす曲者。大經師の家をくつがへし、主を賣らうもしれぬやつ。請人に預けての、くゝしあげて。」とひしめけば、おさん親子ははつとばかり、肝にこた

が顯はれては、此の岐阜屋道順が一分が廢るとて、ほろ〳〵泣いてござるげな。それで色々あつかひて、此の三日までに、二貫百目の利をやつて、事はすむに極まつて、其の上で銀がない。やう〳〵と一貫目は黑谷のお寺で借り出し、まあ一貫目が打つてもみしやいでもないといの。以春樣にいうたらば、つい埒は明くけれど、父樣も母樣も壻に無心いひかけては、大事の息女にひけがつくと、お年寄の我が強く、以春樣へは鼻息もしらす事が叶はぬ。助右衛門にいうたらば、又例のしかみ顏、眉間に皺よせて、其の足で以春樣にいふは定。我が夫をさしおいて、手代に言ふは何事と、結句物に尾鰭がつく。此の月末には、さるお公卿衆の御知行納まり、三十兩戻る金が有る。これは俺も知つてゐる。二十日程の間の事、賴むはそなた許り。一貫目調へて、親達の苦をはらしてたも。エ、無念な。男の身ならば、これしきに親達に苦はかけまい。娘產んだ親も損、女子に生まれた身も因果。」と、しみじみくどき賴みける。茂兵衛も一杯きげん、「はれやれ姫御前と申す者はお氣がほそい。五十貫目百貫目でも有る事か。仰山さうにそれ程の銀、ぐど〳〵おつしやる事かいの。旦那の印判一つ問屋へ持つて參れば、江戸爲替二貫目や三貫目、常住取りやり致します。物ならたつた二十日の間。お氣遣ひなされますな。今日の內一貫目、急度調へ進じませう。私が少しの間、橫道致せば事がすむ、と言うて盜みするでもなく、人の目をかすめる事。よし盜みすればとて、身の慾につけぬは天道が明らかなり。

日は毎年かはらぬ初暦、商賣繁昌めでたい〳〵。以春殿はどこにぞ。悦んであらうの。」「推量して下さんせ。御所がたはう〳〵御嘉例の九獻に醉うて、裏の數寄屋に寢てゐられます。サア先づ奥へござんせ。りんやはつお供大儀ぢや。晩にはこちから送らせましよ。六しやく共いなしやや。」と、親子伴ひ入りにけり。奉公を出過ぎぬ氣立傍輩の、下手につくも我からの、茂兵衛は早天より暦くばりてさき〴〵の、びんび酒の麹の花、ちろ〳〵めにて立ち歸り、「ア、あるいた事かな。七介やすみや。御一門衆お出でなら、すぐに袴も著てゐて、爰で一服樂しみ煙管、さらば醉ひをさまさうか。」と、暫しくつろぎ休みしが、火燵の閒より、「これ茂兵衛、爰へおぢや。」と、呼ぶ聲はおさん樣。「はつ。」とゐなほり、「たつた今歸り、ちと酒氣もござれども、若し急な御用もや。」と言ひければ、「さぞくたびれでは有らうが、急に咄す事が有る。爰へ〳〵。」と、膝もと近く小聲になり、「父樣の方に面倒な事ができて來て、談合したいといふ事。恥をいはねば理が聞えず。知りやる通りの御身代、下立賣の居屋敷を、町衆の加判で、一昨年三十貫目の家質に入れたげな。それでも昔の株の家、物入續いて此の春又町へも隱し、内證で八貫目の質に入れたを、前の銀方が聞きつけ、それとはなしに此の月の三日限りに、家渡すか銀立つるか、返事次第に五日には目安あげると、足もとから鳥の立つ樣に、俄に町へ屆けたといの。いとしや父樣の家渡すも大事ない、目安つけるもかまはぬが、家一軒を兩方へ、質に入れた

れば、玉も續いて立つ所を、以春むく〳〵起きあがり、後抱きにひつたりと、「サア美しい女猫とらへた。」と、乳のあたりへ手をやれば、「ア、こそばあ。またしては〳〵、抱きついたり手をしめたり。一度が定おさん様に告げて、何處も彼處も紫色になる程つめらせます。ア、うるさや。」と、ふりはなす。「どつこいやらぬ。本妻の悋氣と饂飩に胡椒はお定まり。なんとも存ぜぬ。紫色はおろか、身中が樺茶色になるとても、君ゆゑならばいとはぬ。むごいぞえ〳〵。毎晩々々寐込にお見舞申せども、一度も本望とげさせぬ。我ゆゑに此の以春、名をかへて鎌足の大臣、玉をとる思案ばつかり。今夜こそいやといはさぬ。一つの利劍をぬき持つて、彼の海底に飛び入るぞ。おうか〳〵。」とだきしむる。「どうなりとさしやんせ。こちやおさん様にいふ程に、あれおさん様〳〵。」「やれやかましい。其の外おさんわにの口。口のついでに口々。」と、顏をよすれば門口より、「頼みませう。」と、臺にするたる鯛赤貝。「あれお客がある、のかしやんせ。」「いや大事ない。赤貝持參は女中客。」と、いふ所へ駕籠乘物、下立賣のお袋様、お出での由を案内す。「南無三寶姑の古赤貝、これはならぬ。」といひ捨てて、逃げて奥にぞかけ入りける。程なく駕籠をかき入るれば、おさん端まで出でむかひ、「かゝ様ようござんした。」とつ様はなぜおそい。」「さればいの、父様は一昨日花の本の連歌の會に夜をふかし、少し風邪氣の有るうへに、風早宰相樣の朝茶の湯、いよ〳〵風を引きそへ、それでえござらぬ。先づ〳〵今

「エ、おさん樣、いやらしい事おしやんすな。あんな男持たうより、牛につかれたがまし。同じ手代衆の内でも、茂兵衞どのの樣な、かりそめに物言ふもあいそらしうて、いつ腹立顏も見せず。ほんにあの樣な男持つ女子は果報でござんす。」「ほんにいやればさうぢや。猫にも人にも合縁奇緣。鄰の紅屋の赤猫は、見かけからやさしう、此の三毛を呼び出すも、聲をほそめて恥かしさうに見えて、こいつが男にしてやりたい。又むかひの練物屋の灰毛猫は、憎らしいぶ*とうな形で、遠慮會釋もなう、屋根の上を馬せめるやうに、こはい聲して此の三毛を呼び出す。先度も下立賣のかゝ樣と、親子たつた二人ゐる、緣先の藏の屋根で、此の三毛をかはいげに、それは見られた事かいの。あんまり憎さに棹竹持つて追つたれば、おれをにらんだ目元のこはさ。こりや三毛よ、わるい男持つなよ。灰毛猫がぬれかけたら、一度が大事ふつてのけ。此のさんが從者壻、好い牡猫添はそぞえ。オ、かはいや。」と猫なで聲、にやん〱あまえる女猫の聲、漏れてやよそに妻戀の、牡猫の聲々、三毛はこがれてかけ出づる。「ヤイいたづらもの。大勢牡猫の聲がする、あの中へ往て何とする。エ、氣の多いやつぢやな。こりや男持つなら、たつた一人持つものぢや。間男すれば磔にかゝる。女子の嗜み知らぬか。」と、抱きすくめても爪立てて、搔きつくを、「あいたしこ。」放せば放れてかけ出づる。「ヤイ間男しのいたづら者、粟田口へ行きたいな。」と、後の我が身を魂が、さきにしらせて祝日に、追つかけ奥に入りけ

羽織、主も心をおく島の袴、もと渡りの昆布の皮、強ばつたる顏付にて、「ャ旦那はまだおやすみか。夜の中から方々の勤め、くたびれはお道理。申しおさん樣、茂兵衞めが戻つたら、かはらうと存ずれど、何處にのらをかわくやら、二條向お屋敷方の進上曆がおそなはる、一息に廻つて來ませう。嘉例の通り御一門衆お出でなされう。御臺所か姫君のやうに、猫てうらかしてござつてもすまぬ事。これ玉、同じ樣にそれなんぢや。奧の臺子もしかきや。庭の小座敷も掃除しや。火燵に火を入りや。違棚のほこり拂うて、雙六盤將棊盤、棊石の數も讀んで見て、手水鉢に水入れさせ、手拭もかけかや。煙草盆に切炭いけて、膳立をして椀ふいて、お給仕にさしあはう、夕飯はやう喰てしまや。」と、一口に千色程、「まだ面倒な其の猫め、ぎやあ〱とほえるが能で、鼠一匹取りはせず、牡猫見てはびろびろと、屋根も垣もたまらぬ。重ねて屋根でさかつたら、四つ足くゝつて西の洞院へながしてくりよ。」と、何のかけもかまひもなき、猫にまでしぶ口の、茶の間、中の間すみ〲見廻し、「それ久三はさみばこ。曆くばる家によつてお引が出る。只取ると思ふな、給分に引きつぐ。ことわつて置いたぞ。」と打ちつれ表に出でにけり。おさん玉が顏見合はせ、「なんと今のを聞きやつたか。同じ物のいひ樣で、茂兵衞の樣に物やはらかにいうても事はとゝのふ。あの人も氣に如才はなさゝうなが、地體の顏が憎體に慳貪に見えるゆゑ、詞もあいそが無さゝうな。何と助右衛門男にほしいか。肝いつてやらうか。」

おさん茂兵衛 大經師昔暦

上之卷

唄 唐猫が牡猫呼ぶとて、薄化粧するはしをらしや。猫さへもつま故忍ぶに、我が身は何とから打ちの、エイソリヤ綱よりとけぬ契りぞや。じやれてそばえて手毬とれ〳〵、ま一つ二つ、三つ四ついつむつ、なゝつる八つるこゝのほんほとおんえ、えいころ〳〵、ころり火燵にしなだれて、なづくもおのが戀ならん。それは昔の女三の宮、これはおさんの當世女、夫の名さへ春をもつては色香に鳴る、梅の暦の根本大經師以春とて、袴いらずの長羽織、家居も京のどうぶくら、諸役御免の門作り、名高き四條烏丸。すでに貞享元年甲子の十一月朔日、來る丑の初暦、今日よりひろむる古例にまかせ、あるじ以春は未明より、禁裏院中親王家、五攝家清華の御所方へ、新暦を獻上し、方々のめでた酒、嘉例の如く去年の如く、十德著ながら火燵にとんと高いびき、算用場には手代ども、進上暦の枚包、江戸大坂の下し暦、地賣子供の取りさばき、一門振舞祝儀の使、竈の霞鱠の雪、春めき渡る擂鉢の音、今日の霜月朔日を、元日とこそ祝ひけれ。おも手代助右衛門、此の家のたばね綿の小紋の

源頼平　多田滿仲の三男にして賴信の弟なり。出羽冠者と稱す、小蝶の媒によりて詠歌姫と契り驅落の途中、兇賊將軍太郎良門に脅迫せられて其の一味となり、賴信主從の歸途を市原野に要擊して敗れ、渡邊綱に捕へられて死罪に處せられんとせしを、綱の伯母及び箕田二郎纜に救はれて改心し、賴信、保昌等と共に良門、土蜘蛛を葛城山に攻めて之れを退治す。

源頼光　多田滿仲の嫡子なり。敕命を受けて相馬二郎將門が執念の變化惡馬を射る。家督相續を賴信と定む。賴平が兇賊將軍太郎と一味せるを捕へて死罪に處せんとせしが、賴平の乳母及び箕田二郎纜の深く賴平を思へる心を憐んで罪を赦し、賴信、賴平、保昌等をして葛城山に良門、土蜘蛛を攻めて之れを退治せしむ。

蘭菊　卜部季武の妻なり。「岩藤」の條を見よ。

上演人物解說　終

箕田二郎纜　渡邊綱の從弟なり。源頼信、頼平の家督定めの時、小蝶の色香に迷ひ裳に縋つて戯る。小蝶即ち匕首を拔いて纜の烏帽子懸緒を切つて、座中不行跡の者あるを叫ぶ。纜深く愧ぢて自刃せんとせしが、頼平の處置によりて事なきを得たり。かくて後頼平、兇賊將軍太郎に一味して、渡邊綱に縛せられ死罪と定まるや、纜死を以て頼平の改心を促して之れを救ふ。

平井保昌　源頼光の家士なり。頼光家督定めの使者となつて頼信、頼平の邸を訪ふ。頼信伊豫內侍と結婚の夜兇賊將軍太郎と格鬪し、また葛城山に土蜘蛛を退治して武功を立つ。

萩對　江文宰相爲成の室なり。繋馬の幕を奪はんとして闖入せる藤原保輔等と格鬪す。爲成官位を削られて追放せらるゝや、萩の對乃ち詠歌姫をして源頼平を殺さしめんとす。

伴別當　一條天皇の御宇の卜博士なり。敕命を蒙つて參內し、禁中變化惡馬の出づるを易を以て占ふ。

藤原保輔　平井保昌の弟なり。源頼光に見棄てられて素浪人となり、兇賊將軍太郎良門に一味し、江文の宰相爲成の邸に闖入して、繋馬の幕を奪はんとして坂田公時に殺さる。

將軍太郎良門　相馬二郎將門の子なり。同腹の妹小蝶と諜して頼信の邸に闖入し、平井保昌等と鬪ひて逃げ八瀨に行く岐路にて頼平、詠歌姫に遇ひ、これを脅迫して味方となし、頼信主從鞍馬詣の歸途を市原野に要擊して敗れ、遂に季武、貞光に捕はれしが、遁れて葛城山に立籠り、保昌等に攻められて滅ぶ。

源頼信　河內守となる、源頼光の弟なり。院宣によりて伊豫內侍と婚す。鞍馬詣の歸途を兇賊將軍太郎良門等に市原野に要擊せられて之れを破る。

け、木幡等の侍女と爭鬪せしが、名劔膝丸に眞甲を斬られ、遁れて艮門と共に葛城山に據りしを保昌等に退治せらる。

碓井貞光　源頼光四天王の一人なり。主命により江文宰相爲成夫妻を追ひ拂ふ。葛城山に艮門及び土蜘蛛退治の軍に從うて武功を立つ。

卜部季武　源頼光の四天王の一なり。主命によつて江文宰相爲成夫妻を追放す。後、葛城山に艮門及び土蜘蛛退治の軍に從ひて武功を立つ。

佐々目少貳　源頼平の乳母にして渡邊綱の伯母なり。老爺に扮して佐々目少貳と假名し、源頼光に面會を求めて頼平の死罪を諫止す。

大宅忠正　源頼光の家士なり。佐々目少貳來つて頼光に面談を求めたる際、取次に出で少貳の驕傲なる振舞を怒り、武力を以て追ひ返さんとしたり。

江文宰相爲成　詠歌姫の義父なり。頼平、詠歌姫の夫妻兇賊良門の一味となるや、爲成連坐の罪によつて、官位を削られ追放せられしが、後赦さる。

渡邊綱　坂田公時と共に洛中夜廻りをなし、兇漢齋明、保輔を殺し、市原野の戰ひに鬼同丸を斬り、源頼平を生擒す。また葛城山に土蜘蛛退治の軍に從うて武功を立つ。

齋明　藤原保輔の子なり。父と共に兇賊將軍太郎に一味し、江文宰相爲成の邸に闖入し、繋馬の幕を掠奪せんとして渡邊綱、坂田公時に殺さる。

伊豫內侍　院宣によつて源賴信と婚し、小蝶の怨靈に惱みしが、怨靈去つて病癒ゆ。

詠歌姬　江文宰相爲成の養女なり。源賴信の室となるべかりしを小蝶の謀によりて出羽冠者賴平と婚し、賴平と共に驅落する途中兇賊將軍太郎良門に脅かされて遂に其の一味となる。後に賴平が渡邊綱の爲に生擒せられて死罪と定まるや、詠歌姬も亦死を決す。後に賴平の罪を赦さるゝに及んで詠歌姬も亦その罪を赦さる。

おしやなの前　坂田金時の妻なり。「岩藤」の條を見よ。

鬼同丸　兇賊將軍太郎良門の部下なり。賴信が鞍馬詣の歸途を市原野に要擊せんとして、牛の腹中に匿れ居たるを賴信に怪しまれ、渡邊綱に殺さる。

東三條兼家　一條院の敕命によりて源賴光を召し、禁中變化惡馬の出づるを退治すべきを命ず。

坂田公時　顏面朱の如く膂力絕倫にして氣質荒し。洛中の夜廻りをなして、兇漢齋明の首を引き拔き保輔を殺す。また賴光の命によつて賴平の討手に向ひ、箕田二郎纜の賴平を諫めて切腹せし血刀と、懸緒なしの烏帽子とを持ち歸つて賴光に差出す。かくて後葛城山の土蜘蛛退治に從つて武功を立つ。

小蝶　將軍太郎良門同腹の妹なり。世を傾けんとして源賴光の下婢となり、賴信を戀ひて賴信の室たるべき詠歌姬を賴平に媒して出奔せしむ。賴信賴平家督定めの時、箕田纜、小蝶の色香に迷うて戲る。小蝶乃ち賴信に他心なきを見せん爲、匕首を拔いて纜の烏帽子懸緒を切つて座中不行跡の者ありと叫ぶ。賴信、伊豫內侍と婚するや、小蝶は內侍の饗膳に蜘蛛を入れて毒殺せんとし、又良門に賴光の內情を密告せる際、賴光の御臺所に聞かれて斬り付けられ、保昌に殺さる。卽ち怨靈となつて內侍を苦しめ、蜘蛛となつて千筋の絲を懸

大阪に歸る。お千代其の後も姑の虐待に堪へず、遂に夫と共に卯月庚申の夜家を出でて、生玉の勸進所にて情死す。行年二十七。

八百屋半兵衞　遠州濱松の士山脇三左衞門の子なり。大阪靱油掛町八百屋伊右衞門の養子となり、實父十七年忌弔ひの爲濱松に赴き、弟小七郎の主人坂部郷左衞門方にて城主饗應の料理方となり、小七郎をして奴軍右衞門の若衆たらしむ。かくて遠州より歸る途に妻お千代の實家に立ち寄り、お千代が姑にいびられて歸り居るに遇ひ、これを連れて大阪に歸りしが、姑よりお千代の離緣を迫られて意を決し、卯月庚申の夜お千代を離別すと稱して共に家を出で、生玉の勸進所に行きて情死す。

島田平右衞門　山城國上田村の農なり。女お千代が八百屋半兵衞に嫁し、姑に離緣を迫られて歸る。半兵衞遠州より歸る途に平右衞門方に立ち寄る。時に平右衞門病牀にあり。お千代に命じて平家物語祇王の段を讀ましめて之れを評し、以て半兵衞に諷諫す。是に於て半兵衞始めてお千代の事情を知り、乃ち離別せざるを誓ひ、之れを連れて大阪に歸る。平右衞門喜んでお千代の姉に門火を焚かせて之れを送る。

關八州繫馬

岩藤　渡邊綱の妻なり。源頼信の室伊豫内侍が小蝶の怨靈の爲に惱み給ふや、岩藤乃ち木幡、蘭菊、おしやなの前と相謀りて之れを慰めんとし、各松明を翳し、東山大文字聖靈の送火につきて歸れやとて廻向す。小蝶の怨靈蜘蛛となつて現はれしを、岩藤等四人の女長刀にて之れを薙ぎ立つ。

衞門姬　長尾輝虎の女なり。諏訪明神に參詣し、武田勝賴に逢うて相思の仲となり、村上義淸に橫戀慕せられて勝賴と共に失踪し、諸方に放浪したる後、信玄と天目山に逢ふ。甲越の戰ひ解くるに及んで勝賴と婚儀を擧ぐ。

心中宵庚申

八百屋伊右衞門　大阪靱油掛町八百屋の主人なり。淨土宗の信者にして寺參りに餘念なき善人なれども、其の妻は邪險の惡婆なりしかば、遂に養子の半兵衞、お千代の夫妻をして情死するに至らしむ。

坂部鄕左衞門　遠州濱松の城主淺山氏に仕へて弓頭を勤む。或日城主鷹狩の歸途を招待して饗應す。

阿輕　山城國上田村の農島田平右衞門の女にして、お千代の姉なり。お千代新靱油掛町八百屋半兵衞に嫁せしが、離緣されて歸るや、お千代に意見し、且お千代の緣家の處置について難ず。

金藏　山城國上田村の百姓なり。同村島田平右衞門の女お千代を慕ひ結婚を申し入れしが、お千代これを嫌つて八百屋半兵衞に嫁し、惡姑に離緣されて實家に歸るや、金藏これを聞き來つてお千代を冷笑す。

軍右衞門　遠州濱松の奴なり。濱松の士坂部鄕左衞門の小姓山脇小七郎の美貌を慕うて之れを挑み、遂に小七郎の兄半兵衞の仲介によつて小七郎の念者となる。

阿千代　島田平右衞門の女なり。大阪靱油掛町八百屋半兵衞に嫁す。夫の留守中姑より離緣を迫られて實家に歸る。半兵衞これを知らず、遠州より歸る途に平右衞門方に立ち寄り、始めて事情を聞き、お千代を伴うて

ねて上州黑髮山に赴く途中、雨に辻堂に宿りて、高坂彈正政信に邂逅す。是の時遙かに兵火を認めて各驅け赴く。甲越の和睦成るや、時綱姫君の御供して目出度く局を結ぶ。

山本勘介晴幸　三州牛窪の浪人なり。母に孝養を盡さん爲樵夫となりて世を送る。桔梗が原に柴刈に出で、武田勝頼、衞門姫に出遇ひ、身を隱し吳るゝやう頼まれしを斷り、村上義淸の追擊急なるを見て、勝頼夫妻の身を案じ振向く際、野猪に飛び掛られて左足と一眼を失ふ。後、信玄の三顧の恩に感激して其の軍師となり、甲越の戰ひに偉功を立て、遂に甲越をして和解せしむ。

横田兵介　武田信玄の足輕なり。大津の船宿に來り主從の乘るべき船を傭はんとせしかども、既に長尾輝虎の足輕に先を取られて爲方なく、口論を始めて輝虎に殺さる。

原五郞昌俊　武田信玄に陪從して山本勘介を其の草廬に訪ふ。後、勝頼の不興を宥め衞門姫との婚儀を懇請して聽かれず。勝頼武功を立て、甲越和解するに及んで、昌俊等勝頼を誘引して婚儀を擧ぐ。

高坂彈正政信　武田信玄の重臣なり。勝頼に陪從して諏訪明神に參詣し、村上義淸と爭鬪せる際、勝頼を見失ひ、これを尋ね行きて路傍の辻堂に宿つて直江時綱と邂逅す。是の時遙かに兵火を望見して、各我が軍へと驅け行く。甲越相和するに及んで、政信等勝頼の供して萬歲を高唱す。

村上左衞門義淸　信州の國守なり。衞門姫を横戀慕し、粕尾玄蕃を使者として輝虎上洛の歸途を大津に待ち受け、音物を出して衞門姫との婚約を申し込んで峻絕せらる。義淸甲州に食鹽を送るを禁じ、妖怪に變裝して天目山に信玄を狙ひしが、勝頼に斬られて滅ぶ。

に仕へしめんとし、妻をして勘介の母、妻を招かしめ、策を用ゐて勘介をも呼び寄せて優遇せしが、遂に其の意を達すること能はざりき。

武田大膳大夫晴信入道信玄居士　甲州の國守なり。上洛の歸途大津より越後國守長尾輝虎と同船す。折しも甲州より使者來つて信玄の子勝頼と輝虎の娘衞門姫との情事を告げたる事より甲越二家の不和となる。信玄三州牛窪の浪士山本勘介を其の草庵に訪ひ、禮を盡して主從の約をなす。これより越後の軍と第一戰に勝利を得、天目山に居を構ふ。家臣高坂政信、原田昌俊御前に出でて、勝頼、衞門姫の婚儀を懇請して聽されず。折しも勝頼、村上義淸を捕へて首を刎ぬ。信玄その武功を賞して不興を許し、勘介の忠節によつて輝虎と和す。

長尾輝虎　越後の國守なり。上洛して歸途大津にて武田信玄と同船す。是の時村上義淸の使者來つて輝虎の女衞門姫を所望す。輝虎その無禮を怒つて拒絶す。又越後より使者來り、勝頼、衞門姫の驅落を報ず。輝虎大いに怒り、信玄と合戰を約して初度の戰ひに敗れ、信玄の參謀長山本勘介を已が臣たらしめんとし手を盡ししが、勘介の母死を以て義を立つるに及び、輝虎其の心に感じて斷髪し、法名を謙信と名乘る。甲州食鹽の缺乏に苦しむと聞き、輝虎乃ち食鹽を送る。而も甲越の軍結んで解けず。四度の合戰互に勝敗あり、永祿四年九月五度目の戰ひに謙信車掛りの陣法にて肉薄し信玄を斬り付けし際、別に一信玄ありて名乘り出づ。先に斬り付けられたるは主君に扮せし勘介なりしかば、謙信深く其の忠節に感じ、甲越兵を解いて相和す。

直江大和之介時綱　長尾輝虎の家士なり。衞門姫に陪從して諏訪明神に參詣し、姫の行方を失ひ、これを尋

筋向ひの油商手島屋お吉に無心を懇請して拒絶せられ、遂にお吉を殺して金を奪ひしが、捕吏に縛せられて千日の刑場の露と消ゆ。

信州川中島合戰

阿勝　山本勘介の妻なり。老母に從ひて直江山城守實綱の所に至る。阿勝吃にして言語自由ならず、筆にて書き或は琴を彈じて其の意を述ぶ。折しも勘介、阿勝の筆跡になる老母大病との書面を得て尋ね來る。然るに阿勝はかかる書面を書かず。實綱の妻唐衣が僞筆して勘助を長尾家に招かんとする苦計なるを恨み、阿勝唐衣互に刀を拔き合ひしが、老母、兩女の間に飛び入り義理を立てて死す。

武田四郎勝頼　武田信玄の子なり。信州諏訪明神に參詣し、長尾輝虎の女衞門姫と會して相思の仲となりしが、村上義淸に妨げられて姫と共に出奔放浪したる後、桔梗原にて山本勘介に出合ひ隱まひ吳るゝ樣賴む。折しも義淸の手勢に攻め寄せられ漸く遁るゝを得たり。後、天目山にて義淸妖怪に扮して信玄を狙ひしを、勝頼これと格鬪してその首を刎ぬ、この功により父より不興を許されて館に歸る。

進藤小平　長尾輝虎の足輕なり。大津の船宿に來り、主君及び其の從者乘用の數多の船を傭ふ。武田信玄の足輕橫田兵介も來つて、船を傭はんとすれども傭ふべき船なし。是に於て兩人口論を始めたり。小平は後に信玄に殺さる。

直江山城守實綱　越後國守長尾輝虎の重臣にして、山本勘介の妹の夫なり。輝虎の意を受け勘介をして輝虎

に害せらる。七左衛門亡妻の三十五日の法會を營める際、鼠暴れて血痕に染みたる紙片を落す。七左衛門之れを拾ひ見て殺害人の與兵衛なるを知るに至り、與兵衛を捕へて毆打す。

皆朱善兵衛　河内屋與兵衛の友なり。與兵衛等と共に野崎參詣の途中、遊女小菊を連れたる會津者の郎九と喧嘩す。

河内屋德兵衛　故主人の妻阿澤の夫となりて主家を嗣ぐ。阿澤其の子與兵衛の放蕩無賴を怒つて放逐するや德兵衛は筋向ひの手島屋お吉を訪うて、與兵衛を憂慮する旨を告げ、錢三百を出して我とはなしに與兵衛に與へ下さるやう賴む。

山本森右衛門　河内屋與兵衛の伯父にして高槻藩の徒士頭を勤む。高槻藩の小性達の出頭小栗八彌に陪從して外出したる途に、與兵衛、會津者の郎九と喧嘩して、郎九に投げたる泥土狙ひを外れて八彌の馬に中る。森右衛門無禮を怒つて與兵衛を毆打し將來を戒めて放免す。後、與兵衛が手島屋お吉を殺すや、森右衛門は捕吏と共に與兵衛の行方を搜索して之れを捕縛す。

刷毛彌五郎　河内屋與兵衛の友なり。野崎觀音參詣の途中、遊女小菊を連れたる會津者の郎九と喧嘩す。

河内屋與兵衛　大阪本天滿町河内屋德兵衛の故主人の子にして放恣無賴なり。野崎觀音參詣の途中、遊女小菊を伴へる會津者の郎九と喧嘩し、郎九に投げたる泥土過つて武士の小栗八彌の馬に中り、八彌に陪從せる與兵衛の伯父山本森右衛門に毆打せらる。また妹おかちに言ひ含めて病人の眞似をさせて親より金を奪はんとし事露はれて自棄となり、亂暴して家を放逐せられ、口入業綿屋小兵衛より日ぎりの借金の督促を受け、

る。かくて後、三好長慶反逆を企て義輝を弑す。義昭夢に室町千疊敷に遊ぶ。是の時義輝の遺臣淺川左京大夫藤孝等諸國の義兵を催して來會し、長慶を朝日の岡の館に襲撃して之れを滅ぼす。

足利義輝 足利十三代の將軍にして左大臣從一位征夷大將軍たり。京都九條町の遊女大淀の色香に溺れ、大淀を請け出して邸内に引入れ、日夜遊興に耽りて政務を顧みず、暴戻の行ひ多かりしが遂に三好長慶に弑せらる。

女殺油地獄

かち 河内屋與兵衛の異父妹。兄與兵衛の暴惡放逸を矯正せんとして兄の意に從ひ、病と稱して父母を欺く。

阿吉 大阪本天滿町油商手島屋七左衛門の妻なり。子供を連れて野崎觀音參詣の途中、筋向ひの河内屋與兵衛が會津者の郎九と喧嘩して泥土にまみれたるを濯らてやる。五月節句の前夜夫の不在中與兵衛に銀の借用を迫られ、之れを峻拒して殺さる。行年二十七。

小菊 大阪天王寺の遊女にして河内屋與兵衛に慕はる。會津者に連れられて野崎參りの途に與兵衛と邂逅す。

綿屋小兵衛 大阪上町の口入業者なり。河内屋與兵衛に銀を貸して其の返濟を催促す。

阿澤 河内屋與兵衛の母なり。與兵衛放蕩暴戾なるにより之れを放逐せしが、親子の愛情にほだされ、手島屋お吉を訪ひ銀を託して、與兵衛に與ふることを依頼す。

手島屋七左衛門 大阪本天滿町の油商なり。五月節句の前夜懸取に出でたる留守中、妻お吉、河内屋與兵衛

足利義昭の軍に攻撃せられて冷泉造酒之進房平に殺さる。

冷泉造酒之進房平　淺川左京大夫藤孝の臣なり。三好修理入道長慶酒色を以て足利義輝を誘惑し、終に之れを殺す。是に於て房平は妻の清瀧と共に義輝の室を護つて福島に落ち行き、己が親冷泉文次兵衛長房の家に頼る。是の時房平、清瀧と兄妹なるを聞き、それとは知らで契りたるを恥ぢて死なんとせるを、長房制止し歎いて曰く、清瀧は我が子なれども、房平は駒形一學兼綱前妻の子なり、おのれ兼綱の後妻に懸想し、爲に兼綱を暗殺して其の妻子を引入れたるものなれば、我は房平の爲には其の父の仇にして、我が妻の爲には其の前夫の仇なれば、疾く首を討取れといふ。房平討ちかねたり。母乃ち前夫の仇と聲を掛けて斬り付け、妻として長く愛せられたる事を謝し直に池に投身す。長房も其の竝びの池に身を投ず。房平夫妻愁歎に暮る。かくて後、藤孝と共に義兵を催し、三好長慶を朝日の岡に攻めて之れを滅ぼす。

淺川左京大夫藤孝　足利將軍義輝の忠臣なり。足利義昭が、義輝に代つて敕使に謁せしを三好國長に罵らる、藤孝乃ち國長と口論す。藤孝鳥羽畷の片里七瀨川に檢屍に行き、松永久秀が屍體を將軍の室なりといひしを、藤孝よく見その然らざるを知つて久秀の陰謀を察知す。義輝が遊女大淀の色香に溺れ、之れを御所に引入れ暴戻を極むるに及んで、藤孝その諫むべからざるを知つて大淀を斬る。三好長慶反して義輝を弑するや、藤孝諸國の義兵を募り、義昭を將として長慶を朝日の岡に攻めて之れを滅ぼす。

足利義昭　足利義輝の弟なり。敕使義輝の邸に來る。しかるに義輝は五條町の遊郭に流連して不在なりしかば、義昭兄に代つて敕使に謁せしを三好國長に罵られ、さらに野心なきを言明し、髻を切つて遁世の身とな

れて、足利義輝の御臺所の侍女となり、冷泉造酒之進房平の妻となる。

三好淡路守國長　三好修理入道長慶の子なり。足利義昭が其の兄義輝將軍に代つて敕使に謁見したるを咎めて、謀反の志あるものと罵りしが、父長慶に拔討にせられて死す。

白菊　足利義輝の侍女なり。御臺所に陪して賀茂社に詣づ。後、義輝の邪險の刃にかゝつて死し、其の怨靈足利義昭の夢に現はれ、瞋恚の眼をむいで義輝を追ふ。

三好修理入道長慶　足利義輝を誘惑して京都九條町の遊女大淀に溺れしめ、且己が陰謀の發覺せんことを慮り、我が子淡路守國長を斬つて忠實らしく佯り、遂に反して義輝を弑し、朝日の岡に館を構へて日夜酒宴に耽りしが、永祿十二年仲夏下旬足利義昭及び義輝の遺臣に襲撃せられて敗死す。

冷泉文次兵衛長房　古朋輩の駒形一學兼綱の後妻に横戀慕し、兼綱を暗殺して其の後妻及び兼綱の前妻の子造酒之進房平を我が家に引入れて妻子とせしが、淸瀧を生むや之れを東寺の四塚の傍に棄て、福島に閑居して丸綿などの小賣商を營みしが、或日足利將軍義輝の室及び房平、淸瀧の三人尋ね來る。「造酒之進房平」の條を見よ。

初雪　足利義輝の室の侍女なり。室に陪從して賀茂明神に參詣す。後、義輝の邪險の刃にかゝつて死し、其の怨靈足利義昭の夢に現はれて義輝を追ふ。

松永彈正久秀　三好長慶の重臣なり。鳥羽畷の片里七瀨川に檢屍に行き、足利將軍義輝の室の亡骸といひなして淺川藤孝を欺かんとして成らず。後、長慶と共に反し、義輝を襲うて之れを弑し朝日の岡に據りしが、

春、治兵衛と情死す。

後太平記 四十八巻目 津國女夫池

大宮大納言秋忠　正親町天皇の敕使となり、足利十三代の武將義輝の御所に行き、兩頭の龜を出して之れを判じて敕答すべきを命ず。

梅が枝　足利義輝の室の侍女なり。室に陪從して賀茂社に詣づ。後に義輝の邪險の刃にかゝりて死し、其の怨靈足利義昭の夢に現はれ、瞋恚の角を振立てて義輝を追ふ。

大淀　京都九條町の遊女なり。足利義輝に落籍せられ、三好長慶の養女として義輝の御所に入る。これより義輝益淫逸に耽り暴戾の行ひ多し。然も大淀之れを諫むること能はず。淺川左京大夫藤孝を呼び止め、己が心底を語らんとして斬られ、心中を打明けて斃る。

海上太郎兼盛　足利將軍義輝の忠臣なり。義輝が三好長慶に誘惑されて九條町の傾城大淀の色香に溺れ、遂に之れを請け出して御所に入れんとするや、兼盛其の輿入の途中を要擊し、三好長慶の重臣岩成主稅助重正弓頭馬淵閾八郎友澄の爲に毆打せられしが、後岩成を打懲らし馬淵の首を引き拔きたり。長慶遂に反して義輝を弑するや、兼盛乃ち淺川左京大夫藤孝等と謀りて義兵を催し、足利義昭を將として長慶を朝日の岡に攻めて之れを滅ぼす。

清瀧　冷泉文次兵衞長房の女なり。幼時東寺の四塚の傍に棄てられしを、岩成主稅助重正に拾ひ取られ養育さ

慕ひて戀の敵治兵衞を罵詈す。而も小春は深く治兵衞を慕ひて太兵衞を憎む。治兵衞の妻おさんは夫の放蕩を苦にし、竊かに書を小春に送つて治兵衞との絶緣を懇請す。小春泣いて之れに從ふ。治兵衞の兄孫右衞門も治兵衞の身の上を憂慮し、武士に假裝し河内屋に小春を揚げて其の心を探る。小春は治兵衞を思ひ切る事能はざるに太兵衞に請け出されんとするを悲しみ死を決すと雖も、嘗ておさんの手紙に應へし詞の義理を重んじ、心ならずも孫右衞門に對して我が身の治兵衞と疎遠になるやう賴む。治兵衞外にあつて之れを立聞きし小春の無情を憤懣し匕首を引いて小春に擲つて中らず。孫右衞門直に起つて治兵衞の手を捉へて格子に縛し誓くして其の縛を解いて改心を諭す。治兵衞乃ち小春の薄情を痛罵毆打し、嘗て小春より貰ひたる誓紙を投げ返し、兄をして己が小春に與へたる誓紙を取返さしむ。かくて後おさん、小春の太兵衞に請け出さるゝを知るや、更に小春の身を氣遣ひ、嘗て手紙を送つて治兵衞との絶緣を小春に懇請したる實を夫に打明け、小春の死を救はんとして所持金衣類全部を提出し、夫をして小春を請け出さしめんとす。是の時おさんの父五左衞門來つて治兵衞の放蕩を詰り、おさんの離緣を迫つて拉し去る。是に於て治兵衞死を決し、小春に逢うて大和屋に最後の宴を張り、兩人相携へ夜陰に紛れて網島に走り情死す。治兵衞年二十八、小春年十九。

粉屋孫右衞門　紙屋治兵衞の兄なり。「前條」を見よ。

太兵衞　伊丹の商人なり。紀の國屋の妓小春を慕ひ、友と連立つて揚屋河庄に小春のゐるを見て立ち寄り、已に靡かしめんとして小春の愛人紙屋治兵衞を罵詈して出で、再び戻つて治兵衞の格子に縛せられたるを打擲し誹謗して、武士に聞き咎められて投げ付け蹈み付けらる。後に太兵衞、小春を請け出す契約成るを以て小

松若丸　班女の子にして梅若と孖子なり。母に連れられて行房の邸に至り、梅若に逢うて喜びしが行房の室に叱らるゝ際、比良天狗に攫み去らる。行房の舊臣淡路七郎俊兼自刃して其の魂天狗となり、松若を得て班女に渡す。かくて松若は母に連れられて京に上り、吉田家を相續す。

常陸大掾百連　吉田少將藤原行房の室の兄なり。山王權現二十一社修造の奉行を勤め、行房の丹誠して集めたる木材を難じ、行房の臣勘解由兵衞景逸と共に奸策を廻らし、遂に吉田家を横領して遊興に耽りしが、北白川にて酒宴の席上行房の妾班女に銃殺せらる。

吉田少將藤原朝臣行房　山王權現二十一社修造の敕命を奉じ、家來の武國と共に熱心に木材を集めしが、普請奉行常陸大掾百連に難ぜられ、又逆臣勘解由兵衞景逸が比良嶽の材木を伐り出せし爲、天狗の祟りを受けて行房の室影の病に罹る。行房、天狗を刺さんとし誤つて己が妻を刺す。かくて後妻の班女と共に舟を泉水に浮べて遊べる際景逸に刺殺さる。

心中天の網島

かみや治兵衞
きいの國屋小はる

小春　大阪道頓堀風呂屋の湯女より曾根崎新地紀の國屋の遊女となり、紙屋治兵衞と情死す。「治兵衞」の條を見よ。

阿三　紙屋治兵衞の妻なり。「次の條」を見よ。

紙屋治兵衞　大阪天滿宮前町の紙商なり。曾根崎新地紀の國屋の遊女小春と馴染む。伊丹の太兵衞も小春を

き上げられて吹き飛ばさる。後に百連の家來を鏖殺す。

縣權正武國　吉田少將藤原行房の重臣なり。山王權現二十一社の修造に精勵せしが、常陸大掾百連に其の用材を難ぜられて大いに怒る。行房が勘解由兵衞景逸に弑せらるゝや、武國乃ち行房の妾班女を伴ひて大理廳に訴へ、吉田家相續に就いて奏請す。後、行房の子梅若の行方を尋ねて東路に下り、隅田川畔にて故舊淡路七郎俊兼に遇ひ、主家の事情を語つて梅若君の行方を問ふ。俊兼大いに驚き、梅若君と知らずして撲殺したるを自白して自刃す。武國、主君の敵と呼ばはつて俊兼の死骸を拔討にし、百連を攻めて之れを破る。

淡路七郎俊兼　淡路前司兼成の子なり。主君吉田少將行房の金一萬兩を預りて、之れを遊興に浪費して追放せられ、猿島惣太と名乘つて人商人に零落し隅田川畔に住す。或日勾引したる男兒を毆打して死に致す。是の時故舊の縣權正武國來つて吉田家の悲運を語り、若君梅若丸の行方を尋ぬ。俊兼聞いて大いに驚き、扠は己が撲殺したる男兒は梅若君なるを知り、深く非を悔いて自刃し、其の魂魄天狗と化し、嘗て比良天狗に攫み去られたる行房の子松若を探し得て、之れを松若の母の班女に渡す。

班女　美濃國野上宿の傾城なりしが、吉田少將藤原行房と契りて梅若、松若の孖子を生む。然るに松若は比良天狗に攫み去られ、梅若は失踪し、行房は逆臣景逸に弑せらる。是に於て班女は武國を伴ひて大理の廳に吉田家相續を願ひ出で、惡漢常陸大掾百連と口論し精神錯亂して狂女となり、梅若の行方を尋ねて隅田川に至り、渡守唐絲より梅若最期の樣を聞いて悲歎に沈み、墓前に念佛を手向くる折しも、天狗雲霧の中に現はれて松若を返す。これより班女、唐絲、松若相伴ひて京に上り、東女に變裝して百連を襲ひ銃殺す。

帝の畫ける鯉に點睛せし爲、その鯉生動して庭の池に入る。梅若丸は父に叱られん事を恐れて失踪し、人商人蕃椒惣太に捕へられて殺され、隅田川畔に埋められて墓標に柳樹を栽ゑらる。行年十二歳。

勘解由兵衞景逸　吉田少將藤原朝臣行房の逆臣なり。惡漢常陸大掾百連と相謀り比叡嶽の老樹を伐り、比良山の天狗をして行房の家に祟らしめ、尋いで百連と謀つて行房を殺せしが、行房の奴軍介の爲に池に投げ込まれて溺死す。

淡路前司兼成　淡路七郎俊兼の父にして吉田少將藤原行房の奥家老なり。行房比叡嶽の天狗を刺さんとして誤つて已が妻を刺すや、行房の妻の兄の百連大いに怒り暴行に及ばんとす。是に於て兼成が行房の過失を一身に引受けて自害す。

唐絲　淡路七郎俊兼の妻なり。俊兼零落して人買となつて隅田川畔に住し、主君吉田行房の子梅若と知らずして撲殺したるを悔いて自刃するや、唐絲その罪滅ぼしの爲接待の渡船を營みしが、或日梅若の母の班女を乘船せしめて、梅若の最後を語つて墓前に念佛を唱へ、班女と共に京に上り、吉田家を横領せる常陸大掾百連を滅ぼす。

軍助　吉田少將藤原朝臣行房の奴なり。惡漢常陸大掾百連と戰うて其の臣猪熊八郎を殺し、百連を追ひ拂ひ、行房の子梅若君を負ひて北白川に遁る。梅若が逆臣勘解由兵衞景逸に唆されて漢文帝の畫ける鯉に點睛するや、鯉生動して池に入る。軍助卽ち水を潛つて鯉を摑み其の睛を刺す。是の時景逸、行房を弑す。軍助、景逸を池に投じて殺し、梅若君の行方を尋ねて讃州多度浦に下り、天狗に出會ひて斬り付けしが、天狗風に捲

手塚幡樂　島原の遊女更科の父なり。江州志賀の里に隱遁せしが、更科が七草四郎高衡と共に失踪するや、幡樂は足立右馬允景久に召喚せられ、高衡、更科兩人の行方を訊問せられて更に知らぬ由を答へ、見付け次第訴人すべきを約し、家に歸りて其の由を妻に語り、持佛堂の前に坐し、經を讀んで自刃せんとす。この時更科、高衡及び更科の愛人葛西清治訪ひ來つて一悶著を起す。幡樂邪法を嫌ひ更科を清治に託して自害す。

琵琶姫　葛西郡司清重の四女にして足立右馬允景久と婚約あり。梶原景時奧州征討將士の武功を吟味して、清重が四郎高衡を討ち損じたるを詰る。清重憤怨して自刃し、景久、琵琶姫との婚約を破る。琵琶姫これより零落して島原の妓となり名を唐琴と云ふ。畠山重忠に遇ひて畠山家相傳の陣笠を貰ひ、高衡の據れる筑紫の七草城に闖入して縛せられしが、縛を切り寄手の部將景久に矢を放つて敵情を通知して武功を立て、重忠の媒酌によつて景久と婚す。

富樫左衞門宗重　源賴朝より浪人吟味の役を命ぜられ、鶴岡の宮にて源六郎清治を捕へ足立右馬允景久に欺かれて之れを赦す。かくて京に上り島原遊郭に遊び、遊女唐琴のかねて戀慕せる琵琶姫なるを見て其の奇遇を喜び直に請け出さんとす。唐琴これを悅ばず。宗重怒つて唐琴を毆打し、更科の情夫七草四郎高衡に蹴飛ばされて歸り、部下を率ゐて四郎を襲ひたれども之れを逸し、四郎の據れる筑紫の七草城を攻めて討死す。

雙生隅田川

梅若丸　吉田少將藤原朝臣行房の子にして松若丸と雙子なり。ある日惡漢勘解由兵衞景逸に唆されて、漢武

を決心せる折なりしが、更科それとも知らずして四郎と緣を切りし事を語る。父之れを聞いて喜びしが、更科忽ち四郎の幻術に惱まさる。かくて後畠山重忠に逢うて辨財天の注連繩を授かり、肥前國に下り四郎の據れる七草城に忍び入り、四郎に見付けられて縛せらる。更科縛を切り矢を放つて敵情を淸治に通知し武功を立つ。かくて重忠の媒酌によりて淸治の妻となる。

畠山重忠　賴朝近習の者を集めて夢を判ぜしめし時、梶原景時進み出でて夢は體も性もなきものといひしを重忠儒佛の故事を引いて景時の言を駁し、浪人改めをなすやう言上して足立景久を推擧したり。富樫宗重、足立景久の兩人、肥前の七草城を攻めて拔くこと能はず、重忠幕命により大軍を率ゐて七草城に向ふ途中、琵琶姬と更科に遇ひ兩女の懇請を容れて、更科には江の島辨財天より授かりし繰縮の注連繩を與へ、琵琶姬には畠山家相傳の陣笠を與へたり。かくて兩女及び足立景久、葛西淸治が七草城を攻めて遂に之れを陷れ武功を立つるや、重忠金の采配を淸治に與へて葛西家を興さしめ、琵琶姬と景久、更科と淸治の婚儀の媒酌をなす。

七草四郎高衡　奥州仙北の城郭に據り、葛西郡司淸重と戰つて右の膝口を射られしが、幻術を行ひ雲霧に紛れて遁れ、京都に潛みて靑物行商人となり、邪法を以て衆を惑はす。また島原の傾城更科を愛して之れを請け出さんとして富樫左衞門宗重の兵に圍まる。四郎幻術を行ひ、更科を連れ蛙に化して飛び去り、更科の父手塚幡樂を訪うて邪法を勸むる際、葛西淸治に襲擊せられて姿を消す。後、筑紫の七草城に據り、近鄉の土民を集めて死守し、寄手の部將富樫宗重を殺ししが、淸治等の軍に攻められて城遂に陷る。

しも吉田中納言經房卿、景久を召して浪人吟味の怠慢を責む。景久乃ち七草四郎の情婦の父手塚幡樂を召喚して四郎の行方を訊問し、四郎を肥前國七草城に攻めて武功を立て、畠山重忠の媒酌にて琵琶姫と婚す。

葛西郡司清重　奥州征伐軍の部將となり、四郎高衡を射て負傷せしめたれど遂に之れを逸したり。梶原景時が賴朝の代官となり奥州征伐の將士の武功を吟味せし時、淸重功なきを恥ぢ娘琵琶姫をして其の由を語らしめしが、景時、琵琶姫を富樫左衞門宗重に婚せしめよと言ふに至つて淸重大いに怒り景時を罵つて自刄す。

源六郎淸治　葛西郡司淸重の嫡子にして琵琶姫の兄なり。京都大番に上り島原の傾城更科に馴染みて零落し鶴岡に來つて富樫宗重に追跡され足立景久に救はる。是の時父の淸重が梶原景時を罵つて自刄するや、淸治乃ち景時の郞等大河七郎兼任及び其の弟大河九郎を殺す。かくて更科の父手塚幡樂の家を訪ひ、亡父の仇四郎高衡と邂逅し、之れを討たんとして四郎の姿忽ち消ゆ。後、肥後國七草城を攻めて四郎の首を刎ね、葛西の家を興し、畠山重忠の媒酌によつて更科と婚す。

獅々木佐仲太　七草四郎高衡の郞黨なり。四郎の邪法を信仰し、京都櫛笥町に住し近鄰の者を集めて饗應し金を與へ佛像を燒き拂うて邪法に歸依せしむ。富樫宗重の家士柳瀨權藤六に攻められて防戰し、權藤六を殺して遁る。後、四郎と共に肥前の七草城に據り、幕府の軍と戰うて討死す。

更科　手塚幡樂の娘なり。島原桔梗屋の遊女となり、葛西淸治と馴染みしが、七草四郎高衡に請出さるゝ際富樫宗重の軍に襲擊せられ、四郎の幻術によりて四郎と共に遁れ去る。後、四郎を欺きて之れと別れ、淸治に逢はんとして下る途に父を訪ふ。是の時父は足立右馬允景久に召喚され、四郎の行方を訊問されて歸り自殺

は宗清と心付かずして抱き付きしかば、宗清乃ち常磐を罵詈しながらも同情を寄せ、常磐、横笛、雛鶴の三人をして竊かに清盛の邸を脱走せしむ。

丹左衛門尉基康　平家の家士なり。妹尾太郎兼康と共に平清盛の命を奉じ、鬼界島に赴きて成經、康頼、千鳥を船に乘せて歸る途中、備後敷名浦にて俊寛の下人有王丸に遇ふ。折しも此の浦に清盛の船泊す。乃ち千鳥を有王丸に預け、清盛の船に行きて成經、康頼を連れて歸れることを報ず。

高雄の文覺　南都の僧兵に交はりて、平家の討手難波、妹尾の軍を惱まし、又平家追討の院宣を申し受け、源義朝の髑髏を携へて頼朝に謁せんとし、伊豆蛭が小島に下る途中駿州宇都山にて居眠り、源氏が平家を討滅したるを夢む。

傾城島原蛙合戰

梶原平三景時　源頼朝の寵臣なり。頼朝近習の者を集めて夢を判ぜしめし際畠山重忠と夢論をなして負く。後頼朝の代官として奥州征伐の武功を聽取し、葛西郡司清重の武功なきを咎めて自殺せしめ、清重が頼朝より授けられたる金の采配を取り上げたり。

足立右馬允景久　源頼朝より浪人吟味役を命ぜられ、鶴岡八幡宮に詣でて婚約せる葛西郡司清重の娘琵琶姫と逢ふ。この時清重奥州征伐の軍に從ひて武功なきを梶原景時に詰られて自殺したるを聞き、景久乃ち葛西家と婚するは我が家の名折なりとて琵琶姫と縁を絶つ。景久京都に上り禁中を警固して蟇合戰を目撃す。折

清の情によりて横笛、雛鶴と共に清盛の邸を脱走す。

二位殿　太政入道平清盛の室なり。清盛火の病に罹るや、二位殿の夢に獄卒火車を挽きて清盛を連れに來るを見て、之れを能登守教經に語り愁歎せらる。是の時平家に叛いて源氏に屬し兵を擧ぐる者多きを聞かれ、又瞋恚無明の二つの火焰閃き轟いて清盛の臥所に飛び入るを見られ、驚怖氣絕して侍女等に助けられ給ふ。

能登守平朝臣教經　俊寛僧都の室吾妻屋、平清盛に捕へられて其の意に從はず。是に於て教經、吾妻屋に逢ひ、汝の貞節は我之れを立てて取らすべし、汝は清盛の詞の立つ樣返辭すべしとて暗に自害を諷す。吾妻屋乃ち自刃す。教經其の首を清盛に見す。是の時俊寛の下人有王丸、清盛の邸内に亂入す。教經之れを殺すを憫んで追ひ拂ふ。基康兼康の兩人清盛の命を受け、鬼界島の流人召還の使者となつて行かんとす。教經乃ち俊寛をも赦免せんとし、重盛の命と稱して俊寛赦免狀を認めて之れを渡す。治承五年閏二月千鳥及び吾妻屋の怨靈現はるゝや教經矢を放つて之れを調伏し、二位殿に逢ひて平家衰運に傾けるを夢みたるを語る。是の時諸國の武士平家に叛きて源氏に應ずる者多しとの注進あり。教經乃ち宗盛と談合し討手の手分せんとす。

雛鶴　彌平兵衞宗清の娘にして幼名を松が枝と云ふ。清盛の妾となれる常磐に仕へ、常磐の意を受けて往來の人を呼び入る。或日宗清頰冠にて入り來り、常磐を痛罵す。雛鶴緣下に潛伏して宗淸の左股を刺ししが、我が父なるを知つて深く罪を謝し、父の言に從ひて常磐、横笛と共に清盛の邸を脫走す。

彌平兵衞宗清　藤九郎盛長の妹を娶り、松が枝といふ女を設けしが、妻子を離別して平重盛の家士となる。重盛の命を受けて常磐の行跡を視察せんとして、行旅の窶武士に變裝し、頰冠にて常磐の閨中に入る。常磐

盛之れを聞き彼等の心中を糺さる。彼等乃ち我が夫或は我が子が、常磐に呼ばれて其の儘行方不明なる由を言上す。是に於て重盛、彌平兵衛宗清に命じて常磐の擧動を取調べしむ。

俊寛僧都　成經、康頼等と共に平氏を亡ぼさん事を謀りしこと發覺して、成經、康頼と共に鬼界島に流され配所にあること三年に及ぶ。或日丹左衞門尉基康、妹尾太郎兼康の兩人召還の使者となつて島に來る。俊寛は小松殿、能登殿の情によつて備前國まで歸參するを赦さる。俊寛嬉し涙に咽びしが、是の時成經の愛人千鳥同乘を懇請す。俊寛乃ち千鳥の心中を憫み、己の代りに千鳥の乘船を請うて拒絶され、怒つて兼康を刺して俊寛一人島に取殘さる。

千鳥　霧島の漁夫の娘なり。鬼界島にて丹波少將成經と契り、俊寛の養女となる。平家の家士丹左衞門尉基康妹尾太郎兼康の兩人鬼界島流人召還の使者となつて來り、成經、康頼、千鳥を乘船して備後國敷名浦に至り俊寛の下人有王丸が俊寛を尋ねて下るに遇ふ。基康乃ち千鳥を俊寛の形見として有王丸に渡す。是の時平清盛の船もこの浦に泊し、鳥羽法皇を海に沈め奉る。千鳥直に海に躍り入り水を潛つて法皇を救ひ奉りしが、自らは清盛に熊手を打立てられて無慙の死を遂げ、其の怨靈瞋恚の業火となつて千鳥の死骸より現はれ、清盛の頭上に舞ひくるめく。是れより清盛火の病に罹つて死す。

常磐御前　源義朝の妾なり。義朝殺されて後平清盛の妾となり、病と稱して閨深く籠り、腰元横笛、髮上雛鶴の兩人をして往來の人を招き入れしめ、色を以て心を試し源氏に從はぬ者をば横笛をして斬り殺さしむ。或日彌平兵衛宗清頬冠にて入り來れるに抱き付いて、宗清に痛罵せられ、深く恥ぢて實を語る。是に於て宗

常磐聲を掛けて牛若を制し、宗清の好意によつて常磐、牛若、雛鶴の三人清盛の邸を脫走す。

妹尾太郎兼康　平家の家士なり。平清盛の命を奉じ、鬼界島の流人成經、康賴召還の使者となつて行かんとする途に能登守敎經に出合ひ、俊寛をも召還すべしと諭されて之れを拒みしが、敎經より俊寛赦免の自筆狀を得て漸く其の命に從ひ、鬼界島に到つて三人を連れ歸らんとす。成經の情婦千鳥、乘船を懇請して許されず。是に於て俊寛の代りに千鳥の乘船を請へど、兼康これをも峻拒す。俊寛乃ち兼康に近寄り、俄に腰刀を奪ひて兼康を刺す。兼康痛手を負ひながら俊寛と格鬪して斃る。

太政入道平清盛　俊寛僧都の室吾妻屋の色香に迷ひ、己が意に從はしめんとせしが、吾妻屋聽かずして自刃す。清盛暴惡日に長じ、鳥羽法皇に陪從して海路嚴島に參詣する途中、敷名浦にて法皇を海に投じ奉る。蜑千鳥海岸に立つて之れを見、直に海に飛び入つて法皇を救ひ奉る。清盛怒つて千鳥を殺す。是れより清盛火の病に罹り、吾妻屋、千鳥の怨靈に苦しめられ、治承五年閏二月四日悶死す。行年六十四。

小松内大臣平重盛　平清盛の長子なり。病に罹る。平家の一門之れを憂へ相謀つて重盛の心を慰めんとす。重盛乃ち田植の催を所望す。是の時熊野本宮の別當來つて重盛に謁し、白木箱を差出して曰く、本宮の社壇内にこの箱を隱してありきと。重盛命じて其の箱を開かしむれば、重盛の容貌を畫きて、之れを呪ふ賴朝の願文を納めたり。重盛怒つて曰く、我病を得たるは、父の惡心を矯むる能はずんば我が命を取り給へと熊野權現に立願せしに由る。然るに我死なば賴朝は願成就と喜ばん事の愚かやな。よし〳〵盛衰は天にあり恨むまじ。時こそ移れ耕作を見物せんと宣ひて田植を御覽あり。早少女等夫返せ子返せの唄を歌うて插秧す。重

なれるを怪しみ、惣七を諭して京の地を遁れ去らしむ。惣七乃ち小女郎と共に伊勢路に出奔せしが、途に逮捕せられて自刃す。

平家女護島

吾妻屋　俊寛僧都の妻なり。俊寛鬼界島に流さるゝや、吾妻屋は南都の尼寺に隠栖して平重衡を狙ひしが、生捕られて平清盛の前に引出さる。清盛吾妻屋の容色に迷ひ、己が心に從はしめんとして能はず。或日吾妻屋舞子等と踊りし時、齋藤實盛に清盛の心に靡くやう諭されて峻拒し、尋いで能登守教經に諭されて自刃す。後に清盛火の病となり、吾妻屋の怨靈現はれて清盛を苦しむ。

有王丸　俊寛僧都に仕へしが、俊寛鬼界島の流人となり、其の室吾妻屋は清盛の邸に幽せらるゝや、有王丸は主の仇を報ぜんとして清盛の邸に亂入し、能登守教經と格闘して追ひ拂はる。後に有王丸は俊寛赦免せられて歸ると聞き、之れを迎へんとして備後敷名浦に赴き、俊寛の歸らざるを聞いて悲歎に沈みつゝ、丹左衞門尉基康より俊寛の養女千鳥を預る。是の時清盛の船もこの浦に泊し、鳥羽法皇を海に沈め奉りしを、千鳥海に躍り入り法皇を救ひ奉りて有王丸に渡す。有王丸乃ち法皇を負ひ奉り足に任せて落ち行く。

牛若　母の常磐が平清盛の妾となるや、牛若は横笛と稱して其の腰元となり、常磐の御髪上雛鶴と共に竊かに往來の人を呼び入れ、常磐色を以て其の者の心を試し、源氏に從はぬ者をば牛若之れを殺したり。或日彌平兵衞宗清頰冠にて入り來り常磐を痛罵す。是に於て牛若、宗清に斬り付く。宗清これを外し格闘に及びしが

博多小女郎波枕

毛剃九右衞門　長崎生れの海賊なり。或夜門司が關に泊し、京商人小町屋惣七を我が船に乘せしが、己が密輸入を目撃したるの故を以て之れを海に投げ込み、博多に航して柳町遊郭奧田屋に登樓し、偶然再び惣七と相會し、脅迫して仲間に入れ、惣七の馴染遊女小女郎を身請して惣七に與ふ。後に九右衞門等の惡事露顯して逮捕せられ、死罪一等を減じて追ひ拂はる。

小女郎　筑前博多柳町の遊郭奧田屋の妓なり。京商人小町屋惣七に馴染み、毛剃九右衞門を海賊と知らずして金を借らんとしたるに事起り、小女郎請出されて惣七の妻となる。惣七情に絆されて海賊の仲間となる。後、九右衞門、惣七等の惡事暴露するや、惣七、小女郎相共に伊勢路に遁るゝ途にて召捕へらる。惣七愧ぢて駕籠の中に自刃す。小女郎は罪を赦されて夫の父惣左衞門に仕ふ。

奧田屋四郎左衞門　筑前博多柳町の遊郭奧田屋の主人なり。

小町屋惣左衞門　小町屋惣七の父なり。惣七が海賊の仲間に入れるを推知して大いに怒り、惣七の留守宅の家財を捨賣にし、歸り來れる惣七をして早く遁れ去らしむ。

小町屋惣七　九州通ひの京商人なり。門司が關にて海賊毛剃九右衞門の船に乘合はせ、海中に投げ込まれしも辛うじて一命を拾ひ博多に漂著し、馴染の柳町奧田屋の遊女小女郎を訪うて不運を語り歎く。この時偶然再び毛剃九右衞門等と相會し、脅迫せられて海賊の羣に入り不義の富を積む。父惣左衞門は惣七の俄分限と

平安盛　常陸介となり平家の將なり。花山帝に中納言高房の女三の宮を勸め、宸筆の御書を携へて三の宮を迎へに赴き、戻橋にて渡邊綱と戰ひ、金時に毆打せらる。安盛また右近の前に弘徽殿女御を誇るやう言ひ含めて之れを帝の御伽女に奉る。然るに安盛が右近の前に言ひ含めたること發覺して帝の逆鱗に觸れ、渡邊綱に縛せられて源頼光の前に引出さる。

横笛　加藤兵衞氏綱の女なり。賀茂安樂花（やすらひはな）の見物に行き、北白川の廣文に勾引されて江州鏡山の遊郭柊屋長に賣られて禿となる。或日父の尋ね來れるに遇うて身の不幸を嘆ず。長が能樂を催せる際竊かに遊女白妙の病氣を見舞ひ、白妙の愛人吉助を導き白妙と逢はしめたるを、長に見付けられて苛責を受け、悲憤に堪へずして自刃す。

吉助　右馬之允といひ、北白川の廣文の子なり。幼時西國商人の養子となり、江州鏡山の遊郭柊屋の抱妓白妙と馴染む。白妙病篤き時禿の横笛に導かれて白妙を見舞ふ。白妙これが爲に抱主より慘酷なる苛責に遭ひて自刃す。吉助怒つて抱主を毆打せんとして幇間等に撲り据ゑらる。是の時廣文來つて、横笛を勾引して抱主に賣りたる前非を悔いて自刃す。吉助悲歎の涙に暮る。

源頼光　武將なり。加藤兵衞氏綱來つて、其の女横笛が北白川の廣文といふ浪人にかどはされて、江州鏡山の遊郭ひらぎ屋長に賣られたる事を訴ふ。是の時頼光敕命によりて大江山の酒呑童子を退治し、其の歸途四天王と共にひらぎ屋に行きて長を捕へ、其の暴戻を責めて重罪に行ふ。

花山帝　女御忯子姫の死を悼み給ひ、平安盛を召して女御に似たる者を問ひ給ひ、安盛を敕使として中納言高房の女三の宮を召さしむ。然るに三の宮行方不明となりしかば、帝いたく世をはかなみ給ひ、山科の花山寺に入りて落飾し給ふ。安盛乃ち右近の前を御伽女に奉る。

琴柱　北白川の廣文の女なり。朋輩の横笛自刃する場に來り、同情の涙に暮れて共に死せんとす。横笛死に瀕しながら之れを制止す。横笛の父氏綱乃ち琴柱を養女となす。

安倍晴明　陰陽師なり。花山法皇と右近の前と爭へる場に來つて、右近の前を祈禱して右近の前に宿れる物怪を祓ふ。

柊屋太四郎　江州鏡山の遊郭柊屋長の子なり。屢父の邪慳狂暴を諫む。

柊屋長　江州鏡山の遊郭柊屋の主人なり。豪奢狂暴を極め抱妓を虐待せしが、遂に源賴光の四天王に縛せられて重科に處せらる。

忯子姫　大納言藤原爲光の娘にして弘徽殿女御と申す。花山天皇の寵遇を得給ひしが、數多の宮女に嫉妬され、病を得て早世し給ふ。

北白川の廣文　加藤兵衞氏綱の女横笛が賀茂の安樂花(やすらいはな)に參りたるを勾引して、江州鏡山の遊郭ひらぎ屋長に賣る。横笛、長の苛責に堪へずして自刃するや、廣文其の場に來つて前非を悔い、我元は常陸介平安盛の重臣にて八郎權頭秀國と云ひしが、主君の勘氣を蒙つて浪人となり、遂にかかる非行をなしたりと懺悔して自刃す。

白崎八平次　二宮太郎安淸の家士なり。安淸が妻を離別する使者となつて行く。

二宮太郎安淸　源賴朝が富士狩に出でたる留守中、源範賴の自刃及び曾我二子が富士野の狩場に紛れ込みし注進の早打を命ぜらる。榛谷四郎重朝野心を抱き、安淸の妻は曾我の緣者なれば、安淸を使者たらしむべからずと主張して己其の使者たらんとす。是に於て安淸は妻を離別する狀を書きて、之れを白崎八平次に渡して出發し、藤澤の驛にて梶原景高等に妨害せられしが、禪師坊の盡力によつて事無きを得たり。かくて曾我祐成假屋に亂入せしを、刃を石にて叩き潰したる刀にて格鬪す。

傾城酒呑童子

右近の前　中納言高房の下婢なり。高房の女三の宮行方不明となりし爲右近を養女となす。平安盛右近の前をして花山法皇の御伽女たらしめ、且言ひ含めて弘徽殿女御を誘らしむ。是に於て右近の前、弘徽殿女御の繪像を見て、その執念を語つて態と怖る。是の時弘徽殿の繪像動き出で、右近の前の心と入り替つて法皇と爭ひしが、安倍晴明の祈禱によつて弘徽殿の亡魂去り、もとの右近の前となる。

加藤兵衞氏綱　もと武士なりしが浪人となる。娘橫笛の行方を尋ねて江州鏡山の遊郭ひらぎ屋に登樓し、計らずも娘と遇ふ。乃ち抱主の長に願ひて之れを連れ歸らんと思ひしが、長の邪慳なる有樣を見て斷念し、事情を源賴光に訴ふ。後に橫笛がひらぎ屋長の苛責に堪へずして自刃する場に來り、橫笛の手を取つて悲憤の淚に暮る。

られて祐經の前に引出さる。是の時曾我兄弟の來るを見て、頓智を以て曾我の老母大病の由を語り、兄弟をして母を見舞に歸らしむ。

本多次郎近經　曾我兄弟が亡父の仇を報ぜんとして富士裾野の狩場に入込みし時、近經、曾我兄弟に同情して工藤祐經の所在を敎ふ。

曾我五郎時致　兄祐成と共に建久四年五月二十八日の夜、富士裾野の假屋に亂入して亡父の仇工藤祐經を斬り、小舍人五郎丸に捕へらる。頼朝、時致の孝心意氣を愛して自ら手を下し縛す。「祐成」の條を見よ。

常夏　本多次郎近經の妻なり。工藤祐經の妻阿古屋の前と鹿論をなす。

巴御前　木曾義仲の妾なり。義仲死したる後和田義盛に嫁して朝比奈三郎義秀を生む。鎌倉御所にて阿古屋の前と常夏とが鹿論せる時、巴御前兩女を摑んで引出す。

虎御前　曾我兄弟が亡父の仇工藤祐經を殺さんとして富士裾野に赴くや、虎乃ち祐成の母及び少將と連立つて其の跡を慕うて迷ひ出で、朋輩妓龜菊に遇うて營中の狀を尋ね、今夜雨降らば頼朝の出發延引する由を聞き、虎心中に今夜曾我兄弟をして仇討を遂げしめん爲に、法華經普門品を念誦して雨を乞ひたる驗ありて俄に大雨となる。時に建久四年五月二十六日。

源範頼　頼朝の弟なり。伊豆の修禪寺にて落飾し法名を源雄と云ふ。曾我の下人鬼王に遇ひ、曾我二子の爲に富士裾野の營中に入り得る割符二枚を與へて幕府に出頭し、鹿論の捌をなせる際梶原平次景高より割符を穿鑿せられて口論し、怒つて景高を斬らんとして果さず、其の家來八幡三郎を斬つて自刃す。行年三十五。

り行かんと爭うて朝比奈義秀に毆打せらる。

工藤一郎祐經　建久四年源賴朝に從つて富士裾野に狩し、遊女龜菊を宴席に侍せしめ、曾我二子を驛馬に乘らしめて負傷せしめんとしたりしが、其の夜遂に曾我二子に殺さる。時に五月二十八日。

曾我十郎祐成　父の祐泰、工藤祐經の爲に殺さる。是に於て曾我二子は父の讎を報ぜんとし、建久四年五月二十八日富士裾野の祐經の假屋に忍び入り、團三郎より母大病なる由を聞き、祐經より貰ひたる驛馬に乘り狩場より引返して母を見舞ひ、再び狩場に赴いて夜賴朝の營中深く亂入し、祐經を斬つて本望を遂げ、なほ十數人を斬りしが、遂に仁田四郎忠常に殺さる。

少將　曾我五郎時致と情交密なり。曾我二子が亡父の仇工藤祐經を殺さんとして富士裾野に赴くや、少將は時致の母及び虎御前と共に其の跡を慕うて迷ひ行き、朋輩妓の龜菊に遇うて營中の狀を尋ね、虎御前と共に雨を祈つて賴朝の出發を遲らさんとしたり。

禪師坊　曾我兄弟討死せば其の骨を拾ひ納めんとして、藤澤寺に來つて石花菜の店を出す。工藤祐經の家來近江小藤太及び梶原景高等立ち寄る。景高、小藤太に命じて藤澤寺の鐘を撞いて時刻を誤らしめ、以て曾我二子に同情せる二宮安清の富士裾野へ注進の早打を妨害せんとす。是に於て禪師坊藤澤寺内の岩頭に登り、大音聲にて、これ〳〵龜相なされな時が違つたと呼ばはり、小藤太と格鬪して轉び落ちたるを、安淸飛び掛つて小藤太を刺殺す。

團三郎　曾我兄弟の下人なり。大鹿に假裝して富士裾野の狩場に入る所を、工藤祐經の家來八幡四郎に捕へ

曾我會稽山

阿古屋の前　工藤一郎祐經の妻なり。鎌倉御所にて鹿論をなして本多次郎近經の妻常夏と口論し、巴御前の爲に引摺り出さる。

鬼王　曾我兄弟の下人なり。源範賴に遇ひて曾我兄弟が親の讎工藤祐經を殺さんとして肝膽を碎ける由を哀訴し、範賴より賴朝の前まで行き得る割符二枚を借りて、之れを曾我兄弟に渡す。

梶原平次景高　工藤祐經に一味し、源範賴が鎌倉御所にて鹿論を取捌く席上、範賴に迫つて狩場の割符を一見せんと請ひ、それは曾我二子に與へし爲にその無きを知るや、これを詰りて自害せしむ。又二宮太郎安清が富士裾野へ注進の早打の命を蒙るや、景高これを祐經の爲に不利なりと思ひ、安清を藤澤に要擊したり。

龜菊　喜瀨川の遊女なり。富士裾野の狩場にて工藤祐經に揚げられ、歸途朋輩女郎の虎、少將に逢うて曾我兄弟の消息を語る。

京小四郎　工藤祐經の室に賴まれて間諜となり、曾我家に入込みて祐成、時致の動靜を悉く祐經に密告す。曾我二子が遂に祐經を斬つて父の讎を復したる後、賴朝は小四郎の陋劣を惡み、髮を剃らしめて放逐す。

近江小藤太　工藤祐經に仕へ、二宮安清が富士野へ注進の早打の刻限を誤らしめんとして藤澤寺に登り、寺僧を縛して鐘を撞き、禪師坊と格鬪して共に轉び落ちたるを安清に刺殺さる。

榛谷四郎重朝　梶原平次景高一味の徒なり。二宮安清が富士裾野へ注進の早打を命ぜらるゝや、已之れに代

す。治部右衛門將棊に託して、淨閑より謝罪金を出し與次兵衛を助くべきを諷すれども、淨閑應ずる氣色なし。かくて後淨閑意を決し、與次兵衛を遊女吾妻と共に遁げ走らしむ。

葉屋彥介　藤屋の名妓吾妻に懸想し、戀の敵山崎與次兵衛を罵詈して難與平に毆打せられたる意趣に與次兵衛を途に要して斬らんとし、見誤つて與平に斬り付けて却つて斬られ、與次兵衛に斬られたりと叫ぶ。爲に與次兵衛寃罪を蒙つて幽閉せらる。彥介は與次兵衛の父より謝罪金を得て吾妻を請出さんとして井筒屋に來り、計らずも難與平、梶田治部右衛門の吾妻を請出さんとするに際會し、難與平に毆打せられて治部右衛門に縛せらる。

梶田治部右衛門　山崎與次兵衛の妻お菊の父なり。與次兵衛寃罪を蒙つて籠居するや、其の父淨閑を訪ひ、將棊に託して謝罪金を出し與次兵衛を助くべきを意見し、また與次兵衛の爲に吾妻を請出さんとして井筒屋に赴き、難與平に邂逅し協力して葉屋彥介を縛す。

山崎與次兵衛　藤屋の遊女吾妻と馴染む。葉屋彥介も吾妻を戀慕して與次兵衛を惡む。彥介、難與平に斬られたるを與次兵衛に斬られたりと叫びし爲、與次兵衛寃罪を蒙りて幽閉せられしが、吾妻と共に出奔し、難與平に救はる。

難與平　父は難波屋與左衛門と云ひて富豪なりしが漸く衰運に傾く。與平貧困の中に成長し、藤屋の遊女吾妻を戀慕し、吾妻の好意に感激し、吾妻の情夫山崎與次兵衛の敵葉屋彥介を斬り付けて江戸に行き、大金を儲けて吾妻及び與次兵衛を救ふ。

大連物部守屋　崇峻天皇に仕へ、常に佛法を排斥したり。母より立花は天の祭と聞いて立花の會を催し、遂に反逆を謀り膳叡負を斬らんとするや、母乃ち守屋に意見して自刃す。守屋益怒つて叡負を殺し東直駒に命じて聖德太子の妃芹摘姬を攻めしめ、自ら内裏を圍みて帝及び公卿の北の方を奪ひ去り、秦川勝、弓削廣海に命じて公卿の北の方等を河内國志紀の山館に幽閉せしめ、尋いで斬罪に處せんとせしが、川勝心を飜して天皇の御味方となりし爲、守屋の勢ひ頓に挫け、遂に聖德太子の軍に河内國稻村の據城を攻められて滅ぶ。

膳叡負　聖德太子の妃芹摘姬の兄なり。大連物部守屋の立花の會に遲れて行き、守屋より反逆に一味するやう諭されて拒絕し、鞍作數手を斬つて守屋に殺さる。

山崎與次兵衞壽の門松

藤屋吾妻　大阪堂島新地藤屋の太夫にして、山崎與次兵衞と情交密なり。與次兵衞が葉屋彥介を斬りたりと無實の罪を受けて籠居するや、吾妻その見舞に行き、與次兵衞の妻の菊と逢ひ、與次兵衞と共に出奔せしが難與平に救はれて與次兵衞の妾となる。

かや　堂島新地藤屋の鴇老(やりて)なり。難與平母子が太夫吾妻に附纏ふを見て之れを咎む。

阿菊　山崎與次兵衞の妻なり。山崎淨閑と梶田治郎左衞門と將棊をなせる際、其の側にありて謝罪金を出して夫の難儀を救ふべきを諷す。後に淨閑の言に從ひ夫を遊女吾妻と共に出奔せしむ。

山崎淨閑　山崎與次兵衞の父なり。與次兵衞寃罪を蒙つて幽閉せられたる時、淨閑、梶田治部右衞門と將棊

月益御前　葛木島主の妻にして、政若、都賀若の母なり。物部守屋に捕へられて志紀の山館に幽閉せらる。或日監視秦川勝の袂に艶書を入る。川勝之れを披見して月益御前の不貞を卑しむ折しも、垣を破つて闖入する者あり。之れを捕ふれば月益の二子なりければ、月益の不義を語つて之れを痛罵す。二子憤怨して母を刀の背にて打つ。月益涙ながらに述べて曰く、若し落ち散つても艶書は妾一人の不義と戀文のやうに書きしかども、これには二様の讀方ありとて、下より上へ逆讀すれば、二子を思ふ情の切なるを訴ふるものなりしかば、川勝感に堪へずして誤解の罪を謝し、心を翻して天皇の御味方となる。

調使丸　聖德太子の馬丁なり。太子、調使丸に別れを告げに梵天宮に登る。調使丸は太子の妃芹摘姫の行方を尋ね、奈良手向山にて姫に遇ひ太子の梵天宮に赴かれたるを語る。是の時弓削廣海の兵に攻圍せられしが達磨の助けを得て敵を追ひ拂ふ。かくて後聖德太子の軍に屬して物部守屋を河内國稻村城に攻めて滅ぼす。

日益　大連物部守屋の母なり。佛法を罵りしが聖德太子の不思議を見せ給へるに感じて佛に歸依す。守屋反逆を企て膳靱負を殺さんとするや、日益乃ち守屋に意見して自刃す。

弓削廣海　物部守屋の家士にして弓削勝海の弟なり、秦川勝と共に公卿の室等を河内國志紀の山館に幽閉し其の監視をなせしが、川勝心を翻して公卿の室等を赦免せしかば、廣海怒り川勝を罵つて縛せらる。後、聖德太子の妃芹摘姫を奈良手向山の庵室に包圍して達磨に追ひ拂はれ、また河内稻村城を聖德太子の軍に攻められ、川勝と戰うて死す。

政若　葛木島主の子にして都賀若の兄なり。「都賀若」の條を見よ。

く勤めしが不幸にして流矢に當る。乃ち政若、都賀若の二子に教訓を遺して斃る。時に歳五十一。

聖德太子　用明天皇の皇子にして佛法に歸依し給ふ。大連物部守屋が母日益が佛法を罵りし時、太子即ち不思議を見せ給ふ。後、夢殿にて修行せられ、攝州難波の里に大伽藍建立の志あり、梵王宮を巡りて圖形を見給ふ。かくて和州大峯蘇莫閣嶽に降り、跡見赤檮等を率ゐて守屋を河内國稻村城に攻めて之を滅ぼし給ふ。

芹摘姫　聖德太子の妃にして膳靱負の妹なり。守屋の家士東直駒の軍に圍まれしが、跡見赤檮の防戰によつて妃は侍女玉鶴を連れて奈良手向山の邊に落ち延び、鉢開坊主の家に泊り給ふ。折しも調使丸來つて太子梵天宮へ參向せられたる由を物語れる際、守屋の部將弓削廣海來襲す。鉢開坊主即ち達磨と現じ奮戰して賊を破り、葦舟によつて芹摘姫等を遁れしむ。

玉鶴　物部守屋の女小姓を勤め膳靱負と慇懃を通ず。靱負、守屋に殺されしかば、玉鶴はその首を携へて芹摘姫を訪ふ。この時守屋の部將東直駒に攻め寄せられ、芹摘姫と共に遁れて奈良手向山に落ち行く。「芹摘姫」を見よ。

都賀若　葛木島主の子にして政若の弟なり。十三歲の時政若と共に父の許に馳せ來つて、物部守屋既に內裏を攻め破つて公卿の室を捕へ去れる事を注進す。父之れを聞いて、味方の軍の意氣沮喪せん事を恐れ、佯り怒つて二子を勘當す。二子共に守屋の副將弓削勝海の軍を攻めて、役の熊王、六田の岩切を殺ししが、この戰ひに父流矢に中つて死す。二子は母を救はんとして秦川勝に捕へられしが、川勝心を飜して味方となり、二子と共に守屋を河內國稻村城に攻めて之れを滅ぼす。

蘇我馬子　崇峻天皇の大臣なり。佛法に歸依し、物部守屋の軍を其の城に攻めて苦戰に陷る。

鞍作數手　大連物部守屋の反逆に組し、守屋が立花の會を催したる日に膳靫負に殺さる。

弓削勝海　大連物部守屋の副將なり。葛木島主等に攻め寄せられ、跡見赤檮に破られて身を以て免る。

秦川勝　父死して忌中にありしが、親友葛木島主より聖德太子の軍に屬するやう懇望されたれど、物部守屋に義を立てて肯んぜず、亡父の位牌を二つに割り其の一片を渡して、此の位牌を接合する時來らば我が孝も武も立つべきを約す。かくて守屋の命を奉じ、公卿の北の方及び島主の妻月益御前を河內國志紀の山館に幽閉して其の番をなす。或時月益御前より文を袂に入れらる。川勝之れを讀んで戀文と思ひ深く月益の不行跡を惡む。折しも垣を破つて闖入する者あり。川勝之れを捕へて見れば月益の二子なるにぞ、乃ち月益の不行跡を語つて痛罵す。是に於て月益淚に暮れながら其の文を逆に讀み上ぐれば、二子を思ふ情切なるものなりければ、川勝感極まつて誤解の罪を謝し、今より直に天皇の御味方なりと大呼し、直に囚人を開放し、相番弓削廣海を縛して追ひ拂ひ、位牌の一片を取出して月益の子の政若が携へたる位牌の一片と接合す。是れより聖德太子の軍に屬して守屋の據れる稻村を攻め、敵將弓削廣海を斬り守屋を滅ぼす。

吉沙彌　和州橘寺の僧なり。聖德太子の軍に屬し、物部守屋の軍と戰ひ、河內國符都大明神の神主大造を殺す。

葛木島主　秦川勝を訪うて其の妻に面談し、川勝が天皇の軍に屬するやう懇望せしかど川勝遂に肯んぜず。是に於て戰場に相見ゆることを約して別れ、聖德太子の軍に屬して物部守屋の副將弓削勝海と戰ひ、奮戰克

二人の娘を送り付く。忠太兵衞深くおさゐの不行跡を悲しみ、其の諸道具を門前にて燒き拂ふ。

川側伴之丞　出雲の藩士なり。同輩笹野權三と途に遇ひ競馬を挑みて負く。偶岩木忠太兵衞來つて藩主の若殿の祝言の悦びに眞の臺子の茶儀を權三と伴之丞の兩人中に命ず。是に於て伴之丞は茶道指南役淺香市之進の妻おさゐを誘惑して茶儀の祕傳を得んとし、夜中四斗樽の鏡を拔いて枳殼垣の中に突込み、其の中を潛り窃かに庭内に入つて樣子を窺ふ。をりしもおさゐ、權三數寄屋にて癡話喧嘩し、互に帶を奪うて庭に投げ棄つ。伴之丞直に之れを拾うて兩人の姦通を揚言して逃げ、おさゐの弟岩木甚平に斬り殺さる。

おゆき　川側伴之丞の妹なり。出雲藩主の表小姓笹野權三と慇懃を通ず。權三に遇うて結婚を迫り、また心を籠めて縫ひたる帶を贈る。

聖德太子繪傳記

東直駒　大連物部守屋の家士なり。聖德太子の妃芹摘姬を其の邸に夜襲せしが戰ひ敗れて跡見赤檮に殺さる。

跡見赤檮　聖德太子の家士なり。物部守屋の母の日益が佛法を聞いて怒る。或日赤檮が聖德太子の妃芹摘姬の邸を警固せる際、守屋の部將直駒の夜襲に遭ひ奮戰して直駒を殺し敵を擊退す。又弓削勝海の兵を破つて島主の死骸を收め、その二子政若、都賀若を連れて去る。後に守屋を河内國稻村城に攻めて之れを滅ぼす。

小野妹子　崇峻天皇の大臣にして佛法に歸依す。天皇御不例なるに大連物部守屋の參內せざるを咎む。後に守屋を其の城に攻めて苦戰に陷る。

辭して忠太兵衞を訪ひ、暇乞をなして女敵討に出で、山城伏見町京橋の上にて姦夫姦婦に出遇ひて刺殺す。

笹野權三　出雲藩主の表小姓を勤め美男なり。同輩川側伴之丞の妹と慇懃を通じ相會せる際伴之丞來り、權三に對して競馬を挑む。偶岩木忠太兵衞も來り、藩主の若殿祝言の悦びによつて茶儀行はるべきを語り、茶道指南淺香市之進不在の爲眞の臺子の茶儀を權三及び伴之丞の兩人中に命ず。是に於て權三まづ市之進の宅を訪うてその妻おさゐに逢ふ。おさゐ、權三の美貌を愛して行末おのが娘の壻たるを約せしめ、其の夜おさゐ、權三數寄屋に入り祕傳の卷を閱讀す。是の時伴之丞もおさゐをたらして祕傳を受けんとし、庭中に闖入して樣子を窺ふ足音に、今まで喧しかりし蛙の聲はたと止む。權三怪しんで立つ。おさゐは權三の立つを疑つて癡話喧嘩となり、互に帶を奪つて庭に棄てたるを伴之丞に拾はれて姦通の證據物とせらる。是に於ておさゐ、權三不義ならぬ不義となり、相携へて走り、山城伏見町京橋の上にて市之進に女敵討に遭ふ。

おさゐ　岩木忠太兵衞の娘にして、出雲藩主の茶道指南役淺香市之丞の妻なり。前條を見よ。

岩木甚平　岩木忠太兵衞の子にしておさゐの弟なり。おさゐが不義を犯して驅落したる行方を尋ね、おさゐに横戀慕したる川側伴之丞を斬り、おさゐの夫淺香市之進と連立つて、山城伏見町京橋の上にて女敵討の助勢をなす。

岩木忠太兵衞　出雲藩士にして進物番を勤め、淺香市之進の妻おさゐの父なり。笹野權三及び川側伴之丞に遇うて、藩主の若君の祝言の悦びによつて茶儀行はるべきを語り、茶道指南役淺香市之進不在の爲、眞の臺子の茶儀を行ふべき者を兩人中に命ず。おさゐ、權三と不義に陷るや、市之進怒つておさゐの嫁入道具及び

貝勒王　韃靼主順治大王の鎭護大將なり。韃靼主の使者となり、明に朝して貢物を獻じ、華淸夫人を請ふを口實として、明の逆臣李蹈天と謀つて明を滅ぼさんとして、遂に韃靼兵を率ゐて來襲せしが、九仙山の戰ひに敗れて吳三桂、鄭芝龍に殺さる。

柳歌君　明の大司馬將軍吳三桂の妻なり。逆臣李蹈天が韃靼兵を導きて帝及び華淸夫人を弑するや、柳歌君卽ち梅檀皇女を連れて海道の港に遁れ、敵の追擊軍と戰つて其の將剛韃を殺し皇女を船に乘せて遁れしむ。

李海方　李蹈天の弟なり。兄と共に反して韃靼に内通し、明を滅ぼさんとして吳三桂に殺さる。

李蹈天　明の右將軍となりて反逆を企て、韃靼兵を導きて思宗烈皇帝及び皇后華淸夫人を弑し、皇族忠臣を亡ぼして自ら國王となる。後、南京城に於て國姓爺等に襲擊せられて敗れ、捕へられて酷刑に處せらる。

和藤内　鄭芝龍一官の子なり。逆臣李蹈天及び韃靼兵の爲に明國亂れ、皇妹梅檀女肥前の平戶に漂著するや乃ち皇女を妻の小睦に託し、父母に連れられて明に航し、獅子城主甘輝によつて恢復の軍を起し、延平王國姓爺といひ鄭成功と號す。進んで雲門關を越え五十餘城を拔く。吳三桂と九仙山に會し、共に進んで南京城に迫り、李蹈天を捕へて酷刑に處し、韃靼王擊退して太子を立つ。之れを永曆帝といふ。

槍の權三重帷子

淺香市之進　出雲藩士にして茶道指南役を勤む。主君に從ひて江戶に赴きたる留守中、妻おさゐ、笹野權三と姦通して驅落す。市之進歸國して妻の嫁入道具及び二人の娘を妻の實家岩木忠太兵衞方へ送り付け、職を

んで之れに投じ、遂に李蹈天を捕へて酷刑に處し、韃靼王を追ひ、太子をして即位せしむ。之れを永曆皇帝といふ。

小睦　和藤內（後に國姓爺といふ）の妻なり。梅檀皇女肥前國平戶に漂著し、和藤內に逢うて談合ふ有樣を見て嫉妬せしが、その皇女なるを知るに及んで心解け、夫より皇女を託せらる。後、皇女を伴ひて明國に渡る。

左龍虎　明の逆臣李蹈天一味の徒にして、南京雲門關の守將なり。國姓爺の關門を越ゆるを拒み、國姓爺と戰うて敗死す。

思宗烈皇帝　大明十七代の帝王なり。逆臣李蹈天を信じ、遂に李蹈天及び韃靼兵に圍まれて弑せらる。

順治大王　韃靼國主なり。大明を攻め破り思宗烈皇帝及び帝の寵姬華淸夫人を殺して南京に據りしが、國姓爺の軍に破られて縛に就き、鞭うたれて本國に放逐せらる。

梅檀皇女　大明十七代思宗烈皇帝の妹なり。逆臣李蹈天が韃靼兵を導いて皇帝及び華淸夫人を弑せし時、皇女は吳三桂夫妻に救はれて、海道の港より船に乘つて肥前の平戶に漂著し、和藤內に救はる。後、和藤內の妻小睦に連れられて明國に渡り、九仙山にて吳三桂に會す。

鄭芝龍一官　佞臣の斥くべきを言上して逆鱗に觸れ、去つて日本に來り肥前國平戶に住し、名を老一官と改め、平戶の漁夫の女を娶つて和藤內を生む。是の時明朝は逆臣李蹈天及び韃靼兵に攻められて滅亡に瀕す。鄭芝龍乃ち妻子を伴うて明に渡り、獅子城主甘輝に賴つて明朝の恢復を圖る。されど年老いて爲すなきを慙ぢ、單身南京城に赴き、李蹈天と決鬪せんとして生捕られしも、國性爺、吳三桂、甘輝に救はる。

て死す。

永曆皇帝　大明十七代思宗烈皇帝の皇子なり。韃靼國に攻められ、大司馬將軍吳三桂の忠節によつて難を免れ、山中に隱栖すること七年、國姓爺の助勢によつて韃靼軍を破り、帝位に卽き永曆皇帝と稱す。

剛韃　韃靼王の臣なり。海道の港にて吳三桂の妻柳歌君と戰うて殺さる。

甘輝　明の五常軍散騎將軍にして獅子城主なり。妻の錦祥女が義を重んじて自殺するに及んで卽ち大義に歸し、國姓爺等と共に逆臣李蹈天及び韃靼の兵と戰ひ、李蹈天を殺し韃靼兵を驅逐す。

錦祥女　和藤內の異母姉にして獅子城主甘輝の妻なり。鄭芝龍夫妻及び其の子和藤內の三人來つて面會を求む。折しも甘輝不在なりしかば、錦祥女樓門に出でて對面す。鄭芝龍告ぐるに明の恢復を以てし、母を質として甘輝の加勢を賴む。錦祥女乃ち約して曰く、事成らば城外の壕中に白粉を流さん、若し成らずんば紅を流さんと。甘輝歸つて鄭芝龍の請ひを斥く。錦祥女意を決し匕首を以て我が胸を刺し、義によつて甘輝を說く。甘輝遂に鄭芝龍に從ふ。

華淸夫人　大明十七代思宗烈皇帝の寵姬なり。懷妊臨月にて御產の用意ある折から、逆臣李蹈天及び韃靼兵に攻められ、大司馬將軍吳三桂に連れられて海道港まで遁れしが、敵將安大人に射殺さる。

吳三桂　明の忠臣なり。右將軍李蹈天の逆心あるを察して帝を諫むれども容れられず。李蹈天遂に反し、韃靼兵を導きて皇帝及び華淸夫人を弑するや、吳三桂乃ち皇妹栴檀皇女を妻の柳歌君に託して逃走せしめ、自ら幼皇子を抱きて山中に隱匿すること七年。九仙山にて二仙圍棊によせて國姓爺恢復の軍を起すを望見し喜

染みて、許嫁の養女おきはと婚するを嫌ひ、父に疎まれたる上に印傳屋長作に商品を詐取されて窮し果て、おさがと共に夜中我が店に立ち寄る。折しも父五兵衞がおきはを伴ひて來り、おきはとの祝言を強請す。嘉平次結婚を誓うて猶豫を請ふ。是に於て五兵衞は嘉平次に銀貨を與へ、再會を期して別る。然るにこの銀貨もやがて長作に奪ひ去られ、最早これまでと覺悟を定め、生玉社茶店の側まで迷ひ行きておさがと情死す。

さが　扇屋の湯女より伏見坂町柏屋の遊女となり、茶椀屋嘉平次と馴染む。嘉平次難儀に遭ふ毎にさがも共に憂へ、互に身の不遇を歎じて生玉社茶店の側に情死す。

たけ　一つ屋嘉平次の姉の內の飯焚女なり。嘉平次の姉の供して行く途に、嘉平次の自分に對する癡話を明かす。

印傳屋長作　大阪西國橋に住す。茶椀屋嘉平次より價格十五六兩許りの陶器を取寄せ、之れを他に賣却して其の代金を横領し、嘉平次より催促されて既に支拂へりと稱して罵詈を極む。後また無賴漢を伴ひて嘉平次の宅に侵入し、財物を奪ひて遁走す。

國姓爺合戰

安大人　明の逆臣李蹈天の侍大將なり。思宗烈皇帝の寵姬華清夫人を弑す。後に部下の兵を連れて虎狩に出で、千里の竹林中にて和藤內に殺さる。

右龍虎　明の逆臣李蹈天一味の徒にして、南京雲門關の守將なり。國姓爺の關門を越ゆるを拒み、戰ひ敗れ

赤松梅龍　岡崎村に住し、太平記講釋師にして、大經師以春の下婢たまの伯父なり。以春の妻おさん、手代茂兵衞と不義に陷るや、たま其の媒介をなせるの故を以て、手代助右衞門に縛せられて梅龍に預けらる。梅龍は助右衞門が玉を縛したるを怒つて之れを毆打し、又たまに理非を說いて之れを殺し、玉の首桶を携へておさん、茂兵衞の刑場に赴き、たま一人を罪しておさん、茂兵衞を救はんことを請うて拒絕せられ、心錯亂して傍觀しゐたる助右衞門を斬り付く。

茂兵衞　大經師以春の手代なり。以春の妻おさんに賴まれて銀を調達せんとして主人の印判を盜みしを、相手代の助右衞門に見付けられて毆打せらる。この夜茂兵衞かねて己に懸想せるたまの思ひを晴らさせんものと竊かにたまの閨に入り、計らずもおさんと不義に陷り、相共に逐電して丹波國柏原に落ち行き、新六と變名して助作に便る。助作これを官に訴へし爲、捕吏に縛せられて刑場に行き、黑谷の東岸和尙に救はる。

生玉心中

幾松　一つ屋五兵衞の子にして嘉平次の弟なり。嘉平次放蕩にして父の意に從はず、許嫁の養女おきはを幾松と夫婦たらしめて、之れに家督を讓らしめんとす。兄思ひの幾松は兄の不心得を深く憂へ、不具者となつて家督を相續せざらんとし、山上樣に祈つて眼病となり、姉に連れられて天滿の眼科醫に行く途中嘉平次に遇ひ、幾松が兄を思へる眞情を姉に吐露す。

茶椀屋嘉平次　一つ屋五兵衞の子なり、大阪大和橋濱納屋に陶器商を營む。伏見坂町柏屋の遊女おさがと馴

さん　京都四條烏丸の大經師以春の妻なり。以春が下婢の玉に懸想するを怨み、以春を窘めんとして玉の寢所と取替へて臥し、手代茂兵衞と思ひがけなき不義に陷り、兩人相共に逐電する途に父母を訪ふ。父憐んで銀一貫目を與ふ。かくて兩人は丹波の柏原に落ち行き、助作に身を寄せしこと發覺し、召捕られて粟田口に刑せられんとせしを、黑谷の東岸和尙に救はる。

助作　丹波柏原の農夫にして、大經師以春の手代助右衞門の從弟なり。以春の妻おさんと其の手代茂兵衞とが不義を犯して身を寄すや、助作はおさんの銀八百目を預りて返さず、且兩人を官に訴へたり。

助右衞門　大經師以春の手代なり。相手代茂兵衞の罪を發いて之れを呵責し、又下婢玉を縛りて玉の請人赤松梅龍に渡し、梅龍に毆打せらる。かくて後おさん、茂兵衞が縛に就くや、來つて之れを請取らんとして捕吏に叱責せられ、梅龍に頸を斬り付けらる。

岐阜屋道順　大經師以春の妻おさんの父なり。おさん、手代茂兵衞と思ひがけなき不義に陷つて驅落する途に道順を訪ふ。道順憐んで銀一貫目を與へて遁れしむ。後に兩人捕吏に召捕られて刑場に引かるゝや、道順悲歎に暮れ身を以て罪を請ふ。

たま　大經師以春の下女なり。以春、たまに懸想して屢挑めども應ぜず。以春の妻おさん、手代茂兵衞と不義を遂ぐ。たま其の媒介をなせるものとされ、助右衞門に縛せられて梅龍に預けられ、梅龍の手にかゝりて死す。

黑谷の東岸和尙　おさん、茂兵衞不義の罪によつて刑せられんとする時、驅け付けて兩人を救ふ。

上演人物解説

目次

標題	解説	本文
大經師昔暦	一三	一
嘉平次 おさが 生玉心中	一五	三五
國姓爺合戰	一六	六八
槍の權三重帷子	一九	一三九
聖德太子繪傳記	二一	一六三
山崎與次兵衛 壽の門松	二五	二三五
曾我會稽山	二七	二五五
傾城酒呑童子	三〇	三一九
博多小女郎波枕	三三	三七五
平家女護島	三四	四〇五
傾城島原蛙合戰	三八	四六五
雙生隅田川	四一	五三一
紙屋治兵衛 きいの國屋小春 心中天の網島	四四	五七三
後太平記 四十八巻目 津國女夫池	四六	六〇三
女殺油地獄	四九	六六三
信州川中島合戰	五一	七〇三
心中宵庚申	五四	七五七
關八州繫馬	五五	七八九

大經師昔暦

大經師以春 京四條烏丸に住み大經師なり。下婢たまを戀慕して癡態をなし、妻のおさん之れを戒めんとして圖らずも不義に陷り、家騷動となる。

名太平記、弱法師、多田院開帳、佐藤忠信二十日正月、當麻中將姫、義經東方法、傾城淺間嶽、文武五人男、信田小太郎、ゑがらの平太、甲賀三郎(以上貞享頃より寶永初年までの作)などがあり、また門左衛門添削のものに、猫魔達(元祿頃)、善光寺御堂供養(享保二年)、右大將鎌倉實記(享保九年)などがある。他にまだ珍書愛藏者の篋底に祕めて、目新しい近松ものがあるであらうが、私が今までに知り得たものはこれだけである。(樋口慶千代)

一二三　日本武尊吾妻鑑　同　年十一月

一二四　心中天の網島　同　年十二月

一二五　津國女夫池　同　六年二月

後年改題して室町千疊敷といふ

一二六　津國女夫池（狂言本）　同　年春

一二七　女殺油地獄　同　年七月

一二八　信州川中島合戰　同　年八月

一二九　唐船噺今國姓爺　同　七年一月

一三〇　心中宵庚申　同　年四月

一三一　關八州繫馬　同　九年一月

これ等の他に巣林子の作であらうと疑はれるものに、江州石山寺源氏供養、舍利、三社託宣、助六心中蟬のぬけがら、牛若千人斬、葵の上、藍染川、惟喬惟仁位諍、十六夜物語、平安城、龜谷物語、京わらんべ（以上延寶、天和頃の作）、甲子祭、賢女手習幷新暦、源三位賴政（扇の芝）、賴朝濱出、巴太鼓、大原御幸、信濃源氏木曾物語、辨慶京土產、花洛受法記、自然居士、柏崎、都の富士、ひら假

一〇九	國姓爺合戰	正德五年十一月
一一〇	國姓爺後日合戰	享保二年二月
一一一	槍權三重帷子	同　年八月
一一二	聖德太子繪傳記	同　年十一月
一一三	山崎與次兵衛壽門松	同　三年一月
一一四	日本振袖始	同　年二月
一一五	同（本狂言）	同　年夏（？）
一一六	曾我會稽山	同　年七月
一一七	博多小女郎波枕	同　年十一月
一一八	本朝三國志	同　四年二月
一一九	平家女護島	同　年八月
一二〇	傾城島原蛙合戰	同　年十一月
一二一	井筒業平河內通	同　五年三月
一二二	雙生隅田川	同　年八月

九六　傾城懸物揃　同　年三月
九七　弘徽殿鵜羽產家　同　年五月
九八　嫗山姥　同　年七月
九九　長町女腹切　同　年秋
一〇〇　傾城吉岡染　同　年十一月
一〇一　天神記　同　三年二月
一〇二　嫈靜胎內捃　同　年五月
一〇三　相模入道千疋犬　同　四年四月
一〇四　娥歌かるた　同　年八月
一〇五　嵯峨天皇甘露雨　同　年十月
一〇六　大經師昔暦　同　五年一月
後年改題して戀八卦柱暦といふ
一〇七　持統天皇歌軍法　同　年八月
一〇八　生玉心中　同　年八月

八二	傾城金龍橋（狂言本）	寶永五年十一月（？）
八三	五十年忌歌念佛	同　六年一月
八四	御曹司初寅詣（狂言本）	同　年一月
八五	心中刃は氷の朔日	同　年六月
八六	艶狩劒本地	同　年九月
八七	曾我虎が磨	同　七年一月
八八	今宮心中	同　年春
八九	百合若大臣野守鏡	同　年一月
九〇	孕常盤	同　年八月
九一	源氏冷泉節	同　年秋
九二	冥途の飛脚	正徳元年三月
九三	吉野都女楠	同　年九月
九四	大職冠	同　年冬（？）
九五	夕霧阿波鳴渡	同　二年春

七〇　棊盤太平記　同　年六月

七一　卯月の紅葉　同　年夏

七二　曾我扇八景　同　年七月

七三　吉野忠信　同四年一月

七四　堀川波鼓（一云、堀江川波鼓）　同　年二月

七五　卯月の潤色　同　年四月

七六　酒呑童子枕言葉　同　年九月

第三段以下を修訂し、傾城酒呑童子と改題して享保三年上演す

七七　心中重井筒　同　年冬

七八　傾城反魂香　同五年春

七九　心中萬年草　同　年四月

八〇　丹波與作待夜の小室節　同　年六月

正徳二年再演の時丹波與作と改題す

八一　淀鯉出世瀧德　同　年末（？）

五六	最明寺殿百人上臈	元祿十六年春
五七	傾城三つ車（狂言本）	同　年春
五八	曾根崎心中	同　年五月
五九	辛崎八景屛風（狂言本）	同　年秋（？）
六〇	薩摩歌	寶永元年一月
六一	吉祥天女安產玉（狂言本）	同　年秋
六二	雪女五枚羽子板	同　二年春
六三	用明天皇職人鑑	同　年十一月
六四	源義經將棊經	同　三年一月
六五	田村將軍初觀音	同　年春
六六	本領曾我	同　年三月
六七	心中二枚繪草紙	同　年三月
六八	加增曾我	同　年夏
六九	兼好法師物見車	同　年五月

四三	根元曾我	不　詳
四四	今川了俊	不　詳
四五	姬藏大黑柱（本狂言）	元祿十二年十一月
四六	浦島年代記	同　十三年一月（？）
四七	天　鼓	同　十四年春
四八	傾城富士見る里（本狂言）	同　　年春
四九	蟬　丸	同　　年五月
五〇	大掛物十幅一對	同　　年九月
	賴義北國落の修訂	
五一	曾我五人兄弟	同　　年十一月
五二	傾城壬生大念佛（本狂言）	同　十五年春
五三	大磯虎稚物語	同　　年五月（？）
五四	賀古教信七墓廻	同　　年七月
五五	傾城若紫（本狂言）	同　　年（？）

三〇	松風村雨束帯鑑	元祿七年三月
三一	融大臣	同　年八月(?)
三二	釋迦如來誕生會	同　八年四月
三三	鎌田兵衛名所杯	同　年十月
三四	傾城阿波鳴門(狂言本)	同　年(?)
三五	曾我七以呂波　題簽云、義經追善女舞	同　九年九月(?)
三六	頼朝伊豆日記	同　十年七月
三七	百日曾我	同　年十月
	團扇曾我の修訂	
三八	當流小栗判官	同　十一年二月
三九	傾城江戸櫻(狂言本)	同　年二月
四〇	一心二河白道(狂言本)	同　年三月
四一	傾城佛が原(狂言本)	同　十二年一月
四二	阿彌陀池新寺町(狂言本)	同　年秋

二〇　今源氏六十帖（狂言本）　元祿元年一月

二一　本朝用文章　同　初年（？）

二二　天智天皇　同　二年三月

二三　忠臣身替物語（題簽云、今様かしは木）　同　年八月

二四　烏帽子折　同　三年一月

元祿十二年一月修訂して源氏烏帽子折と改題す

二五　水木辰之助餞振舞（狂言本）　同　年春

二六　十二段　同　年秋

元祿十四年九月源氏十二段長生嶋臺と改題す

二七　大覺大僧正御傳記　同　四年十一月（？）

女人即身成佛記を修訂せるもの

二八　日本西王母　同　五年秋

南大門秋彼岸と大同小異

二九　佛母摩耶山開帳（狂言本）　同　六年三月（？）

一〇　百夜小町（狂言本）　　貞享元年
一一　夕霧七年忌（狂言本）　　同　年
一二　大名なぐさみ曾我（狂言本）　　同　年七月（？）
一三　津戸三郎　　同　初年（？）
　門出八島と大同小異
一四　凱陣八島　　同　初年（？）
一五　千載集　　同　二年（？）
　後年修訂して薩摩守忠度と改題す
一六　盛　久　　同　年（？）
　後年修訂して主馬判官盛久と改題す
一七　出世景清　　同　三年二月
一八　三世相　　同　年五月
　夕霧三世相ともいふ
一九　佐々木先陣　題簽云、佐々木大鑑　　同　年七月

巣林子著作目錄

淨瑠璃及歌舞伎狂言	刊年又は初上演年月
一 瀧口横笛	延寶四年十一月
二 花山院后諍	同 五年(?)
三 念佛往生記 後年修訂して大原問答青葉笛と改題す	同 六年(?)
四 赤染衛門榮花物語	同 八年一月
五 鳥羽戀塚物語 後年修訂して一心五戒魂と改題す	天和元年以前
六 徒然草	同
七 東山殿子日遊	同 年一月
八 世繼曾我	同 三年九月
九 以呂波物語	貞享元年三月

れなりと云はずして、獨りあはれなるが肝要なり。」「藝といふものは實と虛との皮膜の間にあるものなり。」「虛にして虛にあらず、實にして實に非ず、此の間に慰があつたものなり。」と、近松の文藝觀を紹介してゐる。

近松の構想、文章、學問其の他に就いては、研鑽すべきこと多々ありて、今後の研究に大いに待たなければならないから、此には『難波土產』の所述を載錄するに止めて置く。

解題終

と、其の文才、學問及び功績を賞讃し、猶近松の苦心を述べ、

往年某近松が許にとむらひける比、近松云ひけるは、

惣じて淨瑠璃は人形にかゝるを第一とすれば、外の草紙と違ひて、文句皆働を肝要とする活物なり。殊に歌舞伎の生身の人の藝と芝居の軒を竝べてなすわざなるに、性根なき木偶にさま〲の情をもたせて見物の感を取らんとする事なれば、大形にては妙作といふに至り難し。某若き時、大内の草紙を見侍る中に、節會の折ふし、雪いたう降りつゞきけるに、衞士に仰せて、橘の雪はらはせられければ、傍なる松の枝もたはゝなるが恨めしげにはね返りてとかけり。是れ心なき草子を開眼したる筆勢なり。その故は、橘の雪を拂はせらるゝを、松が羨みて、おのれと枝を刎ね返へして、たはゝなる雪を刎ね落して恨みたるけしき、さながら活きて働く心地ならずや。これを手本として、我が淨瑠璃の精神をいる事を悟れり。されば地文句せりふことは云ふに及ばず、道行なんどの風景を述ぶる文句も情を籠むるを肝要とせざれば、必ず感心の薄きものなり。詩人の興象といへるも同じ事にて、たとへば松島宮島の絶景を詩に賦しても、打ち詠めて賞するの情を持たずしては、徒らに畫ける美女を見る如くならん。この故に文句は情を本にすべし。

と、文句に情を本とすべきを說き、次に、「文句にてには多ければ何となく賤しきものなり。」「詞遣ひまでその程々の格を別つべし。」「淨瑠璃の文句皆實事を有りの儘に寫す中に、又藝になりて實事になき事あり。」「あはれをあはれなりと云ふ時は含蓄の意無うして、結句其の情薄く、あは

て、頼信の室を惱ましたが、頼信、頼平、平井保昌、四天王は葛城山を攻めて土蜘蛛を平らげ、良門を滅ぼす。

之れを近松巢林子の最後の作とする。此の年三月、二十一日二十二日の兩日大阪大火、竹本豐竹兩座とも類燒、其の歳十一月二十二日に巢林子は歿した。

穗積以貫の『難波土産』（元文三年作）に近松を評して、

近世に至りては、或は座敷淨瑠璃或は芝居淨瑠璃なんど專らもてはやす事にはなりぬ。然れども其の文勢筆力なく、何となく拙く、感情もなかりければ、只下々のもてはやすのみにして、中人以上は曾て其の本とて取り上げ見ることもなかりしに、元祿年間に近松氏出で、始めて新作の淨瑠璃を作り出し、竹本氏が妙音にらつさせたりければ、聞く人感情を催し、ひそかに其の本を索めて、其の作文を見るに、文體拙からず、儒佛神によく渡り、譬を取り、故事を引くにも、人の耳に鋭からず、貴賤のさかひ、都鄙のわかち、それ〴〵の品位につきて、さこそあるらめとおもはせ、道行等のつゞけがらも、伊勢源氏の俤を寫して、しかも俗間の流言をおかしく列ねければ、自然と貴人高位も御手にふれさせ、賞し翫し給ひしより、打ち續いて、數多の淨瑠璃を作り出すに、佳言妙句擧げて數へ難し。終に其の名を天下に顯はし、彼の淨瑠璃本を見るに、恥なく成りて、專ら世上に流行する事數十年に及べり。是れ偏に近松氏が力なり。然して近松死したれども、猶餘光失せず、其の門に遊ぶの人相續いて作文をなす。夫れより數多の作者出で來りて、今に於て燦然たり。

啀にもそなたの噂。」とある程に不幸の女であつた。半兵衞が濱松の實家へ亡父の十七回忌を營みに戻つた留守を幸ひに、邪見の姑が懷妊してゐるお千代を無理やりに實家へ戻す。半兵衞はそれと知らずに、お千代の實家へ立寄り、初めて離別されたに驚き、養母の手前は、一たびお千代を連れ戻して、自ら離緣せんとし、母の前にて離別を申し渡し、宵庚申の夜、夫婦私かに家を脫れて情死を遂げる。

『心中二ツ腹帶』とは異曲同工であるが、之れを海音の作に比すると、一體に軟か味が多く、お千代の父平右衞門の饒かな人情味は、見るもの讀むものをしてほろりとさせる。

將軍太郎良門　出羽冠者賴平　關八州繋馬

享保九年正月十五日より竹本座に上演。

平親王將門の遺兒將軍太郎良門及び其の妹小蝶は源氏を滅ぼして天下を奪はんと企て、小蝶を源賴光の奧方附の侍女となし、館の樣子を探らせる。然るに小蝶は賴光の弟賴信に懸想して、戀敵の詠歌の前を賴信の弟賴平に取り持ちて、兩人は出奔する。賴平は良門に脅かされて、其の一味となつたが、乳兄弟箕田二郎友綱の忠死に依りて、兄弟和解する。小蝶の怨靈は土蜘蛛となり

享保七年四月二十二日より竹本座にて上演。

享保七年四月五日、宵庚申の夜に生玉馬場先南都東大寺大佛勸進所の門前にて、靫油掛町の八百屋半兵衞と女房お千代と夫婦心中を遂げた。舅の伊右衞門が嫁のお千代に道ならぬ横戀慕をしたので、家内に風波が起つて、夫婦別れ〳〵になるのを悲しんでの結果であつた。

一說には兩人の心中は、前年卽ち享保六年四月六日の明方の事であるとも云ふ。紀海音の『心中二ッ腹帶』は、享保七年四月六日から豐竹座にて上演してゐるから、此の說が起つたのであるが、いづれが正しいか、確かでない。

『心中二ッ腹帶』は海音の傑作で、竹本座と豐竹座とは、作家を異にして、同じ題材のもので爭つたが、勝利は豐竹座に歸した。されば此の二作を相對して見るのは、一興のことである。

遠州濱松の武士山脇三左衞門の一子半兵衞は幼少の頃、大阪に出て町人奉公をなし、八百屋伊右衞門の養子となる。其の妻お千代は三度目の嫁入。「尤も始めの男道修町伏見屋の太兵衞殿、心ぶしやうに身體を持ち崩し、たゞずみもないやうに成り果て、あかぬ別れ、其の次は死別れ、互に難はなけれども、人はそなたの辛抱がない故に、去られた〳〵と非難つけ、此度の嫁入も追出さるゝに間はあるまい、忘れても島田平右衞門が娘の風下に居るなと、娘持つた人々は寄合茶呑

信州川中島に於て武田信玄、上杉謙信の兩雄が對戰したのを劇化したものである。

信玄の子勝賴と、謙信(景虎)の女衛門姫との情事より兩雄の間に戰ひが開かれる。山本勘助は信玄が草廬三顧の知遇に感じて、桔梗原の隱家を出て、其の軍師となる。景虎は其の臣直江山城が山本勘助の妹婿なるをたより、勘助の老母を囮として勘助を我が方へ招かんとする。兩雄川中島にて鎬を削り、謙信は信玄の陣中に躍り入りて信玄を一太刀斬つたが、此の信玄は山本勘助が信玄の姿に身を替へて、兩家の戰ひを止めんとの苦忠であつた。謙信も感じ入つて兩雄和解し、勝賴と衛門姫とは結婚する。

第三段輝虎(景虎)配膳の場は名高い。歌舞伎に移されて、享保七年正月大阪中の芝居、同十二年四月、江戸中村座、文政十一年八月江戸河原崎座に於て上演された。

山の道具立は從來山簾であつたのを、此の時から張拔きの山となし、之れを天目山に用ゐたと云ふ。『心中宵庚申』の中にも、「此度生玉大法事の開帳に、築山を飾られたも、筑後の川中島の四段目から出た事ぢやげな。」とある。

おちよ半兵衛　心中宵庚申

祝日に心もない泣きわめき、不調法、其の錢もお吉様頼み、與兵衞にやつてお暇申しやと、いへども女房涙にくれ、こな様の遣つて下さる其の深い心ざしに、盗んだ錢がなんと遣らりよ。ハテ大事無いひらに遣りや。いや許して下されと、夫婦が義理の遣る方なさ。お吉も涙とゞめかね、ア、お澤樣の心推量した、遣り憎い筈、こゝに捨てて置かしやんせ、わしが誰ぞ好さゝうな人に拾はせましよ、ア、忝けない、とてものお情、此の粽も誰ぞ好さゝうな犬に喰はせて下さんせと、又泣き出す二親の、心隔てぬくゞり戸も、子の不孝より落ちたるくるゝ開けて夫婦は歸りけり。

と、思ふさまに發揮された人情美に反して、借金に責め立てられた苦しまぎれに好意を寄せてくれるお吉を虐殺し、金掻つ攫つた與兵衞は鬼畜にも劣る大惡人、遂に捕はれて處刑を受ける。

近松は如何なるものにも其の同情を寄せて、之れを美化することを忘れなかつたが、此の與兵衞のみは極惡無道に描き出されて、人情美と相反映して、醜の極めを盡してゐる所に、異采を放つてゐる。

信州川中島合戰

享保六年八月三日より竹本座に上演。

で、人倫五常の道を心得ぬ不孝不信のあらん限りを盡した。此のしれものを環つてゐる母のお澤と云ひ、繼父の德兵衞と云ひ、妹のおかちと云ひ、小姓の出頭小栗八彌と云ひ、近所の油屋七右衞門の女房お吉と云ひ、いづれも義理を知り、人情もあり、わけの分つた人達であつた。

越ゆる敷居の細溝も、親子別れの涙川、德兵衞つく〴〵と後姿を見送つて、わつと叫び聲をあげ、彼奴が顏つき背格好、成人するに從ひ、死なれた旦那に生寫し、あれあの辻に立つたるなりを見るにつけ、與兵衞めは追出さず、旦那を追出す心がして、勿體ない悲しいわいのと、どうど伏し、人目も恥ぢず泣聲に、憎い〳〵も母の親、噛む涙堪へ兼ね、見ぬ顏ながら伸び上り、見れども餘所の綸幟に、影も隱れて。

の德兵衞の美しい眞情や、お澤の懷から落ちた粽一はに、錢五百、

わざと憎い顏してぶつつたゝいつ、追出すの勘當のと、むごうつらうあたりしは、繼父のこなたに、可愛がつてもらひたさ、是も女の廻り智慧許して下され德兵衞殿、私に隱してあの錢を遣つて下さる心ざし、詞ではけんけんと慳貪に云うたれど、心で三度戴きし、何を隱さう、あいつは立派好きもする奴、取りわけ祝月髮付元結を調へ、人交りもしたからう、生れて此のかた節句々々祝儀缺かぬに此の月斗、身祝ひもしてやりたさ、見苦しい此恥辱を漏らすも、お吉樣賴んで屆けんため、まだ、此の上に根性の直る藥には、母が生肝を煎じて飮ませといふ醫者あらば、身を八ツ裂も厭はねども。

と母お澤の慈愛や、

津國女夫池　後太平記四十八巻目

享保六年二月十七日より竹本座にて上演。

足利將軍義輝は三好長慶の爲に弑せられた。淺川藤孝は三好を滅ぼさんと忠節おさ〳〵怠らずあつた。藤孝の臣冷泉造酒之進は義輝の奥方附の腰元淸瀧と戀仲になつたが、兄妹たることを知り入水して自殺しようとする。父文次兵衞之れを止め、「元來造酒之進と淸瀧は胤腹各別、まんざらの他人なれば、夫婦となるに障りなく、不義にもあらず、某が爲には養子でも又拾ひ子でもなく、親子となりし因緣は。」と舊惡を懺悔して、妻とともに入水する。藤孝は遂に義昭を立てて長慶を殺し、三好氏を滅ぼし、怨敵亡びて勝鬨を擧ぐるに終る。

女殺油地獄

享保六年七月十五日より竹本座にて上演。

近松の世話物中にては、他と全然異なつた行き方をした、珍らしいものである。

大阪本天滿町河内屋德兵衞の子與兵衞は主筋にあたる先夫の子であつたが、放埒無慚のしれ者

質入して治兵衞の顏を立てさせようとする。舅の五左衞門はこれを見て、怒つておさんを離別させて連れ歸る。治兵衞は遂に小春と網島の大長寺にて心中する。

此の曲には「名殘の橋づくし」と云ふ道行文がある。時代物にもあるが、世話物では、『曾根崎心中』の「道行血死期の霜」、『重井筒』の「道行血潮のおぼろぞめ」、『大經師昔暦』の「道行乘合舩」、『槍の權三重帷子』の「權三おさい道行」、『冥途の飛脚』の「忠兵衞梅川相合かご」、『丹波與作』の「與作小まん夢路の駒」、『長町女腹切』の「お花半七道行」、『生玉心中』の「嘉平次おさが道行」、『心中宵庚申』の「道行思ひの短夜」、『壽の門松』の「與次兵衞吾妻道行」、『二枚繪草紙』の「血死期の道行」、『卯月の紅葉』の「末期の道行」、『今宮心中』の「二郎兵衞おきさ道行」、『心中刃は氷の朔日』の「平兵衞小かん夜のあさがほ」、『薩摩歌』の「源五兵衞おまん夢分船」などと同じく、作者の錦心繡腸を窺ふべきものである。

安永七年四月二十一日より北の新地西の芝居で上演した『心中紙屋治兵衞』は、近松半二と竹田文吉の改作したものである。

歌舞伎に移されては、享保六年江戸森田座の『心中天網島』、天明四年中村座の『天の網島』がある。

今宵ありがたき御教へにあづかり忝奉レ存候、私共淺間敷身の果、未來の程おぼつかなく存候、何とぞ亡きあとの御とならひ被二成下一候はば忝奉レ存候、これのみ賴巾上度書殘巾候、以上。

十月十四日

治兵衞
小春

大長寺様

一說に云ふ、紙治小春心中の翌朝市中の取沙汰喧しく、道頓堀の芝居主は右の實說を操に仕組まんとて、其の由早速近松の許に報じたるに、近松は其の日住吉に參詣して不在であつたので、使を以て右の趣を住吉に報じた。近松は恰も酒食してゐたが、矢立の筆にて鼻紙に心中天網島と外題を認め、其の身は早駕籠にて歸宅の途すがら、道行の冒頭、「走りがき、謠の本は近衞流、野郎帽子は若紫、惡所狂ひの身の果ては云々。」と綴つたと。しかし上演までは二ヶ月を經てゐるから、此の說は疑はしい。

天滿の紙屋治兵衞は妻子のあるのにもかゝはらず、曾根崎新地の紀伊國屋小春に馴染んだ。兄の粉屋藤右衞門は之れを憂へて、武士の姿に扮して、小春に會ひて、絕緣してくれと賴み、治兵衞にも意見する。治兵衞の色敵太兵衞が小春を身請するとの噂で、治兵衞の妻おさんは、衣類を

佐掾の正本『隅田川』には、「嫡男梅若丸十二歳、次男松若丸十歳。」とあるが、近松は之れを雙生兒として、趣向を立ててゐる。

吉田少將行房と其の妾班女の前との間に梅若、松若と云へる雙生兒がある。松若は比良ヶ嶽の天狗に攫はれ、行房は常陸大掾百連の奸計に陥りて死す。梅若は東國に流浪し、人買猿島總太の殺す所となる。總太まことは吉田家の舊臣淡路七郎で、之れを悔悟して自殺する。班女は狂亂し我が子の行方をたづね〳〵て隅田川邊にさまよひ來る。淡路七郎の靈が松若を伴ひて母の手に渡し、吉田家は再興する。

近松の『隅田川』は後に影響すること多く、法界坊なども現はれることとなつた。

紙屋治兵衛　紀の國屋小春　心中天網島

享保五年十二月六日より竹本座にて上演。近松傑作の一。

大阪天滿お前町の紙屋治兵衛が曾根崎新地紀伊國屋小春と云ふ女郎と享保五年十月十四日の夜網島大長寺に來り、折柄、十夜廻向參詣の羣集に紛れ、終夜法座に列し、晨鐘の頃、境内に左の一紙を遺して情死を遂ぐる。治兵衛は二十八、小春は十九、法名を釋了智及び妙春信女と云ふ。

享保四年八月十二日より竹本座にて上演。

肥前の島原に於ける切支丹宗徒の一揆を劇化したものである。

藤原秀衡の四男高衡、鎌倉の討手を遁れて、京都に入り、七草四郎と稱し、蛙の妖術を以て土民を惑はし、徒黨を糾合する。島原桔梗屋の遊女更科を身請して、其の父手塚幡樂と云へる智謀の浪士を一味にせんとする。幡樂は更科をその情人葛西清治に託して自殺する。四郎は九州七草城に據つて一揆を起し、其の勢ひ甚だ熾んである。足立、富樫の二將は之れを攻めたが、城は容易に陷落しない。更科は清治の妹琵琶姫と城中に忍び入り、清治を案内して、四郎を討たせ、邪宗の一類を亡ぼした。

雙生隅田川

享保五年八月三日より竹本座にて上演。

梅若傳說は人買傳說で、室町時代に行はれたもので、すでに謠曲『隅田川』となつて知られてゐる。隅田川邊にある古塚のことは、『囘國雜記』や『梅花無盡藏』に見えてゐるが、話の眞僞は確かでない。謠曲『隅田川』は江戸時代に入りて、歌曲、戲曲、小說となりて盛んに行はれた。山本土

織筆耕するに極めて妙手であつたのである。此の拔荷買卽ち密貿易者を其の爼上に料理調合して毛剃九右衞門を主題とした此の篇を作つた。

京の商人小町屋惣七は門司沖にて海賊船に乘り合はせたが、幸ひにして博多に著し、馴染の博多小女郎と云ふ遊女と邂逅した。海賊の張本人毛剃九右衞門、小女郎を身請して惣七に添はせ、惣七は其の義理で毛剃の部下となつたが、遂に召捕はれて自刃した。

俊寛牛若　平家女護島

享保四年八月十二日より竹本座にて上演。

平重衡は南都を燒打ちして凱旋する。淸盛は俊寛の妻あづま、成經の情人千鳥を虐殺した其の祟りで熱病に罹り遂に悶死する。鬼界ヶ島の流人のことども、やがて赦免に逢うて歸洛する人々のことなどあり、牛若は女裝して、常磐の館にて平氏討滅の擧をはかる。宗淸の苦心を黠じ、遂に文覺が夢に諸源の蜂起、平家の滅亡を見ると云ふ筋。

傾城島原蛙合戰

買の張本人を數人召捕置候内、二三人僞て拔荷買に仕立、唐人を誑き賣買の最中へ、將監殿御人數急に驅付、唐船へ乘り移り、頭だちたる唐人五六人生捕、荷物盡く奪取、其餘は追放つ、生捕の唐人は則小倉にて入牢、小倉の人數も少し怪我在レ之候由、右之段々達ニ上聞一御褒美として、右の船中の荷物をば將監殿へ被レ下候。

覺（江戸より小倉侍分十人衆へ銀十枚、時服一重づゝ被レ下候）

白飛紗綾	五百五十反	島紗綾	五十五反	緋縮緬	五十八反
白綸子	百十七反	色綸子	五十卷	色緞子	六十四卷
春秋織	二卷	まかひ絲	百八十包	紋紗	四卷
線織	二卷	紗りん	二卷	色數合十一色	

辰砂、麝香、水銀、右三品員數不知

筑前表へ唐船三艘參候、筑前福岡城主松平肥前守殿御人數、早船を以て唐船を取かこみ、火矢鐵砲を以て打掛る、一艘は唐人荷物船ともに燒立て灰と成る、二艘は是を見て何方共不レ知逃去んぬ、右之兩國之御手立、江戸より御下知被レ爲ニ仰出一候由、已上。

當夏小笠原右近將監殿、拔荷唐船御穿議の節、日本人拔荷買に僞り參候三人の者、一人前に船中代物新銀六十貫目程の物と、一人前に十人扶持被レ下、向後大阪に在宿、拔荷の御穿議の爲に被ニ召置一候由、（金右衞門、又兵衞、甚右衞門）

巢林子は何物をも劇化し、何物をも詩化する大技倆があつた、されば際物を捉へて、之れを心

同　孫兵衛

右三人三十日青竹にてとぢめ、後は御赦免。

長崎　安右衛門

右は當四月國元へ被レ送候由、大阪にて水ぜめ木馬ぜめ、さま〴〵のせめにあひ候へ共、おち不レ申候由。

京　堺屋權右衛門

大阪　小西又兵衛

同　小倉屋善右衛門

同　あかしや彌兵衛

右四人之者共、一二度づゝ水ぜめに逢ひ申候由。

此外家財四分五分、或は三分或は銀二枚三枚五枚、錢二貫文三貫文抔の過料御取上げ、追放或は御赦免。以上。

とある。『攝陽落穗集』に、「享保四乙亥十一月、唐船密商者五人、高麗橋にて三ヶ月間さらし、野江に於て鼻をそぎ、其後銀錢等を遣はされ、御拂に相成候は珍敷御仕置也。」とあるのは、此のことを誤り傳へたのであらう。然し拔荷賣買の事は屢々絕えず、『月堂見聞集』享保四年九月及び十月の條に次のやうな記事が見えてゐる。

當夏拔荷賣の唐船、西國表へ見へ候に付、豐前國小倉城主小笠原右近將監殿へ御下知有レ之、去年日本の者拔荷

右は野村久左衞門、小西又兵衞兩人かけ持の女房に被二成居一申候、尤拔荷少々づゝ自分に賣買仕候、これも御構無レ之御赦免。

京大宮通七條　よしと名を替

同　江口　年二十歳計

右は大阪者久左衞門と申者妻にて御坐候、男走り行方知れ不レ申候、是も御構ひなく御赦免。

油小路二條上ル町　まつと名を替

同　名は不レ知

右は油小路一條上る町、福島屋仁左衞門妻、諸色道具被レ下御赦免。

三條通橋東　きく　年四十歳計

是も御構無レ之御赦免。

大阪平野　櫻井寺和尚

右は傾城かつ山伯父にて御坐候、久左衞門をかくまい置候、御壽之初不レ存候由いつはり申候、其科に依て御預け置被レ遊候、是も御召出し出家之役に候へば、久左衞門命たすけ度一筋御聞届被レ遊、無レ構御赦免。

烏丸三條上ル　丁越屋九兵衞

大阪　くけ屋茂兵衞

京東石垣二條行當り　田中屋半兵衛事
辰砂源兵衛
同油小路通二條上ル町　福島屋仁左衛門

右兩人は閏十月十九日朝、牢屋敷にて死罪に被₂仰付₁候。

長崎者　さつまや嘉兵次
肥前者　石垣八右衛門
肥前者　米屋平兵衛
大坂者　小倉屋善右衛門
大坂者　難波屋仁左衛門
小倉者　若松屋市兵衛

右七人閏十月二十一日より三日の内、高麗橋にて鼻をそぎ、さらし、夫より御追放。

野村久左衛門、淸左衛門、勘左衛門

右三人の者方々へ住居仕候拔買頭にて候へ共、其同類訴人いたし、御公儀樣より御穿議の多そくに相成申候故御はうびとして家財の内四ケ一被₂召上₁殘り本人へ被ₗ下候而御赦免何方に住居仕候共御構無ₗ之候。

傾城かつ山　年三十一歲計

房の女三の君を入内させて寵を專らにせんとする。三の宮はかねて鳥飼少將と許嫁の仲であつたから、四天王の渡邊綱や平井保昌等は早く少將に輿入させようとしたのに、姫は大江山の酒呑童子に攫はれた。

此に近江國鏡山の娼家平木の長なるもの、抱へ女を虐待して、我獨り驕奢を極めた。浪士加藤兵衞の女横笛も其の虐待に堪へ兼ねて自害す。源頼光は兵衞の訴へにより、酒呑童子退治の歸途に四天王をして長を逮捕せしむると云ふ筋。

博多小女郎浪枕

享保三年十一月二十日より竹本座にて上演。

『月堂見聞集』享保三年閏十月十九日の條に、長崎表拔買の罪人が處刑されたことが載つてゐる。

朝六つ半に、大阪御屋敷にて、今度長崎表拔買の者に被レ爲二仰付一候趣、北條安房守樣御屋敷にて、拔買の科人御召出し、其町々年寄五人組家主共被レ爲二召出一、安房守樣飛驒樣御立會にて被レ爲二仰渡一候、扨又殿樣御入被レ遊候て後、御役人方より本人町人共へ御申渡し有レ之由、罪人總高六十四人、内御預け三十人計。

く、朝夕掛盤にて饗膳の式に等しく、日々に獻立を以て料理を伺ひ、庖丁人山海の珍味を整へて之を饗す。あまた抱の傾城襲姿にて配膳給仕す。己が心に叶はざる料理をば足を以て膳を蹴返し　身には錦繡を衣とし、臘虎の敷皮、梨子地の曲彔、その過奢高位の人にも超ゆ。其の頃八文字屋自笑が出せし草紙にも、『傾城竈將軍』と題せし五冊物に其の侈りを書けり。我家の裏に公儀地のありしに、夫へ能舞臺を建て、常に猿樂を翫ぶ。かやうの類重々超過して、享保三年に廳所へ召呼ばせらるゝ處に虛病を構へて出でず。仍りて先づ手錠を懸け、所へ御預けになり、幸齋家內を改めらるゝ處に、金銀財寶の高は未だ考へず、傾城の抱太夫三十七人、引舟三十七人、禿三十七人、天神四十二人、禿四十二人、其の外局女郎など大勢有レ之、凡そ家內の人數五百人計也。同九月三日、幸齋並倅多助牢舍仰付けられ、御穿議の上、大坂三鄉御拂ひに成り、而して幸齋は京師島原に來て、娘の名前にて暫く潜居しけるが、大坂にての奢の事喧しく、人口に在りて、京にても粗御沙汰あるくらゐなれば、島原にも住みがたく、跡を隱して去りぬ。

猶幸齋の事は『みをつくし』に、「吉原町の西の端に茨木屋幸齋といへる女郎屋の長ありし、其の住みける庭泉水築山樹木飛石燈籠數寄家圍ひ座敷は申すに及ばず善盡し美盡し、花やかなることどもなりしに、享保三戊年御咎めに遇ひ今はなし。」とある。

花山天皇は寵姬弘徽殿がお隱れなされたので、哀愁の念切りである。常陸介平安盛は中納言高

織り込んだところに其の大手腕が窺はれる。文章は例の筆法とて頗る冱えてゐるが、殊に虎少將が雨を禱りて、「諸天も感應過たず、晴天忽ち常闇と、虛空に閃く電光、足高山に雲覆ひ涙の雨を誘ひ來て、俄に降りくる雨の足、篠を亂すが如くなり。」より以下、兄弟が雨を懸烏帽子に受けて訣別の杯となり、「さらりと乾して指しければ、時致取つて押し戴き、兄は親にて候へば、母上の御杯も是れに籠り、天の甘露仙家の醬、此の酒に勝らんやと、受けては飲み、受けては飲み、降り來る雨は恩愛の、親と妻との血の涙、親子夫婦の血を飲むと、思ひ知らぬぞあはれなる。」の一段は、悲壯、雄渾、妙絕奇絕の一大文章で、此の篇は曾我文學中第一のものである。

傾城酒呑童子

享保三年十月二十五日より竹本座にて上演。

大阪新町茨木屋幸齋が驕奢を極め、享保三年九月三日處罰せられた一件を、賴光の大江山退治に擬したものである。

茨木屋幸齋驕奢のことは、『翁草』に精しい。

浪華新町傾城屋茨木屋幸齋事、身の程知らぬ奢を究め、己が居間は金襖水晶の障子輝きわたり、宛も宮殿の如

曾我會稽山

享保三年七月十五日より竹本座にて上演。近松の時代物中、『國姓爺合戰』『雪女五枚羽子板』とともに三傑作と稱せられてゐるが、其の脚色の奇と、文章の妙とに於て、最も傑出してゐると思はれる。

曾我の復讐は武家時代に於て最も喜ばれたもので、文學に幾多の題材を供給してゐる。鎌倉幕府の記錄なる『吾妻鏡』に當時の詳細なる記事を殘してゐる程に、有名な事柄であつた。室町時代に入りて、『曾我物語』が作りなされて、眞字本、大石寺本、流布本が傳へられてゐる。此等が本となりて、謠曲には『切兼曾我』『調伏曾我』『元服曾我』『追懸曾我』『和田酒盛』『虎送』『小袖曾我』『夜討曾我』『十番切』『赤澤曾我』『御坊曾我』『禪師曾我』『伏木曾我』『大磯』等があり、幸若舞には『切兼曾我』『元服曾我』『和田酒盛』『小袖曾我』『劍讃歎』『夜討曾我』『十番切』等がある。巢林子の曾我物には『加增曾我』『世繼曾我』『百日曾我』『曾我五人兄弟』『大磯虎稚物語』『本領曾我』『曾我扇八景』『曾我虎が磨（いしうす）』などがあるが、之れを大成したものは『曾我會稽山』である。建久四年五月二十八日寅の一點から、翌日卯の上刻まで一晝夜の間に此の事件を總べて

座敷を改築し、其の釘隱しのごときは坂上の定紋三つ柏の金物であつた。世に此の與次右衞門のことを山崎與次兵衞と呼び替へた。當時の流行唄に、「山崎與次兵衞うけ出せ〳〵山崎與次兵衞をつてで請けだせ三百兩。」と謳ひはやした。當時遊女の身の代三百兩と云へるは、珍らしい高値であつた。

此の傳說に依りて脚色せられたもので、山崎與次兵衞は戀敵彥助を傷けたる寃罪にて父淨閑に預けられ、監禁せらる。押妓吾妻郭を脫け出て與次兵衞を訪ひ、與次兵衞の妻お菊の情に依りて二人出奔する。與次兵衞は狂氣となり、吾妻の介抱を受ける。吾妻に戀して吾妻より十兩の金を惠まれた難與平は彥助を傷つけたものであつたが、江戶に下り、大金を儲けて歸り、吾妻を身請して與次兵衞に添はせる。與次兵衞の狂氣も亦恢復する。

竹田出雲、三好松洛、竝木千柳の合作で、寬延二年七月二十四日より竹本座にて上演した『雙蝶々曲輪日記』は、此の『壽の門松』と、西澤一風、田中千柳との合作『昔米萬石通』(享保十年正月二日より豐竹座に上演)とを粉本として趣向を立てたものである。操では不評であつたが、歌舞伎にては好評を博し、角力場と引窗とは、今も猶上演される。

ぬ戀は、又此にも描き出されて、まことに美しい名のみの密通であつた。近松は男女の醜い淺ましい戀をも美化せずんば已まなかつた。そこに近松の道德觀が光つてゐる。

聖德太子繪傳記

享保二年十一月十六日より竹本座にて上演。

物部守屋が聖德太子を弑し奉つて佛法を破滅し、太子の妃を手に入れんと、奸計を企てる。葛木島主夫妻の忠義、太子の梵天宮巡りなどありて、とゞ守屋は誅滅に伏し、四天王寺の建立となる筋である。

山崎與次兵衛 壽の門松

享保三年正月二日より竹本座にて上演。

寬文年中、大阪新町の遊女屋富士屋(佐渡島勘右衛門)抱へ遊女に吾妻と云へる太夫ありて、器量優れ、品格ありて、絲竹の道は固より諸藝に通じ、全盛を極めてゐた。攝津山村の坂上與次右衛門之れに馴染み、九軒町の井筒屋太郎右衛門方に晝夜足を止めて揚詰のだゝら遊び、井筒屋の

たのである。

當時の流行唄に「槍の權三」と云ふのがあつたから、之れに假託して、密夫を笹野權三としたのである。

松江藩の茶道宗匠淺香市之進が江戸詰の留守中、笹野權三は眞の臺子の傳授を受けんと、市之進の妻おさいと一夜數寄屋にて會合中、はしなくも不義の疑ひを受け、二人出奔して諸所流浪の上、伏見の京橋にて市之進の爲に甘んじて討たれる。

川側伴之丞がおさいに懸想し、夫の留守を幸ひに忍び入つて口說きおほせ、其の上にて眞の臺子傳授の卷物を我が手に入れて、權三に鼻明かさうとの奸計。おさいは權三を娘の壻とせうとての悋氣が嵩じて、伴之丞に不義者呼ばはりされる。「不義者は伴之丞、身に曇りないお前が、何の過り死なうとは。」とおさいは權三の自刃を止めて、「エ、是非もない、最早此の二人は生きても死んでもすたつた身、東にござる市之進殿、女房を盜まれたと、後指をさされては、御奉公はおろか、人に面を合はされまい、とても死ぬべき命なり、只今二人が密夫と云ふ、不義者になり極めて、市之進殿に討たれて、男の一分立て進ぜて下されたら、なう忝からう。」との悲しい願ひ、最後に討たれるまで、二人は淸き、憐れなものであつた。『大經師昔暦』に見えた、同情ある戀なら

享保二年八月二十二日より竹本座にて上演。

此の女敵討のことは、『攝陽落穂集』に見えてゐる。但し享保三年戌とあるは、享保二年酉の誤りであらう。

享保三年戌七月十七日、大阪高麗橋の上において、雲州松江公の家中、玉の井宗義、同家中池田軍治を女敵と有て討取候。

密男　池田軍治

大げさ、右の腕切落され、左のひぢしりそげて骨出る。疵二ヶ所、眉間疵二ヶ所、とゞめあり、帷子ちゞみ立縞、帶紫縮緬、金毛織の紙入、脇差越前國下坂國綱、長さ一尺七寸五分、金ごしらへ。

茶道　玉井宗義女房

同家中　小森半右衞門娘

おかん

背中大疵二ヶ所、其の外小疵とゞめあり、帷子下に白かたびら、上に光琳の梅立木墨繪桔梗入、帶花色綸子白縮緬の抱帶、べつかふの丸櫛、紫縮緬の帽子とぞ。

宗義は四十九、おかんは三十七、軍治は二十五であるとの事だから、此の密夫は若き燕であつ

は大きに和ぐ大和國といふけな、何と女子のためには、大きに和かに好もしい國ぢやないかの、ホウ有り難い國ぢやの。」「日の本とは日の始め、仁義五常情ある、慈悲專らの神國に。」「斯かる勇者の出生す、國國たり君君たる、日本の麒麟これなるは。」「我も同じく日本の產、生國は捨てまじと、あれ見給へ天照大神を勸請す。」など、諸處に國民精神を高調してゐるところに、見物は共鳴を禁じ能はなかつたであらう。「和藤内は巖頭に蓑打ちかづき座をしめて、赤白二つの川水に心をつけて水の面、南無三寶紅が流るゝ。」の獅子城の場は最も名高い。國姓爺が市川團十郎の荒事を粉本としてゐることは否むべからざる事實である。

歌舞伎に移されては、享保元年秋京都都萬太夫座、同二年三月、大阪嵐大三郎座、荻野八重桐座、同年五月、江戸中村座、市村座にて上演せられた。

紀海音の『傾城國姓爺』(正德三年五月六日より豐竹座上演)、巣林子の『種は日本產は唐土國姓爺後日合戰』(享保二年二月十五日より竹本座上演)、『唐船噺今國姓爺』(享保七年正月二日より竹本座上演)などがあるが、いづれも不評で、獨り『國姓爺合戰』のみが屢上演された。

槍の權三重帷子

つた。成功は臺灣に據りて、清朝に抗し、孤忠を守つてゐた。

此の對外的事實を捉へて題材としたものには、錦文流の『國仙野手柄日記』があるが、巢林子の慧眼なる、此の時事問題を劇化し、見物の目先を新たにし、唐風の舞臺に好奇の人心をひきつけたのである。

明の右將軍李蹈天、韃靼王の軍勢を引き入れて、王城を陷れ明の思宗皇帝を弑した。大司馬將軍吳三桂は幼太子を奉じて九仙山に隱る。遺臣鄭芝龍は日本に來りて老一官と稱し、邦人を妻として、一子和藤內を生む。皇妹栴檀女は日本に漂著して、和藤內に救はれる。芝龍は祖國の難を聞き妻子を伴ひて、本國に立ち歸り、前妻の生める錦祥女の夫甘輝の居城獅子城に赴く。和藤內の母は錦祥女とともぐ＼甘輝を說き、義烈なる最期を遂げる。甘輝遂に和藤內に力を協せて、韃靼軍を破り、太子を九仙山より迎へて明朝を復し、和藤內は功を以て國姓爺延平王に封ぜらる。「小國なれども日本は男も女も義を捨てず。」「泣かぬが日本武士の風。」「なんと日本の女子見てか、目も鼻も變らぬが可笑しい髮の結び樣、變つた衣裳の縫模樣、若い女子もあれであらう、裾も褄もほら／＼ほら／＼と、ぱつと風が吹いたら太股まで見えさうな、ア、恥かしい事ぢやあるまいか、いや／＼とても女子に生まれるなら、こちや日本の女子に成りたい、何故といや、日本

た、先づめでたう一歩のうは汁吸ひませうと、戴き〳〵ぐつと飲み、一歩を紙に押し包み懐に納めける。」の趣向は又此に轉用されて、「羽織の下より一升入の祕藏の瓢簞取り出し、サア親の酌一つ呑め、あつと云ふより素燒の杯取り出す、いや〳〵小さい、そちが飲むは知つてゐる、鉢でも茶椀でも大きな物で一つ呑め、さのみ深うはたべませぬ、どれかこれかと茶椀尋ねる其の音を、聞くにも嵯峨が袖しぼる露の萩燒大皿出し、慮外ながらと受ければ、ちやうど飲めと、瓢簞傾けつぎかくる、酒にはあらぬ麴の色、花の一歩のから〳〵〳〵、さら〳〵〳〵と七八十、皿堆高く盛りあぐる云々。」となつてゐる。

父は唐土母は日本 國姓爺合戰

正徳五年十一月一日より竹本座にて上演。此の淨瑠璃大當りにて、三年越十七ケ月の興行。おやま人形は辰松八郞兵衞、立役人形津山助十郞、津山金七であつた。

支那の明朝が亡びると、遺臣鄭芝龍は我が邦に亡命し、九州平戸の田川氏を娶りて、子鄭成功を生んだ。其の後父子は歸國し、明朝の遺子を奉じて社稷を復さん事をつとめた。正保三年、芝龍は援を我が邦に乞ひ、紀州の德川頼宣等は頻りに出兵を說いたが、幕議は遂に之れを許さなか

ある。

惡友長作は、『曾根崎心中』の九平次と酷似してゐるのみならず、一體に上卷は『曾根崎心中』と似通つた所が多い。「しやんとして見よや、柏屋嵯峨は蓮葉にござる。戀の意地酒ャトン〳〵手元でかゝる、押へてかゝる、どうでも嵯峨はぬれものぢや、油壺から出すよな女房、しんとろとろりと見とれる女房、すねる男をぽつ懸けて、そこら〳〵をずんづと飲ましやる〳〵。」の一條は、『槍の權三重帷子』にある、『槍の權三は伊達しやでござる、油壺から出すよな男、しんとんとろりと見とれる男、どうでも權三はよい男、花の枝から溢れる男、しんとんとろりと見とれる男、いとしい男、戀ひ慕はれし、二張の弓のもとはずの、放さぬ先に弦きれて引かれぬ方に引かれ行き。」から思ひついたもので、流行唄の「槍の權三」の作り替へである。『心中二枚繪雙紙』の、「斯かる所に市郎右衞門、内へ歸れど敷居高く、心置かるゝ家來まで野畑へ出たれば、誰に首尾問ふ便りもなく、上り口にとほんとして、寒さは寒し酒一つと、膳棚搜せど酒もなし、ャア荒神の御酒がある、冷でも一つ戴いて、胸のもや〳〵晴らさんと、茶椀引き寄せつぎければ、こりやどうぢや、酒の中より一步が涌く、寶の泉か有り難いと、皆打明けて、是れは夢か現か、三寶荒神の御利生か、死したる母の御授けかと、嬉しいやら恐いやら、分別に能はねども、久々で金けに逢う

く書きなされてゐる。「おさん茂兵衛は夢にだに、戀せぬ中の戀となり、つれて走りし其の日しも茂兵衛が肌の紙入にたつた三歩のかねてより、思ひもあへぬ旅の道、おさんの肌著しろなして、白無垢一重けんばふに裾模樣あり、蘆に鷺、あしに任せて、奈良堺、大津伏見をうかうかと、夫婦にあらぬ夫婦のさま、神佛にも人間にも、疎まれはてし身の上やと、互の心恥かしく、顔打ちあけて顔と顔見合はせ、顔を赤めては涙の外に詞なし。」と、同情を寄せてゐる所に、巣林子の道德觀が見えてゐる。

嘉平次おさが　生玉心中

正德五年八月一日より、竹本座にて切狂言として上演。

正德五年五月五日、大阪九の助橋松屋町の茶椀屋一津屋五兵衞の倅嘉平治が伏見坂町柏屋定吉方抱への遊女おさがと生玉に於て心中したと云ふ際物を取扱つたものである。

茶椀屋一津屋五兵衞の倅嘉平次は許嫁におきはと云ふのがあつたが、これを嫌ひて、伏見坂町柏屋の抱へ女郎おさがと、交情が深かつた。嘉平次金策に窮して、惡友長作の欺僞にかゝる。父はおきはとの結婚を迫る。進退谷まつて、兩人は端午の夜生玉社內にて情死を遂げると云ふ筋で

京の大經師以春は、おさんと云ふ女房があるのに、下女お玉の容色あるに懸想し、其の寢所に忍んだ。おさんは夫を意見せんものをと、お玉と臥牀を取替へて寢た。お玉にかねぐ〳〵戀されてゐた手代茂兵衞が、おさんとは知らずにお玉の臥牀に忍び入り、思ひがけなく不義の契りを結んだ。二人は手に手を取りて丹波へ驅落したが、程なく囚はれの身となり、粟田口でお仕置きとならうとしたのを、黒谷の東岸和尚の命乞ひで助かつたと云ふ趣向である。

大經師以春(意俊が實名)の妻おさんは、下女お玉の媒介にて手代茂兵衞と密通し、茂兵衞お玉もろともに丹波國山田村に隱れてゐたのを捕へられ、天和三年九月二十二日三人とも洛中引廻しの上、粟田口にて姦夫姦婦は磔、お玉は獄門となり、以春の家は斷絶したのである。此の事件を小說に仕組んだのは、井原西鶴の『五人女』であつた。西鶴は二人が捨鉢になり、入水したと見せかけて丹波に隱れ、道ならぬ戀の夢覺むる折もなかつたのを、丹波の粟商人の話から露顯し、大經師は、「身内大勢催して捕へに遣はし、その科遁れず、樣々の詮議極め、中の使せし玉といへる女も同じ道筋に引かれ、粟田口の露草とはなりぬ。九月二十二日の曙の夢さら〳〵最後いやしからず、世語とはなりぬ。今も淺黃の小袖の面影見るやうに名は殘りし。」と多く事實を基として、其の間に作者の構想を交へてゐるが、近松の作になると、全然誤られた不覺の情交として、悲し

解題

文學博士　笹　川　種　郎

茂兵衛（おさん）大經師昔暦

正徳五年春、竹本座にて上演。元文五年十一月十一日より近松十七回忌追善として竹本座にて上演の折には『茂兵衛（おさん）戀八卦柱暦』と改題。明和八年十二月二十五日より北堀江座にて、北脇素人、梁塵軒、中邑阿契改作して、『本卦復（がへり）昔暦』の名にて上演。上の巻、道順内の段、大經師内の段、中の巻、屋敷の段、岡崎村の段、山畑の段、下巻、柏原の段に分たる。

之れを歌舞伎に演じたのでは、正徳五年正月大阪の嵐三十郎座に於けるものを最も古しとし、近松作と同時に興行したのである。江戸では天明七年八月、中村座の二番狂言に、常磐津で、『浮名草月小夜衣』、文化十三年九月、同座にて清元で『由緣の暦歌』、天保七年二月、同座で『茂兵衛（おさん）大經師昔暦』が演ぜられてゐる。

註釋附小引……………………………………卷尾一―四二

目次終

女殺油地獄……六六三―七〇一
信州川中島合戰……七〇三―七五六
心中宵庚申……七五七―七八八
關八州繫馬……七八九―八六三

解題……文學博士　笹川種郎……卷頭一―一三
巣林子著作目錄……同　一―一三
上演人物解說……同　一三―五九

曾我會稽山……………………二五五―三一七
傾城酒吞童子…………………三一九―三七四
博多小女郎波枕………………三七五―四〇三
平家女護島……………………四〇五―四六三
傾城島原蛙合戰………………四六五―五三〇
雙生隅田川……………………五三一―五七二
紙屋治兵衛きいの國屋小春心中天の網島………五七三―六〇二
後太平記四十八卷目津國女夫池……………六〇三―六六一

近代日本文學大系　第七巻目次

おさん茂兵衛 大經師昔暦……一―三四
嘉平次おさが 生玉心中……三五―六七
父は唐土母は日本 國姓爺合戰……六八―一二七
槍の權三重帷子……一二九―一六二
聖德太子繪傳記……一六三―二二四
山崎與次兵衛 壽の門松……二二五―二五四


豊竹越前
手
的連
北



近松門左衛門集

下

